

再会した幼馴染が引き
こもり寸前だったから
面倒見る

たーぼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ぼっち更生物語。

のようなものでもあつたりなかつたりするかもしれない。

ご厚意で描いて頂いたファンアートがあまりにも良すぎたので表紙として使用させていただきます。ご了承ください。

オリ主もいるから新規の人も容姿の目安として見てみてね。

※男オリ主が出てくるので、それが苦手な方はブラウザバックをオススメします。

目次

1. 再会した幼馴染が引きこもり寸前だった | 2
2. 更生なんて簡単にできるものではない | 9
3. HRの自己紹介タイムって普通に地獄だと思う | 27
4. 運命の出会いとは案外突然来るものである | 39
5. 友達も仲間も気付いたらできてる事もある | 53
6. 頑張った人にはちゃんと褒めよう | 70

7. バンドマンは基本的に金がない生き物だ | 89
8. 女の子の名前を呼ぶのが恥ずかしいのは最初だけ | 103
9. ラッキースケベで喜びよりも上回る感情だつてある | 117
10. やりたい事を見付けるのも簡単ではない。 | 130
11. 悩み相談って乗る方も少し緊張する | 150
12. 自分が思ってるより世間は狭い | 165
13. 人の凍った心を溶かすのは人の温 | 165

- かい心だ ————— 182
14. 何かを辞める時は結構緊張する 213
15. 集団の圧ほど怖いものはない 228
16. アー写見てたらどこ向いてんだつてメンバーが一人はいる ————— 242
17. 高価な買い物って何故かテンション上がる ————— 261
18. 給料日は誰にとっても良い日である ————— 281
19. 友人との通話は長くなりがち 297
20. 進め、前へ ————— 316
21. 酔っ払いの面倒を見るのは苦勞する ————— 347
22. 好感度は時々リセットされる 361
23. いきなり家に来られると普通に焦る ————— 388
24. 男子は思春期ポイントを突かれると弱い ————— 400
25. 楽しい時間は何故かすぐ過ぎる 417
26. おふぎげ演技も本気でやれば立派な現実となる ————— 434

3 4.	真夏の観光も体力がいる	605	4 3.	来た、行くよ	777
3 3.	偏見はしちゃいけない	588	い		754
以上		573	4 2.	ダメ人間が多数派だと疲労感が凄	736
3 2.	後から気付いた時の悲しさは想像	546	4 1.	勉強は予習復習が大事	718
3 1.	夢は終わらない	523	4 0.	逡巡、後に死亡	700
3 0.	打ち上げは楽しいけど疲れる	494	い		682
2 9.	行け、誰も追いつけない場所へ	475	3 9.	不意打ちのダメージはマジで大き	663
2 8.	雨の日は気分も移り変わりやすい	458	3 8.	出し物を決める時は慎重に	639
2 7.	黒歴史はバレた時が一番怖い		3 7.	清水優人の何気ない一日	623
			どうかだ		
			3 5.	観光するにもまずは興味があるか	

	44.	男女が二人だけで出掛けるのはもうつまりそういう事	791	51.	それいけ秀華祭!	943
	45.	悩みの捉え方なんて人それぞれでしかない	813	52.	メイド最高、されど思春期発動	
	46.	ギャグのノリを本気でやると洒落にならない時がある	840	53.	夢を叶え夢を失う	985
	47.	初めて行くライブハウスはちよつと怖い	860	54.	転がるぼっち、落ちる後藤	
	48.	人を見かけで判断してはならない		55.	必ずしもハッピーエンドで終わる訳ではない	1041
	49.	見える成長、消える二人	909	56.	番外編：そんなもしものバレンタイン	1062
930	50.	文化祭は青春イベントの一つ		57.	人の評価なんて案外変わりやすい	
				58.	後藤ひとり生誕特別番外編：メモ	1081

	リーズ・ラスト	1099
59.	それでも少女少女達の日常は続いていく	1120
60.	御茶ノ水エンカウント	1144
61.	宅録は宅録で変な緊張感がある	1176
62.	口実または事実	1191
63.	いきなりの呼び出しは心臓に悪い	1212
64.	女難の相が本当にあったとしてなりたいかどうかは別問題	1232
65.	来たる嵐	1246
66.	嫌な予感ほど当たってしまうもの	1439

67.	らしき	1264
68.	見返すための準備を	1285
69.	やるべき事、為すべき事	1343
70.	ライブのためにできる事	1363
71.	初対面の人と違って喋ってたら知り合いだった時は超恥ずかしい	1382
72.	タイプ違いコミュ症、スターリ	1400
73.	ライバル? いいえ、友達です	1419
74.	静かな方が落ち着く時だつてある	1439
	に降臨の巻	1400

75. プレゼント渡された時の反応って
意外と難しい | 1458
76. クリスマスイブの夜 | 1474
77. 突撃、山田家！ | 1499
78. 不可抗力の挨拶 | 1517
79. ツンデレの扱いは常に難しい | 1539
80. 熱よ、下がれ | 1560
81. 新宿シデロス編くミーティング？
の巻 | 1587
82. 新宿シデロス編くライブの巻 | 1605
83. 適材適所は確かにある | 1631
84. MV会議 | 1648
85. 日常を演じるのは実はとても難し
い | 1665
86. カラオケ店の部屋の音って案外
でも普通に聞こえる | 1686
87. 陽キャの唐突な行動に陰キャは弱
い | 1705
88. 友人の家に泊まりに行くとは何故か
晩ご飯がいつもより豪華になりがち
 | 1726
89. 話し声って結構壁越しでも聞こえ
やすい | 1745
90. 人は皆リスクを楽しむもの | 1745

- 1765 9 1. 天使とぶらり旅 ———— 1786
- 9 2. 路上ライブは箱とはまたひと味違
う ———— 1820
- 9 3. コミュ症にとっては出会いの季節
がもう苦痛 ———— 1842
- 1866 9 4. 事前情報の確認は徹底的にしろ
- 9 5. ある意味ちよつとしたフェスと考
えればまだマシかもしれない ———— 1889
- 9 6. 人はいつだつて変わるものだ
- 1916 9 7. 何だかんだ遊園地とかつていると

- 楽しくなつてくるもの ———— 1942
- 9 8. 観覧車はロマンがあつて然るべき
——— 1962
- 9 9. 番外編：そんなもしものハロウイ
ン ———— 1984
- 1 0 0. 交友関係はいざという時頼りに
なる ———— 2002
- 1 0 1. 広い駅構内ほど迷子になりやす
い ———— 2023
- 1 0 2. 一秒先へ向かう者と、一秒先が
訪れるだけの者 ———— 2044
- 1 0 3. 正当な評価とは曇りなき眼で人
を見るといふ事だ ———— 2064

104. ステージの上いきなり立たされるのは誰だつて怖い ————— 280
105. 似合うものより着たいものを着ればいいと思うけど限度だつてあると思う ————— 2096
106. 何かを成すのには心を休ませるのも必要 ————— 2116
107. 大事な出番の前でこそリラック
スはしておくべき ————— 2138
108. 戦いというのは準備段階の内か
ら始まっている ————— 2157
109. どうしようもない戦況をひつく
り返せ ————— 2173
110. 正直ロックフェスはちようどい
い気温の時にやつてほしい ————— 2191
111. みんな必ず何かしらを背負つて
いる ————— 2207
112. それでも少年少女達の世界は広
がっていく ————— 2222
113. レーベルとか事務所とかの違
いつて割と分かりづらい ————— 2241
114. 頼れる大人というのは思った以
上に貴重な存在 ————— 2257
115. やる事ない時はとことん暇
2274
116. 旅行前に色々決める時が一番楽

しい

117・流行り物は常にベルトコンベア
のように流れ変わっていくもの

2302 | 2287

1. 再会した幼馴染が引きこもり寸前だった

小学生の頃に家が隣の幼馴染がいた。

その少女はピンク色の髪でどちらかというが目立つ方だったと思う。

しかしそれ以上に、存在感もあるだろうが性格故に静かで他のみんなと関わろうとしない、関われない引っ込み思案なところもあったのだろう。

気付けば少女はいつも一人だった。今思えば言葉足らずというか、言葉を紡ぐのが苦手だったのだろうと理解できる。そういう子は少なからずいるのだから。

だけど、彼女はそれ以上であった。

だから常に一人ぼっちだった。

幼稚園児とはいえど男女で一緒に遊ぶかと聞かれると案外そうでもない。

男子は男子でかけっこやら泥だんご作りをしたり、女子は女子で室内でおままごとやお絵かきをする。もちろん一緒に遊んだりする事もあるが、基本は前述の通りだ。

その男子の輪の中に自分がいて、そのどちらの輪の中にも、少女はいなかった。

たまに視線をやると同じ歳の子と遊ばずに、先生とお絵かきをしたり本を読んだりし

ていた記憶がある。その頃の自分には同性の男子と遊ぶ事を優先し、少女とは家が隣だし喋ろうと思えばいつでも喋れるから今はいいやと、子供ながらの無邪気で純粋で残酷な選択を罪悪感も覚えず毎日そうしていた。

同い年のお隣さん。そうなれば当然家族ぐるみでの交流もあり、自然と仲良くなつて話す事もあつた。ぎこちなくもお互い名前呼び合うくらいには。

そうしていた事で、家以外で彼女への優先度は低くなつていった。男の子同士で遊ぶ事が楽しい時期という事もあり、幼稚園ではほとんど話さなかつたのだ。

交流はお互いの家でのみ。それは小学三年生まで続いた。

そこからは父親の単身赴任で母を残し自分と父親だけ少し遠くに引越した。普通子供は地元においていくだろうという意見もあると思うが、ズボラな父の代わりに家事と炊事をできるだけやってあげてくれと母に言われたからそうなつたのだ。

小学三年生の割には母の手伝いはやっていたし、自分で言うのも何だけど案外イマドキの子供というのは自分の思考をしっかり持っている。

おかげで自分の事は大体自分でできるし、ズボラと言つても自分の両親の事はちゃんと尊敬しているので仕事で疲れて帰宅してきた父の世話も難なくこなせていた。

料理の腕も子供にしてはまあまあできる方。家事をするために基本毎日早起きもしている。寝るのは遅い時もあるが。

こうして、自分という人間は周囲の同い年よりも割としっかりした人格形成を得て成長した。と思いたい。

そして約六年が経過し、父の長かった単身赴任もようやく終わって受験生真つ最中の中学三年。中途半端な時期にはなってしまったが、久方ぶりに元々住んでいた家へ戻ってきた。

父の事もあるしどこを受けるかはまだ決めていなかったけど、元々父は受験生になったら自分を母の元へ戻すつもりだったらしい。

いつ終わるか分からない単身赴任のために近くを受けて、それが終了したらまた転入するのは面倒だからという理由もあったのだろう。

と言いながらも、だ。自分が家に戻ったのは中学三年の秋、十月である。実に中途半端だった。こんな時期に転校なんて普通考えられない。そんな愚痴も父の都合に付き合ったのは自分だから何も言う事はない。

成績も特に悪くないから今から間に合わないというレベルでもないし。普通に近くで良い高校があればそこを受けようかと思っていた。

そんな楽観的な事を思いようやく平凡な学校生活を送れると考えていたのかもしれない。

さて、前置きはもうこの辺でいいだろう。
そろそろ現実と向き合う時が来た。

「……」

目の前にある光景を眺める。

既に自分の荷物は自室に置き、約六年振りだから隣の家にも挨拶しようという事になった。

母とも久しぶりで元気にしていたようで何よりだが、問題は今だ。

お隣さん。昔から仲良くしてもらっていてもはや第二の家族のような存在とも言える、のか？

少なくとも母はそのように思っているようだけど、如何せん自分は小学三年からここにはいなかったたので正直よく分からない距離感だ。

あちらのご両親は笑顔で出迎えてくれた。驚いたのは五歳の女の子が産まれていた事だ。今もこちらに挨拶したあと無邪気に犬（名前はジミヘン）と走り回っている。

そこまでは良かった。

そこまではまあ再会という名の会話のネタで華を咲かせていた。

しかし、自分には同い年で幼馴染の少女がいたはずだ。

引つ込み思案で普段から大人しくはあつたけど可愛らしくもあつた。そんな少女がいたはずだ。

なのに。

なのに。

目の前にいるのはいったい誰なのか。

「……」

自分が見ていても決してあちらからは目を合わそうとしない。小学生の頃よりもだいぶ伸びた髪。全身ジャージで自分の家だろうに何故かリビングの隅で体育座り。

ひと目で分かる。まだ子供で精神が完全に形成されていなかった頃はあまり何も思わなかったのだろうが、形成するにつれてそれは確立し、少女を孤独のまま成長させてしまったんだろうと。

自分も中学三年生。こういう子が学校ではどういう風に過ごしているかくらいは簡単に想像できる。できてしまう。

纏う雰囲気すらあの頃以上に負のオーラが凄い。ここあの子の家なのにどうしてあんな暗くなれるんだろう。

変わり果てたという言葉が正しいのか分からないけれど、成長の方向性を間違えてしまった感がある。

だけど、彼女は紛れもなく自分の幼馴染だ。小さい頃はお互い名前で呼び合っていた仲間でもある。

興味や好奇心というより、純粹に放っておけなかった。

だから声をかけようとした。

もつと早く気付くべきだったのだ。

成長したとはいえ、自分自身もまだ中学生の思春期だったという事を。少なからず女の子を意識するような年頃で、幼馴染なのに数年離れていて実は距離感がよく分かっていなかったという事を。

「えっと……久しぶり」

幼馴染なのに数年振りに会っていきなり名前と呼んでいいものなのかと。

答えは自分の口から出た。

「ひと……後藤さん」

「どうアツ!？」

まるで少女の口から出たとは思えない言葉で、目の前の少女はショックを受けていた。

かもしれない。

これが俺、清水優人しみずゆうとと後藤ひとりの再会だった。

2. 更生なんて簡単にできるものではない

幼馴染の後藤ひとりという少女と再会してから分かった事がいくつもある。

一つは見た通り性格や雰囲気は暗いまま、常に俯いて前髪で目元が隠れ表情が捉えづらい。二つ目はご両親から聞いたけど友達と呼べる人がいないという事。今まで家に連れてきた事もなければ、学校での話で誰かと喋った事もなく家で好んで話そうともしないそうだ。

三つ目は中学一年の時からギターを始めて毎日六時間も練習してたらめちやくちや上手くなっていった事。再会した昨日、突然ギターを持ってきて何も言わないまま披露してくれた。素人から見ても凄かった。

拍手したら静かにうえへっへ……と笑っていたから嬉しかったんだろうと思う。それを見て俺がギターの凄さよりも思った印象はこうだった。

この子、もしかしなくても重症だと。

何かこう、何だろう。見事に持ち前のポテンシャルを全て木っ端微塵にするほど自信のなさや虚無感で形作られているような人間かもしれない。

そして再会した翌日、今日も後藤家にお邪魔している俺は後藤さんの目の前にいる。ひとりちやんと呼ぼうとした事もあったが、一度後藤さんと言つてしまえばもう後戻りではできなかつたのだ。既に修正できないところまで己の思春期は走り去つてしまつた。

「後藤さん、今日も晩ご飯こつちでござ馳走になる事になつてごめんな。母さんも一人の時よくここで一緒に食べてたから突然止めるのも慣れないらしくてさ、徐々に回数減らしてこつちに来ないようにするから」

「ツ……あつ、いえ、私はその……全然、大丈夫なんで……お、お氣になさらず……」

お邪魔になる時の常套句を言つただけでこの反応である。どうか何で敬語なんだろう。同い年だし小さい頃はそれなりに話してた方だと思ふんだけど。

しかも後藤さんと呼ぶ度に一ミリずつ俯いて元からない覇氣が余計なくなつていくのも氣になる。もはや後藤さんと連呼したら首が真下に向くんじやないかと検証したくなるくらいだ。

ちなみにここはリビングではなく、二階の部屋。つまりは後藤さんの自室になる訳なのだ。

うーん、思った以上に何も無いな。女の子の部屋つてもっとピンクでオシャレでふわ

ふわした空間だと思っていただけ違うのか。ギターとか隅に立てられてたりしてるだけで他に特徴的な物はない。

強いて言えば音楽系の本とかがあるくらいか。どうしよう、本当に何も無い。ゲーム機すらないなんて普段何してるんだろう。……あ、ギター弾いてるのか。

それにしたつてもうちよつと何かあつても良いと思うのは俺が野暮なだけなのだろうか。床は畳で襖を見るに和室みたいなものもあるせいかな、余計空気が重く感じる。何だこれ、霊圧か霸王色の覇気か何かか？

こんな感じで俺は特に喋らず室内を見渡している。元から誰かいてもさほど沈黙を気にしない性格だから全然良いんだけど、そーいや後藤さんがいるんだつたと視線を目の前に戻したらなんか正座でもじもじしていた。

トイレか？ なんて野暮な事は言うつもりはない。そもそも違う理由でもじもじしてるんだろう。

おそらくというか確実にこの子、誰かといったら沈黙の時間が気ままずくなるタイプの子だ。

何か必死に話題を探しても、結局は自分から話が振れずに空振りすらさせてくれないドツボにハマる系である。

昨日の今日で後藤さんの事を大分理解できたと思う。

小声で「あ、う……えと、う、ああ……」と口にしてる辺り、彼女なりの努力が垣間見える。そんな優しさを見せられたら返すしかないだろう。

「そうだ。後藤さんって受験どこ受けるか決まってるの？俺はまだ戻ってきたばかりだから決めてなくてさ、参考にもしたいし良いところあったらいくつか教えてくれると助かるんだけど」

「あつ、えと……その、わつ、私もまだ……ちゃんと決めてなくて……」

「ありや、そうなのか。まあ受験自体はまだだし焦らなくてもいいか。この辺なら大体行けるだろうし」

実際、家の近くの高校なら普通に受かる自信があるくらいには余裕がある。

家事や炊事があるから勉強する時間がないなんて言い訳を自分で作りたくなかったからだ。やれる事はする。そうして成功すれば万々歳だし、もし失敗しても経験値になるしこれからの糧になる。

だから何事もまずはやってみてダメならダメできっぱり諦めたらいい。

そんな精神でやってきたから大体の事はできるようになっていた。完全とまではいかなくてもだ。

なので俺は後藤さんの小さな努力を否定しない。

どんなに全てを台無しにしてしまおうネガティブ思考を持つている彼女でも、前に進もうともがいている手を絶対に離さない。

「あ、ご、ごめんなさい……。せつかく聞いてくれたのに、ちゃんと答えられなくて……」
「ん？ 別に大丈夫だよそんな。つうか後藤さんも俺に対してあんまり遣わなくて良いからな。数年離れてたとはいえ幼馴染なんだしさ。昔と一緒……とまではいかなくても、普通に仲良くしようぜ」

「……は、はい……」
良かった。もしこれで急に男子とか無理ですとか拒絶されたらどうしようかと思っ

た。
陰キャオーラがプンプンしていても彼女だって思春期の女の子だ。突然同い年の男子が部屋に来てこんな事を言ってきたら戸惑う事だってある。むしろよく部屋に入れてくれたな。

「後藤さんはさ」

「は、はい」

「あー……」

自分から話しかけておいて一瞬の逡巡があった。

久々に会った程度の自分が踏み込んでいいものかと思いつつ、聞いておかなければならないと思つた事。

「友達とか、作んないの？」

「ひううあッ……!? あ、ああ……あばあば……」

やっベミスつたか。予想以上にダメージがでかいのか正座のまま横に倒れてスマホのバイブ通知みたいに揺れ続けている。人間業じゃねえ。

「ああ悪い！ 変な事聞いちまったな！ もう聞かないから大丈夫だぞ。だから落ちて着いてバイブ通知オフにしよう。さすがに初見でこれ見たらどうしていいか分かんねえし！」

触れても良いのか分からないまま肩を揺さぶると、正気に戻つたのか後藤さんはマナーモードから通常に戻つた。

そして体育座りをし始めた。どうしよう、殻に籠つてる訳じゃないよなこれ。警戒されてる訳じゃないよなこれ。

ダメだ。後藤さんというか、こういう極限までに自分を卑下している人と話した事な

いからどう接すればいいかまるで分からん。

もういつそ後藤さんを新しい人種として丁重に扱う気持ちでいくしかない。もつと彼女について理解を深めないと。

「……あ、あのっ」

と、彼女から声があった。

小さく、それでも必死に絞り出した声。

「わ、私……こんなだから、友達とかひ、一人もいなくて……居場所もネットさえあればいいと思ってたんです……」

ネットが居場所という事に少し引っかけかかりを覚えたが言葉を呑む。

今は聞く事に集中するべきだと感じた。

「さ、最初はギターとか始めたらっ、声とか掛けられるかも、とか勘違いしたりして……必死に毎日練習してたら気付けば中三になってたし……」

なるほど、ギターを始めた理由はそこにあつたのか。

まあ、始める理由なんて人それぞれで、大体は純粋に好きだという気持ちがあつても

どこかではちやほやされたいという願望が密かに渦巻いているものだ。下心がない人間なんて早々いないのだから。

「学校にバンドグッズとかCD持って行ったり、曲のリクエストでデスメタとか送ったりもしたんですけど……ずっと他力本願で、誰からも話しかけてもらえなくて……黒歴史しか残していないから、本当はもう高校は誰も自分を知らないところに行こうかなって……」

「そうか」

今ので後藤さんの事がまた少し分かった気がする。

何というか、不器用なのだ。不器用で努力の方向性がズレていて、それでも実直に頑張ろうとして空回っている。やっている事がプラスになる事もなくむしろ全部マイナスに行っているという奇跡みたいな方向音痴っぷりだ。

そして、彼女がこんな性格になった原因は俺にもあるかもしれないと思った。

幼稚園の頃でも小学生の頃でも、俺がもつと外で彼女とちゃんと遊んだり接していたりすればこうはならなかったかもしれない。

たればでしかないが、幼馴染で元から静かな子だって分かっていたのにいつも後藤さんを一人にしていたのは自分じゃないか。

男子と遊ぶ事を優先して、一番近くにいたはずの彼女を無意識に遠ざけていたのは紛れもない自分自身だ。俺が一緒にいれば少なからずもう少し明るい子になっていた可能性だってあったのに。

所詮は幼稚園の頃、小学低学年の頃だから、自分の欲のままに生きていた時だから仕方ないと言えばそうかもしれないけれど、結果として彼女がこうなっている一因には間違いない俺も入っている。

ならば、その責任を負うのも俺の役目だろう。

「後藤さん」

「は、はいっ……」

「後藤さんは自分をそうやって卑下してるけどさ、俺からすりやそんなに卑屈になる事もないんじゃないかと思って思うんだ」

「……え？」

まずは彼女に少しでも自信を持ってもらうためにちゃんと言葉を紡ぐ。

言わなくても伝わる、あれは少し嘘だ。言わなきゃ何も伝わらない。誤解なく気持ち伝えるならちゃんと言うべきだ。

「ギター始めた理由は何にしてもさ、実際今日までずっと長い時間続けて練習してきたんだろ？ 友達はできなかつたかもしれないけど、その分をたつた一つのためだけに熱中できるってすげえじゃんか。そこまで続けられる人つても中々いないだし、それも一種の、立派な才能だよ」

「……さ、のう？」

「ああ。グッズ持ってたたり曲のリクエストとかだつてそうだよ。結果としては全部塵カスになつちまつたけどさ、他力本願だとしても友達作ろうと後藤さんなりに努力した事には変わりないんだ。何か思つてももうだうだ言つて行動せずには何もしないヤツよ。りかは何倍も頑張つてる証拠だろ」

これは俺の本心だ。

後藤さんはやる事為す事裏目に出してしまうだけで何もやっていない訳ではない。何かをしているのだ。現状打破のために行動を起こせるのは立派な強さだ。まあ結果は出せていないんだけども。

最後に言いたい事を言う。

「それにさ」

これだけは絶対に伝えたいと思つた。

「昨日のギター演奏してくれた後藤さん、すっげえ上手かったしカッコよかった」
「……………」

部活でもなく強制されてる訳でもないのに毎日一人で六時間も練習し続けられるのも俺からすれば充分凄い。

何より素人目の俺でさえもめっちゃ上手いって思うほど後藤さんのギターから目を離せなかった。そうなるのにどれだけの努力があったのだろうと思う。

後藤さんは自分では思っていないだろうけど、実は頑張れる人なのだ俺は思っている。

「ライブとか行った事ないから分かんねえけど、何かこう、見ててワクワクしたんだよ。素直にすげえって思えるくらい惹かれたんだ。俺もバンドは聴く方だから動画サイトでたまに歌ってみたとかギター弾いてみたとか適当に見るんだけどさ、知らないかもだけどギターヒーローみたいでずっと目が離せなかったよ」

「……………ツツツツ?!?!」

あれ、良い感じに褒めてたのにどうしよう。何かいきなり後藤さんが声にならない悲鳴出し始めたんだけど。

すげえ甲高い鳥の鳴き声みたいだ。仲間でも呼んでんのかな。もしかして褒めすぎたら逆にプレッシャー感じちゃうタイプだったか。だとしたら悪い事をした。

「ステイ！ 後藤さんステイ！ ホーム！ あれ、ハウスだっけ？ ハウス！ ハウスハウス！」

どうにか落ち着かせようと冗談交じりでジミヘンの躰に言うような感じで言ってみたらそのまま後藤さんが襖の奥に入ろうとしたので必死に止めた。

ちなみに襖の中が少し見えたけど、色々置いてあつて秘密基地感が凄いので少し気になるところだ。

話を戻す。

空気がもうめちやくちやなので結論だけを言わせてもらおう。

「後藤さんさつき誰も自分を知らない学校に行きたいって言ってたよな」

「あ……はい」

「よし、決めた」

「……？」

ただのお節介で迷惑と思われるかもしれないけど、俺にだって原因があるなら何とか

しないといけない。

決める時はちゃんと決めるのだ。

「俺も後藤さんと一緒の高校に行くよ」

「……………え……………え、えッ!？」

「どんなに遠くたって構わない。俺と一緒にいればとりあえずでも後藤さんは一人じゃなくなるだろう?」

「あ、え、で、でも……………め、迷惑なん」

「あ、迷惑とかそういうのはナシな。俺と一緒に行きたくて提案したんだから変な気遣いとかは無用だぞ。それに一緒の高校なら勉強とかも大体は教えられるしな。せつかく久々に会ったんだし、またよろしくなっ」

これでお互い別の高校に行ったとして、会う度にコミュニケーション失敗して落ち込んでいる後藤さん見るのも何か嫌だし。

どうせなら一緒のどこ行って新しい友達探しの手伝いをするくらいはできるだろう。

よし、何だかやる気出てきた。

常日頃から家事とかやってたせいでやる事がないと妙にモチベーションを高く維持できないようになってるからどうかしない。父の面倒から後藤さんの面倒を見る

事に変わったただけだけど、個人的には自分から提案したので後藤さんと一緒にいる方がやる気は出てる。

「う…………えと、その…………」

と、後藤さんが何かを言おうとしていた。

表情は見えづらいけど、何となく笑っているようにも見える。少しはこの空気感も良くなったみたいだ。

「ま、またよろしくね…………ゆ、優く」

「優く…………ん!! 晩ご飯もうすぐできるから降りておいでっさ! あ、おねー

ちゃんもね!!」

ふたりちやああああああああんツ!! 今せつかく後藤さんが勇気出して何か言おうとしてたのにタイミング悪すぎないかなあああああああああああ
あ!?

んで振り返った時にはもういねえし、瞬足で下に降りてったし。何だあの子、後藤さんと違って動き回るの好きすぎないか。何だ、後藤さんから『動』を奪ったのか。正反対すぎだろ。

「わ、私の方が先に優くんって言おうとしたのに……」

そして後藤さんに関してには俯いてごによごによ呟いている。

小声すぎて何言ってるか全然分かんねえ……。何なの、特技は周波数の調整ですか。念仏とか呪詛じゃないよね。まあしやあない。これ以上無理をさせるのも良くないしな。

「とりあえず晩飯でできるならもう降りとかか」

「……あ、ゆっ、ゆ、く……!」

「ん? どした?」

部屋を出ようとしたら何か呼ばれたような気がした。

四つん這いになりながらこちらに手を伸ばそうとしていた後藤さんがいた。

「あ、その……お、おかえ、り……」

「……」

そういえば、そんなやり取りを後藤家のみなさんともしていたか。

だが彼女とはしていないかった。

精一杯頑張つて微笑んでくれている気がしないでもない後藤さんに、俺も笑つてこう返した。

「おう、ただいま」

何てことないやり取りだけど。

ようやく俺はここに帰つてこれたような感じがした。

そして年が過ぎ四月。

見事県外の高校に受かった俺と後藤さんは家の前に立っていた。

あれからの事をできるだけ手短にまとめるところなる。

卒業まで時間あるし一応中学でも今から友達できるように頑張つてみよう。

←

そもそもクラス違うから全然サポートできなくて気付いたら後藤さんが自爆してた。

← 色々作戦会議するも会議の内に気付いたら後藤さんの顔が溶けてスライム状になっていた。
←

← バンドメンバーを探そうとした時期もあったが、まず後藤さんが声をかけれないし俺はバンドメンバーですらないので声かけ事案でしかなく気付いたら後藤さんが霧状になつて散つていた。

← 気付いたら後藤さんがのっぺらぼうになつていた。
←

← といった感じである。

← 基本的に気付いたらこうなつてたのだ。

← 十月からおよそ六カ月間。

← 驚いた事に何の成果もあげられなかった。友達作りへの進撃は失敗に終わったのだ。

← そして、唯一の成果というか失敗作というか、今までになかった関係性が出来上がったのである。

← 今から入学式に向かう俺のすぐ背後へピッタリと張り付くように立っているのがそ

う、後藤さんである。

何とした事か。まさかの悪化したのだった。

友達作りどころか、気付けば俺は金魚のフンを作り上げていたのか？

額に手を当ててため息一つ。

「どうしてこうなった」

3. HRの自己紹介タイムって普通に地獄だと思う

入学式が終わって数日後。

わいわいがやがや。

そんな喧騒が耳に入る教室の中に俺はいた。

周囲では近くに住んでるであろう同中の生徒同士が楽しそうに話している。

まあ、まだ自己紹介タイムもなく他校の生徒を知らない状態の今じゃそれが普通だろう。

同じクラスになれたねーとか、またお前と同じかよーとか、何なら別クラスなのにわざわざ教室に来て別クラスだなんて嫌々とか言いに来ている生徒もちらほらだ。

時折一人でスマホを見ている生徒やさっそく寝ている生徒もいるが、おそらくそういうのが苦手か合わない人なのかもしれない。

そしてわたくし清水優人はと言えば、絶賛ほっちなうである。

うん、知ってた。通学に片道二時間かかる時点で知ってる生徒なんてゼロだし、そも

そもそれが目的でここを選んだのだから別段嫌な気持ちとかはない。

まあ先述の通り最初のHRで、実は片道二時間かかるんで放課後遊びづらいですけどよろしくるりんぱっ☆とか自己紹介すれば少しはウケるだろう。最悪スベっても印象に残つてしまえばこちらの勝ちなのだ。

とうか俺の事なんてどうだっていい。問題は他にある。

俺が教室で一人という事はだ、必然的に金魚のフげふんげふん……カルガモの子どげふんげふん、後藤さんと別クラスになった事である。

本来なら少しは性格も陰キャオーラもマシになってワンチャン高校デビューとかいけるんじゃないかね、とか思つたのに、出来上がったのはマイナスにマイナスを重ねた超絶根暗コミュ症陰キャだった。

見事に育成失敗。まさかのFランクで途中リタイアとなった。ステータスで言えば全部下がってるレベルだ。レアスキル『ネガティブ直行』とかデフォで取得してるまである。

マイナスにマイナスを掛けたらプラスになるんじゃないのかよ？吐いたな数学この野郎。超マイナスになってんじゃないやねえか。

唯一変わったと言えば俺とはほんの少しだけ、いや、めちゃくちゃほんの少しだけ、多分、メイビー、ミジンコくらいの大きさ程でしかないけど変わってまともに話せるよう

になったはずだ。願望に近いけど。

だから同じクラスになれば一緒に喋れると思っていただけに現実は一蹴しかなかった。

神は後藤さんを見放した。彼女にどれだけの試練を与えれば気が済むのだろう。中学で俺が何とかサポートしようとしても黒歴史を生み続けてきた生粋の奇行種だぞ。

うなじ剃らなくてもちよつと言葉キツめに言うだけで煙出して溶けていくんだからな。もつと優しくしてやれ。

「……ちよつと見てくるか」

どうしても気になってしまい席を立つ。

これは好奇心ではなくアレだ。保護者的な気持ちの方が強いやつだ。あの子上手くやってるのかしら。いややってる訳ないか。俺ですらまだ一人なのに。

お互いのクラスは掲示板で確認していたのですぐ分かる。俺は五組で後藤さんは二組だ。クラスが違うと分かった瞬間後藤さんが「う……や、あ……ゆ、ああ……」とゾンビみたいな声を上げながらずっと俺から離れようとしなくて引っぺがすのに時間がかかった。危うく感染するところだった。

こういう時ってマンガなら同じクラスになったりするのにな。どうやらここは日常系とは無縁の世界らしい。

さて、後藤さんのクラスに着いた。同時にひっそりと後ろの引き戸から覗いてみる。いた。一番後ろの手前から二つ目の席だ。意外と近いので顔だけを覗かせる事にした。

「……あー」

案の定、後藤さんは俺と同じように一人でただ座っているだけであった。

いや、まあ今は俺も同じだしそこまで気にする必要は……ない、と言い切れないところが後藤さんクオリティーなのだ。

俺はまだ人と普通に話せる方だし何なら自分からでも話しかけに行ける。

だが、後藤さんは当然そんな事もできない。しようとしたら席を立つ前に爆発四散するからだ。教室でそんな大惨事は俺だつて見たくもない。下手すると学校自体爆発しかねないし。

すげえ、変に思われなかったために視線すらキョロキョロさせずに微動だにしない。姿勢の悪い大仏かよ。

そんな後藤さんを見て俺はいつたどこで何を間違えたんだろうとますます疑問が浮かんでくる。

後藤さんがあんな性格になってしまった原因は俺にもあると思ったから色々手伝っ

てきたつもりだ。

少し大目に見てた自覚もあるにはあるが、めちやくちや甘やかしてた訳でもない。自立心を育てるために後藤さんだけで頑張れるようにフオローだっけていた。震えながらも彼女は奮闘していたはずなのにどこで歯車がズレたのだろう。

……いや、もしかしてそれこそが間違いだった説あるか？

百人中百人が根暗陰キャコミュ症と答える後藤さんにまず友達作りをさせようとした事自体荷が重かったのかもしれない。実際ロックマンがやられた時みたいにティウンティウンって消えた時もあったし。

「……!!」

「あ」

何かの気配を察したのか後藤さんが勢いよくこちらに振り向いた。

変だな、気付かれないよう顔だけしか出してないのに、気でも感じ取れるのかあの子。地球育ちの陰キャ人なのか。それはただの陰キャだわ。

俺に気付くや否や後藤さんは音もなくスライドするように俺の方に近寄ってきてすぐ背後にピタツとくつついてきた。

あれえ？

「いや何してんだよ何で後ろに来たんだよ用があるなら向き合うだけで良いだろうした急に」

「あつ、いや……ここが凄く落ち着くので……特等席です……」

俺の背中はいつかからイスになったんだ。背後霊かよ。せめて守護霊みたいに後光出してくんない。落ち込む時の青黒い背景出すのやめてくれ後光さん。じゃない違った後藤さん。

てか用もないのに俺見つけたただけでここに移動してくるのもどうなんよ。金魚のフンってこんなしつこかったつけ。

「もうHRだから俺もすぐ教室に戻るんだぞ？ 今の内に俺がいなくても大丈夫なように慣れておいた方が良くないんじゃないか？ まあ見に来た俺にも非はあるけど」

だって気になってしまったんだからしょうがない。言うなれば今の後藤さんは獣の群れの中に放り込まれた虫だ。上手く擬態してバレないように存在感を薄くするのか、一歩踏み出そうと勇気を出すのか見に来たのだが、当然前者であった。

「も、もう、学校辞めたい……」

「早い。早いよ。まだ何も始まってすらいねえよ。退学RTAやってる訳じゃないんだぞ」

これじゃただ二時間かけて登校しただけだ。極限のバカじゃん。親に何て説明すりゃいいんだ。

「せめて最低限の努力はしてみようぜ。何てつたつてここは誰も後藤さんの過去を知らない高校だ。上手くいけば高校デビューして何かが変わるかもしれないじゃんか」

「う、ううう……でもお」

「まずは自分で思い付いた案とか実行してみるのも良いと思うぞ。会話を聞いて共通の趣味を持ってそうな人に話しかけたりとか……いや無理か」

言いかけて止まる。そう、それができていたら最初からそうしている。

人に話しかけるのが無理だからアピール（本当にアピールだけ）して話しかけてもらえるのを待っているんだから。とことん受け身女子の後藤さんだ。聞こえは良いがただ自分から動かないのでマジで直立不動状態である。そこで話しかけられたら奇行に走り自ら駆逐される。救いはない。

「（も、もうゆ、くんがいれば私は……）」

背後でごによごによされても何言ってるか全然分らない。呪詛じゃない事だけを祈る。

この子はいつたいたいどこに向かおうとしてるんだ。

「とにかくもう予鈴鳴るから俺は教室に戻っ……ちよ、こら、はなっ、離しなさいっ。離せっ、普通に嫌な目立ち方するからやめろお、俺を巻き込むんじゃねえ！」

後ろから掴まれてるせいでこっちの力が入れづらい。というか振り返ろうにもスライドしやがるせいで全然見えねえ。何だこのいらん特技、ゴルゴが相手でも後ろに付けそうだな。

基本非力で運動神経悪いのにたまに人間辞める癖を直してほしいところだ。

「はああなああれええろオオオおおおおお……ッ！」

「んぎぎぎぎぎぎぎい……っ！」

俺と後藤さんの攻防は予鈴二分前まで続いた。

「ふう……」

ようやく後藤さんから解放され教室に戻る。

相手が人間を辞めてる時の対処法のコツはこちらも人間を辞める、である。もう目ん玉飛び出しそうになるくらい力込めてた。もうガツシユの清磨くらい顔を変形させてたと思う。俺自身やろうと思えばできた事にビックリしたけど。

「あつ、清水君、だよな?」

「ん? 俺?」

席に座ったら突然声を掛けられた。

赤い髪を少し左で結び、毛先はセットしているのか少しウェーブがかっている。ザ、陽キャ美少女という二つ名でも持つてそんな女の子だ。

「そうそうつ、今クラスでロインのグループ作ってるんだけど教室にいなかったから声掛けるの遅れちゃってね、清水君も良かったらどうかなって! ちなみに私は喜多つて言いますっ」

わお、何というコミユ強少女なんだろう。こういうのって普通自己紹介とか終わった放課後にするもんじゃないのか。

周囲を見たところおそらくこの子が言いだしついで色んな生徒に声を掛けたのだろ

う。周りはもう若干打ち解け始めている。俺が後藤さんを覗きに行つてゐる短時間の内にこんな事になつてるとは……陽キヤ、恐るべし。

「ああ、迷惑じゃなければ入つても良いかな」

「あははつ、こつちから誘つてるのに迷惑な訳ないよ！　そうだ、清水君つてどこの中学から来たの？　この辺だつたりする？」

いや距離の詰め方凄いな。男女分け隔てなくとか物怖じしないのかね。

しかしここで中学の質問されると後々の自己紹介でネタにしにくいんだが、まあ良いか。

「いや、実は県外から来たんだよ。中学は横浜の西凛中学校つてところで、通学に二時間かかるから起きるのとか結構大変だつたりするかな」

早起きは得意だから別に大変とかではないが、まあ会話でのご愛嬌だ。

これで共感とか得られるとまた少し会話が広がつたりする。会話を続けさせるコツは共感を引くのと聞き手の興味、相手に取つ掛かりを与える事だ。ちなみに後藤さんはそれら全てを産まれた頃に分娩室で落としてしまったようだ。

「二時間!? へえ、凄いのね。そんなにこの学校に来たかったの?」

と言いながら喜多さんは席に座る。いや隣かよ。こんな陽キャオーラしかない子が隣なの。後藤さんにはない後光さんが光っておられるよ。陰と陽の差で風邪引きそう。

「まあ色々あつてな。部活とかそういうのが目当てではないって事だけは言つとくよ」
「ふうーん、そつかあ」

頬杖をついてこちらを見てくる喜多さん。一挙一動がもう後藤さんにはできなさそう。うな陽の者っぽい。

俺の周りに集まるのはゼロか百の人間なのか? 何かに極振りしてるヤツしか目の前に現れないのだろうか。

何となくもし後藤さんが喜多さんのようになった時の事を想像してみる。……うん、違和感がすげえ。違う、そうじゃないって感じがプンプンする。

後藤さん、喜多さんと話したら一瞬で陽の光で塵にされるんじゃないか。俺でさえちよつと眩しいもの、敵わないなって思うもの。あれ、もしかして俺ちよつとずつ後藤さんに毒されてる? 陰キャオーラ感染してない?

チャイムが鳴った。

初の高校生活開始の合図だ。

ふと俺は自分の事よりも後藤さんの顔が真っ先に浮かんだ。

そういうや後藤さん、自己紹介の時どうするんだろう、と。うん、気にするだけ無駄だ。後藤さんの事だし、帰る時に話を聞けそうな感じならそこはかとなく慰めつつ周りに目立たないように帰ろう。

そして、俺の自己紹介はややスベリながらも逆にクラスに溶け込む事ができ、帰宅途中の後藤さんはずっと俺の背中に顔をくっつけていた。

何だか背中が濡れてるような気がしたのはきつと気のせいだ。

高校生活では少し厳しめにいこうと思っていたけど、今日だけは家に帰ったら慰めてやろう。

自己承認欲くっそ高いしすぐ立ち直れるだろ多分。

4. 運命の出会いとは案外突然来るものである

さて、高校生活が始まって一カ月が経ちました。

皆さん、俺はもうダメです。後藤さんがあまりにもマイナス方面に強すぎて手も足も出ません。

そもそも人に話しかけれない時点でもう無理とは薄々勘付いてはいたけど、高校デビューすら既に失敗の領域なんです。こんなの初手から王手とかチエックメイトされてるようなものだ。どう巻き返せばいいんだよ詰みゲーだろこんなの。

朝の歯磨きを済ませ一旦制服に着替えるため自室へ戻る。

出るのは微かに歯磨き粉のミントが香る溜め息ばかりだ。外は良い天気だったのに俺の心は灰色の雨模様です。

まずいな。何だか最近俺まで陰キャ思考に陥ってきてないか？ まさか後藤さんを見てるとこちらまで気分が暗くなってくるのは感染の前兆だったのかもしれない。

いかん、何とかして陰キャウイルスを追い出し清潔な雰囲気を取り戻さないと俺まで生きててごめんなさいとか言い出しそうだ。

ネクタイを締め制服を着る。よし、気持ちがいやつきりしてきた。

そしてスマホを取ろうと机に視線を向けた時、タイミング良くロインの通知音が鳴った。

こんな朝から誰だろうか。俺と後藤さんは通学に二時間かかるので他の生徒よりも早く起きて登校する。そのため今はまだ朝の六時前だ。

つまり相手は一人しかない。そう、一人だけに後藤ひとりからロインが来た。

まあどっちも後藤さんからロインしてくるのも結構珍しい方ではある。

最近はどうご飯とかはこつちで食べるし、以前と比べると後藤さんの家に入る事は少なくなった。行っても週に三々四回くらいだ。……いや行ってる方だなこれ。

スマホのロックを解除しロインを開く。

トーク画面にはこう書かれていた。

『今日は話しかけてもらえる秘策を編み出したので先に学校行つててください。決してサボりはしません。ちゃんと学校には行きます本当です信じてください』

後半必死すぎるだろ。毎日のように学校行きたくないとか呟いてるしこいつサボるんじゃねえかって勝手に俺が思ってる事にしてるな。正解だ、よく分かったじゃないか。

しかし、後藤さんなりに一応はちゃんと考えてたんだな。もう諦めてると思った。俺もそうだし。

だけど秘策って普通なら期待できそうなのに、後藤さんが使うとフラグにしか思えないのは何故なんだろう。多分今までの失敗を見てきたからかもしれない。

成功した試しがないのだ。後藤さんの言う秘策ってあれだ。弁当に入ってるマジックカットの『こちら側のどこからでも切れます』とジョセフの乗る飛行機くらい信用ならない。

話しかけてもらおう秘策という事は自分から何かしらのアピールでもするのだろうか、不安しかねえ。

何で俺が無駄に緊張しなくちゃならないんだ。こんなに頼りにならなくてむしろ怖い秘策も中々珍しいぞ。

とりあえず早く返信をしないとイケない。そうしないと彼女は俺がどうとう愛想尽かしたと思ひ込み派手に落ち込んで学校を休みかねないからだ。

実際中学の時に風呂入ってて返信が遅れた際、翌日布団にくるまって全然出ようとしなかった事がある。あの頃は何とか説得して事なきを得たが、今またそうされると非常にめんどくさい。

だから俺は既読を付けて適当に入力する。

『了解。期待しておくよ。けどもし学校来なかったら後藤さんのクラスの人に後藤さんの分のノート書いておいてもらうよう頼んどくから、次の日見せてもらえよ』

よし、退路は断つ……じゃないフオロー完了、と。ロインは文だけを送れるから凄く楽だ。顔を合わせながらだと声の抑揚や表情まで伝わってしまうので少し気を遣う。

その後藤さんは相手をよく見る（遠目から限定）から相手が今どういった気分なのかを敏感に察知してくる。例えば今の俺の顔を見たら全然期待してない事がバレてしまうとか。

後藤さんへのロインはさりげなく肯定して調子に乗らせつつ、逃げられないよう脅迫、もしくは外堀を埋めていくのがコツだ。そして最後にこちらからトークを強制的に終わらせるためのスタンプを送りつけて、もう話終わったから返信しないぞと遠回しに釘を刺しておく。

コミュ症の後藤さんはそういう雰囲気ですぐ感じ取って絶対に返信を送ってこないからこれをいつも利用しているのだ。

それじゃあ、というスタンプを送って、と。これで後藤さんは学校に来ざるを得ない。何かスタンプを送った一秒後に『え、あ、ちよ』とか来たけど見て見ぬふりだ。あとで聞かれてもロインを閉じる瞬間にメッセが来て気付かなかったと言い訳すればいい。

何故かタップ入力だけは早いんだよな。誰とも喋らなくてずっとスマホ弄ってるからか？

高校からは少し厳しく接すると決めたのだ。じやないと後藤さんのためにならない。いつまでも俺のフンのままでもいいさ。訳にはいかないのだ。いや俺のフンはただのうんこじゃねえか。

せめて信頼できる同性の友人ができるまでは一緒にいる。できた時は晴れて俺はお役御免だ。責任も無事取れて安心して後藤さんを見届けられる。

これが理想。しかしその日がいっになるか皆目見当がつかないのが最大の欠陥だけだ。だって今のところ見込みゼロなもの。

「なるようになる、か」

未来がどうなってるにせよ、俺が今見届けるべきは後藤さんの秘策とやらである。

期待はしてないが、努力しようとする姿勢は評価しないとイケない。叱つても落ち込むだけだし褒めても調子に乗って伸びないようなクソめんどい彼女だが、努力だけは惜しまないタイプだ。

それを見守ってやるのも、俺の役割だろう。

登校してから何分経っただろう。

そろそろ後藤さんも来てる頃合いかな。退路は断ってるし来ないなんて事はさすがにないと思う。

ふう、おし、腹を決めた。見に行くか。

いつも通り二組まで足を運ぶ。これももう俺の日課となってるな。ここ一カ月ずつと同じような事してるし。でも一応クラスの人もそれなりに話してるから変には思われてないはずだ。思われてないよな……？

そして最近俺は気付いた。後藤さんを観察する時、彼女が最後方の席だからって見やすい後ろの引き戸から覗くのはいけないと。

後ろから見てたら俺の気配を感じ取った後藤さんがすぐ俺の後ろに来ようと追いかけてくるからだ。緑の悪魔かよ。

だから絶対安心で安全を確保しながら後藤さんを覗ける場所は、むしろ前方のドアから見る事である。

後藤さんは常に俯いて下を向いてるから前を見ない。誰かと目が合ってしまう可能性があるから。つまりここなら後藤さんに見つからずに後藤さんを観察できるのだ。うむ、俺も日々成長しているな。何の役にも立たない成長だけだ。

さてさて、では後藤さんの秘策とやらをいっちょ見させてもらいますかねー。引き戸に背中を預けさりげなく視線を後藤さんの方へ向ける。

見た。

見てしまった。

「うわぁ……」

自然と出た声は頑張った後藤さんへの正当な評価だった。

ギターを機の横に置き、手提げバッグにはバンドの缶バッジを全面に付け、両腕にはラバーバンドをこれでもかと大量に装着し、ピンクジャージの下には禍々しいロゴTを着ており、音楽雑誌を見ながらニヤケている。

何というかこう、あれだ。痛い、痛すぎる。何だアレ、遠目に見てるだけなのに痛すぎてこっちにダメージ来るんだけど。遠隔攻撃の一種か？

バンド組んでないのにギター持ってきてる時点でもうアレだが、百歩譲ってギターはまだ大目に見よう。

バッグとかどうしたんだ。そんなに缶バッジ付けて何がしたいんだ。防御力でも固めてんのか。何に備えてんだよ。

ラバーバンドに至ってはもはや装備品みたいになってんじゃねえか。攻撃力上げるつもりか。防具名は『ラバーアーム』ってか。うるせえよ。

しかも音楽雑誌見てニヤケてるのがもうダメ。笑うところねえだろ音楽雑誌。あれか、コラムとか見てんのか。だとしても笑うところないだろ。

ちくしよう、ツツコミが止まらん。素直にドン引きだ。秘策がこれかよ。どうしてアレで話しかけてもらえると思った。みんな見て見ぬふりしてんじゃん。不審者と変わんねえよもう。

あの子もう手遅れなんじゃないか？ 手の施しようがない。ここに来て黒歴史増やしやがったぞ。どうやってフォローすればいいんだこれ。

これはさすがの俺もどうしようもない。なるほど、俺は後藤さんを見くびっていた。彼女はいつだってこちらの想像を軽く超えてくる。どれだけ用心したって草食動物が肉食動物に捕食されるのと同じだ。食われる時は食われる。すなわち自然界の掟。

あばよ後藤さん、俺はクールにここを去るぜ。もし万が一見つかつてバンドフル装備野郎に付き纏われるのだけはごめんだ。俺まで何言われるか分からん。

どうして彼女はあんなにもバカなんだろう。俺と一緒に登校してればすかさずあん

なバカ装備外させたのに。……やっぱ俺も押し切って一緒に行けば良かったな。そうすれば後藤さんも黒歴史を生まずにすんだのに。

子供の頑張りを見守る親のような気分で放置していたが、再び失敗。しかもちゃんとすれば防げたのだから、黒歴史を生んだ原因が俺にもある。

どうしよう、俺の未来が心配になってきた。同時に後藤さんの未来には暗雲しかない事も分かりきっている。このままでは一緒に地獄まで落ちてしまう。やっぱり感染してるんじゃないか？

自分の席まで戻り両肘をついて頭を抱える。

間接的に見ただけの俺でさえこんな気持ちなのだ。当人の後藤さんの心境を考えるとかやばい。ポケモンバトルに負けた訳でもないのにためのまえがまっくらになりそう。疑似的に俺まで黒歴史を生んでしまったような錯覚に陥る。幻術かよ。

「頭抱えてどうしたの、清水君。悩み事？」

隣の席の喜多さんが声を掛けてきた。

彼女ともここ一カ月で席が隣だからか、何度か話した事もあって仲良くなっているかだと思ふ。ただこの子の場合には誰かを特別視する訳でもなく誰にでも平等に接するかから友人も多く、俺は所詮その中の有象無象の一人に過ぎない。

他の男子よりは話してる方かもしれないが、ヤツらの視線が怖くて自分からは基本的に話しかけにはいかないようにしている。

人気者と話すのも中々苦勞するものだ。

「ああ、ちよつと知り合いがバカすぎてな。どうしてあんなにバカな事するんだろうつて思つてさ。前世で何したらあんなバカになるのか分からないんだ。もはやバカボンの生まれ変わりなんじゃねえかな……」

「そんなに!? で、でもほら、その人も好きでそうなった訳じゃないかもしれないじゃない? その人にもその人なりの考えがあるだろうし、少しだけでも尊重してあげたらどうかなって……」

「よく考えた末に周りがドン引くようなどうしようもない黒歴史を生んでしまったら?」

「……よ、寄り添ってあげる、とか?」

「……あー、うーん、でもなあ……」

優しすぎませんこの子。ただの陽キャじゃねえ。陽キャの中でも体が全部善性でできているガチ陽キャだ。

喜多さんの陽キャ成分をほんの少しだけでも良いから後藤さんに分けてあげて。多

分ちよつとだけマシになるか反発して弾け飛ぶかもしれないけど。

「ふふつ、清水君って優しいのね」

「そうか？ 発言的にも結構バカにしちまつてる方だと思うけど」

「けどその人の事をちゃんと想ってないとそんなに悩む事もないでしょ？ よつぽど大事な人なのねっ」

「……どうだろうな」

まあ、今よりもマシになってくれたらそれで良いとは思ってるけど。大事……大事、か。陰キャコミュ症になってしまった一因の責任を取る形として今の関係性になってるが、実際のところはよく分からない。

向こうは俺の事を家族以外で面倒を見てくれる人としか思っただろうし、俺は俺でこの根暗早くどうかしなれないと思ってる訳で。

結論、保護者と子供とそんなに変わらないんじゃないか。

後藤さんが手の掛かる子すぎて他の生徒に構ってる時間も最低限しかないしなあ。休み時間はほぼ後藤さん見に行ってるし。その内後藤さん観察日記とか書けそう。

はあ……この高校生活、前途多難だ。

俺と後藤さんはとある公園に来ていた。

彼女はブランコに座って俯いている。通常状態に見えるが、普通に落ち込んでいるのは一目瞭然だ。

「失敗の原因は分かかってるな？」

「え、あつ、ちよつと派手にしすぎたかも……」

「そういう事じゃねえ。いやそういう事でもあるけど」

グッズの量を減らせばいいってもんじゃない。普段全然話さない暗い子がいきなりバンドグッズフル装備でやってきたら誰だつて触れたらダメってなるぞ。

触るな危険みたいなものだ。危険物扱いされてるんだからもう少し自分のポジションを弁えた方が良い。

後藤さんの隣のブランコに座る訳でもなく、俺は向かい合って手すりだか柵だかよく分からないところにもたれている。何て言うんだこれ。

どうしたものかと考えつつも、ここで説教したところで閉じこもるだけだ。そんなのは無意味である。

彼女は彼女で何故か少し離れたベンチに座っている男性と、それを迎えに来た家族らしき女性と子供を見て勝手にシヨックを受けていた。これ絶対迷惑な勘違いしてただろ。

後藤さんはよく自分の世界に入る。表ではあまり喋らない代わりに心の中でめっちゃくちや独り言を話しているのだろう。頻繁に自問自答と自己完結を繰り返し自傷ダメージを負っている。レベルが高いのか低いのか分からない。

今度はスマホを見始めて一人で笑っている。

こいつ……目の前に俺がいるのに何で自分の世界に入り浸ってんだ。反省はもう終わりか。いや、もしかするともう自分の中で猛反省し終わった後なのかもしれない。心なしか表情も普通に戻ってるし。

……しゃあない。

「その自販機で飲み物買ってくるから、何が」

「あー！ ギターツツ!!」

「ん?」

背後から声がして、明らかに後藤さんに向けて掛けられたであろう声を聞いて振り返る。

まさか学校外で話しかけられるというミッションクリアの変化球がやってきた。

これが、後藤さんの運命を変える出会いとなった。

5. 友達も仲間も気付いたらできてる事もある

あ！ やせいのバンドじよしがとびだしてきた！

ごとうひとりはどうする？

にげる おびえる

かくれる ?とくとうせき

ごとうさんはおれのうしろにかくれた。しかしまわりこまれてしまった。ごとうひとりのめのまえがまっくらになった！

いや交ざってる交ざってる。ポケモンクエストになってるから。

と、冗談はさておき。

いきなり俺達の前にやってきたのは黄色い髪を左に結んだサイドテールで、アホ毛がちよこんと立っているキュートなバンド女子だった。

今も俺の背中に隠れている後藤さんへ「それギターだよな？ 弾けるの!？」と質問しているが、初対面の他人と話す事が久しぶりすぎて上手く声を出せていない。

身内と他人じゃこうも違うのか……。というか俺を挟んで会話してない？ 大丈夫

？ 俺人間じゃなくて電柱扱いされてないよね？

「あ、いきなりごめんね。あたし下北沢高校二年、伊地知虹夏！」

ふむ、二年つて事は一つ先輩か。

「あつ、後藤ひとり秀華高校一年です……」

「君は？」

「同じく秀華高校の一年、清水優人です」

良かった、一応人として認識されてみたいだ。危うく後藤さんよりも先に人間としての尊厳を捨てさせられるところだった。

「ちなみにひとりちゃんはさ、ギターどのくらい弾ける？」

おつといきなり名前呼びからの俺への興味既にスルー。オーケー、今日から俺は電柱です。人と人との会話を結ぶ伝心柱になります。誰が上手い事を言えとやつかましいあッ！

「あつ、そこそこかと……」

?である。この女、素人目の俺から見てもギターめっちゃ上手い。たまに好きなバンドの曲を弾いてもらいうくらいにはリクエストもしてたりする。

だがここで後藤さんめっちゃ上手いですよとか言ったら確実に爆散するしな。せつかく人に話しかけてもらえたんだ。プレッシャーかけないためにも俺はノーコメントでいこう。

「清水君は?」

「コードって何? って感じですよ」

あ、俺は名字呼びですよ。まあ見知らぬ男子だしそれは当たり前か。ギター持つてる後藤さんが本命だから一気に距離を縮めるために名前呼びしたんだろう。

ちなみに俺は楽器全然弾けない。一回後藤さんにちよつとだけ教えてもらおうとしたけど、知らん単語がたくさんあるのと指の動きが複雑すぎて指が攣りそうになったからだ。こんなの弾ける人普通にすげえわ。

「そっかあ……あのさ、実は今ちよつと困ってて、無理だったら大丈夫なだけ……大丈夫なんだけどお、困ってて……」

「(ぜ、絶対だいいじよばないやつ……)」

「(それには同感だけど、後藤さんのギター見て声掛けてきたって事はそういう事なんだろ。話聞いてみるのはありだと思っぞ)」

何とか声を聞き取れたので逃げないよう言っておかなければならない。すぐ逃げようとするからなこの子。

「……うん、思い切って言っちゃおう！」

パンツ！ と両手を叩いて伊地知さんが意思を固めたようだ。さすがに口寄せの術ではなかったか。

「お願い！ あたしのバンドで今日だけサポートギターしてくれないかな!!」

予想通りだった。しかし、後藤さんがこれで素直にはいと頷くようにも思えない。ほとんどイエスマンの彼女だが、肝心なところで怖気づいてしまうのが欠点だ。

伊地知さんはそのまま縋るように手を合わせながら、

「これからライブなのにギターの子が突然辞めちゃって……。ある程度弾ける人ならすぐできる曲だから、何卒……！」

「あつ……え、む、む……」

「ん？ おい後藤さんまさかことわ」

「ありがとう！ じゃあさっそくライブハウスへゴー！」

まだちゃんと何にも言っていないのに!? いやでもこの強引さは引つ込み思案の後藤さんにとつてありがたいかもしれない。

俺の聞き間違いじゃなければ後藤さん無理つて断ろうとしてたからな。多少顔が崩壊しても新しい景色を見られるなら行く価値はある。

そして、彼女の門出を祝いつつ俺は後藤さんを伊地知さんに差し出して、

「じゃあ俺は先に帰ってるからがんばらばぶえぼあつ!?」

「ゆっ、ゆ……くんも、一緒に……!」

こいつ……後ろから制服の襟首がつつり掴んで引つ張りやがる……。く、首があ……どこからそんな力湧いてくんだよ握力限界突破でもしてんのか!?

「ちよちよちよ、締まつてる! 清水君の首が締まつてるよひとりちゃん!」

「こ、この野郎……は、はな、離しやががががが」

「壊れたロボットみたいな声になってきてる!?! ひとりちゃんそれ以上はやばいから!

清水君も一緒に行くから離そ! ねっ!?!」

「あつ、はい……」

何故だか俺も行く事になってしまったが伊地知さんのおかげで命拾いした。こんな形で命の恩人を作ってしまうとは何事だ。とりあえず。

「……あだあッ……!?!」

「ハア、ふう……引つ張りすぎだつうの。バーカ」

後藤さんにお仕置きのデコピンを喰らわした。

マジで目の前が真っ暗になりかけた。死ぬかと思つたぞ。

下北沢駅周辺まで俺達は移動していた。
来た事ないから周囲の景色は結構新鮮だ。

「ひとりちゃん達は下北はよく来るの?」

「あつ、いやあ……」

「こんな個性みなぎるオシャレタウンに来れる訳ないって言ってます。ちなみに俺も来るのは初めてです」

「あそこから言ってる事分かるの!?! 清水君凄いな!」

ぼっち脱却大作戦でよく会議してたからな。大体の事は分かる。おおよそ六割は当てられるはずだ。後藤さんもこくんつと頷いてたから今回は正解だった。

あと残りの四割は適当である。後藤さん基本「あつ」「えっ」「その」「いや」「あの」しか言わないからな。もはや暗号。

「あ、ライブハウスもうちよいだから」

「はい。というか、俺まで付いてきて良かったんですか? 後藤さんのせいとはいえ楽器できる訳でもないし却って迷惑なんじゃあ……って分かった。分かっている。分かってる今更帰らないから右腕の袖だけ強く引つ張るな変に伸びちゃうでしょうがっ」

「んんんんううう……!」

その内後藤さんが原因で俺の制服よれの伸び伸びになっちゃうんじゃないか。どうせならゴムゴムにしてください。

「うん？ 大丈夫だよ。お客さん扱いでも良いし今日はひとりちゃんに頼んでるのはこつちだからお代もいらぬし！ ひとりちゃんも清水君と一緒にやないと嫌そうだしねっ」

「せつかくだから俺無しでも行けるようになってほしかったですけどねえ」

まあそう簡単にはいかないか。徐々に慣らした方がいいかもしれないな。お役御免の道のりはやはり遠い。

俺が帰ろうとしたらこれだもんな。育て方を間違えたか……？

当のご本人は俺が帰らないと分かった瞬間機嫌を取り戻し、また自分の世界に入っている。しかし片手はしっかりと俺の右袖を掴んだままだ。絶対に逃がさないという意志を感じる。

しかもいきなり前を歩いてる伊地知さんの匂いをすんすんと嗅ぎ出した。何やってんだこいつ。いつから変態スキルを取り込んだんだ。やめろ、袖掴まれてるから離れたくても離れられない。俺まで変なレッテル貼られそうで怖いんだが。

「ん？ 歩くペース速い？」

「い、いえ」

「そうそう、今日出演するライブハウスは『STARRY』っていうんだけどね。あたしのお姉ちゃんが店長やってて……っていうか店の上のマンションにあたしら家族が住んでるんだー」

「あつ、はい」

伊地知さんが後藤さんの方に振り向いて話しかけた途端目を逸らした。恐るべき速さ、俺でなきや見逃しちゃうね。いや全然伊地知さんも見逃してないけど。

すると突然攻防戦が始まった。

「でね、あたしがそこでバイトやってて……」

「あつ、はい」

「他のスタッフの人もみんな優しいんだー」

「あつ、はい」

「だからそんなに緊張する事もないよーって」

「あつ、はい」

伊地知さんが何とか後藤さんと目を合わせようと必死に動いているが、対する後藤さんはそれよりも先に動きを読んで避けている。

何だこの無意味な戦い。後藤さんは同じ事しか言わねえし。NPCかよ。途中から

水陸両用モビルスーツの事を言ってるかと思つたぞ。それはアツガイ。

「……ひとりちゃんつて実は運動できる？」

「あつ、いえ……でもドッジボールだけは何故かいつも最後まで残つてました……」

「そ、そつか……」

おいやめろ。誰も得しない回答とか悲惨な結末しか見えないぞ。現に伊地知さんがとても困つた顔で俺を見てくるのが証拠。

やめてください。俺だつてまさかデフォでミスデイレクション使える女の子が幼馴染だつたとは思わなかつたんです。気を遣つてボール当てられなかつた説が濃厚だけです。

「清水君は運動できるの？」

俺にもちゃんと話題を振つてくれる辺り普通に優しいなこの人。今日に関してはハッピーセットのおまけみたいなものなのに。

「普通よりはまあ、くらいですかね。基本体育の授業以外で買い物とかしか外出しなかつたんで」

「へえ、そうなんだー。結構インドア派なんだね!」

「ですねえ。家事とか料理とか色々やる事あつて友達と遊びに行く事もそんなになかったんですよ」

友人が放課後誰かの家に行つて遊んだり部活に勤しんでる間、俺はその日の晩飯を作るために買い物したり洗濯物を取り込んだりしていた。

おかげで娯楽といえば家で済ませられるマンガや一人用とかオンラインゲームだけだったな。今でもそれは続いていてソシヤゲとかデイリーミツシヨンとか日課になっている。後藤さんの世話で忙しいので古戦場から逃げさせてください。

「なにににー? 今流行りの主夫系男子なのー? 料理もできるなんて優良物件だねお主っつ」

「流行りかどうかは分からないですけど、そう言ってもらえるのは素直に嬉しいです」
「私は武道館をも埋めた女……」

「え!?!」

いきなりブリザガ放つのやめてもらつていいですか後藤さん。唐突すぎて会話の流れぶち壊してるやん。伊地知さん顔真つ青ですよん。

あははと苦笑いしながら前を見る伊地知さん。多分やばい子だとか頼む相手間違え

たか思つてそう。ほんま後藤さんの墓穴クオリティーには頭が下がるでえ。そして数分後。

「あ、着いた。ここだよー」

案内されたのは上にマンションがありその下へ続く階段の店。上にマンションあるとは言つてたけど一階とかじゃなくて地下にあるのか。

まさにライブハウス独特の暗い雰囲気を入口の時点で醸し出している。隣にいる後藤さんは何故か青ざめていた。何で、むしろホームなんじゃないの？

「おっはよーございまーす！」

伊地知さんの挨拶と一緒に入ると、おお……これはすげえ。バンドは聴くけど主にネットだから直接ライブハウスに来た事はなかったけど、無用にテンションが湧き上がってくる感覚に襲われる。

この暗さと圧迫感がむしろ良い。ここで大音量の好きな音楽を生で見れるのなら、ファンが現地にわざわざ見に行くのも頷けるな。

「私の家……」

「あたしの家なんだけど!？」

隣では後藤さんが伊地知さん家を侵略しようとしていた。すぐ負けそうだけど。

「あれが照明さんで、そこにいるのがPAさんね」

「おはようございます……」

「おお、何だか耳にピアスばっか付けて雰囲気イケイケな女性が出てきたぞう。これは後藤さんにはキツそうだ。」

「いいいいイキつてすみません……」

半泣きであった。

どうした、後藤さんの中で何があった。何かしら調子乗ってたか同士だとか勘違いしてたんじゃないだろうな。言っとくが後藤さん程の人物なんてそうそういないからな。

「やっと帰ってきた」

不意に奥から誰かがやってきた。

「あ、リョウ〜!」

リヨウと呼ばれた人は、何だか伊地知さんとは対照的に大人しめな雰囲気を感じた。一言発しただけで分かる女子にしてはトーン低めな声、肩まで切り揃えられた髪は毛先がふわりと整えられており、左に泣きぼくろもあるからか可愛いというよりも綺麗、女の子というよりは女性印象の方が強かった。

「この子、後藤ひとりちゃん。奇跡的に公園にいたギタリストだよ」

「へえ……」

後藤さんが怯えている。無理もない。PAさんで既に致命傷を喰らっているのに更に追い打ちかけられたようなものだ。もはや泣きつ面に蜂ではなくサメである。

「こっちは？」

「ひとりちゃんの保護者的な子で、清水優人君。楽器はできないけど、一緒にいたしせつかくだから来てもらったの！」

「どうも、清水です。後藤さんの監視役みたいなものなんで、基本的にいない者扱いしてくれて大丈夫です。それより後藤さんの事よろしくお願いします」

「何で自分を卑下するような事言ってるの!？」

いやだって楽器弾かないからモブと変わらないし卑下したつもりもないんですけど。

タダで来させてもらってるのにバンドマンよりも変に目立つちやまずいでしょ。

後藤さんはさつきから怯えで凍結してるし。

「で、こつちがベースの山田リョウだよ」

「ほれ後藤さん、挨拶」

「ごごご後藤ひとりです大変申し訳ありません！」

よし、ちゃんと挨拶できたな。相手が如何なる人であれ初対面ではちゃんと挨拶する事は大切であり、何より序盤のコミュニケーションでもある。

人に話しかけられるに続いて第二ミッションクリアだ後藤さん。よくやったな。何で謝ったのかは謎だけど。

「大丈夫だからっ、リョウは表情が出にくいだけなの。あ、でも変人って言ったなら喜ぶよ」

「嬉しくないしい」

？である。この人、口ではそう言っているても表情がもうとろけている。完全に喜んでいる人の反応だ。

思ったよりも親しめそうな人だな。

後藤さんも今ので少しは和らいだのか、先ほどよりも怯えはなくなっているように見える。

あの明るい伊地知さんの友人なのだ。怖い人な訳ないもんな。

「あ、そういうえば店長が」

「え」

「時間まで練習しとけて。あと虹夏が勝手にライブハウス抜け出した事、怒りながら買い出し行った」

「ひいっ！?!?! 帰ってくる前にスタジオ行こー!」

店長つて事は伊地知さんのお姉さんだっけか。え、怖いのか？ もし会ったら後藤さん耐えられないんじゃない？ 大丈夫？ 死ぬ？

「ひとりちゃんも、ほら!」

それが当たり前のような声があった。

後藤さん自体はまだどう思ってるか分からないけれど、伊地知さんの中では既に後藤さんは仲間の一人として数えられている。そんな些細な事実が、何故か後藤さんよりも俺の気持ちを高揚させた。

軽く、後藤さんの背中を押す。

「ほれ、行つてこい」

「は、はい……！ あ、でも、ゆう、く……は……？」

「俺は元々部外者だから外で待つてるよ。邪魔したくな」

「何言つてんの？ どうせなら清水君も来てよ！ ライブ前に知ってる人に見てもらえた方が練習にもなるでしょ！」

「え、いやでも」

「はやくやく！」

「い、行きましょ……！」

「な、ちよ、分かったから押すなって……！」

今度は急に積極的になった後藤さんに背中を押されながらスタジオに連行される俺。良い感じに送り出したと思つたのに。

締まらねえな……。

6. 頑張った人にはちやんと褒めよう

後藤さんにスタジオへ連行され、俺は隅に置いてあつた木製の丸椅子に座ってからあの程度の時間が経っていた。

僅かな打ち合わせを終え、一度通しで演奏した後の事。

「ド下手だ」

「マ。ッ!？」

後藤さんが硬直した。演奏前は自信ありげにドラミングしてたのにな。何でしてたのかは一切知らんけど。

しかし伊地知さんと山田さんの評価にも後藤さんの演奏にも疑問があつた。

俺は後藤さんのギターを何度も聴いている。自分の好きな曲をリクエストするくらいだし、実際その時はめちやくちや上手かつたはずだ。

なのに今の演奏ではいつも聴いてるそれとは随分とかけ離れていた。素人の俺が聴いてても違和感を感じるくらいだから、バンドをやってる伊地知さん達はすぐに気付い

たのだろう。

何でいつもの実力が発揮できなかったんだ？ 初めて人と演奏したから？ もしくはいつもの陰キャモードでパニクった？ いきなりすぎてスピードとかその辺の調整をミスったか？

どれだ。全部の気もするけど。

「どうも、プランクトン後藤です……」

「売れないお笑い芸人みたいな人出てきた!？」

俺が推測を出す前に後藤さんは人間を辞めていた。さすがにプランクトンに失礼では？

「清水君の定番だよ！ ひとりちゃんを何とかして!」

「時には諦める事も大事ですよ」

「初っ端から諦めてない!？」

ああ、何て気持ちの良いツッコミなんだ伊地知さん。これだ、これだよ。俺が求めていたのはこういうツッコミをしてくれる人だったんだ。

後藤さん相手だと会話すらままならないからいつも自分の心の中でボケてツッコん

でを繰り返してたけど、逸材はここにいた。これで俺も安心してボケに回れるぞ。

そんな事をしている間に後藤さんがスタジオを出て可燃のゴミ箱の中へするすると移動していた。チイツ、プランクトンだから移動するところ見えてなかった！

メタモンかよ。色似てるけど！

「ひとりちゃんどこ入ってるの!?　ねえ、出てきてー!　本番始まつちやうよ!」

「ややや、やつぱりできませんく……!」

「しょうがないよ即席バンドなんだし。ほら、あたしだつてそんな上手くないしっ」

「私は上手い」

そこで胸を張れる山田さんの度胸凄いな。後藤さん慰める気ゼロじゃん。

「とりあえずこつち向いて!　現実逃避しないでー!　清水君ひとりちゃんつてたまに

こんななるの!」

「たまになんてもんじやないですよ。年中無休の四六時中です」

「365日!?　どうにかできないの!」

「できたら俺がとつくにそうさせてます」

「……」まで来るともう不治の病なんじやないかって思えてきた。後藤さんが陽キヤと

まではいかないにしても普通になれる日なんて来るのだろうか？

少なくとも今のままじゃ到底無理だ。その場合、俺が一生後藤さんの面倒を見なくてはいけない。……ちくしょう終身刑と変わんねえじゃねえか！ 常に要介護者だぞ。

だが伊地知さんが俺をスタジオに呼んだのも後藤さんの監視役としてだ。さすがに何もしいままというのは気が引ける。

ので俺はゴミ箱に入ったままの後藤さんの目線まで屈む。いわゆる子供の目線と同じ高さにする事で警戒心を解く技だ。

「後藤さん」

「っ」

彼女の身体がピクンツと跳ねる。

優しく、撫でるように言う。

「伊地知さん達は優しい人だ。だからそんな姿を見てたら後藤さんにこれ以上無理をさせるのは良くないって思わせてしまう事くらいは、分かるよな」

伊地知さん達の方へ視線を向けると首を縦に振った。やはり優しい人達だ。こんな後藤さんを受け入れてくれる人達は滅多にいない。だからここで諦めるのだけは絶対

に間違っている。

無言で頷く後藤さんに俺は続けた。

「ならまずは後藤さんの素直な気持ちをやんと言うべきだ。誘ってくれたこの人達に、後藤さんはどうしたい？　ちなみにこれだけは言つとくぞ。ここを逃せばこんな奇跡はもう二度と起きない」

「うっ……」

「その上で言ってみろ。どうしたいか、何をしたいかを。大丈夫だ、ゆっくりでいい。お前が何をやっても俺が必ずフォローする。だから怖がる必要なんてどこにもねえ。お前はお前のやりたい事をやれば良いんだよ」

「……私の、やりたい、事」

彼女が顔を上げた。

よし、この顔ならもう大丈夫だろう。何せ誰かに声を掛けられてバンドを組むなんて、それこそ後藤さんがずっと待ち望んでいた夢なんだから。それを自ら手放すなんてもつたない。

奇跡でも何でもいい。そこにチャンスがあるなら掴み取るべきだ。

「あ、あの、私、本当に嬉しかったです……。声掛けられて、バンドずっと組みたいと思ってたから……。でも、メンバー集まらなくて、だから普段はカバー曲とかネットに上げたり……」

え、それ初耳なんだけど。そんな事してたの？ チャンネル名何か聞いたら答えてくれ……。なさそうだな。今の今まで自分から言っただけじゃなかったし。

まあ身内にも言えない事の一つや二つあるのは当然として考えておこう。

「普段は何弾くの」

「あつ、結成した時すぐ対応できるように、ここ数年の売れ線バンドの曲は大体……」

「え、ずい！」

そうです。後藤さんはギターの前とちやほやされるための努力だけは凄いです。

全部他力本願だから基本的に実を結ばないだけなんです。それが一番致命的なんですけどね！

「売れ線のカバーばっかって、何かギターヒーローさんみたいだね。って知ってる？ 多分あたしらとそんな歳変わんないと思うんだけど。もう最高に上手いから聴いてみてよ！」

「私もオススメに出てくるから何度か見た事あるけど凄く上手かった」

「あ、その人俺も知ってますよ。俺が好きなのバンドとか結構弾いてくれるから勝手にシンパシー感じてるんですよ。概要欄も何だか俺と似たような経歴してて親近感湧いてます」

ガタンツッ！ とゴミ箱が揺れていた。ああ後藤さんか。

「ねー！ ネーミングセンスはちょっと痛いけど」

「カツ!？」

「そうですか？ 俺は結構好きですよギターヒーローって名前。やっぱヒーローってとこに男は惹かれるんですかね」

「……うえひ、うへへへ……」

ちよつと後藤さん会話の中に自分の世界の声介入させてこないでくれませんか。どんな妄想したらカツとか口から出てくるんだよ。

とかさつき良い表情になってたのに何でまた元通りになつてんの。まともな顔を数秒も持てないのか。

再会した時もそうだったけど、やけにギターヒーローの話題になると反応するのも何なんだ。

自分もネットに投稿してるから意識してるのか？ 確かに上手さで言えば多分同じくらいだと思うけど。素人だからちやんとは分からない。

……ん？

「えつとね、つまり何が言いたいかっていうと、上手くて話題の人もね？ あたし達が見てないところでたくさんギターを弾いてきたんだろうなって。後で見えてみて！ 動画見ると伝わってくるから！」

音楽をやってる人だから分かるものなんだろう。俺にはまだピンと来てないけど、今は俺よりも伊地知さん達の方が後藤さんを奮い立たせる事ができそうだ。

「今日がダメだからってバンド諦めるのは早いって！ あたし達がアレなだけかもだし」

「アレ？」

山田さんがこちらを見てきた。やめてください。俺に振らないでください。ツッコんでいいところはまだよく分からない関係性じゃないですか俺達。

「あ、立った」

「……」

「わ、私、その……」

「もしかして出てくれる気になったとか？」

後藤さんが立ち上がり、ジャージの裾を力強く掴んでいる。

彼女なりの努力と決意が垣間見えた。後藤さんも分かっているんだろう。こんな優しい人達は他にいないって。だから奇跡を掴むために立ち上がった。

「つたく、まあここまで自力で立ったなら頑張った方か。」

傍から見ればまだまだ甘やかしているように見えるかもしれないが、面倒を見ると誓ったのは紛れもないこの俺だ。であれば、多少は優しくしてやってもいいだろう。

静かに俺も立ち上がって後藤さんの隣に立つ。

「……ええ？」

「ん」

そつと右腕を差し出すと、後藤さんも俺の意図を察したのか掴んできた。右腕の袖を。

「いまいち分らないが、こんなものでちっぽけな勇気が出るならいくらでも差し出してやろう。減るものでもないしな。」

「わ、私も……いい、一緒に……でっ、でで……」

いいぞ後藤さん。もうすぐだ。それさえ言う事ができれば確実に前へ進めるぞ。

俺に後藤さんの成長を見せてくれ。

「怖いならこれに入って演奏すれば？」

そう言って完熟マンゴーと書かれたどでかい段ボールを持ってきたのは山田さんだった。

あの、初対面なばっかで大変言いにくいんですけど、ちよつとそこは空気読んでほしかったです。後藤さんのなけなしの勇氣と俺の手助けが無意味になってしまふんです
がそれは。

いやでも待て。袖しか貸してないけど一応俺もフォローしてるし後藤さんも自分で
頑張ってたんだ。

ならあんな段ボールなんてなくても後藤さんはちゃんと

「い、いつも弾いてる環境と同じです……！」

「どんな所に住んでんの？」

秒速でしつかり完熟マンガー段ボールの中へ移動していた。

「？ だろオイ。俺の助言は段ボールなんかには負けたのか。暗くて狭いところがあるとするぐ入りやがって、猫かよ。」

ちくしょう何だこの敗北感。わざわざアドバイスして袖も貸した俺がバカみたいじゃねえかよ。

無駄に恥ずかしい思いしただけじゃん。惨めになっちゃっただけじゃん。

「み、皆さん下北盛り上げていきましよう……！」

「少し気が大きくなった」

腹立つなこいつ。俺の気持ちをも簡単に踏み躪っておいてその態度かこの野郎。段ボールを少し蹴ってやろうとしたら、その前に伊地知さんが声をかけた。

「と、そういえばライブで何て紹介すればいい？ ひとりちゃん？ 本名でいいかな？」

「い、いや、それは……」

パカッと窓みたいに段ボールを開けてきた。いやそこ開くんかい。

「あだ名とかはないの？」

「あ、伊地知さんそれは」

「ち、中学では「あの」とか「おい」とか言われてました……」

「それあだ名じゃなくない!？」

友達がいけないのだからあだ名なんてある訳ない。伊地知さんにもこの雰囲気です察してあげてほしかった。

名字すら呼ばれてないのは本当に謎だ。あれか、名前呼んだら呪われるとか思われてんじゃないかな。奇行ばっかするし。

「ひとり……ひとりぼっち……ぼっちちゃんは？」

「またデリケートなところを！」

「ぼぼぼぼぼっちです！」

「喜んでるし……」

「今日一声が元気だな」

「あだ名とか初めてで……!」

「何か涙出てきた……」

初にあだ名がぼっちってそれはそれで良いのか後藤さん。

いやまあ本人が良いならいいんだけど。普通に喜んでるし。後藤さんのために泣い

てくれるとか何て良い人なんだ伊地知さん。その涙はもつとちやんとした時のために取つといた方がいいですよ。

「あつ、そういえばバンド名まだ聞いてないです……」

「確かに」

「うっ」

伊地知さんが何やら言いたくなさげな雰囲気を出している。

どうしたんだろう。ロックだしえげつい感じの名前なんだろうか。反社会的カニバリズムとかそんな感じかな。だとしたらやばいな。

「結束バンド」

「え」

思わず声が出してしまった。

「傑作……」

「寒いし絶対変えるからあゝ！」

「何で？ 可愛いよね？」

「あつ、はい」

え、可愛いのか？ 結束バンドが？

ダメだ。俺にはさっぱり分からん。女子の感性がそうなのかとも思ったが伊地知さんは変えたらしい。一時的なバンド名なんだろうか。

「バンド名は後回しで、そろそろ出番だよ！」

お、もうそんな時間か。

「じゃあ俺もそろそろ客席の方に行つときますね。頑張ってください」

「うん、しっかり見といてね！」

さて、ここから先は本当に俺無しでやらなきゃいけないぞ後藤さん。

バンド組んで一発目のライブ。ほとんどぶつつけ本番だけど、良い経験になる事を祈っている。

「あつ、うつ、ゆ、ゆう」

「後藤さん」

段ボールからこちらに手を伸ばそうとしていた彼女に声をかける。

「結束バンドの演奏、楽しみにしてるからな」

そう言つて返事を待たずに俺は客席の方へ移動した。

最後に映つたのは伸ばしていた手をゆっくり下ろす後藤さんだったが、まあ大丈夫だろう。

今日会つたばかりの人達だけど、それでも良い人達なんだって事はこの短時間で分かつた。

あの後藤さんを見て普通に接してくれる時点で等しくみんな聖人だ。伊地知さん達になら安心して後藤さんを任せられる。

不思議と気分も良い。

何だかライブが楽しみになってきた。

そしてライブが終わり、俺と後藤さんは帰路についていた。

STARRYを出てすぐ、俺は口を開いた。

「おい、何だアレ」

「あつ、いや、その……」

後藤さんからの返事はか細く歯切れの悪いものだった。

だがそれはいつもの事だしまあいい。俺が聞きたいのはライブの事だ。

「何で段ボールのままライブやったんだあれじゃ顔も見れねえし呼吸も合わせられないだろうが最前列で楽しみに待ってた俺の気持ち返せこの野郎！」

「ううううごめんなさいごめんなさいすみませーん……い！」

マジで完熟マンゴアの段ボールがそのまま出てきた時は声を失った。出荷かと思っ
た。

客はおそらく伊地知さん達の友人だけでまばらだったが、それ故余計に一人だけ最前
で見ている俺の目立ち方が凄かった。

今回はボーカルのいないインストバンドだからどこでノれば良いかよく分からな
かったし、あの段ボールを前に本当にノッても良いのか困惑したほどだ。

しかも最前でライブ中後ろを見るの躊躇うから他の客がノッてるかも分からなかつ

たのが怖い。よく聴くと演奏もちゃんと合ってたし。

結論、俺の選んだ聴き方は棒立ちである。もはや障害物の気持ちになつていた。

初めての生ライブの感想が地獄か？　と思つたのは多分この世界で俺一人だけだ。奇跡を掴んだ少女が段ボールとなつてステージに立つなんていったい誰が予想できる。

あの流れは普通段ボールなしで出てくるとこだろ。いきなり人前で演奏できてすげえつてなるとこだろ普通なら。

やはりというか当然というか、後藤さんはいつだつて俺の予想を遥かに下回つてくる。底なしだ。沼以下だ。引きずり上げるにも限界がある事を分かつてほしい。

結局初ライブは大失敗。俺から見ても無残な結果となつた訳ではあるが。

後藤さんの顔を見るに何も得られなかつた訳でもなさそうだ。

「……で、どうだったよライブは」

「たつ、楽しかつた……」

「それだけか？」

「虹夏ちゃんとリョウさんと一緒に……こ、これからも結束バンドとして頑張つていきたいなつて……」

「……そうか」

五月の夜空。寒すぎる事も暑すぎる事もない、平凡な夜空の下で聞くには十分すぎる回答だった。

彼女の中で答えは見つかったようだ。だとすれば、俺の言うべき事は一つ。

俯いて歩き女性とぶつかりそうになった後藤さんの肩をこちらに寄せる。

小さく「あ……」と声がしたのも無視して、

「よく頑張ったな」

これまで後藤さんの行動は全て裏目に出ていた。

努力が実を結ぶ事はなく、印象としては右肩下がりがかりで誰からも声を掛けられなかった。

本当はただ友達が欲しいだけなのに、そんな些細な願いも引つ込み思案な性格が災いして自分からは動けない。

他力本願でしか努力できなかったのが彼女だ。そんな彼女が、今日確実に一歩前へ踏み出した。

結果はどうであれ、バンドを組んでライブに出たのだ。

他の誰にも理解できないかもしれないけれど、それは後藤さんの中で数えきれない葛藤があり、逡巡し、悩んだ果ての行動だ。

今までにはなかった進歩。

少なからず一緒に歩んできたから俺には分かる。

段ボールのせいで変な説教をしてしまったが、実際には素直に褒めるのがむず痒くて照れ隠しだった。

しかし、ここはちゃんと言うべきだと思ったから。言う。

これからどうなるにせよ、可能性は無限に広がっている。

後藤さんの歩む道が、どうか明るい未来であれと願いながら。

「これからも応援してる」

「……は、はいー！」

7. バンドマンは基本にお金がない生き物だ

「何で俺も連れてこられてんの」

下北沢駅周辺、STARRYへ向かう足取りは当然重かった。

理由はただ一つ。

「今後のバンド活動について話し合うつてのは分かったけどさ、それ呼ばれてんの後藤さんだろ？ 俺関係ないじゃん。ただの部外者だぞ」

何故かバンド活動でのミーティングに俺も連行されている事。

今日は普通に帰ろうとしていたら後藤さんに手を引つ張られ下北沢駅で降ろされたのだ。バンド活動あるだろうし仲間もできたなら俺いなくても大丈夫だし家に帰れる。そう思っていた時期が僕にもありました。

「あつ、いてくれた方が、私が助かると思つて……」

めちやくちや個人的な理由じゃねえか。もつとマシな言い訳考えられなかったのか

よ。

とは言いつつ一緒に歩いてる時点で俺も引き返せなくなってる訳だけど。今帰ろうとすると何しでかすか分からんからなこの子。急に液状化するかもしれんし。騒ぎになつたら面倒だが、どうもなあ。

「つつつても今ライブハウス開いてる訳じゃないんだろ？ それこそ無関係な俺は入れな」

ポンツと、ポツケに入れていた俺のスマホからロインの通知音が鳴った。

喋っている最中なのに不思議なもので、ロインが鳴るとどうしても気になってしまうのが俺の性だ。グループロインか両親か、あるいは友人か。

スマホを出してロインを開くと、見知らぬ誰かからだった。いやほんとに誰。

スパムか？ とも思った束の間、俺の視線はアイコンの方に吸い込まれた。なんか黄色いアホ毛がドアップで写っている。あれ、妙に見覚えがあるような……。

トーク画面を開くと友達追加しますか？ というアプリからの質問と同時にこう書かれていた。

『やつほー！ 虹夏だよー！ ぼっちちゃんから清水君のロインのID教えてもらっ

ちやった！ という事で今日ぼっちちゃんと一緒にSTARRY来てねっ！ 名目としてはぼっちちゃんの保護者枠で良いから！」

個人情報だだ洩れであつた。え、？でしょ。俺のIDこんな簡単に流されんの？ 伊地知さんも普通に送ってきてるの中々にやばい事してるの気付いてほしい。ご丁寧にカモン！ と書かれた猫のスタンプまで貼つてある。

いやとりあえずは隣の犯人に問い詰めるべきだな。

「おいこら情報漏洩者」

「は、はひっ……………」

返事しちやったよ認めちやったよ。まあ逃げ場ないし一人しかいないから当然だけど。

「よくもまあ人のロインIDを軽々しく他人…………て言うのは何か気が引けるけど流してくれてんなあこの野郎。何で許可なく勝手に流した？ 言ってみ」

「あつ、えと…………虹夏ちゃんに教えてって言われて、断れなくて…………」

「…………」

そうだった。後藤さんは基本頼まれたら断れないイエスマンだった。俺に許可取る

前に教えてしまったのもおそらくテンパって早く教えなきやと思ったからだろう。

後藤さんの性格を知ってるからこそ、こう答えられると強く言えない。

「……はあ、まったく。今回は許すけど、次からはこういう事がないようにしろよ。ただでさえ後藤さんは危ねえやつとかに引っかけりそうだから怖いってのに」

「あつうつ、ごめんなさい……」

「謝ったからもういいよ。これ以上は追い打ちとかしねえから。伊地知さんにロイン返しとくか」

バンドメンバーじゃないから別にロイン交換する必要もないと思ってたんだけどなあ。まあ普通に友人として交換したって事でいいか。

一応これで俺もSTARRYの中に入れる理由ができた。やはり罪悪感とか気後れしてしまうような事は避けておきたい。

『分かりました。というかもう着きます』

これで良いな。送信、と。

ロインを送ったは良いがどうしよう。本当にもう着いてしまった。道は覚えてるけど景色を見慣れてないからどうにも時間と距離の感覚が掴めないんだよな。

おっと、そうだ忘れてた。

「あ、悪い後藤さん。俺今日普通に帰るつもりだったから飲み物買ってないわ。コンビニで適当に買ってくるから先入っててくれ」

「……え!? あつ、ちよ」

「後藤さんの分も買ってくるから気にすんな」

そう言つて俺はコンビニへダツシユした。

これに関してはいきなり俺を連れてきた後藤さんが悪い。行くと分かっていたら学校の自販機であらかじめ買っていたのに。

そして数分後。

俺が戻ってきたら階段の前に座っている後藤さんがいた。……え、いや、何で?

「うおーい後藤さん、何で入ってないんだよ? 鍵閉まってるとかじゃないよな?」

話しかけたらグルンツ!! と勢い良くこちらに振り向いて迫ってきた。

「な、何ですぐどつか行つちやうんですか……!? 一人にされたら……は、入れる訳ない

じゃないですかあ……!」

「いや入れよ」

いや入れよ。当たり前的事すぎて口と心の中から同時に出ちゃったわ。

さすがに見知らぬ店って訳でもないんだし入れるだろ。けどそれで入れないのが後藤さんなのでしたー。はい、さんねえーん!!

「うう……一緒に入りたい……」

「……あーもう、分かったからとつとと行くぞつ。いつまでも待たせてちゃ悪いだろ」
いつも通り俺の背中にくつついてくる後藤さんを尻目にドアを開ける。

予想通り、既に伊地知さんと山田さんが中にいた。

「あ、やつと来たねー。ロインの返事からずつと待つてたんだよー?」

「すいません。急に連れてこられたんで飲み物買ってくるの忘れてしまつて。コンビニに買いに行つてたんです。つと、これ後藤さんの分な」

「あつ、ありがとうございます……」

買つてきたペットボトルを渡し、伊地知さん達が座っているテーブルの方へ行く。

ちゃんと俺の分のイスまで用意されていた。

「そうなんだあ。でも飲み物ならウチにたくさんあるからそれ飲んでもいいのにー！」
「店用のとか勝手に飲んだらダメなんじゃないですか普通」

「？」

テーブルの上にはいかにも店の物と思わしきカップとジュースが注ぎ込まれていた。普通にやつちやつてるわこの人。

身内が経営してるからそこら辺のルールが緩いのだろうか。

「まあいいや。ほら座って座って！」

促されるまま座る。

「という訳で第一回結束バンドメンバーミーティング開催しまーす！ はい拍手くぱちぱちぱちぱちぱちい！」

山田さんも後藤さんも続くようにまばらと拍手している。

「というかマジで俺全然関係ないな。場違い感半端ないんだけど。バンド知識ある三人とほぼ無知な俺一人って何。昨日に比べて思ったより居づらいわ。」

「それじゃあえつと……思えばあんまり仲良くないから何話せばいいかよく分かんないやっ」

「身も蓋もねえな」

「そんな時のために、こんなものを用意しておいた。じゃじゃーん、ごきげんいかがサイコロお」

「何でバンジージャンプとか書いてんだよ」

あれ、何か昨日より思った以上に自由だぞこの人達。こんなさばさばしてたっけか。

「おお、清水君ナイスツツコミだねえ」

「あ、すいません。思わぬボケについ敬語外れてしまいました」

いかんいかん。いくらボケとは言っても相手は先輩。後藤さんの恩人なんだから敬意をもつて接しないと失礼だ。

「えー、別にあたしらは良いんだけどなあ。ねえリョウ」

「男友達感があつて良いと思う。これもロックならでは」

ほんとかよ。結構半信半疑だぞそれ。つうかロック免罪符すぎませんか？

「まあほら、それは置いときましようよ。せっかくならサイコロ回しましよ」

「何か流された感あるけど、まあいつか。じゃあサイコロ回すよ。ほいつ、なにっがでーるかな、なにっがでーるかなっ♪」

言うな言うな。よくは分からんが何か言っちゃいけないような気がする。どこことなくお昼の雰囲気が出てくるから。

伊地知さんの転がしたサイコロの止まった目は、

「学校の話く略してガコバナ〜!」

「はいどうぞ」

「えっ、ああ、えつと……そういえば二人共同じ学校……」

「そう! 下高だよ」

「二人共家が近いから選んだ」

後藤さんが話を振られて割かし普通に話している……だと……?」

伊地知さん達は普通にしてるけど俺からすれば結構衝撃的なんだが。どうした後藤さん、一度成長したらずつと成長できていくタイプなのか。

「し、下北沢にお住まいで……」

「あれ、ぼっちちゃんと清水君秀華校でしょ？ 家こころ辺じゃないの？」

「あつ、いや、県外で片道二時間です……」

「え、何で!？」

「高校は誰も自分の過去を知らないところに行きたくて……」

「俺は後藤さんの面倒見るために一緒のそこ受けました」

「清水君の理由も大概だね!？」

ほっとけなかつたからな。この子一人だと今頃学校生活どうなってたか分からないし。いや今も大概か？

その後も音楽の話だったり、後藤さんが青春コンプレックスを刺激する歌が苦手だどうのこうの言ってまた幻想世界に入ったりとミーティングになってるかよく分からない事になった。

気付けば今度はライブの話になっている。

「今度はボーカルありのライブがしたいんだよね。けどあたしは歌下手だし……ぼっちちゃんは……だよねえ」

後藤さんが人前で歌うなんて無理に決まってるじゃないですか!! 歌う前に発狂してブリッジとかしだすに一票。

それはそれで見てみたいかもしれない。これもまたロック。俺も分かってきてしまったか……。

「あの、リョウさんは……?」

「フロントマンまでしたら私のワンマンになってバンドを潰してしまう……」

「その湧き出る自信は何?」

いやほんとこんな自信持つて言えるのむしろ凄いと思う。後藤さんもちよつと分けてもらいなさい。ワンチャン調子乗つて自爆するとこまでがオチになるかもだけど。

「そうだ、ボーカル見付けたら曲も作ろうよ! リョウ作曲できるし、歌詞に禁句が多いならぼっちちゃんが書けばいいよ!」

「ああ、それはありかもですね。後藤さん俺と再会した中学の時も基本ずっと図書室で本読んでましたし。語彙力とか比喻表現は得意かもしれません」

それを話せる事はまずないけど、までがセットである。

当の振られた本人はずつと俯いてぶるぶる震えてた。武者震いかな。

「虹夏は何するの」

「……ど、ドラムにはバンドでの潤滑油としての役割があるから……」
「就活生か」

いや、でも割とこのメンバーの中では大事な役割かもしれない。後藤さんは上手く話せないし、今のところの印象だけど山田さんも結構マイペースで独特なところあるし。

あながち間違いでもないような気もする。一人はしつかりした人がいないとまとまらないもんな。

その後は意外にも順調にミーティングは進んでいった。

ノルマの話になってバンドマンには売れるまでお金がたくさんいる事、しかし前回のライブクオリティーだと集客の見込みもない。

友達がいない後藤さんと山田さんは期待できないしな。あれ、思ったほどミーティング順調かこれ？ 悲しい現実しか分かってないけど。

「清水君は誰か呼べそう？」

「生憎俺も高校ではライブ呼べる程仲が良い友達多い方ではないですよ。いないって訳じゃないんですけど、さっきも言った通り登下校に時間かかるせいで放課後親交深める時間がないと言いますか。一緒に来るとしても後藤さんもいるので、多分来る途中で現実からログアウトします」

休み時間も後藤さん何してるか見に行ってるからマジで交友関係は広くない。最低の交流しかしてないから男友達が数人いるくらいだ。

何なら学校で一番喋ってるのは喜多さんまである。女子じゃん。ラブコメか？

「そっか〜」

「それに俺はバンドメンバーじゃないんで余計呼びづらいつてのもありますねえ。もし呼ぶにしても、もうちよつとクオリティー上げないと何とも……」

「〜もつともだあ〜!」

今まで放課後遊んだ事なかったのに急にライブ誘っていざ来てみれば、クオリティー低いしボーカルもないし一人は完熟マンゴー段ボールだしで下手すると俺まで学校でぼつちになりかねない。

これじゃぼつちくんになつちやう。やだ、男のぼつちつてだけでより悲壮感増すのエグい。やっぱ呼ぶのやめとこう。生命線は確保しておかないと。

「うーん、まあその辺はひとまず置いてこっか。とりあえず当分ライブのために数万円必要だから、ノルマ代機材代諸々稼ぐためにバイトしよー!」

「はい……」

意外にも素直に返事したな後藤さん。

いや違うなこれ。いつも通り適当に返事しただけでちゃんと話聞いてないだけだ。また固有結界の中に入ってたのか。

でも聞き慣れない単語と聞き入れたくない単語が同時に耳に入ってしまうと、人というのは嫌でも現実には引きずり落とされるのだ。

目の前の後藤さんのように。

「……バイトお!?!」

「今日一声出たね」

ぼっちは声のボリリューム調整が下手なんです許してやってください。

後藤さんのバンドマン人生は前途多難のようだ。

8. 女の子の名前を呼ぶのが恥ずかしいのは最初だけ

やめて！ 伊地知さんからバイトしようと言われてまともに話を聞いてなかったせいで一度ははいと答えたものの、よくよく考えれば自分にとつて一番経験したくないものトップ3に入ってるような（俺調べ）事を思い出した後藤ひとり。

このまま事が進んでいけばバイトをやる羽目になっちゃう！ お願い、死なないで後藤さん！ アンタが今ここで死んだら、結束バンドで頑張っていくって言ってた言葉はどうなっちゃうの？ 時間はまだ残ってる。ここで代案を出せたら、バイトしなくて済むんだから！

次回、『後藤 死す』デュエルスタンバイ！
死ぬんかい。

隣で何を考えてるのか分からないままずっと震えて明日を絶望しているあだ名がぼっちちゃんこと後藤さん。

彼女の中では今緻密な計算と思考能力によって、どうにかバイトを回避できる手段を考えてるに違いない。無駄な足掻きとはこの事よな。

「えつと……ぼつちちゃん？」

「ああ、ちよつと待っててください。多分今は話しかけても無意味です。自分パーソナルリアリティだけの現実に入ってるんで」

「ば、ばそ……ん？」

伊地知さんが可愛らしく首を傾げている。マンガやアニメのネタが通じない時は中々に照れ臭いぜ。まあ純粹に分かってない反応をしてる伊地知さんが可愛いので良しとしておこう。

あと後藤さん、そろそろ戻ってきてくれ。座ってるからイスにまで振動伝わってガタガタいってるぞ。ガタガタいわすのは奥歯だけにしときなさい。

やがて後藤さんは我に戻りトートバッグからある物を出して伊地知さんに差し出した。

ジャリンツツという音を豚が響かせていた。

「………ブタさん？」

「あつ、お、お母さんが私の結婚費用に貯めてくれてて……これどうか、バイトだけはあ……！」

いきなりすげえ爆弾発言しやがった。

「あたし達を鬼にする気!?!」

「ありがとう。大事に使わせていただき」

「いただかないいただかない! 返すの!」

山田さん怖いものなしか。これがベースは変人が多いと言われる所以だったりする?
?

変人度で言ったら後藤さん超えられる人いないと思うけど。自称超えられる人いたら出てきてほしい。こっちは塵とか液状化するんだからな。人間辞めてんだよ後藤さんは!

というか後藤さんママいつの間になんかの貯めてたんだ。一応まだ高校一年生なんだから貯めるには早いんじゃない。……あ、そうか、今のバイトすらまともにできなさそうな後藤さんを見越してあらかじめ貯めておいたんだな。

後藤さんママ、あなたの娘はあなたの優しさをバイトしたくないがために簡単に差し出しました。これもロツクなんでしょうか。

「こんな大事なお金使えないから〜！ それにこういうのはそういう時のためにちゃんと取って置かないとダメなんだよ！」

「あつうつ、で、でも……」

「美智代さんが貯めてくれてたものをお歳暮渡すみたいに出してんじやねえつつの」

「あだつ……」

軽いチョップをお見舞いする。めちやくちや軽くしたつもりなのにじわりと目尻に涙を浮かべてるのは、きつとバイトをしなくちやいけない現実から目を背けたいからだろう。

もはや趣味が現実逃避の人なのかもしれない。

「つうか何で後藤さんがんな大事なモンを常備してんの？ 普通美智代さんが持つてるもんだろそれ。ブタ貯金箱てっ、いつの時代だ。無駄に重い物を学校においそれと持ってきてんじやねえ」

二重の意味で重いつつてね。さすがにこんな事口では言えない。俺までブリザガ放ちたくないし。

貯金箱の中からは小銭の音しかない。結婚費用なのか……これが？

「あつ、何でか知らないんですけど……お、お母さんがいぎとなったらゆ、くんに黙って渡しなさいって……」

「今おもつきし言っちゃってんじゃねえか」

「押し付ける気満々だ!?!」

美智代さん、あなたまさか晩ご飯食べに行くといつも快く出迎えてくれてたのに、腹の中ではそんな事企んでたんですか。そもそも結婚費用なのにライブ代の代わりにしようとするくらい軽い気持ちなんですが。

娘さんはまず人とコミュニケーション取る練習をして普通に会話できるレベルにならないと、誰かと交際なんて難しいんじゃないですかね。

それがいつになるかは分かん。だって大きな岩も水に何十年何百年打たれないと形変わらないって言うし。

つまり後藤さんは岩と変わらない……ってコト!?!

「いらん。今度は俺に差し向けてくん。いぎって時でもねえだろ今」

おずおずと俺の方に貯金箱を差し出してきたので取り返しがつく内に押し返しておく。もし受け取ってしまったらもう二度と平穏な日々には戻ってこれなさそうだし。

「今はバイトの話してんだから伊地知さんの話をちゃんと聞けバカ」

「……はい」

「あはは……それでね、提案なんだけど、ぼっちちゃんもここでバイトしたらどうかなってー」

「……………」

ほう、それは結構良い案かもしれない。

「うんっ。あたしもリヨウもいるから怖くないよー」

「アットホームで和気あいあいとした職場です」

完全にネットでネタにされてるようなブラック企業のテンプレ紹介文なんだけど。

何でどこのブラック企業もアットホームで和気あいあいとしてるんだろう。最初は仲良くして距離を詰めてから逃げられないようにどん底へ引きずり下ろすのが目的なんだろうか。

アットホームより庄と法無な職場に変えた方がいいぞ。ただのトラップじゃん。

「ドリンクスタッフとか、掃除しながら色んなバンド見れるし、ねっ？ どうかな？」

確かにそれは良い経験にもなるし学ぶ事もありそうだ。バンドをやっていく上では全然ありだと思う。

で、肝心の後藤さんとは言えば。

「……………がんばりましゅ」

イエスマンの再来となっていた。断れない性分がこんな時でも問答無用に發揮されるのは少し同情してしまう。

頑張れない事や覚えられない事でも「はい」と言ってしまうのはぼっち特有のものなのか。しかしここでのバイトなら後藤さんも何だかんだ上手くやれそうな気もしてくる。

伊地知さん達がいるだけ何倍もマシだろう。

……………マシ、なのかな。そうであってくれ。

「やったー！ これでこのライブハウスももっと楽しくなるね！」

「あつ……………だ、だったら優、くんも一緒にが、いいです……………」

「……………ん？ 何で俺も一緒にバイトする流れになってるの。ライブ代のためのバイトなら俺はいらんだろ。メンバーじゃないんだし」

急に何言い出すんだこの子。あわよくばすぐ俺を巻き込もうとする癖どうにかした方がいいぞ。

それにお金に困ってる訳でもないし。父と二人で暮らしてた時は家事とか家にいる事が多いせいとか、お礼とお詫びに小遣いは結構貰ってたし貯めてるのでね。最近のゲームは基本無料で遊べるからコスパめちや良い助かる。

そんな俺の意見をよそに後藤さんに同調したのは伊地知さんだった。

「お、それいいねえぼっちちゃん！ 清水君も一緒にバイトしようよ！ 男の子がいると何かと心強いし機材の持ち運びとか任せたいしねっ！」

「何でそこで賛同してんですか。つかこき使う気満々じゃん。下心しか見えてこないんだけど！」

「まあまあ。それにほら、バイトするならSTARRYにいつ来てもいい訳だしさ、ぼっちちゃんの事も常に見とけるよ？」

俺がここにしようっちゅう来る前提で話進んでるのは何でなんですかね。後藤さんの事も俺がいなくても大丈夫になってほしいんですけど。

金魚のフ……ずっとピクミン状態だよ？ 全身ピンクだから羽もがれた羽ピクミンみたいになってるんだが。笛吹いて解散とかできませんか。

いつまでも保護者枠でいるのも後藤さんのためにならない。たまには突き放す事も彼女の将来のためだと思う。

そう思い続けて早数カ月。重症化してんじやないのこの子。やっぱ俺のせいなのこれ。マシになるどころかどんどん離れてくんなくなってるし。

いやでも、ちゃんとした子になるまで面倒見るって誓っちゃったもんなあ。

「……あーもう、分かりましたよ。俺もここでバイトさせていただきます。結束バンドがどう成長していくかも気になるので」

「んもうっ、素直じやないなあ優人くんは〜!」

「いや別にそういう訳じや……って、は? 優人? 何でいきなり名前呼び?」

「だって一緒にバイトするしもつと親交深めれる訳じやん? それにぼっちちゃんだけあだ名で呼んでるのに、優人くんだけ清水君なのも何だかなあって思ってたし!」

それはバンドのMCで名前呼ぶからあだ名にしたんであって俺は関係ないのでは? り、理由がめちやくちやすぎる……。こじつけてレベルじやないぞ。

「えっと、山田さんはどう思ってます……?」

「何ならリョウって呼んでくれても構わない。みんなマブ、それがロックだよ優人」

「あたしも虹夏で良いからねー！」

ロックは別に万能な理由付けとして使っているいい訳じゃねえぞ。

何でもロックと言ったら許されると思ってるんじゃないだろうなこの人達。後藤さんは隣でずっと「ゆ、うくん……優、くん……」とか小声で呟いてて怖えし。ほんとに呪ってきてないよな？

伊地知さんから笑顔で見られ、山田さんから無表情で見られ、後藤さんは俺の名前をちゃんと呼ぶ練習をしてて。

一人だけ何か違うけど、この人達といると何か調子狂うな……。いつも後藤さんとはかり話してるから、人と普通に会話できる事自体ちよつとしたレア体験になってきてるところある。

後藤さん以外だと基本右隣の席に座ってる喜多さんくらいしか喋らないし。毎回向こうから話しかけてくるからそれがちよつとした日課にもなっている。

超絶陰キヤと極限陽キヤと交互に喋る事で、俺は平凡な人間としてバランスを保っているのかもしれない。

ところで期待の眼差しが痛い。こちらが折れないとこれからちよくちよく弄ってきてそうだし、仕方ないか。

「じゃあ、虹夏さんにリョウさん。……これで良いですか」

「おお……男の子に名前呼ばれるの初めてだから何か新鮮だ……」

「マブ」

「あつ、あの、わ、わた、わた、わわわわ……」

こっちだつて一つ上の先輩を下の名前で呼ぶなんて初めてだから結構勇気いるんですが。同年代の女の子でさえ名前で呼ぶ事ないのに。こちとら思春期男子つて事を理解してほしい。

後藤さんは後藤さんで壊れたNPCみたいにバグつてた。デバッガー呼ぼうか？

「ほら、もういいでしょう。さつさとミーティングの続きしてください。できるだけ後藤さんの通訳はしますから」

「ぼっちちゃん専用の翻訳家だ！」

「あつ、へへ……」

何でそこで笑う。

とまあ、色々あったがミーティングは何事もなく終わりを迎えた。時々後藤さんが作画崩壊してたのを除いて。

「じゃあバイトは来週からね！ 学校終わったらウチに直行で！」

「ぼっち、優人、ばいばい」

「あつ、はい」

「失礼します」

別れを告げて駅まで歩き出す。

来週からSTARRYでバイトが始まる。バイト経験はないが業務内容自体は難しくないって言うてたし、まあ大丈夫だろう。

後藤さんは凄くガクブルしているけど。今からもバイトの事を考えて怯えているらしい。

無理もない。伊地……虹夏さん達と一緒にと言っても後藤さんにとっては初バイト。ただでさえ人と話せない彼女が接客なんてしようものなら、正面から向き合うだけで石化し相手に自分はメドウーサだったかと錯覚させてしまう恐れがある。

こうなってしまうえばライブハウスのレビューサイトでSTARRYは☆1評価ばかり入れられてしまう。そんなサイトあるか分からないけど多分入れられてしまう。

だが未だに人と話せないのも今後バンドをしていくなら直していかないといけない。お世話になる人やチケットを売る時など、どうしても誰かと話さないといけない時は必

ずやってくるものだ。

この際ショック療法でも多少無理矢理でもいいからどうか少しでも克服してほしい。

せめて俺がいなくても大丈夫くらいには、虹夏さん達といれば何とかかなるくらいマシになれば俺の負担も多少は減るはずだ。

「そんなに不安か？」

「あつ……その、どうしても、やっぱり……」

「そうだよなあ」

今までろくに人と関わってこなかった彼女だ。いきなり接客だなんてハードルが高すぎるというのも理解はできる。

「でも頑張るって決めたんだろ？」

「うっ……」

「だったら怖がる前にやってみようぜ。流れで俺もバイトする事になっちまったけど、その分可能な限りのフォローはするし、虹夏さん達もしてくれるはずだ」

焦らなくなっていた。何もすぐに全部克服しろなんて誰も言わない。

足並みなんて人それぞれなのだから。

「ゆっくりで良いから慣れていけばいいよ。高校じゃスタートダッシュは遅れたけど、確実に後藤さんは成長してるよ。それは傍で見てきた俺が保証する」

「そ、そう、かな……」

「後藤さんは後藤さんのペースでいいんだ。今まで後退と悪化しかしてなかったんだから今の現状は上々だよ」

「づッ……」

あ、やべ、良い事言ったつもりがトドメさしちやった。

後藤、次回に続く前に死す。

デュエルスタンバイ!!

9. ラッキースケベで喜びよりも上回る感情だってある

バイトが翌日まで迫った夕方。

俺は後藤家へお呼ばれされていた。理由は言わずもがな、後藤さんの妹、ふたりちゃんにゆうくんあそぼーと言われたからである。

俺からすれば両親の次くらいには逆らえないほど充分な理由だ。だってめっちゃくちゃ可愛いんだもん。超懐いてくれるんだもん。シナモンカルダモン。

こんなの毎日あそぼーって言われても遊んじやう。本当の妹ができたみたいで甘やかしたくなるほど良い子だしな。たまに後藤さんに対して無邪気な精神攻撃してるけど、悪気ないもんねー？

俺がふたりちゃんと遊んでる間、後藤さんは晩ご飯できるまで風呂に入ってきてると言っていた。その顔には何かしらの決意があつたのを俺は見逃していない。

後藤さん、ちゃんとバイトやる気になったんだな。この前トドメさしてしまった時は家までずっと死んでた後藤さんをおんぶしてて結局何も聞けなかったし。

これなら明日も大丈夫そうだ。

「ゆうくんっ、次は何やるー？ ジミヘン弾くー？」

「うーん、ジミヘン犬はちよつと楽器じゃないから弾けないかなー？ お腹わしやわしやならでできるけどね〜」

「お腹わしやわしやが弾くってことなんだよー！ きゃーわしやわしやー!!」

「へーそうなのかー。それならお兄ちゃんにもできそうだなー」

ふたりちゃんがジミヘンのお腹を両手でわしやわしやし、ジミヘンはワンワン言いながら尻尾を振っていた。

ジミヘンは楽器だった……？

「飽きたー！ ゆうくん次はジミヘンと一緒に追いかけてこしよー！」

「ふたりちゃんはともかくお兄ちゃんが家の中で走っちゃったらちよつとうるさくなるから、もつと静かに遊べそうな事しよつか？」

「じゃあみによんずごっこしよ！ ばなな〜ば〜なな〜！ なー！ ば〜なな〜！」

うん、何言ってるか全然分からん。あれか、小さくて黄色いあいつか。見た事ないから何も知らないんだけどノリでいけるかなこれ。

バナナとか言ってるけど、適当に言っておけば何とかなるか。子供だし細かい違いな

んて分からないだろ。

「バーナー」

「みによんはそんな声低くないよ」

「うん、あ、えと、ごめん。みによんず見た事ないから分からなかったんだお兄ちゃん」
まさかのダメだし喰らったんですけど。さすがに誤魔化せなかったか。フシギバナの声真似じや低すぎたらしい。

今日の遊びはハードル高いなあふたりちゃん。五歳にしてはしつかりしてそうではあるけど、やはり突然突拍子もない事を言いだすのは子供特有だな。

「あつ、ふたりちゃん。お兄ちゃんちよつとママの晩ご飯のお手伝いしてくるから、ちよつとだけジミヘンと遊んでてくれる？」

「わかったー！ 行くよージミヘン！ 探検だー！」

元氣すぎんか五歳児。無限に走り続けるじゃん。スタミナ底なしか。

家のそこからダダダダダダツと足音が聞こえてくる。この家は毎日賑やかで飽きなさそう。つと、いけないいけない。

「美智代さん、手伝いますよ」

「あら、ごめんね。ありがとゆう君。じゃあ味噌汁だけお願いしていい?」

「分かりました。少し薄めでいいんですよね?」

「ええ、助かつちやうわ〜」

晩ご飯をご馳走になる時、いつも自分家からも食材を持ってきて食費の負担を半分にかけているが、それだけだと悪いから俺もこうしてたまに手伝っているのだ。そのおかげか気付けば後藤家の味もマスターしてしまっている程だった。

ちなみに今日は俺がふたりちゃんに呼ばれたから母と父は来ていない。普段は母も手伝ってるからその時は後藤さんやふたりちゃんの相手をしている。というのが幼馴染の日常である。

よし、味はこんなもんで良いか。

「さすがゆう君ねえ。これならいつ娘を貰ってくれても安心できるわ〜」

「さすがに要介護者のままはキツイです」

ちよつと隠さなくなってきたなこの人。だがしかし、ここで動じる俺ではない。何たってまだ高校一年だ。

俺は俺の青春ラブコメを自分で模索していかなくてはならない。そのためにも後藤

さんには早くまともになってもらう必要がある。高校の時くらい俺にだってもつと選
択肢があつてもいいじゃない!

あれ、そういやさつきまで聞こえてたふたりちゃん足の音が聞こえなくなったな。
どつかで大人しく遊んでるんだらうか。

そろそろ晩ご飯もできそうだし皿でも並べておくかと思つた矢先、今度はタタタッ
と軽い足音が聞こえてきた。遊びを終えて戻ってきたのかな。

「ゆーくーん、お姉ちゃんお風呂で沈んでるー」

「……………は?」

一瞬、呼吸が止まった。

気付いた時にはもうキッチンから走り出していた。

「あのバカつ、まさかのぼせてんじゃねえだろうなあツ!」

急いで風呂場へ行き、相手が今どんな格好をしているかさえ気にも留めないで開け
る。

こんな時に裸だとか気にしている場合ではない、下手すると命に係わるような事態に
なっているのだ。ここで心にブレーキなんて掛けられるはずもない。

「おい！ 大丈夫かしつかりしろひと……」

そして、俺は目の前の光景を見て絶句した。

ふたりちゃんの言う通り、確かに彼女は沈みかけていた。しかし、その姿は全裸でもなく、スクール水着だった。

湯船には水がいくつも浮かべられ、床には水を入れていたであろう袋が散乱している。

完全に惨状だった。しかも偶発的に起こったものではなく、明らかに彼女が自分でやったという証拠まで出揃っている始末。

一気に熱が冷めていく感覚がした。

それはもう彼女が沈みかけていく氷風呂のように。

「……」

俺は何も言わないまま服が濡れる事も構わずにバカを持ち上げた。大工の人が木材を肩に担ぐ時のようなものを思い浮かべてくれればいい。

肩から冷たい水が垂れてくるが気にしない。バカもピクピクと震えていて意識があるのかないのか判断もできない。つうか口から漏れてる緑の液体は何だ。やっぱ人間

辞めてんのか。

ふたりちゃんが横で「ゆーくん力持ちだー」とか言つて着いてくる。かわいい。

そのままリビングへ行き、調理途中の美智代さんに言う。さすがにこの先は俺も踏み込んでいいものか分からないから。

「美智代さん」

「あら、またひとりちゃん何かやらかしたのねえ」

「あとは俺がやつとくんでのバカの体拭いて目覚まさせてやってください。あとで説教したいんで」

「鬼の顔だー」

ふたりちゃん、人の顔にそんな事言っちゃダメだよ。それが本当だとしてもね。

あれから何分経ったか。テーブルに並べられた晩ご飯、ふたりちゃんと直樹さんには先に食べておいてもらつて、俺は美智代さんを待っていた。

直樹さんからは小声で「優人君だけは絶対に怒らせたらダメだぞふたり〜」と言つていたが聞こえてます。全部あなたの娘が原因なんですすがそれは。

少し待つてると美智代さんが降りてきた。

「ゆう君、まだ食べてなかったの？」

「ええ、お願いしておきながら先に食べるのはどうかと思ひまして」

「別に良かったのに、ならもう食べましようか」

「え、いや、でも」

「食べてる間にあの子も着替え終わるだろうし、その方が冷めずにすむでしょ？」

自分の娘が食べる頃には冷めてると思うんですけど。まあそこは自業自得か。

確かにせっかくお世話になつてるのに料理を冷ましては悪い。親しき中にも礼儀ありである。

「じゃあ、先にいただきます」

「はい、どうぞ」

ものの五分で食べ終わった。

俺の気持ちは完全にバカへと向いているので、少し念を入れておく必要があるな。

「あの、まだ下に降りて来ないからちよつと上行つてきます。少しうるさくなつちやつたらすいません」

「あの子のためにもなるから気にしなくて大丈夫よお」

何でこんな優しい人からあんな愚かな娘が産まれたのだろうか。

その真相を確かめるべく、俺は後藤^アさんの部屋^ソの奥地へと向かった。

二階に上がる階段。そこからギターを掻き鳴らす音が聴こえてくる。

どういう事だ？ 着替え終わったなら普通晩飯食べに降りてくるはずなんだが。今ギターの練習をする意味が分からない。

この時、俺は風呂場で自分の見た光景の意味をもっとしつかり考える必要があった。いったいどういう思考に至って氷風呂なんてしたのか。わざわざバイト前日にそんな事をする理由が分からない。そう、分からないと思っている時点で俺は後藤さんへの理解をまだちゃんとしきれていなかったのだ。

襖を開ける。

扇風機の前にヤツはいた。

「……………はえ？」

まだ着替え終わってすらいなくて、下着とブラだけの装備。その上冷えピタを何枚も体に貼り付け強設定にされた扇風機の前でギターを持っている女がいた。

バカはこちらに気付きいっそへんてこな声を出している。理解が追い付いていないのだろう。

しかしそれとは逆に俺の脳内はすぐに理解した。男子高校生なら一度は夢見るラツキースケベな展開を前にしながらも、自分の中の熱が沸騰しそうになっていた事に。

これは興奮ではなく怒り。バンドのために頑張ると言っていた矢先にこれだ。

「ゆっ、ゆうく……!?! あ、あわ、あわあばあばばば!?!」

おそらく嫌すぎて休みたい。しかし無断では休めないというなけなしの真面目感から、正当な休める理由が欲しくて風邪を引こうとしたのだと思う。てか絶対そうだ。

不思議と怒っているのに冷静な自分もいて驚いているが、このバカへの怒りは膨れ上がっていつている。

自分でも恐ろしいくらい低い声が出た。

「………テメエ」

「はっ、般若……!?!」

相手から見た俺の顔がどうなっているのとか知らん。そこまでしてバイト休もうと思っただけ俺は許さんぞ。

その日、後藤家から断末魔の叫びが聞こえたとか何とか。
それが後藤さんの叫び声なのか俺の怒号だったのかは神のみぞ知る。

翌日。

見事に風邪を引かず元気に登校し、元気に暗いままスターリーまでやってきた俺と後藤さん。

その入口前で彼女はまだ渋っていた。

「いや、早く開けろって」

「でっ、でも……開けたらバイトが始まっちゃう……」

「開けなくてもシフト決まってるんだから時間が来れば嫌でも始まるだろ。ほら開けなつて。それとも昨日みたいにまた小一時間説教喰らいたいのか？」

「あああうううう……は、般若はもう嫌だあ……!」

誰が般若や。何か軽いトラウマを植え付けてしまったらしい。今日も朝迎えに行つた時は怯えたウサギみたいにならずとぶるぶるしてたし。

話しかける度に体がビクンッてなつてたから相当怖かつたんだろうな。でも後藤さん、それ因果応報つて言うんだぜ。

「う、うう……ぼっち頑張ればっち頑張ればっち頑張ればっち頑張ればっち頑張れ……!」

おお、そうだ頑張れ頑張れ。

自分でそのドアを開ける事が大事なんだ。後ろには優しい優しい俺がいるんだから安心してほしい。もう逃げないなら悪いようにはしないから。

そしてようやく後藤さんがドアを開けようとした時、

「チケットの販売は五時からですよ」

後ろから声がした。後藤さん以外に俺の後ろを取れるヤツがいるだと……!?!と、それは関係ないか。女性っぽい声がして振り返ると、金髪の人がいた。

「まだ準備中なんで」

ムスツとしたヤンキー的ムーブの女性だった。

あー、これはちよつと後藤さんと相性悪い人かもしれないな――、

「ひいつ!?!」

ほら、言わんこつちやねえ。

10. やりたい事を見付けるのも簡単ではない。

「新しいバイトの子だったんだ。なら最初からそう言いなよ」

スターリーに入って早々俺と後藤さんは二列で立たされていた。

無感情というか不愛想というか、そんな金髪の人はまさかの店長だったのだ。そういやタイミング悪かったのか今まで一度も見た事なかったんだよな。

「すみません。なにぶん後藤さんちよつと人見知り以上の人見知りなんでテンパっちゃいます」

「あつ、ごめんなさい……」

いやほんとどうやったたら左右の眼球を同時に違う方へ向けられるんだろうか。もはや特技にしたらちよつとひと稼ぎできそうな気がする。

「まあいいけど。あたしここの店長だから、よろしく」

「清水優人です。よろしくお願ひします」

「ごっ、後藤ひとりです。よ、よろしくお願ひします……」

店長に挨拶つて、何かバイトつて感じてきたなあ。初のバイトがライブハウスつても少しテンション上がる。

普通の高校生つてライブハウスとかで働いてるイメージないもんな。何気に青春っぽくなってきてないか俺の高校生活。

「……あれ、てか段ボールに入ってライブしたギターの子じゃん」

お、よくお気づきで。

まああんな姿でライブする人なんていないだろうし、印象に残るのは当たり前か。良くも悪くも。

「確か……マンゴー仮面」

「ネーミングセンスどうなつてんだ」

「ん？」

「あ、すいませんつい癖でツツコミを。失礼しました」

いけないいけない。最近後藤さん以外の人とも話すようになってから勢いでツツコミを入れてしまう。数少ない友人達はツツコミがないから、結束バンドの人達のクセ

が強すぎるんだよな。

見た目だけで言えば後藤さんがビビるくらいには外見ワルだし、虹夏さんのお姉さんと言つてもあまり逆らわれない方が良さそうだ。

姉妹とか兄弟でも性格が一緒なんて事あまりないからな。真逆タイプとかよく見るし。

後藤さんとか後藤さんのところかね。あと後藤さんのところ。

「まっ、まままマンガー仮面ですう……!」

「何で喜んでんだよ」

それでいいのか。今のところまともなあだ名ついてないぞ。ぼっちちゃんとマンガー仮面で、ど……ちらかと言えば前者だけど。割とどんぐりの背比べだからな。

マンガー仮面とかもうどつかのゆるキャラかご当地ヒーローみたいなものだろ。

「そんな名前じゃないでしょ! お姉ちゃんも適当なあだ名付けなくてよ〜」

天使とマブがやってきた。じゃない虹夏さんとリョウさんがやってきた。

「に、虹夏ちゃんのお姉さま……!?!」

「前に説明したよ？ ほら、スターリー来る時に」

「絶対緊張して聞いてなかったろ」

「あ、うう……」

心ここに在らずだったもんなあの時。基本自分の世界に入ってる子だから大体人の話は聞いてない。

目の前で喋ってる人いるのに自分の内面と話してるし。ここだけ聞けばジャンプ系主人公の修行編みたいに聞こえるから物は言いようだと思う。

「そんな緊張しなくても大丈夫だよー。ねっ、お姉ちゃん！」

「ここでは店長と呼べ。あと仕事に私情を挟むな」

「ピギツ!？」

「もう、怖がらせないでよー!」

後藤さんが小鳥の鳴き声みたいな声出してるんだけど、どこかに親鳥いたりしないですか。保護してあげて。

怖い人見たらすぐ固まってしまうのはどうにかならんか。ならんな。普通の人ならまだしも怖い人なら尚更。あ、いつの間にか裾掴まれてるっ。咄嗟に俺に救援出してくるなつての。

「え、何、アンタら付き合つて」

「ませんから」

後藤さんの行動を見た店長が変に勘繰つてきたから笑顔＋食い気味に否定する。

裾掴んだだけでそういう関係に見えるつて、店長つてもしかして案外初心などこあんのかな。安直すぎるしそれはないか。

「あ、そ、そう。めっちゃ食い気味じゃん……」

こういう質問は中学の頃からたまにされていたので、何となく相手の雰囲気や目線で質問してくるであろう前兆を感じ取る事ができる。

もううんざりしてるので最初からきっぱり言っておくと、今後はもう聞かれないから最初にどう言うのが肝心だ。

「ぼっちちゃん、優人くん、業務内容教えるからこっち来てくれるー?」

「あ、はい。では店長、失礼します」

「ん、まあ初日だし無理せず頑張んな」

あれ、実はこの人普通に優しい説ない? よくよく考えれば虹夏さん(ここ重要)の

お姉さんの時点で優しくない訳ないのでは？

感じる。長年マンガとかアニメ見てきたから分かる。あの人からはツンデレの波動を感じるぞ……！ 波動は我にあり。

虹夏さんに呼ばれテーブルの方へ向かう。

「じゃあまずはテーブルから片そうかあ。それ終わったら拭き掃除を……つて、あれ、ぼつちちゃんは？」

「帰巢本能に従ってるところです」

「？」

きよとんとしている虹夏さんがリョウさんの指がテーブルの真下に指されているのを見て、下を覗き込んだ。

「すいません……暗くて狭いところで一息つきたくて……」

「はやっ!？」

後藤さんの生態調査の中では割かし基本ですよこれは。精神が弱ると俺の背中か暗く狭い場所へ移る。そんなナメクジがいそうな所と同類扱いされてんの不服でしかねえ。

長時間太陽に当たってたら干からびるんじゃないかこの子。ナメクジやん。

「じゃあ優人くんはリヨウに拭き掃除と受付教えてもらって、ぼっちちゃんはこつちでドリンク覚えよっか」

「あ、すいません虹夏さん」

ドリンクコーナーに行こうとしていた虹夏さん呼び止める。

「どしたの優人くん？」

「俺も先にそっち教えてもらっていいですか？ あと今日のうちにひと通り全部教えてほしいです」

「え!!? ベ、別にそんないきなり全部覚えなくてもいいんだよ？ ゆっくりで大丈夫だから」

「いえ、どうせなら一気に覚えた方が早いでしようし。それに、いざという時のためにいつでもサポートできるようにしときたいんで」

記憶力自体は悪くない方だと思う。ただそれを抜きにしても、個人的には最初に少しずつでも全部を頭に入れてバイトしていく内に全てできるようになってるのが効率的にも良いと思ったただけだ。

スターリーは店長が女性だからかスタッフも今のところ女性しか見ていない。

だから男手が必要な場合の業務なども早めに覚えておきたい。女の子に重い機材とか運ばせてもしケガでもしたら大変だしな。

それにせっかくの初バイトだから頑張ってみたい気持ちもある。バンドメンバーでもないんだし、こういうところで頑張らないと。

「……うん、分かった。じゃあ先にこつち教えるね。その後リヨウから受付や裏方とか力仕事とか教えてもらっておいで！ ふふん、期待してるよ、優人くん！」

「分かりました。ほれ、行くぞ」

「あつ、うん」

そこからは色々あった。

ドリンクコーナーを覚えるだけで後藤さんがパニックになりいきなりギターを出して弾き語りし始めたり、ライブハウスが実は飲食店扱いだという事を知ったり、その他諸々やる事が結構あったりして驚いた。

正直舐めてたから全部覚えられるか分からん。リハの手伝い、チケットやチラシの準備、本番中は転換作業の手伝い、柵や看板の出し、人気バンドなら照明の入れ替えとかもあるらしい。

しかしこのスターリーは最近オープンしたばかりだから、ライブするバンドも客足もそんなに多い訳ではない。なので作業自体は今の所まだ難しいものはないと言っていた。

それに他のバイトの人もいるし初心者の俺などはまだ簡単な掃除や受付、ドリンクスタッフと重労働系をメインにしてもらうとの事。

ちなみに後藤さんはドリンクを渡すだけのお仕事を仰せつかった。渡せるのか？あれに？

「お、お客さんもじわじわ入ってきたね。ぼっちちゃん、優人くん、今から忙しくなるよ」

「ここからが本番って事か。じゃあ俺はリョウさんのところで一緒に受付すればいいんですよね」

「そうそう！ ぼっちちゃんの事は任せといて！」
「そうですか。じゃあ、よろしくお願いします」

虹夏さん、やはり良い人だ。俺の心配を見抜いてちゃんと理解してくれている。

これなら安心して受付に行けるといふものだ。何か後ろから「終了しちゃった！」と虹夏さんの声が聞こえるけど振り返らない。近々後藤さんの取扱説明書でも作ってお

くかなあ。

「あ、優人来た」

「リヨウさん、一緒に受付お願いします」

「オーケー。手取り足取り教えてあげる」

「一応もう教えてもらってますから」

それに受付中に手取り足取り教えられんだろ。リヨウさんほどマイペースというか自由な人然う然ういないだろうな。

けどその雰囲気もあつてか、こちらとしては話しやすい。何だか話してて落ち着く感じがする。

口数自体は多くないものの、それだけに会話はシンプルで苦しくない。こういう人と話しての方が俺には合ってるのかもしれない。

……あれ、やっぱ俺後藤さんに染まつてきてない？ あんま喋らない人の方が良いってちよつと会話楽しようとしてんじやん俺。堕ちるな俺、留まれ俺。

「優人は、楽器やらないの？」

まだ五時になるまで少しだけ時間があるからか、リヨウさんから質問があつた。

「一回だけ後藤さんに教えてもらおうと思つた時もあったんですけど、コードとか分かんなさすぎてすぐ諦めちゃいました」

「……そうなんだ」

そーういや虹夏さんには軽く話した事あるけどリョウさんにはなかつたか。

「またやりたいとかは思わないの」

「どうですかね。全然興味ないって訳でもないですし、このバイト続けてたらまたそう思う事も出てくるかなとは思いますよ」

「……私がベース教えるよ」

「いきなり話飛躍してないですか?」

音楽の事になるとグイグイ来るなこの人。可能性の話してゐるのに教える事前提になつてゐるんですが。

この人もまさか自分の中で完結させちゃう系女子なのか。後藤系女子なんですか。いや後藤さんはたった一人の人種だけだ。

「そして私の持つてる楽器とか買い取ってくれたら助かる。金銭的に」

「出会って数日の人間に言う言葉ではねえよ」

そっちが本音か。そういうやこの前家はお金持ちなのに楽器に全部使うから常に金欠とか言ってたな。

「やっぱりその碎けた感じの優人のが話しやすいかも」

「え、ただのツツコミのつもりなんですけど」

「ぼっちと話してる時の素の感じが出てて良い。マブって感じする」

「は、はあ」

知り合って数日でマブになるのもどうなん。関係性薄くない？ 大丈夫？

というか俺の素出させるためにカマかけてきたんですか。

「けどベース教えようとしてるのは本気。変人になろう」

「それでなろうとする人はいないと思いますけどね」

「本音を言えば優人にも楽器に触れて音楽に関わってほしいと思ってるから」

「……」

バイトでもう関わってるとかはダメですか。ダメですよね、はい。

「まあ、気持ちはありがたく受け取っておきます。ですけど、もし楽器を教えてもらうなら俺は後藤さんにギターを教えてもらいますよ」

「へえ、何で？」

「俺って特別何かできる訳でもないし、そういう意味では平凡な高校生なんですよ。やりたい事もないし、できる事も特にない。だからと言ったら何ですけど、何か一つでも成し遂げようとギターを練習して上手くなった彼女って凄いなって思ってるんです」

「うん」

「俺にはそういう誰かに自慢できるような特技はないから。普段は変な奇行ばかりしてるあいつですけど、単純にそういうところは尊敬してるんですよ。一つを極める事の難しさは理解してますしね」

部活をした事もやりたい事もないから何かに打ち込む事も努力をしてくる事もなかった。

強いて言えば家事スキルが自然に身に付いただけ。それだけでしかない。

そういう意味で言えば、俺はギターができてやりたかったバンドを組んでいる後藤さんの事を尊敬と同時に羨ましいとも思っているんだろう。

何だかんだやりたい事をできているというのは、少なからず幸せな事だから。

「まあ、だから俺は尊敬してる後藤さんに教えてもらおうかなど。もし教えてもらおうならですけどね。一度は諦めてるし」

「そっか」

シンプルな返事があつた。

まるで自分の言つた事を肯定も否定もしないような反応で。

「じゃあ私の持つてるギター売ろうか?」

「話聞いてた?」

全部台無しだよもう。どんだけお金ないんだこの人。

切羽詰まつてるってレベルじゃないだろこれ。もはや押し売りに近いぞ。

「もう五時になる。お客さん来るよ優人」

「あ、はい」

急に言われたから少し身構える。

初バイトだからか何だかんだ少しだけ緊張してる自分がいる。

そんな矢先。

「優人のやりたい事も、そのうち見つかるといいね」

「っ……はい」

優しい声で緊張が解れていく感覚がした。

ライブが始まると途中から店長が来て、今日のバンドはレベル高いから勉強がてら見に行つていいと言われて、何故か俺もリョウさんに連れられドリンクコーナーの方へ移動。

そこから後藤さんが一人で頑張つてお客さんのオレンジジュースを微妙な笑顔と共に渡すも、むしろそれで笑ってくれる優しい人で事なきを得る。

そしてライブも無事終わり、撤退作業も終えた頃。

初日だし後はもうやっておくから今日は帰つていいと店長が言ってくれたので俺と後藤さんは帰路についていた。

隣を見る。

「お、終わった〜……!」

バイトから解放されたからか、珍しく純粹に喜んでいる後藤さんがいた。

確かにあれだけ嫌がってた割には頑張っていたし、今日は素直に褒めてやるのも悪くないか。

「また一步前進したって感じか」

「う、うん……これならバイト、頑張れそう……!」

本当に珍しく、だ。

何なら再会してから後藤さんの純粹な笑顔を見たのは初めてかもしれない。高校合格した時もちよつと引き攣つてた笑顔だったし。

少し頬を赤らめながらもこちらへ振り向いた際の笑顔に、こちらも少し表情が緩んでしまう。

バイト終わっただけでそんなに嬉しいのもどうかと思うけど、まあいいか。

「そうか」

「う、うんっ」

「俺もさ、一步前進するために頑張ろうと思う」

「……え？」

リヨウさんと話して分かったのだ。

結局俺には何も無い。やりたい事もなかった。できる事もなかった。周りより秀でたものなんて何一つなくて自慢できるような特技もないけれど。

それはつまり、これから探せばいいという事でもある。

後藤さんは後藤さんのやりたい事をやっている。

だから。

「俺も自分のやりたい事を見付けよう。心の底からそう思えるような、そんなものを」

まだ具体化できるようなイメージは特にない。

それも含めて、これから見付けにいかうと思う。

「わ、私も、それ……応援する！」

具体性の欠片もない事を、彼女は応援してくれるらしい。

それが何だかおかしなくて、俺は人差し指を後藤さんの額に押し付けた。

「んなの応援する暇あったら自分のバンドをまず頑張れっつての」

「あうう……」

「ん？」

ゆらりと彼女が揺れる。不意にやったからバランスを崩したのかとも思ったが、何だか違うように思えた。

気分が高揚していたから赤く染まっていたと思った頬はまだ赤い。不自然なほどに。まさか。

「後藤さん、ちょっと」

「……え？ うえええっ!？」

後藤さんの額に掌を当ておおよその体温を計る。

「これは……」

「高熱だな」

「あつ……は、初めてのバイトだったからき、緊張してたのかも……？」

「んな訳あるか。もしそうだったとしてもそこまではならん」

原因は……思い当たる節しかねえ。

明日からも頑張ろうって時に、ほんとやらかすのが好きだなこいつは。

「ほら」

「……え？ な、何して」

「おんぶするから乗れ。とりあえず駅までな」

そう言つて屈むも、後藤さんはふらふらなままあわあわしているだけだった。

「い、いいいやで、でででも……！」

「ふらついている状態で歩いて倒れたらどうすんだ。それにギターも一緒に倒す訳にはいかねえだろ」

「う、うう……」

諦めたのか、後藤さんはおそるおそる俺の首に手をかけ体重を預けてきた。少し息を吐いてから、立ち上がる。この前もおんぶして思ったけど。

「おつも……」

「ギターがつ！ ギターの事ですよねっ!？」

もっと力付けた方がいいか。
ちよつと筋トレでも始めようかな……。

11. 悩み相談つて乗る方も少し緊張する

最近右隣の席に座っている喜多さんの様子がおかしい。ちなみに後藤さんはいつもおかしい。

前まではいつも笑顔で後ろに太陽でも飼ってんのかと思うくらいいちいち眩しかったのに、ここ最近はふとした拍子に溜め息を吐いているのだ。

いや、何でお前が喜多さんの溜め息をよく見てるんだよとか言わないで。隣でよく話すからつい視線が右に向きがちになるだけなんだって。

前も左の子も全然喋らない女子だからそこしか適当に見れるところがないの。信じてほしい。というか周りに聞こえそうな感じで溜め息吐く喜多さんにもちよつと責任はあると思います！

だつて気になるじゃん。常に笑顔をティッシュ配り感覚で振り撒いてる子が不意にアンニユイな顔ではあとか言つてんだぞ。

何事かと思うだろ普通。常時笑顔装備型の子から笑顔奪うような出来事があったつて事だぞ。そんなの気にするなという方が無理だ。どうにか元気になってくれないか

とも思うが、原因が分からないのでどうしようもない。

さて、今日も今日とて喜多さんからは複数回の溜め息が確認された。回数だけで言えばざっと14回。誰だ今俺の事キモいとか思ったヤツは。やめろ、自覚してるから。

というのも彼女、友人達と席で話してる時は一回もしていないのだ。それは俺が自分の席からや教室の外からバレないように見ていたので確定である。……あれ、いつの間にかいつも後藤さんを遠目で観察してるからか俺の覗き見スキルのレベル上がってない？ めっちゃ嫌なんだけど。

つまりだ。喜多さんが溜め息を吐く時は総じて一人で席に座っている時。何かを思い出したかのようにそれを繰り返していた。

少なくとも彼女はこの学校で数少ない俺の友人だ。例え俺が多数友人のいる喜多さんの中で有象無象の中の一人に過ぎないのだとしても、友達が困ってるなら話くらいは聞いてもおかしくないはずだ。

休み時間の時。

「なあ、喜多さん」

「どうしたの、清水君？」

あくまで俺と接する時も笑顔を崩さない。という事はアレは無意識だったのか？

けどここまで来たら後戻りはできない。俺は直球に聞いた。

「もし不快にさせてしまったらごめん。けど気になるから言わせてもらう。単刀直入に聞くけど、悩みでもあんの？」

「……え？」

「最初は見間違いかもと思ったんだけど、ここ最近の喜多さんは結構悩んでる感じ出たよ。溜め息ばっか吐いてるし」

「やだ、？つ、私そんな事してたっ？」

「俺が気になるくらいには」

別に下心がある訳じゃない。純粹に気になるからだ。

「そっか、私ったらそんなに……」

「ああ、だから何か悩んでるなら力になる事はできなくても話くらいは聞けるかなって」
「……そう、ね」

困ってる人がいるなら助ける。当たり前且つ誰だつて抱いた事のある気持ちだ。

問題は実際にそれで行動できる人の方が少ない事だ。だから俺はできるだけ手を差し伸べたいと思っている。

「うん、じゃあ、ちよつとだけ聞いてくれる？」

「もちろん」

「えつとね、清水君ならどうするかっていう体で聞いてほしいんだけど、私には憧れの先輩がいて、まずその人がやってる事を自分もしたくてできないのにできるって？ ついて一緒にチームに入るじゃない？」

「いや入らないけど」

「もうつ、最後まで聞いてつてば！」

「ああ、ごめんごめん」

あれ、何か流れ変わったな？

「で、結局本番が来そうつてなつた時にまだ何も分からないままだつたからつい逃げだしちゃつたの。清水君なら、どうするべきだと思う？」

「まず？ つかないと思う」

「それはそうなんだけど！」

「一緒にチームつて何だ。スポーツの事か？ 喜多さん運動神経良いからよく助つ人頼まれるつて言つてなかつたつけ。」

まあできない事だつてあるか。たまたま憧れの先輩がいる部活に限つて苦手分野だったのかもしれない。

「先輩と同じ事がしたいつて思う気持ちは分かるけど、さすがにできないのにできるつて嘘を言うのはまずかつたんじゃ」

「だから困つてるのよ！ 何も言わずに逃げ出しちゃつたし、先輩達にも迷惑かけちゃつたから謝りにいかなきゃとは思つてるんだけど……」

「けど？」

「……気まずくて行きづらい」

うん、気持ちは分かる。やつた事ないけどバイトとか仕事でブツチしたらそういう気持ちになるとか言うよね。ネットで見た。

しかも喜多さんの場合は憧れの先輩という付属付きだ。謝りに行ったとしても、そこで先輩と周囲に何を言われるか分からない不安などもあるのだろう。

悩んでる原因は大体分かった。うーん、聞いたところ喜多さんの自業自得ではあるが、ここまで悩むほど反省もしてるならどうか力になつてあげたいけどなあ。

その憧れの先輩とやらがどんな人かも気になる。喜多さんの事だからめちやくちやイケメンの陽キャだつたりして。うわ、普通にありそうで何か腹立つな。

「そんなに気まずいなら俺も一緒に行こうか？」

「え？」

「いや、ほら、何言われるか分かんなくて怖い気持ちもあるんだろ？ だつたら誰かに一緒に着いて来てもらった方がまだ謝りやすいんじゃないかなって。別に男子が嫌なら俺じゃなくても友達に訳を話して着いて来てもらうのもありだと思っただけ」

男子が一緒だとその先輩に変な誤解を与えてしまう可能性もゼロではない訳だし。俺と勘違いされるのも迷惑になるだろうから、本当なら女子友達に来てもらった方が喜多さんも安心できるだろう。

トップカーストの女子に近づきすぎるのは男子からの視線も痛くなるしな。あくまで今も話しているのは隣としてのよしみで、偶然俺が喜多さんの悩みに気付いたからだ。

困ってる人がいるなら助ける。しかし自分より適切な人がいるならそちらに任せても良いだろう。

直接力になれなくたって構わない。補助役で充分ならそれでもいい。

「……じゃあ、清水君着いてきてくれる？」

「分かった。じゃあ他の友達に言つてか……ん？」

自分の中で会話の流れを想定していたから思わず反応が遅れてしまった。まずい、俺も後藤さんのせいで自己完結型になつてきてるかもしれない。

「お、俺でいいの？」

「清水君が最初に一緒に行こうかつて言つたんでしょ」

「や、まあそれはそうなんだけど……」

「それに男子に来てもらった方が心強いしね」

「オーケー、土下座でも何でもするから任せてくれ」

「そこまでは言つてないけど!？」

頼りにされるとつい見栄を張つちまうのが男つてもんよ。大丈夫、その気になれば土下座でも殴られ屋でもやつてやらあ。

「あつ、けど今日はアレ持つてきてないのよね……。ごめんね清水君、明日とかでもいい？」

「いいよ。じゃあ明日で」

ユニフォームとかトレシューかな。助っ人とか頼まれるくらいだし常備してたんだ

ろうけど、逃げたから今日は持つてきてないのか。

行くのは明日の休み時間か放課後になるが、放課後なら後藤さんには先にスターリーへ一人で行ってもらおうか。風邪も治って明日から学校来れる訳だし、そろそろ一人でも行けるようになってもらわないと。リハビリついでに強くなってもらおう。瀕死から蘇って強くなるサイヤ人方式だ。下手したら逆効果だけど。

「やっぱり優しいのね、清水君って」

ふとそんな声があった。

喜多さんが何だかこちらを見て微笑んでいる。うおっ眩しつ、とふざける余裕も少しなくて、俺には精一杯の照れ隠ししかできなかつた。

「……面倒見が良いだけだよ」

後藤さんの世話ばっかしてるからな。

翌日。

登校時。

風邪を引いて数日。ようやく完治した後藤さんは今日からまた登校しているのだが。

「何でギター持ってきてんの。今日バイトだけで練習なかったよな？ あ、もしかして自主練？」

「あつ、またギター持って行ったら話しかけられるかもつて……」

向上心あると思つて少しでも感心した俺の気持ち返せこの野郎。結局他力本願のままじゃねえか。

「少しは成長したんなら自分からもうちよい話しかける努力をしてだな……」

いやでも虹夏さんの時はこれで話しかけられたんだよな。ほとんど奇跡に近かったけど。

あれからバンド組んだりバイト始めたりと、今までの後藤さんなら考えられないほど上手く事が進んでいる。今回も案外功を奏するかもしれない。

「いや、それで虹夏さんと出会えたんだし、万が一って事もあるからその手もありかもな。どうなるかは分からんけど試したいならやってみるか。最悪上手くいなくてもスターリーで自主練できる時間あるかもだし」

「う、うん……!」

こういう直感が割と当たる時もあるのは事実だ。後は後藤さんを観察しつつ経過を見守る事に専念しよう。

「あつ、それと……ゆう、くん」

「ん?」

「あの、こ、この前はありがとう、ごさいます……。私を送ってくれた後も、飲み物とか風邪薬に冷えピタも買ってきてくれたって……お母さんから聞いたから……」

「ああ、そんな事か。別に良いよ。下着姿のままなのに一時間くらい説教した俺にも非はあるからな。一割ほどだけ」

「あつうつ……」

シュンツて縮こまるな。そこはいつものように奇声出して作画崩壊するところだろ。

何か普通に恥ずかしがられるとこつちの調子が狂うわ。ほら、もつと目ぐるぐるにして口とか地面に落とすんだよ。ボトってさあ!!

どうにかして後藤さんの顔面を崩壊させようとしていたところで思い出す。

「あ、そうだ」

「？」

「もしかすると今日放課後ちよつと用事できるかもだから、先にスターリー行ってくれないか。バイトには間に合うようにするから」

「……うええッ!？」

あ、顔面崩壊した。うーん、基準がよく分からんな。

「むっ、むむむむむむ無理ですう! 一人で入れない……!」

「大丈夫、行けるって。そんなんじゃないつまで経っても一人でどこも行けないんだぞ？」

そんなのは嫌だろ?」

「ゆ、ゆうくんが一緒なら行けそうな気が」

「バカな事言ってるじゃねえ」

子供か。しかも俺がいても気がするって確定じゃねえのかよ。

ここは何とか一人で行けるようにしないとダメだ。甘やかしてたつもりはなかったが、今後のためにも厳しくいかないと。

「確かに今までの後藤さんなら無理だったかもしれねえけど、今はバンド組んでバイトもしてるんだぞ。そこまで成長できたんなら絶対行けるって」

「そつ、そんな事……うへ、うへへえ。じゃ、じゃあ、大丈夫です。頑張ります……!」

「よし、よく言った。偉いぞ」
うん、ちよろいわこの子。心配になるくらいちよろい。さすが承認欲求の塊を擬人化させた女だ。褒めればコロツと手のひら返すな。大丈夫かこの先。

「じゃあそういう事だから」

「は、はいっ」

「え、放課後に着いてきてほしい場所がある?」

「そうなの。ちよつと距離あるんだけど、いいかしら?」

「学校内じゃなくて？」

「あら、言つてなかつたつけ？ 謝りに行くのは学校の外よ？」

そ、そつちかあ。てつきり学校内だと思つてたから思いつきり勘違いしてた。

だとしたらちよつとバイト間に合うか不安になつてきたな。距離あるつて言つてるし。少し遅れるかもつてロインでも入れとくか？

「ごめん、憧れの先輩つて言つてたから部活の先輩か何かだと思つてた。でも、だったら喜多さんは何をやつてたんだ？」

「えーつとね……」

少し言いにくそうな表情をしてから彼女は言つた。

「私、バンド組んでたの」

「……………マジか」

まさかの自分と決して無関係じゃない事を喜多さんもしていたとは。いや俺はバンドしてないただのバイトだけだ。

割かし似たような事をやつてたんだな。

「なら逃げたってのは？」

「ギターとか弾けもしなくせに弾けるって言っちゃって……いざライブで本番やろうってなった時に怖くて逃げだしたの……」

結構クレイジーだなこの子。ただの陽キャ最終形態と思ってたら意外とロックだった。弾けもしないのに嘘ついてバンド入るって普通しないだろ。

どんだけ先輩といたかつたんだよ。好きすぎだろ。

「ちなみにさ……憧れの先輩って男性？ 女性？ どっち？」

「女性だけど。一つ上だったかな」

いやそこ女子なんかい。謝りに行きづらいつてたし完全にイケメンパリピバンドマンかと思った。

「女子の先輩なら、俺いるか？」

「いるわよ！ 何なら今もちよつと怖くなってきたところなのに！ どうしよう清水君つ、や、やっぱり後日って事にして……」

「俺の放課後が空いてるのは今日だけだぞ。基本バイト今日もあるけど、何より俺の知り合いが多分うるさいから」

「当日になったら急に怖くなる気持ちだつてあるんだから〜！」

その気持ちを一刻も早く無くすために行くんだろうに。

今日の一日は何だか長くなりそうだ。

12. 自分が思ってるより世間は狭い

「で、ギターで話しかけてもらおう作戦は失敗したと」

「は、はい……」

昼休み。

俺と後藤さんはいつも通りの場所で昼食を食べながら彼女の作戦結果を聞いていた。

「そんなホイホイ作戦上手くいつてたら中学でもっと話しかけてもらってるよな」

「うう……」

まあ教室の外から見てたし分かってたけど。

やっぱり虹夏さんと出会ったのはただの奇跡だったようだ。そりゃタイミング良すぎたものね。

「も、もう調子に乗るのはやめます……慎重しく細々と生きていきます……」

「今まで散々失敗してきたんだし虹夏さんが特例なだけだつて。あまり気にすんな」

半泣き状態でおにぎり食べるのやめろって。余計しよっぱくなるぞ。
って、あれ？

「何かおにぎりいつもより小さくないか？ 前までは手のひらサイズだったよな」

「ツ!? あつ、ああ……いや、その、ちよ、ちよつと今日のご飯そんなに炊いてなかったのかなあ〜なんてっ……!」

「へえ〜」

まあそういう事もあるか。美智代さんだつてミスをする事くらいあるだろう。

後藤さんつて女子にしては食べる方だからお腹満たせるかどうか気がなるとこだけど。

「ゆっ、ゆうくんのは逆に、多くなつてないですか……?」

「ん? ああ、まだつい最近だけど夜に筋トレ始めてさ、その分昼飯の量は多めに作ってるんだよ。筋肉痛もようやく取れてきたし色々トレーニングとか取り入れてみるかなー」

今後の事も含めて今の内に力仕事はいつでもできるように鍛えておかなければならない。

元々は付けたかったし始めるにはちようどいいきつかけだった。後藤さんを重く思ってしまうのは単純に俺が非力なだけかもしれないから。鼻肩目を抜きにしても後藤さんはジャージの上からでも分かるほどスタイルが良いと思う。

普通に見れば美少女に見えるのに、何故こうも魅力的に見えないのか。それはおそらく数々の奇行を見てきたからだろう。

60上がった好感度を奇行で70も落とすのが後藤さんだ。これぞまさに上げて落とす。自分で。

彼女の雰囲気自体を何とかしないとなーと思っていたところで、周りに目がいった。

「それにしてもよくもまあこんな暗いところで昼ご飯食べようと思ったな。教室で食べればいいのに」

「ひ、一人だと教室で食べづらいから……ここなら、落ち着いて食べれるし誰にも見つからないので……」

「お、おう」

理由が全部暗すぎてさすがの俺も反応に困った。

俺達がいるのは階段を下りたところにある机とかイスとか置いてある謎スペース、いわゆる誰も近づかない物置きのような場所だった。何故か学校にはこういうのが一カ所

くらいあるけど何でなんだろう。

「ま、確かに誰にも気を遣わなくて済むって点ではありかもな。こういうのも何か自分だけの秘密基地っぽくて少しテンション上がるわ」

「ゆ、ゆうくんはいつも私と一緒に食べてくれるけど……クラスの人とかは、大丈夫なの……？」

後藤さんがらしくない心配をしてきた。

なので軽くデコピンをしようと「あうっ」と額を押さえている。

「いっちょ前に俺の心配なんかしなくていいつつの。他クラスの友達と食べてくるって言ってるし気にするほどでもねえよ」

それに、後藤さんがこんな所で一人孤独に食べているのを知ってて放っておける訳もない。

自分だけ友人と食べていても、心のどこかに彼女がここで静かに一人で食べている景色がどうしても出てきてしまうのだ。それはあまりにもノイズすぎる。

なら最初から一緒にここで食べれば何も問題はない。

「それと、放課後は先にスターリーに行つてろつて言つた事は覚えてるな？」

「あつはい」

「もしかしたら用事が長引いて少しバイト遅れるかもしれないから、先に伝えておくわ。虹夏さんにはもう言つてるから伝言はしなくて大丈夫」

「わ、分かりました」

よし、愚図らなかつたのは素晴らしい進歩だ。頼むからそこから後退しないでくれよ。

後藤さんの場合一步取り戻すのにどれほど時間かかるか分かつたもんじゃないしな。

「ごちそうさままつと。じゃあ俺は自販機でジュース買ってから教室戻るから。またスターリーでな」

「あつはい。また……」

先に別れを告げて階段を上つていく。

一応バレないよう左右の廊下に誰もいない、もしくはこちらに向いていない事を確認してから何事もなかったかのように歩き出す。これが違和感を悟られないためのコツだ。……いらんスキルばかり身に付いていくな。

「午後にはやつぱら午後ウィーだよなあ」

そんな事を呟きながら教室に戻る最中の俺。

自販機で午後のウィークポイント、略して午後ウィー（ミルクティー）を嗜んで廊下を歩いていった時だ。

遠めではあるが見覚えしかないピンクジャージが俺の教室の前で屈みながらこっそり何かを覗き込んでいた。

何やってんだあいつ。というか昼食時以外で自分の教室にいないってだけでめっちゃくちや珍しいんだけど。俺の教室だし、俺を探しに来たんだろうか？

普通に考えてそうとしか考えられない。俺以外友達いないし。

俺に伝え忘れた事でもあったのかもかもしれない。にしてもあんなコソコソしなくてもいいのに。むしろ変に目立ってるぞあれ。覗くならもっと俺みたいにバレないようにしないと。言ってる悲しくなってきた。

歩く速度を速める事もせずただ普通に歩いて近づいていくと、後藤さんの体がビクツと跳ね返ったり何かを話してる……：…ようにも見える。

ようやく話せたのか、俺以外のヤツと……。

そう思っていた矢先。

「……………」

後藤さんとの距離も十メートルにまで縮まり話し声が聞こえるかなど好奇心を躍らせていた時だ。

彼女は立ち上がって足を昔のマンガのようにグルグルさせて、まるでF1カーを彷彿とさせる音を出しながら俺の元へ突っ込んできた。突っ込んできた???

「え、何でこっちに向かばへあッ!？」

そのまま後藤さんは俺に突撃し、俺は彼女に轢き殺された。後藤さんは走り去って行ったので轢き逃げである。

『再会した幼馴染が引きこもり寸前だったから面倒見る』完ッ! ご愛読ありがとうございます。次回作にご期待ください。

「ええ!?! ちよつと待って後藤さ……つてきやー! 清水君つ!?! いったいどうしたの!?!」

「お、俺達の戦いはこれからだ……」

「何か全部終わりそうな雰囲気出すのやめて! ああでも……ごめんね清水君つ。今ちよつと急いでるから!」

そう言つて喜多さんは俺を置いて走り去つていった。

これでいい。俺を置いて先に行け。後で必ず追いつくからよお……。死亡フラグを立てながら俺の意識は遠くなつていき、やがて暗闇に沈んでいった。

一分もしない内に目が覚めた俺は目の前の惨状を見つめる。まあ最初から目瞑つただけだけ。

廊下の一部に広がっている惨状。ぶつかられた拍子に零れた俺の午後ウィーが床を紅茶色に染め上げていたのだ。

「昼休み終わるまでに拭き終わんのかこれ……」

ほぼ涙目で一人モツプ掛けして終わらせた。ほんとに学校生活死ぬところだったわ。めちやくちや見られて恥ずかしかつただけ。

被害者だぞ俺。許すまじ後藤ひとり。俺はヤツを絶対に許さない。必ず弁償させてやる！ 午後ウィーの仇!!

と、特に何もなまま放課後になった。

午後ウィーの仇は割と自分の中でどうでもよかつたらしい。五分もすれば怒りは消

え去っていた。

学校は終わったものの、問題はここからだ。

「……えつと、清水君」

「準備できたか。じゃあ行くか、先輩のところへ」

女性の人ならそんなに怖がる必要もなさそうだ。喜多さんが憧れるような人ならヤンキーとかでもないだろう。

あくまで付き添いだしささつと終わらせてバイトに向かわないと。

虹夏さんにはもうロインをして『オツケー！ 今日忙しくなさそうだから大丈夫だよー！ それよりぼっちちゃん一人で大丈夫なの？』と来ていたから特に問題はない。

後藤さんは大丈夫か知らないけど、今頃一人でちゃんと向かっていると信じたい。

「その先輩の活動拠点ってどの辺りなんだ？」

「下北沢周辺だけど……」

「……」

偶然であるもんなんだな。それか下北ってバンドマン多いのか。よく分からん。

後藤さんのようにギターを背負った喜多さんの表情は浮かない感じだ。普段明るい

子がこんな顔をしてると少しやりにくいな。明るい太陽をイメージさせる喜多さんほどの人なら尚更。この現象の事は日食と名付けよう。

「あ、あのねっ、清水君……本当に悪いんだけど、謝りに行くのは別の日にしてもらっても大丈夫かしら……?」

「そうやってなあなあにしてたらどんどん行きづらくなってしまうと思うんだけど、それでいいの?」

「ち、違うの! ただ、ちゃんと謝りに行くにせよ……誠意を見せたいの。だから私、ギターを教わって弾けるようになってから先輩のそこに行きたいのよ!」

ふむ、まあ言いたい事は分かる。ただでさえ逃げてしまつて罪悪感に苛まれているのに、何もなまま謝罪だけに行くのも悪いと思つてるのだろう。

せめて最低限でも良いからギターを弾けるようになってちゃんと謝りに行きたいと。彼女はそう言っているのだ。

「ギターを教わるって、当てはあんの?」

「二応、今日はバイトで無理だけどギターは教えてくれるって言ってくれた子がいたから……何とかなるとは思うんだけど」

喜多さんほど人気があつて顔も広いなら、楽器やつてる人の一人や二人くらいはいるか。

彼女も彼女で行動していたのなら、それを優先させてあげるのが良いだろう。でも急に手持ち無沙汰になつたな。このままバイト行けば済む話だけど……バイト？

そうだ。

「その子は今日無理つて言つたんだよな？　じゃあまだ今日喜多さん予定空いてるつて事で良いのか？」

「ええ、そうなるわね」

「ギター持つてるならちようど良いや。俺のバイト先にもギターやつてるめちやくちや上手い女子がいるんだけど、時間あるなら今日はその子に教えてもらうつてのはどうだ？　同じ女子だから教わりやすいと思うし、一日でも早く弾けるようになりたいなら悪くない話だと思うけど」

ちなみに後藤さんの了承はどうでもいい。同じ学校の子にギターを教えるのなら、多少強引でも仲良くなる可能性は高くなる。

それに喜多さんほどの陽キャなら陰キャ王の後藤さんともワンチャン打ち解ける事だつてできると信じたい。

いやだろう。できるか？ 弾けて吹っ飛ばないか後藤さん。

陽キャと陰キャが会うとビッグバン起きたりしそう。主に後藤さん側で。そこは喜多さんの陽キャ的判断で適切な距離を測っていただこう。

「いいの!!? それすつごく助かる！ 私が教えてもらう予定の子も上手だったし、ぜひお願いしてもいい!!?」

「了解。ならさつそく行きますか。俺のバイト先も下北沢なんだ」

最初は新鮮だった下北沢駅も、今となれば少し見慣れた景色の一部でしかない。周囲の街並みに関心する事もなく、俺はいつもの芋ピンクジャージとは違う華やか系女子と一緒に歩いていた。

「まさか清水君のバイト先も下北沢だったとはね……」

「つつても世間はそんなに狭くないし、鉢合わせするような事はないだろ」

「だと良いんだけど、前のバンドの先輩達この辺に住んでるからちよつとね……」

少し怯えながら周りをきよきよきよしている喜多さんはちよつと面白い。こういうのをギヤツプ萌えと言うのだろうか。

ギター背負いながらそんな事してる方が目立つと思うんだけど。

「ごめん清水君。ちよつと後ろ歩かせてね。万が一って事もあるから……」

「まあすぐ後ろ歩かれるのは慣れてるし別に良いけど」

「それ慣れてるって何!?!」

「知り合いがそういう子でね」

問題は最近じゃそれが少し落ち着くと思ってしまうほど俺も毒されるとこだ。

後ろを見なくても気配感じてちゃんというなって分かるようになったのもどうかと思う。あれ、俺もしかして気を感じ取れるようになってる?。

「ね、ねえ、清水君。この道で合ってるの? 何だか私見覚えある記憶しかないんだけど」

「そんな事言われてもこっちはバイト先に向かつてるだけだぞ。道被る事くらいはあ

るっしょ」

「ギターの知り合い……女の子……下北沢……バイト……」

喜多さんが後ろで独り言を呟いてる。

何を考えてるんだろうと思ってたら、不意に後ろから裾を掴まれた。

「し、清水君？　　そういえば聞いてなかったんだけど……清水君のバイト先ってどんな所なの!？」

「あれ？　　言ってなかったっけ。スターリーっていうライブハウスだよ。ギターしてる子もそこで働いてるんだ。ほら、もうすぐそこ……っつて」

「カッ!？」

指差した方向になんかいた。

後ろで掴まれていた裾が強く握られているのにも気付かず、俺の意識は芋ピンクジャージにしか向いていなかった。

何してんだあのピンク。スターリーの階段近くでずっとぐるぐる徘徊している。パドックかよ。

俺達より先に学校出たはずなのに未だにそこにいるって事は……10分くらいあんな事してるのか。

「おいこらピンク」

「ピエツ……!?! あつ、ゆ、ゆう、くん……」

「先に行つててくれつて言つたのに何でまだ入つてないんだよ。虹夏さんとリヨウさん待たせてちや悪いだろうが」

「リヨおツ……!?!」

なに、なんだよ。今度は喜多さんから奇声聞こえてきたんだけど。心なしか裾掴んでる手めつちや震えてない？ 俺の制服まで揺れ出したんだが。

そこで俺の真後ろに誰がいる事に気付いたのか、後藤さんが背後を覗き込んできた。

「あつ、あれ……喜多、さん……?」

「ご、後藤さん?」

「んあ? 二人共知り合いだっけ?」

「えつと、私がギター教えてもらおうとした子が後藤さんなの」

なるほどね。そういや教室で後藤さんに轢き殺された時もすぐ廊下に出てきたのは喜多さんだったな。何だか辻褃が合ってきたぞ。急に予定変更してきたのも後藤さんに教えてもらうためだったからなのね。

俺がモツプ掛けしてる間に知り合ってたのか。てか後藤さん俺いなくても誰かと交流できてんじゃん。やつば成長してるかもしれん。

そう適当に納得してたら後藤さんがわなわな震えていた。
こちらを指差して、

「あつえっ……？ なんっ……ふた、ゆうく……私にはっ、先に行けっつて断つたのに……ふ、ふた、二人で……そんな、あつ、え、そんっ……あ、あえああえええあああ」

バグり始めていた。何言ってるか全然聞き取れない。

俺と喜多さんを指差しているのは分かるが、指差す手が震えすぎて連続デスビームみたいになってる。危ない、本物のフリーザならとつくに貫かれてた。

「そんな事より清水君っ！ さつきリョウ先輩って言わなかった!」

「え、言っただけど。一緒に働いてるし……ん？ リョウ先輩?」

「どうしようごめんねやつぱり私今日帰るねまた後日にしましよそうしま」

喜多さんの声を遮るように声を掛けてきたのは虹夏さんだった。

「おっ、ぼっちちゃん、優人くん！ みんなタイミング良く集合したねー！ あれ、

でも優人くん遅れるって言ってなかったっけ？」

「ガアッ!？」

もう、今度は何だ!？ 次から次へと奇声ばっか出しやがって！ みんな人間だよな!？ 喜多さんは固まってるし後藤さんはフリーザのままだし！ 一人人間辞めてたわ。笑顔でこちらに駆け寄ってきた虹夏さんが、喜多さんを見て立ち止まった。

「つて、あー!! 逃げたギター!!」

「あひいいいいいっ!？」

今日はみんなよく叫ぶなーと思いつつながら俺は一人空を見上げる。

こんなに良い天気の中、何で俺の周りはカオス空間なのだろうと神様に疑問を吹っ掛けた。

そしてどうやら、世間は思ったより狭かったらしい。

13. 人の凍った心を溶かすのは人の温かい心だ

つまり、だ。

喜多さんは弾けもしないギターを弾けると嘘を付いて結束バンドに入り、本番が近くなつて怖くなり逃げてしまったものの、ちゃんと謝罪がしたくて後藤さんにギターを教わろうとする。

しかし後藤さんは今日バイトだったから教えるのは後日になったはずなのだが、お互い後藤さんと知り合いなのを知らずに話は進み……ああもうめんどくさつ。回想めっちゃめんどくさいなツ。

とにかく何やかんやあつて俺達は今スターリーの中にいるのであつた。はい回想終了。

「で、何でこうなつてんの。二人ほどポジションおかしくない？」

現実逃避するために回想しようと思つたけど想像以上にめんどくさかつたら向き合ふ事にした。

ミーティングで使うテーブルとイスに腰掛け、五人で座つたのはいいのだが。

俺の後ろ両サイドを固めてるヤツが二人いた。

一人は後藤さん。いつも通り、平常運転、日常、背後霊、スタンダード、むしろこれで1セット、親よりも掴まれた裾、以上。

もう一人は喜多さん。何があつた、暴走運転、異常、珍行動、可愛い、親にも掴まれてない裾の部分、とりあえず何か書いとけ、以上。

後藤さんはいつもだから良いとして、いや良くはないけど。喜多さんまで俺の服掴んで後ろにくつつくようにして座つてるのは正直謎である。

両手に花と言えば聞こえはいいかもしれないが、実際は少し違う。これじゃ背中にスタンドだ。後ろから負のオーラしか感じられねえ。おい、陰陽コンビで左右から俺を挟むな。中和できんから。

「座つてまで後ろ来なくていいでしょうが。いい加減もつと前出ろつて二人共。話しくいだろ」

「それは、そうなんだけど……」

「こつ、こつは、私の席なので……」

だから俺はイスじゃねえつて。喜多さんもそろそろ元に戻つてくれ。日食進んでつ

てるから。後藤さんのせいで陰キャ力が伝染ってる訳じゃないよね？

このままじゃ一向に話が進まないの何とか軌道に戻さないと。

「はあ……もういいや。話を戻しましょう虹夏さん」

「うん、分かった。けど優人くんはそれ大丈夫なの？」

「スタンドが二人に増えたと思えば強くなったんじゃないかなって」

「ポジティブだねえ」

「ここでも素直に対応してくれる虹夏さん、やっぱり良い人だ。」

「それにしても喜多ちゃんがギター弾けなかったとはねえ。だから頑なに合わせの練習避けてたんだね」

「うう……はい……」

申し訳なく思ってるのか喜多さんの俺の制服の裾を掴む力が少し強くなった。

そして何故か後藤さんの掴む力も少し強くなってる。やめて、後藤さんに関してはちよつと引つ張ってるから、伸びちやう伸びちやう。

「突然音信不通になったから心配してた」

「先輩……!」

「死んだかと思つて最近毎日お線香あげてた」

「殺してんじゃねえか」

この人たまにナチュラルに精神抉ってくる言い方するな。行動も発言も自由人だから、毎日この人と接してきた虹夏さんが聖人になっていくのも分かる気がする。

暴走車を華麗匠にコントロールしているようだ。俺も後藤さんをもつとコントロールできるようにならないと。

「……あの、怒らないんですか?」

「気付かなかつたあたし達にも問題あるし、それにあの日は何とかなつたしね!」

そう言つて虹夏さんは後藤さんを見る。ああ、確かに見方を変えればそうとも取れる。

逆に言えば喜多さんがあの日逃げなければ、後藤さんは未だにずっとバンドも組めず一人のままだったのだ。

喜多さんのした事は褒められるような事ではないが、そのおかげで後藤さんは今やりたい事ができている。

偶然に偶然が重なつた今の状況。神様の巡り合わせにも程がある。ある意味では運

命とも言えるのか。

「で、でもっ、それじゃあ私の気が収まりません！何か罪滅ぼしさせてください！」
ん？ 今何でもするって言った？ 言っていないか。

「そんな事言われてもな〜」

「じゃあ今日一日ライブハウスのバイト手伝ってくんない？ 忙しくなりそうだから」

会話に突然入ってきたのは店長だった。確かにバイトを手伝うというのは罪滅ぼしとしてちょうど良いかもしれないな。

……あれ、でも今店長何て言った？ 虹夏さんに遅れるって言ったロインの返事には忙しくなさそうって来てたような。

「忙しくなりそう……？」

「っ……えへへ〜」

疑問に思つて虹夏さんの方を見るとペロツと舌を出して誤魔化すように笑っていた。

まさか遅れても俺に気を遣わせないために？ ついたのか……？ て、天使じゃんこの

人。聖人なんかじゃ位が低すぎる。天使だ。大天使だ。天使長だ。一生着いて行きま

す！

「で、でもそれだけじゃあ……」

「じゃあちよつと恥ずかしい衣装でも着てもらおう」

その話詳しく。喜多さんに恥ずかしい衣装って何着せるつもりなんですか店長。けしからん、露出は控え目じゃないと許しませんよ。

喜多さんは清楚系陽キャなんだから、むしろ肌を隠した方がこう、良い感じになると個人的には思ってます。いたつ、ちよ、後藤さんつ、裾掴んだまま小突かないで。何で俺が興味津々なのバレたんだよ後ろにいて表情見えないだろ。

数分後。

着替えてきた喜多さんは俺達の所へ戻ってきた。

ライブハウスには似つかわしくない白いフリルカチューシャ、バイトだからか本来奉仕活動をメインとしているフリルの付いたエプロンドレス、現代社会において世間で俗に言うメイド服を喜多さんは着ている。

秋葉原とかにいそうなミニスカメイドではなく、ロングスカートで露出を極力減らし
ている健全なメイドだ。

無言で店長に親指を立てると視線を逸らされた。その視線は後藤さんに向けられている。えっ、まさか店長後藤さんにメイド服着せたいの？ 無礼しか働かないよ？

店長、後藤さんの事気に入ってたりすんのかな。はははいやそんなまさか。

「喜多ちゃん手際良いね〜」

虹夏さんの声で意識が喜多さんに戻った。

床掃除も丁寧にやっていて見栄えも良い。テキパキ動くから働いているこちらの仕事量まで減りそうな勢いだ。おっと、さすがにそれはいかん。

「惰眠を貪る時間までできてしまった」

「時給から引いとくな」

「んな事言つてないで俺達も仕事しますよりヨウさん」

忙しくなりそうって言つてたの聞いてなかったのかこの人。立って寝るとか器用すぎる。これが変人ベーシスト……。

「テーブルとイス片してきます」

「あいよ」

重い物は基本俺が運ぶ事になっている。これもある種の筋トレになるからちようど良い。

テールブル二つを運び終わるまでフロアと倉庫を二往復。特に大変でもないが、その往復してる最中に後藤さんがゴミ箱入ってギター弾いてるし魂は抜けてるし、喜多さんはPAさんにくんかくんかされてたしでこの短時間の間に何があった。

俺が動いている間虹夏さんと喜多さんだけがまともに働いている。リョウさんは後藤さんの魂を見送っていた。死者出てるけど。

ここのバイトは大丈夫なのか。いつか店長にぶん殴られてもおかしくなさそう。

「ふう……あとはリハ中の機材運びか」

専門的な事はまだ他の人がしてくれるから俺は単純に荷物運びや受付、ドリンクスタッフなどを任されている。

結構面白いんだよなここのバイト。普通の飲食店じゃ経験できなさそうな事ばかりだし、何より色んなバンドのライブを見れるのが楽しい。

次何か手伝えそうな事を探しているとドリンクコーナーの方から声が聞こえた。

「きゃあああああ!!」

喜多さんの叫び声……？ さつき虹夏さんが後藤さんにドリンク教えてあげてって
言つてたけど、また何かやらかしたんだらうか？

後藤さんの対処を喜多さんがするにはまだ早すぎる。ここは後藤ひとり専門プロ
フェッショナルの俺が助太刀に入らねば。

そう思つてドリンクコーナーの方へ行くと、まず視界に入ったのが後藤さんの左手。
コーヒーを入れていたのか、カップとコーヒーが床に撒かれていた。そして何より、
後藤さんの左手の甲が赤くなつていたのだ。瞬時に何が起こつたのかを理解する。

「なっ」

咄嗟にだつた。

心配してる喜多さんの後ろから顔面崩壊している後藤さんの手首を掴んで引つ張る。

「何してんだ馬鹿野郎ツ!! さつきと手を冷やせツ!!」

急いで水道の蛇口を捻り彼女の手の甲へと当てる。火傷の場合は確か10分以上水
に当てないといけなかつたはずだ。

幸いすぐに手を引いたのか見た感じ酷くはなつてないようだが、ただでさえ肌が白い
後藤さんの手は軽い火傷程度でも目立つほど赤くなつていいる。水ぶくれになるような

火傷じゃない事が不幸中の幸いか。

「ひうつ……!? あつ……うう、ぐ、ごめんなさい……」

「……………え？」

普段よりも小さくてか細い声がした。

見ると後藤さんは俯きながら涙は流してないものの、まるで怯えてるように体を震わせている。

……しまった。やってしまった。

そう思った時に喜多さんから声を掛けられた。

「し、清水君つ。私ハンカチ持つてるから包帯替わりに巻いてあげれないかしらっ？」

それで正気に戻る事ができた。

冷静になれ。衝動のままに声を荒げたら後藤さんがこうなってしまうのは当たり前だろうが。静かに深呼吸をする。

「……悪い。もうちよい水で冷ましてから喜多さんが巻いてやってくれ。圧迫しすぎないように頼む」

「う、うんっ」

「それと後藤さん」

「はっ、はい……」

「いきなり怒鳴つちまっでごめんな。急な事で頭に血が上ってた。けど、ギタリストなら手に怪我するのだけは極力避けるよう気を付けてくれ。バンド組み始めたばかりなのに練習できなくなるのは嫌だろ？」

「うっ……ごめんなさい……」

反省してるならそれでいい。大事に至らなくて良かった。

普段はツツコミとか説教で怒る事はあるけど、後藤さんの事になるとついカツとなってしまう事がたまにある。いつだって誰にでも優しい人でありたいがモットーなだけに、まだまだ俺も反省点ばかりだ。

「で、何でこんな事になったんだ？」

「えと……名譽挽回しようとしたんだけど、見られてたら緊張しちゃって……」

「こ、こいつ……緊張しただけでこうなるヤツがどこにいるってんだ。……いたわ目の前に。」

俺の心配をこうも簡単に無様にできるのはこの世界の中でも後藤さんくらいだろう。

もつと怒った方が良かっただろうかとさえ思えてくる。

溜め息一つ吐いて、受付の方にいる虹夏さんに声を掛ける。

「虹夏さん、心配しかないんでリハの機材運びまで後藤さんの代わりに俺が喜多さんにドリンク教えても良いですか？」

「いいよー。それと優人くんあんま大きい声出すとこつちもビックリするから程々にね〜！」

「あ、それはもうマジですいません」

やっぱ聞こえてたのね。室内は音楽も掛かってないから余計俺の声が響いてしまう。気を付けないとな。

そんな俺の後ろでは床にぶち撒かれたコーヒーを拭いている後藤さんと喜多さんがこんな会話をしていた。

「後藤さんって何でバンド始めようと思ったの？」

「あつ……世界平和、世界平和を伝えたくて……」

「意識高いのねえ」

？である。この女、誰かに声を掛けられたくてちやほやされたくてバンドをやっ

る。不純の塊である。

まあバンド始める人なんて大体そういう理由だろうから何とも思わないけど（偏見）

「さて、喜多さん、トラブルもあつたけどバイト再開しようか。他のドリンクも教えるよ。後藤さんも一応教え方を学ぶつもりで見せてくれ」

「は、は、は……」

「はーいー」

陰陽コンビでこうも返事の仕方が変わるのか。人間の性格つて不思議だ。

17時を過ぎてライブハウスも開場。

お客さんに頼まれたドリンクを笑顔で渡しまくる喜多さんと、一瞬だけ目を合わせて即座にドリンクを渡し次に移る後藤さん。

後者はちよつとアレだけど回転率は速い。前者は言わずもがなといった感じで愛想

の良い物腰で効率良く回している。

何かあれだ。光と闇が両方備わり最強に見える。ように感じる。

ちなみに俺は時々サポートしつつアルコール類の提供をしていた。

忙しく動いていると時間の経過も早いもので、いつの間にかライブも始まっていった。そうなるとドリンク提供も落ち着きを見せ、こちらも時間の余裕ができる。その間に俺と後藤さんが幼馴染で、いつも喜多さんに知り合いと言って話してる子が後藤さんだという事も簡潔に伝えておいた。

みんながライブに集中している時。後藤さんが口を開いた。

「あつ、あの、もしかして喜多さんが言ってた憧れの先輩って……」

「う、うん……リョウ先輩なの……」

まあそんな気はしてた。外で遭遇した時も真っ先にリョウさんに土下座してたし。何でもするとか私をめちやくちやにしてとか言い出した時は肝を冷やした。

公共の場で、しかも俺の隣で土下座しながら言うものだから、下手したら俺が言わしたり俺に言ってるのかと周囲に勘違いされそうになったからだ。ほんとやばかった。あの時ばかりは俺もフリーザになってる後藤さんの後ろに隠れるしかなかった。

「私は後藤さんと違って不純なんだけど、先輩の路上ライブを見て一目惚れしたの」
リョウさん他でバンドしてたのか。それは初耳だ。

「ちよつと浮世離れしてる雰囲気とか、ユニセックスな見た目とか、もう何もかも
キヤーって感じで！」

「キヤー？」

後藤さんとハモツた。君もそこ気になるって事は俺がおかしい訳ではないのか。

「そして何より楽器が様になってて……！」

「あつ、それは分かります。わ、私が持つと、どうしても楽器に持たされてる感が」

「そう！ 楽器が本体みたいになっちゃう！ あれ何なのかしらねー？」

楽器が本体って何なんだろう。新八の眼鏡みたいなもんか？ 95%が眼鏡で3%
が水分、残りの2%がゴミだけか。どこ行ったよぱっつあん要素。

後藤さんに当てはめてみたらどうなるだろう。95%がギター、3%がピンクジャ
ジ、んで残りの2%が菌だな。感染の恐れあるし。後藤さん要素はちゃんと菌で確保し
てあるからよし。

「あのーカシオレください」

「はいっ、少々お待ちください！ 清水君、カシオレお願いできる？」

「了解」

どれだけ喋っててもすぐ仕事モードに戻れるのはさすがだな。このまま普通にスターリーでバイトしてくれたら助かりそうなんだけど。

カシオレをお客さんに渡して会話に戻る。

喜多さんの視線はライブをしているバンドの方へ向けられていた。

「演奏聴いてからリョウ先輩の活動をずっと追ってたんだけど、前のバンド突然抜けちゃってね」

「へ、へえ……」

「……」

まあ、この辺はリョウさんの事情だ。俺達がここで詳しく聞いても意味ないだろうし、喜多さんも分からないだろう。

間違いなく何かあったとは思いますが、詮索はしない。そもそも俺はただのバイトで関係ないしな。

「その後結束バンドのメンバー募集を知って、思わずやりたいうって言っちゃったんだ」
いや行動力よ。

「だってバンドって第二の家族って感じしない？」

「家族？」

「うん、本当の家族以上に一緒にいて、みんなで同じ夢を追って、友達とか恋人とか超越した不思議な存在だと思うのよね」

その家族、音楽性の違いで結構解散したりするって聞いたんですが言わない方が良いですかね。何ならリョウさんその家族一度抜けてしまつてませんか？

なんて言える雰囲気でもないので黙っておく。

「部活とか何もしてこなかったし、そういうの憧れてたんだ」

なるほど、最初は先輩のために嘘ついてバンド入って逃げたやべー陽キャだと思つたけど、喜多さんには喜多さんなりの憧れや純粋な気持ちもあつた訳だ。

そういう気持ちがあるなら謝罪してもう一度バンド入れてもらえば良いと思うんだけど、そこはどう考えてるんだらうか。

「そう、私は結束バンドに入って先輩の娘になりたかったのよ！ 友達より深く……密に!!」

前言撤回。やべー女だった。

正体現したね。？ついてバンド入るところから薄々感じてはいたが、この子も大概ぶっ飛んだ発想をお持ちのようだ。急に変化球投げられた気分。もはやデッドボールだよ。

「まあ、だからこそ……バンドにはもう入らないけどね」

「……え？」

「……」

ここで、俺の知らない何かを彼女達はどこかで挟んでいたのだろう。

後藤さんの反応を見るに、もしかしたら喜多さんをバンドに誘っていたのかもしれない。そう考えると教室の前に後藤さんがいた事もギターを教える事になってたのも納得がいく。

「二度逃げ出した私みたいな無責任な人間は、ダメよ。バンドなんてしちゃ」

自分なりに責任を感じて、ケジメをつけるために結束バンドには入らない。

喜多さんはそう言っている。それが何だか、メンバーじゃない俺の胸中すらも強く刺

激した。

「あつ、ごめんね暗い話して！ もうこの話は終わりにしましょ！ そうだ、私ちよつと切らしてるドリンクの補充取りに行つてくるね！」

そう言つて喜多さんは倉庫の方に行つた。

ライブで騒がしいはずなのに、俺と後藤さんの空間だけは閉ざされた空間のように沈黙しかなかった。

このままで良いのかと、内なる自分がずっと問いかけてきている。結束バンドのメンバーでもない俺が余計な事をしていいのかと、今にも動き出しそうな体にブレーキを掛けている。

残っている時間は少ない。きつかけを探すなら、今しかないのだ。

隣には、喜多さんの気持ちを理解している少女がいる。

であれば、迷いは振り切ろう。

「後藤さん」

「は、はい」

「このままで良いと思うか？」

「喜多さんの、事だよね……。わ、私も、ダメだと思う。だって、喜多さん……。ハンカチ巻いてくれた時の、あの指……」

「そうか」

何かを知っているかのような口振りで後藤さんは呟く。

取っ掛かりは見つかった。それさえあれば、お節介焼きの定番だ。

「お前が感じた事を全部話せ。あのままじゃ喜多さんは結束バンドに戻ってこない。俺のいないところでどんな会話をしたのか、埋まっていない溝をここで埋めていくぞ」

今日の彼女の働きを見ていくつか感じ取った事がある。

喜多さんはまだ、結束バンドに未練が残ってるはずだ。そうじゃないとわざわざギターなんて教わろうとしない。上手くなってから謝ろうだなんて思わない。

そして聞いた。

後藤さんの証言で分かったのは、きつと喜多さんはまだ未練が残っている。その証拠に彼女の指先はギターの練習のせいか皮が硬くなっていたと。一人だけで密かに練習していたのかもしれない。

まったく、リョウさんがいるからだとか、バンドに憧れていたからとか、そんな事を俺達に話した時点で本心なんて隠せてねえじゃねえか。

教室で話していた時、彼女は時々俺を優しい人だと言っていた。誰かのためにそこま
でできる俺の事を優しい人だと。

だったら、今こそ行動しないと意味がない。

「ケジメをつけて勝手に納得して自分にはバンドをする資格がないなんて、無責任だか
らって未練たらたらそのまま自分の心に嘘ついて、それでも諦めきれずに練習までして
のに逃げ出したからって理由で諦めようとしてんなら。それに俺達が気付かないで
うのうと憧れの世界から逃れると思ってんなら」

彼女を結束バンドに戻すために、宣言する。

「まずはその幻想をぶち殺す!!」

ライブの爆音と客の喧騒が入り乱れる中、俺は叫ぶ。

そして、隣の後藤さんは言った。

「……あつえつ、と……ゆう、くん？ それって、どういう……？」

「あつ、いや何でもありません気にしないでください忘れてくださいお願いします」

頬の紅潮が止まらない。多分俺の顔は今リングかトマト並だ。

やだ、ちよつとめつちや恥ずかしいんですけど。アニメのネタ伝わらないだけでこんな恥ずかしいの？ 死にたくなってきた。俺もバイト辞めていい？

名言なんてノリで言ってみるもんじゃないと酷く痛感した。セリフによつちや大怪我だ。後藤さんの火傷より酷い。心が複雑骨折してる。

変に勢いで言うのはやめよう。慎ましく生きよう。

どうもライブを見てると謎テンションになつてしまう。こうして、俺は学校ではなくライブハウスで黒歴史を生んだ。

と、勝手にライブのせいにして俺は終了間際まで死んだ魚の目をしていたのだった。

ライブも終わつてみんなが帰り支度をしてる時。

「じゃあお疲れ。今日はもう帰っていいよ」

店長のお許しにそれぞれ「お疲れ様でしたー」と答え、先に帰宅しようとしたのは秀

華高の制服に着替え直した喜多さんだった。

「今日はありがとうございます。バンド活動頑張ってください。陰ながら応援します。それでは……」

言つて、階段を上がろうとしている喜多さん。

当然、待ったをかける。

「喜多さんを止めろ、後藤さん!!」

「え!? あつ、えつと、はい! き、喜多さんっ……ちよ、まつ、まつちよ……帰らな……ぶぶう……!」

慌てて喜多さんを止めに行った後藤さんが転んだ。あれだけ怪我には気を付けろと言つたばかりなのに。あと喜多さんはマッチョじゃないと思うぞ。

「後藤さん!?! 大丈夫!?!」

何か予定と違うが結果的に喜多さんを止められたから続行だ。

俺は呆然と後藤さんを心配そうに見つめてる虹夏さんとリョウさんの背中を押した。

「優人くん？」

「いきなりで悪いんですけど二人共、後藤さんのサポート……お願いしていいですか？」
俺の辿り着いた結論は、後藤さんを始めとした虹夏さん、リヨウさんによる喜多さんの説得。

どこまでもバンドメンバーですらない俺がでしゃばったところで、きつと喜多さんには響かない。

だから。

「ここは、ここだけは……結束バンドじゃないと意味がない」

託す。

この人達なら大丈夫だろうと、そう信じて。

何の説明もしていないのに、俺の願いに虹夏さんとリヨウさんは微笑んでくれた。
そして。

「任せて」

二人が後藤さんの方へと歩いていく。

これでいい。あとは見守っているだけで充分だ。

「清水君……後藤さんも……まさか、まだ私の事を……。ごめんね、私、さつき言つた通り結束バンドには入れないわ。ギター弾けないし、一度逃げ出した人間だし……」

ライブ中にも聞いた言葉。あるいは自分を偽るための言い訳。

見え透いた嘘の虚を突き本心を聞き出す事さえできればどうとでもなる。

今のお前ならできるはずだ。

後藤さん。

「あっあっ……わ、私もライブ前に逃げ出してゴミ箱に隠れて……あ、あと」

「ぼっちちゃん、起こすよ。大丈夫、ゆっくりでいいからね」

転んで倒れたまま話そうとしている彼女を虹夏さんとリョウさんがゆっくり起こしていく。

結束バンドが揃う。残ったピースは一つだけだ。

「きつ、喜多さんの左手……！ 指の先の皮が硬くて……そ、それはっ」

「かなりギターの練習をしてないとならない」

「っ」

リョウさんの言葉に俯きながらも強く頷く後藤さん。

自分もギターをしていて、不注意ではあったけどあの局面で火傷をしなかったら決して気付けなかった分岐点。

喜多さんの嘘が瓦解していく音がした。

後藤さんが続けて、

「ほ、本当は喜多さんもバンド続けたかったんじゃないんですか……？ も、もしかしたら楽器を弾くのは人より苦手なのかもしれないですけど……ど、努力の才能は人一倍あるから、大丈夫です……！」

「そうだよ！ 喜多ちゃんもつ、これから結束バンドを一緒に盛り上げてほしいな！」
虹夏さんも入る。

「何で、私にそんな……！」

「ええ？ だって喜多ちゃんが逃げ出してなかったらぼっちちゃんとも会えてなかったよ。優人くんともね！」

言いたかった事を虹夏さんが代弁してくれている。そこで俺の名前は呼ばなくて良いと思うけど。

「あたしもずつとバンドやりたかったからさ、引け目感じちゃうのも、憧れちゃうのも気持ち分かるんだよね」

「わ、私もです!!」

後藤さん、ボリウム抑えて。割かしうるさかったよ今。空気ぶち壊すところだよ。

「あつ、ごめんなさい思ってたより声出ちゃって……」

「あはは……リヨウも喜多ちゃんが戻ってくれたら助かるよね!」

「スタジオ代もノルマも四分割」

「素直な言い方しなよ!」

「先輩分のノルマ……貢ぎたい……!」

「爛れた関係が爆誕しそうなんだけど……」

リヨウさん、空気ぶち壊す天才なのか……? 後藤さんよりも率先してぶち壊しにいったぞ。

しかしその雰囲気は一瞬だけで、喜多さんの顔はまた暗くなる。

「で、でも私……ギター弾けないし……」

ああ、そんな事か。なら心配はいらなさそうだ。

「大丈夫！ ぼっちちゃんが先生してくれるよ！」

「……え、え!？」

「……いいの？」

不意に聞かれて戸惑ってるな後藤さん。いきなり振られるとは思ってなかったんだろ。陰キヤはアドリブに弱いものな。

彼女はこっちに振り向いて困惑しながらアイコンタクトをしてきた。だから軽く首を縦に振る。

迷う必要はないだろうと。

「はいー！」

珍しく、後藤さんははつきりと返事した。

変わってきたな、彼女も。

そして、だ。

偽りの？が溶けた少女の顔は、まるでようやく呪縛から解き放たれたかのように目尻

に雫を溜めていた。

微かな逡巡。それは喜びを受け入れていいのか本当に入っているのかという葛藤。だが最後の殻を破ったのは、紛れもない喜多さんの言葉自身であった。

「……ありがとう。私、頑張る……結東バンドのギターとして……」

この言葉をもってして、結東バンドは四人。

正式な形として元に戻った。

帰り道。

後藤さんといつも通りの道を歩いている。

「まさか喜多さんギターじゃなくて多弦ベース買ったとはな……。そりゃ上手くならん訳だ」

「う、うん」

あの後、真つ先に俺を引っ張って帰ろうとした後藤さんがみんなから褒められ承認欲求モンスターになったり、喜多さんがギターだと思つて買い練習していたのが、実は6本の多弦ベースで前借りしていたお小遣いとお年玉がくと魂抜けてたりひと騒ぎがあつた。

まあ終わり良ければ全てよしだ。

ギターボーカルも増え、結束バンドはここからが本当のスタートとなる。

「それにしても」

「……………」

後藤さんを見る。

彼女があんなに頑張つて話して喜多さんの心を上手く掴めたのは、間違いなく彼女自身の功績だ。

友達もいなくて、ずっと一人で、バンドも組めなくて、それが今はどうだろう。

バイトを始めてまだ一回とはいえライブもしている。仲間も増えた。

何となくの確信があつた。

後藤さんはこれからもつと成長できる。結束バンドとなら、彼女は自分のやりたい事

ができるんじゃないかと。

「今日は活躍だったな」

「そ、そうかな……へへ……」

「ほら」

「……え？」

左の掌を後藤さんに向ける。

ポカンとしていてまるで意味が分かっていないような彼女。無理もない。おそらく誰ともこういう事をしたことがなかったんだらうから。

だから、分かるように言っただろう。

「ハイタッチだよ」

「ハイ……？ あつ、う、うんっ」

ようやく理解したのか、後藤さんの小さな右手がこちらに向けられた。後藤さんは頑張った。今日は素直に称えてもいいだろう。

パチンツと、夜の街中に小さな音が鳴り響いた。

14. 何かを辞める時は結構緊張する

そもそも俺の役割は何なのだろう。

簡潔に言ってしまうえば後藤さんがやりたい事ができて、人と話せるようなまともな人間になるようサポートする、がそうだったはずだ。

難易度は苛烈を極め、下手すると一生このまま彼女の面倒を見なければならぬ。そう思っていた時も確かにあった。

しかし今の現状を見つめ直してみる。

まだまだ正常とは言えないまでも後藤ひとりとはバンドを組み、バイトを始め、仲間もできて、放課後はほぼ毎日ライブハウスで誰かしらと関わっている。以前までなら考えられなかった事だ。だが、現実としてこうなっている事実は変わらない。

最近は昼休みやバイトのない放課後も、後藤さんは喜多さんのギター練習に付き合っている。さすがに邪魔できないので俺は遠慮しているが。

そう、後藤さんの学校生活や性格は多少なりとも変わりつつある。ゆっくりでも確実に成長し、前に進めているのだ。

だが、その途中で俺が関わってしまおうと停滞してしまおう可能性も大きくなってきた。彼女は良くも悪くも俺の後ろを着いてくる。いや大体悪いが、それが一種の停滞になると危惧しているのだ。

俺がいなくても大丈夫なようになってほしい。こんな事を思っているのに俺がいつも近くにいたら意味ないのではないか。そういう疑問が出てくるようになった。

だから、結束バンドのみんながいる今なら、もう大丈夫なんじゃないかとも思う。俺がいなくても喜多さんをバンドに誘おうとし、自分の言葉で喜多さんに思いをぶつけた姿を見た。

あの日以来、こんな気持ちはずっと渦巻いている。

彼女のためならと様々な行動をしてきた。やる必要のないバイトを一緒にやり、いちの後藤さんを観察しに教室へ赴いたり、一緒に作戦会議などもした。

だけでももうその必要もないのではないか？

バンドを組んだ以上、彼女はメンバーと交流する事が増える。そこから信頼関係も築き、親交ももつと深めていくだろう。彼女の欲しかったものはもうほとんど結束バンドにある。何よりみんなとても良い人達だ。

だから、任せても良いんじゃないかと思うようになった。俺の代わりがいなかったから一緒にいたけれど、もう彼女を支えてくれる存在は三人もいる。

であれば、もう自分は必要ないんじゃないか。メンバーでもない自分がいつまでもスターリーでバイトする事もない。彼女の事は結束バンドのみんなに任せればいい。

自分は自分のやりたい事を見付けて、そのために時間を費やすのが彼女にとっても自分にとっても良い事ではないのかと。

そう思えるくらいには、後藤さんは前を行っている。

ふと、自分の頭によぎった。

部外者の俺はもう、潮時なんじゃないか？

—

スターリー。

フロア内にて。

「今日バイトないのに何で俺まで呼び出されたんですか？」

「結束バンドでミーティングしようと思ってね！」

「いや俺関係なくないです？ メンバーじゃありませんし、部外者ですよ？ こんな感じの会話この前後藤さんともしたような……」

「そりやもちろんぼっちちゃんの保護者枠……監視役？ 通訳？ まあ何でもいいじゃん！」

最後でほっぴり出したなこの人。しかしこの人に呼ばれるとあまり逆らえないのである。

後藤さんをバンドに入れてくれた恩人だし、何より天使だし。

「てか虹夏さん達だつて最近の後藤さんの事結構理解できてきたでしょう。何言いたいかくらいは大体分かってきたはずじゃあ」

「まあねー。けどそれはそれ。これはこれっ、みたいなの？ 優人くんいた方が客観的な意見も聞けるし何か落ち着くし面白そうだからさ！ ねっ？」

俺はアロマでも芸人でもないんですが。何を言っても無駄なようだ。虹夏さんにはここに笑つてこちらを見ている。

ここで折れないとずっと付き纏つてきそうな雰囲気あるし、仕方ない。

両手を上げて降参のポーズをとる。

「ほとんど見とくだけですよ……」

「よしてきた！」

「苦勞するね、優人」

「いやいつも虹夏さんを苦勞させてるのはリヨウさんですけどね。そんな肩ポンされても惑わされないからな。」

「おーい、二人共ー！」

虹夏さんがスタジオでギターでの練習をしている後藤さんと喜多さん呼びに行つた。

二人だけで練習して喋る事もできてるんだよな、今の後藤さんは。

「……」

「どうかしたの」

スタジオの方を見ているとリヨウさんが俺の前に出てきた。

変な顔でもしていたのだろうか。

「……いえ、何でも」

「……そう」

相変わらず何を考えてるか分かりづらいなりヨウさんは。

こちらの心を見透かしてるようでいて、ただ何も考えていない時もあるから侮れない。ちなみに後者が八割。やっぱ大丈夫そうか？

「それではバンドミーティングを始めます！ 拍手！」

リヨウさん以外のまばらな拍手が静かなフロアに響いた。

そのまま虹夏さんはスケブを捲ってテーブルへ叩くように置いた。

「さて、本日のお題はこちら！ ずばりっ、より一層バンドらしくなるには!？」

本格的に俺の管轄外じゃねえか。俺何も言えないぞこれ。マジでただ座ってるだけのオブジェになっちゃうけどいいですか。

後藤さんと喜多さんが拍手をする中、ふとりヨウさんが不自然に頬杖をついているのを見た。物憂げに目を細めている。このお題に何か思う所でもあるのか？

「せっかくメンバーも集まったんだし、まずは四人でより一層バンドらしくなっていきたいなと！」

「なっ、なるほど……」

「いや、練習あるのみなのは分かるよ？ だけどそればかりだとねえ。色々話したりするのも大事なかって」

虹夏さんの視線はこっそり喜多さんの方へ向いている。

なるほど、最近練習しかしてない喜多さんの息抜きにこのミーティングをセットしたのか。ほんと虹夏さんだけはまとも、さっきの強引なところもまた良いという事にしときます。

「まずは形から入ってみるのもありだと思ってるね！」

「ありですね！ 流行ってるメイクとかも真似してる内に様になってくるというか！」
「そうそう！」

後藤さんが全然分からないというような表情をしている。大丈夫、俺も分からんから安心しろ。じゃない男の俺はまだしも何で女子の後藤さんが分かかってねえんだよ。

むしろメイクなしでそれは顔面偏差値高いんだからな。猫背と俯いて二重顎っぽくなるから自分で全部台無しにしてるだけだぞ。もっとそういうところ自覚しろ。

「という訳で〜とりあえずバンドグッズ作ってきた!!」

そう言つて虹夏さんが手首に付けたのは赤色の結束バンドだった。

え、？だよね？ まさかそれグッズとして売ろうとしてるんじゃないよね？ 虹夏さん？

「それただ結束バンド巻いてるだけじゃ……」

良いぞ喜多さん。ナイスツツコミだ。

結束バンドだけに結束バンド巻くつてか。傑作だなそれ。それは傑作バンドか。やかましいわ。

「え？ 可愛くない？ 色んな色あるよ！」

虹夏さんがツツコミ役を放棄してしまつたら誰が結束バンドを束ねるんだ。結束感ないけどな今のところ。

ちくしようやっぱ俺か。俺がツツコミをしないとイケないのか。ここにいる役割がツツコミだけで。

「物販で五百円で売ろう」

「ぼったくりか」

「サイン付きは六五十円で」

「安い買います!」

「それじゃバンド内でお金循環するだけだろうが」

喜多さん意外とボケに走ってるんだけど。リョウさんの事になると見境ねえな。

そして後藤さんは何か喋れ。今こそこの前みたいに自分の気持ちを主張する時でしょうが。

「他にバンドらしくなるアイデアある人」

「もしイソスタとかやるなら私やります!」

「いいねそれ! SNS大臣に任命します!」

「その時が来たら毎日更新しますね!」

喜多さんの陽キャ振りが凄い件について。イソスタとか入れてないから何も分からん。

俺とか基本トウイッターでアニメとかゲームの情報仕入れるためだけに使ってるし……あれ、俺つてもしかして意外と陰キャ寄りだった?

けど別にコミュ症って訳でもない。リア充って訳でもない。つまり狭間にいる普通の人間って事か。うん、普通が一番だもんな。

どっちに行ってもちよつと疲れそうだし。

「うーん、あとは……ファンクラブの設立？」

「だいたい階段すつ飛ばしたな」

「年会費は一万円」

「誰が入んだよそんなの」

「ファンクラブ会員特典として握手会と年に一度のたこ焼きパーティー、材料はファン持ちで」

「ファンを何だと思ってるんだ」

「安い入ります！」

「入るなア!!」

虹夏さんこれで結束バンドまとめていけるのか？ ポケ集団だぞこいつら。バンドというよりコントと変わらん。

「後藤さんは？」

「……え？」

喜多さん急に元に戻りますやん。リョウさん絡まなかったら割と普通なんだよなこ

の子。

んで突然振られた後藤さんはおどおどしている。すつごくおどおどしている。二人で練習していると言っても喜多さんはまだ後藤さん初心者だもんな。これから少しずつ慣れていってもらおう。

「あつ、えつと、その〜……」

「ああ、ぼつちちゃんは大丈夫」

割って入ったのは虹夏さん。何で？ どうせ後藤さんからは何も良い案出てこないからですか？ 正解ですよそれ。花丸あげちゃいます。

虹夏さんの後藤さん理解度が20上がった。後藤さんの尊厳は50下がった。

そんなとこだらうと思っていたのだが、意外にも虹夏さんが放った言葉は違ったのだ。

「ぼつちちゃんには、オリジナルソングの作詞という重要な任務があるからね！」

「……え？」

「……あー」

「前に決めたじゃん！ リョウが作曲、ぼつちちゃんが作詞って！」

「そういや言ってたな、言ってたわ。」

歌詞に禁句が多いなら後藤さんが書けばいいって虹夏さんが確かに言ってたのを思い出す。

あれ、本気だったんですね。てつきりその場のノリだと思ってました。

まあ、しかし、何だ。後藤さんが青春コンプレックス発動して発狂するのが悪いところもあるから仕方ない。自分で書くならそれも回避できるし良いんじゃないかと個人的には思う。

「リヨウ先輩の曲楽しみです！ もう作ったりするんですか!?!」

「ううん、イメージ湧いたらその内」

「頼むよリヨウ、それと作詞大臣っ」

「は、はい……」

やはり頼まれたら断れないイエスマン後藤。悲しい生き物である。

「後藤さん凄いい仕事任されてかつこいいね!」

「か、かつこいい?」

「喜多さん、後藤さんにあんまそういう事言っちゃダメだぞ」

「え、どうして?」

「あつ、まあ作詞なんて朝飯前……ちよちよいのちよいですよ……!」

「こうなるから」

「後藤さんつてすぐ調子に乗っちゃうのね……」

柄にもなく腕をぶんぶん振り回してやる気を見せている。俺からすれば空回りする未来しか見えない。

後藤さんが調子に乗り始めたならそれはフラグの合図なのだ。ジェットコースターで言う落下待ち状態である。

おそらく数日後には一人でどっかで頭抱えているだろう。

「えへ、うへへ、大ヒット間違いなしのバンドらしい歌詞書いちゃいますから……ふふ、ふふへつ、ふへ……!」

笑い方がマジで女子なんかかって疑いたくなるほど気持ち悪いのどうにかならんのか己は。

何故良いとこじゃなくて醜いところを曝け出すのが得意なんだこの子。最近虹夏さんとかも慣れてきているからマシになったけど。

けどまあ、何だか微笑ましい気分になってしまうのは、やっぱり今まで二人でしかい

なかったからだろう。

俺以外の友人といえるなら、それが結束バンドのみんななら、何も心配はいらない。

「そうだ、ちなみに優人くんは何か良い案ある?」

それを俺に聞くのはどうかと思うが、むしろ良い機会かもしれない。

「すいません。案っていう訳じゃなくて、話しておきたい事があるのでそつちでもいいですか?」

「え? うん、別にいいけど……どうしたの?」

席を立つ。ほんの少しの注目を浴びる。

バイトを始めた時は後藤さんのためと思ってできるだけ全部の業務を覚え、長いようとも思った。

だけど、思ったよりも俺の心配は杞憂で、安心して任せても良いのだと感じた。

後藤さんはこれから結束バンドの仲間と高みに行く。努力して、研磨して、親交を深め、絆を育んでいくのだ。

そして。

その輪の中に自分はいらない。

必要以上の干渉は彼女に毒だと思ったから。

元々後藤さんに友人ができてちゃんと仲良くできそうならお役御免と決めていたのは自分だ。何も一切の交流を断つ訳ではない。これからも家には行くだろうし学校の登校も一緒だ。

ただ、結束バンドの成長を間近で見える事はせず、遠くから応援する事になるだけ。

そのための決意。部外者はここら辺りで潮時だ。

四人からの視線を浴びながら、俺はほんの少しの深呼吸をしてから。

言った。

「俺、今月いっぱいバイト辞めようと思います」

「え？」

小さな声が、隣から聞こえた。

15. 集団の圧ほど怖いものはない

「まだ働き始めて短いのにすいません。けど、後藤さんにはもう俺じゃなくて結束バンドのみんながいるから安心できるんです。俺がいなくても大丈夫だって思えたんですよ」

店長は買い出しに行っていて今はいない。今日はバイトもないので妹の虹夏さんから伝えておいてほしいと思った訳である。もちろん後日自分から直接話しにも行くが。

最初に言うならこの人達にと決めていた。それが礼儀であり後藤さんを任せる身としての義務だ。

頭を下げる。深々と。

「だから、後藤さんをこれからもよろしくお願いします」

数秒間の沈黙があった。

何とも重苦しい空気がフロア内を支配する。無理もない。楽しい話題の途中にこんな事を話したされたら誰だってこうなる。今日だけは何を言われても受け入れよう。

そう思っていると、虹夏さんからの返事がきた。

「顔上げてよ、優人くん」

言われるがまま顔を上げる。

その顔は優しく微笑んでいた。ああ、やはりこの人はこんな時でも許してくれるんだ。少し罪悪感はあるけれど、今だけはその優しさに甘えよう。

「虹夏さん……ありがとうございます」

「そんなのダメに決まってるじゃない」

「ええ~~~~~」

めちやくちやくきつぱり言いますやん。すげえ即答じゃん。超食い気味ですやん。

あまりの展開に情緒がおかしくなりそうだった。いや展開的には今十分おかしいんですけど。

「え……？ あの、俺バイト辞めるとて言いましたよね？ 何でダメな」

「ダメなものはダメだからだよ！ 優人くんが辞めるのは絶対ダメ！ はいっ、これ決

定ー！ 拍手ー！」

リヨウさんと喜多さんが拍手しだした。いや違う違う違う。

「いやおかしいでしょ！ 虹夏さんが決める権限とかってないですよね!? てかこんなあつさり簡単に断られたら前回のオチに使った意味ないじゃん！ 無駄に引つ張つていてその程度かよつてなるの確定じゃん！」

「無駄に引つ張るオチなんていらぬ！ 人生そんな都合良くはいかないよ優人くん！」

何でアンタまでメタつてきてんだよ。ここは俺の専門分野でしょうがっ！

やばい、完全に空気の流れが変わってきた。空気が重いつて言ったの誰だよ俺だよ。まさか勝手にそう感じてたのも俺だけだったりする？

「そもそもっ！ ぼつちちゃんをあたし達に押し付けて辞めようだなんて考えがもう間違つてるよー！」

「いや別に押し付けては」

「そーれーにい！ あたし達としては優人くんがいてくれた方が助かるんだよねっ。いざという時の荷物持ちとかもあるにはあるけど、さっき言った通り優人くんがいると客

観的な意見も聞けるし落ち着くの。何よりも君がぼっちちゃんとセットでいるのが当たり前すぎて、一緒にいないとむしろこっちが違和感感じちゃうくらいだよー？」

それ俺を後藤さんの付属物として見てないですかね。もしくはハッピーセットのおまけ的な存在として。

おかしい、この流れは普通後藤さんの事は自分達に任せといてってなるとこじゃないの。リョウさんも喜多さんも何かジト目で見てるし、俺そんな悪い事言つたつけ？

ダメだ。ここは虹夏さん以外に助けを求めないと。

ジト目ではあるが多分物分かりの良いリョウさんなら俺の気持ちも分かってくれはす。

「りよ、リョウさんなら俺の気持ち汲んでくれますよね？」

「マブなら辞めるべきじゃない」

「ただマブ引きずってんだよ。バイト辞めるだけだろ別に。」

仕方ない、リョウさんがダメなら喜多さんに……。

「喜多さんは」

「元々帰ろうとした私を後藤さんに呼び止めさせたのは清水君なのに自分は有無を言わ

せず辞めるなんて言い出すのは身勝手じゃない？」

あ、にこにこ笑ってる。むしろ笑顔でそう言ってくるのがめっちゃ怖い。

笑うという行為は本来攻撃的な意味を含むってどこかで聞いた事があるけど本当かもしれない。普段なら明るい喜多さんの笑顔の裏におぞましい闇を感じる。

いつからここは殺伐空間と化したんだろう。

くそ、こうなったら最終手段だ。今までちよつと怖くて見れなかったけど、隣の後藤さんを見る。いつもより俯いていて表情は窺えないが、できるだけ優しい声色で問いかける。

「なあ、後藤さん。結束バンドに入ってからその後藤さんを俺は見てきた。だからこそもう大丈夫だと思って決めてたんだ。俺がいなくても君はもうやっていける。これからこここのみんなと絆を深めていくんだ。……できるよな？　後藤さ」

「むっ、むむむ無理です絶対っ!!」

まさかの全力拒否反応だった。絶対とか言い出した。

え、？ やん。

「いや、けど」

結束バンドの活動をバイトしながら眺め、登下校を後藤さんとする。彼女の変化を守りながら過ごしていくだけの何気ない日々。

そんな事を思っていると、

「それとき、優人くんは部外者なんかじゃないよ」

「え?」

「確かにバンドメンバーじゃないけど、ぼつちちゃんを結束バンドにさせようとしてくれたり、一緒にバイトやってくれたり、喜多ちゃんのために色々相談乗ってくれた事も聞いたんだよね」

喜多さんを見たらまだにこにこ笑っていた。

しかしそこには先ほどのようなおぞましい闇はなく、普通に微笑んでるように見えた。

「ということぞつ! 優人くんを逃がさ……協力してもらうためにこれから結束バンドにたくさん関わってもらいまーす!!」

ねえ、今逃がさないって言おうとした???

言葉が詰まった。

結局その言葉の意味は曖昧のまま、将来性も具体性も感じられないポジション。いてもいなくても変わらないような存在。きっと、バンドメンバーとは違ってファンの人や関係者、その誰の記憶にも残らない。本質的な陰の位置となる。

だけど、不思議とそれでも良いと思えた。

バンドが売れたとして、何でもない自分には将来の確約なんて一切ない。

でも。

だけ。

この人達を支える事に、手伝う事に微塵の嫌悪感すら湧かなかった。

結束バンドには目標がある。対して自分にはまだやりたい事の一つもない。だから彼女達を支えていく上で何かしらを見付けていこうと思う。

「ははっ」

「？」

何だか笑えてきた。

「何ですかそれ。俺は雑用係か何かですか？」

「ん、まあ一緒に何かできるなら何だっていいかなって」

「開き直ってません？ 後藤さん、そろそろ離れないとヘッドロックするぞ」

「うっ……」

ようやく両手ブンブンも止めた後藤さんを大人しく座らせる。

代わりに両手で裾を掴んできた。ズボンだったら脱がされてるくらい強く握られてちよつと怖い。

虹夏さんに向き直る。

「分かりました。雑用でも何でもいいですよ。今更面倒見る人が一人から四人になつたってそんな変わりませんし」

「私達ってそんな手間の掛かる子供に見られてるんでしょうか？」

「優人は虹夏と同じくらいまとも。たまにやたらおかしくなるけど、言ってる事は大体合ってる」

「自分で面倒な子供って自覚あるんですか!？」

赤と青が何か言ってるけど気にしない。

今言うべき事は一つだけだ。

「結束バンドは、俺が支えます」

帰り道。

今日はミーティングだけでバイトもなかったので明るい内に帰っている。

さて、後藤さんとは言えばだ。

「……」

「あの、後藤さん？ めちゃくちゃ歩きにくいんですが……」

「ゆ、ゆうくんが逃げないように握ってるだけです……」

真後ろで裾をすっげえ力で掴まれている。ダウジングを持つてる感じとイメージしてくれば分かりやすいかもしれない。

「別に逃げたりはしないって」

「……」

どうしよう美智代さん、直樹さん。あなた達の娘はマシになるところか余計悪化しちゃいました。

今まで後ろにいたりといっても左右どちらかの斜め後ろにいたのにだ。今はもう真後ろにピツタリと引っ付いている。

やべえどうしよう。これ下手しなくても俺のせいじゃね？ 更生させようとしたら退化したでござる。ニンニン。

高校入学当初より酷くなるなんて誰が想像しただろう。縦列の二人三脚レベルみたになつてるけど。

一歩進んだと思ったら百歩戻った。悲しいけどこれ、現実なのよね……。

真後ろにいられると顔も見えないからちよつと怖いんだよな。いつ暗殺されてもおかしくない。

周囲から少し変な目で見られながら歩いていると、俺にしか聞こえない声で背後の少女が口を開いた。

「……じゃあ、もう絶対あんな事言わないでください……」

いつものようにキョドった声の震え方ではなく、ほんの少しの怒りと哀傷が混ざった

言い方だった。

「……悪い」

家まで後藤さんが後ろから離れる事はなかった。

後藤家。

彼女の部屋にて。

「さて、結束バンドを支えるって決めた事だし遠慮なく関わらせてもらおうぞー。作詞なんてちよちよいのちよいって言ってたもんなあ？」

「ひっ、ヒイツ!？」

16. アー写見てたらどこ向いてんだってメンバーが一人はいる

あれから一週間弱が経過した。

後藤さんの作詞に何日か付き添いながらも、俺は俺でやりたい事があったのでここ三日は後藤家にお邪魔していない。

あくまで作詞をするのは後藤さんであり、俺は見ている事しかできない。関わると言っても踏み込むべきラインと引き際は弁えている。

今回は彼女がどれだけ集中力を切らさず作詞に取り組めるかを見ていたのだが、そこはやはり後藤さんだった。

俺がトイレ行ってる間に部屋に戻ってきたらなんかハートのグラサン掛けて謎の小躍りしてたり、本屋に出掛けて帰宅しまた部屋に行くといっ買ったのかも分からない自撮り棒を持って陽キャになりきっていたのだ。

単純にこの子はもうダメだと思った。ナニかが憑りついていないとああはならないはずだ。

お札代わりに本屋で買った作詞本を投げつけて興味本位に部屋を覗いていたふたりちやんと一階に避難した。あれはお子ちやまにはまだ早い。目に毒である。

その日から後藤さんを見ていないが、ある日俺は虹夏さんに呼ばれ後藤さんと一緒に下北沢駅までやってきたのだった。

「ゆゆゆ許してくださいっ!」

「で、こうなっただって訳」

「何が!? てかぼっちちゃんどうした!?!」

下北沢駅の集合場所で後藤さんは見事な土下座をしていた。丁寧な『私は約束通りに歌詞を書き上げられませんでした』とプラカード的な物まで首から提げている。

往來の場で何やってんだろねこの子。階段辺りでトートバッグから何を出したかと思えばそれかい。その努力をもう少し違う方に使ってほしかったかな。

「ぜ、全然歌詞書き上げてこない私を吊るし上げる会では……?」

「そんな外道な事しないよっ」

被害妄想の化身かよ。こんなに優しい虹夏さんがそんな事するはずないでしょうが。

「じゃ、じゃあ今日集まったのは……?」

「そうだ、俺も目的聞いてないですよ。何かあるんですか?」

「あれー? 優人くんにもロインで伝えてなかったっけー?」

「いや、下北沢駅集合でとしか……」

何だ。妙にわざとらしい言い方なのがとても気になるんですけど。

てててつとほんとに高二かと思うほど可愛らしくこちらに寄ってきた虹夏さんの顔はにこにこしていた。

「そうだったかなー? ごめん優人くん、ちょっと優人くんのスマホ見せてくれない? ちゃんと送ったと思っただけどなく」

何やら引つかかる言い方だが本当に気になってるだけという可能性もある。ロインもたまたまメッセージ遅れてくる時もあるし。

俺は言われた通りのまま自分のスマホを虹夏さんに渡した。別に見られて困るようなものは何もないしな。

「ありがと〜。……えーつと、これをこうしてこうつと……」

ん? メッセージ見るだけのはずが何か操作してない?

気付けば虹夏さんが自分のスマホと俺のスマホを交互に見ながらタップタップ（タップの事）している。え、何してんのマジで。

「ほい、招待完了承認オツケーつと。ようこそ優人くん結束バンドグループプロインヘー！」

「いや勝手に何してんだアンタ!？」

「いやあ、せっかく色々協力してもらおう事になったんだしグループ入れた方が便利かなって」

「だからっていきなり……え、じゃあ、メッセージの件は？つて事ですか？」

「うっそー♪」

ちくしようつ、ふざけんなよ。

可愛い言い方しても俺は騙されんぞ。絶対許してやるだけだかな！ 笑顔可愛いかんな！ はしもとかーんなっ！

「リヨウさんどうしよう！ 俺虹夏さんに押されると弱いかもしれない！」

「良い事聞いた。私も押してく」

「そこは自重しろよ」

「きやーリヨウ先輩！ 私にも押ししてくださいー！」
「オメーもだよ」

そして後藤さんは一人突っ立ったまま放置されていた。会話に入ってこれない疎外感オーラを出しまくっている。主に俺に。

いやごめんて。全部俺のスマホを勝手に操作した虹夏さんが悪いんだって。ついでに可愛いのも悪い。

返されたスマホには結束バンドのグループプロインに自分が追加されている画面が表示されていた。

支えると言ってもこんな直接的にグループ内に入るのはどうかと思っていたのだが、今更退出しようものならもっと面倒な事になりそうなので止めておく。全方位から攻撃されてもおかしくない。

後藤さんのためにも話を本題に戻す。

「で、結局今日の目的って何なんですか？」

「んとね、この前思いつかなかったけどまだあったんだよ。バンドらしい事」

「ああ、グッズを作る以外にあるんですね」

「うん」

虹夏さんは両の手をそれぞれLの形にして長方形のように繋げてこちらに向けてきた。

「アー写を撮ろう！」

「アー……？」

「ああ、なるほど」

確かにそれはバンドらしいな。後藤さんはいまいちピンと来てないけど喜多さんがフオローしてくれた。

「アーティスト写真だって」

「ああ」

「今ある結束バンドのアー写にはぼっちちゃん写ってないしね」

「今ある？」

「前のも一応撮ってたんですね」

ちよつと気になるなそれ。

今後の参考にしたいたから見せてもらえないだろうかと思つてたら、リョウさんがスマホを操作して見せてくれた。

「これ、この前ライブ出る前に撮った」

「うっ……」

あれ、この前のライブって喜多さんが逃げ出した時のやつ？ 本人も少し気まずそうにしてるし凶星か。

どう撮ったんだろうとリョウさんのスマホ画面に目を向けると、

「……行事写真で欠席した子みたいになってるな」

カメラからあえて目線を外しそれっぽくしてるリョウさん。元氣よく体全体を使ってカメラ目線のままピースをしている虹夏さん。そして画面左上に生徒手帳の写真みたいにワイプ抜きされてる真顔の喜多さん。

うん、こりやひでえや。目も当てられねえ。いや逆に興味持たれるかもしれないけど。

「そんな訳で今日は天気も良いしアー写撮っちゃおー！」

「そつ、外でですか!?!」

後藤さん、当然の反応である。いや普通は当然でも何でもないけどね。後藤さんを

知ってる人ならまあそうなるわなって感じ。

「スタジオで撮るのはお金ないから無理。良い、ぼっちちゃん？　アー写つてのはバンドの方向性とかメンバーの特徴を一枚で伝える大切なものなんだ」

「確かに、アー写によつてパッと見ただけでこのバンドかとか、この人達かって覚えてもらせる可能性はでかくなりますね」

「その通り、ライブハウスのサイト告知やフライヤーや雑誌……どんな所で使われてもインパクトがある感じにしないと！」

「バンドやつてく上では大事な事だつてさ、後藤さん」

「……わ、分かりました。覚悟決めます」

「そこまでなのね……」

彼女はそういう生き物なんです。許してあげてください。

一応今までと比べたら成長してる方なんです！

「いよーし！　それじゃあアー写撮影の旅に……レッツラゴー!!」

「おー！」

「お、お〜……！」

「虹夏さんそれちよつとふる」

「ん？」

「何でもありませんですすいませんごめんなさい」

危ない危ない、もう少しで埋められるとこだった。

人間、深追いは禁止って言うものね。言わないか、言わないな、うん。

そこから俺達は下北の街を回った。

商店街を初め、乱雑に並べられた自転車の横、外に曝け出されて売られている古着屋、誰も通らなそうな薄暗い路地裏、スプレーで落書きされたシャツター達、階段、フェンス、植物の前、そして公園。

虹夏さん曰く金欠バンドマンの定番所は大体見終えた。

今は俺の提案で休憩がてら自販機で飲み物を買っている。もう夏も近づいてきてるしそろそろ熱中症や脱水症状には気を付けなければならぬ。

「あとは良さげな壁とかかな」

「つぽく見えますもんねえ」

ペットボトルの飲料水を飲んでいた虹夏さんが呟いた。

何となく言いたい事は分かる。退廃的な壁を背後に立つてるジャケ写とかたまに見

るからな。要はバンドっぽく写っていたらいい訳だ。

「今日ギター持って来れば良かったわね」

「あつ、た、確かに……楽器持ってた方がさらにかっこよくなりそうですけど……」

「君達はね!」

君達とは強調したところで察しがついた。

「絵になるのはギターとベースだけでドラムは可哀想な事になるんだよ! 手に持つのはドラムスティックだけだよ!? みんなにこの気持ち分かる!?!」

分かりませんと答えたらどうなるんだろう。という興味が一瞬湧いたけどすぐに消す。

俺だってまだ長生きしたい。だが我らがリョウさんはそんな事もお構いなしにこう言った。

「可愛いじゃん」

「じゃあ今日だけ楽器交換しよ!」

「カッコ悪いからやだ」

一瞬で本音出てるじゃん。一ミリも可愛いとか思っただけじゃない方だったよあれ。

真顔で矛盾していくのほんと良い性格してるなりヨウさん。ある意味一貫してて凄
いと思う。全然懂れないけど。

そしてこのまま俺達は休憩を終えて続きの散策に向かった。

いくつかの候補は見つかったものの、これだと思ったものがなくただひたすら道を歩
いていく。

その途中。

後藤さんの気配が消えた。

「……あれ、後藤さんどこ行った？」

半径十メートル以内なら後藤さんの気配を感じられるのに、それが突然消えたのだ。

後ろに振り向くも誰もいない。俺の前には虹夏さん達が歩いている。気配が消えて
すぐだから近くにはいるはずだと思ひ、虹夏さん達から少し離れる。

また自分の世界に入っただけでどこかで座り込んでるか灰になってるんじゃないだろうな。

全身ピンクだから見つかりやすいはず。曲がり角に来て見渡すと、普通にいた。後藤
さんが一人で知らない場所なのに自然と立っている……だと……？

彼女はあんな一点をじっと見つめていた。

こつちから見ても角度的にちゃんとは見えないが、何かある訳でもなくただの壁しかない……よな？ 壁？

まさか。

「後藤さん、勝手にいなくなったりしたらダメだろ」

「……あつ、ゆうくん……これ、この壁なんですけど」

「ああ、やっぱりただの壁じゃなかったのか」

彼女に近づいて壁面を見る。

そこには誰かがスプレーで落書きでもしたのだろう。大木のようなものが描かされていた。壁一面ではなく端に描いてあえて大木全体を描かないところが無駄にアートっぽさを出している。何故壁に描くのかはまったく理解できないけど。

「後藤さんはこれが良いって感じたのか？」

「あつその、良さそうかなとは思ったけど……他にも良いところあるかもしれないしやっぱ」

「よし、じゃあ俺はここにいるから虹夏さん達呼んでこい」

「えっ、ええ!!」

「たまには自分の意見を言うって事もバンド内じゃ必要になってくるんだ。こういう時くらいバシツと行ってこい」

言葉のままに後藤さんの背中を強めに押すと、後藤さんは「あうううあう……」と呻きながらもそそくさと走って行った。

支えるという事は甘やかす事ではなく、時には厳しくする事も含めて成長を促し支えてやるのだ。特に後藤さんの場合はその塩梅が難しく加減を間違うとこの前みたいになつてしまう可能性もあるが、そこは俺の腕の見せ所である。

俺がここで待機しておく事で、後藤さんが上手く提案できなくても虹夏さん達ととりあえずこちらへ来るよう差し向ける事ができる。

これからは俺を孔明と呼んでほしい。パリピの方でも可。

しばらくすると後藤さんが虹夏さん達を連れてやってきた。

「うんうん、確かに悪くないね。よし、じゃあここでアー写撮ろう！ あ、優人くん撮影お願いしてもいい？」

「もちろん」

スマホ用の三脚を立てて壁をバックに四人が並ぶ。

髪を直したりしてる喜多さんや既にポーズを取ってるリョウさん。少しの沈黙のあ

とリョウさんの肩を組む虹夏さんと、横に一步離れたところで身動き一つせず俯いてじつとしていた後藤さん。幽霊じゃないよね？

「撮りますよー。はい、アー写」

「……んんんんいや何その掛け声!?!」

ちゃんと撮り終わるまでツツコミを耐えてた虹夏さん偉い。

「写真どうですかね？」

「んー、メンバーのキャラは出てるけどいまいちバンド感が……。バンドっぽさを感じる要素がほしいなあ」

「バンドマンのお手本たる存在こと、私の表情の真似をしてみて」

「こういう事になるとめちやくちや前に出てきますねリョウさん」

どこから来るんだその自信。無表情でそれ言えるのメンタル強者か？

「でもリョウ先輩の言う通りにすれば間違いないですよ！ねっ、後藤さん？」

「あっはい」

「虹夏さん、全肯定マンとイエスマンしかいません」

「そうなるとは思ってたよ。まあ仕方ない、やってみますかあ」

大正義エンジェルの許可が出たのでもう一度撮ってみる。

パシヤリと音がしてスマホを確認してみると。

「何かお通夜みたい」

「俺には修羅場で殺される五秒前の人視点にしか見えません」

怖えよこの人達。何でそんな器用に真似できんの。目に光がないもの。殺る気満々の人しか見えない。後藤さんは幽霊のままだし。

ひとまずここで撮り直しする事にして、一旦他の場所で撮影したのも確認する事になった。

「にしても喜多ちゃんほどの写真でも可愛いね」

「そんな事ないですよ」

俺には分かる。そんな事あるって思ってる反応だこれ。満更でもない表情してるし。

「あるある！ 何ていうか、写真慣れしてるっていうか。ねっ、優人くん？」

「まあ、そうですね。普段から色んな人と仲良くしてるの見てるので、いっぱい撮ってん

のかなって」

「ああ、それはよくイソスタに写真とか色々上げるからかも。ほらっ!」

言って喜多さんはスマホを見せてきた。

これが今若者の間で流行っているというイソスタか。トゥイッターとはまた違うのな。イカスパゲッティの略みたいだどしか思ってたなかった。

何っつか……すげえな。この前のバイトでのメイド姿だったりタピってる写真だったり友人との自撮り、一番新しい写真にはピンクの頭がチラッと……あれ、見覚えあるなこのピンク頭。

これ後藤さんじゃね。知らんところで勝手に撮られてる感じか。まともに撮ろうなんて言ったら元の形保ってられないもんな。

いや、ていうかこんな青春真っ盛りな画面を後藤さんに見せたらヤバいんじゃ、

「おおくさすがSNS担当大臣」

「ごうツ!」

「うわあ!?! ぼっちちゃんが瀕死状態に!?!」

「後藤さんどうしたの!?! 死なないで!」

「あーこれは青春コンプレックス発動してますね」

「そうです。今の虹夏さんなら彼女が言っただけでほしい言葉も分かるはずですよ。さあ、言っただけでしょう。後藤さんを元に戻すために」

「ちよつと異世界転生モノの神様っぽく言ってみる。意外と違和感なく聞いてくれるから逆に恥ずかしいのは内緒。」

虹夏さんは言っただけでほしい言葉というのを少し考えてから、首を縦に振った。

「うん、分かったよ優人くん！ 結束バンドのまとめ役として、ぼっちちゃんを理解するためにあたしやるよ！」

「その意気です。今こそ後藤さんを目覚めさせる時!!」

「ぼっちちゃんもイソスタ始めてみたら？」

あ。

「そうよ！ 友達になりましょう！ バンド活動していくなら、メンバー個人のアカウントあった方がいいと思うし！」

「あああああああああああああああつあああああああああああああああああああああつあああああああああああああああッ!!」

後藤さんがスパークした。文字通りの意味で。

「後藤さん!?!」

「ぼっちちゃん!?! 優人くんどうしよう! あたしもしかして間違えちゃった!?! ぼっちちゃん死んじやつたけど!?!」

「そうですね……」

しばし考える。耳をつんざくような叫び声でスパークしている後藤さんを元に戻すのは至難の業だ。

俺もここまでするとは予想外だった。だってまさかトドメさして追い打ちかけるとは思わなかったし。死体蹴りやオーバーキルってこういう事を言うんだね。

仕方ない。

こうなったらアレを使うしかないだろう。

「でえじようぶだ。死んでもドラゴンボールで生きけえれる」

「そんなのないよ!?!」

ないのか。

そりゃ困った。

17. 高価な買い物って何故かテンション上がる

「あんまり使いたくはなかったんですが、本当に最後の手段を使うしかないようですね」
「そんなのあるの?」

「ちよつと体張らなきゃなので嫌なんですけどこの際仕方ないです。ちよつと誰でもいいので俺の体支える準備だけしといてください」

俺は後藤さんの側に寄って軽く深呼吸をした。
そして。

「後藤さん、俺先に帰るばぎやんっ?!」

「優人くううううううん!?!」

今の一連を説明するところである。

俺が後藤さんの側でさっきの言葉を言う↓本当に帰る気で走り出そうとする↓それを本能的に察知した後藤さんが我に返りほぼ無意識で俺の足を掴む↓俺が盛大に顔面からこける↓顔面強打。イマココ。

「あつ戻りました……」

「う、うぶふう……な、何で誰も、支えてくれねえんだよ……」

「あまりにも急すぎてね。ごめんなさい……」

「行動に移すのが早すぎだよ優人くん。もつとちゃんと説明してくれないと」

何で俺が怒られてんの？ 確かに詳しく説明しなかつた俺にも非はあるけどさ、ご近所さんに奇声で迷惑かけてしまうから早く元に戻そうとしただけなのに……。

ちなみにこれ、全力疾走するつもりでやるから自分の両手で支えようとするけど普通に間に合わないのである。間に合ったとしても手首壊れると思う。

まあでも俺の鼻が犠牲になって後藤さんが復活したのなら結果オーライだ。

父さん、母さん、俺を頑丈な子に産んでくれてありがとう。主に意味ない方向で役に立ってます。

「けどおかげでぼっちちゃんも元に戻ったし、そろそろアー写撮影再開しよー！」

「それは良いですけど、ポーキングとかどういふ感じで撮るかの方向性は先に決めておいた方がいいんじゃないですかね？」

「復活はやっ！ うーん、確かにそうだね……」

「あー！ ジャンプとかどうですか!? 絵になるしみんなの素の感じとか出そうですけど！」

ジャンプか。言われてみれば一理あるかもしれない。普通にジャンプ力然り、各々の跳び方までその人の個性が出たりするものだ。

バンドのアー写にもたまにジャンプしたりしてる物もあるが、個々によつてその人らしさが出ていて俺は結構好きだったりする。

「それ良い！ 喜多ちゃん天才！」

「有識者が言ってた……。OPでジャンプするアニメは神アニメと……！」

それなんてきらら？ ウツ、頭が……。

「つまりアー写でジャンプすれば神バンドになれるのでは……!?!」

「日常系アニメ、俺もよく見るんで大好きです」

「何がつまり？ そして優人くんはいきなりアニメの話してどうしたの!?!」

これが普段アニメ見るタイプと見ないタイプの溝か。

近々布教してやろうかな。けいおんとかやつてるジャンル似てるしちようど良さそう。あの作品ほとんどティータイムしてるけど。唯ちゃん可愛いよね。

「全然意味分かんないけど……とりあえずやってみよー！ はい優人くん撮影！」

「ほいほい、いきますよー。みんな良いタイミングでジャンプしてくださいね。ハイ、ヒール……つつて」

「……何ですぐボケにいくの!? というか写真どう!？」

やっぱ撮り終わるまでツツコミ待つてくれるんだ虹夏さん。生粋だな。

言われたままスマホの写真を確認してみる。

「……おっと」

「どしたの? いきなりスマホから顔背けたりして」

「いえ、ちよつと」

俺の態度に疑問を感じたのか、虹夏さんは俺のそこへ駆け寄ってきてスマホの画面を見た。

すると何やらにまいました顔でこちらに振り向いてきた。絶対何か企んでる時の顔だこれ。

「あ~~~~ぼつちちゃんパンツ見えてるぞ~~~~? これはとんでもない写真撮れ

ちやつたな〜? 優人くんもそれ見て照れちやつたか〜!」

「照れてるんじゃないやなくて配慮して見ないようにしたんですよ。むしろ褒められるべきでしょ」

「ええ〜? ほんとに〜?」

うわめんどくせえこの人っ。こういう時だけちよつと強気に来るタイプの人じゃん。

女子からなら少しセクハラ紛いな事言っても許されると思つたら大間違いである。そして結局男の方が悪く言われるから余計タチ悪いのだ。

「それに後藤さんの下着姿はバイト始める前に一度見た事ありますしね」

「突然のカミングアウト!? えっ、本当なのぼっちちゃん!」

「あっはい……もの凄く怒られました……。無価値なものを映してすみません、消してください……」

「女子としての自信がなくなってる! 何で下着姿見られた方が怒られてんの!? 普通逆じゃない!」

「バイトが嫌で風邪ひくために下着姿のまま全身に冷えピタ、扇風機の前でギター掻き鳴らしてたんですよ。そっからキレてそのまま一時間くらい説教しました」

「後藤さんそんな事してたのね」

「これが幼馴染の関係性……」

いや、普通の幼馴染ならもつと青春ラブコメっぽくなってるでしょ。それかお互いマジで何とも思っていない現実思考パターン。

俺と後藤さんの場合はほぼ介護だ。子供の世話だ。何で俺が世話する役割なんだ。普通こういうのって逆だろ。朝全然起きてこない男子を隣の家に住んでる幼馴染の女の子が起こしにくる王道パターンのやつでしょ。やっぱああいうのはマンガだけか。

「まあけど、後藤さんも一応女の子なんだから少しくらいは恥じらいを持つとうな。あの時は俺も頭に血が上ったからあれだけど、今みたいなのは普通に反応に困るし」

「の割には落ち着いてたね」

「変に取り乱す方がおかしいでしょ。いついかなる時も冷静に対処できればその場を収められるんで」

「高校一年生の考えには思えないほど大人だ！」

「さあ、気を取り直してもう一度写真撮りましょう。後藤さんも次は気を付けてな」

「あっはい……」

男子一人女子四人で下着トークとかこつちの身が持たない。いやリョウさんはずっと空眺めてただけだけだ。

全員元の位置に戻り、タイミングを合わせてシャッターボタンを押す。

「……後藤さん以外は良い顔してるな。よし、これでいきましょう」

「お、いいねえ。バンド感に青春っぽさがプラスされてる！」

「写真のデータ貰っていいですか！」

「あつ私も……」

今時スマホでアー写撮影するのも時代を感じる。金欠バンドマンならではのと言えばそれまでだが。

俺も結束バンドを支える身としてもつと何か役に立つ事をしないとだ。スマホなら機種によって画質や機能も充実しているからアー写撮影にも困る事は少ない。

しかし追々結束バンドを大きくしていくなら曲以外の事にも力を入れていく必要があるだろう。

アマチュアだとしても、その中でひと際目立つ本格的なものほど人の目に付きやすい。ならば形から入る事だっておかしい話じゃない。

「せつかくだし一眼レフでも買うかなあ」

「いきなりどした!?!」

「ああいえ、この先もアー写撮影する事があるならカメラ買つとくのも良いかと思いま
しつ」

「にしても急すぎない……？ 何でまた？」

「結束バンドに協力するならこのくらいはしないと。みんなライブのためにお金
貯めないでだし、なら一人自由にお金使える俺がそういうところ補つていこうかなつて
思つた次第です」

「ええつ、そんな悪いよお！ あたし達別にそんな事してほしくて頼んだんじゃないの
にい！ カメラだつて高いんだよ!？」

あたふたしながら遠慮している虹夏さんだが、生憎俺も下がる気などなかった。

「俺が好きで勝手にやろうとしてるだけなので気にしないでください。それに父と二人
で暮らしてた時は家事ばかりで友達と遊ぶ時間のない俺に、父から小遣いとか結構貰つ
てて割と貯金してるから余裕もあるんです。カメラくらいなら普通に買えますよ」

マンガかゲームくらいにしか使わなかったし、親戚からのお年玉も代わりに母が貰つ
て貯めててくれてマジで貯金は全然ある。

七万〜十萬程度なら余裕で買えるだろう。結束バンドのためなら貯金を崩す事も容
易い事だ。

と、こんなお金の話をしているのに喰い付いてこない輩がいる事を思い出した。常に金欠で最近は草を食べてると喜多さんや虹夏さんからも聞いていたのだが、あのどこ行つた？

「それよりリヨウさんいなくないですか？」

「あれ？ まーた勝手にどっか行つたな……。いつも自由なんだから」

自由すぎんだろ。放浪者か？

「じゃあ今日はもう終わりにしようか。優人くんもあんまり無理はしなくていいからね。それじゃみんなかいさーん！」

「お疲れ様です」

それぞれが帰路についていく。とりあえず俺と後藤さんは近くの公園のベンチに座つた。

さて、空はまだ明るい。このまま帰るのも悪くないが、せつかく下北にいるならどこかにカメラ売つてる店ないか探すのもありだな。

問題は後藤さんをどうするかだけ……二人とはいえこの子をカメラ販売店に連れに行くのは少し気が引ける。

いや本音を言うとは何やらかすか分からないから連れて行きたくはないというのが本心だ。後藤さんレベルだと大量に置かれてるカメラを見ただけで自分が撮られてると錯覚し溶ける。それはもう物理的に。

最悪先に後藤さんを家に送り届けてから近場の店にでも行くか？

別に下北付近の店に拘ってる訳でもないし。うーん、どうしたもののか。

そんな事を考えながら後藤さんを見たらスマホを触っている。

文字を打ってるからロインか。

「ひうつ!？」

なんか小さな悲鳴を上げていた。

「どうした？」

「あつ……あの、リヨウさんに歌詞を見てもらおうと思って、メッセージ送ったらここに
来てつて……オシヤレそうなカフェの地図が送られてきたんだけど……」

「どれどれ……あー、まあ、後藤さんには厳しいか。……あれ？　けど集合した時歌詞で
きてないつて言つてなかったつけ?」

「そつそれは……自信がなくて、その……」

平常運転ね。おけおけ。

「つうかりヨウさん金ないのに何でこんなカフェに行ってるんだ？ 小遣いとか臨時収入でもあったのかな。勝手にどっか行っただと思っただらこんな店行ってるって虹夏さんにバレたら怖いんじゃないか。」

でも後藤さんリヨウさんに呼ばれたのか。ならタイミングは悪くないかもしれない。

「ゆ、ゆうくんっ……着いて来てくれる……？」

「ああ、その店までなら一緒に行ってもいいよ。けど俺はカメラ買いにその辺歩きまわるからリヨウさんには一人で会うんだぞ」

「え、えええ!! なっなんで」

「一眼レフ買うってさっき言ってたの聞いてなかったのか？」

「かつ歌詞の事で頭がいっぱいになってた……」

どうりでさつきずっと黙ってるなと思っただらそういう事か。黙ってるのはいつもの事だけだ。

「行き先が決まったんならさつきと行こう。リヨウさんを待たせても悪い」

「うう……」

自分から歌詞見せたいてってメッセージ送ったのに何故行くのを渋る。

いそいそと立ち上がりいつもの裾を掴んでぴったりとくつついてくる後藤さん。もはや何も思うまい。

——

約十分程歩くと。

目的の店に着いた。

「ここだな。じゃあ俺は行くわ。また後で迎えに行くぐあらあツ!」

「ままま待つてください……!」

いきなり襟首引つ張られたら意識飛びそうになるからやめろって言ったのにこいつ……。

「げほつごほつ……テメエ殺す気がゴルアツ!!」

「ああううごめんなさいい……!!」

「つたく……何だよ。リヨウさん待たせてる場合じゃないだろ」

「あの、ゆうくんは歌詞、見ないのかなって……」

え、そのために俺一瞬意識飛ばされかけたの？

「俺が先に見てどうすんだよ。そういうのはまず実際に演奏して歌うメンバーに見せるのが筋だろ。俺は別にアドバイスできる程詳しくないし後でもいいよ」

「じゃ、じゃあせめて一緒にお店の入口まで来て……」

「そっちが本音かこの野郎」

ここのなればいつまで経っても入らないだろう。

仕方なく後藤さんの手を引いて店のドアを開ける。店員さんのいらっしやいませという声が店内に小さく響く。

「あつへつ、へい大将やって」

「うるせえいらん事言うな。すいません、友人と待ち合わせしてるんでこの子奥に案内してもらっていいですか? 自分はまた後で来るので」

「ぼっち、こっちこっち」

リヨウさんが奥にいた。

というかあだ名とはいえ人がいる場所でぼっちって呼ばれるの中々にやばいな。本人は気に入ってるらしいからまだいいけど。

「じゃあまた後で迎えに行くから」

「あっはい。また、後で……ふへっ……」

店の外に出る。

俺は俺で用事を済ませますかね。ところで何で後藤さんは笑ってたんだろう。オシャレな店に入れたから調子にでも乗ったか？

まあそんな事はどうでもいい。まずはスマホで店舗検索して、と。

そして無事一眼レフ（約八万円）を買い終えた俺は適当にぶらついてた。

何気に人生で一番高い買い物をしたかもしれない。それが一眼レフって、中々オサレなものでは？ 高校一年の割に乙な買い物をしたのでは？ ふへっ。

せっかくだしこの際アー写以外にも持ち歩いて色々撮るのもありかもしれない。使える物は使わないとな。

ある程度の使い方は店員さんに聞いていた。F値やらISO感度やらシャッタースピードの設定とか撮影モードがどうの言っていたが、まあ後からどうとでもなるだろう。

基本設定はしたし、いつでも撮れる状態にしておく。少し青暗くなってきた空。こんな景色でさえも今はシャッターチャンスと思ってしまうほどカメラマン気分になっていた。

一眼レフ持ってるだけでカメラマンになったような錯覚に陥る。結束バンドのみんなの事もいつかアルバム作る時用に写真撮らせてもらうか。

カメラを首に提げ不思議と高揚していた気分以身を任せながら歩いていると、ロインの通知音が鳴った。

案の定後藤さんだった。終わったから迎えに来てとかかな。そんな風に思って画面を見たら少し違った。

『たすけて』

「……あん？」

「食い逃げする気だったのか貴様らは」

「あっうっ……」

「滅相もございません優人様」

「うるせえ山田一文無し」

「そんな芸名みたいに言われるとは思わなかった」

後藤さんからのロインを見て急いで店に向かった俺を待っていたのは、お金がないから救援依頼をしてきたリョウウさんと後藤さんであった。

舐めとんのかこいつら。

「何でお金ないのにカレーなんか頼んだんですか」

「最近草しか食べてなくて常にお腹減ってたから我慢できなくてつい」

「それで、後藤さんからのロインがなかったらどうしてたんですか」

「虹夏に来てもらおうかと」

「ほんと良い度胸してるよアンタ」

図々しいの頂点極めてるヤツじやん。

普通にやってる事クズだよこの人。後藤さん歌詞見る代わりにカモにされてるし。

「つうか後藤さんは何でお金持っていないの。財布持ってきてたよな？」

「あつその……た、多分ゆうくんのバッグに間違えて入れちやつたかもしれない……」

「え、いやいや何でだよ。そんなはず……うわっ、マジで入ってる！ 何で!？」

黒のトートバッグの中を見てみたら本当に入ってた。怖い、何で。

「いつも隣に座ってるから自分の世界に入ってる間に無自覚に間違えて入れてしまったのかもって言った」

いや確かに白と黒の色違いなだけで同じトートバッグだけど、対極の色してんのに間違えて入れるなんてアホだろ。いや、後藤さんはアホだった……。

自分の世界に入ってる後藤さんはまともに周り見ないし、隣同士に置かれたトート

バッグにミスって入れてしまう……可能性ならまあ、あるのか？

しかし事実として俺のトートバッグに入ってるからそうなんだろう。

後藤さんはまあ、まだ良い。

「はあ……今日の所は俺の奢りでいいですよ。次回からは気を付けてくださいマジでマジで」

「私の顔に免じて、ありがとう優人」

「うわっ、近寄ってくんな！ 顔の良さだけ前面に出してごり押ししてくんじゃねえ！」
「来月には返すから」

「分かった。分かったから離れてくださいいっ。ほんとに押しきてどうする!? 前回の伏線回収早すぎんだろ！」

くそう、こつちの分が悪すぎる。顔が良いってだけで武器にできるのズルいだろ。

何とかリヨウさん押し返す。心臓ばくばく言ってるけど多分ドキドキよりも恐怖の方だこれ。この人の目まじで感情籠ってない。

「じゃあ、私は帰る」

「もはや清々しいな」

「あつあの！ 次は、頑張ります……！」

「うん、楽しみにしてる」

それだけ言って、リヨウさんは帰って行った。

俺お金だけ払って終わつたんだけど。なんて言い出せるはずもなく、何となく二人にとっては生産性のある話ができたんだと察した。

帰宅途中、俺は後藤さんからリヨウさんの話を聞いた。

過去にバンドをやっていた事。青臭かったけど真つ直ぐな歌詞が好きだった事。だけど売れるために歌詞を売れ線に変え、それが嫌で揉めながらもそのバンドを辞めた事。バンドそのものが嫌になつた時に虹夏さんが誘ってくれて今がある事。

普段の行動はアレだけど、あの人にも色々あつたんだな。

で、それを聞いた後藤さんは心の変化があつたようだ。

「何か吹っ切れたって感じの顔してるな」

「……うん、私の好きなように書いていいって言ってくれたから……頑張る……！」

本当に、この時は良い顔をしている。

素直にそう思った。

「……そうか。じゃあ俺も期待しとくよ。最後に見せてくれよな」
「う、うんっ」

彼女は俺の一步先を歩んだ。

今まで後ろか隣にしかいなかった姿が、眼前にある。

無意識だった。勝手に買ったばかりのカメラに手が伸びていた。

シャッターボタンを押す。

初めて買った一眼レフ。

その記念すべき一枚目は。

揺らぎつつも確実に一步前へ進めたであろう少女。

後藤ひとりの後ろ姿だった。

18. 給料日は誰にとっても良い日である

梅雨も明けたとある休日。

既に夏の兆しを感じさせる暑さが外を焼く中、いつものようにスターリーに集まっていた結束バンド+俺。

四人はテーブルを囲んで雑談に花を咲かしているのに対し、俺はドリンクの補充や掃除を行っていた。

花の女子高生達（一人は例外）の会話に入るほど野暮ではない。単に話に着いていけないだけだ。じゃないと今日バイトじゃないのにドリンク補充なんてしない。

やれタピオカがどうだのパフェが何だのと言われても俺からすればそうなんだ凄いな。ねくらいしか言えない。

いまだにタピオカがカエルの卵にしか見えないのは自分だけだろうか、と思っている時点で俺はきつと流行からの脱落者だ。

「えー諸君、お待ちかねの給料だぞ」

床掃除をしていたら店長が茶封筒を片手に店に入ってきた。

五つの茶封筒をまるで扇子のように扇いでいる。それが店長のする事か。

スターリーでは口座振込じゃなく現金で手渡される。

個人的にも直接手渡しで貰えるというのはありがたい。紙幣だから重くないはずなのに、自分の血と涙と汗の結晶がお金になってるんだと思うと重く感じるものである。血と涙は出してないけど。

虹夏さんを初め次々と給料が手渡され、最後に床掃除を終わらせた俺が受け取りに行く。

「ほい、清水の分。お前はあいつらより長い時間働いてるからちよつと多めだぞ」

「ありがとうございます」

そりやそうだ。結束バンドがスタジオで練習してる間も俺はせつせとバイトに勤しんでたからな。

おかげで大体の業務は余裕でできるようになった。これが現金の重み。大切に扱わせてもらおうしよう。

元々今日はバイトじゃないので軽い手伝いが終わると本格的にやる事がなくなる。

ちらりと後藤さんの方を見たら一万円を掲げて目をキラキラさせていた。まさかバ

イトの目的忘れてないよな。いやあの表情は忘れてる。目が\$になってるもので使う気満々だあの子。

「はい、じゃあせっかくの所で悪いんだけど、ライブ代徴収するねー!」

後藤さんの背後で何か小さな爆発音がした。まさかまじもんのスタンド持つてるのか……?」

「聞いてください。新曲『さよなら論吉』」

「ごめんね! 私だって心苦しいんだよ!」

まあ、せっかく働いて得たお金がすぐに全部消えてしまうのも少し気の毒だ。

ましてや後藤さんからすれば文字通り汗と涙の結晶。慣れない事をしたのに自分のために使えないのは同情する。

気付いたら後藤さんは可燃ごみ箱の中に入っていた。恐ろしく早い移動。俺ですら見逃しちゃうね……。

リヨウさんはリヨウさんでドラムスティックで後藤さんの頬を突いていた。面白そうだなあれ。

「え〜！ アルバム作るのってそんなにお金かかるんですか!？」

「ううん、せつかくならライブの物販で置いてみたいし、それにMVの撮影とかするのも結構お金かかるんだよ〜」

「じゃあ夏休みは別のバイトも増やさないとですねっ」

「だね〜。みんな海の家とかでバイトしちゃう?」

「良いですねー!」

虹夏さんと喜多さんの会話を聞いて後藤さんがまた瞳から生気を失っている。

海の家とか後藤さん無縁だもんな。まず海行く前に太陽の光と陽キヤの光で砂になっちゃおうのがオチだ。しかもそこでバイトなんてした日にはもう復活とかできないかもしれない。そもそも生き返れるのがおかしいんだけど。

貴重なリードギターに死なれては虹夏さん達も困るもんな。

「虹夏さん」

「ん? 優人くんどうしたの?」

「これ、俺の給料分なんで全部ノルマ代に使ってやってください。一応少し多めに入ってるはずなんで」

俺は茶封筒をそのまま虹夏さんに差し出す。

しかし、虹夏さんも素直に受け取ってはくれない。

「いい、いやいやいやつ、さすがに受け取れないって！ この前もカメラ買ってたでしょ！
悪いよそんなのっ」

「大丈夫ですよこのくらい。それに俺の出した給料分で余ったノルマ代の差額は皆さんそれぞれ手元に給料残るでしょ？ それで新しい機材のために貯金とか楽器のメンテナンスに使えばもつと有意義にバンド活動できるだろうし、その方が良いと思いませんか？」

「いやあ……まあ、それはくそうなんだけど……優人くんに甘えすぎるのも、良くないよ
うな……」

虹夏さんほどの人ならそう言ってくると思ってた。

実際の所、俺の言ってる事は7割事実で3割が別に思惑がある。思惑と言ってもただの懸念だが。

俺が少しでも負担する事でバイトの回数を減らす。そして夏休みに別のバイトをしなくていいようにさせる。これが俺の作戦だ。

何故そんな事をしたかというと、このままでは本当に海の家やら別のバイトをする羽目になって後藤さんがやらかす未来しか見えないからだ。

スターリーはまだ虹夏さんの姉である店長がいるし、今さっきまでゴミ箱に入ってたも何も言われてないから良いが、これが他のバイトだと話は別になってくる。

できる事よりできない事の方が多い彼女が、ここ以外のバイトで成功する可能性はゼロだ。ドン引きされるかクビになるに決まってる。つまり、これは後藤さんのカス程度しか残ってない尊厳と、一緒にバイトしたら苦勞させてしまう結束バンドのみんなを守るための手段なのだ。

「こんな事くらいしか俺にはできないんでさせてくださいよ。それでもまだ渋るなら、そうですね。お礼は結束バンドが成長していく様子をこれからもずっと近くで見させてください。これで十分です」

すらすらとそれっぽく言える俺は中々の才能があると思う。

結束バンドの成長が見たいのは事実だし、これを聞き入れてくれたら助かるけど果たしてどうなるか。

「ん〜……分かった！　じゃあ優人くんの言葉に甘えさせてもらうねっ。その代わり、ちやーんとお礼してあげるから！　将来は結束バンドで優人くんを養えるぐらい大きくなるからね！」

「お金には困らせないわ!」

「そこまでは言つてねえよ」

ヒモになりたいと言つた覚えはねえ。いやできるなら楽はしたいけど。

話が飛躍しすぎだ。墮落宣言に聞こえた? なら訂正させてほしい。

横を見たらなんか後藤さんがリョウさんにギターを渡そうとしていた。

マジでちよつと目を離れた隙にどうやつたらあんなおもしろ事案になるんだろう。

後藤さんの奇行にも動じないリョウさんが言う。

「曲作ってきたんだけど」

倒れたゴミ箱の側面に置かれたスマホから残響だけが残る。

曲の終わり。俺を含めた五人がゴミ箱を囲み微かな余韻に浸る。

これは……。

「え……かなり良くない?」

「はい、とっても……!」

「リヨウさん、凄いですね……」

「ぼっちの書いた歌詞見てたら浮かんできた」

俺にはよく分からんけど歌詞見てたらメロデー浮かぶ事ってあんの。想像ができません。

やっぱ何だかんだ音楽の事に関しては多才なんだなこの人。

後藤さんの書いた歌詞はこの前見せてもらったが、お世辞にも明るい歌詞とは呼べずむしろ暗い雰囲気ばかりだった印象がある。

だけどそんな歌詞も刺さる人には刺さるとリヨウさんは言っていたし、俺も後で見せてもらった時は結構好きなのフレーズなどもあり全然悪くなかった。メンバーから好評だったのもあつて歌詞作りで睡眠不足だった後藤さんは無事に報われた訳だ。

「あたしの夢、叶っちゃうかもな……」

小さな声で、虹夏さんが呟いた。

虹夏さんの夢？ 確かこの前は売れて武道館だー的な事言ってたはずだけど、その事なのかな。後藤さんも聞こえてたらしく、二人で顔を合わせるも首を傾げるだけだった。

俺達の疑問をよそに虹夏さんは立ち上がって、

「ううしっ！ 来月ライブできるようお姉ちゃんに頼んでくるね！」

「え？ まだ言つてなかったんですか？」

「あれ……虹夏さん、ライブって確か」

「だいじょーぶ！ この前もすぐ出させてくれたもん！」

最近色んな業務を教えてもらってるからこそ虹夏さんの発言に違和感があった。

個人的にライブハウスの事についてやバンドの事について色々調べてた時にも見かけた事がある。

ライブってそんな簡単に出られるようなものだったかと。

それを聞こうとした時にもう遅く、虹夏さんは店長に聞きに行っていた。

「ねっ、お姉ちゃん！」

「……は？ 出す気ないけど」

「「……え？」」

結束バンドの声が重なった。

「な、何で？ オリジナル曲もできたのに」

「それはこっちに関係ない」

急に空気が代わり不安に思ったのか、後藤さんが裾を掴んでくる。すまんな、今の俺にはどうにもできん。今は見に回ろう。

「あ、集客できなかった時のノルマなら払えるよ！」

「お金の問題じゃなくて、実力の問題」

「こ、この前は出してくれたじゃん」

「あれは思い出作りのために特別にな」

「思い出作りって……」

前回のあれってそういう経緯でライブさせてくれたのか。

一人完熟マンゴー段ボールでライブしてたんですけどあれも思い出作りに入ってるんですかね。工作作りになってませんかね。

「普段デモ音源審査とかしてんの、知ってんだろ」

「そう、だけど」

そうだ。ライブハウスでライブをするには本来審査が必要なはず。

バンドの実力と集客が見込めそうじゃないと弾かれる事があるのだ。そして店長の

発言からするに、今の結束バンドの実力ではライブに出すまでには達してないという事。

「悪いけど、五月のライブみたいなクオリティーなら出せないから」

「出せないって……じゃあ、あたし達はっ」

「一生仲間で仲良しクラブやっつけ」

「ッ」

おそらく、店長の言っている事は間違っていない。

あの時のライブは素人の俺ですらお世辞にも上手いとは思えなかった。後藤さんの走りすぎるギターや、それに無理に合わせようと虹夏さんのドラムがリズムを狂わせ、リョウさんのベースも引つ張られてしまっていた。

あのような実力のままなら本来デモ審査の時点で落とされるだろう。

店長の言い分は正しい。そんな事は分かりきっている。ライブハウスを経営するにあたって正論を言っているに過ぎない。

でも、だけど。

自分のスカートを掴んで悔しさを滲ませている虹夏さんを見て思ってしまった。

そんな言い方はないんじゃないのかと。

姉妹の間柄だからこそああいう言い方をするのだろうが、それは何だか今頑張つてバンドをしている彼女達が認められていけないような気がして。

結束バンドはあの時のままなんかじゃない。喜多さんも戻ってきてバンドとしての力も付けてきている。

ちゃんと成長しているんだ。

だから、

「っ、てんち」

「いまだにぬいぐるみ抱かないと寝れないくせに〜!!」

虹夏さんの声に遮られて止まってしまう。そのまま彼女はスターリーから出ていってしまった。

……何て可愛らしい捨て台詞なんだ。おかげで冷静さを取り戻した。

「何だ今の捨て台詞は……」

そして店長の表情を見て気付いた。ああ、そうだった。この人は思っている事を素直に言葉にできない不器用な人だったと。

店長の言葉を思い返す。あの人は立場上からして当たり前前の事しか言っていなかった。

何も間違っではない。

言葉通りの意味を捉えらんとするならば。

正しい手順を踏めと、そう言っている。

「はあ……言葉と態度で誤解されやすいタイプだな店長って……」

リアルのツンデレなんて所詮は誤解しか生まないものなのだろうか。

「ぬいぐるみってこのウサギとパンダの事？」

「あら可愛い」

リョウさんが突然スマホを見せてきた。

おそらく家のソファで寝ている店長がよれよれのウサギとパンダのぬいぐるみを抱いていた。よれよれなところを見ると相当な年数使い倒してなこれ。相当好きなんだろうか。

「だあああその画像消せ！ 今すぐに！」

前言撤回。やっぱツンデレは可愛い。※ただし女性とベジータのみに限る。

「リヨウ先輩何してるんですか！ 追いかけますよ！」

「えー……」

「面倒そうにしないで！ ほらっ、後藤さんも清水君も、行きましよ！」

喜多さんがめんどくさそうにしているリヨウさんの背中を押しながら階段を上つていった。

隣の後藤さんは作画崩壊していた。その技術は何なの。

後藤さんに裾を掴まれたまま階段を上がっていると、

「待って、ぼっちちゃん。それと清水も」

「はっはい!？」

「何ですか？」

店長から呼び止められカウンターまで戻る。

PC作業を続けたまま店長が言う。

「虹夏に伝えて。ライブに出たいならまずオーディション。一週間後の土曜日に演奏見
て決めるからって……何してんの？」

「格上の相手にはとことん下手に出てるだけです。気にしないであげてください」

全身ピンクは床に寝転がって犬がよくやるあのポーズをしていた。

「せ、精一杯服従心を表現しようよ……!」

「早く追いかけないと見失うんじゃないの?」

「ワンツ!」

何してんだこの子。気分まで犬になってどうする。それとも首輪持ってこようか?

店長は店長で服従ピンクの写真撮ってるし。やっぱ後藤さんの事気に入ってるなこの人。後藤さんにだけ結構言葉遣いが優しいもの。

ぬいぐるみ好きらしいし、可愛いもの好きとか小動物系が好きなのか?

後藤さんが小動物……プラנקトンは小動物に入るっけ? ミジンコとか?

「じゃあ俺達も虹夏さん探しに行つてきます。店長、妹だからってあまり虹夏さんにキツイ言葉言っちゃダメですよ」

「お、お前が怖い顔して見てくるからこっちも強張ったんだよつ。傍目からでも黒いオーラ出てたぞ……」

「いやだって虹夏さんに酷い事言うから……勝手に自己完結したんで大丈夫ですけど。」

店長つてほんと素直じゃないですよね」

「あ?」

おっと、これ以上はいけない。下手に刺激してしまうと後藤さんまで怖がつてしま
う。

さつさと後藤さんを立ち上がらせる。

「では失礼します。ほら、行くぞジミヘン二号」

「ワツ……あつ、はい」

犬が染み付いてない?

19. 友人との通話は長くなりがち

外に出て少し走った場所。

下北線路街の空き地にあるキッチンカーエリアに俺達はやってきていた。

「つまりオーデイション受けて合格したらライブに出られるって事？」

「そうです。店長は実力があの時のままなら出せないって言っただけで、絶対に出さな
いって言うてる訳じゃありません。今の結束バンドの実力をオーデイションで披露し
て認めさせたらライブにもちやんと出演できるんです」

「なら最初からそう言えばいいのに。お姉ちゃんの意地悪」

「店長がそういう人だって事も虹夏さんは知ってるんでしょ？」

「……まあ、うん」

ほら、やっぱり仲良し姉妹だ。何だかんだお互いの事をよく知っている分、ああやって
遠慮なくモノを言えるんだろう。

普段結束バンドのリーダーとしてしっかりしてる虹夏さんだから、店長と話している

時は妹感マシマシのわがままって感じでギャップがある。見ていてとてもほっこりするのだ。俺も弟か妹欲しかったなあ。

「それでぼっちちゃんは何でそんなに顔真つ青なの？ 今にも死にそうになってるけど」

「ああ。ここまで走ってきたんですけど、途中で後藤さんがリタイヤしたからおぶってきたんです。気付いたらゾンビになりそうになってたんで危うく犠牲者を出すところでした」

「ぼっちちゃん体力なさすぎる……」

走って一分もしない内に気配察知範囲の十メートルから消えたので振り返ると、案の定一人だけゾンビ映画みたいになってたからな。

おんぶして来たは良いけど、さすがに俺も疲れた。最近は筋トレとかのおかげで体力も筋力も多少付いてきたけど、さすがに人一人背負って走るのはまだキツイ。しかももう夏だし暑すぎる。

後藤さんを背負ったまま説明してたから一旦彼女を土管に降ろす。まだゼエハアゼエハア言ってる。黒ひげかな？

俺もようやくやくおも……背負うモノがなくなつて体が楽になる。ふう、気分はまるで亀

の甲羅を背負って修行してた悟空だ。今時このネタ伝わる人いたら普通に凄いと思う。

「はい、清水君っ。後藤さんおんぶしたまま走って疲れたでしょ。ミルクティーで良かった？ 確か好きだったよね？」

「ん、おう、サンキュ。お代返すよ。いくらだった？」

「もう、別にこのくらいはいいわよ」

「女子に奢られるのって何か気が引けるんだって。あと個人的に負けた気になるから好かん」

「ふふっ、何それ」

お代を渡して喜多さんから貰ったミルクティーを飲む。うん、熱くなった体に冷たくて甘いミルクティーが染みわたっていく。

一気に生き返るような気分だ。やっぱこれだよこれ。ミルクティーしか勝たん。

「……てか喜多さん何で俺がミルクティー好きなの知ってるの」

「え？ だって昼休み終わりとか放課後に後藤さんとギター練習してる時よく飲んでるの見てたから」

「……そっすか」

え、ナニコレ。ちよつと恥ずかしいんですが。そんな見られてたの俺。というかそんな飲んでたの俺。

人が何飲んでるかとか普通そんな見ないでしょ。酒場の店員か。いつものって言うたら何も言わずよく飲んでるお酒をちゃんと出してくれるアレなのか。

陽キヤの喜多さんの事だ。このくらは普通の事なんだろう。それで友人とかにファミレス行った時「あれ好きだったよね？　いつもので良かった？」とか簡単に言えちやうキラキラ陽キヤなんだ。

喜多さんを前にすると別にそんな陰キヤでもない俺まで自分は陰キヤかって思うほど眩しくなる。眩しすぎてこつちが陰の者になってしまふ。

おつといけない。このままだと後藤さん化するよこだった。

いや後藤さんで思い出した。まだゾンビのままじゃんこの子。早く水分補給させなければGウイルスが蔓延後藤してしまう。

「ほら後藤さん。ミルクティー飲んで元に戻れ。甘い物は染みるぞ。生き返るぞ」

ストローを後藤さんの口元に近づけたらちびちびと飲み始めた。

おお、微かにだけど顔色が戻っていく。いいぞ、そのまま戻れ。いつそいつもより健康的な肌ヤケしろ。白すぎてちよつと心配になるくらいだし。

と、何だか視線を感じた。

その方向を見ると喜多さんが俺をじっと見ている。

「……」

「えっと、どうかした？」

「……ううん、そういうのは何とも思わないんだって感じただけ」

え、何怖い。さつきまで陽キャだったじゃん。何でちよつと冷めた目になってんの。情緒が不安定なの。

後藤さんに慣れ過ぎてキラキラ陽キャの感情を汲み取る力が弱まってきてるな俺。だってこんな顔見た事ないもの。

「ってああ！ このやろつ、よそ見してる間に俺のミルクティー全部一気飲みしやがったな!」 まだ8割くらい残ってたはずなのに!」

「あつ、凄く美味しかったです……」

こいつ、人のを全部飲み干しておきながら何とも思つてやがらねえ……だと……。

まあ、すっかり元通りに戻ったからいいか。またおんぶするのはダルいし。

「うーん、じゃあ結局オーディションまで頑張るだけか〜」

「これまでとやる事は変わらないって事ですね!」

「あつうん、そうだねー……」

ノリノリな喜多さんに対して虹夏さんは少し難色を示した顔をしている。

何となく察しは付くけど面と向かつては言えない事なのだろう。俺だって言えないし。

「この二人が一番不安なだけどって顔してる」

「ちよ、ぼつ、せっかく虹夏さんが言葉にしなかったのに何でそういう事平気で言うんですかアンタは!」 心臓に毛でも生えてんのか!」

「最近優人が私に対して遠慮なくなってきた。それと同じ」

「ちげえわ! ツツコミと無遠慮の差だわ!」

リョウさんと同類にされるのだけは御免だ。いや外見と音楽の才能は認めるけど、こう……中身が色々おかしいんだよなこの人。

「とりあえず二人のパートはオケ流しとくからアテフリの練習だけしっかりしてくるよ
うに」

「はいー!」

「ダメ、エアバンドじゃないんだよ! どれだけへたつぴでも頑張れば熱意は伝わるから!」

「虹夏さん、それトドメになってます」

「え?」

見事に虹夏さんの口撃にやられた二人はダメージを受けていた。

後藤さんは土管の中にずるずると入っている。ちようど良い棲み処を見付けてしまったか……。

土管の中でぶつぶつ自虐して虹夏さんを困らせている後藤さんを尻目に、俺は隣で意味深に黙ってる喜多さんが気になった。

「喜多さん、どうかしたか? それとも虹夏さんに言われた事を気にしてる?」

「あつ違うの。いや、違わないのもあるんだけどそれ以上に、というか……」

何だか煮え切らない反応だな。やっぱり初心者だからか気にしてしまうのか。と思っていたら、

「あの、清水君」

「ん？」

「今日なんだけど、夜……で、電話、してもいい？」

「え、別に良いけど、ここじゃ話せない内容なのか？」

「そういう訳でもないんだけど、ちよつと気になる事があつて……」

「ここで詳しくは聞けない事なのかね。」

わざわざ俺にだけ言ってくるって事は同性の後藤さん達じゃ乗れない相談の可能性もある。どれだけ力になれるか分からないけど、俺でもできるような助力なら手伝つてやりたい。

「……ああ、分かった。じゃあできる時にロイン送るよ」

「うん、お願いね」

「ちよつと優人くん！ ぼっちちゃんここから出すの手伝つて〜！」

「ああはいはい」

喜多さんと夜の約束をし、虹夏さんに言われるがまま後藤さんを土管の中から引きずり出す。

夜の約束つて響きはちよつとアレだな。イケナイ感じに聞こえる訂正しよう。夜の密会とか。……もつとダメになったわ。

何とかネガティブ後藤を元の精神状態に戻し俺達はキッチンカーエリアを後にする。

「だーいじょうぶだーいじょうぶ！ リズム隊が上手ければ何とかなるよ！」

「そっそうでしょうか……」

会話はさっきの続きまで戻っていた。

「うんつ、リヨウ並に演奏できる事を求めてる訳じゃないと思うし。多分、熱量とか……バンドとしての成長？ とか求めてるんじゃないかな」

「成長……」

バンドとしての成長、か。

傍から見てる意見としては確実にバンドとしても成長してると思う。後藤さんもまだ完璧じゃないが、前回よりも幾分か合わせる事はできてるようにだって感じる。

喜多さんだってギターを始めて間もないのに毎日後藤さんから教わってるし、家でも一人で練習しているらしい。自分だけまだまだという自覚を持っている分、少しでも早く追いつこうと奮闘中なのだ。

リヨウさんと虹夏さんについては今の段階じゃ何も心配はいらないだろう。バンド全体のクオリティーはどうあれ、二人の実力はオーディションくらいなら合格域を余裕

で超している。

虹夏さんは全体を支えるリズム隊として後藤さん達が少しでもペースを合わせられるよう調整してくれる。リョウさんも虹夏さんに合わせ自分を主張しつつも、違和感を与えないレベルで目を合わせない後藤さんに向けて視線の代わりに音を聴かせてくれている。

そう考えると個人としての成長は各々しているのだが……バンドとしての成長を考えるならまた複雑になってくるな。

みんなが今何でバンドをやっているか、何がしたくてやっているのか、何のために始めたのか。実力もそうだが、おそらくこの辺りに答えがある気がする。

ただし、バンドをやっていない俺はそのどれにも当てはまらない。

結局答えを出せるのは結束バンドのみなんだ。

帰宅途中の間。

珍しく後藤さんは普通に隣を歩きながら黙ったままだった。

自室に戻り時計を確認する。

時間は夜の十時過ぎを指していた。

筋トレ後の晩ご飯も食べ終え風呂も入り、やる事と言えば結束バンドに関わると決めた時から日課にしている音楽についての勉強くらいだ。

と言つてもネットで音楽用語や演奏についてのサイトとか動画を見るだけだけど。多少なりとも詳しくなっておいて損はない。

しかし今日は他にやる事があつたので、スマホのロインを開く。

「いつでもできるぞ、と。えっ?」

メッセージを送った瞬間に既読がついた。

なして? ロインの画面開くまでのラグすらなかったけど、もしかしてトーク画面ずっと開いて張り付いてた?

すると了解とか分かったとかそういう返信をしてくる事もなく着信音が鳴った。

相手はもちろん喜多さん。どうやら陽キャは相手からのメッセージは速攻で見る習慣でもあるのだろう。

通話ボタンをタップする。

第一声はあちらからだった。

『もしもし、清水君?』

「あつおう、こんばんは……」

何だか普段正面やら隣から聞き慣れている声が自分の耳元からするのは少し違和感を覚える。

このむず痒さはなんだ。電話ってこんなソワソワするもんだったつけ。

『こんばんは。ふふつ、どうしたの? 後藤さんみたいな言い方しちやって』

「うるせつ……基本電話とかしないから慣れてないだけだ」

『後藤さんと電話とかしないの?』

「後藤さんが電話するところ、想像できるか?」

『……できないわね』

あいつマジで電話出ないからな。ロインとかはすぐ返してくるのに電話したら一切出ない。で、切れた後に『すみません。ちよつとトイレに行つてて気付きました』とか誰でも分かるような?をつく。

それを中学生の時に何十回もされてどんだけトイレ行くねんという思いから電話をする事はなくなつた。

色々心配で何十回も電話かけてたあの頃の俺もどうかと思うけど。もう二度と後藤さんに電話する事はないだろう。

代わりに今じゃ向こうから頻繁にロインしてくる事あるが。隣に住んでるんだから普通に家に呼べよと思う。

「そういう事。で、さつそくだけど本題に入るぞ。何か俺に聞きたい事があつたんだよな？ それとも相談？」

『あ、うん。聞きたい事、になるのかしら。後藤さんの事についてなんだけど』
何でそれを俺に聞く？

「後藤さんの事？ それなら俺に聞くより本人に聞くのが一番手っ取り早いんじゃない？」

『いつも一緒にいる清水君に聞きたかつたのっ』

「分かつた分かつたつて！ それで、何が聞きたいんだ？ 生態調査のレポートなら明日にでも貸せるけど」

『そうじゃないから！ とうかそんなものあるの!?!』

あるぞ。一度虹夏さんに見せようとしたらいらないうって言われて処分に困ってたやつだ。

俺の苦勞を返してほしい。

『じゃなくてっ。聞きたいのは後藤さんのギターについてよ』

ああ、なるほど。

「とうとうと？」

『今日伊地知先輩達に私と後藤さんのギターは下手って言われたじゃない？ だけど、後藤さんのは私が前に学校で聴いた時に、素人の私でも上手いって思ってたのよ。もしかしたらまぐれだったのかもって思ってたんだけど、どうしても気になっちゃって』

「それで後藤さんをよく知る俺に真相を確かめようとした訳か」

『ええ、そうなの。まぐれでギター上手く弾けるなんて事あるのかしら？』

喜多さんの疑問はもつともだ。

最初の後藤さんの腕前を聴いた喜多さんなら、後藤さんが上手いって思うのは当然の事。彼女の實力は一人の時に発揮されるものだからである。

別に隠す事でもないだろう。というか後藤さんから聞いてなかったんだな。

一緒に放課後練習してる時とかに言ってるものだと思ってた。

「まぐれじゃないよ。後藤さんは間違いなくギターが上手い。それもめっちゃくちゃに
な」

『え、そうなの?』

「ああ。俺の主観にはなってしまうけど、単純な実力だけならリヨウさんと同等かそれ
以上だと思ってる」

『そんなに!? でも、じゃあ何で下手だって言われて……』

「ただ、喜多さんももう知ってるの通り、後藤さんは極度の人見知りと引つ込み思案の根暗
陰キャコミュ症な性格してるだろ?」

『そ、そこまで言わなくても……』

「だからそのせいで演奏時は誰とも目を合わせられない。つまりアイコンタクトで呼吸
を合やす事ができないんだ。一人で勝手に突っ走ったり顔を上げる事もしないから、
リヨウさんも虹夏さんもペースを乱されて全体的なライブのクオリティーが下がって
しまう。どれだけソロが上手くてもチームになった途端ド下手になっちゃうんだよ。
これが後藤さん最大の欠点って訳」

最近はまだ聴けるレベルまでにはなってきたけど、それでもまだまだだ。

『……そういう事だったのね』

「ああ。実際喜多さんにギター教えてる時の後藤さんは何もおかしなことかなかったろ？ つまりそういう事」

『ええ、私でもちゃんと分かるように教えてくれるわ。それに応えられてるかどうかは分からないけど……』

「大丈夫だよ。たまに放課後練習見させてもらう度に思ってるけど、後藤さんの教え方が上手いのはもちろん、喜多さんも喜多さんでちゃんと努力して少しずつだけ確実に上達してる。素人の俺でさえ音の違いかスムーズに弾けてるかどうかが分かるくらいにはな」

後藤さんも喜多さんも、結束バンドのために上手くなろうと毎日努力している。足手まといにならないために、他のやりたい事さえ封じてバンドのために時間を費やしている。

それを知っているからこそ、それを伝えて安心させてやりたい。間違いなく成長してるんだぞと。

「喜多さんもまだ始めて期間も短いのにそんなに頑張ってたんだ。後藤さんもだけど、

ちゃんと二人は成長してるよ。俺が保証する」

微かな自信のなさを声音で感じた。多分、結束バンドの中で一番不安になっているのは喜多さんだ。

自分だけが完全な初心者で、ギターだけでなくバンドの要とされるボーカルも任されているのだから。押し掛かるプレッシャーなんて俺なんかには計れない。

だから少しでも不安を取り除けるような言葉を投げかける。むしろそれしか俺にできる事はない。

であればできる事に全力を尽くすのみだ。

「結束バンドのギターボーカルを俺もみんなも信じてるから。だからオーディションの日まで突っ切ってやろうぜ」

『清水君……うん、私頑張る。バンドとしての成長を認めてもらうために、頑張ってたかったって心から思いたいから!』

「いいねえ、その意気だ」

『だから、私達をちゃんと見ててね!』

「……ああ」

声に覇気が戻ったような気がした。これなら喜多さんは大丈夫そうだ。

後藤さんの事も説明したし、聞きたい事もこれで終わりだろう。

「じゃあ用件も済んだなら切るけど、いいよな?」

『ええ、せっかくなんだからもう少し話しましょうよ。男の子とちゃんと電話した事ないから貴重な時間だしっ』

「何でだよ。特に話す事ないだろ。……それに夜更かしは美容の敵とかなんかなかったっけ。良いのか花の女子高生がそれで」

『青春に夜更かしは付き物よ清水君っ☆』

「……さいですか……」

結局、俺は何故か喜多さんの長電話に深夜三時くらいまで付き合わされたのだった。話を向こうから振ってきても楽しくなかったからまだいいけど。

そして通話が終わったあと、ロインには後藤さんから『あの』『今大丈夫ですか?』『ゆ、ゆうくん?』『あつうっ』『私、また何か悪い事……?』『何しでかしたのか心当たりしかないけど、本当にすみませんでした』『明日からも普通に話してくれると嬉しいです』と連投が来ていた。

翌朝、後藤さんから腕を掴まれ教室まで離される事はなかったとき。

チャン
チャン
ツツ
!!

20. 進め、前へ

とある日。

俺は虹夏さんとスターリーへの帰路についていた。

「ごめんね、買い出し付き合ってもらっちゃって。荷物が多かったり重かったりする
とどうも一人じゃキツくてさあ〜」

「大丈夫ですよ。むしろこういう時こそ男の俺の出番な訳ですし。全然頼ってください
い」

虹夏さんの頼みならたとえ水の中火の中クソ野郎のトランクスの中だって行ってや
りますよ。やっぱ最後のだけはなしで。

「助かるよおー。やっぱスターリーにや優人くんが必要不可欠だねえ」

「……はあ、やっぱ虹夏さんがいっちゃん天使。虹夏さんしか勝たん」

「えっ、いきなり何!？」

「ああいや、何かちやんと会話できてるなつて感じるの、虹夏さんだけなんで……」
まともな会話ができる喜びを俺は知った。

後藤さんはいつもアレだし、喜多さんは陽キャ用語多すぎてたまに着いていけないし、リヨウさんは草食ベてるし。まとも枠が虹夏さんしかいないの普通にやばいでしょう。大丈夫か結束バンド。

「虹夏さん、俺……虹夏さんにはいつもまとも枠でいてほしいです」

「そんなお願いされたの初めてなんだけど!?!」

「一緒にあの変人達をツツコミましょう!」

「好きでやってる訳じゃないけどね!?! しかも優人くんもたまにあたしに対してボケに回ってるから強く言えないよ!」

マジでか。いや、言われてみればそうだった。

なんか虹夏さんになら安心してボケに回っても大丈夫な気がして……。

他愛ない会話をしながらスターリーに戻る。

うん、よく考えればこれが普通なんだよな。他の人達が個性ありすぎて感覚麻痺しかけてた。天使に勝るものなし。

「え……何その髪型……」

天使のひつつくい声がスターリー内に響いた。

虹夏さんの声が気になり俺も急いで階段を下りると。

「……は？」

なんか知らん人が三人いた。虹夏さんも呆然と立ち尽くしている。

髪色はそれぞれ一緒だがどうしても同一人物とは思えない。スーツ姿にマツシュヘアー、いわゆる男装っぽい感じには見えるがこいつらもしかして……。

「ばっバンドマンとしての成長を見た目で表現……だそうです……」

「おいバカに何バカな事を言わせてんだ」

「やっぱりリョウか……」

後藤さんは断れないし喜多さんもリョウさんの提案なら喜んで受け入れるのは目に見える。

つまりバカトリオの完成であった。よくあつたなそんな衣装。

「飲酒喫煙女遊び。そして髪型をキノコヘア。それがバンドマン！」

「偏見しかないんですが」

「イメージがこてこてすぎる……」

バンドマン全員がキノコだと思うなよ。今更飲酒喫煙女遊びなんて古いわ。

少なくとも俺の尊敬してるバンドのボーカルは毎日10キロ走って喫煙一切しないし飲酒も年に三回程度、カフェイン摂取も断って基本グルテンフリーで常に喉に気を遣ってるようなすげえバンドマンなんだからな！ 今時体と喉ぶっ壊してするロックなんて意味がねえんだようえーい！

とまあ現役バンドマンの彼女達に素人の自分がそんな事言えるはずもなく、俺は一人でうんうんと勝手に納得するしかなかったのです。

そんな中キノコ達は仲良く三人で写真を撮っている。「はいキノコ〜！」ってどんな合図だよと思いつながら、アー写撮影の時に「ハイ、ヒール」とか言ってた自分を思い出したから口は閉じておく。同類じゃねえか。

「てかそれウィッグなのか。すげえな」

「でしょ？ 結構ちゃんとしたものなのよねえ。一度はボーイッシュな感じにしてみたかったし試したかったの！ どう、似合ってる？」

「え、うん。似合ってる似合ってる」

三方向から三バカに囲まれ俺は男としての自信を喪失。顔が良いヤツはこれだから困る。もうお婿にいけない……。

「満足した？」

「うん、虹夏には目が半分隠れてうざったい感じの斜め前髪枠が空いてるから」

「そんな枠いらんわ」

俺がキノコでも斜め前髪でもなくて良かった。偏見によって精神ダメージ受けてとこだったわ。

てか何で男の髪型に寄せるんだろう。普通に売れてるガールズバンドの髪型真似すればいいんじゃないのか。いや大体女子の髪型も一緒か（偏見）。

「あつあの……わ、私女遊び無理です……。私と遊んでくれる女の人がいま……」
知ってるけど改めて聞くと中々に悲しい発言だな。

「大丈夫。下北沢のビレパン前でギター背負って気怠そうにしとけば多分誰か寄ってくるから」

「偏見に満ちた情報教えない！ 真面目にやるの！」

「でも成長つて目に見えないし、判断基準ぼんやりしてるし」

「はつきりしてるよ！ とにかくお姉ちゃんを納得させればいいんだから、練習あるのみ！ ほーらみんなさつさと着替えて！ 優人くんもすぐ立ち上がる。今日はシフト入ってないんだしいつも通りスタジオで練習見て意見とかあつたら言ってるね」

「あつはい」

虹夏さんに言われると素直に言う事聞いてしまう。これがリーダーの力……。

みんなウィッグを外して着替えに別室へ向かっていく。俺は先に買い物袋の中身を整理してからスタジオに行く予定だ。

それにしても成長、か。

虹夏さんはあまり悩んでるようには見えないし喜多さんはこの前の電話でおおよその答えは見付けたつぽいけど、他の二人はまだ見付けていないのだろうか。いや、リョウさんは大丈夫そうだな、何となく。

ならば残るは後藤さんだが、オーディションまでに聞くべきなのかどうかは、俺にも分からなかった。

オーデイション前日。

この日も俺はシフトに入っておらずスタジオで結束バンドの練習を眺めていた。ほぼ毎日練習は数時間ほどやり、日に日に演奏自体は良くなっている。

ただ、やはり後藤さんは視線を合わせないがためにまだ突っ走ってしまう事があった。そんなすぐにコミュニケーションを治せるなら苦労などしていないか。

しかし、今日の後藤さんの演奏には他にも違和感を感じた。何だか雑念が入ってるような、他の事を考えて集中できていないようにも見える。

オーデイションは明日だ。何か悩んでいる可能性があるなら、今日の内に何とかしなくてはいけない。

そう思っていたら、

「よし、今日はこの辺にしとこっか」

「え？ もうですか？」

「うん、明日のオーデイションに備えてゆっくり休んでねっ」

リーダーの判断で今日は終わりとなった。

駅へ向かう帰宅途中。

俺は先ほどの事を思い出しながら後藤さんに問いかけた。

「今日の練習中、何か他の事考えてたろ」

「えっ、な、何でそれを……」

「こちとらほぼ毎日のように顔見てんだ。前髪で目が隠れてたつてそれくらいは分かる」

そうやって理解しようとしてきたんだから。

「で、何を考えてたんだ」

「あつえつと……私、今何のためにバンドをやつて」

「ぼっちちゃーん！ 優人くーん！」

後藤さんが言いかけていたところで背後から声がして立ち止まる。急な事だからか後藤さんはちよつとビビっていた。

振り返らずとも分かるが、声の主は虹夏さんだ。

「ごめんごめん！ ちょっと話したい事があつてさ〜」

それでわざわざ走ってきたのか。ご苦労様です。というかロインか通話じゃダメだったのか。

あ、後藤さん電話出ないんだった。

「話す事があるなら俺は先に行つときましようか？」

「あつ、優人くんにも話しておきたいんだよね」

「俺にもっ？」

後藤さんはともかく俺にもつて何だろう。バイトの事かな。

ちなみに後藤さんは俺が先に行つとこうかと言つた時点で、俺がどこか行かないようにながつちり服を掴んでいる。元から逃がすつもりはなかつたのねあなた。

「うん、あつちようど良いや。二人共何が良い？」

虹夏さんは横にあつた自販機を見て俺達に聞いてくる。話をするなら何か飲みながらの方が良いと考えたのかもしれない。

気が利くと言えば気が利くが、そこを虹夏さんにさせるのは違う気がする。そつと財布を出しながら自販機に近づく。

「俺が出しますよ。ほら、虹夏さん好きなの選んでください」

「えっ？ あっ！ 優人くんずるい！ あたしが止めたんだからそこはあたしがお金出すところですよ！」

「そうしてくると思ったから先手を打たせてもらいました。もうお金入れちゃったんで、どうぞ」

「……じゃあ、レモネードで」

「はいよ。後藤さんはコーラで良いよな」

「あっう、うん……」

俺はミルクティーを買って三人に飲み物が渡ったのを確認してから虹夏さんに振った。

「で、話というのは？」

「うん。あのね……もし、あたしに付き合わせちゃったりしてたらごめん」

「え？」

急な謝罪に後藤さんと声が被った。

話したいって、謝る事だったのか？

「ほら、ぼっちちゃんが結束バンド入ってくれたのってその場の成り行きだったでしょ？　ぼっちちゃんあの時ずっとバンドやりたかったって言ってたけど、そういえばあたし……ぼっちちゃんがどんなバンドしたいとか、何のためにバンドしてるとか聞いた事なかったなーって」

ちやほやされたいからですって言える雰囲気じゃないのは後藤さんも分かっているよ。うだ。

何故ならめっちゃ服掴んでくるから。

「それに優人くんに至ってはぼっちちゃんの付き添いだからって色々してもらったりバイトまでしてくれてさ、この前は優人くんを辞めさせないために勢いで支えてよなんて言っただけ、よく考えれば我ながら無責任でもあったなって。なのに優人くんは嫌な顔せず今もずっと結束バンドのために手伝ってくれてるじゃん？　それって何でなんだろう。何のためにしてるんだらうって思っちゃってね」

「……」

結束バンドのリーダー、まとめ役。

そんな風にかっこが思っている、彼女だってまだ高校二年生の女の子に変わりはない

い。だから自分のした言動や行動に絶対の自信を持つ事だつてできない。後から思い返して後悔する事もあれば反省する事だつてあるのだろう。

「人によつて何かを始めたりやろうとする理由つて、それぞれじゃん？ 手段ややり方なんてたくさんあるし、それこそ夢なんてみんな持つてるだろうからさ」

少なくともバンドをしている人達はそういう目標がある事くらいは知っている。

それは虹夏さんやリョウさんも例外ではない。詳しい事はまだ分からないけれど。ならば俺のやりたい事とは何なのだろうという疑問が同時に出てきた。

結束バンドの成長を見ていきたい。彼女達を支えたい。というのはいやりたい事とはまた別な気がする。

バイトを始めた直後、リョウさんにも俺のやりたい事が見つつかれば良いなって言われたが、結局まだ何も見つかっていない。結束バンドのためにとかではなく、俺自身のやりたい事、その答えはまだ不明のままだ。

みんながバンドとして力をつけていく中。

本当に前に進めていないのは、もしかしたら俺だけなんじゃないかと、頭によぎった。

「私はさ、目標つていうか夢があるから。だからつい熱くなりすぎるつていうか……

ぼっちちゃん達に無理させちゃってたりするかなーとか」

「そっそんな無理なんて、全然ないです……!」

「右に同じです」

「そう? なら良かったっ」

いや、今は俺の事はどうでもいい。最優先はオーデイションだ。

「に、虹夏ちゃんのバンドやる理由は、売れて武道館ライブですよ……?」

「ま、バンドマンの目指す道としては王道ですもんね」

「うーん……本当の夢はその先にあるんだけど……」

「え?」

本当の夢? 虹夏さんにとって武道館は通過点に過ぎないという事なのか。

ただ、虹夏さんがそれ以上教えてくれる事はなかった。

彼女は口元に人差し指を当て、

「でも、まだぼっちちゃん達には秘密だよっ! じゃ、明日よろしくねー!」

そのまま帰って行った。

虹夏さんにはしっかりした目標がある。だからあんなにも真っ直ぐに進んでいける

のかもしれない。
何のためにか。

「何のためにバンドやってんのか、だったか」

「え？」

「さつき後藤さんもそう言いかけてただろ。虹夏さん、それを見抜いてた。やつぱみんなの事ちゃんと見てんだな」

「そう、だね……」

後藤さんが軽く俯く。

虹夏さんの事を聞いて何を思ったのかは分からない。それで答えが出るほど簡単なものじゃないとも思う。

「何だっかっていいんじゃないか？」

「……え？」

「バンドをやる理由、何がしたいのか、やりたいのか、何のためにやっているのか。そもそも成長とは何なのか。そんなもんすぐ答えが出るようなら悩んでなんかいいえだろ」

「うっ……」

俺自身、やりたい事を見付けていない時点で後藤さんと一緒かそれ以下なのだ。

だが後藤さんには今結束バンドがある。自分の居場所があつて、そこでやりたい事ができている。明確な理由なんてなくなつていい。

「最初みたいに人気が出てちやほやされたいからつてのも理由ではある。だけど、それだけじゃなくなつたからそうやって悩んでるんだろ？」

「う、うん……」

「ならやるべき事は決まつてる」

ある意味答えなんてどこにでも転がついて、どこにも落ちていないのだ。

結局はその本人次第。見付けられるも見落とすも気持ちの強さで変わってくる。しかし不器用な彼女にはどちらも難しいというのなら、自分が多少の助力をしたつて良いと思う。

「うじうじ悩んでないで思う存分ギター掻き鳴らせばいいんだよ」

「……で、でもっ、そんなんで、良いのかな……」

「少なくとも、俺はギターを弾いてる時の後藤さんが一番らしい姿をしてると思つてる」
「らし、い？」

「ああ。それでそれこそが結束バンドとして、バンドをやってる理由に繋がるんじゃないかな。まああくまで俺個人の意見だからどう受け止めるかは後藤さんの自由だ」

理由なんてまだなくたっていい。

ないならこれから作ればいいし、見つかるかもしれないのだから。

後藤さんはまた俯いた。夜だからか上手く表情が見えない。何かを考えているんだろう。

数十秒くらい経過した頃、彼女は顔を上げた。

「……ゆつゆうくん、私の……結束バンドの演奏を見て……」

「しっかり焼き付けとくよ。もしそれでもダメそうなら俺がどうにかしてやるから、好きにやってこい」

「うんっ」

街灯が照らす彼女の表情が瞳に映る。

ああ、これなら心配なさそうだ。

オーディション当日。

スターリー内では着々と準備が進んでいた。

静寂の中、たまに楽器のセッティングをする音だけが響く。

準備中、最初に口を開いたのはスターリーの店長、伊地知星歌だ。

「清水。お前結束バンドを手伝うとか協力者になったとか言ってたな」

「ええ、そうですけど」

イスに座っている星歌に対し隣で立っている少年、清水優人は問いに答えた。

「マネージャーとかでもないんだろ。何だその曖昧なポジションは。まあ売れてもないのにマネージャーになる意味はもつとないけどさ。そんなんでも良いのか？」

「えっと、何が言いたいんですか？」

「だから、あいつらはバンドとしてこれからも大きくなるつもりだろ。それでもし本当に売れて人気になって大きくなったら、お前はどうするんだって聞いてんの。マネージャー志望とかあんの？」

「いえ、特には」

「……はあ？」

低い声が返ってきた。

実際、優人にマネージャー志望はない。それどころかなったとしても彼女達のマネージャーになれる確証もないのだ。マネージャーだけなら他にごまんといるし、実力も経験もない自分には厳しいと考えている。

「おま、じゃあこれからどうすんだよ」

「結束バンドが成長していくのを近くで見守る。支えるって言ったんで、そうしていくだけかと思えます」

「いや、だからその後の事をだな……」

「店長の言いたい事は分かってますよ。結束バンドが成功した先に俺の居場所がないかもって心配してくれてるんですよね」

「なっ……や、それは」

あからさまに目を逸らす星歌に苦笑いしつつ、少年は断言した。

「別に良いんですよ。結束バンドが成長しきって大きくなった先に、俺の居場所なんて

なくても」

「……は？」

準備を進めていく彼女達に目をやりながら、

「協力するって言った時は俺を養ってやるとか冗談で言ってくれた事はありますけど、彼女達がデビューするような事があってどこかに所属する事があれば、俺は喜んで去ります」

「それで納得できんの？」

「はい。俺の役目は結束バンドを支えて手伝う事だけです。その後の事は、もっと詳しい人達に任せればいい。将来の事は、そうですね……まあ成績自体は良いんでどうにかします。あ、最悪ここで働かせてもらうのもありですね」

「ここを滑り止め扱いすんな。……お前、やりたい事とかないの？」
軽くドラムを叩く音が響く。

最終チェックもそろそろ終わる頃合いだ。

「俺もよく考えたんですけど、今はただ結束バンドを見守りたいって事だけですかねえ。それ以外には特に何も」

「かあー、若者ってのは今を生きてるモンだな。お前、将来苦勞するタイプだわ。何の確証もねえのにあいつらの近くにおいて、あいつらが成功したら自分はお役御免ってか？」
「まあそうなりますね。俺はただ結束バンドのみんなが幸せになればそれで満足なんです」

「うーわあ……お前つてもしかして結構ヤバイヤツ？ 自分を勘定に入れないとか、普通そんな考えにならんだろ」

「これでもまともで卒で通ってるんですけど……」

店長とPAがうんうんと頷き合っているのがどうも気に入らない。

何勝手に納得し合ってるんだと言いたいところだが、多分ここで何を言っても主張が通る気がしないので仕方なく黙る。

「ほら、もう始まんぞ」

「はー」

遠回しに会話の打ち切りを渡され、完全な沈黙がスターリー内を支配した。
時間だ。

「結束バンドです！ よろしくお願いします！」

リーダーの虹夏も緊張しているのか、ほんの少し上ずった声だとすぐに分かった。

「……じゃあ、『ギターと孤独と蒼い惑星』って曲、やります！」

意識を結束バンドの方へ切り替える。今日の主役は彼女達だ。

昨夜の少女を見た身としてはあまり心配はしていないが、それでもこちらが強張ってしまう気持ちも多少あった。

僅かに握り込んだ手が震える。

オーデイション。ある意味、今日結束バンドが新たなスタートラインに立つ日だ。

まずはここを超えなければライブができない。

ステージに立つ四人が見合つて頷き合う。緊張で少し強張っているようにも見えるが、ここまで来ればもう後戻りはできない。全員が前を向く。

そこが合図だった。

ハイハットがリズムを刻んだ瞬間、静寂だったスターリーを音の暴力が支配した。

(ツ……！)

スタジオ練習で何度も見て聴いているはずなのに、まるで初めて聴いたような衝撃が少年の体中に走る。

昨日と今日で劇的な変化は見られない。だけど確実に、イントロだけでもう違うと分かる。

伊地知虹夏のドラムがリズムを作り。

山田リヨウのベースがベースの基盤となり。

後藤ひとりのリードギターが場を沸かす一陣となり。

喜多郁代のボーカルが曲全体の顔となる。

絶対に誰一人欠けてはできない結束バンドの旋律だけが奏でられていく。

気付けば勝手に体がリズムを刻んでいた。

そして、清水優人は見た。

サビに入る直前、ピンク色の少女の瞳に変化があったのだ。

前髪でほとんど隠れ、本当なら見分ける事すら難しい些細な変化。

それをずっと見てきた少年だけが、ここであの少女が何かをするという前兆を感じ取れた。

どこかで何かが決意に変わる音がした。

同時に、後藤ひとりが床を足で強く踏み込む。いつもスタジオや家で彼女のギターを聴いていたからだろうか。素人のはずなのに彼女のギターの音色がよりいっそう明確なものになった感じたのだ。

(すげえ……すげえ……！)

全体的に見ればまだまだ上手いとは言えないかもしれない。一人で突っ走る傾向はまだ続いており、必死でドラムとベースが合わせないと違和感を感じてしまうような演奏なのかもしれない。

でも、 فقط。

彼女達の演奏は、間違いなく一人の少年の心を掴んでいた。

音の振動でペットボトルが小刻みに揺れ、重低音な音圧が腹をより一層跳ねさせる。気付かぬ内に一歩前に出ていた。もつと近くで見たい。思い切り彼女達を応援したい。そう思わせてくれるような演奏。

もはや、自分の心臓の音でさえうるさいと少年は感じた。

確信はない。確証もない。だけど、今日は結束バンドが世界に産声を上げた日になる。可能性は無限に広がっている。

彼女達は、結束バンドは。

何かになれると、清水優人は確信した。

演奏が終わる。

余韻が残る中、俺だけが手を叩いて拍手をしていた。勝手にしていたのだ。どれだけ叩いて手が痛くなっても止める事はない。俺のこれが、彼女達は合格なんだと示すかのよう。

ありがとうございますと各々が言っ頭を下げる。

俺はもう自分でもびっくりするくらいパアツとした笑顔で店長を見た。合格以外あり得ないよな。これで不合格な訳ないよなと、そういう雰囲気にかけて少しでも確率を上げるためにだ。

そして店長は少し考える素振りを見せてから、

「良いんじゃない」

「それみる合か」

「つて言いたいところだが」

……はっ！

「ドラム、肩に力入れすぎ。ギター二人、下向きすぎ。ベースは自分の世界に入りすぎ。……でも、まあお前らがどういふバンドかは分かったけどね」

蓋を開けてみればダメ出しの応酬があった。

いやいや、そんな、？だろ？

「なつ、ちよつと待ってくださいよ店長！ むしろこれだけの期間でよく頑張った方ですよ!? 喜多さんなんかギター初めて二〜三ヶ月くらいでギターボーカルやってんですよ!? それに後藤さんだつて段ボールの中に入らずにあそこまでやったつてのに

……」

「あん？ 急に何言つてんだお前」

「あれか！ 分かったぞ！ どうせまたツンデレ発動してんだろ!! 素直に合格つて言えないからちよつと下げてから実は合格でしたーとかそういう事なんですよ!! 俺には分かるからな！ 伊達にアニメいっぱい見てねえからばふうツ!!」

「うるっせえなお前少し黙つてろ！」

脳天チヨップを予備動作なしでされた。

「つたく……よく聞けつての。どういうバンドか分かったつてこっちは言つたんだぞ。」
「喜ぶところだから」

「「え？」」

「多分合格つて言いたいんだと思いますよ」

「だからそう言つてんだろ……合格つ」

それを聞いた瞬間俺は勢い良く立ち上がる。

「分かるかあツ!! てかやつぱりツンデレじゃねえかアンタ俺の言つた通りの展開じゃん最初から合格つて言えばいいでべふあツ!」

「いちいちうるせえちなみにお前はあいつらに入れ込みすぎだバカツ!!」

今度は脳天拳骨をいただいた。

俺の脳細胞はこの二発でどれだけ死んだだろうか。さよなら俺の細胞ちゃん達。生まれ変わつても元気でな。

「やったー! 合格ですつて!」

「は、はいっ」

倒れたままステージの方を見ると喜多さんは後藤さんに抱き付いて喜んでいた。あ

あ、これが俗にいうてえてえてやつですか。凄く良い景色ですね。

こんなの見れるなんて俺も生きてえてえ良かった。使い方あつてるっけこれ。

喜び合つてる後藤さん達を見ているのは虹夏さんとリョウさん。何やら後藤さんの方を見てコソコソ話しているように見えるけど、まさかな。

そろそろ脳細胞ちゃん達も復活してきた頃かなと思つてたら、その時は突然やつてきた。

「ツ、き、喜多さんすみません……！」

口元を押さえたまま後藤さんがステージ脇まで移動したかと思えば。

「oh。」

ダム決壊である。あるいはマライオン後藤の誕生だった。

見事にリバースしておられる現役女子高生なんて見たくなかったが、それが幼馴染だなんて世も末だ。

「大丈夫後藤さん?! 清水君早く来て！」

「あーはいはい。慣れない事して緊張が解けて一気に胃酸が逆流してきたんだな」

早々に立ち上がり後処理に向かう。

ステージ上で吐くなんて相当ロックしてんなあ後藤さん。やっぱバンドはこうでなくちゃ。

後ろでは虹夏さん達が改めて喜び合っている。

それでいい。今は合格した事を素直に喜ぶべきだ。紛れもなく自分達の実力で切り開いたものなんだから。

「みんなで写真撮りましょう！」

「あつわ、私は床の掃除を……」

「ここは俺がやつとくから行ってこい」

「でっでも……」

「いいから。かつこよかつたぜ、今日の後藤さん」

「っ」

素直な気持ちを伝える。何事においても演者や創作者には応援や感想が一番の力になるからな。

「じゃあ俺はバケツに水入れてくるから」

言つてステージ上から下りてドリンクコーナーに向かう。
バケツを持って水道水を入れてると、店長がやってきた。

「清水、お前将来はどうあれとりあえずはずっとあいつらの側にいるんだろ」
オーデイションが始まる前に話してた事か。

「ええ、そのつもりです」

「そうか。……じゃあ」

俺に背を向けて、店長は言つた。

「虹夏達の事、ちゃんと見とけよ。優人」

「つ……はい！」

思わず言葉に力が入る。

何だか、認められたような気がした。

「え、どした。何があった。さつきまで喜びムードだったじゃん。何でいきなりスタン
ドモードになつてんの」

バケツに水を入れステージ上に戻ったらいきなり後藤さんが半泣き状態で後ろに來た。

一喜一憂の頻度が半端じゃないなこの子。

「ゆっゆうくん……ま、守ってえ……」

「何から？ 社会から？」

写真撮ってたんじゃねえのかよ。どうしてそうなった。

聞いても彼女はビクビク震えているだけだから何も分からない。また自分の世界に入って厳しい現実でも幻視していたのかもしれない。

さつきまであんなかつこよかったのになあ。

ともんじや（表現緩和）の処理をしていると、虹夏さんの元気な声が入ってきた。

「じゃあチケットノルマ1500円を二十枚だから、一人五枚ずつで！」

今度こそ後藤さんが背後霊へと進化した。

いや昇華した。

21. 酔っ払いの面倒を見るのは苦勞する

金沢八景駅からほんの少しだけ歩いた場所、琵琶島神社に俺と後藤さんはいた。

すぐ近くには弁才天様像もある。お邪魔してまーす。

さて、何故俺達がここにいるのかというのだ。

無事オーディションも合格しライブをする事が決まった結束バンド。なら次にやる事は当然集客である。ただでさえ結成したばかりで知名度なんて皆無。

とすると必然的に自分からチケットを売らなければならないのだが、そのノルマは五枚。

家族や友人知人と普通ならそんなに苦勞しないのではと思うところもあるだろう。しかしそこは我らが後藤ひとり。期待を裏切らず見事に売り捌く事なんて無理なのであった。

辛うじて後藤家両親が買ってくれて二枚は何とか買ったものの、後の三枚はどうするか。

それで出た答えが地元で宣伝フライヤーのピラを配ってチケット買ってくれる人を

探そう大作戦に出たのである。果たしてその結果は。

「……妖怪か？」

「け、結束バンドのみんなです……」

そもそもコミュ症の彼女がピラ配りなんてできる訳がなかったのだった。

しかもフライヤーに描かれてるこの、なに……アー写の時の結束バンドのメンバー？
らしき怨霊達が描かれたピラなんて誰も取ってくれはるはずもない。すげえ怖いし。

十秒見つめてたら多分魂抜かれるか呪い殺される類の呪物だこれ。特級呪物認定しなきゃ。

「あうう……やっぱりもうゆうくんを買ってもらおうしか……」

「それは最終手段って言ったろ。まずは最後まで粘ってみろって」

「だっ、だったらせめてピラ配りだけでも手伝」

「やだよ！ こんな呪物配って受け取ってくれる人いる訳ねえだろ！ もしいたとしたらとち狂った狂人がよっぽどの聖人くらいだったの！」

何なら配ってる最中に警察に職質される可能性大だ。今日私服だし。

いきなりロインでチケット売るの手伝ってと言われ何をしでかすか分からないから

着いてきたけど、正解だったようだ。この子一人なら今頃ヤバイ勧誘だと思われて連行されてもおかしくない。まず一人でできる未来が見えないが。

ビラだけは無駄に枚数作ってきたの何なんだ。真面目な無能か。それとも呪いの手紙的なやつ？

神社だしワンチャン火を焚いて供養してもらおうのが身のためかな、と思ってたらロインの通知音が鳴った。後藤さんも反応したという事は結束バンドのグループプロインだろう。

それぞれ二人でスマホを見てみる。

『お友達結構来てくれるみたいですよ！ よかった〜〜♡☆彡』

『なんか売れた』

『ぼっちちゃんはどうかな？ 今日の自主練来る？ 新曲もみんなで合わせたいし！ 優人くんも良かったら一緒に来てね〜！』

最後のこれ、絶対遠回しに後藤さんの様子を伝えろって言うてるじゃん。密かにチケットの売れ行き気にしてるじゃん。

既読を付けてしまったがどうしたものか……。ごめん虹夏さん、多分今行っても後藤さん死んじゃうだけなのでスルーする事をお許しください。何としても売らせません

で。

俺がここで返信しようとするのと絶対阻止してくるだろうしなこのピンク。

今もまた自分の世界に入って頭抱え込んでるし。

「だから美智代さんのご厚意に甘えとけば良かったのに。友達に売ってくれようとしてたんだろ？ 何で見栄張ったんだよ」

「うっ、うう〜……ふたりがいる手前強がっちゃって……」

「バカじゃねえの」

張るような見栄もないのに強がるからそうなるんだ。

「こ、このままじゃクビに……クビになっちゃおう……!」

「どうした急に」

いきなり頭抱えてヘドバンしだしたんだけど。

目が若干イッている。うん、これは通常運転ですな。

「ああもう夏なんだから荒ぶるにしてももうちよつと静かに荒ぶれっ！ 見てるこっちが暑苦しいわ!」

びくびく痙攣しだした後藤さんを何とか階段に座らせる。

目の焦点は合っていないけど奇行続けられるよりかはマシだ。まさか暑さでおかしくなったとかじゃないよな？ 確か向こうにコンビニあったはず。

「暑いしちよつと水分補給した方がいいな。そのコンビニで飲み物買ってくるからじつとしてろよ。ここなら人もあんま来ないし大丈夫なはずだ」

「あつ、じゃあコーラで……」

「水分補給だつってんのに炭酸買う訳ねえだろ。せめて他のジュースな」

「あつはい」

そう言つて俺はコンビニの方へ歩き出す。

時刻はもう夕方に入ろうとしている。コンビニ近くまでやってくるとある事に気付いた。

「……浴衣の人が多いな」

目に映る人の七割くらいが浴衣を着ている。確か今日は祭りがあるんだっけ。

一時は後藤さん陰キャ脱却大作戦で連れて行こうともしたが、人混みが無理で家を出る前から溶けていた記憶がある。溶けられると物理的に持てないから連れていけない

んだよなあ。

それもあつてか俺も最近は祭りとは少し縁遠くなっている。

だけど周囲が祭りムードだで行つてもないのに少し気分が高揚してくるのも不思議だ。浴衣のカップルとか女子同士で浴衣着てる人とか多い。正面からふらふらで酔っぱらつている女性ともすれ違つた。酒臭え……もう飲んでんのかよ。

うええと思ひながらコンビニに入る。外とは違つて涼しかった。

ドリンクを売つてる場所へ向かう。ふむ、俺は当然ミルクティーだ。で、後藤さんは何にするかな……暑さで頭おかしくならないように無難にスポドリでも良いか。

ペットボトルを二本手に取り、塩分取れそうな何かを買つていこうかと考えてたら口インが鳴つた。

また結束バンドの方かなと思つたら違つた。後藤さんから個人の方で来た。追加で欲しいものもあるのだろうか。

『すみません。追加でお水と酔い止め、あとしじみのお味噌汁とふかふかのベッド買ってきてください』

何を言つてるんだらうこの子。とうとう暑さにやられたか？

というか酔い止めにしじみの味噌汁って、まるで酔つ払いの介抱でもするみたいだ

な。

「……しゃあねえな」

店内にあるカゴにペットボトルを入れ、俺は他の商品を見に移動した。

ビニール袋を片手にコンビニを出る。

またロインの通知音が鳴った。まさか後藤さんまた追加してくるんじゃないだろうかと歩きながらスマホを出そうとすると、また通知音が鳴った。

珍しくスタンプも送ってきたのかと思っただけでまた通知音が鳴った。え、また？

いい加減何だとスマホを出してる間にもまた通知音が鳴る。普通に連投うるせえな

！

『優人くん？』

『清水くん？』

「……………」

トーク欄の画面にはそれぞれ虹夏、喜多と書かれた名前が一番上にあった。

そして今も彼女達からロインが来続けている。交互に送ってきているからかトーク欄の一番上を二人が行ったり来たりしていた。しかも文字は全部『優人くん?』と『清水くん?』と統一されている。

俺はそつとスマホをサイレントモードにしてポケットに入れた。

おそらく後藤さんは何しているか聞こうとしているんだろうが、既読スルーしただけでこんなに送ってくるのも普通に恐怖だ。俺を介すんじゃないかと直接後藤さんに送ってくれ頼むから。超怖いんだけど。こんなアニメみたいなヤンデレ風どっかで見た事あるぞ。

この世には見ない方がいい事もあるのだ。

どうしよう、今日もうロイン開けないよ。何が何でも後藤さんにチケット売ってもらわないと俺まで何かしらの被害を被るかもしれん。

もういつそあの呪符ばら撒いて悪霊でもいいから買わそうと足早に後藤さんの元に戻っていくと、何やら話し声が聞こえてきた。

あれ、誰かいんのか? の割に人気は少ないけど。

弁財天像のあるとこまで戻ると、

「ああヤバイっ! 何か出てきそう! 私の中から込み上げてくる熱い何かがこの世界

に解き放たれそう!! 出すかもう!? いつその事私でこの世界埋め尽くしちゃおうかなー!? うえーいわーはっはっはっはーッ! おぷっ

「あああああつ……え、えつとあのつ、も、もうちよつとだけおち、おつち……落ち着いてくだひやつ、わつああ……!?!」

地獄が繰り広げられていた。

「ぷっへあく肝臓に染みる〜! いやあく助かったよー。本当にありがとねえ。もう少して私だけのマールライオンが出来上がるとこだったよ〜!」

「いえ、まあ、はい」

酔い止めを飲みしじみ汁を盛大に飲み干した女性が言う。

危なかった。マジで危なかった。あと少し遅れてたら後藤さんのジャージがもんじやまみれになっていたとこだ。

「うあーきつちい〜。頭ん中全部洗い流したい気分だわー」

酔っ払いに絡まれるコミユ症陰キヤという地獄絵図を目の当たりにした俺は、とにかく後藤さんをこの女性からひっぺがし酔い止めとしじみ汁を押し付けたのだ。という

かこの人さつきすれ違つた人じゃねえか。

何とか事なきを得た俺達はようやく落ち着きを取り戻したつぽい女性をそつと見て立ち上がる。

「（いいか、ささつと挨拶だけしてここから立ち去るぞ。酔っ払いの相手なんぞロクな事にならない。そういうのは父親だけで間に合ってるんだつつうの）」

「（うつつうん）」

「じゃ、じゃあ俺達はこれで」

「君達名前何てゆーの？」

「……」

逃亡ミツシヨン、失敗。

少し落ち着いたせいである程度の理性を取り戻したか。むしろこつちの方が厄介かもしれない。

「……清水優人です」

「ごつ後藤ひとりです……」

「そつかー！ お酒はほどほどにしないとね。つて言ったそばから飲んじゃうんだけ

どー！ がははー！」

「おい今どつからその安酒出したアンタ!? セっかくこつちが酔い止めくれてやったのに意味なくなるだろ!?! 飲みすぎも大概にしろって!」

「なーっはっはっはっは！ 迎い酒ってねー！ 鬼ころならいっばいあるよーうえうえうえーい！」

「んがああああああッ!! 何言ってもこれだから酔っ払いは嫌なんだよクソがあああああああああーッ!!」

「ゆっ、ゆうくん落ち着いて……ゆうくんまで変になったら私はどうすれば……!?!」

口から火が出そうになってたところを後藤さんにしがみ付かれて冷静になる。

酔っ払いには良い思い出がない。基本尊敬しているが、父親が酔って帰って来た時のうざったらしさはもう半端じゃなかった。そこだけはどうかしてほしくて何度も言っただけ、結局酔ってしまえば全部パーなのだ。

床に吐き散らかす絡んでくる臭えわ風呂でシャワー流したまま寝るわでどれだけ苦勞したか。

それから俺は酔っ払いが苦手になり、自分は二十歳になって酒を飲むとしても一杯だけで我慢しようと心に誓った。それで目の前にいるこの女性。相当に厄介なタイプの酔っ払いだ。今すぐ逃げ出したい。

「あ、しみず君達も飲む？ 安酒だけど中々いけるよ〜？」

「飲むかあッ!! こっちは未成年だぞ見て分かんねえのかこの野郎ッ!!」

「わーっひやつひやつひゃ! しみず君怒つてらあ! おんもしれえ〜!!」

「ガールルルルルウツ!!」

「ちよ、ゆ、ゆうくんっ、ダメ……か、顔が……顔が般若になりかけてるから……!!」
 ー、この野郎……人の顔見て鬼ころ片手に腹抱えて笑つてやがる……。

「後藤さん、コンビニでありつたけの酔い止め買ってあいつの口にぶち込むぞ。この酔っ払いの酔いを覚まして三時間くらい説教しねえと気が済まねえ。それかもういつそ警察に突き出すか……?」

「お、怒りすぎて礼儀正しいゆうくんの口調がどつかいった……!」

「あーギターだろ。どつちか弾くのお?? いいじゃん、私もインディーズだけどバンドやってんだー!」

聞いてもいいねえ事をよくもまあべらべらと。……つて、え、バンドやってる? こんな酔っ払いが?

そ、そんなバカな……バンドの闇か? バンドの闇がこの人を酒沼の権化にさせたの

こんな時に人間じゃないところが仇になるとは……。とにかく追いかけないとアレの面倒を彼女が見るのは命がいくつあっても足りやしない。

これだから酔っ払ってやつはもうツ!!

2.2. 好感度は時々リセットされる

「じゃーん！ 私のマイベース、スーパーウルトラ酒？ 童子EX！ かつこいいですよ！」

「あつはい、かつかつこいいです」

「名前長いな」

結局後藤さん拉致事件を防ぐために全力で追いかけて居酒屋までこの女性のベースを取りに行き、元の場所……とまではいかないが近くの石ベンチに戻ってきた俺達。

人の話を聞かない人種への対処法とかないのかよ。何言っても笑ったまんまだったぞ。赤ちゃんか。てか本当にバンドやってたのか……。

酔っ払いの人はベースに頬ずりしながら、

「昨日のライブでも大活躍だったんだよ。んで打ち上げで飲み過ぎてさ、気付いたら日昇ってるし全然知らないここに来てただけだねー！」

「バカかよ」

さすがに飲みすぎですよそれ。

「ゆ、ゆうくん、多分言ってる事と思ってる事逆に言ってる……」

しまった。つい本音の方が出てしまった。あまりにもやってる事が愚かすぎて頭の心配をしてしまう。

見た目的にもまだ若い方なのにどうやったらそんな酒浸りになるんだろ。

「ぶっは〜！ やっぱこれだわあ！」

「また飲んでんじやねえか！ やめろって言っただろ!？」

「私を止めるのはまだ早いぜ少年」

「決め台詞みたいに言っても全然かっこよくねえよ」

？
パツク型の安酒なんてどこから出してるんだ。あのポツケは四次元ポケットなのか

「お、お酒好きなんですか？」

「うん！ だっってお酒飲んだら全部忘れられるからさー！ ほら、将来の不安とか？」

そういうのを全部お酒で流せば嫌な事も忘れられてお酒もどんどん進むじゃん？ 私

はこれを幸せスパイラルって呼んでるんだ！ 真似していいよー！」

そんなのが幸せでいいのか。いかん、何かこの人の事だんだん可哀想に見えてきた。

何があったのか知らんけど厳しい現実には打ちひしがれて酒に逃げるようになってしまったのだろうか。バンドマンってやっぱり苦勞が絶えないのかなあ。

「大丈夫。あなたの人生はまだ長いんですから、くそつたれた現実の中でも好きなように生きるあなたの事を俺は応援してます。だから強く生きてください」

「あれれー？ 何か急にしみず君優しくなったねー？」

そうだ、この人にだって酒に逃げなきやいけない理由があつたに違いない。酔っ払いだからって邪険に扱わず、まずは悩みを聞いて少しでもこの人が酒を飲まなくてもいい生活を送れるようなアドバイスをすれば何か変わるかもしれない。

俺は立ち上がって女性に近づき目線の高さを合わせた。できるだけ優しい笑みを浮かべる。

「もしよかつたら悩みとか相談に乗りますよ。年下だから頼りにはならないかもしれないかもしれませんが、愚痴でも何でも吐き出せば少しはスッキリするんじゃないですかね」

「んあゝ？ 特に悩みはありませ〜〜ん！」

「人の親切心を何だと思っ@bをうbヴおのなdせいんヴいんbnjsscツツ!!」
「げ、言語がおかしくなってるよゆうくん……!」

どうやらこの人はただ酒が好きで狂人ベーシストなだけらしい。もうそれでいい。俺がそう思ったんだからそうなんだ。はい決定!

後藤さんに止められるくらい心が乱されるのはよくないぞ俺。もう少ししつかり気を持たないと。

「あくまでピンとこないかあ。まあ二人も大人になったら分かるよ」

「分かりたくないんですけど……」

誰が目の中の酔っ払いを見て分かったと思うんだよ。むしろもう二十歳になっても酒飲まないでおこうかと思うレベル。

若者の酒離れの加速の原因って、実はこういう悪酔いしてる人を見て自分はこうならぬでおこうって思ってる人が多い説ないか。いうてそんなないか。ないな、俺だけだ多分。

「ひいひいあああああああ!?!」

隣でいきなり後藤さんが発狂しだした。また何か想像したなこれ。

「うひょー！　ひとりちゃんってもしかしてヤバイ子〜？」

「気にしないでください。ただの発作なんで」

「あ、ああううう……ゆう、くん……や、やしなっ……わた、私を……やしな……」

「どしたのひとりちゃん？」

「ヤシの木になりたいそうです」

「ひとりちゃんシラフでこれなら酔ったらもつとやばそうだねえ」

「……」

「ちよつと想像してみる。……あ、ダメだ。社会不適合者になってストロング虚無と病結飲^{びようけつ}んでるイメージしか出てこない。」

「ある意味普段奇行してる元気がある分、酒飲むようになったらそれすらできなくなる可能性がある。後藤さんと酒は相性悪いような気がしてきた。」

「飲めるようになったとしても変に酔うまで飲ませませんよ。この子が酒飲む時は見張っておかないとどうなるか分かったもんじやないし」

「あーあ、私にも止めてくれる人がいたらなあー!」

アンタさつき止めても飲んでたじゃねえか。この人の中には多分ブレーキがなくて常にアクセル全開だから俺でも着いていけない。

「あ、そういうや君達ここで何してたの? ひとりちゃんギター持つてるし練習の帰りだったとか?」

言われて思いい出した。

「そうだよ酔っ払いのせいで忘れてた! 後藤さんっ、早くノルマのチケット売らないと間に合わないぞ! 花火大会で人がたくさんいる今日がチャンスなんだ。もうあの呪符でも配って地縛霊でも悪霊でもそこら辺の人に憑りつかせて買ってもらうおう!」

「あっうっ」

「しみず君も時々えげつない事言うねー」

手段を選んでる場合じゃないのよこっちは。早くノルマ達成してクリア報告しないと次スターリー行つた時何が待ち受けてるか想像もしたくない。

怖くて今もスマホ見れねえし。足元からずると恐怖が這い上がって来てる気分なんだけど。下手なホラー映画より怖い。やっぱ幽霊とかお化けよりも一番怖いのは

生きてる人間なんだよなあ。しみお。

「どれどれ、いっちよお姉さんに話してみんさい！ 先輩バンドマンとして何か協力できるかもしれないよ〜！」

「なっ」

この人に助けを乞う……？ バンドマンではあるけどこのどうしようもない酔っ払い女に……？

良いのかそれで？ むしろ失敗しないか？ いやでも今の後藤さんのままじゃいつまでたつてもチケットが売れないのは事実。

最悪俺と両親で三枚買う事もできるが、あくまでそれは切り札だ。

可能ならあととは後藤さんだけの力で売ってもらいたいと思っただけ……うーん、仕方ない……のかぁ……。

「……苦渋の決断だ。藁にも縋らねえと終わらないもん。後藤さん、この人に話を聞いてもら」

「じ、実はかくかくしかじかで……」

「なるほどお、まるまるうまうまなんだね〜！」

もう言っちゃつてるうゝゝゝ！

「ひとりちゃんは悲劇の少女だったわけかあ……しみず君も優しいねえ手伝つてあげるなんて。チケット売るの大変だよね……私も最初の頃は凄く苦しんだな」

最初の頃はつて、じゃあこの人のバンドはもうそれなりに人気があつてチケットも普通に売れてるつて事なのか？

え、マジで。実は酔つてなかつたら普通に凄い人なのかこの人つて。

「よおし、命の恩人のために私がひと肌脱いであげようつ」

そう言つて、目の前の女性はいきなり上着を脱ぎキャミソールワンピースだけになつた。

は？

「ちよ、ばつ、いきなり何して——うおわつ!？」

「ゆ、ゆゆゆゆうくんはみみみ、みちやつ見ちやダメつ……!？」

上着を拾おうとしたら突然後藤さんから両目を覆われた。

いやてか、力強くない？ ねえ、手に力入れ過ぎだつて！ それじゃ俺の目が剝り抜

かれるっ、めり込んでるからあ!? というか何か後頭部に柔らかいモノが当たってるよ
うな気がするけどその前に俺の目があ、目があ!?

「私とひとりちゃんて今からここで路上ライブをするよお! って何してんの二人とも
?」

「…………え?」

じたばたしてたせいで割かし男女にあるまじき態勢になってた事に気付く。細かく
言えば後藤さんに後ろからがつちりホールドされてる状態だ。

うん、あの…………ちよつと、あんまり見ないでいただけると助かります。

「ほら、ビラもあるし路上ライブで客呼んでチケット買ってもらうのが一番良いつて!」
程なくして落ち着き俺達はお姉さんの話を聞いているのだが、

「あれ、確かそういうのって許可貰わないといけないんじゃないやあ…………?」

「だーいじようぶだいたいじよぶ! 今日はこちら辺でお祭りあるつぼくて人も多いしそん
なバレないつしよ!」

これがロックかあ、便利だなあ。

「あつ、でもアンプとか路上ライブの機材何もないかあ」

「じゃ、じゃあ残念ですが別の機会に……」

「ちよつとメンバーに持ってきてもらうねー!」

そう言ってお姉さんはバツキバキに割れたスマホをこちらに見せて電話をかけていた。

何というか、画面割れてるのらしい感あるな……。

にしても、路上ライブか。確かにライブのチケットを売るなら宣伝にもなるし集客にも繋がる可能性は大きい。

後藤さんだけなら絶対に無理だけど、この人がいるなら路上ライブも案外ありかもしれないな。

こちらとしてもチケットを売れる手段があるなら最大限利用させてもらう。どの道今のままで売れる可能性はゼロなんだし。

酔っ払いであつてもやはり先輩バンドマン。やり方はちゃんと分かっているらしい。

「じゃあちよつと近くまで機材取ってくるわー! すぐ戻ってくるから君達はここで軽く準備しててねー!」

「分かりました。後藤さん、俺はコンビニでペンと紙買ってくるから機材の用意しとくんだけぞ」

「えっいやっあつ」

後藤さんの返事を待たずにコンビニへダッシュで向かう。

多少強引じゃないとやろうとしないからな後藤さんは。このくらいがちようどいい。

コンビニから戻って即席の宣伝用の貼り紙を作り、お姉さんはキャリーケースの中からアンプや機材諸々を出して手際よく準備を進めて宣伝までしてくれている。

そして本来一番動かないといけない後藤さんは、

「わ、わあく楽しみだな〜……」

「おうコラさつきと戻ってこいピンク娘」

観客に紛ればバレないといつから錯覚していた？

むしろ真夏にジャージフル装備の時点で目立ってしかないからね。俺から逃げられると思わないように。

酔っ払いお姉さんのおかげで何人かはもうライブが始まるのを待っていてくれる。

早めに準備終わらせないと。

「え？ 外でギター弾いた事ない？」

「は、はい……どうしても、その……」

ふと、そんな会話が聞こえた。

「そんなに怖いなら目瞑って弾くとか？ なーんて、人見知りなんだよね〜分かるよお」

「確かいつも暗い押入れで弾いてるからそれでも弾けるよな？」

「あっうん、それなら何とか……」

それが結構凄い事をこの子は自覚してるんだろうか。毎日六時間ギターの練習して
るだけの事はある。

しかし、そこでお姉さんの声が割って入ってきた。

「でも一応言っとくけど」

何だか、雰囲気やさつきまでとは違ったように見える。

「今日の前にいる人達は君の闘う相手じゃないからね」

「うーん、目を瞑るのも下ばつか見るのも悪くないけど、たまには前を見るか耳を傾けるのもいいんじゃないか？」

「えっそれって、どういう……？」

「まだ客を見るのが怖いってのは分かる。そう簡単に克服できるものじゃないって事も理解してる。だからもし目を開けようと思えたらでいい。俺を見る。他が怖くても俺なら大丈夫だろ？」

「……う、うん」

彼女は軽く縦に頷いた。

「よし、ならそれでいい。俺も観客側で見てるから、好きにやってみな」

それだけ言って俺は階段を下りる。

演奏者と観客との境界線だ。

最終チェックも終わったのか、酔っ払いの人が手を挙げた。

「それじゃ始めますねー！ 曲はこの子のバンド、結束バンドのオリジナル曲でーす！！
ほら、弾くよ」

大きな声を上げる事で立ち止まってる人達以外にも注目を集める手法。

あの人路上ライブも慣れてるのか？

数秒間の沈黙。

そして。

二人だけの演奏が始まった。

「マジかよ……」

始まった直後、後藤さんが目を瞑って演奏している事にはすぐ気付いた。それはまだいい。想定通りだし演奏に支障は出ていない。

ただ俺が最初に驚いたのは、ベースのお姉さんの方だった。

『あのバンド』。結束バンドの新曲であり、まだステージで披露すらしていないまさしく俺達しか知らない曲。

なのにあの人、何の迷いもなく弾いてないか……？ 即興だぞあれ。何であんな自信に満ちたままでできるんだよ。アドリブであそこまで弾けるものなのか？

まったく違和感を感じない。むしろ後藤さんのベースに合わせて演奏を支えてるんだ。

最近バンドや楽器について勉強したり店長やP Aさんに教えてもらってるから余計

分かる。あの人、おそらく只者じゃない。凄い人なんだ。

ただの酔っ払いだと思っていた女性は、想像を遥かに超えた実力者だった。

……だが、俺は知っている。実力者があの人だけじゃないという事を。

開ける。目を開けるんだ。今お前を見てる人達は敵なんかじゃない。本当の敵が誰かなんてお前自身が一番分かっているはずだろ。

そんな時だった。

「がんばれ〜！」

近くで後藤さんを応援する声があった。

見ると祭りに来ているのか、浴衣を着ている女性組の一人だった。

「ちよつとあんた、何言ってるの？」

「なんかギターの人、不安そうだったからつい……」

それを聞いて俯いていた後藤さんの顔がハッと上がる。多分、俺だけじゃどうしようもなかったかもしれない。

結局は後藤さんの意思任せで彼女が目を開けるきっかけにはなれなかったかもしれない。

だけど、きつかけはここに広がっていた。

そうだよ、今ここにいる人達は後藤さんの演奏が聴きたくて立ち止まってくれてる人達なんだ。敵なんか初めからない。むしろその逆、後藤さんを応援してくれている人しかいないんだ。自分自身に勝て、壁をぶち破る時は今だぞ。

そして、そして、そして。

彼女の目が開いた。

俺でも分かるくらい演奏の安定度が増す。同時に周囲の視線が一気に後藤さんへ集中した。

彼女は目を開いても基本的には下を向いて演奏している。手元に集中する事でギターに没頭するためだ。

だがここで俺は気付いた。

「……………ん？」

演奏は安定している。お姉さんがペースを合わせてくれるから違和感も感じない。

ただどなあーんかおかしい。俯きがちで他の客は気付いていないが、俺には分かった。

あのピンク……片目しか開けてねえ……。

普段から後藤さんの目を見るから気付けた。恐ろしく分かりにくい開眼、俺でなきや見逃しちゃうね。けどまあ、自分から殻を破った事は素直に評価してやるか。

ギターとベースの余韻を残したまま演奏が終わる。

途端に観客の拍手が連なっていた。人数にして約十一人。後藤さんの演奏のために立ち止まってくれた人達全員の称賛が満遍なく拍手として彼女に送られた。

「ひとりちゃん、良かったよー!」

「は、はい……。あつ、ゆ、ゆうくん……」

「ん。まあ、よく頑張ったな」

片目しか開けてない事は黙っておいてあげよう。

そう簡単に変われたら苦労していないものな。人前で演奏できただけ上出来だ。

「あゝ」

「は、はい……?!」

振り向いたら後藤さんの演奏を見てた浴衣の女性二人組だった。

手には俺が書いた宣伝用の貼り紙を持っている。いつの間にかゼロハンテープ?が

れてたか……。

「すみません。わざわざ拾っていただいて。ほら後藤さん、ライブ見てくれたんだからお礼言わねえと」

「あッ……あ、あり、ありやり……あ、ありがとうございます……！」

「あ、いえいえ。このライブのチケット、買ってもいいですか？」

「二枚くださいっ」

え……ま、マジか……マジでか!!

「おい後藤さん、売れた……。チケット売れたぞ!? あっはははっ！ 売れたんだよっ、後藤さん自身の力で！ すげえじゃん!! やったなあっとうおっ」

後ろに倒れそうになった後藤さんの体を慌てて支える。

危ねえ、もう少しで後頭部強打してたぞ。いやこんなんでは死ぬとは思えないけど。

「あー顔がルーレットになってる。ダメだこりや。えつと、代理ですいません。一枚1500円なんで、3000円をお願いします。ほら後藤さん、自分の手でチケット渡さねえと意味ないぞ」

「……ハッ！ あつ、ああああの、ほ、本当にいいんですかつ。買っていたいで……」

「こら、買ってくれるのに失礼でしょうが」

「だ、だってえ……」

いや気持ちは分からんでもないが。

「初めて路上ライブ見たけど凄く良かったですつ」

「今度のライブも頑張ってくださいね！」

「……はい、頑張りますつ」

今日、初めて後藤さん自身の力でチケットが売れた。

……良い顔してんじゃん。

その後、自転車のお巡りさんが通りがかつて軽く注意されたが補導される事もなく片付けを始めた。

補導されると思ってビビり散らかして顔のパーツ落とした後藤さんを直すのに苦勞したが一応何とかなった。

「そういやチケットあと一枚残ってるんだよな」

「あつうつ、うん……」

「もう辺りは暗いしなあ。しゃあない、二枚売ただけでも大したもんだ。最後の一枚は俺が」

「最後の一枚、私を買ってもいいかな」

「え？」

何……だと……!?

「チケット、それでノルマ達成でしょ？」

「い、いいんですか……!?!」

「俺達としてはありがたい事ですけど……」

「もちろんっ。私、普段新宿拠点にしてるから近いし、このライブハウス知ってるしね
!」

「後藤さん、ほら」

後藤さんの背中を押す。

こんな事つてあるんだなあ。

「あつ、ありがとうございませ……」

「うんつ、鬼ころ五本分以上のライブ、期待してるよ！」

「は、はいっ」

これで真正正銘、後藤さんはチケットノルマ五枚を売る事に成功した。

しかも自分の力だ。正直、全部売れるとは思ってなかった分俺も驚いている。彼女の力が認められたようで、俺が為した訳でもないのに自分の事のように嬉しい気持ちがあつた。

駅前までお姉さんを見送る事になった俺達は駅近くまでやってきた。

「そういえば聞いてませんでしたけど、お姉さんの名前つて何ですか？」

「あれ、言つてなかつたつけ？ 廣井きくり、それが私の名前だよー！」

「きくり姐さん、今日はありがとうございませーッ！」

「え？ 何々どした急に〜？」

「最初はこの酔っ払いがこの野郎つて思つてたんですけど、あなたのベースを聴いたり

チケット買ってくれたりで……後半のきくり姐さんの行動にはずっと助けられっぱなしでした！あと個人的にかっつけえと思っただけで！！」

「ええ？ そんなうそかなあ？ ありがとね〜でへへ〜！」

いやだつて酔っ払いなのを除けばこの人めっちゃ良い人だもん。

きくり姐さん半端ないって。今日知り合っただけの後藤さんのためにわざわざ路上ライブ開いてくれてチケットまで買ってくれるもん。そんなんできひんやん普通。言つてやもう！

「じゃあ私の好感度が高い内に帰ろっかな。ひとりちゃんもまた一緒にライブしようねえ。ばいばいー！」

「またっすー！」

後藤さんも頭を下げ一礼する。

何だかんだ今日はきくり姐さんに助けられた一日だった。あの人がいなかったら今頃俺達はまだチケットを売れずに項垂れていたかもしれない。

「すげえ人だったな、きくり姐さん」

「ゆ、ゆうくん、お姉さんの評価がひっくり返ったね……」

「まあな。あの人のおかげでチケット捌けたし、何よりふとした時の言動のギャップが良か」

「しみずくうくん！」

歩き出そうかとしたところで、話の渦中にいた人がこちらに戻って来ていた。

はやっ。

「え、どうしたんですか？ 何か忘れ物でも」

「チケット買ったからお金無くなっちゃった〜！ 電車賃貸してえ！ ライブ行った時返すから〜！」

「……」

「ゆ、ゆうくん……私が出しても良かったのに……」

「後藤さんが出す必要なんかねえよ。電車賃くらいなら尚更な」

慌てて去っていく女性を見送りながら言う。

「やっぱ酔っ払いは総じてクズだな」

気持ち切り替える。空はもう真っ暗だ。

そろそろ帰るかと思つてたら、パァンッ！ と音がした。

「お、花火か」

今日はみんなこれを見にここまで足を運んでるんだもんな。

そりや人も多い訳だ。……後藤さんも今日は頑張つた。路上ライブを成功させてケツトも売り捌いて、結果で言えば最高だと言えよう。

ならば、何かご褒美くらいはあつたつていいはずだ。

少し考える。過去に比べると成長してるんだし、今なら何とかなるか？

「後藤さん」

「？」

「今ならみんな花火見に行つてるだろうし、人が少ない事を祈りながら祭りの出店でも行つてみるか？」

「っ」

その反応が良いのか悪いのか判断する前に、彼女から返事はすぐだった。

「う、うんっ……!」

ま、そう言えるくらいには成長したって事か。

「じゃあ、美智代さん達にロインしときな。晩飯食って帰るって」

「わ、分かった」

「俺も母さんに言っとくかあ」

と、いつも通りスマホを出してロインを開く。

そう、俺は忘れていたのだ。路上ライブ成功とチケットが売れた事による気分の高揚で記憶から抜け落ちていたのだ。

画面を見た俺は思わずスマホを落としそうになった。

トーク欄。その上と下には奴らの名前があった。

虹夏、喜多と。

その件数およそ80。

ただしメッセージは変わっていて、だけど二人共似たようなものだった。

『優人くん明日会うの楽しみにしてるねー!』

『清水君明日会えるの楽しみにしてるわね〜!』

口の端から血が垂れてきた。

もう笑うしかない。女子のロインを無視したらどうなるか、俺は明日思い知らされるだろう。ハッピーエンドで終われると思ってたのになー！

「後藤さん」

「な、なに？」

「最後の晚餐ってこんな感じなのかな……」

「え、ええ……？」

わりい、おれ死んだ。

23. いきなり家に来られると普通に焦る

突然だけど夏休みの響きって良いよね！

学生の間でしか味わえない最高の長期休み。大人になったらほぼ二度とできない約一カ月超の休みである。今日はそもそも日曜日だけ。

最近バイトやら結束バンドの手伝いとかで色々忙しかったが、今日はもう完全にオフ。夜はいつも通り楽器などの勉強はするとして、昼間と夕方はぐうたら確定の最高期間だ。

登校時とか毎日四時起きでバイトがある日は夜の九時や十時に帰る事も余裕である。つまり学校もバイトもない貴重なオフの日は飯時以外自室に籠ってゲームとアニメ三昧をするしかねえのだった。

いつも朝から夜まで動いてるんだ。オフの日くらい全力で休んだってきつと神様も怒らない。後藤さんの面倒も見なくていいとかまるで夢のようだ……。

よおーし、今日は思いつきりぐうたらしてやるぞー！ 家事もしなくていいとか超楽。もういつそ一生ここで引きこもってたい……は後藤さん化するのでNG。

そんな俺はまだベッドの中だ。冷房をガンガンに付けてちよつと肌寒いところに夏の薄い掛け布団で寝るのが最高に気持ちいい。罪って感じる。

時間はまだ昼前か。よし、あと一時間惰眠を食らう。無駄に寝る事なんてこんな時じゃないとできないしな！

スマホは昨日から事前にサイレントにしておいた。一切の連絡をシャットアウトする事で自分のやりたい事に集中できるので。これで後藤さんからのロインは全て気付かなかったと言いついでできる。対策は完璧だ。

ちなみにこの前虹夏さんと喜多さんのロインをスルーした件については、翌日土下座とお詫びとチケットノルマ達成させた事で何とか許してもらった……はず。やっぱ人って笑顔が一番怖いんだね。

できる限り虹夏さん達のロインはスルーしないと約束し、俺はその日心に恐怖を刻まれた。もう思い出したくないからやめていい？ 寝ていいもう？ 寝るわ。

お休み世界。僕はまた夢の世界へ旅立つよ。

目を瞑りドリムランドに行こうとしたその時だった。スマホではなく、部屋の外から声がした。

「シューミーズークーん！」

「下りりーてーきーてー!」

ぞわりと一気に寒気と身震いがしてベッドからずり落ちた。

え、スマホからじゃないよね? でも今の声、下にいる……? いやいや、そんなまさか。あの人達がここにいる訳……。

もはや恐怖から聞こえる幻聴に違いない。下北から二時間近く離れたこんなところに来るはずないもの。

きつと気のせいだ。何ならむしろこれが夢まである。よし、寝よう。そしたら夢から覚めるかただの幻聴だったって証明できるはず。

「優人く、下にお客さん来てるわよ。ひーちゃんのバンド仲間の子でしょ?」

母からの一声で俺は現実から悪夢へと引き戻されたのだった。

我が家の一階、ベランダにて俺は土下座をしていた。

「すみません、どうか帰っていただけますでしょうか」

「だが断る!」

どうやら二回目の土下座は効果が薄くなるらしい。くそ、寝起きで階段から下りてす

るっと土下座する高校生なんてこの世で俺くらいだぞ。そのくらい許してくれたっていいじゃない!

しかもだが断るの使い方ちよつと違うし、虹夏さんが腕組みしながら言ってもただ強がって言うてるだけの可愛い女の子でしかない。

「さあ、行きましようか清水君♪」

「ぶふつ、やだ、やだよつ! 寝起きジャージの俺をどこに連れて行く気だ!? 今日のは久々のオフだから惰眠を食って夜までぐうたらするって決めたんだっ。たまの休日にどこに連れ出されるかも分からないままこの清水優人がほいほい言う事聞くと思うなよお!」

「優人くん、またあたし達のロイン見てないよね。昨日の内に送ってたんだけど」
「……………」

あ、あるえく? 何かデジャヴ感じるんですけど。やっぱまだ夢の中とかないですか? ないですか。ないですね、はい。

おそろおそろスマホを出してロインを確認してみる。虹夏さんの個人ロインを見たらこう書いてあった。

『前々から言ってたけど明日ぼっちちゃんの家でライブで着るTシャツのデザイン考えるから優人くんも来るんだよ？ ライブには関係ないからって関わらないのはナシだからね？』

「前々から言ってたけど明日ぼっちちゃんの家でライブで着るTシャツのデザイン考えるから優人くんも来るんだよ？ ライブには関係ないからって関わらないのはナシだからね？」

まさかの一言一句違わずセリフを仰っておられる。あれ、天使ってこんな顔だっけ？
慌てて虹夏さんから顔を逸らし、喜多さんのロインを開いた。

『一緒に来るわよね？』

「一緒に来るわよね？」

もう冷や汗しか出てこない。何でなの。短いこの文章にこそシンブルに突き刺してくる怖さってどんなだよ。込められた意味を考察していくだけで泥沼に落ちそうなんだけど。

ここは俺の家。つまりは逃げ場がない。袋のネズミである。

いや諦めるな清水優人。まだ全部の道が途絶えた訳じゃない。道がないなら自分で

作るんだ。こじ開けるんだよ。

恐怖を捨てろ。前を見る。進め、決して立ち止まるな。退けば老いるぞ臆せば死ぬぞ。叫べ!!

「それでも俺は休日を謳歌し」

「いいからさっさと着替えてきなさい」

「ふあい……」

斬月のオッサン……俺の休日は終わりだ……。

ささつと私服に着替えて玄関に向かう。

女子を待たすと……いやあの人達を待たすと何をされるか分かったもんじゃない。髪の設定は……特に目立つ寝癖もないし今日はもういいか。どうせ隣に行くだけだしな。

「お待たせしました……」

「めちやくちや不潔そうな顔するじゃん。でもこれでやつとぼつちちゃんの家に行けるね」

「そうですね！ 横断幕も気になりますし！」

横断幕？ 何の事を言ってるんだろ。そんなもの近くにあったつけ？

「ところでリヨウさんはどうしたんですか？ ないとは思いますが、でも先に行つてるとか？」

「そんな事ある訳ないじゃん。おばあちゃんが今夜峠なんだって。今年で10回目だけだ」

「絶対？ ですよん」

山田だけに今夜が山だつてか。やかましいわ。

「あら？ 清水君今日はいつもより髪の毛ツンツンしてないのね？」

「セツトする時間なかったからな。いつもは寝癖目立たなくするために軽く立たせてるだけだし」

「へえ、そうなのねえ。癖つ毛なのかしら。私ホントはストレートだからちよつと面白いかもっ」

あの、靴履こうと座ってる時に髪触るのやめてもらつていいですか。むず痒さ半端ないんで。

というか隣に行くだけなら靴じゃなくてサンダルでもいいじゃん。いやもう靴下履いてるしいいけど。

「じゃあぼっちちゃん家行こー！」

「おー！」

そんな張り切って行くようなとこじゃないと思うんだが。ましてや後藤さんの家だし。

外に出ると灼熱が全身覆ってくるような感覚に襲われた。あ、あちい……すぐ隣とはいえ真夏マジ地獄すぎん？ たった数秒の距離だけでもやばい。こんなん後藤さんじゃなくても溶けるわ。

快晴すぎるのも悩みどころだ。太陽お前もたまには有給取ればカ野郎。

玄関の日陰から出たくねえ〜と思いつつながらも何百回と往復した距離を歩いていく。

「あつ、でね優人くん。ぼっちちゃんの家って旅館なの？」

「そんな訳ないでしょ。こっから見ても分かる通り普通の一軒家ですよ」

「じゃあアレは何なのかしら？」

「アレってどれのこと」

足が止まった。ついでに俺の中の時間も止まった。決してザ・ワールドを発動した訳ではない。

暑いのに関わらず立ち止まった理由は目の前にある。

見慣れた家に見慣れない横断幕が掲げてあったのだ。

こう書かれている。

『歓迎！ 結束バンド御一行様！ 癒しのひと時を皆様……』
と。

まるで本当に旅館に招待されたみたいになっている。

いつの間にあんなのあった？ 昨日まではなかったはず。というかどうかやって掲げた。梯子でも使ったのか？

こんなのを堂々と飾っているとか正気じゃない。え、こんな家の中に俺達入るの？
いつもはない謎のプレッシャーが凄いんだけど。

「よく分かんないけどとりあえず行ってみよー！」

マジか、何の躊躇いもなくインターホン押したぞこの人。何回も通ってる俺でさえ逡巡したのに。

「ぼっちちゃん来たよー!」

「こんにちは〜!」

『あつ、い、今開けます……!』

何か嫌な予感するのは俺だけなんですかね。変な横断幕掲げるくらいだし多少の警戒はしといた方が良いか。

無警戒でドアが開くのを待っている虹夏さんと喜多さんに対し、俺は少しだけ身構える。実は開けられた家の奥は豪華な飾り付けがされており、いかにもパーティーしますよ的な雰囲気醸し出しながら歓迎してくるんじゃないだろうな。

変な推測をしてる間にドアが開かれた。

その一秒が俺にはスローモーションに見え、徐々に姿が露わになる問題の少女に警戒を向ける。

意外にも家の中は暗く、推測していたような明るい惨状は見受けられなかった。

しかし友人を出迎えるにはあまりにも暗くて、彼女以外の家族がいるようにも見えない。日曜だしもしかしたら出掛けているのかもしれない。さて、問題は彼女だ。

ピンクの少女は星型の光るサンングラスを掛け、世界で一番有名な配管工の弟のような付け髭を装備し、クラッカー持って待機していたのだ。

呆然としている虹夏さん達と警戒していた俺を見据えて、待ち構えていたやべー女はシナリオ通りに動く人形のようにパンツ！ とクラツカーを鳴らした。

「いっいえええええええええええええええええい！ うえ、うえうえウエルカあああああ
ああああム！」

「……………」
今度こそ俺達の時間は止まった。どうやらザ・ワールドの使い手は彼女だったようだ。

これは、あれだ。俺以外で家に来るような人物がいないため、初めての友人を出迎えるようにしたが出迎え方が分からず、あえてパーティーみたいに盛り上げて出迎える事によってウケを狙ってきたのだろうと思う。哀れとはこの事だ。

俺達の時間が止まっているのをどう思ってるか知らんが、彼女は何故か二発目のクラツカーを鳴らした。

パンツ！ と鳴って虹夏さん達の意識が元に戻る。危ない危ない、クラツカーの音か。後藤さんが心肺破裂したかと思った。

静寂に包まれる家の中。開いたドアの外からはセミの鳴き声が嫌でも入ってくる。

俺は虹夏さんと喜多さんの手を引いて外に出る。

そして、そつとドアを閉じた。

この世界には見てはいけないものだってあるんだなあ。俺はできるだけ優しい表情を浮かべて二人に話す。

「虹夏さん、喜多さん、デザインなんですけど俺ん家でやります?」

「まつ、ままま待ってゆうくうん……!」

勢い良くドアを開けてピンクおバカこと後藤さんが俺目掛けて飛び込んできた。

24. 男子は思春期ポイントを突かれると弱い

猛暑の中ダイブして引っ付いてきた後藤さんを何とか引きはがし、再び玄関の中へ入る。

「後藤さん、これお土産。ご家族で召し上がってねっ」

「あっえっ、あ、ありがとうございます……わあっ……!?!」

「お、どんなのどんなの? 後藤さん俺も見せて。くあっ!?!」

「な、何だこの紙袋から物理的に発せられているオシヤレの光は!?! 眩しすぎて中身が見えん!」

「だんだん陽キャ耐性無くなってきてるのか俺。それとも単純に喜多さんの陽キャ力が強すぎるだけなのか。まさか陽キャ力53万ある?」

「もう、何で清水君がお土産覗くのよっ」

「や、だって俺週に三〜四回はこの家来てるし晩ご飯とかも親子共々お世話になってる

からな。もちろん食材食費は半分出してし手伝ったりもしてる。そもそも親同士が仲良いんだよ。つまり、ほぼ第二の家族ポジションの俺にも喜多さんのお土産を召し上がる権利がある！ はい証明完了QED！」

「ふくん？ そうなのね。でもこれは後藤さんのご家族分しかないから清水君の分はいわよ？」

「なん……だと……!? おい後藤さん、眩しくて何入ってるか分からんけど半分こしよう。それが平和への打開策だ！」

「えっあつ」

何でそこで即答しない。もしや自分一人で食べようとしているな？ ずるいぞ、俺だって貴重な休暇を強制的に連れ出されたんだからちよつとくらいご褒美があったっていいじゃない！

オシヤレなよく分からないものでも食べたい！ だってオシヤレなんだもの！

「清水君の分はまた今度ね？」

「マジで？ じゃああの光ってるやつがいい！ 正体不明感が気になる！」

「光ってる……? うん、じゃあ同じの買ってくるから、今日のは食べちゃダメよ？」

「了解した。おい一日巡査部長、さっさと姫達を案内するんだ。上か？ 上だな。上だ

ろ」

「あつうん……」

もたもたしないで早くご案内するんだよお！ その謎のタスキは飾りかあ!?

何で一日巡査部長なんだよちよつと下の階級じゃねえか。そこでまで自己評価の低さを表さんでいいから。

「そうだ。私映画も持ってきたんです！」

「ここら、ライブのTシャツデザイン考えるって言ったでしょ？ みんなバラバラの服よりお揃いの方が一体感というかバンド感出るしね」

ちなみに映画のジャンルによつては巡査部長死にますけど大丈夫ですかね。割とすぐ殉職しますよその人。

案内されたのは俺にとつてはもはや行き慣れた後藤さんの部屋。さつき靴を見たけどやっぱり美智代さん達は出掛けてるようだ。可愛い妖精ちゃんはどこかにいるっぽいけど。

「今日あたし達は遊びに来たんじゃないんだから。いいね？」

「こ、こつちです……」

「ん？」

後藤さん？ 何かただでさえない声の覇気が余計無くなってる気がするんだが、どうしたんだ。

……あ、そういや部屋中に貼り散らかしてたアー写はどこかに仕舞ったのか？ 一回アレを見た時はいいよ精神病院行かせるか迷ったけど、全部剥がさせたし大丈夫のはず。

その前に、だった。

襖の隙間からカラフルな光が漏れているのが見えた。もう嫌な予感というより確信しかねえ。こいつ何かやってるわ。

いつその事襖を勢いよく開けて中を確認する。部屋の主の趣味とは真逆の光景が広がっていた。

暗がりの部屋を照らすミラーボール、カラフルな風船達、壁に貼られたPARTY P O P L E Y E A H のシール、誰だこいつらと言いたくなるナイトプールのポスター、『ようこそ！ 後藤家へ』と書かれたミニ横断幕。

なんかもう、なんかもう可哀想に思えてしょうがなかった。なになんなのこの子も。

幼馴染の俺以外で初めて友達が来たから盛大に出迎えたかったんだろうけどさ。た

だ、玄関でも思ったが方向性がぶつ飛んでる。普通の迎え方が分からなくてただ豪華にすればいいと思ってるところがやばい。

これじゃ誰かの誕生会みたいになってるじゃん。同性の友達が来て完全に浮かれますやん。

余程嬉しかったんだろうけど……悲しいなあ。今日は遊ぶんじゃないでなくてTシャツでザインするだけだもんなあ。そりゃ声にも覇気なくなるわ。

「あつえつ、全部片づけますね……」

おもむろに針を取り出して風船を次々と割っていく一日巡査部長。

ねえちよつと見てらんないよ！　あまりにも背中が悲しすぎるもの！　自分だけ浮かれて私ってバカみたいとか思ってるようなオーラ漂わせてるもの！

「(虹夏さん喜多さんフォロー！　フォロー早く!!)」

「えい!?　ああえつと、やつぱちよつとは遊ぼうかなあ!？」

「そ、そうですね！　賛成です！」

よしナイズだ二人共。これで少しは後藤さんの心も軽くなるはず。

と思ったけど背中が黒いままだった。あれ、ピンクジャージじゃなかったっけ。何で部屋

も暗いのにあの背中をもつと闇のように黒いの。

「よくしよしよし、友達のために飾り付けよく頑張ったなあ。初めての友達だもんな、偉いぞ。後藤さんは偉い。そう、生きてて偉い！ いいですか虹夏さんッ！ 後藤さんは生きてるだけで偉いんですよッッッ!!」

「何急にどうしたの!? 優人くんもたまによく分からなくなる時あるんだけど!」

ちくしように俺だつて何言ってるかよく分かんねえよ! ただこの子のメンタルケアするこつちの身にもなつてほしい。

繊細なんて言葉すら足らないほど豆腐メンタルなんだから。いいや息吹きかけるだけで消え去る灯火みたいなものなんだよ。ヒトカゲの尻尾の火みたいに消えたら死んじゃう訳。分かる?

小さな子供をあやすように頭を撫でると多少は背中が晴れたのか、後藤さんももうやく顔を上げた。

ははっ、部屋暗いしサングラスに付け髭してるからどんな表情してるか一切分かんねえや!

「じゃ、じゃあ飲み物取ってくるね……。あっ楽にしてください……」

後藤さんはスライドしたまま部屋を出ていった。ん？ スライドしたまま……？
何を言ってるんだ俺は？

「それにしても凄い飾り付けだね。優人くん知ってた？」

「元々オフだったんだから知る訳ないでしょ。後藤さんがこんなパリピグッズ買った事がまず驚きです。いったい何回死んでは生き返るのを繰り返した事やら」

多分置き配だとは思うけど、こんなミラーボールとか検索するだけで消滅しかねないぞあの子。

「でもギターとかエフェクター何もありませんねえ」

「だねえ」

言われてみれば確かに。いやおそらく押入れの中に入れてあるんだろうけど。

「私、もう少しロックな感じの部屋してると思ってた——」

「喜多さん？ どうし……ああ、これか」

急に黙るから何かと思つたら盛り塩とお札を見ていた。

普段明るい部屋で見てるから何も思わんけど、暗いところで見たらやっぱり雰囲気ある

な。和室だしまるでお化け屋敷だ。

「これは……ロック?」

「うっ……め、めちやくちやロックしてるね……」

ええ、これはロック^封してますねえ。何かを封じ込めてるか絶対に見るなという暗示か。

俺は理由知ってるけどお二人には想像力でも膨らませておいてもらおう。ホラーなのも夏の風物詩である。

「ほ、他にはロックなどこあるかな……? あいつたあ!」

暗いせいで虹夏さんが何かにぶつかった音がした。

そこからバサリツと大量に紙のような物が落ちる。あ、それつてもしかして。

「うえっ!」

「何でアー写がこんなにたくさん……?」

呪いのアー写およそ百枚以上のご降臨である。

虹夏さんが驚く理由も喜多さんが疑問に思う理由も非常に理解できる。何せ俺も初

めて見た時はさすがにドン引きした。だって部屋中くまなくアー写しかないんだよ？
異様な光景で異世界転生したかと思った。

アー写が落ちたのに連鎖して他の物も床に落ち、その振動で押入れの中にある物まで
ドガガンツと落下し激しく振動した。

貼ってあったナイトプールのポスターは貼り方が甘かったのか振動で剥がれ落ちる。
その壁には大量のお札が何重にも貼られていた。

「ひいいうっ!?!」

「え、ちよ、どうしたんすかいきなり」

虹夏さんと喜多さんが俺の両腕にしがみついてきた。

「あ、あたし怖いのも無理なんだってー!?!」

「清水君この部屋何回も来るんですよ! どうにかしてよお!」

ちよつと涙目になってる虹夏さん。マジで無理なのか。

あと喜多さん、どうにかできるならそうしてます。できないからお札とか貼ってある
まんまなんです。あと多分機能してない。

「でっかいのもあるよ」

突然背後から可愛らしい声が聞こえた。

「ひああああああっ!?!」

「いだだだだだだっ!?! ちよ……う、うでっ、腕が、俺の腕があっ!?!」

ガチビビりしてる人の力強すぎない!?! 普通に二の腕がもがれるうううううううううううううっ!?!

やっばお化け屋敷とかでいきなりしがみ付いてくる女子とかいるけどあれ絶対怖がつてないよ。俺には分かる。だつてガチじゃないもの。本気なら筋肉潰されるかと思うくらい痛い!!

「ふたつ、二人共、あれ見て! 幽霊とかじゃないからっ! よく見てそして俺の腕を離してえ!?!」

「……え?」

「あのね、この写真部屋にいっぱい貼ってたんだよ! すっごく気に入った写真なんだつて! でもお母さんに目がチカチカするから剥がしなさいつて言われてね、ゆーくんにも怒られたんだよ! あとそっちのお札はお姉ちゃんがお化けに憑りつかれたか

ら貼つてあるんだー！ 以上、説明おーしまい！」

暗い部屋の中、ミラーボールに照らされた妖精とオトモがいた。

「もしかして……後藤さんの妹？」

「はいっ、初めまして！ 後藤ふたりです！ 犬はジミヘン」

ようやく虹夏さん達から解放される。大丈夫？ 俺の腕残ってる？

「ゆーくんターツクル！」

「おっと、今日も元気だなふーちゃんは」

「あれ？ ゆーくんいつもの高い高いは？」

「ごめんな、今お兄ちゃん腕の感覚ないんだ。もうちよつと後でならできると思うよー」

「え、優人くん腕大丈夫？ ほんとにお化けとかじゃないんだよね？」

「怖いわ……」

おいもしかして無自覚だったのか貴様ら。人の腕をこんなにしておいて！

という冗談はここまですておいて、まず部屋の電気を点けないと。ミラーボールいい加減鬱陶しいわ。パリピはこんなので楽しい気分になれるのか。頭ハッピーセットなのかな。

「ふーちゃんはジミヘンと遊んでたのか?」

「うんっ、今日はお姉ちゃんがお友達連れてくるからお母さん達はお買い物行つたんだけどね。ふたりはどんな人が来るか気になったから隠れてたの! どう、ビックリした!?!」

「うん、主にその黄色と赤のお姉さんがねあだつ」

「色で言うな」

虹夏さん最近俺へのツツコミ強くなつてない? いや、脳天チョップは店長譲りの可能性あるな。

といつても事実を言つたまでだよ俺は、だつて黄色と赤じゃん。パプリカじゃん。

「ふーちゃん、この黄色いお姉さんが伊地知虹夏さんつて言うんだ。別名は天使だよ」

「天使つて何!?! ……まあいいや。虹夏つて呼んでいいからね、ふたりちゃん!」

「うん、虹夏ちゃん!」

良い返事だぞ小さな妖精さんや。

待てよ、よく考えたら天使と妖精のコラボつて普通に凄い事なんじゃ……? どうし

よう、こつそり写真撮つたらダメかな!? ダメだ、手元にはスマホしかねえ。一眼レフ

家に置いてきちまったちくしよう!!

仕方ないので気を取り直す。

「で、こつちの赤いお姉さんが俺と同じクラスの喜多いk」

瞬間。

バアンツ！　といきなり壁ドンされた。相手はもちろん赤い彗星のキチャアだ。

「し・み・ず・く・ん？」

「な、何でございましょうか……？」

「下の名前はダメって言ったわよね？」

「え？　いや、初耳なん」

「言ったわよね？」

「ひゃい……」

この子最近笑顔で人を殺せるんじゃないかって思えてきたんだけど。壁ドンって普通男女逆じゃないの？

ドキドキ赤面するやつでしょ。今の俺ドキドキはしてるけど顔は青ざめてるよ。色々逆すぎん？

「ふーちゃん、このお姉さんの事は喜多ちゃんって呼ぶようにね……」

「分かった！ ゆーくん震えてる？」

「きつききききききのせいだよ」

「あははっ、ゆーくんお姉ちゃんみたいになってるー！」

それは面白がってるのかバカにしてるのかどっちかな？ 後者の場合は後藤さんが消え去る事になるけど。

「ていうか優人くん、ふたりちゃんの事ふーちゃんって呼ぶんだね？」

電気も点け後藤さん待ちの間に虹夏さんが聞いてきた。

ふーちゃんは後ろから俺に抱き付いてぴよんぴよん跳ねている。ああ、心がびよんぴよんするんじゃないか。

「前まではふたりちゃんって言うってたんですけどね。母さんが昔みたいにくたりちゃんの事もふーちゃんって呼ぶから、俺もそう呼べてふーちゃんに言われたんですよ」

それ以降はずっとふーちゃん呼びである。

確かにふーちゃんの方がこの子の可愛さがより一層輝くので俺もすぐ馴染んだ。ち

なみにジミヘンはジミヘンのままで。

「昔みたいって事は……ぼっちちゃんの事も昔は違う呼び方だったの？」

「……」

少し痛い所を突いてきたな虹夏さん。勘の良い天使は嫌いじゃないよ。

いや、まあ、別に隠す必要も何もないけどさ。こう、思春期特有のアレが発動してしまっただけでしてね。

「ほれほれ、虹夏お姉ちゃんに言ってみなさいなあ。何て呼んでたのー？」

「ああん!? 虹夏お姉ちゃんって何だコルア!? そう呼んでもいいですか!？」

と揶揄う余裕もなくなるほど近づいてくるので俺は折れた。

「昔は、その……ひとりちゃん、とか……ひ、ひーちゃんって……呼んでました……」

「えー!? 何それ!? いいじゃないじゃない、何で今もそう呼んであげないのさー!」

「後藤さんもそっちの方で呼ばれたいと思ってるんじゃない？」

「いや、それはその……再会したのが中三だったし、その歳にもなって再会した途端名前とかひーちゃん呼びできる訳ないでしょ……。こっちだって恥ずかしいんですよ!」

思春期男子の悩み舐めんな！」

くそう、くそう、何だこの辱めは。何で女子に囲まれてこんな話しなきやならんのだ俺は。

早く戻ってこいよ後藤さん。飲み物持ってくるだけで何分かかってんだ。おそらくジューズがいいのかお茶がいいのかでずっと迷ってるんだろうけど、早く来てこの空気をお得意の奇行でぶち壊してくれ。

「へえ、可愛いところあるじゃん優人くん」

「清水君って意外と初心なのね！」

「言っとくけど男に可愛いは褒め言葉にならねえからな!? そこんと勘違いしないように！」

「ゆーくん声うるさーい！」

「ああ〜ごめんなくお兄ちゃんうるさかったな? もうちよつとポリウム抑えるからねえ〜」

「将来親バカ確定だねあの男」

「子供好きってポイント高くありません?」

今誰かバカって言った？

25. 楽しい時間は何故かすぐ過ぎる

「ゆうくんおままごとしよー」

「うーんお兄ちゃん達ちよつとやる事あるからなあ。少しだけならいいぞ」

「分かったー」

ふーちゃんのお願いはほぼ絶対である。何故なら俺が勝手にそう決めた。

こんな可愛い子の言う事とか聞かん訳にはいかない。この子に懐かれるためなら俺は何だつてしてやろうじゃないか！

「じゃあまず喜多ちゃんはお母さん役で、虹夏ちゃんはお姉ちゃん役ね！」

「おつあたしが姉役かあ。あたし自体は妹だしたまにはお姉ちゃん気分でも楽しもうかなー」

「それでふたりがお父さん役でえ、ゆうくんが喜多ちゃんのふりん相手ね！」

「オーケーちよつと待とうかふーちゃん」

胡坐かいてる俺の上にちよこんと乗っていたふーちゃんを前に座らせる。

「何かお兄ちゃんだけ役どころが変なところになってる気がするんだけどどうしてかな？
？」というかどこでそんな言葉覚えたのかな？」

「ドラマでやってたよ！」

「よし、お兄ちゃんちよつとその放送局に苦情を入れてくるからちよつと待っててねー
☆」

「☆じゃないから！ 優人くんステイ！ さすがにそれはまずいって！」

止めるな虹夏さん。この可愛い妖精さんに不倫だなんていかかわしい単語を覚えさせたドラマと放送局には責任取って死んでもらう。

どこだ。ブジテレビか、フイーヴイーエスか。絶対許さんぞ。

「あら、ふたりちゃんがやりたいって言うならやってみるのも良いんじゃないかしら、清水さん？」

「呼び方をさん付けにする事でリアリティー持たせてくれるのはやめろオ!!」

ふーちゃんが余計変な事を覚えたらどうするつもりだ。ただでさえ普段から後藤さんを見て偏った認識を持たないか最大限気にしてるつてのに。

ハッ、この気配は!?

「来たか後藤さん!」

「うあつ!? あつえつ」

「あ、ぼっちちゃん。優人くんホントにぼっちちゃんの気配分かるんだねー」

そりやもう常に黒いオーラ出てるような子だし六割くらいの確率で分かる。後藤さんの周囲だけ少し温度低くなっても全然不思議に思わないよ。

いやそんな事はどうでもよくて。今の俺には後藤さんはある意味救世主だ。一刻でも早くこのおままごとを中止させなければならぬ。

いつものように何か奇行に走ってくればいいのだが、生憎彼女は今トレイを持っていて変な行動を起こせないだろう。

視野を広める。飲み物を持ってくるだけで無駄に時間がかかるような子だ。何かしらやっているに違いない。例えば飲み物とかその辺にツツコミ所があるはず……。

あつたあ!!

「いや麦茶なのにシャンパングラスってなんでやねん!!」

さすが後藤さん。良かれと思ってやった行動を斜め上の方向にぶっ飛ばしていくの

はもはや才能だ。絶対に外ではやらないでほしい。

「あつ、す、少しでも陽キヤ的な気分になれるかなつて……」

「真面目に返してこなくていいから。あと陽キヤもさすがにシャンパングラスで麦茶は飲まないと思うぞ」

多分。俺自体陽キヤじゃないから断言はできないのがちよつと怖いところ。

パリピなら逆にやつてるかもしれない。あいつらに常識とかなないからな。むしろ常識ぶつ壊していくタイプの子もんな(偏見)

「そつそれよりふたり、なな何でここにいるの……?」

「おままごとしたいから」

「おおお姉ちゃん達今から大事なお話あるから、ジミヘンと遊んでてね……?」

よしよく言つたぞ後藤さん! これでドロドロな昼ドラ系おままごとをやらなくて済む!

「えゝつままないゝ! 今からするところだったのにゝ!」

「私はふたりちゃんがいっても大丈夫よ。ね、優人さん?」

「ゆっ……さん……!?!」

「下の名前にする事で余計関係深くなってきた感出すのもやめろオ!! ふーちゃんにはずっと綺麗な心のままでいてもらうんだ!」

「過保護だねー」

お姉ちゃんがこれだからね。せめてふーちゃんには健全に真っ直ぐ育ててもらわないと。

お友達たくさん作って元気に走り回るのを見守るのが俺の役目なのだ。今そう決めた。代わりに後藤さんはその光景を見て押入れに引きこもる。

「ととつとにかく……お願いします! ジミヘンと遊んでてくださいっ!」

「ええ〜」

うわあ、バンド仲間の前で妹にマジ土下座してる……。さすがにそこまでしてほしいとは思ってなかったんだけどなあ。

そしてそれを見てもまったく動じず全然不満を表すふーちゃんのメンタルも中々に凄い。素直で直球な子供というのは、裏を返せば無邪気で遠慮なく人の心を踏み荒らす暴君なのだ。

しかしそこはやはり姉。土下座でも通じない事は想定していたのかすぐふーちゃん

の近くまで寄って耳打ちしだした。

「つー！ もうつしようがないなあ〜！」

何かを聞いたふーちゃんと言葉とは裏腹に喜んだ様子で部屋を出ていく。当然のよう
うにジミヘンも後ろに着いて行つた。

おそらく買収したなこれ。

「アイスか何かで釣つたな？」

「わっ私の分のアイスだから、大丈夫……」

自分の尊厳とアイスを犠牲にしてまで出ていってもらいたかつたのか……。

0か100でしか行動できんのかこの巡査部長。まあ俺の目的も同じだったし達成
されたので別に何でもいいや。

今度アイスでも買ってやろう。

「じゃあ、この部屋も平和になった事だし本題にでも入りますか」

気を取り直して俺達はテーブルを囲んだ。

「それじゃあTシャツのデザイン決めよう！ みんなはこれに自由に描いてね！」

そう言つて虹夏さんが取り出したのは基となるTシャツが描かれたタブレットとお絵かき帳である。

お絵かき帳を三冊それぞれ後藤さん、喜多さん、俺に渡された。

「……え、俺も描くんですか？」

「そだよ？」

「支えるつて言つてもこういうデザインとか考えるのはさすがに俺の仕事じゃないような気が」

「ん〜？」

「何でもないです」

よし、拒否権はなさそうだ。もはや何も言うまい。

仕方なく色鉛筆を手取る。色鉛筆とか持つの何年振りだろう。

「無難にロゴTでも良いんだけど、そのままグッズにして物販で売りたいと思つてるし

！ みんなからそれ以上に良い案が出たら採用しますのでよろしくねー！」
意外と貪欲だなこの人。いやバンドの活動資金を貯めるなら当然とすべきか？

「よし、後藤さん、清水君、頑張りましたよ！」

「はっはい」

「デザインねえ」

俺の分のお絵かき帳まで用意してたって事は最初から俺も面子に入れられてた訳ね。
どうりで先にこっちの家に来た訳だ。デザインなんてそう簡単に出るものじゃない
だろうし、考える人数は少しでも多い方がいいという事だろう。

だとしたら今夜が山田はマジで何してんだ。どっかで音楽聴いたり街を散策して
るんじゃないだろうな。

「ぼっちちゃんずつとその装備なんだね……」

今までずつと俺しか家に来る事なかったからはっちゃけたいんです。そつとしい
てやってくださいえ。

ほんとどこで手に入れたんだその装備。絶対今日以外で使い道ないだろ。

それにしてもTシャツのデザインか。こういうのって絵心とかない俺でもできんの

かな？

センスとか問われて難しそうなイメージしかない。虹夏さんも言ってた通り普通にロゴTじゃダメなの。喜多さんも後藤さんも言われた通り各々のデザインに取り掛かっている。

え、そんなすぐ描きにいけるもんなの？ 俺の想像力が乏しいだけ？ 男子と女子とでは差があつたりとか？

アニメとかで培った想像力を働かすんだ。常にイメージするのは最強の自分だぞ。

「後藤さんもつと顔上げて。目悪くなんぞ」

「あつうん……」

お絵かき帳と顔の距離が近すぎる後藤さんに軽く言いつつ、自分は自分で考える。

どうしよう、とりあえずでいいから俺も何か描かねば……。とにかくそれっぽいのを描けば妥協案くらいにはなるよな？

「できました〜！」

「お、どんなのどんなの？」

え、早くない？

「コンセプトは友情努力勝利で〜す！」

「体育祭で見るやつ！」

「ジャンプじゃねえか」

喜多さんが描き上げたデザインはピンク一面のTシャツに『皆で掴め！ 勝利の華を

！ 結末バンド』やらガンバレ、優勝とか描かれている。にっこりマークとか描いているのがもう陽キャ感凄い。いったい何に優勝するつもりなんだろう。フェスか？

「え〜可愛くないですか？」

「待って、優勝って何？ ライブにそんな概念ないけど……」

「んっとお、ノリです！」

「ノリ？」

「だってこういうの着たらみんなの心が一つになる気がしますね！? ね、清水君！」

「はいはい、そげぶそげぶ」

「そげぶって何なの!?!」

喜多さんの暴走を止めるにはこつちがボケて相手にツツコミをさせるのが手っ取り

早い。

陽キャへの対抗の仕方はこれくらいしか分からねえ。俺にはこのフォローが限界です虹夏さん。

「ていうかぼっちちゃんがぶるぶる痙攣してる!？」

「体育祭に良い思い出ないでしょうからね。嫌な記憶ばかりなんです。俺は見てないけど」

「そつか。優人くとぼっちちゃんが再会した時はもう体育祭終わってたもんね」

「はい。それより虹夏さん、後藤さんにもたれかかるとマッサージ機みたいで面白いですよ、ほら」

「遠慮しとく……」

後藤式マッサージ結構効くから良いのに。たまに体育祭の話してマッサージの代わりになってもらうのもありな気がしてきた。

ん？ あれ、何だかもたれてる背中が沈んできた……う？

「後藤さん、溶けちゃいましたね」

「今日暑いからね」

「ぎゃあ!？」 背中に後藤さんの泥が染み付いてる!？ これ洗濯で取れんのか!？」

「清水君も時々バカになるわよね」

誰かまたバカって言ったな!?

まずい、ピンク色の泥つてどうすりや取れるんだ。ていうか泥でいいのかこれ。ペンキみたいたいにも見えるけど。

幸い上着にしか付いてないから脱げば何とかかなるかと思っていたら、突然襖が開いた。

「ほら、本当にいるでしょ?」

ふーちゃんが美智代さんと直樹さんを連れてきた。

「あ、こんにちは〜!」

「お邪魔してます〜!」

本当にいるって、まさか後藤さん信じられていなかったのか……。

時刻は夕方の五時半。

俺達は先ほどと同じように後藤さんの部屋に戻ってきていた。

結局あの後、後藤さんが初の友人を連れてきたという事で急遽友達記念日パーティーが開かれたのだ。

ピザやらから揚げやらと後藤さんの好物ばかりが並べられた昼飯だったり、美智代さん達が本当に虹夏さん達が友達なのか再確認してきたりした。娘を何だと思ってるんだこの人達は。

あとはトークに花を咲かせつつ、喜多さんが持ってきた青春胸キュン映画を観たり後藤さんが前もって練習してたらしいツイスターゲームや大富豪などをやって盛大に時間を潰したのだった。

そう、盛大に時間を使い潰したのである。本来の目的を忘れて。

「結局映画観てゲームして遊び倒してしまった……」

「ツイスターと大富豪楽しかったですね!」

「楽しかったよ? 凄く楽しかった! けど……」

「まあまだちょっと時間残ってるしデザインの続きやりましょうよ」

楽しいとすぐ時間経つって言うものね。それだけ楽しんでくれたなら後藤さんもきつと悪い気はしないだろう。

今は青春ラブコメ映画のせいで死にそうになってるけど。

「清水君もツイスターやれば良かったのに」

「あなた様は意味を分かって仰っておられやがりますのでしょいか？ 俺以外全員女子の場でツイスターやれる男がいたらそれはもう超の付くド変態か男好きだよ。役得精神を隠してやったとしても女子には下心満載なのバレて学校生活終了まで目に見えてるっての」

「別に私はそんな事思っていないわよ？ 普通に一緒にやりたいから言ってるだけで。ねえ伊地知先輩？」

「そうそう、それに優人くんになんか度胸あると思ってるないしねー」

あれ？ 何か急に俺の事バカにしてないこの二人？ これ男として全然見られてない？

包むならもうちよつとオブラートに包んで言ってくれないですかね。俺にだって一応男としてのプライドが一欠けくらいあるんですよ！

「ふーちゃんとならいくらでもやれるんだけどなあ」

「え……優人くんつてもしかして、ロリコン……!?!」

「んな訳あるかあ!! ただ純粋に何も考えず遊べるのがふーちゃんつてだけですう!

妖精さんと遊ぶ時は何も考える必要がないからですう!!」

「じゃあやつぱり私達とやつたら色々考えちゃうつて事?」

「……………」

沈黙は肯定なのに思いつきり黙ってしまった俺。ここから入れる保険つてありませんかね。

演者でもない俺にアドリブはまだ早かったようです。

いやだつてほら、みんな顔面偏差値高いやん。

さすがに何も思わないのは無理があるやん。俺かて高校一年の思春期男子なんですよ。そら下心ないとか断言できませんて。

男一人と女子三人（一人は除外とする）では分が悪すぎる。勝てる見込みはゼロだ。

しかも相手の一人は髪赤いから超陽キャ人ゴツド。俺は死ぬ。

「ま、まあ一応モラルというか常識というか、踏み止まるべき一線を超えなかつた俺は紳士つて事。これ褒めるところだから」

「ふーん、そういうのよく分かんないや」

「私達を思いやってやらなかったって事？」

「いや、完全に自分の保身だけだ」

「自分の事しか考えてない!？」

だつてもし喜多さんとかとツイスターゲームをやつたつてクラスの男子にバレたら俺はどうなると思う？ 俺もクラスで孤立してしまふぞ。

後藤さんとお揃いになつちやうぞ。こんなお揃い世界一嫌なんですけど。

喜多さんの事だからどこでうっかり話したりSNSで呟くか分からんからな。

今の若者は何でもかんでもすぐあつた事を呟いたりするし。そこんとこ全然呟く事がない俺を見習つてほしい。いや呟く事ないつてイベントがないとかじゃないからね。あつても軽率にバレるような事は言わないつてだけだから。ホントだから！

まあしかし女子だけのツイスターゲームを眺めるつても中々面白かった。

外野で得する事もあるんだね。これが眼福というやつなんだつて思ったよ。女子同士のくんずほぐれつ（健全）を見てても退屈しなかつたのでとても良い時間でした。

「ふう、さつきも言いましたけど不毛な話はここまでにしてさつきとデザインの続きしましよう」

「ハッ！ そうだった！ もうあんま時間ないんだ！ 急いでやろう！」

よし、虹夏さんがまともで良かった。

喜多さんから謎の視線を感じるが気付かない振りだ。

後藤さんの相手でもしよう。

「ほれ後藤さん、そろそろ戻ってこい」

「……んはっ!?!」

んはって。

26. おふぎげ演技も本気でやれば立派な現実となる

ライブTシャツのデザインを決めるといふ本来の目的に取り掛かっていた俺達の元に虹夏さんのタブレットから通知音が鳴った。

「お、リヨウからもたくさんデザイン案が届いたよ！」

「見たいです！ 見せてください！」

「意外とちゃんと考えてたんだなあの人」

絶対街ブラしてるかと思ってたわ。

さすがにリヨウさんも結束バンドの事を思ってくれてたんだね。心の中で謝っておこう。

「ん？ な、何これ？」

「カレー？」

「どういう意味があるんだ……？？」

リヨウさんから送られてきた画像を見ると、Tシャツの真ん中に美味しそうなカレーの写真が貼られていた。

やけにリアルな画像だな。リヨウさんの事だ、きつと何か深い意味があるかもしれない。えつと……そう、結束バンドのメンバーはみんなカレーのルーとライスのように相性が良いとか。

いや、それでも割とダサいか。

虹夏さんが次の画像を出す。

「んん?」

「今度はお寿司ですね」

「寿司……寿司……」

何だ、酢飯とネタの相性の良さがまるでメンバーを表しているとかか? いやこれじゃカレーと一緒に一緒だな。

俺には分からない深い意味をリヨウさんはカレーと寿司に見出している……?

虹夏さんは頭上に? マークをポンポン出しながら画面をスライドした。

何故かデザインTの画像ではなく風に揺られて干されているTシャツと共に、こう書かれている。

『晩飯、どつちがいいかな?』

「自分で考え……優人くんが般若じゃなくて不動明王みたいな顔してる!」

「怒りのレベルで顔が変化するんだわ!」

あんのベースリスト……こつちがどんな意味か探ってたつてのにただ晩飯悩んでただけだと……?

虹夏さんの手を煩わせやがって……次会ったら小一時間ほど問い詰めてやる。やっぱり街ブラしてたんじゃないか。

「あつあの……!」

体ごと体型変化してやろうかと思つてたらしいの間にか後藤さんが復活していた。

しかもお絵かき帳を手を持っているという事はデザインを終えたのだろう。確か遊ぶ前も真剣に描いてたし完成間近だったのかね。

「わ、私のデザインも見てくだされば、と……」

自分の家だからかいつもより積極的だな。

星型サンングラスに付け髭を再び装着し、後藤さんは立ち上がって閉じていたお絵かき

帳を開く。

それは赤いTシャツに多数のファスナーがあり、中学生男子が好んで着そうな謎の英語フロント、裾の辺りは破かれ、あとはなんか鎖があった。

豪華に2ページ分使って描かれた後藤さん作のデザインを見て、咄嗟に口から出たのは素直な言葉だった。

「ど、どうでしょう？ おしやれすぎますかね……？」

「ダっつっつっつっつっつっつっつっつむがつ!？」

思わず大声で言いかけていた所を慌てた虹夏さんに口を手で閉ざされる。

サンキュー虹夏さん、もう少しで本音が出て後藤さんに止めを刺すところだった。にしても、にしてもだ。何で女子高生が中学生男子の好みそうな服を的確に選出してるんだ。

右腕まで変形してた俺の腕もあまりのダサさに元の形に戻っている。

しかもアレを本気でかつこいいとかおしやれと思ってるのがもうヤバイ。思考回路男子中学生じゃん。

「これだとライブ中、服の方に目が行っちゃいますよね……」

「うん、色んな意味で」

それが目的か。おしゃれな服にみんな視線を奪われて自分を見ていなければまだ楽に弾けると思ってるんだろうな。

逆だぞ。むしろ奇異な目で見られると思うよ。今時アレ着る子がいるのとかなくなっちゃうからね。

ちなみに俺は中学生の時にあんな派手な服は着た事ない。家事と夕飯などの買い物ばかりで服を買いに行く事なんてほほなかったからだ。

いつも父さんがたまに買ってくるような無地のシンブルな服ばかりだった。今となってそれが当たり前だと思えてた事に感謝である。女子目線では普通にナシっぽく思われてそうだし。

「その大量のフアスナーと鎖は何に使うの？」

「あつフアスナーはピック入れで、鎖はギターストラップにもなります」

「意外と実用的！」

「ピック入れそんないらんだろ」

フアスナーありすぎたら洗いにくいので却下。俺じゃなくて美智代さんに迷惑かか
るだろそれ。

そんな事は許しません。せめてもつと少なくしなさい。あと謎フォントもやめなさい。やめて。

「へへへっへへっへへっ、じゃあこれが採用という事でよろしいでしょうか？　ふへっ、へひっ……」

「それは……どうかしら……」

なんつー気持ちの悪い動きをしてるんだこのピンク。人間のできるウネウネの動きを超えてるぞ。

めっちゃくちや自信作だからって採用される前提で進めるの最高に調子乗ってるな。悪いけど100パーないよ。

すると後藤さんのセンスに疑問を持ち始めた虹夏さんがおずおずと口を開いた。

「も、もしかして私服もこんな感じなの？」

「あつ、服はお母さんが買ってきてくれるから違います……」

「そうなの？」

「いつ一度しか、着た事ないですけど……好みじゃない、から……」

途端に座り込んで俯く後藤さん。長い前髪の隙間からたまにチラチラとこちらを見

てくるが、すぐ目を逸らす。俺に何を求めてるんだろう。微かに顔も赤いような気もする。

助けを求める目線とは、違う？ 何だ、後藤さんとのアイコンタクトは割と自信あるけどこれに関しては分からない。というかサングラスが邪魔すぎる。外せ、それじゃできるフォローもできないでしょうが。

と、必死に何を訴えているか考えている俺の隣で虹夏さんのアホ毛がピンと跳ねた。

「え〜！ 見てみたい！」

「私もジャージ以外の後藤さん見た事ないです！」

「ね〜、お願い！ ちょっと着てみて〜！」

虹夏さん何か猫耳生えてません？ 獲物見つけた猫みたいになってるけど。

喜多さんもノリノリになってるし。なるほど、後藤さんはこれを予期して俺に助けを求めようとしてたのか。サングラスのせいで上手くは分からなかったが多分そう。いや分かんない。

「えっ……」

「「お願いおねが〜い！」」

「あつうつ……ゆ、ゆうくん……た、助け」

「お願いお願いお願いお願いお願いおねがうい！」

「……わ、分かりました……」

【悲報】後藤ひとり、押しに押されて折れる。

「よおーし！　じゃああたし達外で待つてるから着替えてね！　終わったら襖をノックして！　さあ行くよ、喜多ちゃん優人くん！」

「はい！」

「後藤さん、まあ……どんまい」

襖を閉める瞬間、部屋の中にはこちらに手を伸ばそうとしていた彼女の最期の姿が映った。

今度は霧散しない事を祈っておこう。

壁があると言ってもたつたの襖一枚だ。防音もくそもないので着替える音が中から普通に聞こえてくるのを避けるため、俺は階段の方へ移動していた。もちろん虹夏さんと喜多さんも。

てかちやんと私服を着れるのかあの子。さすがに途中で着方分からなくなるとかないよな。

「そーいやさ、ぼっちちゃん一回だけ私服着たって言ってたけど、優人くんはそれ見た事あるの？」

階段で座っている虹夏さんからの質問だった。

別に隠す必要もないしいいか。

「ありますよ。中三の時、たった一回の私服をいきなり俺に見せてきたのが最初で最後です」

「へーそうなんだ！ 何で急に見せたのかな？」

「さあ？ 突然部屋に呼ばれて行ったら中に私服着てる後藤さんがいたんですよ。いつもジャージだから驚いて俺も十秒くらい呆然としてましたね」

いつも通りギターでも弾いてくれるんだと思ってたらあれだもんな。さすがの俺もリアクションするのに時間掛かってしまったのを覚えている。

「清水君に見てほしかったとか？」

「どうだかねえ。確か階段上る前に美智代さんと会って、そんな時に感想言っただけであげてねって言われたの覚えてるから……多分美智代さんが買った服の意見が欲しかったと

かそんななんだったんじゃねえかな」

「で、実際ぼつちちゃんの服装はどうだったの!？」

目をキラキラさせて聞いてくる虹夏さん。そんなに気になんの。いや、まあ普段からずつとジャージだし気にもなるか。

ただ、百聞は一見に如かずだ。俺の言葉よりも本物を見てもらった方が手っ取り早い。

「……ま、見りや分かりますよ」

しかし、美智代さんの趣味がまだ以前と同じなら、きつと甘い系の服なんだろうなあ。ふーちゃんの私服とか見てもそんな変わってるようには見えないし、後藤さんの好みからは程遠いだろう。何せ彼女の好みが男子中学生のようなアレならば真逆にも程がある。

「えーちよつとくらい教えてくれたっていいのに」

「そうですね」

「じゃあ仕方なく少しだけヒントでも」

タイミング良く襖からトントン、とノックの音がした。

合図が来たから俺達は部屋の方に歩き出す。たった数歩分、この襖の向こうに久しくジャージ姿ではない彼女がいる。

俺は襖を開けるタイミングで、こう言った。

「普段の奇行を知つてて尚、めっちゃくちゃ不覚だったんですが」
襖を開ける。

どうにか彼女には聞こえないポリウムに抑えて。

「衝撃すぎて数秒間目が離せなかった自分がいました」

部屋の中に入って俺達を待っていたのは、

「ここ、これは……!」

奇しくも虹夏さんと喜多さんの表情は過去の俺に似ていた。

分かる。分かるよその気持ち。

着替えていた後藤さんの服装はセーラー風のリボンタイ付きのホワイトトップスに紺のロングスカートを履いており、まるでお嬢様学校に通う気品ある生徒のように思わせた。

見た目だけで言えば清楚なお嬢様だ。甘い雰囲気とか弱いオーラを漂わせて庇護欲を掻き立たせてくる完璧な容姿とスタイル。ただ顔がもうマジで嫌そうにしてるのが問題だけ。

「か、かわいい〜……!」

そう、普通の私服になった後藤さんは虹夏さん達のリアクション通り、誰が見ても美少女の部類に入る。

いつもの奇行と猫背に俯きがちで二重顎になってしまいうから忘れがちになるが、普通にしていればそこら辺にいるような女の子と変わらないのだ。

「後藤さん素敵〜! こっち向いて! 一枚だけで良いから撮らせて〜!」

「そうだよ、ぼっちちゃんは可愛いんだよ……!」

「あっうっ」

各々勝手にテンション上がってらっしやる。一人だけ真逆に下がってる人いるけど。

なるほど、喜多さんは相手の見た目が良ければ大体誰でも良いんだな。リョウさんと後藤さん性格や中身アレなのにこんな反応してるし。何だっけ、面食いつて言うんだっけか。

虹夏さんは何か後方彼氏面みたいに腕組みして頷いてる。一応見た目は良いと元から思ってたんだ。

無理もない。普段が普段だからね。人として機能してない事の方が多いもんな。

「そうだった。優人くん前も見ただ事あるって言うってたけど、その時もこんな感じだったの？」

「? ええ、まあ」

「なるほど……だからか」

「ですね」

何がだ。

「(多分ぼっちちゃんの可愛さと奇行のギャップを知ってるから優人くんって下心よりも理性が勝つようになっちやっただよ)」

「(教室で私と一緒に話してる時も、普通の友達としてだけの感情で喋ってる原因が分かりました。他の男子から感じる好奇心な視線を一切感じないもの。私の相談に乗ってくれた時も純粋な善意しかないってすぐ分かったし)」

「(それにいきなりあんなぼっちちゃん見せられたら他の女子とか見ても何とも思わな

そうじゃない？ 何か慣れてる感というか、靡かなそうというかさ)」

「(私結構自分の容姿には自信あるんですけどね……)」

「(ん？ 喜多ちゃん?)」

いきなり隅でコソコソ話しだしたんだけど、この状況どうすりやいいんだ。

着替えさせられた後藤さん座り込んでじっとしたままなんだが。放置するのやめたげて。正直俺もどうしたらいいか分かんない。

いつそ俺も星型サンングラス掛けようかと思ってたなら、顔だけ青ざめたままの後藤さんがこちらに向いた。

「ゆ、ゆうくん……」

「ん？ 何?」

「わっ私、の……服、ど、どう、かな……」

「え」

あの後藤さんが普通に服装の事について聞いてきただと……いや大分どもってたけど。

まずい、どうしよう。前回と同じ質問してきたぞ。

以前は常にジャージ姿だったから衝撃受けてる間に咄嗟に聞かれて、内心慌てつつも

平静保ちながら「何か見慣れねえな」って言ってしまった結果、彼女は霧散した。

その時はGウイルスに感染して三日間俺も陰キヤ拗らせたトラウマがある。もうあんな悲惨な結末は回避しなければならぬ。

どうする、今回は考える時間が少しだけある。曖昧だったり否定は確実に霧散エントだ。

なら正直に褒めるべきか。これなら少なくともウイルス拡散は避けられるかもしれない。うん、ここは男として堂々と答えてやるべきだな、よし。

「あつ……や、やっぱりゆうくんからすれば似合ってない、かな……」

「いや、そんな事はないと思う」

「……え？」

そうだ、彼女に少しでも自信を持ってもらうために正直に言おう。

ネガティブに捉えないよう真っ直ぐにだ。

「普通に可愛いと思うぞ」

「……………」

どうだ、言ってやったぞ。これで虹夏さん達もウイルスから守れる。

後藤さんも少しだけ自分に自信が持てるしWINWINのはずだ。そして虹夏さん達はいつまでコソコソ喋ってんだ。早く戻ってこい。

だが褒めたら褒めたで調子に乗るのが後藤ひとりだ。

変な笑い声でも出していつもの彼女に戻るんだろうかと思いつつ視線を後藤さんに戻すと。

「アツ……!」

後藤さんが徐々に霧散し始めた。

霧散し始めた……?」

「は!? いや? だろ!? 何で!?」

「え!? 何!? 電気消えたんだけど!? うわあつ、ぼっちちゃんがどんどんしおれていく!?」

「後藤さんどうしたの!? 清水君何をしたの!?」

「いや何もしてないって! ただ服似合ってるかどうか聞かれたから正直に可愛いって言っただけで!」

「そんな事言ったらダメでしょ! 優人くんの言葉はぼっちちゃんの体には毒なんだか

らー！」

「どゆこと!?!」

褒め言葉が毒って何なんだよ。否定しても褒めても霧散されるなら何言えば正解だったんだ。

どうあがいてもバッドエンドとか無理ゲーすぎんだろ。

いや、その前に。

「窓開けて換気しねえと感染しちまう!」

「そこそどゆこと!?! ウツ!?!」

突然、虹夏さんが苦しみだした。

まさか……。

「Gウイルスの感染……!?! くそつ、早すぎる!」

「Gウイルスって何なの清水君!?! 伊地知先輩大丈夫ですか!?!」

「ち、力が抜けていく……!」

「伊地知先輩!?! 清水君、これってどういう……ウツ!?! ま、まさか私も……!?!」

「ダニイツ!?! 喜多さんもか! 換気してるはずなのに何で感染スピードが速いんだ

!？」

何で俺だけ大丈夫なんだ……？ まさか一度感染してるから耐性ができた……？

よく分からんけど今はこの状況をどうするかだ。

感染源である一人は死亡。

感染者二人もまもなく症状が出てくる。レベルによつては助からない危険性もある

が、解決策が思い当たらん。

どうしたものか……。

「いつも明るさだけで乗り越えようとしてすみません……」

Gウイルスの症状の一つ、自分も極度のネガティブになるのが出てきた。

「ギター上手くならなくてごめんなさい……」

陽キヤの極みである喜多さんにも症状が表れてしまった。マジか、さすがの陽キヤも体内からの侵食には勝てなかつたっていうのかよ。

「可愛すぎてごめんなさい……」

あ、自覚あつたのね。まあイソスタが趣味らしいし自分でそう思つてなきやわざわざ

SNSで自分の顔晒さないか。

にしてもこの光景、誠に地獄である。

俺も過去に感染した時は大変だった。なんか産まれてきてごめんなさいとか言つてた記憶ある。

どうすればみんな元通りになるか考えないといけないけど、これって意図的に治せるものなのか？

「うう、優人くん……無理矢理誘つてごめんなさい……バンドの事よく知らないのに巻き込んでごめんね……」

だいぶ拗らせてきたのか、虹夏さんが俺の足元までずり寄ってきて足にしがみついていた。

感染したら近くにいる人に対して潜在的に申し訳ないと思つている事まで吐き出させるのかこのウイルス。タチ悪いな。

というか虹夏さんもまだそんなこと思つてた事に驚きだ。

ほんとに明るさだけで頑張つていたのかもされない。安心できるかは分からないけど、俺も座り込んでおそるおそる虹夏さんの頭を撫でる。

「だ、大丈夫ですよ虹夏さん！ 俺だってもう好きでやってるんですから。それに今は色々勉強してるし、PAさんや照明さんにも機材の使い方とか少しずつ教えてもらってるんです。いつか結束バンドの役に立てる日がこれるよう、俺も頑張りますから、もうそんな事言わないでください」

「うう……」

どこことなく、虹夏さんの表情が緩くなった気がした。治るかどうかは知らん。

しかし実際マシンになってるかどうかは分からない。面倒すぎるだろこのGウイルス。どっかの研究機関に送った方がいいんじゃないのか。

「うおっ……!?! き、喜多さん!?!」

今度は喜多さんが横から腰にしがみ付いてきた。

危うくバランスが崩れそうになるのを両手で支える。くそっ何だっつんだ！ 別に喜多さんは俺に申し訳ないと思ってる事とかないだろ!?!

「清水君……私の相談に真剣に乗ってくれて親身に話も聞いてくれたのに……ずっとちゃんとしたお礼をできなくてごめんなさい……。誰にも言えなくて、どうすればいいのか分からなくて隠してた私に初めて気付いてくれたのが清水君だったのに……」

ええ……いつの話持ち出してんこの子。とつくに終わった話されても何て言えばいいんだよこっちは。

と、とにかく何か言わないと離れそうにない。子供を諭す親か俺は……。

「あーえーと……あのーあれだ。喜多さん、別に俺は見返りが欲しくて相談に乗った訳じゃないから、お礼とかそんなのいらねえつて。悩みも無事解決して喜多さんも結束バンドに入れた。それであの話はお終いなんだ。掘り返す必要なんかどこにもねえよ」

「あーうー……」

どういふ感情なのかまったく分かんねえ……。

いきなり部屋の電気も消えてるし普通に怪奇現象だろこれ。まともに生存してるの俺だけじゃん。誰か助けてくれ。

そんな俺の心の声が聞こえたのか、階段を上がってくる足音が複数聞こえた。

もしかして美智代さん達か!? ダメだ。今来たら美智代さん達まで感染してしまう!

かと言って今の俺は左足を虹夏さんに掴まれ、喜多さんには腰を掴まれて身動きができない状態。

襖を開けられないようにする事もできない。足音はもう襖の前まで来ている。今更声

を出しても間に合わないだろう。

というかこんな光景見られて大丈夫なのか俺!? 後藤さん死んでるんだぞ!?

俺の悲鳴も出す間もなく、襖が開けられた。

「みんなーデザート食べない?」

「喜多ちゃんが持つてきたスイーツでも食べ……ええええええええええ!!」

美智代さんと直樹さんがやってきて、この惨状を目の当たりにすると当然のように驚いていた。

感染しないのを見るに、血縁があるから大丈夫なのだろうか。

「ゆ、ゆう君……これはいつたい……?」

美智代さんの問いに、俺は静かに手を合わせてこう言う。

弔いはしてやらないとな。

「俺以外の全員……ご臨終です」

そして、後藤家に両親の叫びとふーちゃんの笑い声だけが響いた。

リョウさんには本番は一人で頑張ってくださいとロインしたら何でだよと返ってきて

た。

ごもつともです。

その後、適当に南無阿弥陀仏とか言ったら後藤さん以外元通りになり、直樹さんのご厚意により虹夏さん達を車で駅前まで見送った。

そして俺は自分の家、ではなく後藤さんの家へと戻る。

本当は次のバイトに行ってる最中とかに聞こうと思っていたけど、この際ちようど良
い。

部屋に行くと後藤さんは自然復活していた。

服装もいつもと同じジャージ姿に戻っている。

「あつゆ、ゆうくん。ま、まだ帰ってなかったんだね……」

「ああ、まあな」

部屋の飾りを片付けていた彼女は作業を一旦中止し、ギターを持つ。

「えっと……わ、私のギターでも聴く……？」

こちらに気を利かせてくれてるんだろが、今は別にそういう気分でもない。

「それも良いけど、今は後藤さんに別件の用事があつてさ」

「用事……？」

「ああ」

きよとんとした表情でこちらを見ている後藤さん。普通なら、想像できないよな。

さつきまでのふざけた空気感はどこにもない。俺と後藤さん、二人だけの空間だからこそ、腹を割って話したい事があつたのだ。

俺は真っ直ぐ彼女を見据えて、言う。

ずっと気にはなっていたけど確信が持てず、だけどようやく確証を持った声音でだ。

「さあ、話をしようぜ。ギターヒーロー」

27. 黒歴史はバレた時が一番怖い

正体を聞いた訳でもない。

彼女から言われた訳でもない。

ただ俺の言葉に彼女は時間が止まったかのように硬直していた。まるで壊してしまったおもちやを隠していたのに見つかった子供みたいだ。

しかしそんな硬直も次第に解ける。現実はずぐに戻ってきた。

「……えっ!? な、なんでつゆうくんがそれを……あつえっ、いや……な、ななな何の事かな……?」

「いや苦し紛れすぎるだろ」

何でゆうくんがそれをの時点で認めてるようなものじゃねえか。よくそのまま流せると思ったな。

座布団を手に取り後藤さんの前に座る。彼女も観念したようで床にへたり込むように座った。もう言い逃れできないと考えたのだろう。

一応最終確認しておくか。

「後藤さんがギターヒーロー。これで間違いないよな?」

「あつ……」

「俺には正直に答えてくれ」

「……う、うん……」

よし、本人が認めたなら間違いない。確信は持ってたけど万が一って事があつたら恥ずかしいし、とりあえずはこっちも一息つける。

「で、でも……何で分かったの? い、一応バレないようにしてたのに……」

正座でもじもじしながら後藤さんが聞いてきた。

バレないように、ねえ。

「普通に背景とギターが同じ。ピンクジャージもな」

「はうあつ!?!」

俺が指差して言うとな彼女はまさかそれで!?! みたいな顔してこっちを見ている。

むしろそんな顔されて見られた俺がまさかそれでバレないと思ってたの!?! と言い

たいんだが。なんかこう、肝心なところで頭が回らないんだよなあこの子は……。

「俺は基本ネットで音楽とか動画流す時は作業用BGMとして流すから最初は画面とか全然ちゃんとして見てなかったけど、結束バンドに関わる事になって色々動画漁ってる内にいつも聴いてる動画ももう一度よく見てみようと思っただ。新発見とか勉強にもなると踏んでな」

後藤さんは俯きながらもこちらの話をちゃんと聞いている。

「んで元々見てたし気になる事があつたからギターヒーローの動画を一から見直す事にした。そしたらどうだ。よく見たら既視感のある襖や畳、見た事あるギターとジャージがいつも映ってんだぜ。そりゃ分からない訳がないよな」

「う、うう……」

「初期らへんの動画はジャージの種類とかよく変えてたから確信は持てなかった。似てるけどこういう人もいるかもしれないって思ってた。だけど、後半になるにつれて俺と再会した時と一緒にジャージばつか着てるし、俺がリクエストした曲とかやたら動画上げてたろ？ どうりで俺が聴き入る訳だ。何せ好きな曲ばかり弾いてるからな」

むしろ今まで何で気付かなかったんだと自分で思ったくらいである。弾いてみた動

画って楽器やる人以外はあんま手元とかちやんと見ないよね。

普通に曲の一部として聴くから勉強とかする時にちやうど良いやくらいにしか思っ
てなかった。ソースは俺。

「あ、ちなみに俺が最初に疑問に思ったのは6話のとこだから。ちやんと『ん……?』つ
て入れているから」

「ろ、ろく……え……??」

「細かく言えば虹夏さんリョウさんと初めてライブした日って事だよ」

後藤さんの顔が?マークになっていた。当然の反応だ。これで理解されたらそれこ
そこつちが反応に困る。

「ピンクジャージなんてそうそう家で着るヤツとかいないだろ。身バレ防止を怠るとそ
ういう事も今後出てきちまうぞ。まあ以前までは身バレするような相手もいなかった
し仕方ないつちや仕方ないけど」

「……あ、あの……黙ってて、ごめんなさい……」

突然後藤さんが謝ってきた。

あれ、何でそうなる?

「いや、何で謝るんだよ。謝罪する必要なんかどこにもないだろ」

「でっでも……ゆうくんにまで、ずっと隠してたのは事実だし……」

「それはまだ隠しておきたい理由とか言えない理由があったからだろ？ 今回に関しては俺が無遠慮に聞いたのが元々悪いんだから後藤さんが謝る必要ねえよ。むしろごめんな」

誰にだって隠しておきたい事の二つや三つはあったっておかしくない。俺には特にそんなものはないが、後藤さんにとってはこれがそうだったんだろう。

俺にまで秘密にしていたんだし少なからずショックは受けてるはずだ。

しかし、それでも聞いておきたい事があるから俺は彼女に言った。

「虹夏さんにも言ったけど、俺は今結束バンドの役に立てるように色々教えてもらってるんだ。PAさんや照明さんに機材の扱い方とか、ライブの演出やいざトラブルが起きてしまった場合のフォローの仕方とかを。これでも以前よりは結構詳しくなった方だと思う。楽器の事についても今は調べたりして少しは知識も増えたよ。と言ってもまだ素人に毛が生えた程度だけだな」

「う、うん」

「あとは後藤さんのギターを弾く姿をずっと見てきたからか手癖も分かるようになってきたんだよ。目の前で弾いてる時と動画の時と似てる事がよくあった。それも気付いた一因ではある。その上で、後藤さんがソロでは上手いのにみんなと演奏すると下手になっちゃう原因も何となく分かるようになった」

そう言った時、彼女の表情が少し曇るのを確認した。

「どうやら後藤さん自身も大体分かっているようだ。思えば、直接言うのは初めてかもしれない。」

「人の目を見れないからみんなのペースに合わせてられず一人で突っ走った演奏をしてしまう。それが下手に聴こえる原因なんだな」

「……うん」

彼女は首を小さく縦に振った。自覚があるだけまだマシ、か。

しかし分かっているにもかかわらずまだペースを合わせられないのはそれだけ後藤さんの欠点、人見知りやコミュ症が重度でこれからも問題になってくるという事だ。

結束バンドのメンバーとの仲も決して悪くなくむしろ良好にも見えるけれど、それとこれとは話が別なのだろう。

「そう簡単に更生できれば俺も彼女も苦勞していないし、これに関してはこれからゆっ

くり改善させていくしかないな。

「一応聞けどメンバーのみんなにも黙ったままでいるのか？」

「あつえつと……いい、今の私じゃ言っても信じてもらえないし、実力も全然出せてないから……。も、もつとこの性格を直してからちゃんと言おうと思つてて……ゆうくんにも、自信が付いたら言おうとしてただけど……」

「ふうん……そこはちゃんと考えてんだな」

確かに今の状態で打ち明けても実力と普段の演奏が違いすぎて信じてはもらえないだろうな。

今の性格が直るかどうかは別として、彼女なりにしっかりと考えてるなら尊重してやるのが俺の務めだ。

「分かった。自信が付いて本当に自分から打ち明けたい時に言えばいいさ。俺もその時まで黙っておくし秘密は絶対守る」

「あ、ありがと、ゆうくん……」

ひとまず安心といったような感じで、強張っていた体から力が抜けたように息を吐いた後藤さん。

俺も聞きたい事は聞けたし家に帰るかあ、とはならなかった。
むしろ本題はここからだからだ。

「なあ、後藤さんって一人でギターヒーローの活動やってるんだよな？」

「？ う、うん」

「じゃあ編集とかも全部自分でやってんのか？」

「そう、だけど……」

思った通りだ。直樹さんとかが手伝ってるかもしれないと思いましたが、どうやら全部自分でやってるらしい。

ならちようど良い。

「だったら俺にギターヒーローの手伝いさせてくれないか？」

「……………え、ええっ!？」

久々に大きい声聞いたな。

「な、なんで……?」

「編集はもちろんカラオケトラックとか打ち込みとか色々やる事あるのは知ってるし、

最近は調べたり使い方もちよつと学んでるんだ」

後藤さんの頭上に？マークがたくさん出ているが気にしない。

そして彼女は押されると断れない事も知っている。

「ギターヒーローの動画、結束バンドの活動が本格的になった日から投稿してないだろ？」

「……あつうん……色々あつて、忙しかったし……」

「そう。だから後藤さんが撮影や編集する暇ないなら俺が代わりに編集とかやろうと思つてさ。それなら後藤さんは最初にギター弾くとこだけ撮影すれば良い訳じゃん？」

こうすりや動画は投稿できるし俺が編集とかすれば後藤さんはその時間をバンドの練習に使えるつて事。もちろん今はまだ後藤さんより技術も打ち込みもできないけど、それはこつから死ぬ気で上達する」

「えつあつ、ゆ、ゆうくんの気持ちは嬉しいけど……どうして、そこまでしてくれるの……？」

おずおずと聞いてくる彼女に対してむしろ疑問を持ったのは俺の方だった。

何で今更そんな事聞いてくるんだこの子。どうしてそこまで……。

「そんなの俺がそうしたいからに決まってるだろ」

「え……………」

「勘違いしないでほしいのは、別に後藤さんのためとか結束バンドのためとかじゃないぞ。色々手伝ったりするのにも勉強になるし今後役に立てるかもって思ったからな訳であって、全部自分のためだ。俺がやりたいからやってるだけ。今回の事はお互い悪くない提案だと思うし、お互いWINWINだろ？」

「あつまあ、うん……………」

「ついでに、俺が買った一眼レフは動画も撮れるからスマホで撮るよりも画質とか音質も良くなるはずだ。どうよ、優良物件だと思わね？」

「い、一眼レフ……………良い音質……………」

見事に喰い付いた。やっぱり根本的に音楽が好きだから音質などには拘りたいんだろうな。動画の質が少しでも良くなるなら尚更だ。

「まだすぐには戦力になれないかもしれないかもしれねえけど頑張るからさ。時間ある時にでも教えてくれないか？」

「あつうつ、うん……………あり、がと……………」

彼女も納得したように応じてくれた。これで少しは後藤さんの負担も減らせるはず

だ。

まずは俺が編集やら何やら覚えないと意味ないが、後藤さんに教えてもらいつつ空き時間を活用したりしよう。

やりたい事も終わったし今日は一旦帰って、明日から本格的に始めるかね。バイトに音楽についての勉強や筋トレ、それに編集作業などの勉強もプラスとなると結構やる事あるな。

最近家事とか手伝い程度にしかしてなかったしこう、やらなきゃいけない事がたくさんできたならむしろ楽しくなってきた。後藤さんの世話ももうデフォだし普通になってきたからなあ。何だかオラわくわくしてきたぞ！

「で、でもゆうくん……そんなに前から私がギターヒーローかもしれないって思ってたのに……ど、どうして今まで聞いてこなかったの……？」

「んっ？」

帰ろうとしたら後藤さんが質問してきた。

少し考える。そういやどうしてだっけ。なあんか言うべきかどうか悩んでたような記憶はあるけど……あ、思い出した。

「いやまあ、さつきも言ったけどギターが同じだの背景やジャージも似てるだの思ったりもしたんだけど、確信持てるまでにはちよつと時間を要してだな」

「な、何で……?」

「や、信じられないというか信じたくなかったと言いますか……」

「何を……?」

え、何でまだ自覚できないのこの子。言わすの? 俺にそれを言わすの?

逆に言つちやつて大丈夫なの? また霧散して胞子撒き散らさない? 大丈夫?

言うよ?

「いや、だって幼馴染が概要欄でリア充アピとか学校生活忙しいとかイケメン彼氏がとかどうのとかさ、あり得ないような虚言ばっか書いてんだぞ? あまりにも真逆すぎてそんなの信じたくなかったに決まってんじゃん」

「ふぐあッ!」

誰かに見えない何かを撃たれたのか壁まで吹っ飛んでつた。言葉の衝撃って物理ダメージあるんだ。初めて知つたわ。

虚言書くのが当たり前すぎて自分でも忘れてたらしい。?を付き続けるとこうなるんだ……。俺も気を付けないと。

後藤さんの口からは赤い血じゃなくて緑色の汁みたいなのが出ていた。さすが人間辞めてるだけある。紫色だったらナメック星人と呼んでやったのに。

それだけ受け入れ難かつたんだな。分かるぞ、俺も幼馴染があんな事書いてるの受け入れられなかつたもん。当人知つてると悲惨つてレベルじゃない。

「しかも俺をイケメン彼氏に見立てて俺との出来事もたまに？盛りまくつて書いてたろ。どうりで親近感湧く訳だ。この人も似たような環境なのかなつて当時は疑いもしなかつた自分が恥ずかしい」

「ぶえあツ!」

今度は全身真っ赤になつて頭から噴火した。凄い煙が出ている。もしこんなのなら俺だつて死にたくなる。

変な？は吐くものじゃないね。みんなも気を付けような。

ちなみに過去に概要欄に書かれてた虚言理想と現実を一例として見るとこうあつた。

—虚言ver—

今日は彼氏とお昼休みに図書館に行つて勉強してた〜！（*、艸、）
帰りにはタピオカ奢つてくれたしほんと優しいんだよ〜！

家では一緒の高校行かためにつばい勉強教えてくれて超捗った！ やっぱ彼氏しか勝たん！（*ノωノ）

—現実ver—

少しでも勉強させないとヤバいのに人がいない図書室じゃないとできないからと言われ無理矢理そこで勉強させた。

帰りには問題集を全然解けなくて落ち込んだから仕方なくコーラを買い与えただけ。

家ではもうマジで受験勉強しなきゃ合格しないと泣き付かれたので深夜までみっちり叩き込んだ。

温度差凄くね？

悲しいけどこれ、現実なのよね。

「う……あつ、あ……」

呻きながら床でびくびく痙攣しているが、こんな彼女でもギターの才能と努力の量はピカイチなのだ。

そこだけは俺も認めているし尊敬している。

他のみんなが日々楽しく過ごしている毎日を犠牲にして、彼女はただずっと一人で努

力を続けていた。

そしてその結晶はネットでも人気を確保しつつ、着実に成果を上げている。普通の人では中々できない事を成し遂げている彼女は素直に凄い。こんなにかっこいい彼女をもっと知ってほしい。

だからこそ俺は、そんな後藤さんを支えたいと思った。

「これからは結束バンドのためにもっと頑張らねえとな」

「あ…………え…………？」

うつ伏せのまま俺の顔を見上げてくる後藤さんの目線に少しでも合わせるため、俺も屈む。

「お前の事だつっうの」

人差し指で軽く額を突くと小さな声で「あうっ」と鳴いた。
それに少しおかしくなりつつ。

「俺は俺のやりたい事をやるから、お前もお前のやりたい事をやれば良い。それでもしなんかあったらいつだって俺が支えてやる、どうにかしてやる、引っ張ってやる。その

ために力付けようとしてんだ。お前は何も恐れずに突っ走って行きやいいさ」

きつと、俺の期待に彼女はそんなすぐに応えられない。だがそれも分かり切っている事。

その上で言っているのだから構わないのだ。俺は彼女のやりたい事を支えるだけ。結束バンドのやりたい事を支えるだけ。そこに何も変わりはない。

本当にやりたい事はまだ見つかっていないけれど、当面のやりたい事は彼女達の側で力になってあげたい。

それだけで十分だ。

「ゆう、くん……?」

「ほら、立て」

手を差し出すと後藤さんも左手を伸ばしてきた。

小さくて白く柔らかい、だけど指先だけがギターのをせいで硬くなった手。努力の証。彼女を起こす。少し目線が下の少女に向かって俺は言う。

「まずは14日のライブ、期待してるぞ」

「……うんっ」

後藤ひとりは、強く頷いた。

そして。

8月14日。

結束バンド、スターリーでのライブ当日。
台風8号が直撃した。

28. 雨の日は気分も移り変わりやすい

8月14日。

今日はスターリーで喜多さんというギターボーカルを迎えた結束バンドの初ライブである。

みんなそれぞれ練習を重ね、結束バンドのライブTシャツを作り（何故か俺の分も）、この日のために準備してきたのだ。

それなのに。

外は既に灰色で覆い尽くされ、ひとたび外出しようものなら一瞬で全身がずぶ濡れになり風邪一直線。傘なんてすぐ破壊される始末。

つまりは台風8号の直撃を意味していた。幸い今がピークらしく、夜になる頃には過ぎ去っているとニュースでも聞いたが、本音を言えば今すぐ去ってほしい気分である。

後藤さん達は今スタジオに楽器を置きに行っている。ついでに本番まで練習もしておきたいのだろうと思う。

俺は頭を拭き終わったタオルを首に提げて余りのタオルを今やってきたPAさんに

渡した。

「PAさん、これで拭いてください」

「ありがとうございます、清水君」

「いえ」

いまだに本名を知らないけど、もうPAさん呼びでみんな固定してるし誰も気にしてないからそのままになっている。

PAさんは軽く頭を拭いてからドリンクカウンターのの上を見上げた。

「これは……てるてる坊主、ですか?」

「結束バンドのみんなが作ったんですよ。一応俺もですけど」

二日前、最後の練習の日と同時にライブTシャツお披露目の時、台風が接近してきていると聞いた俺達は急遽てるてる坊主を作る事になった。

これが意外にも後藤さんの提案だったのも驚きだ。それで気休め程度の願掛けだけど何もしないよりかはマシだと、その場にいた俺も一緒にたくさんのてる坊を生産した次第である。

まあ、そんなおまじないで天は味方してくれなかった訳だから俺はとりあえず神様を

恨んでおく事にした。

何でよりによって今日なんだよ。しかもお盆だぞ。みんな迷惑してんだからさつきと台風散れ、千本桜。

「ですが結局台風来ちゃいましたねえ」

「まあてるてる坊主でどうにかなる訳じゃないからさ」

そう答える店長はカウンターに突っ伏している。声の覇気が全然ない。

「この様子じゃチケット買った人すら来ないんじゃないですか？ みんな、客の入り見で心折れなきやいいですけど。練習頑張ったのに可哀想ですね……」

「バンド続けてたらこんな理不尽たくさんあるんだから、どんな状況でも乗り越えられるようにならないと……」

確かにこの状況じゃチケットを買ってくれた人もスターリーまでは来られない可能性が高い。

何せ台風だ。下手しなくても電車が止まってる所もあるだろうしあり得ない話ではない。そもそもこんな時にまでライブを見に来てくれる人がいたら、その人達は本物のファンだ。

とりあえず、

「店長、俺ので良ければハンカチ使いますか」

「あっち行けよ……」

「声に全然力入ってないですよ」

突っ伏したまま店長は動かない。やっぱり何だかんだで結束バンドを一番気にかけてくれているのはこの人だな。

口調の割に行動があまりにも優しすぎる。本当に典型的なツンデレの人だ。店の売り上げよりも彼女達の事を考えてくれるのはこちらとしてもありがたい。できれば他のバンドの人達にもちよつとだけその思いを向けてあげてほしいけどね。

今の時間は十五時半を過ぎた辺り。

開場は十八時で開演が十八時半だから、まだ三時間はあるのか。それまでに少しでも暴風雨がマシになってくれればいいが、今のところ期待できそうもない。

「……なあ優人」

「はい?」

力の抜けた声のまま、店長から話しかけられた。

店長は突っ伏したまま、

「あいつらの事、ちゃんと支えてやれよ……」

おそらく様々な意味が含まれているであろう言葉には、確かな重みがあった。

この雨と風じゃ客の入りは悪い。PAさんも言っていたようにそれで心が折れなければいいけど、実際演奏者の立場になってみればそれがどれだけ恐ろしいものか分かる。

自分達のファンがどれくらい来るのか分からない恐怖、そして全体的に客が少なかった時の不安、ましてや結束バンドは初ライブだ。

知名度は皆無で会場自体はお馴染みでも、いざ他のバンドもいるとなると完全アウェーになるのは必至。その中で練習の成果を出し切るというのも、女子高生にとっては少々ハードルが高いかもしれない。

そんな不安の中で、彼女達に俺は何ができるのか。

今考えていても何も出てきはしない。だからといって何もしないじゃない。土壇場でもいいからその場で彼女達を少しでも楽になれるような言葉を伝える事も、立派な俺の役目だ。

何があっても支える。そう決めたんだから。

当たり前のように俺はこう返した。

「言われなくとも」

「ふう、とりあえず全バンドのリハは問題なく終わったか」

「何でお前が一番ひと息ついてんだよ」

「あでっ」

店長からの脳天チョップを喰らい頭を押さえる。何ですぐ暴力振るうかなこの人は
〜！

「……みんな客の入り悪かったら多少は精神的に来るでしょ。結束バンド以外の人達
だって例外じゃない。演奏面でもそれが如実に表れる事があるんだから、リハの時点で
ひとまず問題なく終わった事を喜んだって良いじゃないですか……。とかいいつの

間にか普段の店長に戻ってますね」

「リハを見んのも店長の仕事だ。そこは割り切ってるっつもの。……リハが上手くいったからって本番もそうだとはい限らない。ましてや今日みたいな日は特にな。だからこんな事でもいいいち安心してたら足元すくわれんぞ」

「……確か本来の言葉は足をすくわれるですよ。あとちよつと使い方間違えてるしつでえツ!」

「うっせ。だいたいの意味が伝わりやそれで良いんだよつ。考えるな感じろ、それがロックだボケ」

「すぐ殴るじゃん! マジでダメですよ! 最近虹夏さんも店長の真似てきてんですからね!? 姉ならもつと妹の良いお手本になってくださいよ! 暴力的なところなんて一番似なくていいところ!」

「愛のムチだ」

物は言いようだなオイ。本気じゃないだけまだマシだけど、天使な虹夏さんが将来この人みたいになつたらどうしよう。もう天使じゃなくなっちゃう、墮天使になっちゃうよ。

手をぶらぶらさせながらカウンターの方向に向かっていく店長を恨みがましく睨んでもまったたく意に介していない。メンタル強いのか弱いのか分からんな。

時間を確認してみる。およそ十七時五十分。開場まであと十分ほどまで迫っていた。店長の言っていた事を思い出す。リハで上手くできていても本番でどうなるかわからない。ステージに立って客を目の前にしたらリハの時とは違い景色なんてガラッと変わる。

理想と現実。

その差を自分の目ではつきり捉えた上で、彼女達はリハのような演奏を本番でできるのか。いいや、きつと大丈夫だ。

喜多さんもミスはしなかったし、虹夏さんとリョウさんのリズム隊も安定してた。後藤さんだつて前よりもマシになってたんだ。

だからきつと大丈夫。大丈夫のはずだ。

「うあー、やつぱこつちもダメか〜」

「台風ですもんねえ……。あ、清水君っ、私達のリハどうだったかしら？」

会話をしながらフロアに戻ってきたのは虹夏さん率いる結束バンドのメンバーだった。

俺は自分でも気付かない内に強く握りしめていた拳を慌てて解き、駆け寄ってきた喜多さん達の方へと体を向ける。

「ああ、俺が見てる限りは問題はないように見えた。店長も今のところは言う事なさそうだったよ。本番もそのまままで頑張つてな」

「ええっ、任せて！」

外は灰色なのに喜多さんの瞳はぴかぴかしていた。そんながんばるぞいポーズしなくても分かつてるから。何かキターンとか文字見えるけどこれなに？ 能力者にでもなつたの？

眩しすぎる喜多さんから視線を横に逸らすと、後藤さんがこちらを見ていた。

正確には俺の手に視線を向けている。もしかして拳を握り締めてたのを見られてた？ いや、会話が聞こえた時点で解いてたから多分バレてはないはず。

俺はあくまで彼女達の支えになるんだから、変なところで余計な気を遣わせる訳にはいかないのだ。

すると、喜多さんのスマホからロインの通知音が鳴った。

キラキラしていた瞳がすぐに変わる。

「あ、私の友達も親に止められてやっぱ来られないみたいですよ……」

「そりゃ仕方ない」

親だつてこんな時に子供をライブに行かせるのは止めさせたいだろう。

「だよね〜……」

「来てくれる人だいが減つちまったのか？」

「うっうん……半分以下になつちやつたかも……」

一人のノルマが五枚で四人だから二十枚、つて事は十人以下か。連絡くれた人だけでこれなら、連絡なしに來ない人を考慮すれば本番の時にはもつと少なくなつてもおかしくない。

話がどんどん悪い方に持つていかれてる気分だ。

「これに関してはもうしょうがないよつ。切り替えていこー！」

「お、さすが虹夏さん、どんな時でも明るいつすね」

「こうなつちやつた以上は仕方ないしね。もうすぐライブ始まるんだしくよくよなんてしてられないよー！」

「やっぱこの人は凄い。結束バンドのリーダーとしてみんなの雰囲気をもとめてくれる。さすが後藤さんを勢いのままバンドに迎え入れただけの事はある。店長にもこうい

う天使なところを見習ってほしいものだ。おっと、何だか背後から嫌な視線を感じるけど気のせいかな。気のせいだろう。心の中まで読まれたらどうあがいてもあの人に逆らえなくなっちゃう。

虹夏さんがみんなの士気を上げていたら、突然リヨウさんが立ったまま虹夏さんの肩に寄りかかった。

めっちゃあくびしてんだけど。マジかこの人。

「リヨウは緊張感ないなあ〜」

「ていきあつ……ねむい……」

心臓が鉄でできてんのか。どうしたら本番前に眠くなれるんだよ。ある意味羨ましいけどさその精神力。

そんで隣のアホピンクはいつの間にか大変身していた。

「ばかばかばかばかもう。何でいきなり気合い入ってんだよ良い子だからとつとそいつら外しなさい大使なのか巡査部長なのかどっちかにしなさい」

「問題そこじゃないと思うけど!?!」

前に見た星型サングラス、付け髭、『一日巡査部長』と書かれたタスキにまさかのもう

一つアイテムが追加され、『観光親善大使』と書かれたタスキと合わせクロスさせていたのだ。まったくもって理解不能である。

少し目を離れたらこれだ。勝手に変身するもんだから解除させるのに時間がかかってしまうのがネック。

「まったく、どつから持ち出してきたんだこんなの。ほら、頭下げろ」

「あつうっ……」

「優人くんってほんと面倒見良いよね。リヨウもついでに見てほしいもん」

「あ、ベースストはちよつと」

「限定的な拒否があつた!？」

「それでも私は諦めない。虹夏と優人の世話になる」

堂々と言うなよ。

堂々と言うなよ。

「リヨウさん良いですか？　まず介護が必要な人と面倒なだけでやろうと思えば自分でできる人は違うんです。アンタの場合はめちやくちや後者でしょうが。なので虹夏さんに全部任せ」

「ひゃく！ 凄いい雨だあ。あ、ひとりちやくんしみずくくん来たよ〜！」

「あつお姉さん……」

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああツ！」

「ええ!?! 優人くんが真つ先に逃げてっただけど!?!」

「私追いかけて連れてきます！」

そして楽屋のゴミ箱の中に隠れていたところを喜多さんに見つかり手を繋がれたままフロアに連行される俺であった。

「ガルルルルルルルルルルルウツ！」

「いつもは誰にでも優しい優人くんが犬みたいになってる……。喜多ちゃんの後ろに隠れてめちゃくちゃあの人に警戒心剥き出しにしてる……」

「伊地知先輩どうしましょう、こんな清水君初めてでちよつと可愛くないですか!?!」

「いらんとこでギャップ萌え感じてる場合じゃないよ喜多ちゃん！ まだ何もやらかしてないのに優人くんどんどん顔が般若になりかけてるから！」

「どしたのしみずきくん、この前みたいに懐いてくれて良いんだぜい。ほーれ、チチチチチ」

「うるせえ！ 酒カスなんか陽の気に当てられて干からびちまえばいいんだ!!」
「私武器にされてたの!？」

一分後。

埒が明かないと店長に首根っこを掴まれた俺は平静を取り戻し、何とか我に返る事ができた。俺がゴミ箱に隠れている間にも少し話が進んでいたらしい。

「へえ、店長の大学の後輩だったんですね。くずり姐さん」

「そうなんだあゝこの前スターリー知ってるって言ったのもそれが理由だよ！ あとなんか呼び方違うくない？」

「囁みました」

何で打ち上げでもないのにもう酔っぱらってんだよこの人は。いやこの前も既に酔っぱらってたけど。

「こんな雨ん中来たんだからもうちよつと感謝してもいいんだよ？ ぼっちちゃんの
ためだから遠慮すんな！」

「ちよつと何言ってるか分かんないですクスズ……きくり姐さん」

「考えるな感じろお！ それがロツクだぜえゝい！ やっぱり呼び方おかしくなかった

「？」

「噛みまみた」

俺がゴミ箱で喜多さんにあやされている間に、後藤さんの呼び方がひとりちゃんからぼっちちゃんに変わったようだ。

どうやら店長とか虹夏さん達が後藤さんの事をぼっちちゃんと呼ぶからそれに変更したそう。まあ彼女自体あだ名として気に入っているので特に俺が何かを言う事もない。

しつこく絡んでくるきくり姐さんを店長に押し付けてひと息ついてると、

「それにしてもさっきの優人くん珍しかったね？ めちやくちや体から煙出してたよ」

「見苦しいところを見せてしまってます。あの人見た瞬間に条件反射で自我が吹っ飛んじやいました」

「そんな事あるのねえ。いつもは凄く優しいのにどうしてなの？」

「極度な酔っ払いと俺の情緒を乱してくる人が苦手なんだよ。つまりあの人は両方当てはまる天敵って事」

「「ああ……」」

喜多さんと虹夏さんが同時に納得したような声と表情をした。

分かってくれたようで何より。

にしても開場の十六時を過ぎて一発目の客がきくり姐さんとは……やはりこんな台風の中ライブハウスに来るような人は頭イカれてないと無理なのかね。

常識的に考えてきついもんな。ワンマンならまだしも数曲しか聴けない訳だし。すると入口のドアがまた開いた。

頭イカれた野郎がまだいただと……!? いったいどのどいつだ!?

「ふう〜濡れた〜!」

「あ! ひとりちゃん!」

「えっ、き、来てくれたんですか……?」

「もちろん! だって私達、ひとりちゃんのファンだし!」

「台風吹つ飛ばすくらいかっこいい演奏、期待してますね!」

「どうぞお嬢様方、差し支えなければどうかこのタオルをお使いくださいませ」

「優人がまたキャラ崩壊してる」

しょうがねえじゃん。てつきりどんな頭イカレ野郎かと思つたらまさかの後藤さんの路上ライブ見てくれた人達なんですもの。

もう申し訳なくて俺の頭がち割りたい。誰だよ台風の中来るような客はイカれてる

とか言ったヤツ。ぼっかじゃねえの！ くそつたれた天気でも来てくれるのが本物のファンなんだよ！ あつ、でも本当は無理したらダメだからね。安全第一よ。これ優人さんの約束な。

「ありがとうございませつ。あなたは……ひとりちゃんのお手伝いしてた子、かな？」
「まあ、そうなりますかね。幼馴染なんで、できる限り手伝ってやりたいと思ってるだけですよ」

「そうなんだあ。じゃあ……優人君って呼ばれてたよね。君も頑張つてね！」

「……」

あつ、これいかん。

「きゃー！ 清水君が昇天されかけてるわ!? う、浮いてる……!?!」

「優人くんのとこだけピンポイントにスポットライトが当たってるような感じに……これあれだ。ボクもう疲れたよ的なアレになってるよ！」

「優人、南無」

「……うへへ、ぐふつ、ファン……うえへへ……くひひ……（ニチャア）」

「ぼっちゃんぼっちゃんはぼっちゃん二チャつてるし!? どうしよう！ ぼっちゃんだけ

ならまだしも優人くんまでおかしくなったら対処のしようがないよ!!」

みんな……俺もう疲れたよ。

時代は年上お姉さんの包容力を欲しているんだ……。俺はこのままお姉さんの器の温もりを心で感じながらてんご

「あー！ しみず君さっきの私と接し方全然違うぞおー！ ひいきだー！ ズルだー！

酒だー！ ぶうーぶうー！」

「良いですかきく……クズ姐さん。本来年上の女性というのはあのような余裕と包容力のあるお姉さんの事を言うんです。年上なのに微笑んだ時の顔はまるで自分よりも年下のように見える幼さが垣間見えながらもどこことなく年上としての余裕ある笑顔に男は惹かれるんですよ分かったか分かったなら酒なんて飲んでないで先輩バンドマンとして少しくらいアドバイスとか寄越したらどうだコラおおん!？」

「そんなツンケンしているとモテないぞおー！」

「余計なお世話だつんヴお r g j w じょん b j c くん j v j r j v のいくえ j ぬ b b h t j r i m p k ??!」

「みんなで優人くん押さえて!! 顔が三つに腕が六本……あ、阿修羅だ……阿修羅が出てきてるってー!？」

その後、三分間の記憶が俺の中から抜け落ちていた。

29. 行け、誰も追いつけない場所へ

「ライブというのは生で演奏する人達がいる、それに沸き立つファンと裏で支えるスタッフがいる、そこ成り立つのが基本です。ですが、生だからその場の状況やトラブルに合わせてアドリブをする事も時には必要になってくるんですよ」

「はっ」

ちよつとした騒乱から落ち着きを取り戻した俺は今、最終準備までPAさんに仕事の一部を教えてもらっていた。

「例えばテンションの上があった楽器隊の誰かがMCのノリでソロ弾きをし始めたりすると、それに合わせてリバーブなりモジュレーションなど様々な音響をアドリブで調整しないといけないんです」

「……PAさんって、マジで凄いですね」

「ふふっ、やっぱり清水君にはまだ早いですかね」

早く戦力になりたいから色々な業務を教えてもらってるけど、特にPAの仕事は個人的にめっちゃくちや難しいかもしれない。

というか機材だけで何かこうすげえごちゃごちゃしてるし、覚えようとしても途中で頭がパンクしそうになってくる。やる事が多すぎて理解が追い付かないのだ。

「PAというのは結構拘りとか持つてる人とかがやる事が多いんですよ。専門職みたいなものなので、好きか本気でやってる人じゃないとまず続けられないんじゃないかと思えます」

「……でえすよね。やっぱ俺には厳しいのかなあ……」

俺の場合は好きでやってる訳でもなく、本気でやってるかと聞かれるとそうでもない……と思う。

もちろん結束バンドの役に立てるように真面目に取り組んではいるが、それとこれとはまた違ってくるのだろう。

熱意は熱意でもベクトルが違う。一つの事に全てを割いているPAさんや照明さんに対して、俺は結束バンドのためだけに色んなものへ熱を向けている。だから常に最高温度を保ってられない。

熱も分散させれば一つ一つの温度が低くなっていく。

これじゃいつまで経っても変われない。彼女達の力になれる日が見えてこない。そこでふと脳裏によぎった。

もしかして俺……成長する方向性を間違えてるんじゃない？

「でも清水君」

隣からPAさんの声があった。

「スターリーでPAという役割が私にしかできないように、清水君には清水君にしかできない事だってあるはずですよ」

「俺にしか……」

ある程度の知識は身に付けてきたものの、俺なんてまだまだ無力に等しい存在だ。

バンド面で何か手伝える事なんてない。そんな俺が俺にしかできない事なんてたかが知れてる。自分の気持ちを結束バンドのみんなに正直に伝える事しかできない。

そんなものが力になるのだろうか。

「清水君の言葉は、思ってる以上にあの子達に響きますから」

「……え、それって」

「おい優人、そろそろ始まるからこっち来い」

どういふ事だろうと聞こうとしたら、背後から声がかかった。

店長だ。

「癪だが今日は客が少ないからお前も後ろで観とけ」

十八時二十分。

ライブ開始まであと十分だ。

フロアももう暗転しており、PAブースやドリンクカウンターと最低限必要な箇所しか照明は点いていない。

ステージから一番奥、フロアの最後方に俺と店長はいる。ついでにきくり姐さんも。

「やっぱり少ないですね……」

「十人しかいないからな。この人数だし、ドリンクは客が必要そうになったらカウンターに向かえばいい。それまではここでライブ観てていいぞ」

「少しでもギャラリーを多く見せるためですか？」

「別にそういうんじゃないやねえ。……ただ、あいつらの初ライブはちゃんと見てやりたいだ

けだ」

それ余計本音出てませんか？ 用法用量間違えてツンデレデレみたいになってますけど。

「先輩は身内に甘いからね。妹ちゃんの事になると余計だねっ」

「うっせカス」

「ほらきくり姐さん、酔い止めと水です。今のうちに飲んでおいてください」

「え？ 何でしみず君がこんなの持つてんの？」

「チケツト買ってくれたから今日来ると思って一応用意しておいたんですよ。見た時は反射で逃げちゃいましたけど、案の定用意しといて正解だったみたいです」

この人の場合酔い止め飲んでもまたすぐ酒飲みだから効果あるか分からんけど。

まあないよりはマシだろう。絶対自分で酔い止めとか用意してなさそうだし。

「しみず君……いや優人きゅん……君こそ私の理解者であく！」

何を思ったかこの泥酔女、いきなり飛びかかってきた。

「うおあつ!? 急にくつついてくんな! ええい離せ! HA☆NA☆SE!! てか

近えし酒くせえ!」 店長ヘルプ!」

「本番前だつてのにうるせえよアホが」

「ばうっ!」

見事店長から綺麗な脳天チョップを喰らった酒カス姉さんは床に崩れていった。あ、優しくを心掛けているのに最近沸点が低くなつてしまつてるような気がする。いや、ピンポイントで刺激してくる人が悪いんだ。きつとそうだ。

うるさいのが静かになつた事で再びフロアは客の微かな喋り声だけが聞こえる。ダークな雰囲気へと戻る。

辺りを見渡す。結束バンドを見に来てくれたのは、現状きくり姐さんと路上ライブに来てくれたあの二人組のお姉さん達だけだ。

他の人達は、パツと見でどのバンドのファンなのかは分からない。喜多さんや虹夏さんの知り合いも来れないって言つてたもんな……。おそらくリヨウさんの方もダメそうだ。

基本ライブハウスで複数のバンドがライブをやる場合、順番やお目当てのバンドかどうかで客がステージの前まで移動したり後ろに下がる事がよくある。

好きなバンドなら近くで見たいと前に行く、お目当てのバンドが終わつたら次のバンドのファンにステージ前を譲るために後ろへ下がるというような事だ。当然移動しな

人もいるが、それもその人なりの楽しみ方なので特に悪いという訳ではない。

結束バンドは今日トツプバッターを務める。

だから結束バンド、基後藤さんのファンであるお姉さん達はステージ前にもういる……のだが。

「他に誰もいない、か……」

俺と店長と一緒にいるきくり姐さんを除いて、お姉さん達の他にステージ前で待機している客は一人もいなかった。

仕方ないとは分かっているけど、メンバーじゃない俺でさえくるものがあつた。おそらく後藤さん達も楽屋方面から覗いてるはずだが、これを見て上手く演れるのか……？

彼女達なら大丈夫と信じたけれど、今日は大切な初ライブだ。

場合によっちゃ今後に響く可能性だって少なくはない。何とか成功体験として無事に終わってほしいんだけどな……。

と、そこで話し声が聞こえた。

「ねえ、一番目の結束バンドって知ってる？」

他にも喋っている客はいるが、縁の深い単語だったからか、それはハッキリと聞こえ

た。

いいや、聞こえてしまった。

「知らない。興味ない」

無数の称赞コメントが送られてくるのに、たった一つだけあったアンチコメントだけが妙にしっかりと見えて気になってしまう。

まるでそのような現象だった。

「観とくのたるいね」

ほんの一つの心ない言葉の針は、刺さる。とても簡単に。

それでいて中々取れるものではなく、無理矢理取ろうものならその小さな穴からどんどん流れていく。

自分を支えていた自信、自尊心、誇り、プライド、自己肯定感が抜け落ちていくのだ。

やがで残るのは虚無か虚勢のみ。チクチクと痛んだまま、その傷は毒へと変わり体内を蝕んでいく。

彼女達の努力が、否定された気がした。

「……………」

「待て優人」

移動しようとしたら不意に手を掴まれた。

「そんな顔して、何するつもりだ」

「でもっ……………」

俺は今、どんな顔をしているんだろう。

自分でも分からなかった。答えられなかった。ただ、店長の俺の手を握る力がとても強い事だけは分かる。

「良いか、客にとっちゃそれが普通なんだよ。どんな有名フェスや対バンでも同じ、自分が興味ないバンドに関しちやだいたいこのヤツらがそう思ってる。ましてや知名度もない無名バンドなら尚更な。知らないバンドっていうのは、それだけで理不尽にそう思われるのも仕方ないんだよ。これからバンドを続けてくなら嫌でもこういう事が起き続ける。それを覚悟して乗り越えていかないと意味がないんだ」

「ッ……………」

知名度もない、ともすれば人気もないのは必然。店長の言ってる事は充分理解でき

る。

実際どれだけでも有名なロックフェスでも、自分の知らないバンドにまで興味が出てくると聞かれればすぐには首を縦に振れない。

いいや、ロックバンドだけの問題じゃなく、アイドルやアニソンプエスなんかでもきつと一緒になんだと思う。

まだ無名で興味のないものに最初から興味を持ってというのは難しい話なんだから。人気アーティストだとしても、知らない人や興味ない人からすれば何も変わらない。

だからそう思われても仕方がない。

何を言われても我慢するしかない。店長はそう言っている。

そんなので、そんなので……納得しろっていいのか。

仕方ないと我慢して震えてろっていいのかよ。

「……あ」

そこで気付いた。俺が握り締めている拳と同じくらい、店長が俺の手を掴んでいる力も強く、そして震えていた。

我に返る。俺が脱力していくのを確認したのか、店長も離してくれた。

「……ありがとな。代わりに注意しようとしてくれて」

あの店長が珍しく素直に感謝の言葉を述べる。

「店長の立場じゃなかったら、私もお前みたいに行つてたかもしれねえ」

ああ、この人も気持ちは一緒だったんだ。

妹のバンドがバカにされたような気持ちになつて、それでも店長という立場があるから割り切つている。ように見せている。

同時に、自分の未熟さに腹が立った。

感情のままに動こうとした自分がどこまでも浅はかな子供で、軽率なだけでしかないバカという事が思い知らされた。

「行くなら裏に行つてこい。今ならまだギリ間に合うかもしれねえ」

「……え？」

「お前にしかできない事をしてこいって言つてんだよ」

「ツ……はいっ」

言葉の意味をすぐに理解して俺は急いで裏に回り楽屋へと走っていく。

時計はもう十八時二十五分。ステージに出て機材の準備をする時間だ。間に合うか

……!?

裏手の通路から楽屋に入ると、まだいた。

「あつ……優人くん……」

虹夏さんの表情を見て察してしまった。

多分、あの会話を聞いていたんじゃないかと思う。

「あ、あははあく、優人くんも聞いてたよねつ。あたし達結成したばつかでまだ知られてないからさ……し、仕方ないよ！ 大丈夫つ、落ち込んでなんかないから！」

いつも明るい虹夏さんだからこそ強がりだとすぐに分かった。

メンバーが少しでも沈まないように無理して笑っているんだ。それが見ていて辛い。他のみんなも同じようだった。

「そ、そうですよ！ 私達はこれからですもんね！」

「気にしない気にしない」

「は、はい……」

みんなそれぞれ気にしないようにしている。そうしないと表情に出てしまいそうに

なるから。

俺は何を言おうとした。発破でもいい、激励でもいいから言ってるのが俺の役割だろ。なのに、どうして言葉が出てこない？

こんなになつてきているみんなを目の前にして、下手に何かを言ってる余計プレッシャーを与えてしまう事への恐怖が、俺の口を閉ざしている。

俺の言葉がプラスよりもマイナスになつてしまつたら、きつと俺は今後彼女達に何も言えなくなつてしまう。それが怖くて、上手く言葉にできない。俺にしかできない事が、余計に足枷になつてしまつていた。

「あ、もうステージ行かなきゃだから行くね！ 優人くんもフロアで観ててね！」

そう言つて虹夏さんはステージに向かつて行つた。

続いてリョウさん、喜多さんも。

何をやっていているんだ俺は。店長にも結束バンドを支えてやれって言われたんじゃないのか。言われなくともって返したのはどこのどいつだ……。

土壇場で怯えてちゃ何の意味もないだろうが清水優人!! 何があつても支えるって決めた言葉に？を付くな!!

結局どこまでいつても自分はただの高校生で、見栄を張つても大仰なセリフを言つて

もいざとなれば何もできない。

どこにでもいる平凡な高校生。それが俺だ。

でも、だけど。

ここだけは、引いちゃいけない。ここを逃せば自分すら変えられない。こんな
じゃ、憧れたヒーローになんかなれやしない。

だから!!

「後藤さん!」

最後にステージへ行こうとしていた彼女を呼び止める。

時間が迫っているから長くは割けない。できるだけ手短かに、俺の伝えたい事だけを上
手く伝えるしかない。

後藤さんなら、俺の言葉の意味を分かってくれと信じて。

「俺は……ちゃんと見てるから、誰よりも結束バンドの事を理解してるから! みんな
がたたくさん頑張ってきた事も知ってる。だから……!」

ああ、くそっ。

やはり上手く言葉が出てこない。ちゃんと伝えようとしても頭の中がこんがらがっ

てくる。

ダメなのに、ここで言わなきや俺の役割の意味がないのに……。今は後藤さんの顔すら見れない。下を向いてしまっている俺には、前すらも見えない。

と、小さな足音があつた。それは下を向いてる俺の視界に入ってきた。見慣れたピンクのジャージだ。

「ゆ、ゆうくんの伝えたい事、ちゃんと伝わったから……」

声が聞こえて、俺は顔を上げた。

前髪で隠れ目がよく見えない。常に猫背で不格好なはずの彼女がいた。

後藤さんは俺の両手をそっと包み込むように両手で掴む。

また知らないうちに力強く拳を握り締めていた事を今更理解した。やっぱりフロアで喋っていた時もバレていたのかもしれない。

自然と力が抜けていくのが分かる。

「だ、だからね……」

目の前の少女は俺を見てこう言った。

「私を見てて」

ライブが始まった。

「初めまして！ 結束バンドです！ 本日は足元の悪い中お越しいただき、誠にありがとうございます！」

「あっはは、喜多ちゃんロックバンドなのに礼儀正しすぎ〜！」

「あはは……」

後藤さんフアンの二人しか笑っていなかった。しかもほとんど愛想笑いだ。

俺は急いでフロアの最後方に戻り、店長ときくり姐さんと一緒にライブを観ている。店長は俺に何も聞いてこなかった。踏み込むラインを弁えてくれるのだと思う。今はそれがありがたかった。

にしても、ホームのはずなのに、アウエー感しか感じられない。

MCも台本のせいで思いつきリスベっている。空気感で言えば最悪だ。喜多さんや虹夏さんもこの空気に？まれてる。マズいぞ。

「あ、じゃ、じゃあさつそく一曲目いきます！ 聴いてください、私達のオリジナル曲で

『ギターと孤独と蒼い惑星』」

オーデションでもやった曲。

今の所では彼女達の一番得意な曲だ。リハでも上手くできていたし、派手なミスでもない限りは大丈夫なはず。

そう思っていた時にはもう、違和感に気付いてしまった。

「……ズレ、てる？」

イントロの部分から既に、変化は表れていた。

「こりゃあ、呑まれてんな」

隣の店長がそつと呟いた。

「虹夏のやつ、ドラムがもたついてる」

「喜多さんもリハではできてたのに今は上手くできてない……」

「リヨウも虹夏と全然息が合ってねえ。このままだとやばいかもな」

全体的な音にズレが発生している。ライブでは割と致命的なミスを連発してしまっているのだ。

店長の言っていた意味が分かった。どれだけリハで上手くできていたとしても、本番ではどうなるか分からない。その場の空気によつて演者のメンタルも変化していくからだ。

しかもそれが悪い方向に行つてしまうと、素人でも分かるようなミスを続けて客側の興味も薄れていってしまう。

現に辺りを見渡すと、後方の客はみんなステージを観ずにスマホを触っているか爪を弄つたりしていた。こんなに客が少ない状態であからさまにスマホを見るような行為をしている事に腹が立つが、今の演奏は俺でも分かるような酷さだ。

喜多さんの歌声も緊張と不安で震えてるし、虹夏さんとリヨウさんも目を合わせずリズムとして機能していない。

唯一、後藤さんだけがブレずに演奏をしている。他が変にズレているせいか、逆に後藤さんのギターが正確に聴こえているんだ。一切のミスもせずに行っている。

サビに入る瞬間、一人の客が奥のイスに座りに向かつていくのが見えた。

そんな、ことが、普通にできるのか……？ 今精一杯頑張つて彼女達が演奏してるつてのに、何も感じる事なく平気で移動なんかできるのかよ……！

それを目の当たりにしたからか、喜多さんの歌声と表情が余計に変化している。あの喜多さんがだ。不安でたまらない顔をしていた。

結局、きくり姐さんと二人組のお姉さん達以外誰もリズムを取る事なく一曲目は終了した。

「『ギターと孤独と蒼い惑星』でした……」

今までバイトで色んなバンドを見てきたが、こんなに反応がないのは初めてだ。

残響も終わり、一旦ステージが静寂になった瞬間、聞こえた。あの二人組だ。

「やっぱ全然。パツとしないわ」

「早く来るんじゃないかね」

「あつえつと……」

プツンツと何かが切れる音がした。

「そん——」

俺の声が出る前に、後ろから店長に口を塞がれホールドされる。

「(落ち着けバカ! ここでお前が変な事言っても状況が悪くなるだけだろうが。余計あいつらを追い込みたいのかお前は!)」

「ツ………すいません」

店長に諭され気分を落ち着かせる。そうだった、もう少しで俺自身がこのライブの空気をぶち壊すところだった。

そんな事をしては本末転倒だ。

「それにお前だけはちゃんと見てやらないと意味ないだろ」

言われて、ステージを見る。

喜多さんも虹夏さんも戸惑い気味でどうMCを続かせるか迷っていた。リョウさんもベースを見て可能な限りフロアを見ないようにしている。

「喜多ちゃん、次の曲紹介しないとっ」

「あつえつ、そ、そうですねっ。えつと、次も私達のオリジナル曲で、つい先日できたばかりなんです……!」

みんなが不安の空気の中、一人だけ纏っている雰囲気が違う者がいた。アウエーでしかなく、淀んだ空気が漂っているのに、むしろその逆に行くような……そんな感覚さえ感じた。

そうだ、彼女は言つてたじゃないか。

紛れもなく俺に、「私を見て」と。

一曲目でも彼女だけは普通に演奏できていた。それが何を意味するのか。

よく見ろ。今だけは彼女から目を逸らすな。全ての意図を探れ。あの言葉の意味は、きつとそこにある。

曲紹介の途中、誰も気付かないレベルで彼女の顔が動く。

前髪が垂れて見えづらくとも、俺だけが分かった。

蒼い瞳が、確かに俺の瞳を捉えている。

つまりは、後藤さんと目が合った。

アイコンタクトの合図だ。

……そういう事か。

「あ、おい」

店長から離れ、瞬時に俺はPAさんのところへ向かう。

できるだけボリュウムを押さえ、それでも上にいる照明さんにも聞こえるように。

「すいませんっ、急遽ギターソロ入ります！」

「っ、ええ、任せてください」

瞬間、フロア内にギターの音だけが響き始めた。

一曲目はボロボロだった。

みんなさっきの会話を聞いて落ち込んでるんだとすぐに分かった。

かくいう私もその一人だったから。

だけど、今は違う。

私は彼から言葉を貰った。勇気を貰った。

彼の普段からすれば拙い言葉だったけど、それでも私にはちゃんと意味は伝わったんだ。

どんな状況でも彼は、ゆうくんだけは私達の味方でいてくれる。理解してくれている。

なら、ゆうくんにかっこ悪いところなんて見せられない。見せたくない。いつもこんなだらしのない私の側にいてくれる彼には、せめてライブだけはかっこよく見てほしい。

こんな空気が何だ。

こんな不安が何だ。

エフエクターを踏んでギターを掻き鳴らす。フロアの空気が一変した。

元々予定にないギターソロを始めた私にみんなどんな視線を向けているかは分からない。今まで以上に視線を下に向けているから、私の視界に自分の足元とギターしか映っていない。

ギターを弾いていたら、いきなりリバーブとモジュレーションがかかった。

良かった。ゆうくんが伝えてくれたんだ。アイコンタクトだけで伝わるか分からないけど、信じて正解だった。

ありがとう、これで思いっきり自分の世界に入れる。

みんなの不安を少しでも吹き飛ばせるように、リードギターである私みんなを引っ張るんだ……！ こんなピンチくらい乗り越えないと、ヒーローなんて言えない！

結束バンドのみんなをリードする。そして私達に興味を示さなかった人達を置き去りにするほどの演奏で圧倒してみせる。

ギターヒーロー。

ありふれた名前だけど、私にはちゃんとした由来がある。

いつか小さかった頃、ゆうくんはヒーローが大好きと言っていた。どんなピンチにも駆け付けて諦めずに立ち向かい、みんなを助けるのが凄くカッコいいって。

キラキラしながら満面の笑顔でそう言っていたのを私は子供ながらによく覚えていた。ずっとその顔が頭から離れなくて、もし私がそうなったらどんな顔してくれるのかなって何度か妄想した事もあった。

結局私の性格は暗いままで一時ゆうくんとは離れ離れになったけど、いつか私もゆうくんの憧れるようなヒーローになりたいくて動画サイトではそう名付けたんだ。

フアンの人々にかっこいいと思われるようなギターヒーローになりたくて、ちやほやされたくて、人気者になってまたゆうくと再会した時は恥ずかしくない私になつていようと練習を続けてきた。

気付けばギターだけが上手くなり学校生活も変わらないまま中学生も終わるのかなと思つてたら、突然ゆうくと再会した。

名前の呼び方が変わつててももの凄く悲しかったけど、ゆうくんは私なんかのために手

を差し伸べてくれて引っ張ってくれたのを覚えている。

あの日から、ゆうくんはずっと私のヒーローだったんだ。

何も変えられない私に小言を言う事もあるけど、絶対に見捨てないでいざという時は助けてくれる。

そんなゆうくんだから私は……。

そんな私だからゆうくんには。

私がかっこいいギターヒーローなんだってどこを見せたいんだ!!

一瞬で流れが変わった。

こんな俺でもそれはすぐに感じ取れた。

後藤さんのギターソロでフロアの客全員がステージに釘付けになり、ステージ上のメンバーは何かを察したようにお互いの目を見合わせ、PAさんと照明さんがアドリブに

合わせてくれて次の曲が始まった。

あれだけ淀んでいた空気が消えている。

『あのバンド』。

結束バンドの新曲。腹の底から込み上げてくるようなイントロから喜多さんの歌声で曲の幕が上がる。

練習で何度も見ているはずなのに、俺はどうしようもない高揚感に襲われていた。

一曲目とは対照的にこの曲ではみんな息が合っている。後藤さんに関しては相変わらず一人だけ突っ走っているようにも見えるが、今はこれで正解だと思う。

そうだよ、それでいい。

アウエーの空間なんて逆に？み込んでいけ。興味なさそうな客なんて置き去りにするつもりで自分のギターを見せる。誰も追いつけないような迫力と演奏で全てを魅了してしまえ。

ああ、ダメだ。気付いたら口角が上がってた。さっきまであんなにはらわたが煮えくり返そうだったのに、今は違う意味で腹の底から声を上げてしまいそうだった。もはや武者震いの領域だ。

これが見たかった。こんな後藤さんが俺は見たかった。

ライブで自分の好きなように演奏してみんなを取り込んでいく。それこそが彼女の

魅力の一つだ。

本当にピンチを変えやがった……。チャンスに変えやがった！ この盤面をひっくり返せる實力を持つてるのが後藤さんなんだよ！

ちくしょう、最高にかっこいい。

これこそが俺の憧れたヒーロー。

まさしくギターヒーローだ。

みんながみんな顔を上げている。あの二人組でさえ。

たまらない。このどんでん返しが本当にたまらない。俺の幼馴染は、こんなにもかっこいい一面もある。いけ、バカにするヤツは實力で黙らせればいいんだ。

虹夏さんとリョウさんが後藤さんの演奏に息を合わせにいき、喜多さんの普段とはギヤツプを感じる歌声が曲の少しダークな雰囲気を連想させていく。

おそらく、どんな練習の時よりも完成度は高いと思った。その理由の一つに後藤さんの姿勢が関係していると思う。

超前傾姿勢。

一切前を見ようとせずずっと下を向いて演奏する事でギターだけに意識を集中させ、普段彼女が家で演奏しているような没入感を演出できる。ギターヒーローならではのやり方だ。

あえてみんなに合わせようとせず自分のペースに合わせさせる事で、少しでも本当の実力に近いける唯一の手段。

少々手荒だが、だからこそ土壇場のライブでは沸き立つ。そして、そして、そして。興奮冷めやらぬ中、演奏が終わる。

客の反応は先ほどとは違って真逆だった。

およそ十人の観客。その全員が拍手を送っていたのだ。

小言を言っていた二人組の声も聞こえる。

「ちよつといいじゃん……」

「ね……」

手のひら返しと言えば聞こえは悪いが、ライブの演奏においてそれをさせるのは相当難しい。

きっかけは後藤さんだったけれど、この称賛を勝ち取ったのは間違いなく結束バンド全員の力だ。

「(はは、ざまあみろ)」

「(声出てんぞ。へへ)」

店長と二人で拳を突き合わす。俺達の気持ちは一緒だった証拠である。何かパシヤリと音がしたけど気のせいだろう。

ステージ上では後藤さんが我に返ったのかキョロキョロ見回して虹夏さんにグツグツジョブされていた。

そして次に彼女は俺の方を見てきた。客からは分かりにくいように下の方で親指を立てている。

バカ、まだもう一曲残ってるだろ。

そう思いながらも、俺は後藤さんに向かって思いきり腕を伸ばして親指を立てる。

俺のできる限り満面の笑みを乗せて。

30. 打ち上げは楽しいけど疲れる

かんぱあ〜い！ という声が店内で響く。

俺達は今スターリーでのライブを無事に終え、片付けが終わってから徒歩十分ほどの場所にある海鮮居酒屋『かおみせ』に来ていた。

そう、ライブの打ち上げだ。パーリナイだ。

あれだけ荒れていた台風もライブ中に通過して天気は回復し、絶好の打ち上げ日和になった訳である。

「ライブよく頑張った。今日は私の奢りだから飲め」

「お姉ちゃんありがとー！ あたし達飲めないけど」

俺の隣にPAさん、店長、何故いるのか分からないきくり姐さん。

対面の後藤さん、虹夏さん、喜多さん、リヨウさんという席順になっている。

何気に居酒屋来たの初めてかもしれない。こういう場所は酒が飲める大人しか来ない印象があったけど、今はそうでもないのか。

中学生高校生とかはカラオケとか焼肉に行くイメージがある。あくまでイメージだ。俺は家事ばかりやってたからそういうのに縁がなかったし、あったとしても事情を知ってる友人達からは一度も誘われた事がない。彼らなりに気を遣ってくれてたんだろ。……あれ、何故か今更悲しくなってきたぞ。

「わーい先輩しゅき〜！」

「お前は自腹だよくつつくな！」

隣の隣ではきくり姐さんが店長に抱き付いていた。おかしい、女性同士の絡みをもってキラキラしてるはずなのに……てえてえとか何とも思わないぞ。

やはり女性同士というより女子同士なのかね。やっぱごちうさとかきんモザって偉大だわ。だって凄いきらキラきらららしてるもの。

酒臭い大人同士はもうダメである。だって酒臭いもの。主に一方が。

あ、そういうえびさつきここに来る前コンビニでこういう事もあろうかと思つて買ったのがあつたな。えつと……あつた。

「きくり姐さん、もう手遅れかもしれないけどまた飲み過ぎる前にこれ飲んでください。ウコンの技かぜパリーゼ、どちらか好きな方どうぞ」

確か飲酒する前に飲めばいいやつだったよな。この人もう飲んでるけど大丈夫なんだろうか。うん、まあないよりはマシだろう。

「んもう、やっぱ優人きゆんは気遣いの鬼、いや阿修羅だね〜！ ちゆき〜！」

「うがあーツ!? だからいきなりこつち来てくつついてくん……つ、ああもうつ……はいいい、分かりましたからまずはおちゃんとお飲みませうね〜」

「うへへあ〜、優しい男には弱いぞ〜！」

「優人くんが阿修羅じゃなくて急に菩薩みたいな顔になつて優しくなつた!?!」

心を殺し、俺はくつついてきた酒力……きくり姐さんの背中をあやすように叩いて落ちて着かせる。ついでに自分の気持ちも。ていうか酒臭いな。

心頭滅却すれば泥酔女もまた普通の女子。よし、いけるな！ いけるか？

「わはは〜！ 優人きゆん代わりに飲ませろ〜！」

「どつちが良いですか？ それとも両方ぶち込みますか？」

「てつ、ててててていうかその人どなたなんですか!?! 清水君と近すぎますけど!」

ナイスだ喜多さん。良いパス出した！

喜多さんの質問にきくり姐さんは俺の肩を組みながら、

「誰よりもベースを愛する天才ベーシスト、廣井きくりでええす！　ベースは昨日飲み屋に忘れしましたあ。どこの飲み屋かも分かんない。どうしよう優人きゆうん！」

「どうしようかあ」

「一瞬で矛盾したんですけど……というか近いですつて！」

喜多さんのナイスパスはきくり姐さんのキラージュートによつてゴール外へぶつ飛んで行った。ブルーロックに入つて訓練してきてほしい。あと超酒臭い。

いまだに俺から離れずぐ隣で酒の匂いを撒き散らかしているきくり姐さんをどうしたものかと考えてると、天から救いが差し伸べられた。

「優人、泥酔女には普通にキレて良いぞ」

「占めた！　ええい離せ酔っ払い！　さっさとドリンク飲めこの野郎!!」

「ぶへあつ!!　いきなり天国から地獄に墮とされた?」

店長からの許可を貰いきくり姐さんをひっぺがし元の席まで転がす。吐かなくて良かった。

うっ、間近で酒の匂い嗅ぎ過ぎたか。一瞬視界がぐらついた。父さんもいつも酔っ払つて帰つてきてたし、もしかして俺酒弱い説ある?　いや、きつとたまたまだ。父さ

んを介抱してた時もベッドに連れてく間ずっと酒臭い息吐きながらしゃべってたけどこんな事はなかったし。

目の前にあったコーラを一気に飲みして微かに感じた変な感覚を全て掻き消す。喉
いっつった!!

俺が喉の痛みと格闘してる間に、リョウさんが実はきくり姐さんのバンドのファンだ
という事が分かったらしい。話を聞く限り相当ヤバイライブをしているとの事。客に
酒吹きかけるとかありなの？

「お前絶対ウチでライブさせねえわ。酒撒き散らかされるの堪ったもんじゃねえし」

「え〜みんなそれで結構喜んでくれますよ〜?」

「ウチに来るのはヘンタイバンドのファンばかりじゃねえんだよ」

まあうちの後藤さんステージでバチボコ吐いてましたけどね。

「でもまあ、とりあえずライブ盛り上がって良かったね〜!」

「観客十人くらいでしたけどね」

「でもその人達は全員満足してくれたじゃない!」

「ですかねっ」

実際、結果的にライブは成功した。

結束バンドはトップバッターだったけど、それもあってか最初に植え付けた印象は強く、ライブ終わりには結束バンドの事を話している人も何人かいたのだ。一曲目がああだっただけに、後藤さんのギターソロから入った二曲目のインパクトは強かったんだと思う。

ほんと、彼女達が全部頑張ったおかげだ。

「ま、続けてればどんどんファン増えてくよ。だから次のライブでも頑張れよ。ちゃんとノルマ代は払ってな」

「最後のがなかったら感動したのに……」

「ツンデレなんですよ」

「何か言ったか？」

「いえ何も」

PAさん越しに睨むの怖いんでやめてください。

寒すぎてツンドラかと思っちゃった。

「それより後藤さんどうします？ さつきから動きませんですけど」

「真っ白に燃え尽きてる!？」

「ぼっちちゃん灰にならないで!」

ずっと黙ってるかと思えば彼女はジョー的な何かになっていた。

いや、パトラツシユか? 色々交ぎつてない? やめろ、それは俺の専売特許だぞ!

「後藤さん、腹減ってんだろ? ほら、何か頼みな」

「あっはい」

起きた。さすがによく食べる子は食に敏感だな。

ついでに俺も一緒にメニュー見させてもらおう。と思つたら虹夏さんも後藤さんに寄つてきた。

「ぼっちちゃん何にするー? あたしはね、から揚げ頼みたいかなあ。ね、優人くん」

「お、いいですね。じゃあ芋餅とかもいっちゃいます? どうよ後藤さん」

「あっうん……良いと思う……」

海鮮居酒屋つて聞いたけど、結構バリエーション豊富なんだな。

というか虹夏さん、後藤さんがジャンクというかこういう子供が好きそうな物が好

きって分かってきてるな。自分で主張しにくいから代わりに選びそうな品を選出して
くれてる。そのうち後藤さん係の副班長に任命してもいいかもしれない。

「他に食べたいもんとかあるか？　せつかくの居酒屋なんだし、他じゃ食えないような
物とか頼もうぜ。海鮮はいけるんだっけ？」

「う、うん……大体は大丈夫……サーモンとかマグロは好きな方、かも」

子供舌にも程がありませんかね後藤さんや。いや定番つちや定番だけどさ。

変に尖ったもの頼むよりかは確実に食べれるやつの方が良いか。無難にお造りとか
にしておこう。後藤さんが無理そうな物あっても大人組に全部食べてもらえるだろ。

食べるよりも飲む方優先するみたいだし腹も満たされてないはずだもんな。

現にリヨウさんとかはバクバク食ってんにP Aさんやきくり姐さんは飲んでばっ
かだ。店長は……、

「何で消えかけてんの？」

「喜多ちゃんの陽オーラにやられちゃったみたい」

ああ、どうりで喜多さんの背後がSSR確定演出みたいになってる訳だ。いやもしくは
ゲーミング喜多さんか？

「後藤さんはもう良いか？ ほい喜多さん、こっちは決まったからメニュー」

「ありがとうっ」

何でメニュー貰っただけでそんな眩しい笑顔になれるんだろ。顔の筋肉疲れないのかな。

「えーと……じゃあ私、アボカドのクリームチーズのピンチョス。あとスパニッシュオムレツのオランデーズソース添えください！」

「なんて？」

「このオムレツ、オランデーズソースのやつです！」

「オランダ……？」

喜多さん随分とオシャレなもん頼むのな。海鮮居酒屋なのにそんなものもあるのか。海鮮のページばかり見てたから気付かなかった。

そして店長は店長で何も分かってないってマジ？ あなた料理とかしない系女子の方ですか。確かに珍しい名前かもしれないけどせめてピンチョスくらいは知ってると思ってた。

「基本的には小さく切ったパンの上に少量の具材とか乗せて串か爪楊枝に刺してるやつがピンチョスで、スパニッシュオムレツが色んな具材を炒めてから溶き卵を入れて円形状に焼くやつですよ。簡単に言えば具材入りのオムレツですね。オランダーズソースは確か、バターに卵黄とレモン汁塩コショウで作られたソースだったような……。エツグベネダイクトとかによく掛かってるあれですよ」

「エツグイベネズエラ……?」

ダメだこの店長、音楽の事はめちやくちや詳しいのに料理の事になるとアホになる。

「清水君詳しいのね?」

「ん? ああ、喜多さんには話した事なかったつけ。俺小三から中三の途中まで父親の単身赴任に付き合っただわりに家事炊事諸々やってたんだよ。だから大体の料理は知ってるし作れると思う。海外料理のレシピも見てたし割といけるかな」

「ず、随分と家庭的なのね……」

何でちよつと落ち込んでんだよ。褒められると思ったのに。

あの頃は真面目すぎて一カ月間毎日ローテーションみたいに料理が被らないよう、どうにかレパートリーを増やすために色んな料理を調べたり動画など見たものだ。

さすがに被らなすぎて父さんから心配されローテーションでも大丈夫だよって言わ

れた時の安堵感を今でも忘れない。

子供の吸収力って凄い。やろうと思えば海外の料理まで覚えちゃうもんな。フイリピン料理のシシグとかカンボジア料理のクイティウを出した日には何これ？ って言われた事もあった。めっちゃ美味いって食べてくれたけど。

「変なところで生真面目すぎなんだよお前は。お堅い委員長か」

「ウツ、痛い所を……」

店長からの言葉が刺さる。ちょっと今はチクチク言葉やめてくれませんか？

あなたツンデレのツンだけに徹したらただの毒吐きヤンキーだからね？

いかん、気を紛らわさないよ。

「……何をぶるぶる震えてんの君は」

「わ、私もオシヤレっぽいもの頼みたい……」

どこに対抗心向けてんだこの子。あの陽キャ代表みたいな喜多さんに勝てると思ってるのか？

やめとけ、浄化されるぞ。悪い事は言わんから普通にフライドポテトとか頼んでおきなさい。可哀想な事か面白い事しか起きないの優人さん知ってるんだからね！

「ぼっちちゃんは何頼む？」

あーつとここで後藤さんの事がお気に入り、の店長から無駄なパスが通つてしまふー！

果たして彼女はこのパスをどうするのかあー!?

「あつじやあ……マチュピチュ遺跡のミシシツピ川グランドキャニオンサンデイエゴ盛り合わせで……」

「なつ何イ……!?!」

「マチュピチュマチュピチュ……ど、どこだ……!?!」

店長が何やら真面目に探しているがそんな事はどうでもいい。そう、どうでもいい。

後藤さんがどんなふざけた注文をするのかと思つていたら、まさかの珍回答だったのもどうでもいい。ただ俺はいつも成績悪いこの子が世界で有名な土地や遺産をちゃんと言えてる事に感動しているんだ。

アホの子の成長ほど嬉しいものは中々ない。後藤さん、よくふざけながらマチュピチュ遺跡なんて言葉が出てきたな。偉いぞ、本当なら褒めてやりたいとこだが絶対メニユーにないからそれはナシで！

よーし、俺が後藤さんからのキラーパスを繋いでやる！

「じゃ俺はアルティマヤ・ツイオルキンドラゴエクイテスアルティミトル・ビシボールキンのゴギガ・ガガギゴ添えで！」

「絶対ねえだろふざけんな！」

何か言いにくい遊戯王のモンスターじゃダメだったか。すまん後藤さん、ゴール外したわ。

「ならフライドポテトで」

「ならも何もないだろ……」

しばらくすると頼んだ品が色々やってきた。

サーモンなどのお造りとポテトを後藤さんの近くに置くと、彼女は静かに嬉しそうな反応をした。まるで待ちに待ったおやつ時間を迎えた子供だ。

ポテトを一つ取って小さく頬張ると、美味しそうに頬を緩めている。俺なんか一口で食べるのに女の子ってこういうものなんだろうか。

小動物にしか見えない。何だかこちらまで頬が緩んでくる。こうしていると普通の可愛い女の子なんだけどなあ……。奇行がなあ……。

「美味しいか？」

「う、うんっ」

「そっか」

ライブの時のギャップが激しすぎて見てるこっちが混乱しそうになってくるレベル。

まあ無理矢理ポジティブに捉えるなら色んな一面が見られるってところか。八割ほど見たくない一面なのがネツクだけど。

後藤さんがポテトともももつと謎の擬音を発しながら食べているのを眺めてたら、一番遠くにいるリヨウさんが話しかけてきた。

「優人、このスプラッタオムレツ作れる？」

「スパニツシュな。意味合い怖えわ。一応作れますけど、それがどうしたんですか？」

「美味しい。だから今度作ってきて。虹夏でもいい」

「じゃあ最初から虹夏さんでいいじゃないですか」

「虹夏はあまりがつつくと騒がしいから」

「聞こえてるよりヨウ」

「ああ、いつもの発作ですね。顔もズレ始めてる。修理作業に入ります」
「あれいつものなんだあ〜！」

確かトートバッグの中に修理用具は常備してたはず……と、あったあった。

「怖いんだよな、ぼっちちゃんのこの顔」

「そうですか？ 結構味があると思いますけどっ」

「マジかよ……」

マジかよPAさん、この顔癩になつてきてんの？ いや俺も割と長く見てきたから何とも思わなくなつてるけど、さすがに味があるとは思わんよこれ。

人間じゃないもの。

「喜多さんとリョウさん手伝つてくれ」

二人を呼んで俺は両手を病院ドラマでよく見るあのポーズをする。

これより、手術を開始する。

「喜多さん、紙やすり」

「はいっ」

まずは両目を元の位置にかざし、紙やすりで擦り付けていく。よし、こんなものだな。

「鼻はリヨウさんに任せます」

「よしきた。紙やすりこつちにもちようだい」

「どうぞー！」

リヨウさんが鼻を直している間に俺は口と顎の作業に入るとしよう。

顎の修繕はトンカチで長さを調整しなきゃいけないから集中しないと。

「喜多さん、トンカチ」

「はいっせんせつ」

乗り気だな。

トンカチで叩きながら紙やすりで形を整えていく。

「……よし、この調子でいけぶえつくしよいつ!!」

あ、やべ、ミスった。

いやだつて急に鼻ムズムズしちゃって……。

「まあいつか」

「よくないでしょ！何か凄く顎長くなってないかしら!？」

確かに。よく見ると顎が少し長いような気もする。無駄に鼻も高くなってるような……。

学園ハンサムかと思つた。あるいは御門。

「また修正し直さないとか……結構大変なんだよなこれ」

「私がトンカチやるから清水君は紙やすりでやって分担しましょ。ね?」

「私は終わったから戻つて酒盗食べとく」

「鼻もおかしいんだからアンタも手伝えやあ!」

居酒屋では本来聞こえない工事音と共に、無事後藤さんの修繕は完了した。

「ふう、疲れた」

「あつ、ありがとゆうくん……」

いつもの暗い顔に戻つておる。我ながら完璧な作業だった。

集中力めっちゃ使つたからか暑いな。ここ冷房の効き悪いのか。

「疲れたんでちょっとトイレがてら外涼みに行つてきます」

誰かの適当な返事（絶対きくり姐さん）を流して席を立つ。

用を足してから俺は一旦外に出た。店の人にはあの金髪の姉さんが全額払うつて言つてるから大丈夫だ。

すつかり雨も上がり、上を見上げると澄んだ夜空が広がっていた。近くにあつた電柱にもたれかかる。

真夏なのにあれだけの台風だったせいか、今は結構涼しい。ほんの十メートルも歩けば道路に出るが、やけに周囲は静かだ。

誰もいない涼しい夜に一人。あれだけ騒がしい店内とは裏腹に、ここの空間は静寂に包み込まれて落ち着く。

楽しい空間にいるとそれなりに気分も盛り上がるけど、逆に言えば何も無い空間に行くとも気分は一定か微かに下降する。

何も考えずバカ騒ぎしていれば余計な事は考えずに済んだのに、それではダメだと外に出た。下手な？ならたくさん出てくる。

そういうところは俺も後藤さんの事強く言えないな。

「……」

きつと、大人ならここで煙草を吸いながらもの思いに耽るんだろう。俺は一生吸わないつもりだからあくまで想像でしかないが。

ただ、思うところはたくさんある。

ライブ終了後、片付けをしている最中に店長に呼ばれ二人きりで話していた事を思い出す。

自分の欠点や反省点をつらつらと並べられ、俺はそれを素直に聞いていた。言い返すつもりも毛頭なく、ただただ店長が正しいと思うからその言葉を戒めと共に胸に刻みつけておくために。

『結束バンドを支えたいならまずお前自身が成長しろ。あいつらの事を本気で思ってるならな』

俺自身の成長。

それが今後の課題。

結束バンドはオーデイションの時にバンドとしての成長を見せていた。

なら俺も変わらないといけない。今後も可能な限り彼女達の側にいるためには、やら

なければならぬ事がたくさんある。俺にできる事なら何だつてやらないと。

『かおみせ』の引き戸の開く音がした。

他の客が出てきたのかと思つたが、まさかの見知つた顔だつた。

「やつほ、優人くん」

「虹夏さん」

「あたしも涼みに来ちやつた。一緒してもいい？」

「もちろん」

沈黙の時間が一分ほど続く。ライブの感想などはここに来るまでに話していたから、特に何か言う事も無い。

店の中からはきくり姐さんっぽい声を中心に騒ぎ声が聞こえる。外まで聞こえるって相当だな。涼みについて言つてたし虹夏さんも暑くなつて来たんだろう。

ただそう思つていただけに、次の虹夏さんからの質問に一瞬目を見開いてしまった。

「優人くんさ、何かあつたでしょ？」

「……………え？」

思わず彼女の方を見る。

虹夏さんは真つ直ぐこちらを向いたまま笑みを浮かべていた。

「そこですぐに何も言つてこないつて事は、やつぱそうなんだね。いつもはふぎけながらすぐ言い返してくるのに」

「……あーそうですつけ？」

「はぐらかし方が雑。そんなのすぐに分かるよ」

顔に出してたつもりはなかったんだけどな。

「あたしはドラムで結束バンドのリーダーなんだよ？ みんなの事をいつも見てるし、

それは優人くんだつて例外じゃないんだから」

「さすがみんなのまとめ役ですね」

「それがあたしだからねっ」

にとつ笑う虹夏さんに思わずこちらも笑みが零れる。

そして、彼女は俺に近づいて、

「それじゃあ優人くんの悩み相談ついでに」

「こう言った。」

「ちよつとお話しよつか」

3 1. 夢は終わらない

ライブ終了後、閉店作業時。

『今日はすいませんでした』

『一応呼ばれた理由は分かっているみたいだな』

スタツフを含めたみんなが片付けている中、俺は店長に呼ばれて受付に移動していた。

イスに座った店長の前に立ち頭を深く下げる。

『俺がしようとした事はあまりにも軽率な行いです。店長に止められてなければ全部台無しにしてしまった。今日ここにいる全員に迷惑をかけてしまってください……』

一時の感情に身を任せて行動する事がどれだけ危険を伴うかよく理解した。

あそこで変に反論しに行こうものならライブ自体中止になってた恐れもあるのだ。

全てのバンドがオーディションに合格してようやくライブできるのに、俺の身勝手な行動でその機会を潰すところだった。絶対にあつてはならない事だ。

『そこまで分かってんならいいよ。とりあえず頭上げろ。高一にんな深々頭下げられちやこつちの気分が悪いわ』

『でも』

『いいから。バイトなら大人しく店長の言う事聞け』

言われて渋々顔を上げる。思ったよりも店長はいつもと変わらない表情をしていた。そのまま受付業務の整理をしながら、

『ぼっちちゃんから色々聞いたけどお前、昔はずっと家で家事やってたんだってな』

『? ええ、はい……』

店長と二人で話せたのか後藤さん。大きな進歩だな。俺の個人情報漏らしまくってるけど。いや言われて困るような事はないけどさ。

というか家事やってたってだけで今の話に関係あるのか？

『友達とも校内以外では一切遊ばず基本ずっと家にいたと』

『そうですけど……』

『叱る事はあるけど誰にでも優しくしてキレる事は滅多にない、と』

『いや、一応そう心がけてはいますけど、後者に関してはここ最近少し守れてないかも……です』

そんな事まで教えてたのか後藤さんと思いつつも訂正を入れる。

不甲斐ない所を見せてしまったばかりだからここは否定しておかないといけない。けどいったい何が聞きたいんだろう店長。

てつきりめちやくちや怒られるの覚悟してたのに、何やら少し考え事をしている素振りだ。

話の理解がまったく進まない。二人きりになった意味は何なんだ？

そう思っていた矢先。

『あくまで私の考えだけ』

『? はい』

『お前の欠点はそこかもしれないな』

『……え?』

そこ………つて、どこだ?

『普通小学生なんてよっぽどの事がない限りは放課後誰かと遊ぶもんだろ。習い事も然りだ。そこでお互いもつと親交深めたり距離感を計るもんなんだよ。こいつの場合はこのくらいの距離感がちょうど良いとか、あいつの場合はお互い気い遣わずに話せるなとか、知らねえうちにそういうのを覚えるんだ』

『はあ……』

『特別仲が良いとかそういうのもいなかっただら？』

『そう、ですね』

精々休み時間に遊んでた程度の友人ばかりだったと思う。

まあ放課後遊べないのに休み時間一緒に遊んでくれていただけマシだったかもしれないが。気心許せるような友達や気を遣わず好き勝手言える友人がいなかったのは事実だ。

『そういうところがお前の場合弱点になってる』

『えっと、それってどういう……』

『これまで仲の良い友達を作ってこなかったのに、今になってお前にはあいつらのような親身になれるヤツができた。学校でも外でも常に一緒にいる仲間を。しかもぼっち

ちゃんもあんなに頑張ってるのを間近で見てんだ』

あくまで作業を続けながら、だ。

店長は俺を見た。

『そりゃ入れ込みまうよなあ。自分が思ってた以上にあいつらの事が大事なんだから』

『ッ』

芯の中心に何か刺さるような感覚がした。

『誰かと深い繋がりを持つてこなかったお前が今繋がりを持つ事で、ただでさえ無駄に正義感が強く生真面目なお前があいつらをバカにされたら、そりゃあもうこの上なくムカつくに決まってる。なまじ精神が他のヤツらより大人びてるのもあるから余計許せなかったんだろうさ』

『……』

言われてみて納得する。結束バンドの四人は、おそらく俺の人生の中でも一番濃い時間をごっこしている人達だ。

休み時間に遊んでいた友人達を蔑ろにする訳じゃないが、それしか記憶になかった俺

にはもう、今の彼女達と一緒に過ごすこの時間がとても大事なものになっている。

それほどまでに、俺は結束バンドの事を気付かないうちに大きな存在として認識していたのかもしれない。

バカな真似をしてしまうほどに。

『あいつらが大事だからムカつく事くらいは私だつて否定しねーよ。実際こつちも妹がバカにされたようなもんなんだ。何も思わない訳じゃねえ』

『……はい』

『ただ自分の立場を弁えろつて事だ。私は店長で、お前はバイト。このライブハウスで働いてる以上、そこにやあ多少なりとも責任つてのが出てくる。まずはそれを再認識しろ』

『はい』

自分の妹に変な事を言われても店長は表に出さないうで迷わず俺を止めてきた。対して俺は口頭注意と称してバカみたいに反論しに行こうとしてしまった。

意識の違いと精神力の強さ。俺にはそのどちらも足りていなかったんだ。

『普段がまともなだけに、あいつらの事になると変にアクセル掛かっちゃうのがお前の

弱さであり悪い癖だ。必要以上に入れ込み過ぎると視野が狭くなるのもどうかしねえと。簡単に言っちゃえば心の問題だな』

ひとまず受付での作業を終えたのか、書類を適当に整え棚に置いた店長は、

『で、それ自体は簡単に解決できる』

『え？』

まさかの言葉があつた。

作業を終えた事で少し体を伸ばしながら壁に背中を預けた店長が言う。

『いちいち自分で考えろとかめんどくせー事は言わんぞ私は。こういうのは手っ取り早く言つてやった方がサツと解決できるし相手も変に悩む時間が減つて済むからな』

さすがにそこまでぶっちゃけるのはどうなんだとツッコミたい心を押さえる。

既に俺の試練は始まっているのかもしれない。

『要はお前があいつらの事を全面的に信じてやりやいいんだよ』

『……………ん？』

ちよつと理解するのに時間がかかってしまった。

結束バンドの事を信じる？

『いや、でも店長、それに関しちや俺はあの人達を信じてますけど……』

『心の底から信じてるヤツがちよつと何か言われたくらいでちよつかいかけに行くか？』

『……………』

何も、言えなかった。

ただ、そうだとしか思えなかった。

『本当に結束バンドを信じてんならドーンと構えてりやいいんだよ。言いたいヤツには言わせとけ。どうせどんなに良いライブをしても毒吐いてくるヤツはこの先絶対出てくるぞ。千人中千人が満足する曲もライブもねえんだ。見えないどこかで歌詞が気に食わんとかセトリ微妙だったとか匿名なのを良い事に好き勝手すんだよ。んなのにいちいち嘸みつく訳にもいかねえだろ』

ごもつともとしか言いようがない。

『全部が全部称賛されるなんてあり得ないと思え。賛否両論がちよつど良いと思つと

きやメンタルは然う然うやられねえ。まあこれに関してはお前よりもあいつらの問題だけだな』

とりあえず、と彼女は俺に指を差してきた。

『あいつらなら大丈夫。何か言われても実力で黙らせればいい。凄さを知ってるのは自分だけでいい。良さを分らないヤツは可哀想だ。バカだ。カスだ。ピ——野郎だつてな。とにかく何でもいい。他のヤツらがどうであれ、あいつらなら音楽で魅せられるとか何も心配いらなくてちゃんと思えてたら、例え何言われても気にならねえよ』

さっきのライブを思い出してみる。

結束バンドの事を言われても店長は動じていなかった。いいや、ムカついてはいるんだらうけど表に出さずただじっとライブを観ていた。

まさに、そう思っていたからなんじゃないのかと思う。腹は立つても結束バンドなら大丈夫だと信じていたんだ。

ただ後半の発言はどうかと思うが。放送禁止用語はやめていただきたい。

実際、結束バンドは後半盛り返している。後藤さんをきっかけにみんなも観客も巻き込んでライブを楽しんでいたのは事実だ。

そういう意味では、俺は彼女達を心の底から信じ切れていなかったのかもしれない。

『ま、常にあいつらの良し悪しを見てるからこそ不安になっちゃう事もあるだろうさ。けどな、それも全部含めて信じてやるのがお前の役目であり、あいつらを支えてやるって事なんじゃないの？』

『そう、ですな』

自分の心の弱さを認める。でもってそれを改善しつつ、彼女達を信じ抜く。

そうすればきつと、もうあんなヘマはしない。結束バンドだけじゃなく、俺も成長していかないと何の意味もないから。

軽く頬杖を付き俺の方を見ていた店長が言う。

『結束バンドを支えたいならまずお前自身が成長しろ。あいつらの事を本気で思ってるならな』

『……はい』

まるで俺の心を見透かしているように的確な事を言ってくる。

この人は俺達の事をよく見てくれている。故にこういった事も遠慮なく言ってくれらんだろう。それがとてもありがたいと思うと同時に、もうこんな迷惑はかけないようになしようと思っただけだ。

『まあ、私は私でむしろ安心したけどな』

『? 何をですか?』

『お前も感情的になつてあんな事すんのかつて事。無駄に精神が大人びててどうなんだつて思つてたからな。良いじゃねえか。感情的にカツとなつて行動できんのは子供の内だけだからな。お前にも子供らしい一面があつたつて事だ』

『それは褒められていいんですかね……』

『少なくとも私がお前の立場だったら迷わず殴りに行つてたぞ』

いや一番ダメだろそれ。

『昔は殴り合いなんて普通だったからな。お前の年頃の時もバンド仲間とよく揉めて殴り合つてたもんだ』

『……めつちやロックしてますね。というか店長、バンドやつてたんですか?』

『……あー、まあな。飽きたから辞めたけど』

『飽きたつて……何で?』

『別にいいだろ。……方向性の違いとかそんなんだよ』

おー、バンドでよく聞く話のやつだ。

本当にそんな事あるんだな。最後少し含みのある感じだったのが気になるけど。じゃあどうしてライブハウスの店長やってるんだらうと聞くのは野暮か。

『とにかくだ。優人、理由は何だつていい。あいつらのためになる事を一番に考えろ。そうすりやお前はもう絶対に間違えねえよ』

『……はい!』

「へく、そんな話してたんだ」

「ええ」

街灯と店の中から漏れる明かりだけが俺達を微かに照らす。

店長との事を話すと、虹夏さんは「そっか」とだけ小さく呟いた。

「ありがとね。あたし達のために怒ろうとしてくれて」

「そんな事言われるような筋合い、俺にはないですよ。結果的に店長が止めてくれたから何とかなったけど、俺は虹夏さん達のライブを壊すところだったんだから」

「うん、だから次そんな事しようとしたらめっちゃくちゃ怒るよ！ あんな事言われたってライブに最初からいてくれるだけありがたいんだからね！」

「……き、肝に銘じておきます」

そりやそうだ。自分のライブを台無しにされるとこだったんだから怒るのは当然。

俺に何か言う資格はどこにもない。あと普通に虹夏さんに怒られるのが怖い。

「……でもそっか。優人くん、そんなにあたし達の事大切に想ってくれてたんだね」

プンプンしていた表情を治め、虹夏さんは空を見上げた。

店長にあれだけ言われたのだからもう言う事はないという、彼女なりの気遣いだろうか。

「当然ですよ。今の結束バンドは俺にとつて掛け替えのない存在です。本当に、気付いたら俺自身みんなに惹かれてたんですよ。頑張っている姿や楽しそうにしているのを見てると、全力で応援したくなってくる。それに虹夏さん達は後藤さんをバンドに入れてくれた恩人でもありますしね。本当に感謝しかないですよ」

「ぼっちちゃんに関してはおたしから頼み込んだんだけどね」

「それでもですよ。俺達にとつては充分奇跡だった」

あの出会いがなかったら、きっと俺も後藤さんもまだに家で変な作戦会議ばかりしていただろう。

後藤さんの世界を変えてくれたのは、間違いないこの人だ。

「嬉しい事言ってくれるねえ」

「本音なんで」

「真っ直ぐだね。あ、そういやさ、悩み相談とか言っただけど結局お姉ちゃんにほとんど解決されたんなら、何に悩んでたの？」

ああ、その事か。

「悩みというか、これから結束バンドのために俺がどう動こうかなって思ってたんです。信じるってのは俺の心の問題じゃないですか。でもそれだけじゃなくて行動でも表していきたくないって、そうすれば俺ももつと成長できるんじゃないかって思ってただけです。まあ俺が勝手にそうしたいだけなんですけどね」

「……何だか優人くんらしいね」

「そうですか?」

「そうだよ。お姉ちゃんが生真面目って言う理由が分かるもん。……でも、あたし達の事を思ってそうしようとしてくれてるんだもんね」

基本的に俺は俺のために動いている。自分の見たい景色のために。誠に勝手な理由だ。

ただそれが結果的に結束バンドのためになるならそれでいいし、それがいい。みんなの笑顔を見られればそれだけでいいのだ。

「だったらさ」

虹夏さんが俺の方に向く。

髪色も相まってか、街灯から照らされる彼女はいつもより輝いているように見えた。

「あたし達と一緒に成長していこうよ」

彼女の手が、こちらに差し伸べられた。

「優人くんの弱いところも、あたし達の弱いところも全部支え合ってさ。みんなと一緒に強くなっちゃえばいいんだよ! そうしたらあたし達はもっと大きくなれる。凄いバン

ドになれる確信も見付けたし、みんながいれば怖くなんかないよ。ねっ！」

思わず笑みが零れてしまった。

ただでさえ眩しい虹夏さんの照らされた笑顔には、あまりにも心惹かれるものがあったからだ。

差し出された手に自分の手を乗せる。

まるでエスコートされる紳士と淑女のようだ。性別的に立場が逆なのがあればだけど。

「はい。俺で良ければ、そうさせてください」

「相変わらずこういうところはお堅いね、優人くんは」

「今の俺にそういうチクチク言葉は禁句ですよ。へこむんで」

「あははっ、ごめんごめん！」

何だかおかしくなり二人で軽く笑い合う。

ああ、こういうのもまた青春って感じがして良いな。小学校中学校では味わえなかった感覚を今取り戻しているような感じだ。

そんな話をしていると、また店の引き戸が開いた。

「あれ、ぼっちちゃんだ」

「どうした、後藤さんも涼みに来たのか？」

見慣れたピンクの子がやってきた。

「あつえと、二人共遅かったのでもちよつと気になって……ああいやすつ、涼みに来ました……」

訂正おつそいな。

そそくさと俺の隣までやってきて勝手にふうと落ち着いている後藤さん。相変わらず俺の隣か後ろが棲み処になっているらしい。

「ぼっちちゃんも来たなら、ついでに話しちやおつかな。優人くんもいるし大丈夫だよ
ね」

「？ えつと、虹夏さん？ どうかしたんで」

「あのねっ」

俺の言葉を遮るように、虹夏さんはそのまま紡いだ。

「今日の演奏見て気付いたんだけど、ぼっちちゃんがギターヒーロー……なんでしょ？」

.....
たつぷり数秒間の沈黙が続いた。俺も、後藤さんも。な、なななななななな.....
何ですとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおおッ!?

「あつあの、ち、ちが、ちがちがちちち、ちがつ!」

「ば、バカ野郎おおおおおおおおおお落ち着けてつ.....。ま、まままずはそこら辺でタイムマシンを探してだなっ!」

「二人共慌てすぎだつて。そんなんじや認めてるようなもんだよ。それに、あのキレのあるストロークを聴いたら分かったよ。よく見たらギターも部屋の背景も一緒だったしね」

「カツ.....!?!」

二人して動きが止まる。そういや虹夏さん後藤さんの部屋来てたじゃん。ちくしよ、俺とまったく同じバレ方しちまつてるじゃねえか。

今思えば虹夏さんギターヒーローのファンでチャンネルも登録してるって言ってたもんなあ。そりやバレるか.....。

もはや逃げ場はない。

俺も秘密にするの協力するって約束したのにさっそくバレたんですが、どうしよう。もう無理じゃん。そうなってしまったからには、もう言うしかないだろう。

「後藤さん、これ以上は無理だ。虹夏さんには正直に話そう」

「……うん。あつあの、そう、です。……で、でもわざと隠してたんじゃないかって……今の私なんて、まだ全然ヒーローなんかじゃないし、この性格を直してから話したかったです……。と、特に、虹夏ちゃんには……。や、やっぱり私なんかギターヒーローだって知って……しよ、シヨックでしたか……」

これは前に俺も聞いたから分かる。

ただ、元々ファンの虹夏さんが聞いたらどう思うかまでは、分からない。

「虹夏さん、後藤さんの言ってる事は本当です。もつとギターヒーローとしての力が出せるようになったら自分で言いたかって彼女は言ってる、みんなに失望されなくなかったからなんです。それだけは分かってやってください」

「優人くん」

「……はい？」

「あたしの事も、ちゃんと信じてくれてるんだよね？」

「そ、それはもちろん」

「だったらあたしがそれを知ったところでシヨックなんか受けないって、そう思ってたんだけどあたしそつちにシヨック受けちゃうかもなく？」

絶句だった。

俺はまたへまをやらかすところだったのか……？

「あ、いや……すいませんっ。そういう訳じゃ……」

「あははっ、ごめんねえ。ちよつと意地悪だったかも。大丈夫、むしろあたしはぼつちちゃんかギターヒーローで良かったと思っただよ」

「え？」

虹夏さんの言葉に二人で顔を見合わせる。

「あのさっ、あたし本当の夢があるって前に言ったよね？」

「あっはい」

「あたし小さい頃に母親が亡くなって、父親はいつも家にいないしお姉ちゃんだけが家族だったんだ」

初耳だった。そりゃそうだ。

普通言えるような事じゃないんだから。

「あの頃のお姉ちゃんはバンドばかりにかまけてて相手してくれなくてね、そのせいであたしはバンド嫌いだったんだけど、母親が亡くなってから寂しがるあたしをライブハウスに連れてってくれるようになったの。あの頃のあたしには全部がキラキラして見えて、凄く幸せな空間で……そんなあたしを見てたから、お姉ちゃんはバンドを辞めてライブハウスを始めたんだ」

そんな事、店長は一言も言っただけでなかった。
飽きたから、方向性が違うからと言っただけなのに、真相はまったく違っていた。

「スターリーはね、お姉ちゃんがあたしのために作ってくれた場所なんだよ。お姉ちゃんは絶対そんな事言わないけどね」

たった一人の妹のために、大好きなバンドを辞めてライブハウスを作る事にした。
妹の大切な場所となるように、自分の夢を犠牲にしても居場所を作ろうと奮起した姉がいた。

ああ、何て世界一妹思いの姉なんだろう。何て優しく切ない話なんだろう。

あのライブハウスにそんな想いが込められていたなんて知らなかった。虹夏さんに

とってスターリーは本当に大切な居場所なんだ。

「だからあたしの本当の夢はね……お姉ちゃんの分まで人気のあるバンドになる事。スターリーをもっと有名にする事！」

オーデイション前、自販機で話していた本当の夢はこれだった。

武道館でライブとかでもなく、むしろそれに比べると小さな夢かもしれない。けど、それを立派に掲げる彼女が、俺にはとても大きく見えた。

「でもバンド始めてみたら、あたしの夢なんて無謀なんじゃないかって思う時もあった、今日だってみんな自信なくしちやったし……。でも、とんでもなくやばい状況をいつも壊してくれたのが、ぼっちちゃんだったよねっ」

それを聞いてハツとした。

公園で俺達を見付けた時を思い出す。あの時だってもうライブの日で、当日になって欠員になったギターの代役を見付けるために虹夏さんは必死に走っていたんだろう。

ギターの代役なんて見付ける可能性自体低いものに懸けるしかなくて、不安の中を奔走していたはずだ。そんな中後藤さんを見付けた。

オーデイションの時も、今日のライブも後藤さんはみんなを引っ張る形で演奏しライ

ブを成功させてみせた。

そうだ、紛れもなく後藤さんは。

「今日のぼっちちゃん、あたしには本当にヒーローに見えたよ！」

本当のギターヒーローとしてみんなを救っていた。

「リヨウは今度こそこのバンドで自分達の音楽をやる事。喜多ちゃんはみんなで何かをする事に憧れてる。みんなバンドに大事な想いを託してるんだ。優人くんはどうかかな？」

「……俺はバンドメンバーじゃないですからね。夢はこれからゆっくり探していきますよ」

「そっか。そういうやぼっちちゃんが今何のためにバンドしてるか結局聞いてなかったよね？」

「わっ私は……」

虹夏さんに問われ、後藤さんは少し考えてから顔を上げた。

しっかりと、虹夏さんを見つめてだ。

「ギターリストとして、みんなの大切な結束バンドを最高のバンドにしたいです……！」
自然と俺の口角が上がっていた。

「……あつ、それで全員で人気バンドになって、売れて学校中退したい……」
そして口角が下がった。

「いやその場合後藤さんのために一緒に受験した俺どうすりゃいいんだよ。いや一緒に中退すればいいか？」

「あはは、二人共何か重いなく！でも託された！」

託されていいんですかそれ。

割とやばい夢ですけど。

ふと、虹夏さんが店の前まで移動した。

店の明かりが虹夏さんを照らす。

「あたし確信したんだ！ぼっちちゃんがいれば夢を叶えられるって」

「え……？」

「だからこれからもたくさん見せてね！」

満面の、百点満点の笑顔で虹夏さんは言った。

「ぼっちちゃんのロック……ぼっちざろっくを！」

「……………はい！」

今日一番の、後藤さんの笑顔があつた。

ぼっちざろっくか。何か良いな、それ。凄え気に入ったかもしれない。不思議と俺まで笑っていた。

この人達と一緒に成長していけるなら、どこまでだつて着いていこう。

「だいぶ涼んだし、そろそろ中に戻りますか」

「そうだねっ」

「後藤さん、行くぞ」

「あ、うん……」

三人で店内へ戻る。

後藤さんは真つ先にトイレに向かって行った。ここに来る前に先に行つてなかったのか……。

まあちようどいいや。

「虹夏さん」

「ん、どしたの？」

靴を脱ぎながら声をかける。

これから言う事は虹夏さんの話を聞いてあつた心境の変化だ。

「俺のやりたい事。夢とはまた違うけど、増えました」

「お、どんなのどんなの？」

興味津々に聞いてくる彼女を目を真っ直ぐ見る。

「結束バンドを支える。それは大前提として、虹夏さんの夢も手伝いたくなっちゃいました」

「え？」

「スターリーを有名にする事とか、結束バンドを人気にするとか、微力ながら全力で支えさせてもらいます」

あんな話を聞いて何も思わないという方が無理な話だ。

少なくとも、俺にはとても響いたのだから。

「俺なんかにできる事なんて限られてますけど。ツンデレな店長のためにも、虹夏さんの夢を一緒に叶えていきましよう」

「っ……うんっ、ありがとー！」

この人には、やっぱり笑顔が似合うな。

二人でみんなのところへ戻る。確かな絆を確認して。

テーブルに戻ると、何故か喜多さんはしくしくしながら丸まって「私は喜多喜多」と言ってるしリョウさんはそれを面白がっていた。

この短時間で何があつた??

3.2. 後から気付いた時の悲しさは想像以上

俺は高校生探偵（じゃない）、清水優人。

幼馴染で同級生の後藤ひとりの家にいつも通り行つて、夕飯の手伝いをしていたらふーちゃんと美智代さんの怪しげな取引現場（晩ご飯の試食）を目撃した。取引（つまみ食い）を見るのに夢中になっていた俺は、背後から近付いてきたもう一人の仲間（ジミヘン）に気付かなかつた。

俺はその犬に飛び付かれ顔面から倒れ、目が覚めたら……体が縮んでいなかった！

清水優人が普通に起きてまだまだ元気だとジミヘンにバレたら、また背後を狙われ周り（主にキッチン周辺）にも危害が及ぶ。美智代さんの助言で走り回るジミヘンから身を隠す事にした俺は、ふーちゃんと何をしているのと聞かれ咄嗟に「隠密行動だよ」と言い、ジミヘンから逃れるため、今日も部屋に籠っている後藤さんの部屋に転がり込んだ。

「後藤さん、そろそろ晩飯の時間だぞ〜って……え、何で寝てんの？」

部屋は何故か真っ暗。時刻はまだ十九時過ぎだというのに既に敷かれた布団。そこに入り込んでいる少女。

こいつは後藤ひとり。隣に住んでいる幼馴染探偵（じゃない）だ。会社で窓際族の直樹さんや隔世遺伝で超絶ネガティブな祖母譲りの奇行力で、数々のドン引き行動を起こしている。ヤツは俺が面倒を見なくちゃいけない数少ない人物だ。

小さくもなつてないし頭脳も同じ。迷宮も特になしの迷探偵、真実はいつも一つ!!
というのは置いといて。

「まだ十九時過ぎなのに何で寝てんのって聞いてるんだけど。どうした、発作?」

「あついや、その、えっと……」

煮え切らない返答だな。いや煮え切らないのはいつもか。

向こう向いてるから表情も読めない。電気を消してこの時間から布団で寝ている……そこから導き出される結論は。

これぞまさしく名探偵清水川ユナンの名推理を見せるとこだ。

つまり。

「もしかしてマジで具合悪い? 風邪か?」

「……」

可能性として考えるならこの辺りが妥当だろう。

今はまだ夏休みの八月十九日。新学期前日でもないから仮病で休もうとする理由もない。明日もこれといって予定はない。というか後藤さんは基本予定なんてない。家にいてもギターの練習しかしないのでどんどん腕が上達していくばかりだ。

とりあえず何も言わない後藤さんに近寄る。

本当に具合が悪いから寝ている可能性も捨てきれないため、一応部屋の明かりは点けないでおく。夏風邪は長引きやすいって言うし、治せるなら早めに手を打たないと。

「一旦体起こすぞ」

「……えっ? あつ、ゆ、ゆうくん……?」

後藤さんの体を支えながらゆっくりと体を起こす。暗くて顔色がよく分からない。仕方ないか。

「ちよいと失礼するぞ」

「うえっ……!!? ちよ、あ、あのっ……!!?」

体温計が近くにならないためお互いの額を当てて熱を測ろうと近づける。

「へあ……あ、う……ああわわ……!？」

何かを思い出しおでこ同士がくつつく直前、俺は止まった。

その距離およそ一センチ。

「あ、悪い。これこの前ふーちゃんが風邪の時にやったやつだわ。後藤さんには普通に手で測るべきだったな。ごめんごめん」

「……………あ」

ふーちゃんが風邪になった時によくおでこコツンツとしてってよく頼まれてたから、ついその癖が出てしまった。

実際おでこくつつけても極端に熱がない限りはよく分かったのが本音だ。ふーちゃんの場合は熱を測るといふよりかはただ俺と額をくつつけたかっただけなんだろうけど。可愛いよね。

後藤さんの額に手をやってみる。……うん……熱なくね？

むしろちよつと冷たいような気がする。どういう事？ 推理外れたんだけど。と思つてたら襖が勢いよく開かれた。部屋の外からの光が室内に入ってくる。

「ゆーくん晩ご飯できたから早くお姉ちゃん連れてきてつてお母さ……あれ？ ゆーくんとお姉ちゃんちゅーしてる？ ひるどら？」

「してないしてない。後藤さん風邪引いてるのかなつて思つて熱測つてただけだよ。とつかふーちゃんほんとそういう知識覚えるのやめとこうね？」

「はーいー！」

うむ、良い返事だ。きつとまともに聞いてないなあれ。絶対適当に流しただけだ。

襖を閉めてとたとたと一階に下りていく足音を聞きながら後藤さんの方へ振り向こうとする。まったく熱がなかったのに何で寝ていたのか聞き出さなくてはならない。

そう思っていたら、突然背後からブシユウウウウウツツ！ という音がした。

「うお!? 何だ……つてあつづあつ!? なにこれ!？」

後藤さんから煙みたいなのが……まさかこれ、蒸気か!? いつもはピンクなのに全部が真っ赤になつて溶けていつてやがる。

今まで色んな後藤さんを見てきたけど、こんな彼女は初めてだ。もはやその気になれば何にでもなれるような気がしてきた。

やばいな、この部屋がどんだんサウナみたいになつてきたぞ。仕方ない、今は部屋の外に避難しよ……う!？」

「なっ……足を掴まれてる、だと……!?!」

赤白いナニかが俺の足首を掴んでいる。多分後藤さんだったナニかの手だこれ!

いつからこの世界はホラーチックになったんだよ。夏だからって季節っぽい事しかなくていいから! 物理的に触ってくる分こつちのが幽霊より怖えんだけど!?

「は、離すんだ後藤さんっ。このままじゃ俺まで溶かされちまうから! まだそこまでは体が対応できてないんだって!? ネガティブ胞子よりタチ悪いのしてくるのはズルいだろ!?! う、う、うわあああああああああああああああああああッ!?!」
そして、俺の意識は闇へと堕ちていった。

「……あ……赤大根ツ!?!」

目が覚めたら知っている天井があつた。

知っていると言っても俺の家ではない。隣の家、後藤さんの家であり、後藤さんの部屋だ。つうか何の夢見てたんだ俺は。

すぐ隣にはふーちゃんが気持ち良さそうに寝息を立てている。どうやら絵日記を書き終わってから寝たらしい。テーブルには絵日記用のノートが置かれている。

そして近くには後藤さんがいてスマホで一般相対性理論の動画を見ていた。昨日も見てなかったっけ。……ん？ 昨日？

待て、確か俺は後藤さんに足を掴まれて溶かされたはず……。でも今は朝だし体もピンピンしている。何なら後藤さんも普通だ。いや精神的には普通じゃないだろうけどとりあえず普通だ。

あれからずっと意識を失っていた？ の割には美智代さん達も大騒ぎしたような様子は無い。おかしい、何だか記憶が混在している。

……そうだ、絵日記。絵日記を見れば今日の日付が分かる。

昨日は八月十九日だった。なら今日は二十日のはず……！

急いでテーブルの上にある絵日記を見た。

そこにはこう書いてあった。

八月三十一日。後藤ふたり。

今日はゆうくと一緒にお姉ちゃんにギターを教えてもらってました。お姉ちゃんはいつも家にいてギターを練習して凄いなと思いました。ゆうくんも始めたばつかなのに凄く頑張ってた。

ふたりは夏休みやることいっぱいだし友達とも遊ばなきゃだから、お姉ちゃんみたいに毎日練習できないので、凄いなと思いました！

めっちゃ天然で残酷な事が書かれていた。姉よ、こんな事が書かれてるけど良いのかこれ。幼稚園の子はまだ理解力少ないからいけるのかこれ。いけていいものなのかこれ。ダメだ、気になりすぎて俺の中の木の葉丸が出てきた。

………いや、ちよつと待て。それよりも日付がおかしくなかったか？

八月三十一日だと？ 二十日じゃなくて？ まさか俺の記憶が十九日から飛んでる？

でもさつきは後藤さんがまた宇宙の動画見てるのを知ってた。なら記憶が飛んでる訳じゃない。あまりにも強烈な夢(?) すぎてここ最近の記憶が薄れてたんだ。

そしてあの夢もおそらく夢じゃない。現実のはずだ。

俺はそれを確かめるべくふうちゃんさんの絵日記を捲った。十九日に何が起こったのかを知るために。

八月十九日。後藤ふたり。

今日は晩ご飯になっても下りてこないお姉ちゃんとうーくんをもう一回呼びに行ったら、二人共すらいむみたいになってました。お姉ちゃんのはよく見るけど、うーくんのは初めて見たから驚きました。でもうーくんもこんな事ができるんだって凄いなと思いました。お母さん達に言ったら二人でていねいにお姉ちゃんとうーくんのすらいむを集めて、人の形に戻してました。手品って凄いなと思いました！

どうやら俺も新たな領域に足をつ込んだらしい。なるほど、溶ける事に対応するために俺はここ約十日ほどの記憶が薄れるくらい体力を消耗していたのか。

何を言っているのか分からねーと思うが、俺も何がどうなったのか分からなかった。だって溶けてんだもん。

しかし絵日記を見た事で薄れていた記憶が少しずつ蘇ってくる。

そういえば今日はスターリーで練習する日だったはずだ。そのために一応早起して朝の七時くらいにこつちに來たら美智代さんやふーちゃんは起きていて、後藤さんだけが部屋で寝てたから勝手に部屋に入りふーちゃんの絵日記に付き合っていた。

だけど夏休みという事もあってか気の緩みから睡魔に負け、再び寝てしまったという訳である。普段なら眠くなる事なんてないのに。

時計を見ると朝の九時過ぎ。寝てたのは一時間半くらいか。二時間かかると言っ

も練習までの時間も少し余裕がある。早起きして正解だったな。

とはいえそろそろ準備も始めておかないと後でバタバタされても困る訳だ。俺はここに來てる時点で既に万全、まあ後藤さんもメイクとかしないしジャージだから準備に手間取るような事はない。

軽く体を伸ばす。さて、この宇宙少女を現実に戻さないと。

「後藤さん、そんな動画見てる暇あんらまず飯食つて出る準備しな。俺はふーちゃん下のソファに運んどくからジャージに着替えてくるんだぞ」

「(結局誰も……誘って、くれな……あ、ああ、やっぱりここはブラックホールなんだ……)」

小声すぎて何言ってるか聞こえないけど多分現実逃避したままだな。
まあそのうち正気に戻って下りてくるだろう。

そして後藤さんは正気に戻らないままスターリーまでやってきました。

「という訳で変になったまま連れてきた結果、今ライブハウス前にセミのお墓作り続けてます」

「色々限界すぎる！ 何であんな事になってんの!?!」

「電車の中でもずっと夏休み夏休みって呟いてたんで、普通に夏休み終わるのが嫌なだけだと思いますよ。中三の冬休み終わる前日もこんなだったし」

「それであんななるの……」

スターリーの入り口で俺、虹夏さん、喜多さん、リョウさん、店長で階段の上を見上げていた。

後藤さんの姿は見えづらいが、負のオーラはどんよりと天にまで昇っている。快晴だから天気に影響しなければいいけど。

「とういかさ、お前ら夏休み誰か遊び誘ってやったの?」

「え?」

「この前夏休みはどうしてるって話をぼっちちゃんとしたんだけど、予定は空けてますってずっと言ってたぞ」

おお、割と店長と話せるようになってんのな。むしろそこに感心したわ。

「誘おうとはしたんですけど……ここに来る日以外は全部予定が埋まって、知らない子いたら後藤さん萎縮しちゃうかなって」

まあ確実に縮こまるでしょうね。もしくは物理的に空気と化すか。もし遊ぶとしても逆に喜多さんが苦労しそう。

つうかスターリー来る日以外予定埋まってどういう事？ 全部友達と遊びに行ってるの？ そっちの方が異常だろ。一日くらいは家でだらだらしたいと思わんのかこのリア充陽キャ。

「虹夏さんは？」

「あたしは……練習の日以外は家事してたり、ここでバイトしてたから……」

「店長家事手伝ったりしないんですか？」

「……ほっとけ」

あらやだ可愛い。やっぱりこの人絶対家事できないわよ。居酒屋で薄々気付いてたけどこれ本当に虹夏さんに全部やらせてんだな。

「リヨウさんは?」

「三人が誘つてると思ってた」

うん、リヨウさんはまず誘わないよね。分かったた。そんな雰囲気全然ないもの。

ていうか遊ぶお金持つてんの?

「え、じゃ、じゃあ優人くんは……?」

「俺は後藤さん家よく行つてるだけなんで遊ぶとかとは別ですね。自分の家でやらないといけない事もたくさんあったし。そもそもあの一家には俺友達判定されてないので」
隣に住んでる息子が帰ってきたみたいないつも受けてる。何なら自分の家より滞在時間長いかもしれん。

「それつてつまり……誰もぼっちちゃんと遊んでないつて事じゃん!」

「お前らもうバンド名変えろよ」

【悲報】後藤さん、夏休み誰からも遊びに誘ってもらえなかった件。

高校に上がる前は俺以外に知り合いいなかったからマシだったけど、こうしてバンド仲間という友達もできたのに誰からも誘われなかったらそりゃダメージは深刻ですよ。そんなの俺だつて傷付く。

……あれ？ よく考えたら俺も誰にも誘われてたくない？

部屋で勉強してるか後藤さん家で編集とギター教えてもらおう事しかやってたくない？ まさかの同類ですかボク？ あつ、何だか意識が……。

「ちよつと悲しくなつてきたんで俺も後藤さんに交ざつて卒塔婆立ててきます……」

「どこから出してきたのそれ!? 清水君ダメ！ 戻つてき……スライドして階段を上つていった!」

「優人くんも最近ぼちちちゃんと同じくらい人間辞めてきてるよ!」

「後藤さん、一緒にセミを供養しよう。初めての共同作業だ……」

「アツウン……」

もはや機械的な言語になっている後藤さんと一緒に卒塔婆を立てていく。

あ、何だかこつちも浄化されていくようだ……。気分が落ち着く……。後藤さんの気持ち少し理解できたかもしれない。

「こうなつたらもうどこか遊びに連れていくしかないよ！ 喜多ちゃん！ 案を……何が良い案ない!? 今から夏の思い出を作れるような何か!」

「ええ!? ……えーと、えーとお……あ、そ、そうだわ！ みんなで今から海に行きま

しよう！ 江の島とかつ、ここからなら電車一本で行けますし！」

「喜多ちゃんそれだあ！ ぼっちちゃん、優人くん！ 今からみんな江の島に行こう！」

「江の、島……？」

脳裏に浮かぶは青い海、白い雲、綺麗な景色と砂浜を走り回るリア充達。滾る殺意。過る悪意。

アア、リアジユウ、ニクシ……。

「コ、コロ……リアジユウ……ボクメツ……ア、アア、コロ……コロ……シテ……」

「清水君が変な事言いだしましたけど!？」

「ぼっちちゃんに感化されてどんどん悪化してるけど最後の良心で何とか押し殺そうとしてるんだ！ 仕方ない、二人が変な事しない内に江の島連れて行くよ！」

「本当に大丈夫なんですかそれ!? 心配しかないんですけど!？」

「それしか方法ないじゃん！ あたしがぼっちちゃん連れてくから喜多ちゃんは優人くんに肩貸してあげて！」

「任せてください!!!」

33. 偏見はしちやいけない

「……も……モリブデンツ?!」

「あ、起きた」

目が覚めたらまずガタンゴトンという音が耳に入ってきた。

何か凄く嫌な夢を見ていた気がする。どんなのだったかはもう臆げだけど思い出したくもないから良しとしよう。

「大丈夫? 清水君」

「え? あ、うん、全然大丈夫だけど……え、何で電車にいの俺達?」

「優人……記憶が……」

辺りを見れば分かる通り、普通に電車内である。俺は目覚めの一発目に何を言っていたらんだろう。自分の荷物は……よかった、トートバッグが横に置いてある。

左には後藤さんが緑色の胆汁を出しながら気絶している。そういやスターリーの前

で何かやってたな。

右には喜多さん、リョウさん、虹夏さんがいた。

「いい、落ち着いて聞いてちょうだい」

俺は喜多さんから全てを聞いた。

夏休み誰からも遊びに誘ってもらえなかった後藤さんと俺が負の概念と化し世界に絶望していた事。一刻も早く元に戻そうと考えた結果、俺達に夏の思い出を作らせるため、急遽今日の練習を中止し江の島へ遊びにたった今移動の真っ最中という事を。

なるほど、理解した。

俺って意外と寂しがり屋なところもあつたのか。記憶ぶつ飛んでるほどだし自分で驚いた。一人でも大丈夫なようにこのメンタルも改善していかないとだなあ。

「にしてもぼっちちゃんより早く目覚めたね」

「さすがに後藤さんほど拗らせてはないですからね。その辺は俺の方がマシですよ。ところで俺達をここまでどうやって連れてきたんですか？」

俺の質問に答えたのは虹夏さんだ。

「普通に肩貸して連れてったよ。改札とかは何でか知らないけど二人共普通に自分でカード出してたし。あたしがぼっちちゃんや喜多ちゃんが優人くんを連れてきたんだ」

「え、マジでか。悪いな喜多さん、肩貸すとはいえ重かったろ？」

「ううん、むしろごちそうさま！」

「何が??？」

え、怖い。訳分かんない返事来たんだが。気絶してる間に何か奢ったの俺。何でそんな笑顔なの。キターンじゃないんだわ。

意識なくても改札は自分でやってたつて虹夏さん言ってたしな……もしかして切符代とかチャージ代を勝手に出してたとか？ うん、きつとその辺だ。そうに違いない。

「むう……それよりぼっちちゃんの事なだけどさつ」

「? はい」

何故かちよつとご不満そうな顔の虹夏さん。どうしたんだろう。可愛いしか感想が出てこない。

無理矢理話題を変えるような言葉で虹夏さんは後藤さんの方を見る。

「よつぽど学校に行くのが嫌みただけど、優人くんも一緒なのにこんなになるまでつ

て相当だよね」

「ぼっちって学校でどうなの」

ああ、二人は学校違うしそこでの後藤さんがどうしてるか分からないのか。

そりや気になりますわな。

「俺も喜多さんもクラスが違うんであんまり干渉はできないんですけど、少なくとも同じクラスで誰かと一緒にいるところは見たことないですね」

「私もそうです。二組の友達にそれとなく聞いてみた事もあったんですけど、後藤さんが引つ込み思案なのもあってみんな接しづらそうというか、どう扱っていいか分からないみたいで……」

「というか喜多さん二組にも友達いんの。そっちのが驚きなんだけど。どんだけ顔広いんだよ君、人脈凄そう。」

それに比べて俺は体育で二人組作るの困らないくらいに関係もそんな濃くない友人しかない。精々三々四人程度だ。広く浅くとか狭く深くとかじゃやない。もう狭く浅い関係みたいなものである。

休み時間をほぼ全部後藤さんの観察と世話に費やしてる俺の学校生活っていったい

……。

後藤さんの学校での様子を少し聞いて虹夏さんは少しだけホッと息を吐いた。

「そっか……虐められてるとかじゃないんだ」

「当たり前です。休み時間になったら俺が毎回こっさり後藤さんのクラス覗いたり授業が始まるまでの間失踪するのに付き合ってるんで」

「いつも休み時間すぐどっか行くと思ったらそんな事してたのね……」

「優人くんってさ……何だかんだぼっちちゃんに対して過保護だよね……」

「超過保護」

「え、そんなに？」

三人でジト目してくるのやめてもらっていいですか。リョウさんに関してはおちよつと面白がって適当に合わせるのバレてるからな。

うんうんと頷いてくる三人。特に喜多さんと虹夏さんはガチでそう思ってそうな感じで見てくる。

しょうがないじゃん！ か弱いペットが猛獣達の中でちゃんと生きていられるか見守るのが飼い主の役目でしょうが！

適応が無理なら寄り添ってあげる心も大事だと思います！

「じゃ、じゃあさ……仮に、もし仮にねっ……」

急に虹夏さんがどもり始めた。

「ぼつちちゃんか誰かにそういう扱い受けてるのを見ちゃったら……優人くんはどうする？」

「……あー」

そういう扱いは、まあ、そういう事だろう。

後藤さんの性格からして虐められていると思われるのも完全に否定できないのが痛いところだ。実際、こういう子で虐められているような生徒はたくさんいるだろう。

でもって想像してみる。もしも後藤さんが知らない誰かに虐められている現場を目撃した場合、俺はどうするのだろうか。

答えは簡単だ。

「まあ、殺しますね」

「「……………」」

「えっ、いや、ちよつと、そこツッコむところですよ？ それはやりすぎやろがーいつて言うところですよ？ 何で何も言わないの？ 冗談なのにそんなガチで黙られたら俺マジ

でやりそうな人みたいに思われるだけじゃん！ やめてっ、黙らないで！ 誰かツッコミ入れて！」

ちよつとネタに走っただけじゃん。いきなり真面目に答えるとそれはそれで変な空気になるっちゃうかなって思ってお茶目に回答したらこれだよ。

ジト目が更に酷くなってない？ この冷たい反応がむしろイジメでは？

「だって優人くん、ちよつと前科が……」

「言い方ア!! そこ掘り返すの禁止だから！」

罪悪感に苛まれるからほんとやめて。あと前科とか言うの良くないと思う。虹夏さん最近当たりキツいんですけど何故。

遠慮がないと容赦がないは違うからね？

「いやあ、過保護な優人くんならやりかねないと思ってる……」

虹夏さんの言葉に喜多さんとリョウさんが頷く。俺を何だと思ってるんだ。

「さすがにんな事する訳ないでしょ。常識的に考えてくださいよ」

「そうよねっ、清水君はそんな事しないものね。結構目が本気だったからもしかした

らって思っちゃって」

うわっ、俺の演技力、凄すぎ……？

いや一部は本気だけでも。

「はっはっは、まあ殺しはしないにしてもそれ相応の報いは受けてもらいますけどね！」

「あ、それも冗談？」

「本気だけでも？」

空気が凍った。

俺もブリザガを覚えてしまったか……。

「一応聞くけど、何でかな？」

「だって、今でさえ引つ込み思案なのにそんな状況になったらもう二度と外出れなくなるかもなんですよ？　そう考えたらまともになるまで面倒見ると決めた俺の負担が見ず知らずの輩のせいで余計増やされる事になる訳です。これだけで軽く極刑レベル。あと単純に後藤さんに危害加えるヤツは絶対許さん。どんな手段を使ってもボコボコにする」

「後半まだ良い方なのに前半に私情が入りすぎて……」

そもそもイジメ、ダメ、絶対の精神なのだ。つまり日頃から後藤さんを観察してるのも言い方を変えればいつでも守れるように見張ってる訳である。

それに美智代さん達からも娘をどうかよろしく頼むって言われてるから余計ね。ちなみに二組の人達は観察したところみんな良い人そうだったから安心だ。なのに馴染めてない後藤さんはマジで生粋なんだろうなって。

「まあ平和……というか何もなさすぎるというか……とにかく後藤さんはいつも一人ですけど、平穩つちや平穩な学校生活送ってますよとだけ。俺がいる限りはこの子を守れるんで大丈夫だと思います」

気絶しているからか、さつきから振動と共にガンガンと仕切りに側頭部をぶつけている後藤さんの頭をこちらの肩に寄せて乗せる。

俺の身動きが取れなくなるけど、頭ぶつける音がうるさいよりかはマシだろう。意識あつたらこの時点で爆発してそうだし、ある意味都合だ。

「……清水君ってそういう事誰にでもするの？」

「何を？」

「えっと、その……肩に、頭を……」

「え？ ああ、これか。ははっ、んなこつぱずかしい事する訳ねえじゃん。何とも思わないふーちゃんか気絶してる時の後藤さんくらいだよ。こんなの誰にでもできるヤツは相当なナルシストか勘違いイカレ野郎くらいだよ」

「そ、そうなんだ……」

自分に自信ないとできんだろこういうの。後藤さんに関してはまだ保護者みたいなものだから特に何も思わないのできるけど。

もしかして女子からすればあんまりこういうのやらない方がいいのか？ こういうところで地味に好感度下がってる説ある？ 陽キヤの振る舞いがよく分かんねえ。

「まあともかく優人くんがいるならばぼっちちゃんは安全だね。今の夢は高校中退だつて言つてたけど」

「夢つて言つていいんですかそれ!? 清水君はそれ知ってるの!?!」

「ああ。まあその時は俺も一緒に辞めようかなつて。後藤さんの付き添いで秀華高受けただけで思い入れある訳じゃないし、最悪スターリーですつと働かせてもらえればいいのかなつて」

「考え方が一番ロックだわ!?!」

わざわざ二時間かけて通学してるのに後藤さん中退したら俺だけ一人で通うのバカ

みたいじゃん。

何のために一緒に高校受けたんだよって話になるからね。普通に行き帰りで四時間かかるってヤバいと思う。慣れって怖いなく。

片瀬江ノ島駅到着。

すこぶる天気が良い。暑い。ただただ暑い。

「よおーし、今日はぼっちちゃん達と楽しい夏の思い出を作ろうー！」

「写真撮りましょ後藤さん！ ほら、清水君も！」

「え、俺は別にいい」

「いいからー！」

後藤さんに肩を貸しているから回避無効だった。

なんかもう凄い勢いで自撮りしてるぞこの陽キャ。アングルとか変えても肩貸し状

態じゃどうあがいても決まらなと思うんですが。一人は顔色ずっと悪いし。SNSに上げるのはやめてね。

「じゃあ私は塩ソフト食べてくるので、またね」

「こころら、誰が自由行動って言った？」

「むしろリヨウさんが自由じゃない時なんてなかったでしょ」

「ふふん、分かっておるな優人」

褒めてはないです。得意気な顔されても困る。

「ちなみにどこに行くかプランとかって決めてるんですか？」

「ん、とりあえず海見に行こうかなあって。まあ時間はあるし、仕方ないからリヨウの用事先に済ませちゃおっか」

何だかんだ虹夏さんもリヨウさんに甘いじゃん。過保護とか俺に言えないっしょ。

あと喜多さんいつまで撮ってるの。夏の陽の下でどうしてそこまで元気でいられるの。天照大神様なの。カシヤカシヤとシャッター音鳴る度に後藤さんから力抜けてくんだが。生気吸い取ってる？

結局リヨウさんの塩ソフトを買うのに付き合ひ、俺達は真の目的地、海へとやってき

た。

「ほら見て！ 海でかあゝい！」

片瀬海岸地下通路付近で立ち止まる。目の前に広がっていたのは綺麗なビーチと青い海。もう泳げないだろうが砂浜には水着の客が結構いる。

泳げないのに何やってるんだろ。夏を味わえれば何でも良いのだろうか。リア充の考えはよく分からん。と、さすがに後藤さん起こさないとな。

「ほれ、後藤さん起きろ。海に着いたぞー」

ぺちぺちと軽く頬を叩くと、

「……………さ……サビキツ!？」

何で釣り用語。海を見てそれを連想したのか。

ビーチバレーとか海の家とかじゃなくてサビキが出てくる辺り、陽キヤの遊びにはてんで無縁なんだなって改めて思った。うーん、この陰キヤ。

「あつあれ……………いつの間に……………」

「ほんとに今まで意識なかったんだ」

「かくかくしかじかですここに来たって訳」

「な、なるほど……」

「それで伝わるんだ!？」

幼馴染ですから。付き合い長くなると虹夏さん達も慣れてくると思う。

これ便利なんだよね。説明省けるし。

とりあえず状況を理解したのか、後藤さんは珍しく海を見渡していた。

まあ滅多に見に来ないもんな。しかも江の島という観光スポットだし。俺もこんな綺麗な景色は久々に見た。

「あ、そうだ」

トートバッグの中に入れていた一眼レフを取り、空と海をバックにシャッターボタンを押す。

こういう時にカメラがあるとつい撮影したくなってしまふ。今まで結束バンドの練習風景や日常の一コマばつか撮ってたから、景色を撮るのは何だか新鮮だ。俺もカメラマン気質になってきたのかな？

良い事思い付いたかもしれない。

海に来るなんて早々ないし、メンバーも揃ってるならちようどいい。

「どうせなら結束バンドで海をバックに一枚撮ってみま」

そう俺が提案しようとした時、何かシユバツてきた。

「うえ〜いお姉ちゃん達イ!! 暇ならウチの海の家で食べてきなよ〜!!」

どこかで見た星型のサングラス、頭にタオルを巻き微かに見える髪色は金、メラメラと太陽に焼かれたであろう黒い日焼け肌、無駄に鍛え上げられた体。

つまりは真性のパリピ陽キャ海の家店員が俺達の前にやってきた。

まずい、喜多さんとは違う方向性のガチパリピ三銃士はやべえ。しかもよりによって後藤さんの方に目を付けてやがる。ちくしょう、見る目はちゃんとあるなこいつ!

「お姉ちゃん達と一緒に兄ちゃんもどうだい! 今ならすぐ席も用意できるよ〜可愛いお姉ちゃん達に良いカツコしたいならメニューもお安くしとくよ〜!」

しかも普通に良い人だった!! やめろ、パリピが良いヤツとか俺の良いとこ全部食われちまうでしょうが!

「お兄ちゃん達高校生？ どこから来たの〜？」

会話のコミュレベルも高えな。たった数秒間でめちやくちや距離詰めてきやがる。

どうする、今の俺ならパリピに合わせて会話もできるけど、この圧倒的オーラに耐えられないのがここに……、

「ミ。ツ」

「ぼつちちゃんが爆発四散した!？」

パアンツ！ と風船のように膨れて後藤さんが破裂した。やはり耐えられなかったようだ。

ティウンティウンティウンと久々にロックマンがやられた時の音がした。

仕方ない、ここは撤退が得策かつ。

「虹夏さん!？」

「オーケー!？」

空気が抜けてペラペラ状態で飛んでいた後藤さんを虹夏さんに掴み取ってもらい受け取る。

そして全力疾走でその場から退避。

「すいません俺達これから違うとこ観光するんでまたの機会にいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

「うえ〜〜い楽しんで〜!!」

ああもう最後まで良いパリピだったなあの人ら!!
変な偏見持つててごめんて感じ。

「あれを相手にするのは分が悪すぎる〜!」

「急いで海から離れましょう!」

「虹夏さん次の目的地は!?!」

「え〜と……とりあえず仲見世通り行こう!」

「分かりました! ペラペラのせいかわかさ感じねえな後藤さん!」

せつかく江の島に来たのものもの数分しか海を見れなかつた俺達は、逃げるように仲見世通りへ走るのだった。

34. 真夏の観光も体力がいる

炎天下の中、仲見世通りまで走ってきた俺と結束バンド御一行。

息を整えてからせつかくだし適当に食べ歩きしながら観光しようという事になった。という訳で一発目はあの有名なアレである。

五人分買ってそれぞれ手渡ししていく。ようやく元の形に戻ったのに顔色の悪い後藤さんにもだ。

「ほい、これ後藤さんのな」

「えっあつ、ありがと……。えつと、これつて……。？」

「たこそん。聞いた事くらいはあるだろ。たこを一トンの力でプレスしながら焼くおぞましいせんべいだ」

「優人くん言い方。気持ちは分からなくもないけど」

だつてプレスしてる時とか急にきゆるきゆる言い出すんだぞ。既に死んでるとはいえ断末魔にしか聞こえなかった。

この作り方考えた人中々やベー人なんじゃないのかって思うレベル。あ、うまつ、めつちや美味しい。結構しつかり味付してる。

「食ってみ。美味しいぞこれ」

「二トン力……はむっ……おいひい」

「だろ？ どうせ名物もんだし味自体は大した事ないと思ってたから予想以上だったわ」

しかも薄いから軽い。ペロリとイケてしまう。何か一気に食べるの勿体なくなってきたな……。

「私、美味しい物センサーも抜群」

「さ、さすがです……！」

「家では良い物食べてそうですもんね」

「この前優人が作ってきてくれたスコティッシュオムレツの方が美味しかった」

「スパニッシュオムレツな。俺が作ったのより下つてそれはそれでどうなんだ……」

金持ちの晩ご飯とか適当に高い物食べてそうな雰囲気しかない。とりあえずキャビア乗せてトリュフふりかけときゃ良いだろ的な。

それか高級外食。回らない寿司屋とかJ O J O 苑よく行ってそう（偏見）

「とにかくぼっちちゃんが元気になってよかったよー!」

「このたこせん、おつきくて可愛いし映えますね!」

かわつ、可愛い……???

この丸ごとタコ押し潰しせんべいが可愛いとか正気かこの小娘。SNSに毒されるともはや何でも可愛いとか映えると思っちゃう生き物なの女子高生つて。

俺には分からん世界だ。そして気付いたら最後の一口だった。美味かった、ごちそうさまでした。お前の事は一日くらいは忘れないぜタコ。

よく考えたら薄くされたとはいえタコ丸ごと二匹分が腹の中にいるって相当だな。

「よし、記念に写真撮ろー!」

「あ、じゃあせつかくだし俺のカメラで撮りますか。結束バンド江の島に降臨記念つすね」

人通りの少ない場所に移動してカメラを構える。

「いきますよー。はい、結束バンド」

「ドゥー！」

「ど〜……」

何その合図と思ったそのあなた、深掘りしちやいけない事も世の中にはあるって知っておいた方がいいぜ。

ちなみに俺もよく分かってない。虹夏さんと喜多さんがきやぴきやぴしながら自分達だけの掛け声とか作っちゃおうと勝手に作ってたのだ。次撮る時はこれ言ってるってな感じで。俺も巻き込まれたクチなんすよ。

写真の方は良い感じに撮れている。後藤さんも珍しく普通の顔だ。普通の顔が珍しいうってどういう事なんだろうね。

ひとまずカメラをバッグに直す。俺の愛機に長時間の直射日光はできるだけ避けておきたい。

「優人くんも一緒に撮ろー！」

「俺は別にいいですよ。カメラマンとして結束バンドを撮ってた方が性に合ってますし」

「本音は？」

「女子四人の中に男一人だけ入って撮られるのは結構キツイ……ハッ!?」

ついそのまま本音を言ってしまった。くそう、誘導尋問が上手いな虹夏さん……。俺をハメるとは中々やりおる。

漏れ出た言葉を聞いた虹夏さんは一瞬ムツとした顔になり、強引に俺の手を引つ張ってきた。

「いいから撮るよ!」

「いやほら、俺つてばカメラマンだし結束バンドの思い出を切り取って残すのが仕事なところあるんで……」

「でもそれだと優人くんがずっとその思い出のアルバムの中に入れてないじゃん」

「えつと……何か問題でも?」

「……いいから撮るの! リーダー命令! 喜多ちゃんやつちやつて!」

「用意バッチリです!」

ほとんど強引にポジションにつかされた。こういう時の女子の謎の結束力って何なんだろうな。団結しないといけない空気感というか、一種の同調圧力さえ感じる。

そしてそういうのには逆らわない方がいいのだった。女子の圧は強い。ぼくはまなんだ。

「はいチーズ！」

いや結束バンドの合図やらんのかい。なに、思ったより恥ずかしかったの。だとしたら実際言わされた俺が一番恥ずかしいんだけど。人の心ある？

「めっちゃ良い感じですよ！」

「お〜良いね〜！」

明るい女子達がキヤツキヤしておられる。写真一枚でこんな楽しそうにできるなら幸せ者ですな。陽キヤって何でも楽しめるように脳みそができてるんだらうか。

陽キヤと陰キヤの中間にいる俺には難しいや。とりあえずほほえま〜と思っておけばいいだろう。

「どう優人くんっ、良い写真でしょ！」

「ん？ あー、まあ、そうですね。俺だけたこせん持ってないですけど」

これじゃ俺だけお預けくらった人にしか見えない。しかも女子四人の中にいるせいで異物感半端ない。

やめろ、俺は百合の間には挟まらない男なんだ！ ちさたきとスレミオが大正義なんだよ異論は認め！！

「こういうのは撮ることが大事なの」

「そんなもんですか？」

「そんなもん！ あと忘れてそうだから言うけど、今日はぼっちちゃんだけじゃなくて優人くんにも楽しい夏の思い出作ってもらうんだからね！ 今日は目一杯楽しむ事！

リーダー命令！」

「……リーダー命令なら仕方ないか。じゃあ今日は楽しませてもらいますよ」

「ふふーん、よろしいっ」

腕組みしてドヤツてるけど一番身長低いから威厳もくそもない。年上だけど年下の子が頑張つて大人ぶつてるようにしか見えないわ。

あと虹夏さんの感情に連動してびよこびよこ動いてるアホ毛は何なの。ただただ可愛いな。

俺も今日は楽しむ事を優先しよう。

せっかくの江の島だしな。時間の許す限りは観光しまくるのも悪くない。

「あつ、今日は、皆さんありがとうございました……。お疲れ様でした……」

「何でももうクライマックスに!? これからでしょ！」

楽しもうと思った矢先に終わろうとしてる全身ピンクちゃん。たこせんがそんなビッグイベントだったのか。

いや、違うな。俺はポツケからハンカチを出す。

「これで涙拭けよ、後藤さん。そうだよな、友達とこんな遠出したのがまず初めてだったもんな。『普通』が分からないから観光イベント一つ終わっただけで遊ぶの終了と思っちゃっただけでもんな。大丈夫、まだまだ楽しい事はこの先もあるぞ」

「う、うう……」

「ぼっちちゃんの悲しい現実が……よ、よおーし、楽しい思い出をもっと作ろーう！ 喜多ちゃん良さげなとこ連れてって！」

「任せてくださいー！」

観光に困った時は陽キャに頼めば勝手に調べてくれて良さそうな場所に案内してくれるやつだ。

喜多さんなら安心して任せられる。みんなが楽しめそうなところを選んでくれるはず。

そんなこんなでやってきました江の島神社の大鳥居前。

目の前に朱くて大きな鳥居があり、遙か彼方まで続いてそんな階段が既に精神を億劫にさせてくる。はっはっはっ、バカだ、バカがいるぜい！

「よろし、ここから頂上まで登りますよ〜！」

「えっ、階段……!?!」

「自力で上がって見る景色ほど、素敵なものはないと思いませんか……!?!」

「いやそんなのはいい……」

「真夏にここをチョイスする喜多さんのメンタルどうなってるの」

さすがの俺も素直に喜べそうにないよ。あの三銃士から少しでもパリピ成分を吸収しておけば良かった。俺の中にもう一人の俺が登りたくないとは拒絶してる。

これ後藤さん絶対無理だろ。途中でリタイアするのが目に見えてるよ。戦う前から敗北が決まってるようなものだよ。

「頑張りましょうー！」

「嫌だ!!」

リヨウさん初めて出会ってから今日が一番ボリユーム出てません？
そんなに嫌なんだ。気持ちは分かるけど。

「後藤さんも!」

「あつ……うつ……」

ここでハツキリ断れないのが陰キヤの辛いところよな。

清水、動きます。

「喜多さん、さすがにこの炎天下の中で階段登るのはキツイんじゃないかなって。特に後藤さうおつまぶしっ!」

「喜多ちゃんがいっつになく眩しい!」

「な、なんで……!?!」

「い、いつもは抑え気味な陽のオーラが陽の光を浴びる事によって……」

「リミッター解除されてんのか!?!」

な、何だこの眩しさは……!?! 太陽拳か!? 天津飯なのか!?!

今まであれで陽の気を抑えてたなんて、俺は喜多さんの気をほんの一部しか感じ取れ

ていなかっただんだ。ヤツはずっと解放する時を待っていた。太陽光を浴びて陽の気を一気に放出させるために……！

「ほら行きますよー！」

目がチカチカするう！ チカつとチカ千花あッ！

背景がUR確定演出になってやがる。【陽の気を纏いし者】UR喜多郁代が自ら排出されにきた。しかもSSRから覚醒しているだと……！

これにはみんな怯えるしかない。インドア人が何人集まってもたつた一人の陽キヤには勝てないのだ。こいつが伝説のスーパー陽キヤ人キタリーだったのか。

四対一。本来なら多数決、民主主義によつて我らが勝つのだが、キタリーにはそれで勝てるはずもなく、いつだつて陰は眩しすぎる光によつて消滅させられるのだ。

という訳で全員敗北。

頂上まで登り確定です。さて、みんなどこでリタイアするかな。

「みなさ〜ん！ 早く〜！」

テンポ良く駆け上がって行くバフ陽キヤの喜多さん。いつも色んなところ歩き回って体力ついてんのか？

虹夏さんもリョウさんもノロノロとだけ何とかがつていくが、現役女子高生とは思えないスピードだ。あまりにも遅すぎる。

そして、だ。

もう一人、現役女子高生とはかけ離れた速度で階段を上がってくる少女を見下ろす。

後藤ひとり。真夏にピンクのジャージと自ら熱中症に立ち向かっていくおバカな思考の持ち主は、右足を上げて一段上り、また右足を上げて一段上りと左足負傷してんのかみたいな上り方をしていた。

めっちゃ息切れしてるし、汗すげえし。

遅すぎてとうとう見知らぬおばあちゃんに抜かされている。それでいいのか女子高生。体力ないにも程があるぞ女子高生。

とうとうかまだ神社の入口近くだぞ。この時点でこれって先が思いやられる。頂上まで何時間かかるの。

ちよつとフラついてきてるけどマジで大丈夫かあれ。

「……はあ、見ちゃおれん」

彼女のどこまで駆け下りて屈む。

「後藤さん、とりあえずそこまでおぶってやるから乗れ」

「ぜえ、はあ……ぜえ……あつ、でも……ゆうくんがしんどいんじや……」

「この暑い中じつと待たされる方が辛いんだよ。だから早く」

「うっ、ごめんなさい……」

一人で上らせて変につまづいて転がり落ちるよりはマシだろう。後藤さんの場合スライム化してすぐ再生しそうだけど。

背後から重みもたれ掛かる。自然と首に手が回された。密着してるせいか余計暑苦しいな……。何でジャージなんだよもうちよつと薄着でもいいだろ。

「急に暴れたりするなよ。下手すると二人仲良く落ちて死にまうからな」

「うっうん……」

神社の前で縁起でもない事は言うもんじやないが、この階段の長さだとマジであり得ない話じやないから怖い。

「できるだけ俺の方に体重預けとけよ。バランス崩したくないから」

「うん……あつ、でも」

「どうした？」

「えっと……その……」

やめろ、密着してる状態でもじもじするな。変に動くなつて言つたばかりでしょうが。

ゆつくり階段を上りつつ、後藤さんの言葉を待っていると、

「私……お、重くない、かなつて……。初めてのバイトの時におんぶしてもらつたら、重いつて言われたし……」

「え？ ああ、その事ね」

そんな事まだ覚えてたのか。後藤さんは気にしがちなところあるからな。そしてあの時の俺も後藤さん相手だからとはいえ、さすがにデリカシーがなさすぎた。

女の子に対して重いなんて思つても口に出しちゃダメだ。うん、ダメダメ。

「全然重くないよ。むしろ今は軽い方だ。あん時の俺が単純に非力なだけだったんだよ。だから後藤さんは元々軽いつて事」

「あつ、そ、そうなんだ……。一応ご飯の量とか気にして食べてただけど……。そうだったんだね……。ゆうくんも、へへ……。き、気にし過ぎないでね……」

この野郎、誰のために筋トレ始めたと思つてんだ……。こういう事がいつあつても対

応じることができるように鍛えてたつてのに。

あと耳元でニヤけんな。可愛い笑い方とかならまだいいけど、へへっとかうへへとか言われても普通に寒気がするぞ。どんなASMRだよこれ。

ほとんど階段よりも後藤さんに対して悪戦苦闘しながらも何とか階段を上りきった。

俺の肩に後藤さんが顔を置くものだから双頭怪獣みたいになつてる。汗のせいで頬に彼女の長い髪がべたりとくっついていたりして非常に微妙な気分だが、自分からおんぶすると言った手前何も文句は言えない。

辺りを見渡すと端の方に喜多さん達がいた。虹夏さんとリョウさんはへたり込んでいる。

入口付近だつてのものにもう三人グロッキーなのか。着いたのにまだ下りようとしないうちに後藤さんを仕方なく背負いながら近づく。

「二人ももうリタイアですか？」

「そうなの清水君。聞いてよ……後藤さんおぶつてきたの!？」

「いや危なっかしかったからさ。安全面を考慮して連れてきた。こいつが後藤ひとりならぬ護送ひとりだ」

「うへへ……ドッキングです……!」

「清水君!？」

ただ、今のこの状態で全員頂上まで登れそうにないのが事実。

これからだつてのに既に過半数リタイア寸前で。暑くてキツイのは俺も嫌だけど高
校生が聞いて呆れるぜ。

「あつ、ゆ、ゆうくん」

「つ、どした?」

いつの間にかむむむ神拳を止めていた後藤さんが俺の頬をめちやめちや軽くぺちぺ
ちと叩いてきた。

やめろ、馬じやねえぞ俺は。ウマ娘でもなければウマ息子でもねえ。

「あそこ……え、エスカレーターで行けるみたい……」

「なぬっ」

後藤さんの指差す方を見ると、確かにあった。

江の島エスカー乗り場と書かれた看板がでかどかどか立っている。なるほど、お年
寄りや小さな子供にはこの長い階段は厳しいもんな。意外と優しいところあるじゃん江
の島。

「これは使わない訳にはいかないね！」

「文明の利器、素晴らしい」

「階段で登りましょうよ〜！」

「喜多さん、さすがにもうこの三人の意見を覆すのは無理だと思うぞ。限界を超えたインドア人は梃子でも動かない時あるから。あ、一応俺も入って四人側で。そういう訳でナイス発見だったぞ後藤さん。歩かなくていいからこれで下りれるな」

「あっうっ……」

何でそんな残念そうなんだよ。エスカレーター乗れるんだからむしろ喜べ。

うっ、ずっとおんぶしてたせいで背中の汗がぐちちよりしてて気持ち悪い。着替え持ってきてくりやよかつたな……。

そして数分後。

俺の前で高校生とは思えない立派な土下座をしている少女がいた。

「優人、お金貸してください」

「またか 안타!!」

35. 観光するにもまずは興味があるかどうかだ

「一応本人の口から聞いておきましょうか。いつ返してくれる予定なんですか？」

「らい……今度必ず返す。私は約束破った事ない」

「前の返してもらってないですけど。あれ何ヶ月前のやつですっけ？」

「……」

顔逸らしてんじやねえこっち見ろ山田。

江の島の有料エスカレーター、通称江の島エスカでのんびり上っていた俺達はその最中で大事な話をしている。そう、お金は大事な話なのだ。

「ごめんね優人くん、バイトの給料から払わせるから」

「そんな殺生な！」

「被害者面してんじやねえよ」

何でお金持ちの家に住んでるのにすぐ楽器に全部つき込むんだ。もしかして我慢

言葉ご存知でない？

せめてもう少し計画的に使うとか、ある程度貯金しておくとか色々あるだろうに。高校生にもなつてそんな簡単な事もできないなんて将来大丈夫かこの人。

「そもそもですけれどリョウさん、アンタ今日ここに来て一発目に塩ソフト買いに行きましたよね」

「行つた。美味しかった」

「で、そのあとたこせんも買いましたよね」

「私の美味しいセンサーに狂いはなかった」

「元々お金が少なかったら自分は買わずに誰かに少し分けてもらう事もできたはずなのに普通に買つてた。つまりあの時点でもうお金無くなるつて予測はできてたはずですよ。そしてアンタは財布が空になる事を想定した上で、そうなつた時は誰かから貸してもらえばいいやと借りる前提で勝手に話を進めてた。違いますか？」

ほんの五秒間、リョウさんは顎に手をやり考える素振りを見せる。

そして、無表情のままこう言つた。

「優人のような勘の良い男子は嫌いだよ」

「俺から借りておいて何だその言い方 d m d k s @ k @ n g k n ぼえいえ j k ツ!」

「ステイ! ステイだよ優人くん!? 全面的に正しいのは優人くんだけどここエスカレーターだから今だけは抑えて!」

さすがにこれはキレていいと思うんだが。

こいつこのクズベーシスト……お金の使い方を一から叩き込んでやろうか……!

「今度返すから」

「……信じていいんですね?」

「絶対……多分」

「山田ア!!」

ちよつと自信なくしてんじゃねえ!!

結局、江の島エスカターで上に上り着くまで俺達のいざこざ話は続いた。みんなもお金の貸し借りは程々にね。信用できる人だけにするんだよ。

「やつと着いた〜!」

「せつかくだしこのまま展望台まであがりましょう!」

「エスカター使ったとはいえ少し疲れたね」

「階段で来てたらと思うとゾツとするな」

結構上まで上がってきたような気がする。これを階段のみで上がってくる人もいるとなると普通に凄いかもしれん。ある意味修行だぞ。

少し歩くとサムエル・コツキング苑という南国ムード感がある庭園の入口前までやってきた。

「結構距離あった……」

「ですね……」

そして少し歩いただけでインドアの二人が疲れ果てていた。

リョウさんはまだしも途中からおぶられて楽しんでた後藤さんは何で疲れてんの。エスカーで回復もしてただろ。マジで体力ないのか。

まあ、もう体力使いそうなところはあんまなさそうだし大丈夫だろう。

喜多さんはピンピンしすぎてて逆に凄いなと思う。太陽光で力溜めれる系女子なのか。関係ないけど何か昔面白いゲームないかネットで調べてたら、実際に太陽光を使って遊ぶ携帯ゲーム機ソフトがあったような気がする。「太陽〜!」とか言うやつ。

真夏の陽の下で騒げる年頃でもなくなつたなあ。昔は休み時間は暑くてもグラウンドで走り回ってたつてのに、今はもう涼しい室内から出たくなくなつた。

しかしこんだけ暑いと熱中症とかならないように気を付けないといけない。視界の隅に自販機が見えた。ちようどいいか。

「ちよつと飲み物買ってきます」

「おっけー」

パパツと用を済ませて戻ると、

「でもいざ上まで来ると開放的になる」

「あつ何かポジティブな気持ちになつてきました……」

気持ちのビフォーアフターがあつた。あの後藤さんがポジティブな気持ちになつてくるつて何気に相当凄いぞ。いつもは二言目とか一分に一回は必ずネガティブになるし。

しかしポジティブになれるならそれはそれで良い。少しはここまで上つてきた甲斐があつたというものだ。

「最高の眺めと空気だね！」

「みつみんな写真撮りますう？」

「後藤さんから写真撮影を誘うなんて……明日は空から槍でも降ってくるのか……!?!」
いつもポジティブとは真逆の位置にいるからかプラス思考が働くと一気に積極的になるのね。

リヨウさんでさえ普段絶対見れないような笑顔になってる。激レアじゃん。顔の筋肉死んでるのかと思ってたのに。

そして後藤さんはどこから自撮り棒出してきたんだ。いい加減四次元ポケット使うのやめなさい。

だがそれはそれとしてノリノリな二人がちよつと面白いので俺も一眼レフを出し構える。虹夏さんも乱入してきた。インドア人ほど開放的な気分になったらはっちゃけようとするのか。

「へいちーずー!」

虹夏さんの掛け声で後藤さんと俺が同時にシャツターを押す。

もう完全に「結束バンド」の声はやらないのね。後にも先にも俺だけかもになっちゃうのね。

「急にハイテンションになり始めた……」

「三人揃ってこういうところ来た事ないんだろ。ちなみに俺も初めてだからちよつとテンション上がってる」

「とてもそうには見えないけど？」

「アレだよ。自分よりテンション上がってるヤツとか怖がってる人がいたら逆に冷静になるってヤツ」

「分かりやすい例えね……」

にしても無駄にハイテンションすぎるような気もする。

日差しが強いからか三人の頬は紅潮していた。ないとは思うけど一応確認しとくか。

「三人共ちよいと失礼しますよ〜」

「んっ、どしたの優人くん？」

「……熱はないみたいだな。熱中症とかでも脱水症状でもなさそうか」

撮り終わった三人の額に手を当てていく。

真夏でいきなりハイテンションになられるとちよつと怪しいので確認しておきたかったが、まあ大丈夫そうかな。そもそもマジでやばかったらこんな元気にはならんか。

「いや、何かいきなりテンション上がりだしたんで熱でも出たのかと」
「微妙に失礼！」

「とまあ冗談はさておき、その自販機で全員分のスポドリ買ってきたんで飲んで下さい。熱中症対策には必要でしょうし」

「え、いいの？ やったー！」

虹夏さんから順に渡していきながら、

「リヨウさんも、はい。これは俺の奢りだから気にせず貰っても大丈夫ですよ」

「優人優しい……好き……」

「一ミリも思っただけえ事言うな」

さてはアンタお金ですぐ釣られるタイプのちよろい女だな。

女子から初めて好きと言われたのに感動も喜びも欠片ほど湧いてこなかった。やはり思いの込められようで分かるもんなんですな。

「あれ、『に』？ キャップにあたしの名前の頭文字書いてある？」

「ああ、みんな同じ飲み物なんで分かりやすくしようと思っただけです。虹夏さんと喜多さんはバッグあるけど後藤さんとリヨウさんは鞆とか持ってきてないし、俺が買ったの

に虹夏さん達だけ持たせておくのは悪いから飲み物は俺が預かるとききますよ。飲みたくなったら都度渡すんで、気軽に言ってください」

「な、何てできる男なんだ優人くん……！」

「気遣いの鬼だわ……」

「へへ、じ、自慢の幼馴染です……」

何故後藤さんが自慢気なのは分からんが、俺が勝手に買ったのにバッグあるから虹夏さんと喜多さんは自分で持っていてねとかできないじゃん普通。

それこそ鬼だよ。

ひと通り水分補給を終え飲み物を回収していると、後ろからこんな会話が聞こえた。

「ちよつとお、何ぼうつとしてんの？」

「ああ、ごめん。みーたん綺麗だから見惚れちゃってえ……」

「もうっ、ばか♡」

「みーたん♡」

「たつくん♡」

何だろう。無性に腹が立ってきたな。

ただでさえ暑いのに余計温度上げるのやめてもらっていいですか。後藤さんに奇行

させて空気ぶち壊してやろうかこの野郎。

「チツ」

「移動だ移動。こんな場所にいつまでもいられるかってんだ」

「今度は清水君のテンションが急に下がり始めた!? もうっ、早く展望台行きましようよ！」

ちくしょう、精々幸せな生活送りながら結婚して孫達に囲まれながら老衰で死ねバカ!!

許せねえ、俺にはリア充が許せねえよ……。

気を取り直してやってきたのは江の島シーキャンドルの展望台。

江の島名物の一つである。

エレベーターが開かれたすぐ前にはもう景色が広がっていた。

「わあ、見てください！ 展望台からの眺めはもつと絶景ですね！ 目に焼き付けたくない！」

「へえ、360度見渡せるのか。こりやすげえや」

ガラス越しにはなるけどカメラで撮るところ。やっぱ景色を撮るのも中々良いな。

喜多さんは既に何十回とスマホカメラで撮りまくっている。同じ角度から何枚も撮ってるけど意味あるのかあれ。SNSに上げる用だとしても選ぶのに時間かかるだろ。もしかしたら実は俺も同じ角度から撮るの真似した方がいいとかあんのかな。

「あくクーラー最高……」

「極楽」

「うっ、思ったより人が多い……ゆ、ゆうくうん……」

三人は三人で景色よりも室内に関しての感想のみだった。

後藤さんはそそくさと俺の後ろにしがみ付いてきてるし。まあ、観光スポットなんだから当たり前だけど確かに結構人がいるな。

涼しいから余計室内に集まっているという感じか。

しかも夏休み中の観光スポットという事はだ。最終日だから最後に行つところぜ的なノリで来てるカップルとかが割といる。男女二人組ばつかじゃねえか。もつと家族とかで来いよ。

俺だつて高校一年生。まだまだ思春期で青春ラブコメみたいな事に少しでも憧れが

ないかと聞かれてないと言えるほど達観はしてない。

人生一度きりの高校生だ。誰だつて甘酸っぱい青春を送つてみたいと思うのは当然である。

……よく考えたら俺も一応バンドとはいえ女子四人と観光スポットに遊びに来てい
るという事になつてゐるんだよな。

後藤さん、喜多さん、虹夏さん、リョウさんの順にちよつと視線をやる。

うん、まあこの面子じゃなー。はははつ、ラブコメ的な展開を期待するだけ全部無駄か。

「なんかムカつく」

何故か喜多さんと虹夏さんの両方から頬をつねられた。あと後ろからしがみ付いて
る後藤さんの力も強くなりだした。

口に出してもないのに何でこんな事されてんの。そんな変な顔でもしてた俺？ ラ
ブコメ展開諦めてただけじゃん。

何せ観光スポット大冒険に、根暗コミュ症陰キャ、超陽キャSNS中毒者、大天使、借
金クズのパーティー編成ではどうしたつて偏りがあるに決まつてる。

平凡男子高校生の俺の手に余るヤツしかいねえ。一番マシなのが虹夏さんと言つて

も、彼女は大天使。むしろ俺なんかじゃラブコメ展開を期待するのすら烏澁がましすぎる。高嶺の花には手なんて届かないのだ。

「ふ景え色ふ見いまうしわよひ景よう色え色ひ色」

ようやく頬が解放された。伸びてないよねこれ……。

「ほら、結構綺麗でしょ？」

「おー……」

虹夏さんが少し感嘆の声を漏らしたかと思えば、それつきりで言葉が途切れた。

え、どうしたの。

「生だとこんなもんかあ……」

「ネットで見たドローン映像の方が綺麗だった」

何てこと言うんだこいつら。そういうのは例え思ったとしても言わないのが鉄則でしょうが！

まだ黙って見てる後藤さんの方がマシってどういう事よ？ この子はコミュ症陰キャだけど基本的に何かを下げるような事は絶対言わない良い子なんだ。俺は信じて

た。

「喜多ちゃんも満足したみたいだし降りよつか！」

「涼しいのは最高だったけどここに来るまでの労力と報酬が釣り合っていない」

「疲れた……」

「あ、まだ景色見てたかったら見ていいからね。あたし達先に降りとくからー」

俺でもビックリするくらい景色に関心ないなこの人達。

いや、カメラがあるからまだ俺も写真撮ったりしてるけど、一眼レフ持ってなかったらこうなつてた可能性もあったのか……？

横を見ると喜多さんが珍しく拳を握り締めていた。

「ぐぬぬ……インドア人達めえ……！」

さすがにこればかりは俺も喜多さんに同情せざるを得ない。

自分だけ景色に感動してバカみたいに見えるもんな。大丈夫、今回ばかりは喜多さんが正しいよ。

「俺も喜多さんの味方してやりたいけど、どっちみち二対三でこっちの負けだもんなあ。

景色をバックにみんなの写真撮りたかったのに迷わずエレベーターに向かってっただぞ」
「みんなを楽しませるための私の計画があ……！」

ああ、事あるごとにスマホで何か調べてると思ってるたら江の島観光について見てたのか。

はしやぎまくってたから何も考えてないと思ってたけど、インドア共(俺を含める)でも楽しめるよう喜多さんなりに気を遣ってたのね。あの階段は擁護できんが。

元々は俺と後藤さんの思い出作りのためにここを提案してくれた訳だしな。

俺にできる事は、喜多さんのみんなを楽しませる計画とやらに甘えさせてもらう事だけだ。

「喜多さん、次のエレベーターで降りよう」

「うう、分かってるわよう……」

「だからその前にさ、俺に上手い自撮りの撮り方教えてくれないか？」

「……え？」

「たまにや高校生らしくスマホを活用してみたくなってるな。そういうの、得意なんだから？」

喜多さんが顔を上げる。

落ち込んでいた表情がみるみる明るくなっていくのを感じた。四つん這いで項垂れていた彼女が勢いよく立ち上がる。

「ま、任せてっ！ 清水君を可愛く盛れる撮り方伝授しちゃうから！」

「できればかつこいい盛り方が良いんだけど……。あの、ちょ、聞いてる？」

「ほら、一緒に撮りましょ！」

「え？ いや教えるのが先じゃ……。というか俺のスマホじゃなくて喜多さんのスマホで撮んの？」

「いいから！ この後で清水君ので撮りましょ！」

一度立ち直った陽キャというのは行動が早い。

ものの数秒で何枚も写真が撮られた。

そして、俺のスマホの初自撮り記念は喜多さんとのツーショットになった。

36. 楽しい時間は必ず終わる

サムエル・コッキング苑付近。

俺と喜多さんはそこで虹夏さん達と合流し一休みする事にした。

ちなみに喜多さんと撮ったツーショットに関しては、彼女から「みんなには内緒ねっ！」と口を封じられている。理由は分からん。

結局自撮りの撮り方もそんなに工夫がある訳でもなく、加工はアプリでやればいいとの事だった。いやアプリ使ってまで盛りたいたいとは思わんけどね。

近くの売店でソフトクリームを買い、適当に座れそうなところへ座ってひと息をつく。後藤さんと虹夏さんがミルク味、喜多さんとリョウさんがミルクとアップルマンゴーのミックス味、俺が夕張メロン味のソフトクリームを買った。一口食べたけど誠に美味である。

喜多さんはまたソフトクリームと一緒に自撮りしてる。ほんと飽きないね君。

「そっういえばリョウさつき塩ソフト食べてなかった？」

「アイスは無限に食べれる」

「アイス代出したの俺ですけどね。ちゃんと返してくださいよ？　じやないとその内リョウさんの家に押しかけますんで」

「今度絶対返す」

そう言うヤツほど返してこないんだよなあ。この人の場合返せそうな時だとしても普通に忘れてるとかありそうで余計怖い。

つうかお金借りるならもつと申し訳なきやうにするとかないんか。

合流した途端無表情のまま華麗に俺に向かってスライディング土下座してきたぞ。

さすがに断ろうとしたが、俺が断ると矛先が後藤さんに行きそうな気がしたし、何より周囲からは女の子に土下座させている男子というレッテルが貼られかねなかったの
で断れなかった。つまりこのベアシストに上手く空気を利用されたのだ。お金の借り方を熟知してやがる……。

「あとは何します〜?」

「もう結構遊んだけどねえ」

「そうですね？　まだもうひとイベントくらいは足りてない気が」

海行つてたこせん食って階段上つてエスカー乗って展望台行つてアイス食ってるの

にまだ足りないんですか。

イベントも詰めすぎると逆に大変になってくるんだよ喜多さん。気持ちはありがたいけど後藤さんの体力的に持つかどうか。

「うーん……じゃあしらす丼食べたい！ 有名だし食べてみたかったんだよね！」
しらす丼か。確かにそれなら食べる系だし体力も使わないから後藤さんも行けそうだな。

「無理。もうお腹いっぱい」

「ほんとに自由だなおい」

「リヨウさんの言う事は七割信用したらダメですよ」

「全然信じてないじゃん……」

前科しかないからね。この人とまともな会話したの最初の内だけな気がする。
基本黙ってるか好き勝手言ってるだけなもの。

「……………この音……何ですか？」

後藤さんの言葉で耳をすませると、聞こえた。

ピーヒョロローと音色のような音……というか、鳴き声？
後藤さんの質問に答えたのは虹夏さんだった。

「あゝ、トンビじゃない？」

みんなで上を見上げる。いた。

そういえば聞いた事あるな。トンビって確か人の食べ物を狙って取ってきたりする事があると。見た事はないから実際どうなのかは分からないけど、もし本当ならむしろ見てみたいものだ。

人が近くにいるのに構わず狙ってくるなんてカラスでも珍しいぞ。どんだけ恐れ知らずなんだろう。

こちらとしては狙えるものなら狙ってみる精神だぜ。受けて立ってやらあ！

「人の食べ物狙ってくるので、気を付けて食べ」

「うわあ!?!」

喜多さんの言葉に視線をやった瞬間、その隙を突いてトンビは後藤さんのアイスを奪い去っていった。

恐ろしく速いステイール……俺でも見逃しちゃうね。いやそんな事思ってる場合

じゃなかったわ。

「言った傍から!? ほっちちゃん大丈夫う……?」

「俺のアイス食べるか? まだ一口しか食べてないから結構残ってるぞ。夕張メロン味
すげえ美味いから、な?」

幸い上手く盗まれたのか、手などに怪我はしてないように見える。

そして俺のアイスを渡そうと立ち上がった時、先ほどの鳴き声が複数、頭上から聞こえた。

……え、何か多くなってませんか? さつき一羽だけだったのに、今八羽ぐらいいます
んこと……?」

しかも頭上をずっと旋回している。それが何を意味するのかは、動物の知識に疎い俺
でも何となく予想できた。

まずい、まさか今度は俺か……!? だったらできるだけ後藤さん達から離れて危険か
ら遠ざけないと!

と、俺が走り出そうとしたその時。

トンビの群れは俺ではなく真っ直ぐに後藤さんの方へ飛びかかっていった。

「ぼっちちゃんが獲物にされてるー!?!」

「何で俺じゃなくてそっちなの!?! 狙う相手間違えてんだろテメェら!」

まさか弱い相手を狙ってるのか。だとしたらこのトンビ共賢いな。弱肉強食の世界、最弱のヤツを狙うのは道理ってかしやらくせえ。

「鳥にまで舐められてる」

「そんな事言ってる場合じゃないですよ! た、助けないと……!」

「喜多さん、俺のアイス持ってきてくれ!」

「え、し、清水君!?!」

喜多さんにアイスを渡して後藤さんの元へ走る。

「今も彼女はトンビ達に群がられている。大事な幼馴染を狙うなんて許せねえ。俺がぶっ飛ばしてやる。」

と言つても俺は人間、ヤツらは自然界を生きる猛禽類である。

数も圧倒的不利、恐れを知らないあいつらに勝てるとは思えないが、後藤さんから俺に狙いを変える事ならできるはず。

「うおおおおおおお! ぐ、ぐ、ぐはああああああん!!」

「何言ってるんの優人くん!？」

構わず後藤さんとトンビ達のとこへ飛び込む。

そこから数十秒間、俺は猛禽類の猛攻をただただ受け続けた。

「ダブルヤムチャの出来上がり」

「料理番組みたいに言うな! もう、ああつち行けえーッ!!」

「後藤さん、清水君! 大丈夫!？」

「無理です……」

「き……貴様といた数ヶ月……わ……わるく……なかつたぜ……。死ぬ、な……よ……」

悟……飯……」

「悟飯じゃなくて後藤さんでしょ!？」

守り、きれなかった……ウツ。

「ひとイベントあった」

「私こんなイベントは望んでないですけど!？」

「まあ、ちよつと名残惜しいけどあんまり遅くなってもあれだし、そろそろ帰ろつか。

ぼっちちゃん達も満身創痍だし……」

「そうですね……。清水君、立てる？」

「ん、大丈夫」

「治りが早いね……」

俺と後藤さんクラスになると、わざと大ダメージを受けた演出をして相手の戦意を削ぐ事ができるのだ。多少は痛いけど。

なあ後藤さん。……あ、この子ガチのダメージ受けてる。元々の体力ゲージがなさすぎたのがダメだったか……。

「それよりもさ、喜多さんはそれでいいのか？」

「え……？」

「ごめん、さつきエレベーター降りてる時にチラッと喜多さんのスマホ画面が見えちゃった。調べてたのって、ここの神社の事だよな」

江の島にはいくつか神社があると聞いていた。

喜多さんが行きたがっているのはおそらくその一つだろう。スマホを見ているだけで楽しみにしているのが分かったんだ。ここで行かないという選択肢を選ぶのは早計すぎる。

「みんなと行きたかったんだろ？ なら言っちゃまえ。あと一つくらい寄ってく時間と体力くらいはみんな残ってるさ。後藤さんなら俺が担いでくしリヨウさんが面倒くさがらるなら借金チラつかせて同行させてやる」

「しれつと飛び火してきたんだけど」

自業自得です。

ぐったりしたままの後藤さんをおぶる。

「ほら、どこに行きたいって？」

問うと、喜多さんは虹夏さん達の方へ顔を向けた。

「……じゃあ、最後にみんなと一緒にお参りして帰りたいです！」

「よしてきた！ じゃあさっそく行こー！ リヨウもいいよね！」

「優人様の命とあらば私はどこにだって行く」

「よろしい」

良い返事だ。その調子でちゃんと借金も返してくれればもう文句なしだけど、絶対返ってこなさそうだから見直すのはまた今度で。

エスカレーターは上り専用なので下りは必然的に徒歩となる。

一人後藤さんをおぶりながら膝に負担かけまくりつつ俺達がやってきたのは、辺津宮にある奉安殿前。

「後藤さんもう起きてんのバレてるからな。途中からずっと腕の力入ったままだったぞ。ほら降りれ降りれ」

「……あう」

こつそり楽しやがってこのピンク。下りは下りで結構疲れるんだぞ。いやまあ修行と考えるとトレーニングにはなったけどさ。

「ここに祭られているのは妙音弁財天という女性の神様で、音楽、芸能の神様なんです！江の島行くならみんな絶対行きたいって思ってたんです！」

「じゃあ、あたし達のバンドの活躍をお願いしないとね！」

それぞれ財布から五円玉を出して参拝する。

リヨウさんもさすがに一円玉や五円玉はあつたようで、それを賽銭箱に投げ入れていた。

音楽や芸能の神様、か。俺の願いは……そうだな。

この先も様々な試練や難関が待ち受けてるかもしれないけど、どうか結束バンドがこれから少しずつでも前へ進んでいきますように。そして、後藤さんがいつかみんなの前で本当の実力を出せるようにしてやってください。

本当は神様に願うものではなくこういうのは自分達で叶えてこそなんだろうが、せつかく有名な神社に来たのならたまには神頼みも悪くない。

願い終わって目を開く。隣では後藤さんがまだ入念に願い事をしてる最中だった。……いや、これあれだな。入念にどうでもいい事願ってる顔だ。

俺には分かる。何か変なもやもや出してるし。

音楽と芸能の神様だっつってんのに無関係な事願ってるぞ絶対。俺が後藤さんの分の願いをしてて正解だったな……。

「ぼっちちゃん、さつきは凄く真剣にお願いしてたねっ」

「長かった」

「えっ……そ、そうですか……？ き、気付かなかったなく、なんて……はは、ははは……」

お参りも終わり、階段を下り始めたところで虹夏さんが口を開いた。

後藤さんの反応ですぐ分かっちゃった。やっぱロクな願い事してないぞこの子。めっちゃ目逸らしてるし。

「優人くんもちよつと長かったよね？」

「あれ、そうですっけ？」

自分ではそんな時間かけてないような気がしたけど、そういや俺が目を開けた時にはもう後藤さん以外終わってたっけ。

「どんなお願いしたの？」

「一説によると神様への願い事って口に出したら叶わないとか言いますよね」

「あれ、そうだっけ？ あぶなっ、あたしお礼とかお願い普通に言おうとしちゃってた！」

「お礼は別に言ってもいいんじゃないですかね？」

「そうだよ、そもそも虹夏さんは天使なんだから神様とほぼ同格だし別に言っても大丈夫っしょ。」

「何なら虹夏さんの方が格は上まである。……つまりそれってさあ、虹夏さんに願い事をしてもらえばそれは神社のお参りと同義……ってコト!？」

「あ、そっか！　じゃあお礼だけ言うかねっ。神様、ライブ成功させてくれてありがとうって言つといたんだ！」

やっぱ大天使やこの人。もう虹夏さんが神様でいいんじゃないかな。母性の女神的ポジションで俺達を導いてください。一生着いていきますんで！

それに比べて隣のピンクジャージを見る。

「虹夏さんはさすがですねえ。まああくまで一説なんで事実かどうかは分からないですけど。試しに後藤さんの願い事を口に出してみたらいいんじゃないか？」

「……わア、あ……!?!」

どうした、ちいかわみたいなの反応して。いや後藤ひとりだからひいかわか。常に悲鳴挙げてるみたいだな。あながち間違いではないけど。

やっぱり変な事願ってたっぼい顔してる。他のみんなは欺けても俺には通じんぞ。どれだけ前髪で隠れて見えづらい表情を覗き込んできたと思ってる。大体分かるかな。

少しからかうような顔で後藤さんを見てたらこちらの意図を理解したのか、人差し指でとても小さく何度も突いてきた。

「ゆうくん……あ、あんまり意地悪しないで……」

「ははっ、悪い悪い。後藤さんの事だからほんとに真面目なこと願ってんのかちよいと気になっただけだって」

「……………な、ナンノ、コトカナ？」

目線が明後日の方向に行っている。凶星だなこいつ。確信しました。

すぐ顔に出るじゃん。幸い虹夏さん達は前で違う話をしていて聞こえていないようだ。仕方がない、幻滅されないように今回は黙っておいてやろう。

帰りの電車内。

太陽は夕陽へと変わり、青かった空が朱く染まりつつある頃。

俺達は端からリヨウさん、虹夏さん、俺、後藤さん、喜多さんの順で座っていた。

電車に乗る前から既に疲労でウトウトしていたリヨウさんを端に寄せる事にしたの

だ。一人で外出する事はあると聞いていたけど、リョウさんの場合は古着屋とかをのんびりブラブラするだけでこんなに歩き回る事はなさそうだし、そりゃ疲れるか。

「ここから下北まで一時間くらいだっけ？」

「ですなあ。あ、後藤さんと清水君は藤沢で乗り換えね」

「あっはい」

「うーい」

最後までケアしてくれる喜多さんシステム優しいな。喜多さんのナビ音声とかあつたらバカ売れしそう。勝手に陽キャが行きそうな店ピックアップして案内してくれる可能性高いけど。

大きく息を吐く。電車の柔らかいイスに座り、程よく効いた冷房で体がリラックスしていくのが分かる。藤沢までは割とすぐだったか。

「清水君もちよつとお疲れ気味って感じね」

「んー？ まあな、後藤さん背負って階段上つたり下つたりしたから今頃疲れが来たんだと思う」

「あつうつ……ごめんなさい……」

「ああ、気にすんなって。そういう時のために俺がいるんだし」

もし俺がいなかったらどうなっていたんだろうという想像をしそうになってやめる。

多分誰も救われない。後藤さんという一人の存在の負荷があまりにも大きすぎるんだ。

「下北着いたら起こして……」

「しようがないですねえ」

声の方を見たらリヨウさんが寝る態勢に入っていた。

虹夏さんに至ってはもう完全に寝ている。しかも少しヨダレが垂れ出していた。めちゃくちゃ疲れ溜まつてる時の寝方じゃん。

「ああ、あ、本当は鎌倉も観光したかったし、みんなで晩ご飯したかったんだけどなく」
「本当に行きたいところには行けたしいいじゃん。というかあれ以上行ったらそれこそリヨウさんとか後藤さんの体力尽きてるぞ」

「それはそうだけども……」

「しらすどおん……」

虹夏さんから声が聞こえた。

まさか寝言か……？ か、可愛すぎるぞこの天使。めちやくちや可愛い。もうどのくらい可愛いかっていうともう、あれ、えーと……あの、そう……めちやくちや可愛い。

「よつぼど食べたかったみたいねえ」

「今すぐしらす漁に行つて俺が作つてやりたいくらいだな……」

「そこまで!？」

そりやあだつて、ほら、虹夏さんの願いはできるだけ叶えてあげたいじゃん？

いつも癖の強いメンバーをまとめ上げるのは大変だろうし苦労してそうだから労つてあげなきやだろ。

しらす丼に代わつた代用料理とか作れないか？ と思つてたら左の肩にストンツと黄色い頭が収まった。虹夏さんだ。

よく見たらリヨウさんも虹夏さんの肩に頭を預けている。つまりはドミノ式にこちらに倒れてきたという訳だ。ふむ、困つたな。身動きが取れなくなつたぞ。降りる時どうしよう。

まあいつか。その時の事はその時に考えよう。

「ねえねえつ、冬休みは全部結束バンドのみんなだけで遊びましょう！ 後藤さんどこ

行きたいっ？ 毎日思い出作りましょうね！」

「えっあつえっ……!?!」

良かった。結束バンドだけって事は俺は入ってないな。

さすがの俺でもクソ寒い時期に毎日外出なんてしたくない。後藤さん、ファイトだよっ！

「もちろん清水君も一緒よ！」

でえすよねえ~~~~!! なんか分かってましたあ！

俺だけ都合良く逃れられると思ってたのに世界は厳しい。夏休みでも毎日誰かしらと外出してる喜多さんってマジ何者なの。そう簡単に毎日とか言うなよ。震えるだろ。

「考えておきます……!」

「うんっ！」

どうやら後藤さんも同じ事を考えていたらしい。ハモツた。

俺でもこんな気持ちなんだ。後藤さんからすれば毎日外出とかバイトじゃない限り嫌でしかないだろう。

「そうだ、後藤さんも眠かったら起こすけど」

「あつ、いや、行きの電車ですつと意識なかったので、割と目は冴えてて……」

「あら、清水君は？」

「俺も電車までは意識失ってたからな。そもそも藤沢まで寝てもすぐ起こされるだろ？」

「ふふっ確かに。じゃあ藤沢までまだまだ楽しいが続くのねっ！」

片瀬江ノ島から藤沢まではおよそ六分程度である。

なのにその短時間をまだまだ楽しいが続くと言える喜多さんに脱帽した。ここでそういう言葉が出てくる時点で、喜多さんが何故色んな人から人気があるのかすぐに分かる。

嫌味や裏なんて感じさせない純粋な笑顔は、それだけで人を惹き付けるに値する。

「あ、あの……喜多さん」

「ん？」

後藤さんが珍しく自分から話しかけにいった。

「今日は、みんなと遊べて……楽しかったです。明日から、頑張れそうです……多分」

最後がなければ120点だったんだけどなあ。

まあ、自分から顔見てそう言えし、今回は100点にしといてやろう。

「……本当!? よかった。新学期も一緒に楽しみましょうね!」

「はい……!」

「清水君も、ね!」

「はいよ」

虹夏さん寄りかかってきてるからそんな動けないんだって、勘弁してくれ。

「んにゃんにゃ……」

電車の中でよくそんな気持ち良さそうな顔して眠れるな……。

ああもうさつきよりヨダレ垂れてきてんじやん。ポツケからハンカチを出し、後藤さんの涙を拭いた面とは逆の方を使って虹夏さんのヨダレを拭き取る。

何で俺自分のハンカチを他の人のために使ってるんだろう。自分で使えなくなるんだが。

次から予備持つてきておこうかね……。

「あ、次が藤沢じゃない?」

「分かった。……さて、虹夏さん達を起こさないようにしないとな」

そこから俺は喜多さんに手伝ってもらいつつ、できるだけ虹夏さんを起こさないように肩からどけてもらった。

少し名残惜しかったのは内緒だ。

電車を乗り換えて数十分。

金沢八景駅から降りていつもの帰路についていた。

「あつ、ゆうくん……今日はウチでギターの練習、していく?」

「急遽遊びに行く事になったからギターはスターリーに置いたまんまだろ」

「あ、そっか……」

結束バンドの初ライブを終えた頃から俺は後藤さんにまたギターを教わっていた。

一度はコードとかよく分からなくて挫折してしまったけれど、曲がりなりにも今は音楽関係のバイトもさせてもらって再び興味が湧いてきたのだ。

最初は後藤さんの事を理解しようとは思っていなかったためにすぐ諦めたが、今回は結束バンドのためにできる事があるかもしれないと思い再開してみた。

身近に上手い人がいるところという時はありがたい。それに喜多さんにも教えてるからか、今の後藤さんはギターの教え方も分かりやすくなっている。これも一つの成長か。

当然バンド活動やバイト、喜多さんに教えるのが最優先なので後藤さんに無理のない時や時間に余裕がある時だけ教えてもらっているのが今の現状である。

後藤さんも不思議と俺に教える時は活き活きとしているし、できない事がほんの少しずつでもできていくのが何より楽しくて仕方がない。バンドに関わるようになってから俺に起きた心境の変化がこれだ。

バンドをしたい訳じゃないけど、カメラと同じで新しい趣味にできそうだな。近い内に自分のギターも買いに行くかあ。

「じゃ、じゃあ晩ご飯だけでもウチでど、どうかな……」

「うーん、いや、今日はそのまま家に帰るよ。明日から新学期だし、準備もしなきゃいけ

ないからな。今夜は編集作業の練習とネットとか本で知識のインプットでもしとくわ
「……そ、そうだね……」

「後藤さんも、明日からまた早起きしねえとなんだから、夜は早めに寝るんだぞ？」
「う、うんっ……」

明日から新学期。

高校に入ってから初の長期休み明けとなる。

二時間かけて登校する学校というのは億劫なものだけど、隣の少女がいるおかげで退屈と思った事は一度もない。

そういう意味では、俺はいつも奇行に走る後藤さんにもっと優しくしてやってもいいかもしれないな。虹夏さん達には過保護とか言われたが自覚もないし、そうしてるつもりもない。

いつか彼女が普通になれるその日まで、きっと俺は後藤さんに手を差し伸べつつ見守っていくのだろう。

明日からが少し楽しみだ。

翌日早朝。

美智代さんから呼ばれた俺は急いで後藤さんの部屋へ向かった。
自分がどんな顔をしているかも分らないで、だ。
襖を開ける。布団の中にヤツはいた。

「あつ、ゆ、ゆうくん……ぜ、全身筋肉痛があ……」

スウツと、自分の体温が下がっていくのが分かる。

美智代さんは隣で困ったように頬に手を当て、釣られて早朝に起きるのが日課になっている元気なふーちゃんは布団ダルマを見てキヤツキヤしている。

低い声が出た。

「オイ……明日から頑張れるって喜多さんに言ってたよなあ……う？」

「……そ、それは、そのつもりだったんだけど……体中が痛くて……う、動けな……
ヒイツ!? あ、阿修羅!？」

「いいからさつさと準備しろグルルルルルルルルルルルアツ!!!」

「ひ、ひいいいいあああああああつ!？」

新学期早々、朝っぱらから絶叫と悲鳴が響き渡った。

37. 清水優人の何気ない一日

朝の四時。細かく言えば三時五十九分。

時計のアラームが鳴る直前でスイッチ自体をオフにする。

薄い掛け布団をどかし、上体を起こす。窓のカーテンを開けても外はまだ薄暗く青黒い。

九月四日。新学期になり四日目の朝だ。

早朝とはいえまだ残暑が残り、お世辞にも涼しいとは言えない暑さが外には漂っている。

適度に効いた冷房を止め、窓から青黒い空を見上げる。社会がまだ機能し始めていない貴重な時間帯。最初はむしろ新鮮さも感じていたが、今ではもうそんな事を思う気持ちには微塵もない。

どこまでもありふれた日常のルーティーンと同じで、ただの風景と化していく。

軽い欠伸が出る。ある種の危険信号。このままだと二度寝に入ってしまうような体

に鞭を打ち首を振る。

再び空を見上げてみた。

何も変わらない風景の中、ガラス越しに鳥が微かな鳴き声をあげながら何羽か飛び去っていく。

重い瞼を必死に支えながら、いつものように寝起きの独り言が勝手に出た。

これが合図とも言える。

「……………ねみ眠い」

そんな俺の、清水優人の一日が今日も始まった。

両親を起こさないように階段を下りて向かったのは洗面所。

「ぷんぷん」

眠気を覚ますのに水道から出した冷水を手で掬い顔に当てる。

まだまだ夏の暑さが残る今では気持ちも良く、眠気も飛ぶのでちようどいい。

気分は全快とまではいかないが、やる事がある以上立ち止まってはられない。

タオルで軽く顔を拭いてからキッチンの方へ移動する。次は昼食用の弁当作りだ。

といつても基本的に昨夜の夕飯の残り物や冷凍食品、彩りにブロッコリーやトマトなどを入れるだけ。申し訳程度に卵焼きやらウインナーを焼いてそれっぽく見せるだけの簡単なメニューである。

親に早起きさせて弁当を作ってもらうのは気が引けるからこうしていつも適当に自分でやっているが、中学の時もそうだったので別段面倒くさいとかそういうのはない。

よし、こんなもんか。残り物のから揚げにウインナーと卵焼き、ブロッコリーとプチトマトを入れ、冷凍食品のきんぴらごぼうやほうれん草のコーンバターソテー。

俺の弁当はいつも残り物以外はだいたいこんな感じだ。適当にあるものをぶち込んで余っている食べ物を処理する。弁当に手の込んだものは必要ない。

男子高校生の胃袋はとにかく腹が膨れればそれでいいのだ。

「……」

弁当に入らない分のから揚げはまだいくつか残ってる。あいつから揚げ好きだもんなあ。

よし、別の容器に入れて持って行ってやるか。食べる分だけ食わせてやろう。基本

引つ込み思案なのに食い意地だけは張ってるし。

「そんなこんなで弁当は完成。時短料理ならぬ時短弁当だ。ついでに余った卵焼きとウインナー、ブロッコリーで朝食も出来上がった。」

時計を見ると四時半くらいだった。今から朝食を食べて制服に着替えるにしてもまだ余裕はある。九月下旬に中間テストあるけど、今から勉強するのも早い気がする。つうか朝っぱらから勉強なんてしたくない。

「……飯食ったらギターの動画見て時間潰すかあ」

時間に余裕があるのはとても良い事だ。

朝の六時過ぎ。

二時間かけて登校するため、俺と後藤さんはいつも大体この時間帯に家を出る。

と言つても俺はいつも五時半くらいには後藤さんの家に行き彼女の身支度を手伝っているのだが。

だっていつも学校行きたくない駄々をこねつつのそのそ準備が遅れるからだ。し

かも新学期が始まってからまだ四日。筋肉痛はほぼ治ったらしいけど、たまに「ブラックホールに呑み込まれないかな……」とか呟くし怖い。怖い。

ただ外に出てしまえば普段と変わらない後藤さんになる。普段がまともかと言われれば決してそうではないけども。

朝早くから電車に乗る俺達は通勤ラッシュに遭遇した事がない。いつも空いている電車内は静かで、俺と後藤さんを含めても数えられる程度の人しかいない。

そんな中で俺達は他愛ない会話をしていた。

「さっき家で動画見てたんだけど、ギターの弾き方って色々名称とかあるんだな。バッキングとかチョーキングってのは聞いた事あったけど……ああ、カッティングとかは動画で見たな。俺にはまだ無理そうだったけど……」

「でっ、でもゆうくん集中力凄いし、飲み込みも早いから……一回覚えると意外とすぐできちやうかも……」

「ギターヒーローにそう言ってもらえるのは嬉しいけど、そう簡単にできたら苦労はないってもんよ。喜多さんが普段からどれだけ練習に取り組んでるかよく分かったわ」

天才でもない限りすぐに上達なんてのは到底無理な話だ。そう考えると数カ月でステージに立ち演奏しながら歌っている喜多さんは本当に努力家だと思う。

ああいう性格なのもあって、ステージに立つ度胸もさることながら真面目な彼女の性格が演奏と歌にも出ている。才能云々の話じゃなく、純粹に喜多さんは凄いのだ。

「あつ、えつと、けどっ……ゆうくんも今頑張ってるし……上達も早いからっ、わ、私ももつと教えるの上手くなるので……あう、あの、あ、諦めないでほしいな……っ……」
なんか変にあたふたしている。

「わざわざ俺から頼んだんだぞ？ 今更また辞めるなんて微塵も思つてねえよ。それに、前の時はコードとかよく分かんなくて諦めちまったけど、今は色々知識も増えてきてむしろ楽しいんだよな。押さえられなかったコードを押さえられたり、簡単なメロディーをぎこちなくても弾けるようになった時とか、できなかった事を少しずつでもできるようになってくるのがすっげえ気持ちいいんだ」

勉強やスポーツなど、他の事でも一緒かもしれない。

解けない問題を解く事ができたら少し賢くなつたんじゃないかと思うように、今までできなかったドリブルやシュートができるようになったなど。

次への扉を開いた瞬間の解放感、更なるステップへのモチベーションと欲求が深まる。

まだ音楽への興味が見る事でしかなかった前回の俺と、少しでもバンドに関わるようになり身近で頑張る彼女達を見てきた今の俺の違い。それだけでこんなにもやる気は変わるんだよな。

「それもこれも、後藤さんがいなきや絶対経験できなかった事だからさ。また時間ある時にでも教えてくれよな」

「……う、うんつ。わ、私はいつでも、ゆうくと練習できるように夜は空けてるから……ま、毎日でも来ていいよ……なんて、へへっ」

「毎日はどうだかなあ」

空けてるじゃなくて空いてるの間違いでは？ というのは野暮なので言わないでおうこつ。

つうか夜は俺が筋トレとか編集作業の練習とか色々やる事あるから毎日は厳しい。けどまあ、後藤さんもやる気になってくれるから検討はしておこうかね。

「あ、そーいやさっきの話に戻るけどさ、後藤さんってギターめちやくちや上手いじゃん？ なら色んな弾き方もできんの？」

「ええ？ えへへ、うへっ……うん、で、できるよ……。良かったら今日の夜でも見せら

れるかも……あつあのね、歯ギターとか背ギターとか、スライド奏法もちよよいのちよいだから……！」

思つてたよりハードのが出てきちゃった。

背ギターはまだしも、歯ギターつて……あの歯ギター？ え、そんなんできんの？
何で？ ていうかそんなの練習してたのか……。

女子高生の歯ギターつて絵面やばそう。何なら普通に怖いかもしれん。さすが後藤さん、こちらの想像をいとも簡単に超えてくる。

そんなの覚えてどうしたかったんだ。ちやほやされるとでも思つてたのかな。通な大人なら分かるかもしれないけど、普通の人が見たらドン引きされちゃうんじゃない？

「お、おう……。えっと、家でもっと調べてみるよ……」
「うんっ……」

嬉しそうに微笑む彼女だが、俺はどうしてもその姿で歯ギターするところを想像してしまいまともに顔を見る事ができなかつた。

この時ばかりは俺の顔にも暗い縦線が入っていたに違いない。

朝八時二十分。

後藤さんと別れて俺達はお互いの教室へ向かった。

俺達が登校する頃には結構いい時間帯で、生徒も既に結構来ているような状態だ。

自分の教室に入り、数少ない男友達とすれ違いざまに軽い挨拶を交わし席へ向かう。

新学期に入ってから席替えをしたのだが、俺の席は前から一個左へズレただけでまた一番後ろという中々ナイスなポジションをゲットした。

そして。

「あつ、おはよう清水君！」

「おう、はよつす喜多さん」

喜多さんもまた俺の右隣だった。おー、朝から笑顔が眩しいね。

そう、お互い左へ一個ズレただけだ。まあ、知らない女子よりは気を許せる彼女で良かったと言うべきだろう。その分男子からの視線も少しキツイけど、こんなのはもう慣れた。伊達に数カ月これで過ごしてない。俺のメンタルも日々成長している証拠かな。

そもそも軽い嫉妬ってだけで害も何も無いのだ。このクラスはみんな良いヤツばかりだし、団結力もそれなりにある。

だいたい喜多さんのような上位カーストがムードメーカーをやってくれるので、こちらはただ適当に乗っかるだけでいいし。

「ねえ清水君つ、今日のスタ練つてこの前できた新曲をメインに練習するんだったわよね？ 清水君は見に来るの？」

「ああ、そうだよ。俺はバイトが暇そうなら店長に許可貰つて見に行くくらいかな。今日はライブするバンド少ないみたいだから」

「そうなんだつ。早く次のライブを決めて披露したいな。今回の後藤さんの書いた歌詞、意味を深く理解した訳じゃないんだけど何だか惹かれるのよね〜！」

「ああ、それは俺も思ってた」

いつもは世の中への不平不満を抽象的に書いて歌詞にしているのが後藤さんのやり方なのだが、今回は珍しく、本当に珍しく不平不満なワードはさほど見当たらなかった。

不満というよりは憧憬や羨望に近い何かを書き起こしたものだと思う。

「暗い感じなのは一緒だけど曲調自体もしつとりした明るめな感じだし、俺は結構好き

だな」

「分かるわ〜！ 私も演奏してて踊りたくなっちゃうもの！」

「そこはボーカルに専念してもらて」

まあ気持ちには分からなくもない。俺も練習見ると勝手に足と指でリズム刻んじやうくらいには聴いてて気持ちいいメロディーだし。

次のライブでのお披露目を楽しみになってきた。

そこに別の声が入ってきた。

「おは〜、何々、朝から楽しそうに話してるじゃん」

「あ、おはよろさつー！」

「清水もおはよ。今日も相変わらずのツンツン頭してんね〜」

「おつす。そっちも相変わらずワカメ色の頭なよう〜」

「お〜言つたなこいつ〜」

喜多さんの前の席に座った彼女は佐々木次子^{つぐこ}。

髪色はワカメのような暗い深緑で、ミディアムに近いショート^{ショート}の髪型。左耳にピアスをしており、最初見た時はヤンキーかと思った。女子の割にサツパリとした性格で今となつては俺でも気兼ねなく話せる数少ない女の子だ。

喜多さんとは中学の頃からの付き合いで、何と四年間も同じクラスらしい。ここまで来たらもう腐れ縁とかじゃなくて運命すら感じてる。

「そーいや虹夏さんとリョウウさんもずっと一緒って聞いた事あったな。うん、やつぱ運命だわ。」

「何話してたん？」

「今日のバンド活動についてよ！ 新曲がとても良くてねっ、清水君とその話をしてたところなの！」

「へえ、そうなんだ」

「もうっ、淡泊な返事して！ さっつーもライブ来てくれたら良さが分かるのに！」

「ウチはヒップホップしか聴かないって言ってるじゃん。清水もそれで誘ってこなくなつたの知ってるでしょ？」

「無理に誘っても悪いしな」

「そう、この佐々木さんは趣味でヒップホップをやっているらしく、それ以外の音楽はあまり聴かないらしい。」

「徹底しているというか好きなものに一直線で一途というか、物怖じせず直球で聴かないと言われるとむしろ清々しい。後藤さんだったら多分対面して五秒で爆散する。」

「でもまあ、機会があったら聴いてほしいとは思ってるよ。結束バンドにやっえリードギターいるしリズム隊のベースとドラムも上手い。ギターボーカルの喜多さんはどんなギター上達してきてるし歌声の幅が広いから聴いてて飽きないんだよ」

「ふくん、やつぱ一番近くで見てるだけあって言う事が違うねー」

「あつたりめえよ。何たって俺の一押しバンドだからな」

「分かつてるって。ひゃー、重い重い。清水の愛が重いわくく」

「バカにした？　ねえ今俺の事バカにした？　バカにしたよね？」

「おのれ、我を愚弄するか佐々木・ワカメ・次子……」

「あははっ、外国人みたいに言うなし」

「ほら落ち着いて清水君、さっつーはこれが平常運転なの知ってるでしょ？」
知ってるけどそれはそうとムキーツてなるから仕方ないじゃん！

愛が重いか言われると恥ずかしいでしょうが！

「顔赤いよ清水、ウケるね」

「……ッ！　くくッ!!」

「あくもうほら、よしよし、大丈夫だからさっつーに向かって連続デスビームみたいに指を差さないの。私からさっつーに言っといてあげるから、ね？」

初めてですよ、この私をここまでコケにしたおバカさんは。くそう、くそうっ、いつか絶対仕返ししてやるんだから！ 覚えてなさいよ！

勝てる見込みなさそうだけど倍以上にイジってやるんだからね！

「清水あやされて親子みたいになってんじゃん。ウチもあやしてあげよつか？」
「それはダメ」

午後七時半。

スターリーでのスタ練中。

「ふう……今日はこのくらいにして終わろつか！」

「新曲、良い感じになってきた」

「ですね！」

「あつお疲れ様です……」

「早えよ帰ろうとするの」

学校もいつも通り終わり、放課後にスターリーへやってきた俺達。

後藤さん達はスタジオで練習し、俺は途中までバイトをしていたのだが、店長に暇だからスタジオ行ってこいと言われてスタ練の見学をしていた。

学校の事なんて基本授業で休み時間は後藤さん観察、昼休みは後藤さんと暗い場所で昼食を食べるだけなので特に思い返す事とかない。

強いて言えば余分にかけてきたから揚げを後藤さんが全部平らげたくらいだ。美味しそうに頬張る姿はリスみたいだった。以上。

「次のライブとかも色々決めないとね」

「学校行事とは被らないようにするのも大事ですよ。テストもそうだし、ウチは十月始めに文化祭もあるので」

「あーそっか。下旬には中間テストもあるもんねえ。テスト勉強とかその後の練習期間を考えると、少なくとももうちよつと後か。できて十月後半とかになっちゃうな」

てことは新曲のお披露目はまだまだ先になりそうか。

ファン一号二号さんもライブ待ってくれてるだろうし、ライブが決まればすぐ教えてって言われてるんだよなあ。この前のライブ終わりに半ば強制的にロイン交換させられたけど、これってどうなんだろう。

何やらあの人達の中で俺はファン零号という事になっているらしい。一番身近にいるファンだから零号なのとか。

そもそも『号』って何だよ。ファンクラブの会員番号か何かか。つまり結束バンドのファンクラブを作れば確実に二人は入るって事？ リヨウさんの言ってたぼったくりファンクラブが成立してしまうかもしれないのか。何としても阻止せねば。

いや、そんな事は今どうでもいい。

一号さんのロイン、登録はしたけどそれだけ。お互いメッセージを送る訳でもなくそのまま放置。あくまで結束バンドのライブ情報を知りたいのが目的。ならやつぱライブが決まってから送るのが妥当、か。

「とりあえずしばらくはバイトと練習に打ち込もう！ 既存の曲の完成度を上げるのも大事だからね！」

「分かりました！」

「あっはい」

「私はもう上手い」

「はいそこ空気を壊さない!」

変なところで結束力が発揮されないのが結束バンドである。

元々個性はみんなバラバラだからそうなのも仕方ないっちゃ仕方ない。それも含めて結束バンドの魅力だから見て飽きないのも事実。ほんと絶妙なバランスなんだよなあ。

「という事でかいさーん!」

虹夏さんの一声でそれぞれお疲れ様でしたと言ってスターリーを出す。

この時間ともなるともう空はほとんど暗くなっていた。後藤さんと二人で歩く。

「来月は文化祭かあ」

「うっ……いい、嫌だ……青春コンプレックスがあ……」

「想像で勝手にダメージ受けるのやめとけて。出し物何になるかは知らんけど案外楽しいかもしれないじゃん」

「ゆ、ゆうくんと同じクラスだったら一緒に色々できたのに……」

「じゃあねえだろ? 違うもんは違うんだ。まあそういうのは当日になってから分か

るって」

俺もはっちゃけたい訳でもないし、何なら展示ものにして当日はめっちゃ楽しみたい。それで適当に色んな出し物見て回りたい。

ウチの高校は結構自由な校風だから文化祭も様々な催し物が出るって高校のパンフに書いてたもんな。後藤さんがどうなるかだけが懸念だ。

「それより今日はそっちでギター教えてもらってもいいんだっけ？」

「あっうん、ゆうくんが良かったら全然大丈夫……。朝に言ってた歯ギターでも見せ」
「それはいい」

ちよつとシユンってならないでほしい。罪悪感一ミリも感じないけど。

「練習見てたら俺も弾きたくなつてき。今日も頼むよ」

「う、うんっ」

「帰ったら十時くらいか。先に飯食って風呂入ってからそっち行くよ。その方が後で楽だし」

「わ、分かった。私もそうしとくね……」

適当な予定を決めながら駅へ向かう。

夜空を見上げ、ふと新曲の歌詞が脳裏に浮かんだ。

満天の星は見えないけど、いつか結束バンドのみんなと星空がよく見える場所へ行ってみたいと思った。

ああ、なるほど。歌詞の意味を少し理解した。これを見て彼女はフレーズを思いついたのかもしれない。

スマホの時計を見る。

思った通り、もうすぐ八時だ。

こうして、俺の一日は終わりへ向かっていく。

いつもと変わらない。ピンク色の少女と共に同じ道を歩みながら。

38. 出し物を決める時は慎重に

HRが始まる五分前、俺はクラスの友人とこんな会話をしていた。

「いいか佐藤、鈴木、高橋、田中。文化祭一日目をいかに楽しんで自由に見回れるようにするか、そのための出し物を最優先に考えるんだ」

「じゃあ普通に展示物でいいんじゃないかねーの。それだとクラス全員自由に行動できるだろ？ 常識的に考えたらそんな事すぐ分かるつしよ清水。はい俺あつたま良いー」

「はいバカ田中バカ通称バカタナ。んな古典的な楽したい作戦が団結力あるこの五組で通じると思ってたのか俺らの中で成績最下位君よお」

「よおーし表出る清水そのふざけ腐ったお口をチャックしてゴミ箱にフオークボールしてやらあー！」

「いいぜ来いよ。理解力のねえその頭シャツカシャツカシエイクしてカップ入れてその辺の虫にテイクアウトさせてやんよこのスキンヘッド野球バカが！」

「ああん!？」

「何で成績真反対の二人がいつもこうなってるの」

朝イチからこうなっているのには訳がある。

そろそろ文化祭の出し物を決める必要があるらしく、一限目を丸々HRにして何をしようか候補をクラス内でグループ分けしてそれぞれ出し合う事になった。そしてクラスの中でも俺がよく喋る方の男子生徒はこの四人。

佐藤、鈴木、高橋、田中だ。全国でも名字が多い順なので非常に覚えやすかった。数少ない仲の良い友人がこいつらとかある意味奇跡だろ。ちなみに喜多さんは他の女友達と決め合っている。当然だ、あんなところ割って入れる男子がいたらそいつは陽キャを超したアホである。

俺を含めた五人で一つの候補を出すのだが、見事に俺達は文化祭を自由に見たいという意見で一致。そのために最適な案を考えるという段階なんだけど……。

このハゲ坊主頭の田中が初歩も初歩な案を出すもんだからほんと使えない。はーつつかえ。野球ばっかして勉強してないからダメなんだこいつは。

「磁石は引かれ合うものだからでしょ」

「誰がS極とN極だ佐藤コラア!？」

「それ以上揉めるなら剣道部の僕が相手するけど」

「高橋様どうかその竹刀をお出しにするのはお止めください」

田中と一緒に土下座である。いや、武器出すのはズルいじゃん。男ならステゴロ一本勝負だろ普通。

そんなの謝るしかないやん。あと鈴木はずっと小説読んでるのやめなさい。せめて話聞いて。

「……話を戻すぞ。このクラスは基本的にみんな仲が良い。故に一致団結がしやすい協力的なヤツらばっかだ。初日からグループプロインとか作っちゃうくらい陽キャの集まりなんだぜ、微妙に俺達も含めてな。そこでお前らに簡単な問題だ。常にみんなで何か一つを盛り上げんと考えるようなヤツらが展示物でそれをやろうって乗ってくると思
うか?」

「「「思わない」」」

「エサクタ正解。そう、だから展示物は使えない。候補に出したところでボツにされるのがオチだ」

陽キャは何かをやりたい、とにかくみんなと楽しんで動きたいという精神構造をしている(偏見)

陰キヤではないけど陽キヤほど明るくない俺達にとっては縁のない心だ。

「じゃあどうすんだ？ みんな自由に動けなきや意味ないんじゃないの？」

「逆だよ。見て回りたいと思う生徒ももちろんいると思うけど、年に一回……それもこのクラスでの文化祭はたったの二日間しかない。ではまた問題。こんな貴重な時間をパラメーター振り切った陽キヤ達が、自分達は何も動かなくてもいいから楽だくなんて思うでしょうか？」

「「「思わない」」」

エサクタ
「正解」

「BLEACHみたいに言うのやめろ」

「文化祭だしせっかくだから何かはしたい、自分の役割が欲しい、思い出を残したい。とにかくそこら辺の欲求を適度に満たせるモノがいいんだよ。そんなでもって教室に配置する人数は少なめで回せる案が良い。ちなみに調理系はダメだ。接客も必要な分人数確保が必要になるからな」

人が全然必要ない展示物や人がたくさん必要な調理系は軒並みアウト。

できる限り少数精鋭でも臨めるモノじゃないと陽キヤ達の欲求は満たせない。あいつらは動いてないとむしろ落ち着けないヤツらなんだから（ド偏見）

「……なら清水は良いアイデアがあるの？」

「よくぞ聞いてくれたな鈴木。完璧とまではいかないけど案としては悪くないものならある」

「それは？」

顔を合わせて聞いてくる最大手名字達。

俺は人差し指を立てて、

「駄菓子屋だ」

「その心は？」

「駄菓子なら安いし予算的にも多く確保できるだろ？ 調理系じゃないから作る必要もない。子供の頃はよく食べてたかもしれないけど、大人や高校生になった今では駄菓子とかって買う機会も少ないはずだ。そこでバラエティー豊かな駄菓子を机に並べて置いとくだけで、懐かしい雰囲気だが入ってきた客は自分で好きな物を手に取るから注文をとる必要もないし席への案内もしなくて済む。何なら適当に机とイスを配置してイトインスペースを作るのもありだな。決められたところへ案内するより自由に座ったり立食しながら駄弁ったりと、自由度が高けりゃその分需要も高まると思う」

「ふんふん」

「他のクラスで食べ物を買った人達も使えるように、ある種の休憩スペースにするのも良いか。駄菓子コーナーをあえて狭くして昔ながらの駄菓子屋っぽい雰囲気も出せるかもしれないね。あとは肝心の動員をどうするかだけ、教室の入口で宣伝一人、接客や案内は不要だから会計係をスムーズにするとすれば二人か三人、商品の補充に二人、教室内の見回り兼掃除に二人の大体計八人。これならほとんどのヤツは自由に動けるし、希望者がいればもうちょい増やしてもいい。そいつらは基本的にカースト上位の陽キャだろうから俺達にとつては好都合。シフト制にするにしても楽なものばかりだから思い出作りたいヤツとかやりたいヤツにぶん投げときゃ俺達に回ってくる事はない。これでどうよ?」

「一番最後に本音隠しきれてないね」

「最近の清水は少しクズ成分が出てくるようになったな。最初の頃は俺らにすら優しくかったのに」

「案出したのに何で貶されてんの俺」

そんなバカな、俺にクズ成分なんてある訳ないでしょ。基本的には真つ白なキャンパスのように純粋な優しさでできてるんだぞ。

最近二人のベーストクズに絡まれるけど俺は至つて普通なんだ。……………いや、あ

の二人のせいで若干伝染^{うつ}ってきてる説？　そ、そんな訳、はは、ははは……。

「けどその案は悪くないな」

「だろ？　飾り付けとかも含めたら手間もかかる分、むしろ準備期間に功労者となっておく事で当日はあまりシフトに入れられなくて済むって寸法よ。ちな成功確率は70%」

「失敗の確率30%の理由は？」

「問答無用にシフト入れられそう」

「一番あり得そうだね」

しかし俺としては何としても暇な時間を一分でも多く確保しておきたいのが本音だ。こいつらには悪いが底の底にある本心は隠させてもらう。

何故なら文化祭当日は後藤さんの面倒を見たいためである。

中三の時俺が地元に戻ってきた頃には既に文化祭終わってたし、後藤さんと迎える文化祭は今回が初なのだ。

相変わらず青春コンプレックス発動している彼女だけど、せっかくのイベントだからどうせなら楽しんでほしいと思うのが幼馴染心なんです。

俺と一緒のクラスならある程度は大丈夫な事をこの前言ってたからな。同行でき

る時間を増やして一緒に校内の出し物を見て回れば、少しはこういうイベントにも前向きになれるかもしれない。

そう、これも一種の後藤さん更生計画の一つだ。

そういうや外部の人も来れるって事は虹夏さん達も一応来れるんだよな。近々誘ってみるのもありか。

俺が同行できない時に後藤さんを見張ってくれば変な事はしないだろう。おそろく、多分、きつと、メイビー。

「とにかく、俺の案のメリットを最大限アピールして票を増やすんだ。クラス内グループは七つ。案が七個出ると考えて四十人中俺達だけでも五人は自分とこに票が入る。あと最低でも七人くらいは欲しいな。各自他の仲良いヤツに探り入れてスパイってこい。生憎俺はお前ら以外に喋るヤツそんなないから、部活仲間が多いお前らだけが頼りだ。頼む」

「清水……お前そこまでして俺達のために自由を勝ちとろうとしてくれるんだな……」
「当ったり前よ。このクラスの中じやお前らだけが気兼ねなく何でも話せてバカ騒ぎできる家族みたいもんなんだ。頼りにしてるぜ、俺のスパイファミリー達」

「そんな上手い事言えてないよ」

チクチク言葉やめてつて。

心に少々傷を負いながらスパイファミリー達を見送る。所詮はただの候補出しだ。グループ分けしたからと言って別グループの生徒が来たところでお前の方は何か良い案出た？ とかそういう話になるに決まってる。元々全員仲が良い奇跡みたいなクラスだしな。

だがすまんスパイファミリー達よ。何でも話せるとは言ったが後藤さんの事だけは秘密にさせてくれ。もし運動部に絡まれてもしたら彼女がどうなってしまうか想像もつかないからさ。機密情報にさせてもらうぞ。

ところで後藤さんのクラスは出し物何になんだろう。向こう次第ではこっちの作戦もパーになりかねないよな。可能な限り後藤さんに負担少なそうな出し物になってる事を祈つといてやるか。

「家族とかファミリーがどうしたの？」

「あーにやあッ!?!」

自分の席に戻ろうとしたらいきなり背後から話しかけられて飛び上がった。心臓止まるかと思っただけ……。

「き、喜多さんかよビックリしたあ……」

「清水君ってそんな驚き方もするのね。何だかキュウリ見てビックリする猫みた
いっ」

「ホラーは大丈夫でもドッキリ系は苦手なんすよ……」

「じわじわくるものは余裕だけど突然目の前に出てきたら誰だってビックリするで
しょ。それと同じ。」

「で、家族がどうしたの？」

「あ、そこ掘り返してくるの。別に何て事ないバカな男達の戯れなんですけど。」

「男同士の熱い友情みたいなもんだよ。あとその場のノリが九割」

「あ、友情なのね。それなら良かったわ！」

「良かった……?」

「何が? もしかしてガチと思われてたって事? まさか男に興味あると思われてる
の俺。」

「凄く心外。僕は女の子が大好きです。って言うとすげえ語弊しかないな。ノンケだ
よ俺は！」

「だって第二の家族は私達だものね！」

「ん？」

違った。思ってた方向性となんか正反対な方へぶっ飛んでった。俺達いつから家族になったの。宗教の誘いか何か？

あと教室で何て事言うんだこの子。幸い他の連中は文化祭の出し物についてという名のフリートークに夢中で聞いてないから良かったものの、もし聞かれてたら俺の高校生活は終焉を迎えてたぞ。

「どゆこと？」

「もうっ、私が結束バンドに入る頃に言ったでしょ？ バンドは第二の家族のような感じがするって」

「……あ——、言ってた。言ってたわ。うんうん、言ってたね」

あつぶねくく！ 変な勘違いするところだった。もう少しで自意識過剰になりかけて壮大に自爆するところだった！

容姿が良いとここまで異性を勘違いさせるのか。恐ろしいな全く。これだから顔が良い人は困る。平常心平常心、思い出すは後藤さんの奇行………よし、平静を取り戻

した。サンキュー下北沢のツチノコ。

「清水君も結束バンドを手伝ってくれる身だし、実質第二の家族よね！」

「いや、あくまで俺はメンバーじゃないからその論は成り立ってないんじゃない？」

「よね？」

「……はははは」

「圧が怖え。喜多さんこんな子だったっけ。結束バンド入ってから少しずつおかしくなっていないか？」

「変人達（主に後藤さんやリョウウさん）と関わるようになって伝染^{うつ}ってきてる可能性があるぞ。俺もそうかもしれないし。」

「よし、ここは話題を変える事に専念しよう。」

「と、ところで自分の席に戻ってきたって事は喜多さんも話し合い終わったの？」

「え？ うん、良い感じのアイデアが出たから終わったところなの。私達の家になつたら多分イマドキの文化祭っぽくなると思うわ！」

「ちなみに何か聞いても？」

「恐る恐る聞いてみる。」

天元突破した陽キャの言うイマドキほど怖いものはない。なに、ミラーボール飾ってパリピコレクシヨンの事でもすんの。パーリナイで踊りあかすの。

「みんなの写真から選りすぐりの映えスポット写真を展示する映えスポット展よ！」
て、展示物、だと……!?

バカな……喜多さんほどの陽キャグループが一番楽な展示物を選ぶなんて……天変地異の前触れか!? それとも後藤さんがまともになつちまう前兆か!?

いやでも待てよ。展示物ならそれはそれでこちらに都合なのでは……?!

陽キャは常に動いてないと死ぬ生き物（偏見）だから展示物は無理だと勝手に決めてた。だけど喜多さんがいる上位カースト陣がそれで良いと決めたならもう映えスポット展で良い気がする。

「清水君はどんな候補にしたの?」

「俺は駄菓子屋にしたけど、喜多さんのやつの方が楽そうで良いな。文化祭とか両日自由に見て回れるし」

「……へえ、確かにそうね〜」

クラスの中心人物がそう言うならもうこの案で間違いないだろう。

スマホのロインを開いて田中達に事の経緯を伝える。全員がすぐ既読になり俺の方へ向いて軽く首を縦に振った。楽したいヤツらは協力的で助かるな。

そうして一限目の時間も進んでいき、いよいよ投票の時間となった。

当然結果は見ての通り。

「はい、では多数決の結果、五組の出し物は映えスポット展に決まりました」

文化祭実行委員の女子の言葉により正式に出し物が決まった。

よし、これで両日共に俺は自由の身だ！ 二日丸々後藤さんが逃げ出さないように見張っておけるぞ！ 待つてろ後藤さん、常に闇を纏っている君でも文化祭くらいは楽しめるって事を俺がその身に教えてやらあ!!

喜多さんも自分が出した候補が選ばれて嬉しそうだった。

いいね、映えスポットの写真については喜多さんみたいな陽キャが良い写真いっぱい持っているだろうし任せとけば大丈夫だろ。俺の一眼レフには結束バンドのみんなばかりや映えとまではいかなない景色しか撮れてないからアウトかなあ。

なので俺は適当に準備の手伝いとかその辺りをして当日まで伸び伸び待たせてもらう。

いやー、やつぱ一致団結って良い言葉だなー！

「じゃあ文化祭当日までに一人一枚ほど自分の思う映えスポットの写真を撮ってきてくださいねーもちろんもうあるやつじゃなくて新規で。映えてたら景色でも人が写っても大丈夫です。まあこのクラスならこんなノルマくらい大丈夫でしょ」

「……………はえ？」

今あの文化祭実行委員何と言った？ 一人一枚は確定で映えを用意しなきゃいけないだろ……………？

何でそんな惨い事を言うんだ。もうあるやつで良いじゃん。写真に新鮮味とかないだろ別に！ 映えスポットとか知らないんですけどお!!

両日自由になる代わりに陽キャ以外には結構シビアな条件が追加されてしまった。

名字多いブラザーズから痛い視線が送られてくる。やめろ、俺もこんな事になるなんて思わなかったんだよ。そんなルールあったっけ？ 喜多さんから何も言われてないけど……………。

俺達五人衆は集まれば基本うるさいが、陽キャ的なノリとかではなくアニメの話とかで勝手に盛り上がってヒートアップしていくタイプの人種だ。映えスポットなんて一つも知らない。

……いや、待てよ。アニメの聖地巡礼とかならまだワンチャンあるか？ 今やアニメも世間に浸透して聖地巡礼もしやすくなってきている。有名なアニメの聖地なら充分映えスポットにもなるはず。さつき実行委員も言ってたじゃないか。

自分の思う映えスポットを撮ってこいと。つまりはそういう事だ。大丈夫、何とかなる。

適当に良い聖地に行つて写真を撮りつつ聖地巡り……あれ、案外楽しいかも……？
これなら俺が少し遠出するだけで田中達も納得してくれるはず。

「ねえ清水君」

「……………え、あ、何？」

「清水君ってイソスタ映えするような所に心当たりつてある？」

「いや……………この前の江の島くらい、かな」

「だろうと思つたわっ」

凶星だけドストレートに言われると何だか引つかかるぞ小娘おい小娘。

そんな行かんだろイソスタ映えするところなんて。行き過ぎてる喜多さんがかしいんだよ。俺はむしろ普通だと思う。

「じゃあさ」

少し俺の席へと身を寄せて、声のポリュームを抑えながら喜多さんは言った。

「今度一緒にイソスタ映えするところへ写真撮りに行きましょうよっ」

「……………ええ」

蘇るは江の島の記憶。

太陽の下で陽キヤ成分マシマシになった喜多さんのぶっ飛び具合。あんなのとまた対峙しろっていうのか……？ 後藤さんじゃなくても死ぬぞ、俺が。

だがしかしこの案に乗ったのも紛れもない俺。正直喜多さんが一緒なら万が一にも間違えるなんて事は絶対にならないという訳だ。

ヤツらとの友情を取るか、安パイを取るかの二択。

数秒考えて、俺は喜多さんに答えた。

「……………分かった。俺に映えを教えてください」

「そうこなくっちゃー！」

迷わず田中達とのロープを切る。あいづらにはそれぞれ頑張ってもらおう。両日自由になれる代償を考えればまだマシだろ。

許せサスケ……また今度だ。

「でもできればお手柔らかに頼むな？　この前みたいに無限に体力いるような場所は勘弁で……」

「色々調べとくわね！」

聞いちゃいねえ……。

39. 不意打ちのダメージはマジで大きい

放課後になった。

俺は基本休み時間は後藤さんのクラスを覗きに行っているため、田中達と駄弁ったりするのは朝のHR前くらいだ。なのにあんな仲良くしてくれるのは本当にありがたい。バカみたいに騒げるのもあいっらくらいだからさ。持つべきものは男友達ですわ。

文化祭の出し物については少々誤算もあったが何とかなった。イソスタ映えをする場所は喜多さんに任せておけば大丈夫だろう。何たってあれからずっとウキウキしながらスマホで色々調べてるし。陽キヤは映える物を生き甲斐にでもしてんのかね。

放課後のHRで少し文化祭の話をしていたからか帰りの準備が少し遅くなっちゃった。後藤さんを教室で待ちっぱなしにしてると天然記念物みたいに見られるかもしれないし早く行ってやらないと。

少し目を離すだけで迷子……じゃない奇行に走るような生物だ。さっさと保護せねば……。

「喜多さんは今日友達と予定あるんだったよな？」

「うん。だから今日はバイト行けないの。ごめんね」

「喜多さんはよく誰かのヘルプで入ってくれているんだから気にすんなって。陽キヤは友達との予定も大事にしなきゃサークル崩壊みたいな事になるんだろ？」

「さすがにそれはないけど……」

「ないの？ あの子最近付き合い悪くない？ ノリも違ってきたし何かね。ウチらよりあつちの付き合いの方がいいんだ。ハブる？ ハブるか。みたいな感じになるんじゃないの陽キヤの集まりって。」

まあ怖い。後藤さんには縁のない話だわ！

「じゃあ俺は後藤さんところ行ってくるわ。じゃあな」

「ええ、また明日」

別れを告げて足早で二組へ向かう。

教室の引き戸までもうすぐそこまで来たと思った時、違和感を感じた。

あれ、後藤さんがいない……？

半径十メートルほどまで近づいているはずなのに、彼女の姿がどこにもない。や、常に気配を感じる訳じゃないけど、後藤さん特有の陰のオーラを感じないのだ。

いつもなら教室の中か廊下で忠犬ハチ公みたいに待つてるかなのに、どこに行つたんだらう。

でも机にはギターとトートバッグが置いてある。トイレならいつもロインでちよつと待つててつて送つてくるのだがそれもなし。休み時間でもないからわざわざ薄暗いところに行くとも思えないし。

どこかへ向かった……？　あの後藤さんが？　校内を？　何もなしのにたった一人で？

あり得ない。後藤さんは何もなしのに校内をうろつくはずがない。人を避ける傾向にある彼女は無意味に廊下を徘徊なんてしないのだ。俺には分かる。

つまり何かしらの意図があつて後藤さんはどこかに向かつたはず。今こそ俺の名推理が光る時だけ清水優人！　真実はいつも一つ！

「……うん、分かんねえや」

無理。そもそも後藤さんがこちらの予想を超えてきた時の行動パターンなんて読める訳がない。

目の前にいるならまだしもいないとこで変な事してたら分からんよ普通。案外普通に戻つてくる可能性もなくはないが、ここで待つてるのも何だかなあ。

「しらみつぶしで探していくか」

ピンクジャージ娘を求めて俺は廊下を走り出す。

その時は意外と早かった。

きつかけは廊下に響いた誰かの悲鳴だ。

「……まさか」

上の階から聞こえた声を頼りに階段を上る。

本来学校で悲鳴を聞くこと自体おかしいのだが、それをおかしくないとさせる少女をわたくし清水優人は知っている。経験則で知っている。

簡単だ。

悲鳴あるところに後藤ひとりの奇行あり。

あいつめ、今度は何しやがった。上の階は二年生がいる階だ。普段の後藤さんなら絶対縁のない場所。

なのにそこに彼女がいるという事は何かがある証拠にもなる。……確か、生徒会室も

この階にあつたつけか。

階段を上つて生徒会室のある方へ走つていくと。

いた。なんかいた。

とかいうかピンクの少女が倒れている。普通なら心配して駆け寄るべきなのだろうが、ちよつと迷つた。悲鳴のせいで軽い人だからできてるし。

うゝゝゝゝゝゝ……完全に我らがゴトゥーザさんだけどなく……半笑いのまま気を失つてるのが不気味すぎて関係者と思われたくねえ……。完全に殺人現場だもん。名推理がどうか思つてたせいで変な伏線回収みたいになつちやつたよやべえ。

生徒会つぼい人もはたして動かして大丈夫なのかとあたふたしておられる。

全身ピンクの生徒を見ても引かずに心配してくれるあなたは生徒会の鑑です。良心が痛む前に俺が出向こう。

「すみません。この子俺の知り合いなんで、あとは任せてください。保健室に連れて行きますね。おーい後藤さーん……やつぱ意識ないか」

「あ、そ、そうですか……。多分頭かどこかを打つたかもしれないですけど、すみませんがよろしくお願ひします。皆さんも失礼しました。その生徒さんが保健室に付き添つてくれるそうなので、もう大丈夫です。お騒がせしました」

「適当な相槌をして生徒会の人は部屋の中へ戻っていった。ついでに野次馬達も散つていき、あつという間に廊下には俺と死体だけになった。」

「さて、どう遺棄しよ……じゃない連れて行こうか。」

「頭を打ったかもしれないと言つてたけど、この半笑いの表情的に事故ではなさそう
だ。いやある意味自己的かもしれないけど。」

「一応念のため頭を少し浮かせて後頭部などにたんこぶができてないか触診で確認す
る。……なさそうだな。」

「てことは……額か？」

「と思い前髪を少し上げると、見事に一点集中。額の中心が赤くなっていた。完全に自
分でやったなこれ。」

「左手に握り締められている紙が少し気になるが、大方予想はできる。というかほぼ確
信した。生徒会室の前にいるつてことは、そういう事なんだろう。」

「詳細は保健室で目が覚めてから聞くとして、今は保健室まで運ばないとな。」

「おんぶは……この態勢だと難しいか」

「仰向けに倒れてるせいでちよつと起こしにくいし補助がないと厳しい。何でこうい
う時に限つて空気抜けたりツチノコになって縮まらないんだ。運びにくいだろ。」

うーん……ちよつと誰かに見られるのはアレだけど、この際仕方ない。

後藤さんの上体を起こし肩甲骨辺りに手を伸ばす。そして両足の膝裏にまで腕を入れて自分の体ごと起き上がる。

いわゆるお姫様抱っこだ。

本当なら抱えられてる人に首へ手を回してもらわないと支えづらいのだが、気を失つてるのでそれは不可能。

故に後藤さんの頭を俺の右肩と顔の中間辺りに寄せて支える事にした。俺の頬や顎に彼女の頭部が当たっている。最近押入れに入っていないからか防虫剤の匂いはしなかった。

できるだけ人がいないタイミングを見計らって保健室を目指そう。

スニーキングミツシヨンの始まりだ。

保健室に辿り着いた。

まあまあな生徒に見られた。

そりやそうだ。だって基本廊下なんて一本道に生徒が人つ子一人いないなんてのは早々ないもの。

くそう、コソコソ喋ってたヤツ何人かいたけど変な噂立てねえだろうな。顔覚えたか

ら噂が立った日にや一人ずつ問い詰めてやろうかこの野郎。

とりあえず後藤さんをベッドへ運び寝かせる。そしてこういう時に限っていない保健室の先生。ケガ人いるのどこ行ったんだよ。

職員室に呼びに行くのもな時間かかるしなく。しゃあない、ちよつと包帯とガーゼを拝借させてもらいますよつと。

という事で俺はネットで包帯の巻き方を見ながら寝たままの後藤さんの額に包帯を巻いていった。その途中で彼女が握り締めていた紙を取り後ろの机に置く。予想通り文化祭二日目のステージ出演希望者用の紙だった。これは後で本人に聞くとして、まずは応急処置が先だな。

よし、我ながら上出来だ。いつもなら溶けたり霧散したりした後に戻ったら傷とか治ってるのに彼女の体は誠に不思議である。魔人ブウかな？

このまま後藤さんが起きるまで待つしかなさそうか。バイトの時間まではまだまだ余裕あるから大丈夫として、彼女が起きるまでの間は割と暇になる。

スマホでギター動画でも見ところかな。

と、ポツケからスマホを出そうとしたら廊下から誰かが走ってくる足音がした。その音はだんだん保健室の方へと近づいてきて、引き戸が開かれる。

「あれ、喜多さん？」

「と、友達から後藤さんが倒れたって聞いて心配になっちゃって……おひ……じゃなくて、後藤さん大丈夫なの？」

「額を何度か自分で打ったくらいだから大丈夫だろ。いつもの自害だよ」

「もうそういう言葉に慣れてきてる自分が怖いわ……」

「出会って数カ月経ってるのにまだちゃんと慣れてないのか。それとも俺が感覚麻痺してるだけ？ 多分そう。」

「というか友達と予定あるのに大丈夫なの？」

「あ、うん。ちよつと待ってもらってるの。さすがにバンド仲間だから放っておけなくて……みんなもいいよって言ってくれたから平気よ。さっつーもいるしね」

「そっか」

「理解力のある友人がいるのは良い事だ。まあ喜多さんの友達だしそれは当たり前か。さつきハブられるんじゃないかねとか言ってしまったけど訂正しなくては。」

「知らない天井だ……」

「起き抜けに何言ってるんだオメーは」

後藤さんが起きた。のはいいがスルツとその言葉出てくるの何なん。君エヴァ見た事ないよね。

もしかして意外とリアルで目覚めた時に知らない天井だったら出てくる言葉なのそれ。俺も使ってみたいんだけど。

「あ、後藤さん目覚めた？ 具合はどう？」

「あつ、全然大丈夫です……」

そう言つて後藤さんは自分で上体を起こす。

さすがの回復力だ。俺もその能力身に着きたい。

「後藤さんが倒れたつて聞いたから来ちゃった。清水君がここまで運んでくれたそうよ」

「あつそうなんですわ……。あ、ありがと、ゆうくん……」

「いつもの事だし別に構わねえよ」

マジで後藤さん運ぶのはいつもの事だからね。何ならもう後藤さん運搬係まである。重くもないしちようど良い筋トレと思えば何とも思わない。

「あ」

「どうしたの？」

後藤さんの視線が一瞬後ろの紙へ移動したのが見えた。

「あ、ああ、えと……私もう少し寝てからバイト行くので、それかゆうくんに運んでもらいますのでご心配なく……」

「え、さすがに長距離おんぶはキツイんだけど。主に視線が」

遠出の江の島ならともかく、同じ学校の生徒達にずっとおんぶしてるとこを目撃されるのはちよつとアレだ。うん、アレ。ただでさえこの子制服じゃなくてピンクジャージ（しかも学校指定のジャージじゃない）で目立つつてのに。

いくら自由な校風と言っても全身ピンクジャージで指定のスカート履いとけばセーフにするこの学校も相当ヤバイ。傍から見たらこの子ただの寡黙な不良だもん。

とうか完全に喜多さんが後ろの紙へ注意が向かないようこつちに意識させようとしてんな。いきなり布団に潜り込んだし。

後藤さん的にはあまり見られたくないのか。ぐしゃぐしゃにされたステージ出演希望の紙。まあ、理由は一つしかないだろう。

まったく、世話のかかるお姫様だ。

「でも清水君だけに任せるのは……」

「あー、大丈夫だよ。歩けそうなら自分で歩かせるから。喜多さんもいつまでも友達待たせてるの悪いだろ？ こっちは俺が請け負うから任せてくれ。わざわざ来てくれてありがとな」

「……うくん、清水君がいれば安心、かあ。うん、分かったわ。でもあまり無理しないでね？」

「あっはい」

「じゃあ清水君、後藤さんまた明日ね！」

「おう」

「ま、また……」

喜多さんが保健室を後にして十秒ほど。もう戻ってこないと確信してから声をかける。

「喜多さん行つたぞ。だからもう出てこい」

「あ、うん……」

妖怪布団潜りが明るい世界に顔を出した。

そんな彼女に俺は後ろに置いていた紙を前に出して見せつける。

「大体予想はつくけど一応聞くぞ。個人ステージ、結束バンドで出なくていいのか？」
文化祭二日目、体育館で行われる個人ステージに○印を入れており、バンド出演希望で結束バンドと書かれている。

名前の表記はもちろん後藤さん。出演者の欄にはしつかり四人と書かれ、付き添いには一人と記入してあった。これ絶対俺だよね。当然が如くちやつかり入れてあるよね。いやまあいいけどさ。

俺の問いに後藤さんは紙を取り、

「……ほ、ほんとは出たいけど、ライブもまだろくにしてないし勇気が……」

そりゃあ、そうか。正式なライブは夏休みのあの一回のみ。

経験で言えば浅いも浅い。海でも川でもなくそこら辺の水溜まりに足を浸けたようなものでしかないのだ。後藤さんにとっては自信に繋がるまでにすら至ってない。

こんな状態で出ても逆に何かやらかす可能性の方が大きいんだろうな。例えば完熟マンゴー復活とかやりかねん。むしろ笑い取れそうな気もするけど、虹夏さん達の事を考えたらさせる訳にはいかない。

でも……せつかく後藤さんが自らステージに出ようとした気持ちを無碍にするのは、何だか違うような気がした。

「けど紙に書いて生徒会室まで来たんだろ？ あと一步踏み出せば文化祭でライブっていう夢を叶えられるじゃねえか」

中学の頃も結局バンド組めずにできなくて、ただずっと妄想だけを繰り返していたと過去に聞いてたから分かる。

そこまで強い望みがあつたなら、きつとやるべきなんだ。

「千回くらい妄想したし良いかなって……」

「いや妄想と現実の違いは違えだろ。……じゃあ何で紙に書いてあそこまで行つたんだ？」

「ずっと文化祭ライブをやりたいからなんじゃないのかよ？」

「い、いや、あれは気付いたらあそこにおいて……私も直前まで記憶が途切れてたというか……自分で記入してたの見てビックリしたくらいだし……」

「二重人格かよ」

もう一人の後藤さんでもいんのか。承認欲求モンスターがとうとう表に出てきちゃったか？

強すぎる望みというのは人の意識を奪う事もあるんだな。何それ、A☆I☆B Oじゃん。闇ぼつちかな。怖い怖い。

「気付いたらつて、じゃあ記憶が途切れる直前は どうしてたんだ」

「えつと……た、確か前の席の子がクラスの誰かがライブしたら惚れるかもつて言つて……それで、気付いたら生徒会室の前まで意識がなくて……」

「承認欲求働いた時の行動力だけはトップレベルだな」

意識なくなるほどとかマジかよこいつ。夢遊病と同等くらいじゃね。

つうか動機が不純すぎて素直に応援しようとしてた俺の気持ち返せバカ野郎が。

「ちなみにそれ言つてたのは男子かそれとも女子、どつち？」

「え？ えつと、女子だったけど……」

「ならいい」

変な輩に惚れられようとしなだけマシだ。女子に惚れられようとするのもどうかと思うが、まあまだ許せる。

同性から好かれるのも魅力あつてこそだしな。……魅力……魅力かあ。魅力、魅力ねえ……。ステージでギター弾ければ完璧なんだけどなあ。

やっぱ後藤さんはギターでしか誰かを魅了する事はできないし、ステージに立たせる事を優先に考えてみるか。

「文化祭ライブなんて基本的にみんな素人だろ？ プロでもないんだしそんな気負う必要もないんじゃない？ ほら、試しに動画サイトで検索してみたらどうよ。演奏レベルなら結束バンドの方が大体上のはずだぜ」

「う、うん……」

適当にスマホで調べてみたらいくつか文化祭ライブの動画が投稿されていた。試しに一番上にあつたやつをタップして二人で見してみる。

『お前から盛り上がる準備できてるか〜！』（イケメン男子生徒）』

『イエエエエエエー！』

「うわあッ!？」

突如として俺達は陽キャ弾幕により体中を撃ち抜かれてしまった。

な、なんだこの破壊力……文化祭ライブに陽キャってこんなにもバフがかかっているのか……。限定解除でもしてんのかよ。いつもの五倍はダメージ負ってるぞ。

俺でこれなら後藤さんは……あ、死んでる。額のダメージより重傷だわこれ。

というか忘れていた。そもそも動画サイトに文化祭ライブを投稿するような輩はもっぱら陽キャしかないので。これは完全に俺の失念だ。

どうしよう、俺のせいで後藤さんが死んでしまった。

陰キャには強すぎたか……。

「……おい、後藤さん……お、起きれるか……？」

「……………」

「ひ、姫……？ そろそろバイトに行かないとなんです……」

「……………」

返事がない。ただの屍のようだ。

どうしたものか。ウチの姫はご臨終なされた。教会に持ってけば生き返るのかな。

「……………おんぶ」

「え？」

枕に顔を埋めているせいでハッキリ聞こえなかった。

少し顔の向きをこつちにずらし、微かに涙目のまま彼女は言う。

「……………駅までおんぶ……………」

「……………はい」

こればかりは従うしかない。

わがまま姫でも面倒を見ると決めたのは俺だしなあ。

文化祭ライブ、どうにか立たせてやれないものか。

40・逡巡、後に死亡

「おはようございますーす」

「あつ、店長さんおはようございます……」

いつも通りスターリーまで来た俺と後藤さん。二つだけ違うと言えば、今日は喜多さんが用事があつて一緒に来ていない事だ。

あと駅までワガママ姫をおぶったせいで俺まで色んな人に奇異な目で見られた事。額の包帯が目立ってなかったらもつと注目を浴びていたかもしれない。

どうやら何かあればすぐ他人のプライバシーなんて関係なくスマホで動画を撮るような現代人ばかりの今でも、おぶられてる人が頭に包帯巻いてるケガ人だった時は好きな視線も数秒ほど消えるらしい。撮られてなくてよかった。

動画撮影なんてされたらそれこそそいつのスマホぶつ壊す。

「えっ、いや仕事してよ……。何自然にゴミ箱の中に入ってるのぼっちちゃん。あと優人も流れのままにぼっちちゃん放置してくな。二人してなに……。何かあったの？」

え、後藤さんはゴミ箱の中に入るのがデフォオなのでは？　まるで自分の巣に帰るような自然な流れ。俺も違和感とか一切感じなかった。もはや居住地だと思う。スターリーまでは普通に歩いてたし、もう怪我の方も大丈夫そうだな。

「いや、まああるにはあつたけど……って感じですかね」

「何だよ煮え切らねえな。ほれ、みんなのお姉さんに言ってみ」

「お姉さんって……ハハッ」

「今笑ったか」

「笑ってないです睨まないでください」

おれのぼうぎよがさがつちやうよく。

「つたく……そもそもぼつちちゃんやんが挨拶をスムーズにしてきた時点でおかしいのは分かってんだよ。いいから話せ」

その認識もどうなんですかね。店長とはいえさすがに酷いと思いませんか？

俺は思いません。事実なので。

それにしても後藤さんの事をよく見てるなあ店長。どんだけ気に入ってたんだよ。気付けば目で追ってたってか。恋かな。

ともあれ隠し事という程でもないしバレてるならば無理に黙ってる必要もないか。
ゴミ箱と一体化なうの彼女を引きずり上げる。

「後藤さん出てこい。困った時は大人へ悩み相談だ。さぞ良いアドバイスをくれるかも
しれないぞ」

という事で店長とついでに近くにいたPAさんに事情を話してみた。

「ふーん、迷ってんなら出た方がいいと思うけどね。一生に一度の青春の舞台だし」

「でしょ？ 後藤さんにも学校で良い思い出の一つくらいは作ってほしいと俺も思っ
て
るんですよ。行事イベントで後藤さんが輝けそうなのって文化祭しかないし」

「お前も言ってる事大概だな」

「球技大会でこの子の失態を目撃してる身としてはもう文化祭しか希望はありません。
それ以外の行事は諦めるほかないです」

「何を見てきたんだお前は……」

個人競技なら誰の迷惑にもならないと考え他クラスだったけどお互い卓球にしよう
と事前に打ち合わせし、見事に同じ体育館での対戦（男女別）になったから遠目で見て
いたのだが、とても見てられなかった。

個人競技であっても同じクラスに卓球を選んだ人がいる時点で気付くべきだったのだ。

試合をするのは個人だけど五人組で一人ずつ対決していく形式だと。

つまりは五人中三人は勝たなくてはいけないというある意味のチーム戦であった。そこで発揮される運動神経壊滅ウーマン。後半からもう彼女の組のメンバーは後藤さんを戦力外として数え、四人で勝ち上がろうと士気を上げていた。

本人は真剣に頑張っているつもりなのに捨て試合扱いされ、終わればメンバーと二メートル離れた場所で孤独のまま体育座り。

家に帰った時の彼女がずっと部屋の隅で「私は誰から見ても戦力外の女……」と呟きながら静かに泣いていたのを思い出す。ふーちゃんはそれを見て無邪気に笑っていた。俺は心の中で泣いていた。こんな悲しい思い出ある？

「その話、します……?」

「いやいい。お前が珍しく死んだ目になってるから聞いたらこっちまでダメージ来そう」

楽しい思い出を作るためのお悩み相談なのに何で余計雰囲気暗くなってるんだらう。

うわつ、後藤さんのエピソード……暗すぎ……?」

「そんな訳で高校一年の一度つきりしかないイベントを良い思い出にするために出た方が良いと俺は思ってるんですけど、当の本人の気持ちを無視する訳にもいかないので店長何かアドバイス言ってるんでやってくれせえ」

「さっきも言ったが少しでも出たいと思ってるなら出ればいいじゃん。まあ私は高校ろくに行っていないから適当に言ってるけど」

「私は高校中退でーす」

「ダメだ後藤さん、相談相手間違えてるわ。ロックすぎて何の役にも立たねえ」

「あつうっ」

「お前って最初は丁寧なのに仲良くなると雑に扱ってくるタイプの人間だよな」

そのくらいじゃ関係が壊れないと思ってるという信用の表れです。

あと話してみとか言ってるくせに適当に答えてる時点でマジで役に立ってないのこそつちでしょうが。

「おつはよろう。あれ、どうしたのぼつちちゃん達、お姉ちゃんと何か話でもしてたの？ てかぼつちちゃん頭の包帯何？ だいじよぶ？」

「助けてママッ!!」

「えっ急に何!? ママ!? あたしが!? 何でっ!?」

天使が降臨なされたぞお! 助けを乞え! 神託を授かるのじゃあ!!

「実はかくかくしかじかなんですよ」

「あー、なるほど、そゆことね!」

「今ので分かんのかよ」

天使を舐めないでいただきたい。ニジカエル様は全知全能ぞ。

「良いじゃん文化祭ライブステージ! 出ようよ!」

「うっ……でもお……」

よし、いいぞ。もっと言ってみてやれ! ちよつと強引にいくくらいがちようどいいんだ

後藤さんには!

バンドメンバーの虹夏さんの言う事なら八割は言う事聞くんね!

「ライブハウスとはまた違う良さがあるよ?」

「に、虹夏ちゃん出た事あるんですか……?」

「うん、中学ん時ね」

「虹夏さんの文化祭ライブか。そりや見てみたかったですね」
きつとみんな信者になったに違いない。崇め奉りご奉納されまくったに違いない。

「私もある」

「りよ、リヨウさんも……?」

「やっぱり観客みんな沸きましたか?」

この人ベースは普通にめちやくちや上手いからなあ。

女子達にキヤーキヤー言われてそう。

「マイナーな曲弾いて会場をお通夜にしてやったつ」

「台無しだよ」

絶対普通に弾いた方が盛り上がるじゃん。普通の人なら絶対にやらない事をやってのける。まさにロツクだ。

さすがリヨウさん、俺みたいな凡人の考えとは違う世界を見ている。そこに痺れないし憧れねえーッ!

「あたしもしリヨウとは出た事ないし文化祭ライブやりたいな〜」

「えっそうなんですか？」

「結束バンド組んだの最近だしね」

「前は別のバンド組んでたんでしたっけ」

アー写撮影の日に後藤さんから軽く聞いてたのを思い出す。

「まあね。だから次は今の四人で出てみたいなって！」

「私も、オリジナル曲をここ以外でやりたい」

「だってよ。こういうバンドがあるって知ってもらおう良い機会なんじゃねえか？」

スターリーだけだとどうしても知名度を広げるにも限界というのがある。

たまには外に出てライブをし、色んな人に興味を持ってもらうのもありだろ。なお後藤さんの心労は考えないものとする。

「……で、でも、高校の文化祭って青春ロックで盛り上げないと退学なんじゃ……」

「俺達の高校を何だと思ってるんだ」

そんな校則あつたら不当で訴えてやるわ。

こいつの場合青春イベントに偏見持ちすぎするのも考えものだな。下手に妄想力激しい分、思い込みと偏見で無駄なハードルと壁まで作っちゃう。

後藤さんの顔はまだ浮かない。出たい気持ちと不安や恐怖の中で逡巡しているんだろう。

まあここで変に調子乗って出るとか言うとな変なフラグ立つに決まってるし、軽断するよりは慎重になる方がまだマシか。何より真剣に考えている証拠だ。

「とはいえ、ぼっちの迷う気持ちも分かる」

それを言い出したのはリヨウさんだった。

「下手したら………というか絶対ここより多い人数の前で演奏する訳だし。だからそんなに焦って決める事でもないよ」

「リヨウさん………」

「うぐふうあッ!?!」

「優人くん!?! 胸を押さえてどうしたの!?! ちょっと吐血してるし!」

「ギャップが………ギャップがあ………」

俺の心にこうかばつぐんだった。

普段がクズだからたまにこういうまともで良い事を言うとな、そのギャップで俺は大ダメージを受ける。くっ………顔が良いから余計かっこよく感じちまう。卑怯だろあんな

の。

俺はギャップに弱い。

マンガとかでいつもは能天気な態度なのに戦闘になるとめっちゃ強かったり、普段は大人しいのに大事な場面では凄くかつこよく見えたりするのに滅法弱い。はい、大好物ですそういうの。見るとテンション上がるか撃ち抜かれる。

「正直お通夜状態だったライブたまに夢に見る……」

「強がりだったのかよ」

「ふう、それでこそリョウさんだ。実は打たれ弱いギャップもあるとは恐れ入ったぜ。よっしゃしようがねえ！ 明日リョウさんが好きな食べ物作ってくるんで元気だしてください！ 何がいいですか？」

「黒毛和牛のローストビーフと最高級の松茸ご飯……」

「調子乗んな」

「回復はやっ。そしてギャップを喰らったせいか一時的に甘やかそうとしてる……！」

超速再生とでも呼んでください。最近コツ掴めてきたんで。

「私は質の良い食べ物を欲している」

「んな贅沢料理は家で食っててください。俺が作れるのは庶民のものばかりなんで」

「けど優人の作る料理は素材の質とか関係なく絶品なのは確か」

「誤魔化そうとしたって高級食材を最初に選んだ事実は消えないからな！ 卵焼きで手を打ってやる！」

「打つんだ」

やっぱり人に自分の作った品を褒められるのは嬉しいんすよ。ギャップ関係なく作ってあげたくなっちゃう。美味しいものは人を笑顔にするんだ。

あれ、そういや何の話してたっけ？

「文化祭ライブどうするかって話をしてたんでしょ。はい優人くんもリョウに構ってないで戻ってくる」

「……ん？ 虹夏さん今俺の心を読ん」

「あとあたしにも卵焼き作ってきてね」

「え」

何か今労力が一つ増えたような気がするんですが気のせいですかね。

というか心読まれたっぽいんだけど、ほんとに天使だったりする？

いや、天使か。

「ゆ、ゆうくん……わ、私も……」

「お前にや昼休みの時いつも分けてんでしようが」

まだ食い意地張るつもりかこいつは。見境ねえな。

「とーにーかーくっ!」

手を叩いて虹夏さんが場の空気をまとめにかかる。

「ぼっちちゃんの悔いが残んないような選択をしなよ。それが一番なんだからさ。優人くんも、ちゃんと意見聞いてあげてねっ」

「仰せのままに」

「うむ、よろしい」

「わ、分かりました……もう少し、考えてみます……」

その日のバイトは特に忙しくもなく終了した。

後藤さんの部屋。

そこでいつも通りギターを教えてもらっている俺は、彼女の顔を見つめていた。

「よし、今日はもう帰るかな」

「……………え？ あつでも、今日はまだ四十分くらいしかやってないけど…………」

「考え事してるからかたまに上の空になってんぞ」

「うっ……………ごめんさない…………」

借りていたギターを渡して軽く体を伸ばす。

「文化祭ライブの事だろ」

「……………うん」

ギターよりも考え事の方に持ってかれているのは非常に珍しい。

それだけ彼女の中で文化祭ライブというのが大きくなっているんだろう。もしかしたら文化祭ステージに立って結末バンドでライブができるかもしれない。叶えられなかった一つの夢が叶えられるチャンスが目の前にある。

承認欲求の塊である彼女からすればあまりにも巨大な餌が撒かれているような状態だ。

本来ならすぐ喰い付いてもおかしくないが、彼女の性格がそれを阻んでしまう。リョウさんの言っていた通り、観客はスターリーの数倍。そこで後藤さんが普通に演奏しなければならぬのだ。不安にならないはずがない。

「虹夏ちゃんもやりたいてって言ってたし、絶対気分良いんだろうなって思っただけ……」

「あと一歩が前に出ないと」

「……はい……」

初ライブの打ち上げの時に虹夏さんと話していた時も思っていた事だけど、後藤さんは少しずつだが変わり始めている。

周りからちやほやされたいという気持ちは大前提にあるけれど、それ以上に自分以外の誰かのためにやりたいと思えるようになってきているのだ。

今だって虹夏さんもやりたいって言っていたと、気分が良いんだろうという承認欲求よりも先に来ているのが良い例である。

この変化は普通の人なら小さな事だけど、後藤さんにとってはとてつもなく大きな変化なのだ。自分だけの気持ちを優先するのではなく、結束バンドの気持ちも汲めるようになってきた。

それが何だか、俺にはとても嬉しかった。

「良いんじゃないの？」

「……え？」

「出るも出ないも結局は後藤さんが決める事だ。喜多さんにバレたら嫌でもゴリ押しされるだろうし、どちらにしてもその前にハッキリ決めておくのは悪い事じゃねえ。虹夏さんだって言ってたろ。一番は後藤さんが悔いのない選択をする事だって。なら本当に悔いのない選択をしたなら、虹夏さん達も分かってくれるさ」

あくまで俺は後藤さんに選択を委ねるだけだ。ライブをやるにしてもやらないにしてもな。

本音はやってほしいというのはあるが、彼女の気持ちを無視してまでさせるのは違う。背中を押すのと無理矢理やらせるのでは差が大きすぎる。

「ただ、これだけは言っておきたい。」

「ただ、後藤さんが文化祭ライブに出たいって選択をするなら、俺はそれを全力でサポートするよ」

「サポート……？」

「ああ、俺にできる事なら何でもしてやるさ」

「(……なん、でも……)」

彼女の夢を叶えられるならやれる限りの事は尽くすつもりだ。

そうして後藤さんがまともにも近づいてくれれば一歩前進なのである。更生計画は地道に進ませていけないと一気にやったら爆散しちゃうから調整が難しいんよね。

程なくして、後藤さんから返答があつた。

「ゆうくん……わ、私……やってみる……！」

決意に満ちた表情に、俺の口角は自然と上がっていた。

「よく言った」

翌日。

学校に着いた俺達は早々に別れていた。

後藤さんに文化祭ステージの出演希望申請書を出してくると言われたのだ。

何でも俺がいると変に播らぎそうだから一人で行くとの事。彼女が成長していて嬉しい限りである。別れ際にめちやくちや震えてたのが少し気になるけど。

教室に着き自分の席に向かい鞆を置く。

「おっは〜清水。今日も遠方はるばるご苦労さんだね〜」

「はよつす佐々木さん。もうすぐ半年だしさすがに慣れてきたよ。若いっていいな。遅寝早起きでも割と体にガタが来ねえし」

「いやそれいつかガタが来るフラグのやつじゃん」

軽口を叩き合いながらいつも通り田中達のとこへ行こうとして気付く。

「あれ、そういや喜多さんはまだ来てないのか？ 珍しいな」

「ああ、ちよつと寄つてくところあるから少しだけ遅れるってロイン来てたけど」

「へえー」

コンビニとかかなくと思っていると、俺のスマホがロインの通知音を鳴らした。

朝っぱらから誰だ？

スマホを出して画面を見ると噂の喜多さんからの個人ログインだった。

何だろう。お目当ての物がコンビニで売ってなかったとかそういう嘆きのログインか？ とにかくトーク画面を開いてみる。

そこには簡潔にこう書かれていた。

『清水君どうしよう……私、後藤さんを殺しちゃった……』

なにごと？

4 1. 勉強は予習復習が大事

ロインで喜多さんが後藤さんを殺してしまったという報告を受け、俺は喜多さんとメッセージのやり取りをしたまま現場へ向かった。

居場所は生徒会室近くの廊下。そこに被疑者と被害者はいた。

「い、これは……」

「し、清水君……私、どうすれば……」

座り込んだまま涙目でこつちを見上げてくる喜多さん。そのすぐ傍には棺桶があり、中には胸に手を重ねて死んでいる後藤さんの姿があった。

およそ朝の学校でお目にかかる光景ではない事だけは確かだ。

そつと後藤さんの首に指を当てる。

「外傷なし、争った形跡も道具も見当たらない。だが脈は止まっている……か。恐らく

……いいや、確実に精神的ショックの要因がでかそうだな」

「清水君、私……人殺しになっちゃったの……？」

「そこは全然気にしなくていい。にしても……溶ける訳でも爆散する訳でもなく、実体をそのままにして棺桶まで顕現させるとそこを見ると……GSレベルは4辺りか」

「じ、GSレベルって何？ どういう意味なの……？」

「知らん、今勝手に付けた」

多分GS後藤の死因とかそんなんだと思う。ちよつとそれっぽい事言ってみたかっただけです、はい。

「ちなみに何でこんな事になったか聞いても？」

コクンツと小さく頷いてから被疑者（仮）は事の顛末を語り出した。

「昨日、やっぱり後藤さんの事が気になって保健室に戻ったら、もう後藤さんも清水君もいなくて……仕方ないから友達のとこに戻ろうとしたんだけどね。……その、間違つて保健室のゴミ箱に入ってた申請書に気付いたの！ だから、後藤さんの代わりに私が個人ステージの申請書を出して、それをさつき後藤さんに言ったら急にこうなっちゃって……」

「……なるほどな」

妙な間と一部の言葉に関して少し引つかかるが、喜多さんもこのパターンの死に方を見るのは初めてだからテンパつてるといふ事にしておく。

喜多さんにバレル前にとかそもそも保健室のゴミ箱に捨てるべきじゃなかったとか、もつと色々警戒しておくべきだったなあ。友人との約束よりも後藤さんが心配で戻ってきてくれたのが完全に想定外だった。良い子すぎんだろ。

にしても話を聞いている限りこの死体、申請書を出す直前で日和りやがったな……？

昨日あんだだけやる気になって今日も出してくる雰囲気満々で別れたのに、日和った後にどういふ気持ちで俺と会うつもりだったんだ。土下座してくる未来しか見えねえ。

「私、どうしたら……」

「まあ気にする事ねえよ。いつもと違うパターンで死んだっただけだ。ほつときやその内起き上がってくるよ。とりあえずもうすぐ朝のHR始まっちゃうし、今は棺桶ごと保健室に持って行こうぜ」

「う、うん……」

棺桶を閉めて鎖を持つ。どうやらドラクエと似たような棺桶で引き摺っていけるらしい。

「……いや重つ。そんでもって持ちにくいなこれ!？」

「どうする? もう後藤さんだけ保健室に運んで行った方が早いんじゃない?」

「けど、そうすると棺桶置いていっちなうし……どうしたら消えるかも分からないんだよなこれ……」

相変わらず後藤さんだけこの世界の人間とは思えない能力を持つてるな。まったく、こんな時に限って棺桶なんか出してくんなよマジで。

世界の理をどこまで無視するんだこの子。

「喜多さん、俺が後藤さん運ぶから棺桶だけそのまま引つ張ってこれるか?」

「任せて!」

「頼む」

そもそも保健室はこの階にないからどこかしらで階段を経由しなければならぬ。

後藤さんが入ったままの棺桶だと到底下りれないのでちようどいい。今回は喜多さんもいてくれるから変な目で見られなさそうで済むかな。

喜多さんの手伝いを借りつつ後藤さんをおんぶする。

補助がいるので今回はお姫様抱っこではない。あんなの連続でしてたまるかかってん

だ。はあ、朝つばら世話のかかる幼馴染には溜め息が出ますなあ。

「んじや行きますか」

「ええ！」

その後、登校時間という事もあり、ピンクジャージをおぶっている俺と棺桶を引きずっている喜多さんは結局色んな生徒から変な目で見られたとき。

これ何でデジャヴ？

放課後。

喜多さんと俺は後藤さんの様子を見に保健室へ行く事にした。まあ元々今日はスターリーで集まる予定だし起こさないといけないのだが。

「珍しいな。まだ起きてないのか。いつもならとつくに目覚めて布団に籠りながらぶつ

ぶつ何か呟いてるのに」

「ああつ、やっぱり私人殺しになってしまったんだわ！ ごめんなさい後藤さん……私ちゃんと自首します……」

「せんでいいせんでいい」

どっから出してきたのか、喜多さんは『私は罪人です』というプラカードを首から提げて両手首を合わせている。

いつから結束バンドは無から有を生み出す（物理）能力者ばかりになってしまったのか。虹夏さんは天使だし、普通の人間がファツキン借金のリョウさんだけって世も末だな。

「文化祭に冬休み……バンド活動……これから楽しい事がたくさんあったのに……」

「いやあるから。これからそれ普通にやっていけるから。捕まる前提で話進めるのやめない？」

冬休みの事までもう考えてるって気が早くないですかね。陽キャは常に未来のイベントを見据えてんの？

計画性凄いな。江の島の時も事前に色々調べてたし楽しむ事に全力なんだね。

「でも……そういやその前に中間テストあったわね……テスト……？」

「ああ、そういうえばテストも近いな。ぼちぼち勉強しとかねえと」

と言つても普段から授業を聞いて少し復習とかしとけば大体良い点は取れるので、個人的にはそんな慌てる必要もない。

まあ一人を除いてだけだ。

何かを思い出したように喜多さんはいきなり大きな声を出した。

「後藤さん起きて!!」

「あっはい!!」

勢い良く飛び起きた後藤さん。誰かの大きな声に慣れてなくてビビッて起きた感じが。とりあえず脈も復活して何よりだ。

「後藤さんって勉強できるのかしら!？」

「あつできません!」

「いい返事ね!」

返事だけな。

聞かれた後藤さんは三点と書かれたテスト用紙を俺達に見せてきた。うん、何度見て

も酷い出来ですな。むしろ一〇二問正解してるのが奇跡なのほんとうかしてると思う。

「清水君……これって……」

「見た通りだよ。それが後藤さんの実力。普通にめっちゃ頭悪い」

「あつへへ……」

自虐の笑みが凄い。初めて見た時はテストで三点って取れるもんなのかと大層驚いたもんだ。

不真面目って訳でもないのにこの点数はもはや才能、あるいは呪いだと思う。ただ、ここで三点のテストを見せてくる辺りなけなしの見栄が隠せてないぞ後藤さん。下には下があるだろ。

「て、テストで補習になったらバンド活動もできないわ！ 私もそんなに得意じゃないし、清水君いつもテストの点数良いわよね？ 良かったら教えてくれない？」

「ん、まあ後藤さんには元から教えるつもりだし別にいいよ」

「助かるわ！ じゃあさっそくスターリーに向かいましょう！」

「あいよ。後藤さんその棺桶ちゃんと消しといいな」

「あつうん……」

「おはようございまーす」

やってきたのはお馴染みスターリー。

今日はバイトもなく練習のはずだったのだが、先に来ていた虹夏さんとリョウさんは何やらテーブルでノートを広げていた。

「あ、先輩達もテスト勉強中なんですか！」

「おはよく！ そうだよ」

「次に赤点取ったらやばいから教えてやってんだって」

「なるほど、じゃあ今日は予定変更してテスト勉強会ってところですか」

俺の言葉に店長はそうだろうなとだけ返してきた。

赤点者は後藤さんだけじゃなかったんだな。まあ誰かは分かり切ってるけど。

そんなでもって何も気付いてない喜多さんは虹夏さんの頭に手をポンツと置き、

「あははっ、伊地知先輩頑張ってくださいいね！」

「えっ、あたしが教えてるんだけど……」

恋は盲目ならぬ憧れは盲目ってどこか。

度が過ぎると相手の欠点は見えなくしてしまう。完璧な理想像を求めてしまうが故に良いところしか捉えられなくなるんだとか。

……いや、結構お金の貸し借りとか草食つてたりとか変なところ見せまくってんな。それでいいのか喜多さんや。

「……え？ そんな、まさか……リョウ先輩がバカなんですか!？」

「できません！」

「誇らしげに言うな」

0点のテスト用紙をドヤ顔で見せてきたリョウさん。またもデジャヴを感じるが、いやまさかここでも0点用紙を見るとは思わなんだ。

大丈夫かこのバンド。美形のクソバカ二人がどうしようもなさすぎる。神様もう少しこの二人に恵みを与えてやっても良かったでしょ。今のところ顔の良さと音楽の才能

以外何も良いところないぞ。

「(リョウ先輩はミステリアスでどこか儂げで、思慮深くて無口なのも会話レベルが私達と釣り合わないからだと思つてたけど……まさか何も考えてないだけだったの!?)」

おーおー、どんどん喜多さんの中のリョウさん像が崩れていく音がしてきますな。

リョウさんへの憧れでバンドに入った結果がこれだと思つと少し哀れに思えてくる。ドンマイ喜多さん。というか草食食べてたりとかは別に平気だったのね。

「いや〜〜〜! 脳みそが小さすぎて頭の中で転がる音がするわ〜!」

虹夏さんが軽くリョウさんの頭を振るとカラコロカラコロ音が響いてきた。構造どうなつてんだらう。やつぱりリョウさんも普通の人間じゃなかったのかあ。

「この音次の曲に使えるかな?」

「ならタイトルは『カラカラ』とか良いかもですね。響き的には可愛いですしガールズバンドっぽくて」

「やめてー! 私イメージを壊さないで!!」

喜多さんの顔が壊れますけど。この時代に楳図かずお作画見れるとは思わなかつ

たや。順調に結束バンドに染まってきてる証拠だ。

そして喜多さんや、よく分かっただろ。憧れは、理解から最も遠い感情だよ。

「ゆ、ゆうくん……」

「ん、どした？」

「わ、私はどうしたらいいのかな……」

ああ、勝手に話が盛り上がると絶対話に入って来れないのが後藤さんだった。

いつの間にか俺の後ろで服を掴んでおられる。最近は喜多さんとも一緒に学校を出るから普通に歩くし、何だかこれも久々だな。

……あれ、何で俺落ち着いてんだ？ 前まではいつもこうだったから慣れすぎておかしくなったか。

このポジションを日常に感じてたせいで俺まで感覚が少し変になってるかもしれない。

「あくそうだなあ。とりあえず教科書とノート出して、先生が言ってた範囲になりそうなページを自分なりに探してみな。あと戒めとして前回のテスト用紙を見直す事。いな」

「あっはい……」

もともと自分のバッグの方へ向かって行く後藤さんを尻目に、俺はリヨウさん達の方へ戻る。

「今リヨウは中一の範囲やってるんだよ」

「そこから!? どうやって高校入ったんですか!?」

「確か虹夏さん達の学校って進学校だから相当頭良いですよ。何したんですかりヨウさん。裏口?」

「違う違う。今はアホだけど受験の時はめちゃくちゃ頑張ってたんだよ。あたしが付きつきりで教えてただけだよ」

その説明で納得しろって言われてもできるはずないんですが……。

「リヨウは完全一夜漬けタイプだからね。その時は良かったんだけど、今はもう全部忘れちゃったみたいでテストも全部赤点なんだよ」

「脳みその容量キロバイトか何かなんですか」

「連立方程式楽しい」

大丈夫かこの人。今までどうやって生きてきたんだ。まあ考えるまでもなく虹夏さ

んのおかげなんだろうけど。

後藤さんとはまた違うタイプのダメ人間だな。

「デメリットとしては勉強の事を覚えると代わりに楽器関連を全部忘れちゃうってところかな」

「ベースの弾き方とか忘れちゃう」

「よく今までやってこれましたね!?!」

「デメリット大きすぎん?」

借金クズから借金クズバカに進化しちゃったよ。進化じゃなくて退化か。いや劣化か?」

結末バンドの未来が少し不安になってきた。やはり頼れるのは虹夏さんだけなのか……。

今日はもう勉強漬け決定かね。底辺が二人もいるとさすがに練習どころじゃない。

「あ、そうだ。リョウさん虹夏さん、昨日言ってた卵焼き作ってきましたよ。テスト勉強するなら小腹対策にもちょうど良いですかね」

「優人の手料理ッ!!」

「うおっ!」

うるっさ! 聞いた事ないくらいの声量と振り向きの風圧で飛ぶかと思った。

お金と食い物に関しては大ガチじゃんこの人。一番やばいタイプの人間だこれ。

「おーほんとに作ってきてくれたの!? ありがと優人くん!」

「手料理ってほどでもないですけどね。というかほんとにとって……え、まさか冗談だったんで」

「ありがたく頂戴するね〜!」

有無を言わず容器を取られてしまった。

動きが見えなかった……こ、これが伊地知の黄色い閃光……!?

「あ、ちゃんと名前書いてある。こっちがリヨウのだってー。あたしのがこれね」

「味の好みが分からないんで何となく独断と偏見で味付け変えてあるんですよ。リヨウさんは打ち上げの時居酒屋の定番系ばっか食べてたんで、味濃いのが好きなのかと思っ
てそれに合わせて卵焼きというかだし巻きですね。虹夏さんは天使なんで少し甘めに
仕上げました」

「あたしの味付け理由がよく分かんないんだけど」

さすが虹夏さん、天使は自分の行いに見返りを求めない。そして自覚もないから自分でもよく分かっている。まさに聖母のような器を持っているだけある……。

「うーん……おいひい。優しい味が染み渡るな……」

「何個でもいいける。優人、おかわり」

「もうねえよ」

食うの早すぎだろ。ばつくんばつくん食い漁りやがって、パックマンかと思ったわ。それに比べて虹夏さんは一つ一つ丁寧に食べては味わってくれている。そうそうこいういの、こういうのでいいんだよ。

これが癒しか……。

「ねえ清水君これどういう事!? 話が見えないんだけど!」

「ああ、喜多さん昨日いなかったもんな。実はかくかくしかじかなんだよ」

「リヨウ先輩……そんな事が……」

あ、そこなのね。てつきり流れで私にも作ってよー的なノリで来るかと思ってたわ。完全に俺の自意識過剰だった。うわーちよつと恥ずかしい。

「ゆうくん……私には……」

「安心しろ。今日から毎日夜食は作ってやるからな」

「あつうん………えっ!?!」

ちよつと理解するの遅れてたな。このくらいいしないと後藤さんは赤点回避できないから俺が付きつきりで勉強を見なきゃ話にならないのだ。

ちなみにテストだけはスパルタでいかせてもらおう予定である。後藤さんの吸収率の悪さは俺が一番知っているので、そこからどう上手く点数を取らせるかを考えるのも俺の仕事だ。

介護より介護してるじゃん。

「ところで清水君」

「ん?」

「二人で出掛ける日はテスト期間が終わってか」

この日、俺は自分の人生の中で最も反射神経が早く反応したかもしれない。

みんなが反応する前に喜多さんの口を手で抑え込んだ。

「(その話はロインで済ませようか喜多さん……!?!)」

「むがも(むが)♪」

何でちよつと楽しげなんだこの小娘。言葉をもう少し選ぶ事もできんのか。語弊しかねえ言い方するんじゃないよまったく。

みんなは店長を筆頭に虹夏さんを羽交い締めにして卵焼きを一つずつまんざりしてこちらには気付いていない。虹夏さんはぶんぶん怒ってるけど。後藤さんに関しては今日から行われるスパルタ勉強に泡を吹いてる。

テスト勉強するんじゃないのかお前ら。

何だこの光景。

「うーん……地獄絵図」

42. ダメ人間が多数派だと疲労感が凄い

よくよく考えれば喜多さんとは文化祭の出し物のために出掛けるというだけで、別に後藤さん達に聞かれても何も気にする必要がない事に今更気付いた。

何で俺は咄嗟に口を塞ぎに行ったんだろう。……まあいつか、それこそ気にする必要がないな。

ある程度現場も落ち着きを取り戻し、再びテスト対策をしようという流れになったのはいいが。

問題児二人の手がかり過ぎる事を危惧した虹夏さんが、卵焼きを食べられた恨みを晴らすかのように店長に向かって言った。

「むう……優人くんからの差し入れを食べたんならお姉ちゃんも勉強教えるの手伝ってよー！」

「はあ？ 何で私が」

「食・べ・た・よ・ね?」

「……お、おう」

天使のニジカエルも実の姉には容赦がないようだ。身内への遠慮のなさがめちやくちや出ている。

おっと、こつちはこつちで進めないとな。

「喜多さんも教えてほしいんだっけ」

「ええ、できればお願いできる?」

「じゃあさっそくだけど、まずは俺は何もしないからできるだけ後藤さんの勉強見せてやってくれないか? 喜多さんの場合は平均点は取れてるし、後藤さんに教える時に喜多さん自身も復習とかできて基礎から見直す事も可能だから、上手くいけば二人にとっても良い刺激になると思う」

「なるほど……そういう事なら分かったわ! 後藤さんっ頑張りましたよね!」

「あっはい……」

後藤さんは嫌でも今晚から俺の餌食になるんだ。今くらいは優しい喜多さんにアメをたんまり恵んでおいてもらおう。ムチは俺の役割なので全力で叩く。

ここは喜多さんに任せて視線を虹夏さん達の方へ向けてみると、店長とPAさんがプ

リントと睨めっこしていた。

「……なんだこれ。お前分かる？」

「私高校すぐ辞めたんで勉強できません……」

マジかこの人達……。

「ちよつと！ お姉ちゃんは大学いつてたじゃん！ 何で分かんないの!？」

「大学なんて選ばなければバカでも入れんだよ」

大人の言葉か？ これが……。

いや、まあ店長が入れたんならそういう大学も本当にあるのか？ 調べた事ないから

よく分からんけど。

「君先輩に頭の出来似なくて良かったね〜！」

「お前表出ろ」

そして当然のように店に入ってきて溶け込んでるきくり姐さん。いつの間に入ってきたんだ。

というか何でここにいるんだよ。拠点はどうした拠点は。酔ってない時あるのかこ

の人。

「優人くん……」

「何でしょう」

「大の大人が三人も揃って高校レベルの問題を一問も解けないの、どう思う？」

目の前にはうーんうーんと呻きながら問題を解こうとするも何も出てこない三人の大人がいた。

見てくれは良いのにアホしかいない。音楽にステータスを全振りした結果がこれなんだろうか。まるで後藤さんだな。……後藤さんはコミユ力もないんだった。

「控えめに言って無様ですね」

「……あたし、絶対あんな大人にはならないようにするよ」

そう語る虹夏さんの目には軽い軽蔑の念があった。天使も見放す下等生物と見做されてる。完全に反面教師だ。哀れよのう。

けどその発言は今のところ後藤さんとリョウさんにも当てはまりそうなんですけど大丈夫ですかね。問題児を二人も抱えてる結束バンドの未来や如何に！

ひとまずは部外者をどうにかするかね。

「そもそもきくり姐さんはここで何してんですか。開店前なのに普通に入ってくるのおかしいでしょ。あと平然と酒飲んでんじゃねえ」

「うえーそう硬い事言わないでよゆうきゆうん！ 外で飲んでると通報されるからここに来たんだよーん！」

「うぎゃあ!? だからくつついてくんない！ 何でアンタはいつもこつち来るんだよ!?」
「何だかんだ介抱してくれるゆうきゆうんのとこに私は現れるんだよーん！」

「冗談じゃねえ！ そこかしこに吐かれたら処理が面倒だからいつも酔い止めとか与えてるのが逆に仇になったのか!？」

「ダメ人間は付け上がらせるとすぐ調子に乗ってかまちよしてくるから厄介なんだっ。控え目に来るだけまだ後藤さんの方がマシってどういう事!？」

「自分の拠点あるでしょアンタ！ そこ行けばいくらでも介抱してくれる人とかいるんじゃないのか!？」

「基本的にみんな私を放置するんだよーん！ 構ってくれるのも一人だけだし……ここなら相手してくれる人いっぱいいるからつい来ちゃうんだよねーん！」

「絶対酔ってるから面倒だと思われてるだけじゃんそれ！ 俺達は今テスト勉強で忙し

いんですって！ だから相手できないし今日は大人しく家に帰りましょう帰れ！」

「テストお？ そんなのカンニングすればいいじゃん？ 中間テストくらい大丈夫っしょ！ それか教師脅して解答盗めよ！」

「最悪だよこの人!!」

大人が言っているいい言葉じゃねえだろ。全面的に周囲に頼れる大人がいなさすぎる……。まともな人いないじゃん。大人つてもっとしつかりしてるものじゃないの？

それに解答盗めってどういう事なの。怪盗だけに解答盗むってか。やかましいわ！

「んもう、分かってないな。社会のしきたりに縛られないのがロックでしょ？ 浅学

だねえ、もっとロック史を学びたまえ」

「カンニングってロックなんですか？」

「全ての真面目なロックアーティストに謝れ」

何でもかんでもロックって言っときゃ許されると思ったら大間違いだぞ。

「いやそれがロックだ。お前達はまだ浅い」

「ロックですねえ……」

「教えられないからって逃げたな……」

「ダメ大人三銃士だ」

俺に説教してくれたあの時の店長の頼もしさはどこにいったんだ。見る影もないんだが。

あの三人には戦力外通告をして虹夏さんと共にリヨウさんのところへ戻る事にした。すると虹夏さんがテーブルに置かれたリヨウさんのテスト用紙を手にとって、

「え?! ちよつとリヨウ! 英語は毎日勉強してるって言ってたじゃん! 何でこんな点数なの!?!」

またもや三点であった。俺としては毎日英語勉強してるという事に驚きを隠せないんですけど。

脳みそカラカラなのに勉強できてたのか?

「自分でも分からない。毎日八時間も勉強してたのに……」

八時間って……こんなのでも頑張ってたんだな……。

「うっ……ごめん、リヨ」

「睡眠学習として寝ながら毎日洋楽聴いてたのに」

「もう留年しろ」

期待を裏切る事に定評あるリョウさん。今回もぶつちぎりに最悪な形で裏切ってくれたので遠慮はない。

ほんとよくこれで進学校に入学できたな。どんだけ虹夏さんが苦勞したのか分かってしまう。俺も後藤さんで同じような経験したし。

「英語喋れる。Queen Tool Nirvana」

「それ海外のバンド名でしょ！ 優人くんリョウはもうダメだ！」

「知ってます」

勉強面においてもうこの人は諦めよう。俺の手にも負えん。

進学校のテスト対策なら虹夏さんに任せるほかないですわ。

「伊地知先輩……後藤さんも結構やばいんですよ……」

喜多さんが半分涙目でテスト用紙を手持ってきた。もちろん後藤さんのだ。

後藤さんのいるテーブルを見るとテスト用紙が全部広げられている。ああ、やつぱ全部見られたのね。戒めとして見直しとけと言ったから何となく予想はしてたけど。

「ちゃんと全問解いてるのに全部間違ってるんです……」

「リヨウと違って必死に解いた形跡あるのが余計辛い……」

「奇跡的に点数取れたのがさっきの三点のやつだけだからなあ」

喜多さんに見せていたテスト用紙は唯一点数が付いているアレだけである。

つまりそれ以外は全部0点。これが後藤さんのフルパワーだ。うん、全くもってなっさけねえや。

「優人くん勉強教えてあげなかったの？」

「いつもは教えてるんですけどね。高校入ってから一回くらいは自分の力だけでやってみて言った結果がこれです。なっ？」

「あっはい……へへっ……」

毎回教えてるから勉強のやり方とか少しくらい覚えて自分でどうにかできるかなあつて、そんな希望を託し返却されたテスト用紙を見せられた時の俺は膝から崩れ落ちた。

ああ、この子本当に容姿とギター以外はダメなんだなと再認識したのだ。

「虹夏さん、簡単な掛け算の問題でも出してみてください。ほらいくぞ後藤さん」
「えっ？ あっえっ」

「分かった。ぼっちちゃん、 241×10 は？」

「あっえっえっ……その……」

桁数多いと見せかけて実はめちやくちや簡単な計算問題だぞ。虹夏さんの優しさが滲み出てるんだから頑張つて解くんだけ藤さん！

0増やせば良いだけだぞ早く気付け。とまあ、淡い期待は早々に捨てておく。それで出来たら期間中毎日俺が付きつきりで教える必要もないのだから。

早く解かなければ、という焦りが彼女の計算能力と判断を奪っているんだろう。普通の会話すら少し時間を要するのに、不得意な問題を出されたら余計慌ててこうなるに決まっている。

後藤さんには悪いが、これは虹夏さん達に彼女が如何にして成績が悪いかわかってもらうための儀式だ。

「につ、24100、です……！」

「後藤さん……」

「ぼっちちゃん……」

焦って桁一つ多くなっちゃったかあ。プリントに計算式を書けばまだしも、脳内計算じゃやはり無理難題だったか。

「後藤さん、『鳴かぬなら、鳴くまで待とうホトトギス』という句を詠んだのは誰？」

「あつその……えつとお……と、豊臣秀吉……」

「誤答さん……」

「誤っちちゃん……」

「……えつ、あつなつ、何か今字が違ったようになつ……?」

小学生レベルも無理かあ。

ほんとの先社会でやっていけるのかこの子は。むしろ社会に出しちやダメな気がしてきたまでである。

「という訳で、素で頭悪いのが後藤さんです」

「優人くんどうやっていつも勉強教えてるの……」

「とにかく範囲内のテストに出そうで覚えやすいところを集中的に覚えさせてます。数学もぎりぎり解ける問題だけを頭に入れさせて、何とか赤点回避させるのが精いっぱいです。後藤さんもやる気があるので毎回必死に頑張ってはいるんですよ」

「そうなの？」

「あつテスト前はゆうくんがいない時も、一応ちゃんと自分だけでも勉強してるんですけど……」

「ノートもこんなに綺麗にとつてあるのにな……」

喜多さんが見ているノートには、後藤さんの字でびつしりと授業でやった内容が写されている。

そう、ちゃんと隅々まで細かく綺麗にだ。努力自体は彼女もやっている。頑張ろうという意識はこれまでだつて何度も見てきた。

ただ、それが全部報われないんだ。

どれだけ必死に頑張っても勉強ができない。どうしようもないほど嫌という訳でも面倒だと思つている訳でもない。

本当に、本当に勉強しても無意味なほどに身に付かないのだ。

「(クラスに一人はいる子だ……。必死に勉強してるのに要領が悪い子……)」

虹夏さんの小さな声が隣の俺には聞こえた。確かに、要領は悪いな。

板書なら誰でもできるし、書かれた内容を頭に入れつつ理解してなきや意味がない。ただ写すだけで問題が解ける訳もないのだ。そしておそらく、後藤さんはノートを写す

「虹夏さんが一緒なら心強い。これから一緒に後藤さんを養っていきましょう」

「あたし達ならぼっちちゃんがどれだけダメでも面倒見ていけるねっ」

「ついでに私の面倒も見て」

「ちよおつとお!? ずる……じゃなくてわ、私も見ます! 見ますからあ!」

これが喜多さんが言ってた第二の家族……?

なるほど、バンドの枠組みを超えて俺達は新しい家族になるのか……。こういう形も悪くないな、介護者一人増えたような気がするけど。

「ぐおええあつ!」

「全員ボケに回ったらツツコミ役いなくなんだろうが。戻ってこいアホ優人。あとお前に虹夏はまだやらん」

ちよ、急に襟引つ張られたら首思いつきり絞まるんですがあ!!

ぎ、ギブギブつ、ギブアップ! は、離してっ、はなっ……おい離せこのシスコン野

郎お!

「何か失礼な事考えなかつたか?」

「何も考えてませんすみません産まれてきてごめんなさい」

全力土下座である。命より惜しいものはないのだ。

てか最近俺の心の中読んでくる人多くない？ 別に顔に出てないよね？ なして？

店長の介入により後藤さんを養う問題の云々は先送りになった。養うのはまた俺だけに戻ってしまったか……。

話は本題に戻り、テスト勉強へシフトする。

「諦めないで頑張りましたよう！ 後藤さんはどこが苦手かしら？」

「えっ……それが分からないです……」

「後藤さん学年変わっても先輩なんて呼ばなくていいからね……。清水君、私にはどうやら後藤さんに教えるなんて荷が重かったようだわ……」

「喜多ちゃん秒で諦めた!？」

本題に戻ったら戻ったでこれだ。誠に力オス。

喜多さんでも無理なら、やっぱ俺が教えるしかないか。まあどうせ夜もやるし一緒だろ。アメも貰えないままムチに移行するが悪く思うな後藤さん。これも全部お前のためだ。

「ふふ、ふふふふ……」

「喜多さん？」

今まで聞いた事ないような笑い声が喜多さんからした。

何このちよつと不安に駆られる声は……。どうしたんだろう、まさか喜多さん壊れた？

「そうよ……そもそもバンドマンに学歴なんて必要かしら？ 必要ないわよね！ よしつ、私もリョウ先輩と後藤さんと一緒に学校辞めます！ 清水君も一緒に辞めましょう！」

「喜多ちゃん正気に戻って!？」

喜多さん壊れた。時々出てくる喜多さんのロック魂が見事に爆発しておられるわ。

？吐いてバンド入って逃げたり私をめちゃくちゃにしておか言ったり、一緒に学校辞めるとか言ったりと、やっぱ喜多さんも相当なロック魂を持つてるな。完全にやけくそになってる。

「そうだよ。ぜーんぜん必要ない！ 現に勉強できなくても生活できてるし！」

「そうそう学校なんて辞めましょ。毎日が夏休みですよ」

「ダメ大人達は黙ってて！」

「まともなのが俺と虹夏さん、喜多さんは……あっち側に行こうとしてるな……」

このライブハウス、ダメ人間のが多いってマジ？

大人が軒並みあっち側なのどうかしてるでしょ。何で俺達より人生経験長くて教育受けてきたはずの大人達が社会を舐め腐った発言ばかりするんだよ。教えはどうなつてんだ教えは！

「それにしてもこんなぼっちちゃんにいつも勉強教えてあげてるって、優人くん本当に成績良いんだね？」

「まあ悪くはないですけど、上の下つてとこですかね。これでも元々成績は平均くらいだったんですよ」

「あ、そうなんだ？」

いよいよ後藤さんにモールス信号で答えを教えようとしてる喜多さんにツツコミを入れたくなる気持ちを抑え、言葉を続ける。

「はい。後藤さんと一緒の高校に行くために秀華高を見つけて必死に勉強しました。俺の成績じゃ既に合格ラインにはいってたんですけど、後藤さんを合格させるために、後

藤さんでも解けるように分かりやすく教えてやれるよう模索してたら、いつの間にか成績も良くなってたって感じですよ。ある意味後藤さんのおかげですね」

「け、献身的すぎる……」

これに関しちやそう言われても仕方ない。結果的には後藤さんも合格できたし俺も成績上がってるしでWINWINだから問題は何も無いけど。

このくらいしないと補習なり留年なりしかねないので、ただでさえ少ない睡眠時間を毎回削りながら勉強してる俺はもつと褒められても良いと思う。

「あたしもリヨウと進級したいし、優人くんみたいに頑張らないとなあ」

「や、あの人はダメの方向性が違うからもつと違うアプローチの方がいいと思うんですけど……。変に教えてばっかだと付け上がってきますよ多分」

「だろぅねえ。まあ見ててよつ。リヨウのやる気を出させる方法くらいあたしも知ってるしー!」

ちよつと小悪魔っぽい笑みを浮かべてリヨウさんの方に向かっていく虹夏さん。悪魔のような天使の笑顔ってまさにこの事か。うん、ありですね。大いにあり。

「リヨウはちゃんとやってんの?」

「ん、何も分からん。だから虹夏もモールス信号覚えて私に教えて」

他力本願一直線だなあの人。後藤さんでもまだ自分で頑張ろうとしてるってのに……。

「店長はあれ、どう見ます?」

「あん? あー……まあ留年して虹夏と離れて一番困るのはリヨウだし、何とかなんだろう」

リヨウさんが一番困る?

てつきり虹夏さんがリヨウさんと離れたくないものだと思つてたけど、違うのか?

「まったくもうつ、このままじゃリヨウは留年しちゃうんだよ? 一緒に進級したくないの? あたしとリヨウの仲つてその程度だったの?」

「何かめんどくさい彼女みたいな事言ってますけど」

「実際あれが効果抜群だったりするんだよ」

「え?」

あれが? 確かに虹夏さんにあんな事言われたら俺でも東大目指し兼ねないけど。というか絶対目指すけど。

常に無気力系女子のリョウさんにあんな感情論が効くの？ すると虹夏さんがこっそりこちらにウインクしてきた。可愛い、じゃなくてこれがやる気を出させる方法って事ね。

店長の言葉も気になりつつ見ていると、

「帰る」

「……え？ かえつ……あ、リョウ、今のは別に怒った訳じゃなくて」

まさかのリョウさんご帰宅宣言であった。

そしてちよつと焦ってる虹夏さん。思ってた反応と違って少し戸惑っている様子だ。

え、大丈夫なのあれ。

「店長、あれ大丈夫なんですか？」

「まあ見てろ。すぐ手の平返すぞ」

言われるまま行く末を見守る。

「家の机じゃないとまったく頭に入らないから勉強しに帰る」

「はよ帰れ!!」

「な?」

「な? じゃないよ今日何しに来たんだよあの人」

ここでテスト勉強する気なかつたんじゃん。俺の卵焼き食っただけじゃねえかよこんちくしよう。

半ば追い出されるようにして帰ってつたりヨウさん。さて、こちらもちちらで本腰入れてかないとな。

パキポキと指の骨を鳴らしながら、未だにモールス信号を会得しようとしている悪あがきガールへ近づく。

というか喜多さんクラス違うから教えられねえだろ。

「よし、いいな後藤さん。家帰るまでにここでいっちょ突アき出ミューズし、あるいは前オールドブル菜といこうか?」

「ひ、ヒイツ!?!」

「清水君が今まで以上に悪魔みたいな笑顔になってるわ!?!」

こつちとしても後藤さんだけ赤点回避できませんでしたじゃバンド活動もできんのですね。

悪いが手加減はせんぞ。なーに、地獄はテスト期間が終了すれば終わるんだ。それま

での辛抱よ。

「喜多さんは虹夏さんに教えてもらってくれ。俺は後藤さんに集中させてもらう」

「え、ええ……分かったわ……」

「ゆ、ゆうくん……で、できればお手柔らかに……」

「そうしてほしけりやもつと勉強頑張ろうな？」

今日この日。

スターリーにて後藤さんの悲鳴が絶える事はなかったという。

数日後。

テスト期間も終了し、無事全員赤点回避という喜ばしい結果となった。

リョウさんは進学校なのにほぼ満点という驚異の点数を叩きだし、後藤さんは全教科三十点という奇跡の点数を叩き出した。

これで遠慮なく文化祭ライブに向けて準備が進められる（後藤さんは逃げようとしていたが）というものだ。

俺はというといつも通りテスト結果は上々。代わりに後藤さんに付きっ切りで毎回睡眠不足に陥っている事だけを除けば文句なしである。

そんなテスト期間も終わって家に帰った金曜日の夜の事だった。ようやく休日が翌日に迫り、さすがに眠くて後藤さんの家にも寄らずベッドに倒れ込んだ時。

こんなロインが来たのだ。

『ねえ清水君、明日はバイトも練習もないじゃない？ 天気予報見たら土曜は晴れって言ってたの。だから明日にでも文化祭のための映えスポットを探しに行きましょう！』
という事で明日は十時に金沢八景駅に集合ね！』

「……日程変更は、無理か……」

どうやら、俺の睡眠不足はまだ続くらしい。

43. 来た、行くよ

テスト返却が金曜日に終わった翌日、俺は金沢八景駅にいた。

とある人物と待ち合わせをしているのである。ちなみに寝不足のままだ。

ここ最近の後藤さんのテスト対策に付きっ切りで睡眠時間はおよそ三〜四時間程度。それにバイトもしているときさすがに疲労も溜まってくる。

後藤さんに勉強を教えるという事は、普通の人に教えるよりも時間がかかるのでそれだけこちらでも体力と精神力を使うのだ。

そんな疲労蓄積状態のまま平日をやり過ぎ、テスト返却が金曜で終わって翌日はバイトも練習もない幸せな休日ライフとなる予定だったのだが。

一通のラインで全ては崩れ去る。陽キャによる急なお誘いで土曜は昼まで寝るぞとなつてた体へ強制的にムチが入った。

しかも文化祭の出し物のためという名目があり、自分から映えスポットを教えてくださいと言った以上断るのは到底無理な話である。

持ってくれよ俺の体……陽キャに対抗しうる体力はまだ戻ってないけど、来たからに

はもう後戻りはできない。こうなったら最後まで付き合うしかないぞ。

時刻は午前九時五十分。待ち合わせの時間は十時なので当たり前のように十分前行動だ。

柵にもたれつつあくびを一つ。待つてる間つてのも体は正直なもので、今も睡眠欲が俺を襲ってきている。子供の頃から早起きは得意と言つても、基本的にはロングスリーパーなんだよなあ。休日はめつちや寝る。

後藤さんはそろそろふーちゃんか美智代さんに起こされてる頃合いかねえ。

一応ロインで今日は用事あるから夜までそっち行けないとは送っているが、返事がまだ来ないという事はまだ寝ている可能性が高い。後藤さんは今日もいつも通りずっとギター練習するんだろうな。予定ある訳ないし。

ギターの練習で思い出したけど、そろそろ俺も自分のギターを買いに行かないと。いつまでも後藤さんに貸してもらっただけじゃ悪い。

どこで買うのが良いとかあるのかなと、眠気を誤魔化すためにスマホで調べようとしたら遠くから声がした。

「清水く〜ん!」

前日グロッキー状態だった俺を容赦なく呼び出した張本人、我がが結束バンドの陽

キヤ代表喜多郁代選手が私服姿でやってきた。明るさだけなら既に金メダル級だ。

検索結果が出たページのまますまの電源ボタンを押してズボンのポケットに入れる。

「おいーっす」

「おいっすうー！」

うわあっ眩しいッ！

てつきりおはようと返してくるものだと思つてたのにそのまま返してくるとかマジかこやつ。いつもは絶対言わなそうな事を言つてきた時のギャップで燃えそうになつた。あとちよつと元氣的にペコリーヌぽかったとことか個人的にポイント高い。あとテンションも高いな。

「ごめんね、待った？」

「いや待ち合わせまであと十分くらいあるから全然大丈夫だぞ……ハッ!? い、いやっ？ 今来たとこだけ……?」

「ふふっ、訂正が遅いわねっ。もしかしてそういう事言つてみたかつたとか？」

「……男子高校生なら一度は言つてみたいセリフランキング上位に入ると思つて……」

もちろん俺調べである。くそう、絶好のシチュエーションなのにめちやくちや素で返

しちまったじゃねえか……。

後藤さんとじゃ待ち合わせる事ないし言う機会とか絶対ないと思ってたから完全に油断してた。

「清水君つてそういう変なところで謎な事したり言ったりするの後藤さんに似てるわよね」

「後藤さんと同類扱い……だと……!?」

「あら、ご不満？」

極めて遺憾である。遺憾砲撃つぞこの野郎。

いや後藤さんの対処とか対応するために彼女を模倣するようにしてたから多少の自覚はあるけど……後藤さんがいないとここでそれが出てきてしまつてはもう終わりだ。絶望しかねえ。

うん、この話は終わりにしよう。

「今日は映えスポット探しに来たんだろ。とつとと本題の話をしようぜ」

「それもそうね」

「というか昨日はガス欠で了解しか送れなかったけど、ほんとに集合場所ここで良かった

たのか？ 遠かったら？ 最終的に頼んだのはこっちなんだし言ってくれりやそっち方面に行ったのに」

「元はといえれば私が一緒に行こうって誘ったんだからそっちに合わせるのが普通でしょ。だから気にしないで？」

おおう、普通に返された。これを素で言えるって喜多さんやっぱ良い子だなあ。実際こちらとしてもありがたかったから助かる。

「それに今日の映えスポットはこの近くにあるから、集合場所は何も間違ってるよ」「え、そうなの？」

金沢八景にそんな映えスポットとかあったっけ？

何も思い浮かばんけど、喜多さん俺に気を遣ってる訳じゃないよな？ きくり姐さんと出会ったその琵琶島神社くらいしか出てこない。弁財天でも撮るのかな。

「今日の目的地はあ……」

何だか目をキラキラさせている。陽キャ特有の瞳だアレ。絶対弁財天のどこじやないわこの表情。

「八景島のシーパラダイスよ！」

「……あ~~ね」

「そういうそんなのが近くにあったな。灯台下暗しつてやつだ。

地元民ほど案外地元の有名スポットに興味がなくて詳しくなく、そして知らない事が多い。ソースは俺。」

「水族館とかイルカショーとかアトラクションとか、イソスタ映えとしては完璧だと思うの！ 一度は行ってみたいって思ってたし、こんな絶好の映えスポットなんて中々ないわ！ ぜひ行きましょ！」

「わ、分かった、分かったからそんなぐいぐい来ないで。俺が顔が良いヤツに弱いのを知ってて近づいてくるな！ 余計断りづらくしてくるのやめろお！」

「はい、じゃあ確定ね！」

自分の可愛さを自覚してて迫ってくるヤツは天敵認定で良いかなもう……。

喜多さんのやつ、完全に味を占めやがったな。この先もしてくる可能性大だから対策を考えておかないと。」

行き先が決まって楽しみなのか、喜多さんは早々に俺の手を引っ張ってきた。」

「早く行きましよ！ 時間は有限なんだから！」

「ちよつ、写真撮りに行くだけなんだから？ ならそんなに慌てなくたって」

「最高の一枚を展示するんだから、普通に数枚撮っただけの写真なんて許されないの。可能な限り長居して良い写真をバンバン撮るわよ！」

この陽キャ、覚悟が決まりすぎてない？ 一枚の写真のためにここまで本気出すってもうプロのカメラマン気質じゃん。

一眼レフ持つてる俺より情熱度高いの凄いな。妥協を一切感じない。え、ただの文化祭の出し物だよねこれ。オーデイションとかじゃやないよね？

もうされるがままに引つ張られる俺は空を一瞥した。

ああ、体力持つかなあ……。

券売機で乗車券を買い、シーサイドラインの電車に乗って八景島駅を目指す俺達。
その電車内。

「……座らないの？」

「電車の揺れって何か眠たくならね？」

「睡魔が来てるのね……」

ご名答。例え八景島まで七分程度しかないと言っても油断する事なかれ。

この清水優人、眠ろうと思えば割とどこでも眠れるのである。せつかく眠気が薄くなってきたのに心地良い揺れを堪能してしまつたらまた眠気が襲つてきてしまう。そんな事は許されないのだ。

「もしかして今日誘つたの、悪かつたかしら……?」

「それは気にすんな。全部後藤さんの勉強に付き合つてた俺の責任だし。このツケは全部後藤さんに払わせるから」

「後藤さん何をさせられるのかしら……」

まあいつもよりギター練習多く見てもらうとかそんなことになるかもしれない。それか文化祭ライブはもう素直に頑張らせるとか。

「そういえば清水君つてシーパラダイスには行つた事ないの? 一応地元よね? さつき言つた時もリアクション薄かつたし」

「ないな。小三から中三の途中までここにいなかったし。昔は俺達つてどこか出掛ける時は基本後藤さんとこも一緒だったんだよ。でもあの性格だから遠出とかは一切なし。中三で戻つてきてからもうそういうのはなかったかな」

「へえ、ほんとに家族ぐるみで仲が良いのねえ」

「俺達つつか母親同士が仲良すぎて、気付いたら俺も後藤さん家に入り浸ってたって感じ。中三の時は引つ込み思案が悪化してたからいつも俺の後ろで背後霊になってたくらいだぞ。とまあそんなところで、シーパラなんて常に人がキャツキャしてる場所に行けるはずもねえのよ」

「(と)とく後藤さんとは無縁の場所なのね……」

無縁も無縁。けど後藤さん自体は行ってみたいというちよつとした願望を持つてるのよね。行ったら溶けるのに。

まるで猫が好きで触りたいのに猫アレルギーのせいで近づけない人みたいだ。陰キヤは陽キヤの行動に憧れはするものの、実際同じ事したらわなわなしてしまう生き物なのです。

実は今日後藤さんを連れて来ようと思ったけど踏み止まって正解だった。喜多さんだけならワンチャン行けると思っていたが、行き先が分からない以上後藤さんにとってリスクが大きすぎる。

そして案の定シーパラとかいう後藤さん殺しのチョイスだもんな。そうだよ、一番気を付けなくちゃいけないかったのは喜多さんだった。この子自体が陽の化身だもの。

「けど、何でまたシーパラだったんだ？ いや、他に良いところあるかは分からんけどさ」「うーん、清水君達つて秀華高に通つてるけど凄く遠いじゃない？ 実際県外から通つてるのつて清水君達くらいだし、そうなると展示物として横浜は新鮮味に満ちてるの。みんな基本下北の近くだし遠くても県外には行かないから、イソスタ映えを狙うならシーパラかなつて。それに、水族館は定番だしね！」

「なるほどなあ」

ちやんと考えてるんだな喜多さんつて。さすが夏休み全部予定で埋まつてた人は違
うぜ。

ゆらゆらと揺られながら、着実に電車は目的地へと近づいていく。

八景島駅に着くとせっかくだしマリングレードから行きたいという陽キャ姫のわがま
まをさつそく頂き、少し遠回りしてからようやく着いた。

喜多さんはマリングレードからもう既にキャーキャー喚きながら写真を撮つていてテ

ンションが高い。

横浜・八景島シーパラダイス。

割かし近くに住みながらも来たのは初という事もあり、あまり表には出してないが俺も内心ちよつとテンション上がってたりする。

だつて海の生き物とか普段生で見える機会とかなくない？ 深海生物もいるみたいだし、そりゃ男としてロマンを求めてしまうのも無理はないっしょ。

しかし、だがしかし、今回はあくまで映える写真を撮るのが目的。俺も浮かれたおバカさんではない。最優先の目的を完遂しつつ適度に観賞させてもらおうとしよう。

「よくし、今日は水族館満喫するわよ〜！」

「いや違う違う。思いつきり目的履き違えてるから。写真撮りに来たんでしようが俺達は」

せつかく節度を弁えようと己の欲望に蓋をした俺の覚悟どうしてくれるの。

そつちから蓋開けられたらどうしようもないじゃん。

「何を言ってるの清水君！ 写真を撮るなんて大前提の話よ！ せつかくこんな所まで来たんだから楽しまないと損よ！」

「うん、まあ、気持ちは凄く分かるというか、俺もどちらかというところと楽しみたいく
なってきたのはあるけどさ。まずは映えそうなスポットを探しに行こう、な？」

歩いてたのもあつてか今のところ眠気は吹っ飛んでいる。

休日だから当然周囲には人がたくさんいて、それは家族だったりカップルだったり友
人だったりラジバンダリ。

とにかくこういう場所はみんな誰かしらと来ている事が多い。やはり後藤さん誘わ
なくて正解だったな。

ただ陽キヤというよりは家族やカップルばかりで元々うるさいかと思っていたが、
割とそんな事もない。個人的に適度な賑やかさでむしろ落ち着くレベルだ。水族館だ
からか？

「ならいっぱい写真撮っていっぱい楽しましょ！ お金払う分は堪能しないとね！」
陽キヤ強えくくく。いかん、もれなく陽キヤバフがかかっている。知ってるよ、こ
うなると止められないんだよな喜多さんって。俺は江の島で学んだんだ。

しかし言っている事は尤もである。せっかくお金を払うならその分ちゃんとして回
りたいと思うのは当然の事。高校生のお金はものすごく貴重なのだ。

それに今日は喜多さんに映え写真の撮り方を教えてもらおう訳だし、大人しく彼女に従

うのが吉だろう。

という訳で俺もどうせなら楽しめ精神にシフトチェンジしていこうと思う。

「……それもそうだな。こんなところ中々来れねえし、色々見て回るか。よし、じゃあさっそくチケット買いに行こうぜ」

「ええー」

二人でチケット売り場へ向かう。

大人と高校生はワンデーパスで5100円という、何ともまあそれなりの値段をしていらつしやった。

まあ四つの水族館とアトラクションが全部堪能できると考えれば妥当？ むしろお得？ よく分からん。

つうか俺は大丈夫だけど喜多さんは金銭的に大丈夫なのか。バイト代は全部ノルマ代に消えてるし、夏休みは友達とずっと遊んでたらしいけど小遣いとか足りるの？

と思つてたら普通に払つてた。そりやまあここに来るのを提案してきたのは彼女だし払えない訳ないか。

どこぞの山田とは大違いだな。山田はもつと反省して。映えスポット写真撮るためだけに5100円を普通に払つちやう女子高生も中々凄いけど。

チケットを持って入場口へ向かう最中。

既にかけてはいたが、仄かに潮の香りと潮風がそよぐ。江の島の時とは違って今は東京湾が目の前にあり、以前より海を近くで感じる。

あーこれこれ。じわじわとテンション上がってくるのがよく分かる。

やっぱ非日常感あるとこに来ると楽しくなってきたあー。面白くなってきたあー！

「よっしゃ、喜多さん行くよおー!!」

「今私の名前イジツたわよね？」

4 4. 男女が二人だけで出掛けるのはもうつまりそういう事

横浜・八景島シーパラダイス。

アクアミュージアム入口付近。

自動ドアを抜けると一気に雰囲気が変わった。

明るすぎる事もなく暗すぎる事もない、どこか水中にいるような落ち着くBGMと共に視界に広がるのは、全体的に青暗い照明と右の壁にある水槽群だった。一気に水族館へやってきたという実感が湧いてくる。

のにも関わらず、つい三分前まで高揚感の化身と化していた俺のテンションは少し落ち着きを取り戻していた。

いいや、正確に言うと落ち着かされたと言うべきか。雑に言うとな喜多さんのありがとうも怖い笑顔で説教され若干涙目である。

「清水君、今回は時間がもったいないからもう許すけど、今度言ったらもつと長〜くお話

する事になるからね♪」

「ふあ……」

目からハイライト消えた女の子の怖さを舐めていた。二次元だとむしろ可愛いじゃんこれ羨ましいなおいとか思ってたけど、やっぱり理想と現実は違うね。

もう超怖かった。何なら店長より怖かったかもしれない。下手に手を出してこない辺りが余計怖い。あと怖い。

そういやライブの打ち上げの時に喜多さんの名前の事でひと騒ぎあったって言ってたな。

俺と虹夏さんは外で話してたから分からなかったけど、どうやら喜多さんは自分の名前にコンプレックスを抱いてるらしい。何とも喜多郁代だから来たく、行くよくみたいなダジャレ風に聞こえるのが嫌なんだと。良い名前だと思っただけだなあ。

まあとにかく、そんな事もつゆ知らずテンション上がって出た俺の言葉が彼女の逆鱗に触れ、水族館の中と同等なくらい俺の顔色は真っ青になった。

人間、どこに地雷があるかは分からないもんだね。みんなも誰かの名前をイジるような事はしちやダメだぞ。生きていたいならなっ☆

「それじゃ気を取り直して水族館見て回りましょっ」

「お、おう」

喜多さんの一言で我に返る。気持ちの切り替え早すぎないですかね。

俺の気持ちなんて知らないで彼女は足早に水槽の方へと向かって行った。俺も慌ててその後を着いていく。

「ねえ見て！ これキイロハギだって、可愛いわね〜！」

「可愛い、のか……？」

全身黄色でおちよぼ口の魚だってさ。可愛いかどうかはよく分からん。色は綺麗だと思っけど。

「あつ、チンアナゴもいるわよー！」

「なんだって!？」

喜多さんの指差す方を見るとチンアナゴとやらはいた。

おいおいマジかよホントにいるじゃん！ もう喜多さんの説教なんか忘れて普通に
テンション戻ってきたぜおい。

すぐさま俺は両手を上げて体を真っ直ぐに伸ばす。

そして。

「チンアナゴお〜」

「……何をしてるの?」

「いやそこはほら、さかなあ〜ってやってくれないと。流行りだぞ」

「そうなの!?!」

分からないか。流行りに乗り遅れてるなんて喜多さんにしては珍しいな。

にしても俺だけやってるとただの恥ずかしい人みたいになってるじゃん。男がするもんじゃないわこれ。せめてコーカサスオオカブトお〜とかやっておけば良かったか。いや良くはない。

そこからはもうただただ水族館を満喫していくだけであった。

あまりにも大規模すぎるのでダイジェストで行こうと思う。

「ホツキョクグマにセイウチ、ハイイロアザラシもいるのか。お、ペンギンもいっぱいじゃん」

「こんな近くでホツキョクグマなんて普通見れないんだから、シャッターチャンスを待つわよ清水君!」

「俺の一眼レフが輝く時が来たようだな……。収めてやるぜ、その一枚に!」

ホツキョクグマ相手にカメラ連写させたり、

「すごく綺麗……！」

「まるで水中をそのまま散歩してるみたいだな」

頭上180度を覆うチューブ型の水槽の中をエスカレーターで進んだり、

「オオグソクムシたん！ オオグソクムシたんじゃないか！」

「でかいダンゴムシ……うう、映えないから私はちよつと無理かも……」

「そうか？ 近くで見ると案外可愛いぞ？」

「足がいっぱいある時点で無理なお！」

深海生物でてんやわんやしたり、

「清水君、私コツメカワウソと握手したい！」

「別料金のやつだっけか。じゃあ俺が握手してるところ写真撮ってやるよ」

「きゃ〜！ 可愛すぎるわー！ ぷにぷにしてる〜！」

「……喜多さんのほっぺの方が何故かぷるんぷるんになってるように見えるのは気のせい
いか？」

喜多さんの頬が文字通り落ちそうになったりとしていた。とりあえずシャッターチャンスは逃さずに済んだ。

「すごい！ やっぱイルカって賢いのね〜！」

「どんな風に覚えさせてんだろうなああいうのって。一番最初に覚えさせた人だけ凄いいんだ」

「もうっ、そんな事考えないで純粹に楽しませようよ！ ほら、トレーナーさんがイルカの上に乗ってるわよ！」

「……」

楽しそうにイルカショーを見ている喜多さんの横顔をこっそりカメラに収めておいた。これはこれで映える……ってやつになんのかな？

続いてはドルフィンファンタジーへやってきた。

分かる通りイルカがいる場所である。

アクアミュージアムよりも小さい施設ではあるのだが、入ったらそこはもう別世界となっていた。

アーチ状の水槽。頭上は全て水で覆われており、先ほどの水中エスカレーターを思い出させる。

しかしここは上から太陽光が差し込み、自然の光が水中の情景をはつきりと映し出していた。

「幻想的ねえ……」

「ああ、こりやすげえや」

自分でも上手く言葉に言い表せない程に、目の前の景色は俺達の目を奪わせるのに十分だった。

優雅に泳ぐバンドウイルカと群れで泳ぐ魚達。本当に海中に立っていると思つてしまふくらいには見惚れてしまふ光景だ。

そんなアーチ状の水槽を抜けた先には、円柱の水槽があつた。

小魚達が泳いでいる中、最も目立っていたのは見慣れないのに見慣れたフォルムのあいつ。

「マンボウだ」

「マンボウね」

「どう森でサメかと思つて釣つたらこいつだった時の微妙な感情を今でも忘れねえ。ヒレ付きなのに安いんだよなこいつ」

「ゲーム感覚の話をここでしたらダメよ清水君」

あつ森イ!!

というか正面から見ると意外に細くないんだな。顔の部分だけ普通の魚みたいな厚さしてる。それはそれとしてでけえや。あんなのやサメを片手で軽々と持てる村人つてやつば超人なんだなあ。

ドルフィンファンタジーを出て時計を確認すると、時刻は昼過ぎになっていた。

「ちようど良い時間帯だし、一旦昼食にするか」

「気付かない内に結構時間経ってたのねえ。あつ、じゃあ私行きたいお店があるんだけどいい?」

「ん、いいぞ。先に決めてたんならそっちの方が楽しな」

という事で喜多さんに着いていく。

やってきたのはハワイアンカフェ、メレンゲという店。あれよあれよという間に席に案内され注文を済まし、品が来るのを待っているのだが。

「ここにきてまで映えるの意識しなくても良かったんじゃねえの? もっと海っぽいもんとか色々あったらうに、海鮮バーベキューとか海鮮丼とかさ」

「女子高生は映えは映えでも基本的に可愛く映えるものがいいの。ここのパンケーキは見た目もオシヤレだしうってつけなのよ！」

「さいですか……」

まあ行き先を譲った時点で俺にとやかく言う資格はもうない。

にしても昼食なのにパンケーキで腹を満たせるもんなのかね女子高生という生き物は。メニュー表の値段を見てびっくりした。

俺が頼んだハワイの有名料理ロコモコが1440円なのに対し、喜多さんが頼んだハワイアンフルーツパンケーキが1640円と、まさかの俺のより高いという衝撃。

パンケーキに1500円以上かけるってどうなんだ。俺の感覚がおかしいのか？

これが普通だったりすんの？

どうやら女子高生は服装やおシヤレ以外にもお金がかかるらしい。ぼくは映えが少し怖くなってきましたよ。やっぱ景色とか撮ってる方がお金もそんなかからないし健全なんじやとまで思ってしまう。

そうこうしてるうちに料理がやってきた。

「これよこれ〜！ いいわあ〜。この角度……いやこの角度からも……！」

「……先食べててもいい？」

「うん！」

パシャパシャと色んな画角で撮っている喜多さんをよそに、俺はいただきますと言つてからスマホで一枚ロコモコをパシャってハンバーグとライスを一口頬張る。

うん、美味である。ご飯の上にハンバーグと目玉焼きを乗せるだけで何でロコモコつて言うんだらうとか細かい事は気にしない。美味けりや良いんだ美味けりや。

「つうか喜多さんそれで腹膨れんの？ 見た目はポリウムあつてもパンケーキって結構軽い方だろ？」

「ふふんっ、女子の体は便利にできてるのですっ！」

「さいですか」

「あ、心配してくれるんなら清水君のそれ少し分けてくれてもいいのよ？」

「まあ、別にそれはいいけどさ」

四分の一ほどハンバーグとライスを分けてやる。どうせなら目玉焼きの黄身も割つて絡めさせるか。

小皿に乗せて喜多さんの方へ移動させる。

「やっぱり優しいわね、清水君っ」

「むしろそんな事言われて分けない方が印象悪いだろ」

「正直にそういう事ズバツと言っちゃうのも大概じゃない？ 素直って感じで私はむしろ好印象だけ」

何か知らんけどポイント高かったっぽい。

適当に食事を進めながらも喜多さんの会話スキルが高いのか、俺達の間には沈黙はなかった。パンケーキを小さく頬張りながら喜多さんがスマホのフォルダを開いている。

「良い感じに写真もたくさん撮れてるわねえ」

「喜多さんのスマホのフォルダ内って九割くらい写真で埋まってそうだよな」

「え？ 写真以外って何かあるかしら？ 行きたいお店とかのスクショくらいじゃない

？ あとは……動画とか？」

「え」

いや、あれ……言われてみれば一般人や陽キャのスマホのアルバム内ってどうなってるんだ？

俺のスマホはくだらないコラ画像やゲームのスクショ画面、アニメや漫画の公式トゥイッターから時々配布される素材的な画像ばかりだ。喜多さんとは逆に写真とか動画が全然ない。

なるほど、俺もどちらかと言うところの陰の者側だったか……。いや友人少なくて誰かと遊びに行く事がなかったから薄々分かってはいたけどさ。

目の前の陽キャに言われる事で嫌でも実感してしまった。これが陽キャへの壁、でかすぎんだろ……。

この話題は危険だ。後藤さん程ではないにしろ少なからず俺にもダメージが来る。

「時を戻そう」

「それももう古いわよ」

別方向からダメージを負った。

ロコモコ食べてるのに気分はボコボコだ。

こうなりやヤケ食いしかねえ。これ以上は俺の精神が持たない。ギャップに弱いと言ってもそれはビジュアルや言動であって、こういう陽キャと中途半端な自分とのギャップに関しては弱いどころの話じゃない。

常に急所をやられてるような感覚になってしまう。

「急に急いでどうしたの？」

「他に見回る時間が惜しいと思って少しでも短縮しようかなと」

?である。

「そう? 水族館はもう見終わつたし、他行くにしてもまだ時間はたくさんあると思うけど」

「……」

くそつ、こういう遊ぶ時のスケジュールというか効率を考えるのは圧倒的経験者の喜多さんの方が分があるな。

ここで友達と遊んでこなかった弊害が来るとは……。つうかどつちみち喜多さんも食べ終わらないとどこにも行けないから俺だけ食べ終わつても意味ねえじゃん!

「でものんびり時間潰しながら歩くのも悪くないわねえ。じゃあこの後はアトラクションの方に行つて気になる乗り物があつたら乗るつて感じでどう?」

「異議なし」

「なら私も早くパクパク食べなきゃね!」

パクパクですわ! つてこと? 違うか、違うな。

マックイーンはそんな事言わない。いや言いそうではあるけど。

とまあそんなこんなで昼食も食べ終わり、俺達はアトラクションのある方へ向かつ

た。

「つつても基本的には子供や家族向けのアトラクションばつかな」

「案外乗ってみたら楽しいかもしれないわよ？」

「ああいうのって男同士とか女子同士でその場のノリとかで乗るやつだろ。あとはアホなカップルが適当にわーきゃーするだけのリア充空間だよ。俺には恥ずかしくて合わん」

「カップルに恨みでもあるの……」

高校生が乗るにはメンタル的に恥ずかしいのばかりのように見える。

もつところ、何かちやうど良さそうなものとかないのかね。

「なら刺激的な物に乗りましょうよ！ 私が連れてってあげる！」

「もうそれでいいや、頼む」

そして俺は地獄を味わった。

喜多さんに連れられやってきたのはバイキングという、いわゆる海賊船のような乗り物に乗り傾斜65度まで揺れ動く言わば絶叫マシン。

今まで修学旅行や遠足でも絶叫系というものを乗った事がなかった俺はまさしく初

時刻は午後十六時。人気アトラクション故に待ち時間も結構あったため、空はもう夕方に差し掛かろうとしていた。

そんな俺はジェットコースター終わりに喜多さんに肩を貸してもらいながらベンチに移動。二人で休憩なうである。

「……や、俺もまさかこんなダメだったとか知らなかったから、気にしないでくれ……」
絶叫系は文字通り絶叫系だった。少なくとも俺の中の宮川大輔が出てくるくらいには叫んだ。

横回転しだした時はマジで死ぬかと思った……。こんな怖いのかよジェットコースター……。もう絶対乗らんからな……。

「大丈夫……?」

「ああ、多分寝不足なのもあるんだと思う。ちよつと乗り物酔いしちゃったかな……」

「そういえばそうだったわね。楽しくてつい忘れちゃってたわ……」

それについては激しく同意だ。初めて誰かとプライベートでこういうところに来たから俺も舞い上がったのかもしれない。

小学生や中学の時の修学旅行や遠足、江の島の時はほぼ後藤さんの介護だったから数

えん。

最初は映えスポットのためと思っていたけど、何だかんだ普通に楽しんでしまっていた。な。

これも喜多さんが盛り上げ上手だからか。出掛ける際に關してはほんと頼りになるな。

「ふう……大分楽になってきたかも」

「そう？　せっかくだからもう少し休憩していきましょ。ほとんど立ちっぱなしだったし、疲労も溜まってるんだから無理は禁物よ」

「ああ、悪い」

寝不足のままジェットコースターダメ、絶対。

九月といつても海が近いから風もあつて結構涼しい。木々に囲まれ、人気も少ないこのベンチは絶好のポジションかもしれない。

「……あれ……？」

ようやく落ち着いて座れたからか、心地良い風と太陽の光で一気に眠気が押し寄せてきた。

あーそうだ……眠くならんために電車でも立ってたつてのに、変に自覚してしまったら戻れなくなる。忘れた頃に来るとは、恐ろしいやつめ。

「清水君、もしかして眠い？」

「ん……ちよつとな。でも大丈夫だよ。次どこ回るか考え」

「だゝめ」

「つと……喜多さん？」

立ち上がろうとしたら喜多さんに手を引っ張られまたベンチに座らされた。

「こういう時は無理したらダメよ。疲れてるんでしょ？ 休む時は休まなくちゃ」

「いや、そうは言ってたって……」

「時間もまだあるし、幸いここはベンチだから。ちよつとくらい寝ちやつたつて平気よ」
「……………ん？」

寝ても平気……？ 何を言つとるんだこの子は？

「え……と、寝たらダメでしょ普通」

「この辺は人も少ないし他のベンチも誰も座つてないから迷惑はかからないと思うけど」

「？」

「にしたって……」

「ほら、あくび我慢しても涙目になってるからすぐ分かるわよ」
バレてた。ちよつと恥ずかしい。

喜多さんは俺に向けていた体の向きを正面へと戻し。

そして言った。

「私の肩貸してあげるから、少し寝る事。良い？」

「……………」

思考が止まる。

理解が遅れた。

彼女の言つた事はつまり、そういう事か？

いやいや、そんなの。

「むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ」

「後藤さんのが移ってるわよ。いいからほらっ」

「なっ」

首を振ってたらほとんど強引に顔を掴まれ強制的に喜多さんの顔の横へ俺の頭が移された。

後藤さんの技が効かないなんて……まさか抗体でもできたのか!?

「少しでも良いから寝る事。拒否権はないから」

「でも」

「これ以上は言わせないで」

「……はい」

一瞬悪寒がした。

何故かアクアミュージアムに入る前の事を思い出す。恐怖を植え付けられるってこういう事なんだね……。

すぐ横に喜多さんの顔があるという事を嫌でも意識してしまう。後藤さんの家でウイルスにかかり腰へ抱き付かれた事もあるけど、顔と顔がこんなに近いのは初めてな気がする。

江の島で後藤さんをおんぶした時と何だか似てるなあ。状況はだいぶ違うけど。

「何か慣れてる風だけども、友達と遊びに行った時もこういう事ってあんの?」

「え？ ……うーん、そうね〜……。たまに、ね」
「……そうか」

なら問題もそんなになさそうだな。

軽く香水でも振ってるのか、はたまた髪の毛の香りなのか。喜多さんからは良い匂いがした。

ほんのりと甘い、それでいて落ち着くような香り。眠気に襲われているからなのか、ふんわりと包まれる感覚があつた。

ああ、そろそろ限界だ。

ほんとに、寝ちま——、

そうして、俺の意識は薄くなっていった。

「おやすみなさい、清水君」

45. 悩みの捉え方なんて人それぞれでしかない

清水君が寝た。

私の肩に頭を乗せたまま。

実際彼に無理矢理そうさせたのは私だけど、もつと抵抗してくるかと思つてたら案外すぐに受け入れてくれた。

多分そこまでの気力も眠気のせいではなかったんだろうな。

少し顔を左に向けようとすると、ツンツンとした清水君の髪が私の頬に当たる。ちよつとくすぐつたい。

夕方に近づいてきてるとはいえ空はまだ明るく、アトラクションや水族館の方にも人はたくさんいる。

だけど私達がいるこのベンチの周辺だけは人気が少なく誰もいない。まあ、景色が良いという訳でもないしここから海が一面見れる訳でもないから、ポジションとしてもお世辞にも良いとは言えない。

ただ、今の私達にとっては好都合というだけだ。

ここから見えるシンボルは目の前にそびえ立つシーパラダイスタワーのみ。それ以外には特に目立った物はなく、人通りも少ないため私達をがつつり見てくるような人もいない。

もし見えてるのならば、きつとシーパラダイスタワーの上からだろうと思う。私達以外にベンチに座っている人がいないから、そういう意味では逆に目立っているのかもしれない。

あの上から見下ろしてる人達には、私達はどんな風に見えるのかな……なんてちよつと考えてみたりして。

再び清水君の方を見る。彼は綺麗な寝息を立てながらぐっすり眠っている。よほど疲労が溜まってみたい。

後藤さんったら清水君をこんなにするまで勉強してもらってただなんて、彼の苦勞が計り知れないわ。

……でも、それも何だかちよつと羨ましいと思ってしまう自分も少しはいる。

家が隣の幼馴染。近しい距離にいて近しい関係性でいられる絶対条件を二人は満たしていた。

引つ込み思案で遠慮しがちな後藤さんと、献身的で基本的に誰にでも優しい清水君。

二人を見ていると本当に仲が良いんだなって思う。

困っている人を見ると放っておけない清水君と、自分じゃ何もできないと思っ
ている後藤さんは相性がいいのかもしれない。

周囲から見たら清水君が介護してるだけのように見えるけど、私からすれば清水君も何だかんだ言いつつ満更でもなさそうだし、後藤さんも彼を信頼してるからこそ純粋に甘えてるようにも見える。

どちらかの一方通行じゃなくて、お互いにとってあれが心地良い関係性なのかなって個人的に思ったりもした。

その点清水君の苦労が毎回凄い事になってるのはご愛嬌なんだろうか。なのに彼は後藤さんのお世話をする事に何の疑問も持たず、いつも側にいて支えようとしているのだ。それを過保護と言わずに何と言うのか。

「……ん」

「清水君？」

肩を貸しているとはいえやっぱりこの態勢は寝づらいのかな。ドラマとかだとみんな普通にしてるけど、あれは結局演技だし……実際座って寝ると後で首とか痛めちゃうよね……？

右手をゆつくりと動かし彼の頬を軽く突いてみる。

「……起きない、わね」

寝づらくはあつても眠りは深いようで、それだけ疲れていたんだと改めて実感する。せつかく寝たのにこのまま寝づらいのを分かつて放置はしておけない。解決策がない訳じゃないけど、少し心の準備が必要だ。軽く深呼吸をする。

「……」

意を決する。

清水君を起こさないようにベンチの端までゆつくり移動しつつ、少しでも寝やすいように彼の体を徐々に倒していく。

「……ふっ」

緊張感のある一分間だった。

割と動かしたのにも関わらず清水君が起きる気配はない。ひとまずは安心、かな。私がしているのは、俗に言う膝枕だ。

寝づらい態勢を解決するにはこれしか策が思い浮かばなかった。さつきとは顔の距

離が遠くなったけど、これはこれでちよつと思ふところがある。

以前、江の島へ向かう電車内で私は清水君に質問した。気絶している後藤さんの頭を自分の肩に寄せていたのを見て、誰にでもそんな事をするのかと。

彼の答えとしては、そんな恥ずかしい事はしない。何とも思わないふたりちゃんか気を失つてる後藤さんくらいでしかやらないと。誰にでもこんな事できるのはナルシストか勘違いイカレ野郎だけだと言っていた。

私だつてそうだ。自分の見た目に關しては努力してるから多少可愛いとは思つてるけど、誰にだつてこんな事をしない。ましてや自分から強制的にさせるなんて普段は絶対であり得ない。友達でもそんな事はしなかった。

なら何故こんな事をしたのか。それも女子ではなく男子の清水君に。

理由は単純。普段からの労いと感謝だ。

清水君はいつも私達のために結束バンドの活動を支えてくれている。バイト代だつて自分のために使えばいいのに、少しでも私達が機材などを買う時のために貯金できるようにと自分のバイト代全てノルマ代にあててくれるほどだ。

普通に考えればあり得ない。男子高校生なら自分の私利私欲のために使うのが当然で、そのためにバイトのモチベーションも高くなるはずなのに。

彼はそんな打算も欲も一切感じさせず、ただただそれが当たり前だと思つていてるかの

ように行動している。

こんな人、今まで見た事も接してきた事もなかった。

これまでも現在も、人と関わるのが好きな私はみんなのノリに合わせつつもクラスの中心点に立って来た。その中で色んな男子と話す事も多かったけど、みんな下心見え見えだしあわよくば付き合おうとでも思ってるのか近づこうとしてきた男子も何人かいたと思う。その度さつつーが牽制してくれたけど。

けど清水君からはそういう気持ちも下心さえ全然感じなかった。

一度結束バンドから逃げ出した時も私の悩みにすぐ気付いてくれて、本当なら全く関係ないのに一緒に謝りに行くこうともしてくれた。

純粋な善意からの行動。それが私には凄く嬉しかった。

後藤さんと一緒に引き留めてくれた事も、電話で色々話を聞いてくれた時も、清水君は真摯に私と向き合ってくれたのだ。

少なからず他の男子よりも好意的に思っているのは確か。

だけどその気持ちは何なのかは、自分でもまだよく分かっていない。

友愛？ 親愛？ 敬愛？

それともつと別の何か……とも思ってたけど、答えは出てこない。ラブソングは好きだけど、経験もない以上恋心というのがどんな気持ちなのかは分からない。

「……」

ただ、清水君ともっと仲良くなりたいたとは思っている。でもそれは後藤さんに対しても思っている事で、つまりそういう気持ちとはまだ結びついていないんじゃないかと思う。

私にとって清水君も後藤さんも、それにリョウ先輩や伊地知先輩みんな大事な人だから。

寝ている彼の髪を少し撫でてみる。

いつもツンツンしている髪も、撫でてる間は当然のように倒れる。それが何だか新鮮で面白くて、ついつい両手で髪全体を倒そうとしてみたりした。

「ふふっ」

男の子らしいツンツン髪からストレートっぽくすると、普段より少しだけ幼く見える。

寝顔のせいもあるんだろうけど、それが余計にそう感じさせた。

「いつもは頼もしいけど、こういう寝顔は可愛いものね」

スマホを手に取り、パシャリと一つ、二つ。

撮れた写真を見る。清水君の寝顔だけのものと、自分も枠に入って収めたツーショット。

「……な、何やってるんだろ私……」

正気に戻り顔を手で扇ぐ。普通に考えて恥ずかしい事をしてるんじゃないの私……。

勝手に撮っちゃって清水君にも悪いし……でも消すのは何だか惜しい気もする。だつてこんな写真、この先二度と撮れないかもしれないんだから。

「……秘蔵フォルダに入れとけば、ね」

誰にも見せる事のない、私だけが見るフォルダに分けておく。この中身を開くにはロックを解除しないとイケない。つまり文字通り私だけの秘蔵フォルダだ。

万が一誰かに見られたら清水君に迷惑掛かっちゃうし、これが正解よね。ちよつと惜しいような気もするけど、私だけの秘密にしておく。

ほんの少し体温が上昇しているのが分かる。

気を紛らわすかのように、私は結束バンドの曲を子守歌のように歌う事にした。

「……………んっ、んあ……………?」

「あ、起きた?」

適当に結束バンドの曲を鼻歌で歌いながらスマホを触っていると、清水君が小さく声を上げながら目を開いた。

「おはよう清水君。よく眠ってたように見えるけど、どうだった?」

「ああ……………思ってた以上に眠れ……………」

清水君の言葉が途中で止まる。

どうしたんだろう。寝ぼけているのかとも思ったけど、何やら目が点になっているような気がする。彼は半ば人形のような目で私を凝視していた。

「……………何で俺は膝枕をされているのでせう……………?」

「……………あ」

「そういえば忘れてた……。これは私が勝手にした事であつて清水君からすれば態勢変わつてるし状況的にはかなりおかしいんだつたわ！」

えと、ど、どう言えば……。

「あつえつと……。そ、その、あれなの！ 清水君つたらよつぽど寝づらかつたのか急に私の膝に倒れてきちやつて……。変に動かしたら起こしちやいそうだし、もうこのままでも仕方ないかなつて思つてね！」

恐らく私の目はぐるぐるになつている。自分でも苦しい言い訳かと思つたけどこれしか思い浮かばなかつたんだからしょうがないじゃない……。。

「あー……。そういう事か。ごめん、すぐにどくよ。何か悪かつたな。足動かせないし辛かつたろ？」

「え？ あ、や、大丈夫大丈夫っ！ 私は全然平気だから気にしないで！」

思つたより普通に納得してくれてほつとした反面、喜びも照れもしないでただ本当に申し訳ないと思つていなさそうな清水君の態度にちよつとだけ寂しさが募る。

今更正直に言えば良かったと後悔した。

「そ、それよりどう？ 一時間くらい寝てたし、少しは疲れ取れたかしら？」
「おう、おかげで多少マシになったよ。色んな意味で眠気も覚めたし」
色んな意味でというところが少し気になるけど変に追及はしないでおく。

「にしても一時間も寝てたんだな俺。じゃあ今の時間は……五時過ぎか。さすがに陽も傾いてきたな」

太陽は夕陽へ変わりつつあった。

ずっとスマホ見てたから気付かなかったなあ。

「喜多さんの帰る時間を逆算すると、もうアトラクション乗ってる時間もなさそうか……。悪い、俺のせいで時間潰れちゃったよな」

「ううん！ もう乗るアトラクションもないし私も休憩できてちやうど良かったから大丈夫よ！ そもそも私が寝るように言ったんだから気に病むのはなしにしてちやうだい。その方が私も嬉しいから」

「……そう言ってくれるとありがたい」

「清水君起きたばっかだし、もう少しだけここで休憩してから帰ろっか」

「おう」

二人で目の前のシーパラダイスタワーが上がっていくのを見送る。
何てことのない、数秒間の沈黙。それを最初に破ったのは清水君だった。

「そーいや俺が寝てる間どうしてたんだ？ 暇潰しとかできたか？」

「あ、うん。スマホ見てたからその辺りは平気よ。クラスのグループプロインとか色々来てたから見てたの」

「あーグループプロインね。何だ、連絡しないといけない事でも送ってきたのか？」

清水君は自分のスマホを取り出してロインを開くと、何やら少し眉間にしわが寄っていた。

「どうしたの？」

「……いや、別のロインが来てただけ。クラスのグループプロインはと……何々、あん？ 何か写真ばっか貼ってんな」

「みんなも休日を利用して各々の思う映えスポットに出掛けてるって事ね。そこで撮った展示物とは関係ない写真をここに貼って、自分達はここに来たわよって共有したいんだと思うわ」

「わざわざ殊勝なこって。陽キャは何でもかんでも共有しないと気が済まないのか

ねえ。思い出を自分の中だけに仕舞っておくのも尊い青春の一つだと思うんだが」

「私達の写真も載せとく?」

「俺を殺したいの?」

何がどうなつてその結論に至つたのかよく分からないけど、清水君の目が本気なのでやめておく事にした。

……でもちよつともつたいないな。

「(でも喜多さんほどの陽キャが便乗せずにいるのも不自然か? 喜多さんなら真つ

先に乗っかりそうだし……。いやけどシーパラの写真なんか上げたら俺の地元って事もバレルし何より俺もシーパラの写真展示するんだからほとんど自殺みたいなもんじゃねえかちくしょうどうすりや違和感なくこの場をやり過ごせるんだ……!?)」

凄く小声で独り言を呟いてるけど何を言つてるのかまったく聞こえない。

とにかく悩んでる事だけは確かだね。

数十秒間たつぷり悩んだ清水君は、覚悟を決めたような表情をしてこちらに振り向いた。

「適当に空の写真でも載せとこう。本番まであえてスポットは隠すけど写真は撮りに

行ってますよ感を出すんだ」

「徹底してるわね……」

「あくまで延命措置だけだな。俺の」

最後の強調が凄いんだけど……。

「間違ってもイソスタに俺とのツーショットとか上げないでくれよ。学校外でも怯えて歩くのは御免なんでね」

「え〜」

「俺の生殺与奪の権は喜多さんが握ってると思うてくれりゃいい。俺を生かすか殺すかは喜多さんの選択にかかってる」

「写真投稿するかしないかだけなのに問題が深刻すぎないかしら!？」

清水君が大袈裟に考え過ぎてるだけなんじゃ、とも思うけどここまで迫真に言われるとあながち?でもないかもしれない。

じゃあ清水君がしっかり写ってる写真は投稿しないでおう。他の写真なら……まあ、大丈夫よね? さっそく今夜イソスタに上げる写真の厳選をしなくちゃ。

ブワツと少し強い風が顔にかかる。髪を押しさえ反射的に上を見上げると、空が明確に朱くなっていた。

陽が沈み始める兆候だ。昼から夕へ切り替わる時間帯。世界が暗くなるカウントダウン。

同時に、私の思考も少し変化していた。木々に囲まれたベンチは周囲と比べて夕陽には照らされず、少し暗い。

今は清水君と二人きり。話しておくならちようど良い機会かもしれない。

「清水君」

「ん？」

本当なら先に後藤さんに話すべき事だけど、どうしても彼の反応も気になった。だから。

「この前の、後藤さんが間違えて捨てた申込用紙を私が代わりに出したって話をしたの、覚えてる？」

私は切り出した。

「ああ。後藤さんが棺桶で死んでた事も含めて覚えてるよ」

「その事なんだけどね……。ちよつと話しておきたかった事があって……」

「どうしたんだよ？」

ほんの少し息が詰まる。

私がこんな事を言ったらどうなるんだろう。いくら優しい彼でも怒るだろうか。いや、後藤さんを大切に思っている彼だからこそ怒るに決まっている。いつそそうされた方が私の気持ちも少しは楽になるはずだ。

「私ね……後藤さんがわざと申込用紙を捨てたの知ってたの。悩んだ末に諦めたのもくしゃくしゃになった用紙を見て何となく分かったわ。でも、それを知ってて私が勝手に出した。後藤さんの選択を無視して。だから先に清水君にだけでも謝っておかなくちやつて思つて……ごめんなさい！」

座りながらも頭を下げる。

何を言われるか分からない恐怖感と不安で胸が張り裂けそうになる。清水君は後藤さんの事に関しては過保護になる面が多々あった。

怖い。この人から本気で苦言を言われるのが。自分から話しておいて体が震えそうになる。

でも素直に受け入れなきや。それが私にできる最初の償いなんだから。

そして、彼が口を開く。

「え、話しておきたかったってそんな事？」

「……え？」

いつそ素つ頓狂な声があった。

思わず顔を上げてしまう。

「何だよ。ちよつと真剣な顔になるからこつちも身構えちまったじゃねえか。緊張して損したあ……」

「えつ、え？ 怒らないの？」

「あん？ 何で俺がそんな事で怒るんだよ？」

本気で疑問に思っている顔をしている。

私の決意が簡単に崩れていく音がした。

「だって私、後藤さんに嘘ついて勝手に出しちゃって……」

「ああ、その点についてはむしろ納得がいったよ。この前後藤さんが死んだ時の説明で変な間とかあったし、申込用紙が間違つて保健室のゴミ箱に入ってたとか言ってたからおかしいと思ってたんだ。意図的ならまだしも、どう間違つたら申込用紙が保健室のゴ

ミ箱に入るんだよって話だし」

「あう……」

やっぱり言い訳にしては酷かったのねアレ。

後藤さんはあの時のショックのまま忘れてたけど、清水君はちゃんと覚えてたのね……。

「んな辛気臭え顔すんなよ。最後だったのにそんなんじやせつかくの楽しいシーパラ巡りが台無しになっちまうぞ」

「で、でもお」

「むしろ俺は喜多さんに感謝してんだ。申込用紙出しといてくれてな」

「え？」

軽く体を伸ばしベンチから立って彼は言う。

「直前まではやる気だったのに結局最後の最後で日和ってたし、あいつには喜多さんみたいにも多少強引でも背中を押してやれる人が必要なんだ。そうじゃなきゃいつまでも前に進めない。それに、バンドメンバーの喜多さんだからこそ意味があるんだよ」

「私だから？」

「おう。同じ学校で、同じギターで、ギターの師弟関係という近い距離の喜多さんにしかできねえ事だ。何より後藤さんにとっちゃ初めての学校友達だしな。あ、俺は幼馴染だから友達という枠とはまた別だぞ？」

変な補完をしつつも清水君は明るい声音で話してくれる。

私の不安なんて知らずに、彼はいつも通りの調子で。

「ちなみに何で申込用紙出したか理由は聞いてもいいのか？」

「あつ、うん」

不意な質問で後藤さんの口癖がうつってしまった。

確かに後藤さんの代わりに出しといたと言っただけで、私の理由は何も言ってなかった。

少し恥ずかしいけど、清水君にならいいかな。

「結束バンドの初ライブの時、あつたじゃない？」

「ウツ、あ、ああ……」

何故か清水君が少しダメージ受けてるけど、そういえば伊地知先輩から簡単に聞いたんだつた。確か問題行動起こしかけて店長に説教されたんだつた。

「私達が落ち込みかけてた時、後藤さんだけがいきなりギターソコを始めてあの場の空気を一変させてくれたでしょ」

「だな」

「あの時の後藤さんの姿がどうしても忘れられないの。どうしようもない空気を一気に自分のものにしてみんなを惹き込ませた後藤さんが……私には凄くかつこよく見えたから」

ライブ本番中なのに、私はあの時客席でも自分の手元でもなく、後藤さんばかり見ていた。

いいや、見惚れていたんだと思う。あのギターを弾く姿は、いつも私に教えてくれたる時の後藤さんのように、どうしようもなく輝いていた。

「みんなにも見てほしいの！ 後藤さんが本当は凄くかつこいいんだって、大人しいだけじゃなくてこんなにも魅力的な人なんだって分かってほしいの！」

これはあくまで私のエゴだ。我が儘だ。

勝手な押し付けであって、後藤さんの気持ちには全然配慮していない。私の我が儘に、リョウ先輩や伊地知先輩までも巻き込んで。先輩達は乗り気だったけど、本質的

な理由については私は騙しているに過ぎない。

決して褒められるべきではない事をしてる私に対して清水君は、ニヤリと口角を上げた。

「同感」

「清水、君？」

「良い事言うじゃねえか喜多さん。そうだよ、後藤さんの演奏はみんなに見てもらおうべきだ。でなきゃあいつのかっこよさは理解されねえ。ははっ、やっぱ近くで見てきた喜多さんは違うな」

まるで自分の事のように嬉しそうにしている彼はそのまま続けて、

「良いか喜多さん。喜多さんのやった事はナイスプレーだ。罪悪感なんて持たなくていい。それでもまだ悪いと思ってんなら、後藤さんに謝ってやってくれ。あいつも怒る事なんか絶対ないと思うけど一応な。そんで、隣であいつをサポートしてやってくれ」

「サポート？ 私か？」

「ああ。ステージ上じゃ俺は何もできないかもしれないかもしれねえ。けど同じステージに立ってる喜多さんならギターとしてあいつのためにしてやれる事があるはずだ。そして忘れる

んじゃないぞ。ステージの上では、後藤さんだけじゃなくて喜多さんもかっこいいところ見せないとだぜ。まあ努力の才能ぶつちぎってる喜多さんなら大丈夫だろうけど」

「……うん！」

「よし、気分は晴れたようだな。言つとくけどシーパラに来てまで悩む事でもないからなそれ」

ああ……清水君はやっぱりこういう時、私が一番欲しい言葉をくれる。

それに応えたい。後藤さんのかっこいいところをみんなに見てもらって、私ももう一つレベルを上げていきたい。

後藤さんにはまた機会を見計らって謝ろう。

今は、

「んじや土産でも買って帰るか」

「ふふっ、そうね！ 最後には楽しく終わらなくちゃ！」

空は朱い。

けど私の心は青く澄みわたっていた。

喜多さんと別れ、俺は金沢八景駅から帰路についていた。やけに嬉しそうに手を振ってたけど、まあ最終的に良い思い出になったのなら万々歳だ。

土産も結構買えた。

自分家と後藤さん家用に適当な食えそうなサブレやらシヨコラやらと何個か。あとは物があんま置いてない殺風景な後藤さんの部屋用にしんかいメンダコのぬいぐるみだ。これで少しは女の子らしい部屋になるだろ。気休め程度だけだ。

とりあえず今日の目標、映えスポット写真は撮れたし喜多さんの悩みも多少は解消した。

解決するかどうかは後の喜多さん次第だ。別れ際の表情を見るに心配はいらなそうだが。

歩きながらももう一度ロインの画面を開く。

ベンチで起きた時、クラスのグループロイン以外に別のロインが来ていたのだ。後藤さんから。

へ 後藤さん 三

今日

ここから未読メッセージ

《left》 今日どこ? 11:10

《left》

《left》 お昼はホットケーキでした 12:46

《left》

ft》

《left》 あつ、今日私の家でギター練習していく……?

13:33

《left》

《left》 お、お母さんが晩ご飯ウチで食べていくんだよね? だって

1

4:51

《left》

《left》 あの……へ、返事は……

15:25

《left》

t》

《left》 用事いつ終わる……?

16:09

《left》

《left》 ゆうくん……どこ……?

16:10

《left》

t》

+ A a

いつ振りかの連投である。

怖い。怖いよ。あと怖い。超怖い。

こんなの起き抜けに見たら誰だつてまだ夢の中かもつて思うじゃん。

ヤンデレ適性あるんじゃないのあの子。用事終わるまで待てんのかまつたく。一応さつき駅に着いてから練習ついでにそつち寄るとは送つておいたし大丈夫だろう。

うん、既読になつてるな。

家も見えてきた。どうせ母さんも父さんも後藤さんとかいるだろうし、土産はそつちで一気に渡すか。

後藤さん家のドアに手を掛けると鍵は開いていた。

そのまま開けると、玄関の明かりは点いてないのに彼女がそこに直立していた。

「あれ、何でそこにいんの？　もしかして待つてた？」

「あつうん……もう帰つてくるつてロインで見たから、待つところかなつて……」

「別にいいのに」

まるで飼主の帰りに勘付いてお座りしながら待つてる犬みたいだ。

「あつえつと、ゆうくん……」

「どした？」

「あの、お、おかえり……」

「ん、おう、ただいま。土産買ってきたぞ」

挨拶の流れで持ってた袋を置いていく。

「お土産？」

「ああ。ほれ、殺風景な後藤さんの部屋もぬいぐるみ置いときや多少マシになんだろ。メンダコぬいぐるみだつて。どうだ、結構可愛いだろ。何か不思議と後藤さんに合うって思ったんだよなメンダコ」

「(ゆうくんの……お土産……)」

よほど気に入ったのかメンダコぬいぐるみをギュツと抱き締めている。
うむ、僥倖僥倖。

「あつ、でも何でメンダコなの？」

「俺のクラスは文化祭で映えスポットの展示するつて言ってたろ。それで今日喜多さん

とそこの八景島にあるシーパラダイスってどこ行ってきたんだよ。水族館とかあつて色んな海の生き物いてさ、すげえ面白かったぞ」

「……………喜多さんにとって……………まさか、ふ、二人で……………？」

「そりやな。クラスでわざわざ俺の地元に来てくれるのは喜多さんくらいだし」

「あ、あああ……………あああああああ……………あああああああ……………あああああああ!!？」

土曜日。

午後六時半。

後藤さんがメンダコになった。

46. ギャグのノリを本気でやると洒落にならない時がある

月曜日。

いつも通り後藤さんと別れ自分の教室に入った時の事。

一步踏み入れた瞬間、俺の視界に映ったのはこちら目掛けて飛んでくる足の裏であった。

「はよーっす」

「死に晒せ清水クソカスボケがアアアあああああああああああああああああああああああああああああああああッ!!」

ドゴアッ!! という音と共に教室の外へ吹っ飛ばされる俺……という訳でもなく。

しっかりと相手の足と衝撃を受け止めノーダメージである。

「せめて理由を言いやがれ！ 謂れない罪で裁かれる義理はねえぞ！」

「謂れないだと？ ほう、よくもまあそんな事が言えるなあ清水君よく……。もうクラスの全員知ってんだぜ？」

「……何だと？」

全員？ 女子も含めてか？

思い当たる節が一つも出てこない。悪行なんかやった記憶もなく、慎ましく生きてる俺に何の罪があるというんだ。

「言っておくがもし俺に何の非もなかったらお前ら全員一発ぶん殴ってやるから覚悟しとけよ」

「非がなかったら、な」

「もつたいぶってんじやねえよ田中。さつさと言ってみやがれてんだ。こちとら冤罪の反論ならいくらでも出てくるんだよお!!」

「貴様が休日到我がクラスの華、喜多さんと二人きりで水族館に行った事……。バレてないとも思っているのか？」

「……………」

時間が止まったような気がした。

どうしよう、嫌な汗が止まらない。滝のように出てきちゃう。あ、あるえく？ おつかしいぞく？

「……しよ、証拠は？ 俺と喜多さんが二人で出掛けた証拠でもあんのかよ!? まずほそれを見せねえとこつちも納得できねえぞ!」

そうだ、ある訳ない！ 喜多さんにも俺とのツーショットは撮るだけでSNSに上げるのはやめてくれってちゃんと云ってるんだ。

物分かりの良い彼女なら俺の顔が写ってる写真なんて上げてるはずもないし、誰かに見せるような事もしてないはず。大丈夫、きっと大丈夫だ。

俺の言い分を聞き入れたのか、田中が大人しい鈴木に何かを持ってくるように首をクイツと動かすと、鈴木は黙ってスマホを取り出し軽く操作してから田中に渡した。

そして田中はそのスマホ画面を俺の目の前に掲げてきて、罪人に問うように口を開く。

「喜多さんがイソスタに投稿した写真。これは貴様の地元金沢八景の近くにある横浜シーパラダイスだろう？」

「……」

「そして昼食時の写真。これには可愛らしいパンケーキの奥に女子では少々重めの口コモコがある。おかしいよなあ、普通に考えたらそんな遠くの水族館に行く必要なんかねえしどう見ても女子一人で食べきれぬ昼飯の量じゃねえもんなあ？」

「……………」

「そして極め付けはこれだ。喜多さんが飲み物を持った手元だけを撮ってる写真。一見普通の写真のように見えるが、その奥には微かにだがどう見ても男の腕と思われるものが同じカップを持つてるのが写っている。こんな分かりづらい写真でお前だと決めつけるのは邪推だと思うか？ だがな清水、お前ミルクティー大好きだったよなあ？ 何だこのカップ底にあるミルクティーの色は？」

「……………」

体が震えてきた。どうしよう、思った以上に証拠を掴んでやがるこいつら。特定厨かよ気持ち悪いな。

とうか喜多さん俺とのツーショット上げるのは止めてくれと言ったけど、それ以外で俺が写り込んでそうなものは別にいいとか言ってるじゃねえか！

これじゃ何だか匂わせ写真みたいになってるじゃねえか！ 変に憶測が出回って炎上するタイプのやつでしょこれ知ってるよ!!

どうする……こうなってしまったこいつらを宥めるのは至難の業だ。つうか絶対無理。何か、何か弁明できる材料はないか!?

「……ハッ!? そうだ喜多さん!」

俺は先に来ていて女子に囲まれている喜多さんに声をかける。

こういうのは本人の声を届けるのが一番だ。何か上手い言い訳でも釈明でもしてくれたらこのバカ共も少しは落ち着くはず!

「こいつらに説明してやってくれ! 喜多さんの言葉ならまだ届くはずだ!!」

俺の必死な言葉に彼女は、

「えっと……一応バンドやってる事とか今回の事について色々話したんだけど……」

だけどと言った時点で嫌な予感ほした。

説明したにも関わらずこいつらが俺を殺そうとしてくるという事はだ。救いはないと思った方がいいかもしれない。

最後に、喜多さんは可愛らしく手を合わせて俺に謝ってきた。

しかしそれはそれとして女子と二人で出掛けるのは普通に羨ましいので許さん!!
よって死刑死ねえ!!」

「心の中読んでくんじゃねえよっ!」

「喜多さんから聞いたぞ清水う!! テメエ帰宅時間長いからって一人だけ部活に入らず苦勞してると思ってたらバンド活動手伝ってんだってなあ!!」

田中の坊主め……余計な情報喜多さんから掴んでるんだったな……。

とうかあいつもめつちや早えじゃん! そこはちゃんと野球部で走り込んでるってか!!

「しかも四人構成のガールズバンドだあ!?! こちとら男だけのむさ苦しい坊主の集まりだつてのに良い御身分だなこの野郎! 喜多さんが所属してんなら全員もれなく美少女確定してんだろ!?! せめて一人くらい紹介しやがれボケがあ!!」

「……………あア?」

田中の言葉に俺の足が思わず止まる。

いいや、正確には止めた。

「バカめ! 足を止めたな! お前らどいてろ! 喰らえつ野球部直伝フライング殺人

スライディングブーツ!!」

もはやただの飛び蹴りで向かってくる田中を見据えて、

「死いにやあぶどうるるるるるるっ!」

《田中あッ!?!》

蹴りを躲かし頬に一発叩き込んで吹っ飛ばす。

坊主頭が男子の群れへ転がりこんでいき、ヤツらの足が止まった。

今度は、俺がヤツらの元に歩いていく番となる。

「おいそこのクソ坊主。今なんつった? よもやあいつらに言い寄ろうとか言うんじや

ねえだろうなあ?」

「何かいきなり雰囲気変わったぞ清水のヤツ……もしかして俺ら変な地雷でも踏んだか
?」

「だとしてもヤツは部活にも入ってない一般人だ。運動部で数でも勝ってるこちらに敗
北はねえ」

「田中息してないぞ」

「ほっとけ。今はあの罪深き罪人を裁……ねえ顔変わってないあいつ? 何かツノが二

本生えてるんだけど」

「テメエらも話聞いたんならもう同罪だ。逃げる義理はねえ。全員まとめて二度と女子と関われねえくらい顔歪ませてやらあ」

こんなカス共に結束バンドのみんなが言い寄られると思うと文化祭ライブに出るのも少し気がかりになってくるな。

まあここで相手にされなくらいポコしとけば近づこうとは思わんだろ。とにかくぶっ飛ばす。真っ直ぐ行つてぶっ飛ばす。

「い、いいい行け野郎共お!! 相手はたかが帰宅部一人! ガールズバンドの手伝いなどのたまり甘い汁を啜る羨ま……不埒なオス猿に過ぎん!! 全員でかかれば恐るるに足りんぞお!!」

「問題児ばかりの面倒見る苦労も知らねえテメエらに語る事なんか一つもねえ!! かってきやがれ、全員生きて帰れると思うなよおツ!!」
かくして、俺と猿共の死闘が始まった。

「で、クラスの男子半分以上を戦闘不能にして怪我の治療もしないままスターリーにやってきたと」

「つつつ……まあそういう感じですよ……」

放課後、スターリーに来た俺は虹夏さんに絆創膏や消毒液で簡単な処置をしてもらいつつ、状況を説明していた。

「体育会系の相手しかいないのに無茶すぎだよ」

「高校生男子の熱いノリと思って軽く流してください」

「それでクラスの男子半分以上に勝てるお前も何なんだよ」

あいつら俺を殺す気満々だったしこっちだって全力なんですよ。そりやもう一人二人倒しては逃げてまた一人二人倒して逃げてを繰り返してた。授業だけは真面目に受けて休み時間は全部バカ共の相手してたのだ。

喧嘩にルールなんてない。結局は最後に勝てば良い。そう、最終的に勝てばよかろうなのだアアアアッ!!

「男の子ってほんと何ですぐ喧嘩するんだろ。痛いだけじゃん」

「男にや譲れないものがあるんですよ」

「それで怪我したら元も子もないでしょ」

「いいッづあッ!?!」

消毒液が染みる!?! もうちよつと優しくポンポンツつてして!!

「それで、何でぼつちちゃんと言喜多ちゃんは優人くんの後ろに引つ付いてるのかな」

「さあ? またスタンドになりたかったんじゃないですか?」

「私がちよつと欲張ったせいで優人君が大変な目に……」

「そーいや元凶君だったね」

「ゆ、ゆうくんはもう、怪我するようならダメ……。と、というか喜多さんいつの間にもゆうくんを名前呼びに……!?!」

「いつも溶けてる後藤さんが何言ってるんだ」

普段から怪我よりやばい事なってる自覚あんのかこの子。

「いやーゆうきゆんも高校生っぽい青春してんだねー!」

「つーか何で酒飲みニートがいんだよ消える。もしくは消えろ」

「きくり姐さんも不法侵入が板についてきましたね」

怪我してる俺よりも何故か床に倒れながら笑ってる酔っ払いこときくり姐さん。

最近拠点の新宿よりこっちに来てる回数の方が多くなってるんじゃない？

「もおく二人共ツンがひどいな。けどゆうきゆんは何だかんだ許してくれるもんねえ
！」

「いつでえ?! こんな時にしがみ付いてくんнатての!？」

「うははく! そんな事言つても顔赤くなつてんぞお? 照れ隠しなのバレバレだぜ」

「! ほらほら妹ちゃんも何か言つてやれー!」

「廣井さん帰ってください。今優人くんの治療中なので」

「うわお、先輩に負けず劣らずの目をするようになってきたね……」

おおぅ……今の虹夏さんの目、俺もちよつとゾクゾクしちゃった。

さすが店長の妹だ。瞳の温度が氷点下にいってるのが見てるだけで分かる。将来有望ですなあれ。圧だけで人を従えそう。

「ここの居心地良すぎるのが悪いんだよー! 私みたいなダメ人間でも受け入れてくれる優しい子達ばかりだし先輩の家でシャワー借りれるしピツタリの場合なんだぞお」

！ もっと私を甘やかせ〜！ 構え構え〜!! どうせ先輩は可愛いものに弱いんだろお。これでどうだ！ にやくにやくニヤーン!!」

「もしもし警察ですか？ 酔っ払いが業務妨害してるんですけど今すぐ来てもらえますか。場所は……」

先輩に通報されてる後輩って何。全然効いてないし。

そして店長も容赦ねえな。

「はあ……虹夏さん、とりあえず文化祭ライブの事話し合いませんか？ そろそろセトリも決めつつ練習しなきゃですし。あ、治療ありがとうございます」

「それもそうだね〜」

「ウツ……文化祭ライブ……」

後ろで落ち込む声があった。

俺のスタンド、ボッチミスディレクションだ。

「まだ不安なのか？ もう取り消せねえしみんなで出るってちゃんと決めたら？ そのためにテストだって頑張ったのに。主に俺が教える側で」

「で、でもお……」

「何々どしたのぼっちちゃん？　心配事でもあんの？」

「きくり姐さんには言つてませんでしたっけ？　結束バンドで文化祭ライブ出る事になつたんですよ。けどいつも通り後藤さんがごねてるつて感じですよ」

やる気になったり不安になってツチノコになつたりと、情緒不安定なのはいつもと変わらぬが最近頻度が多くなつてるのは確かだ。

この子の気持ちと性格を考えると分からないでもないが、決まつてしまつた以上後戻りできないのを理解して練習に熱を入れてくれると嬉しいんだけどな。

「だ、だつて……いつもの箱より多い人の前で……しかも、学校での私を知つてる人の前でライブをするのが……こ、怖くて……」

まあ、いきなりスターリーよりも多く人が集まる場所でライブをするのは相当緊張するものだろう。

こんな性格の後藤さんなら尚更だ。何か良い方法でもないか色々模索してみたが中々良い案は出ず。もう最終的に俺が後藤さんの願いを何でも聞くとか言えばワンチャン頑張つてくれないかなと思つてみたけど、そんなんでやる気が出るならとつくと向こうから言い出してくるはずだ。

喜多さんとも話した通り、俺は後藤さんが学校のステージで演奏してみんなを魅了す

るかっこいい姿が見たい。

人気者とまではなれなくても、みんなの後藤さんを見る目が少しでも疑心より好意的になってくれれば、彼女ももつと学校での生活が過ごしやすくなるはずだから。……変に調子乗らなければの話だけど。

そんな事を思っていると、突然きくり姐さんがポケットから何かを取り出した。

「ねえぼっちちゃん、これあげる」

「え？」

「私のバンド今日ライブするんだあ。だからそのチケット。この前のお返しも兼ねてさ……良かったら見に来なよ！」

「えっ……いい、いいんですかっ？」

「もちろん！ ほい、君達もどうぞ。ゆうきゆんのもあるよ！」

そう言つてきくり姐さんは人数分のライブチケットを渡してきた。

「ありがとうございます」

「あ、じゃあチケット代……」

「いいよー！ あげるあげる！ こう見えても私インディーズでは結構に人気バンドな

んだよお。ノルマ代なんて余裕だし物販でも稼いでるんだから！」

「じゃあ何でいつもウチのシャワー借りてくんですか？」

「この前の電車賃俺も返してもらってないですね」

「家賃払えクス」

「ごもつともである。」

お金稼いどいて返さないのもさすがにどうなんだきくり姐さん。やっぱアンタは高に生粋のクスだぜ。絶対見習わねえ。

「あう……えつと、それには深い訳があつて……泥酔状態でライブするから毎回機材ぶっ潰して全部その弁償に消えてるの……」

「自業自得じゃねえか。おい優人、他にこいつから返してもらってないお金あるか？」

「きくり姐さんからはもうないですけど、リヨウさんから何回か返してもらってません」

「優人……!?!」

悪いなりヨウさん。同じベースリストが正しく責められてんだ。アンタもクスなら同じ地獄に落ちてやるのが筋つてもんだぜ。

という事で底辺ベースリスト達から正式にお金を返済してもらい関係は保たれた。

お金の貸し借りは信用してる人としかしちやダメだね。

「つたく、というかお前ライブ活動する前は酒飲んでなかったろ。体壊すぞ」

「あー……まあそんな事はどうでもいいじゃん？　よくし、という事でみんな新宿にレッツゴだよ!!」

酔ってるノリで流したなこの人。

「どうしたの君達！　返事がないよ！　ゆうきゆんもほら………つてあれ、ゆうきゆんいつから手すりみたいな形状になったの？」

「なあってねえよ」

どこ見て言ってるんだ。

そういうのになれるのは後藤さんだけで俺はまだなれねえよ。いやなりたくもないけど。

「あの人あれで今日のライブでできるの………？」

「できてるからおかしいんだと思いますよ」

「………ねえ、この音………何かしら？」

「音？」

そろそろ新宿に向かおうかと軽く準備しようとしていたら、聞き慣れない音が聞こえてきた。ここはライブハウス。普段なら外の音は結構シャットアウトされてるはずなのに。

ヴーヴーという高い音がこちらに近づいてきている。

「……あ、そういやさつき店長通報してたな」

「え!! 警察!!? ほんとに呼んでたの!!? ああいうのって普通その場のノリで冗談みたいなやつじゃないの!!?」

「それをするのが虹夏さんの姉って事ですよ」

俺もマジで通報してるとは思わなかったや。

ロックに関わる人達ってどこかしらでネジが一本外れてないといけないのかねえ。

「よおし、みんな警察ごと新宿に連れてくよ!!」

「スターリーで警察沙汰は嫌あああ!!」

「けっ、警察……!!? わ、私も挙動不審暗すぎる事案で捕まったりするんじゃ……!!?」

まずはこの状況をどうするか考えないとだなー。

47・初めて行くライブハウスはちよつと怖い

警察の方には俺から上手く説明して帰ってもらった。

顔の傷とかに関して少し聞かれたが、ボクシング部だから熱い拳を交えただけですと嘘をついて難を逃れる事ができた。？も方便という事で許してほしい。

そして駅へ向かう最中。

こんな会話があつた。

「SシIックCック HハAックCックのライブをタダで見れる……胸熱！」

「シクハック……？　それが廣井さんのバンド名なんですか？」

「そだよ〜！　オシヤレでしよ〜！」

「オシヤレなのかそれ？」

俺には分からん……。四字熟語をそれっぽく変換するだけでオシヤレになるなら苦労しないだろ。

そしてリヨウさんはタダに喰い付きすぎだ。もしお金いるってなったら絶対自分で払えなかつたな。俺には分かる。だってさっきの一番にチケット貰ってたし。にしても、きくり姐さんのライブか。

「なあ後藤さん」

「えつな、何？」

みんなとは二歩後ろ離れて歩いている後藤さんに歩幅を合わせ話しかける。

「きくり姐さんのライブ、どう思う？」

「あつ、えつと……前の路上ライブで上手い事は知ってるけど、どんな音楽してるかはよく知らないなって」

「やっぱ気になるよなあ」

きくり姐さんの実力は本物だ。後藤さんと路上ライブをした時だって、きくり姐さんにとつては即興だったのに上手く合わせてセッションしていた。

先ほどのインディーズバンドの中では人気だというのも本当なんだろう。泥酔しながらライブしても人気があるのは、相当な実力者じゃないと許されなさそうなイメージがある。

「だから、楽しみ……かな」

「……だな」

軽く笑みを浮かべた彼女を見てこちらも少し安堵する。

文化祭ライブの事で浮かない表情ばかりしてたし、今日のライブでちよつとは前向きになつてくれたらいいな。

そんなこんなで下北沢駅から新宿駅に着き、西口広場方面の改札辺りまで来た。

新宿の人混みの多さは異常。弱い人ならここで人酔いしてもおかしくないレベル。

で、酒臭い大人（笑）のきくり姐さんは俺が肩を貸してる状態だ。すれ違いざまにちよつと肩がぶつかつただけでふらつと倒れそのまま嘔吐しかねないから、仕方なく俺が介護する事となつた。

そしてもう一人。人混みが苦手な少女がいた。

「あつ今日のライブ、凄く良かったです……」

「まだ会場にすら着いてないでしょ！」

さつき見た笑みはどこへやら、後藤さんは死にかけていた。

うん、まあ新宿とか普段来ないしこの人混みはまだ厳しいか。この子の場合、少し目を離すとすぐ人混みに吞まれてはぐれるとか余裕でありそう。それは面倒だ。こんなところで騒ぎになるのは勘弁である。

「後藤さん、はぐれねえように近くにいろよ」

「あつうん……」

「何ならいつも通り俺の服でも裾でも好きなどこ掴んどきやいい。絶対離すなよ」

左側はきくり姐さんに肩貸し中なので右側の方へ来させる。

というかきくり姐さんヘラヘラしながら俺の首に回してる右手に力入れてくんのやめて。絶対無意識じゃん。余計顔近くなるから危ないって臭い！あと臭い！

顔を離そうと地味に格闘したら右手を握られる感触があった。

咄嗟に視線を戻すと、後藤さんと俺が手を繋いでる状態になっていたのだ。

「……何でいつもは裾とかなの今回手繋いでんの？」

「あつ、その、こうしとけば私も離す事ないし……ゆうくんからも握っててくれればはぐれる事もないかなって……」

「確かにそうだけどさ……まあいいか」

なるほど合理的だ。後藤さんにしてはよく考えたと褒めてしんぜよう。

しかしこれで俺の両手は塞がった。左に酔っ払い、右にド陰キヤだ。

両手に華だと思ukai? 残念、その実ただの介護なのだよ諸君。

自分でも驚くほど喜ばしい気持ちとか一切湧いてこない。右側がまだマシだと思うくらいだ。後藤さんがマシって、世も末だな。

「ゆうきゆん達も青春してんね。いいなく私も混ぜろよお!!」

「頼むからちよつと黙っててください」

「ほんと優人くんが結束バンドの手伝いでいてくれて良かったよね」

「ですねぇ。廣井さんの面倒見るの本当に大変そうですし……こういうのはやっぱり男手が一番ですね」

おい聞こえてんぞ前の二人。

厄介事ばつか押し付けてくるのは違うんじゃないですかね? ちよつとはサポートするとか考えないかなあ!?

「ここが私のホーム、新宿FOLTです！」

酒の匂いを拡散させながら左側のきくり姐さんが声を上げる。

結局会場に着くまで俺の介護は続き、後藤さんとも手を繋いだままここまでやってきた。

新宿FOLT。

違うライブハウスってだけで結構印象変わるもんなんだな。内装とかスターリーと全然違って少し新鮮だ。

「ありがとねゆうきゆん。さあ、みんな入って入って〜！」

もう良かったのか、きくり姐さんは俺から離れて案内を始めた。

ついでに後藤さんと繋いでいた右手も離し、俺達は中へと入っていく。

「スターリーとは随分雰囲気違いますね……」

「だいじょぶ。うちと変わらないよ！」

フロアの広さはここの方が大きいのか。の割には地下という事もあり、照明もまだ最

低限しか点けていない状態ではやけに雰囲気も暗く感じる。

うん、スターリーがいつも騒がしいだけですわねこれ。本来ならこういうちよつとダークな感じの雰囲気なのがライブハウスの良い所だろう。危ねえ、あまりにもあそこがホームすぎて感覚がおかしくなるところだった。

「へえ、ここは料理も提供してんのか」

「そだよ〜！ ゆうきゅん料理上手だし何ならここで働いてくれないからね〜！」

「別にメニユーもレシピも変わらんから一緒でしょ」

「ふふん、このライブハウスはシェフのアレンジもオツケーなん」

「優人くんは渡しません」

「らしいです」

「妹ちゃんの目がまた先輩みたいになってる!？」

とほほと案内を再開していくきくり姐さん。すいません、虹夏さんスターリーの事になると本気になつちやうだけなんです。

それにしても一日で二度も虹夏さんの瞳からハイライト消させるなんて、きくり姐さんどれだけダメ人間だと思われてんだ。

「ん、ん、ん、ん」

「ひいうっ!? いいいいイキってすみません……」

「何だどうした」

後藤さんがまた内心勝手にイキって敗北したらしい。

彼女の視線の先には、どうやらこのライブハウスで今日ライブをするのかただの打ち合わせなのか、明らかにガラの悪いガールズバンドっぽいお三方がいた。

しかも一人はめつちやこつち睨んでる。

ベレー帽を被り首にチョーカー、全体的に黒で統一された服装と見た目をしており、一番印象的なのはツイントールをしているところか。

今のこの時代にツイントールしてる人って本当にいるんだな。いやバンドマンだしキアラ付けの可能性もなくなはないか?

にしても睨みすぎじゃないですかね……。メンバーの一人はタバコ吸ってるけど、ツイントールの人は明らかに未成年に見える。おおよそでしか推測できないが、座高もそんなに高く見えないし身長は低め……。見かけで判断するのは失礼だけど多分高校生で同じ年くらいなんじゃないかと勝手に思う。

というかあの人後藤さんじゃなくて俺の事見てません? そりや女子達の中に一人だけ男が混ざってるのは自分でもおかしいって自覚はしてるけど……。そんな邪険にし

なくとも良くない？

バンドマンってあんなに敵意剥き出しにするものなのか。おそらく先ほど咳払いしたのも彼女だろう。それで後藤さんが怖がつて萎縮している。

第一印象だけなら、まあ良いとは言えないな。

「怖いならこっちいろ」

「えっ、あつ、ありがと……」

後藤さんをカウンター側に移動させて俺の側に寄せさせる。

もう一度ツインテールの方を見てみると、彼女はまだ俺を見ていた。目付きは先ほどよりも鋭くなっている。

俺が何かした訳でもないのにあんな睨まれるのは理不尽だろ。またあらぬ冤罪でもかけられるんじゃないかとちよつと警戒しておく必要があるそうだ。いや朝方のは冤罪というか事実だったけど……。

初対面相手に堂々と睨んでくるあのメンタル。俺には分かる。バンドマンにまともなヤツはいないのだと。

結論、変に関わるとロクな事がねえ。つまりは面倒事なんて御免なのでもう無視させていただく事にした。

触らぬ神に祟りなし。ああいうのは関わると絶対後々面倒になるタイプだもん。しかも全身黒にツインテールとかちよつとした中二感あるし確実に地雷系だ。

俺の面倒事センサーがヴィンヴィン鳴ってる。華麗なスルーでいこう。今日はライブを楽しみに来たんだ。

「ああいう人達も大体話せば良い人だから大丈夫だよぼっちちゃん」

まあ最初はスターリーの店長もPAさんも見た目で言えば怖い部類だったもんな。

話せば全然だったというか可愛いもの好きなツンデレ店長と本名不詳の優しい中退PAさんという事が判明したし。いやPAさんに関しては今も謎だらけだな。

「銀ちゃ〜んおはよ〜!」

「ああ?」

きくり姐さんが一升瓶片手に手を振った先には、何ともまあ一番物騒な見た目と雰囲気醸し出している人がいた。

耳に大量のピアス、口にもピアス、両手首にシルバーを巻き、目付き半端ねえし野口さんやら福沢さんをピラピラと数えていらっしやる。

パツと見だけで言えばやべー人一択なんだろうが、きくり姐さんの態度からして悪い

人ではなさそうだ。まあインパクト強すぎて後藤さんの体内からパチンパチンと何か小さく弾けていく音してるけど。

そんな中、先頭を歩いていた虹夏さんが俯きながら静かに俺の方に寄ってきた。

何だろうと思っていると、彼女は俺の手を握り顔が見た事ないくらいふにやふにやになりながら涙目になっている。

「ゆ、ゆうとくん……お姉ちゃんに会いたい……」

ああ、さすがに虹夏さんもアウエーのライブハウスでこんな人と会ってしまったから怖かったんだな。

ちよつと幼児化してるもん。精神が一気に退化してしちゃってる虹夏さんもこれはこれで可愛いな。何気に喜多さんも背後から小さく服掴んできてるし、リョウさんは無表情だ。うん、通常運転だね。

「この人が店長の銀ちゃんね〜！ あとスターリーが珍しいだけでライブハウスの店長なんて男ばつだからねえ！ 見た目はアレだけど良い人だよ〜！」

「あら〜、随分可愛くてピチピチなお友達がいるのね〜！ あたし、吉田銀次郎37歳で〜す！ 好きなジャンルはパンクロックよ！ 好きなように呼んでくれていいからね

「！」

おお、心が乙女な人と出会うのは初めてだな。

話し方も明るいいし普通に優しそうな人じゃん。虹夏さん達は見た目と話し方のギャップで混乱しているようだ。仕方ない、先陣は俺が行こう。

「どうも初めまして。清水優人、誕生日はまだなので15歳です。好きなジャンルはポップロックとかミクスチャーロックをよく聴いてます。見た目とのギャップ凄いですね」

「よく言われるわあ〜！」

「ギャップで頭バグるよね〜！でも銀ちゃんは心が乙女なただのおっさんだから安心してねえ！」

こういう人って何故か服装とか見た目厳つい人が多いの何でなんだろうな。この人は違うけどやけに筋肉質の人とかも多い印象ある（偏見）

でもって話してみるとめっちゃ良い人というね。ギャップが良いよね。銀次郎さん、好きなように呼ばばいいって言うてくれたよな……。

「あの、銀さんって呼んでも大丈夫ですか？」

「全然良いわよ〜！ ならあたしは優人ちゃんって呼ぼうかしら〜？」
「超オツケーです」

よし、これで自然に万事屋っぽい感じで銀さんと言えるな。中々ない名前だし、銀さんと呼べるならちゃん付けで呼ばれるくらい何とも思わない。

俺と銀さんの会話を聞いて安心したのか、虹夏さんも普段の調子に戻り軽い挨拶を済ませていると、

「おい廣井」

「ほおい？」

女性の声と共に、奥の方から声の主っぽい人ともう一人の女性がこちらにやってきた。

「遅刻するなっっていうつも言ってるよな」

そう言ったのは黒髪ショートの女性。黒シャツの上から青と白の無地のスカジャンを羽織り、下には黒のズボン装備。どちらかというところボーイッシュな雰囲気がかっこいい系の人だ。

「むう、もうリハーサル終わっちゃいましたヨ〜！」

少し口を膨らませながら言ったのはアホ毛がピヨンと一本飛び出している金髪ロングの女性。黒のキャミソールの上に白い着物を羽織っているが、大胆に着崩しており容姿も相まってか教育上ちよつとよろしくない服装だ。見た目的に日本人じゃない事は確かだけど、どこの人なんだろうか。というか着物とか普通に凄いな。

「ごめん！ まあ何とかなるっしょ！」

「時間を守らない人は徐々に誰からも信用されなくなるんですよきくり姐さん」

「ゆうきゆんここで正論はやめてよお！」

「うおっ!? 一升瓶振り回しながらしがみ付いてくんな！ 酒かかるでしょうが！」

「こうなったらゆうきゆんを酒漬けにして道連れにするのもやぶさかじゃないよ！」

「未成年に何てこと言うんだこの人!？」

そういうやテストの時も教師脅して解答盗めとかとち狂った事言う人だった。

つうかマジで飲まそうとしてくるじゃん！ 高校生の口に強引に一升瓶近づけてくる成人女性の構図って色々アウトなのでは!? この人より力強くて良かったと心から思ってる。筋トレ様様だ。

俺ときくり姐さんが格闘しているすぐ隣では、虹夏さんと黒髪ショートの人が自己紹

介し合っていた。

「どうやら黒髪ショートの人がSICK HACKのドラムを担当している志麻さんという人らしい。」

「最近うちの廣井がご迷惑おかけしてるようで、あつこれつまらないものですが」

「あ、ありがとうございますっ」

「……で、お前は現在進行形で迷惑かけるんじゃない」

「あべしっ!？」

志麻さんの手刀がきくり姐さんの脳天に直撃。きくり姐さんは崩れ落ちた。哀れすぎる。

「た、助けてくれて、ありがとうございます」

「私のストレス発散にもなるからね。……君があのうきゆんか」

「……？」

何だろう、最後の含みある言い方は。

あときくり姐さん以外からうきゆんって言われるのは何だかむず痒いな。しかもかつこいい系のこの人が言うもんだから余計に。

「はいは〜い！ 私清水イライザ！ イライザって呼んでイーヨ！ 18歳までイギリスに住んでました〜今日日本三年目！ 仲良くしてネ〜！」

「あれ？ 清水だつて、優人くんと一緒だね！」

「え？ ああ、そうですね。俺も清水なんですよ。清める水と書いて清水。清水優人です」

「オ〜！ ユウキゆんも清水だつたんですネ〜！ まつたく一緒ヨ！ きやは〜！」

「なつちよつ待つ、抱き付くのはっ!？」

ふおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おとおおとおおとおおとおお!!

な、なん……………この、このふくよかな感覚……………とても甘い香りと包容力のある肌の柔らかさは……………!？」

あ、抗えない……………これが大人の包容力……………大人のお姉さん……………俺に足りていなかったもの……………。

酒の匂いがしないってだけでこんなにもハグで幸せになれるのか。フレンドリーハグ万歳！ 大人のお姉さん万歳!! 俺はもうこの中で死んでもいい!!

「い、伊地知先輩……これって……」

「うん……いつもぼつちちゃんやリヨウ、何だかんだ廣井さんの面倒を見たりして苦勞してる優人くんは、小さい頃から家事ばかりで誰かを甘やかす事はできてても自分を甘やかしてくれる人がいなかった。だからきつとこういうのに弱いんだ。自分を甘やかしてくれる包容力のある人にツ！」

「ゆ、ゆうくん……!? あつあわ、あわばばばあばあばあばあばあばあばあばあばあば……!?!」

「きゃあー! 優人君がしぼんでいつてるわー!?!」

「優人も順調に人間辞めてきてる」

「んな事言ってる場合か! 優人くん元に戻すよ!」

その後、俺は虹夏さん達のおかげで人間修復作業の形に戻ることができた。

俺はいったい何をしていたんだ……? 直前までの記憶が曖昧になつてるような……。

「(伊地知先輩……優人君が記憶を呼び戻そうとしてますよ!)」

「(あたしが話題を変えるよ!)」

うーん、何か思い出せそうな気がするんだよなあ。

確かイライザさんに――、

「あー！ そういえばイライザさんってわざわざ日本に来てまでバンドするなんて、邦ロック好きなんですね！」

「あは〜ノー！ コミケ参加したくて日本来たノ〜！ 本当はアニソンコピーバンドしたいネ〜！」

「そ、それは……!?!」

イライザさんが取り出したスマホケースに付けられているストラップを見て俺の目は見開いた。

「スローループ……スローループじゃないですかそれ！ イライザさん好きなんですか!?!」

「イエ〜ス！ 可愛い女の子が出るアニメにハズレはないネ〜！ もしかしてユウキゅんもアニメ好きなんですか？」

「愛してます」

「私達の相性バツチリネ〜！ いっぱい語り合いまショ〜ウ！ あ、そうだユウキゅんロイン交換しヨ〜！」

「イエーイ！」

イライザさんとハイタッチしてスマホを出し合う。

アニメを語り合える人がいるって最高だね!! 大人だし包容力あるしアニメ好きだし、もしかして理想の人見付けちゃったかな〜!

「またか!!」

虹夏さんと喜多さんが何か叫んでるが気にしない。同志を見つけた時の感動は何ものにも代えがたいのだ。

いや〜まさかきくり姐さんのバンドメンバーがこんなに良い人達だとは思わなかったなあ。やっぱバンドマンにもまともな人はいたんだ。

「んんんっん うっ!? けほっこほッ!」

また後ろの方から咳払いが聞こえて見てみると、先ほどのツイントールが少し涙目でこちらを睨みながらマジで咳き込んでいた。

わざと咳払いしようとしたらマジで喉にちよつと唾が詰まって苦しいやつだあれ。そこまですて睨んでこなくていいのに。もしかしてかまってちゃんか?

イライザさんとロインIDの交換を終えると、今度は裾を軽く引つ張られた。

予想通り、後藤さんだ。

「どうした?」

「あつその……わ、私もそのアニメ、みつ、見てみようかな……なんてえ」

「俺の気持ちを理解しようとしてくれるのはありがたいけどやめとけ。バトル物ならまだしも、日常系は友達と青春してるやつが多くて視聴してる後藤さんが先にダメになっちまうぞ」

「あう……」

本来なら日常系アニメは難しい事を考えずに視聴できて癒されるものなんだけど、後藤さんの場合は逆に致命傷受けかねないのが難点だ。

いや、本当にどうかしてると思う。

「じゃあ私達は準備してくるので、皆さんはゆっくりしてってください。イライザ行くよ」

「ハア—イ! ユウキゆんまた後で話しましょうネ〜!」

軽く手を振って一旦別れを告げる。気絶しているきくり姐さんは志麻さんが引き摺っていった。

開場時間も迫ってきてるし、外にはもう客も並んでるかもしれない。

「別のライブハウスで初めて見るライブか。楽しみになってきたな、後藤さん」
「うっうん……！」

何とも言えないドキドキ感とワクワク感が一斉にやってくる。

しかもきくり姐さんのバンドのライブだ。こんなの楽しみに決まってるよな。

開場までもうすぐ。

俺はもう自分の口角が無意識に上がってしまうほどワクワクしていた。

「ん、ん、つつん、ん！」

後ろから聞こえる咳払いに対して少し面倒になりそうな予感も感じながら。

48. 人を見かけで判断してはならない

開場してから少し経ち、トイレから戻ると既に客は150人ほどまで入っていた。わーお、この感じを見るにまだまだ来そうだな。

とりあえず分かりやすい髪色を目印に虹夏さん達を探す。

後藤さんは意識的に影を薄くするので、探すなら虹夏さん達の方が見つけやすいのだ。さすがにこの人だからだと半径十メートルの気配察知はできてもの確な位置までは掴みにくい。

おっ、いたいた。

信号機トリオは目立つ髪色をしてるので分かりやすいな。

「あ、優人くんおかえり〜」

「もう結構人入ってますね」

「うん、200人は余裕でいきそうだねえ」

別に疑ってた訳じゃなかったけど、本当にきくり姐さんのバンドは人気のようなだ。

行きの電車でもリョウさんがコアなファン多めとか言ってたっけか。じゃあある意味洗練された精鋭達って事だよなこの人達。顔面踏まれたり酒ぶつ掛けられたりとかしても平気な猛者の集まりという訳ね。そう思うとちよつと怖いな。

「あれ、虹夏さん達もうドリンク交換してたんですね」

「人が入場しきる前にしといた方がいいと思つてね。優人くんも今のうちに行つてきたら？」

「そうしてきます」

と言つてもドリンクカウンターの方は人が結構並んでいる。少しかかりそうだな。こうしてる間にも人が入ってきているので、足早に列へ並ぶ。

数分後にはドリンクを貰つたが、その時にはもう結構な人数がいた。

ちなみにドリンクはレモンソーダだ。スターリーよりもソフトドリンクの種類が多くてちよつと迷つたレベル。スターリーももう少しレパートリー増やせばいいのに。そんな事を考えながら後藤さん達の元に戻ろうとした時だった。

「ねえ、その茶髪のツンツン頭」

背後からそんな声がしたのだ。

しかしここで振り返ってもし俺じゃなかった時の事を考えると、変に恥ずかしい思いはしたくないので振り返らないでおく。周囲には茶髪の人なんて大勢いるし、それこそツンツン頭なんてこういうライブハウスにはたくさんいるし、きつと俺じゃない。そもそも知らない声だしね。

よし、戻ろう。

「ちよつとつ、貴方の事よ！ 私を無視するなんてどういうつもり!？」

今度のもつと近い距離、すぐ後ろで同じ声が出た。え、マジで俺なの。知らない声なんですけど……。

仕方なく恐る恐る振り返ってみる。まるでホラー映画のワンシーンのように。

振り返った先に、声の主がいた。

とうか俺を睨んできてた地雷系（推測）ツインテールだった。うわーお、やつべ。

「いや、俺の事だとは思わなくてつい……」

「……ふんつ、まあいいわ。とにかく話があるからちよつとこつち来なさい」

「すいません、知らない人に着いていたらダメって親に教えられてるんばあッ!？」

「いいから早く」

ぐっ……おぉ……!?

な、何でバンドマンってのは人の話聞かずにすぐ襟掴んで引つ張るヤツばつかなんだああ……ツ!?

連れてこられたのはメインステージとは逆にあるコミュニケーションラウンジ、ザ・ロフトという場所。通称『深海』と言うらしい。

ソファなどが置かれており、休憩や文字通りコミュニケーションの場として使用されるスペースだ。ガイドマップに書いてあった。

ライブがもう少しという事もあり客はみんなそつちに集中し、ここには俺とツインテールしかない。

奥にはバーフロアがあり、その奥にはバーステージもあるが、そこにも人はいなかった。本当に二人きりらしい。

ずっと睨んできてたし嫌な予感というか、面倒な予感しかないんだけど……。

強引に連れてきたという事もあり、最初に切り出してきたのは向こうからだった。先ほどと同じように鋭い目つきのままで。

「貴方が清水優人よね」

「違います」

「やっぱりね。貴方に話が……ってええ!?!」

「人違いのようなので俺はもう行きますね。失礼します」

この際引つ張られた事に関しては無問だ。目先の事で食いかかるよりも、もつと先を見据えて面倒事から離れる方が最優先である。

だって睨まれてたんだから絶対ロクな事にならないじゃん。変なイチャモン付けられるくらいならさっさと逃げた方が得策ってね。

「あつ、そうなの……それは、悪い事したわね……」

「じゃあそういう事なんで」

「……でも待つて……貴方さつきゆうきゆんとか呼ばれてたわよね……? 自分でも清

水優人って言うてたし……ってじゃあやっぱり貴方が清水優人じゃない!」

「チツ、バレたか」

「確信犯!?!」

訂正。この人意外とおもろいかもしれん。

適当な嘘で乗り切れそうになるとか割とポンコツ系なのか?

「?付くとか私に失礼だと思わないの!」

「初対面相手に睨みつけるわ強引に連行するわ強気のタメ口だわ自分の名前も名乗らんで、どっちが失礼なのか考えたらすぐ分かりそうですけど」

「うぐう……………」

レスバよつつつつつつわ。

会心の一撃、入っちゃったね。ちよつと涙目のまま睨みつけてきてるんだけど。くつころ女騎士みたいになってる。

やっぱおもしれー女かもしれないこの人。

面倒な予感は今進行形でめちゃくちゃするけど。

「で、あなたの名前は? こっちはもう知られてるみたいですけど一応、俺は清水優人。

高一です」

「…………大槻ヨヨコ、高二よ。…………って私の方が年上じゃない! タメ口でも問題なかったじゃないのよ!」

「そこは普通に初対面なら歳関係なく強気なタメ口とか言わんでしょ。最低限の礼儀ですよ」

「うぐう……………」

「何だこの人噛み付くだけ噛み付いて来てすぐ何も言い返せなくなるじゃん。」

ちなみに虹夏さんとの初対面は向こうが先に名乗ってくれて年上だとすぐ分かったのでノーカンド。あと天使だ。

つうかこのままじゃ話が進まらない。

「ライブももうすぐなんで手短にいきましょう。大槻さん、俺に何の用ですか」

「そ、その前に……清水優人。貴方、その顔のケガとかはどうしたのよ……大丈夫なの？」

「ん？ ああ、クラスの男子ほぼ全員と殴り合っただですよ。その勲章です」

「なぐっ……!!? そ、そう……やるじゃない……」

「何で一歩後ずさる。そっちから連行しといて今更怖がられてもこちらが困るんですけど。」

「今から私の話を聞いても何もしないって約束はできる!？」

「話によりますけど、その言い分からしてそういう事言おうとしてるんですか?」

「女性を殴るのはダメだから!」

「俺は基本男女差別しない派なんです。結束バンドのみんなに何かしようもんならさすが

に黙ってはいられないですよ。なーんて、冗談言ってみたりい!」
「ヒイツ……!?!」

あれ、冗談のつもりが余計怖がらせてしまった。俺また何かやっちゃいました?
最初はずっと睨んできてどれだけ気の強い人なのかと思つてたけど、ちよつとからかい甲斐あつて面白いんだよなこの人。チワワかと思つた。

悪印象は既がない。むしろ今までいなかったタイプの女性でかもしれー女つて感じがする。

「ほら大槻さん、何かするつもりなんて一ミリもないですから、用件を言つてください。そのために連れてきたんでしよう」

「うっ、そ、そうね……。なら言わせてもらおうわ!」

「はいはい」

ようやく本題だ。

はてさて、何を言われるのやら。初対面から好感度マイナスっぽいし、多分きくり姐さん辺りかな。じゃないとここまで睨まれてる理由が分からん。

大槻さんは俺に向かつてまるで真実はいつも一つと言いたげ風に勢いよく人差し指を向けてきた。

「清水優人、貴方に廣井姐さんは渡さない！」

「いやいらんけど」

「なあつ……!?!」

そんな何を言ってるんだこいつは……みたいな目で見られても。

「最近は特に清水優人と後藤ひとりとかいう人の話ばかりするのよ姐さんは！　今まで私と仲良くしてくれてたのに！」

「……ちなみにどう仲良くしてくれました？」

「シャワー貸してとかご飯奢ってとかお金貸してとか……ずっと私を頼ってくれてたのよ!?!　それを貴方と出会ってからはたまにご飯作ってきてくれるだのいつも介抱してくれるだの電車賃くれただのって……それってつまり私から姐さんを奪おうとしてるって事でしょ!?!　そんなの許さないんだから！」

「……」

「何とか言ったらどうなの!?!……って、えっ、な、泣いてる!?!」

これが泣かずにいられるかよお!

この人めっちゃたかられてんじゃん!　カモにされてんじゃん!　しかもそれに全

然気付いてないじゃん！　こんなのってありかよ！！

「失礼ですけど大槻さん、友達います？」

「えっ!?　あ、当たり前じゃない！　えっとお……ら、ライブに来てくれるみんなでしょう……あとは、トウイッターのフォロワー……とかも入るわよね……?」

「入らんけど」

「……が、楽器屋さんの店員は……!?」

「ノー」

「うう……」

彼女は崩れ落ちた。

さつきから不思議と感じていた既視感の正体がようやく分かった。

この人後藤さんとは別種のぼっちかもしれないねえ。

変に話せる分、口調と態度、目付きのキツさで誰も寄ってこないタイプのコミュ症だ。当時後藤さんのために色々調べてたから何となく分かる。

人を傷付けない大人しいタイプの後藤さんと、攻撃的な発言で誤解を与えやすい大槻さん。同じコミュ症でも方向性が真逆なんだ。さつき俺の顔のケガを心配してくれた辺り、根は優しいのは分かったからいいけど。

友達いないからきくり姐さんみたいな人でも頼られると承認欲求が満たされ、その関係が友達だと錯覚してしまう悲しい思考の持ち主。

しかも当のきくり姐さんは最近スターリーに来ては俺が介抱という名の面倒ばかり見るせいで入り浸り、若干放っておかれてる始末。

はつきり言つて可哀想だ。さすがに同情してしまう。

そして、何故俺の周りにはこんな人ばかり集まってしまうのだろう。もつとマシな、普通の子はいないのか神様。

「大槻さん」

「何よ……」

「きくり姐さんに関しては俺も見たくて面倒見てる訳じゃないんだ。誰かが見とかないとどこで何しでかすかゲロ吐かれるか分かったもんじゃないから、仕方なく俺が面倒見ただけなんだよ。別に大槻さんからきくり姐さんを奪おうなんてこれっぽっちも考えてない。マジで、ガチで。むしろ最近は店長と出禁にするか本気で話してた事もあったし、何なら今日警察に通報されてたんだ。だから安心してくれ。それと、金の貸し借りや一方的に奢るだけの関係は友達じゃなくてただのカモだから。そこは気を付けるべきだぞ」

もうこれ以上ないくらい優しい目で慰める。

この人は唯一の友達と思つていきくり姐さんが俺達に奪われると思つたからこんな事をした訳だ。そんな事はある得ないのに。

だが、つまりはその勘違いを正し、ついでにいきくり姐さんとの関係を少し考えさせる事で改善に向かえばと思つている。

これでわだかまりも消え、大槻さんの俺に対する態度も少しは変わ——、

「姐さんはそんな人じゃないわ！」

らなかつた。

むしろちよつと地雷踏んだ説まである。

「いつも私を見つけると笑顔で近づいてきてくれるもの！」

「ご飯奢つてもらおうとしてるだけでは」

「駅まで一緒に帰ろつて誘つてくれるんだから！」

「電車賃貰おうとしてるだけでは」

「家で音楽の話しようかつて言つてくれるんだから！」

「シャワー借りてあわよくば泊まろうとしてるのでは」

「だから姐さんはそんな人じゃないわよ！」

いやめつちやそういう人ですよ。と言いそうになった口を閉じる。

これ以上は火に油だ。余計に燃え上がらせる事はすべきではないだろう。

唯一の友人関係と呼べる代表がきくり姐さんの時点で改心とか無駄な話だったかもしれない。

そもその基準が違うのだから、そこにズレがあつたとしてもデフォルトからは動かさないのだ。

初対面の俺にいきなり睨みつけて連行するほどだもんな。

きくり姐さんの事を友人先輩枠というか、ほとんど教祖扱いしてもおかしくないぞこれ。

「……姐さんは、かつこいい人なんだから！」

「ああ、それについては同感」

「……え？　で、でも随分と見下すような事言つてたじゃないっ」

「普段はね」

ほんと、普段はあんなにダメなのになあ。

「けどふとした時にかっこいいとこ見せてくるからズルいんですよきくり姐さんって。確信めいた事っていうか、いきなり核心に迫るような事を突然言ったりとか、そういうギャップにやられたんですよ。路上ライブで演奏する姿も凄かったし。あとは雰囲気、幼馴染に似ててつい面倒見ちゃうって感じですよ」

「ふ、ふん……少しは分かっているじゃない」

別に？ ついてる訳じゃないけどちよろすぎやしませんかねこの人。

後藤さんとは別の意味でちよつと心配になつてきたんだが。

「でもそのきくり姐さんって呼び方は気に食わないわ！ 私の方が先に廣井姐さんって呼んでたのに、何で清水優人の方が下の名前で呼んでるのよ！」

「オオツキンもきくり姐さんって呼べばいいじゃん」

「私は尊敬してるから姐さん呼びなの！ あと急に馴れ馴れしいわね！」

ふむ、こちらから一步踏み寄ろうとすれば突き放すような言い方をしてくるのか。

変に距離を詰めるのはこの人には逆効果なのかね。後藤さんならすぐ調子乗つて心許すのに。

「とりあえずヨギボーさんが心配してるような事はないから安心してください」

「ヨヨコよー！」

「きくり姐さんもここがホームって言ってるし、何だかんだ新宿FOLTがあの人居場所だと思うんでもっとヒヨコさんが構ってやればいいんですよ。もちろん甘やかすんじゃないかもっと対等にですけど」

「ヨヨコよー！」

何でこんな面白いのに友達できないんだろうこの人。ツツコミもできるし不思議でならないんだが？

多分こういう人なんだって理解される前に向こうから離れてしまいか他人を寄せ付けないのが原因なんだろうけど。

それできくり姐さんの悪癖に騙されてるの不憫すぎん？

今までまともに関わってくれる人もいなかったのかな。下手すると後藤さんもこうなってた可能性があったとか？ いや、あの子は優しい子だからこんな当たりキツイ話し方とか絶対しないわな。

「フンツ、まあ貴方の事については大体分かったわ。今日のところは見逃してあげる」
リアルで見逃してやるとかそんなセリフ言う人本当にいるんだな。

「でも次はないからね！ 私の方が姐さんと仲良いんだからもう調子に乗らないように！」

「乗った覚えはないんだけどなあ」

レモンソーダを一口飲む。適度な酸っぱさと甘みが口に広がり、冷たい炭酸が刺激してくれる。美味ええ。

「まあその話はどういいわよ。……それにしても貴方、結束バンドの何なの？ メンバーではないんですよ。マネージャーって訳でもなさそうだし」

「きくり姐さんから聞いてるんじゃないんですか？」

「詳しくは聞いてないもの。きよ、興味もないからね！」

「はあ」

「じゃあ聞かなくてもよくない？ とか聞いたらまたツンツンしそうだよなあ。」

「何なんでしょうね。一応結束バンドの手伝いとか、あの人達を支える立場にいますしか言えないです」

「なにそれ。そんな中途半端な立ち位置にいて何がしたいの」

うーん、耳が痛いな。何がしたい、か。

結局深く考えないまま今も結束バンドを支えるとか虹夏さんの夢を手伝うとか、そういう曖昧なポジションに収まったまま俺はあの人達の側にいるけど、俺の立ち位置は依然不透明のままだ。

メンバーでもなければマネージャーみたいなものでもない。傍から見ればただ何となくいつも一緒にいるのは見るけど演奏はしない謎の人になっている。

確固たる理由が自分でも見付けられないままなのだ。だけど、それでも何がしたいという問いに対して答える事があるとするとするならば。

「結束バンドみんなの笑顔が見たいから、とか？」

「はあ？ そんなの勝手に喋って笑い合ってたらいだけじゃない」

おいそういうとこだぞ。

「それもそうっちゃそうなんですけどね。ライブが成功してみんなで笑い合う、休憩時間とかに他愛ない話をして笑い合う、何か嬉しい事があって喜び合う。あの人達のそういう顔が見れるなら、俺は何だってできるししてやるつもりです」

「変なの。結局貴方のポジションは曖昧なままじゃない。それで将来もしバンドが売れたところで、そこに清水優人の居場所はないかもしれないのよ」

「分かってますよ」

店長にも同じような事を言われた記憶がある。

それでいて、俺の返答は今も昔も変わらない。

「俺は望まれてここにいます」

あの人達が言ってくれたからバイトを辞める事もなく、俺はみんなの側にいる事ができる。

近くで後藤さんを見守る事ができる。

「だから色々な夢を叶えて、俺が手伝える事や支える必要なんて一つもなくなつて望まれる事がなくなつた暁には、俺は喜んで結束バンドから去ります」

その時は、きつともう俺がいなくても後藤さんは結束バンドのみんなと一緒にやつていけるようになっていくだろうから。

適当にスターリーで働くか音楽系の仕事に就く事も視野には入れている。

まあ、今のところはみんな俺を何かしらの形で養おうとしてるみたいだけど。

それは男としてどうなんだ……。まあまだ深く考える必要はないかな。いうて高ーだし。

「……思った以上にぶっ飛んだ考え方してるのね」

「褒めてます?」

「半分は」

もう半分はどうなんだよおい。

「つたく、本当ならここで貴方をこてんぱんに言いくるめて姐さんにちよつかいかけないようにするつもりだったのに、何だか拍子抜けだわ。思ったよりも悪い人でもなさそうだし」

「こっちはヨポポさんが睨んでくるから逃げようとしてたんですけどね」

「ヨヨコよ! その流れいつまで続くの!?!」

「ほら、ボケとツツコミって仲良くなるためにもってこいって言うじゃないですか。知らんけど」

「えっ、そ、そうなの……!?! これをしてれば仲良くなれるの!?! ふ、ふくん……貴方、私と仲良くなりたかったんだ……」

大丈夫かこの人。

人間関係築くのほんと下手そうだな。

「というかこの人の目を見てると何だか違和感がある。
何だ……? もうちよつと近くで見ないと分かりづらいな。」

「えっ? な、なにっ? 何で急に近寄ってきてるの!? 顔近い! な、仲良くって、も
しかしてそういう意」

「あー、目付き悪いと思って勘違いしてたけど、ヨっさん寝不足なのか。目の下に軽い隈
できてますよ」

「……………え? ……あつ、あゝゝゝうん、明日ライブだから……………あんまり寝れなくて
……………というか寝てなくて……………。というかヨッさんだけはやめて!」

「徹夜かよ……………。なるほどね、だから目がキマツて睨んでるように見えてたのか」
「貴方を見てた時は睨んでたわよ」

「ほんとそういうところだぞ」

「確か俺の鞆に買ったばっかのやつがあったような。
ガサゴソと自分のトートバッグを見ると、

「お、あったあった。はいこれ」

「? なにこれ」

「アイマスク。通学時間の問題でたまに授業中寝る時とか使うんだ。結構熟睡できるからオススメだよ。ちなみに使い捨てだから安心してくれ。まあないよりはマシでしょ。女の子なんだからちゃんと寝た方がいいぞ」

「あ、えつと……ありがと……」

うん、これで問題解決。

俺も安心してライブが見れるつてもんだ。……ん？ ライブ？

「あ、あの……もし貴方がどうしてもって言うなら……わ、私のロインID教えてあげてもいい」

「うわっ!? もうライブ一分前じゃねえか!? 絶対人で埋まってるだろうし合流できんのかこれ!? 悪いヨホホさんっ、俺もう行くわ! またな!」

「いわよ……つてちよ、ええ!? ねえ! わ、私のロイ」

ヨボボさんの声も聞かずにメインステージの方に移動する。すると案の定、フロアは人で埋め尽くされていた。

「……これ合流できないやつじゃん」

照明も暗くなり、観客の歓声が湧きたつ。

せつかく一緒に楽しみにしてた後藤さんで見れると思つてたのに急なぼっち感が凄
い。何だこの空間の中には確実に友人がいるのに会えないという心細さは。

ちくしよう、大槻さんに付き合つてる時間が長すぎたか……。

おもしれー女だったと同時にめんどくせー女という称号を勝手に進呈しておくとし
よう。

そうこう考えてるうちに、幕が上がった。

きくり姐さんのベースから入り、イライザさんのギターと志麻さんのドラムが後を追
いかけるように音を奏でていく。

……な、何だ？ この音楽……いや、ジャンル？

聴いてると心が変に揺さぶられるというか、少しばかり不安や焦燥感を駆られるよう
な曲調に聴こえる。ああもう、こういう時に後藤さんかりヨウさんがいれば解説とか聞
けるのに！ あとで絶対聞いてやる……。

それにしても、聴いてるとだんだん癖になってくる曲だ。

あまり聴いたことない曲調、主観だがリズムも取りづらそうなのにみんな完璧に演奏
できていて、何よりきくり姐さんが全てを支えているんだとひと目で分かるカリスマ
性。

誰も彼もが目を離せず、演者と観客全てが一体となれる空間。きくり姐さんが客席に

飛び込み、みんながそれを支えているのがまた一体感を演じているように見えた。

これがライブ。これがバンド。これが……音楽……!

自分の手が微かに震えてる事も自覚せず、俺はライブが終わるまでステージに釘付けとなっていた。

「……あれ? ライブ、もう終わつぶえあつ!?」

あまりにも集中して見ていたせい、ライブが終わった事も気付かずに突っ立っていると客の波が押し寄せてきた。

やばいつ、俺がいるのは後方だったから自然と客はこつちに来るんだった!

この流れに逆らえねえ。ていうか逆らったらむしろ危ないか!?

仕方ない、ここは一旦波が落ち着きそうなとこまで行くしかないな……!

と、一度出口付近まで戻された俺はようやく中に戻ってこれた訳なのだが。

その間に揉みくちやにされるわ、落ち着いたと思つたらまたヨヨヨさんと出会って無言でロインふるふるされて友達追加されるわ、それで彼女がふるふる震えながら喜びを

嘸み締めてるのを見てこちらがむしろ泣きそうになるわでボロボロであった。

そして急いで楽屋に戻った俺は、

「え、何この空気。何できくり姐さん正座させられてんの？ 何で壁ちよつとへこんでんの？ 何で若干良い雰囲気なのみんな。……もしかして色々終わった？ 後藤さんの文化祭いやいや期解決しちゃった？」

「したよ」

虹夏さんの抑揚のない声を聞いて、俺は叫ばずにはいられなかった。

「何で!? 本当なら俺もいて心理描写とかこう、良い感じにまとめながらきくり姐さんと一緒に後藤さん諭して問題解決の流れになるはずだったのに！ 大事などこカットされたみたいになってるじゃん！ 俺何もしてないじゃん！ 不在の間に大事なこと解決してんじゃん!?!」

「それより優人くんさ」

「くそう、やはり面倒事に巻き込まれるとロクな事がねえ。こっちはさっきのライブの余韻まだ残ってて後藤さんと一緒に語りたかったのに一人で見てたから不完全燃焼のままなんだよ！ なのに正座してるきくり姐さんのせいで冷めつつあるこの気持ちど

うすりゃいいんだ!？」

「オ、ユウキくん私と一緒にアニメの話しヨク!」

「どこにいたの?」

「……………ふえ?」

あまりにも黒い声がしてそちらを見ると、笑顔を浮かべた虹夏さんが俺を見ていた。おつと……………これはちよつと、俺がやばい状況かもしれぬ?」

「ドリンク受け取りに行くだけなのにそんな時間かかるはずないよね? どこにいたの? 誰といたの?」

「えつとお……………に、虹夏さん? そんな、誰といたのつて……………俺は一人でライブ見てたつて言ったじゃないですかやだなくも〜」

「ライザさん空気読んで。今俺の手を握ってぶんぶん振ってる場合じゃないから。アニメ見ようじゃないから。こんな時でも天然可愛いですねあなた。」

「嘘だよね?」

「?でしよ?」

喜多さん参戦しちゃった。

どうしよう逃げ場ないかな。いつそこから全速力で逃げればワンチャンないかな。ないな。おまけに俺の信用もないな。

「で、誰を引つ掛けてきたの？」

「めちやくちや人聞き悪い言い方してません!？」

「あの、彼の言い分も少しは聞いてあげた方がいいんじゃないや……」

志麻さんナイス!! ナイスアシストですよ!

大人のあなたが言ってくれる事で虹夏さん達も冷静さを取り戻すはず。そうすりや俺にも助かる術が出てくるってもんだ!

「そうですよ! まず俺の言い訳も聞いてく」

「優人くんは何の理由もなくいなくならないし、突然消えた時は大抵女の子絡みなの知ってるんだからね」

「それに言い訳って言った時点で認めたようなものよ優人君」
嫌な汗が止まらない。

人の圧ってこんなにも目に見えるものなんだなー。

「正座」

「え？」

「正座」

有無を言わせないとはこの事か。二人は腕組みしながら既に俺を見下ろそうとして
いる。

くっ……こうなったら最終手段だ。背に腹は代えられねえ！ いつだって俺の味方
をしてくれるのはこの子だけだ。

「後藤さんヘルプ!!」

幼馴染に助けを求めろ。

彼女なら俺を優先してくれるはずなんだ。そう、俺は後藤さんを信じている！ 幼馴染が困ってたらそれを助けるのが幼馴染だもんなあ！

そして、ピンク色の少女は小さく口を開いた。

「ゆうくん……せ、正座して」

「……………はこ」

神は俺を見放した。

「あはは〜！ ゆうきゆんも正座させられてる〜！ 私とお揃いだね〜！」
「何も嬉しくねえ……」

この後、俺はこつてり絞られた。

ヨヨコさんの事は何とか知られずに済んだけど。

49. 見える成長、消える二人

きくり姐さん達とも別れ、無事俺も解放されて結束バンドのみんなと下北まで戻りレストランのデナサンにやってきた。

イライザさんとはまたロインでアニメの話をしようと誘われ、志麻さんにはきくり姐さんがスターリーでやらかした時は連絡してとロインを交換し、きくり姐さんには壁の修繕費返済を頑張れと伝えておいた。

ああやってツケが増えていくんだな。そりやお金なんて持つてる訳もないか。そしてここに来るまでに楽屋であつた事を後藤さんから全て聞く事ができた。

あのきくり姐さんが昔陰キャだった事や、普通の人生が嫌だからバンドを始め緊張を解すために酒を飲むようになった事、きくり姐さんの言葉で後藤さんが文化祭ライブ出る事に前向きになった事など。

ひとまずは一歩進んだという感じだ。きくり姐さんが後藤さんの背中を押すためにライブ誘ってくれたんだと分かつてはいたから、そこは感謝しておく事にする。

背中を押すために自分のライブに誘うなんて、俺には絶対できない事だからな。

「優人くん、はいメニュー」

「あつどうも……」

「さっきの説教の後遺症がまだ少し残ってるな。少しやりすぎちゃったか。ちよつとぼつちちゃん化してるし」

虹夏さんからメニューを受け取る手が微かに震えてる。

何なら名前呼ばれた時も少し体がビクツと反応してしまったのだ。ああ、ダメだ。思いつく……虹夏さんは天使、喜多さんは陽キャ、虹夏さんは天使、喜多さんは陽キャ……ケツシテフタリハアクマナンカジャナイ……。

「……ハツ!? よし、もう大丈夫です。お見苦しいところをお見せしました」

「まあ悪いのは優人君だけだね」

喜多さん、これ以上掘り返すのはやめるんだ。足のつま先から冷たくなってくから俺。

ちなみに五人向かい合って座れるソファ席で奥から俺、後藤さん、喜多さん、向かいにリョウさん、虹夏さんというポジションだ。

メニユーを広げて後藤さんや喜多さんにも見えるよう少し手を突き出す。

ライブ終わりはもう夜だし、ついでに近場で晩ご飯を食べていこうという流れからここにやってきた。

「私はパスタにしようかしら」

「後藤さんはハンバーグ系が好きだからそっちにするんだろ？」

「う、うん、そのつもり」

「帰りも二時間弱かかるし、多少歩くから俺もガッツリ肉系にしとくかね」

帰宅時間が長いというのも中々考え物だ。

各々が「グ〜」好きな食べ物「グ〜」をタブレットで頼み、しばらく「グ〜」経つと注文の品がやってき「グ〜」た。

「よお〜し、ライブ「グ〜」見てテンション上がったし、晩ご飯食べ「グ〜」ながら文化祭のセトリ決め「グ〜」ちやおつか！」

「なるほど、話して「グ〜」おきたい事もあるって「グ〜」セトリ決めるからだっただけすね」

「そういう事！」「グ〜」喜多ちゃんの話だとひとバンド持ち時間「グ〜」は15分、だ

から大体3曲くらい「グ〜」かなあ」

まあ「グ〜」大体そんなもんか。結束バンドの曲数自体多い訳「グ〜」でもないし、ちょうど良いっちゃ良いな。

今の結束バンド「グ〜」のレベルだと学校の軽音部よりは上いつてるだろ「グ〜」うし、そういう意味でも宣伝になるかも「グ〜」しれない。

……それにしても、何かうるさくね？

いや正体は目の前にいるから分かるんだだけ「グ〜」ってだからうるせえなっ！

「あ、あの……リヨウ先輩にご飯分けてあげるのはダメなんですか……？」

「ダメ！ 優人くんにずっとお金返してなかったんだから少しは痛い目みるべき！」

さつきからリヨウさんの腹の虫が一生鳴いてる件について。

多分虹夏さんのドリア、喜多さんのパスタ、おまけに頼んだポテト、俺のてりたまハンバーグに後藤さんのチーズハンバーグの匂いが余計そうさせているんだろう。

そう、簡単に言えばリヨウさんはお金がなくて何も頼めなかったのである。

めちやくちや自業自得。反省して。お金の使い方もっと考えて。せめて小銭は持つとけ。モノローグにまで侵入してくんな。反省しろ。

「郁代く優人く……」

「うう……」

「よく貸してもらった俺に助けを求めれるな」

目をウルウルさせていてもこういうところでのメンタルは凶太いままだ。

絶対その場の反省でしかないぞ。お金借りるヤツは大体そうなんだってドラマか何かで見たんも。明日になれば忘れてるぞこれ。

虹夏さんが3Bがどうだのダメベーシストがああだのと言ってる間に俺は自分の料理を食べていく。

「お、後藤さんお互いのハンバーガー一切れずつ交換しようぜ。ちよつとチーズの方も食べてみたい」

「あつうん、いいよ」

「ほれ、割れた黄身のとこたつぷり乗せといてやるよ」

「えつ、あ、ありがと。ふへへ……」

食べ物的事になると割と普通に笑うのに、何でドリンク手渡す時とか誰かと話す時はキモい笑いになるんだろ。まあ緊張だろうな。

「もう絶対人にお金借りません」

「言ったね？　じゃあこれだけあげる」

そう言つて虹夏さんが取り皿に入れて渡したのは、一本のポテトであった。

oh. Potato.

「虹夏優しい……好き……」

「ちよつとガチで感謝されると胸が痛むじゃん！　もうたくさん食え！」

「引つ掛かつてます。ダメベーストに引つ掛けられてますよ虹夏さん」

リヨウさんに厳しいのか甘いのかよく分からん時あるなこの人……。

何だかんだダメベーストを甘やかすダメ彼女みたいになつてる。将来苦労しそうだ。

結局その後は俺のハンバーグも三分の一ほど分けてやる事でうるさい腹の虫はどこかへ消え去つて行つた。

さつきまで反省してた風の顔だったのに今は満足そうに天を見上げている。メシの顔しやがって……。

そんなこんなで俺達も晩飯を平らげて少しテーブルの上を片してから本題に入る事となつた。

「セトリなら決めてある」

横に添えてある紙ナプキンを一枚取り、ペンを片手にリヨウさんは書きだした。

「文化祭に出るかもって言われた時からずっと考えてたけど、今日のシクハツクのライブを見て色々固まった」

「とうとう?」

「一曲目は掴みが大事。だから初めて聴く人でもノれそうな比較的明るい曲でいく」

紙ナプキンの上にはMCが1分、そしてその下には一曲目『忘れてやらない』が書かれていた。

今ある結束バンドの曲の中ではまだ曲調も明るくて、俺も初めて聴いた時には初見の人にも受けやすいかもと印象を受けた曲だ。

「二曲目は『星座になれたら』で。全体的に曲調は落ち着いてはいるけど、この曲のイントロでまず聴いてる人の心を離さないようにする。それにこの曲は特に郁代の歌声が光るから惹き込めるはず。あとは何かエモいから」

おい最後。いや気持ちはめっちゃ分かるけどさ。

「それが終わったらMCを少し入れて、ラストに『あのバンド』で終わろう」

「あれ、『ギターと孤独と蒼い惑星』じゃないんだ？」

「それも良いと思っただけど、これは郁代とぼっちの文化祭だから。ぼっち、初ライブで『あのバンド』に入る直前にやったアドリブギターソロ、あれまだ覚えてる？」

「えっ？ あっはい、一応は……」

ほんの少しだけリョウさんの口角が上がった気がした。

「正直……私はぼっちのギターソロを見た時、痺れた」

それはバンドの中でもひと際楽器隊としてレベルが高いリョウさんからの、最大の称賛だったかもしれない。

「だから文化祭でもぼっちのソロから入ろう。最後の最後に一番バンドらしい音楽をして、見に来た人みんな虜にしてやればいい」

「おお、いいねそれ！ 一気に結束バンドのファン獲得って訳だ！」

「俺も賛成です。やっぱ音楽に関してだけはリョウさん頼りになりますね」

「私の良いところはもつとある」

「例えば？」

「顔」

こいつ、自分の武器をしつかり理解してやがる……。

俺が唯一反論できないとこを持つてくるなんて卑怯だぞ！ あと顔が良くても頼りになるのとはまた違うんだからね！

ふふんつと勝ち誇つたような笑みを浮かべてから、何かを思い出したようにリヨウさんは後藤さんへと顔を向け、

「あと、二曲目にもぼっちのギターソロを入れる」

「えっ？」

「この曲なら郁代とぼっちの見せ場、同時に見せる事ができるから」

「ギターソロが、二回……」

「ぼっちならできると思うんだけど」

「あつうつ、頑張ります……！」

リヨウさんは後藤さんのギターソロを見てある程度実力を見抜いてるのか？

確かにリヨウさんほどの人なら分かるのかもしれない。ソロであればそれなりに実力を出せる事に。人に見られてる事でまだデバフはかかるけど。

「あ、でも文化祭で全部オリジナルって、ちょっと攻めすぎな気も……」

「うーん、コピー曲の方が盛り上がると思うけど、あたし達は結束バンドの曲を聴いてほしいからねえ。強気な姿勢でいこう！」

「そうだけ喜多さん。それにコピー曲なんて軽音部がほとんど流行りものやってくるだろうし、被る心配もないオリジナルの方が安心できるだろ。あと単純にコピー曲覚える時間がない」

「あ、確かにそうね……」

ちゃんと練習できているオリジナル曲の方がクオリティーも安定してるし、本番までの間にもっと磨く事だってできる。

「というか文化祭なんてよっぽどの事がない限りは盛り上がるだろ。喜多さんは一年の中じゃ人気者だし、それだけで適当言ったりや勝手に客も笑ってくれるんじゃないか？」

「さすがにそんな上手いくかしら？」

「いくいく。だって俺らの学校自由でノリ良いバカばかりじゃん。主に俺のクラスだけ」

「そういえばそうだったわ……」

おお、喜多さんにまでバカ認定されてるぞクラスの男子共。
良かったな、美少女から見下されるなんてさぞご褒美でしょうよ。

「まれに例外はあるけど。まあ仮にスベっても四人いるし痛みは四等分。何なら優人にステージが上がってもらって一発芸させるのもあり」

「いきなり巻き込んでくるのやめてくれませんか？」

「たまに人間辞めるんだし何か一つはできるでしょ」

「まあ、角生やしたり鬼の顔にはなれますけど」

「芸の域超えてもはや怖いよ!?!」

「最近髪逆立たせてスーパマサルじん優人になれないか練習中です」

「もう修行じゃんそれ」

江の島の時にヤムチャったからワンチャンなれるかと思つて……。

セトリも決まつて適当に食後のお喋りをしている最中。

いつも通り会話に入れないから黙っている後藤さんを見ると、少し俯いていた。長い前髪の僅かな隙間から見える瞳は、不安や焦燥よりももつと別の何かを表しているように見える。

そして、そんな彼女を見つめるもう一人の少女がいた。

虹夏さん達と解散し、後藤さんと喜多さんと駅まで一緒に歩いている時。不意に喜多さんが立ち止まった。

「? き、喜多さん?」

「……………、後藤さんっ」

両手で鞆をギュツと握り締める彼女の姿は、何かを言おうにも中々言い出せないもどかしさを感じさせた。

ただ、俺には何となく、喜多さんが何を言おうとしているのか察知できた。先ほど後藤さんを心配そうに見ていたから分かる。

「俺、先行つとこうか?」

「……………優人君も、ここにいて。ちゃんと言うから……………」

「……あーよ」

まるで答え合わせ。

喜多さんとシーパラダイスへ行った時の会話を思い出す。おそらく今しか機会はないと思っただろう。

なら彼女の選択を尊重するべきだ。

だけど話の中心点にいるのはあくまで喜多さんと後藤さん。だから俺は近くの壁にもたれかかる事にした。

何の事か分からずあたふたしている後藤さんへ、重く塞がっていた喜多さんの口がようやく開く。

「……あつ、あのね……」

一瞬声が詰まりそうになりながらも意を決したように彼女は続けた。

「私……後藤さんが文化祭ステージの申込用紙を捨てたって分かったの！ でも、わざと出したの……後藤さんが悩みに悩んで選んだ選択を無視して、私の身勝手な理由だけでみんなを巻き込んで……後藤さんの気持ちも考えないままここまで来ちゃった……だから……」

多分、罪悪感自体はずっと残っていたんだろう。

俺に打ち明けてくれたあの時も、今日に至るまでずっと。

たまにぶつ飛んだ行動に出る彼女ではあるけど、何だかんだ真面目で優しく、だからこそ奥底にあった罪悪感がずっと喜多さんの心をチクチクと蝕んでいったのだ。

割かしすんなりと俺に打ち明けられたのは、おそらく俺自体は何も被害を被っていないから。喜多さんの思う罪悪感の対象にちゃんと含まれていなかったから、彼女は俺に言ってくれたんだろう。

そりゃあ張本人に謝るなんて勇気がいるに決まってるよな。

本人に言われてる訳でもないのに気にするなど言われて本当に気にしないのは、それこそ薄情な人間になってしまう。本人に謝るまでちゃんと痛みを理解し続け、機会を見つけて勇気を振り絞った彼女は本当に偉い。

「嘘吐いて……本当にごめんなさい！」

喜多さんが頭を下げた。人通りもあるこんな道端で。

自分達だけしかいない空間ではなく、周囲に人がいる場所で頭を下げるのは彼女なりの誠意、あるいは戒めか。人が多い訳ではないから注目されすぎずに後藤さんも変にテンパっていないのが幸いだ。

過去の清算、とまではいれないが、とりあえず喜多さんはちゃんと謝る事ができた。あとは後藤さんが何を言うかだが、あの顔を見るに俺が出しゃばる必要なんてどこにもなさそうだな。

杞憂は杞憂に終わり、今度は後藤さんが口を開く番だった。

「あつありがとうございます……」

「……………え？」

その言葉を聞いて、自然と俺の口角も上がっていた。

「さ、最初はとうしようって思ってたんですけど、今はちょっと楽しみっていうか……」

喜多さんも顔を上げていく。

お互いの顔が見合わさる。

「そ、それも喜多さんが用紙を出してくれたからで、それがなかったら今頃きつと後悔してたかもしれないわ。ふつ、不安な気持ちもあるけど……ギターソロを貰えた事がそれ以上に嬉しかったんです」

ああ、自分の言葉だけでここまで言えるようになったんだな。

「だから……ありがとう」

やっぱり、心配する事なんて一つもなかった。

自然と笑みを誰かに送れるようになるなんて今まで思いもしなかったが、彼女も少しずつ成長している証拠か。

「……後藤さん！ 私、もつともつと練習頑張るから……だから文化祭ライブ、絶対成功させましょうね!!」

「……あつ、はい……!」

何かを抑えられなくなったのか、喜多さんが後藤さんの手を掴んで声を張り上げていた。

あの後藤さんの言葉が、人を感化させた瞬間だ。

ペアと打って変わって明るい顔になった喜多さんがこちらを見てくる。

俺は静かに少しだけ頷く動作をしてから、二人に話しかけた。

「んじゃその自販機でジュースでも買ってこようぜ。奢るよ」

何故だか全員ミルクティーだった。

俺は好きだからそれにしたけど、後藤さんとかコーラじゃなくて良かったんだろうか。

まあたまには違うものを飲みたくなる気持ちも分かる。

ちなみに今日の俺は午後ウィーのミルクティーではなく紅茶屋然やねんにした。これもまた美味しい。

満足そうに飲みながら少し前を歩く後藤さんと喜多さん。

俺から見てももう仲睦まじい姿を見て良かったな後藤さん……という気持ちが溢れてくる。バンド仲間であり友達って、ある意味後藤さんが求めていたものだもんなあ。しかも同級生だし。

そんな事を思っていると、喜多さんが俺の隣まで下がってきた。

「どうしたんだ？」

「優人君にもちちゃんとお礼を言いたくてね」

「お礼？ 俺何かしたっけ？」

ただ見てただけなんですが……。

「ちゃんと見守ってくれてたから」

「物は言いようですなあ」

「優人君がいてくれたから私も勇気を出せたのよ？　あの時の言葉も背中を押してくれ
たしね」

「大袈裟だよ。結局最後に動いたのは喜多さん本人の意思だ。そこに俺は何も関与して
ねえよ」

「ふふっ、またそんな事言ってる」

「事実だろ？」

そう、今回は本当に何もしていない。だからただ見ているだけに過ぎなかった。

頑張ったのは喜多さんと後藤さんだ。

小さく笑って喜多さんは前を見る。

どうやら今話した事はそんなに大切な事じゃなかったらしい。

彼女はその後藤さんに聞こえないようボリュームを抑えながら、

「優人君」

「ん？」

「私、リョウ先輩にもギターの練習見てもらう事にする」

「……」

喜多さんは前を見据えていた。

ただ前方を見ているだけのようには見えない。見据えるべきものを分かっけていて、そこに一点集中している。

「後藤さんもギターソロとか自分の練習があるし、私は私でもっと練習して後藤さんを支えられるようになりたいから。変わりたいの」

「……そうか」

やはり喜多さんは眩しい。どこまでも自分のために、誰かのために変わりたいから努力する。

その惜しまない精神は、間違はなく称賛に値するだろう。実力的に自分が一番下だと分かっけていて、その上ボーカルも兼任しているのだ。

プレッシャーだって本当は凄いはずなのに、可能な限りそれを表に出さずひたむきに上を目指そうとする喜多さんは、ただただ凄い。

だから実感する。結束バンドは、まだまだ上に行けると。

ともすれば、後藤さんももっと成長できる。

「……後藤さん、結局怒ってくれなかったわね」

「だから前も言ったろ。後藤さんはあんな事で怒るような子じゃねえって」

「うん……」

未だに後藤さんが怒ったとこなんて見た事ないしな。というか怒れるのだろうか。それはそれでちよつと見てみたい気もするけど。

「そうよね。後藤さんは、そういう子だもんね」

「ああ」

こちらの様子をおどおどしながら気取られないように伺いつつもバレバレな彼女を見て微笑む。

全方位どこから見ても小心者で、猫背で、陰気で、俯きがちで、何かあればすぐ消えてしまいそうで、小動物みたいで、そのくせ誰よりも優しく、頑張り屋で、常に周りを見ていて、気遣いもできて、人一倍何かになりたいと願っている少女。

あの小さな背中を守っていくと決めたあの日。

そこから彼女は確かに一歩ずつ前に進んでいる。

「不器用で空回りしがちだけど、本当に誰よりも優しいんだよ。あいつは」

そんな小さな背中が。
今日は少し大きく見えた。

そして文化祭当日。

「ええ〜!?」

秀華高校一年二組の教室で、伊地知虹夏の声が響いた。

「ぼっちゃんと言人くんが消えた〜!?」

50. 文化祭は青春イベントの一つ

10月1日、土曜日。

第31回秀華高校文化祭。通称秀華祭1日目。

結構自由な校風という事もあってか、それは文化祭でも如実に表れていた。

バルーンや横断幕、派手な立て看板や屋台、コスプレに着ぐるみなど、とにかく高校にしては豪華すぎる飾り付けがそこかしこにされており、今日明日の秀華高はいつもと違った姿を見せている。

秀華高の生徒や教師も、外から来る他校の生徒や保護者なども、今日ばかりはみんなお祭り気分で盛り上がる事間違いなしだろう。

わざわざ校内マップまで作っているし、そこにはお化け屋敷や演劇、被り物の売店とかまるでテーマパークのような催し物ばかり書いてあった。

誰もが楽しいと思える一日を過ごせる。秀華高ならそんな文化祭ができると思ひ込みなまで作り上げた集大成。

早くも他校の生徒などがたくさん来訪し繁盛しているのが廊下から少し見えた。

そう、後ろから追いかけてくるクラスの男子共と捕まったら最後のリアル鬼ごっこなうなのだ。

ただし俺以外全員が鬼というまさに鬼畜のデスゲームである。

「二人だけ女子グループと文化祭を回ろうなんざ万死に値するツ!! よって問答無用で死刑!!」

「だから手伝ってるバンドの人達が遊びに来るから案内するだけって何度も言っただろ!?!」

「案内||遊びまわる確定だろうがカス! 絶対殺す! 死ね! そして死ね! ついでに死ね! あとなんか死ね! あー、えつとお……死ねえ!!」

「語彙力ねえなら黙ってろたなカスウ!!」

暴言吐かれまくりの俺は絶賛誰もいない校舎内を走り回っていた。この前よりも人数は少ないが、それでもクラスの男子半数以上はいる。

せつかく虹夏さん達に案内するって言ったのに! これじゃ一生文化祭見て回れねえじゃん!

それもこれも喜多さんが直前に、

『優人君っ、結束バンドのみんなと文化祭見て回るの楽しみね！ 私ったらずっとそわそわしちゃってるわ！』

《絶許ツツツツ!!》

なんて言うからもうすぐさま教室を飛び出るしかなかった。

あの後何度も逃げながら説明してるのにあいつら聞く耳持たねえしっ。

「大人しく捕まって殺されろお!!」

「いいや生温いッ！ 散々黽つてから体育館でパンツ一丁のまま吊上げて燃やすべきだー!」

「そんなのは甘い! パンツ一丁のまま足を縛って校舎内を市中引き回しの刑に処してから屋上から突き落とすべきだ!」

「そんなんで死ぬようなヤツじゃねえよあいつは! まずはパンツ一丁にしてからクレープ屋の生クリームパクってヤツの体にクリームを盛り付けバンド仲間の前に晒し社会的に殺す! そして……物理的に殺す!!」

あいつらとにかく俺をパンツ一丁にして殺す事しか考えてねえな……。

しかしどうする。もう虹夏さん達も来てるだろうし、このままじゃ埒が明かない。逃げ続けても体力勝負で全員運動部のあいつらに勝てる見込みもねえし……。

この前みたいにいっそ玉砕覚悟で殴り込むか？

……いや、負けてパンツ一丁にされるのはさすがに嫌だな。さて、どうしたもんか。

何か良い案がないか考えていると、およそ十メートル先にある曲がり角の階段から突然誰かが飛び出てきた。

まさか知らないうちに挟み撃ちされてたかとも思ったが、その姿を見てそれは無いとすぐに判断する。

だって、それはメイド服を着ていたから。

だって、それはピンク髪の子だったから。

だって、十メートル以内で気付いたから。

だって、見間違えるはずがなかったから。

少女は俯きながら前を見ずに走っているせいか、俺に気付かないまますれ違った。

あの格好を見るに、おそらく怖くなつて逃げ出してきたんだろうと思う。おおかたトイレに行くとか？言つてそのまま誰もいない校舎に來たんだろう。

でもつてすれ違った彼女を放つておける訳もなかった。

何せ俺とすれ違ったという事はだ。自然と俺の後ろにいる獣共の視界にも彼女が映るといふ事になる。

女子に飢えた野獣がメイド服を着た女の子なんて見てしまったが最後、どんな行動を

とるか分かったものではない。

そして案の定、ヤツらはすれ違っていった少女に反応した。

「メイド服ツ!!」

「癒しの象徴!!」

「奉仕という名のぐへへ!!」

「万歳ツ! メイド万歳!!」

「不肖この田中、あのメイド少女に声をかけてきま」

猿共が振り返って走っていくメイドに見惚れている。

俺は即座に集団の方へと逆走していき、掴みやすい坊主頭を後ろから片手で掴み、

「はいレッドカード即刻退場オオオおおおおおおおおおおお!!」

カスの顔を勢いよく床に叩き付けてやった。

《田中アアアあああああああああああああああああああつ!!》

「欲望丸出しのバカ共が。テメエらの相手は俺だろ間違えてんじやねえ!」

「おのれ清水う……! やはりこの男は生かしておけん! 八つ裂きにしてくれるわあ

!!

「おい田中また息してないぞ」

「ほっとけ！ 最優先は清水だ!!」

さて、注目がまた俺に集まったのはいいけど、結局どうするかは決めてないままだ。とりあえずもつかい逃げながら考えるしかな——、

「あれは……」

逃げようとして振り返る瞬間、廊下の窓の外。

文化祭で賑わっている喧騒の中に、それはいた。今の俺にとっては全てを覆す逆転の一手が。

俺は窓を開けた。

「おいお前ら、俺なんかと鬼ごっこを続けててもそつちにメリットはないだろ。どうせならもつと有意義な事をしたらどうだ？」

「窓を開けたと思つたら何を言っている？ 諦めて二階から飛び降りるつもりか？」

「そうじゃない」

まだ何も理解していないヤツらのために、俺は外のある一点を指差した。

「あれを見る。うちのクラスのサッカー部期待の新人エース、本田が他校の女生徒をナンパしてるぞー！」

「何い!？」

「あいつ、珍しく清水抹殺作戦に乗ってこないと思つたらあんな堂々と……!」

「抜け駆けしやがってええええええええええええええええ!!」

予想通り喰い付いてくれた。

「裏切者は即刻抹殺対象だっけか。ならまずはあいつをやらなきやだよなあ!」

「ターゲツト変更! 現行犯で今すぐ本田を潰せえ!! その後は俺達も乗っかって他校の女の子と遊ぶぞお!!」

《きやつほおおおおおおう!!》

バカがバカな方向に転換していった。

なるほど、ナンパ目的があるから他の男子は追っかけてこなかったんだな。少しは考える頭があつたか。

逆に今まで俺を追いかけたこいつらはマジでただのバカという事になるけど。豹変してもうどっかに行つたし。とりあえずは助かって良かった。

「……さて」

少し息を整えてから、俺は外へと目を向ける。

「俺も本田のクソ野郎を潰しにいきますかね」

身代わりで犠牲になってもらった事に一瞬だけ感謝し、あとは殺意へと変更する。

そう、勘違いしてもらっては困るが、俺は俺でクラスの男子がリア充になるのを許せない。こんな時だけ俺を追っかけてこないからって、俺が許すと思つたら大間違いだ。

憎いものは憎い。

リア充死すべし慈悲はない。

「ナンパなんてさせるかよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!」

「それで他の男子と混ざってサッカー部の子をボッコボコにしようとしてたと」

「はい」

「あたし達を案内してくれるって言うてたのに、忘れたまま校舎内全力ダッシュしてたと」

「はい」

「何か言い訳は？」

「足痺れてきたんで正座崩してもよろしいでしょうか」

「リヨウ、喜多ちゃん」

「了解っ」

「うぐうううおおおおおおおお足があああああああああああああああああああああああああ
ああああ!?!」

リヨウさんと喜多さんに足をしっかりと刺激され床をのたうち回る俺。

それを見下ろす虹夏さんと後藤さん。何か俺、今すっげえダサくない？

実はあの後、本田を屠るために仕方なく生徒と客もいる廊下を走り抜けていたら後藤さんを探し当てたポロポロの虹夏さん達に見つかり、階段の踊り場でまた正座させられていたのです。

最近こんな事ばかりだ。俺が何をしたというんだろう。悪いのは本田なのに。足の痺れでちよつと涙目になりながら、

「……あれ、そういや何で虹夏さん達ボロボロなんです？ そつちも一戦交えてきたとか？」

「優人くんと一緒にしないで。こつちは喜多博士の指示通り、ぼつちちゃん探すためにゴミ箱とかタンクの中探しに行つてたんだから！」

そりゃあご苦労なことだ。

後藤さんの事だからナメクジがいそうな暗いところにいたんだろうけど。さつきすれ違つた時も暗いとこ探してたんだろうなあ。

「とにかく、これでやつと全員揃つたしぼつちちゃんをクラスに連れ戻すついでに文化祭の出し物見て回ろう〜！」

よほど楽しみなのか虹夏さんのアホ毛がブンブン回っている。あれで大体感情読めるの便利だな。

どこから行くか校内マップを見ている虹夏さん達を見ながら、俺は隣にいる後藤さんに話しかけた。

「ちゃんと文化祭見て回るの初めてだな」

「……」

「で、自分のクラスで接客するのが怖くなって逃げたのか？」

「……」

「……あの、何で黙ってんですかね……？」

隣から一切返事がない。

チラッと一瞬見てみてもこっちに顔を向けていないから表情も読めなかった。

「……ゆうくんなら、最初に見付けてくれると思ったのに……」

「え……いや、それはこっちにも一応理由あったし、そもそもあいつら後藤さんに声かけようとしたから体張って止めたんだぞ？」

体張ったのはもうそのままの意味で。

「……」

顔が見えなくても大体分かる。

何でちよっと拗ねてんだよ……。喜多さん達が見つけてくれたんだから別にいいで

しよ。

「……あー、じゃああとで何か適当に食いもん奢ってやるから、それでキャラにしてくれ」

「……あつあと、動画半年くらい出せてないからネットの居場所も危うくて……ギターヒーロー死んだんじゃないかとか言われてる……」

「よおーし姫！ 俺が何でも奢ってしんぜよう！ 好きなどこへ行くんだー！」

もちろん忙しいという理由もあるが、動画を出せていないのは俺が編集作業を手伝うと言って色々教えてもらってるからというのが最大の原因となっている。

そんな言われたら俺が全力出すしかないじゃん。言い訳もできないじゃん！

かくして、俺と結束バンドの文化祭見回り編が始まるのだった。

「……何か優人くんぼっちちゃんと目合わせないね。いつもは見てるのに」

「ハハハ、キノセイデスヨ」

5 1. それいけ秀華祭!

「二年二組お化け屋敷〜！ 最後尾はこちらでえ〜す〜！」

まずやってきたのは血まみれナース服の女生徒が宣伝中のお化け屋敷。その名も『幽霊病棟』というらしい。

実際は教室なのに何でお化け屋敷なのか病院設定なのか野暮なこと言うヤツはここにはいない。思っても心に仕舞っておくのが美徳だ。俺はちゃんと仕舞ってる。

「目のハイライトがない……そういうカラーコンタクトでもしてんのか？ 特殊メイクもしてるし完成度すげえな。あとこの学校全体的に顔面偏差値高い女子多くない？ 似合ってるコスプレほど良いもんはないな……」

「出てる、オタクの部分めっちゃ出てるよ優人くん」

「ちよつと引く」

リョウさんに引かれたら普通にお終いだと思うんですけどやめてくれませんか？

男にとつてメイド服やナース服といったコスプレへの潜在的興味（見る側専門）は尽きないものなんですよ。可愛い女の子が可愛いコスプレをする。まさしく大正義つてやつよなあ！

「ぼっちちゃんもメイドのコスプレしてるじゃん。ほら」

「あつ」

「H H H H H A、何を言ってるんですか虹夏さん。堂々と着こなしてる彼女達と自信喪失しながら仕方なく着ている後藤さんとじゃ完成度は高くても可愛さや美しさに天と地の差が出るんですよ!!」

「声張り上げて言うのはまだいいけどさ。じゃあ何でこっちは見ないで目逸らしてんの？」

「いやほら、今日俺寝違えたような気がして。もしくはあの可愛いナース服の女子を目に焼き付けておき首がああああああああああああああああああああ!」

「そんなガン見したら失礼でしょ？」

完璧な理由を言っている最中に喜多さんが俺の顔を持って首ごと力の限り曲げてきた。

嫌な音したんだけど。グギリツとか変な音したんだけど折れてないよね？ ニコニ

コ笑顔でやってくるもんだから最初何が起きたか分からなかった。暗殺者かな。

「まあいいや。実は校内マップ見てからここ気になってき、みんなで入ろうよ!」

「私も賛成です! クラスの友達がもう行って評判とか良いらしいですよ!」

「あ、俺今ので首痛めたからみんなで行ってきていいですよ。外で待ってますから」

「ダメ、みんなで行くんだよ」

くそつ、適当な口実じゃ無理だったか。

つうか虹夏さん手引つ張らないで。子供みたいで恥ずかしいから。いや力強つ、握力も強え、これがいつもドラム叩きまくってる人のパワー……? そのうち骨津拳師のKICK BACKみたいになりそう。

しばらく並び続けると、俺達の番がやってきた。

「では前のお二人から入っていただいて、あとの三名様は少し経ってからお入りくださいねっ」

五人一緒じゃダメだったらしい。

という事で先に虹夏さんと喜多さんが入り、後から俺と後藤さんとリョウさんで入る事になった。しょうがない。ここまで来たからには入るしかないか。

「優人はこういうホラー系大丈夫なの」

「舐めないでください。こちとらいつも気配を消す後藤さん相手にしてるんですよ。それに比べたらお化けを演じてるただの人間なんて存在感の塊。怖いはずありません」

「急によく喋るね」

「どういう意味ですかそれ」

「おおん？」

「では三名様入りま〜す！ どうぞ〜！」

血まみれナースに案内され、三人で中に入る。

教室の中は黒いカーテンや布で覆われ、目を凝らさないと前も見えにくいほど暗闇に満ちていた。

へ〜、雰囲気は意外とそれっぽいな。教室内なのにそういうのを一切感じさせないほど世界観が作られている。

暗い中にも注射器やらメスなど、リアルなおもちや類が散らばっており病院設定を徹底しているようだ。

「ぶふうっ……ぐ、ぐふっ……! さ、さすが優人……優しいところあるぶふうっじゃん
……いいと思うぶはっ!」

この野郎……笑いを堪える気一ミリもねえな……。

「よし、次行くよぼっち。面白くなってきたかも」

「あっはい。ゆうくん……よ、良かったらまだ挿んでいいからね……」

「……は、はぐれねえためだからな」

結局、そのあと教室内は俺の悲鳴ばかり響きながらゴールした。

「外まで優人くんの悲鳴聞こえてたよ」

「優人君怖いのダメだったのね。意外かも」

外で待っていた虹夏さん達と合流し、俺は廊下の窓際で座り込む。

暗いところから一気に明るい場所へ出たせいか目がチカチカするが、気持ちを落ち着かせるのにはちょうどいい。はーしんどっ。

「ぶふっ、優人の悲鳴……最高だった……! ぶふおっ……優人、何ならもう一回入るのもありふへっ」

「やめなさい。んでぼっちちゃんは何でそんな満足気に溶けそうな顔してんの？」

「うへへ、うへ、うえへへ……いやあ、ゆ、ゆうくんが珍しく私にくつついて頼りにしてくれたのが嬉しくて、つい……ふへへ」

あ、目が慣れてきた。

ついでに気分も落ち着いてきたっぽい。けどそのせいで痴態を見られた羞恥心が俺を襲ってくる！ やめろ、よりによつてリョウさんに見られるのだけは避けたかったのに！！

「あれ？ でも優人くんこの前ぼっちちゃん家行った時、ぼっちちゃんの部屋で怪奇現象っぽい事起きてても全然動じなかったよね？」

「ホラー系って言ってもじわじわ来るのとかは大丈夫なんですよ。来るタイミング大体分かるし。ただいきなり飛び出てくるのかそういうドッキリ系がどうも苦手みたいで……ほら、ああいうのって突然出てきたら対処できないから……。ちなみに後藤さん関連なら全部平気です。ほぼ全て慣れてるんで」

「はえ、そういう事だったんだ」

「優人君はドッキリ系のホラーに弱い、と」

おい喜多さん、何をメモしている？ まさかいつか俺にそういうの仕掛けてくるん

じゃないだろうな。

やめろよ、シヨックで引きこもるぞ。後藤さんも巻き込んで引きこもってやるからな
!

「ゆ、ゆうくん……もう一度私と行ったりとか」

「行つてたまるかあ!!」

「だから目合わせて言いなつて」

いやほら、寝違えた可能性あるからちよつと……。

「まあいいや。よーし次行こー!」

切り替え早いつすね。

続いて来たのは三階。三年生がいる階だ。

目の前には三年二組の標識があり、でかでかとたくみクレープと書かれている。巧み
? 匠? どつち?

時間的にもちよつとした腹ごしらえにちようどいいかもしれない。

というか高校の文化祭でクレープとか作れるのか。

「チヨコバナナか……いやでもしよっぱい系もいいなあ」

「両方買って一口ちようだい」

「たかる気満々じゃねえか……。後藤さんはどれにする？ さつきも言った通り今日は俺が奢るから何でもいいぞ」

「あつ、じゃ、じゃあチヨコバナナで」

「りよーかい」

「お、ぼっちちゃんのことチラチラ見始めた」

ちよつと、言い方悪いよそこ。

各々好きなクレープを買って食べ歩きしながら次の場所へ。

今度はミニ屋台など祭りを模した教室へやってきた。

射的や輪投げ、千本引きといった祭りの定番ものが出揃っている。

「ふっ」

「リヨウ先輩さすがです〜！」

「はあー、やるなあ」

リヨウさんが射的で無双しておられる。

食べ物目当てだとほんと容赦というか遠慮がないなこの人。本場の祭りのやつとは違うから商品めつちや倒れていくし……。当分は草よりお菓子食べてそうだ。

千本引きでは。

「いづくよ〜! とりや〜!」

「お〜!」

「虹夏、半分、半分でいいから私に分けてっ」

虹夏さんがお徳用のんまし棒を引き当てていた。そしてリヨウさんがたかっていた。半分って結構な量なんですけど。リヨウだけに……つてね!

「優人君今寒いこと言った?」

「言つてないよ」

普通に心読まないで。

「さて、次は俺がやりますか」

「おつ、優人くんの運を見せてもらおつかなあ!」

目の前の女の子にお金を渡す。

ラインナップに書かれてる商品にはまだでかいのが二つほど残っている。何が残つてるとか丁寧に書いてくれるのはありがたい。

「はい、それではお好きな紐を引つ張つてください！　ハズレはないので必ずいずれかの商品が当たりますよ！」

「男は迷つたら負け……つまりは直感的に決めれば自ずと勝利は掴める。という事でこれだあああああああああ！」

「おおー！」

勢い良く紐を引つ張る。

そして出てきたのは、

「ピロルチョコ一個……ぶふっ」

「笑えよおー！　もうこの際思いつきり笑つてくれよおっ!!」

「落ち着いて優人くん！　むしろラインナップに一つしか入ってないハズレ枠のピロルチョコ当てるのつて逆に凄いとあたしは思うよ！」

「そうよ！　……で良いとこなんて見せなくても優人君はいつもと変わらない優人君だ

から! けどオチとしては最高よ!

「何の慰めにもなつてねえ!」

やつてられるかあ!!

お次は美術部の展示へ。

「ねえこれぼつちちゃんじゃない!」

「うわこわっ」

描かれているのは後藤さんつぼいナニかが壊れた顔をしながら突っ立っているというもの。タイトルは『七不思議』と書かれている。

後藤さんいつからこの学校の七不思議にデビューしたんだろう。人間辞めるという点では合致してるけど。

「あ、優人つぼいのもある」

「なに!?!」

リョウさんの元へ行くと、そこには人間……ヒト……? オニ……? ……的なナニかがあった。

なんか鬼の形相をした二足歩行の生物が廊下を疾走している絵。

「うわっ……これはあ……優人くんだね」

「ええ、優人君ね」

「ゆ、ゆうくんです」

「紛れもなく優人」

「ねえ待ってさすがにそんな満場一致されるのはちよつと納得できない。俺のはもつとマシでしょ？　こんな目ん玉飛び出しそうなくらい怒り狂って走る事なんてないよ俺。化物じゃん」

「でもこんな顔でいられるのって優人くんくらいしかないし」

「「うんうん」」

【悲報】俺氏、結束バンドからまともな人間として見られていなかった件。

こんな事ってある？　しかもタイトルに『もう一つの新七不思議、走る鬼殺し』とか書かれてるし。俺新しい七不思議作っちゃったよどうしよ。

心当たりがあるとすれば、後藤さんが何かやらかした時かクラスの男子と殺りあつた時ぐらいいしか思いだせない。

うん、多分後者だな。詮索されると墓穴掘りそうだし黙ってよう。

あと許可なく俺と後藤さんを勝手に描いたヤツには肖像権やら何やらの侵害で金請求してやろう。

「おお、これが喜多ちゃんと優人くんのクラスの展示物か」

「はい！ 各自でイソスタ映えする場所に行つて最高の映えスポットを撮つてきました！」

「それで当日は楽しんで自由に見回るための口実でもあります」

「もうっ、優人君！」

少なくとも俺とかはそれが目的だったし別に言うくらいは構わんでしょ。

おかげで今こうして自由に動けてる訳だし。

「はえ、でもみんなそんなに写真とか被つてないね。行つてるのって大体下北付近なんでしょ？」

「友人と一緒に رفتたりとかしたみたいですけど、色んな店とか行つてるからそこで各々別に撮つたんでしょね」

見渡せばオシャレなカフェの外観やら見た目が可愛い洋菓子、街並みの景色が見えるスポットに神社など、穴場のスポットに果てにはアニメの聖地巡礼写真まである。

ちなみに写真の下には撮影した本人の一言コメントが添えられており、スポットの場所や食べ物であればメニューの詳細まで、この映えスポット展に来て気になる所や行ってみたいと思つた人向けに店名や簡単な居場所の案内も書かれているのだ。

何気にちゃんと考えられている。抜け目とかもない。

その証拠にここを見に来てる人も結構いるし、地元なのに行つた事ないと言いながらその場で気になつた店を調べてる人もいる。クラスの連中は誰一人としていないけど……。

「……あ、これ優人くと喜多ちゃんの写真じゃん!」

「どうですか! 水族館の写真凄く綺麗だと思いませんか!」

「喜多ちゃんはシーパラダイスに行つたんだ。相変わらず行動力凄いなあ。お、優人くんの写真は海か。……ん?」

「どうしました?」

写真を見ていた虹夏さんが俺の一言コメントを注視している。

何だろう。別に変な事は書いてないはずだけど。『魚とか海とか景色やべえ。横浜シーパラまじパねえ。良ければみんなも行ってみてねえ』ってちよつと陽キャっぽく韻踏みながら書いてみたけど、そんなにおかしかったのかな。

「後藤さん足から溶けてきてるぞ」

おいどういう事だよ何でほんわかした空気がちよつと重くなつてきてるんだよ。

我関せずのリョウウさんはドツポ食ってんじやないよ。最後までチョコたつぷりか。

「ぼっち、メンダコみたいになつてきてる」

「いけないわ！ 後藤さんが元に戻れなくなる前に後藤さんのクラスに行きましょう
！」

「え、後藤さんのクラスってメイド喫茶ですよ？ それって天国か何かか!？」

「優人くん、オタク気分で浮かれるのはいいけど、ぼっちちゃんにも接客してもらうんだ

よっ。」

「……」

さようなら、俺。

52. メイド最高、されど思春期発動

「二年二組のメイド喫茶へようこそ〜!」

「おかえりなさいませ〜ご主人様〜!」

「ここが天界ってやつか……。よおーし、ご主人様いっぱいご奉仕してもらっちゃおっかな〜!」

「優人くん完全に現実逃避してるね」

「後藤さんの方一切見ないですもんね」

さあいよいよやって参りましたメイド喫茶! 男の楽園、男の天国、男のドリームランドお!

アキバなどで経営されているプロメイド喫茶とは違い、高校生が素人ながら僅かな恥じらいを含んだまま接客をしてくれるまさに究極の癒し空間ツ!

しかもここは後藤さんのクラスなので生徒ほぼ全員の顔は把握していますが、女生徒のレベルがとにかく高い!

どこを見ても可愛らしいメイドさんしかない眼福祭りです！ 壁のポスターには明日は執事喫茶と書いてますねえ。今日は女子で明日は男子と交互にやるようですが、明日の執事喫茶はどうでもいいでしょう。今日のメインはメイドさんなのでね！ 目の保養ですなあまつたく！

「あ、そうだ。後藤さん連れてきたわよ！ ほらっ」

「ありがとう喜多ちゃん！ いやあ、後藤さんも戻ってきてくれて良かったよ。無理に着せちゃってごめんね、後藤さ……後藤さん？ なんか口から緑色の液体出てるけど……」

「今色々あって模型と化してるだけだから気にしないで。やっと人型に戻ってきたから」

「人型ってなに!？」

「優人君、後藤さんどうすればいいと思う？」

「適当に外置いときゃいいんじゃないね」

「いつになく優人くんがドライだ……」

模型になつてるなら宣伝係やらせとけばいいんだよ。接客しなくて済むし喋らなくていいんだから後藤さんもそっちのが楽でしょ。

それより今はメイドさん。メイドさんが俺を呼んでいるよ！

「そういえば、えつと……そちらの方は……」

「ああ、この人達は私がやってるバンドの先輩よ。今日は遊びに来てくれたから一緒に回っているとこなの！」

「どもども〜！」

「お腹減った。早く入ろう」

「そうなんですねぇ！ 喜多ちゃんの事、よろしくお願いします！」

「もお、何言ってるの〜！」

メイドと可愛い女の子が戯れているでござる。

拙者、誠に眼福で候。

「それとお……」

「……ん？」

何やら二人のメイドさんが俺の方を見ている。

どうしたんだろう。バンドメンバーじゃないのに何一緒に来てんだオラアみたいな感じかな。ここの教室に入った事はないから俺が一方的に知ってるだけで面識もない

はずだけど。

すると視線に気付いたのか喜多さんが、

「この人は私と同じクラスの人だね」

「知ってるよ」

「え？」

え？

喜多さんと心の中だけどもモッチャった。知られてんの俺？ なして？ ホワイ？

「だって休み時間になったらよく教室の前の引き戸から後藤さんのこと覗いてるし」

「いかにも見てませんよ的なオーラ出してスマホ触ってるけど、めちやくちやバレてるよ。クラスの大半は知ってるかも」

「優人君……」

「うわあ……」

「ぶふっ」

「いやっ見ないでっ！ ちょっと今羞恥心でどうにかなっちやいそうだから！ そんな

可哀想なヤツを見るような目はやめてっ！」

なに、このっ……恥ずかしい、とにかく恥ずかしいっ。

絶対バレてないと思ってたのに大半の人にバレてんの俺。しかも誰を見てるかまで知られてるとかバカじゃん。アホやん。何してんだよ清水優人！

「ぼつちちゃん的事見にいつてる事は江の島の時に聞いてたけど……結構その、アレだよね。優人くん変なところで抜けてるとこあるよね」

「そこ追い打ち禁止い!!」

「えっと、ちなみに優人君のこと、みんなどう思ってた……」

「後藤さんのボディガード？ 保護者？」

「覗き魔？ 不審者？」

あれ、ここって人を地獄に送る冥土喫茶だったっけ。最後とかほぼ犯罪者なんだけど。

おつかしいなく、看板の文字見間違えたかな。あ、何だか目から水が……。

「やばい！ 優人くんまで液体化しそうになってる!？」

「もうっ変なところで精神弱くなるんだから！」

「優人って意外と身近な人以外からは評価低いよね」

「トドメさすな山田ア!! 喜多ちゃん、後でこのクラスの子達に誤解解いといてあげて! さすがに天国と違ってた場所で地獄に送られるのは可哀想だから! あと直前までの記憶消してから蘇生させてね!」

「分かりました! 優人君、ちよつと痛いかもしれないけど許してね。フンツ!!」

目を覚ますと俺はメイド喫茶の中で席にっていた。

「あ、意識戻ったね」

「俺はいつたい……」

「優人君、メイド喫茶に来たのが嬉しくて昇天してたのよ。覚えてない?」

「うっ……言われてみればそうだったかもしれない……」

そうか、俺そんなにメイド喫茶に来たのが嬉しかったんだな……。気絶するほどつてのは自分でもちよつと引くけど。

「……何か、目が合うメイドさんみんな俺に優しい視線送ってくれるんですけど、何なんですかね。……ハッ!? ご主人様に対しての視線と受け取ればあれもまた自然という

「ことか！ やはり徹底して完成度高いなこのメイド喫茶は……恐ろしいぜ」

「(上手く記憶は消せてるようだね)」

「(意識ない間にみんなに事情説明しておおよそ分かってくれたのが良かったですね)」

「そういう後藤さんはどこに……いたわ。外で看板持ちながら宣伝係やってる。」

「微動だにしないからまだ気を失ってるようだ。未熟者め、気絶するなどまだまだだな。」

すると、一人のメイドさんがこちらにやってきた。

「こちらメニューになっております。ご注文お決まりになりましたらお呼びください

ね、ご主人様！」

「ご主人様了解しましたあ！」

「元に戻ったら戻ったで厄介だな……」

誰か今チクチク言葉言った？

「さてさて、メイドさん達が作る最高のメニューはつと」

「………ん？ 廊下の方騒がしくない？」

「何かあったんでしょうか？」

虹夏さん達の言葉に俺も視線を廊下に向ける。

すると壁の上にある窓から天井を擦るようになして進む何かが見えていた。何あれ、ブラシ？

そう思ったのも束の間、それはメイド喫茶の前で止まる。

正確には気絶している後藤さんの前で。

「あ、世紀末的風貌の輩だ」

「ほう、このご時世に珍しい見た目してんなあ」

「何で入れてんの!? とういか優人くん意外と冷静だね!? 普通なら真っ先に助けに行きそうなのに!」

「まずは見に徹そうかなと」

こういう時は一旦冷静になるのが大事なのだ。それに学校だし感情的になって対峙すれば大事になってしまうからだ。

それにしてもあの風貌、北斗の拳のファンか何かか? 全然きららの風貌じゃないぞ。出る作品間違えてますよ。

後藤さんに狙いをつけたのか、世紀末ボーイズ（今命名した）は後藤さんに話しかけ始めた。

「お嬢ちゃーん、看板持ちしてるくらいなら俺らと遊ばない?」

あの世紀末ボーイズ、言うに事欠いて後藤さんをナンパ……だと……!? 見る目は多少あるようだけど正気か!?

てか顔でさえ、後藤さんの数倍あんだけど何したらあんなでかくなるんだ。むしろそっちの方が気になる。

「ぼっちちゃん声かけられてるよ!? いいの行かなくて!」

「優人君!」

「本気でやばかったら行きますけど、ああいうのって大体雰囲気で分かるんですよ。空気の重さとかで。でもって今の雰囲気ならおそらく大丈夫です。まあ見ててください。うちの後藤さんが世紀末ボーイズ如きに後れを取る訳ないんで」

俺の言葉に虹夏さん達が後藤さんの方を見る。

展開はすぐに変わった。

「こ、こいつ俺達のガン飛ばしにビクともしねえ!」

「それなんだ……!?」 口から緑色のナニかが出てるぞ!」

「ナニイ!? な、何だこの液体は……に、人間じゃねえ……! こいつ人間じゃねえぞお!?!」

「化物だ! 化物が変顔で俺達を煽ってやがるんだあ!?!」

「……な、何だ? く、口からナニか出てきて……ぎ、ギター……!? う、うわああああああああああああああああ!!」

「す、すみませんでしたああああああ!!」

世紀末ボーイズが勝手に都合の良い方へ解釈してくれたようでむしろ土下座している。

たかが人間如きが気を失ってる後藤さんに声かけるからこうなるんだよ。意識ない時の彼女はある意味一番無敵なんだぞ。怯えないし人間やめるから常人に相手なんて無理だ。

「ほらね?」

「後藤さんが役に立ってる……?」

「風評被害もちよつとありそうだけど」

それより口からギターって、何を言ってたんだろうあいつら。

「気を取り直してえ、あたし達も何か注文しよつか!」

「すごいや決めてる最中でしたね」

「あつ、私後藤さん呼びますね! おーい、後藤さくん! 注文おねが〜い!」

「なっ」

「んはっ!?!」

チイツ、喜多さんめ……せつかく俺が他のメイドさんに頼もうと思つてたのに何てことしてくれるんだ……。

後藤さんももつと気絶しとけよ! あと世紀末ボーイズ何気に来店してんのね。

「(ぎゅ、ぎゅ)注文は……!?!」

知り合いに声かけられるとすぐ反応しちゃうところ、まさに後藤さんって感じする。

「ん〜とね……むふっ」

何だ、虹夏さんがなんか思い付いたような表情してるんだけど。

嫌な予感しかない。

「てか、それにしてもぼつちちゃんメイド服似合すぎじゃない?」

予感的中である。

「後藤さんはこういう甘い系の服似合いますね〜！」

「あつうっ」

逃げ場は、逃げ場はないか……!?!

「分かるう〜。ジャージ以外の服も着ればいいのに。ね〜優人くん？ 優人くんはぼつちちゃんのみメイド服、似合ってると思わない？」

ほら〜絶対俺に振ってくるって思ってたもーん！

この人たまに意地悪モード入ることあるから警戒してたのに案の定だよ！

「……ははは、そうですねえ。良いと思いますよー」

「の割には後藤さんの方見ないわね」

見たらなんかこう、アレな気がするんで……。

「んもおつ、しやらくさいなあ！ 優人くん、ぼつちちゃんに可愛いの一言も言えないの〜」

「それで後藤さん家で一度どうなったか覚えてないのかアンタは!」

胞子化してネガティブモードになってたじゃん! 元に戻った時めっちゃ顔赤くしてたの覚えてるからな!

「今のぼっちちゃんなら少しは耐性できてるかもしれないじゃん! それに心の準備さえしとけば大丈夫だよきつと。ねっ、ぼっちちゃん」

「あつたつ、多分……」

何でちよつと前向きに頑張ろうとしてんだよそこで。

もしこんなところで胞子になったらここにいる人全員終わるぞ。

そういう事を阻止するために俺はあえて後藤さんを見ないように努力してるつてのに、それを妨害してくるのはダメだと思えます!

「ならこうしよう優人くん」

「……なんですか」

嫌な予感。パート2なんですわが。

「ぼっちちゃんのメイド服の感想をここで言うか、ぼっちちゃんをここで名前呼びする

か決めること！」

「ふつつつぎけんな!! それ俺に一切の得ねえじゃねえか! 横暴だ! 断固拒否する

!!」

「そう言うと思つて一応ゲームを用意したよ」

ゲーム……?」

そのまま虹夏さんはメイド喫茶のメニュー表を開いて俺に見せてきた。

「その名も、『冷食オムライスに美味しくなる呪文かけて誰のが一番美味しく感じるのか
選手権〜!』」

「いやそれ店員にやつてもらおうでしょ!」

それよりメニューに名前だけ変えた同じオムライスしかないし全部冷凍食品という
事にシヨックを隠せないんだが。

メイドさん手作りじゃないのか……。服の予算にほとんど使っちゃったんだろうな
……。

「店員のぼっちちゃんは当然として、優人くんもでしょ。こつちからは喜多ちゃんを出
すよ!」

「私が相手になるわ優人君！」

「何でノリノリなんだよ……」

陽キャつてこういうのにはんとすぐ乗っかってくるよなあ。

「もちろん優人くんが勝った場合の事も考えてるよ」

「……というと？」

「優人くんが勝ったら……あたし達もメイド服着るつてのはどう！ いくつか撮影用にレンタルしてるみたいだし！ ……つていうのは、ちよつと自意識過剰、かな……？」

「きやつほうさつさとオムライス注文しましょう!! 負けても文句は言わせませんからねえ!!」

「ちよろいわね優人君」

何とでも言いな！ これは絶対に負けられない戦いだ。

虹夏さん達にメイド服を着させて合法的に俺の一眼レフで写真撮りまくつてやるからなあ!!

そうして各々頼んだオムライスがやってきた。

ちなみに俺が頼んだのは『愛♡と勇氣☆だけがズツ友出オムライス』だ。マジでただの冷食っばい。

「ルールは簡単だよつ。とにかく美味しくなると思う呪文を唱えるだけ！ プラシーボ効果でも相手に伝わるインパクトが大事だからね！ という訳で……さあ、先攻はぼっちちゃんだ！ それではどうぞ！」

虹夏さんの合図に、もはや拒否権なく強制的に参加となっていた後藤さんが嫌々ながらも仕方なく手でハートの形を作った。

「あつ……ふつふわふわびゅあびゅあみらくるきゅん……オムライスおいしくなれ……へっ」

「うわっ」

ヘドロばくだんみたいなのが出てきたから自分のオムライスの前に腕を置いて死守する。ベチャツとか汚い音なつてたけど大丈夫か。プラシーボ効果云々じゃなくて普通にマズくなつてそう。

審査員の虹夏さんとリョウさんが後藤さんの呪文がかかったオムライスを一口食べる、

「……パスついでる」

「あつ、あくまで冷凍食品なので……」

不評っぽかった。そりゃ紫色の負のオーラしか感じられないもの。無理もない。

呪文は何でもいいとの事だが、後藤さんは割と無難な感じで言ってたな。とりあえず後藤さんがビリなのは確定か。……そもそも後藤さんが勝った場合のご褒美って何だったんだろう。

「後藤さんっ、もつと愛情込めて唱えないとダメよ！ 見ててね、こんな感じで！」

そのまま自然な流れで喜多さんのターンへ。

彼女が指ハートをした途端、まるで背景が変わったかのように辺りがキラキラし始めた。これは……固有結界!? いや違うっ、ニチアサにありそうな変身空間か!?

「ふわふわあく☆ ぴゅあぴゅあく♡ みらくるきゅんツ☆ オムライスさんっ美味し
くなあくれっ♡」

キターンという謎の効果音と共にハートの形をした何かがおムライスへと刺さる。

俺にはもう喜多さんがプリティーでキュアキュアな人にしか見えない。ぷいきゅあくがんばえく。

そして審査員達の評価はというと、

「ケチャップの程よい酸味とソースの甘さが溶け合い温かな家庭を感じる味に変わった!?」

「まろやかっ……!」

めちやくちや好評価だった。嘘でしょ、そんな変わる? 確かにオムライスもちよつと活き活きしてるように見えるけどさあ。いやオムライスが活き活きって何だ。

喜多さんもこちらに向かつてピースしている。勝ちを確信しているようだ。

なるほど、喜多さんはあえて後藤さんの真似をしつつ表現の違いを見せる事で差を見せつけてきたか。

いいだろう。しかし俺もやると決めた以上本気でいかせてもらう。

こちとら三人のメイド服を見られるチャンスがあるんだ。

喜多さんにや悪いがここは勝たせてもらおうぜ!

「呪文なら何だっついていい。オムライスの味が変わるほどのインパクトを与えりやいいだけでしょ。それならこつちだっつとっておきがある! いくぜ!!」

「本気だ……いつになく優人くんが本気だ!」

「けどああいう時って大抵フラグな気がする」

言いたいヤツには言わせておけばいいさ。

伊達に俺だつて後藤さんと張り合うために人間辞めてる訳じゃないつてところを見せてやるよお！

「滲み出す混濁の紋章、不遜なる狂気の器、湧き上がり・否定し・痺れ・瞬き・眠りを妨げる、爬行する鉄の王女、絶えず自壊する泥の人形、結合せよ、反発せよ、地に満ち己の無力を知れ！ 破道の九十・黒棺!!」

そして。

オムライスは衝撃の変化を迎えた。

「オムライス真つ黒になったんだけど。嫌がらせ？」

「焦げてる訳じゃない。けど味は一ミリも変わってない。見た目最悪になっただけ。優人、オチとしても失格」

大不評であった。

？だろ……完全詠唱の黒棺だぞ……それが色変わったただけ……。しかも笑いとしても失格の烙印押されてしまうとか……終わりだ……。

「はい、という訳で一位喜多ちゃん、二位ぼっちちゃん、ビリは優人くんです！ それじゃあさつそくぼっちちゃんのごほ……優人くんの罰ゲームいつてみよ〜！」

「ちよつ、早くないですか!?! もう少し心の準備とか」

「そういうのいらないでえ〜す！ メイド服の感想を言うか名前呼ぶかどつちかな〜？」

完全にこつちに選択権を与えない気だこの人……。

仕方ない、苦渋の決断だがもうそれしか生き残る方法もないか。服の感想なんか言つてしまうとまた後藤さん胞子事件の再来になってしまう。前は部屋を密室にしたから被害も最小で済んだが、ここじゃ下手すると廊下まで広がっちゃう。

それだとこの学校なんかすぐに崩壊してしまうぞ……。

かくなる上は……、

「……な、名前呼びで」

「おお、そつちを選んだか〜！ これは見ものだ〜！」

「これは胸キュン展開確定ですね〜！」

「シャッターチャンス」

好き放題言いやがってこの信号機トリオ……。

「ちやんとぼっちちゃんの事も見てあげるんだよ！」

「分あってますよ！ ……後藤さん、一応言っておくけど、崩壊しないように精神を限界まで保つんだ。いいな、くれぐれも自分を見失うなよ」

「あつえつう、うん……」

「……すう……」

二人して軽く深呼吸する。

目を開け、ゆつくりと後藤さんをちやんと見る。

基本は周囲と似たようなメイド服、カチューシャを付け、首元に黒いリボンもありコスプレ特有の短めのスカート。

なのに他のメイド服と一カ所だけ違うのは胸元だった。後藤さんのメイド服だけ何故か胸元が少し開いており、普段のジャージでは目立たない後藤さん本来のスタイルの良さが完全に浮き出ている。

これは、ズルい。

しかし、今回は服装について感想を言う訳ではなく、後藤さんの名前を呼ぶだけだ。大丈夫、昔呼んでたようにひとりちやんと一瞬呼ぶだけでこの罰ゲームは終わる。

そうだ、虹夏さんやりヨウさんのように気兼ねなく言えばいいだけなんだ。とても簡

単だろろう清水優人。言ってみろ清水優人。さっさと見え清水優人。

「……ひ」

「っ」

彼女がピクリと反応した。

同時に、俺の口が何故かそこから動こうとしなかった。心の中では言おうと思ってるのに、踏ん切りもついているはずなのに。何故か詰まる。

すぐ近くでは虹夏さん達が「お?」「おお?」とかちよつと茶化しながら凝視してきている。

名前を言うだけなのに何でこんな体が熱いのだろう。久しぶりすぎて思春期特有の恥ずかしさが勝っているんだろうか。きつとそうだ。しかもこんな見られてるのなら尚更。

だけど、言わないとこの地獄が終わらないのもまた事実。

さあ、決心の時だ。

「すう……。ひっ」

「ッ」

「「おっ」」

「ひ……ひと……ひ、ひひひひ……ひとっ」

見られているせいか上手く口が回らない。

ええい、覚悟を示せ清水優人！ 男だろ！ 罰ゲームの一つや二つくらいできないで何が男だ！ 決心したならば思い切って言ってしまえ！

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお!!

「ひ……ひとうさん……」

「温泉になっちゃった」

「……」

「伊地知先輩つ、後藤さんが微笑んだまま昇天しかけてます！」

「それで良かったのぼっちちゃん!？」

「良い動画が撮れた。これで揺すれる」

嗚呼、神様。

俺は成し遂げたでしょうか。もう、ゴールしていいよね？

「今度は優人君が灰に!？」

「ああもうこの幼馴染コンビほんとめんどくさいな!？」

そうして俺は、メイド喫茶が終わるまで灰になり邪魔にならないようゴミ袋に詰められていたとき。

53. 夢を叶え夢を失う

スターリーへ向かう道中の事。

「もつと貴重な素人メイドさん達を堪能したかったのに……何で塵になってたんだ俺は……！」

「さつきからずつと悔しがっては落ち込んでるね」

「よほど目に焼き付けておきたかったんでしょね」

もうっ俺のバカ！ 後藤さんの名前呼んだくらいで灰になりやがって、もつと精神力鍛えとけよボケが！ いや正式にはちゃんと名前で呼んでないけど。

「そんなにメイド見たいならどっかお店行けばいいじゃん」

「ノー！ あなたは何も分かってないですぜ虹やん！」

「誰が虹やんだ」

「プロのメイド喫茶なんて行こうと思えばいつでも行けるけど、高校の文化祭という舞台でどこちなさを感じさせつつも頑張つて可愛く接客してくれるメイドさんはあそこで見れないんですよ！ 分かりますかニジヘン！」

「ジミヘンみたいに言うな。うーん、確かに分かるような分からないような……」

きびきびと動いてご奉仕してくれるプロなんざいくらでもいるのだ。

けど今日の俺はご主人様のために頑張ろうと緊張しながらご奉仕してくれるメイドさんを求めている。それでもし失敗しちゃつても全然許しちゃう。ご主人様は寛容なのだ。

「それなのに俺はたかが後藤さんの名前を呼んだくらいで気絶するなんて……」

「呼べてなかったけどね。秘湯さんって温泉みたいに言つてたけどね」

「この際戻しの能力とか会得するしかないか……？」

「今の優人君なら本当に会得しそうで怖いわ……とかそこまで執着してる事がちよつと怖いわ」

「これが可哀想なおタクだよ喜多ちゃん」

「哀れ優人」

何か知らないうちに結束バンドからの好感度下がってるように思えるのは気のせい

ですかね。

こっちは好きな気持ちに正直なだけでしようよ！ 引かれる覚えはない！

「わっ私はゆうくんの好きなものへの気持ち、真っ直ぐで……良いと思うっ……」

「おー分かってくれるか後藤さんっ」

「ふへっ……だ、だからもう一回だけな、なま」

「君だけだよ俺の味方は……。よおし、今度そっちの家で特大ハンバーグ作ってやるからな！ 楽しみにしとけ！」

「えっあっ……」

さすが毎日ギター六時間練習してる子は言う事が違う。

好きなものに一直線って素晴らしいよな。俺の場合はメイドというよりも可愛いコ
スプレ系全般好きだけど、きつとバンドで言うロックの種類の違いみたいなもんだから
実質一緒だよな！

「……はあ……ねえ、優人くん」

「はい？」

何やられため息を吐きながら虹夏さんが俺のトートバッグに指を差してきた。

「優人くんのカメラのデータ、ちょっと見てみて」

「え、あ、分かりました」

「どういうことだ？ まさか勝手にデータ見られたとか？」

「いやでも見られて困るようなものなんて撮ってないはず……。それこそ基本結束バンドのみんなかたまたま景色撮るくらいだし。」

「スターリーの入り口付近にやってきた辺りで、俺は自分のカメラを起動した。」

「優人くんが灰になった後だけど、ぼっちちゃんのクラスの子に頼まれてあたし達もメイド喫茶手伝ったんだ」

「はあ」

「繁盛してたんだろうか。虹夏さん達ならライブハウスとはいえ接客対応はできるだろうし、それなら俺も邪魔にならないようゴミ袋に入れていたのも納得できる。」

「というか客の立場なのに手伝ってあげるの普通に優しいな。天使かやっぱ。」

「おっと、今はカメラの確認だ。」

「だからその時にね、あたし達も結局メイド服着ることになったんだよ。それで記念に

その写真を優人くんのカメラで何枚か撮ってもらったの」

「神かツツツ」

「うるっせえ!!! いきなり入ってくるなりやかましいんだよアホ優人!!」

中に入りカウンターの方に下りてきたところで俺は崩れ落ちた。

カメラのフラッシュにあつたのは俺の知らない写真。しかし、そこには確かにメイド服を着た虹夏さん、喜多さん、リヨウさんがいた。あとついでに後藤さんも。

なにこれ何のサプライズ!? こんな事あつていいの? 俺ゲームに負けたのに実質ご褒美貰ってるんですがいいんでしょうか!?

メイドさんの写真とかこんななお金払わないといけないやつじゃん! ……お金? そうか、お金か。

「……え、いやこの千円はなに優人くん」

「献上品でございます。お受け取り願います」

「ご主人様がメイドに献上品渡してどうすんの。立場逆転してるじゃん」

いやだつてこんな素晴らしい物貰つておいて何もしないのは俺の流儀に反するから……。

危ない危ない、カメラのデータでこの破壊力だもんな。後藤さんだつて心の準備しな

がら少しづつ慣れていけたからまだしも、もしいきなり生で見えていたら俺はまた灰になつてたかもしれん。ある意味助かったといえよう。

「メイド喫茶で働かされたのにギャラも貰えなかったしちようど良い。苦しゆうない。虹夏、いらぬなら私が虹夏の分も貰つといてあげる」

「どさくさに紛れて奪おうとするな！　というかりヨウほとんどイスに座つてて何もしてなかつたでしょ！　貰う資格一番ないから！」

「何してんのお前ら……。男に貢がせてんの？　ウチそいう店じゃないからやめてほしいんだけど」

「お姉ちゃん違うから！　優人くんの気持ちが発火しちゃっただけでいつものぼっちゃんとやつてるコントと変わらないからね!？」

俺いつも後藤さんとコントしてると思われてたの。そっちのが驚きなんだけど。

「リヨウも返す！　あくまで記念なんだからお金のやり取りはなしだよ！」

「推しに貢ぐのはファンとして当然なんですよ虹夏さん！　スパチャと一緒にです！」

「すばちや……。？　はよく分かんないけど、とにかくダメ。優人くんだつてもつと自分のためにお金使いなさい。ほら、さっさと明日のライブの練習始めるよ〜！」

「虹夏さんは聖母なのか……?」

「勝手にウチの妹を母にすんじやねえ」

スタジオに向かう後藤さん達を見送っていると頭上から軽い脳天チョップをお見舞いされた。

「姉は暴力的なのに……」

「おう私を目の前に良い度胸だな。褒美にヘッドロックの刑にしてやるよ」

「あががががががが、ぎぶっギブギブツ!」

「……あん? お前、この指……」

何度もタツプしてようやく解放された。

普通こういうのって冗談ですぐやめるもんだろ!? 何でこの人本気で締めにかけてんの!? しかもガチでキマツてたし!

「はあ、はあ……なんすか……?」

「……や、何でもない。それより今日はお前バイト一時間くらいでいいから。それ終わったらスタジオ行ってあいつらの練習見てきていいぞ」

「え、何でまた急に?」

どういふ風の吹き回しなんだ？

「別に今日は忙しくねえしな。お前がいなくても全然まわる」

「何か言い方トゲありません？ ……いや、まさかツン発動中ですか？ デレ発動なんですか？ どっちですか？」

「うっせ。さっさと掃き掃除始めろっ」

「へーい」

相変わらず素直じゃないんだから店長は。リアルな天然ツンデレなんて希少種だよなあ。

うーん、ツンデレメイド喫茶もありだな。店長とかも結構似合ったりして…いや、気に入らん客いたら容赦なく蹴り飛ばしそうだからなしか。

その後も特に何も起こることなくフロアの掃除が終わり、控え室の掃除でもするかと思つたところでふと思ひ出した。

「店長、楽屋の掃除ついでにちよつと電話してきてもいいですか？」

「スピーカーするなりイヤホンするなりして手を動かすならな」

「分かりました」

許可を貰ったのでさっそくまだ誰もいない楽屋へ。

イヤホンをスマホに差し込んで耳に着ける。ちなみに俺がワイヤレスイヤホンじゃないのは無くしそうで怖いからだ。高いのに無くしたらダメージでかいだろあんなん。

とまあそんな事は置いて、ロインを開いてから相手のアイコンをタップしロイン通話の画面になる。

メッセージを送るだけでも良いんだけど、直接聞いた方が早いし通話にした。ライブは明日だし急すぎるかなとも思ったがまあ聞くだけ聞いてみよう。

通話ボタンで相手かけると、およそ二十秒くらい経ってから反応があった。よし、出たな。

『……あつ、えつと……も、もしもし!? いきなり電話かけてくるなんてどういう事よ! ……ま、まあ別にどうでもいいけど? ……で、貴方が私にいったいな、何の用なの!?!』

「おー、ヨツちゃん。突然なんだけど明日用事ありますー?」

そう、相手は後藤さんと真逆タイプの真性ぼっち、ボヨヨさんだ。あれ、ヨヨボさんだっけ。

まあいいや。今日も当たりの強いお言葉でありますなあ。

『ヨツちゃん言うな！ 何よ……用事って』

「明日ウチの高校で文化祭があつて、そこで結束バンドがライブするんですよ。だから良かったらヨーヤんも来ないかなって思ひまして。もちろん用事あるなら全然断つてもらつて大丈夫ですよ。いきなり誘つたこつちが悪いんで」

この前の会話から結束バンドに良い印象は持つてなくても、多少の興味くらいは持つてくれるかなと思つて誘つてみたが、さすがに急すぎたかな。

数秒間の沈黙の後、ヨーヤんからの言葉があつた。

『……明日は曲作りの打ち合わせがあるの。だから行けないわ』

「あちやく、それは仕方ないですね。すいません、いきなり電話して用件言つちやつて。もしかして今も何か準備中でしたか？」

『インスピレーションが降りてこないかと思つてたとこだから別に気にしなくてもいいわよ。……それより、行けないって言つたけどそれは別に私が結束バンドに興味あつたけど行けない訳じゃなくて予定があるから行かないだけだし……そこは勘違いしないでよね！』

「ああもうそういうのいいんで。分かつてるんで」

『何が!?』

「曲作りの邪魔しちゃってすいません。陰ながら応援してます。では」

『ちよ』

テイロンツという通話の切れる音がする。

最後に何か言いかけてたつぽいけど、かけ直してこないという事はさほど大事なこともなかったんだろう。

きくり姐さんは後藤さんが誘ったつてこの前聞いたし、ファン一号二号さんにはロインでもう伝えてあるから基本は大丈夫かな。

ウチの家族も後藤さんの家族も見にくくると言っていた。直樹さん達は台風の時来られなかったから余計張り切ってたな。まあこれで少なくとも後藤さんが誰にも応援されないという残念な展開にはならなさそうだ。

やる事も終わったしぱつぱと掃除終わらせて後藤さん達のとこに行くか。

「なにこの空気」

スタジオに入ったら虹夏さんとリョウウさんがお互い睨みあつて火花をバチバチさせていた。

「あつに、虹夏ちゃんがMCでも上手く盛り上がらないかって話になったんだけど、リョウさんが面白いバンドのMCとかないって、ファンが空気読んで愛想笑いしてるだけとか言っちゃって……それで……」

なるほど、つまり不毛な争いということか。

あとリョウさん、言つて良い事と悪い事がある。それ絶対一番言っちゃいけないやつだから。ちゃんとMC面白いバンドもいるからね。きつと。

「はいはい、両者睨み合いはそこまです。虹夏さん、MCはもつと場数踏んでから色々考えましょう。明日はとりあえずその場に合わせて無難な感じが良いかと思えます。ウチは基本ノリの良い学校なんで、リョウさんみたいにやらかさない限りはお通夜状態になる事とか多分ないですよ」

「今私の心にクリティカルヒットしたんだけど」
知らん。

因果応報だ。

「今は明日の練習しましょう」

「うん、それもそうだね。よし、そんな最後に通しでやってみよっか！　いくよー！」
もはや俺がスタジオでみんなの練習を見ることも自然となり、今では誰も意識するこ
とがなくなつた。

虹夏さんの合図で練習が始まる。

「ふう……」

通しの練習が終わる。

全員ひとしきりの汗をかき、それが集中していた事への説得力を増している。

見ていた限りおかしなところもなく、みんな以前より曲の完成度も上がっていてむしろ
レベルは上がつてるように思えた。

だけど、それより気になったのは。

「どうかした、後藤さん？」

後藤さんも違和感に気付いたのか、俺と同じように喜多さんを見ていた。

俺でも分かるほどに喜多さんのギターが上手くなってきているのだ。この前リョウさん
にもギターを教えてもらうって言うってたけど、その努力が如実に表れている。

以前のようにギターを弾く事に集中しすぎて下ばかり向いていた頃とは違う。

自信を持つて演奏しながらちゃんと前を向いて歌えるほど余裕ができていた。この短期間でまさかここまで成長するなんて……喜多さん、家でも相当練習してるんじゃないや。

「あつい、いえ、あの……ライブ、少しでも盛り上がるといいですねっ」

「うんっ絶対楽しんでもらってるっ！」

そういう後藤さんには隠れて練習してること言ってないんだっただか。

まあ後藤さんの場合そんなこと言ったら自分の教え方が下手だったんじゃないや、とかネガティブモードに入るの確定してるし、喜多さんが言わないのであれば俺も黙っておこう。

「うんうん、ぼっちちゃん頼りにしてるよおっ？」

「私達が自信持たなきゃだからね！ みんな後藤さんにビックリしちゃうかも！」

「え、いや、それは……」

「絶対するわよ！ だって後藤さんは凄く……」

喜多さんが何か言いかけていた言葉を呑み込んだ。

「……ううん、何でもない！ 明日頑張ろうね！」

「えっ……あ、はいっ」

ビックリした。愛の告白でもすんのかと思った。

俺の中の桜トリックが目覚めそうになったぞ危ねえ。俺には後藤さんはかつこい
いって言えてたのに本人の前では言えないの、本心からそう思ってるって事なんだろう
な。リヨウさんにはすぐ言えるのに。

「優人くんも何かあったら頼りにしてるからね〜！」

「何かってなんすか」

「何かは何か！ それよりちゃん和最前列で見ててよね〜！」

意味が不明すぎる。ライブ始まったら俺何もできないんですけど……。

「じゃあ今日はこれまで！ 明日の本番に備えて各自早く寝ること！」

そうして、文化祭ライブに向けた最後の練習が終わった。

その帰り道。

「いよいよ明日か」

「う、うん」

金沢八景駅に着き夜空を眺めながら歩く。

「文化祭でライブするって、後藤さんの夢だったもんな。どうよ、夢が一つ叶う気持ちは」

ふとそんな事を口にした。

理由や夢の大小はどうあれ、後藤さんの夢は一つ一つ叶えられている。だから単純に聞いてみたかったのだ。

「……す、凄く緊張するけど、今はみんなと演奏できるって思うと……夢がどのというよりは、楽しみになってきた……かな」

「へえ、結構前向きな考えになってきたじゃん。良い兆候ですなあ」

バンドを組んで人の前に立ちたいのに立ちたくないという矛盾を抱えていた以前の彼女からすれば、今の言葉は紛れもなく成長した証だ。

後藤さんからそんな言葉が聞けるなんて……俺も保護者として嬉しい限りですよ
まったく。

「……でも明日の事を考えると今でも心臓飛び出しそうなくらいドキドキする……」
「物理で出てきそうな雰囲気出すのやめて」

君の場合マジで心臓出てきてもおかしくないからね。

まあ数年拗らせた陰キャ思考が数カ月で元に戻る訳もないよなあ。

「あ、そうだ。今日は俺そつち寄らずに帰るから」

「え？ ギターの練習していかないの……？」

「今日は明日のために早く寝ろって虹夏さんに言われたろ。俺はともかく後藤さんはステージに立つんだからちゃんと従うべきだ」

「あう……」

小動物にみたいに落ち込まないでほしい。俺の中の庇護欲が暴れちゃうんで。

「俺は俺で今日はギターの弾き方とか色々見直す事にするよ。最近は譜面も少し分かるようになってきたし、簡単なものなら何とか弾けるからな」

「ゆ、ゆうくんの上達速度早すぎる気が……」

「そうか？ まあ興味あるのとないのとじゃやる気も違ってくるからモチベの問題だ」

ろ。俺からすりや毎日六時間練習できる後藤さんや喜多さんの上達速度の方がすげえと思うわ」

「ええ？ そ、そんなことないよお……うへへ……」

ほんとすぐ調子乗るなこの子。

「とりあえず明日のライブ、楽しみにしておくよ。ついでにギターヒーローの力も出せるように願っておくか」

「うっ……が、頑張る……あつ、急に胃と心臓が拒否反応を……!?!」

どうやら無理そうですね。

初ライブ終えてまだ二カ月経ってないし、焦る事もないので現状今できる最大限の力を発揮できればそれでいいか。

てかドツドツドツドツって聞こえるのもしかして後藤さんの心臓の音か。

キングエンジンかと思っただ。

「落ち着け落ち着け。俺が悪かったから。そうだよなく、今の後藤さんは言うなればあれか。陰の実力者か。訳あって本当の力を発揮できない実力者」

「陰の……実力者……!」

ちよっつっつっつっつっつろ。

サンキュー、シド・カゲノ。中二的ワードは後藤さんにとって大好物だったらしい。

そんな訳で翌日。

秀華祭二日目が始まった。

他の軽音部がライブ中の中、俺達は体育館のステージ裏で最後の出番待ちをしていた。

「今日お姉ちゃんも来るってえ！」

「そうなんですか！ 私達がどれだけ成長したか見てもらえるって事ですね！」

姉が来ると知ってちよつと嬉しそうにしてる虹夏さん可愛い。

何だかんだ彼女も姉っ子なんだな。さすがママであり妹であり結束バンドの姉と全属性網羅してるだけある。もはや虹夏さんは概念。

結束バンドの出番は13:30。

もう次に控えてる中、一人イスに座っている後藤さんは目を瞑り瞑想している……はずもなく、どうせまた妄想してるんだろう。

「へへっ……にへへへへへっ」

「また一人の世界に入ってますね〜」

「優人、ぼっちは何の妄想してるの」

「おそらくこの体育館の中にレコード会社の人が入って、あわよくば見初められ現役女子高生バンドのメジャーデビュー。ニュースに取り上げられて伝説となり満員御礼の武道館ライブしてるところかと」

「めっちゃめっちゃ細かい!？」

俺クラスになると後藤さんの妄想世界を視る事ができる。

その場のシチュエーションに合った妄想しやすいからおおよその見当もつくしな。

「優人君、後藤さん起こしてあげて。もう行かなきゃ」

「分かった。ほれ、起きろ後藤さん。サクセスストーリーはここからだぞ」

「んあっ!？」

周りに他の人もいる状況でそんな声上げて起きるな。変な注目浴びるだろ。

虹夏さん達は既に移動していて関係者は俺と後藤さんしかいなかった。普通に置いてかれてる件について。

逃げるように後藤さんとステージ脇まで移動し虹夏さん達に合流する。

前のバンドももうそろそろ終わる頃合いか。

「前のバンド盛り上がりつつあるね〜」

「この曲今年ヒットしましたしねえ」

「バンドのライブでペンライト振り回すとか」

「そこは許してやってくださいリョウさん。このステージ出てるのバンドだけじゃないので最初からそのまま振ってるんですよ。むしろペンライトを振ってるノッてくれるという解釈にしときましようや。お通夜よりマシでしょ」

「ぐぬぬ、確かに……」

よほどトラウマだったんだなマジで。素直にダメージ入るじゃん。

「うう、緊張してきた〜！」

「喜多ちゃん深呼吸！ ぼっちちゃんはある、大丈夫？」

「はいっ!!」

「ぼっちちゃん、半年前までは完熟マンガーだったのにこんな強い顔できるようになっただねえ……」

「いやあの力強い返事的に絶対逆ですよ。こういう時の後藤さんボリユーム調整できないんでおそらくテンパってます。ほら」

「え?」

ドツドツドツドツ! という音と共に後藤さんの心臓がドラムみたいな音立ててる。

キングエンジンならぬボツチエンジンだ。たまにマジの心臓出てる分、本家よりやばい。

「結束バンドさーん、間もなくですー!」

「はーいー!」

お、いよいよか。

「いよしっ! んじゃ円陣でも組んどくー!? 手合わせておーってやるやつしよつか

!」

「いいですね!」

「ええっ……」

「暑苦しい……」

この二人ほんま。

空気読む事に関してはド下手の領域超えてんな。

「みんな左手ね！」

「はい！」

渋るリヨウさんと後藤さんを虹夏さんと喜多さんが声をかけて促す。

つと、俺もいつまでもここにいちやマズいな。

「じゃあ俺は客席の方に移動するんで。頑張ってください」

「え？ 優人くんも一緒にやろうよ！」

「俺は結束バンドじゃないんで場違いなだけですよ。代わりに最前列で見とくから最高のライブ見せてくださいね」

そう言って返事を待たずにステージ脇から客席の方へと向かう。

後ろのドアの向こうから小さくおー！ という声が聞こえた。

「わお、結構いるな……」

いざ客席へ来たらスターリーよりも遥かに多い人が集まっていた。

そりゃ文化祭だし集まるかとも思ったが、みんな席を立ちステージの前方へ寄っている。

ははっ、変な心配とかは杞憂だったかな。

俺も急いで最前に行かないと。

何とか客をかき分けながら後藤さんがステージに立つポジション前まで移動していくと、何故かその付近でいきなり人混みがなくなっていた。

んん？ どゆこと？ 後藤さんの負のオーラが周囲に人を寄せ付けなくさせたか？

そんな事を思いながら行ってみると、元凶がいた。

「うわでた」

「やつほーうゆうきゆうん！ わらひも来たよ〜！」

「店長何でこの人入れたんですか何で酒飲ませたんですか」

「会った時にはもう飲んでたんだよ……。しかも体中のそこかしこに酒を隠し持ってやがった」

何やってんだよこの学校の警備員は！ 酔っ払いとかある意味一番のトラブルメーカーだろ。

……いや、世紀末ボーイズが入れる時点でお察しか。こっちは酒飲んでないってのに頭痛くなってきた。

そりや周囲の人が避ける訳だわ。こんな酒臭いやツ例え女の人でも近くに寄りたくないもの。

校内にいれば真つ先に不審者扱い待ったなしだよこれ。

「ういゝ、今日は楽しんでこお〜！」

「せめて今日くらいはお酒控えてほしかったな〜もお〜！」

そうこうしてるうちにステージの幕がゆっくりと上がっていった。

当然いるのは結束バンドの面々だ。

それにより、悪い意味で注目されていた視線はステージの上へと向けられる。

「喜多ちゃん！」

聞こえる声援はほとんどが喜多さんへ放たれている。

さすが一年の人気者、ほぼ全部女子の声援なのが凄い。喜多さんも手を振ったりして

程よく緊張は解けているようだ。

でもって後藤さんは……うん、見るからに分かつてましたよ感満載で口角が引き攣つてるね。

誰からも声援がないと思ってるんだろうけど、そもそも彼女は忘れている。彼女自身の家族と俺の家族が来ている事に。

「おねえちゃ〜〜ん!!」

おそらく左の方。そこから後藤さんの家でよく聞く声が入ってきた。

「がんばれ〜〜!!」

「ひーちゃんファイト〜!」

「ひとりちゃんぶちかませ〜!」

ふーちゃんと一緒に後藤家の皆さんと俺の両親が一緒にいるようだ。めつちや声でかい。父さんもつとボリユーム落としてくれ頼むから。

「ひとりちゃ〜ん! 頑張つて〜!」

俺の少し後ろの方にはファン一号二号さんもいた。

ロインでも絶対に行きますと返してくれた時にはさすが後藤さんのファンだと感嘆したものだ。

そして。

「おお〜いぼつちちやくん頑張れ〜！ あ、見て見て、今日は特別にカップ酒え〜！

かつこいいい演奏頼むよ〜！ うえ〜いうえ〜いうえ〜い〜！」

「(酒臭つ……)」

「(やばい人入ってんじゃん……何で横の男子も止めないんだろ……)」

やばい人認定された人が俺の隣で騒いでいる。

どうしよう、一緒にいる俺まで評価下がっていきそうなんだが。

これ以上好き勝手させるのはさすがに放っておけないか。

「店长、コブラツイスト！」

「これに関してはお前に全面同意だから言う事聞いてやる。テメエもそろそろいい加減にしとけ〜！」

「せ、せんばい……ギブ、ギブ……！」

いいぞ、さすがシメるとなったら容赦がねえ店长だ。

そのままやっちゃえバーサーカー!

どこかの骨が折れる音がしたと同時にようやく静かになった。

それを合図にボーカルの喜多さんが口を開く。

「あー、私達結束バンドは、普段は学外で活動してるバンドです。今日は私達にも、みんなにとつても良い思い出を作れるようなライブにします!」

校内でも人気のある彼女の言葉は、体育館にいる全ての人を惹き付けるように紡いでいく。

「それで、もし興味が出たらライブハウスにも見に来てくださいね〜!」

喜多さんの友人らしき人達が一斉に返事をし、それに続くように他の人達も声を上げていた。

やっぱり陽キャな彼女は喋るのも得意らしい。しかもボーカルだし面白さはともかくとして喜多さんは案外MCに向いてるかもしれないな。

声援が止む。

空気が変わっていく。

ライブ特有の、演者も客も静まる数瞬の沈黙。

高揚感と緊張感が辺り一帯を支配し。

結束バンドのギターボーカルが狼煙を上げた。

「それでは聴いてください！」

俺の前に立っている少女もまた、前を見据える。

そして。

「結束バンドで——」

少女の夢が、産声を上げた。

54. 転がるぼつち、落ちる後藤

ドラムスティックがリズムを刻み、後藤さんのギターと虹夏さんのドラムが最初に助走を鳴らす。

喜多さんが観客に手拍子を促しながら一体感を一気に作り出し、そこからリョウさんのベースと喜多さんのギターが合流してイントロの盛り上がりには拍車をかけていった。

「……よし、出だしは好調だな」

顔を見る限りみんなさほど緊張はしていなさそうだ。

後藤さんも相変わらず下を向きがちだけど、それがむしろ集中力を増幅させ普段よりも安定した演奏を可能にしている。

そして喜多さんのボーカルが入る。

一曲目『忘れてやらない』。

歌詞はいつも通り少し暗めではありながらも、曲調はこれまでとは違い明るめで

キャッチーな雰囲気。

喜多さんが手拍子を促したように、初見の人でも馴染みやすく掴みとしてはバツチリな選曲となった。

「優人、前のめりになりすぎだ。お前が緊張してどうする」

「え？ あっ」

気付けば体が始まった時より前に出ていたらしい。

彼女達の頑張りを側で見えていたからか、ライブを楽しむというより上手く演奏し終えるかが気になってきてしまう。

「もっとリラックスしろ。こういう時は純粹に楽しめばいいんだよ。あいつらだって前には楽しんで見てもらいたいはずだぞ」

「店長……」

きくり姐さんにまだコブラツイストかけたまんまなんですな。

それがなかつたら素直に感謝できたのに……。よくそのまんま見れるな。

しかし勝手に強張っていた俺の体も無駄な力が抜けているのを感じた。肩にも変な力が入っていない。

ある意味ショック療法だなこれ。何が悲しくて自分の学校で身内が酔っ払いにプロレス技かけてるとこを見なくちやならんのだ。いや指示したのは俺だけどさ。

再び視線をステージへ戻す。

言われた言葉の意味を理解する。そうだよ、楽しもう。結束バンドの努力を見てきたからこそ、精一杯楽しむのが礼儀ってもんだ。

店長達の方へ振り返った時にも見えたが、観客はみんなステージに釘付けになつてペンライトを振り回すなり手を叩いていたりと、各々の楽しみ方でライブを見ていた。

ライブとは、元々こういうものだど強く再認識する。楽しみ方は人それぞれ、自由だからこそ楽しめる。

なら俺も楽しもう。自分なりの楽しみ方で。

腕を振るだけが楽しむ事じゃない。声を出さだけが楽しむ事じゃない。俺の楽しみ方は、演奏しているみんなをただ見守るように見ていたい。バンドを楽しんでいる彼女達を見届けていたいのだ。

サビでは喜多さんがリズムに合わせながら体を動かしたり歌い方にアレンジを入れるなどして、以前よりもだいぶ余裕ができています。

これもひとつそりとリョウさんに教えてもらった喜多さん自身が頑張つて練習していた賜物か。ギターの弾き方からして明らかに成長しているのが分かる。

「へえ、結構上手くなってきたな」

「でしょ!? 店長もそう思いますよね!」

「いちいちうるせえなっ。お前はあいつらの親か」

どうよ、ウチの子達ちゃんと成長してるでしょ! これでも保護者気分です!

元バンドマンの店長からそう言われると俺の目と耳も間違いないやなかつたんだと実感する。そりゃそうだ、あれだけ練習したんだからみんな上手くなってるに決まってる。

虹夏さんは気持ちがりラックスしているのが分かるくらいドラムのリズムも正確だし、証拠に表情も常に楽しんでるのがここから見える。

時折他のメンバーを確認しながらリヨウさんとリズム隊としての息もすっかり合わせられていた。

リヨウさんはいつも通りクールにベースを弾きつつ、時に抑えられないのか好戦的な笑みを浮かべているのがまた様になっている。

そんな彼女のコーラスは喜多さんの歌声ともマッチしており、その姿は見る者を男女問わず惹き付けるほどの妖艶さすら感じさせた。

喜多さんは言わずもがな、おそらく今回一番の成長を見せていると言っても過言では

ないほど演奏に自信の表れが見て取れる。

演奏に余裕ができていて分、元から上手い歌も今まで以上に自由さを解き放ち、生のライブ感を思わせる彼女自身のアレンジやアドリブが輝いていた。

後藤さんに至っては俯いてはいても俺から見える限り演奏中に笑みを薄く浮かべていたレベルだ。

それだけでもう前とは違うとすぐに理解した。彼女の夢だった文化祭ライブ。初ライブの時よりも演奏のレベルはアップしていて、人前だと強く意識しすぎないよう前傾姿勢で演奏する事により安定感もさらに増している。

結束バンドは間違いなく、ここでまた一つレベルアップしているんだ。

一曲目が終わった。

同時に背後から歓声が上がリ、驚いてつい俺も体が一瞬跳ねてしまう。

「うおっ……結構盛り上がってんな」

少なくとも俺の視界に入っている人達はみんなステージに向かって歓声や拍手を届けている。

その中にはあの世紀末ボーイズもいた。つうかまだいたんだ。しかもペンライト

振ってるし本気で楽しんでんじゃん。実は良いヤツらだったの？

「ありがとうございます！ 一曲目『忘れてやらない』でした！」

歓声と声援が入り混じる。初ライブでは客がほとんどいなくて少なかった歓声達が、あの時よりも数十倍の音として結束バンドに向けられていた。

これだよこれ。この景色が見たかったんだよ！

かゝ、ここまできると後藤さんも様になって見えるなあ。

この前家で歯ギターとか背ギターとかスライド奏法を見せてもらった時は何でこんな習得したんだこいつと思つてた時期もあったけど、もうこれ立派なギタリスト判定じゃダメ？ 頑張ってるよこの子。

「……………」

「？ ……分かつてる。分かつてるから無言でどうだこれがウチのバンドですよみたいな目で嬉しそうにこつち見んな。見えない尻尾振つてるのが丸分かりだぞ犬かお前は」
いやだつてさあ、こんな嬉しくもなるでしょうよ！

ウチの学校で結束バンドが大歓迎されてるようなものなんですよ？ そりゃあ俺のテンションだつて上がつちまうわよ！

しかも喜多さんとか最後にウインクしてちよつとしたファンサしてたし!

もし俺に向けられてたら危うく惚れちまうとこだったぞおい。そして勘違いして何もないまま素朴な人生を過ごしその気持ちも墓場まで持って行くんだ。絶対そうだ。

あと店長いつまできくり姐さんに技極めてるんですか。

もうこの人一点しか見つめないようになってるんですけど。開眼したまま気絶とかしてないよね。

「きくり姐さん? 生きてます?」

「……」

返事がない。ただの屍のようだ。

と思つてたら、

「ゆうきゆん」

「あ、生きてたんですね」

きくり姐さんは技を極められたまま一点だけを見据えていた。

「ぼつちちゃんのギター。あれ結構年季入ってるよね」

「え？ まあ、後藤さんの父親が若い頃から使ってたらしいんで、年季自体は相当入ってますけど……」

きくり姐さんとの会話の裏では喜多さんからMCが虹夏さんに変わっていた。

「……」

何だろう。会話できくり姐さんがふざけない。

本来ならそれが普通で安心するはずなのに、この人の場合はそれが何かしらの異常であつたり異変の前兆だと思わせるかのような雰囲気が出てくる。

……そうだ。さっきから俺と話しているのにきくり姐さんの視線はずっと俺を見ていないじゃないか。

そして会話から察するに、おそらく後藤さんのギターの事で何かあるんじゃないかとおおよその見当がつく。

「ぼっちちゃん、一曲目の終了間際にギターに違和感感じてたっぽいんだよね」

「……まさか」

俺は他に喜多さん達の事も見ていたから分からなかったけど、きくり姐さんはずっと後藤さんを見てたから気付いたのか？

だとしてもそれで違和感を感じてる事に気付くなんて、マジで何者だよこの人。

「なるほどな、最後の方だけ少し音に違和感あつたのはそのせいかな。多分チューニングが安定してないんだろ」

店長も気付いていたの!? いや元々バンドやってた人なら分かるもんなのか……?

夏から後藤さんにギター教えてもらつてるとはいえ、俺もまだまだだな。いや当たり前か、始めて一カ月そこらじゃひよっこ以前の問題だし。

いいや、というか今はそれどころじゃないはずじゃ……。俺達の会話も周囲の歓声などに打ち消され後藤さんには聞こえていない。

虹夏さんのMCも終わって再び喜多さんに返された事で、もう次が始まる合図なのだと嫌でも思い知らされる。

「それでは聴いてください! 二曲目で……『星座になれたら!』」
始まってしまった。

新曲の中でもこの曲は俺が凄く好きで楽しみにしていた曲でもある。

思わず踊ってリズムを刻みたくなるようなイントロから、耳が心地良いベースとギターの音が聴く者の期待感をさらに増していく。

喜多さんのボーカルが入ってAメロに突入した。

確かによく聴いていくと一弦と二弦のチューニングが安定していないように思える。ずっと練習しているのを見てきたから俺も今ので何となく分かったけど、このままいけば客に変な違和感を与える事なく終えられるはずだ。

だけどその途中で、重大な懸念が二カ所だけある。

一番のサビ終わりと『あのバンド』に入る直前のギターソロ。後藤さんが一番輝けるパートなのに、チューニングが安定しないままいつて大丈夫なのか？

……いや、その前にチューニングがずっと安定しない時点でおかしい。

まさか……ペグに何か起きてる？

後藤さんも異変にもう気付いているからか表情に異変が表れてるな……。

最悪チューニングが不安定でもソロは何とかなるか？ 後藤さんの技術力なら上手く切り抜ける事も可能かもしれないけど……如何せん確信はない。

そうこう考えているうちに一番のサビに入った。

その時。

「ツ……!!？」

後藤さんのギター、その一弦が切れてしまった。

同時にリードギターのメロディーが途切れる。無理もない、突然のトラブルだ。……まずはここからどうリカバリーするか考えなくてはいけないが。

後藤さんが一旦しやがみ込み二弦のチューニングを合わせようとしたところで、またも負の連鎖は起きた。

ペグの故障だ。

「あれじゃ二弦も使い物にならない。このままだとソロ無理だぞ……」

きくり姐さんの言葉に俺の心臓も跳ね上がりそうになる。周囲も異変に気付きざわつき始めた。

店長は黙って見ているだけだが、その視線も後藤さんを見つめたままだ。

鼓動が激しくなり拳を強く握り締める。……落ち着け。下手に行動すると初ライブの二の舞だ。

ステージ上で何かあった時、俺には何もできない。昨日はそう感じていた。本番になつてしまえば所詮は見る側でしかなく、トラブル時には無力感に苛まれるだけの部外者でしかない。

だけどそういつた時、何かしてやれるのは同じステージに立つ仲間だ。

俺は思わず喜多さんの方を見た。隣で後藤さんが座り込んでいる事には気付いてる

はず。今フオローできるのは喜多さん達しかいないぞ……!!

そして、一瞬俺と目が合った喜多さんは、小さく頷いて微笑んだ。

……そうだ。考えろ。俺でも何かできる事を。

どんな小さな事でもいい。後藤さんのために何ができるかを考えろ。

考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ!!

何かないか!? なけなしの経験からの引き出しは!? 後藤さんと一緒にいた日々で役に立てそうな知識はなかったか!?

こんな時だからこそ使える頭をフル回転させろ清水優人!! こんな時、ギターヒーローならどうする!? あいつの技術力で賄える方法がどこかにあるはずだ!

「……………これ、は……………」

その臭いが鼻を刺激した時、俺はそこに置かれているあるモノに気付いた。

これならあるいは……………どうにか、なる……………?

隣でピンク髪の少女が座り込んだのが見えた。

彼女の奏でるメロディーが止まり瞬時に弦が切れている事も視認した。

それ以外にもペグを何度も触っている事から他にもトラブルが起きているのだと理解する。

一番のサビ途中。

それが終われば後藤ひとりのギターソロが来てしまう。だが今の彼女にそれをする余裕がなく、このままでは頑張っていた少女の努力は無駄に終わってしまう事も想像できた。

一瞬、右隣にいる山田リヨウに目配せをしてアイコンタクトをとる。

彼女も異変に気付いているのか軽く頷いてくれた。ライブでは本番何が起こるか分からない。だからそういう時のために結束バンド内である程度アイコンタクトで意思疎通ができるよう、何度か練習していたのだ。

そして客席の最前列でこちらを見ている少年と目が合った。

その表情は冷静さを失っていないように見えるが、同時に焦りも感じ取れるような顔だ。

分かっている。彼にとっても大切な少女の晴れ舞台。
こんなトラブルで失敗させてしまうのはもったいない。

(分かっている。大丈夫だから)

何より、後藤ひとりという少女のかつこいい姿を見てほしいと用紙を出したのは自分だ。

それなのにこれで終わっていいはずがない。こんなところで機会を失っていいはずがない。

微笑む。

少年に向かって。

ステージに立ってないから何もできないなんて思っている彼に、彼女はフォローしておくから自分もやるべき事があるんじゃないのかと、そういう意志も込めて。

(だからそんな顔しないで、優人君)

成長した自分を解き放つ。

(私も、後藤さんを支えるから!!)

(どうしよう……どうしよう……どうしよう……!?)

弦が切れた。

ペグも故障した。

このままじゃギターソロなんて到底できない。

せつかくの文化祭ライブなのに、彼も楽しみにしてくれていたのに、自分のせいで台無しになってしまう。

(弦を張り替えても意味ないし、替えのギターもないっ。私のせいでっ、みんなにも恥をかかしちゃう……ッ！)

念願の夢が、途中で霧散してしまう。もはや目尻に涙が浮かびかける。もう頭が空っぽになりかけていた、その時だった。

(……え?)

本来なら自分のソロパートだったところ。

そこを、隣の少女が代わりに演奏し始めたのだ。どこかで覚えのある前傾姿勢、手元に視線を集中させて演奏するその姿は、まるで自分を見ているような感覚さえあった。

(喜多さん……打ち合わせしてないのにアドリブ……それに演奏も全然ブレなくなってる……！)

そこで理解する。

喜多郁代だけではない。山田リヨウも、伊地知虹夏も、全員が自分のために時間を繋いでくれている。

ギターボーカルの少女からアイコンタクトがあつた。

みんながそう語り掛けてくれている。こんなところで終わるなど。まだ終わっていないぞと。

後藤ひとりはギターヒーローだ。

その実力はソロだけであればここに居る誰よりもずば抜けている。想定外のトラブルには一時的に焦る事もあるが、咄嗟の機転をきかせるという点においても彼女は頭一つ抜けていると言っても過言ではない。

音楽、それもギターの才能と努力の話をすれば、おそらく同世代で後藤ひとりの右に出る者はいないだろう。

視界の端に、あるモノが照明の光に反射してひとりの視界に映った。

そして、これだと行動に起こす直前。

演奏の音と共に声が出た。

それは周囲の音に掻き消されるようなものだったけれど。目の前にいる少年の声だけは、ひとは決して聞き逃さなかつた。

「後藤さんッ！　これだ!!」

同じ事を考えてくれていた。

いいや、必死に何かないかと少ない知識の中で導き出してくれたのだろう。

自分ならこれでもできるだろうと。

そう信じてくれているのだ。

一瞬、思わず口角が上がったのを自覚した。

それを手に取る瞬間にはもう、表情も元に戻っていたけれど、これならやれる。そんな確信があつた。

(絶対、諦めないッ!!)

後藤ひとり、ギターヒーローが、その片鱗を見せる^{魅せる}。

きくり姐さんがステージに置き去りにしていたカップ酒を手を取って、後藤さんは一
く二弦が壊れたままギターソロに入った。

リヨウさんも虹夏さんも後藤さんを信じてくれていたようで、ソロパートの部分をも
う一度リピートしてくれた。

以前、後藤さんの家でギターを教えてもらってる時の話だ。

少しの休憩のあと、彼女が突然見ててと言うからどんな曲を弾くんだろうと思ってい
たところ、おもむろに歯ギターや背ギターをしだし、スライド奏法とかをやり始めたの
だ。

最初は頭おかしくなったのかと脳内が宇宙になりかけたが、思い返せばあれもギター
として立派な技術の一つだった。

スライド奏法。別名はボトルネック奏法とも呼ばれるギター奏法の一つ。

本来であればスライドバーと呼ばれる棒を指に装着、あるいは手に持ち演奏する技術
だとネットで調べた事がある。

そしてそれは元々酒瓶などのネック部分をカットして使用されていた事が由来だったのも分かった。

詳しい事はまだ知らないが、過去に海外でライブ中一つの弦が切れた事により他全ての弦のチューニングが狂ってしまったという状況を、咄嗟にボトルネック奏法で演奏し音感を生かしながら乗り越えた女子高生ギタリストがいたという記事も見た事がある。要は弦が切れてしまっても関係なく、演奏技術があればボトルネック奏法でチューニングに左右されずに演奏できるのだと。

俺だってそんなに知識を持っている訳じゃないから正しい判断なのかは分からない。だけど、目の前で一度演奏してくれた後藤さんなら、ここでもできると思った。

だから信じた。

それだけの話だ。

そんなもつて後藤さんは今、この文化祭のステージでカップ酒片手にボトルネック奏法を演じている。

俺が声をかけた時にはもうカップ酒へ手を伸ばそうとしていた辺り、咄嗟の判断力はやはりギターヒーローの実力あつてのものか。俺が声をかける必要もなかったって事か。

周囲のざわつきも別のものへと変わっていく。

「あのギター何やってんだ？」

「よく分かんねえけどすげえ！」

どうだ。すげえだろウチの後藤さんは。

彼女の手にかければこんなピンチどうって事なかったんだよ。……全部喜多さん達のおかげだけだ。

「この土壇場でポトルネック奏法とか普通やるかあ？」

「あれならチューニングズレしても関係ないもんね〜」

店長達はさほど驚いてるようには見えないが、感心はしているようだ。

「……つうか優人。お前ぼっちちゃんならあれができると踏んで声かけたろ。知ってたのか？」

「や、まあ……一応知ってましたけど、ぶっつけでできるかは分からなかったのが本音です」

「よくそんなんでこいつのカップ酒渡そうと思えたな」

「そもそも俺に後藤さんや結束バンドを信じろって言ったのは店長でしょ。だから俺は

みんなを信じたままですよ」

最終的には俺にできる事なんてそれだけだしな。

「……おう、上出来だ」

「なっ何すかいきなり……」

急に頭撫でないでほしい。

演奏中だからみんなステージ見てて気付かれてないけど結構恥ずかしいんですって……。年上お姉さんの力ここで発揮してこないでよ！

少し照れくさくなりながらもステージを見る。

何とかギターソロを終えカップ酒を床に置いた後藤さんは上を見上げていた。

やりきったという感情か、乗り切れた安心感故かは分からないけれど、彼女の表情に

何とも言えない感情になった。

ピンチを乗り越える様は、まさしくヒーローそのもの。

念願の文化祭で後藤さんは、間違いなくここにいる人達を盛り上げたのだ。

ああ、ちくしょう……かっこよすぎてちよつと泣きかけたぞ……。

終盤は一応一弦二弦がなくとも演奏できる譜面だったらしく、無事に二曲目を終える

事ができた。

そして、先ほどよりも爆発的な歓声が体育館の中に響いた。ひと通りの歓声が止んだ頃、虹夏さんがマイクを通して話し始める。

「えつとお……本当ならこのまま最後の曲に行くところなんですけど……これだけ言わせてください！ みんな、今日は本当にありがとう!!」

弦が切れてペグも故障したままラストの曲へは行けないから、おそらく結束バンドの出番はここで終わりか。

でもまあ、この二曲目でだいぶ足跡は付けられただろう。今日はここらが潮時だなあ。

「この日のライブを、みんなが将来自慢できるくらいのバンドになりまあす!!」

虹夏さん、後藤さんがまたギターヒーローとして覚醒したからテンション上がってるなこりゃ。

気持ちは分かる。だって俺も目が離せなかったからね。あんなん見惚れるに決まってる。

観客の方も歓声と声援が入り混じっている。

「いいぞおー！」

「武道館行っちゃえー！」

「ご……なんとかさんも良かったぞー！」

「弦切れたのに頑張ったねー！」

おい誰だ今インなんとかさんみたいに言ったヤツ。出てこいコノヤロー。

「つ……ほら後藤さん！　ひと言くらい何か言わなきゃ！」

「え」

「え」

おいバカ喜多さん何言い出してんの？

いくらかつこいい後藤さん見せられて褒められたのが嬉しいからってそれは悪手すぎるぞー！

コミュ症は事前に台本作つとかなないと喋れないのに、予想外の振りされたら頭真つ白になつて何しかすか分かんないんだぞおバカ！

これは後藤博士号剥奪だ……。後藤さん係も一時的に退任していただく。公開処刑と変わらないよこれ。顔青ざめてんじやん。

「何か面白い事なにかおもしろいことナニカオモシロイコト……」

あ、まずい。あれ何か良からぬ事を考えてる時の目だ。

後藤さんの視線がまず床のカップ酒に行く。そして、そのまま視線は俺の隣にいるきくり姐さんへ。

はい、その時点で警戒レベルMAXです。

考えろ清水優人。さつきと同じように脳内をフル回転させるんだ。あのアホピンクはこれから何をする？

面白い事をしようとしてきくり姐さんを見ていた。ならきくり姐さんに関する事？

いつそ飲酒？ さすがにそれはない。ギター破壊？ 直樹さんのだしそれもない。なら何だ。

考えられる可能性としては、この前のきくり姐さんのライブ……いや、まさか……。そしてその予想は当たってしまふ。

後藤さんが一歩踏み出した瞬間に察したよ俺は。この子、ダイブする気だと。しかもよりによってわざわざ端にいる俺の方ではなく真ん中の方へ。

あんのアホっ……！

ライブハウス以外でダイブしたところで受け止めてくれると思っただけか!? そう

いう風習知らない連中ばかりなんだぞ!?

何とか人を掻き分けて落下地点まで急ぐも間に合うか分からない。

俺の気持ちも知らないで彼女は飛び込んだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

やはり避けようと離れていく生徒の間を掻い潜り俺は前へ飛び込んだ。

そう、この時、俺は一つの間違いを犯した。

普通受け止めるならばせてスライディングのように足から先へ飛び込むべきだったのだ。

なのに俺は勢いに任せてビーチフラッグのように頭から飛び込んでキャッチしようとした。しかも縦ではなく横から飛んでしまったのだ。

そんなので上手く受け止められるのはドラマかアニメの世界だけという事も忘れて。何なら急いでいたせいで距離感すら間違っていたんだろう。

俺の手は後藤さんよりも前に出て、後藤さんは俺の背中に真上から落下。

つまり、背中で後藤さんを受け止め重力のままに床に顔面直撃。そして後藤さんも勢いのままに顔面直撃。

俺と後藤さんはお互いの体がクロスし『+』の構図で落下し床とキスをしたのだ。
ドゴアツ！ という音が響いた。

「(ぎ)ぶあツ!？」

「べぶうツ!？」

イキつて飛び出すも受け止めること自体失敗し、後藤さんも結局顔面強打させてしまった。

ミツシヨン失敗である。俺も無駄なダメージを負うし誰も得しない時間がやってきた。

「後藤さん!? 優人君!？」

「二人とも大丈夫!? やばい音したけど!？」

「お前は伝説のロックスターだwwww 優人はダサいだけだけどぶふうwwwwwwww」

「ぼっちちゃんもゆうきゆんもサイコー!!」

「お前から少しは心配しろ!!」

「ほんとだよ!？」

ああ、終わりだ……。

あんだけ盛り上がったライブがお通夜になってしまふなあ。

「誰か担架持ってこい！」

「優人君！ 後藤さん！ しっかりして！」

周囲が騒がしいのに対し、俺の意識は静かに遠のいていく。

覚えてろよ……このアホピンク……。

そこで、俺の意識は途絶えた。

5.5. 必ずしもハッピーエンドで終わる訳ではない

暗闇の意識の中、ふと自分の両手が何かに包まれているような感覚があった。

いいや、握られていると言った方が正しいか。どちらも自分の手より小さく、しかし柔らかい。なのに指先だけは少し硬い印象がある。

何だ、夢の中か？

いつの間に寝たんだ俺。というか周り真っ暗なんだけど、その癖俺の姿ははっきり見えるし、やはり夢の中というのはよく分からない。

未だに両手が握られてるといふ感覚はあるけど、周囲に誰かいる訳でもないか。

そして夢というのは不思議なもので、体の自由が急にきかなくなる事がある。今がその時だった。身動きが全然できない。

そもそも俺が立ってんのか寝てんのかすらも分からない。明晰夢って確か自分の思うようにコントロールできるんじゃないやなかつたのか。なんで何もできないの。

夢と分かっているならさつきと目覚めたいんですけど、この場合ってそういう方法とかがあったっけ……？ ダメだ、何一つ分からん。

あーもう、起きるまで暇だなく。

そう思った時だった。俺の足元が突然白く輝き始めたのだ。

え、何が起こるの。まさか異世界転生とかしちやう系だったりする？ それはそれで興味はめつちやあるけど。

いやしかし俺には後藤さんの面倒を見るという役目が……というかまだ動けないんですがいい加減動けよ俺の体っ。

力を入れて無理矢理動かそうとするもビクともしない。辛うじて動くのは視線と首だけだ。

そして、足元の白い光から二つの頭が出てきた。スウ〜と流れるように出現してくる顔には見覚えがある。

そう。

「優人」

「ゆうきゆん〜」

やべー女のツートップであった。

?でしょ。何でよりによつて夢の中でこんなベーシスト達が出てくるんだよ。

たった今から悪夢確定じゃねえかこんちくしょう絶対ロクな事にならねえよこれ!

「……ひ、ヒアルロン酸!?!」

「ひうツ!?!」

「きゃあ!?! お、起きたのね優人君……」

「……あれ、喜多さん、後藤さん……?」

目が覚めると俺は保健室にいた。

学校の保健室のようだ。

「結構うなされてたけど、大丈夫?」

「あ、ああ……もうどんな夢見てたか覚えてないけど……というか、あの……お二人さん」

「どうしたの?」

「ゆ、ゆうくん?」

「その……そろそろお手を放していただいてもよろしいでしょうか……」
起きたら女子高生二人に手を握られていたでござる。

これは役得……だなんて思うはずもなく、普通にはずいんでやめてほしい。

「え？ あつ、ご、ごめんなさいっ。心配だったからつい……」

「わ、私はその……早期回復を願っての念を送ってたから……」

後者の言ってる事はよく分からん。念を送ったくらいでどうにかなるのはハンターハンターくらいだぞ。

「優人君覚えてる？ あなたステージからダイブした後藤さんを受け止めようとして……その、失敗しちやって後藤さんと一緒に気を失ってたのよ？ 優人君なんて凄く鼻血とか出てて大騒ぎになったんだから」

「あー、どうりで鼻声っぽいと思ったらティツシユ詰め込まれたのか」

何となく思い出してきた。むしろあの衝撃でよく鼻血で済んだものだ。後藤さんのキヤツチ失敗で大量の鼻血出して気絶、ね。

うん、できれば思い出したくなかったな。恥ずかしさで死ねそう。くそ、夢のように忘れていてくれればよかったのに……。

いや……その前に確認しなければならぬ事がある。

「それより後藤さんはどこかケガしなかったか!? 腕とか足とか大丈夫なんだな!? お前……その顔のガーゼはなんだ!？」

「えっ? あつ、こ、これはちよつとしたかすり傷だから気にしないで……。これ以外はゆうくんのおかげで何ともなかったから」

……見たところ本当に顔のかすり傷以外は何ともないように見える。

後藤さんがイスに座っているという事は、俺よりも早く目が覚めて寄り添っていてくれたんだろう。二人には感謝だ。

だが。

「よし、なら遠慮なく説教できるな」

「……えっ?」

思い出した以上は容赦せんからなアホピンク覚悟しろ。

「元はと言えば後藤さんがあんな誰も受け止められないダイブなんてしようとしたからああなったんだぞ! 何で一言って言われてんのにも喋らず無言でダイブするんだよ日本語の意味分かん」

「はいそこまでにして優人君。一応あなたが一番のケガ人なんだから大声出さないの。」

「ここは保健室なんだからね」

「……はっ」

正論を言われちゃ黙るしかない。

つうか元凶の元凶は喜多さんだけどね。君が後藤さんにいきなり話振るからパニクって奇行にはしまったんだからその子。という事で彼女に後藤さん係の称号はまだ譲れんな。

まあ後藤さんも反省してるようだし、今回はお咎めなしにしといてやるか。俺も鼻血程度で済んだから良しとしよう。

「あの、ゆうくん、ごめんなさい……。き、喜多さんも、ライブ台無しにしちゃってすみませんでした……。せっかくの文化祭ライブだったのに」

「ううん、何故か逆に盛り上がってたかも」

「人が気絶してんのに盛り上がる学校って何なんだよ」

やっぱ割とおかしいヤツらの集まりなんじゃないのここ。

「そーいや虹夏さん達は？ 外で待ってんの？」

「今片付け中。優人君達が大丈夫ならこの後打ち上げ行こうって。でも無理そうならま

た今度にしようって言ってたわ」

「俺は別に大丈夫だけどきくり姐さんいるのは厄介だな……。よし、ロインでみんなに今日は打ち上げなして口裏合わせてもらって、きくり姐さんだけ帰らせよう。そんでその後みんなで打ち上げ行くか」

「優人君廣井さんに対しては本当に容赦ないわよね……。でも、分かった。じゃあ私が伊地知先輩に連絡しておくわね」

悪く思うなきくり姐さん。今日くらい大人しくお家に帰っててください。

あと今は個人的にちよつと会いたくないんで。会ったら俺が気まずくなっちゃうかもしれない。何でかは分からないけど。

どんな夢見てたんだ俺……。

思い出したらダメな気がするし、ここは話題を変えよう。

「それにしても喜多さん、演奏頑張ってたよな」

「え？」

「あつ、私も驚きました。喜多さん、凄く上手くなつて……」

陰で練習していたとはいえ、まさかアドリブであそこまでやり切るとは思わなかった。

ギター初めてまだ半年くらいなのによくもまあ上達したものだ。最近ギターを始めたら余計分かる。喜多さんの努力量は間違いない本物だ。その熱量とひたむきな熱意には感服してしまう。

「……バッキングだけだけどね」

謙遜……という訳でもなさそうだな。

なまじ後藤さんの実力を知ってる分、あのボトルネック奏法を見てしまったからまだ自分に対して自信を持ってないってところか。

「あの、えつとつ」

「……」

後藤さんが何か言いかけるのを手で制す。

フオローしようと思っただらうけど、何となくここは喜多さんの言葉を待つべきだと思った。

「私にはみんなを惹き付けられるような演奏はできない。でも……みんなと合わせるのは得意みたいだから」

後藤さんと自分では決定的な違いがある。それを理解しているような口ぶり。でも、その割には喜多さんの表情は明るかった。

「これからもつとギター頑張るから教えてね。後藤さ……ひとりちゃんっ」

「……え？ あっえっあ、はっはいっ」

「じゃあ、私先に行くから優人君のことお願いっ。準備できたら来てね！」

「あっはい！」

「また後でな〜」

ちよつと照れくさかったのか喜多さんはそそくさと退室していった。

うーん、これは中々の青春イベントじゃないだろうか。言ったら後藤さんスライム化しそうだから言わないでおくけど。

「ゆ、ゆうくんっ……喜多さんの、今のって……!？」

「ん？ ああ、下の名前でも呼んでもらえてたな。良かったじゃん、もつと仲良くなれたみたいだぞ」

「あ、そ、そう、かな……」

「いつその後藤さんも喜多さんの下の名前……は向こうがNGだっけか。ならさん付け

じゃなくてちゃん付けで呼んでみたら？」

「いいあああつ!!」　そ、それはまだ私の心の準備が数カ月くらい必要だからむりい……!

「だろかなとは思った」

「どんだけかかるとだよ。年越すぞそれ。」

別に下の名前で呼ぶ訳じゃないんだからそれほど緊張するものでもないだろうに。いくらライブでかつこよくてもこういうところはまだまだヘタレだな。

さすがいざという時しか頼りにならない女だ。面構えが違う（目が外れかけてる）。

ほんと、ライブじゃ別人みたいにかつこよかったのに。……そっぴいやライブの感想言つてなかったか。

「とりあえず、後藤さんもライブお疲れさん」

「え? あつうん」

「アドリブでポトルネットク奏法やってた時の後藤さん、めちやくちやかつこよかつたぞ」
「……え?」

喜多さんや他のメンバーにはまた後で感想伝えるとして、今は後藤さんだ。

「あんなトラブルがあつても最後には観客の目を自分に向けさせたんだ。今日の後藤さんは間違いなく最高のバンドマンだったよ」

「あつ……で、でもつ、ゆうくんのおかげもある……というか……ゆうくんも私と同じ考えをして信じてくれたから……」

「ん？ 俺は別に何もしてないぞ？ カップ酒だつて俺が声かける前に後藤さん手伸ばそうとしてたし、結局俺が何もしなくてもトラブル自体は解決できてたつて事だからな。強いて言えば信じ切る事しかできなかつた訳だ」

これはもう本当に、痛感した。

俺にやれる事は何かと自問自答を繰り返し、ようやく見つけ出した解答も既に彼女は見付けていた。トラブル時ほど俺のできる事はなく、ただただ信じる事しかできない。

ただ、身をもって体感したから分かる。

店長が俺に結束バンドを信じとけばいいと言った真意も理解した。

彼女達なら、俺が特に何かをせずとも自分達で解決できるんだと。それだけの実力がもう結束バンドには備わっているんだと分かった。

俺はただ、胸を張って彼女達の演奏を信じて見ていればいいんだ。そして最大限に楽しむ事こそ、結束バンドのためになる。

「ゆう、くん……」

「まあ、俺は俺で今回いくつか収穫あったし、ライブは成功だと思ってる。ラストの曲で
きなかったのは残念だったけどさ、それ以上に後藤さんが夢を叶えてるところを見てた
ら、胸がもの凄く熱くなったんだ。本当に、自分の事のように嬉しかったよ」

「あ、そ、それなら……良かった、かな……へへっ」

後藤さんと色々作戦会議をしたりまともになれるよう努力と失敗を重ねてきた。

だからこそ、仲間ができて、バンドを組めて、一つの夢だった文化祭ライブで演奏し
ている彼女を見て込み上げてくるものがあつた。

そう、後藤さんは本当に頑張った。これは素直に褒めるに値する出来だ。

ご褒美に何か奢ってやるのも悪くはないが、それだと普段とあまり変わらないように
思う。

……よし、腹を括るか。

これが果たして褒美になるかは分からない。むしろ俺の自意識過剰な気がして気は
進まないけれど、彼女も一度は喜んでいたので間違つてはない……と思いたい。

俺と後藤さんのスマホから同時にロインの通知音が鳴る。おそらく打ち上げ関連の
事だろうが、今は見ないでおく。

後藤さんはスマホを少し確認しつつこちらに視線を戻してきた。

「いいか、後藤さん。一度しか言わないから聞くなりよく聞いとけ。あと絶対崩れんなよ」

「? う、うんっ」

軽く深呼吸。

ここには俺達二人しかいない。だから昨日よりは気持ち的にも楽な方だ。

彼女の頭に手を乗せる。

今ではあまりしなくなっただが、過去の作戦失敗時には泣き付いてくる度に後藤さんの頭を慰めながら撫でていたのを思い出す。何だか久しぶりの感覚だ。

後藤さんも後藤さんでいきなり俺の手が頭に乗せられた事でキョトンとした顔になった。

そして、俺も意を決した。

「よ、よく頑張ったな……ひとり……」

「……」

あ、やつぱ恥ずかしい。めっちゃ恥ずかしいわこれ。

喜多さんに感化されて俺も一回くらいなら久しぶりに名前と呼んでみようと思った

けど、ちよつとやばい。想像以上にこつそり精神持たてられた。思わず目を逸らす。

ピロントツという音が後藤さんのスマホから聞こえた。ロインの通知音とは違つたけど、多分メールか何かだろう。

むしろその機械音が余計静寂な保健室に響き渡り、俺の精神へ侵蝕ダメージを与えてくる。獣域ハウンドかよ。

無性に顔が熱くなってきたのでさつきと話を換えようとするも何も思い付かない。

完全に思春期発動しちやつてますわこれ。付き合つてもない女の子に呼び捨てで名前呼びは体に悪いです。陽キャとかりア充つていつもこんな感じで呼び合つてんの？

ボケる時かややくそテンションじゃないと無理だろこんなん。

そんで何も言つてこない後藤さんは俺を生殺しにしたいのかな。

崩れてはないけどさすがに何の反応もないとこつちが逆に溶けそうなんですが。

「……あつ、えへ、えへへ……ありがと……っ」

ニヤケ過ぎだろ。体全体波打つてんぞどうなつてんだ。

……まあ、少しは悪くないと思つてくれてんなら良いか。

はー暑い。暑いわ。体あつついわー。十月とはいえまだ暑い時は暑いもんだなーおい。暖房ついてんじやねえのこの保健室！ あつちい〜！

気を紛らわすために自分のスマホでログインを開く。さっきの通知はやはり結束バンドのグループログインだった。

そしてその一個下には虹夏さんからの個人ログインが18件ほど入っている。

へ 虹夏さん（天使） 三

今日

ここから未読メッセージ

《left》 優人くん大丈夫？ 14:02 《left》

《left》 大きなケガとかしてない？ 14:08 《left》

《left》 いっぱい鼻血出てたみたいだけど… 14:10 《left》

《left》 あたしもそっち行っても大丈夫、かな？ 14:12 《left》

《left》 お姉ちゃんに止められたから行けなかったや。ここは喜多ちゃん

に任せるね 14:18 《left》

《left》

《left》

優人くん？ 起きたらとりあえず連絡してね！

14:20

《left》

《left》

ぼっちちゃんはすぐ再生するから大丈夫って分かってるんだけど

優人くんはまだ分かんないから心配なんだよね

14:23

《left》

eft》

《left》

あたし達は校舎の近くで待つてるから、起きたらちゃんとどこか

痛まないか確認してから来る事。いいね！

14:25

《left》

ft》

+A a

こんな感じのが下にも続いていた。

さすがに心配しすぎでは……？ ケガの部類で言ったらこの前の男子達とドンパチ
やった時のがダメージあつただけだよ。

というか俺そんなに鼻血出てたんだ。喜多さんにも凄く出てたとか言われてたな。

何となく鼻を触る。うん、もう痛くはない。やっぱり俺の体はそれなりに頑丈なよう
だ。

とりあえず虹夏さんに軽く返信だけしておこう。

今さつき起きたんで帰りの支度済ませたら合流します、と。これでいいか。そうと決まれば早めに帰り支度をしないとけない。

いまだにデレデレウエーブ顔になつてゐる後藤さんに声をかける。海流に揺られるわかめかと思つた。

「後藤さん、さつさと教室戻つて帰る準備しよう。これ以上虹夏さん達待たせるのも悪いからな」

「へへへ……ふひつ……あ、うんっ」

崩れなかつたのはいいけど、そのままずっと変なニヤケ面と笑い声出してるのは普通に気持ち悪いな……。

もう少し普通に笑えないのかこの子。

自分達の教室に帰り支度を済ませる。

俺のところは展示物だったからクラスのヤツらが勝手に全部片付けをしてくれていて机も元通りになつていた。

早めに終えた俺が後藤さんのクラスの方に行くと、彼女は自分の教室を静かに見つめていた。

放送室から文化祭の終了が告げられ、昨日今日と続いていた特別な喧騒も既になく、今では片付けをしている生徒達の僅かな話し声と足音しか聞こえない。

後藤さんの隣に立ち教室内を覗く。

昨日はメイド喫茶で今日は執事喫茶だったか。そういった名残もほとんど残っておらず、机とイスがいつも通りに並べられ、誰かが持つて帰るのを忘れたかメイドの力チューシヤがポツンと一つだけ机の上に置いてあった。

あれだけ騒がしかった祭りが終わった後というのは、どことなく寂しさを感じさせる。

それもまた一興。イベントの醍醐味である証拠だ。こんな余韻を後藤さんも感じているなら、文化祭ライブをやって正解だったと胸を張って言えるだろう。

「さて、帰るか」

「……うん」

たまにはこんな余韻を抱えるのも悪くないか。

それに、今回の文化祭は俺の中でも過去一楽しかった。最後は色々あったけど、終わり良ければ全てよしだ。

ふう、今日は気分良く帰れそうだな。

そう思い、二人で歩き出そうとした時だった。

二人の男子生徒とすれ違う。おそらく片付けの最中なんだろう。

特に何も思う事なく行こうとした瞬間。

背後から声があった。

「あ、ダイブの人」

「ああ、ロツクのやべー奴か」

「ガッ……!?!」

あれま、可哀想に。ここに来て精神ダメージ与えられるとは後藤さんも思ってたなかったようだ。

まあライブでいきなりステージから飛び降りたらそういう印象にもなるわな。

校内での評価上がったと思つたらまさかの下がってるなんてさすがに不慣すぎる。

神は彼女を見放したのか。こりやあまた学校行きたくないとか辞めたいとか言い出しそうだなあ。夢の舞台でライブしたのにあんな事言われちゃ割かし誰だつてダメージ来るか。いや後藤さんの自業自得なんだけどね？

哀れ後藤さん。

そう思いながら心の中で合掌していると。

「鼻血大量の人もいるじゃん」

「イキったくせにキャッチミスしたダセー奴か」

「ガツ……!?!」

訂正。神は俺も見放していたらしい。

ああ、そうだよ。俺も盛大に悪目立ちしてたんだね。しかも一番かつこ悪い目立ち方だったもんね。そりゃああそうなるか、あつはつはつは!!

「後藤さん……早く売れて高校辞めてくれ。俺も一緒に辞めるから……」

「うん……」

余韻も何もあつたもんじゃなかった。

最後の最後にトドメさせられたのもう俺の精神はダメです。あとで虹夏さんに慰めてもらおう……。

こうして、文化祭ライブは無事終わった。

その犠牲として、俺と後藤さんのダイブミス事件は校内に噂としてすぐに広まり、ほぼ全生徒からの俺達二人の評価はどん底に落ちたのだった。

56. 番外編：そんなもしものバレンタイン

く喜多郁代の場合く

教室、隣同士の席にて。

「はい、優人君っ」

「ん？ いきなり何？ 何かでかいな」

「何って……バレンタインのチョコに決まってるじゃない！」

「……あー、そういやそうだったな」

「もうっ優人君ならもつと喜んでくれると思ったんだけど、何でそんなにテンション低いの？」

「いやあ、よく考えたらバレンタインって普通女子が男子にチョコを渡すイベントなんだったよなくって。俺のバレンタインって毎年父さんと二人で暮らしてた時に、『俺は妻と息子からしかチョコを貰わん』とかほざいてたから毎回俺が手作りで父さんにチョコ

「コ作って食わせてたんだよ」

「そ、そうなのね……」

「だから俺の中でバレンタインってのはそんな甘い青春イベントのイメージからかけ離れてる訳ですよ……。しかもそのせいで毎年チョコ作らないと何か調子狂うっていうか、ルーティーン崩してるみたいで気になっちまうようになったし……。どうせならもつと作って持ってきてくりや良かったな。……。あれ、てか女の子からチョコ貰ったのこれが初めてかも」

「……え!? そうなの!?!」

「小中学校ん時はいつもすぐ帰ってたからな。あんま交流とかなかったし」

「でも、ひとりちゃんから貰ったりとかは……。?」

「例え義理だとしても後藤さんがそんな青春コンプレックス刺激されるような事をすると思ってる?」

「……あく、そう言われると、そうよね……」

「そゆこと。つまり人生初バレンタインチョコは喜多さんからって事になりますな。初めて貰ったから何て言えばよく分かんねえけど、とにかくありがとう。……。義理とはいえ何だかこっぴどくかしくないなこれ」

「あつうん、一応手作りだけど……。優人君の口に合えばいいかなって。……。でもそっか、

私のチョコが初めてなんだ……」

「おう、大事に食べさせてもらおうよ……って、どした？」

「……え？ う、ううん、何でもないっ。あつ私、他の友達とか男子にも渡してくるね！

優人君はそのチョコすぐ仕舞う事、いい!？」

「え？ あ、ああ、分かった」

「じゃあまた後で！」

「……なるほど、どうりで他の男子が俺に殴りかかってこない訳だわ。みんなの分もちゃんと用意してるとは、さすが喜多さん。陽キヤはやっぱすげえな」

く 佐々木次子の場合く

喜多が去った後の教室にて。

「喜多は毎年毎年律儀だねく」

「え、喜多さん毎年友達とかにあんなたくさんあげてんの？」

「うん、ウチもさつき貰った。あれが喜多がみんなに人気な理由の一つで良い所なんだけどねえ」

「ひやくすげえな。あの様子だと他クラスの友達にまであげてんだろ？ 結構お金かかるんじゃない？」

「そこは度外視でしょ。友達をちやんと想ってる証拠じゃん？」

「そんなもんかねえ。女子つて大変ですな」

「喜多が渡しすぎな気もするけどね。ウチは女子友だど喜多にしか渡してないし」

「男子にはあげねえの？」

「ウチが男子にあげると思う？ このクラスはみんな仲良くてもウチは男子とはあんま絡みないヤツばっかだよ」

「ははっ、確かにそうだわ。どっちかっていうと佐々木さんは女子にモテそうな性格してるもんな」

「それウチの事サバサバした男勝りな性格って思ってるでしょ」

「いやそこまで言っていないやん。何なら自分で言ってる分ちよつと自覚ありますやん」

「女子からは友チョコ貰ってる方だからね。あ、清水は喜多からの一個だけか」

「へーへー、友チョコでも女の子から貰えて羨ましい限りですね。それに比べてこっちは所詮バンドのよしみで義理しか貰えない可哀想な清水さんですの事よ……」

「まあまあ、そんな自分を卑下すんなし。ほれ、これあげる」

「……はい？」

「コンビニで買ったブラッッシュサンダー。何も貰えないよりかはマシっしょ」
「ひと目で義理と分かるえげつなさってあるよな」

「何、ウチからの本命が欲しかったの〜?」

「別に、つて言うのと嘘になる」

「そこは素直だね」

「男子ならそういうもんだろ。まあサンキューな。そこら辺で適当に頂くよ」

「おやつ感覚か〜」

「ブラッッシュサンダーを大事そうに食べるのもおかしいだろ。つと、チャイム鳴る前にトイレ行つてくるわ」

「はいはい。……あ、そうだ清水」

「ん〜?」

「喜多つて基本的に男子には市販品ばつか渡すし、仲の良い女子には手作りで小さいのくれるんだけどさ」

「? ああ、それがどうしたんだ?」

「清水に渡したやつ、あれ手作りの中でも一番大きいやつだよ〜」

「……」

「ほら、早くトイレ行かないとチャイム鳴るよ〜」

「……今度からからかい上手の佐々木さんって呼んでやろうか……」

く伊地知星歌の場合く

スターリーにて。

「おい優人、バイト始める前にこれやるよ」

「……まさか、チョコですか？」

「それ以外の何に見えるんだよ」

「市販品？」

「お前は私に何を期待してんだ」

「や、店長絶対料理できないだろうし、ましてやお菓子作りなんて何を作り出すか分からないものじゃないから……」

「どうしてほしい？ 四の地固めか？ ヘッドロックか？」

「も、もうしてるつもりしてるがア……ッ!？」

「つたく、あんま大人をからかうんじゃないやねえつつの……」

「ハア……ハア……というか、店長もこういうイベントに乗つかるもんなんですね。」

てつきり私には関係ねーしとか言い出すと思ってました」

「毎年虹夏がご丁寧手作りチョコをくれるからな。私もその過程ですぐ返せるように買うようになってたんだよ。お前のはそのついでだ」

「いわゆるファミチョコってやつですか。さすが虹夏さん、家族にも平等にあげるなんて何て優しい人なんだ……。やっぱ天使だよあの人！」

「うちの妹を人外にすんじゃねえ。つうか何でチョコやった私じゃなくて虹夏の方が株上がってんだよ」

「何言ってるんですか店長っ！ 虹夏さんの株なんて一生上がってくもんでしようが！

何たって俺がその株買い続けるんで!!」

「そんなきつぱり言われるとは私も思わなかったわ。お前最初に比べるとほんと遠慮なくなってきたよな。まあいいけどさ」

「店長は大人としてちゃんと尊敬してるんで基本的に全部ぶつつけてもいいかなって」

「お、おう……別にそんな大した事はした覚えないしそう思われる筋合いもないが……まあ、なんだ。私もお前の事はちよつとした弟分みたいに思ってるから、今後も何かあったら頼ってきていいぞ」

「ほんとツンデレですよね店長」

「よし、逆エビ固めを、ご所望のようだな」

「足がああああああああああああああああああああああああああああああああッ!」

（PAさん（本名不詳のため）の場合）

スターリー、PAブースにて。

「清水君、ささやかですがこれ、バレンタインチョコです」

「あ、どうも、何か気を遣わせてしまったみたいですいません」

「あら、清水君は私がこういうイベントとは無縁だと思ってるんですか？」

「いや、そういう訳じゃないんですけど……スターリーっていつもスタツフ含めて女性の人しかいないんで、俺だけ男だしそういう気遣いさせちゃってるのかなって思うと少し申し訳ないなって」

「ふふつ、構いませんよ。実際私も誰かにチョコをあげるなんて久しぶりですし、たまにはこういうのも悪くないかなと思っただけ」

「そうですか……。なら、ありがたかったですね。ありがとうございました。ちゃんとホワイトデーにはお返ししますんで」

「あらあら、ではその時を楽しみにしていきましょうかね」

く山田リヨウの場合く

スターリー、端に置かれているテーブルにて。

「優人、チョコ」

「なん、だと……？ あのリヨウさんが、チョコを……持つてき」

「ちようだい」

「だろうと思ったよちくしろうツ!! そういうオチだつてのは何となく分かつてた!」

「オチとかいいからチョコちようだい」

「そしてどこまでもマイペース! ほんとブレねえな! ……虹夏さんからは貰つてないんですか?」

「もう食べた」

「強欲な壺か?」

「私は今類を見ないほど甘味を欲している。だからちようだい」

「喜多さんからは?」

「あとで余った分全部貰う」

「貪欲な壺か？」

「疲れた時は糖分が良い」

「何かしてたんですか？」

「ここまで歩いてきた」

「強欲で貪欲な壺か？」

「優人っ、今はボケなくていい！」

「オメーだよボケてんのは」

「私に……どうか私に草以外の甘くて美味しいチョコをお恵みください……！」

「ちつつつつか!? そうやってすぐ自分の武器使ってくるな離れる虹夏さんから貰って食べたチョコの香りがほんのりするくらい顔を寄せてくるなああー!?」

「ありがとう、これで私はしばらくチョコでやっていける」

「い、一応コンビニで買ってて正解だったな……」

「……まだ残ってるか分からないしジャンプしてみて」

「カツアゲか!!」

く廣井きくりの場合く

不法侵入されたスターリーにて。

「ゆうきゆうんいる〜!?」

「居留守使いたいとこですけどうるさくて堪らんのでお相手しますよ。何の用ですか？」

「今日ってバレンタインじゃ〜ん? だからチョコ持ってきてあげたよ〜ん!」

「チョコ買うお金あったんですね」

「失礼なあ〜! 私だってそのくらいのお金は持つてまあ〜す!」

「今日もいつも通り酒臭いな……またどっかで飲んできたんですか?」

「うえへへ〜覚えてなあ〜い!!」

「もう少しポリューム抑えてもらえませんか? ボーカルしてる分声めっちゃ通ってるんで」

「はいこれチョコ!」

「全然話聞かねえなおい。……ん? 何かこの箱軽い?」

「きくりお姉ちゃんが奮発して買ったやつだぞお〜! とくと味わいたまへ〜!」

「紐が解かれてる……？ チョコ入ってるにしては軽すぎるよな……？ ちなみにきくり姐さん、何のチョコ買ったんですか？」

「ん？ ウィスキーボンボンだよー！ ゆうきゆん高校生だしこのくらいなら少し食べても平気かなって！」

「……きくり姐さん」

「何々どした？」

「箱の中身、空なんですが」

「……あ、覚えてないけど我慢できなかつたか私いー!!」
「全部食ってんじゃねえかツツツ!!!」

く清水イライザの場合く

スターリー、入り口前にて。

「もおくまた迷惑かけたんですか？ 今日ライブの打ち合わせあるって言ったのニく！」

「すいませんイライザさん。ほらきくり姐さん、イライザさん迎えに来てくれましたよ。」

……ダメだ、完全に寝てやがる」

「いつもの事なので大丈夫だよウくん。いつもは放つていくか引き摺ってるしネ」

「ボーカルの扱って……いやこの人の場合はそれが普通か」

「そゆコト。あ、ついでにユウくんこれあげます！」

「ハッ!? こ、これは……!?!」

「チョコではないですけど、ごちうさのバレンタイングッズです！ ユウくんこの前口インで行きたいって言ってたもんネ！」

「いいんですかこんなの貰っちゃって!? 結構高かったんじゃない!?」

「いいのいいの！ 私も欲しいグッズ買えたから気にしないデ〜！」

「ありがたすぎる……! イライザさん、このお礼はホワイトデーか後日にちゃんと返しますね！」

「楽しみにしとくヨ！ じゃあユウくんまたネ〜！ またロイン通話でアニメ語りまシヨ〜！」

「ぜび〜！ 持つべきものはやはり同志だなあ……」

〜大槻ヨヨコの場合〜

ロイン通話にて。

『清水優人』

『通話一言目にフルネーム言ってくる人初めてですわ。何ですか？ 今一応バイト中なので、できるだけ手短にお願いします』

『え、そうなの？ じゃあ単刀直入に言うけど……いい、一応バンドメンバーみんなにチョコ買ったんだけど、余ったから捨てるのももったいないしどこかに処分手伝ってくれる人いないかな〜って思ってたのっ』

『はい』

『で、でも私達みんな女子だし？ そんないっばい食べられる訳じゃないから……だ、男性に当て擦ろうとした訳！』

『言い方最悪だなおい。ちなみにどのくらい余ったんですか？』

『……じ、十個くらい』

『買いすぎだろ誰に渡すつもりだったんだ』

『なっ何よ！ ファンなら喜んでくれると思っただけじゃない！ あと楽器屋の店員さんとか！ どうしてみんな拒否してくるのよお!?!』

『いきなり無言でチョコ渡されても大体の人は困惑するでしょうよ。つうか普通そーい

うのつて貰う貰わない以前にバンドマンからじゃなくてファンから貰うもんだろ？
コミュニケーションなどこにぶつ飛び過ぎですよトホホさん」

『せめてヨを付けなさいよ！』

『そんで？ そのチヨコ十個分全ての処分を俺にしろつて事ですか？』

『あら、勘が良いじゃない。どうせ貴方の事だから誰にも貰ってないんでしょ？ しょうがないからと、友達の私が恵んであ』

『間に合ってます』

『え？ あつ、ちよ』

「……憐れなり」

く伊地知虹夏の場合く

二人以外買い出しで誰もいないスターリーにて。

「まさか後藤さんまで買い出しに行くなんて……気でも触れたか……？」

「普通に少しは成長したかもって喜んであげなよ。まあ喜多ちゃんに笑顔で連れてかれてたけど」

「リヨウさんは喜多さんに追加のチョコ買わせる気でしたね。ただでさえ喜多さんは友チョコいっぱい渡してたのに、鬼かあの人」

「喜多ちゃんの事だから喜んで買ひ与えるんじゃない？」

「……うん、それもそうか」

「……」

「あー、それにしても掃除とか諸々は終わったし今日はどこもライブないからバイトつつつても暇ですなえ」

「だねー……」

「平和だあ。このまま少し惰眠でも貪るかあ……？」

「……ねえ、優人くん」

「くあ……ふあい……？」

「今日さ、優人くんってチョコとか貰ったの？」

「え？ ……まあ一応、喜多さんとか店長とかから貰いましたけど。クラスの友達とかPAさんやイライザさんにも貰えましたね。イライザさんはチョコじゃなくてグッズでした」

「……そっか」

「それがどうしたんですか？」

「うーん……あたしも、ね。一応お姉ちゃんとかみんなに渡す用で作って渡したんだけど、さ。優人くんもいるかなあ……って思ったんだけど、そんなに貰ってるならあたしからのはいらない……かな？」

「いりますツツツ!!!」

「うわあッ!? 声でか!?!」

「虹夏さんからチョコ貰えるんですか!?!」

「え? えつとお……欲しいなら、あげちゃおうかな……なんて」

「欲しいです!! あ、でもどうしよう。うちは仏壇とか祭壇ないからお供えができねえ……ツ!!」

「そこは普通に貰って食べてよ」

「俺が? 虹夏さんの手作りチョコを、食べる……? それ俺も神格化するってコト!?!」

「あたしも優人くんも人のままでけど!?!」

「これで普通の人間とかマジかよ……。もったいなさすぎるだろ……」

「もう、何言ってるのー? ほら、はい、あたしのチョコ。ちゃんと食べてよね? 飾るとか保存しとくとかダメだから!」

「一口一口感謝の拜みをしながらいただきます」

「ねえ実はあたしと距離取りたい訳じゃないよね? 言つとくけど遠慮なくあたしは近

づくよ?。」

「うわあ、天使だッ!」

「だからもつと人として見てつてばあ〜!」

〜後藤ひとりの場合〜

後藤家、ひとりの部屋にて。

「ま、やっぱりこうなるわなあ」

「ふ、ふおうしたの?」

「いんや。去年と変わらさず後藤さんには俺がチョコ作って食わすのがこれからの恒例になりそうだなって」

「あう……」

「いい、いいから。別に料理苦手な後藤さんにチョコ作らせるほど俺も厳しくねえから」
「……」

「まあ、今年は縁もあつてか結束バンドや店長達からも貰えたし俺的には恵まれた年になつたけど」

「……あ、あのっ」

「どした？」

「わ、私は、確かにチョコ作れないけど……ちゃんとお礼の気持ちも伝えたいから……」
「後藤さん、これ……？」

「今日、喜多さん達と買い出しに行った時に……買いました……」

「後藤さんが……俺にチョコを……？」

「ゆ、ゆうくんっ」

「え、あ、はい……？」

「い、今はまだ……こんなのしか渡せないけど……いつかは、もっとちゃんとして、手作りのチョコを渡せるようになるから……だから、これからも……よろしくお願いします」

「……っ」

「……ははっ、ただのバレンタインなのに何畏まってんだよ」

「あっうっ」

「でも、そうだな。これからは楽しみが増えそうだ」

「が、頑張る……」

「おう。……そんじゃま、来年は一緒にチョコ作ってみるところから始めてみるか」

「……う、うん！」

5.7. 人の評価なんて案外変わりやすい

文化祭の振替休日も終わり、久々にゆっくりと自分の家と後藤さん家でのんびり体力を回復した翌日。

学校では既にいつも通りの日常が帰ってきていた。

「校内での俺に向けられる視線が好奇すぎて気分悪いから後藤さん連れて早退していいかな」

「まだ朝のHR前だけど!?! あと何でひとりちゃんも巻き込もうとしてるの!?!」

誰かにとつては日常かもしれないが、俺にとつて今朝はいつもの日常とは少し違っていたのだ。

文化祭ライブでの後藤さんダイブと俺のキャッチミス。あの一件の騒ぎは校内ですぐに広まり絶賛拡散中らしい。

高校生の拡散力って凄いやね。後藤さんと一緒に登校してるだけなのに色んな生徒

から見られるし。

男子の睨むような視線、女子のひそひそ話十好奇な視線。まるでちよつとした有名な気分だ。それも週刊誌にスキャンダルされた方という悪い意味で。

「普通ああいう視線向けられたら真つ先に壊れんのが後藤さんだろ？ でも一昨日からずつと機嫌良くて今日も一生にへら顔してたから周囲の目に気付いてなかったんだよ。後藤さんがいつも笑つてるとかむしろ異常だろ」

「優人君は笑つてるだけで異常って言われるひとりちゃんの気持ちもつと考えた方がいいと思うわ……」

いやまあ笑つてる理由については一応知つてるけどさあ。

果たしてあの店長にバイト辞めるって言えんのかね彼女は。絶対無理だと思うから放置してるけど。

「とりあえずあの調子だと今日一日中は自分の世界入つてるだろうし心配しなくてもいいかな」

「珍しいのね。ひとりちゃんの教室見に行かないの？」

「今の状態で行ったらまた変な目で見られるの確定だろ。あと何かメイド喫茶以来あの

教室には行かない方がいいって何故か俺の脳がそう働きかけてきてるんだよね」

「あの時記憶消したはずなのに本能で拒否反応出ちゃってるわね……」

「ん？ 何か言った？」

「い、いやつ、何でもないの！」

しばらくは二組に行くのやめておいた方がいいか。

俺と後藤さんのためだ。これで今以上に変な噂が流れないようにしないと。

「あ、男子はどうか分からないけど、女子の優人君を見る視線は多分バカにしてるものじゃないと思うよ」

「……え、何で分かんのか？」

「私のロインでも結構優人君達の事が流れてきたから、文化祭終わった日の内にバンドのボーカルとして私がちやんと事の経緯と誤解を上手く解けるように広めてって説明しておいたの。だから少なくとも女子には友達づてとか部活の先輩とかにもちゃんと伝わってるはずよ」

「やつぱ持つべきものは第二の家族だな！ ありがとう喜多さんつ、女子からの視線ってマジ怖いからほんと助かる！ お礼に今日はジュース奢らせてくれ！」

「……え？ 女子からの視線？」

喜多さんの顔の広さからして一年の女子はほぼ大丈夫のはず。そこでそこから先輩とかにも説明が回ってるなら女子に関しては何とんどクリアだ。

女子の噂話好きは異常って聞くし、拡散力も段違いだからすぐ広まったんだろう。ほんとありがたえ……これでもう大半は気にしなくて済むぞ。男子からの視線に関してはもう知らん……と言いたいところだけど。

「……ん？　じゃあ俺が女子に見られてた理由って何なんだ？　まだ説明回ってない人とか？　喜多さん他の女子からの今の俺の印象って分かる？　というかどんな説明したんだ？」

「……えつとお……今回は失敗しちゃったけど、いざという時は体張って自分の身を犠牲にしてまで守ってくれる人って……言ったかな……」

自分の身を犠牲にしたつもりは一切なかったんですね。

間に合わなさそうと思つて慌てて飛んだらミスってああなつてしまっただけで、あれに関しては完全に俺のドジです。上手く良い方に捉えてくれたようだから良いけど。

しかし、喜多さんの言葉のままに説明が回っているとしたら、だ。

俺は今校内の大半の女子の中で体張って守ってくれる男子というイメージになつてる訳か。捉えられる印象としては悪くない。むしろ男としてこの上ないくらい好解釈

だ。

「なるほど……普通に考えれば俺のモテ期到来だ……」

「モテ期!?!」

で、よく考えると女子だけに説明したと喜多さんは言っていたが、こういった噂話は基本的に会話中心のはず。そもそもって会話をしている場合その言葉は必ずその場の女子以外……つまり男子にも聞こえる事がある訳で。

俺の評価がマイナスから這い上がってプラスに変わった場合、女子から好意的な視線を向けられる俺を見る男子の視線もまた意味が変わってくるのが必然。

そう、つまりだ。

「学年問わず男子の敵が増えただけじゃん。ならいいか」

「いいの!?!」

「女子はともかく、男子くらいなら別にまあ何思われてても構わないかなって。他人の評価よりも身内の評価の方が大事だし。喜多さん達が分かってくれてんならそれでいいわ」

「いいんだ……」

いいんだよ。グリーンだよ。

「それに、このクラスのヤツらは男子含めて俺を変な目で見てこないからな。何だかんだ良いヤツらばっかつて事を再認識したよ」

「ああ、うん、確かにそれはそうね」

「よっしや、懸念も解消できたし、HR始まるまで田中達と駄弁つてくるわ」
「ええ、いつてらっしやい」

普段は追いかけて追いかけるような関係でも、信頼し合えてバカやれる男友達というのはこういう時本当にありがたいと思う。

俺が「よっ」と手を上げると向こうも何人かそれを返してきた。

そして。

「来たな清水。女の子を身を挺して守る事は男として尊敬に値するが、それはそれとして女子からの評判が上がるのは許さんツ。という訳で股間への飛び蹴り十発で許してやるツツツ!! しかもやつぱりバンドメンバー全員可愛かったじゃねえかアー!!」

「よおーし、勝手に変な評価されてこっちも鬱憤溜まってんだ。憂さ晴らしにまずはオメーの残り少なえ坊主頭の毛を全部ツルツルにしてやらあ!!」

男子達との熱い死闘が幕を開けた。

「今日のぼっちちゃん、ずっとキラキラしてるんだけど」

「虹夏さん、俺への言及はなしですか。またケガしたんですけど」

「また無茶してケガしてきた優人くんにかける言葉なんてありませんっ。あたしだっていつも優しい訳じゃないんだからね！」

「リヨウさあくん」

「仕方ない、その辺で拾った草あげる。薬草代わりに使うといいよ。多分効果ないけど」

「ほんと期待を裏切らないなアンタ」

放課後、スターリーに集合したのはいいのだが、後藤さんの奇妙な笑顔にみんな違和感を拭えないようだ。

「……ほら、優人くんこっち来て。手当てしたげるから」

「アツ……」

「伊地知先輩!? 優人君真っ白になりましたけど!?!」

「何で!?! 手遅れだった!?!」

虹夏さんのツンデレ、最高ですよん……。

ほんと伊地知家の姉妹は似てるな。二人共ツンデレの素質しかない。これが見れるならもう死んでもいいや!

もちろんそのまま死ぬなんて事もなく、俺は虹夏さんの愛情たっぷり（誇張）手当てをしてもらいながら事情説明をした。

「あー、そんな事になってたんだ。優人くんも大変だね〜」

「ふへっ、ある意味女子からも男子からも熱い視線を向けられる俺って人気者ですね」

「もうやけくそポジティブになってるじゃん。あとぼっちちゃんの笑い方うつってるよ」

ちなみにあの後、田中達からは『お前が良いヤツだなんて最初から知ってるし他人からの評価なんて知らん。身内の評価だけ信じてりやいいんだ。このクラスの結束力舐めんよ。結束バンドだけに☆』という大変ありがたいお言葉とクソくだらないダジャ

レを頂いた。

最後のがなければ髪の毛一本くらい残してやったのに……。

「そういえば件のぼっちちゃんは何であんなご機嫌なの？」

「ああ、ギターヒーローでの動画を直樹さ……後藤さんの父親が収益化してたらしくてですね。いつも使ってるギターは修理も可能だけど、どうせなら自分のギターも買って見たらつて今までの広告収入含めていきなり大金手に入ったんですよ。だから後でバイト早めに切り上げてギター買いに行く予定です」

「へへ、凄いな。まあ、ぼっちちゃんの動画人気だからそのくらいは普通だったり？ 今度宅録する時見せてもらうとかできないかな？」

「それで大体十万前後のギター買うとして、あとの余ったお金を全部ノルマ代にあててバイト辞めるらしいです」

「サラッと重要なこと言ってるじゃない!? えっ!? ぼっちちゃんバイト辞めつ……ええ!」

虹夏さんが混乱しておられる。無理もない。

俺も最初聞いた時は随分と驚いた。俺がバイト辞めようとした時は頭ドリルしてきたのに、何で自分の時は迷わず行動力発揮してんだろうと思ったもん。

「何で優人くんその場で止めなかったの!? 止めなきゃでしょ!」

「いや、よく考えてみてくださいよ虹夏さん。バイト辞めたってどうせ練習はここでするんだし、何よりあの店長を前に後藤さんが辞めるなんて言い出せると思ってるんですか?」

「……い、言われてみれば……」

「なので俺はあえて放置してるんです。あんなキラキラした笑顔の後藤さんなんてこの先一生見れないかもしれないんですから、見ておくなら今の内ですよ。多分あとでゴミ箱の中に入ると思うので」

「もうそこまで予測してるんだね」

これまでどれだけの作戦を練って失敗してきたと思っている。

俺が作戦を全部考えてサルでも仲良くなれる方法とか編み出したのに、全てマイナス方面に結果を出してきた後藤さんだぞ。

彼女自身が考えた作戦なんて上手くいくはずないでしょうに。
明るくいられるのもあと数分しかないよきつと。

「あ、ぼっちちゃんが超スーパーぼっちちゃんになってる」

「ダニイ!」

あ、あの野郎……！ 金色のオーラに青い稲妻を迸らせてやがるッ！

間違いない……あれは超サイヤ人2の時のソレだ。俺でもまだ習得しきれていないのに、ヤツはもう俺の一步先へ進んだというのか……!? 江の島でトンビにやられた時、ヤムチャになつていた事から才能はあると思つていたが、まさかこれほどとは……。

「チイツ、俺も負けてられん!! 必ずきさまを超えてやるぞ、ゴトロットー!!」

「優人くんキャラ変わってるよ。どこぞの王子様みたいになってるよ」

「はあああああああー!!」

「ああダメだ。同化しちやつた。こういうところは似てるんだからもおー!!」

で。

「あ? バイトが何だつて?」

「あつこれからも誠心誠意心血注いで仕事がんばりましゅ……」

「何で突然の決意表明?」

案の定失敗したゴトロットはゴミ箱の中へと入っていた。

ふんつ、情けないヤツだまつたく。たかが戦闘力5にも満たないヤツにやられるなん

てな……。

「ほら、言った通りになつたでしょ？」

「さすが理解者は違うね。あと髪の毛逆立つてるから早く元に戻しなね」

「戻し方分かりません」

「……はあ」

あの、溜め息吐かないでもらえますか？ ノリでやったらこうなっただけなんですつて。

真顔で見つめてくるのやめて。どうした、笑えよニジータ。

「はーい、私が戻してあげるから優人君はこっち来ましようね」

「どわつ、喜多さんいきなり髪くしゃくしゃにしてくんのはやめろつて！」

「特にセツトしてる訳じゃないんだから別にいいじゃない。ひとりちゃんの事は伊地知先輩に任せましょ！」

いやそういう訳じゃなくて女子に髪触られるのは何かむず痒くて落ち着かないんだよ。

何で普通にこんな事できるのこの人。陽キャって距離近いのがデフォか何かなのか

!?

ん。虹夏さんに関してはまだ俺の方を見てすらいねえし後藤さんの方に向かってますや

完全にこつちに興味なくしてますやん。

「♪」

「……」

何で男の髪触つてご機嫌なんだろう。陽キャの考えてる事はよく分からん。

このくらしいのスキンシップが普通なのかな。だとしたらいったいどれだけの男子を勘違いさせてきたのやら。こんなの男子の脳破壊案件だろ。期待させるだけさせていざとなると轟沈つてか。惨いな喜多さん……（偏見）

「優人、見て見て」

「何すか」

喜多さんに髪を弄られてる間にリョウさんがおそらく草の茎を持って寄ってきた。

そしてそれを自分の前頭部辺りに差して、

「ピッコロ」

「ぶふおツ!!」

「あつちよつ、動いちやダメよ優人君!」

だ、だって……リヨウさんが、リヨウさんがいきなり変な事しだすから……!

こんなの吹き出すに決まってるでしょうが! 真顔でやってくるのもまたズルい。ちくしょう、この人にこんな一発芸があつたとは、やるな……。

「そつちはいつまでふざけてんのさ。ほら、ぼつちちゃんギター買いに行くらしいからあたし達も楽器屋さんに着いて行くよ」

「楽器屋!?」 なら御茶ノ水に行こう。そこならぼつちの求めているギターも絶対あるはず。そしてあわよくば私が次買うベースも見に行きたいっ!」

いつの間にか虹夏さんが戻ってきていた。そしてリヨウさんは楽器オタクと化していた。

御茶ノ水か……そういや行つた事ないな。何で御茶ノ水なんだろ? 有名な店があるとか?

「ん? どしたのぼつちちゃん?」

「あつあの、店長さんが今欲しい物って何か聞いてきてもらえますか……？」

あ、店長に物でも献上して辞めさせてもらおうとしてんなこのアホピンク。

そんな事したらむしろ後藤さん気に入ってる店長の事だから余計辞めさせてもらえなさそうだけど。

呪縛が強くなるだけだぞ後藤さん。自分で自分の首を絞めてるぞ後藤さん。選んだ選択肢が全て愚策だぞ後藤さん。

分かったと一言だけ言つて虹夏さんは店長の方へ向かつて行った。

「——つてぼつちちゃんと言つてたよ。お姉ちゃん誕生日近いし、プレゼントかな？」

「特にない」

「いらねえだつてー！」

いや虹夏さん言い方。

めつちや棘ある風に言うじゃん。

「終わった……」

「ぼつち、私は」

「はいそこ便乗して後藤さんにたかろうとしない」

「優人……めざとい……」

「リヨウさんの考えてる事も最近分かってきたんで」

作曲関連以外でリヨウさんが後藤さんに近づく時は大抵たかろうとしてる時だ。

それが陰キャ思考で共感した時。今回は完全に前者だったので阻止させてもらった。むしろ何で買ってもらえると思ってるのかが不明だけど。

「ほらみなさーん、楽器屋さんに行きますよー！」

喜多さんの掛け声と共にスターリーを出す。

後藤さんは予想通り口から魂が出てるので中まで押し込んでおいた。魂に触れると
いうのは変な気分だ。

「にしても、店長って誕生日近いんですか？」

「うん。といつてもクリスマススイブだからまだ二カ月後だけどね」

「へえ、何ともロマンチックな日に生まれたもんですね」

「あははっ、確かに！ だから可愛い物好きなのかも！」

何その解釈めっちゃ可愛い。そんな事が浮かんでくる虹夏さんも可愛い。

「てことは店長俺と三日違いなのか」

「え？ そうなの？ 優人くんの誕生日っていつ？」

「12月21日です。だから父さんからはよくクリスマスプレゼントと一緒にされたもんですよ」

「そうなんだあ。なら今年の誕生日はみんなに祝ってもらえるかもね！」

「別にいいですよ。虹夏さん達の誕生日も今年はまともに祝えなかったし、来年はちゃんと祝わせてください」

バンド活動とかでバタバタしてる内に虹夏さん達の誕生日が過ぎたせいで、今年は結束バンド内で祝えなかったからな。

来年は俺も何かプレゼント用意しておかないと。まあ、その前に店長のプレゼントか。早めにリサーチしておこう。可愛い系だったら何でも喜んでくれそうだけど。

「ほほう、これはみんなの誕生日が楽しみだね？」

「過度な期待はしないでください。所詮は男が選ぶものなんで」

「え？ こういうのは気持ちが大それたよ？」

「何々、何の話してるんですか？」

「誕生日の話！ 来年はあだし達の誕生日に優人くんが素敵なプレゼント用意してくれ

るって!」

「虹夏さん!」

何てこと言いだすのこの人! 誇張にも程があるよ!

そうやってプレッシャー出してくるのダメだと思えます!

「優人、私今年の貰ってないから今ちようだい。ベース買ってほしい」

「限度があるだろうがよ限度が」

「ぼっちちゃんは今優人くんに誕生日プレゼント貰ったの?」

「え? あっはい……ハンドクリーム貰いました……」

「おおー、ギターリストに持つてこいだね。さすが優人くんだ!」

やめろ、茶化すな。そんな目で俺を見ないで。

ハズいから。期待されるとそれはそれでやりにくくなるから!

「だあーもう! さっさとギター買いに行きますよ!」

という感じで、俺達は誕生日の話で時間を潰しながら御茶ノ水駅を目指したのだつた。

58. 後藤ひとり生誕特別番外編：メモリーズ・ラスト

2月21日。

今日は私、後藤ひとりの誕生日だ。

といつても特別な事なんて何一つもなく、友達もない孤独な私にとっては家族以外と過ごす事のない平凡以下のイベントである。

家族以外からは存在自体ともに認識されず、私の誕生日を覚えてる人なんて誰一人としていない。

だから自分が生まれた日に盛大に祝われる事などこの先も一生ないと思っていた。孤独で、親しい人なんていなくて、けどそれも毎年繰り返し返していると当たり前だと思ふようにもなった。だってそれが私の普通だったから。いつしかそう思う事で寂しさすら感じなくなっていたんだろう。

だけど、そんな当たり前を壊してくれた人がいた。

少し話を変えよう。

今の現状を細かく表現するには私と彼との過去の記憶を共有する必要があると思ふ

から。

私には幼馴染の男の子がいる。

清水優人。

高校の身体測定の日、の帰り道で聞いた情報だと身長は168cm。髪は明るめの茶髪で、セツトしてないのにツンツンした頭が特徴っぽい？寝癖対策でたまに軽くワックスを付ける時もあると聞いた事があるけど、今は分からない。

顔は……私なんか勝手に勝手に判断するなんて烏滸がましいにも程があると思うけど、個人的には整っている方だと思う。少なくとも私は嫌いじゃない。むしろ逆だ。彼の顔を見るととても安心する。こ、個人的に……。

そんな彼は同じ年で、優しく、いつも一緒にいてくれるたった一人の友達……いや、家族みたいな人……？

小さい頃から家族ぐるみで仲が良く、私も彼と家で何度も話したり遊んだりもした……はず。あれ、どうだったっけ？主に彼が積極的に話しかけてくれて、私も話してた覚えはあるけど……何して遊んでたんだらう。どうした、記憶の引き出しなさすぎるぞ後藤ひとり。

ともかく、小学三年生まで私と彼は学校ではなく家で遊ぶ仲であり、お互いを『ゆう

くん』『ゆーちゃん』『ひとりちゃん』『ひーちゃん』と呼び合う程の仲良しさんだったのだ、ふへっ……。

それまでは私も今のように極度の人見知りとコミュ症を發揮してた訳ではなく、ゆうくんがいるからまだマシな方だった……と思う。

だけど、ゆうくんが父親の都合で一緒に遠くに引越すと聞かされた時、子供ながらに頭が真っ白になって何も考えられなくなりずっと部屋で静かに泣きじやくっていた記憶がある。あの日から心の中に穴が開いたような感覚にずっと襲われていた。

自分の中の時計が止まり、そしていつも一緒にいてくれた人がいなくなつて、その後はお母さん達もふたりが産まれて育児に奔走しながら忙しそうにしていた後に、いつの間にか私は今の私になつていた。

ゆうくんと一緒にいれなくなつた事で、ただでさえ大人しい性格がさらに暗くなり思考もネガティブな方へとシフトしていったのだ。

今思えばシヨックの部分が大きかつたんだと思う。それ故に友達なんて当然できるはずもなく、中学でギターを始めるまではただただ学校に行つて帰るだけの作業のような毎日を送つていた。

もはや懐かしい。今でも私は覚えている。学校の帰り道、あまりにも何も無い自分が嫌になつてつい出てきた独り言が『お腹の中に戻りたい』だった事。

小学生の私、何言ってるんだろ。なんて思うけど実は今でもたまにそう思う時があるから根本的な所は何も変わってないんだと思う。

中学では心機一転、ゆうくと再会した時に少しでも良い格好を見せられるように、あと色んな人にちやほやされたくて陰キャでも輝けると言うギターを始めた。

そして、ヒーローが好きと言っていたゆうくんに影響されてギターヒーローという名義で動画投稿も始め、毎日練習漬けの日々がつづ「はいそこまでー」……え？

「長い、ながいわ。いつまで続くんだそのモノローグ」

「うええあぁッ!?!」

ゆ、ゆうくん?! 何で私の独白の中に入ってきてるの!?

というかどうやって乱入してきたの!?

「いきなり自分の世界入りだしたのはそっちだろ。何昨日みんなから貰った誕生日プレゼント眺めながらトリップしてんだよ。いい加減片付けなさい」

「うう……せ、せつかくこれから無限修行編に入るところだったのに……」

「そういうのは友情努力勝利の三つを続けて言えるようになってから入れ」

ゆ、ゆうじよ……ウツ、青春コンプレックスがあ……!?! 二つ目はまだしも最初の

ハードルが高すぎるう……！！

「まったく……いくら今日誕生日で主役といつても、俺がこつちに泊まつてる以上ガサツな生活はさせんからな。飯食ってケーキも食べたんだし、さっさと片付けてのんびりしようぜ」

「は……」

今日は日曜日。でもってもう夜だ。学校もバイトもなく、本来であれば誕生日としては一番地味な休日になっていたかもしれない。

だけど昨日はバイトがあつて、一日早く結束バンドのみんなが私の誕生日を祝ってくれたのだ。もちろん店長さんとPAさんも祝ってくれた。

どうやらゆうくんが私の誕生日をみんなに言っていたらしく、密かに準備してくれてたらしい。

誕生日自体は日曜だしどうせ土曜は何もないんだろうなと思っていたところに、みんなでサプライズしてくれたのだ。

前々からプレゼントを用意してくれていたようで、虹夏ちゃんからは女子高生に今人氣らしい洗顔セット、喜多ちゃんからはギターのお手入れグッズを何個か。

リョウさんからは多分そこら辺に生えてる草で作った冠、ゆうくんからはちよつと高

いピンク色のワイヤレスイヤホンを貰った。

店長さんとPAさんはケーキと出前を頼んでくれていて、昨日は私史上最も多くの人に誕生日を祝われた日になっただろう。

本番は翌日だ。また家族以外の誰にも祝ってもらえないと思っていたから、本当に嬉しかったし私なんかのためにわざわざすみませんという申し訳ない気持ちにもなっていた。

昨日のサプライズを仕込んでいた張本人は目の前で独り言を呟いている。

「洗顔セットは浴室として、メンテナンスグッズは押入れの中でいいか。草の冠は……一番どうしたらいいか分かんねえな……後藤さんをどこかの民族扱いでもしてんのかあの人」

私の代わりに片付けをしてくれようとしていた。こういう面倒見の良さにどれだけ救われてきたことか。

自分自身で諦めて受け入れていた当たり前をゆうくんはいとも簡単に壊してくれた。そもそもだ。去年の誕生日だってそうだった。

ゆうくんと再会してから毎日会うようになって、彼が私の部屋にいる事がもう当たり前になっていたのだ。

前回の私の誕生日、つまり再会してから初めての誕生日は前日から私の家に泊まり、日付が変わった瞬間に直接おめでとうと言ってくれた。

たったそれだけの事が、私にとっては凄く非日常的で、甘受していた当たり前とは程遠くて、もの凄く嬉しかったことだ。

その時に貰ったハンドクリームはありがたすぎて最初使うのももつたないから引き出しに入れたまま永久保存していたんだけど、後にゆうくんに見つかり使わなきゃあげた意味ねえだろと怒られてしまったところまでが素敵な思い出になっている。

誰が何と言おうと私にとっては素敵な思い出だ。

そして今回もゆうくんは昨日からうちに泊まっており、昨夜も彼のギター練習に付き合っていると日付が変わったと同時に改めて誕生日おめでとうと言ってくれた。

あの時の表情は今でも覚えている。去年とまったく同じ表情だったから余計に。私が生まれた事をちゃんと祝福してくれているような優しくて明るい笑顔。

結束バンドのみんなもそうだったけど、ゆうくんの笑顔はまた格別だった。

彼のあの笑顔からしか得られない栄養素は確かにある。一年にたった一度の誕生日。その日、私だけに送られるあの笑顔は誰のものでもない。紛れもなく私だけに向けられた私だけの笑顔だ。

思い出す度に頬が緩みそうになるのをどうにか抑える。私の場合は本当に物理的に

頬が溶け落ちるので、ゆうくんに迷惑をかける訳にはいかないのだ。

いやでも今日は誕生日で主役だしたまには一日中面倒を見てもらうのも悪くないかな。なんてえ……へへへつ。……あ、面倒はいつも見てもらってるんだ……。

「……よしつ、こんなもんでいいか。どうなるか分かんなかったけど、案外やってみればそれっぽく見えるもんだな」

「あつうん」

リヨウさんがくれた草の冠を一カ所だけ解き、ゆうくんはそれをそのまま壁に掛けてあつた時計に飾り付ける事でちよつとした自然を感じるインテリア時計にしてしまった。

私じゃ絶対思い付かなかった。多分そこら辺に置いといて終わりにしてたかもしれない。さすがゆうくん。略してさすゆう。

「じゃあ何すつか。もう夜だし長い時間はいれないけど、したいこととかある？ 俺にしてほしいことでもいいぞ」

「してほしい……」とっ」

「おう。何たって後藤さんの誕生日だからな。俺にできることなら何でもしてやんよ

！」

「で、でも、昨日にもうプレゼント貰ったし……」

「あん？ プレゼントとこれはまた違うだろ？ それに今日が本番なんだから遠慮すんなって」

ゆうくんの顔を見るにこれは冗談でも何でもなさそうだ。

ほんとに何でもしてくれる……？ 私は今したいことってなんだろう。ゆうくんとしたいこと……。

……夜だし膝枕とか？ いやいやいやつ、そんなの私がする方でもしてもらう方でも原型留めていられる自信がない！

なら今日も泊まってもらって、一緒の部屋で寝たり……無理無理無理無理！ 昔は一緒の部屋で寝てた事もあったけどさすがに今はこっちの精神が持たない！ いやでもふたりも一緒ならもしかすると……ああでも私なんかこんなこと言える勇氣ある訳なかったあく！！

うう……でもせつかく何でもしてくれるって言ってるんだし、もつと何か捻り出さないと……。

何か、何か……ゆうくんとしていたいこと……私もゆうくんも嫌な気持ちにならないで二人で楽しめそうなことは……あつ。

「え、えつと」

「お、何か思い付いたか？」

「う、うん……」

私の目線に合わすようにゆうくんが目の前に座る。

結局、私にはこんな事しか思い浮かばなかった。

「ゆ、ゆうくんと一緒に、ギターの練習したいなって……」

「……はい？」

目の前の彼はキョトンとした顔になった。

うん、無理もない。ゆうくんの立場だったらきつと私だってそうなる。

「や、それっていつもしてる事じゃん。もつとこう、ないの？ 今日くらいもう少しワガママになってもいいんだぞ？」

「うん……で、でもつ、私がゆうくんとしてほしいことはこれ、だから……」

「……」
や、やっぱりダメかな……。もつと誕生日っぽいお願いにした方がよかった？

……でもダメだ、あまりにも誕生日にお祝いされる事がなかった私には何も思い付かない。二人でやれる事といえばこれしかないんだし……あーもうっ、そういうとこだぞ後藤ひとりっ！

「……分かった。後藤さんがそうしたいならそうすつか」

「え？ い、いいの？」

「ああ。後藤さんが望んでんなら俺はそれに従うだけだしな。結局は俺の練習に付き合ってもらう訳だしむしろこつちがいいのかつてくらいだよ」

「わ、私はっ……ゆうくと一緒にギター弾けるの楽しいし、嬉しいから……全然っ大丈夫……」

「……そりゃ良かった」

何だろう……いつものようにギター練習しようってだけなのに、何でこんなに恥ずかしくなってるんだ私っ……。

調子に乗るな後藤ひとり、ゆうくんは妥協してお願ひ聞いてくれただけで後藤ひとり、決して良い雰囲気になってるかもだなんて思い上がるなよ後藤ひとり！ 私はただのミジンコ以下の存在なんだからな！

「じゃあ準備するか」

「あつうん」

慌ててギターを押し入れから出す。

ゆうくんもゆうくんでも自分のギターを用意していた。どうも去年の文化祭の後に一人で買いに行ったららしい。これで私のギターを借りずに一緒に練習できると意気込んでいた姿はちよつと可愛かった。絶対本人を前にしては言えないけど。

「どうせなら弾き語りでカバー曲を誕生日プレゼントにしようかとも思ったんだけどさ、よく考えたらああいうのってドン引きされる地雷プレゼントなんだってな。ネットで調べてて良かったわ。そもそもまだそんな事できるほど上手くないし危うく恥かくところだった」

「そ、そうなんだ……ゆうくん上達速度凄いからいけそうだけど……」

えっ、普通にゆうくんの弾き語り聴きたかったなあ……。

何でドン引きされるんだろ。自分のために歌ってくれるのって普通嬉しいものなんじゃ……？ 私がおかしいのかな？ 多分絶対そう。

そんな話をしながらスコアを出して準備を進める。

「き、今日はどの曲練習する?」

「ん〜『あのバンド』がいいかな。後藤さんのサビパートめっちゃかっこいいから早く俺も弾けるようになりたいし」

「え、ええ〜そうかなあ……ふへへ……うへっ。じゃ、じゃあ今日は特別に歯ギターも教えちゃ」

「それはいいから」

「あっはい……」

そうして、私達はいつも通りギターの練習を始めた。

部屋に響くのはギターの音色と、たまに交える話し声のみ。

私は、この時間が好きだ。

ゆうくと二人きりでギターに真剣に取り組んでいるこの時間が。

私は、この時間が好きだ。

誰にも邪魔されずにこの空間には私達しかいないと錯覚してしまうほどの濃密な時間間が。

私は、この時間が好きだ。

大好きなギターを彼と一緒に演奏できる楽しい時間が。

私は、この時間が好きだ。

ギターを教えるという名目上、彼と自然に物理的な距離が縮まっても平気でいられる幸せな時間が。

私は、この時間が好きだ。

この時間だけは……彼を、ゆうくんを私のものにできるから。

私は、この時間が好きだ。

限られた時間の中だけこの時だけに関しては、ゆうくんは私だけを見てくれるから。

結局、私のしたいことはこんなものだ。ゆうくんが拍子抜けしてしまうような安直な願いしかできない。

だけど、それでいい。個人の感じる幸福度なんて人それぞれなんだから。

私にとっての幸せはゆうくんと一緒に大好きな音楽に触れること。

それさえできれば、この部屋の中だって優しい世界に早変わりする。

彼と再会してから暗かった世界は照らされて、巡り巡っていく季節に彼がいるのは私からすれば奇跡みたいなものになって、止まっていた時計は動き出した。

多分、多分だけど、ゆうくんが去年と今年の誕生日にずっと一緒にいてくれるのは、離

れていた空白の時間を少しでも埋めてくれるためだと思う。

去年の誕生日、彼は私に言った。

『これから毎年、後藤さんの誕生日は俺がずっと一緒にいるよ。家族以外に祝ってもらえないとかそんな寂しい誕生日なんてもうなしにしようぜ。それに誰かが常に側にいたりやネガティブ思考になんてならないだろ』

冗談かと思っていたあの言葉も、今ではもう本気だったんだなって思うくらいには一緒にいてくれる。

ゆうくんのおかげで、私は自分の誕生日が来るのを少し楽しみになった。今ではもう結束バンドのみんなもいるし、一人だけだったあの頃とはもうおさらばだ。

ああ、どうか。

こんな優しい時間が、いつまでも続きますように。

「ふう……今日はこのくらいにしとくか」

「あ、うん、そうだね……」

集中していると時間はすぐ過ぎ去っていく。いつもより遅く始めたから終わるのも早く感じた。ただトイレに行ったりする以外はずっと練習できたので良しとしよう。時計を見たらもう夜の十一時五十分だった。日付が変わるまでもうすぐそこ。私の誕生日ももう終わって、主役ではなくなる。特別な時間が終わる。去年からかな。誕生日が終わってしまう事に寂しいと思うようになったのは。

「俺もそろそろ帰りますかね。風呂入って明日の準備しなきゃいけないし」

「ご、ごめんね、私のお願い聞いてもらっちゃって……」

「後藤さんの願いを聞くって言ったのは俺なんだから気にすんなって。というかいつも大体こんな時間だし、もっと遅い時もあるだろ」

「うっ、確かに……」

いつもはゆうくんが教えてって言うってくれるから気兼ねなく一緒に練習できるけど、こうやって私からお願いで一緒にやるのは珍しいからちよつと引け目を感じてしまう。

けどゆうくんは私のそんな気持ちさえ分かってるような様子で、

「また明日にでもやろうぜ。もちろん後藤さんが良いならだけどさ」

「……う、うんっ」

ゆうくんの帰り支度が終わり、彼はギターケースを背負いお泊まり用の鞆を持って立ち上がる。

「こんなもんかな。まあ忘れ物あつても隣だし気にする事は何もないけど」

「な、何か忘れてる物あつたら私の部屋に置いとくね」

「おう、頼むわ」

ゆうくんが部屋を出ようとして、私も見送るために立とうとした時、彼はこちらに振り向いた。

「あ、そうだ。なあ後藤さん」

「な、何？」

「昨日今日と祝ったけど、今年の誕生日はどうだったよ」

そう聞かれて、何故か咄嗟に時計を見た。

時刻は十一時五十五分。あと五分で私の日は終わる。

いつもなら何かとどもつたりすぐに答えられない私だけど、この時は珍しく自分でも素直に言葉が出てきた。

「うん、凄く楽しかったっ」

「……そっか」

彼は嘸み締めるようにそう言って、私にとって一番ダメな笑顔でこう返してきた。

「そりゃ何よりだっ」

「っ」

何で自分の誕生日じゃないのにそこまで自分の事のように笑ってくれるんだろう。

そんな笑顔は、ズルい……。

「じゃあまた明日。玄関まで見送りはいいから、ちゃんとギターも押し入れの中に直しとくんだぞ。他の片付けもすっかりとな」

「あ、はい……」

やっぱり最後はお母さんモードになるんだ……。

あくまで私に対しては保護者的な立ち位置なんだなあ。

最後の確認も終えて満足したのか、ゆうくんはそのまま部屋を出ていった。

まあ、二日連続でケーキも食べれたし、好きな食べ物もいっぱい食べれたから総合的

に見れば今年の誕生日は最高のものになったと断言できる。

明日片付けができていなかったら何言われるか分かったものじゃないので、おずおずと部屋の片付けを始める。

まずはギターを押し入れに直そうと襖を開けると、

「……………え？」

私がいとも引きこもっているスペースに小さな紙袋があった。

練習始める前はなかったはずだから……………ゆうくん？ でもいつの間……………私がトイレ行ってる間に置いたのかな。

けど、誕生日プレゼントは昨日も貰ったし……………何なんだろう。

とりあえず紙袋を手に取り、中を覗く。

するとそこには、

「ピンクの、マフラー……………？」

触るだけでもふもふと気持ちいい感触が手に伝わってくる。

同時に、私のスマホからロインの通知音が鳴った。

このタイミングで来るという事は、相手は一人しかない。

急いでスマホを取って画面を開く。案の定ゆうくんからだった。トーク画面には簡潔にこう書かれていた。

『本番は今日だって言つたらろ』

そうだ。ゆうくんは私のお願いを聞く時も言っていた。今日が本番だと。

だとしたら、彼は二つもプレゼントを用意してくれていたのだ。私のために。

思わずマフラーを抱きしめる。体が震える。寒いからでも怖いからでもない。ただただ嬉しくて、彼の優しさに溺れてしまっそう。

今までの誕生日が誕生日だったからか、その反動としてこんなにも嬉しい気持ちに包まれていいのか逆に戸惑ってしまう。

呼吸が甘い。

こんなにも満たされるような気持ちは初めてだ。こんな私でもその幸せを受け入れていいのだと言われている気がした。

マフラーを抱きしめたまま倒れ込み足をジタバタしてしまう。

この気持ちを簡単に押し留めることなんてできない。何ならこのまま寝られるのかすら分からない。明日ゆうくんの顔をまともに見れるかすら怪しい。

時計を見る。

十一時五十九分。魔法が解ける寸前。

誕生日が終わるその瞬間まで……私の心は間違はなくゆうくんで満たされていた。

59. それでも少年少女達の日常は続いていく

さあそんな訳でやってきました御茶ノ水駅。

といつても何で御茶ノ水なのかは分からんけど。

「楽器屋さんといつたらやつぱ御茶ノ水だよね〜」

「そうなんですか?」

俺の知ってる御茶ノ水といえなくそでかい鼻で両サイドに金平糖みたいな白髪付いた白衣の男性しか思い浮かばないけど。それはお茶の水博士。

「ねえひとりちゃん、何でこんなに楽器屋さんあるんだろうね〜?」

確かに見渡せばどこかしらに楽器屋の名前が看板として飾つてある。

何かしらの聖地とか? もしくは音楽で有名な街とかなのかね。ここに来たの初めてだからよく分からないな。

「そー！ れー！ はー！」

あ、どこかでオタクスイッチ入った音がしたぞ。

「明治時代に最も古いプロオーケストラが結成されてから都内で音楽活動が盛んになってその頃御茶ノ水で老舗と言われる下倉楽器イシバシ楽器ができてうんぬんかんぬんうんぬんかんぬん」

「ねえ優人くん、あれ今日一日シユバツてきそうじゃない？」

「オタク特有の早口だ。俺には分かる」

ああいう類の人種は自分の得意分野があるフィールドにいると素早さが上がり口数が多くなる傾向がある。

ソースは俺。秋葉原に行けば多分サトシのピカチュウよりも速いでんこうせつか使えらると思う。

「音楽知識は凄いのにお勉強はアレなのがリヨウのめんどくさいとこだよね」

「はっはっは、極端すぎるのも悩みものですね」

「優人くんのアニメ知識も大概だけだね」

「え」

虹夏さん？ 今ガラスのハートにヒビが入ったんですけど？

サラツと俺まで不意打ちで被弾させてくるのやめませんか？ ふうちはあくタイプ
の先制わざでダメージ70だぞ。フェアリータイプの虹夏さんがそんなの使ってくる
なんて……まさか虹夏さんはフェアリー・あくタイプってコト!?

うん、多分こういうところだぞ俺。

「あ、この店入ろー！ 品揃え良いし！ 昔お姉ちゃんがここでバイトしてたんだー！」
虹夏さんが指差す先にあったのは当然楽器店。

それもさつきリョウさんが早口で言っていたイシバシ楽器という店だった。店長こ
こで働いてたのか。全然愛想よくしてるイメージが湧かねえ……。

外から見ても店内にはギターやらそれ以外の小物まで色々と見えていた。

老舗ってんなら確かにここは良さそうだな。肝心の後藤さんは何故か怯えてるけど。
店員さん怖いとか思ってたそう。

「ゆ、ゆうくん……こわい……」

「店員さんが？」

黙って首を縦に振ってる。当たってた。

まあ店員さんと喋りたくないって理由だけで美容院にも服屋にも行かないからなあ。そんでいつの間にかガッツリ俺の服掴まれてるし。完全にお前は一緒に入るんだよ逃がさねえぞって感じじゃん。

仕方ない……とりあえず店内を軽く確認してみるか。

「えーつと……やつぱ外からじや店員の姿見えねえな。後藤さん、とりあえず俺も一緒に入るからさ、それなら行けるだろ？」

「た、多分……ハッ、イヤホンしてノッてる振りしとけば話しかけられないんじゃない!?」

何言ってるのこの子。

何でこういう時だけすぐイヤホン出したりして行動早いの。

「あの、姫？　そういう事されると一緒に入るわたくしめの立場が非常に危うくなりそうなんですが……。ちよつと虹夏さん達も手伝ってくださいよ！」

「あやし達は先入ってるからー」

見捨てるの早すぎない!?

これがいともたやすく行われるえげつない行為ってやつか……。

「ここ、こうなったらゆうくんも一緒に首を振ろう！ イヤホン片方付けてっ。くつついでれば穩便に行けるはずだから……！」

「えっマジでやるの？ いつも自信なんてゴミ捨て場に捨ててきてるくせにどこから湧いてくるんだその自信！ ちょ、ほんとに？ ……ああもうちくしょう！ やるんだな!? 今、ここで！」

ええいままよお！

いつそやるなら全力でやってやんよお!!

「て、店長！ 凄いヘッドバンカップルが腕組んでやって来ました！ あんな激しいヘッドバンは初めて見ます！ どう対応しましょう!？」

「カップル揃ってコアなメタルファンに違い……！ ここはお客様のニーズに応えられるようこちらも全力で接客しなくては！」

めちやくちや必死に首振ってるし片方イヤホンしてるから何言ってるか全然聞こえねえ。

これでやり方合ってるのか？ 視界ぐつちやぐちやだよもう。残像の中の世界に取り残されてるよ俺。

「お客様方！ メタル志向のギターをお探しなら二階の方にありますよ！」

「えっあつえっ!？」

「男性のお客様の方大丈夫ですか!? 頭が二つあるように見えてきたんですけど!? あのっ、彼氏さんがやばそうなんですすが!？」

え、何て? 誰か何か言った? つうか前に誰かいる? そろそろこっちは音速の世界に入ろうとしてんだけど。

これからは音速のソニックならぬ音速のシミックって呼んでほしい。さすがにシミみたいでダサイか。めっちゃダサイな。

というかどうかしよう。どうやったら俺の首止まんのか。早くしすぎて自分でも止め方分からなくなってきたんだが。

ブレーキが効かんつ。ちよ、誰か、後藤さんでも誰でもいいから止めてっ!

「あがつ!？」

「はあい、ひとりちゃんも優人君もいい加減ギター見に行きましょうね?」

「あつはいい!？」

お、俺でも止められなかったへドバンを喜多さんが両手で俺の顔を掴んで止めてきた、

だと……!?

しかもちよつと笑顔なのが怖い。ブラックスマイルだ。そんな怒らなくてもいいじゃん……こつちは後藤さんのために付き合つてやつてただけなんだぞ。理不尽すぎない?

その後俺達は何やかんやあつて二階へとやつてきた。

「はえ、楽器店とか初めて来たけどすげえな」

「ギターとかズラツと並べられてるだけなのに何だか圧巻よね」

見渡す限りギターやらベースやらが飾つてある。

デザインも様々で見ているだけでも楽しいものだが、あれで性能とかに違いはでるのかな。単に見た目の好みの問題とか?

「すいません、このベース試奏できますか?」

「大丈夫ですよ」

「先輩また買うんですか?」

「たまには貯金する事も覚えた方がいいですよ」

「違う。ちよつと気になるから軽く弾いてみたいだけ」

ほんとかよ。お小遣い貰ったらまたここに買いに行くんじゃないだろうな。

「あ、スラップしてもいいですか？」

「はい、いいですよ」

「後藤さん、スラップってあれだっけ？ 『星座になれたら』のイントロでリヨウさんがやってた奏法」

「う、うん……ゆうくん、ギターだけじゃなくてもうそんなに覚えたんだね、凄いな……」
へへ、よせやい照れるべ。

「ハッ、こいつまさか……!？」

「ん？」

虹夏さんが何か察したような反応をしたけどどうしたんだろ。

そうこうしてる内にリヨウさんがベースの試奏を始めた。

イスに座り見事な手捌きでスラップ奏法を奏でている。うーん、黙ってればマジでクールでベース弾けるかつこい美少女なのになあ。

脳内に出てくるのは草食ってるリヨウさんばかり浮かんでくる。これが日頃の行
いってやつか。

「ま、まあ……凄いい、適当に弾いた……ただけど、凄く良いベース……ゼエ……ハア……」

「試奏で本気出してドヤるやつだ」

「イキつてたんかい」

オタクくんさあ……得意分野だからって調子乗りすぎじゃない？

いや別にかっこよかったからいいけどさ。

その後は各々適当に見て回ったりもした。

三階にはハイエンドコーナー、つまりはどちやくそ高い楽器が置いてあってみんな忍び足でしか歩けないほど怯えたり、木目のデザインが後藤さんがバグった時の目と一緒に笑ってた喜多さんがリョウさんに拳骨で頭ぐりぐりされてたりなど。

結局は二階に戻って改めて後藤さんのギターを探す事になったのだが。

「何、郁代。そのギター気になるの？」

「あ、いやそういう訳では……私にはリョウ先輩からお借りしてるギターがありますので！」

「ギターは何本あってもいい」

ふむ、確かに一理ある。

文化祭ライブでのトラブルがこの先絶対ないとは言いつれない以上、予備で持つておいても決して無駄ではないだろう。まあ持ち運びは大変そうだけど。それに高校生には安めだとしてもそれなりの出費になるし、そう簡単には手は出せないか。友達のお出掛けも多い喜多さんなら尚更だ。

「優人くん、何かみんな楽しそうで良いね……」

「虹夏さん？」

どうした。何を羨んだ目で後藤さんのこと見てるんです？

「これがマンガでよく見るドラマー孤独問題なのかな……」

「ああ、そういう……」

確かにここに売ってるのはギターとかベースばかりでドラム全然ないもんな。

変な疎外感感じるのも無理はない。ただでさえドラムは持ち運びも不便そうだし。

でもすいません虹夏さん。実は俺も結構ギター見てるの楽しいんです……。

色んなデザインあったり色も様々で、何かこう……男として普通にこういうの見てるだけでもちよっとテンション上がったりしちゃうんですよね。

「あー、あああたしもギターとか買っちゃおうかなって……ほら、いつそ優人くんも一緒に買っちゃおう〜みたいなの？」

「えっ……」

「普通に弾く用でだよ!!」

俺には見える。この二人が両手でギターを振り回しながらドラムを叩くゲーミングムキムキ虹夏さんを想像している姿が。

何でゲーミング色に光ってんだよ。虹夏さんだけに虹色に輝かせたってか。やかましいわ。

「そうか、寂しかったのか……」

「今度はドラム専門店に行こうねっ、アキバにあるから。アキバなら優人くんも着いて来てくれるよね?」

「虹夏さんが望むなら俺はどこまでも着いて行きますよ。例え二人だけでもね」

「そこは私達もちゃんと着いて行きますよ!」

それがアキバなら尚更ね。

虹夏さんとアキバ巡りできるならお金払ってもいいレベル。

いや話の流れで何となくスルーしたけど、ギターか……。

確かにこういうところ来る機会も中々ないし、俺もそろそろ自分の欲しいとは思ってたんだよなあ。今回はお金そんな持ってきてないから買わないけど、ちよつと参考に色々見とくか。

個人的に好きな色は青とか黒だし、赤も捨てがたいな。見た目とカラーは選ぶ上でも結構重要だろう。

奇抜すぎるデザインよりかは形はむしろシンプルなものでもいいかな。この辺りのギターなら予算は大体六万〜十万前後ってところか。初心者向けならこれくらいがちょうどいいだろ。

もつとしつくりくるものがないか見ていると、ある一点を見つめたまま動かない後藤さんがいた。

「後藤さん？ 何か気になるものでも見付けたか？」

「え、あつうん、このギターかつこいいいなって……」

「どれどれ？ おう、確かにいいな」

値段も六万ちよいでリーズナブルだ。色もほとんど黒で統一されていてデザインもシンプルな方。

うん、普通に俺もちよつと欲しいレベルでかつこいいなこれ。

「YAMAHASANさんいいですよね〜」

「ああひい〜……」

突然の店員さん乱入で後藤さんが俺の腕をがっしりホールドしてきた。

すぐ俺を盾にしようとしてくるのそろそろ卒業しようや。文化祭ライブで結構な人数を前に演奏しきつたのに、こういうところはまだまだだな。

「それ特注仕様なんですよ。手頃な価格なんですけど凄く良いギターなんです！ 良かったら彼女さん試奏なされますか？」

「だつてよ後藤さん」

「ああああえつとおお……」

ん？ ていうか今彼女さんつて言った？

もしかして腕組まれてるから勘違いされてる？

「初めてのギターならシールドとミニアンプも揃えた方がいいですよ」

「へえ、なるほど」

最初に買うならギターだけじゃなくて他のも一緒に買った方がいいのか。そりゃピックもそうだしチューナーもいるだろうから当たり前っちゃ当たり前か。

ギター含めてサブも揃えるとなると、大体予算は十万前後ぐらいになりそうだな。よし、だいぶ参考になってきた。

「……買います」

「いやもう持つてんだろ」

何どさくさに紛れて追加で買おうとしてんだ。

ここで断われないとか、将来家電とか買いに行く事になったら余計なものまでやたら買わされそうだなこの子。ノーと言える女子になりなさい。

「あ、彼女さんは経験者の方でしたか。失礼しましたっ」

また彼女さんとか言われた。これ絶対勘違いされてるじゃん。

さすがに訂正しといった方が良さそうだな。

「あの」

「いえいえ、大丈夫ですよ。この子のギターが最近壊れちゃって、今日は代替機を探し

に来たんです。ね、ひとりちやあん？」

「ウンツウンツ」

え、怖い。急にブラックスマイルで俺をスルーしてくる喜多さんも怖いけど、何より一瞬でいつこく堂の腹話術人形みたいに顔が変形してる後藤さんが超怖い。

喜多さんそれに順応してるし使いこなしてるのは何でなの？ もしかして君が後藤さんをそうさせたの？

「今どき学生さんでも何本も持つてる方いらっしやいますからね」

「そうなんですなぁ。このギター気に入った？ ひとりちやん」

「ウンツ」

「うん、うん……このギターにするそうです！ ね、ひとりちやあん？」

「ウンツ」

「ありがとうございます〜！」

「いったい俺は何を見せられてるんだ……」

「何この狂気。なんで店員さんも疑問に思わないの。あの喜多さんちよつとしつとりしてない？ 主に言い方とか態度とか。」

「ぼっち、腹話術の人形みたいになってる。優人、私もあれやってみたい。人形になって」

「人形になってって何。パワーワード？ それともパワーハラワード？」

「最近成長したと思っただけど、こういうところは全然だね」

ワイトもそう思います。

とりあえずギター購入が決まり一階へ。

俺達は入口付近で待ち、会計をしている後藤さんを待っている最中だ。

「このベースは良いのばかりだった。次は一人でゆつくり見に来る事にする。あわよくば……」

「まーたお小遣い使い果たす気だなこいつ」

「リヨウさんに心のブレーキはないんですか」

「あつたら常に金欠になってない」

「胸張って言うんじゃねえよ」

ほんとに大丈夫かこの人。

その内変な草食って病院送りになったりしないだろうな。

「ましたあ!!」

「ギター忘れてますお客様〜!」

なんかいきなりF1みたいな音を立ててピンクが店を出てった。

どんだけ帰リたかつたんだ。運動神経悪いのに逃げ足だけは早いな。

という事で仕方なく俺達が代わりにギターを受け取る事になった。

俺が受け取っている中、意外にも店員さんが話しかけたのは隣の虹夏さんだった。

「そういえばさつきから気になってたんだけど、あなた星歌さんの妹さん?」

「あ、はい! お姉ちゃんがお世話になりました!」

そういや入店する前に店長がここで働いてたって言ってたな。というか伊地知という名字も出してないのによく分かったねこの人。

まさかアホ毛で分かったとか? 虹夏さんも店長も感情でよくアホ毛動くし、何より金髪だし。

「星歌さん、仕事できて良い人だったんだけど、自分の弾きたいギターを入荷したり好き勝手してて……御茶ノ水の魔王サタンと呼ぶ人もいたの!」

「うちのお姉ちゃんがすいませんでした……」

異名だつたつたつたつた。

「お客さんがいなくなるとすぐ店のギターメンテとか言つて弾いてたし拳句の果てに『店長これ今度ライブで使つちやダメですか?』とか言つてきたりね……」

いち店員のする事じゃねえなおい。どんだけメンタル肝座つてんだよ店長。仕事できてなかつたら即クビ案件だろ。よく最後まで雇つてくれたなこの人。

「誰にも買わせたくないからつて売約済みの札貼つてたりもしたね……」

「ほんとお姉ちゃんがすみません……」

もはや暴君じゃん。そりゃ魔王とか言われるわけだわ。

「でも突然バンドやめちやつてライブハウスやるつて聞いた時はびっくりしたけど、そつか……。今は妹ちゃんがバンドしてるんだねえ」

なんか含みのある言い方をしてるつて事は、店長だし伊地知家で何があつたか大体事情を知ってるのかもしれない。

「私も応援してるから、星歌さんの分まで頑張ってるね！」

「……はい！」

何という眩い笑顔！ この笑顔だけで万物は救われてしまうぞ。くそう、何故こんな時に限って一眼レフを持ってきてないんだ俺は！

仕方ない、目に焼き付けて一生記憶のメモリーに保存しておくんだ清水優人。天使は今宵大天使へと覚醒なされたぞお！

「ほら、行こつ優人くん！」

「はい、じゃ、ありがとうございました」

「こちらこそ、また遊びに来てくださいね〜」

これにてギター購入編終了。

店を出ると普通に後藤さんがいた。途中で正気に戻ってここまで走ってきたな。

「ぼっちちゃん、お店の人がまた来てくださいって言ってたよ」

「ほれ、自分のギター忘れてんじゃねえっつの」

「あう、ごめんなさい……」

「ひとりちゃん、ギター買えて良かったね！」

「あっはい」

御茶ノ水駅のイシバシ楽器店ね、覚えとこう。

「じゃあこの後はどうしよつか？　なんか食べて帰る？」

「あつえつと……」

「今日は解散」

何か言いたげにしていた後藤さんを遮るように口を開いたのはリョウさんだった。

「え？　なんか用事？」

「ぼっち、早くギター弾きたいでしょ」

「ああ」

ほほう、リョウさんほんと音楽関連になるとまともになるな。

その気遣いは正直ナイスです。あとふとした拍子のイケ女ムーブが俺を狂わせてくるのでいきなりそういう事するのはやめてほしい。ギャップで惚れそうになるから。

「そうだ！　じゃあ今からスタジオ借りて、ひとりちゃんのリョウさんお披露目会しますか？」

「い、いやあ、それはちよつと……」

「そうだと喜多さん。んな事したら後藤さんの体がスタジオ内に飛び散るだけだ。あと
の掃除が大変になるぞ」

「まあ明日みんな練習するしね。その時のお楽しみにしよ！」

「は、はい！」

気付けば空も夕陽に照らされ焼けていた。

そろそろ陽も短くなってくる季節なのだと思ひ知らされる。

「文化祭も終わったし、次のライブの事とか色々考えないとね」

「ですな」

「リヨウも新曲よろしくっ」

「こればかりはインスピレーション待ち」

しかし、季節が変わりゆくからといって俺達の何かが変わるといふ訳ではない。

結束バンドの活動はこれまでと変わらず、それぞれが掲げた夢のために奔走していく
のみだ。

「私にできる事があつたら何でも言ってくださいね！」

「何でもっ。」

「喜多ちやくん、リヨウに気安くそんな事言っちゃダメだよ。ていうか何優人くんも反応してんのさー！」

「すいません、つい条件反射で……」

「じゃあさっそくだけど牛丼奢って。優人でもいい。お願い、レディーファーストで」

「結局俺じゃねえか！　つかレディーファーストの意味ちゃんと調べてから言ってこいよアンタ！　適当ばっか言って俺がほいほい奢ると思つたら大間違……あつ近い、顔が近いっ！　やめて、その顔で近寄ってこないで！」

「いっそ不可抗力で頬に私の口が当たってしまえばもつと良い物奢ってもらえるはず」

「それはダメ！」

「悪知恵だけは働くな!?　そしてナイスセーブだお三方！　けどここにいればまたたかられちゃうな……。チイツ、こんなところにいられるか、俺は先に行かせてもらう！」

「死亡フラグだけ立てて駅の方に走ってっちゃったけど!？」

「逃がさん」

結局、イベントが一つ終わったところで俺達はまた次のために動き出していく。

どこまでも続いていく日常の中で、ほんのひと摘まみ程度の非日常を楽しみつつ、またバンドとしての進化を求めて。

「ゆ、ゆうくんっ、ま、待っ……あぶうっ!？」

「ぼっちゃんがかけたあ!？」

「あーもうっ! 何で逃げ足はくっそ早いくせにこういう時はすぐこけるんだよ!? 大きいケガとかしてねえか!?! ギターは大丈夫なんだろうな!?!」

「最後にはやつぱりひとりちやんのとこに戻ってくるのよね、優人君って」

「優人、掴まえた」

「ひいいいあああああ!?!」

「お前は優人くんから一回離れろオ!!」

結束バンドと、その手伝いとして支える俺の活動に終わりは。

まだまだ見えなさそうだ。

「ゆうくん……お、おんぶう……」

「分かったからできるだけ目立たねえように存在感を消すんだぞ。いつも溶けたりして
るしそのくらいはできるだろ」

「ぼっちゃん発光しでしたよ」

「なんで!？」

「嬉しかったのねえ」

……幼馴染の面倒見るのって普通こんな大変だっけ？

60. 御茶ノ水エンカウント

土曜日。

今日と明日はバイトもなく練習もない日なので俺は一人でとある場所へやってきた。

そう、つい先週も来たばかりの御茶ノ水駅だ。

理由はたった一つ。そろそろ俺も自分のギターが欲しくなったから。

後藤さんに教えてもらおう時にいちいち彼女のギターを借りるのも申し訳なくなってきたので、思い切って買う事にした。

ギターや他の用品も買うと想定して予算はおよそ十万円。一応少し超えてもいいようにもう少し多めに持ってきたけど、大丈夫だよな？

まあ最悪お金下ろせばいいしこのまま楽器店に行こう。

ちなみに後藤さんにはこの事も伝えており、社交辞令で一緒に行くかと聞いたたら、

『あつ……い、行つてらつしやい……。私はゆうくんの無事を祈りつつ笑顔で帰りを待ってるので……』

と、まるで戦地に向かう夫を信じて待つ妻のような物言いで断られた。

やはり聞くだけ無駄だったようだ。できれば音楽経験者の助言も借りつつ選びたかったのだが仕方ない。ここは店員さんに聞けばいいか。

実はというところで行く店も気になるギターも前回と同じ場所にあるので、まずはそのイシバシ楽器という店へ向かう事にする。

どうせなら他にも楽器店はあるし色々見て回るのもいいけど、さすがに初心者なのに一人で堂々と店をはしごしても俺の知識じゃデザインの良い悪ししか区別できないから、こういうのはいつそバシツと店を一つに絞りパパツと決めて買うというのが男のやり方だ。……多分。メイビー。

後藤さんにも帰る時は連絡してと言われてるしすぐに買って帰るのも悪くないが、せっかく遠出したんだしギターはすぐ買うとして適当にそこら辺をぶらり旅するのも悪くない。

……けどそうすると先にギター買えば荷物になっちゃうか。うーん、悩みどころだなあ。

そうこう歩いている内に目的地の楽器店の近くまで来てしまい、練習もしたいし買っ

たらずぐ帰るかど決意しようしていたところであった。

俺の前方に見覚えのある美少女がいたのだ。

「げっ……」

ああいうのが好みなのか、オシャレな私服というよりかはダウン系の古着でまとめしており、だがそれがまた彼女の雰囲気と存在感をより一層際立たせている。

男性ならまだしも、女子高校生で古着をあれほど着こなせるのはルックスの良さと纏う雰囲気一致していないとできてない芸当だ。

そしてそんな事が可能なのは俺の知る限りではただ一人だった。

あのキラキラ陽キャな喜多さんすら目を光らせて憧れる女子高生。彼女でもなく娘になりたいとぶっ飛んだ事を言わせてしまうほど見た目だけは良い結束バンドのベース担当。

山田リヨウが前方にいた。

まさかこんな所で出会うと思っていなかったが故に、次の行動に出るのが遅すぎた俺。その間にこちらの存在にハッと気付き目を輝かせてきたやべー女は、驚きの速さで俺に近づいてきた。

「優人？ 優人が何でここにいるの？ ……もしかして優人もとうとう自分の楽器買いに来たっ？ いや待て私、そんな都合の良い話があるか？ 自分の良いように解釈するのは良くない。分かった、当ててみるから優人はちよつと黙つてて。…私の推測はこう。先週のぼつちがギター関連で買い忘れた物があつて、仕方なく優人がそれを買いに来たとか？ どう、あつてる？」

「とかいかいちいち近え!! 何一人で自問自答して勝手に納得した上に推測始めてんだアンタは!! 音楽関係の事になるとほんとよく喋るな!？」

ここでぐいぐい来るのやめてほしい。普通に恥ずかしいから。

いつもは制服で会つてるからたまにこういう私服とかで会うとちよつとドキツとするんで。ボーイツシュとかユニセックスとかいうか、こういう服装ほんと似合うなこの人。

「で、どう、あつてる?」

「や、まあ…不正解、というよりは惜しいですかね」

「惜しい?」

「はい、むしろ最初のままだったら正解だったんすけど」

「と、いうと?」

だから近いって。

「……結末バンドの演奏とか見てる内に興味が出てきて、最近俺も始めたから自分のギター欲しくなって買いにきた……って感じですよ」

そういや後藤さん以外の人には俺がギター始めたって言った事ないんだよな。

バンド組む予定はないし、後藤さんは上達早いつて言ってくれるけど個人的には全然見せられるレベルでもなくて、結末バンドの演奏を見てから興味持って始めたつて言う
とミーハーっぽく聞こえそうで何だか気が引けてくるのだ。

しかも一番音楽にうるさ……げぶんげぶん、詳しいリヨウさんなら余計である。ペ
チャクチャ音楽知識をひけらかしながらまくし立ててきそう。

だがしかし、そんな俺の予想に反して彼女の反応は至って真逆であった。

「ふうん……」

むしろ静かに右手を顎に当て考え込む素振りをみせていた。

「あの、リヨウさん？」

「優人」

「は、はい？」

「今は何時？」

自分のスマホでも見ればいいのにと思いながら、この人の事だからそれさえも面倒に思ってるのだと勝手に納得して自分の腕時計を見る。

「十三時過ぎですね」

「私はお腹が空いた」

「え」

正直時刻を聞いてきた時から嫌な予感はしていたが、まさか……。

「奢って優人。私はパスタが食べたい」

「お金貸してでもなく奢って、だと……!?!? しかもよりによって自分からパスタ食べた
いとか要望出してくるヤツなんて初めてだぞ!?!? とういか何でいきなりそんな流れに
なってるの!?!? 質問からの会話ぐちゃぐちゃになってんじゃない! いったいどういう
思考回路して」

「これは取引」

「……とり、ひきき?」

分からん。この人の考えてる事も少しは分かってきたと思ってきたけど、やっぱり分かんねえとこはさっぱり分かんねえ。

いつもリョウさんの相手してる虹夏さんってやっぱり凄い人なんじゃあ？ 後藤さんとは別ベクトルで常人には荷が重すぎるぞ。

「優人、ギター買いに来たのはいいけど、知識自体はそんなにないからお店を一本に絞って決めようとしてるでしょ」

「え？ まあ、そうですね……よく分かりましたね」

「でも運良く私と会えたのはラッキーだと思ってる」

「たかられた時点でアンラッキーではあるよ」

「私ならギターの知識もバッチリあるし、アドバイスも完璧にできる。本当なら初心者すぎて一人で決めなきゃいけないところに私がいる事で知識も蓄えつつ、優人に合ったギターやサブ用品もしっかり見てあげられる。それをお昼ご飯一食で等価交換できるなら、安いものだと思うけど」

「う、うーん……？」

安いかどうかは置いて、一考の余地はあるかもしれない。

確かに後藤さんが無理だから仕方なく一人で来たけど、本来なら経験者の知識を借り

たいのが本音だ。

ギターはどうかになるとしても、チューナーやらシールドとか何を選べばいいのかまではよく分かかっていない。事前にある程度調べはしたが、所詮は初心者向けの焼刃だ。そこにリヨウさんという楽器に関しては知識の塊みたいな人が近くにいるとくれれば、そこら辺の難易度はガクツと下がるだろう。

この人の事だから色々懸念は拭えないが、まあ……いないよりはマシと考えるか？
これから長い間世話になるギターと今日一日分だけの昼飯代と換算すれば、安いと思うのが妥当なのかなあ。

「……分かりました。昼飯は俺が奢ります。それで手打ちにしましょう」

「フツ、さすが優人。身の程を弁えておるな」

「めつちや癪に障る言い方だな」

「善は急げ。さつそく pasta 食べに行こう」

「ちよつ、背中押してこなくても歩けるからつ、つうかもう行く店決まってるんですか
!？」

「駅の周辺ブラついてる時に美味しそうなお店があったからそこに行く」

いつもは気の乗らない気分だったら亀みたいに鈍いのにかような時の行動力だけはチーター並に早えな!?

とまあ、こんな感じで遠出したら思ったより世間は狭くてリヨウさんに遭遇し、想定外の時間を過ごす事になったのだった。

「そーいやリヨウさんは何で御茶ノ水に来てたんですか?」

リヨウさんの言っていたパスタ店でお互いに注文したパスタを頬張りながら質問してみる。

ちなみに俺が食べているのは梅としらすを使ったさっぱりと食べられるパスタで、リヨウさんのは紅ズワイガニと帆立のクリームソースに温泉卵が添えられたパスタだ。しつかり俺より高い物を頼んでやがる。いやいいけどさ……。

「この前みんなでここに来たでしょ」

「はー」

「その時に色々見たくなってここに来た」

「ほんと好きなんですなね楽器」

「あわよくばベース買おうかと思ってる」

「全力で止めるわ」

金欠になられたらまた俺がお金貸さないとダメになるやつじゃんそれ。

「あとは試奏しまくって次に買う候補を決めておくみたいな感じ」

「結局買う気満々なんすね」

「ギターとベースは何本あってもいい。見栄えが良いってだけで買う人も世の中にはいる」

「それを金欠になってまで女子高生がするのはどうなんですかね」

おい目を逸らすな。山田、おい山田コラ。山田ア!!

「にしても優人もわざわざここに買いに来るなんて珍しい。それこそ今時はネット通販で楽器も買える時代なのに。初心者向けセットとかお手頃価格で色々あったでしょ。あまりオススメはできないけど、あれじゃダメだったの」

「露骨に話題変えてきたな……。あー、まあ最初はまとめて買えるならそれも有りかなって思ったんですけど、やっぱりこういうのって自分で触って確かめてみたいという

か、その方が自分で選んだって感じがして愛着も持てると思ったんですよ。ああいうのが悪いとは思いませんけどね。後藤さんみたいに店員が苦手って人からすればありがたいと思うし、知識があつて通販で済むならそれに越した事はないので。あくまで個人的な感想です」

元々後藤さんも最初は音ハウスっていう通販サイトで買おうとしてたしな。

「今日も最初の方は通販サイトで一緒に選ばない……?」とか言ってきたし。この前ので相当疲れたらしい。あれは当分楽器店に行けない体になってそうだ。

「なるほど。優人は結構良いセンスしてる。実際試奏してみたり持った時の感覚でじっくり来るか来ないかってのも大事だったりするから、そういうのも含めて自分で触ってみるのが一番良い」

「やっぱそういうもんですよねえ」

リヨウさんほんと楽器の事になると真面目に返してくるから頼りになる。ずっとこれでいてくれたらいいのに。無理か。無理だな。

「ちなみに予算はどのくらい?」

「一応十万とちよつとです。後藤さんの買ったのが六万前後だったので、俺もそれく

らいいいかなって」

「ふむ……大丈夫。私がいるからにはその予算内でちゃんとしたものを手に入れられるようにする」

これほんとにリヨウさんか？

余った分の予算を私に貢げとか後から言ってこない？ 大丈夫？ 影武者とかじゃないよね？

「……何」

「いや……リヨウさんの割には真面目だなって」

「音楽と楽器に関しては私はいっただって本気。それ以外がダメなだけ」

「うくん、ダメかあ」

ならもう手遅れですねえ。

この人につける薬はないらしい。末期である。

「ん？ 何してんですか？」

「写真撮ろうと思って」

「そんなキャラでしたっけ？ つうかもう Pasta 食べてる途中ですけど、セーフに入ん

のこれ。さすがに映えないんじゃない？」

「別にどこかに投稿する訳でもない。優人と偶然会ったから一緒に撮って結束バンドのロインに貼ってみるだけ」

そう言つてリヨウさんはスマホを手に取り自撮りモードで自身と俺にカメラを向ける。

まあ、待ち合わせても無いのにこんなところで友達といきなり会つたらこうなるものなのかね。リヨウさんも意外と女子高生っぽいところあるんだな。

「何でまたそんな事を？」

「ぼっち達の反応が気になるから」

「はあ……？」

反応つていっても、普通に後藤さんの場合は何もリアクション起こしてこないと思うけど。グループプロインの時はいつも業務的な返事だけだしなあ。

虹夏さんと喜多さんも何となく予想はできる。おー珍しい組み合わせだねとか、リヨウ先輩と一緒に優人君ズルい！とかって感じて来そうだな。

何ともまあ平和な想像だ。これ以上の事なんて予想できん。

とりあえずパスタを一口頬張る。その瞬間だった。

「優人」

「んあ？」

パシヤツという音がリヨウさんのスマホの方からした。

「……何で今撮るんすか」

「ベストショット」

人がものを口に入れた瞬間を撮る事のどこがベストショットなんだ。自分はずっかりピースしてるし。

「よし、結束バンドのグループに送る」

「へーへー」

もはやこの人のマイペースさにいちいちツッコんではいられない。

俺は俺のペースで食事を済ませよう。

ピロントと俺のスマホの通知音が鳴る。

リヨウさんが送ってきたからだろう。別に内容は知ってるものだし見る必要もないのだが、一応確認という事でロインを開く。

そこには撮影した通りの写真と、リヨウさんの一言が添えられていた。

『お忍びデートなう』

と。

それを見た俺は、冷ややかな視線を対面に座っている彼女へ向ける。

「写真貼った時点で忍んでねえじゃん」

「意外、優人なら吹き出して思いきりツツコミ入れてくると思ってたのに」

「リヨウさんのやってる事に全部ツツコミ入れてたらこっちの息が持たなくなりそうなんだ」

「むう、ちよつとつまらないけどいいか。本命はぼっち達の反応だし」

「後藤さんなら多分反応しないですよ。今まで結束バンド関連以外の事で返事きた事ないでしょ。虹夏さんは家事してるから返事遅れるだろうし、喜多さんはそもそも休日は友達と出掛けてるはずなんでスマホ見てない可能性高いです」

念のため自分のスマホの通知をオフにしてバイブレーションにしておく。

他意はない。決して。

「くっ……私渾身のボケが……」

「反応来るまで待つとくのも面倒だし早く食べて買いに行きましょうよ。本来の目的はそれなんだから」

「ぐぬぬ、仕方ない」

「といつても俺はもう食べ終わるからリヨウさん待ちだ。」

食欲旺盛の男子高校生にパスタなんてあまりにも軽すぎる。こんなの俺の手にかかればすぐペロリだ。もはや飲み物まである。

「ごちそうさまでしたと手を合わせたのも束の間、スマホのバイブが反応した。」

黙々と食べているリヨウさんからは見えないようにテーブルの下でスマホを確認すると、後藤さんからの個人ラインだった。

『何で』

『どうして』

『リヨウ先輩と一緒にいるの?』

『今、私は冷静さを欠こうとしています』

「どこで覚えたそんなネットスラング。いやネットか。」

「それに後藤さんの場合は冷静な時の方が珍しいでしょうが。何自分を棚に上げてん

だこの子は。

ちよつとめんどいけど返信しとくか。

『御茶ノ水歩いてたらリヨウさんと出くわしたから、そのままギター買うのとか色々手
伝つてもらおうわ』

こんなもんでいいだろう。

あ、すぐに既読になった。ロインだと反応早かったり流暢になるんだよなあ。

『私が着いていかなかったばっかりに……』

ロインを閉じてスマホをポツケに入れる。

着いてくる気更々なかっただろうというツツコミは胸に仕舞っておこう。今は目の
前のマイペース少女にリソースを割かなくては。

「食べましたか？」

「ふあふえふあた」

「お行儀」

「これで良いとこの娘さんてマジ？」

昼食も食べ終わり、その後俺はリヨウさんに色んな楽器店へと連れられた。

ギターを売ってる店はもちろん、何故かギターと関係ない店だったりベースばかり売ってるような店まで。

果てにはウクレレ専門店とか連れて行かれた。いや、この場合はもう連行されたに等しいのでは？

で、結局。

「何だ、気になってるギターがあるなら最初からそう言えばいいのに」

「言ったよ!?! 途中で俺それ言ったよ!?! けどどうせなら色んな楽器も見とくといいつて言ったのそっちじゃん! 俺の手引っ張つてずっと離さなかったのそっちじゃん!

絶対自分の気になる店行きたかったただけだろ!?! 手とか今も繋いだままだし!!」

「はいちーず」

「そこで自撮りする度胸だけは認めてやる。あとで覚えとけよ……」

「またグループプロインの方に貼つといた。デートの続きなうって」

虹夏さん達で遊ぶ気満々だなこの人。面白さ優先とか大阪人かよ（偏見）
そしてポツケのスマホがバイブレーションを奏でる。後藤さんからだった。

『ゆうくん、今、私は冷静さと書くこうとしています』

誤字つてる。誤字つてるよ後藤さん。

冷静じゃないのバレバレだよ。

すると続けざまにバイブ通知が鳴った。

結末バンドのグループプロインだ。虹夏さん達もようやく見たか。一応俺も反応気になるし見てみよう。

『リョウ先輩と優人君が手を……？』

『どういう事か詳しく説明しなさい』

『今』

『私達は冷静さを欠こうとしています』

もしかしてこの流れ流行ってるの？

打ち合わせしてないよねこれ。何でこの二人も息合ってるんだよコントかよ。そんなブームの兆しトゥイッターでもなかったぞ。もはや俺に対してドツキリ仕掛けてきて

るんじゃないかと思うレベル。

「フツ、計画通り」

「バカ言つてないで行きますよイシバシ楽器店に」

今度はこちらから手を引つ張つて店に向かう。

虹夏さん達には悪いが相手するのは後回しだ。リヨウさんを放つておくとまたどこか違う店に連れて行かれちゃかなわん。

「ギターを買うなら他にもチューナー、シールド、ストラップ、ピック、アンプ、ギタースタンドとケースも必要。家で使うアンプなら小さめでも良いのは結構ある」

前回来た店に入った途端、リヨウさんの態度がまた一変した。

「とかいきなり真面目モードになったっぽい。一分前まであんなふざけてたのに……。」

店員さん達も前回と同じ人達で、俺達を覚えていたのかいらつしやいませくと言つてからゆつくり見えていってねと優しい笑顔を送ってくれた。

やはり年上のお姉さんって良いな……。

「優人、聞いてる？」

「聞いてますよ。予算内で買えそうな物は全部買っていくつもりです」

「初心者なら一応替えの弦も買っておくといいかも。最初は結構切っちゃう人もいますから」

「へえ、そうなんですわね」

文化祭ライブの時の後藤さんみたいになる時があるのか。

「切れ方によつては弦が勢いよく跳ねて顔とか指をケガする事もあるから気を付けて」

「はい」

思ったより丁寧に教えてくれる。

ただ買うだけじゃなくてこういった予備知識を教えてくれるのはとてもありがたい。普通のためになる。

「粗方説明は終わり。大体買う物が決まったなら、次は優人が気になってるギターを見に行こう」

「あるのは二階ですわね」

何かサクサクしてんなりヨウさん。

もつとふざけてグダるかと思ってただけに意外だ。

俺の案内の元、二階に行つて目的のギターがある所へ向かう。

「お、まだあつた。これです」

前に来たのが先週だつたからまだあるか不安だつたけど、普通に置いてある。

ギターとかそういう楽器つてホイホイ売れる訳じゃないのか。まあ値段が値段だからな。

「……優人、これつて」

「何です?」

「ぼつちと同じシリーズ、それも色違い。何、ぼつちとお揃いのやつが欲しかったの?」

「何か言い方に含みがあるように聞こえるのは気のせいかな?」

ちよつと無表情ながらに口角少しだけ上げてんじゃないよ。

なんか俺がちよつと意識してゐみたいで恥ずかしくなつてくるでしょうが。いや間違つてゐる訳じゃないけどさ……。

「……単純に見た目がかつこいいと思つたからですよ。……あと、やっぱり憧れてる人の

真似つてちよつとしてみたくなったりするでしょ。あれと同じです」

「え、優人つてぼつちに憧れてるの？」

「絶対に他の人には言わないでくださいよ。ギターの技術力もそうですけど、いざとなるとピンチをチャンスにして乗り越えてく姿を間近で見てる身としては、その……やっぱ惹かれるんですよ。俺がそういう展開みたいなのが好きだからつてもありますけど、こういう所から少しでも憧れに近づきたいつてだけです」

そのために選んだのがこのギター。YAMAHAのパシフィカ、後藤さんが買ったギターの隣にある同じシリーズで、全体的に黒を基調としたカラーリングだけどピックガードの部分だけがレッドカラーになっているギターだ。

俺からすれば色違いだからこそ意味がある。スタートを切るにはもつてこいの代物だろう。

「ふうん、そつか」

「そつちから聞いておいて全然興味なさそうな声で返すのやめませんか？」

「別にそういう意味じゃない。ただギターを買うだけじゃなくて、ちゃんとそこに意味を見出してるなら良い事だなんて思っただけ」

「あ、そうなんすね。すいません」

「別にいい。その方がギターも報われる」

リヨウさん……やっぱこと楽器に関してはアンタが一番信頼できる人や……!」

「じゃあギターと他の用品も買って今日は解散にしよう。優人も早くそのギター弾きたいだろうし」

「……はい!」

いつもがいつもなだけに、今日のリヨウさんがとても頼もしく思えた。

ギターと他の部品も買い揃えて店を出る。

とりあえず駅まで一緒に行く事になった。

隣を歩くりヨウさんの足取りが不思議と軽く見えて、表情もいつもより明るく見えるのは気のせいだろうか。

「リヨウさん、何か機嫌良くないですか?」

「ん? まあね」

否定しないという事は、つまりそういうことなんだろう。

「優人は覚えてる？」

「何をです？」

「バイト初日の時にした会話」

よく思い出してみる。

確かにリョウさんに受付教えてもらった時だっけ。

「何となくは」

「あのとき、私は優人にも楽器に触れて音楽に関わってほしいって言ったよね」

「ですぬ」

「だから今日、優人がギターを始めて自分のを買いたいって聞いた時、嬉しかった」

「そうなんですか？」

「うん」

そう答えながら空を見るリョウさんが、何だかとても美しく見えた。

「私達の、結束バンドの音楽を見てそう思ってくれたんだとしたら、それは私にとっても

本望だから」

「本望？」

「少なくとも私達の音楽が一人にでもそういう影響を与えたって事だし」

言われてみると確かに、バンドマンからすれば自分達の音楽で誰かに影響を与える事ができるってのは誇れるものの一つになるのか。

しかもまだライブ自体は初ライブと文化祭ライブの二回だけだしな。

「それにいつも側にいる優人に影響与えられたってのが、一番嬉しい事かな」
「っ」

？ 偽りのないリヨウさんの純粋な笑顔があまりにも眩しくて思わず顔を逸らす。

正直今の顔は、反則だ……。ちくしょう、この人こんな顔もできたのか。やっぱ顔が良いってズルいわ……。

「？ どうしたの」

「何でもないです……」

しかもこういう時に限って鈍いのなんなの。ラブコメ主人公かよ。

不意に見せるギャップはダメだって言ったでしょうが！ いやリヨウさんには言っ

てないけども！」

「じゃあ私はこの辺で」

「え？ あ、ああ、分かりました」

そうこうしてる間に駅に近くまで来ていたらしい。

前半で散々振り回されていたから、リヨウさんも楽器店を見て回るといふ自分の目的を果たせたって事かな。

「今日は本当にありがとうございました。何だかんだリヨウさんのおかげで色々知れたし、楽しかったです」

「私も、たまには誰かと楽器を見るのも悪くないって思った。もつと上手くなった時にはそのギターで結束バンドの曲弾いてみてよ」

「……頑張ります」

地味にハードル上げないでほしい。

「じゃあまた月曜日」

「はい」

お互い軽く手を振って別れる。

最初はどうなるかと思つたが、予定通りギターも買えたし結果的には上々だ。あとは帰るのみ。

これで後藤さんとの練習ももつとしやすくなるしこれから充実しそうだなあ。あ、今日は後藤さんに俺のカメラを持たせてちよつとだけ様になつてるか写真撮つてもらおう。

何せマイギターだ、少しくらいテンションが舞い上がったっていいでしょ。

ギターケースも背負つてるしもう気分は生粋のギタリストである。やべえ、もしかして今の俺つて周りからしたらちよつとバンドマンっぽくてかつこいいんじゃないか？

と、ルンルンしながら改札に向かおうとした時だった。

急に背後から誰かに腕を掴まれたのだ。

「あのっ!」

「はい?」

振り向くと小柄な女性……いや、女の子? とにかく小さい女の子がいた。

前髪はパツツンで後ろはツーサイドアップ、ファッションなのか首に包帯だか何だかを巻いており、袖が余り散らかしているのか両方の手が袖の中に隠され萌え袖の究極版

かと思ってしまうほど。

何だろう。人を見た目で判断しちやいけないのは分かっているんだけど、何かこう……
関わると面倒そうな気がプンプンする。

格好がちよつと地雷系とかメンヘラ系というか、いや見た目通りの年齢なら別にいいんだが……俺の嫌な予感センサーがレベル4まで上がってきてるような。

「ギター持つてるって事はバンドマンの人ですかっ？」

「……えっ？」

彼女の第一声に素っ頓狂な声が出てしまう。

や、確かに今の今まで俺ギタリストっぽくねとか思ってたけど、まさか本当にそう見えてたなんて……やだ、ちよつと照れちゃう。俺そんなバンドマンに見える？

「あつ、あたしばんらぼっていうバンド批評サイトで記事書いてるぽいずん♡やみつて
言います！ ちなみに十四歳ですっ☆」

おっと、これは危険な香りがしてきましたよ。

十四歳でライターやってるって何。怪しきMAXなんですけど……。つうか喋り方からしてこれぶりってんな。アニメ好き舐めんなよ。そういうのはすぐ見抜けるんだか

らな。

「実はあたし記事になりそうなネタを探してるんですけどお、御茶ノ水付近うろついてたらバンドマンにも遭遇するかなって思ってたのに全然いなくて……でもようやくあなたに出会えたので良しとしましょう☆ 良かったらあなたのバンド経験から面白いネタとか気になってるバンドの話とか聞けたらと思ってるんですけど、何かありませんか!？」

なるほど、バンドマンのネタ探してどこか。

この際十四歳とか痛々しい格好については触れないでおこう。人には決して踏み入れてはいけない領域があるのだ。

しかし気になるバンドか。結束バンド……の話をしたところで今はまだ二回しかライブしてないし無名も無名だからなあ。

この人に言ったところで絶対相手にしなさそうだし、何よりまだ後藤さんがこういう人を相手に上手く話せるはずもないからまだ黙っておくか。話すにしてももう少し経験値を増やしてからじゃないと。

「すいません、ギター背負ってるから勘違いさせてしまったようですけど、俺バンドマン

でも何でもないんです」

「…………え、そうなんですかあ？」

「はい、最近始めたばかりでようやく今日ギターを買ったばかりですしバンドも組んでる訳じゃないので、期待に応えられるようなネタはないと思います」

中学生じゃないのは当然として、ライターをやってるならおそらく成人して働いてると見越して接する。

むしろ成人済みでこんな格好する人リアルにいるんだな。首に包帯が気になりすぎる。いつそコスプレかと思うっちゃう。

俺の言葉にどう反応するかと思っていたら、さつきまでのぶりぶりかまってちゃんオーラがすぐさま消え去った。

明るい表情も消えあからさまにガツカリした雰囲気を出している。

「ああ、そうなんです。なら大丈夫です。時間取らせちゃつてすいませんねえ。じゃああたしは忙しいので失礼します。あ、ギター頑張ってください」

「あ、はい」

流れるように別れを告げられた。

めっちゃ分かりやすく豹変したな……。リアルぶりっ子ってあんななのか？

「はあ……せつかくネタの手がかりになると思ったのにハズレ……どこかに記事になりそうなバンドネタはないの……」

背中からちよつと哀愁が垣間見える。

うわお、ライターって大変なんだな……。あんな若い人でも苦労しまくるのか。力にはなれなかったけど密かに応援くらいはしておいてやろう。南無。

「思ったより嫌な予感的中しなかったな。勘が外れたか？」

結構警戒してたけど向こうから離れてったし、嫌な予感ほど当たる俺からすれば珍しく何もなかった。

いや何もならないならそれでそれが一番いいんだけど。まあいいか。

「よし、帰ろう」

最後に謎の出会いがあつたけれど、そんな事は気にも留めずに俺は帰路についた。

近い時、今の女性と再会するなんて事も知らずに。

61. 宅録は宅録で変な緊張感がある

「来ちゃった☆」

「来ちゃったかあ……」

リヨウさんとギターを買った翌日の日曜日。

今日もバイトはないので後藤さんの動画投稿の手伝いをする予定だったのだが……。今日の前にいるのはみんな大好きラブリーマイエンジェル虹夏さん。

しかも俺の家の玄関である。母さんに呼ばれて下に行くとき彼女はいた。これなんてデジャヴ？ 結束バンドのTシャツデザインを考える時いきなりウチ来たよね。来ちゃった☆ で済ませられる距離でもないよこれ。

「あの、もし忘れてたら申し訳ないんですが……俺にアポとりましたっけ？」

「とってないよ！ 優人くん家には思い付きで来たんだ！」

「そっか〜」

んん〜無邪気な笑顔が可愛いから許すっ！

思い付きで来たなら仕方ないよね。俺だっと思いつきで行動する事あるもん。しゃあないしやあない！

「で、何しに来たんですか？ 一応俺は今日後藤さんところで予定があるんですけど」

「知ってるよ。あたしもぼっちちゃんに昨日の夜連絡したからここに来る事になったしね。優人くんの家に来たのはついでの迎えに行こうかなって思ったわけ」

「昨日の夜って、だいぶ急ですね」

「まあね〜。ぼっちちゃんに聞いたら今日はギターヒーローの動画を撮影するって言うてたから、見学してみたくなっちゃったんだ。元々あたしってばギターヒーローのファンだからねっ」

言われてみれば確かにそうか。

せつかく好きだったギターヒーロー本人がバンドメンバーにいるんだから、その作業風景を見てみたいと思うのも道理だ。まあ虹夏さんだけなら後藤さんもそんなに緊張せずに撮影できるかな。

「あとは結局昨日リヨウと二人きりでデートしてた説明何にも聞いてないし、直接問い詰めた方が早」

もの凄い早さで虹夏さんの口を俺の手で塞ぐ。あ、あつぶねえ……今の母さん達に聞こえてないよな……？

……よし、大丈夫そうだ。もし聞こえてたらドア蹴破つてきて詰められるの確定だし、何とか命拾いした。できるだけ俺は声を抑えつつ虹夏さんの近くで言う。

「に、虹夏さん……その話はここでされると色々マズいので、後藤さんの家に行きましようか？俺もすぐ準備してくるからちよつとだけ待つてもらえますよねえ？」

「ぶはっ……う、うん……」

「三分、いや一分で済ませてきます！」

言つて階段を駆け上がっていく。単純に虹夏さんを待たせたくないのもあるが、その間に母さんが虹夏さんに話しかけてボ口を出されるのが怖いからだ。

間違つてリヨウさんとデートしたなんて誤解しかない事を言われると、おそらく俺は三ヶ月くらい家を放り出され後藤家に放り込まれるだろう。その未来しか見えない。

こういう時ほど男で良かったと思う事はない。何せその気になれば準備なんて一分でできるのだから。

そしてこの時急いでいたせいか、俺は虹夏さんのその声を聞く事は叶わなかった。

「何で平然とああいう事してくるかなあ……」

宣言通り一分で準備を済ませた俺は虹夏さんと共に後藤家へと向かった。

何故だか虹夏さんがさつきよりも大人しい気がしたけど、母さんと会話した訳でもなさそうだから大丈夫だろう。

ものの数秒で後藤さんの家に着き、俺は鍵を出していつものように鍵穴に差しした。

「……え？ 優人くん？ 何それ？」

すると虹夏さんが素っ頓狂な声で俺に聞いてきた。

「何それって言われましても……普通に鍵ですけど」

「それは見れば分かるよ!? 何でぼっちちゃん家の鍵を優人くんが持つてるのって話
！」

「ああ、そういう事ですか。合鍵ですよ。ほぼ毎日後藤さんの家行つてゐるからと、いつもインターホン押すのも面倒そうだから合鍵あげるつて後藤さんのご両親がわざわざ作つて俺にくれたんです」

「もう完全に家族扱いだね……」

信頼されてゐるようで俺としては普通に嬉しいんだよなこれ。もちろん悪用なんて一切しないけど。

よく考えたら自分の家より後藤家にいる時間の方が長いし、割とマジで第二の家になつてるところある。

「ほら、入りましょ」

「慣れてるな」

「あら、ゆう君も虹夏ちゃんもいらつしやくい！ あつ、ゆう君の場合はおかえりなさいかしらあ、なーんて。ふふつ、ひとりちゃんは上にいるから、二人共ゆつくりしていつてね。ふたりは下にいさせてるから安心してちようだいっ」

「あ、お邪魔します」

サツと出迎えてくれた美智代さんは簡単に言つたあとすぐリビングの方へ戻つて行つた。

おそらく直樹さんと一緒に家事したりゆっくりしてたんだろう。それに撮影する事も昨日の内に言っているからその辺の気遣いもしてくれてるっぽい。あまり邪魔するのも悪いし、さっさと上に上がるか。

「上行きましよう、虹夏さん」

「何で優人くんはおかえりなさいなの？」

「さあ、ここは自分の家だと思えって事じゃないですかね？」

「外堀の埋め方が凄い……」

まあこういう手法には俺も慣れてきたから今更何か思うところとか特にない。

もはや日常なのでスルー安定である。

どうせ成人した後も一緒にいるだろうし、その後も何やかんや面倒見るのは俺なんだから何も言っておなくてもいいのにな。

結束バンド続けている間は虹夏さん達もいるのでそこは安心できる。できれば人気出て一生続けてほしいところだ。

二階に上がってすぐそこにある引き戸をノックもなしに開ける。

部屋の主がいた。

「おいつすー後藤さん。虹夏さんも一緒に来たぞー」

「あつゆうくん、虹夏ちゃんもこんにちは……」

「ちよつと優人くん、一応女の子の部屋なんだからノックくらいはしないと」

「今更見られて困るようなものなんて俺達の間にはないですよ。なあ後藤さん」

「え？ あつう、うん、そうだね……」

どうやら困るものがあるらしい。次からは気を付けるか。

部屋を見れば作業準備の最中だったようで、テーブルにはノートパソコン、周りにはギターはもちろんカメラやアンプなど録音撮影に使う機材などが置かれていた。

「おくぼつちちゃんの新しいギターやっぱりかっこいいね！」

「あつありがとうございます……」

「じゃあ今日はこれで動画撮るんだね」

「あつはい」

「宅録一度は見てみたかったから楽しみだな〜！ って、あれ？」

部屋を見渡していた虹夏さんの視線がある一点に集中する。

それは後藤さんがいつも引きこもっているもう一つの巣……じゃなくて部屋。押し入れの中だ。

「このギターって、ぼっちちゃんの前のギターでもないよね。ていうか新しいやつとピックガードの色だけ違うって事は、色違い？ ぼっちちゃんもう一つ買ったの？」

「あつ、いや、それは違くて……」

そうだった。昨日後藤さんが今日だけこのお揃いギターを一緒に並べて寝たいとか言い出したから、舞い上がってた俺もその場でオーケーしたの忘れてた……。

今日虹夏さん来るだなんて思ってたからすつかり失念してたな……。何で押し入れ閉めてねえんだよ。

しかし見つかってしまったものはしょうがない。まだ言い出すつもりはなかったけど、リョウさんにも知られたしあの人の事だからいつボロ出すか分からないので、もういつそ自分から言ってしまう方が後腐れも悪くはないか。

「あー、そのギター俺のなんです。夏休み辺りから始めて、昨日御茶ノ水で買ったんですよ」

「……えー!? そうなの!?!」

「結束バンドの演奏を見て興味持ったんで、後藤さんに教えてもらいながらやってたんですけど、そろそろ自分のも欲しくなっちゃって」

うん、虹夏さんらしい反応すぎてむしろ安心感すら覚える。
なんかこう、分かりやすくリアクションしてくれる人がいるというのは良いね。こっ
ちも気持ちよくなってくる。

「う〜ん……そつかそつかあ〜。あたし達の演奏見て優人くんも楽器始めちゃったか〜
！」

凄く満足そうに虹夏さんがにんまりしている。やはりリヨウさんと同じで、自分達の
音楽が誰かに影響を与えた事実喜びを感じているんだろう。

それはそれとしてとても可愛い。

「じゃあいつそのこと優人くんも結束バンドに入っちゃ」

「それはないです」

「即答?!」

虹夏さんの事だから多分言っけきそうだなと思っただら本当に言ってきた。

「実力的な理由もありますけどそもそも俺が好きなのは四人の結束バンドであって、そ
の中に入りたいたいからギター始めた訳でもないですし、俺が入るのは絶対に違うと思っ

るんで」

「えー、そうなの？」

「例えるなら推しのアイドルグループがどんなに好きでも、その輪の中に入ってずっと一緒に歌って踊りたい訳じゃないみたいなき感じですよ」

「結構分かりやすい例え来た!?!」

「あつ、私も何度か言ったことあるんですけど、いつもああやって断られます……」

「俺は結束バンドを陰から手伝えればそれでいいんですよ。何せ結束バンドのファン番号なので」

「というか女子四人の中に男一人入ってるバンドとか肩身狭すぎて無理。」

あと謎の力が働いてるか知らんけど、一切バンドメンバーに入りたいとかそういう気持ちが一ミリも出てこないのだ。謎の力ってなに？

「なーんだ。優人くんのギター聴いてみたいのにな」

「あくまで俺は趣味の範疇ですから。もっと聴かせられるようになって後藤さんに認めてもらえたらその時にでも戯れだと思つて聴いてやってください」

「ゆうくん、もう結構上手いんだけど……」

お世辞はよせ。後藤さん程の人が始めたばかりの俺如きの演奏を上手いだなんて言

うはずないだろ。

調子に乗って初めて後藤さんが虹夏さん達とセッションした時みたいにな手だつて言われて終わりだよ。泣くぞ。

「はいはい、俺の話はこれくらいにして今日の目的を果たしましょう。後藤さんも撮影準備してくれ。俺も手伝うから」

「あつうん」

「ん？ 優人くんも手伝ってるの？」

足を延ばしていた虹夏さんが聞いてきた。

「はい。と言つても今回が初ですけどね。俺のやる事は準備の手伝いと撮影した後の編集作業が主です。そのために今日まで色々勉強して練習もしてたんで」

「はえ、そうなんだあ」

それはもう、ただ映像を編集するだけなら簡単ななと思つていたのだが……弾いてみたの動画には打ち込み作業などもあるらしく、カラオケトラックや著作権問題にも配慮して色々やらなければならぬ事が多かつたりするのだ。

オーチューバーの動画編集とはまた全然違うやり方なので結構苦労した。おかげで

最低限の知識は付いたから結果的にはプラスになったけど。

「じゃあぼっちちゃんがもつと人気出たらギターヒーローのマナージャーにもなれる訳だね」

「まあやってる事はいつもと変わらないですしね。変わるとすれば投稿頻度上げさせるくらいでしょうか」

「そ、そのくらいなら私でも頑張れそう、かも……」

曲のジャンルはともかくギター弾くこと自体は好きだもんな。編集は相談しつつ俺がすればいいし後藤さんは好きなギターを弾くだけでいい。

……あれ、これってもしや俺は常に後藤さんの面倒見れるし、後藤さんは結束バンドの活動しつつ動画ではギター弾くだけで済むから結構良い案では？

「……うん、このままいけば絶対調子乗ってどこかで躓く未来が見える。他の人ならともかく後藤さんだからな。誰にも想像できない事やらかして炎上からのチャンネルBANされてそう」

「ウツ……!?!」

「優人くん、心の中の本音口に出ちゃってるよ〜」

しまった。俺とした事がなんて初歩的なミスを……。

危うく後藤さんが棺桶の中に入りそうにしていたところを引っ張り出して何とか現世に留まらせる。

撮影準備も終わる寸前というところであった。

「そーいや他の二人にはギターヒーローの事伝えてないんだっけ？」

虹夏さんが客出し用のジューズをストローで飲みながら聞いてきた。

「あっなんか言うタイミング逃しちゃってるというか……今はまだ三人だけの秘密という事で……」

「機会が来れば俺も一緒に立ち会って言うんで、待ってやってください」

「マンガだところという秘密からバンド解散とかに繋がるよねえ」

「ふっ不吉な事言わないでください……」

なんて事言うんだこの天使。たまに毒吐いちやうとこも姉そつくりだな。

そういうところも素敵ですっ！ 時には墮天しちゃってもいいじゃない！

まあ虹夏さんがいる時点で結束バンド解散なんてあるはずもないけど。こんな優しい人いてバンド辞めるバカとかいる訳ないじゃんね。

リヨウさんは虹夏さんがいる限り辞めないだろうし、喜多さんはリヨウさんに憧れてるし何なら後藤さんを支えるために頑張ってる最中だ。後藤さんは虹夏さんの夢を支える事と高校中退……は関係ないか。とにかく虹夏さんがいれば大丈夫だろう。

さすがバンドの潤滑油。むしろ虹夏さんがいないとどうなるか分かったもんじやないね。

俺ももつと信仰しないと……。

「これから毎日虹夏さんにお供え物した方がいいか」

「急に何!? 不吉な事言ったからあたし消されるの!? ぼつちちゃんつ、たまに優人くんもヤバイ発言するんだけど!」

「えへへ、さすが私の幼馴染ですよね……」

「それは褒め言葉なの!」

後藤さん的にはそうなんだろうけど、不思議な事もあるもんですね……全然嬉しくないや!

しかも虹夏さんから遠回しに後藤さんと類友扱いされてるし。ちよつと体の形変えられて幼馴染ってだけで似てる訳ではないでしょうに。

いい加減気を取り直して後藤さんにギターを持たせる。

録画準備もバツチリだ。

「よし、いつでもいいぞ」

「う、うん」

先ほどまでのふざけた雰囲気はどこへやら。

虹夏さんもいよいよギターヒーローを目の前にして少し萎縮したようにちよこんと座っている。

俺は後藤さんにアイコンタクトで合図を送った。

虹夏さんがいるからって緊張はしなくていい。手元に集中するんだぞと。

彼女が小さく頷く。

そして。

ギターヒーローの撮影が始まった。

「ぶあつくしよい!!」

「その流れで優人くんがNG出すの!？」

6.2. 口実または事実

「ふう……よし、こんなもんか」

「と、投稿完了……だね」

「ああ」

あの後、テイク2では無事に撮り終え今回は既に作ってあったカラオケトラックを使用したため打ち込み作業もなく、軽い編集だけで動画を投稿する事ができた。

アップロードも終わったし、今日やれる事はひと通り終了ってとこかな。

「……」

「すいません虹夏さん、せつかく来てもらったのに見てるだけつても暇でしたよね」

「……え？ あつ、全然そんな事ないよー！ 撮影風景とか編集気になるって言ったのはあたしだし、見てるだけでも結構楽しかったよー」

「それなら良かったです」

撮影中は何か落ち着かない様子というか何だか焦りを感じてるような顔してたけど、どうやら心配なさそうだ。

俺も一息つこう。練習してたとはいえ、世に出す動画……それも登録者数の多い後藤さんの動画編集を手伝うとなると少し緊張する。何度も確認したけどおかしいとことかなかったよな？

思わず隣の後藤さんを見てみると、

「ふ、ふへへ……初めての共同作業だね……」

「言い方に語弊がありすぎる事を言うな」

何だか気持ち悪いトーンでにへらっていた。相変わらず頭がちよつとアレらしい。

まあ何も言つてこないって事は編集への不満点はないと判断しておこう。PCの前で正座待機してるところを見るにコメント早くつかないかなとか思つてんだらうな。そんな早く来るのはガチファンくらいだろ。

「やつぱりツイッターとかイソスタはやらないの？」

隣にいる虹夏さんが両足を立てたまま座つて後藤さんに質問した。

こらっ、膝なんて立てないでちゃんと伸ばすかもう少し気を付けなさい。スカートだ

から若干太もが見えてしまってるでしょうが。男が隣にいらつと、いう事忘れてません？ や、チャリズムとか別に期待してないから。そんなの見たら俺自ら命落とすから。マジだから。

「あつそんなに興味は……」

「え、手軽に動画あげられて便利なのに」

「虹夏さん、後藤さんにSNSは酷ですよ」

「え、なんで？」

「なんでってそりゃあ、ねえ？」

「言わずもがなでしょ。」

「承認欲求モンスターの彼女がそんなの始めたらいね欲しさに何しでかすか分かりませんよ。変にのめり込んで痛い目見て終了です」

「ほんと信用ないねぼっちちゃん……でもちよつと見てみてよ。こつやつて色んな人が動画とか画像あげてるんだよ！」

言つて虹夏さんはPCでちよちよいと検索をかけてツイッターの画面を表示する。

ふむ、ギターの画像上げてる人もいるんだな。my new gear. という眩き

はあれか。新しい楽器買った時の恒例行事みたいなコメントなのかな。

「楽器の写真だけでたくさん反応貰ってる……。まいにゅー……げ……あ？」
「後藤さん……」

中学生レベルの英語も読めなくなってるってマジかよ。
先月のテストで叩き込んだばっかなのにもう忘れてるのか。

「マイニューギアだよぼっちちゃん」

「パプアニューギニア……」

「誤答さん……」

「あつ、字が……」

次回のテストもどうやら俺は寝不足確定のようだ。

グツバイ未来の俺。無事に生き残るんだぞ。過労で倒れるなよ。

「新しい機材や楽器買ったらみんなこうやって写真あげるんだよ。高価な楽器はいいねたくさんつくね〜」

「じゃ、写真あげるだけでこんな簡単にいいねが……!?! 演奏動画あげるのもうやめよ

うコスパ悪すぎる……あいたつ!？」

「自分から破滅の道行ってんじやねえよ。広告収入ある分オーチューブのがマシだろ。あと俺の仕事いきなり奪おうとすんな」

手刀チョップで正気に戻させる。

と思っただけで正気でこれなんだったわ。どうしようもねえな。

「つたく……ん? この人、高い楽器速攻で売り買ってますね」

「あ、ほんとだねー。せっかく高いの買ったんなら大切にすればいいのに……つて山田!? 何やってんだあいつ!」

え、これリヨウさんのアカウントなの? まじ?

いや、でもそんな事あるのかね。トウイッターとかサブ垢含めたら普通に億とか余裕で超えるくらいアカウントありそうなのに、その中で身内一人特定しちまうなんてそんな……。

「これ見て! この眩きでお金ないから山菜ご飯食べるって言ってる! 絶対リヨウだよー!」

まじでした。何やってんのこの人。バカなの。アホなの。

チンするご飯にワラビとか食べそうな山菜をとにかくぶつ刺してるところがもうやばい。そのうち雑草博士とかになれそう。

つか昨日俺に楽器を買う事に意味を見出してるのは良い事とかなんだ言ってたくせに、自分普通に売り捌いてんのどういう事だよ。

昨日感動した俺の気持ち返せこの野郎。楽器に関してはいつだって本気とか？じゃん。平気でコレクション手放してるよ。サイコかな。

「身内のこういうの引くわ……てかりョウフオロワー3000人もいるんだ……お金で買っつてないよなあいつ……」

「可能性は否定しきれませんね」

だってリョウウさんだし。昨日見惚れてたのがバカバカしくなってきた。

何だよ世界のYAMADAってアカウント名。矢沢カナベアツのどつちかだろ普通。いやYAZAWAもあるか。何たってにこにーだもの。

んで後藤さんは何を唸ってるんだろう。

何となく考えてる事は予想できるけど。どうせマイニューギアりたいとか思ってるだろ。承認欲求スイッチ入ってきてるなこれ。おお、葛藤してる葛藤してる。

自分の中の承認欲求モンスターと戦ってるのか。本体エクソシストみたいになって

るけど大丈夫なの。

悪魔に憑かれ始めてないかな。うん、どうせ後藤さんの中にいるのが天使でも悪魔でも見た目が後藤さんならくそ雑魚確定だし放っておいてもいいだろう。

「あ、ちよつとお花摘みに行つてきます」

「普通にトイレ行つてくるでいいよ。ぼっちちゃんはあたしが適当に何とかしとくね。あの態勢はちよつと怖いけど」

「すみません、頼みます」

後藤さんの部屋を後にする。

女子の前でトイレ行つてくるって何か言いづらいから女子っぽく言つたけど、逆に気を遣われたな……。

男版のお花摘みはどんな言い方するんだろ。

一回調べてみたけど忘れちゃった。それより数年前に一番かつこいいトイレ行つてくるの言い方考えた奴優勝みたいなスレを見付けて、ドイツ語っぽく書かれた書き込みでめつちや笑つた記憶しかねえや。

確かイツヒ ファンバルト デル ウンコ ハイル フンデルベン ミーデルベン
ヘーヒルト ベンデル ファンバルト ヘーデル ベンダシタイナー フンデルト モ

レル ケツツカラデルド フンベン モルゲン モーデルワ イツヒ アーデル
ゲーベン ワーデルだっけ。

当時は中学生だったから一人でバカみたいに笑ってたなあ。今思い出すと呪文かよつてなるけど。二階に虹夏さん達いるのに何無駄なこと思い出してんだ俺。

手早く用を足し手を洗っていると、玄関の鈴が鳴ったのが聞こえた。

誰か出ていったのか？ 美智代さん辺りが買物に出掛けただけかな。

そう思い特に気にも留めずトイレから出て二階へ戻る。

と、そこにいたのは虹夏さんだけだった。足伸ばしてめっちゃリラックスしながら座っていらつしやる。

「あれ、後藤さんは？」

「なあんか急に行つてきますつて言つて家から飛び出していつちやった」

「……はい？」

じゃあさっきの玄関の鈴が鳴つたのは後藤さんが出ていく音だったのか？

つて、いやいやそうじゃなくて。

「え、何しに出てつたんですか後藤さん」

「あははく、えつとねえ……」

どうやらエクソシストを鎮めるべく虹夏さんの気遣いで後藤さんのトウイッターアカウントを作成、一枚だけ写真をあげれば落ち着くだろうとおニューでもないのに元から使っていた直樹さんのギター写真を投稿。

しかしアカウント作成したすぐにいいねがたくさんつくはずもなく、謎の衝動に駆られた後藤さんはそのまま外へ飛び出していったと。

「あんのアホ……」

「適当に時間潰しててって言われたんだけど、ここぼっちちゃんの部屋だし勝手に触るのも何だかなろって思ってたから優人くんがいて助かったよ」

「見られて困るようなものはここにはないと思いますけどね。楽器機材と音楽雑誌くらいしか置いてないし。まあ俺でよければ暇潰しの相手になるんで飽きない限りはここにいてもらって大丈夫ですよ」

とは言ってもさすがに勝手にPCで遊ぶのは気が引けるので閉じておくか。まだトウイッター画面開いたままだな。

……ん？ ああっ!?

「あのピンク野郎……勝手に俺のギターまでマイニューギアにしてやがる……」

「あたしもそれはやめといた方がいいんじゃないかって言っただけどね。ゆうくんなら許してくれますって謎の自信を持って言ってたよ」

「まじで謎の自信だな。俺の物は後藤さんの物とでも認識してんのか。それどこのジヤイアンだよ。」

「本当なら俺のトゥイッター垢でマイニューギアしたかったのに……相互のアニメオタクフォロワーからどんなリプ来るかちよつと内心ワクワクしてたけどこれじゃもうできねえじゃん！ ギターヒーロー垢だから下手すると特定されそうだし。」

「ねえねえ優人くん、気になってたんだけどさ」

「何です？」

「振り返ると虹夏さんが四つん這い状態で部屋の隅に移動していた。スカートなんだからもつと気を付けてほしいんですけど。」

「このおつきいメンダコ？ のぬいぐるみって前来た時はなかったよね？ ぼっちちゃん水族館にも行ったのかな？ あんまりそういうところ行かなそうだけど」

「ああ、それは俺が後藤さんにお土産であげたんですよ。殺風景な部屋だからぬいぐる

みでもあつた方がいいかなつてね。ほら、文化祭の時にも言いませんでしたっけ。喜多さんと二人でシーパラに行つたつて。そんな時のやつです」

「……あくさういえばそんなことも言つてたね」

後藤さんの好みとかは分からののでとりあえずあげてみたらこれが気に入つたようで、寝ている彼女を起こしに行くとい〇〇%の確率で抱き枕にしている。

何でも触り心地が良くて寝る時にちょうど良いのだとか。確かに触り心地がよいのを買ったから気持ちには分からんでもない。俺も小さいの買つとけばよかつたと今更思つてる。

おふわふわだあ〜と言いながらメンダゴぬいぐるみをぼんぼん触つたり抱き締めたりしてる虹夏さん。

くそつ、おいメンダゴちよつとそこ変われこの野郎。天使に抱き締められるとかどこで徳を積んだんだお前。今この時ほどぬいぐるみに羨ましいと同時に変わりたいと思つた事はないぞ。

「あつ、喜多ちゃんと二人で水族館行つたので思い出した！　さういやまだ昨日リヨウとしたデートの件、詳しく聞いてないよ！」

「誤解しかない言い方！　ほんとあの人俺に厄介事押し付けるのだけは上手いな!!」

その後、俺は何故か正座をして昨日の出来事を全て説明した。

自分の楽器を買いに御茶ノ水に行ったら偶然リョウさんと出会った事。そこから取引の提案を受け、昼食を奢る代わりに機材選びを手伝ってもらった事。半ば強引に手を繋がれ色んな楽器店に連れ回された事など。

聞かれているのはリョウさんの事だけだし、最後に出くわしたほいずん何たらって人の事については別に話さなくてもいいかな。

「ふう〜ん、なるほどね〜」

「事の顛末は全てお話しました。？偽りなんて一つもございません。だからどうかお許しくださいませ虹夏姫！」

何で俺は許しを請うてるんだろう。ただ説明してるだけだよ。正座する理由もないよね。

なのに何で虹夏さんの顔を見てると正座して許しを請わなきゃって思ってしまうんだ？ まさかこれが天使への信仰……？

胡坐をかいたまま特大メンダコぬいぐるみをギュッと抱き締めてる虹夏さん。

その表情は何となくだけど納得がいつていないようにも見えた。ナイスだメンダコ、女の子が胡坐というスカートなのに非常に危険極まりない態勢をとっていてもお前が

防いでくれるなら安心して正面を見ていられる。

「うん、リヨウとの件については理解したよ。あのリヨウに限ってそれはないとは思ってたからねえ」

あれ、でもあなた昨日ロインで冷静さを欠こうとしてなかったっけ。

大丈夫、あれでも虹夏さんの幼馴染なんだ。大事なりヨウさんを取るような真似とかしませんでした。

「喜多ちゃんにもあたしからロインで説明しとくから、優人くんは何もしなくて大丈夫だよ」

「ありがてえっす天使様」

「もう普通にそういう事言ってくるようになったね……」

天使に天使と言って何が悪い。虫見付けたらあ、虫だつて言うのと同じだよ。目の前に天使がいてあ、人だとはならんでしょ。そういう事。

「けど優人くんも気を付けなよ〜?」

「何をですか?」

「優人くんってば気が付いたらどつかで女の子引っ掛けてくるんだから。男友達より絶対女の子の方が連絡先多いでしょ」

「言い方に棘がありすぎる……。さすがに男友達の方が多……」
最後まで言いかけて止まる。

スマホ、今となつては主流のロインで友達確認してみると。

男友達がクラスでつるんでる田中達五人くらいに対して、だ。

女の子がまず結束バンドの四人、店長にPAさん、ファン一号二号さん、からかい上手の佐々木さん、きくり姐さん、志麻さん、イライザさん、オヨヨさん、最近では文化祭ライブ以降の評判もあつてか、喜多さんの女子友とも何人か知り合つていて三人くらい増えた。

「……フツ、やはりモテ期か」

「やけくそポジティブになつちやつた」

だつて男子みんな俺の事ちよつと敵視してくるんだもーん！ クラスの奴らだけだよまだ普通に接してくれるの。

けどバイトとか後藤さんの事もあるから中々交友を広める機会も親睦を深める機会もないのでおわおわりである。まずバンドの手伝いしてるのに何で周囲にはガールズ

バンドしか集まってこないんだろう。しかもクセが強いばかり。また謎の力でも働いてんのかな。

「はあ……出会いがほしい……」

「それ絶対男子の前で言っちゃダメだからね!? また追い掛け回される事になるから! あとぼっちゃんと喜多ちゃんの前で言うのもダメっ、何ならあたしの前でも言ったらダメ!」

「制限強すぎませんかね……」

俺だつてもつとこう、人並みの青春くらい送つてみたいんですよ。何せこれまで家で家事しかしてこなかったからそういうのとはほとんど無縁だったし。

高校入ってバンドの手伝いとかちよつと青春っぽいことはできてるけど、こう、何?

ピンク色のラブコメディックな青春だつてちよつとはしてみたいと思うのが男子高校生の健全な願望でしょうが!

癖強ガールズしかいないスターリーとかじゃそんなの望めないだろうし、ちよつとくらい欲望吐き出させてくれてもいいんじゃない?

ちくしょう、やはり俺の青春ラブコメは間違っているともいうのか!?

「それよりさ……」

「え？ あ、はい」

俺の願望なんて一切気にする様子もなく、虹夏さんはメンダコを抱き締めたままこちらを見ていた。

「優人くんっていつもここでぼっちちゃんと一緒に訳じゃん？」

「まあ、そうですね」

「そんでこの前は喜多ちゃんと二人でシーパラ行つてたでしょ？」

「はい」

「昨日は偶然とはいえリョウと一緒にお昼ご飯食べてお店に行つたと」

「そうなりますね」

え、何、怖い。ちよつとずつ質問攻めされてる感が凄いですけど。

まだ何か問い詰められんの俺。清水さんそんな悪い事したつけ。

いつでも謝罪できるように身構えていると、虹夏さんは少しむくれたように頬を膨らませてこう言った。

「ズルいな」

「……………はい？」

むしろ呆気にと取られてたのは俺の方だった。

「だってみんな優人くんと二人でどっか行つたつて事でしょ？ ぼっちちゃんはいつも一緒に家にいるから例外だけだし、優人くんは結束バンドのメンバーじゃないけど手伝つてくれる大事な人だし、親睦を深めるのに二人で出掛けるつてのは結構良いアイデアだと思うんだよね」

「は、はあ……」

「つまりあたしとも二人でどっか出掛けたりしようよ！ それこそお互いの理解を深めてもつとサポートしやすくなるかもしれないしき！」

「天使と……二人で、だと……!?」

「そんなの俺どうすりゃいいんだよ。銀行から全財産下ろしてもエスコートするには足りないんじゃないのかそれ。」

サポートしやすくなる理屈がイマイチ理解できないけど、虹夏さんには虹夏さんなりの考えがあるつて事なんだろうか。

いやしかし落ち着け清水優人。虹夏さんと二人でどっか行つて事はそれこそ俺の命に関わる出来事だぞ。

結束バンドとサポート役として必要な事かもしれないけど、彼女の背後には必ず店長というファイアアウォールがいる。店長がいる限り二人で出掛けたとしても、どこかで絶対耳に入ってシスコン店長が俺を八つ裂きにしてくる未来しか見えない……！

どうする俺、天使か悪魔、どっちを取る!?

「優人くんはあたしと二人は嫌……かな？」

「二人でどこまでも行きましょう」

気付いたら即答していた。

いやだつて無理やんそんなの。虹夏さんからの誘いを断れる奴がいるとしたらそれはもうリョウさんか邪教徒くらいだよ。

「おお、良い返事いただきちゃった。それじゃあ約束ねっ。もし破ったらお姉ちゃんに言い付けちゃうから！」

どうやら逃げ場は完全に潰されたようだ。

というか逃がす気がないっぽい。いや破る気なんて更々ないけど。

「へへ、日程とかはロインであたしが送るから、当然だけどバイトとか練習がない休日

にするね」

「どっか行きたい場所でもあるんですか?」

「ん、別に? 二人で親睦を深められそうならどこでもいつかなくて。一応調べてみる?」

結構サツパリしていらつしやるようだ。

これはこれで男として見られてなき過ぎてちよつと思うところはあがるが、これも結束バンドのためになるなら構わないか。そもそも天使と人間じゃ釣り合いとれる訳ないしそんなこと考える事すら失礼だな。

そして俺と虹夏さんはどこに行くかを適当にネットで調べつつ後藤さんが帰ってくるまで待つていたのだが、一時間たつても全然帰ってくる気配がないので虹夏さんが帰る事になり、駅まで見送ることにした。

「じゃね、優人くん! 送ってくれてありがと〜!」

元気に手を振ってくる彼女に軽く手を上げて振り返す。

結局どこに行くかは決まっていなかったが、虹夏さんがあたしが考えとくよ〜と言っていたので全部任せることにした。

改札を過ぎて虹夏さんが見えなくなったところで俺も来た道を引き返していく。

結束バンドのサポート役。それが俺の役目だ。今のところは何もしてあげられていない気がしてしょうがないのだが、もつと自分でも何ができるか考えてみるか……。

バンド活動以外でなら何か役に立てることだつてあるかもしれない。

例えば宣伝場所をもつと増やすとか、SNSをもつと利用するとか。考えるだけでも結構案は出てくるもんだな。これらを活用すれば知ってもらえる機会も増えそうだし、後日色々提案してみよう。

そんな事を考えながら俺は第二の家、後藤さんの家に帰っていく。

帰るとどこかですれ違っていたのか既に帰宅していた後藤さんと、何故か大量のエフエクターが部屋に置いてあった。

「……おい、何だこれは」

「ヒイツ!?! あつ、あ、えつと……その……」

話を聞くとこのエフエクターに前の収益代の残り二十万円を全て使いきつて写真をトウイッターにあげたところ、いいねどころか『そんなにエフエクターあつてどうするんですか?』や『練習しないの?』というリプが来て嘆いている途中だったらしい。

憐れすぎんだろ。そしてバカすぎんだろ。一時の感情に振り回されて二十万を無駄にしやがったのかこのアホピンク。

もはや同情の余地はねえ。

お金を無駄遣いするヤツには少しお灸を据えてやらんな。数百年ならまだしも、数十万はさすがに度が過ぎてている。

「お金の使い方を一から勉強し直そうか、後藤」

「えっ……あ、あれ……ゆうくん？ 名字、何で呼び捨てに……」

叱る時は叱る。

それが俺のやり方だ。このアホのアホさ加減には上限がないから、言う時は徹底的にキツク言わんとまた繰り返すからな。

絶対ギャンブルやらせたら一瞬で全てを失うタイプのバカだ彼女は。

将来はギャンブラーにならないよう見張っておかなくてはならない。とりあえずはまあ、一喝いれておこう。

そして、雷よりも鋭い轟音が後藤家に響いた。

63. いきなりの呼び出しは心臓に悪い

平日の放課後。

俺はスターリーでも学校でもなく、とあるカフェにやって来ていた。

いいや、正確には呼び出されたというべきか。

本当なら今日もバイトで後藤さん達と一緒にスターリーへ向かう予定だったのだが、昨夜突然こんなロインが来たのだ。

『清水優人、明日新宿近くにあるカフェに来て』

『え、何ですかいきなりロインしてきて』

『清水優人、明日新宿近くにあるカフェに来て』

『同じ事しか言わないゲームに出てくるNPCかよ。一応理由を聞いても？』

『とにかく新宿近くにあるカフェにきなさい！ いいわね!!』

という半ば有無を言わせない強制呼び出しを喰らったのである。

なので仕方なく今日は急用でバイトに遅れると店長に伝え、俺は新宿にあるカフェへと出向いたのだ。

まったく、まず新宿近くにあるカフェに來いとか曖昧すぎるミッション内容が難しすぎる。

新宿どんだけ大きいと思ってるんだ。構内だけでも迷路だつてのに店名も伝えておいてくれないと探すの無理ゲーだからな。ロインで聞き出したから良かったけど。

と、心の中の愚痴はこの辺にしておいてだ。

俺は対面に座っている少女（一つ年上だけ）に目を向ける。

前回出会った時と同様、ベレー帽に首にチョーカー、黒で統一された服装と毛先だけウエーブがかった特徴的なツイントール。

おもしれー女こと大槻ヨコパイセンが冷や汗だらだら流しながら目を泳がせていた。

「……あの、もうここに来て10分くらい経ちますけど、結局俺を呼びだして何の用なんですか？」

「え？ ……あ、えつと……ま、まあいいじゃないととりあえずは！ せっかくカフェに來たんだし頼んだ物でも飲もうじゃない！」

「や、俺この後バイトあるんで何もなければもう帰りますよ」

「待って！ 言うつ、言うから帰るのはちよつと待って！」

何なんだこの人。人を呼び出してにおいて用事があるならそつちから言うてくると思つて待つてたら何も話してこないんだが。

一回しか会つた事ない人を呼び出す度胸はあるのに、いざ会うと自分から直接話せないとかどんなメンタルしてんだ。

仕方なくもう一度席に座り、注文していたロイヤルミルクティーをストローで頂く。うん、うまし。

ちなみにヨポポさんはカフェオレを頼んでいる。

「で、用というのは？」

「こ、これは一応姐さんにも助言を貰うついでに、とつ……友達の貴方にも仕方なく聞いておこうと思つただけだから、そこは勘違いしないようにね！」

「あれ、俺達つて友達でしたっけ？」

「違うの!？」

「どちらかというところヨッさんが一方的に結束バンドを敵視してるから、俺も快くは思われてないんだらうなって思つてたんですけど」

まさかそちらさんが驚くとは思わなかった。

カフェであまり大きい声を出すもんじゃないですよ。アンタ今普通にファッションとしてはぶっ飛んだ格好してるから。何でカフェなのにもう衣装着てきてんだよ。別に学生服でも良かったでしょうに。

「そ、それはまあ、そうだけど……え……？　でもロイン交換したらもう友達って事なんじゃないの……？」

「うわあ……」

何て悲しい生き物なんだろう。友達という定義を自分で確立させようとしてる時点で見てるこっちが悲しくなってくる。

後藤さんとは違うタイプのコミュ症だとは前から思っていたけど、こっちはこっちで拗らせてんな。どうして俺の周りにいるコミュ症は全身ピンクジャージだったり地雷系ファッションだったりと見た目でもうやべー奴なんだろう。いや似合ってるから良いけどね。

「まあどうでもいい話は置いておくとして」

「どうでもよくはないわよ！　私にとっては重要な事なんだから！」

「本題に入りましょうや。きくり姐さんにも相談しようとしてんならそっちの方が重要なんでしょ？」

「うっ……確かに……」

きくり姐さんの名前を出すと結構素直になるな。相変わらずちよろい。

お互い飲み物を一口飲んでから気持ちのリセットさせる。そして彼女は視線を下に向けながらとても言いにくそうに口を開いた。

「う、うちのバンドメンバーがみんな辞めちゃったの……」

「……………o h.」

どうしよう、思った以上に深刻な話だったでござる。

バンドメンバーってこの前一緒にいた二人の事だよな？ タバコ吸ってた人もいたからオヨヨさんよりも年上のはず。そんな人達が一齐に辞めたのか。まじかよ、普通に驚きすぎて逆にリアクション薄くなっちゃったぞ。

「えっとお、辞めた理由というの？」

「……多分、人間関係が上手くいなくて……」

「あっ」

失礼だけどもちやくちや納得してしまった。

いつもコミュ症の後藤さんと接してる俺でさえ、ヨツさんの性格とか話し方には棘があつて誤解を生みやすいタイプのコミュ症だとうまく理解できるくらいなのだ。

何も知らない人からすればただいきなりデイスられて空気ぶち壊しな挙句、それがバンド間の話であるなら不和が生じてしまうのも道理だ。

改めて後藤さんは虹夏さん達のような理解ある人達と巡り会えただけ幸せなのかもしれない。やつてる事はヨツさんよりやばい時あるけど。

「まあ、話は大体分かりました。けど、それを何で俺に話すんですか？ それこそバンド関連ならきくり姐さんやフォルトにいる銀さんとかに相談した方がいいんじゃない？」

「さ、さつきも言ったでしょ！ 貴方は一応私の友達なんだから、少しくらい話を聞いてくれてもいいじゃない！」

「そのためだけに呼び出されたのか俺……」

この人のバンドに関してはまだの部外者なんだから何も言う事ないような気がするんだけど。

「その話、聞きはしますけどあんま力にはなれないと思つてくださいね」

「ふんっ、別に貴方にそんな期待なんかしてないわよ。友人っぽく話だけ聞いていれればいいわ！」

この野郎……こつちだつて話聞く義理なんてないのを忘れてないか……？

自分の言葉に常時バフかけるスキルでも持つてんじゃないだろうな。しかし私こと清水優人、コミュ症の扱いには多少なりとも長けているという自負が少しはある。つまりこんな事でいちいち苛立ったりツツコミなんてもうしないのだ。

「それで、話というのは？」

「どうすれば良いバンドメンバーって集まるのかしら？」

「めちやくちや相談事じゃねえか」

いかん、あまりのテンポの良さにツツコンでしまった。

そもそもこの人こんな性格なのにどうやってバンドメンバー集めてたんだ。ウエブ面接か何かか？

「な、何よ！ 私と仲良くなりたいたいなら相談ぐらい乗ってくれたつていいじゃない！」

「さつきと言つてる事まったく違うんですが……」

仲良くなりたいかどうかに関してはノーコメントで。

「人が辞めてく原因は分かっているんですけどよね？」

「……私のコミュニケーション不足、かも……」

「それが分かかって何でいつも棘のある言い方しかできないんですか？　こうやって対面で会うの二回目の俺にさえ結構キツめに言ってくるし、んな言い方自分もされると嫌でしょ？　そういうのをもう少し考えてから発言するのも大事な事ですよ」

「そつそんな急に正論言わなくてもいいでしょ!?　私だつて分かっているわよ！　けどバカにされないために必死にやったらこうなっちゃったの！　今更急に変えられないわよ！」

うん、それはそう。気持ちには分かるよ。

それができてるなら後藤さんだつてとつくの昔に変わってるはずだしね。いきなり変われるなんて無理だよな。

「ならもういつそメンバー募集要項に求める技術力と本気度を書いておけば簡単には辞めない人が集まるんじゃないですかね。志が高ければメンバーもみんな向上心ある人とか来そうですし」

「な、なるほど……確かにそれはあるわね。生半可な志じゃ入られても私が困るもの。」

やるからには一番にならないと……」

「あとはヨヨさんも学生だから、もし募集メンバーの年齢を設定するなら同じ学生、それもできれば同じ年か一個年下くらいがちょうど良いかもしれません」

「どうして？」

ミルクティーを一口飲んで俺は続ける。

「ヨヨさんの場合、コミュニケーション不足と口調の強さ、志の高さが他人よりも凄いとプライドも相まって相手への圧力が強くなりそうなので、年上の人だと変に衝突して上手くないかもしれないかもしれません。ただでさえ口下手なんでね」

「ぐぬぬ……言い返したいのに言い返せない……」

「だから同じ年か年下に焦点を当てるんです。一つ下でも俺と同じ高校一年生。それもSIDEROS^{シデロス}が求める演奏技術を知った上で入りたいて言ってくる人がいるなら、それは少なくともバンド先輩のヨヨさんの言う事がある程度聞いて理解してくれる人の可能性が高くなるからですね。とはいっても人の性格なんてそれぞれだからあくまで理想論ですけど」

本当なら年上の方が包容力もあつて理解力も高いからいいかと思つたが、それで一度辞められてるもんなあ。

だから衝突を避けるために年上を回避した上で、先輩だから言う事聞いてくれるかもという上下関係を少し利用しつつも、できればヨヨさんを理解してくれる後輩が入ってくればなっという俺の希望的観測だ。

「……というか貴方、私のバンド名知ってたのね。教えてなかったはずだけど」

「今時新宿フォルトをメインに活動してるバンドって調べりやすぐに出てくるネット時代ですよ、それにシデロスの動画も最近見てるからメンバーが辞めたって聞いて余計に驚いたんですよ」

「そ、そうだったの……」

「レベルが高いだけに辞められたのはダメージ大きいですよねえ」

「ま、まあ？ 別にメンバー辞めてったのはこれで初めてじゃないし？ 私はそんなにダメージ受けてないけどね!」

「ちよつと涙目になってますよ」

「え!？」

おもつくそ深手負ってんじやん。

ネットで調べた時にメンバークビにしまくっているとかまとめサイトに書かれてたけど、これおそらく全部ヨヨさんのコミュ症のせいだな。基本的に人と接するのが下手す

ぎる。そして意外と打たれ弱いとか、そこまで後藤さんと似てるのか。あの子は普通に泣きじやくるタイプだけだ。

「話を戻しますけど、俺が提案できるのはここまです。これもメンバーに入りたいて言ってくる人の性格に期待するしかないですが、そこはもうヨヨさんに判断を任せるしかないですね。あとはきくり姐さんにも聞いてください」

あの人の場合ロクなアドバイスくれるか知らんけど。いや、バンドの事なら多少は真剣に聞いてくれるか？　そういうところは一応真面目だもんなあの人。

……や、どうだろう、期待と不安が見事に五分五分だ。さじ加減一つ間違えれば簡単に地獄にしてくるぞきくり姐さん。

「……そうね。貴方のアドバイス、頭に入れておくわ」

「案を捨てられないだけマシに思っておきますよ」

「だからその……あ、あ、あり……」

「じゃあこれで用も終わりましたよね？　俺そろそろバイトに向かうんで」

「え!?　　ちよ、ちよっと!」

そう言って飲みかけのミルクティーを持ち席を立とうとすると、不意に手を掴まれ

た。

「えつと……まだ何か？」

「……せ、せつかくカフェに来たんだし、もうちよつとくらいゆつくりしていけば……？」

少し頬を赤らめながら目を逸らして言うてくるヨヨさん。

うーん、普通なら勘違いしてもしかして自分に気があるんじゃないかね？ とか思ってしまった。そんな表情ではあるが、それこそ勘違いしてはならない。

俺とこの人は今日でまだたったの二回目の顔合わせである。

お互い男女のアオハルのイベントなんてある訳ないと思っっているし、何より結束バンドをよく思っていない時点で彼女の中で答えは出ているのだ。

ともすれば、この表情の答えは簡単に推測できる。

大丈夫、コミュ症の相手ならばお手の物だ。

「ヨヨさん……いくら友達とカフェでお茶するのが嬉しいからってそんな必死に引き留めなくても……」

「ばつ、ちよつ……べつ、別に必死になんかなくていいから！ ただ、その、えつと……」

そう、頼んだ飲み物くらい最後まで飲んでから行きなさいって事が言いたかったの！
行儀悪いでしょ!？」

何つう無茶な言い訳と口実を並べてんだらう。

お金は払ってあるんだし飲み物くらいならテイクアウト方式でそのまま持つて外に出ている事くらいさすがに知ってるだろ。もう顔真つ赤になってますやん。目とかグルグルですよん。ミルクティーだつてもう半分も残つてないぞ。

しかし手を掴まれて引き留められてしまった以上、このまま逃げるのはさすがに気が引けてしまう。

俺も後藤さんと喜多さんに野暮用できたから先行つてくれつて言つて何も聞かずにダツシユで離れたから後が怖いんだよなあ……。できれば早くスターリーに行つて適当な理由で納得してもらわないと気持ち的にも安心できない。

「そ、それに今向かつてもどうせ遅刻なんだから、むしろいつ行つたつて一緒でしょ？」
いや、それが通じるのは学校の話では？　うちの場合バイト先の店長が怖いから早く行きたいつてのもあるんですが。

うーん、ダメっぽいなあ。この人ポンコツだけど頭は良さそうだから延々にそれっぽい事言つてここに居座らせようとしてきそうだ。

仕方ない、ここは諦めて真性ぼっちの相手をしようではないか。

「はいはい、ミルクティーが無くなるまでの間だけです。その代わりバイト先の店長に怒られたら今度何か奢ってもらいますからね」

「つ……！ え、ええつ、まあ、そのくらいなら全然構わないけど？ というか、また私と会う予定でも作る気なのね！」

「……いや、別にその予定はないな。すいません、失言でした。今のなしです。忘れてください」

「そ……まで言わなくてもよくない!?!」

そもそもお互い拠点が違う訳だし会う頻度なんて全然ないと思うしね。きくり姐さんは……うん、放浪者だから。

向こうから会話が振られてくるなんて期待してないのでこちらから話題を振る事にしよう。

「ヨヨさんってほんとに学校で友達とかいないんですか。その容姿だと普通に男子でも女子でも寄つてきそうなもんですけど」

「さつきからちよつと思つてたけどヨヨさんで定着させるつもりなのね……。学校では

もって地味な格好してるのよ。眼鏡だつて掛けてるし、身長も低いから目立つ事もほとんどないわ。……まあ、別にそれで困る事なんて特にないからいいけどね？」

「あーね」

強がり出ちやつてますよ。

ほんと分かりやすいなこの人。会つて二回目の俺にこんな執着してくるほどだし、友達に憧れてんだろ絶対。学校でもほんとは友達欲しいつて顔に出てるもん。

「それに何をするにしたつて一番さえ取ればみんな必ず私を見るんだから、それで十分よ」

「友達欲しいのか崇めてほしいのかどっちなんだよ……」

後藤さんみたいに人気者になつてちやほやされたいとかか？

話し方から察するにそれとはまた別つぽそうだけど。いったいこの人は何を指してるんだらう。

「一番を取ればみんなが認めてくれる。注目してくれる。だから私は好きな事で……音楽でいつか必ず一番を取つて世界に私を認めさせるのよ」

「大きく出ましたね」

「当たり前でしょ。やるからには絶対が一番を目指す。それが私のやり方なんだから」
「ならその前に早くバンドメンバー集めないとですね」

「うっ……それはそうだけど……」

バツが悪そうにストローを加えてちびちびと飲んでいるヨヨさん。

ここでのんびりしてないでさっさとメンバー集めに励めばいいのに。

「つつてもシデロスレベルならメンバーもすぐ集まりそうですよね」

「……何で貴方にそんな事が分かるのよ」

「動画見てるって言ったじゃないすか。ワンマンライブもした事あるんでしょ？ それだけ人気ありや入りたいって思う人もいると思いますよ。もちろんヨヨさんの圧に負けない人ならですが」

「圧って何よ！」

「そういうとこだよ」

シデロスのレベルは当然ながら結束バンドよりも上だ。

ヨヨさん一人だけだとしてもその技術力は只者じゃないって事は俺でも分かる。メンバーの入れ替えが激しくても人気を維持できているのは、メンバーが変わってもまったく劣らない演奏と歌声でヨヨさんが客を魅了しているに他ならない。

正直、シデロスの奏でるメタルロックは俺からしてもかっこよく、見ていて惹き込まれるものばかりだ。

ヨヨさんと知り合いだからという鼻肩目なしにしても、これは人気が出るのも納得である。そんな人に敵視（？）されてる結束バンドっていったい……。

……あれ。

「あ、ミルクティー無くなりましたわ。んじゃ帰ります」

「ええ!!」 ちよつ、私のがまだ残ってるんだけど!! ほ、ほらつ、まだ半分くらい! だから、ねっ!!」

こいつ……まさか俺のが無くなったとしても自分のが残ってるんだから一緒に残ってくれるとか思ってる……?」

「ただ友達といたんだよ。ちよつと悲しき通り越して虚しさ感じてきてるんだけど。いつそ何か友達イベントの一つでもこなせば一気に満足して解放してくれるとかなのかな。」

うーん……何か良い方法何か良い方法……あつそうだ。

「そういや江の島で喜多さんに教えてもらったものがあるじゃないか。陽キャ御用達困った時の自撮りつてやつがよお!!」

俺のミルクティーはもうないがヨヨさんのカフェオレはまだ残ってるし、ヨヨさん自体衣装も相まってもう映えそうだからこれでいいだろう。

という事でさっそく対面にいるヨヨさんの隣へ移動する。

「ちよいと失礼」

「え、えっ？ な、なに？ いきなり横に来て何なのっ!？」

隣で何か言っているがお構いなしにスマホを出す。

バイブレーションモードにしていたからか気付かなかったけど、画面には虹夏さん達からいくつかロインと着信が来ていた。あれれ？ おつかしいぞ、遅れるってちゃんと連絡したはずなんだけどなあ？

微かな鳥肌を無視してスマホをカメラに切り替える。

「はい、ヨヨさん自撮りなんで適当にカフェオレ持つてポーズしてください。いきますよ」

「えっ？ ちよ、ちよちよ、まつ」

「はいシデロ〜ス……つと。あと二枚くらい撮りますよ。うえーい」

「う、うえ〜い……?」

三枚ほど写真を撮影して適当に確認する。

ふんふん、まあまあ良い感じに撮れてるな。さすが俺、一眼レフで撮影スキルも上がってきてるか。

「何？ あ、貴方私と写真撮りたかったの……？ そ、それならそうとちゃんと云つてくれればもつと」

「よし、じゃあ後々これロインに送りますんで友達イベントはこれにて終了という事で。それでは！」

「私だつて髪とか直し……つてえっ!? ちょっと!? ほんともう行くの!? またこのオチで置いていかれるの私!? ねえ!」

「バイト先からめっちゃ連絡来てたから急がないといけないんですつて。また会う機会あったらそんな時に話しましょうや。あとメンバー集め応援してるんで新星シデロス楽しみにしてますね〜!」

「なっ」

足早に店を後にする。

最後に、俺は彼女の言葉を聞き洩らした。

「……まったく、次会ったら容赦しないんだから」

その後、スターリーにて。

「優人君だったら、詳しいこと何も言わずに行っちゃうんだもの。ひとりちゃんもずっと
そわそわしてゴミ箱から全然出てこなかったのよ?」

「ぼっち、ゴミツムリになってた」

「わ、私の特等席はやっぱりゆうくんの後ろ……」

「それで? 今日はどうな女の子を口説いてきたの?」

「ねえ急いで来たのに何この言われよう!!? 俺何かした!?!」

64・女難の相が本当にあつたとしてなりたいかどうか は別問題

「もつと結束バンドの活動を宣伝して広げていく?」

「はい」

何とか尋問を振り切りバイトも終わって最後の掃除中、俺は虹夏さんにそう提案した。

「文化祭ライブを機にうちの学校でも少しずつ知名度上がってきてるし、前から次のライブはいつやるかって話してましたよね。だからここでいっちょよライブをしてもっと広めていくべきかと思ひまして。もちろん場所はスターリーですけど」

「なるほどお、あたしもそろそろライブしたいと思つてたからちようど良いかもね。今ならもつとお客さん来てくれるかもしれないし」

「はい。それと喜多さん、SNSの宣伝もつと頻度増やせないか?」

ちようどイス運びを終えた喜多さんにも話しかける。

「ええ、それはできると思うけど」

「とりあえず写真付きでトゥイッターとかイソスタに投稿してくればいい。楽器とか、演奏してるメンバーの風景でも構わん。何ならバイト中でも暇があれば写真撮って投稿するのもありだな。スターリーでバイトなうとか眩いとけば、結束バンドだけじゃなくてスターリーの知名度も少しは上がるかも」

「分かったわ。それって自撮りとかでもいいの?」

「ああ、あくまで結束バンドのSNSだから眩きや写真が音楽関連であれば問題ないと思う」

あとは何ができるかな。

ライブの様子を写真とか動画で撮影して投稿するのも悪くない気がする。バンドなんだから曲を聴いてもらってなんぼだもんな。だとしたら一眼レフで動画撮るか? いや、それともちゃんとしたビデオカメラを用意すべき? どっちがいいんだろ。

写真を撮るならライブハウスは照明ライトがあるにしても暗いのに変わりないし、新しく明るいレンズも買わないとだよな。

ビデオカメラについては……また家に帰ったら調べるか。

「けど優人くん、何でいきなりそんな積極的になったの？」

「優人にしては珍しく変な草でも食べた？」

「アンタと一緒にすんな。」

「や、結束バンドのサポート役とはいってもそういう俺何にもできてないなって思い出して、肩書きだけに収まってるのも嫌なので何かできる事はないかと俺なりに模索してみましたですよ。そしたら結束バンドをもっと有名にしていく手伝いをするのが俺の役目かなって」

「おお、あたし達のためにそこまで考えてくれてたなんて……さすが優人くんだね！
略してさすゆう！」

「いやそんなさすおにみたいに言われても。」

「俺には何でも持て囃してくれる可愛い妹なんていませんよ。」

「それにあたしだって何も考えてなかった訳じゃないよ。次のライブに備えてちよつとしたサブライブも用意してあるしい〜！」

「え〜、何ですかそれ！ 気になります！」

そのサプライズ、私、気になります！

「ふふーんっ、それはライブの時のお楽しみだよ！　といつても早くお披露目したいから次のライブはすぐにやるとして、今週のどこかにしようか。それなら今ある曲だけだしみんなもやりやすいと思うから問題も特にないよね？」

「賛成です！」

「異論なし」

「あつ、私も大丈夫です……」

意外と早く次のライブが決まった。

みんなもちゃんとモチベが上がりつつあるようだ。文化祭ライブも途中で打ち切りになったとはいえ、感触は全然良かった。色んな意味で話題になってるから、そこから興味を持つてくれた人もいるようだし、これから徐々に客も増えてくるかもしれない。

「で、ぼっちちゃんはいつまで優人くんの腰にしがみ付いてるの？　いい加減離れないとぼっちちゃん腰痛めちゃうんじゃない？」

「あつ、前から落ち込んだ時はたまにやってたので慣れてます……」

「慣れてるんだ……」

そう、バイト開始からほぼずっと、忙しい時間帯以外で後藤さんは俺の腰にしがみついて離れなかったのだ。

俺としてももう慣れてるので今更何も思うところはない。凄いやね、女子に密着されてるのに何とも思わないなんて。これが後藤耐性Aの付いた俺の固有スキルである。

「ほら、ひとりちゃん。そろそろ離してあげないと優人君も掃除しづらいでしょ？
ねっ？」

「大丈夫だよ喜多さん。俺も慣れてるからこのくらいじゃ邪魔でも何でもなし」

「優人君は良くても私の気持ちが悪く……何というか、収まらないというか……もうっ
とにかく引つ付きすぎよひとりちゃん！」

何がどう収まらないんだろう。

俺と後藤さんが密着したところできっきのヨヨさん同様アオハルイベントなんて起きないぞ。

だって普通に考えたら女の子にしがみ付かれてドキドキするもんなんだろうけど、後藤さんだよ？

しがみ付き方がもう普通じゃないもの。後ろから抱き付かれるならともなく腰だけに手回してきてるんだもの。鏡で見たらこれただのケンタウロスだよ。こんなのでど

うドキドキしろってんだ。

「まあ今はほつといてやってくれ。帰りにずっとケンタウロス状態でいられるより、ここで少しでも精神的に安定してくれた方が俺の身のためでもあるから」
主に外で変な目で見られないためにね。

「ほんとに何も思ってたなさそうな目してるわね……」

「お姉ちゃんにライブの日程伝えてきたよ！ ライブは三日後、平日だけど今のあたし達ならノルマも達成できそうだし、優人くんも良かったら学校の人に話してみてね」

「あー……分かりました。一応クラスの奴らに適当に声掛けてみます」

「よおーし、それじゃあ次のライブも頑張ろ〜！」

という事で翌日の朝、さっそく声を掛けてみたのだが。

「部活あるから無理」

「だよなあ」

そうだろうと思ったよちくしよ。

うちのクラス男子は俺以外運動部所属という何ともまあアクティブな奴らの集まりな訳で、平日なんてそりや部活があつて当たり前か。ダメ元で言つてはみたものの案の定だった。これは他の男子に声掛けても無理そうだ。

「何で平日にやるんだよ。部活がない日曜なら行けたのによお。なあ、今からでも日程変えてくんね？」

「俺の一存で決められる訳ねえだろバカ田中。元々お前らに声掛けたのもダメ元だし、うちの男子は全滅つて事にしておくか。女子の方なら喜多さんに任せてるから大丈夫そうなんだけどな」

チラツと喜多さんを見てみるともう既に何枚かチケットを手渡している。

いやノルマ裁けるのは凄いけどその場でチケット代渡して了承してくれる女子達もすげえな。これも喜多さんの人脈あつての賜物か？

「俺も部活がなかったら行きたかったんだけどな。文化祭ライブ見てて興味出たし、ちやんとしたライブハウスで見てみたかったよ」

「その気持ちだけはありがたく貰っておくよ佐藤。今度は日曜辺りにライブを設定してもらうから、そんな時にみんな来てくれ」

「ん、僕もその時に行かせてもらう。二曲目のやつ好きだったし、またやってくれたらありがたい」

「分かってんじゃないん鈴木。曲数自体はまだ少ないから、今の内にライブ来たらもれなく全部聴けると思うぞ」

やはりあの文化祭ライブは成功だったんだなとこいつらの反応を見て思う。

終わりは最悪だったが、それまでは客を魅了していたのも確かな事実だと判明したから良かった。

「何よりバンドメンバーみんな可愛かったよなあ」

「……………あ?」

急に何を言いだすんだこの猿?

「バンド女子って何であんなにひと際輝いて見えるんだろうな。クールそうなベースの

人とか女子からも人気あつたし、喜多さんは言わずもがな美声とギターソロ？ が超良かつたよなあ。それに一見パツとしなかつたドラムの人も性格の明るさで良い子なの丸分かりだから好感度めつちや高え！」

地味に分析が正確なの何なんだよ気持ち悪いなこいつ。無駄に見る目あるのが普段から視線だけで女子を追つてるのがよく分かつて余計キツイ。

けドラブリーマイエンジェル虹夏さんをパツとしなかつたと言うのだけは許さん。万死に値する。一番まともで良い人なんだからな。ぶつ飛ばしてやろうかこの坊主。

「あとは弦が切れても何かよく分かんねえ事して乗り切つたピンクジャージの子、いやあれは普通に見惚れたわ。アドリブであそこまでかっこよくできるなんて普通思わねえよな。あの子つて確か二組の子だっけ……つておい清水、何でお前がめちやくちやドヤ顔してんだよ」

ふふん、見る目あんじゃねえか田中。そこだけは認めてやろう。

まあ後藤さんの実力はそんなもんじゃないけどな？ 本気出せたらもつとすげえんだぞ。誰もが見惚れるギタリストの素質持つてんだからなあの子。

「まあいいか。それにしてもあのジャージの子、俺の見立てではちゃんとすりや見た目

も化けると踏んだね。最後のダイブにやあ少しドン引きもしたが、俺クラスの人間にもなるそこも推せる！ なあ清水、あの子についてもっと詳しく教えてくれよ。二組の子だけど知ってるんだろ？ 確か後藤さんって呼ばれてたよな？ 俺の見る目は間違いないねえってとこをこいつらにも見せてやりたいんだよ。そしてあわよくば知り合いの特権としてちよつとメンバーの皆様方とお近づきにさせ」

「殺すぞ」

「お前が言うのと冗談に聞こえねえよ……」

やっぱ猿はどこまでいつても猿か。

こんなヤツにうちの結束バンドひいては後藤さんに近づけさせるのは危険だな。いつそ俺に隠してこっそり声を掛けないようにここで殺つとくのもありか？ ありだな。ありだと思えます。よし、殺ろう。

「今のうちに芽は摘んでおかないとな。という事で田中死」

「おはよー」

「ナイスタイミング高橋！ 何か今清水に殺されそうになるイメージが脳内を駆け巡ってきてやばいところだった！」

チッ、運良く高橋の後ろに隠れやがったか。

まあいい、片鱗を見せた時に一気に片付けてやる。それまでは生かしておいてやるう。

「珍しく遅かったな高橋。寝坊か？」

「剣道部の朝練がなかったからゆつくり来ただけだよ。とうかさつき校門で変な女の
人いたんだけど、みんなは見た？」

「二「変な女の人の？」」

田中達と顔を見合わせるもみんな顔を横に振る。もちろん俺もだ。

変な女の人ってなんだ。そんなの後藤さんカリヨウさんかきくり姐さんくらいしか
知らんぞ。後藤さんは俺と一緒にいたし、他二人はここにいようものならそれこそ通報
してもらって構わない。

「俺が来た時はそんなのいなかったけど」

「なんか人を探してたっぽいんだよね。ご………なんとかさんって人。中国人留学生の
事かな？ 首に包帯巻いてたりぶりっ子っぽい感じで地雷臭かったよ。教師に追い
出されてたけど」

「ご………なんとかさんってなんか聞き覚えあるんだけど。」

確か文化祭ライブの後藤さんがダイブする直前でそんな感じのこと言われてなかったっけ？ 名前覚えられてないからインなんとかさんみたいに呼ばれてた気がする。

いや、でもさすがに考え過ぎか。

そんな都合よくピンポイントで俺の予想が当たるはずもないよな。後藤さんに限つてそんな知り合いの人とかいる訳ないし。

そう考えていると、高橋の後ろに隠れていた田中がおもむろに口を開いた。

「つうか変な女の人って事はアレだろ。清水の知り合いなんじゃねえの？」

「いや何でそうなるんだよ」

知り合いに変な女の人達がいる事は否定できんけども。

「ウチの学校で女絡みといやあ清水関連に決まってるんだ。どうせ修羅場ってるんだろ？」

さっさと出頭して刺されてこい」

「勝手に俺を修羅場の中心人物に置いてんじゃねえよ!? 何でもかんでも女性関連の話を俺に結び付けようとするな！」

「だって、なあ？」

「「うんうん」」

こいつら……ノータイムで領いてやがる。

普段から俺をどういいう目で見てんだ。失礼極まりねえな。

「ふざけんな！ 俺だつてさすがに見てもねえのに勝手に知り合いとか決めつけられて良い気分になる訳ねえだろうが！」

「「「あ」」」

「そうやって謂れのないバッシングを受ける痛みをテメエらにも思い知ら……何だよ、お前らどこ見て……あつ」

田中達が俺のすぐ後ろに視線をやっているのを見て俺も後ろを見る。

大声でやり取りしていたのがいけなかったらしい。教室全体に俺達の会話が響き渡っていたのだ。

それはつまり。

「修羅場つて何の事かしら、優人君？」

にっこり笑顔の魔王の耳にも内容が筒抜けだったという事。

「……いや、あの、姫……？ どこまで話を聞いてたか分かりませんが、どうかわたくし

めの言い分も聞いていただけると凄く助かると言いますか……」

「もうHR始まつちやうからあとでひとりちゃんとうつくりお話ししましょうね〜!」

やべえ、喜多さんの瞳がめつちや黒い。

これももうアレだ。キタサンブラックだ。今の声はめつちやミホノブルボンに似てるのにオーラはキタサンブラックになっておられる。いつもサポカでお世話になっております。

「「「清水、南無」」」

「ちよつ、お前ら友達ならもつと助け船と」

「「「ついでに逝ってこい」」」

「即刻見捨てられた!?!」

そうして俺は喜多さんの隣、自分の席へと首根っこを掴まれたまま連行されたのだつた。

何で俺が悪いみたいな風潮になってるんだろう。

65. 来たる嵐

昼休み、俺は後藤さんと喜多さんと共に誰もいないいつもの薄暗い物置きの踊り場に
来ていた。

俺だけ正座で。

「いやほら、修羅場って言ったのはあのさr……田中でしてね？ 何ならわたくし清水
さんは謂れのない風評被害を喰らわされた訳なんですよ。何か変な女性が学校に来て
たらしくてそれが俺の知り合いなんじゃないかとか勝手言うもんだから、俺も反論した
だけで決してやましい関係なんて誰とも築いてないしむしろ逆に築いてみたいとい
う淡い願望さえ抱いてるのに酷いと思いません？ つまり何が言いたいかというとな
くし清水優人は無罪を主張致します！」

「最後の願望がなければ無罪だったのに余計な一言だったわね。有罪よ優人君。ねっ、
ひとりちゃん」

「えっ、いや、あっはい……」

流されるんじゃない後藤さん。そこは控え目にでも俺を擁護してくれるとこじゃないのか？

俺達の関係ってそんな軽いもんじゃないでしょう!? なあおい!!

「じゃあ罰として優人君のお弁当のおかず一つずつ貰うわね。ひとりちゃんは何がいい？」

「あっじゃ、じゃあミニハンバーグを……」

「分かったわ。私は卵焼き貰うわね、優人君♪」

うおおお……俺のメインのおかず達がああ……!!

何たる惨い罰なんだ。男子高校生の無限の食欲にハンバーグと卵焼きは欠かせないってのに……後藤さんめ、昨日だつてハンバーグ一個半食つてたくせに残り物のミニハンバーグまで食うとか相変わらず好きすぎだろ。自分に正直か。

俺のおかずが減っていく。これはスターリー行く前にコンビニで軽食買っていくの確定かなあ……。

卵焼きを頬張りつつ、ニコニコ笑顔の喜多さんはお箸を持ったまま人差し指を頬に当て考える素振りをみせた。

「それにしても変な女性の人か。私も友達から聞いたけど、あんまり見ない格好してたのよね？」

「え？ ああ、俺も改めて聞いたら首に包帯巻いて手が見えないくらいの萌え袖、何故か天使の羽が生えてる鞆、身振り手振りはぶりっ子そのもので地雷臭が凄かったらしい。女子の観察力に徹底してるウチのクラス男子が言うんだから情報は正確なはずだよ」

「悲しい才能ね……」

俺もそう思う。ただ後藤さんの観察をよくしてる俺もそんなに人のこと言えないところあるけど。

「後藤さんは教室で何か聞いてないか？ いつも寝てる振りして盗み聞きしてるんだろ？」

「なっ何でそれを知って……!?! あっいやっうん……私も聞いている感じだとそれくらいしか話してなかった気がする……。ただ、女の人でもそういう人が学校に侵入して、い、今も近くをうろうろしてるって考えたら……怖い……」

「そーいや後藤さんはお化けとかそういう類のモノは平気だけど、それこそ人間に対しては極度に怖がる子なんだ。」

普通の人でさえビビるのに、それが不審者ともなると怯えるのも無理はない。痺れる前に正座していた足を崩し、彼女の目を見る。

「まあそこは大丈夫だよ。先生達も一応下校時には校門近くで見張つてってくれるし、そもそも相手は女性なんだ。俺の近くにいればよっほどの事がない限りは追い払えると思うぞ」

「そうよひとりちゃん。優人君なら顔を異形に変えてヤクザだつて追い払っちゃうんだから。大丈夫よ！」

ヤの付く人達はその場合チャカとか出してきましたかね。あり得ない話じゃないからそんなの普通に逃げるぞ俺は。変に話盛るのはお止めなさい。

「じゃ、じゃあ今日も腰にしがみ付いてもいい……?」

「それは目立つから普通にやめて」

ケンタウロスモードは周りの視線が痛すぎて俺の心にダメージ入るから。新しいプレイなのかか思われそうで嫌だ。

普通に羞恥プレイだよ。俺が。

「でもその人、誰かを探してたのよね？」

「聞いた話だと探してるのは中国人留学生っぽかったけどな。ウチにいたっけ？」

「さあ……少なくとも私は聞いた事ないわね」

喜多さん程の人脈があつても聞いた事がないのか。

となると……やっぱ引つ掛かるよなあ……。

ご……なんとかささん。見方を変えれば影の薄い後藤さんがうろ覚えで言われた呼び方とも取れる。

それだと完全ではないが辻褄も少し合う。文化祭ライブを経て後藤さんは色んな意味でちよつと有名になつたし、もしかするとそれ関連の可能性という事もあり得てくるんじゃないか？

それに……首に包帯と手が隠れるほどの萌え袖。

……なあーんか覚えがあるようなないような気がしないでもないような……。いかに、さつきから何だか小骨が喉に引つ掛かつてずっと取れないような違和感をずっと感じてるぞ。

そしてこの違和感、同時に嫌な予感も少しあつたりする。俺の場合は幸か不幸か、嫌な予感ほど当たつたりすることが多い。

今回はそんな事あってほしくないのがめちやくちや本音だけど、後藤さんといるとこれまた不思議なもので……やべー女の周りには類友でやべー女が集まってきたりしちゃうのだ。何ともまあはた迷惑な話である。

「……俺の考え過ぎって事で祈っておくか。とにかく今は明後日のライブに集中しよう。それまでにノルマも捌かないとだしな。喜多さんは順調そうだったけどもうチケツトは配り終えたのか？」

「うんっ、自分の分のノルマは終わったわ。他の友達も来たがってたくらいよ」

「さすがだな。後藤さんは……まあ、うん、聞くまでもないか」

「あつへへ……ごめんなさい……」

大丈夫、分かってるから。

一応せめてもの確認しただけだから。

「つつても後藤さんのノルマの内二枚は一号さんと二号さんにチケツト取っておいてくれってロインで言われているから正確にはあと三枚だな。それが鬼門つちや鬼門だけど」

「うう……」

「良かったら私とその三枚貰ってもいいかしら？ 他にも来たがってた子いたしちよう

どいいんじゃない？」

「確かに、ノルマって言っても別に他のメンバーに任せちゃダメって訳でもないもんな。捌ける人がいるならその人に任せるのも悪くないか。頼むわ喜多さん」

「任せて！」

後藤さんには荷が重すぎるしね。

もつとファンを増やして一号さん二号さんのような、後藤さんからでもチケット買ってくれる人ができればいいんだが。これも適材適所というところか。後藤さんには本番で頑張ってもらおう。

「ゆ、ゆうくん……私も一つ卵焼き食べたいな、なんて……」

「ええいこの際一つや二つ減ったくらいじゃ何も変わんねえ！ 食いたきや食え！ その代わり後でコンビニ寄るからなあ！」

そんなこんなでライブ当日。

開店前のスターリーでは俺達の前に顔以外タオルで包まれた虹夏さんがいた。

「え〜今日はライブの日ですが……その前にみんなに発表がありまーす!」

にししと企み顔で笑う虹夏さん。可愛い。ただただ可愛い。

発表というのはこの前言つてたサプライズの事だろう。タオルで隠してるという事は、結束バンドTシャツみたいなやつかな。

「じゃーん! 寒くなってきたからバンドパーカー作ってみたよ!」

「かっつっつっつっつっつっつ」

わいいわいいいゝゝゝゝゝゝゝ。

おいおい、死んだわ俺。天使が迎えに来たのかと思つたらニジカエルでした。うん、大天使だね。

「大変! 優人君が口から泡吐いて死んでるわ! 店長どうしましょう!」

「ぼっちちゃんの隣のゴミ箱にでも捨てとけ」

何か運ばれてるような気もするけどいいか。きつと天国に上ってる最中なんだ。

我が生涯に一片の悔いなし。俺はもう、死んでいる。

「あくちよつとゴミ入ってるけど別にいいだろ。お前らはさっさとそのパーカーに着替えてこい。私がこのアホ捨てとくから」

「……ハッ!? 俺はいつたい何を……?」

てか何でゴミ箱に入れられてんだ俺。全然天国じゃねえじゃん、むしろ地獄じゃん。

「うぎやあ!? しかもゴミ入ってる方のゴミ箱じゃねえか!? 誰だ俺をこんなところに入れたのは!」

「私だが?」

「でしようね! アンタ以外俺をここに入れようとする人いないもの! つうか入れるならせめて後藤さんがいつも入ってる方にしてくださいよ!」

「あれはぼつちちゃん専用だからダメだ」

「鼻屑だ! 店長が鼻屑してる! 俺知ってたからな! 店長何だかんだ言いつつ後藤さんが入るゴミ箱だけ毎日入念に布巾で掃除してるって!」

「ぶつ……ちよ、おまつ、何でそれを……!?! とうか黙れえ!!」

「俺が黙って殴られると思つたら大間違いだぜ。ただ立ち上がるだけじゃねえつてところを見せてやぶうあばツ!」

「減らず口もここまで来ると清々しいなオイこら……!」

「べふう……」

店長もう俺殴るの遠慮なくなつてませんか?

まさか右ストレートで来るとは思わなかつた。これガチで恥ずかしくなつて思わずピンタじゃなくてグーパンやつちやつたパターンだな。俺には分かるぜ店長。可愛いところあんじゃん。

「はいそこで意識途絶えないで優人君! あつちはあつちでリョウ先輩が伊地知先輩にプロレス技かけられてるの!」

「……どういふ状況?」

「かくしかまるうまなの!」

なるほど。どうやら俺がゴミになつてる間にみんなはパーカーに着替え後藤さんはパカつむりになり、リョウさんが後藤さんで良からぬ商売を考えたところで虹夏さんに技をかけられたと。

ふむ、そういうことね。………うん。

「それっていつもの事では？」

「優人君も店長とのやり取りで麻痺してきてるんじゃないかしら……」

天使でも一応あの店長の妹だしね虹夏さん。

魔王の血を引く天使って何か凄そう。マンガでいうハイブリッド的な感じで最強になるやつ。虹夏さんは最強、店長は最凶。

「おい優人今失礼なこと考えなかったか？」

「やだな店長、そんなの考えた事一度もありませんよぼかあ」

平然と心読んでくるのやめて。

「んで後藤さんはいつまでパカつむりになってんだよ」

「ぱ、パーカーは全てを包み込んでくれるから……」

あーね、つまり安心感が違うと。

にしてもそこまでするかね。視界狭くしても全体の景色は変わらんとぞ。

慌てて虹夏さんを止めに行く喜多さんを見送りつつ、もう一度後藤さんの様子を窺う。

「……………何かあったか？」

「……………え？」

「いや、勘違いならいいんだけど、何かいつもと違うなって思ったから」

「ちゃんと顔を覗き込めば表情の違いも大体分かる。これも彼女の意思を汲み取れるように観察していたおかげか。」

「俺の言葉に反応してか、後藤さんは俺にしか聞こえないようなポリウムで話し始めた。」

「……………お、お客さんを増やす工夫を色々話してる内にね、私がギターヒーローだって事を公表した方が結束バンドのためになるんじゃないかとか、でもそれも何か違うような気がして……………私もまだ結束バンドではちゃんと演奏できる訳じゃないし、みんなもそれで客が増えても喜ばないんじゃないかって、ずっと自分の中で考えてた……………」

「……………」

「そういう事か。ギターヒーローの知名度を考慮するなら公表するメリットは確かにあるだろう。」

「しかし、その分デメリットも後藤さん自身にあるのでそうすべきではないと彼女は考

えている。初めて俺が後藤さんにギターヒーローなのかと聞いた日からまだ考えは変わってないようだ。

なら俺も何も変わらない。

「結局打ち明けるかどうかは後藤さん本人の自由なんだ。自分の納得がいく時が来たらそんな時に言えればいいさ。それまでは俺も虹夏さんも協力するしな」

「う、うん」

その日がいっ来るかは分からんけど。

もつと場数踏んであまり緊張しなくなったら実力発揮できんのかなこの子。俺が願うのはそれまでに他のメンバーももつとレベルを上げて全体的な演奏技術が上達する時だったら良いんだけど。

「さて、ぼちぼち客も外に並びだす時間帯だし俺も準備するかねえ」

「……あ、ゆ、ゆうくんっ」

「んっ」

先にトイレを済ましておこうと思ひ移動しようとしたら裾を掴まれた。

「その……あ、ありがとう……」

「……」

振り返ると後藤さんはフードを被りながら目を逸らして言ってきた。

照れるくらいなら言わなくなっただっていいのに。だから俺は普段通りにこう返す。

「気にすんな。いつもの事だろ」

そう言っただけ今度こそトイレに行こうとする俺。

しかし、再び裾を掴まれた。

「え、まだなに」

「優人くんっ」

わおっ、天使が目の前に現れた。

可愛すぎて目玉破裂するところだったわ。

「はいこれ！」

「……えつと、これは？」

突然手渡された黒い生地で作られた何か。

その厚さとゴツさである程度の予想はできたが、思わず聞かすにはいられなかった。

「優人くんのバンドパーカーだよつ。ちゃんと着替えてきてね！」

「……はい」

自分は結束バンドのメンバーとはまた違うんじゃないかとか、たかがサポート役にこれはやりすぎではという疑問もあつたが、虹夏さんの笑顔を見てそんな言葉を言う訳にはいかなかった。

いやこんなキラキラ笑顔にツツコミとかできません。今の今までリョウさんにプロレス技かけてたのに俺の前じゃこれですよ。こんなもうほぼ小悪魔ですよん。小悪魔虹夏さん、最高か？

仕方ない、ついでにトイレで着替える事にしよう。

着替え終了。

Tシャツ同様、真ん中に結束バンドと書かれた冬用パーカー。

鏡の前で自分を見る。今日は普通に学校だったので下は制服ズボンのままだが……

うん、まあ、これはこれでいいな。

どうしよう、普通に気に入っちゃったかもしれない。

しかもちようどいいサイズだし着心地も良い。この上に制服羽織って登校すれば今流行りのパーカー男子の完成では？

後藤さんも学校指定じゃないピンクジャージで登校してるし、俺も明日からパーカーの上にブレザーだけで登校しようしよう。

ありがとうカーディガン、お前とは今日までだ。また春先で会おうな。

思った以上に気に入ってルンルン気分でフロアに戻ろうとした時だった。フロアの方から「こんにちは〜！」と知らない声が聞こえたのだ。

あれ、まだ開場時間でもないのに誰か来たのか？

いやけどこんにちはって事は関係者？ 今日出演する他バンドの人？ だが変に甘ったるい媚びたようなあの声、どこかで聞いたような気が……。

急いでトイレを出てフロアへ戻る。

すると、知らない人がいた。

いや、正確には変な女性がいた。

そして一つ一つを確認していく。

首に包帯、手が隠れるほどの萌え袖、天使の羽が生えたイタい鞄、いかにも地雷臭が

漂うオーラ。

それとは別に、ツーサイドアップの髪型が特徴的というべきか。

そうだ。ちゃんと思ひ出すべきだった。

俺は一度御茶ノ水駅で会ったじゃないか。インパクトはあつたのに記憶の隅に追いやつて思ひ出さないようにしていたのは、嫌な予感がしたから無理に脳が拒絶していたからか。

もう一度女性を見る。

あくまで彼女は明るい笑顔でこう言った。

「ぼんらぼつてバンド批評サイトで記事書いてる者ですが、今日は結束バンドに取材したく……つて、あっ」

そして、彼女は俺の方を見て固まった。

もちろん俺も固まつてる。どうしてつて？ ははっ、そんなの分かり切つてる事じゃん。だつて知り合いだとか勝手に決め付けられてキレてたのに、ふたを開けてみれば思いつきり見た事ある人だつたんだもの。

そりゃあこう思うでしょ。

「あく！ この前声掛けた駆け出しのギター男子〜!!」
「「え」」

あ、俺終わったなって。
波乱が始まりそうだなあ。

66. 嫌な予感ほど当たってしまうもの

前回のあらすじ。

やべー女がやってきた。終了。

「なんで君がここにいるのー！ もしかしてここで働いてたり？」

さて、どうする。みんなの視線は俺に一点集中している。

ここを上手く切り抜ける方法はなんだ。もう助からないような気もするけど、今こそ成績上位者の頭をフル回転させる時だぞ清水優人。何が何でもピンチを乗り切れ清水優人。死にたくないよ清水優人！

「……あー、えつとお……実はここでバイトさせてもらってる清水優人って言います。それで、あなたは確か……えー、あのお、うん、あれ、あれですよね……？ 言いたい事も言えない世の中に毒吐いてそうな名前でしたよね？」

「ぼいずん♡やみよ!! ……あつ、自己紹介遅れちゃってすいませんくん！ あたしぼい

ずん♡やみっていいます！ 14歳でえくす☆」

……よし、空気が死んだな。冷たい視線の標的変更完了。

痛い格好してるから逆手にとって正解だった。ぶりっ子はキャラを守る事に徹底するから、こちらから逆に仕掛ければ簡単にぶっ飛んだ発言してくれるのありがたい。あと痛い、痛いのてんこ盛りだわこの人。

そしてさすが大人。いち早く正気に戻りGTOならぬBぶりっこエグい女EOに向かつて行ったのは我がスターリーの謎多き美女、PAさんであった。

すげえ、この世の終わりみたいな雰囲気をもともせず行ったぞ。

「あの、アポとかとってらっしやいますか？」

「ごめんなさ〜い、とってないです☆」

さて、PAさんが相手してくれてる間に俺は別の問題にとりかかろう。

標的変更させたけどどうせ後々詰められるならさっさと楽になった方がマシだ。ぼくあたまいい。

「よし、殺せ」

「優人君、駆け出しのギター男子ってどういう事かしら？」

バカな……俺の覚悟を決めたセリフをフル無視して普通に問い詰めてきた……だと……!?

「あれ、喜多ちゃんはまだ知らなかったの？ 優人くん、夏休み後半辺りからギター始めたんだって。まああたしも知ったのは最近だけどね」

「私は御茶ノ水と一緒にギターと他の機材とか見てあげた時に知った」

「わっ私は最初から頼まれてたので……」

「……」

おっと、喜多サンブラック再びだこれ。笑顔がくつろいですわ。これは間違いなく金スキルの『迫る影』とってるやつじゃん。逃げウマなのに追込スキルとってどうすんだよ。

あ、喜多さんはヒトだから関係ないか。

「何で私だけ知らされてないの？」

「いついやつ、別に俺が勝手にギター始めただけで結束バンドとは関係ないし、言う必要も特にないかなくって思っただけだね？ 虹夏さんとリョウさんに知られたのも偶然というか事故みたいなものだったからやむなしと言いますか………なんか黙ってて

すいませんでしたあ！」

圧が怖くてもう謝るしかなかった。

何言ってもダメそうな気がして耐えられなかったでやんす。三人知ってるなら喜多さんにもちやんと言っておけばよかったと今更後悔してる。そうだよな、仲間外れっばくなるのは嫌だもんな。

「……なら今度学校でひとりちゃんも含めて一緒に練習しましょ。それなら許してあげる」

「えっ、さすがに学校にギター持っていくのはめんどく」

「それなら許してあげる」

「……ハイワカリマシタ……」

尻に敷かれる世のお父さんってこんな感じなのかな……。だったら結婚はあんまり期待しない方が良さそうだなあ……。

何とか無事にこの場も収まった(?)とところで、ぼい……ぼ、ホイホイカプセルさんがこっちに近づいてきた。

「実はあたし今、下北沢で活躍中の若手バンド特集記事を書こうと思つてまして〜！

ちやちやつと終わらせませんんで取材いいですか☆」

正直開場前に勝手に入ってきた時点でちよつとアレなのだが、仕事として記事を書くうとしているのは本当みたいだな。

もつとちゃんとしたやり方あったでしょうに。何でわざわざ怪しまれるようなキャラ設定してまで来たんだよ。実は結構ライターとして追い込まれてんのか？

俺の嫌な予感センサーがピンピン反応してるのと、胸に渦巻くモヤモヤを抱いているのとは裏腹に、虹夏さん達は意外と乗り気な態度になっていた。

「あたし達つてもうそんなに注目されてるの!? うわあ、ありがとうございますー!」

「伊地知先輩凄いですね! これでもつと知名度上がっちゃうかもですよ!」

「……」

虹夏さんの言葉に拭いきれない違和感を覚える。

よく考えてみると所々おかしい部分があるのだ。

結束バンドはまだ数えられる程度しかライブをしていない。それも客だつてノルマを捌けるギリギリの状態でだ。

初ライブは台風で散々だったし、文化祭ライブも結局は後藤さんのギターの弦が切れたのとライブをしたせいで最後までライブができずに終わった。校内では確かに色ん

な意味で少し有名になったかもしれないが、所詮は校内だけの話だ。知名度なんてまだ皆無のはず。

なのにこの人が結束バンドを活躍中のバンドとして取材しに来る理由が分からない。アポをとって貰うならまだしも、ライブハウスを片っ端から突撃して色んなバンドを取材してするように見えないし……何よりうちの学校にも来てタイミング良くスターリーに来た時点で不審点しか出てこない。

客の誰かがSNSで広めてくれたとしたらもつと客も増えてるはず。

それもまだ特にないという事は、どこから結束バンドの情報を聞き出してスターリーを特定してきた……？ 結束バンドのSNSを見た可能性はあるかもしれないけど、だとしても学校まで特定されたのは何でだ？ あの時だって軽い宣伝はしたが学校名までは載せていなかったのに。

……ちよつと警戒しておくか。

「じゃあ早速しつもん！ 今後の結束バンドの目標は？」

俺が一人で考え込んでる間に取材が始まってしまっていた。

まだ何か怪しい素振りを見せてないし、今は少し様子見しておこう。

「メジャーデビュー！」

「エンドース契約してタダで楽器もらう」

「みんなですつと楽しく続ける事かしら？」

「あつ世界平和……」

「……夢がいつばいなのは素晴らしいですよネ☆」

うん、相変わらずさういうところの結末感は全然ないな結束バンド。

虹夏さんだけがまともだ。あと後藤さんはまだそれで通すつもりなんすね。

「あつ、その質問優人くんにも聞いてくださいいね！」

……ん？ 虹夏さん？

急に何を仰っておられるのでしょうか？ 何故そこで俺に振る？

「え、どうして？」

「彼はメンバ〖じゃないんですけど結束バンドの大切な一員なので！」

そこはできれば大人しくしておいてほしかったかなあ虹夏さん。

天使の気配りも行き過ぎると困惑しちゃいますよわたくし。

「うーん、じゃあまあ一応聞いてこっかなあ。清水くんだけ？ 君の目標は？」
ちよつと腑に落ちない顔をしながら彼女は俺の方へ向いてきた。

仕方ない、ここまでされちゃ質問に答える他なさそうだ。

「えつと、そうですね……。一応結束バンドのサポート役をやらせてもらってるので、彼女達が望むまでは俺なりにこれからも彼女達を支えていければと思います」

リヨウさんみたいになぶざけた答えを聞いて俺もふざけた方がいいかとも思ったが、同類にはなりたくなかったので普通に答える事にした。

そして俺の答えを聞いた不審者予備軍の人は、

「……………ふうくん、そうですねかあ」

あまりにも興味なさそうな表情でスマホにメモだか録音だかした後、すぐさま俺から離れていった。

……………うん、分かった。分かったよ。バンドメンバーじゃないヤツから聞いたところで記事にならない事くらい俺も分かってますよ。にしても反応ドライすぎじゃない？ 店長だつてもつとマシな反応するよ？

ちよつと不貞腐れて地雷系ライターの人に睨むような視線を送った時だった。

彼女が俺に質問し最初からどうでもいいと思っっているような目をしていた時とは裏腹に、後藤さんに対しては目をキラキラさせながら近づいていったのだ。

「あつ！　そういえばちよつと調べたんですけどお、ギターの方つて少し前にダイブで話題になった人ですよね！」

「えっ……!？」

……なんだつて？

「あのつすいません、話題になったつてどういう事ですか？」

思わず話しかけると、意外にも彼女は素直にスマホで一つの投稿画面を見せてくれた。

「知らないんですか？　スレにもトウイッターにもダイブした時の画像が転載されてるんですよ。ちよつとバズってるくらいには話題になってましたよねえ☆　……つてあれ、そういうえげ……どこかで見た事あると思つたら、もしかしてこのダイブで下敷きにされてた子？」

トウイッターには後藤さんがダイブに失敗し、俺諸共うつ伏せ状態で床に倒れ込んで

いる画像が投稿されていた。

しかももう一つ見せてくれたスレの画面には動画付きで後藤さんが上から飛んでくると、それを受け止めようとして横からカットインしてくる俺が映し出されている。

『【悲報】女子高生と男子高校生、文化祭ライブで衝撃の展開にwww』という丁寧なタイトル付きだ。

幸い顔にぼかしが入ってて特定はされにくくなっているが、このピンクジャージの色が目立ち過ぎてあんまり意味を成していないようにも見える。

というか学校とバンド特定された理由これやないかい!!

まじかよ。思いもよらないところで拡散されてんじゃん。しかも肝心のライブとかは切り抜かれてないのに、ダイブのどこだけしっかり切り抜かれてるの何なんですかね。これじゃ結末バンドじゃなくて後藤さんしか目立ってないぞ。

つまりこの人は拡散された動画とか記事を見て俺達を特定してきたって事か。それなら大体の辻褄も合ってくる。

トゥイッターに投稿した人や書き込み入れた人に聞き込みをしたのなら特定されるのも無理な話ではない。おそらく動画投稿した人はうちの学校の生徒だろう。まったく、もつとネットトリテラシーを持ってよ。口軽すぎんだろ。

「それより何であの時ダイブしたんですかあ？　普段のライブでもダイブしてるんですかあ？」

「あつえつ……」

そして気付いたらターゲットは後藤さんへ戻っていた。

なるほど、あのダイブが割と話題になったから取材に来たって訳か。それも後藤さんのみをネタにするつもりで。

さつき結束バンドに質問してた時よりも活き活きしてるし。

さてはこの地雷系、結束バンドはついでで音楽にも曲にもメンバーにも興味なし。本命は後藤さんだけを中心としたネタ記事書くつもりだな。

幸い後藤さんが初めて見る人種に心閉ざしてるからまだいいけど。

めっちゃ虚無の顔してる。お口チャックってレベルじゃないくらい絶対口を開かないという意志を感じた。いいぞ、まだそのままを保つてくれ。

「優人くん、もしかしてあの人……」

「はい、おそらく後藤さんだけをネタにした記事を書くつもりですね。ちよつと店長に言ってます」

虹夏さんもおおそ察したらしい。控え目に俺の裾を掴んできた。

結束バンドの取材じゃなくて後藤さんのネタ部分しか取り扱わない記事というなら悪いがお断りだ。知名度を上げたいとはいってもさすがにこんな形で上がるのは虹夏さんも不服のようだしな。

という事で困った時の店長である。

今まで対応をPAさんに任せてPCで作業してた店長に話しかける。

「店長、思った以上に変な人来たんで何か言ってるやってくれませんか。この際注意でも何でもいいので」

「あん？ そんなのお前が言ってやりやいだろ。スターリーの狂犬なんだから」

「ちよつと待って何そのダサイ二つ名。聞いてないんだけど」

「私とPAでこの前暇な時に決めた。キレたら手が付けられなさそうだからって。ちなみにぼつちちゃんはスターリーの座敷童だ。形変わるし神出鬼没な時あるからな」

その座敷童たまに胞子モードになると周囲をネガティブにしてくるデバフ持つてるけど大丈夫ですかね。

あと俺のは勝手な想像で決められてるの納得いかねえ。普通にダセーし、やだし。

「つうかそんな事言ってる場合じゃなくてつ、バイトの俺よりも店長の方が効果あるか

らお願いしてるんですってば。今は店長お得意のしかめっ面ヤンキー脅しが必要なんですよ。ほら見てください、後藤さん困って固まったままなんです」

「お前あとで覚えとけよ?」

そうは言いつつも行ってくれる店長つてやっぱツンデレなんだなって。後藤さんダシにしたら大抵の事聞いてくれそうだな。

兎にも角にも店長が注意してくれるならこつちのもんだ。さすがにあの人も店の長から苦情を言われれば大人しく引き下がるだろ。

虹夏さんと共に期待しつつ店長を見守っていると、予想通り店長はいかにもヤンキー風なオーラを出しながら眉をひそめてライターの人に言った。

「すみませんうちの迷惑行為はやめてもらえま」

「ふえ……ごめんなさい……」

「ツ!? せ、セツドアルコウドウオネガイシマスネ……」

「はあ〜い♡」

なん……だと……!?

あの店長を言葉だけでドン引きさせて打ち負かすだなんて……なんてヤツだ……。

リアルでふえ……とか言うヤツほんとにいるんだな。やべえ、アニメなら可愛いって

なるのにリアルだとあざとすぎてまったく何も思わん。むしろ俺もちよつと引いてるまである。

でもって店長にはこうかばつぐんだったようで、俺達のところに戻ってきた時には何故か顔が青ざめていた。

「私あいつ無理だ……近くで同じ空気吸つてると頭おかしくなりそう……何だあの女……」

「もうっお姉ちゃんの役立たず！」

店長でも無理とか強すぎるだろあのぶりっ子。

どうしたもんか……。

「優人くん、もう開場時間も近いしとにかくそれを理由にぼつちちゃんをあの人から離そう。とりあえずはライブが優先だからっ」

問題の先送りではあるけど背に腹は代えられん。何ならライブ終わったら何やかんやうやむやにして帰ってもらおう事も視野に入れておこう。

さすが虹夏さん、店長より頼りになるな。

と、その前に。

「店長、PAさん、一応あの人の事警戒しておいてもらってもいいですか。何となくですけど、嫌な予感がするんで」

「私ん中であいつはもう十分に要注意人物だよ……」

「分かりました。こちらで少し調べてみますね〜」

「ありがとうございます」

一言礼を述べて後藤さん達のところへ向かう。

ジライターの人が何とか質問をぶつけるも後藤さんはずっと直立不動のまま地蔵と化していた。いつもなら厄介だが、今だけはナイスだ後藤さん。よく持ち堪えた。

「みんな！ 今日トップバッターなんだからそろそろライブの準備しなきゃだよ！」

「あつそうですね」

「ほら、後藤さんも起きろ。さっさと顔直して楽屋で準備してこい」

「……あつうん」

あれだけ無反応だったのに俺の声に反応した後藤さんがすぐさま返事を返してきた。

「すみません、あとはライブ後でいいですか？ 優人くんも、お客さんの列整理頼むね

！」

「分かりました」

他のバンドの客もいるから外に出て列整理をしなくてはならないのだが、いつもは他のスタッフさんがやってくれている。

しかし今日はうちの学校の生徒も何人か来るので、案内ついでに俺も列整理を手伝う事になっていたのだ。喜多さんの友達とかほとんど俺のクラスの女子だし、まあ俺の顔が目印代わりくらいにはなるだろう。

少し慌てている雰囲気わざと醸し出しながらほいずんの人から話しかけられないようその場を離脱する。

最初はどうなる事かと思っただが、とりあえずは切り抜けられてよかった。あとはこのまま何事もなければ万々歳だな。

さてと、ここからしばらくは業務の時間といきますか。

その日のライブ自体は滞りなく終了した。

他のバンドの客もいる中、トップバッターを務めた結束バンドは初めて悪天候や機材トラブルなどのトラブルに見舞われる事もなく出番を全うしたのだ。

喜多さんの友人達もノッてくれていたし、他のバンドの客もちゃんと見てくれていた。演奏レベルとしてはまだまだかもしれないけど、それだって最初に比べれば凄くマシになった方だと思う。

ただ少し気になったのは……ライブ中、後ろでつまらなそうにスマホを弄っていた包帯首の人が途中から信じられないような目で結束バンドのライブを見だした事だ。

思っていたより結束バンドの演奏が良かったのか悪かったのかは分からないが、少なくともバンド記事を書いているライターの方の琴線に触れたのなら喜ばしいものだけど、実際はどうか分からない。

しかし彼女の視線がずっと後藤さんに向いていたのは確かだ。

ある意味文化祭ライブのリベンジ。『星座になれたら』のギターソロを後藤さんが弾いていた時は釘付けになっていたと思う。懸念があるとすれば、感動して見ているといふよりも何かを確かめて確信するような表情にも見えた。

結局真意は分からないままライブは終了し、客も去ってクラスの女子達も一言二言満足そうに伝えて帰って行ったが……どうも気が休まらないのは何故だろう。

謎の違和感と焦燥感さえ感じてしまう。まるで見えない何かにいつでも潰せるぞと

言われ直接心臓を握られているかのような感覚だ。

そんな中、フロアに残っている客もまだチラホラいる中で、結束バンドの側には一号さんと二号さんが駆け寄っていた。

「今日のライブ良かったです〜！」

「あつありがとうございます……」

「これ差し入れです！ 鈴カステラなんで後でみんなで食べてくださいー！」

「あつどうも……」

え、一号二号さん差し入れまで持ってきてくれたの。

良い人達すぎんだろ……。俺ももうドリンクコーナーの担当を終えたので駆け寄る事にする。

「一号さん二号さん、どもです。あと後藤さん達も、お疲れさまです」

「あつゆうくん……」

「ん？ ……何してんの？」

「充電……お、落ち着くから……」

俺の背中を充電器代わりにすな。でも何でだろう、後藤さんが俺の背中にいるのが少

し落ち着いてしまう自分がある。慣れつつ怖いね。

不思議と先ほどの焦燥感も消えてるし、実は後藤さんには人のネガティブ要素を吸い取ってくれる機能付いてるとかない？

「おお、優人君もおつつかれ〜！ 今日もチケット確保しておいてくれてありがとね！
ロインで早くライブの日程教えてもらえるところちも予定合わせやすくなるから助かっているよお。さすが零号〜！」

「お二人は結束バンドの最初のファンですからね。結束バンドのファンが少ない間は俺の特権でチケット確保も優先的にしますんで任せてください」

まあ後藤さんのノルマ二枚を消化できる貴重な人材でもあるし。

それに一号さん達は美大の映像学科生という事をロインで教えてもらってから、最近ではカメラや撮影についてご教授願う事もあり個人的に仲良くさせてもらっている。いわば俺のカメラの師匠的存在だ。これも後々優先的にチケット確保するための取引材料として扱っており、つまりはお互いWINWINという訳である。

「頼りにしてるよ優人君！ あ、それとひとりちゃんっ、私演奏の事とかはよく分からな
いんですけど、最近何だか凄く良い感じですよ！」

「あつ大体同じお客さんだから最近慣れてきて……」

「ぼっちちゃんそこ慣れないで!? お客さんもっと増やさなきゃじゃん!」

「ま、まずは今いるファンの人達の前で最高のプレイができるようになる事が先なんじゃないかって……」

「正論ぶちかましてきた!」

虹夏さん、後藤さんの肩揺らすとガッツリ裾掴まれてる俺も必然的に揺れるのでできればやめてくれるとありがたいです。

振り子みたいになってるよ俺。そんなもつて意地でも離さねえのな後藤さん。まだ充電終わらんのか。

と、いつものような雰囲気です。ライブの余韻に浸っている時だった。

「あのっ!」

割って入ってくるような声があったのだ。

その声にみんなが反応する。もちろん俺も声の主を見た。

「その……まさか……まさかとは思ったんですけど……」

震えたような声色だった。

そして俺はすぐ後悔する事になる。あの違和感に正直に向き合い、彼女の真意を確かめようとしなかった事を。

「その歌うようなギタービブラートのかけ方、所々に滲み出る演奏のクセ……絶対そう！ 間違いない！」

本来、後藤さんの演奏についてそこまで言われた時点で彼女の口を抑え込むべきだったのだ。

蘇る焦燥感。嫌な予感ほど当たると自分で分かっていたはずなのに、さすがにそんな事はないだろうと目を背けていた末路があった。

「あなた……」

これまで必死に守っていたはずの何かがいとも簡単に崩れ去っていく音がした。

「ギターヒーローさんですよね!？」

冗談抜きに、時が止まったような気がした。

67. らしさ

まず最初に、背後から裾を握っていた手に力が入っているのを清水優人は知覚した。

しかしそれよりも早く口を開いたのは、何の事情も知らない喜多郁代だった。

「えつと……何の話?」

「まさかアンタ達知らないの!?!」

信じられないものを見たせいか、ぽいずん♡やみと名乗る女性はもはや自分の作っていたキャラを維持する事さえ忘れ、後藤ひとりの正体を何の容赦もなく言い放ってしまった。

優人が気が付いて口を抑え込もうとした時にはもう間に合わなかった。

「このギターヒーローさんはねえ! 超凄腕高校生ギタリストで! それでいて男女間

わず学校の人気者でロインの友達数は1000人越え！ しかも彼氏は自分の面倒をいつも見てくれてスポーツ万能成績優秀家事炊事完璧という超スパダリ持ちのリア充女子なのよツ!!」

「人違いじゃないですか？」

「即答!」

そして口を抑え込もうとしていた清水優人はズザアツと勢い良く顔面からズツコケていた。

ぼいずん♡やみの言葉から一切の疑心を感じないのは、彼女がギターヒーロー元い、後藤ひとりのオーチューブ動画概要欄に書いてある虚言ワールドを何の疑いもなく信じているからだろう。

そういえば優人が手伝った先日の動画の概要欄ではシンプルな説明文だけで投稿したが、それ以前のものは虚言癖全開のままだった事を思い出す。

起き上がりながら結束バンドの面々を見ると、事情を知らない喜多郁代と山田リヨウは何のこっちやという顔。正体を知っている伊地知虹夏は何とも言えない気まずそうな顔で優人から目を逸らしている。後藤ひとりに関しては緑の液体を口から垂らしながら直立不動で死んでいた。普通にただの地獄絵図である。

因果応報というべきか自業自得というべきか、ひとりが作り出した架空のリア充女子

なんてこの場にいるはずもなく、同時にスパダリ彼氏なんてものもない。

ただそれを生み出した本人が一番ダメージを受けてそれどころじゃなくなっているのが幸いか。ぼいずん♡やみの言葉に頷く人物は誰一人としていなかった。

つまりまだ完全にひとりだけがギターヒーローだとバレた訳ではない。

今なら相手の勘違いという事にだってできるはずだ。そうと決まれば優人はすぐさまひとりの近くに寄り、ある意味真実を言い放つ。

「そうだ！ そのギターヒーローって人とうちの超絶コミュ症ド陰キャ引きこもり予備軍の後藤さんが同一人物な訳ないでしょ！ 見る目ないんですか言いたい事も言えないこんな世の中にぼいずんしてる人！」

「ウツ……!?!」

「ぼいずん♡やみだつてばー！」

グサリと何かが陰キャ少女の胴体に刺さった音がしたが気にしない。

最優先はいかにぼいずん♡やみからギターヒーローという解を遠ざけるかが肝だ。それに優人は嘘偽りなく事実を述べてひとりを紹介した。誰がどう見ても疑いようなない見た目とオーラまで添えてだ。

しかし、普通ならこの時点でギターヒーローと後藤ひとりを結びつけるものは何一つ

ないと理解するはずなのに、首に包帯を巻いた女性はしばらく考えこんでから、もう一度こう言った。

「やつぱりギターヒーローさんですよね!」

「なんつ……!?! いや、どう見たって違うでしょ?! これのどこがリア充に見えてんですか! 香水とかじゃなくて防虫剤の匂いするような子なんだぞ後藤さんは! 学校じゃロクに友達もいねえし昼食だつて人のいない階段の物置きにされてる踊り場ですか食えねえ。ロインの友達も俺達や家族に何かの公式アカウントくらいで知り合いだけで言えば両手で数えられるんだぞ! そして何よりこんなずっと一緒にいる俺だから言えるが、後藤さんにそんな無双ラブコメ系主人公みたいな彼氏なんていねえ!! これに関して俺の命と花京院の魂を懸けてもいいぜツ!!」

「ステイっ優人くんステイ! ぼっちちゃんハチの巣にされちゃつてるから!! オーパーキルにも程があるよ!?! いくら何でもトドメ刺しすぎだつて!」

最後の一撃は信頼している幼馴染からだつたらしい後藤ひとりもう泡拭いて痺撃していた。

後ろで何とか蘇生を試みている少女達をよそに、優人の言葉を聞いたほいずん♡やみはそれでも答えを改める事はしなかつた。

「だってその伸びっぱなしの髪は抜け感出してるのもとれるし、普段のジャージもあえて世間のトレンドから外してよりカリスマ性が目立ってるとも言えるでしょ！ そう、カリスマというのとは一般人とは違うの。きつとレモンとかパプリカが好きでフラミンゴ飼ってますよね!! それに好きなポーズはピースサインでたまにトラックにも轢かれますよね!! やっぱりギターヒーローさんはカリスマなのよ!」

「誰津玄師の話してんだ!! おい後藤さん言つてやれ! そんな人知らんし私とは無関係ですつてな!」

もういつそ本人が否定した方が早いし相手も納得してくれるだろうと、そんな淡い希望を持ってギリギリ蘇生したピンクの少女に言う。

すると話は聞いていたのか、後藤ひとり俯きつつ体を少し震わせてから顔を上げる。

結論付ける言葉があつた。

「あついやあ……えへえ……違いますよお……へへへ」

「絶対この子……!!」

「ああもうバカっぽんとバカ! おだてられるとすぐ顔に出るところほんとバカ! どん

だけ流されやすいんだよ!! お前マジで将来そのかさされて変な商売引つ掛かったら承知しねえからな!! 俺と虹夏さんの努力返せこの野郎!!」

調子乗ったバカが褒められてポロを出して証明完了。

以上、努力は水の泡と化したのであった。

ひと通り正体が露呈してしまった事で優人は四つん這いでダウンしていたのだが、結局話を分かかっていない者からすると何が何だかという話でもある。

つまりは喜多郁代が痺れを切らしてこう言った。

「あの、ひとりちゃんがギターヒーローってどういう事ですか……?」

「ほんとに知らないの!? いいわ、ならてんで無知なアンタ達にも教えてあげる! これを見なさい!」

と、スマホでギターヒーローの動画を見せ得意気に説明しているぽいずん♡やみとそれを聞いている郁代とリョウがやいのやいのしてる間に。

「おい優人、説明」

「……あ、はい」

店長の伊地知星歌に呼ばれて事の経緯を話すこととなった。

「……なるほどねえ。たまに虹夏から動画を見せられた事があつたけど、まさかあれがぼっちちゃんだったとはな」

「ソロだとやっぱり凄く上手ですね〜」

特に驚いた様子もなく店長とP Aはすんなりと受け入れた様子。

むしろあつけらかんとしすぎて戸惑うのは優人の方だ。

「ぜ、全然驚かないんですね……」

「前からソロの時は上手いって思ってたからな。これで合点がいったつてもんだ」

「登録者数も多いですし何か参k……げふんげふんつ、長い事こういうのをやってると手癖とかでも誰が弾いてるのか大体は分かったりもするんですねよ」

「? そうなんですな」

P Aの言葉に少し疑問を持つも特に気にはしなかった。

向こうの方では「ぼっちが上手いのは何となく分かってた」や「私も何かあるんだろうなつて薄々思ってたので」とか「もつと驚いてよく!」などとあつちはあつちで各々の反応を示しているようだ。ファン一号二号もそれぞれリアクションしている。

（万が一気まずくなる可能性も考慮してたけど、やっぱあの人達にそんな心配は必要なかったな）

ひとまずは安心といったところか。

不本意な形ではあったが、正体がバレて結束バンドの空気が崩れるといった事はなさそう。というよりもほいずん♡やみという人物がイレギュラーすぎて他があまり重要視されていないようにも思えるが。

「ところで優人」

「？ はい」

「あいつの事、調べたぞ」

優人とPAにしか聞こえないボリウムで店長が言った。

「そしたらこれが意外にも出てくる出てくる。なあ？」

「はい。ああいった格好とさつきからの言動といい、性格があまり良くないのが影響してるかもしれないねえ。ネットじゃそれなりにアンチもいるようで、本名とか連絡先も晒されてますね〜」

「怖すぎだろネット情報網……」

個人情報とかプライバシーとかあったもんじゃない。ネットで大勢を敵に回すとどうなるか他人越しに思い知ってしまった気分だ。

ともあれ、思った通りぼいずん♡やみに関しては良くない評判の方が断然に多かった事が分かった。

要注人物扱いなのは継続でいいだろう。彼女は自分をライターと言っていたが、それこそ書く本人の意思によってこちらの言動が好き勝手に歪曲され捏造記事などが出回ってしまう事にもなる可能性がある。

それもあんな痛い格好をして痛い名前をしているのなら尚更だ。見た目で人を判断しちゃいけないというが、言動と行動で物語っている時点で黒である。

一応ぼいずん♡やみの情報をあらかた教えてもらい、優人はひとり達のいるところへ戻ることにした。

「喜多さん、リョウさん」

「あ、優人君」

「どした」

一号と二号に向かって何やら熱弁している誇張萌え袖女を尻目に、二人に声をかける。

「後藤さんがギターヒーローだって事、俺も知ってたのに黙っててすい」

「ストップ、優人君」

せめてもの誠意で頭を下げようとしたら、その前に郁代から人差し指で軽く唇を抑えられた。

急なことに照れる事も焦る事すらできず、ただ二人を見る事しかできない。

「私もリヨウ先輩もひとりちゃんかどういいう子なのかもう知ってるから、言わなくても大丈夫よ。ちゃんと納得もしてるしね」

「で、でも」

「優人君だってひとりちゃんを思ってる事でしょ？ だから気にしないで、ね？」

「それでもまだ負い目を感じるなら牛井一杯分奢ってくれたらいい」

郁代に優しく諭され、リヨウには冗談交じり（半分本気）で遠回しに気にするなと言われ、優人は肩の荷を下ろす。

二人の目を見る限り本当に何も気にしていないようだ。

「こらリヨウ！ まったく……まあそんな訳で優人くん、みんな大丈夫だから変に背負

い込むのは禁止ね！」

「まあぼっちの普段からする面白い奇行に比べれば全然驚く事でもなかったし」

「それは……そうですね」

「あつへへ……」

多分褒められてる訳ではないぞと言いたい気持ちを底へ押し込んでおく。

隠し事がなくなった分、不思議と気持ちが悪くなった気がした。なんかリョウがひとりに対して動画の収入管理は自分に任せてほしいなどのたまっているが今はどうでもいい。どうせ承認されないだし。

なし崩し的ではあったがギターヒーローの正体打ち明け問題も解決となり、残す面倒事はあと一つ……いいや、一人だけとなった。

その女性はひと通り熱弁し終えた後、こちらに戻ってくる。もちろんひとりの元へ。

「あつそうだ！ ギターヒーローさん、さつきは何であんな酷い演奏を？」

「……結末バンドの演奏を酷いなあ……？」

「優人くんステイ。あの人ライターだから色んなバンドの音楽とか見てきてるんだよ。だから多分、耳は確かだと思う」

「……」

そういうものか。

言動からするにギターヒーローのファンなのは確定だろう。そしてだからこそ動画とライブのギャップがありすぎて違和感を抱いたのかもしれない。だとすると手のクセや演奏の仕方だけでひとりをギターヒーローと看破したのは、本当に目と耳が確かだという証拠になり得たという事か。

「あつわ、私人見知りで……だからバンドだと目も上手く合わせられなくて……。動画は家でひと……二人で作ってるから……」

「……いいんですよつ。天才にだって欠点はあるもんですう！　むしろ逆にプラス要素☆」

「ぼっちちゃんにだけとことん甘いな……」

「恋は盲目ならぬファンは盲目ってとこですかね」

好意の対象に欠点があつても許容してくれる包容さは素晴らしいと思うが、あそこまでおだててるともはや妄信レベルだ。

多分何を言ってもプラスに変換してくるに違いない。一番厄介なタイプのファンである。

そんなギターヒーローの厄介ファンはもう一つ何かを思い出したように萌え袖から

微妙に見える指を一本立て、

「そうそう！　うちの編集長にかけあつて業界の人に紹介してもらえるように言つておきますね！　良い人がいるつて！」

「……………え？」

何を言ひ出すのかと思つたら、結束バンドにとつて無視できない発言があつた。

優人でさえ素つ頓狂な声を出してしまふほどの爆弾発言。要注意人物と警戒していた女性が、まさかのバンドマンにとつて最上級の言葉を放つてきたのだ。

（業界の人に紹介してもらえるつて……………まさか音楽業界にありがちな演奏を見てからのスカウト案件つて事か？　いやでもさつき後藤さんに対して何で酷い演奏をとかつて言つてたし……………一旦紹介してもらつてからライブの場合を踏んで経験値を増やす算段？　結束バンド全体のレベルを総合的にアップさせてワンチャンデビューの流れ？　そんな都合の良い話なんてあるのか……………？）

甘い言葉の裏には何かが潜んでいる。音楽業界をまつたく知らない優人からしてもそんな印象を抱いてしまうほどには、そういうニュースやらネットやらでは不祥事や被害が出ている事を知っている。

ただこの女性は妄信レベルでギターヒーローのファンだという事も分かった。だから騙すはずがないと思いたいというのが優人の本音か。

まさに半信半疑。

だがさすがに鵜呑みにするのはまだ早いか……と思ったところで別の反応があった。フアンの一号二号の二人だ。

「え〜デビュ〜できるかもって事!？」

「すごい!! 一気に結束バンドが遠い存在に思えてきましたー!」

あれを聞いて純粋な反応ができるなんて正直羨ましいと思う。

自分でさえ完全に信じてもいいのか迷っているのに、あんな反応をしていたら自分もその言葉を信じて甘い蜜の中に溺れてしまいたくなるではないか。

この判断は決して簡単に出していいものではない。

果たして甘い金色の蜜か。または泥臭い灰色の沼か。

そう思いながら結束バンドの面々を見ると、

「うへへ……」

「もう、ひとりちゃん顔たるんでるわよ〜」

「そういう喜多ちゃんもねえ」

「虹夏もね」

全員類が物理的にたるんでいた。

ついでに顔もピツカピカであった。

まさかの誰一人として疑っちゃいねえ。何ならひとりのあの顔は未来の武道館ライブを妄想でしているやつだ。

自分以外のみんなが信じて疑わない。だから、清水優人の思考にも変化が生じる。生じてしまう。

(……もしかして、俺の考え過ぎだった?)

そして一度変化し始めたものはそのまま流れていく。

(やってる事はやばいけど、あの人は後藤さんの、ギターヒーローのファンなんだよな。なら裏があるとか騙すとか、そんなの考えるはずがない、か……? むしろ俺の考えがニュースやドラマとかアニメみたいな展開になるかもって卑屈に捉えすぎてるだけかもしれないのか)

結局は媒体を通した向こう側の事象。不祥事や何かしらの被害があるのはそういう

展開の作品を見てきたからか。

優人が思ったよりこの世界は普通で優しいのかもしれない。素行のやばさと善意はまた別と考えるべきだと、考えを改める事にした。

(そうだよな。この人だつて普通に結束バンドに見出せるものがあつたからそう言つてくれた。ただシンプルにそう捉えるだけでいいじゃないか。虹夏さん達の夢が少しでも叶えられる近道があるなら、そつちを選んだ方がいいに決まつてんだ)

今も喜んでいる結束バンドのメンバーを見て自分も混ざろう、純粹に認められたのだと喜ぼう。甘い蜜という名の希望へ溺れよう。

そうやって、一歩踏み出した時だつた。

蜜を垂らした本人からの一声があつたのだ。

「え？ 結束バンド？ 何の話？」

上がった口角がそのまま硬直した。引き攣るといふ形で。

あれだけ騒いでいたメンバー全員が一斉にぼいずん♡やみを見る。

希望は、容易く絶望へと反転する。

「あたしが言ってるのはギターヒーローさんだけ。他のメンバーの事までは知らないわ」

その言葉に先に反応したのは、何を言われているのか理解できず固まっている結束バンドのメンバーではなく、清水優人だった。

「ちよ、ちよつと待つてくださいいよつ。それつてつまりあなたかスカウトしてるのは結束バンドじゃなくて、後藤さん一人だけつて事ですか……？」

「そうだけど？」

何の気なしに目の前の女性は返してくる。

そしてそのまま彼女は続けて言ってきた。

「そもそもあたしは最初からそのつもりで言っただしね。さっきの演奏見た感じだと結束バンドは良く言えば高校生にしてはまあ上手い方だとは思うけど、悪く言うなら下北によくいるバンドつて感じでパツとしない。全体的にレベルが中途半端なの」

一瞬にして全てを理解した。

そうだ。この女性の目には最初からギターヒーローしか映っていなかった。

口から出る善意も優しさも、全て結束バンドではなく後藤ひとりだけに向けられたも

の。スカウトの話ですら、ギターヒーローのみに掛けた甘い蜜だった。それ以外のメンバーの事なんて端から眼中になかったのだ。

「ていうかさ」

最後に、決定的な一言があつた。

「ガチじゃないよね？」

「……………え？」

ぼいずん♡やみの言葉にいち早く反応したのは優人ではなく伊地知虹夏だった。

だからだろうか。一瞬で沸騰しかけた優人の脳内が怒りよりも早く冷めていったのは。ここで相手の胸ぐらを掴んで怒鳴るくらいならいっだってできるが、肝心の場所がスターリー内だということをおぼえてはならない。

店長の言葉を胸に刻む。もうあのような問題は起こさないと決めたのだから。きつとシヨックを受けているのは虹夏だけではない。だから無理はさせないよう、今は自分が前に出るべきだと判断する。

代わりに、口から出たのは自分でも驚くほど低い声だった。

「どこを見て、そう思った……」

「ん？」

「あの結束バンドの演奏を見て、何でそんなふざけた事を言い切れるんだ……」

「あの……？ ごめんね、君の主観なんてこつちも別に興味ないから。ただ客観的に見てそう思っただけ」

「……は？」

あくまで彼女はつらつらと悪気もなく自分の言葉だけを述べていく。

「言っておくけどあたしは仕事柄アンタ達より多くのバンドマンを見てきてる。だから大体そのバンドが何をどう目指してるかって事くらいは見て大体分かるのよ。でもって結束バンドの実力は中途半端で下の上、良くて中の下。これで声が掛かると思ってる辺りが夢の見すぎ。自分達の実力をちゃんと客観視してる？ それもできてないようじゃギターヒーローさん以外は論外。さっさと他のリードギターを集めて身内だけで楽しくわちゃわちゃやつとけば？」

「……………」

そこまで、言えるのか。

ただでさえ希望から絶望へ落とされて、灰色の泥沼に沈められた彼女達を目の前にし

て、どうして平然とそんな事が言える？

「……みんなメジャーデビューを目指して頑張ってる」

「頑張るだけなら誰だってできる。努力だつてそう。何ならバンドマンなんてみんなメジャーデビュー目指して頑張ってるわよ。何もアンタ達だけの話じゃない。あたしが見てきた中で結束バンドはプロになるために必死で努力してるようには見えない」

「……みんながみんな歩むスピードや歩幅が一緒な訳じゃない。それぞれの思いや理由があつて、例えば小さな一歩で地道だろうとコツコツ夢に向かって進んでいくんだ。結束バンドには結束バンドなりの進み方がある。それをアンタにとやかく言われる筋合いはない」

「だからそれじゃギターヒーローさんがダメになつちやうんだつてば。素晴らしい才能をこんなところで腐らせていい訳がない。いつまでも身内ノリでしか輝けないちいけな場所じゃなくても、あたしなら多少なりとも業界にツテがあるしギターヒーローさんの才能を最大限に活かすにはこれがうつつけなの。分かる？ 結束バンドじゃギターヒーローさんは宝の持ち腐れつて事」

「だからつて後藤さんだけを引き抜こうなんざこつちが認めるかよ。こいつの意思を無視して好き勝手に話進めてんじゃねえぞ」

「バンドマンの引き抜きなんて普通の事でしょ。欲しいギターリストがいたら何がなんでも引き抜く。有能なベーシストがいたら了承するまで毎回会いに行く。バンド界限じゃ至って当たり前に行われてる行為なの。それで売れるバンドが出来上がるなら最高じゃない」

「とことんこつちの意思を尊重してねえ言い方だな」

「適材適所って知ってる？ ギターヒーローさんにはギターヒーローさんしか輝けない場所があるの。人見知りでバンドだと上手く演奏できないでしたっけ？ なら早めに新しいプロのバンドに入れてもらって慣れてもらう方がいいでしょ。それに他のメンバーにはここでずっと小さな幸せでも掴んでいてもらう方がよっぽど身のためじゃない」

「な、にを……？？」

「だってギターヒーローさんが本来の演奏をできるようにになったら、足手まといになるのはむしろ他のメンバーなのよ」

「「っ」」

「テ、メエツ……!!」

この女、どこまで人の神経を逆撫でする事を言い続けるつもりなんだ……？

そんな問題はギターヒーローの正体を知ってからずっと考えていた。だからこそい

つかちゃんと打ち明けてみんなでひとりに追いつけるように、ひとりもちゃんと本来の力で演奏できるようにと話し合うつもりだった。そう決めていた。

なのに。

それなのに。

この女が全てを台無しにした。

怒りは逆効果。そうと分かかっていても、心の内には果てしない灼熱があつた。

どこまでもペースを乱してくる地雷女を前に清水優人は軽く深呼吸をする。

(?まれるな……こいつの音楽に対しての知識は俺より遥かに多い。だから何を言ってもらいたい事を言つてこつちに揺さぶりをかけてくる。今俺に求められているのは結束バンドのみんなへの精神ダメージを最小限に抑えつつ、こつちにヘイトを向けさせた上で引き抜き話を終わらせる事だ)

もう一度深呼吸を繰り返す。

どうにかなりそうなくらいに沸騰していた感情は少しずつ冷めていった。ただ、正しい怒りの感情だけはそのままに。

(ふざけやがって)

清水優人は知っている。

伊地知虹夏が志半ばで夢を諦めた姉のためにバンドを始め、結束バンドの知名度が広まった際にはスターリーをもっと有名にするといった夢があり、そのためにバイトも含めバンド活動を頑張っている事を。

清水優人は知っている。

山田リョウが音楽性の違いにより前のバンドを辞めた際、虹夏に誘われ結束バンドに入り今度こそ自分の音楽を貫き通すために、表には出さずとも作曲活動に力を入れていく事を。

清水優人は知っている。

喜多郁代が一度逃げた罪悪感からも向き合い一番の初心者なのに必死にギターの練習に励み、半年近くでボーカルをも務めるほど努力の才能を持っているという事を。

清水優人は知っている。

後藤ひとりは何をやってもダメでギターしか取り柄がなく、それを見出してくれた虹夏の夢のために作詞や結束バンドを最高のバンドにすると初めて誰かに宣言し、いざとなればどんなトラブルだって乗り越える力を持っているという事を。

そう、清水優人は知っている。

知っているのだ。

だから、彼女達の努力を少しも理解しようとしていないこの女の言葉を全て受け入れるなんて事は到底できない。

まずは否定から入るために口を開こうとした時だ。優人よりも先に、もはや呆れたような口ぶりではいずん♡やみが少年の後ろへ指差した。

「とういかさあ」

標的が彼女達へ向けられる。

それが分かかっていて尚、止める事も間に合わず言葉が発せられた。

「あたしにここまで言われて結束バンド本人達が何も言つてこない時点でお察しな訳なのよね。何で何も言つてこないの？ 悔しくないの？ 言い返せないのはあたしの言つてる事が事実だから？ それでも普通思うことがあるなら自分で言つてくるのが普通でしょ。それともこの清水君つてのが少女を守る騎士ナイト的な役割で肝心なお姫様達はだんまり決め込むだけで安心してんの？」

「ッ、それはアンタが好き勝手言」

「ああそうそう、さつきからずつと思つてたんだけど」

何かを思い出したかのように微妙に見える人差し指を上へ上げ、ほいずん♡やみの視

線が清水優人へ向けられた。

またも標的が変わる。それも先ほどとはまったく違う視線だった。明らかに攻撃的な目をしたばいずん♡やみは、その名の通り毒を持った言葉を解き放つ。

「清水優人君、君がいるから結束バンドが余計ダメになってるのかもね」

「……ッ」

真正面から放たれた言葉が、少年の勢いを一瞬で削り取る。

「そもそもバンドのサポート役って何？ マニピュレーターやマネージャーみたいなものでもないんでしょ？ まあ無名バンドのマネージャーって何って話だけど。サポート役でやれる事は……バンド活動の宣伝とかかな。さつきSNSを見たところだと最近ようやく宣伝に力を入れ始めたように見えるけど、まだまだ全然ね。ライブの客も常連ばっかだし同じ学校の制服の子達がほとんど。新規を取り入れようっていう気概が見えない。そんなんでやる気あるの？ 今まで何してた訳？ あのね、正直に言わせてもらおうけどさ」

「……」

少年は何かを言い返そうとして、止める。

それを良い事に、ぼいずん♡やみがスターリーで一番言つてはいけない事を口にした。

「君の存在つて別に結束バンドに必要じゃないよね」

冗談抜きに、フロアの空気が凍り付いた。

いいや、あるいは焼き付いたか。

しかし彼女の言葉に真つ先に反応したのは、今までずっと優人の後ろにいた伊地知虹夏と喜多郁代だった。

「ちよっ……それはいくら何でも言い過ぎじゃないですか!？」

「そうですよ! 彼は……つて優人君つ、どうして……!」

ぼいずん♡やみに歯向かおうとする少女達の前に左手をやって二人を制す。

自分のために怒ろうとしてくれたのだろう。心の中で感謝しつつも視線は向けない。

実際止めたのもただ、こいつにそんなのは無意味だと判断しただけだ。怒るだけ無駄だから。

「俺が結束バンドにいる必要性がないって、アンタは言ったな」

「少しはオブラートに包んだつもりだったけど、まあそう受け取ってもらっていいわ」
取り繕う事すらしなくなった女性を前に、清水優人は言う。

「なら言ってみろ。俺のどこがダメで、必要性が感じられないのか。アンタの言いたい事を全部言ってみろ」

睨む。もはやお互いを敵と認識しつつ、それでも退く事はない。

それを彼女も受け取ったのか、少し目を細めてから、

「なら遠慮なく。前提としてまず役割が意味不明、サポート役の定義も曖昧。楽器もギター始めたてならいざって時に代役で役に立てる事すらできない。SNSでの宣伝回数がアピールポイント含めて少なすぎ、話を聞いてる限りじゃ新規の客を取り入れるための努力が感じられない。今はSNSの時代なのよ？ どうせならもつとライブの動画やりハの動画を撮影して広めるべきなのに、一切やってないんだもの。それで本気だつて言われてもこつちが信じられるはずがない。それに、バンドを有名にするためのサポート役だか何だか知らないけど、それならもつとプロデュース力とか付けた方がいいんじゃない？ 今のままだと素人の頑張りなんてたかが知れてるんだし、まあそんな

事も思いつかない時点で真面目かどうかも怪しいけどねえ。てかバンドメンバーならまだ分かるけど君はメンバーじゃないんでしょ。そこが一番謎なのよ。結局何をどうしたいの？ 結束バンドにいる君の存在意義は何？ 普通ならバンドマンにそんな変なサポーター役なんていらぬし無駄なの。そういうのも含めて最初は自分達だけで試行錯誤しながら這い上がっていくのがバンドマンなのよ。力もツテもない君はただのお飾り、バンドにとつてのお邪魔虫つてところかな。悪い事は言わないからお手伝いなんて夢見がちな事は辞めてバイトに専念したら？」

「だからそんつ……優人くんつ！……ここで言い返さなきや……」
自分より前に行こうとする虹夏を止める。

ただ視線はぼいずん♡やみだけを見据えたままだ。

「何？ 清水君まで何も言つてこないの？ だったら拍子抜けかも。結局君達はバンド活動に対して真摯に取り組んでな」

「言いたい事はそれだけか」

「い……え？」

「言いたい事はそれだけかって聞いてんだよ」

多分、ここまで本気で誰かに対し敵意を向けた視線を送ったのは初めてだろう。

それだけの事をこの女は結束バンドの面々に言ってきたのだから。もう遠慮も容赦も必要ない。

「な、何よ……あたしは事実を」

「佐藤愛子」

「びぎやあ?! だ、誰?! あたしの本名呼んだの……何か重装備してるんだけど!」

優人が何かを言おうとしたところで横からの乱入があった。

何故かガスマスクをしてこちらに近寄ってきたのはスターリーの店長、伊地知星歌だ。

「ったく、さつきから黙って聞いてりゃ私の妹と大事な弟分に好き勝手言いやがって」

おそらくぶりっ子への対策としてガスマスクをしてるのだろうが、それが有効なのかは不明といったところか。

先ほどのように苦手意識満々だった店長の表情が普通に返っているのを見ると効果はありそうな気もする。

「店閉めるからお前はもう出てけ。ハッキリ言ってお前がいると気分が悪い」

「なつ、こつちはまだ話終わってないから帰りません〜!」

「……しやあねえな。じやあ実力行使でいくか」

「な、何……暴力でも振るう気!?!」

「正直言うともそれも悪くないんだが……うちの狂犬はそれより惨い事を普通にしてくるぞ。おい優人、もういいだろ。遠慮なく言っちゃまえ」

ガスマスク越しに店長が悪い笑みを浮かべたのが微かに見えた。

「ボロカスにされてもただで立ち上がらねえのが清水優人ってヤツなんだよ。言っておくけどこいつを怒らせたのはお前だからな。最初に引き金引いたんなら、その責任も結果もお前が受け入れるべきだ」

それが合図だった。

今の今まで我慢していた清水優人がようやく口を開く。

「本名佐藤愛子、23歳」

「ぴいぎやあツ!?!」

「23歳って事は立派な成人女性だよな」

「そ、それがどうしたのよ!?!」

ここで、初めて清水優人の口角が不気味に上がった。

「アンタみたいなアクの強いライターには必ずアンチがいる。だからアンタの事を店長達に調べてもらったよ。そしたら色々出てきた。嫌われ者ってのも大変だよなあ？ さつき俺に対して今はSNSの時代って言ったのはアンタだろ。ああ、全くもってその通りだ、認めるよ。ぽいずん♡やみつて調べるだけで本名も出てくるし、今までやってきた痛い行動とかやらかし行為がバンバン書き込まれてるぞ。このご時世だ、本名調べたら実家の連絡先も分かるよな？」

「うっ……な、何、あた」

「ああそうそう、目立つ服装してくれてたから確信持つて言わせてもらおうけど」
「ついさつきの意趣返しだった。」

「この前うちの学校に不法侵入したの、アンタだろ」

「……………」
「完全にぽいずん♡やみの動きが止まる。」

「そして今日の営業時間前に勝手に店内に入ってきたのも不法侵入。店長が注意しても

聞こうとしなかったし散々喚いてみんなに迷惑かけてくれたよな。それに関しては営業妨害か業務妨害のどっちかになったりするの？ ああ悪い、そこら辺は詳しくないからさ。帰らねえってんなら一旦通報した方が手っ取り早いよな」

「なあ!?! ちよつ、まつ」

「うちの学校が許してもスターリーで好き勝手やった事に関しちや店長の意思次第だ。それで店長は俺に決定権を委ねてくれた。はあ、成人してる立派な女性が一週間もしないうちに二回も不法侵入だなんてな。こつちに説教だか引き抜きだかする前に、そつちが社会の常識を身に着けた方がいいんじゃないか?」

年上の女性に対し、少年は三本指を立ててこう言った。

「アンタに三つの選択肢をやるよ。一つは大人しく帰るか、もう一つは親にアンタの痛い名前とこれまでやらかした行為を伝える、最後の一つは警察に通報されてお縄頂戴のどれかだ。さあ、どうする。なけなしの理性はまだ残ってるか?」

「ぎゃあああああ帰ります帰ります〜! だから通報と親に連絡だけは勘弁して!?! はいそれじゃさよならあ〜!!」

さつきまで好戦的に突つかかかってきたのが?のように、ほいずん♡やみはダツシユでスターリーから出ていった。

あれだけ無駄に騒がしかったスターリーが一瞬で静寂に包まれる。
重い空気だけが流れていた。

そこでふと、優人は自分の右手が誰かに握られていた事に今更気付く。

「……後藤、さん？」

「あつゆうくん……その、あんまり強く握り過ぎたらダメだよ……痛めちゃうかもしれ
ないし……」

ひとりの両手が優人の右手を優しく包み込んでいたのだ。

ふわりと離された右手をゆっくり開くと、どれだけ強く握りしめていたらこうなるの
かと思うほど、右手は震え手の平には爪の跡が赤くくつきりと付いていた。

（気付かなかった……後藤さんに握られてた事すら）

それだけ表面には出さないようにしていたつもりでも、結束バンドをバカにされた優
人の怒りがそうさせていたのか。

ともあれ、だ。

「……ありがとな、後藤さん」

「あつうん……」

微笑みかける。きつとあの険悪な雰囲気が一番やられていたのは後藤ひとり自身だ。相手の目的が自分で、それを中心に結束バンドのみんなと優人が好き勝手言われていた。ただでさえ基本的に自分が悪いと思いついでしまふ彼女にとって、今回の出来事はあまりにも酷すぎる。

それなのに、自分を守るのではなく優人を優先的に思いやって手を握ってくれていたのか。

（後藤さんは誰よりも優しい。だからこそ今回の件で自分を責めてしまふ事もあるかもしれない。なるべくメンタルケアしてやりたいとこだけど、問題はまだ全部終わった訳じゃないもんな……）

「お前らもあんな奴の言葉真に受けなくていいからな。所詮は犯罪者予備軍の戯言だと思つとけ。今日はもう全員上がっていいぞ」

氣を利かせた店長が言葉掛けてくれた。

さすがにこのまま作業を続けるのは厳しいと判断したか。各々が小さく返事をして帰りの支度を始めた頃、店長が優人の肩に手を置いた。

「悪いな、もつと早く止めるべきだった」

「……いえ、ああ言われても仕方ないところは確かにあるので」

「それでもだよ。あそこは大人としてお前らをちゃんと守ってやる場面だった。うちに不法侵入かましてんだ。一発くらい殴ってやっても私は見逃したぞ」

本気で言っているのかこの店長は、と思いつつながら軽く笑う。

「だとしても、もう店長達の大事なスターリーで荒事は起こしたくなかったんですよ」
虹夏の夢のためにも、という事は言わないで。

「……バツカ」

「あでっ」

「もつと子供らしくしときやいいんだよお前は。弟分守んのも私の立派な仕事なんだぞ」

そう言って伊地知星歌は自分の定位置のカウンターまで戻っていった。

ああいうところは、本当に尊敬するものだと思底思う。小さく、けどどしつかりと清水優人はスターリーの店長に頭を下げた。

帰り道。

結東バンドの面々とも別れ、後藤ひとりと清水優人は二人で夜道を歩いていった。
その最中。

「ゆ、ゆうくんは、大丈夫なの……?」

「ん、何が?」

思い切つてひとりが優人に声を掛けるも、意外と普通に返してきた少年に対して困惑してしまう。

「あの、えつと……あの人にゆうくんが色々言われて……」

「ああ、そのことか」

もう冬だからか、少し肩を上げながら歩く少年は前を見る。

「正直俺個人に対して言われた事については全然怒りの感情なんて湧いてこなかったよ」

「……そう、なの？」

「ああ。さすがにあの野郎が何も知らねえくせにみんなをバカにした時は腹立ったけどな」

(あつこれゆうくんめっちゃ怒ってるやつだ)

基本的に仲の良い人以外に対しては柔らかい言動をする事を知っているひとりとしては、ほぼ初対面の女性に対し優人があの野郎などと乱暴な口調が出るといふ事に色々察してしまう。

(ゆうくんは誰よりも優しい。だけど……もっと自分の事も大事にしてほしいな……)

「まあ」

まるで遠くを見つめるような瞳で、少年は続ける。

「あいつの言ってる事が概ね正しいって事も理解してる」

「え？」

「結束バンドのサポート役。ちゃんと考えなくても誰だつてよく分からねえ役割だろうなどは思つてたからさ。実際俺も最近まで何をどうすりや結束バンドのために動けるのかつて思つてたし。悔しいけどあいつの言葉が全部刺さつたのも事実だ。結束バンドに俺がいる必要性ないつてところも含めてな」

「……そつ、それはちが」

「分かつてる」

ひとりの言葉を遮るも、清水優人の視線はこちらに向いていない。

ただ正面だけを見据えている。

「あんなこと言われたから辞めるなんて事はしないさ。試合に勝つて勝負に負けたつて感じかな。ただ痛感したんだよ。ああ言われないとちゃんと自覚してなかつたかもしれないつてな。あそこである程度冷静になれたのは大きかつた」

「……う？」

ふと、よく分からない発言があつた。

「帰り際、虹夏さんに言われたよ。何であんなこと言われて言い返さなかつたのかつて。いつもの俺ならちゃんと言い返してたでしょ、らしくないじゃんつてさ」

「うん……聞いてた。私もちよつと、ゆうくんらしくないなって思ってたから……」

そう、他のメンバーもひとりも思っていたこと。

普段の清水優人ならハッキリ言える事はちやんと言い返す強さを彼は持っている。それは相手が年上だろうと関係ない。現に途中までは返していた。

なのに優人本人の事について言われるとただ黙って言われるだけだったのだ。

反論しようとした虹夏と郁代を抑えてまで。そうした意味が誰にも理解できなかった。
た。

らしくない。

ただそう思われるまでの大きい評価をされている事に、果たしてこの少年は気付けたか。

ひとりの言葉に清水優人が微かに笑う。

「何も考えてなかった訳じゃない」

「……え？」

「またも優人は前だけを見ていた。」

「確かに俺の役割に対して痛いところばかりを突かれたし、何が良くて何がダメなのかす

ら曖昧でちゃんと分かってなかった。そういうところ指摘されて納得しちまった部分の方が多かったってのもある。あんなんでもさすがは業界に詳しいライターってところか。俺よりも遥かに知識量が多いのも頷ける」

「う、うん……」

弱い部分を突かれ、それをちゃんと正しく理解した上で、次に少年はこう言った。

「だから聞き出せる事は全部聞き出した」

「え？」

思わずひとりの足が止まる。

隣を歩く少年の足もまた止まった。

「さっき言ったろ。俺個人に対しての言葉には何も思わなかったって。俺よりも詳しいあの野郎なら俺のどこがダメなのかをちゃんと指摘してくると思っただけからな。反論してくれようとした虹夏さん達には悪かったけど、あそこはどうしてもあいつの言葉を全部聞き出す必要があったんだ」

（まさかゆうくん、あの時怒ってたはずなのに自分の事になった瞬間からそこまで考えて……？）

「そして俺の着眼点自体は間違つてなかった。もっと早くから活用すべきだったのと、宣伝の仕方を工夫していく事。あとはある程度のプロデュース力も必要か。新規の客を取り入れていく事を重点的に考えると、やる事は山積みだな。ああ、あの野郎のおかげなのは癪だけど何だか楽しくなってきた」

「ゆう、くん……?」

彼の横顔にはやる気が満ち溢れていた。

好戦的な目。自信を取り戻していく希望。

「後藤さんもあんな好き勝手言われて本当は悔しかったんだろ」

「……うん」

「大事な仲間をバカにされて悔しかったんだろ」

「……うんっ」

「ならお前も多少の覚悟を決めろよ。あんだだけボロカスに言われたんだ。俺達がただ立ち上がるだけじゃ何の意味もねえ。結束バンド全員で立ち上がるんだ。その上であいつを見返す」

多分、この時自分は見惚れていたんだろうと後藤ひよりは自覚する。

ギターヒーローと自分で名付けた名前の由来。その張本人が目の前にいた。

ヒーローが大好きで、憧れて、そうありたいと願っていた小さき頃の少年の面影が街灯越しに少女の瞳に映っていた。

そしてそんな少年に憧れて自分もギターという分野でヒーローになりたいと願った少女がいた。

二人して正面を見据える。

見えない何かを確かに捉え立ち向かうように、清水優人が宣言した。

「らしくないのはここまでだ。ここから全部巻き返してやろうぜ！」
「うんっ」

確かな火を瞳に宿し、二人のヒーローが動き出す。

68. 見返すための準備を

「最後に確認するけど、いいんだな」

「う、うん……」

「明日になったらやっぱ無理とか言わないな」

「う、うん……」

「その覚悟に？はないな」

「う、うん……」

「……よし、よく言った。じゃあ明日これ持って虹夏さん達に提案しよう」

「うん……っ」

—

翌日。

スターリーにやってきた俺と後藤さんはいつも通り階段を下りて入口のドアを開ける。

昨日別れる際、当然だけどみんな普段のような明るさは微塵もなかった。表には出さなかったけど、落ち込んでいたのは明白だろう。

かくいう俺も明るくはなかったが、考え事をしていたから落ち込んでいたのはまた違う。あとはあの女への怒りくらいだ。

昨日の今日だからか少し気まずい……というよりは緊張していると言った方が正しいか。

みんな変に引き摺ってなけりやいいけど。ちなみに後藤さんは常に俺と一緒にいるからそんなに気にしてない。

昨夜もお互い寝る寸前まで一緒にいたし、何なら一緒に部屋の部屋で寝落ちしてた。

目開けたらすぐ隣で俺をメンダコぬいぐるみの抱き枕代わりにして後藤さんが寝息立ててるわ、何故か一緒に布団掛けられてたわで身動きできねえし思わず現実逃避からの二度寝しそうになったのである。布団掛けてくれたのはおそらく美智代さんだろう。どうせなら俺だけ起こしてくれれば家に帰ったのに。

その後の事は言うまでもない。後藤さんが起きて寝ぼけながら俺を上目遣いで見たと思ったら突然我に返り朝から爆発オチだ。

魔人ブウみたいに破片を集めて再生させるのに一苦労しながら一度自宅に帰り、再度準備を済ませてからここに来た。

俺の隣を歩く後藤さんの手には一枚の紙、フライヤーが握られていた。

昨夜色々話し合って決めたものだ。これを虹夏さん達に見せてある提案をしようと思う。一番の難関である後藤さんはもう乗り越えたし、あの三人なら普通に受け入れてくれそうだけど、果たしてどうなるか。

階段を下りると既に結束バンドの三人が集まっていてテーブルを囲みながら何かを話していた。

「あつ、ぼっちちゃん、優人くん！」

ドアと階段を下りる音で俺達に気付いた虹夏さんが急に立ち上がる。

その際、俺の視界にテーブルの上に置かれていた一枚のフライヤーが映った。自然と口角が上がる。

「……どうやら考えてた事はいつ」

「結束バンドでフェスに出てグランプリ獲りましょうっ！」

虹夏さんに向けて話しかけようとしたらいきなり隣の少女がキリツとした顔で持っていたフライヤーを前に突き出した。

……何だろう、良い表情なのにちよつともうオチが分かったかもしれない。

ほら見たまえ、虹夏さん達もポカンとしておられるぞ。

珍しく後藤さんが声なんか張り上げるから脳の処理が追いついてないんだよきつと。脳内ダウンロードを先に終えたのはさすが結束バンドのリーダー、虹夏さんだった。

彼女は後藤さんの持つてるフライヤーとテーブルの上に置いてある物を一度交互に確認した後、こう言った。

「あのお、ぼっちちゃん……あたし達もね、ちょうど今その話してたところなんだよね……」

「……………え？」

「キメ顔で言ってるよこ悪いけどほら、テーブルの上見てみ。答えはそこにあるぞ。俺はキメ顔でそう言った」

俺の言葉通りにテーブルの上を見る後藤さん。

そこにはまったく同じフライヤーが置いてあったとき。凄い偶然だね。

そして当然、キリトも驚くほどキリツとしたキメ顔でキメていた後藤さんは、髪と服装だけでなく顔色もどんどんピンク色になっていく。

らしくない事するから……あーあ、全身ピンクになってる。それはもうただの魔人ブウだよ。朝の伏線回収しなくていいから。

という訳で羞恥心から俺の腰にしがみ付いてきた後藤さんのケンタウロスモード再びであった。

もうめんどいからこのまましばらく放っておこう。

「じゃあ改めて確認しよう！ 優人くん達もそれ持ってきたって事は提案しようとしてくれてたんでしょ？」

「はい。後藤さんにも昨日50回くらい確認したんで覚悟はできてるかと。そうだろ、後藤さん」

「……」

俺の腰に頭押し付けながらおそろく縦に首を振っている。

うん、肯定のようだ。この子の事だし一夜明けると覚悟がどつか行ってるなんてのは普通にあるからね。さすがに今回は思うところがあつたらしい。俺の問いにフライ

ヤーを何度も握り締めて葛藤しながらもやると決めた思いは強かったようだ。ぐしやぐしやになったフライヤーをテーブルに置く。

そこにはこう書かれていた。

『未確認ライオット』。10代アーティスト限定のロックフェス。つまりは学生ばかりが出るであろうこのイベントに結束バンドも出る。虹夏さん、これはもう決定事項でいいですよね』

「うん、あたしと喜多ちゃんも同じ事考えてたみたいでね、ぼっちちゃん達も同じ気持ちなら出ようって話し合ってたところなんだ」

「……実は私もそのフライヤー持ってきてたから仲間入れて……」

「むしろ何で黙ってたんだよ……」

クールぶってんじゃないよ。もうアンタ表に出さないだけで内心ビビったり焦ったりする事多いの優人さん知ってんだからね！

うちのギターとベースはよくイキって滑る。ここテストに出ますよ。

咳払いを一つ。

「じゃあ説明は俺がしますね。まず審査の順番ですけど、最初に音源を録ってデモテー

プを送るデモ審査。これはライブハウスのオーディションに似たようなものですかね。しかし通過できるのは100組のみ。調べたところによると、応募数は毎年3000は軽く超えるらしいので100組なんてのは実質狭き門ですね」

「10代なんて一番ピチピチで熱くなれる時だからねえ。実際の応募数なんてもつといふんだらうなあ」

「でもそれを乗り越える気概がないと通過できるものもできませんよー!」

「よく言った喜多さん。そうだ、そんならいやる気がないと応募する意味がねえ。んでもって今の結束バンドのやる気はフルMAXだ。怖いモンなんてないと思え」

俺のコシギンチャクになつて後藤さんもそうだそうだと頭をぐりぐりしてきている。喋れ。

一応きっぱり言っておくがコシギンチャクだからと言って共存してる訳ではない。コシギンチャクが俺を掴んで離さないだけだ。

「で、それが通るとウエブ審査……いわゆるネット投票ですね。デモ審査を通過したアーティストの曲や動画を見た人に気に入ってもらえたら投票してもらうちよつとした選挙みたいなもんだな。これは一人一回のみの投票じゃなくて一日一回投票できる形式だから、友達や家族に頼んで毎日投票してもらおう事もできる訳です。んでこれを通

過できるのが100組の中から30組だけ。これまた一気に絞られますね」

「つまり動画やSNSの使いどころって感じかしら？　ならデモ審査を通過すれば私の腕の見せ所ね！」

「喜多さんギターボーカルだから常に本気で腕見せてくれな。広報に関しては俺も今以上に手伝うから、そこは二人で話し合って頑張ってください」

「もちろん！」

ちよつとせつかく説明してるのに一向に離れる気配のない後藤さんの腕を掴んで離そうとするも何故か全然離れない。

こういう時だけ腕の力強くなりすぎだろ。ガツチリホールドされてんだが。何なの、俺の口から臍物出させる気か？

仕方なく諦めて昨夜ネットで見たルールを並べていく。

「30組の中に入れたら次に次にあるのがライブ審査。いよいよ人前での演奏になります。これは各地の会場で集められた数組のバンドが観客の前で演奏し、その観客と審査員の投票によって上位2組だけが最後のファイナルステージに進む事ができるって感じですね。それで最終審査のファイナルステージはフェス形式でやるので数千人規模の前で演奏する事になります。そしてそこで勝てば晴れて優勝、確定でメジャーから声がか

かるはずですよ。とまあ、審査の流れはこんなもんですかね」

「当たり前だけど夢のある話だよね。そのためなら余計頑張れちゃうかも！」

その夢を掴むために半端ない数のバンドが応募してくる事を考えると、当然生半可な努力じゃダメだろう。

結束バンドの実力がどんなもんかは昨日あの女に散々言われた通りだ。今のままで必ずどこかの審査で躓くのは確定、最悪デモ審査すら通らない可能性だってある。

でも。

だけど。

「道は険しい、壁だって高い。それでもみんな優勝目指すなら俺も全力でサポートします。俺にできる事なら何だってするつもりなんで思う存分パシッてください。あ、奢るとかは極力なしなんでそこはリョウさん弁えてくださいね」

「くっ、先手を打たれたか……」

一瞬で目を光らせたのバレバレだからな。

「優人君も気合い入ってるのね」

「まあな。昨日あの野郎に言われた事は納得してないけど、理解はできた部分もある。

主に俺の必要性とかな」

「でも、それはっ」

「分かつてる。そこはもう昨日の時点で解決済みなんだ。だから見返そう。胸倉掴んで怒鳴るなんて事しなくたって、あの野郎を見返すには結束バンドの音楽が手っ取り早い。それに、俺の必要性はあいつが決めるものじゃなくて結束バンドのみんなが決めるものだ。ぽっと出の他人なんか決められてたまるかよ」

「そうだよ！ その点あたし達なら優人くんのこと必要ないなんて絶対言わないし一生一緒にいてもらうから安心だね！」

ええ、ええ、俺もできる限りの力で結束バンドを支え……ん？ あれ……？ この天使今一生一緒に言いませんでした？

三木の道山的なこと仰ってない？ 何か霊圧的な重さ感じるんだけど気のせいかな。ああ、後藤さんが腰からずり落ちていく重さだったわ。もうこっちは掴んでないのに離されまいとずっと力を入れてたのが仇になったらしい。体力の限界だったようだ、バカめ。そしてよく持ち堪えたな俺の臓物達。

いまだに俯いて立ち上がるうとしない後藤さんを猫を抱っこする時みたいに持ち上げ、何とか特等席らしい後ろに配置させ服の裾を掴ませつつ、

「勝ち上がるためにもまずはデモ審査を乗り切らないといけません。×切は来年の4月、約半年くらいか。できればそれまでに活動数を増やして新曲作り、MVも作っておきたいですね」

「それはあたしも思ってた。スターリーでの月1ライブだけじゃ足りないし、路上ライブとかもしていこうよ！ お金もそんなにかからないし！」

「いいですねそれ。ただ路上ライブだと許可申請があるので、無許可でやるのは極力なしにときましよう。許可なしでも基本注意で済むとは思いますが、罰則がある場合もあるからそこは避けたいですね。他のバンドがよくやってて人が集まりそうな場所と時間帯の把握もとききたいので、良さそうな場所は俺が探しておきます。その間皆さんは練習に集中してもらって大丈夫ですよ」

「おお、頼りになるね！ 優人くん！ よろしく頼むよ！ これから半年忙しくなりそうだね〜！」

「曲作りにMV作成、路上ライブもするととなるとバンド活動がメインになりそうですしね」

「あのお、うちのシフトだけはちゃんと入ってくれよ……特に優人は」

俺だけ名指しですかい店長さんや。

「いくらでもここでライブさせてやるって展開じゃないんだ……というか優人くんだった一員としてやる事いっぱいあるんだからそっちに集中してもらわないとダメ！」

「ええ、うちのシフト増やしてたくさんライブすりゃいいじゃん」

「一回三万するのに無理だよ！ バイト時間だって土日以外は短いんだからね！」

まあ厳しいよな。ライブ代だけじゃなくて機材代も溜めておかないといけないってなるとそう毎月何回もライブしまくれる訳ではないのだ。

そこが学生の辛いところである。

「じゃあ優人の今までの給料分からいくらか出してライブするってのは？ 働いてる時間もお前らより多いから給料も幾分か多いし、こいつなら全然許してくれるだろ」

「うっ、それは……」

「え？ 俺の給料って毎回ライブ代に使われてたはずじゃ？ 虹夏さんともそういう話でケリ付いてたと思うんですけど」

「こいつ、お前の給料袋初バイトの時からずっとご丁寧に引き出しに仕舞ってあるんだよ。勝手に使うのはやっぱり申し訳ないんだとさ。ずっと返そうとしてたみたいだがああ言った手前、返しそびれてたんだって」

「うう……」

まじかよ。全然気にしてないから何とも思ってたなかったんだけど。

むしろ結束バンドの力になれてると思ってたから喜ばしいときえ感じてたんだが、もしかして虹夏さんずっと悩んでたの？

「ごめん優人くん！ お姉ちゃんの言う通りなの！ 実は優人くんの給料、やっぱり自分のために使ってほしくて一度もライブに充ててないんだ……」

「そうだったんですか……。や、俺としては気にしてないので全然使ってもらって構わないんですけど」

「最初は厚意に甘えようと思ってたんだけどね……。自分達のライブをするために優人くんのお金を使うのはちよつと違うかなって思っちゃって。他の事で頼るならまだしも、ステージに立つライブだけはあたし達だけのお金で何とかしたいって思ったの。けど、それだと優人くんの気持ちを無駄にしちゃうかもって考えたら返そうって思っても中々行動に移せなくて……」

「……」

なるほど、そういう気持ちもあって当然か。

優しい虹夏さんの事だ。頼りたい事と自分達だけで何とかしたい事は別で弁えておきたいんだろう。厚意に寄せすぎて逆にずっと気を遣わせてしまってたのか。これは

反省だな。

「分かりました。じゃあせつかくの機会だし、今までの分は貰っておく事にします」

「ほんと!?! なら今日終わったら持つてくるね!」

「はい、ちゃんと俺の好きなように使わせてもらいますよ」

お金が虹夏さんから俺の手元に戻ってくるだけで、結束バンドのために使うという当初の目的は何一つ変わっていない。

確か路上ライブの許可申請には手数料がかかるんだっけか。路上ライブの許可はほとんど通る事がないらしいからみんな無許可でやってて、警察も相応のクレームやトラブルがない限りは黙認か注意程度で済むとネットで見たけど、許可がとれるとれないにせよ一応筋はちゃんと通しておきたいもんな。

「良かった。何気に自分の引き出しに誰かのお金が入ってるって結構気が気じゃなかったからさ」

「俺としてはお金の管理を虹夏さんがしてくれてて安心しましたよ。リョウさんなら今頃私用で全部使い果たしてそうですしね」

「してそうというか絶対するよりリョウは」

「今私サラッと巻き込み事故喰らった？」

日頃の行いだと思います。

「ちよつと伊地知先輩!!」

「何、どしたの喜多ちゃん？」

俺の給料の件も解決したし話を戻そうとしたところで喜多さんが大きな声を上げた。
未確認ライオットのフライヤーの裏側を見て何やら慌てている様子だ。

「昨日フライヤー取った時はちゃんと見てなかったんですけど……ここここ優勝賞金
100万円もあるんですか!？」

「うん、そうだよ」

ちゃんと見てなかったんかい。

「凄いですね……。去年優勝した人達は何に使ったんでしょう……」

「そりや楽曲制作とかにじゃない？ クオリティーの良いものを作るにはお金かかるか
らね」

「おいお前ら、思う存分ここでライブしろよ。分け前は50万で手を打とう」

「結構です」

スターリーの店長ちよつと現金すぎやしないですかね。

スタツフも俺達含めて割といるしそんなお金困ってないでしょ。可愛い妹もいるのにこれ以上何が欲しいんだアンタ。

「つうか後藤さんもいい加減復活したらどうだ？ みんな未確認ライオットに向けての話してんだからお前も入らなきゃダメだろ？」

「……あうー」

「……………」

「びゃうっ!？」

とりあえず赤ちゃん化したアホピンクに脳天チヨップだけしておいた。

6.9. やるべき事、為すべき事

「ぼっちちゃんも元に戻った事だし、同世代で今人気のバンドとかもチェックしてみようか？」

「そうですね。曲とか聴いてみましょうか」

後藤さんの赤ちゃんプレイ（違う）を強制的に終了させ元に戻した俺は自分のノートPCを立ち上げ起動した。

こういうのって調べると結構出てくるもんだよな。

「えーと……『10代 ロックバンド 人気』と……お、出た出た」

「優人、なんか調べ方古いね」

「え、？、調べ方に古いか新しいとかあんの？」

「まじで？ ネットで調べ物する時はシンプルな単語入力していくだけでいいんじゃないの？」

むしろ新しい調べ方ってなんすか。オツケーギューギユル、10代で人気のロックバンドを調べてとか音声で認識するやつ？ よく分からん。

「そんなことは今どうでもいいじゃん。それより見てみようよつ。優人くんスクロールスクロール！」

「え、ああ、はい」

何だかモヤるが仕方ない。

記事のサイトを下にスクロールしていくと、『10代で人気絶大の若手ガールズバンド10選』みたいなタイトル記事だった。

「まずは、都内を中心に活動しているエレクトロロックバンド『ケモノリア』。四人で構成されていてダンスミュージックとロックを掛け合わせた斬新なサウンドが特徴、だそうです」

「ダンスミュージックかく、客も一緒にノリノリで踊れるようなバンドって考えると確かに斬新かも。手を振ったりヘッドバンするだけがロックとは限らないもんね。今の時代楽しみ方は人それぞれだし」

「キーボードボーカルか。それも含めて珍しいですね」

見た感じ年上っぽいし、バンド歴も長そうだ。

都内って事は、この人達も未確認ライオットに応募してくる可能性は充分にあるのか。要チエツクだな。

「次は……大阪のバンドですね。『なんぼガールズ』、曲中にパロディを盛り込んだりして若者中心に人気を集めてると。いわゆるコミックバンドです」

「コミックバンド……って何かしら？」

「ん〜俺もまだ詳しい事はよく分かってないけど、基本的に演奏よりも変な仕草や面白い歌詞で見る人を楽しませるようなバンド……って感じかな。日本で有名なやつだと、ヤバイロンT屋さん、フルフルズ、ザ・トリュフターズ辺りか。名前くらいは聞いた事あるだろ？」

「へえ、あの人達ってコミックバンドだったのね！」

多分全部が全部コミックしてる訳ではないと思うけどね。

そういうのもやったりしてますよって事だと思う。俺もあんま聴いた事ないから知らんけど。

「優人くんいつの間になんか詳しくなったの？」

「バンドに関わるってなった時から一応色々調べただけですよ。こんなものでも知識は多い方が役に立つかもしれませんしね」

その後も色んなバンドが紹介されていた。

改めてロックのジャンルだけでも様々なものがあると思いき知らされる。しかも紹介されているバンドはみんな人気なだけあってレベルも高い。こんなのが未確認ライオットに出てくるのなら覚悟はしておいた方がよさそうだ。

「えーと、次のバンドはつと……あー」

「どしたの?」

「……いや、新宿FOLLYで活躍中のバンドって書いてるんで、きくり姐さんが拠点にしてるところだなあって思っただけです」

「そういえばそうだね。何々? あ、『SIDEROS』って何か聞いた事あるかも。確かメタルバンドだよね!」

「ですね」

危ない危ない。危うくヨヨさんに反応してしまうところだった。ネットの記事に写真載ってるってやつば普通に凄いなんだなあの人。

……あれ、でも何で俺虹夏さん達に気付かれないようにしたんだろ。別にやましい事

ある訳でもないし隠す必要もなかったはずだけど。いや色々詰められそうで面倒くさそうってのはあるが。

そういうやヨヨさんは結束バンド、特に後藤さんに対してきくり姐さん関連の事があって敵視してるんだっただか。

俺の誤解は解いたけどその辺はまだ何も解決してないもんな。うん、やっぱもう少し黙っておこう。昨日の事もあつたし面倒事はしばらく無しにしておきたい。

イスに座ってPCを操作しているのは俺だけで他のみんなは左右や後ろから立ったまま覗き込んでいる形なので、左にいる虹夏さんが妙に近い距離で密着してきながら画像に写っているツインテールの女の子を指差した。

「このギターボーカルの大槻ヨヨコって子がリーダーみたいだね。前に新宿FOLTに行つた時見かけたような気がするけど……」

「いましたよ。主に俺と後藤さんをめっちゃ睨んでました」

「ヒイツ!? や、やっぱりあの人なんだ……っ!」

何で今いないのに驚いてんだ。

「ふうん、結成して一年足らずでワンマンできるほどの人気なんだ」

「まとめサイトには活動自体は三年前からしてるけどメンバーをクビにしまくってて現メンバーでは一年目らしいって書いてる」

「暴君じゃん」

「それまとめサイトなんで多分デマですよ。あと現メンバーといつてもこの画像に写ってる人達は前のメンバーだから、今のメンバーはまた違う人達ですわね」

ヨヨさんの名誉のために一応軽いフォローだけ入れたいやろう。

クビにしまくってるというかヨヨさんのコミュ不足のせいでみんな早々に辞めてってるのが事実だし。……いやそっちの理由も大概だな。

「あれ？ 何で優人くんがそんなこと知ってるの？ この記事には書いてないよね？」

「おっふ」

やっべ、咄嗟にフォロー入れちまったせいでなんか変に勘繰られそうになってんだだけど。

この前ロインでヨヨさんから新しいメンバーが見つかったって連絡と写真が送られてきたから俺だけ知ってるの忘れてた……。

俺のアドバイス通りなのかは分からないが、ロインで聞いたところによるとみんなヨヨさんより一つ年下らしい。つまりは俺と同一年の高校一年生だ。

なのに演奏技術も高くヨヨさんの気持ちを理解してくれるメンバーのため、今のところは上手くやれているのだとか。

話を聞いただけの俺にそこまで報告してこなくてもいいとは思うけど、ロインを無視したら無視したでうるさそうだからほとんど惰性で会話は今も続いている。

というか俺がトークを打ち切るためのスタンプを送っても普通に送ってくる辺り、やっぱコミュ下手だわあの人。話題もないのに一日一回必ず今日の天気に関して送ってくるの何なんだろう。天気デツキか？

つと、今はそんなことよりどう切り抜けるかを考えなくてはいけない。

ヨヨさんと知り合いなのを隠しつつ、みんなに納得してもらえる言い訳は……、

「あれですよ。俺もサポート役として役に立つために色々調べてたらたまたまこのバンドの記事を見たので知ってるんです」

「あ、そうなんだあ。やっぱメンバーとつかえひつかえしてるんだね」

「ですなあ」

すまんヨヨさん、余計なフォロー入れたら墓穴掘りそうだからしばらく暴君扱いさせといてくれ。

変に突っつかれる前に他の話題を提供するため、俺は動画サイトを聞く。

「せっかくだしシデロスの動画も見ておきましょうか。拠点は同じでもきくり姐さんのバンドとはどう違った雰囲気のライブしてるかも興味ありますし」

そんな訳で一番上にあつた動画を再生してみると、

「おお、やっぱり人気あるバンドだと観客の入りも違うね。それにメタルだから激しくてガンガンノれちゃうかも」

「しかもみんな演奏技術が高い。人気あるのも頷ける。優人、このバンドのライブ映像何個か再生してって」

「はー」

お気に召したのかただ同じバンドマンとして気になるところがあるのか、リョウさんの言う通り俺はシデロスのライブ映像をいくつか再生していった。

そしてそれを見ていく中で、みんなが薄々思っていた事を喜多さんが言ったのだ。

「というか高確率でライブ映像の最前に映り込んでる廣井さん邪魔すぎませんか？」

「喜多さん……せっかくみんな思っても口にしなかったのに……」

「うん、FOLTでは絶対ライブしたくないね」

最前列で酒飲みながら「もつと気合い入れてけ〜！」とか言われるのマジで邪魔だしかねえな。

うちだったら速攻で店長につまみ出されるぞ。何なら俺も手伝うまでである。出禁レベルだもんこれ。FOLTでしか許されないだろ。

「けどシデロスのレベルが高いのは事実だよ。当面はこの人達があたし達の目標って事になるね。でもこっちは曲も知名度も圧倒的に足りない……」

「そのために新曲作りに励むんでしょ。気圧されてる場合じゃないですよ虹夏さん」

「……うん、分かってる。最低でもメ切までにあと一曲は作ってミニアルバムとMVを作るのが目標。だからみんな、次は最高の一曲を作ろう！そしてその曲をデモ審査に送る！ぼっちちゃん、リヨウ、それでいいかな」

虹夏さんと同じように俺も二人を見る。

その表情からはやる気も感じられたが、他に何かを隠してるようにも見えた。

「あっはい、頑張ります……」

「……まあがんばるわ」

次の新曲の出来でデモ審査が通るかどうかが決まると言っているようなもの。

そりやプレッシャーもかかる訳だ。それだけ重要な事だと二人も分かっているから先に重圧が勝ってしまうのも無理はない。

「あつりヨウ先輩どうかしました……？」

「……ん？ ああごめん、何でもない」

そんでそういう変化にいち早く気付いて自分そつちのけに相手を気遣えるのが後藤さんである。

こういう時だけは鋭いのが彼女の美点か。メンバー間での支え合いも大事だからこそ、俺も自分の出る幕は弁えないとな。出しゃばりすぎても良い影響になるとは限らないのだ。

「ぼっち、作詞作曲者には印税が入るんだぜ。タワマン住めるくらいの凄いの作ろうぜえ」

「あつはい……」

「生々しい話に持ってくんじゃないよ」

前言撤回。ブレーキ役は常にないとダメだ。いやツツコミ役と言った方が正しいか。

リヨウさん、いくらプレッシャーを誤魔化すとはいえ後藤さんを変な方向性に道連れにするのはおよしなさい。教育に悪いので。

「あたしはジャケット描くよ！ 映像の編集は……優人くんお願いできる？」

「了解です」

「私は広報します！ トウイッターとかイソスタの！」

「喜多さん、俺も手伝うから広報はトウイッターとイソスタ二人で分けよう。イソスタは俺からつきしだから喜多さんに任せる。トウイッターは俺も大体把握してるから任せてほしい」

「了解したわ！ 二人の共同作業ね！」

「それはちよつと違うかな」

どちらかという分担作業寄りじゃね。

喜多さんは最近たまにぶっ飛んだこと言い出すから後藤さんとかリヨウさんのアホさに釣られてきてんじやねえかなって思う。普通に懸念事項である。

「動画といえば店長前にスマホでみんなのライブ撮ってませんでしたっけ？」

「おいこらやめろ！」

と、ここでPAさんから思わぬパスが飛んできた。

そういうやなんかこつそりスマホ構えてた時あつたな。俺はドリンクコーナーから見てたから直接画面は見えてなかったけど、虹夏さんもいるし結束バンドを記録してくれてたのか？

「え、そうなのお姉ちゃん？ でもなんで？」

「え？ ……いやあ、その、ライブのほら、あの、あれ……あれだよ、光……そうっ、照明がイルミネーションみたいで綺麗だなんて……」

「苦しすぎるー！」

……ほーん？ これは何か隠してますねえ？

「虹夏さん、ホールド」

「あいよー！」

「あああああああああやめろおおおおおおおッ!!」

俺がやるとセクハラとか言われそうだしここは虹夏さんに任せておく。

さてさて、スマホを拝借っど。

「ふむ、指紋認証ロックか。ダメですよ店長、音声認証と指紋認証はあらゆる生体認証の中でも超ガバガバの部類なんです。指紋なんて本人がいなくても日々生活してる圈内ならそこら中にべたべた残ってる指紋を採取して型取るだけでいいし、音声はここ最近のレコーダーだと簡単に録音したもので突破される恐れがあるんですから」

「……何で優人くんそんなこと知ってるの。怖いんだけど」

「アニメとかドラマ見ると変な知識身に付く事って結構あるですよ。どこまでが正確なのかは分かりませんがね」

とはいえ本人が目の前にいるので拘束中の店長の指でロックを解除。

スマホとPCを繋いで動画をPCに送ってから再生ボタンを押してみる。

その中身はというと、

「後藤さんばっかじゃねえか」

確かに結束バンドのライブ映像ではあるが、四人の中でも後藤さんだけで五割くらい映像を占めている。

ほんと後藤さん気に入ってたんだなこの人。そりゃ喚き散らかしながら止めようとすするのも納得だわ。にしてもそんな店長をしつかりホールドしてる虹夏さんの力も強すぎじゃないかな。ドラムってそんなに腕の力強くないの？

「そつそれは鑑しよ……監視だ！」

「まだ目つけられてた……」

あまりにも見苦しい言い訳を真に受けて後藤さんの魂が口から抜けていた。

普通なら好意的な解釈に落ち着くはずなんだがそこはさすがの後藤さん。被虐的思考ならお任せあれである。

「本当にひとりちゃんばつかですな」

「な、何かあった時の記録用にな……」

「何のだよ」

鑑賞用ですか。鑑賞用ですな。鑑賞用だろ。

映像を見ていくと確かに後藤さんばかりではあるが、一応他のメンバーもちやんと映っている。

しかもこつそり撮ってたとはいえちゃんとライブ映像としても使えるようなカメラワークだったり各メンバーのアップなども撮影されている辺り、さすがは元バンドマンか。どこことなく拘りを感じる。

これなら上手く編集すれば普通に動画とかにも使えるそうだな。

「ちようどいいや。虹夏さん、このライブ映像を編集して動画サイトに投稿しましょう。ちゃんとした撮影は次からやるとして、せっかく映像があるなら使わない手はないでしょ。これなら知名度アップにも繋がると思います」

「お、いいね〜！ そんじやさつそくお願いしようかな！」
「優人君頼もしいわ！」

「元々ギターヒーローを手伝うために編集作業の勉強してたのがここで役立てられるなら本望だよ。まあ任せてくれ」

つつても今回の映像はほとんど後藤さんと、あとは全体の様子に各メンバーのアップだけだから簡単な編集で良さそうかな。

こういう映像ならばシンプルな方がライブを見る人にとつても見やすいのだ。変に凝った編集はバンドと音楽を見に来た人の目に留まりやすいかもしれないが、あくまで俺達が見てほしいのは結束バンドだ。最初の動画はありのままでいこう。

編集ソフトを起動して動画を取り込み、音声はそのまま流しながら映像だけを上手く切り取ったりアップにしつつライブ映像風のMVっぽくしていく。

よし、これなら結構すぐ終わりそうだな。

「あつゆうくん、私は顔見えてないカットオンリーで……」

「さすがに最初の動画だし紹介も兼ねてるから全部カットはできないぞ。大丈夫だ、元々俯きがちだし照明も相まってハッキリ顔が映ってる訳じゃないから」

店長のせいで後藤さんばつか映されてるから、そこは他の映像と合わせつつバランスを……、

「ねえ優人君、私の顔って編集できる？ 加工アプリに慣れてるから何か素の顔って恥ずかしいのよね。ライブ中は汗とかかいちゃうし。上手く可愛い感じにできないかしら？」

「別にんなことしなくても喜多さんは素のままでも可愛いんだしそこまで気にする必要もないだろ。それにバンドマンにとってライブ中の汗は一番の宝石だぞ。むしろどんどん見せてけ」

「かわっ……!!? そ、そう……ならそのままでも大丈夫かなあ〜なんて……あつ、じゃあその顔アップにして！ 照明で汗と一緒に私が一番輝いてるとこ！」

まあ一番目立つギターボーカルだから多少のドアップくらいは構わないか。
ボーカルの人ってどこのライブやインタビューでも一番映像に映るもんな。

「優人くん優人くんっ、普段後ろで地味に頑張ってるドラムのあたしが映ってるのもうちよっとだけアップにしてくんない？　なんかこう見るとほんとドラムって顔映んないだなんてなるからさ、顔上げて画角に入ってるここはあたし多めでね！」

「虹夏さんのご要望とあらば断わる理由なんてありませんぜ」

そうだよな。ドラムって客側からしたらほとんど顔見えないもん。しかもライブハウスとかだとモニターもないからマジで顔が見えない。

であればせめて天使の尊顔が映ってるそこくらいは目立たせてあげようじゃないか。それが信徒の務めだろう清水優人。

「優人、そもそもベースイントロなんだから私の編集から始めてよ。何事も最初が肝心でしょ。あと私の場合は顔よりも手元アップで。この手捌きで視聴者をベースの沼に引きずり下ろす」

「はいはい、じゃあイントロ手元からの徐々に顔に上がって全体にいくようにしますよ。それでいいでしょ」

全員の要望を入れつつそれっぽく編集していくが、その間にもわがまま姫達の声が左右から俺の耳に響き渡っていく。

三人を強制的に掃除させに行った虹夏さんが俺の元に戻ってきた。

そしてイスを隣に置いて当然のように俺の横へ座ってくる。まあ虹夏さんなら最初の要求だけで何も言つてこないから全然いいんだけど。

両肘をテーブルにつき両手に顎を乗せてニコニコ笑顔でこちらを覗き込んできた。

え、何この可愛い生き物。頭の上のドリトスもピョンピョン左右に動いてるんだけど。あ、アホ毛だわあれ。可愛いから何でもいいや。

「ねえ優人くん」

「どうしました？」

「あたし、みんなのこと注意したよね？」

「？　そうですね。さすがにうるさかったんでありがたかったですよ。これで集中できそうです」

「それなら良かった」

にへらと笑う虹夏さん。

どうしよう、可愛すぎて逆に集中できなくなるかもしれない。よく顔に出てないな俺。もしかしたらポーカークラフェイスのプロになれるんじゃないか。

「でね、あたし今ポイント稼いだじゃん？」

「はい。……ん？ え？ ポイント……？」

最初普通に流しちゃったけどポイントって何。

うちにそんな制度あったっけ。知らない内に誰か作った？ てか何のポイントなの？

「ということで優人くん」

「……なんででしょう」

そして目の前の天使は言った。

「ご褒美としてあたしのカットをもっと多くしてくれたら嬉しいな！」

「……」

この天使、打算的すぎない？ うーん、許す！

結束バンドが結束する時はまだまだ遠そうだと思う俺であった。

70. ライブのためにできる事

12月。

月が進むのは早いもので、もう今年最後の一カ月に入った。

確かライブ映像を完成させたのが11月17日だから、割と結構だったと言える。

結局あれから自分達の投稿したライブ映像を見た後藤さん達の反応はといえば、微妙の一言だった。

演奏している本人達からすれば思っていた以上に衝撃だったらしく、直前まで他の人気バンドの曲を見ていたせいもあってか客観的に見ると全体のレベルが低いのだと言う。

最初から聴いていた俺は彼女達の成長を知っているからそこまで酷いとまでは思わなかったが、まさにそのせいで感覚がズレ違和感も少なく感じてしまったのかも知れない。

ただ、あの日投稿した動画を見たのは間違ひなく正解だった。

4月のメ切までの間、各々の課題が見えたからだ。

後藤さんなら単純に場数を踏んで慣れる事。ギターヒーローと知られた以上、求められる技術も高くなってくるからだ。あとはペースに振り回されすぎないようにするの
も大事か。

あとは虹夏さんも喜多さんもリョウさんも、自分の課題を見つけたようでこれまでの練習にも熱が入っていた。

そしてそれは俺もだ。

サポート役として何ができるか。まずはもつと音楽や機材に関しての知識を身に着け、バンド全体のバランスを聞き分けられるようになるまで耳を肥えさせる事。そうすることで練習の場においても客観的に見られる俺がみんなにアドバイスできる事だつてあるかもしれないと考えた。

他にはSNSなどで使えそうな宣伝の仕方や動画撮影に良さそうな機材を可能な範囲で揃えた。

あとはプロデュース力だが……これに関してはまだ勉強中だ。今はできる事をやり尽くしていくしかないだろう。それに俺達の戦いはまだ始まったばかりなんだ。4月まで時間も猶予もあるから、その都度着実に成長していけばいい。

「すっかりクリスマスモードね〜」

「あっはい」

隣を歩く喜多さんと後藤さんが何やら話している。

視線に釣られて俺も右方面を見ると、商店街の通りにクリスマスツリーが置かれていた。

いつの間に置いてたんだあれ。ここ最近は歩いてる途中も結束バンドの事ばかり考えてて全然周りの景色見てなかったわ。

12月ともなればすっかり寒さで肌が凍るんじゃないかと思ってしまうほど冷気がそこらじゅうを支配している。そんな寒さを遮断するコツは体を動かす事の他にこういうのがある。

集中だ。正確には思考力を高めると言った方が正しいか。

考え事に集中していれば寒さも暑さもあまり気にしなくなるといふものだ。逆にそれで集中できない人もいるみたいだが、俺は前者である。

結束バンドの事で最近では考え事ばかりしていたおかげであまり気にしていなかったけど、今ってこんなに寒いのか？

雑談始めちゃった辺りから空気がくっつき冷たいんだが。よく平気でいられたな昨日

までの俺。心頭滅却すれば何とやらってか。

一応制服の上にコートとマフラーをしているが、寒いものは寒いのである。
ええい、こうなったら最終手段だ。

「後藤さん、もつと近う寄れ。湯たんぽじゃ。お主を湯たんぽ代わりにするのじゃ」

「えっあつうん」

手招きすると同じくコートにマフラーのピンク少女が俺のすぐ横にくっついてきた。

……あれ、ちよつと思つてたんと違う。俺の予想ではいつも通り背中にくっついてきて暖をとるつもりだったのに、横に來られてはあまり意味がない……事もない？ やっぱ人と人って密着すれば案外寒さもマシになるのかね。やけに腕にくっついてきた後藤さん側があつたかい気がする。

「……」

「……え？ ひやつ」

「ああ、どうりであつたかいと思つたらカイロか」

一部分だけに熱が集中していて怪しいと思つていたので、後藤さんのコートのポケットに手をつ込むとカイロが入っていた。

なるほど、直前までポツケに手を入れて手袋ごと温めてたから後藤さんの手も温かいのね。さすがが去年の冬も俺の湯たんぼ代わりになってただけあるな。ちゃんと俺の温め方を心得ているじゃないか。優秀優秀。

「優人君、いったいひとりちゃんに何させてるの?」

「何ってそりや……後藤さん説明して」

「えっわ、私……!?!」

だってなんか喜多さんすげえにつこり笑顔でここへ来るかぜしてきてるんだもん。

寒さに弱い清水さんにとつてはこうかばつぐんですの事よ。あとちよつと怖い。最近の喜多さん少し圧が強いような気がする。

「あつえつと……ゆうくんは寒がりなので、この時期になつたらいつも体温高めの私がくつついて……ゆうくんを温めてあげるのが日常なんです……これしか私は役に立てないから……」

「……優人君は卵か何かなの?」

「人を勝手に卵生扱いすんじゃないねえ」

「これ以上どう産まれろってんだ。普通に生まれ変わるだけですよそれ。」

もしそうなら俺も推しの子になりたいです！ あわよくば好きなアニメキャラの子供に生まれ変わりたいです！ そんなもって特別な才能受け継いじゃうやつ！ 無理かな!? 無理だな!!

と、ここで俺のスマホからロインの通知音が鳴った。

後藤さんと喜多さんのと同時に鳴ったという事は、結束バンドのグループロインからか。

「ん、虹夏さんからだな」

一番早く気付いた俺が代表でスマホを取り出し画面を開く。

そこにはこう書かれていた。

「何々……12月24日、新宿FOLTで行われるSICK HACKのワンマンライブに結束バンドがゲスト出演しないかきくり姐さんから誘われたって……え、マジ? きくり姐さん直々に?」

「凄いいじゃない! 私達の知名度を上げるチャンスにもなるわね!」

いや、そうかもしれないけどさ……あなた達先月FOLTではライブしたくないって言うってませんか?!

最前列でうるさいきくり姐さんも今回はライブに出る方だから別にいいのかな。決定権は虹夏さん達にあるし出ると決めたなら何も言わないけど。

「詳しい話はスターリーで聞こう。あとは明日のライブの打ち合わせも忘れずにな」

「ええ！」

「うっ……別の箱でライブ……」

バイブレーションモードになってしまった後藤さんのせいにくっつかれてる俺まで震えてきたんだけどやめてくんないかな。

湯たんぽにそんな機能はいらんぞ。

「あ、おはよーみんな。ロイン見てくれた？」

「おはようございませす。見ましたよ、きくり姐さんのライブにゲスト出演誘われたって出るんですか？」

「うん、そのことも含めて今日は軽い練習と打ち合わせにしとこうかなって」
「分かりました」

テーブルの側まで移動するとリョウさんが一人でペンを片手に考え込んでいた。

曲の構想が浮かんでこないって言ってたけど、あの調子だとまだ難航してるみたいだな。テスト勉強の時みたいに家でしか集中できないはずなのに、ここでも頭を捻っているのは相当だ。

作曲に関しては俺も完全に無知もいとこだし、下手なこと言って混乱させてしまうのも本意ではないから何もできないのが歯痒い。

×切はまだだから信じて待つておくしかできないか。

「おう、何だか優人くんもギター背負ってるのが様になってきたねえ」

「茶化さんでください。そういうのはもう学校のヤツらに散々言われたんで勘弁つす」

「茶化したつもりなのに……」

背負っていたギターケースを降ろして壁際に置く。

喜多さんから一緒に練習しようと言はれ……せがまれた数日後くらいから俺はギターを持って登校する事が多くなった。

放課後の練習に俺も混ざり、メインの邪魔にならない程度に技術を身に着ける日々を

送っているのだ。

そしてギターを持って学校に行くという事は、クラスのバカ共（主に男子）に色々からかわれたり喜多さんがうつかり一緒に練習するとか言うもんだからまた地獄の鬼ごっこが始まったりと大変であった。いやほんとマジで。

「聞いてくださいよ伊地知先輩！ 優人君つてば始めてまだ三ヶ月くらいなのにもう結構上手いんですよ！ 私追い抜かれそうで怖いです！」

「始めて三ヶ月くらいでギターボーカル務めた喜多さんが言う事か？」
始めてみて分かったけど割かし喜多さんも上達速度バケモンだと思う。

まあ、俺達が上手くなるのが早い理由には少なからず後藤さんの教え方が上手いってのもあるだろう。後藤さんは言葉をめちやくちや選ぶタイプだから、その分複雑な言葉も少なく簡略化された説明で分かりやすいからかもしれない。

「あつうへへえ……」

「何笑つてんだ？」

「な、何だかゆうくんに褒められたような気がして……」

「え、こわっ」

口に出してないのに何で分かったんだよ怖えよ。怖い。あと怖い。

「よし、じゃあ雑談もこれくらいにして打ち合わせから始めよつか。ほら、リヨウも一旦ノート仕舞って」

リーダーの言葉によつてみんなが席につく。

「ではでは第……え、何回かの結束バンドミーティングを始めます」

何回か忘れたならもう言わなくてもよくないですかね。

「さつそくだけど今日廣井さんから12月24日、クリスマスライブだね。新宿FOLTでやるワンマンライブのゲストで私達に出てくれないかってお誘いを頂きました」

「さつきの反応を聞いた限り、出るんですよね？」

「うん、廣井さんはあんなんでも新宿じゃ人気のバンドだつてこの前のライブで分かったしね。お客さんも前と同じくらい入るなら結束バンドの知名度も上がりそうだし、良いたイミングだと思うの。ちなみに優人くんはどう思う？」

「俺は賛成です。こんな絶好の機会逃す訳にはいかないでしょうよ。ただ……」

「ただ……？」

俺はあらかじめスマホで開いていた画面をみんなが見やすいようにテーブルに置く。

「……新宿FOLTの公式サイト?」

「そこに書いてあったお知らせの部分です。その日、本来予定していた前座のバンドの2組のうち1組が急遽出られなくなっちゃって書いてますよね。おそらくその空いた枠を埋めるために結束バンドが誘われたんだと思います。きくり姐さんからのロイン、多分ですけどその日にゲスト出演しないかとだけしか送られてきてないんじゃないですか?」

「おお、正解」

「あの人の事だから絶対言葉足らずだと思って調べて正解でした。突然送ってきたって事は、酔っぱらってたか寝ぼけて送ってきた可能性も考慮すべきですね。きくり姐さんならやりかねん」

「確かに……」

シラフの時あんのかなあの人。

あつたらむしろ見てみたい。俺の予測としてはシラフ時は意外と大人しい説を唱えたい。だから酒飲んでブーストしてみたい感じがとかなりそう。……くそ厄介だな。

「でも出るって決めたって事はきくり姐さんにロインの返事したんですよ？」

「ああ、うん。嬉しくてその場ですぐ返事しちゃったよ」

「むしろ好都合です。それなら万が一きくり姐さんから誤送信だって断りの連絡が来てもロインのメッセージを材料にして逃げ場を無くせる。あの人アホだから少し脅せばすぐ手のひら返してくるでしょうし」

「優人君ってたまにえげつないわよね……」

「結束バンドのためなら何でもするって決めてるからな。それに例え寝ぼけてたとしてもわざわざ虹夏さんのロインにメッセージ送ったんだ。あんなこと言った手前だけど、寝ぼけてなくても結束バンドを誘ってきた可能性は十分にあると考えていいと思う」

「……うん、そうだよね！ あたし達と廣井さんの仲だし！」

虹夏さん結構きくり姐さんに容赦ないことばっか言ってたような気がするんですが……。

いったいどの口が言ってるんだろう。ああ、天使の口か。それなら許せるぞおい!!
おつといかん、勝手に天使に惑わされてる場合じゃない。

「ですが、これを忘れてはいけません」

「何を？」

「結束バンドが元からゲストとして誘われたんじゃないくて、枠が空いたから誘われたって事を」

「っ」

そう、実力が認められているならば最初から誘われているはずなのだ。たとえ拠点が違っていたとしても。

簡潔に言ってしまうえばまだ結束バンドの実力が認められていないという事になる。普段から酔っぱらっているあの人が、いざ音楽の事になるとふとした時に真面目になるのを俺は知っている。

だからこそ、今のこの空いた枠を埋めるために誘われたという事実が結構刺さる。

S I C K H A C K程のバンドなら他に知り合いのバンドだっているだろうし、ただ予定が合わなかったか、もしくは消去法で結束バンドが選ばれたか。

どちらにしても一番手ではなく二番手であろうやく選ばれる程度の存在という事だ。

虹夏さん達自身も自分の実力はこの前客観的に見て思い知ったばかりだから、余計にそう思ってしまうかもしれない。

しかも。

「それに前座のバンドが2組。結束バンドの他に出来るもう一つのバンドは……今みんな

が目標にしてるシデロスです」

「……まあ、拠点だし人気もあるからそうだよねえ」

「プレッシャー凄そうね……」

「……」

「あ、ああ、あああああつ、ま、またあの人に睨まれる……!?!」

若干一名違う意味で怯えてるが放っておこう。

むしろ彼女だけ通常状態で安心した。怖がるところそこなんだ。

俺としてはとうとう結束バンドのみんなとヨヨさんが邂逅してしまう事に結構穏やかじゃないんだが。

ヨヨさんも結束バンドを敵視してるところあるからなあ。よくロインしてるから勘違いしがちだけど、ヨヨさんは後藤さん達と話したことないし面識もないに等しいからどんな展開になるか予想もつかない。

あの人のコミュ症っぷりと話し方は誤解与えかねないし、もし何か起きそうだったら全力でフォローしないと……。

特に後藤さんとか下手するとその場で物理的に弾けるかもしれんしな。変な化学反応が起こる気しかしねえ。

「箱的にも知名度もこっちは圧倒的アウエーですもんね……」

「でも出る価値は十分にある。実力が足りないなんてのはもう知ってるんだ。そのために今も必死に練習して経験積もうとしてるんだろ。なら怯えてる場合じゃない。弱さを認めた上で強くなろうとする気持ちがありや怖いもんなんてねえよ」

何もみんなを怖がらせるためにこんなことを言ったんじゃない。

自分達の弱さを知って、認めて、這い上がるために言ったのだ。もちろん、俺自身も。その意味を汲み取ってくれたのか、いの一席に席を立ちあがったのは虹夏さんだった。

「そうだね！　むしろ逆境こそ超えてのロックバンドだよ！　未確認ライオットだってそうだし、バンドを続けていく以上はこれからもこういう逆境ばかりなのは確定してるようなもんだしね。そのための前哨戦だと思ってる張ろう！」

「その意気です。みんなも以前投稿した動画よりも確実に上手くなってるので間違いない成長してますよ。クリスマスライブのライブを成功させるためにも、まずは明日のライブで勢いつけましょう。今回は俺は撮影メインなのでちゃんとは見れないですけど」

「大丈夫、その代わりにあたし達の勇姿をしっかりとカメラに収めてね！」

「了解です。カメラ諸々は今日ここに置いていきますね」

「じゃあこのまま明日のライブの打ち合わせに入ろっか！」

こうして、俺達のミーティングはこの後も滞りなく進み、練習も順調なまま終わる事ができた。

翌日。

今日は結束バンドのライブの日だ。

ざっと見るに客は20人前後。

一号さん二号さんは確定で来るから20人超えは確定かな。文化祭ライブがあつてから少しずつだが客足も増えてきている。

順調、とまでいかないにしても一歩ずつ進んでいるのは確かだ。

それに今日からは本格的に俺も撮影するため力を入れなくてはならない。まずは準備を進めるか。

と、三脚とカメラを持ってフロアの後ろの方に移動すると、

「あつ優人君やつほく！ 今日のライブも楽しみにしてるよ〜！」

「お、一号さん、二号さんもどうもです」

もはやフアンの人というか普通に友人レベルに仲良くなった一号さんと二号さんがやってきた。

「ゆうと君、何だか今日は一段と気合い入ってるね？」

「もちろん。本格的に力入れてから一発目のライブですからね。フアンをもっと増やして知名度を上げるためにも、まずはここでバッチリ決めて良い再スタート切ってみせませよ」

「おお、いいね〜。でねでねっ、そんな優人君に朗報でえ〜す！」

「朗報？」

何だろう。一号さん達もちよつと嬉しそうにしてる。

分からん、全然予想もつかない。

何かあつたつげと思っていると、二人してニコニコしながら隣り合っていた一号さん達が間をあけた。

まるで二人で背後の何かを隠していたように見えたその正体が判明する。

「じゃじゃーん！ 何と新しいファンの子連れてきました〜！」

「ちようどそこで会ったんだあ」

そう言った二人にいきなり前に出された人は、突然の事にあたふたしていた。

茶髪に眼鏡をかけ、マフラーにコートという特徴的な特徴もない少女。いかにもザ・普通の見た目であった。

「あつえつと……」

何だかどこぞのピンクから何万回も聞いたどもり台詞と共に若干頬を赤らめながら少女がこちらを見る。

一号さん達は新しいファンの子だと言っていた。

ならば結束バンドの手伝い役として俺も相応の態度で接しないと失礼にあたる。よって。

「ひ、久しぶり」

「どうも初めまして、結束バンドのサポート役をしています。清水優人です。今日はスターリーでのライブ、楽しんでいってくださいいね！」

「づうアツ!？」

可愛らしい文学系少女が何やら変な声を出した。

71. 初対面の人と思つて喋つてたら知り合いだった時は超恥ずかしい

最初に言つておく。

初対面の人に対してはできるだけ丁寧に接するのが俺の人との関わり方だ。といふか一般的に大体の人がそうだろうと思う。

丁寧な対応をされれば余程のDMかイカレた類人猿以外は気分も良くなるし、それを返されればこちらも気持ちがいい。

だから相手がやべーヤツじゃない限り俺は初対面の人に失礼な対応はしない。今回だつて接客する立場としてもファンの人にもつと結束バンドを好きになつてもらえるよう、サポート役の自分の印象も上げておくべきだと判断したから笑顔で対応した。はずなんだが。

「あ、あああ、あああばばあああばば……」

目の前にいる眼鏡っ子少女が若干涙目になっておられた。

あれ、俺何か失礼なこと言ったっけ？ 対応としては間違っていないと思うんだけど。

「(は、初めましてって……？ 嘘……もしかして私……友達なのに気付かれていない……？ こいつなら変装してたって何だかんだ気付いてくれるって思ったのに……まさか知らないうちに私、嫌われるような事して無視されてるんじゃない？ 確かに普段から口調は強めになっちゃってるけど、いつもはロインだっけしてるし仲良くなれるつもりだったのに……うう……)」

なんか一人でぶつぶつ言っている。どうしよう、さすがに挨拶も返されないとはい思わなかった。

……ハッ!? そうか……この子の見た目は至って普通。しかも眼鏡っ娘で地味目の印象をしている事から察するに、おそらく人見知りかコミュニケーションを上手くとれない人なのかもしれない。

そうなると話は簡単。こちらら身近にレジ^Lエンドレア^Rの『絶・コミュ症／後藤ひとり』を所持してるんだ。

しかも周りにキャラが強い人しかいないせいでこういう普通の地味っ子女子とか逆にレア。ファンとして重宝しておきたい。コミュ症と決めつけるのは少々気が引ける

が、普段から人外承認欲求モンスターと接してる俺からすれば、この子の心を開く事もできるはずだ。

「あの、大丈夫ですか？ もしまだ前の方でライブが見づらいのであれば後ろの方で見
る事をオススメしますよ。客もまだ少ない分、例えば好きだとしても演者と目が合うと恥
ずかしい人も一定数はいますので、後方から全体の雰囲気を楽しむのもライブの醍醐味
だと思えますが、どうでしょうか？」

自分から来れない人にはこちらから歩み寄るのが定石だ。なるべく警戒心を与えず
に、何となくでも相手が求めていそうな情報と踏み込んでいい心の距離感を測りつつ
ノックをする。

それで相手がドアを開けてくれれば成功だ。

「ふぐうつ!？」

うん、どうやら失敗したらしい。眼鏡つ娘が両手を胸に当てくの字に折れ曲がった。
精神ダメージを与えてしまったようだ。

優しさは時に人を傷付けるとはよく言ったものですな。シャニP並のコミユ力と会
話術が欲しいぜまったく。

「あーもう優人君何してんのさ。君の言葉は女の子にとつては毒になる事多いんだからもっと自重しなきゃだよ。つつきー大丈夫？」

「いや普通のこと言っただけだと思っただけ……。え、俺接客側として普通の対応でしたよね二号さん？」

「ゆうと君、いつか刺されても知らないよ」

真顔で言うのやめてもらっていいですか二号さん。なんかよく分からないんですけどあなたがそう言うのと洒落にならないような気がしてくるんですよ。

ヤンデレの素質ありそうこの人。一見こういうふんわりした人ほど素質が隠れてたりするんだよ。俺知ってるよ、アニメで見たことあるから。誠死ね。

ついでに最近撮影の師匠である一号さん達の俺への対応が少し遠慮なくなってきたる件。

これは仲良くなれたというべきか、はたまた少しずつ嫌われていつているのか定かではない。男女の友情って成立する？ するよね？

「はあ……一号さん、とりあえずその人が本当に体調悪い訳でもなくただ人見知りなだけだったら側において色々教えてあげてください。一号さん達なら俺も信頼できるので。」

あ、できるだけ優しくですよ。こういう人には一気に詰め寄っても警戒されやすいから徐々に視線を合わせて諭すように話すんです」

「さすがひとりちゃんです慣れてるだけあるね……」

「(……あれ？ 清水優人、まさか本当にただ私に気付いてないだけ？ 口調からしてもわざと無視してるようには見えないし……それだけ私の変装が完璧すぎたって事……？ ふ、ふふんつ、さつすが私、変装の才能を持ち合わせていたなんて自分でも驚きだわっ)」

「つつきーちゃん？ ボソボソ喋ってるように見えたけど、本当に大丈夫？ 緊張してるの？！」

「えうあつ!? べ、別にそんなことない……大丈夫だから……」

「んん?」

「えっ……ちよっ」

さつきまでほとんど驚いた声しか聞かなかったから気付かなかったけど、今の眼鏡つ子の声、なんか聞き覚えのある声だったような……。

「んん……?」

「あつうっ……ち、近い……」

「……気のせいかな」

もしやと思ったがどうやら違うようだ。まあそうだよな。この人がヨヨさんな訳ないか。

あの人ならこんなしおらしい反応するはずないし、もし敵情視察ならライブ衣装ばかりし着て敵対心むき出してくるようなちよつと頭のネジが飛んでる人だもんな。

「はい優人君女の子の顔をそんな近くで覗き込まないの。君はひとりちゃんと普段から距離が近すぎて他の女子との距離感もたまにバグってる時あるから気を付けなね。気の強い人ならビンタされてもおかしくないよ今の」

「あつ、そーいやお客さんですもんね。すいません、少し聞き覚えのある声だったもので勘違いしてしまうところでした」

「え、あ、うん……」

一号さん達とは違ってこの人は初めてなんだから適切な距離を取らないとだよな。

俺とした事が、知り合いかと思って変に踏み込んでしまった。反省だ。

「じゃあ俺は撮影の準備するんで。あー一号師匠さん、カメラの設定だけどんなもんか見てもらっても大丈夫ですか？」

「おー任せなさい！ 師匠が見てあげちやうよく！」

こういう時ノリの良い一号さんは頼みやすくて助かるな。

いや実際師匠的存在だから間違つてはないけど。

三脚にカメラをセットし終えて色々設定したが、やはり自分より詳しい人がいるなら確認と助言は欲しいものだ。

こういう時変に渋つて質問しないと後々困つたりすることもあるからな。理解できそうなものは早めに取り込んでおきたい。

「うん、ホワイトバランスもフォーカスも設定合ってるね。明るさは照明によつて変わるからマニュアルじゃなくてオート……にもなってるか。ふんふん、さつすが私の弟子い！ 教えた事ちやんとできてるね〜！」

「いでつ、まあメモもしてるし一号さんの教え方も上手だからあだつ、こつちも助かつてまつ……ちよ、いたつ痛いって、何回も背中叩かないでくれませんか!？」

なーはつはつはつと笑う一号さん。仲良くなつてから知る。意外とこの人も遠慮がないことに。

二号さんが一号さんの首根っこを掴みながら眼鏡つ子と共に前の方に移動してくれたので、俺も自分の作業に専念する事にした。

カメラのセッティングはOK。アングルもステージメイン且つ観客も少し映る程度に収めている。

物販はさつき確認したから良いとして、大体こんなもんか。今日は店長にも撮影に専念していいと言われたからここから動かなくてもよさそうだな。

ライブももう始まるし、あとは演奏を見つつその都度カメラを確認するとしよう。そしてライブが始まる一分前。一応最後の確認として設定を見直していると、

「……」

「……ん？ あれ、どうしたんですか？ 一号さん達と前に行つたはずじゃ」

いつの間にか眼鏡っ子が俺の右隣にちよこんと立っていた。

「……貴方が後ろでライブ全体の雰囲気を楽しむのも良いって言うから……」

「ああ、なるほど……?」

にしても俺の隣に来る必要性はあるんでしょうか。一応スタッフみたいなものだから客からすれば近寄りが見たい存在のはずなんだけど。

というか距離近くね？ 30センチも開いてないんだが。めちゃくちゃ友達感覚の距離で居座るじゃん。

いや、もしかして位置の問題か？ 撮影するためにセンター陣取ってたけど、客なら真ん中で見たいと思う人もいるよな。

仕方ない、撮影は大事だが多少位置がズレても全体が映っていたら問題ないし少しズレるか。今の結束バンドにとって大事なのは新規ファン獲得と知名度拡大だし、ここでセンターを譲っておけば少なくとも悪印象は付かないだろう。

「前失礼します」

ということまで最前にいる客とカメラが被らないところがドリンクカウンター近くだったため、三脚を持って眼鏡っ子の前を通り過ぎる。

眼鏡っ子さんや、どうぞど真ん中で楽しんでいってくださいや。

パパッと移動して再び三脚を置いてアングル調整をする。

こんなもんか。思ったより違和感なさそうだ。それでもって時間がやってきた。フロアの照明が落ちて結束バンドの面々が出てくる。

喜多さんの簡単なMCからライブが始まった。撮影の方も問題なくできている。よし、これなら大丈夫そうだな。

それにしても。

「……」

「……」

何で眼鏡っ子さんはまた俺のすぐ左隣にいるんだろう。

センター譲ったよね？ 真ん中で見たかった訳じゃないの？ というか何で俺の隣

なの？ ライブ始まつちやったからもう移動できないんだけど。俺の移動した意味は

???

なんてことを言えるはずもなく、俺はただ眼鏡っ子との肩と肩の距離感約15センチの中で、その日のライブを最後まで見届ける事になった。

特にトラブルもなく無事に全てのライブが終了。

今回はあの野郎もいないのでライブが終わっても変に身構える必要もないのが精神的にとても楽だ。

そしてライブ終了後、結束バンドだけ恒例のちよつとしたファンとの交流会があった。主に一号さん達だけだ。

「みんな今日のリブも良かったよ〜！」

「二号さん達！ どうもありがとうございます〜！ お、優人くんはあたし達のライブ

「どうだった？」

「前回よりもさらに成長が感じられて見応えのあるライブになってましたよ。撮影もバツチリです。練習の成果がちゃんと出てる証拠ですね」

あれからみんな真剣に練習する日々も多くなり、明確に上達しているのが俺でも分かった。

演奏技術は間違いなく上がっている。まだ上で通じるレベルには達していないかもしれないが、伸びしろは十分にあるだろう。

これなら次の新曲のクオリティーも上がりそうだ。

そのためにはリョウさんに頑張ってもらわないとだけど。

「やっぱ客観的にそう言われると嬉しいものだね。……でき、優人くん」

「はい」

「隣の女性の人、どなた？」

「はい？」

何ともまあ良い笑顔で虹夏さんが言うもんだから反応に遅れた。

左を見るといつも通り後藤さんがいる。結束バンドパーカーを着てぴったりと俺の腕にくっついてる状態だ。別に室内だから湯たんぽ代わりにならなくていいのに。

でもって右を見る。

眼鏡っ子であった。

腕を掴まれてるとかではないが後藤さんに匹敵するくらいくっついてきていた。

小柄だから気付かなかった……。何で俺の側にくるんだこの人。一号さん達のところに行けばいいじゃん。どうして俺が虹夏さん達に冷たい目で見られなきやならんのだ。

「優人君、また？」

「何が!? 言つとくけど今回はマジで何も無いからね! 元はといえば一号さん達が連れてきた結束バンドの新しいファンですよこの人! 俺よりも虹夏さん達の方によっぽど興味ある人なんですって! つうか今回はつて何だよ別に誤解与えるような事これまで一切したことねえわ!」

「……ハッ!? 下手するとバレるかもしれないし帰ろうと思ってたのに気付いたらこいつの隣にいた……」

「こんなこと言ってるけど」

「なんでっ!! そうっ!! なるのっ!!」

頭どうしちゃったんだこの眼鏡っ子。もしかして普通な地味っ子枠じゃなくてこの人もやべーヤツ枠だったりするのか?

何でまともな人いないんだ俺の周りにはあ!!

「殺せえ! もう殺せよお!」

「どうしよう、優人くん自暴自棄になっちゃった」

「放っておきましょう。たまには軽率な行動を反省させないとですよ」

「これが結束バンドの日常なの……ウチとは大違いね……」

「あつゆ、ゆうくん、しつかりして……私はそんなゆうくんも応援してるから……」

「それより新しいリストバンド買ってくれた?」

「買いましたよ! 新色買うのはファンとして当然なので!」

「……は? そんなの売った記憶……おい山田ア!!」

「あ、怒りで優人くん元に戻った」

「何なのこのライブハウス……」

そこから一悶着あつて数分後。

「まあ、そういう感じで新規のファンらしいです。ですよね?」

「……えつとお」

「あれ、何か見たことある気が」

「うええ!? き、気のせいでは……?」

「ダメですよリヨウさん。この人は人見知りっぽいんであんまりジロジロ見るのはなしです。かわいいそうでしょ」

「(え、優しい……! 私に気付いてないってだけでこんな丁寧に扱ってくれるのこいつ……いつもはちよつとイジツてきたりするの……)」

何か下手に深掘りするとこの人も厄介そうな雰囲気出してたからちよつと怖いんだよなあ。

叩いたら何かしらの埃が出てきてもおかしくない。だってここにいるまともな人とか虹夏さん……は天使か。一号さんと二号さんくらいだぞ。この二人も最近怪しいけど。

そんな時だった。

「みんらあ〜!」

「やべーのが来た!」

妖怪サケカスキクリンがやってきた。

店長まだ出禁にしてなかったのか。してても勝手に入ってきそう感しかないが。

「今日のライブもよかったよ。あのくあへくくく4曲目のエモ曲!」

「絶対今来ただろ……。今日は3曲しかやってないですよサケカスキクリン」

「ありやくそうらつけく? てかサケカスキクリンってなに?」

「言い間違えです」

「あははくゆうきゆんもおバカだねく!」

「何すか。俺の名誉を毀損したいんですか。受けて立ちますよ」

「優人くんどーどー」

誰がふたごどりポケモンノーマル・ひこうタイプじゃい。

「あ、廣井さん新宿FOLTにゲストで呼んでくれてありがとうございます! 今たくさんライブしたかったから助かりました!」

「えくいいのいいの!」

「でもどうして私達を? 他にも知り合いのバンドとかいたんじゃ?」

「いやく何故か送信履歴に入ってたんだよねく。不思議なこともあるもんだく!」

「やつぱ酔っぱらって送信しただけかアンタ!? ほんともう……。マジでそういうとこだ

ぞく!」

「うへへく怒られちったく。でもシラフでも結束バンド呼んでたよく」

絶対嘘だろ。……いやこの人のバンド癖強すぎるから知り合いのバンドがいても断られそうなどこあるけど。

もはやため息しか出てこない。何だかんだきくり姐さんはいつでもたつてもきくり姐さんなのだ。俺達の想像なんて軽く超えてくる。そこに痺れない憧れない。

「やっぱり適当だったんじゃないですか……」

ふと隣からそんな声が聞こえた。

どこか、聞き覚えのある声が。

俺よりも先に反応したのは酔っぱらっていたきくり姐さんだ。

「え？　大槻ちゃん？」

「……あつえついやつ違います！」

「大槻、だと……？」

「……あ」

ぐぎぎ……と俺の首が眼鏡つ子の方へと向く。

すると、彼女もやつちまった感を出しながら俺を見ていた。それはもう冷や汗だらだらで。

おいおい、嘘だろ。
まさか……。

「なっ、やっちよ、近っ……!?!」

思わず眼鏡っ子に近づき両手でその眼鏡を取る。

「……………おおう」

いた。

見知った人がいた。

眼鏡の縁で分かりづらかったが確かに見覚えのある吊り目がちな瞳、普段よりも下で結んでいるツインテール、コミュ症特有のこれまでの態度。

よくよく考えてみれば今までそれっぽい要素は確かにあった。まさかそんなはずはないと自分の中で選択肢を外していたのだ。

つまり。

「ツ………そうです！ 私が大概ヨヨコ！」

「えっ誰!? 何で優人くんは四つん這いで倒れてんの!?!」

初対面だと思って丁寧に接していた人がおもつくそ知り合いだった時の気持ち
を3
0
字以内で述べよ。

72. タイプ違いコミュ症、スターリーに降臨の巻

「私が大槻ヨヨコ。どう、これで分かった？」

「シデロスのギターボーカルの人だ……でも、何でここに？」

服装が違って眼鏡をしてるだけでヨヨさんだと分からなかった俺は申し訳なさと恥ずかしさで轟沈。

そんな俺の目を覆い隠すように後藤さんと喜多さんが両手で背後から二重のだーれだホールドをしてくる。その間に変装(?)から着替え終わったヨヨさんがいつもの衣装姿になっていた。

え、まさかトイレに行くとかじゃなくて俺が目隠しされてるすぐ近くで着替えてたの？

正気か？

「私の変装が完璧すぎて貴方も気付かなかったようね。……何で気付かないのよ」「いや今までその衣装姿しか見てないのにそんな眼鏡っ子姿されると気付きませんで。

真逆のタイプじゃんそれ。もしかして普段はああいう恰好なんですか？」

「そうだけど」

「……ほお？」

うん、良い。ナイスギャップ。

衣装が派手な分、私服は地味目つてのが素晴らしいですね。俺のストライクゾーンど真ん中ですわ。後藤さんのギャップには劣るけど。

勝手にふんふん頷いてると、俺の肩を誰かがとんとんと叩いた。

何だ何だよ何ですか。今ギャップ萌えを堪能してたつての――、

「やっぱり知り合いだっただね、優人くん？」

「……………あの、弁護士

用意してもらっていいですか？」

「だーめ☆」

くうくダメかあ〜〜☆

「ちゃんと説明しなさい」

「ういつす……」

人は天使に勝てないのだった。

「とまあ、そんな感じでヨヨさんとは知り合いになったんです」

「初めてFOLT行つた時にそんな事があつたなんてねえ」

最近は正座にも慣れてきて足が痺れることもなくなった。嬉しい事なのか悲しい事なのか俺には判断がつかない。

これがほんとの正座に慣れたらつてね。

「だから優人君ライブ始まつても合流できなかったのね」

「そゆこと」

「大槻ちゃん私のライブでゆうきゆんナンパしてたの？ わーるいんだあ〜！」

「し、してませんよ!? 断じてそのような事はしてません！ ほら清水優人つ、貴方も何か言いなさい！」

「逆ナンつてこういう感じなんだって思いました」

「最初全力で逃げようとしてたくせによくそんなこと言えるわね!? あと知り合いじゃなくて友達でしょ！」

いやあ、ちよつと慌ててるヨヨさんが面白くてつい。
てか訂正するところそこのね。どっちもそんな変わらんしょ。

「まあ大槻さんと知り合った経緯は大体分かったよ。でもね」

「はい？」

「やつぱりあたし達の言った通り女の子絡みでいなくなってたんだね？」

……あ、やつべ。

「あの時はただ謝罪ばかりではぐらかされたけど、推測は間違ってたようだよ喜多ちゃん。どうする？ 優人くん、あたし達に？ ついてたんだって」

「え、いや、あの、虹夏さん？ それには一応事情がありまして……」

「埋めますか」

「どこに!? 主語がないから余計怖いんだけど!? ご、とうさんは無理か……リヨウさんヘルプー!」

「いくら？」

「冬休みの間三日分の昼食奢りで!」

「安い。一週間分」

マジかこいつ。

こいつマジか。

「ええい、じゃあそれで！」

「交渉成立。虹夏、郁代、今は優人の事は一旦置いて問題ハシデロスの方。何でここに来たのか聞かないといつまでたつても話が進まない」

「うっ……た、確かに……放置しとくのは失礼だよね」

「じゃあ優人君は後でですね」

おっとお？ もしかしてこれ俺助かってなくない？

ちよつと延命しただけで根本的な解決には全然なつてなくない？ なくなくない

？

「一週間分の昼食、ゲットだぜ」

「解決した訳じゃないから報酬はなしで」

「なん……だと……!?!」

一時的なその場凌ぎで依頼成功したなどと、その気になっていた山田の姿はお笑いだったぜ。

「それはそうとぼっちちゃんに分かるけど、何で大槻さんも優人くんの隣にずっといるの？」

「友達だから」

「来たはいいけど完全アウエーだし人も多いから友達のコいつの隣にいればとりあえず安心するし安全よねって言ってます」

「ちよつと何翻訳してるのよ！」

「当たってるんだ……」

伊達に後藤さんの翻訳家してないんで。

左右に後藤さんヨヨさんと挟まれている状態だ。これじゃ両手に花ではなく両手にコミュ症である。なんも嬉しくねえ。

「とりあえず本題に入りましょう。ヨヨさん、何で今日スターリーに来たんですか」

「多分結束バンドの空気感だといつまでたつても話が進みそうにないので俺からヨヨさんに振ることにした。」

「そ、それは……」

俺の目を見て一瞬躊躇いを見せたヨヨさん。

しかしそれを見越してか先に反応を示したのは酔っぱらい怪人キクリンであった。

「え、その感じだと大槻ちゃん、まだ私が結束バンドを誘ったの納得してない感じなのお？」

「……あー」

「そ、そうですっ！」

うん、やっぱりか。

基本的に人付き合いと慣れない場所が苦手なヨヨさんがわざわざここに来る時点で何か理由があるのは分かっていた。当然ポジティブではない方向でだ。

俺との関係はまあまあ良好というか普通に話せるくらいになったとしても、元々は結束バンドを敵対視していて特にきくり姐さん関連で後藤さんを快く思っていないのがヨヨさんである。

突然同じ日に結束バンドとステージに立つ事が分かって実力を確かめに来たのもあるのだろう。気に食わなければきくり姐さん本人に断りを入れるくらいに思っていたとしても不思議じゃない。

成長しているとはいえ実力はまだシデロスよりも劣っているのは自覚してるし、俺と

しては何とかヨヨさんを説得するくらいしかできないだろうから許してくれるとありがたんだけど……どうなるか。

だから結束バンドのみんなと会わせるのもまだ早いとか俺と知り合いなのをまだ黙っておきたかったんだけどなあ。

「演奏レベルもまだまだ私達に並んですらないのに……あつ、この前動画で見た時よりは全然成長してるけど……それでも姐さん達のゲストを務めるほどの力に達してないのは分かりますっ。……いや、まあ絶対ダメとかでは無いんですけど……」

何でできくり姐さんより隣にいる俺の方をチラチラ見るたびに優しめな訂正が入るんだろう。

そして何で後藤さんは無言のまま俺の腕をずっと掴んでるんだろう。湯たんぼ代わりはもういいって言ったよね。あ、言っていないか。心の中で言っただけだったわ。

それにしても、やはり語気は強くても根本的な優しさを隠し切れてないのがまたヨヨさんらしい。

似たような憎まれ口を叩かれようともあの女よりは何億倍もマシだな。むしろちよつと可愛げがあるくらいだ。反抗期のチワワだと思えば愛おしくなってくるレベル。

「うゝん、酔った勢いとはいえ私も結構考えてるけどなゝ」

ほんとかよ。

さつき何故か送信履歴に入ってたって言ってたじゃねえか。

「それとも何？ 大槻ちゃんは私の目が節穴だつて言いたいの？」

「そういう意味じゃ……うう……」

「ストツプきくり姐さん。何か見てられないんでからかうのはやめてあげてください」

ヨヨさん耐えられなくて俺の背中に隠れたじゃん。しかもそのせいで後藤さんパーソナルスペースにちよつと侵入されてめっちゃ慌てるじゃん。トウバンジャン。

確かにあんだけふざけてたくせにいきなりグルグル目のままあんなこと言われたら怖いよね。酔っぱらいだから突然何しでかすかも分かんないもんね。

「ありやりやく大槻ちゃん真面目で可愛いからついねゝ！」

「それはまあ、分からなくもないですけど」

うん、俺も少し分かる。

いや、めつつつつつつちや分かる。

「くくくつ！ も、もう今日は帰りますつ！」

「おっと」

バツと背中に隠れていたヨヨさんが勢いよく飛び出した。

「結束バンド！ 特に後藤ひとり！ つてちよつ、貴方そんな近い距離でずつとくつついてたの!?!」

ああ、俺を挟んでたから見えてなかったのね。

「何で貴方も少しは強引に振り解かないのよ！」

「まあこれが日常なんで」

「慣れすぎてる……!?!」

慣れつて怖いつすよね。

ワイトもそう思います。

「と、とにかくつ……私と姉さんのライブを台無しにするのだけは許さな……台無しにしないように頑張る事ね！」

捨て台詞優しいなおい。

だいぶ緩和されてたぞ今の。素でツンデレつちやうのほんと才能あると思います。店長とヨヨさんでツンデレ二大巨頭できちやうね。

そんなツンデレヨヨさんは急いで帰り支度を済まして出口の方へ向かっていった。そのまま帰るかと思いきや、彼女は最後の最後でこちらに振り向き、

「あつ、それと清水優人！ たまには私からじゃなくて貴方からもロインか通話かけてきなさいよ！ 私ぼっかりじゃ不公平でしょ！ 忘れたら承知しないわよ！」

最後にはた迷惑な台詞を吐いてツインテールコミュ症はスターリーから出ていった。捨て台詞としては完璧な置き土産だったな。さて、どうしたものか。

「いや、まあほら、友達と毎日ロインするくらいは別に普通でしょ。なつ、後藤さん？」
「わ、私は毎日直接話してるから別に何も……」

誰に対してのマウントだよ。

「いやあく大槻ちゃんに怒られたくないから適当な事言っちゃった！ みんな頑張つてね☆」

「廣井さんのせいでプレッシャーが凄い事に……」

そして虹夏さん達は虹夏さん達でライブの事で頭がいっぱいいっぱいな様子だった。よかった、また何か問い詰められそうと思って身構えてたけどどうやらお咎めはないらしい。そうだよ、異性といつても友達とロインしてるだけだからね。何もおかしい事なんてないんだ。俺の勝ち！

「とはいえ明確な目標は決まったんですし、まずはクリスマスイブのライブまで詰められる部分は詰めていきましよう。さつきヨヨさんも言ってた通り成長はしてるんですからまだまだ改善できる箇所はあるはずですよ」

「……うん、そうだねっ。お互い意見出し合って良い所と悪い所を確かめていこう！

喜多ちゃんもぼっちちゃんも臆せずどんどん言いたい事は言ってきてね！」

「はいっ！ 当日までにやれる事は全部やっていきましよう！」

「あっはい」

よし、最初はどうなる事かと思っていたが結果的に良い方向に風向きが向いたな。

あのぽいずん系女のせいで変に警戒しすぎてたようだ。ええい、俺の頭の中から消えろ反町隆史イ!! じゃないぽいずん♡やみイ!!

「とりあえず今日はライブ終わりだしもう解散にしよつか。明日また練習しながら完成度高めていこうっ」

「分かりました。じゃあ片づけも終わったんで俺達はこのまま帰りますね。おつか」

「あとは優人君をどこに埋めるかですなっ！」

「行くぞ後藤さん今こそ人間離れできる俺達の馬力を発揮する時だッ!! 俺に力をくれツインターボ! うおおおおおエンジン全開大噴射アッ!!」

「えっあつびやツツツ!?!」

「ほんとに人間離れした速さで逃げてった!?!」

「ぼっちの残像がまだここに残ってるくらい速さだった」

「……まあ明日もどうせ会いますしね」

12月24日。

クリスマスライブ。

新宿FOLT、SICK HACKワンマンライブ当日。

やあみんな、土の中って割かし温度は変わりにくいんだぜ。あれが地中熱ってやつだったんだな。

とまあそんなどうでもいい事はさておき。

バイトと練習を重ねていると日にちが進むのも早く、気付いたら学校は冬休みに入っていた。

世間はすっかりクリスマスモードに浮かれ、街中では至る所にイルミネーションが飾られている。外を歩いてるだけで不思議と定番のクリスマスソングが聞こえてくるほどだ。

さて、世間がそんな浮かれモードの最中、我々清水優人と結束バンドの面々は外界のぼやぼやしたオーラに充てられる事もなくライブハウス、新宿FOLTで絶賛リハーサル中であつた。

リア充爆発してくんねえかなあ。

リハーサルを見てるとつくづく思う。

同ジライブハウスといつても会場内の構造は当然ながら全くの別物。だからスターリーでいつもやっているようなりハでは音の聞こえ方や反響の仕方も全然違ってくる

のだ。

つまり細かい調整が普段よりも必要となってくる。

普段通りでは意味がない。せっかく演奏レベルが上がっていても客への聞こえ方が悪ければ印象は下がっていくだけなのだ。

だから演奏している本人を含め、一番結束バンドの音を聴いている俺も聴く側としてリハに参加させてもらっている。

一人ずつ楽器を鳴らし音を聴いて相談しつつ新宿FOLTのPAさんと話しあったり細かい部分を決めていく。

「ふう、あたしはこんなもんかな」

「ひとまず個人リハお疲れ様です」

「ありがとね。優人くんが聴き手してくれるからこつちもありがたいよ」

「結束バンドの一番良い音を知ってるのは虹夏さん達に次いで俺ですからね。そこに妥協は一切しませんよ」

虹夏さんにタオルを手渡しして周辺を見る。

リヨウさんは終わったし次は後藤さんだが、不意に虹夏さんが俺の肩をトントンと叩いた。

「ねえ、あれ何」

虹夏さんが指差したのはステージの下の隅に置いてあるどでかい段ボールの塊だった。

「ああ、後藤さんの完熟マンゴーフルドライブガンダムの残骸です」

「完熟マンゴー進化してる！ 何であんなの置いてあんの!?!」

「進化した後藤ひとりを見せるんだってさつき着てましたよ」

「防護力上がっただけじゃん！ ……ん？ 着てましたって、何で過去形？ いやぼつ

ちちゃんステージにいるから着てないのは分かるけど」

「着てたのを俺がボッコボコに剥いで撃墜したからです」

「どうりで完熟マンゴーフルドライブガンダムがベコベコになっちゃってる訳だ……」

そもそもあんなくそでかい段ボールをどうやって持ってきたのかという疑問になるかと思うが話は簡単。

でっかい袋に段ボールを重ねて入れ、会場に着いてから順序通りに組み立てるとあら不思議、完熟マンゴーフルドライブガンダムの出来上がりである。

「あんなの作ってる暇あったならもっと練習しててほしかったよ……」

「あれ作ったの直樹さん、後藤さんの父親ですよ」

「お父さん暇なの!?! てかそれを容赦なくボコボコにしたの優人くん!?!」

「さすがに目の前で壊すのは申し訳なくてしなかつたですよ? なのでここで着たのを見計らつてから遠慮なくぶつ壊しました」

「配慮があるのかないのかよく分かんないよそれ」

俺も分からん。家で勝手に着るならいいけどここで着るのは論外だ。

せつかくの場を荒らすのは言語道断である。よつて容赦なしと判断した。直樹さん、娘に甘くしすぎるのはダメですよ。俺がそうはさせません。

俺が完熟マンゴーフルドライブガンダムをぶつ壊したおかげで後藤さんのリハはつづがなく終了。

喜多さんのリハは……違うライブハウスと面子のせいで緊張しているのかむせる事もあったが何とか無事に終えた。

個人のリハが終われば次は当然全体のリハとなる。

しかし音の確認も終わっているので自分達の気になるところだけ再確認程度に流すといった感じだ。

「じゃあ2曲目のサビだけやろうー！」

「はー！」

……うーん、何か全体的に演奏が走ってるな。

みんな喜多さんほど顔には出さないもののさすがに会場が違くと緊張もしてくるか。まあ今までとは勝手も違うし無理もない。本番でどこまで修正しつつ力を発揮できるかだな。

さつき見たSICK HACKとシデロスのリハ凄かったもんなあ。シデロスなんてまだ新メンバー入れて間もないのに完成度が桁違いだった。

あんな人達と同じステージでやるんだからそりゃ焦る気持ちも分かる。こっちが成長しているという事は、あちらも日数を経るたび練習を重ねて上達していつている訳だ。溝なんてそう簡単に埋まるものではない。

「ん……う？」

ふとフロアの隅に視界をやると、ヨヨさんがエナジードリンクを片手に険しい表情でステージを見ていた。

あの演奏は緊張でちよつと走ってるだけなんで、本番ではもつと上手くやるんで……なんて言い訳をしに行こうものなら何を言われるかなんて大体想像がつく。

向こうはリハでも高い完成度だったのだ。リハだから下手な演奏をしていい理由がない以上、こちらに弁明の余地なんてないに等しい。

ロインでは結構ツンケンしながらもアドバイスの事を遠回しに言ってくれたりもしてたから、そんなに邪険にされてる訳でもなさそうだけど。

つか何で今エナジードリンクなんて飲んでんだあの人。

あれデッドブルじゃん。翼を授けるやつじゃん。今飲む必要がある？ 単に好きなか
け？ ヨヨさんの事まだまだ知らないところだけだな。知りたいかどうかでいえば別
にそんなだが。

デッドブルを一口飲んだヨヨさんはそのまま楽屋の方へと歩いて行った。

おそらく次に彼女と話す時はツン要素多めだろうな、と思う俺であった。
や、むしろデレ要素が最初の時なんてなかったか。

73. ライバル?いいえ、友達です

「みんなリハ少し走ってたから本番では気を付けてね」

「分かりました」

全体のリハが終わって楽屋に移動してきた俺達。

本番までの時間はまだもう少しあるので、ここで各々最後の自由時間となる。

本番までに集中力を高める人もいれば、あえて直前まで練習せずにコーヒーを飲んだり大人であれば本番5分前に必ず煙草を吸うなど、そういったルーティーンを行いメンタルの安定を保つ人もいる。

各々が本番までにする事には一見何もないように思える事もあるかもしれないが、大抵はちゃんと意味があったりするのだ。

そしてそれは結束バンドにも――、

「SIDEROS達のバンドよりも目立つたためには派手なライブパフォーマンスをするしかないわよね……」

「でっですぬ……」

「ここ、こうなつたらじゃんけんで負けた方がギターをたたき壊して客席にダイブするつてことで……」

「じゃ、じゃんけん……」

「会場ドン引きだよ!! ちよつと優人くん何とかして!」

「彼女達なりにロックを見せようとしてるんです。ここはやりたいようにさせてやりましょう」

「そこは諦めないで!? ここで優人くんが諦めたらライブがカオスになるだけだよ!」

言える事でもなく、彼女達は今日も結末感ゼロでマイペースな時間を過ごしていた。

拠点以外でこんなコントできるのある意味凄いいんじゃない? やっぱ最強の陰と陽が合わされば怖いものなんてないよきつと。ほんとこういう時相性いいよね後藤さんと喜多さん。実際は両方めっちゃ緊張してるんだらうけど。

さて、心の中でこんな一人語りをしている俺だが、現在諦めないでと虹夏さんに肩を掴まれブンブン揺らされている。それはもう凄い勢いでだ。

頭が振り子のようになってます。そろそろ止めてくれませんかね虹夏さん。俺の脳みそがシエイクシエイクされてブギーな胸騒ぎ状態になってきてますので。

「うっぷ。ぶ……まあ、客も9割はきくり姐さんのファンの人達だし良い感じに迎えてくれおえっぷ……るでしょ……。一号さんと二号さんも結束バンドがゲストで出るよって言ったらその日の内にチケット確保してたから来るのは確定だしな……ごぶっ」

危ねえ、もう少しでウツプシエイク脳みそ味が出るとこだった。

一応きくり姐さんに結束バンドのファンも呼んでいいか聞いておいてよかった。少なくともこれで100%のアウトエイではなくたはずだ。

ただでさえ急ごしらえの呼び出しバンドなのに、新宿FOLTを拠点にしてるSICK HACKとSIDEROSと違って結束バンドの場違い感は正直半端ない。

そこをどうにかして少しでも緩和できればと思つての一号さん達召喚である。結束バンドあるところに一号二号ありとはよく言つたものだ。今初めて言つたけど。

「でも9割は廣井さんのファンなのよ。それって怖くない……?」

「……」

ひ、否定できねえ……。

深刻な飲んだくれ、借金持ち、金欠と綺麗にクズの三拍子が揃っている女、それが廣井きくりである。安心材料なんて最初からなかったんだわ。分かつてた事だけどね!

「残り1割の内0.9割はシデロスのファン、それで0.1割が一号さん達の結束バンドファン。一号さん達……きくり姐さんのファンに？まれなきやいいけど」

「あつゆうくん……そろそろ、いい……？」

「ん？ ああ、いいぞ」

俺に確認を取ってから後藤さんは俺の背中に回り、丸まるように両手で小さくギュツと服を掴んできた。イメージとしては母の背中にしがみつくコアラの子供辺りか。

最近発見したらしいが、後藤さんはライブ前にこうする事で若干緊張がマシになる事の事。それでもステージに立った直後はガチガチだが。

それでも何もしないよりはマシなようで、ここ数週間は家でもたまにこうする事で精神の安定を保つ練習をしているのだ。

これが後藤さんのライブ前ルーティーンになりつつある。そして俺はコアラの親気分になれる。うん、後者は何の得にもならないね。

背後にいる事なんていつもの事じゃんというツツコミを俺からしたこともあつたが、彼女曰く普段とは違ってこの時は背中を中心点に意識を集中するから安心できると返された。純粹に反応に困った。

今となつてはもう完全にスタンドだと思うことにしてちよつとしたジョジョ気分だ。

たまに人間やめるしな。

「……今日の客は荒れてるぜえ。お前ら、気を緩めるんじやあねーぞ」

「えっなんで!?」というかりヨウキヤラ変わってない!」

何でリヨウウさんまでジョジョ風になってんだよ。どうやって俺の気分を察したの。

「わざわざクリスマスイブにロック聴きに来るヤツなんて恋人のいない暇人に決まってるじゃあないか」

「偏見すぎる!」

「それイブにライブしに来てる俺達にも刺さりませんか? ブーメランの切れ味紫くらいまでありますよ。あとジョジョ風やめろや」

何なら歌う訳でも演奏する訳でもない客でもない俺とかどの立場なんですかね。

あつ何だか目から水滴が……。

「もうっカップルとかもライブに来るでしょ」

「クリスマスデートでライブ、素敵だと思わない優人君!」

「リア充の頭でギターたたき割るのは素敵だと思っ」

「いきなり物騒なこと言い出した!？」

どうしよう、悲しみよりも怒りの方が勝ってきたぞ。

俺がライブの手伝いしてる間にも世間ではカップルやギリギリ恋人未満のヤツらが手でも繋いでイチャイチャしてるのか……許せねえよなあ!？」

事前にクラスの男子共の予定は聞いているが、ヤツらはみんな男同士でカラオケなり食べ放題なりナンパなりするらしい。

もしナンパに成功しようものなら喉搔つ捌いてやろう。全員運動部だし顔は悪くないヤツらの集まりなんだよな。性格が残念なのが一番の敗因要素だけど。冬休み明けが血祭りにならない事を祈るばかりだ。

「優人くんも何言ってるのさ。ほら、こう考えてみて! 今日であたし達がみんなのサントさんで素敵なライブをお客さんにプレゼントしようよ!」

「私達の音楽がカップルを盛り上げるBGMにされる……!？」

「うぐあああ……ッ!？」

「結束バンドの曲でそんな雰囲気にはならんでしょ。SICK HACKの曲もサイケだしシデロスはヘビーだしロマンチックには遠いかと」

「急に冷静なこと言うじゃん優人くん……」

『星座になれたら』ならまだしも、他の曲でカップル応援歌みたいなのはないしこれから来る客には派手に盛り上がっていただく事にしよう。

もしその中にリア充がいたら俺が後ろからうなじを斬ってやる。恋人級の御仁には制裁が必要なのだ。

「何でこんな日まで幸せな人間のために演奏しなきゃいけない……」

「この歌詞を共有したいのに……」

「あーリア充みんな将来老衰で死ねばいいのに……」

「クリスマスの子で卑屈度も上がってる……優人くんに関しては憎みきれてないよそれ、そこはかとなない優しさが滲み出ちゃってるよ。急に過激なこと言ったりいきなり優しくなったり情緒がおかしくなってるよ」

クリスマスイブだもの。そりゃ情緒の一つくらいおかしくなりますって。

「けどぼっちちゃん家はクリスマスとか楽しそうじゃん。優人くん家の人達とも仲が良いでしょ? 一緒にパーティーやったりしないの?」

「あつ去年はゆうくん家と一緒にパーティーとかして楽しかったんですけど……」

「へえーそうなんだ! 楽しいならいい事じゃん!」

「でも12月はギターヒーロー宛てのリクエストがクリスマスラブソングばかりで……」

おい、俺の背中であれ話すのか後藤さん。

止めてくれ後藤さん、その話は俺にも効く。

「ゆうくんの隣でラブソングを10曲くらい弾いたあたりでお互い耐えられなくなつて……暗い部屋でお経を流して二人で仏像に囲まれながらずっと私達は仏教徒って唱え続けてました……」

「いつの間に怪談になったの……? 優人くんまでダメーヅ喰らつてるし」

「思えばあの時から俺達の体に異変が起きて人間やめれるようになった気がしてきました……」

「なにその変な伏線回収!? 呪いじゃん! 怖いよやめて!」

よし、怯える虹夏さんでメンタル回復させてもらおう。

何でライブ前に傷つかなきゃいけないんだ。後藤さんもルーティーンの意味なくなつてんじゃない。

緊張をほぐすためにこんな一見マイペースに思える話をしてたせいか離れたところに座っているシデロスのギターボーカル、ヨヨさんからの視線をまた強く感じた。

とういかまだデッドブル持つてる。リハから結構時間経ったのに何でまだ飲んでないの。もしかして二本目? これ以上目ギンギンになって目力強くしてどうしたいの? にらみつけたいの? こっちの防御を下げたいの?

虹夏さんもヨヨさんを見て少し委縮してる様子だ。あんだだけ目力強いと睨まれてると思っちゃうよね。大丈夫ですよ。俺も今回はそう思ってます。

しかしそのせいか虹夏さんまでも表情が硬くなってきた。リヨウさんはまだいいとして、喜多さんも笑みを浮かべているものそれは乾いたものだった。後ろにいる後藤さんは掴んでいる力の強さで大体分かる。少し震えがちで強く握っているのが緊張しっぱなしという事だ。ルーティーンの意味全然ねえ。

どうしたものか……。

いつそ俺がボケ倒すのもありだが……と思っていると、意外な方向から声がかかった。

「そんな心配しなくても大丈夫つすよ〜」

振り返ると、黒い衣装で黒いマスクをした少女がいた。

「自分らがどんなライブをしようが最後には滅茶苦茶になるんで」

想像しているのかいつもそうだからというのを既に分かっているのか、少し眉間にシワを寄せた少女が言う。

自然とみんなの視線がそこに集まった。そういや自分達の事で精一杯だったせいかな。まだちゃんと挨拶していなかつたな。

「そういうえばまだ挨拶できてなかつたですよ。自分、長谷川あくびです」

そう言ったのはシデロスの衣装に合わせたのかマスクも黒くて印象としては全体的に髪は短く、おくれ毛だけ長くした銀髪の女の子だ。

「私は本城楓子ですっ」

次にひよこつと出てきたのはベージュのような髪色をした少女で、見た感じの第一印象はふわふわ系というかおっとり系を連想させた。

「内田幽々です」

最後ににゆるつと這い出るように言ってきたのは口元のホクロが特徴的で、ウェーブがかつたロングヘアーの黒髪パツツン少女だった。

これが新生シデロスのメンバー。構成人数は四人、まだメンバーが入れ替わって間も

ないのに既にワンマンライブをするほどのクオリティーと人気を誇る、同世代の中でもトップクラスの实力者達。

ヨヨさんのメンバー募集相談に少しアドバイスした身としてはどんな人達なのか気になるところだが、一応はヨヨさんとのロインで多少は聞いていた。

といっても大まかな見た目と年齢だけでどんな人物像なのかは言ってこなかったけど。というかロインでも口下手だから説明がこっちにちゃんと伝わってこなかったと言った方が正しいか。

お互い軽い自己紹介（後藤さんは俺が代わりに紹介した）を終え、

「結束バンドの曲、この前ヨヨコ先輩が貰ってきたCD聴いたんすけど自分は好きっす！ 同世代のバンドと出会う機会少ないんで仲良くしましょう！」

「えくありがとう！ こちらこそ仲良くしてくれると嬉しいな〜！」

見た感じこの黒マスクの長谷川さんがシデロスの中でもフランクな性格で積極的に話しかけてくるタイプか。

人付き合いが苦手なヨヨさんにとってはありがたいメンバーだな。

「メンバーの入れ替わりが激しいって聞いてたからもつと殺伐としてるかと思ってた

よお」

「あくそれは……」

「結束バンド！ それと清水優人！」

他のメンバーがこつちに来たのでやつと自分からも話しかけると思ったのか、ヨヨさんが急に威勢よくこちらに声をかけてきた。

自分一人だけじゃこの輪の中に入り込めなかったんだね……。

「ゲストだからってシデロスと同じ土俵に立ったと思わない方が良い。言っておくけど私のトゥイッターフォロワー数は1万人だから」

「うわあ……」

「突然急カーブして謎のマウントとってきた!?!」

SNSのフォロワー数多い方が偉いって思ってる悲しき現代人思考をいきなり自分から暴露してきたよこの人。

どうしてまともなコミュニケーションをとろうとしないの。……あつ、まともじゃないからか。

「清水優人」

「え、この状況で俺に矢印立つの面倒な予感しかないんだけど……何すか……」

「貴方もツイッターくらいはやってるでしょ」

「え、ええ、まあ……自分のと結束バンドの垢をみんなで共有してるくらいですかね」

「私のフォロワーから探しても貴方のアカウントと思うものが見当たらなかったんだけど、貴方私のツイッターフォローしてるんでしょうね?」

「してないけど」

「なんでよ!?!」

むしろ何でしてる前提でフォロワーの中から俺のアカウント探してるんだよ怖えよ。1万人いるのによくそんなめんどい事しようと思えたな。

「幕張イベントホールと同じくらいフォロワーがいるのよ!? 友達ならフォローくらい

普通するでしょ!」

「しねえよ」

ロインならまだしもツイッターをリアルの友達と相互になるのは嫌なタイプなんで俺。

するとしても別垢作るに決まってんでしょ。

「あ、私もイソスタなら最近人気投稿に入ったみたいで、1万5千人くらいいますよ！」
「なっ!？」

「喜多ちゃん武道館じゃんすごっ!」

「身近に人気イソスタグラマーが誕生しつつあるとは……さすが喜多さんだな」

常に映えを追求してる女子高生は違えますね。つうかもう俺がトゥイッター広報メ
インで喜多さんはそっちで結束バンドの広報した方がよくない？

個人垢だからそういう訳にもいかないか？

「く〜く〜っ! バンドマンなら演奏技術で勝負しなきゃダメでしょうが!」

「ブーメラン顔面にぶっ刺さってますけど大丈夫ですか」

完全に敗北者の言動になってますよ。

「こんな感じでヨヨコ先輩がコミュニケーション下手なので人間関係上手くないか
けないです」

「なるほど……ぼっちちゃんとは違うタイプの方だね……」

虹夏さんも理解が早くて助かる。

そんな後藤さんは今も俺の後ろで知らない人達がいるからか固まって怯えています。

「うちの先輩が迷惑かけてほんとすみません」

「でもいい感じにリラククスできたんじゃないですかあ〜?」

「うおっ!」

「あ、言われてみればそうかも」

ビツクリしたあ……内田さんて人どこから湧いてきたんだ……? いきなり隣にいたんだけど。

「……凄いモノ持ってますねえ」

「えっと……な、何がですかね……?」

あの、内田さんどこ見て言ってるんでしょうか? 何で俺と目が合わないの? 何で

誰もいない上の方見てんの?

「それにしてもライブ前なのに落ち着いてて凄いね」

「いや〜自分達も毎回緊張してますよ」

俺無視して話進めないでもらえませんかね。

なんか内田さんあらぬ方向ばつか向いてて超怖いんですけど。俺の上と後藤さんの

後ろをずっと交互に見てるんですけど!! まさかモノホンのスタンドがいたりとかしない? しないよねさすがに……え、しないよね?

「あの、う、内田さん? そろそろ向こうの話に混ざっても大丈夫ですかね……?」

「はいい〜」

どうしよう、思った以上にシデロスのメンバーも濃いかもしれん。全体的にとかではなく一人のキャラの濃さがあまりにも強すぎる。

「自分達よりあがってる人見ると逆に冷静になってくる事ありません? まさに自分達がそれなんですよね」

「あたし達のこと?」

「いや、毎回ヨヨコ先輩が緊張で3日くらい寝てこないんすよ」

「睨んでるんじゃないかな? 目がキマッただけなんだあれ!」

まだライブ前の緊張で寝れないの治ってなかったのか。だからエナドリ飲んだのね。

いやまあそんなすぐ治るもんでもないしライブをする以上緊張からは逃れられないもんね。にしても3日て。一応花の女子高生が3日も徹夜はやばいだろ。

うーん、しゃあねえな。

「後藤さん、ちよつとだけ離れられるか」

「あつう、うん……」

後藤さんに少し離れてもらい自分のトートバッグから常備してる使い捨てアイマスクを一つ取る。

「ヨヨさん、このアイマスク使っていいんで少し横になつてください」

「……え、でも今からじゃ」

「分かってます。時間もそんなにないし今から10分仮眠したとしても、ボーカルにとっちゃ致命的に喉が締まっちゃう。だから眠るんじやなくて視界を全部塞ぐ事でリラックスするだけでも効果は多少出てくるはずですよ。何もやらないよりはマシだと思いますよ」

そう言つてアイマスクを差し出すと、ヨヨさんは躊躇いながらも手に取った。

「何で私に……」

「これでも結束バンドのサポート役してんですよ? あらゆる場面に對して対応できる

ように準備しておくのは基本です。それにヨヨさんは友達だから放っておく事はできません」

こつちには規格外の後藤さんもいるんでね。

普通の人よりは視野も広い自覚はある。世話しなきゃいけない人がいるとこつちも色々気が回るようになってくるのだ。

とりあえずヨヨさんを横にさせて近くにあつた薄い毛布をかける。

順番的には結束バンドが先なのでシデロスはまだ時間がある。これで少しはマシになつてくれたらいいが。

「さて、結束バンドはそろそろ時間か。虹夏さん、準備始めましょう。俺もまたフロアの後ろの方で動画撮影するから移動しますね」

「そうだね。よし、みんな準備始めるよ」

「ちよつと待ちなさい。清水優人も」

楽屋から出ようとしたところでヨヨさんから呼び止められる。

本人の表情は至つて真剣なのに毛布にアイマスク装備で緊張感の欠片もないな……。
これが格上のバンドってまじ？

「さっきのリハ、今までに見た貴方達の演奏よりさらに良くなった。いつも通りやれば絶対上手くいく。努力は裏切らない。だから自信もってステージに立ちなさい」

見た目はあんなでも、結束バンドより場数を踏んできた先輩としてのアドバイスが確かにあった。

「あ、ありがとうございます!」

「ふんっ……分かったらさっさとステージに上がりなさい! 姐さんのファンを待たせるんじゃないわよ!」

「は、はい!」

慌ててステージの方へ行く結束バンドの面々を見送るヨヨさんの顔は、俺から見れば何となく優しい表情に見えた。

「……な、何よ……あ、貴方も撮影するなら早く行きなさい! ……その、アイマスク……ありがと……」

どこまでも底の優しさを隠し切れない彼女を見て思わず笑みが零れてしまう。

この前はとんだ捨て台詞で酷い目に遭ったんだ。少しばかり仕返しさせてもらおう。

楽屋を出る直前、俺はヨヨさんに向けて言った。

「やっぱアンタはどこまでも優しいよ。良いメンバーに巡り合えて良かったな」

「なっ……」

半ばイタズラ混じりな笑顔で、シデロスのメンバーにもわざと聞こえるように言ってから俺は楽屋を後にする。

これでメンバーからイジられてしまえばいい。せめてもの仕返しだ。

「……急に何言い出すのよあのバカは……」

「あの人が事あるごとに先輩の話に出てくる噂の清水優人さんなんです。後でちゃんと話したいところっす……って、ヨヨコ先輩なんか顔赤くないっすか?」

「うっうるさい!」

74. 静かな方が落ち着く時だってある

「メリークリスマス〜ス〜！」

かんぱうい、という音頭と共にそれぞれのグラスが上に掲げられた。

ここはとある店……という訳でもなく、我らが拠点スターリーである。

新宿FOLTでのライブを終えて新宿から下北沢まで戻ってきたのだ。

理由は単純明快。

「今日はスターリークリスマスパーティーに集まっていたいただきありがとうございます！
！ 今宵のパーティー、司会はあたし伊地知と喜多が務めさせていただきます！」

「短い間ですが皆さん楽しんでってくださいーい！」

そう、スターリーでクリスマスパーティーをするからである。

クリスマスにパーティーと聞くとみんなは何を思い浮かべるだろう。きっと飾り付

けで彩られたキラキラしたお部屋と食べきれるか不安になるような豪華なご馳走、学生ともなるとわいわいしながらプレゼント交換なんかもしちゃうのかな。

おそらくそのイメージは間違っていない。青春真っ盛りな高校生にとってクリスマスは特別に特別なイベントで、恋に恋する男女にとってもある意味壮大な一大イベントになるかもしれない。それが聖夜だ。

では、クリスマスパーティーのイメージを大方想像できたところで、わたくし清水優人さんの周囲を見てみましょう。

なんということでしょう（ここでビフォーでアフターなBGM）。虹夏さん達のいる陽の気オーラで輝いている向こうのテーブルとは打って変わって、こちらのテーブルは暗黒かと思ってしまうほどに暗いではありませんか。

まさに陽と陰。明と暗。光と闇。太陽と月。天国と地獄。

左にはいつぞやの星型サングラスにフィンランド観光大使のタスキを掛けた後藤さん。

右にはベレー帽と衣装……ではなく意外にも初めて私服姿を拝む事ができたヨヨさん。

両手にコミュニケーション再びであった。

「うーん、俺の知ってるクリパと違うなあ」

最初の席決めの時、どうせパーティーするなら楽しいのがいいと虹夏さん達の方に行こうとしたら、割とマジな勢いで後藤さんとヨヨさんに両手を引つ張られ強引に座らされたのだ。

引く力が強すぎて両手すつぽ抜けたかと思った。千切れてなくて安心した。

あとついでにリヨウさんもいる。

全体的に暗い人がこちらのテーブルに座るらしい。俺の場合は引力の問題で移動不可でした。というか暗い系ならシデロスの内田さんもこっち側じゃないんですかね。ホラー的な意味で。

俺の小さな眩きも虚しく、司会者はこちらを見ないで進行していくようだ。見捨てられるって、こういう気分なんだね……。

「そして今回は兼クリスマスライブの打ち上げでえくす！なのでシデロスのみんなにも来てもらいました！」

「ありがとーございませーす！」

全体的にヨヨさん以外の人はノリが良いらしい。喜多さんと一緒に合いの手を入れてらっしやる。内田さんもちやつかりグラス持って揺れてるし。……あちらさんが楽

イエア!!

「清水優人……貴方姐さんがいない事を喜びすぎじゃない……」

隣でツインテールがなんか言ってるけど知らねえや!!

俺は光の道を歩むぜ!

「さらにうちのお姉ちゃんと21日に誕生日だった優人くんの誕生日会でもありまーす
!」

「いや兼ねすぎだろ」

「えー店長は今日で30歳なんですわね!」

「それ以上誕生日の事は掘り下げなくていい。優人と一緒に祝われるのは年齢が比較されてるような気がしてなんか……」

「いよつ! 店長誕生日おめでとー! 三十路万歳ツ! また一つ上のステージへ到達した店長に乾杯! でも見た目はまだ二十代に見える健在! イエばるぶつへあツ!」
「掘り下げんなつつつたろボケがあ!!」

「おーつとお! お姉ちゃんをイジツた優人くんに投げられたお皿が顔面にクリティカルヒットして椅子ごと壁際まで吹っ飛んでいきましたあ! 誕生日でも変わらない愛

のムチです！」

「ありがとうーごいままーす！」

ぶふう………なんで褒めてるのに怒られなきやいけないんですかね……。

俺のラップもどきじや店長の心には響かなかったのかい？

ともあれ、椅子ごと吹っ飛ばされたおかげで闇のテーブルからは逃れられた。

この機に乗じて俺も光のテーブルに――、

「……………」

「……………」

じいゝつと。

引きこもりコミュ症とツンデレコミュ症がさつきと戻ってこいと言わんばかりにこちらをじつと見つめている。

やめろ。お前らポテト食いながらこつち見んな。

言葉には出してこないのに視線だけで訴えてきやがって、それでも口付いてんのか。だからポテト食う手を止めろや。

「……………ああつ！ もうポテトねえじゃん！ アンタら喋んねえで間を持たせるためだけ

にずっと食ってたなこのコミュ症共！ 俺の分はどこだこの野郎！」

「あつ私は一応ゆうくんの分は置いとこうと思っただけど……」

「優人の分は私が全部平らげてやったぜ。指に付いたポテトの塩を全部舐め取るまでがポテトを最後まで楽しむ食べ方よ」

「だったらオメーのその指に付いた塩俺が舐め取ってやらあ指出せ山田アーツ!!」

「ふふん、これでも私は女子。同性でもない優人にやれるものならやってみ……あれ、なんか目が本気……? ちよ、ゆつゆうとつ、まつ」

「ゆ、ゆうくんっ！ さすがにそれは……!! そえあはあつ……!!」

「ちよつ、貴方全然止めれないじゃない！ 振り回されすぎでしょ!」

「お姉ちゃんもいっぱつやっちゃって。はいお皿」

「おうよ」

見事な投擲スキルによって放たれたお皿は見事に俺と山田の額にヒット。

両者ダウンからの強制的に三分間店の外に締め出され頭を冷やす時間をちようだいました。……なんで俺も? 悪いのは全面的に俺のポテトまで食ったりヨウさんじゃね? 仮にも誕生日会の主役の一人の扱いか? これが……。

「ふっ……塩を舐め取った指が唾液のせいで濡れてクリスマス風の風により余計冷たさを

増してゐるぜ。優人、あつためて」

「およそクリスマススイブの夜に聞く言葉じゃねえな前半。断る。反省してねえだろアンタ」

「上着もないからしようがないじゃん」

この開き直り方どういうメンタルしてたらできるんだろう。

確かに寒いのは寒いけどさ。危ねえ、もうすぐでクリスマススイブに先輩女子高生の指に付いた塩を怒り半分で舐め取る男子高校生というレッテルを貼られるところだった。ライブ後の余韻とクリスマスという事で俺も若干浮かれてたのかもしれない。頭を冷やすのは正解だったかもな。

それにしても、前を通り過ぎていくのは大体カップルや恋人未満の男女が多い。

下北つてそういうとこだっけ？ クリスマスイブはどこもかしこもそういうオーラに包まれちゃうの？ 何で俺の前を横切る人達はみんなピンク色のオーラ醸し出してるの？ ハッピーエンドなの？ ああ？

「優人」

「何すか」

隣のついさつきまで自分の指をペロペロしていた聖夜もへつたくれもないダーヤマ

が話しかけてきた。

「私、甲斐性のある雰囲気を出してクリスマスの日だけレンタル彼女やったら売れると思っただけどう思う？」

「持つてないものを売るな鳥濱がましい」

甲斐性とかリョウさんと一番縁のない言葉でしょうが。

ちくしよう、周りはハッピーなピンク色のカップルばかりだったのに、なんで俺の隣にはクズベーシストしかいないんだ。これじゃ俺だけ灰色のクリスマスじゃねえか。絶対こんな彼女、お借りしません。

「けど時にはバラードでファンにロマンを贈るのもバンドマンの甲斐性と言え……よし三分つ、私は先に戻るッ」

「ほんと適当な会話ばっかだなアンタ!？」

反省の三分間が適当すぎる。

いやまありョウさんが真面目に反省するなんて虹夏さんも思っではないと思うけど、話の途中ぶった切っていくかね普通。

……とりあえず寒いし俺も戻ろう。

そして暖かいスターリーの中へ戻ると、既にリョウさんは自分の椅子へ戻ってスマホを見ながら他の料理を食べていた。

ゲスの極み乙女かな。

階段を下りると再び後藤さんとヨヨさんからやつと戻ってきたか二人だけでめっちゃくちや気まずかったんだぞはよ戻ってこいやという視線を強烈に受けた。

ああ、そつか。俺とリョウさんいなかったから二人だけだったんだ。やば、それはそれでどんな重い空気なのか見たかったわ。

そんなヨヨさんの片手には据え置き型でも携帯ゲームとしても遊べる便利なゲーム機、トウイツチがあった。

なるほど、ゲームはコミュニケーションを取る手段として最も有効な手だ。コミュ症なりに頑張つて誘おうとしたんだろうな。

けどごめんよヨヨさん。うちの後藤さんそんなんじや全然絆されないから。

ニツクネーム与えるかいつも一緒にいないと基本的に心開かんぞ。まあ俺レベルになるとパツカーンと扉全開まであるけどな。

でもゲームを持つてるなら暇つぶしにもなるか。

俺も混ざれば後藤さんも入れるし良いかなと思いつつ戻ろうとすると、

「あ、清水さんっ、ちょっとこっち来てもらっていいっすか！」

黒マスクの長谷川さんからお呼びがかかった。

俺に用があるなら当然そっちに行かないといけない訳で。悪いなコミュ症ズ。さすがに初対面の人の誘いを断る訳にもいかないのよ。

ということでも光のテーブルへやってきた。

闇の方から何だか負の視線を感じるが気にしない。見たらお終いだと思え清水優人。一目でも見たら引きずり込まれるぞ。あいつらなら生霊飛ばしてきても何ら不思議じゃない。

「どうもお〜」

「……あつ、うす」

そうだった。こっちはこっちでモノホンぽい人いたんだった。

何ならギャグ寄りのあつちじゃなくて本格派の方だった。可愛いけどちよつと怖いんだよなあ内田さん……。どこ見てんの内田さん、だから上には何もいえないっば。

「いきなり呼んじやつてすみません清水さん。ヨヨコ先輩からよくお話を伺うんでせつ

かくだしちよつと話してみたいって思ったんす」

「さいですか」

ヨヨさん俺の事そんなに話すようなことあったつけ。

メンバー募集の事でちよつと一枚かんだくらいしかない気がするけど。そもそも友達俺しかいないから他に話題がなかったのかな。悲しいね、ヨツちゃん。

「あなたがヨヨさんが音楽以外の会話になると二言目には名前が出てくる清水優人さんっすよね！」

「有名人に遭遇したみたいない方だけど言葉の節々にヨヨさんの悲しい現実突きつけて来るのやめたげて」

いらぬところでダメージ受けちゃうからあの人。

プライベートではほんと話題持ち合わせてないのな。会話持たせるために何か努力とかしないのか。……うん、無理難題だね。後藤さんもできなかつたし。

「つうか多分俺と長谷川さんって同い年だろ？ 別に敬語なんか使わなくてもいいよ」

「自分は誰にでもこうなんで気にしないでください。清水さんも普段通りに接してくれると嬉しいっす」

「あ、そうなのか。ほいじやりよーかい」

キャラ付けかとも思っただけど話し方も自然体だし本当にいつもそうなんだな。

同年代に対しても語尾に「っす」とか付ける人初めて見た。こういつちや何だが長谷川さんがシデロスのまとも粋っぽいな。ヨヨさんはヨヨさんだし、内田さんは虚空見がちだし、本城さんは……まだよく分からんけど見た目は天然おっとり癒し系女子って感じする。つてことはまとも粋かな？

ふむ、そうなるまともと粋兼まとめ役兼リーダー兼癒し粋兼天使粋を全部兼ね備えてる虹夏さんつてやつば最強なんだなつて。

勝てる人いないだろあんなの。もう天然記念物に登録しようぜ。それかまだ現役だけど世界遺産。教科書か聖書に載せるのも良し。

「最近優人くんから熱い視線が送られてくる回数多いような気がする」

「伊地知先輩どういうことですか。どういう意味ですか」

司会進行まったく進行しなくなつたな。もう普通に喋ってるじゃん。

あ、俺とリョウさんが外に締め出されてたから自由時間みたいになつてるのか。後藤さん卓の方は自由時間というより瞑想時間みたいに静かだけど。

「ヨヨコ先輩といつも仲良くしてくれてありがとうございます。おかげでこっちにロイン来る頻度少なくて済んでるので」

「毎日のようにロインが来るから返してるだけだよ。……というかそれ絶対本人の前で言うなよ。家でこっそり泣くぞあの人」

良いメンバーなんだよね？ 実はあんまり良く思われてないとかないよね？

ヨヨさんの扱い方が上手いだけとか？ きつとそうだな。そうに違いない。そうであつてくれ。頼む。

今回のシデロスメンバーがずっとヨヨさんを支えてくれますようにと密かにサンタさんに願っていると、今まで喜多さんと喋っていた虹夏さんがこちらの輪に入ってきた。

「ちよつと話してる途中にごめんねつ。最後に優人くんを確認だけしときたくてさ。他のみんなは買ってると思うけど今日って優人くんの誕生日会も兼ねてるじゃん？ でも一応優人くんも忘れずにお姉ちゃんへのプレゼント買ってるかなって思ってる」

ああ、そのことね。

「ちゃんと保険も併せて買ってきてますよ。抜かりはないです。ついでに他にも買って

ますしね」

「保険……？　まあいつか。他にも買つてゐるつてどゆこと？」

「ああ、一応毎年うちの家と後藤さん家とでクリスマスパーティーしてるんで、明日ふーちゃんにあげる用のプレゼントも買ったんです」

「はい♪」

「……ん？」

虹夏さんからでもなくまさかの方向から相槌があつた。

見るとニコニコしながら本城さんがこちらを見ている。何だろう、見てることちまで気が緩んでしまいそうなほんわかオーラだ。

「へー、ちゃんと近所の良いお兄ちゃんしてるじゃん。ふたりちゃんには何あげるの？」

「無難に可愛い柄のタオルとジミヘンと遊ぶ時用の服です。クリスマス定番のおもちゃとかゲームは直樹さん達が買うでしょうから。ふーちゃん女の子だけど結構わんぱくなどこあるんで、家の中でも外でもジミヘンと走り回って服や体汚して帰ってくる事多いんですよ。だからちようどいいかなつて」

「良いお兄ちゃんだ……！」

「はい♪」

「……」

今度は虹夏さんと一緒に本城さんを見る。

明らかに俺への相槌だよな今の。とうかさつききのも。さすがに二連続隣で反応される気になってしまう。

「あの、本城さん？　つかぬ事をお聞きしますが、何でさつきからわたくしめの言葉に反応してるんでしょうか？」

「あ、ごめんなさいいっ。私もよくはーちゃんからふーちゃんって呼ばれるからつい反応しちゃって……。ほら、私の下の名前って楓子なので」

「……あー、ね」

つまりふたりふーちゃんとニツクネームが同じだから反応したと。

いやそうはならんやろ。……なつとるやろがい！

なるほどね、知らない間に俺は同年代の女の子をまだ会って間もないしそんな仲良くなつた訳でもないのにニツクネームで呼んでいたと。

ふむふむ、オーケーオーケー。よしっ、大体理解した。

「虹夏さん、ジャッジ」

「これは両者共に予想できてなかったから無罪かな。あたしから聞いておいて処罰するのはかわいそうだし」

「生還ミツシヨン完遂ツ!! よくぞ無罪を勝ち取った俺!」

とはいえそうそう本城さんの前でふーちゃんの名前を出さないとと思うが、今後誤解を与えてしまうのも良くないので言っておくか。

「俺は今後も本城さんの事は本城さんつて呼ぶから、もし本城さんの前でふーちゃ……ふたりちゃんの事をふーちゃんつて言っても勘違いしないでいただけると助かるかな」
俺の身のためにも、というのには言わないでおく。

一応は目標でありライバル的なバンド（将来的に）なので仲良くしすぎると虹夏さん達に何言われるか分かったもんじやない。本人達が仲良くなってくれる分には全然かまわないけど。

「そう? 私は慣れてるから別に清水くんもふーちゃん呼びでいいけどお……」

「俺が慣れないんで……。あと本城さんがそういう事を気安く男子に言わない方がいいぞ。勘違い野郎が絶対出てくるから」

「?」

このふわふわおっとり系女子、さては何も理解してないな。
ポカンと頭上に？ を浮かべて首を傾げている。もしやガチの天然系か？

「あ、そうだ。なら清水くん、私のことは楓子って呼ん」

「本城さんそれ以上はお口チャックでいこうか!! あとできれば俺なんかよりも喜多さんとか虹夏さんとかバンド間の親睦を深めるためにお話しした方がいいんじゃないかなーって！」

「むう……まあそれもそうだね〜！」

油断も隙もねえなこの天然ゆるふわ娘。めちやくちや可愛いだけに下手すると一瞬でこっちの身に危険が迫りかねん。

やはりまともな梓は黒マスクの長谷川さんだけか。といっても内田さんもいるし何かシデロスって結束バンドとは違う意味でキヤラ超濃いな。

このままここにいっても何だか墓穴掘りそうで怖い。
かくなる上は……。

「……」

「……」

「…………ふへっ」

「…………何よ、結局こっちに戻ってきたのね。まあいいけど…………」

やっぱ闇のテーブルは落ち着くなあ~~~~!!

75. プレゼント渡された時の反応って意外と難しい

「そういやライブどうだったんだ？」

結局光と闇のテーブル離しておく理由なくねって話になり二つのテーブルをくつつける事になった。

光と闇が合わさり最強に見える……。普通にテーブル離してたら話しにくいからってだけなんすけどね。

ライブに来てなかった店長がポテトをひと摘まみしながら聞いてきた。

「ライブはねー、みんな大盛り上がりでモツシュにダイブにサークルまでできてねー」

「おお、すげえじゃん」

「ライブ終了後には10分間のスタンディングオベーション……なんて事もなくふつーにアウエーでした……」

「モツシュの時点であらうなとは思ってた」

さすが店長、妹の嘘に気付くなんて姉してるだけあるじゃん。

そもそも結束バンドにモツシユやダイブするような曲とかなないからな。曲はみんないいけど。

ちなみに俺の右隣でビクツと反応したのはヨヨさんだ。

なくなつたポテトの代わりにチキンナゲットに手を伸ばそうとしてたところで動きが止まった。そしてそのナゲットを気付かずに後藤さんが手に取って美味しそうに頬張つた。おい何個目だそれ、後藤さんの分のドイツ用ケチャップもうねえじゃねえか。

「まあ初めての箱じゃそんなもんだよ」

「そ、そうー!」

仕方なく俺の分のケチャップを後藤さんにかけていると、ここぞとばかりにヨヨさんが立ち上がる。

「演奏の出来と客の盛り上がりは関係ないから! その日のライブの空気なんて色んな要素が関係するしそりやそれをひっくり返せるくらいのライブをするのが一番なんだけどそれに緊張して気付いてなかったかもしれないけど後ろの方ではノツてる人も結

構いたし足だけリズム刻んで見てた人もいたからあながち完全アウエーだった訳でもないしむしろあの状況で良い演奏しつつ何人かの心も掴んでたから悪い結果には」

「一言で要約すると結束バンドで盛り上がりつつた人もちやんといるから気にすんなって
言ってます」

「全部持つてくんじゃないわよ?! 合ってるけど!!」

いやだつて長いんだもんあなたのツンデレ。

上手くいくと言つた手前気まずかつたんだろうが、後方で撮影してた俺も見てた限りノツてる人がいたのは確認したし本当にあんま気にする事はないと思う。案外演者の見えてないところで自分なりに楽しんでる人もいるのだと今回のライブで分かったのは収穫かもしれない。

手を上げて体を揺らすのだけが楽しい訳じゃないのだ。

ある者は足でリズムを刻みながら、ある者は腕を組み軽く首を振りながら、ある者はただ集中して目に焼き付けながら、ある者は一定のリズムを鼻歌にして口ずさみながら、ある者は目を閉じて耳に意識を集中させながらなど。

楽しみ方は人それぞれ。

それがライブなのだ、ゲストという立場であのステージを後ろから撮影して改めて感じたのだった。ステージ上からだけでは見えない、演者のサポート役だからこそその客

観視で得られた情報だ。少なくとも俺は手応えあったと思う。

「でも本当に感謝しかないから！ 今の結束バンドが絶対出られないような場所ですせてもらったし、大人数の前でのライブの経験も積めたからあとは曲数増やしてたくさん練習するだけだね！」

「ですね！」

「曲数、か」

チラリと左隣を見る。曲作りはどうなっているのかという目線を送ってみると。

そもそも話を聞いてないのか、後藤さんはお気に召したらしいナゲットをまた頬張っている。……揚げたチキンなら何でもいいのかこのから揚げ好きは。

「ケチャップジャージにちよつと付いてんじゃねえか。一回に付けすぎなんだって。今拭くから動くなよ」

「あつうん……」

ピンクジャージの裾に付着していたケチャップをコップの水で濡らしたティッシュで軽く押さえながら拭き取る。

本当なら台所用中性洗剤などを使うと良いらしいが、あれは服も色落ちしてしまう事

があるため今回はなし。ちなみにケチャップは水溶性なので水に流した後でティッシュで水気を拭き取ると結構綺麗に取れたりするのだ。何この無駄な豆知識。

「まあこんなもんか。シミになつたら美智代さんに迷惑かかるんだからな。気を付けて食べるんだぞ」

「う、うん、ありがと……へへっ」

このアホピンク……性懲りもなくまたナゲットに手を伸ばしてやがる。

まあいいか。今日はクリスマススイブだし少しくらいは大目に見てやろう。ダメ主人に仕えるメイドか俺は。いや性的に執事か。

と、こんなどうでもいい事をしている間にも虹夏さん達の方では会話が進んでいる。

「そうそう。未確認ライオットつていうフェスに出ようと思つてて。この前ライターさんが来たんだけどさ……その……」

フェスに出る経緯を虹夏さんが話している途中だったらしい。

ともすればあの女の話は必要不可欠で、むしろそれがきっかけだから話さない訳にもいかなかったのか、虹夏さんは事の顛末を大体話した。結束バンドや俺への指摘の言葉も含めて。というかあの時の会話結構覚えてるんすね虹夏さん。もしかしてちよつと

根に持ってませんか？

俺はもうそんなに根には持ってない。思うところはあつたああの毒女の事は好きでも何でもないが、言っていた事は概ね合っていた。

だからもつと成長するための努力をしようと思つた。きつかけは不本意でも、あの女の言葉のおかげでバンドとしての上を目指す理由ができたのは事実なのだ。まあ腹は立つけど。

「何すかそれ。失礼な話ですな〜」

「うーん、でも凶星な部分もあつたし、あたし達もあの時はまだちゃんと上を目指すための覚悟ができてなかつたのは本当だつたしね。だから今こうして練習も頑張つてフェスにも出ようつて決められたから、結果的には良い方向に向かつてると思つてるよ」

見事に虹夏さんが俺の気持ちを代弁してくれた。さすががつす。

いい加減一人でナゲット全部食いそうな後藤さんから一つ奪つてケチャップに付けて頬張る。うん、美味い。

やつぱジャンクフードつて神だわと思ひながらもぐもぐしていると、隣のヨヨさんの様子がおかしい事に気付いた。

いや、大人しいというか黙つてるのはいつもの事なんだけど、何だか少し不機嫌ほく

見える。ナゲツトそんなに食ってなかったのにもうなくなりそうだから拗ねてるのか？ 可愛いとこあんじゃない。

「……そのライターの名前、教えなさい」

「……………はい？」

「貴方達に対してそんなふざけた事を言った女の名前を教えろって言ってるの。SNSに晒してまともに活動できなくしてやるわ」

「アンタならほんとにやりかねんしちよつと影響力あるからやめて」

全然違った。可愛いとこよりアホなとこあったわ。

何で俺らよりヨヨさんの方が怒ってるのさ。あれか、きくり姐さんが認めてるバンド（ヨヨさんが認めてるかどうかはさておき）を侮辱するヤツは許せんみたいな感じか。何もここでツンデレ発動せんでもいいのに。

「いくら正論だからって言い方ってのがあるでしょ」

「ヨヨさんが言いますか」

「聞いている限りだとその人の言動は度が過ぎてる。姐さんが気に入ってるバンドに頑張ってる人達なんていない。そんな何も無い人達の演奏じゃ姐さんには響かないん

だから。見る目のないライターが言うような事なんて何一つ気にしなくていいわ。どうせ普段からくだらない批評記事しか書いてない輩でしょ。ああいうのは一度くらい痛い目見ないと改心しないわよ」

「ツンデレつつうかツンドラ要素しかない発言なんだけど。トウイッターフォロワー数1万人の人が晒すと割と普通に拡散されてマジで終わるかもしれないねえからやめてくれよ。そんな復讐紛いなこと望んでる訳じゃないから」

幕張イベントホール分の拡散力とか怖すぎるわ。

大丈夫かこの人。いつかトウイッター炎上しそうで心配になってきたんだが。変な輩にリプで絡まれてクソリプ合戦という名のレスバしてそう。けどヨヨさんレスバ弱いからなあ。

「貴方だって失礼なこと言われたんでしょ。悔しくないの!」

「え、まあ、みんながあんなこと言われたし、悔しいよそりや」

「だったらなん」

「だからこそそんな陰湿な仕返しは望んでないんだ」

「い、陰湿……!?!」

あ、余計なダメージ入れちゃったかもしれん。

一気にしおらしくなっちゃった。ヨヨさん負けず嫌いなのに打たれ弱いところもあるからどこが急所なのかよく分からん。

「あいつを見返すために結束バンドの音楽で結果を出す。みんなですう決めただよ。俺の必要性は結果の副産物でいい。みんなが少しでもバンド活動に専念できるようサポートするのが俺の役目だからな。自分のやる事はそれ以上でもそれ以下でもないだ」

「(……やっぱり欲しくなってきたわね)」

「?」

なんか小さく呟いてるせいで聞こえない。これは別に俺が難聴系主人公だからという訳でもなく、マジで隣にいるのにボソボソ言ってるから聞こえないだけだ。

コミュ症特有のボソボソ声ってほんと何言ってるか分からない。後藤さんはまだスキんシップで伝えてくるからまだ何となく分かる方だけだ。

「……まあ、貴方が望んでないならいいけど。ふんっ」

「お、おう……?」

よく分からんけど収まってくれたのならありがたい。

ヨヨさんもヨヨさんで暴走したらどうなるか分からないもの。

何はともあれ不穏なムードから平和なクリスマス会に戻って良かった、

「あ~~~~!! やっぱここにいらあ〜! わらしずつとひとりでまってるんらよ〜!!」

「チイツ! 閉店の看板出して関係者以外(酔っ払いも)立ち入り禁止って書いたのに普通に入ってきたやがったか!? 店長対策失敗です! 俺達の平和な誕生日会が潰されますよ!」

「諦める優人。ヤツが来た時点でもう手遅れだ」

なん……………だ……………。

来ただけで全てを終わらせられるのかきくり姐さんは。それなんてシャックス。

「バレちまったならもういいか。つうかお前はSICK HACKのみんなともう飲んでるかと思ってたわ」

「あ〜イライザはどうじんし? の締切があるんだって〜」

なんと。イライザさん結構切羽詰まったのか。

ちよくちよくロインでアニメについて語り合ったり同人活動してたのは知ってたけ

ど、そういうや冬コミに当選して同人誌出すって言ってたな。良かったら来てネ〜とか言われたし、年末はさすがにバンド活動も休みになるから一人で行ってみるか。

「んで志麻はなんかドラムぶつ叩きまくってて荒れてたよ〜！ ライブ後は毎回こうなるから手がつけられないんだよね〜。けど私がいたおかげでドラム上手くなっただな〜」

「全部お前のせいだって自覚はないのか。ないよな」

店長ほんとに諦めてる反応だな。確かにこの酔っ払いには何も効きそうにない。強いて効くなら酒没収ぐらいか。……いやそうしたらしたで暴れそうだな。

「さすが姐さんね」

「絶対ああいこうとは見習わないでくださいよヨヨさん。厄介がクソ厄介になるんで何が厄介よ！」

だからそういうとこだって。

隣からヨヨさんにチクチク言われ続けるのを適当に流していると、いつの間にかどっか行っていた虹夏さんと喜多さんが戻ってきて、

「え〜ではそろそろ店長と21日に誕生日だった優人くんへの誕生日プレゼントお渡しタイムに移りま〜す！ シデロスのみんなは急だったから気にしないでね〜！」

「何もそこまでしなくてもいいのに」

「同感です」

男子高生が同年代の女子達からプレゼント貰うって結構むず痒いんですが。店長にあげるだけじゃダメなんですかね。

そして両隣から驚愕の視線をいきなりぶつけられたんですけど。

ヨヨさんからはこの前誕生日だったの!? 何で前もって言ってこなかったの!? みたいな視線を送られてきた。言う必要ないしそもそもこのクリスマス会始まった最初に虹夏さんが言ってたでしょうが。

その後藤さんからは店長のプレゼント買うの忘れてただけどうしよう助けてゆうくん!? って視線が送られてきた。やっぱ何も覚えてなかったなこいつ。それは忘れてた君が全面的に悪いです、以上。

「まずは喜多ちゃん！」

「私からはこれです！ 店長にはハーバリウムとお花のリップです！」

「おお、ありがとう……」

さすが喜多さん、いかにも女子って感じのプレゼントだ。

実用的なりっぴに可愛いインテリアのハーバリウムとは、プレゼントの手慣れた感じが凄い。これが陽キャか。

「優人君にはこれねっ」

「これは……プレスレット?」

「そう! 優人君って普段あんまりアクセサリーとか付けないから、これを機に付けてみるとかどうかなって! 好きなデザインと文字を入れられるやつをネットで買ったから文字もちゃんと入ってるわよ!」

赤を基調として所々ピンクと黄色と青の縦線が入ったプレスレット。結束バンドのそれぞれをイメージしたカラーになってるのか。

それで肝心の文字は、『結束バンド』と白く書かれていた。……うーん、オシャレ……なのか? やべえ、分かんねえ。けど一応文字を裏側にしても使えるっぽいし、普段使いならそつちでいいかな、多分。

「これでメンバーじゃなくても優人君が結束バンドの大事な一員って証になるわね!」

「……ありがとな、喜多さん」

裏側にするのはもうちよつと後でいいか。

しばらくはそのままにして付けてみよう。せっかく貰ったんだし厚意には甘えておこうかな。

「じゃあ次はリヨウ！」

「プレゼントって値段じゃなくて大切なのは気持ちですよね」

「それあげる側が言う台詞じゃなくない？」

絶対用意してないじゃん。いや容易に想像はできたけど。

「用意してくる」

そう言つてリヨウさんは飛び出ていった。

さつきあんなに寒がつてたのに自ら外に行くとは、その意気だけは認めてやろう。つか買いに行くとしてもそもそもお金持つてないはずだよな。何しにいったんだ？

「戻ってくるまでまだ時間ありそうだし、次の人にプレゼント渡してもらおうかな」

「はいはい！　じゃあ私が渡しまゝす！」

「嫌な予感しかしねえ」

きくり姐さんの言葉に店長とハモツた。

や、まあ、ね……。そうなるでしょ。

と、危惧していたのも束の間、

「私はくなんと肉と現金れす！」

「姐さんどこから盗んできたんですか！」

「真っ先にその可能性に至るのをおかしいでしょ」

ツツコミはごもつともだが普段がアレなので擁護できねえ。

「肉と現金が当たるポイントシール100点分ですよ！ 先輩とゆうきゆん二人で協力して残り100点分これ買ってね」

しかも一人一つじゃなくて店長と協力制かよ。どっちか当たったとしても報酬は半分ずつなのね。

まあ、きくり姐さんにしては珍しくまともなプレゼント……になるのか。大事なのは気持ちだもんな。

「……ありがとな」

「きくり姐さん、ありがとうございます」

店長が紙を受け取る。残り10点分は自腹だが、ちよつとした夢を見る気分で楽しむのも悪くはないか。

そして、スマホでそのサイトを確認していたきくり姐さんが言った。

「あ、これ期限すぎてるわ」

「ゴミ」

「カス」

流れるように店長が即座に紙を破り、俺がそれを受け取ってゴミ箱へダストシュートのコンボ。

一瞬で感謝の気持ちはゴミ処理場へと消え去った。

76. クリスマスイブの夜

「じゃあ次はぼっちちゃんー！」

くずり姐さんのプレゼントを然るべき場所に捨てた後、リヨウさんが外で作ってきた雪だるまピエールくん（リヨウさん命名）を店内に持ってきて店長からどやさされていた。アホだなあ。

そして一応リヨウさんの番も終わり、虹夏さんは順番通りに後藤さんへ名指しした。当然、さっきの視線からしてこの子が店長に渡すプレゼントを買い忘れてるのは察している。

普通に自業自得なのでこのまま放っておいてもいいのだが、何かないかと必死に周囲を見渡してプレゼントの代わりになる物を探しているのを見てるとこっちが情けなくなってきた。

一応保険は用意してあるけど、どうするか。

「ゆ、ゆうくうんく……」

「……はあ」

出てくるのは大きな溜め息。

何故かピンクジャージのポケットから出てきた目薬を俺に見せながら泣きついてきた。のび太かお前は。

ここで俺が突っぱねると精神崩壊して即興弾き語りソングとかいうドン引きされる地雷プレゼント第一位（※下北沢調べ）を披露するに違いない。

そうなるよこの場合は聖夜の天国ステージから血濡れの地獄会場になってしまふ。さすがに俺の誕生日会も兼ねてる以上、見え透いた最悪な未来は回避しておきたい。

幼馴染の失態は今までも数えきれないほど見てきたが、何度も見させられるこっちの身にもなつてほしいものだ。面白いを超えてもはやいつ爆発するか分からない爆発物を見ている事しかできない人質になつてる気分だ。笑えねえ。

あと俺の腕を強く握つてきてるせいで既に逃げ場はない。こいつ、あわよくば俺を道連れにしようとしてやがるな？

まあ、即興弾き語りなんて俺が付き合うはずもなく、できるだけ虹夏さん達に気付かれないよう自然に後藤さんを連れ店長の前へと移動する。

保険を持つておいて本当によかった。これでとりあえずスターリーを葬儀場にしな

くて済む。

「店長へのプレゼントですけど、実は俺と後藤さん二人で一緒に選んできたんですよ、後藤さん」

「……え？ えっあつと、うっ、うん……！」

「ほうほう、確かにぼっちちゃん一人でプレゼント選ぶのはハードル高そうだもんねえ。優人さんと一緒に選んだんなら安心もできるでしょう！ それではどうぞ〜！」

後藤さんへの理解度が高いのはさすがですけど、自然にデイスリが入ってますよ虹夏さん。

いや何も間違っていないから否定はしないけども。100点満点の回答だけでも。

「ということで俺達からのプレゼントはこれです」

事前持っておいた袋からプレゼントを取り出し、店長に渡す。

「バスグッズとスキンケア用品です」

「おお、思ったよりちゃんとしたプレゼントなんだな。前の二人が論外すぎて余計良くみえるわ」

ハードルが下がったという意味では一応あのクズベースト達も役に立ったということか。

いや別に立つてはないな。何もしてないに等しいし。

「バスグッズは入浴剤です。バスボムなんで何が出るかは風呂入った時のお楽しみという事で」

「……一応この歳にもなっておもちゃ系のバスボムで楽しむと思われてんのか私。まあいいか、ありがとな」

ちなみにバスボムに入ってるおもちゃ、というよりはファイギュアと言った方が正しいか。ファイギュアは可愛いうさぎだったりパンダだったりする。

みんなの前で表立って可愛い系の物をあげるとそれこそキツイと思われそうだし、これなら良いカモフラージュになるだろう。

「んでスキンケア用品は入浴後に使うやつですね。店長ほどの人ならまだ大丈夫かもしれませんけど、女性に美容品は必須でしょうし年齢的にも気を遣わな」

「ありがたいけどもうそれ以上は言うな。言うな……」

店長……誕生日なのに表情に陰りが……30歳にもなったらもう素直に誕生日も喜

べなくなってくるのか。

確かに20代と30代ではパツと聞いた時の印象かなり違ってくるもんね。強く生きてほしい。

「いや〜ぼつちちゃんの事だからもしかしたらぶつ飛んだ事しそうと思っただけけど何もなくて良かったね〜！」

「あっはい……」

俺が阻止したからね。せつかくシデロスのみんなとも仲良くなれ始めたのに後藤さんのせいで距離遠くなるの嫌だし。

いやヨヨさんもぶつ飛んでるから慣れてそうではあるけども。二人共方向性が違うタイプのやばさだからな。どっちも触るな危険。取扱注意人物。

「ゆうくん……その、ありがと……」

「まったく、世話になつてる人の誕生日くらいはちゃんと覚えとくんぞぞ？ 次はないからな」

「うん……」

何はともあれ最大の難関は突破した。

これでもう何も心配することはないだろう。……ないよな？

「ぼつちちゃんも明日も優人くんと家族ぐるみでクリスマス会するからその時渡すんだつたよね。んーじゃ、最後はあたしからつて事だ。優人くんにはあ、はいこれっ！」

「……二つありますけど？」

虹夏さんから渡されたのは二つのプレゼント。

どつちか選別的なやつなのかな。

「どつちが良いかな」とずつと迷つててさ、思い切つて両方買つちやつた！ だから二つとも優人くんのだよ！」

「マジか……聖夜の天使じゃん……」

いやプレゼントの数で優劣つける気は一切ないんだけど、迷つたからつて二つ買つちやう虹夏さんどうかしてるよ（誉め言葉）

ここで遠慮すると変に押されそうな気がしたので素直に頂くことにした。とりあえず片方の袋に入つてるプレゼントを取り出す。触り心地的に服かな。

「ハ、ハ、これは……!?!」

バツと袋から出して服を広げる。それは一見普通のパーカーだった。

しかし、違うのは前に描かれているデザイン。シンプルなパーカーならいくつも持っているが、これはさすがに持っていなかった。

何故なら。

「11月に抽選販売されたアニメのデザインパーカーじゃないですか！ 俺も欲しかったのに抽選落ちて買えなかったこれを、何で虹夏さんが……？」

「ふっふーんっ、優人くんがアニメ好きだって事はもう周知の事実でしょ？ でも特に好きなアニメって何だろうなってなった時にバツと出てこなくてさ。ほら、優人くんって聞いてないのにたまにその季節の時やつてるアニメで一番好きな作品の話を早口でオススメしてくるじゃん？」

遠回しにオタク特有の早口デイスられたような気がしたんですけど気のせいですかね。気のせいだといいな。

「それで適当に調べてたら優人くんがその時話してたアニメの服が抽選で発売されるって見たからダメ元で応募したら当たったんだよね。でも一応買った方がいいものの、これをあげて喜んでくれるかも分かんないしこういう服って私服として着るものなのかも

知らないから、予備でもう一個プレゼント買ったって感じかな」

「いやめっちゃ嬉しいですよ！ このアニメは今もやってるんですけど、ネットでも評判で毎回トレンドに入るくらいには話題になっ」

「はいその話はまた今度ゆつくりね」

「あっはい」

なるほど、こういうところだな俺。あまりにも嬉しくてついつい熱く語っちゃうところだった。

ちなみに大まかな説明をするとだ。アイドル好きの医者があるとある理由で死んで、推しだったアイドルの子供として転生するという作品である。最初は普通にアイドル物として見てたから後の展開には驚かされたね。

「もう一つの方も開けてみてよ。まあ一目でそんな喜んでくれるならいらなかったかもだけど」

「そんな事ないですよ。虹夏さんから貰えるなら例えムカデだろうが黒いテカテカ野郎だろうが喜ぶ自信ありますよ」

「それは渡すあたしが嫌だよ!？」

何ならその辺で拾った石ころでも草でも良い。リョウさんとは違って虹夏さんの

拾ってきた物にはもれなくご利益が付いてくるからね。

拝まなきや……と思いつつも一つのプレゼントを開けると、

「おつ、これつてヘッドホンですか？ あれ、まだ何かある」

「そだよ。優人くんもギター弾いたりするならこれから録音する機会もあるかもしれないし、ヘッドホンアンプ持つといた方が良いかなくて！ これがあたしからの二つ目のプレゼントでしたあゝ！ つて優人くん泣いてる!？」

「ええ人やあ……やっぱ虹夏さんしか勝たん……虹夏さんがいつちやん天使……」

こんなどストライクに俺が喜ぶ物をくれるだなんて虹夏さんやっぱ天使なんよ。

それでこそ俺の推しの子。いやくとびきりの愛貰っちゃったなあゝこれ!! 今なら重曹舐めれるかもしれない。いつそこの場で舐めてやろうかなもう!!

「なんか知らんが嫌な予感するから誰かそこの黒一点押さえつけとけ」

「誰か重そむごぐあ!？」

「はい優人君私がこのチキン食べさせてあげるから大人しく座つてましようねえ〜!」

テンション上がった俺の口へ喜多さんが割と大きめのフライドチキンを突っ込んだ。
きた。

あ、顎があ……顎が外れるう!?

「ヨヨコ先輩、清水さんって面白い人っすね。時折やばいっすけど」

「しつかりしてるとこもあるけどちゃんと子供らしくて可愛いところもある男の子って感じだねえ!」

「さすが凄いいモノを持つてる人なだけありますう……」

「みんなのあいつへの評価バラバラじゃない……」

俺が喜多さんから強引にチキンを押し込まれて悪戦苦闘してる間に何だかシデロス方面から視線を強く感じる。

やっべ、後藤さんがやらかささないようにしてたのに気付いたら俺がやらかしかけてるじゃん。俺をこんなな狂わせるなんて、虹夏さん……罪な女だぜ……。

「優人君次行くわよ〜!」

「ちよつまつ……喜多さんもういいから! もう何もしないからせめて普通に食べさせて!?! クリスマスに女の子からのあーんという男子なら誰もが羨む甘いイベントなはずなのに俺が恐怖感じてる時点でおかしい事に気付いて!?! これじゃちよつとした拷もむぐごばあ!?!」

「きゃ〜！ 男女であーんなんてクリスマススって感じるわ〜！」

なんか言ってるが俺はもう若干泡吹いて倒れそうです。

クリスマススイブにチキン食わされて殺されそうになってるの世界で俺だけなんじゃないか。後藤さんはあわあわしながら俺を助けようか迷いつつもしつかり手はフライドチキンへ伸びている。やっぱ揚げたチキンなら何でもいいのな。

「いや助けろやあ!!」

「んぎやああああああああああ〜!?!」

「お、自力で戻ってきたね」

二個目にぶち込まれたのが骨なしチキンだったから何とか丸呑みで事なきを得ただ。

俺クラスの人間にもなると食道を広げる事くらい造作もない。我ながら人間やめるなどと思う。それもこれも全部後藤さんのせいにしておこう。彼女の対応をしてたらこうなってたし。

そんな後藤さんは俺の声に驚いて喉にフライドチキンを詰まらせ死んでいた。

クリスマススイブにフライドチキンを喉に詰まらせて死んでるのって世界で後藤さんだけなんじゃないか。ふん、所詮この後藤はアホピンク四天王の中でも最弱よ……。ヤ

ツが死んでもいずれ第二第三のアホピンクが現れるであろう……。

「そういうのいいから優人くん早くぼっちちゃん復活させてあげなよ」

「あ、うっす」

何で独白聞こえてんの怖いよメタいよ。

「ザオリクッ！」

「……んはっ!? わ、私はいったい……」

「虹夏さん、蘇生完了です」

「ん、ご苦労さま」

「ええ!? あれドラクエの復活呪文っすよね!? どうやってやったんですか!？」

意外な方向から反応があった。

何やらテンション高めになっている黒マスクの長谷川さんだ。どうしたんだろう。

「え、いや……ノリで?」

「ノリでできるもんなんですか!?! 凄いつす!」

「ふっ……それでできてしまうのよ清水優人という人間はね……」

「何でアンタが得意気なんだよ俺の何を知ってんだよ」

「なつ……そ、それくらいこれから知っていけばいいだけでしょ!? そのうちお互いの知らない事なんてなくなるわよ!!」

距離の詰め方エグくない?

「ただ俺と友好深めるつもりなんですか。そこまでいくともう友人の枠超えちゃってるよ。」

「やっぱり只者じゃないですよねえ〜? ぼっちさんもですけどお」

「そのセリフそっくりそのままバットで打ち返させてもらってもいいですかね内田さん!!? 君とは全体的にまともな会話したことない気がする! だって目が合わないもの! 虚空を見つめてるもの!!」

何で私服も派手な格好なのに気配もなくニユルツと出てくるんだこの子。

あとその抱えてる二つの人形さんちよつと怖いからできるだけ近づけさせないでほしい。たまにそつちから視線感じて寒気するので。

「はいーいそろそろ時間も良い頃合いなのでお開きにするよ〜」

良い所で虹夏さんから助け船が出された。

それを合図に半ば逃げるように俺は後藤さんの背後へ隠れる。

「あつえつ、ゆ、ゆうくん……?」

「気にするな後藤さん。ただの避難だ」

「うん……?」

よく分かってないのか小さく首を傾げている。だがそれでいい。だって俺も十二から逃げてるのかよく分かってないから。

やっぱバンドマンって変な人しかないのかな。

あれからみんなでわいわいしながら(後藤さんとヨヨさんを除く)片付けを済ませ、気付けば俺は喜多さんから貰ったブレスレットと虹夏さんから貰ったパーカーを身に付けていた。

話している最中にどうせならちゃんと言われたからだ。何だかこそばゆいです。

そしてパーティーも無事終了し、駅まで虹夏さん達が見送ってくれる事になったのでみんなで移動していく。

もちろんシデロスのみんなも含めてだ。
雪が降っているその道中。

「結束バンド！」

ヨヨさんが突然俺達に声をかけてきた。

「最後に言っておくわ。私達も未確認ライオットに出るから覚悟しておきなさい！ 今決めたわ！」

さつきまで静かにパーティーを楽しんでいたように見えたけど、まさかそんなこと考えてたのかヨヨさん。

「どうか今決めたのね。逆にそんな堂々と言っちゃっていいのかいそれ。メンバーに報連相してたくない？」

「あと書類選考で落ちるなんてダサイ事されたくないし改善点まとめてあげたから！ もっと上を目指したいんならあ、ありがたく読めばっ？」

「えつとお、ありがとう……っ？」

あまりのツンデレ具合に虹夏さんも困惑してらっしやる。

よく考えたらヨヨさんって後藤コミュさんと店長ツシマレを掛け合わせたみたいだな。……うん、褒め言葉になってないのは確かだ。主に前者部分が強すぎてマイナス要素にしかなってねえ。

「私ら聞いてないんですけど」

「相談はちゃんとしましようよ！　そういうところでみんな辞めてくんですよっ？」

「あつ出ても……いいですか……？」

「ダサイなあ……」

かっこよく宣言したのにメンバーから怒られるその姿は泣けてくるぜヨヨさん。

アンタに爆弾発言はまだ早かったようだね。その辺はまだどっか外に捨ててきたデリカシーゼロのきくり姐さんを見習うべきだわ。やっぱ見習わなくていいかな。

「ぐぬう……ふんっ、まあいいわっ。清水優人！」

「んあ？　何ですか？」

今度は俺に予先が向けられる。

もうしつかりとこちらに指を差してきてロックオン状態だ。今更何を言っつてこようがヨヨさんの事だし軽くないしちゃうよぼかあ。

と、そんな軽薄な事を考えていたからか。

「貴方の今日の動きを見ていて思った事を言わせてもらおうわ」
「？」

彼女の次に放った言葉を聞いて。

みんなはおろか、俺でさえ言葉を失うには十分だった。

「清水優人。貴方、新宿FOLTに来てシデロスのサポートをください」

「は？」

金沢八景駅に着き、俺は後藤さんと帰路についていた。

こっちにもまだ雪が降っている。

ここまでの帰り道、電車の中も、お互い無言のままだった。

気心知れた幼馴染故の気にならない沈黙とは違って、今は少し気まずさも感じさせるような沈黙状態。

結局あんな事を言ったヨヨさんはすぐに長谷川さん達にいきなり何言っただと首根っこを掴まれながら改札の向こうへ連行され、発言の真意はうやむやのまま終わった。

あの後俺達はよく分からない雰囲気の中、普通に別れの挨拶を済ませ各々の帰路にいった。

そして今に至るのだが……。

「いや、まさかヨヨさんがいきなりあんな冗談言うなんてな」

「……え？　じょう、だん？」

後藤さんが反応した。

何て声をかけるべきか迷ったけど、やはりこの件が黙ってた原因か。

「当たり前だろ。あの人って後藤さんと違うタイプで人付き合いが苦手でさ、パーティーの後だったし最後に何か言っただろうとして空回りしたんだろ。すぐ長谷川さ

ん達に連行されたのがその証拠だよ」

「……そつ……か……そう、なんだ……」

「おい、まさか俺が鵜呑みにして向こうに行くとか思ってたんじゃないだろうな？」

「うえっ!?! い、いや、別に……そんなこと、はあ……あだつ!?!」

アホピンの額にデコピンを一つ。

「……つたく、お前がスターリーにいるのに放ったまま向こう行く余裕なんてねえつつの。そんなくらい分かれバカ」

「あうう……」

「……」

まあ、あれを聞いて何も思っていないと言えば嘘になるが。

いくらヨヨさんとはいえあの局面であんな冗談を言うとは思えない。言葉足らずで相手との付き合いが下手、それがヨヨさんだという事を俺はもう知っている。

つまりあの言葉には必ず何か裏があるはずだ。

……いやまさかマジで冗談で言ったとかないよな。……ないよね？ あれ、ちよつと自信なくなってきたかも。

「あのっ、ゆ、ゆうくんっ」

ヨヨさんの生態をもっと把握しておく必要があるかなと思っていたら後藤さんの前で立ち止まった。

顔を見るに俺の言葉を信用したのか先程あつた不安はなくなつたようだ。

「どした？」

「え、えつと……こ、これっ」

そう言つて彼女が取り出したのは小さな箱だつた。

でもつてここまでされて何か分からないほど鈍感でもないのが俺である。

「誕生日プレゼント？」

「うん……」

「けどこれって明日のクリスマスパーティーで貰う予定じゃなかつたっけ？」

だからプレゼントを渡す時も後藤さんの順番は飛んだはずだつたけど。

「そう、なんだけど……どうしても今、渡さなきゃと思つて……。ゆうくん今虹夏ちゃん達から貰つた物付けてるし……」

という事はこれも身に着ける物だろうか。

「開けても？」

「う、うん」

小さな箱を開けてみる。

するとそこから出てきたのはとても小さなギターだった。いいや、正確にはギターのキーホルダーだった。

「これって……」

「あ、えつと……一人でお店に探しに行く勇氣はなかったからネットで探してみたら見付けて、渡すならこれが良いかなって……」

「……」

「その、ゆうくんが使ってるギターのキーホルダーなんだけど……」

そう、俺の使ってるギターのキーホルダー。

それが後藤さんからの誕生日プレゼントだった。こんな事があるなんてな……。

「……はは、あっははははっ！」

「ゆ、ゆうくん……?」

思わず笑いが零れてしまう。

いけないいけない、せっかくプレゼントをくれたのに笑い出すのはさすがに失礼か。

「悪い悪い、ありがとな。……でもそっか、そういう事もあるんだなあ。いや、偶然つてのはほんと凄え」

「?」

いまいち状況を掴めていない後藤さんがポカンとしているが仕方ない。

何せ俺しか分かっていないんだからそういう事にもなる。

本当なら明日渡すつもりだったけど、そもそもフライングで一日早く渡してきたのは後藤さんだ。

ならば今俺も渡したっておあいこだろう。俺はバッグから小さな箱を取り出して後藤さんの前に出す。

「ほら、一日早いけど俺からもクリスマスプレゼントだ。これでお互いフライングって事でおあいこな」

「えっと、あ、ありがとう……開けてもいい?」

「おう」

小さな手で彼女は同じように箱を開けていく。

俺が渡したプレゼントの箱のサイズは、後藤さんから貰った物とまったく一緒だった。

「……え？ これって……」

つまりは、そういう事だ。

「まさかお互いプレゼントが被るなんてな。これも幼馴染だからってか」

「ギターの、キーホルダー……。それも、私が使ってる……」

「どうやら息はピツタリみたいだな」

何の偶然か、運命の悪戯か。

お互いがお互いの使っているギターのキーホルダーをプレゼントとして渡す。こんな事がクリスマス夜の夜に起きた。

「どうせなら後でお互いのギターケースに付けるか。俺のは家に置いてあるし」

「……あ、うん」

覗き込むと傘の下にある後藤さんの顔が赤くなっていた。

さすがに雪が降ってる中立ち止まりながら話すのは寒いか。少なくとも俺はくっそ寒い。

これ以上12月の夜にじつとしているのは個人的に我慢できないので歩き出す。

「ほら、寒いしさっさと帰ろうぜ。早くあつたかい部屋であつたまりてえ。そうだ、せつかくだからキーホルダー付けたギターケース並べて写真でも撮るか」

「う、うんっ……!」

「何でいきなり元気になつてんの」

「うへへえ……キーホルダー、お揃いだね……」

「……あー、まあ、そうなるか。……なあ、やっぱ付けるのはなs……いや分かつたつ。付けるから今にも本気で泣きそうな顔すんなって!?! せめていつもみたいに溶けるか何かにしてギャグ落ちにして!! 聖夜に外で奇声混じりの泣き声はご近所迷惑どころか俺が社会的に殺されるから!?!」

12月、クリスマススイブの雪が降る寒空の下。

凍り付くような空気にあてられ全身寒いはずなのに、どうにも顔一点に熱がこもった

まま俺と後藤さんは街灯だけに照らされながら家へと歩を進めていく。

77. 突撃、山田家!

『クリスマスパーティーの最後に言った言葉、冗談じゃないから』

あの後ヨヨさんからこんなロインが送られてきてから、それがずっと頭の中で引っかかっていた。

その時のロインは何か軽く受け流しあちらも深くは踏み込んでこなかったが、言葉の意味を上手く探り取れないでいたのだ。

ツンデレヨヨさんの言う事だからそのままの意味で受け取る事はまずない。

どこにツン要素があつてどこにデレ要素があるのかを探したけど、何ともまあ不思議な事である時の言葉にはどちらも当てはまらないのだ。下手な暗号よりも難解つてどういう事だ。日本語難しすぎん？

本来なら特に気にせずいなせば良いだけだったのに、何故か妙に気になって仕方ない。まるで喉の奥に魚の小骨が残っている感覚だ。

事あるごとにヨヨさんの言葉が俺の脳内を駆け巡ってくる。ちよつとしたタチの悪い呪いのようだ。

「……くんっ」

いつそ本人にどういう意味か聞いた方が早いとは思うが、言葉が言葉だけに少しばかり抵抗感もある。

俺が結束バンドをどう思っているかはヨヨさんと初めて会った時に話したから理解はしてるはずだ。ヨヨさんもまだあの時の会話を憶えてるはずだし、だとすればあの言葉も聞いても俺の思いが変わる事なんてなく何の意味もないという事も分かっているはず。

「ね……ば、優……ん」

いや、むしろ分かってて言ってきたのなら、捉えるべき意味もまた変わってくる？

ロインでわざわざ冗談じゃないと送ってきた理由も、その先に何かの意味を隠しているから……？

なら——、

「優人君!」

「うおわっ!」

突然両耳から美少女の爆音ASMR襲撃を受けたワイ、喜ぶよりも先に驚きが勝る。というか一気に正気に戻された。

「もうっ、何ぼーつとしてるの。そんなんじやそのうち電柱にぶつかっちゃうよっ」

「優人君、最近考え事してるの多くないかしら? それとも正月気分まだ抜けてないとか?」

両隣にいるのは虹夏さんと喜多さん、そして後ろに後藤さんだ。

俺達は今スターリーにいる訳ではなく、とある場所へ向かっている。

そして喜多さんの言った通り既に年は越してあけおめことよろの賞味期限もとうに超えていた。

つまりは冬休みが終わって新学期が始まりはや数日、いつもの日常が戻ってきたという訳である。休みが終わるのは早いね。

「あく……かもなあ。イベント楽しんだりのんびりできてた冬休みが恋しいよまったく」

「イベントって、冬休みどっか行ってたんだっけ？」

とりあえず話を逸らす事はできた。

都合の良い解釈をしてくれたので変に勘ぐられる前に全力で乗っからせてもらう。

「はい。年末は一人でコミケ行つてイライザさんの漫画買いに行きましたよ。あとはカメラ持ってるからコスプレイヤーの写真撮ったりとかも」

「お互いアニメ好きで気が合うもんね〜」

「同士がいると異性とか関係なく話が盛り上がるから最高なんですよ。俺は参加側じゃないのに打ち上げにわざわざ誘つてくれて二人だけでずっと帰るギリギリまで喋りましたし」

「よくそんな話尽きないね……というか年上の女のひとそんなに長くいても平気なんだ？　気まずいとかないの？」

「手の掛からない年上の女性ってだけで非の打ち所なくないですか？」

「……うん、普段からほんとご苦労様だよ」

何でかとても優しい目で微笑んでくる虹夏さん。言っておきますけどその手の掛からない年上の女性には虹夏さんも入ってるんですからね。その微笑みでもう俺の心は浄化されそうです。

え? 山田? きくり姐さん? 何の話?

「年明けは後藤家でこたつを満喫しながら後藤さんと一緒にみかん食ってたら連絡してきた喜多さんに連行されて三人で一緒に初詣に連れてくれましたね」

「連行って言い方しなくてもよくないかしら!」

いやだつて大晦日には既に俺んとこと後藤さんよこの家族みんなで初詣行つたところだし……違う神社で二回目の初詣つてどうなのみたいな。

二回目なのに初詣つて言つていいのとかあるじゃん。お前違う神社で初詣してたよなとかそこに祀られてる神様に思われてるかもじゃん。

「んでその神社で俺と喜多さんのクラスメイトの女子達に遭遇してからは地獄でしたよ。後藤さんもいるつてのにいきなり新年カラオケに参加させられるわ男俺しかいない中で歌わされるわ妙に女子から優しい視線向けられるわで早く帰りたかつたです。あと後藤さんはバンドやつてるから歌上手いでしょとか無茶ぶりされてて危うく灰になるよでした」

「ぼっちちゃんは何となく想像できるなあ。ボーカル以外も歌上手そうとか思われるの何なんだろうね。てか優人くんの歌声はあたしも興味あるんだけど! 聞いた事な

いもん！」

「そりや聞かせる機会もありませんでしたしね。俺もカラオケ自体あれが初めてでしたけど。つっても別に平均くらいですよ？ 特別上手くもなく下手でもなくです、多分」

今まで友人と放課後遊ぶ機会がなかったから地味にカラオケは初めてだったが、案外普通に歌えた点は個人的に収穫だった。

自分の部屋で好きな歌を口ずさんだり風呂でたまに気持ちよくなりつつ熱唱してたのが良かったかもしれない。

「見てて思ったけど優人君って初めてだった割にアニソンとか色々ちゃんと歌えてたわよね？ 何かノリノリだったっていうか慣れてる感あったというか」

「ああいうのは逆に恥ずかしがったらダメなんだよ。みんなが知ってそうなアニソンさえ入れときや大体無難だし、歌い方も歌手のを真似れば感情の込め方分かるし何とかなるからな」

「ギターもそうだけど歌も普通にいけるって結構器用よね優人君」

「喜多さんにやあ負けるよ」

基本自分の好きな曲しか聴かないから俺は流行りのJPOPはよく分からんが、流行りモノをちゃんと抑えてて盛り上げながら歌う喜多さんはさすがだった。

俺は精々世間にも知られてるアニソンや好きなバンドがドラマでタイアップしてた曲しか歌えなかったもの。後藤さんなんて顔のパーツ落としながら消臭力のCMソング歌おうとしてたからな。何でそこでウケを狙おうとしたのか。

「あつゆうくん……も、もし良かったら今度弾き語りの練習とかもしてみる……?」

ふと後ろから俺の顔を覗き込むように後藤さんが声をかけてきた。

弾き語りねえ……。ギターを始めてそろそろ五ヶ月。喜多さんは約三ヶ月でギターボーカルとしてライブしたし、俺も順調に上達してるって言われるから始めるには良いタイミングって事にもなんのかな。

「……おう、面白そうだしやってみつか。またご教授頼むわせんせー」

「う、うんっ、毎日夜空けてるから頑張ろうね……っ」

毎日やるのね……いや別にいいけどさ。

という事は今日からかあ、と思いつながら寒空を見上げる。歩く度にカラントツカラントツという音が俺と後藤さんのギターケースから鳴っていた。

その音に反応するように、虹夏さんがこちらに振り向いて、

「そーいやさつきから気になってただけどぼっちちゃんと優人くんのギターケースに付いてるキーホルダーつてさ、二人とも自分のギターのやつだよな?」

「ええ、そーですけど。それがどうかしたんですか?」

「まさかクリスマス時のプレゼントつてお互いそれ渡しあつたとか?」

おっと、何やら虹夏さんからからかいオーラが出てきてるような……。

「……まあ、ですな」

「ええ〜! 何々い〜! クリスマスにお揃いのキーホルダーあげるなんてすっごい幼馴染つて感じるな〜! 偶然だけどある意味必然的な奇跡つてやつかな〜?」

くそつ、こういう時は普通にめんどくせえなこの小悪魔天使つ。

いくら年上お姉さんといえど虹夏さんもまだ高校二年生というピチピチの女子高生。こういつた事に関心や興味を示すのも不自然ではないとは思いますが、それにしてもノリノリすぎやしませんかね。頭上のドリトスぶんぶん揺れてますよ。

「うえへへつ、うえへえ〜……私達奇跡起こしちゃいましたかね〜つ……」

んでもってこんな時だけ調子乗つてくるお前は何なんだ。久々に見たぞ体全体波打ってるの。どういいう人体構造してんだ。

「私もひとりちゃん達みたいに自分のと同じギターキーホルダー付けたいわ〜!」
「ならまずはりヨウさんから借りてるのじゃなくて自分のギター買わなきゃだな」
「うっ……バイト代はライブで消えるしお小遣いは友達と出掛ける時に使うから一向に貯まらないのよね……」

陽キヤも陽キヤで大変そうであった。

喜多さんの場合友達と出掛ける回数が一般人の数倍くらいありそうだし、オシヤレしたり映え写真撮りに行ったりするのだけでも結構お金使うもんな。陽キヤすぎるというのも考えものだ。

と、何気ない話をしてる内にいつの間にか前を歩いていた虹夏さんが立ち止まった。

「さて、着いたよ〜。ここがリヨウの家っ」

「……でけえ」

ここでようやく何故俺達が練習もバイトもしないで外をほつつき歩いていたのかを思い出す。

確か虹夏さんから休みの間リヨウさんがバイトにも来ず、学校が始まって一切の連絡を返してこないと言ってきたのがそもそもの発端だった。

そして元々リヨウさんに憧れて結束バンドに入った喜多さんは、何だかんだまだ一応それなりにリヨウさんをリスpektしていたからか山田欠乏症に陥り生きるのが辛くなっていたそうなの。

顔が良い生き物を好んでいる喜多さんには面食い属性を進呈しておく。相手の理想が高ければ高いほど将来苦労しそうだけど大丈夫か。

とまあこんな感じでじゃあいつそリヨウさんの家の様子を見に行こうという事になり、今に至るといふ訳だ。

虹夏さん曰く、多分作曲作りが難航していて無意識にプレッシャーをかけていたからかもしれないらしい。だから虹夏さん自身もそれを気にしてどことなく元気がないように見えたのか。

「豪邸ですわ〜」

「病院やつてるからねえ。今家にいるのかな?」

「とりあえずインターホン押してみましようか。虹夏さん、オナシヤス」

「あつ、あたしがやるんだね」

そりゃあね。いくら俺でもこんな金持ち豪邸のインターホンをおいそれと押せるメタルは持ち合わせていない。普通に緊張しちゃう。

ここはリヨウさんの家に来た事のある虹夏さんに任せるしかないのだ。怖い執事と出てきたらどうしようってなる。例えば黒執事とかハヤテのごとく的な人達とか。

どんな人物が出てくるかも分からないからか、後藤さんは俺の背後からひよっこりはん状態になっている。ギターケース背負ってるせいでいつもよりフィット感ないな。

虹夏さんが何の躊躇いもなくインターホンを押した。
すると。

『はい、どちら様でしょうか?』

「あ、リヨウのお母さんですか? あたしです、伊地知虹夏ですつ。ちよつと最近リヨウ見かけないから友達と見に来たんですけど……」

『あら〜虹夏ちゃん久しぶり! どうぞどうぞ、遠慮なく入っていいからね〜! 友達のみんなも大歓迎よ〜!』

「じゃあお邪魔しま〜す。ほら、入っていいだつて〜」

思ったよりフランクというか勝手に抱いていたお堅い病院経営者のイメージが音を立てて崩れていった。

聞いた感じの声だけだけど印象めちゃくちゃ軽いな。リヨウさんのクールキャラはどっからできたんだ。いや父親譲りの方かもしれないか。

虹夏さんの後ろに着いていくように豪邸に入る。玄関までにちよつと距離があるの豪邸っぽいな。

なるほど、それで左手に見えるのが芝生の庭か。めっちゃでか……あつ。

「つてリヨウ先輩普通にあんなどころにいますよ!」

「家にいるんかい! いやアレどういう状況!」

いたわ。普通にいた。

自分家の庭にテント張って寒いから寝袋の中で温かさに包まれている山田^{アホ}がいた。いやマジで何してんの。

「ちよつとリヨウ! こんなところで何してんの!」

「遠くに旅に出ようと思ったけど、準備してるうちに遠出するのダルくなつて庭でキャンプしてた。……というかみんな来たんだ」

準備中にダルくなんの何ともリヨウさんらしい。まだ庭にテント張る気力あつただけマシか。いやバカか。

学校やバイトにも来ないで遠出しようとしたのは、やっぱり作曲関係かな。

「テントの中にパソコン持ち込んでるしご飯もケーターリングしてますよ!」

「ゆるきゃん」

ゆるキャン△舐めてんのかこいつ。同じ青い髪でもしまりんの方が百万倍マジだぞ。もつと精進して。

そして同じピンク髪でもなでしこの方が百万倍明るくて行動力あるつてのに後藤さんは何故こうなのか。いや比べるだけ可哀相だな……。

「何でいきなり遠出なんかしようとしたんですか! 心配したんですよ!」

「……別に」

とりあえず寝袋の中から出てきてもらっていいですかね。いつまで芋虫モードになつてんだ。普通誰か来たら出てくるのがマナーだろ。

え、休みの間この人ずっとここに一人でいたの? すぐそこに家あるのに庭にテント張つてわざわざ寒い中寝袋で寝てたの? 頭大丈夫?

「何か心配しすぎて損した気分になつてきたよ……」

「大丈夫です虹夏さん、俺もなんで」

「この山田はとことん山田であった。」

さて、この芋虫をどう引きずり出してやろうかと考えてると、何やら遠くから足音が響いてきた。そっちへ視線をやってみたら見た目若そうな男女が豪華な食べ物を持ってやってきたのだ。

「リヨウちゃん！　BBQの準備できたよ！！」

「リヨウのお母さんお父さん！」

マジで？　あれリヨウさんのご両親なの？

普通に兄と姉って言われた方がまだ信憑性あるレベルなんですけど……。

「あらく虹夏ちゃんまた少し大きくなった？　いつ見ても可愛らしいわね！　後ろの子達はバンドの子かな？」

「おお、君達も参加するかい？　夜には花火もやるよ〜！」

どっちもテンション高えな。リヨウさんのクールさは遺伝でもないのか。

初対面の俺達にも優しくしてくれるようなご両親から何でこんなクズベーストが出来上がったのかだけちよつと知りたい。というか一応今日平日だよな。病院は？

「えっ、お仕事は大丈夫なんですか？」

「リヨウちゃんはずっと家にいるのが嬉しくて」

「今病院は休業してるんでーす!」

「おい社会人!!」

ナイスツツコミ虹夏さん。今虹夏さんがいかなかったら初対面の俺が割とキツめのツツコミしてたかもしれん。

大人はちゃんと仕事して患者と向き合ってあげなさいよ。

「ゆ、ゆうくん……BBQなのにケーキもあるっ……」

「どこで食い意地見せてきてんだおのれは」

予想以上に明るい親御さんが出てきて俺に重なるように隠れてたくせに、美味そうな食べ物出てきたらこれか。ちよろすぎんだろ。

……いや確かに美味そうだな。この肉とか絶対くそ高いやつだろ。和牛の中でも確実にランク高いよこれ。家だといつもこんな食ってんのリヨウさん。贅沢すぎても野草食ってるのがバランス調整にしか思えなくなってきた。

「ところで君、少しいいかな?」

ただ焼くだけなのも勿体ない高級肉をどう調理すればもつと美味そうにできるかと、

脳内シミュレーションをしていたら声をかけられた。

俺以外で唯一の男性、リョウさんのお父さんに。

「え、あ、はい。えっと、何でしょう？ あつ、自己紹介が遅れました。清水優人で」

「娘からバンドの事は多少聞いててね、四人でやってるガールズバンドのはずなだけで……なら君はうちの娘とどういった関係なのかなって」

「……」

無言でリョウさんを見る。ヤツはバツが悪いのか寒いのか、顔を見せないようにくるまつていた。

あの芋虫野郎……まさか俺の事説明してなかったのか……。どうしよう、真冬なのに冷や汗が出てきた。見た所この親御さん達はリョウさんの事を溺愛している。それはもう過剰なほどに。

そんな愛娘の家に突然見ず知らずの男がバンドの女子を数人連れてやってきたとなればどう思うか。

答えは火を見るよりも明らかだ。俺は病院の地下に連れて行かれて謎の人体実験をされるに違いない。それだけは回避せねば。

選択肢を間違えれば改造人間か植物人間の二択。

ただの友達とかバンドのサポート役だからと言うのは簡単だが、何せあのリヨウさんの親だ。そのままの意味を受け取ってくれる保証はない。こういうのは大概変な解釈をされて勘違いを起こしてしまう展開になるのが定番。

ならば変に見ず知らずの俺が説明するより溺愛する愛娘から俺達の関係性を言ってもらった方が信用してもらえらる確率も増えるというもの。

この間およそ0.3秒。

俺は即座に後ろにいた後藤さんを喜多さんに引き渡し、芋虫モードのリヨウさんへ向けて言った。

「リヨウさん、俺達の関係を誤解なく簡潔に説明してくださいえー！」

「ん」

くるまっていた状態をほぼ強引に剛腕の虹夏さんから解除されたリヨウさんが仕方なく寝袋から出てくる。

そしていつもの真顔のまま、彼女は自分の父親へこう言い放ったのだ。

「一生支えるって言ってくれた人」

78. 不可抗力の挨拶

「はっはっはっは！ いやあ、ごめんね。娘が男友達を連れてくるなんて初めてなものだったからつい気になっちゃって。まさか一生支えると言われたと変な冗談を言うなんて思わなかったよ」

「そうですね〜！ 自分もビククリして思わず本気でツッコんじゃいましたよ〜！ リョウさんのマイペース振りにはいつも振り回されてるからほんともう大変で大変で〜！」

「けどそういうリョウちゃんも可愛いのよね〜！」

「はっはっはっは！」

さて、この地獄空間からどうやって脱出しようものか。

多分向こうはそんな気全然ないと思うが、謎の圧が凄い。とにかくもう、何か凄い。手汗が止まらない。まるで霧囲気の明るい圧迫面接をさせられてる気分だ。

寒いからという理由でこのくそでかいリビングに招かれたはいいが、笑い声が響いて

いるのは俺とリョウさんのご両親三人だけである。

あの後、比較的信用度の高い虹夏さんがフォローに入ってくれて誤解はすぐに解けたけど、元々俺達がここに来た理由は作曲担当山田の様子を見に来たというもの。

様子というのは調子や進捗も含まれていて、それをリョウさん一人に押し付けてしまっていたのではないかと心配した虹夏さんを思つての事でもある。

当然、遠出の旅に出ようとしていた時点でリョウさんがスランプというのはみんな見抜いていた。何せ無断で学校とバイトを休むほどだ。というか学校ならまだしもバイトも休むとか命が惜しくないのかと思う。店長に殺されるぞ。

とまあ、そこで結束バンドの結束バンドたる所以の協力プレイが始まった。

困っている仲間を協力して助けようと三人が立ち上がったのだ。あ、後藤さんもちやんと自ら立ち上がったから。あの子友人のためにならそういうのできるタイプだから。寿命を削るリスクはあるけど。

リョウさん曰く、山田家の親御さんは随分と彼女を溺愛しているらしく、何かと干渉してくる節があるとの事。

そんな過干渉気味の両親がバンドメンバー達を招いて愛娘が部屋で何かをしていれば、必ず侵入してくるに違いないと判断。ただでさえスランプなのに親が来れば事態は悪化してしまうと小声で話し合った結果。

バンドメンバーじゃないわたくし清水優人がご両親の相手タケ取りをする事になりましたと
さい。

はっはっは、面白いねまったく。誤解は解けたが黒一点という事でまた変な解釈されるリスクがあるとか考えない浅はかな選出ですな。あとで覚えとけよ山田。

そんな訳で俺は山田パパと山田ママとの三人で楽しくお喋りなうなのだ。

嘘である。いつボロを出してしまうか分からない焦り、向こうから関係性の深堀りをされる事で墓穴を掘ってしまわないかという恐怖の中での極限の会話。いったいこれのどこが楽しいのか。さつきから永遠にリヨウさんエピソード聞かされてるだけだぞ。軽い洗脳か？

「ところで清水君、君には悪い事をしたね。虹夏ちゃんのおかげで勘違いだと分かったから良かったけど、もしリヨウの恋人だなんて関係になっていたら正気を保っていられたか分からなかったよ」

「ははは、滅相もないですよ。リヨウさんと俺が恋人だなんてそんな事ある訳ないじゃないですか」

「それはうちの娘に魅力がないと言いたいのかい？」

「あの美人聡明パーフェクトリヨウさんに俺なんか釣り合う訳ないってだけですお願い

いだから眼鏡を不穩に光らせないでください人体実験しないでください産まれてきてごめんさい」

もう全力土下座である。

生きて帰るためなら己のプライドなんか全部捨ててやる所存だ。眼鏡の奥の瞳が見えなくなるのマジで怖い。直樹さんが恋しい。やっぱ後藤家の皆さんが一番の癒しなんだなって。ふーちゃんに会って何も考えないままじゃれあいてく（健全な意味で）

「もうっ、そうやって冗談言ってリヨウちゃんの友達を困らせたらダメよパパ。清水君も真に受けて土下座なんかしなくていいからね。にしてもどうして高校生なのにそんな立派な土下座ができるのかしら〜？」

「清水君顔を上げて！ っ、ごめんよ！ 娘の男友達と打ち解けるにはどうすればいいかまだよく分かってなくてっ。ああどうしよう、こんな事させたなんてリヨウに知られたらまた部屋にいる時間が長くなってしまっ！」

「え、は、はい」

冗談だったのアレ。全然そうには見えなかったんだけど……演技派なのかな？

あと土下座に關しては慣れです。主に店長に技掛けられる前にいつもやっているので。まあ最近は問答無用でやられるけど。もはやどうすれば許してくれるのか分からない。

山田ママの助力もあって俺は再び高級そうなソファに座る。
そして山田パパが咳払いを一つ。

「こほん……えー、清水君」

「な、何でしょうか」

「君は娘がやってるバンドのサポート役としてあの子達を支えている、という認識で合っているよね？」

「まあ、はい。虹夏さんが説明してくれた通りですね」

娘の友達の中に男がいるのは想定外だったのか、やはりあちらも距離感を測りかねていたという事なんだろう。

認識のすり合わせをして改めて俺の立場を再確認したいのかもしれない。よし、俺も娘にとって無害の男だという事を証明しなければ。

「なら娘に変な虫が付かないように護衛もしてくれているという事かい？」

「あの人良いのは見た目だけなんでそういうのは大丈夫だと思いますよ」

「え？」

「ふざけた男が寄り付かないようにいつも俺が見守っています」

危ない危ない、思わず本音が出てしまった。気を付けないと。

ふむ、だけど実際ライブを見に来る人の中には男性もいるが、今まで言い寄られた事は一度もないな。ただ単にスターリーに来る人達の民度が良いだけだと思うけど、謎の力でも働いてるんだろうか。何か知らんがきらら空間的な感じするもんね。

「あの子はみんなに迷惑とか掛けていないかい？」

「7割くらい迷惑被ってますね、主に借金の面で俺が」

「え？」

「作曲やライブではいつも頼りになってます。掛け替えのない人ですよりヨウさんは」

何で勝手に口が滑るんだろう。聞かれた事について体良く答えようとしてるだけなのに心が脊髄反射で本音を先に出してしまう。

正直者すぎるのも考え物ですな、がっはっは！

「そうか、それは良かったよ。話を聞いている限り清水君は信用していい男子だという事も分かった。心配は吹っ飛んだよ」

「虹夏ちゃんが最初にそう言ってたんだから当たり前でしょ。私は最初から分かったもの。リヨウちゃんのお友達はみんな良い子だって事くらい。だってリヨウちゃん

が良い子だからね〜！」

虹夏さんの信用度高いな。あとリヨウさんを過信しすぎじゃないかこのお二人。

周りが良い人ばかりなのは否定しないけどリヨウさん自体は普通にクズですよ。だって店長にもそう言われてたもの。

ところで上の階に行つたみんなは今どうしてんのかな。後藤さんとか上手くやれてるだろうか。

スランプの原因は何となく分かるけど、それを解消できるのはバンドメンバーの後藤さん達だけだから何とか頑張つてほしい。俺は俺で一つ年上の女友達の親御さんに初対面三人きりで話すとかいう気まずさMAXで頑張つてるんだから。むしろ問題解決しないと俺が困になった意味ないからね。

「ねえねえ清水君、ちよつと聞いてもいいかしら〜？」

「あ、はい」

「女の子の友達に虹夏ちゃんや他のバンドの子がいるから良いんだけど、男の子の友達に清水君しかいないのよね？」

「あー、多分いないと思いますよ。基本学校でも虹夏さんと二人でいるみたいですし、男子よりも女子からの方が人気あるっほいです」

「あらくそうなのね。さすがリヨウちゃんだわ！　あの子の魅力は同性をも虜にしてしまうのよねえ！」

それは過言……とも言えないのがリヨウさんの不思議なところである。

実際喜多さんは最初リヨウさん目当てでバンド入ってたしな。今は後藤さんへの憧れの方が少し大きめにも見えるが、今日だつてリヨウさんがいなくて落ち込んでいたのは紛れもない事実。まったく、異性ながら女子からモテるのは普通に羨ましい限りだ。俺もあんな美形だつたらいいのに。

「じゃあ、この際聞いちゃおうかな。清水君から見てリヨウちゃんって魅力的なのかしら？　どうして男の子なのにリヨウちゃんを見て平然としてられるのかな？　貴重な機会だから同年代の男の子の意見も聞いてみたいのよね」

「確かにそれは気になるね。清水君は信用できるけど、逆にいつも娘と近くにいるのにあんな平常でいられるのも凄い事だ」

それは単にお二人が親バカなだけでは？

「さあ清水君、君から見てうちの娘は魅力的かい？　そして何故娘という平気でいられるのかな。自分ならずぐにでもカメラを用意して写真に収めるといふのに！　よっぽ

ど女性に対して耐性がないと説明がつかないよ！」

ほんとに医者かこの人。娘を世界的美女とでも思ってるんじゃないだろうな。

いや父親なら自分の娘をそう思ってしまうのも無理はないのか？ それにしても度が過ぎてるとも思うが。

で、何だっけ。

俺から見てリヨウさんが魅力的かそうじゃないかだっけ。なるほど、難しい質問をぶつけてきたな。

まず俺からリヨウさんへの印象はクズ、借金、ベアシスト、草、甲斐性なし、作曲家、クズ辺りか。

……大変だ。褒められるところが2割くらいしかねえ。しかもどっちも音楽関係でリヨウさん自身に備わっている魅力ではないところが変に勘繰られそう。

考えるんだ清水優人。ご両親に対してあなた達の娘は借金クズベアシストですなんて口が裂けても言えない。例えそれが事実だとしても。

落ち着け、つまりここはリヨウさんに元から備わっていて異性から見ても良いと思うような印象を伝えればいいんだ。

そう、変に誤解を与えるような嘘を言うのではなく、俺が思った素直な感想を言えば嘘偽りなくリヨウさんの魅力ポイントを言えるはず。

ここは大事な局面だ。信用してもらつてゐる以上、下手な事は言えない。

リヨウさんの良いところ、リヨウさんの良いところ、リヨウさんの良いところ、リヨウさんの良いところ、リヨウさんの良いところ、リヨウさんの良いところ、リヨウさんの良いところ、リヨウさんの良いところ……。

よし、これだ！

「手足が二本あつて目も二つあるとこですかね」

「え？」

「容姿端麗でクールな部分もありながら内心ビビったりするギャップとベースを弾いてる時のアンニュイな表情が惹きつけられます」

「ベースを弾いてる時のリヨウちゃん見てみたいわ〜！」

うん、上手く言えたな。よくやったぞ俺。

「それでそれでつ、どうして清水君はあのリヨウちゃんの近くにいて普通でいられるのかしらー！」

「見た目以上に普段からやつてる事が借金とか草食べたりで好感度の振り幅がマイナス寄りになりがちだからですね」

「え？」

「実は見た目だけなら本気出すと一番やばい子が身近にいたのでそれで耐性がついたのかもかもしれません」

「あら〜そうなのね〜」

何となく分かった。この二人の前ではとりあえずリヨウさんを褒めておけば大体誤魔化せる。

ほとんど愛娘に関しては盲目だからこれで時間を稼いでおけば、あとは虹夏さん達が何とかしてくれるはず。たまにはこちらから仕掛けてみるか。

「リヨウさんって結構自由人な方だと思っんですけど、お二人は昔からリヨウさんの好きにさせてきたんですか？」

「そうなのよ。リヨウちゃんったらあまりにも可愛いから欲しい物は何でも買ってきまし基本あの子のやりたい事を尊重してきたのよねえ」

その結果がああ金遣いの荒い自堕落ベーシストになった訳ね。

というか欲しい物買ってきたんなら今もねだれば買ってくれるんじゃないのか。それなら俺に借金する必要もないんじゃないか……。

「けどあの子、私達に構われるのがあまり好きじゃないみたいでね。お小遣いは受け取ってくれるんだけど、それ以外だと楽器弾いたり作曲するからって部屋からあんまり出てきてくれないのよ」

「はあ」

お小遣いだけは受け取るの完全に都合の良い反抗期ですやん。

そういう親からの過干渉への反抗心でロック始めたってさつき虹夏さんが小声で教えてくれたっけ。親が好きなものや真逆の事をすればグレたと思って干渉してこなくなるってたとか。この感じだとほぼ無意味に終わってるっぽいけど。

「もう高校生だしそういうのが好ましくないと思われるのは仕方ないと自分達も分かっているんだけどね。仕事がない日とかはどうしても娘と遊びたくてついお小遣いや豪華な料理で釣ろうとしちゃうんだ。いつもお小遣い受け取ったらすぐ出掛けていくから結局遊べてないけど」

単なる親バカというかメンタル強いというか全然懲りねえなこの人達も。

あとお小遣い貰ってすぐ外で使い切るリョウさんほんと良い性格してる。どうしよう、今度からお金貸さないでおこうかな。

山田ママが高そうなカップを持って紅茶を一口啜る。

それをそつと置いてから、

「でもね、最近は何よりも色々話してくれるようにもなったのよお」

「そうなんですか？」

普段口数の少ないリョウさんが音楽関連以外でペラペラ話すイメージはないんだけど、親ともなれば多少は違ってくるのだろうか。

「ええ、虹夏ちゃん達とバンドをするようになってからは今まで話してくれなかったバンドの事とか教えてくれるようになったの」

なのに俺の事は一切伝えてなかったんかいとツツコミをここでするのは野暮ですね。

まあ男だと分かればさつきみたいに問い詰められるの確定してたし、リョウさんなりの気遣いだったという事でプラスに解釈しといてやろう。

「普段話す時はいつもと変わらない表情なんだけどね、バンドの事を話す時だけは少し目元や口元が綻ぶのよりヨウちゃん」

そうなのか。あまり意識して見ないから気付かなかったかもしれない。基本俺にお

金借りる時とか無様な姿を晒してるから余計か。

何だかんだ親はいつも子供をちゃんと見ているという事かね。

「それであのリヨウちゃんがたった一度だけ自慢気に話してくれた事があったのよ。あの時のリヨウちゃんの笑顔は今でも忘れないわ〜！」

「うんうん、あの時ほど写真に収めたいと思った事はないね」

「へえ、どんな事があったんですか？」

ライブ中とか少し口角が上がる時もあるが、あのリヨウさんが笑顔になるなんて基本ないから純粹に俺も気になる。

「自分達がやってる音楽の影響で楽器を始めた友達がいてその子と一緒にギターを買いに行っただって満足そうに話してたのよ。よほど嬉しかったんでしょね〜！」

「……
そ、そうなんですか〜」

「あら、顔に両手くつつけちゃってどうしたの清水君？」

「な、何でもないです……」

絶対俺の事じゃんそれ。確かにあの時のリヨウさんも笑顔だったけども。

くそ、今顔上げたら絶対赤くなってるのバレる。あの人は時々やる事がマジで俺の心臓に悪い時あるからほんとやめてほしい。いや聞いたのは俺だけどさ。今度多めにお金貸してやるか……。何なら昼飯も作ってあげちゃう。

さっさと紅潮した頬よ治まれと祈っていると、上の階からドンツという音がした。

え、なに、暴れてんの？ ……いや、この感じだと虹夏さんがリヨウさんに技仕掛け
た音か？

俺にも聞こえていたという事は、当然前のお二人にも聞こえていたという訳で。

「……清水君」

「はい？」

「リヨウには今まで自分のやりたいようにさせてきたけど、本当に今が一番楽しそうにやってるんだと思うんだ」

「はあ……」

普段はアレだがライブをやっている時は本当に活き活きしていると俺から見ても分かる。
あれこそ自分のやりたい音楽をしているという証拠なのかもしれない。

「その上でもう一度、君に問いたい」
顔つきが変わった。

過干渉気味の愛娘溺愛親バカなどと思つてはいても、この人はまず病院の経営者だという事を忘れてはならない。つまり頭がめちやくちや良いのだ。俺の思つてる以上に様々な事を考えていて、そんな人に何を問われるのか。

僅かに息をのむ。
そして。

「あの子を支えると言つた事、あれは本当に嘘なのかい？」

「いいや、事実です」

即答した。

「といつてもリヨウさんだけをじゃなくて、結束バンドのみんなを支えるつていう点を強調させてください。後が怖いんで」

「ふむ、確かにそれならあの子の表情にも納得がいく」

「表情？ あの時のリヨウさん無表情じゃなかったでしたっけ？」

「これでもあの子の親なんですね。表情と口調の僅かな違いくらいは分かるよ」

そういうものか。俺にはさっぱりだったけど。

多分いつもの時とさっきので写真撮ったとしても表情の違いとか分からないと思う。さすがは病院の経営者、患者の僅かな異変も逃さないみたいなものだろうか。

「ある程度の誇張はさつきもしてたと思うけど……うん、そうか。やつぱり君やバンドの子達なら安心できそうだよ」

「は、はあ」

分からん。どんだけ脳内で自己完結してるかすら分からんけど何か勝手にどんどん信用度が上がってる気がする。

「元々虹夏ちゃんもいるんだし心配なんて最初からいらないわよ。パパ。みんな良い子だって事は心配して家に来てくれてる時点で分かった事だものねえ」

「ははっ、それもそうだね」

うーん、いまいちペースが掴めん。さすがリヨウさんの親だ。

どちらも結構マイペースなところある。そりゃ娘が家にずっといるからって病院休みにしてるくらいだもんな。いや大問題だわ。

「ちやんと君からリヨウを支えたと聞けて良かった」

「結束バンドみんなですけどね」

「だから今度はこちらから言わせてほしい。何、友人の親からの軽い頼み事みたいなものだよ」

眼鏡の奥にある瞳と目が合った。

「これからどうか娘を支えてあげてくれないかな」

「……」

初対面の高校生にこんな事を言える親がいるなんて、とは思わなかった。

ただ本当に自分の娘を大切に想っているが故の純粋な頼み事。どこまでも真っ直ぐな瞳には芯があった。

だから、俺もそれに応えなければならない。

確かに山田リヨウという少女は簡単にお金を借りようとするし、すぐ人に集るような自堕落人間だし、面倒ごとは全部押し付けてくるような人だけだ。

こと結束バンドの音楽に関しては常に真面目に向き合ってきた人だ。

唯一作曲ができて楽器体としてもかなりの実力がある頼りがいのある人でもある。

あの日の笑顔を思い出す。

既に言うべき言葉は決まっていた。

「当然そのつもりです」

その場で立ち上がる。

さつきリョウさんが言った一生支える事については冗談って事にして有耶無耶にしたが、今度は自分の口からハッキリと。

「俺は結束バンドのみんなが望む限りは、一生彼女達を支えていきますよ」

その日の夕方。

どうせなら一緒にバーベキューをしようと誘われ、結束バンド一同+俺はありがたく山田家で晩ご飯という名のバーベキューを供にさせていただいていた。

真冬の庭でやるバーベキューも中々乙なモノですなあ。

見るからに高級肉を網で焼いてしまう背徳感がまたたまらん。

「ねえ、優人」

「どうしました？ ああ、そういやスランプ問題は解決したようで良かったです」

「うん、一応優人にも謝っておこうと思って。勝手に休んだりしてごめん」

「別にスランプ脱したんならいいですよ。俺としては次の新曲を楽しみに待っておくだけなんで」

肉やら野菜やらを焼きつつ隣のリョウさんを見る。

片手には皿を持っており、見事に肉ばかり乗せていた。抜かりないな。

「親から何か言われたりしなかった？」

「特には。普通に囿として雑談してただけですよ」

「ゆ、ゆうくん、このお肉もうそろそろ食べていいかな……？」

「ん、このくらいならちようど良いかな。食べていいぞ。……ああ、そういや山田パパから頼まれ事だけしました。分かりきってた事なので承諾も何もありませんでしたけどね」

「え、何を？ 何か吹き込まれたんなら私からキツク言っとくけど」

愛娘からそんなこと言われたら落ち込むってレベルじゃなさそうだからやめたげて。後藤さんの皿に肉と適度な野菜を入れつつ、トングをカチツと鳴らしながらリヨウさんの方へ向いた。

「これからも娘を支えてやってほしいって言われましたよ」

「……虹夏が誤解したのはずなのに」

「別に誤解でもないでしょ」

「え？」

あの時、山田パパはリヨウさんの僅かな表情と口元の違いに気付いていた。リヨウさんの言葉はおそらく冗談半分、本気半分。

それにリヨウさん自体が気付いているのかどうかはさておいてだ。

「結束バンドが続いていく限りは一生支えていきますよ、俺は」

冬の夕方は暗くなるのが早い。

庭の灯りはもはやリビングから漏れている部屋の灯りとバーベキューの火だけ。

そんな灯り自体が少ない光源の中に、俺はリヨウさんが目を見開くのをしつかりと見ていた。

オレンジ色の火がそのままリヨウさんを照らす。その顔はどことなく赤いのかオレンジなのか区別が付きにくい。

「……優人も言うようになった」

「俺とリヨウさんの仲でしょ。俺達マブなんで」

「その設定も久しぶり」

「おいこら今ハツキリ設定って言ったな？」

「ゆ、ゆうくんっ！ お肉がつ、お肉が燃え上がっちゃった!?!」

「だああああもう何で自分の肉すらまともに焼けねえんだお前はあ!! うおっ!?! やべえ、良い肉すぎて油が落ちまくるもんだから迂闊に手が出せねえ!?!」

「……期待させてもらうから、優人」

「誰かあ！ 水か氷かいつそ消火器持ってきてえ!!」

79. ツンデレの扱いは常に難しい

一月もそろそろ中旬に入る頃。

外は相変わらずの寒さの中、俺は休み時間の教室で一人スマホの画面を見つめていた。

『ねえ、何でいつまでたつても来ないのよ』

送り主はもちろんみんな大好きツンデレヨヨさんである。

今日の今朝方、後藤さんと登校中の電車内でこれが送られてきてきたのだ。当然後藤さんと話してる最中にスマホを触らない俺はこのメッセージが来てた事に気付かなかつた。

そして教室に着いてから田中達と駄弁りつつ朝のHRと授業を終え、今は三限目の休み時間。

ここでもようやくスマホを開いた俺はヨヨさんからのメッセージに気付き、今に至る。

ちなみに隣の席の喜多さんは俺と二言くらい会話を交えてから女子友の方へ行つた。前までなら休み時間になると後藤さんのクラスへ様子を見に行っていたのだが、文化祭以降は行っていない。何故だか見に行くところあちらさんのクラスから視線を感じるようになってしまったから。

という訳で暇になった休み時間は喜多さんと佐々木さんと喋るか田中達と男子トークという名のアニメ談義をするのがここ最近の過ごし方だったけど、今日は一人で思考に耽る事にした。

ヨヨさんとのロインは最近まで毎日あっちから送ってきてたのに、クリスマス会以降から全然送ってこなくなったのだ。

最後に送ってきたのは新年を迎えたあけおめロインくらい。

で、そこからトークは途切れていたはずなのに、今日このメッセージが来た。

来ないのよって何がなんだろう。やっぱりあの時のシデロスをサポートしろって言葉は冗談じゃなかったのか。

その翌日の時もロインで本気だつて言ってきたし、いったい何を考えてんだ？

普通に考えて俺が結束バンドを放つておいて他のバンドのサポートをする訳がない。そんな事はヨヨさんだつてもう分かっているはず。

確かあの時サポートしろって言う前に言ってたっけ。俺の動きを見て思った事を言

うって。

俺の動き、というのは結束バンドのサポート役としての働きを見ていたという事だろう。

それを見て俺に声を掛けてきた理由だが、これがまたいまいちピンとこない。ましてやあんな別れ際にいきなりみんながいる前で言ってきた理由が。

単純にスカウト？ もしくは結束バンドからの引き抜き？

そういやあのほいずん野郎も似たような事を言ってたか。バンド界限じゃ他のバンドから引き抜きの声が掛かる事は当たり前だと。

だとしても何故俺なのか。そこだけが分からない。

楽器隊でもボーカルでもない、そもそもバンドメンバーですらないただの裏方だ。そんな俺を引き抜く理由なんて本来一つもないはず。

ヨヨさんに限って意味もなくあんな事を言うなんてあるのか……？

どうしよう、めちやくちやありそう。普通に友達だからっていう理由だけでありえそうだわ。さすが後藤さんとは違う意味で悲しい人なだけある。

「さつきから一人で難しそうな顔してどしたん清水」

「んあ〜さつきさんか」

俺の前の席の椅子に座り俺の机で頬杖をついたのはワカメ色の髪をしたヤンキー風女子、佐々木さんだ。

いきなり話は変わるがここで小話を一つ。冬休みが明けてからの席替えはもう最後だしクラスの生徒だけで決めていいという担任の粋な計らいによって、バカでノリの良い我らは好き勝手に席替えをした。

席が被った場合はじゃんけんで勝敗を決める中、俺は窓側の一番後方を勝ち取り見事マンガでよく見る主人公席をゲット。

で、勝ち誇った顔で席に座っていると右に座ったのが喜多さん、俺の前に座ったのは佐々木さんだった。

この周囲の席も人気なはずだしおそらく二人もじゃんけんで勝ち取ったとは思いうのだが……二人共じゃんけん強かったんだろうか。

それにしても何故佐々木さんが喜多さんの前ではなく俺の前の席に決めたのか、理由を聞いてみたところ『色々と面白そうだったから』と返された。何が？

「さっさんて何だし。初めて呼ばれたんだけど」

「なあさっさん」

「あ、それ続けるんだ。まあいつか、どした？」

俺の机で頬杖をつきながら軽く笑みを浮かべてさっさんがこちらを見る。

一人で考え事と思ったが、女子の行動の謎は同じ女子に聞けば何とかなるかもしれない。この場合後藤さんは女子（特異点）なので該当せず。

「女の子からさっさと自分のとこに來いって言われたんだけどこっちはこっちで他に面倒見なきゃいけない女の子いるしこれって真に受けるべきかそうでないかどっちだと思おう？」

「ごめんそれって修羅場の話？」

「違うけど」

「違うんだ」

どう聞こえたら今の話が修羅場になるんだよ。

「冗談だと思ってたけどそうじゃないって本人が言ってたんだよなあ」

「随分男らしい心意気だね、その子。女子としては珍しいタイプかも」

確かに女子にしては色んな意味で珍しいタイプではあるけども。むしろやべー女の部類に入るか。

「何々く清水って女子からそんな熱烈なアプローチ受けてんの〜?」

「アプローチ……になんのかねえ」

「あれ、そこは完全否定しないんだ」

もしヨヨさんのあれがスカウトや引き抜きの話だとしたらアプローチというのも間違いではないが、なーんか引つかかるんだよなあ。

何せ店長と肩を並べるほどのツンデレガールだ。しかもツンデレといえばツインテールという王道も兼ね備えてる。

根は優しいを地でいく彼女の事だから、結束バンドから反感を買うような真似はしないと思うけど……。

となると考えられるのはやはり別の意図があつての事か。くそく、本人が近くにいれば表情とかで何となく読み取れるんだけどな。

いつそ頬杖をついてるさっさんの横に腕枕もしないまま俺は窓側を向きながら顔ごと置いて、

「さっさんってツンデレ女子の翻訳できる?」

「ウチに何を求めてんの」

「いやさ、さっさんは見た目イケ女じゃん? だから女子の友達多そうだし一人くらい

はそんな子いないのかなって」

「ん、確かに友達は少なくないけど、そういう子はいないかな」

「だよなくそんな都合よくツンデレ女子なんて見つかる訳……」

そこで俺の脳内にティキーン！ キロリロリーン！ というガンダム特有の音が鳴った。

嘘、そんな気がしただけである。

「……いたわ、ツンデレ女子」

「お、マジ？ リアルツンデレとかいう貴重な存在が身近に二人もいるって凄いいじゃん」

「女子って言うていいかは分かんねえけどな。これ本人の前で言うて絶対殺される」

「てことは年上か？ はあー年上女性の知り合いとか清水も隅に置けんなくおりゃおりゃ」

「どさくさに紛れて頭わしやわしやししないでくんない？」

「いやあ、清水の髪って猫っぽくてついね。ウチは犬しか飼ってないからこの毛ざわり感の中々味わえないものなんですよ」

「人を猫だか犬だかに例えるのもどうなんだよ。……あ、やばい何か眠くなってきた」

と言つても手を止めるつもりはないらしい。

こうなつたら強引に頭を上げて止めさせるのも一つの手だが、何故か人に頭を撫でてもらうのつて結構気持ちよかつたりする。

しかもいつも早朝から二時間かけて登校し、果てには窓際の席だから外からの太陽光で冬なのにほかほか気分だ。

こんなの誰だつて眠くなるに決まつてる。そう、今の俺みたいに考え事なんか吹っ飛びただただ心地よい眠気と撫でられてる気持ちよさで意識が薄くなつ――、

「あら、何をやってるのかしらさつとつと優人君？」

ビクウツ!! と反射的に俺の体が跳ねそうになつた。

眠気なんてものは彼方へひとつ飛び。謎の悪寒と冷や汗が止まらない。何でだろう、不思議と振り向いたら終わりだつて脳内が警告音鳴らしてる件。

声の正体は当然喜多さん。今更聞き間違えるはずもなく、だからこそやばいというのが理解できる。どうしようめつちや怖い。声音からして笑顔なのは分かるけど、笑つてないようにしか聞こえない。

うん、これはあれだ。いつそもう寝た振りしてやり過ぎすしかない。いくら喜多さんでも寝てる相手に何かするよな女の子じゃないだろう。

「んー？ 清水から相談事をちよいとねー。あとは髪わしやわしやしてたら眠気に負けたっぽい」

「へえー」

生返事怖すぎませんか？ いつもならお得意の陽キャコミュニケーションで会話広げてくのにもう会話終わってんじゃん。

広げる気一切ないじゃん。頼むからいつそ寝てくれ俺。さつさと意識失えよ俺え！

「じゃあ私もついでに髪触ってもいいわよね優人君？」

「……」

「ゆ・う・と・く・ん・？」

「は、はいいゝ……」

頭を鷲掴みにされあまりの恐怖に女芸人のやす子みたいな返事が出ってしまった。

「で、結局私に相談する事にしたと」

「そゆことです。という訳で店長ってツンデレの翻訳得意ですよな?」

「オーケー、とりあえず一発シバいてから話を聞こうか」

「え、もしかしてそれもツンデレの一種なんいでえツ!」

ほんとマジで今時げんこつしてくるのこの人くらいなんじゃないの!?

今の時代に暴力系ヒロインなんて流行らないんだからね! いや俺は好きだけどさ。

「つたく、そんでクリスマスパーティーん時にいたシデロスの子がお前の働きを見てうちに来てサポートをしろって話だったか」

「いつつ……まあ、そんなところです」

カウンター席に座り腕を組む店長と側に立つ俺。

現在スターリーには俺と店長とPAさんしかいない。結束バンドのみんなは今日のバイトは暇だからと買い出しに出掛けていて、PAさんも裏の方で作業をしているからか実質フロア内は俺と店長の二人きりだ。

「普通に考えりやそのままの意味だろう」

「新宿FOLTでヨヨさん達のサポートをしろって事ですか？」

「ああ。頭がぶっ飛んでない限りあそこでわざわざ嘘を言う必要なんてどこにもない訳だしな」

あの人割とぶっ飛んでる方だと思っうんですが。

「けどお前から聞いた話だとそのヨヨコって子は実力もあつて基本的な言動はキツいけど根は優しい子、なんだろう」

「はい。まさに店長みたいなひびゅッ!？」

「で、そんな不器用で優しい子がみんなの前でわざと反感を買ってしまふような言動をした意図がよく分からないと」

「ふあい」

顎に手をやり少し考える素振りをしてから数秒、意外にも早く店長は結論を出してきた。

「そりやお前、結束バンドよりも実績のあるシデロスの下でサポートをすればもつと経験を積めるしお前個人のスキルアップにも繋がるからって事だろ」

「…………え」

「前ここに来たぶりっこメルヘン年齢鯖読みライター女みたいな性格の悪い子じゃねえんだ」

俺が言うのも何だけどもの凄え言われようだな。

「なら少しの期間だけでもいいから結束バンドより忙しいシデロスで色んなサポートをする方が、お前のためにもなるって話になるのが普通なんじゃないか」

「俺個人の、成長のため……」

確かに、言われてみて納得できる部分が多々ある。

ヨヨさんの性格なら素直に言つてこないのは重々承知。それでいて遠回しに優しさをを見せてくるのも彼女なりの気遣いとして理解できる。

結束バンドは間違いなく成長している。個人の實力もさることながら、バンドとしての一休感も日に日に増していく一方だ。

それに引き換え俺はどうだろう。やるべき事は分かっているけど、する事は結局以前からしている事により力を注いでいるだけ。伸びしろとしてはどうしても幅が小さくなってくる。それではいつまでたっても視野は広がっていかない。

それを知ったヨヨさんは俺個人の成長の幅が広がりやすくなるようにたまには違う現場で経験を積んでいけど、遠回しにそう言っていた？

クリスマスパーティーの別れ際、結束バンドに書類選考で落ちないようわざわざ改善点のメモ用紙を渡していたし、結束バンドが一次審査を通過できるようアドバイスもくれていた。

つまり、結束バンドだけでなく俺自身も成長できるように場を用意してくれているのだとしたら、今日のロインで何で来ないのかって言ってきたのも何となく頷ける。

いや頷けねえわ言い方まどろっこしすぎるだろ。分かるかそんなの。ある意味後藤さんより解読難しいじゃねえか。

「ま、あくまで私の推測だけだな。どうだ、少しは役に立ったか」

「……はい、やっぱり店長に相談して正解でした」

ただ単に引き抜きだったなら蹴飛ばして終わりだったが、こうなってくると話は変わってくる。

俺のサポートだけで審査の結果が変わるような事はないと思うが、一ミリでも可能性があるのならそこに手を伸ばさない理由はない。

あれから今までロインを送ってこなかったのに今日ヨヨさんがわざわざメッセージを送ってきたという事は、せつかくのチャンス逃してしまうタイムリミットが迫っているかもしれない。

くそつ、言い方がいちいち遠回しすぎるんだよあの人は！

時間は四時半。向こうでライブが控えてるかは分からないが、もしライブがあつてもまだ始まるまで時間はある。

なら今からでも間に合うか。善は急げとも言おうし、迷つてる暇もなさそうだな。

……いいや、結束バンドのためになるなら迷う必要なんてそもそもどこにもない。

「けどまあ、どうするかはお前しだ」

「店長。いきなりで悪いんですが、しばらくバイト休ませてください。俺ちよつと新宿に行つてきます」

「い……え？ いや、おいつ、ちよつ待つ」

鞆を持つてスターリーを飛び出す。

今は時間が惜しい。ヨヨさんの事だ。もしかしたら気が変わつて今更頼んでも了承してくれるか分からない。とにかく今は走る事に専念しろ。後藤さん達に連絡をするのは後になってしまおうが、きつと許してくれると信じよう。あとは店長に任せるか。

「……はあ……まったく、何であいつらのためとなつたらああも迷わず突つ走つてくんだあいつは……あーどう説明すつかなあ……」

「こっちの作業終わりましたよ〜ってあら、どうしたんですか店長？ 面倒事に巻き込まれたみたいな顔して」

「たった今弟分のケツを拭く羽目になったんだよ……」

清水優人がスターリーを出て二分後、結束バンドの面々が帰ってきた。

「ただいまー、買い出し終わったよ。あれ、どしたのお姉ちゃん。体調悪い？」

「……あー、いや、別に悪くはない」

「ならいいけど。そういえば優人くんは？ 見かけないけど、裏の方にいるの？」

「……えーとお」

星歌の何だか歯切れの悪い返事に首を傾げる虹夏。

次に言葉を発したのは荷物テーブルに置いていた喜多育代だった。

「優人君の鞆もないですよ。買い出し行く前はここに置いてあったのに。優人君も買い

出しに行つてすれ違いになつたのかしら？」

「そ、そういえばゆうくん、最近ずっと考え事してたようですけど、まさかそれと何か関係あつたりするとかじゃ……」

「さすが幼馴染の事になると鋭いなぼっちちゃん……」

「「え？」」

ついうっかりひとりの眩きに反応してしまつたが最後。

買い出しの途中で郁代に買つてもらつたから揚げを頬張つているリヨウを除いた三人が星歌の方へ振り向いた。

「あ」

そしてそうなつてしまえば逃げ場などない。

妹の虹夏が向こうにいる時点で星歌に回避の選択肢は許されなかつた。

「つー訳で、それが最近あいつが悩んでた理由だよ」

「優人君、私達にも相談してくれたらよかつたのに……」

「さつきまで真に受けるべきか冗談かで迷つてたヤツだぞ。んな状態でお前らに相談できるとはあいつじゃねえよ。……もうめんどくさくなつてきた、あとは全部優人に押し付け

るか」

大方の事情を説明された結束バンドのメンバーは、クリスマスパーティーの終盤に言われた大槻ヨコの発言の真意を星歌から聞いた。

冗談ではなく本気だったという事。しかしそれにも別の意味が含まれていたかもしれないという事。

そして。

真意に気付いた清水優人がスターリーを飛び出していったという事。

「今のうちに言っておくぞ」

先に星歌から忠告があった。

それはあるいは当事者である結束バンドへの優しさか、はたまた警告か。

「あいつはお前らのためなら何でもするヤツだ。それこそ私が勝手に付けたスターリーの狂”犬” つつうあだ名で、まさに犬みたいに忠実にな」

ふざけたあだ名だと優人本人は文句を言っていたが、実はあながち間違いではないのだと彼を知る人間ならば誰でも納得する。

「いいか、もう一度言うぞ。あいつは、優人は結束バンドのためという口実があれば例えお前らと離れる事になつても喜んで実行するヤツなんだよ」

「っ」

その言葉に特に反応したのはひとりと虹夏だった。

星歌の言葉の意味を把握し、正しく理解し、言い知れぬ嫌な予感が脳内をよぎる。

「だから手綱を握りたきゃ、ちゃんとあいつを見張つとけよ」

「ゆ、ゆうくんは……今、どこに……？」

「説明ならしたでしょ。さっき新宿に向かったばつかだよ」

全員の次に出る行動は早かった。

「今ならまだすぐ追いつけるはずつ。一本後の電車に乗って走ればロスは縮められるよ
！」

「電車の時間調べました！ このまま走っていけば急行に乗れます！ 一本前との時間

差は約四分！」

「オツケー！ 悪いけどぼつちちゃん、今から人混み凄いとこ行くよ！」

「ゆうくんのためとはいえ人混み……ひ、ひと……ウツ!?」

「よし、ぼっちちゃん爆ぜたからペラペラのまま持つてくよ!」

「走りの遅いひとりちゃんを物理的に軽くして連れて行くとは、伊地知先輩賢いですねっ!」

「私は最悪一本遅れでも」

「早く来い山田ア!」

相変わらず騒がしいままスターリーを出ていった結束バンドを頬杖つきながら見送る店長星歌。

その横にはさつきまでP Aブースでゆったりしていた女性が立っていた。

「よかったですか? あんなシリアスそうに発破かけて。実際のところは微笑ましい動機で何でもないのに」

「いいんだよ。私の返事も聞かずにさつきと出ていった優人が悪い。たまにや本気の修羅場になんのも悪かねえだろ」

「大体の事情知ってるのに修羅場になるとは思えないんですが……もしかしてちよつと面白がってませんか?」

「……多少は」

そして、十数分後の世界にて。

「……」

「ああ、遅かったじゃない」

新宿FOLT。

開店前で薄暗いフロアの中に、元凶の少女がいた。

「来たのね」

不敵に笑む彼女、いいや、彼女達を前に少年は一步前へと踏み出していく。スターリーとはまるで別世界。異質な空間を前にしても物怖じは一切せず。

「ヨヨコ先輩、毎日清水さんが来ないかそわそわしてたつすもんね」

「あくび!？」

シリアスな世界は一瞬で崩れ去った。

80. 熱よ、下がれ

新宿FOLT。

きくり姐さん率いるSICK HACKやシデロスなどが主に拠点としているライブハウス。

来るのは三度目という事もありほとんど見慣れた光景だと思っていたのだが、それはみんなと一緒に客としてや結束バンドを支える裏方として来ていた時だ。

今はいつとも一緒にいるみんなは誰一人としていない。真正銘俺一人。そのせいか、普段よりもピリピリとした感覚を肌で感じた。

開店前、あるいはライブ前だからという緊張感か。薄暗いフロア内は静寂に包まれ、俺の足音だけが響く。

目的の人物はすぐに俺を見つけ、不敵に笑んだ。
そして。

「ああ、遅かったじゃない。来たのね」

「ヨヨコ先輩、毎日清水さんが来ないかそわそわしてたつすもんね」

「あくび!？」

ピリピリ空間はほわほわ空間に変化した。

うん、やっぱヨヨさんはこうでなくちやね。誰かに調子崩されてる時の方が輝いてるよこの人。普段クールぶってる人が慌てふためく様は見えていて心地良いもの。

「いきなり変なこと言わなくていいから！ 今良い感じに出迎えようとしてたところでしょ!？」

「でもほら、清水さんもう笑っちゃってますよ」

「何ですって!？」

「さすがヨヨさんつす。まじリスペクトつす」

「もうふざけてるじゃない!？」

失敬な。こちらだってふざけてる訳じゃない。ふざけてあげてるのだよ。

このままじゃヨヨさんだけシリアスっぽい雰囲気醸し出してたの恥ずかしいかなって思ったから、何ならイジって笑いに変えてあげようとした俺を褒め称えてほしい。

「あらく優人ちゃんじゃなくい！ いらつしやくいつてあら、今は一人なのかしら？ まあいつか、優人ちゃんならただ遊びに来ただけでも大歓迎だからね〜！」

「どうもです、銀さん。今日はヨヨさんにちよつとしたお願いをしに来たつて感じですかね」

パツと見やべー人だけど実はめちやくちや優しい心が乙女な人、もとい新宿FOLTの店長銀さんがカウンターから出てきた。

薄暗いところから急に出てくるもんだから一瞬ヤの付く人かと思つたのは内緒だ。

「そうなの〜？ ん〜じゃあここは若いみんなに任せてあたしは作業に戻ろうかしら。優人ちゃん、ゆつくりしていつてね〜」

小さく手を振つて銀さんを見送る。何故か知らんがあの人には前から少し気に入つてもらえてるようだ。何故か知らんが。

さて、こつちはこつちでそろそろ本題に入るとしますか。

「ヨヨさん」

「……何よ。またふざける気？」

「そんな唇尖らせなくても今はふざけませんよ」

「ふんっ、ならいいけど。……ん？ 今はって言った？」

「いんや？」

チツ、そこを聞き逃さないとは無駄に頭良いだけあるな。まあいいだろう。ふざけるのは後でいくらでもできる。

楽屋で機材を見ていたのか、裏の方から帰ってきた本城さんと内田さんが俺を見つけると笑顔で手を振ってくれた。ので俺も小さく返しておく。

シデロスのメンバーも揃ったしタイミング的にもちようど良いか。

そうして本題に入ろうとした時、後ろの方で……正確には入口の方で小さくガチャンと音がしたような気がした。

あれ、ちゃんとドア閉まっていなかったのか。それとも違うバンドの人が来たとか？
しかし待ってても一向にこちらに出てこない。

……確かここって他に別のフロアもあるし、こつちに来ないって事はそつちに行つたのか。まあいいや、些末な事だし気にするほどでもないだろ。

「とりあえず単刀直入に言います」

「……」

「俺をシデロスの下でサポートさせてください」

急いで新宿FOLTにやってきた結束バンドの四人。

事前にFOLTの店長へそちらに何うと連絡を済ませ、なるべく大きな音をたてないようにそつとライブハウスの中へ入る。

その時にドアを閉める音が少し響いてしまったが、どうやらバレる事はなかった。おそらく違うフロアの方へ行つたのだと都合よく解釈してくれたのかもしれない。

足音をたてないようほとんどすり足でギリギリの場所まで移動する。

ようやく向こうの声が聞こえそうな範囲まで着き、耳を澄ました時だった。それはいきなり聞こえてきた。

「俺をシデロスの下でサポートさせてください」

「ッ——」

聞き慣れた声の言葉に思わず反応しそうになったひとりの口を虹夏が慌てて手で押

さえる。

せつかく元の体に戻ったのにまた爆発しなかったただけまだマシか。

「私とリヨウ先輩のとこだとちゃんと聞こえないんですけど、伊地知先輩何話してるか聞こえますか!?!」

「(発言だけならギルティなこと言ってるけどもうちよつと聞いてみる！ 優人くんの事だし何か考えがあるのかも!)」

「(ゆ、ゆうく……あば、ああばばば、ああばあばばばばば)」

「(ぼっちは聞こえてるっほいけど既にグロッキーになった)」

「(ほんと幼馴染耐性ないなぼっちちゃん!)」

いつでもどこでも結束バンドは結束バンドであった。

身を潜めているのもうてんやわんやである。こうなつてしまえば会話が聞こえているのは虹夏のみだし、もはやひとりに変な事をしてかさないか見張りながらあの少年とシテロスの会話を盗み聞きしないとイケない。単純に手間が増える。

しかし、彼女達の密かなしつちやかめつちやかななんて当然知る由もなく、向こうでは普通に会話が繰り広げられていた。

(大丈夫だよね、優人くん……)

「……ふーん、ようやくその気になったのね」

そう言つて腕を組んだのは大槻ヨヨコだ。

待ちに待った発言というべきか。とにかく優人からその言葉を聞いて無性に口の端が上がりそうになるのを顔に出さないで必死に抑えようとしている。

変に口角が上がりそうになっているのをバレさせないように、さっそく次の言葉を紡いでいく。

「まったく、いったいどれだけ待たせるのよ」

「いやあ、単純にヨヨコさんのメッセの真意が分かりにくいのが問題なのでは」

「何よ！ 私のせいってどういうの!?!」

「今の言葉めっちゃめんどくさい彼女みたいですよヨヨコ先輩」

「かのおツ!?! か、かかかつ、かの、かか……かのっ!?!」

こっちはこっちでてんやわんやであった。

勝手に盛り上がって勝手に自爆するのはどこかの幼馴染と一緒にだなあと優人はいつ

そ遠い目をした。

「そういう訳ですヨヨさん」

「気持ちが良いほどそこはスルーしていくのね貴方は！」

「まあ、こういうのは慣れてるので、ハハッ」

「乾いた笑い……これはいくつもの修羅場を潜ってきた歴戦の猛者つすね」

「そうなの!？」

「あながち間違いいはないかな」

主に喜多郁代関連や結束バンド関連で教室の男子達と頻繁にリアル鬼ごっこしているのは修羅場として正しいかは不明だが、生死に係わるという点では確かに修羅場かもしれない。

ところで新宿FOLTに来てから数分経つが今のところ真面目な話をしている時間の方が少ないのは気のせいかな。

何故か軽い息切れをしていたヨヨコが体勢を立て直す。

「と、とにかくつ、私達の下でサポートしたいって話だったわね」

「ああ、はい」

「まあそこに關しては元々私から言つたんだしシデロスとしても拒否する理由はないわ」

「そこで拒否されたら俺ただの餌に釣られたバカな魚ですもんね」

「……一回拒否してみてもいい？」

「その場合アンタが泣くまでヨヨさんは寂しがり屋つて耳元で囁いてやるからな」

「罰が重すぎる!？」

おそらく途中でビンタが飛んできそうではあるが、どうやら罰を受ける意志自体はあるようだ。そこは案外受け入れる子らしい。

ともかく、いちいち話が脱線しかねないので優人も一度スイッチを切り替える。

「とりあえず許可してくれた、つて認識でいいんですよね」

「え？ あ、ああ、そうね。こつちだつてここまで来てもらった以上受け入れないなんて、そこまで鬼じゃないわ。やる気があるならもちろん歓迎よ。ま、これは清水優人、ひいては結束バンドのためにもなるし、貴方の事だから必ずここに來るつて確信はあつたけどね」

「そんなこと言つてずつとそわそわしてたじゃないつすか。ねえふーちゃん」

「そうだね。毎日チラチラ入口の方見てたもんね」

「ヨヨさんほんといまいち決まらないですよね」

「うぐう……っ」

ここまで来るとちよつと不憫に思えてきた。

ひとりとは別の意味で側においてあげたくなるタイプだ。主に心配の気持ち9割で。

精神ダメージを受けているくそ雑魚イキリパイセンの代わりに、隣の長谷川あくびがこちらに振り向いた。

「そーいやこの事、結束バンドの皆さんにはもう伝えてあるんすか？」

「あー、それがまだ言っていないんだよな。ヨヨさんの言ってた意味に気付いてすぐこつち来たから、とりあえず許可貰ってから言おうと思ってる」

「でもそれって向こうからしたらいきなりの事ですよ？ 大丈夫なんすか？ 怒られたりとかって……」

「んー、それについては一応覚悟はしてるつもりだよ。文句でもパンチ一発分でも貰うくらい心の持ちはしてる。そんなんでもシデロスの手伝いが許されるならお安い御用だ」

「清水さんは清水さんで罰に慣れすぎでは？」

大体スターリーの店長のせいである。

「良い心掛けね」

「あ、復活してる」

「私からの提案だとしてもシデロスのサポートができるのよ。そつちからすればありがたい経験値でしょ。一発くらい殴られるのなんてむしろ優しい対価よ。女子のパンチとかほぼ猫パンチみたいなものだしね」

「虹夏さんならその辺の壁とか平気で凹ませそうなくらい強いと思いますよ。腕の力やばいんで」

「え？ あ、そう……そう、なのね……。あ、あまり強く言わない方がいいかな……」
「後半ポリリウム下げすぎて聞こえないんだが」

何か後ろの方で物音がしたような気がしたが、多分気のせいだ。

自分で言っておきながら虹夏のパンチを想像するとちよつと覚悟が薄れてきた。天使は天使でもあの店長の妹だという事を忘れてはならない。相手は魔王の妹だ。おそらく殺る時は殺る。

（さすがに虹夏さんには報連相くらいしとくべきだったかなあ。けど今いきなり帰っても何か問い詰められそうので結果変わらなさそうだし……あれ、もしかして割と詰みだったりする？）

つまりここに来た時点で逃げ場はないのだった。

諦めて吹っ切れるしか道は残されていない。多分怒られはするだろうけど、優人の選抜については呆れつつもきつと了承してくれるはずだ。結束バンドと自分もつと成長するための過程で必要な事だと説得すれば分かってくれる。後はどうとでもなれだ。

「こほんっ……本当にいいのね？ 今ならまだ向こうに連絡するくらいの時間はあげられるけど」

「……いや、いいです。そういうのは直接会って話すんで」

「……そう」

「それに、今の結束バンドには俺が絶対に必要って訳でもないし」

また後ろの方から音がした。

違うフロアにいる人達が何かやっているのだろうか。

「へえ、どうして?」

「今結束バンドは作詞作曲途中なんですよ。撮影とか裏方でなら俺も何か手伝える事はあるだろうけど、作詞と作曲に関してはもうバンドメンバー本人達じゃないと意味がない。そこに俺のできる事は何もないんです。だから作詞作曲の期間中、俺が何も手伝え

ないこの空白の時間だけ、ここで経験値を積みに来ました」

リヨウが作曲し、ひとりが作詞をし、虹夏がジャケ写を作り、郁代や優人が広報をす
る。

みんなそれぞれ役割があつて、自分のすべき事を忠実にこなしていく。今は曲作りの
前半の部分で、虹夏や郁代は曲の事で一緒に話し合つたりはするだろうが、この期間に
バンドメンバーじゃない優人にできる事はほとんどないに等しい。

だから。

「だからその空いた時間を俺の成長へと繋げる。無意味な時間を一切省いて上を目指
す。結束バンドが一次選考で落ちないようアドバイスもくれたんだ。ならヨヨさんの
提案にも全力で乗っからせてもらいますよ」

「いいの？ それってある意味じゃ貴方が成長するにつれて私達ももっと上に行ける。
結束バンドの勝率が今よりも下がるって事にもなりえるし、何より貴方をそのために利
用するともとれるのよ」

「逆だよ」

「……逆?」

「悪いけどあくまで利用するのはこっちだ。俺の成長のためだけにシデロスを利用させ

てもらおう。それにプラスしてアンタ達のバンド活動を観察しながら良い所は全部盗んでうちにも取り入れていく。言っとくけど採算で言うならそっちの方が合っていないぞ。伸びしろで言うならこっちの方が圧倒的に大きい」

そこまで聞いて、だ。

本当の意味で、大槻ヨヨコは不敵に笑った。

「そうでなくちゃ面白くないわ。きくり姐さんが目を掛けてるバンドがあつさり負けるのなんて私も情けなくて見てられないもの。いいわよ、盗めるものがあるなら盗んでいきなさい。その上でシデロスが貴方達をぶつ倒して一番になってやるわ!」

「最後言ってる事が完全に悪役つすよ」

「え!? 主人公側じゃないの!?!」

「それはむしろ清水さん側だと思うつす」

「喧嘩じゃないのにぶつ倒すとか怖いこと言わないでほしいわー」

「ちよつとつ、貴方も今の今までこっち側で言い合ってたでしょ! 何裏切ってるのよ!」

「最後まで真面目な空気が続かないのは結束バンドでもシデロスでも変わらないらしい。」

ほわほわおっとり系女子の本城楓子と不思議系不気味ガールの内田幽々は二人仲良く離れたテーブルで雑談している。もはやこっちに興味すら示さない。

「はあ、もういいわ……。それで？ 期間ってどれくらいなの？ 私相手に大見得切っ

たんだから……。そ、そうね……。締切もまだ少し余裕あるし、い、いっかげ」

「一週間」

「……………は？」

「一週間でやる事やってスターリーに帰る。それが俺の想定です」

いっそ素っ頓狂な声が返ってきた。

「なっ……ちよ、貴方分かってるの!? ライブのサポートや普段行ってる作業に広報、裏方のスキルを全部上げるのにたかが一週間で何とかなる訳ないでしょ!? ましてや私達のやってる事は絶対結束バンドよりもハードなものでやる事だっただい。それを盗むつもりならそれこそ時間なんて足りるはずがない。余裕を見積もっても一カ月……最低でも三週間は必要なのよ!」

「ええ、そんなのは分かっていますよ」

「だったらなんで」

「だから本気でやるんだ」

「っ」

その目を見て、思わず息を？んだのは大概ヨヨコの方だった。

「余裕なんて見積もってたらそれこそどこかで緩みが生じてしまう。それならいつそ期間を短くして集中力をそこに全て注ぎ込めばいい。それにこう見えて俺、頭は結構良い方なんで記憶力と効率化は得意なんですよ。極限まで集中力を高めりゃ一週間程度でも何とかなるはず……いいや、何とかします。しなきや俺が持たないかもだし」

「……そ、それにしたっていくら何でも一週間は無理よ！」

「落ち着いてくださいヨヨコ先輩。清水さん、しなきや持たないかもって……もしかして一週間の理由って他にもあったりするんすか？」

「た、確かに……ほら、言ってみなさい！ どうせ大した理由でもないんでしょ！ 私が華麗に論破して期間を延ばしてやるわ！」

急に近づいて問い詰めてくるヨヨコを抑えつつも、自分も気になるといった視線で優人を見つめるあくび。

そして特に隠す事でもないと思つた少年は、深く考えもせずこう言つた。

「後藤さんが心配だから」

「……はい？」

目の前の女子二人からアホを見るような視線をぶつけられた。何も知らない人からすればこのような反応をするのも致し方ないと思うが。

「いやさ、一応昼間は学校もあるし今の後藤さんなら夕方くらい多少俺がいなくても何とかなるとは思うんだけど、さすがに一週間も空けるとどうなっちゃうか分からない不安さというか怖さというか、後藤さんがみんなに迷惑かけてしまう申し訳なさとか色々あってな。逆に俺が耐えられなくなりそう」

「……過保護」

多分褒め言葉ではないだろうと表情から察する。

あとどこかからも同じように過保護と言われたような気がした。多分幻聴だと思いたい。

数える程度しか会っていないものの、後藤ひとりという少女の生態を少年が説明すると二人は一応納得してくれた。

要はギターは超上手いけど相当やべーヤツだと。

ヨヨコは簡単な咳払いをしつつ、

「それでも一週間は短すぎない？ ちよつと大丈夫だつて信じてあげなさいよ」

「音楽面では信用するつて前から決めてるけど、やらかし具合はちつとも信用してないです」

「ああ、分かります」

「ちよつとあくび！ それどういう事よ?！」

そういう事だろうと察せない時点でほぼ同類だと分らないのか。

「……ねえ、一週間が限度なの?」

「まあ、ですね。それに作曲自体はもう進んでるし、それが上がれば作詞もおそらく切り詰めてやるでしょうからその辺りがちよつと良いかと」

「二週間もダメ?」

「俺もそんな結束バンドと離れたい訳でもないんで。可能な限りは側でサポートしたいんです。勝手な思いですけどね」

遠慮気味に笑う優人に、ヨヨコは少し目つきを変えた。

微かに、鋭く。

「……貴方が結束バンドをどれだけ想ってるかは以前も聞いたけど、そこまでして彼女達に入れ込む理由は何？ 何が貴方を本気にさせてる訳？」

「理由、か……」

理由、と聞かれて清水優人はまず何を思い浮かべたか。

幼馴染の後藤ひとりがよくやく見つけたバンド仲間で、奇跡と言ってもいいほど理解のある仲間に囲まれてるからこのメンバーでずっと音楽を続けていつてほしい。それも理由の一つではあると思う。

しかし、今ここまで本気になっているのは別の理由もあるからだと何となく自覚していた。

メンバーそれぞれが結束バンドに抱いている気持ちや夢を清水優人は大方知っている。

例えば後藤ひとりが結束バンドを最高のバンドにすると宣言した事を。

例えば山田リヨウがこのバンドでこそ自分達のやりたい音楽を貫き通すという事を。

例えば喜多郁代が憧れたギター少女を支えたいから自分もさらに努力を惜しまなくなつたという事を。

例えば、ある少女が自分のせいで夢を諦めた姉の分まで人気になってスターリーを有名にさせると言つた事を。

それはすんなりと出てきた。

「支えたい人がいる」

「……」

芯の通った声が新宿FOLTの中に響く。

「自分のために夢を諦めた人の代わりに大きなバンドになつて、そのライブハウスを有名にさせて自分が代わりに夢を叶える。目の前で、笑顔でそう言った人がいたんだ」

あの表情だけは忘れられなかった。

芯はあつてもどこか儂げで、何か小さな綻びがあればそれだけで崩れてしまいそうで、一人だけじゃ絶対に到達する事のできない夢を語った少女がいた。

仲間がいてようやくやくスタート地点。そこから茨の道をゆつくりと進みつつも必ず叶うとは言い切れない無謀な願望。

それでも夢を諦めきれなかった優しい妹は、夢を諦めた姉のために奔走する事がある日の夜に誓った。

「世界で一番仲の良い姉妹だと思うよ。不器用な姉と、優しい妹。そんなあつたかい誓いを見せられたら、ただ手伝うだけじゃ俺の気だつて収まらねえ。だから、そんな不器用で優しい人達をこの先もずっと支えたいと思つたんだ」

本当なら理由なんて出そうと思えばいくらでも出てくる。

幼馴染のためだとか、病院経営をしているベースの両親に頼まれたからだとか、自分が引き入れたギターボーカルの少女のためだとか、それらしいものはわんさか浮き出てくる。

しかしそれらを抑えても、本気になれる原動力はそこにあつた。

清水優人は小さい頃ヒーローに憧れていた。誰かのために本気になれる者になりたかつた。他者のため、それは見方を変えれば結局自分のためにもなる。

きつかけはそこにあつたのだ。

自分には夢などまだなかつた。やりたい事はあつてもそれが夢かと言われるとそうではない。自分は何も持てていないと、そう思つていた。

だけど口にしていくとようやく何かが掴めていく。まず取っ掛かりがあつた。

誰かを支える、誰かの力になりたい、夢を叶えていく姿を見ていたい。そんな気持ちに日に日に増していつている事に少年はいつしか気付く。

つまり、これはある種の表明でもあつた。

「あの人を支える。結束バンドのみんなが大きくなっていくのをずっとサポートしていい」

「結局はそこに行き着くのね」

「ああ、そしてこれは俺がようやく見つけた夢でもある」

「夢？」

結束バンドと共にいる事で見つけた清水優人の夢。

それがようやく分かった。結局、どこまでいつてもこの少年は誰かのために動く時こそ真価を発揮する。それが自分のためになると信じて。

「少しずつでも夢を叶えていくみんなを見守り続ける。そこで最終的に夢の終着点でみんなを見送るのが、俺の夢だ」

夢を叶えていく誰かを見送り続ける。

それは簡単なようでいてとても難しい。夢を叶えられる可能性は限られていて、それを掴める人だつて一握りなのだから。しかしだからこそ叶えられるように全力で支えていくと、この少年は本気でそう言っているのだ。

「そのためならどんな事だつてしてやれるし、最後まで本気でい続けられる。これが俺の理由だよ」

「……ふうん」

そして、少年の理由、夢を聞いた大槻ヨヨコは清水優人に背を向けた。

「ならこの一週間、精々こき使われて倒れないようにする事ね」

遠回しに一週間で裏方のスキルを磨けるだけ磨いていけと言われた。

あくびの方もヨヨコの表情を見て両手をひらひら挙げている。いつものツンデレを発動しているのだろう。

「ええ、よろしくお願いします」

「にしてもヨヨコ先輩、清水さんを利用するとか言ってましたけど、自分から誘っておいてあの言い訳は苦しくないっすか？」

「ばっ、ちよっ!?!」

「まあそれも含めてヨヨコさんの優しいところだろ。明らかにちよつと勝ち気というかヒールっぽいアピールもちよくちよくしてたし」

「も、もういいでしょそれは！ それはそれとして清水優人っ！ そんなに結束バンド

を想ってるならまずはちゃんとこの事を彼女達に連絡してきなさい！ 報連相はしっかりしないダメなんだから！」

「ヨヨコ先輩がそれ言いますか」

「確かに」

「あ、貴方達ねえッ!?!」

という感じでわちやわちやしている一方。

隠れていた結束バンドの方ではこんな事があった。

「(うーん、やっぱり私達の方ではちゃんと聞こえませんか。大きい声で話してる時は何となく分かりますけど、伊地知先輩は聞こえますか?)」

郁代とリヨウがもう半ば会話を聞くのを諦めつつ、体育座りで小さく雑談をしている最中。

「(……ご、ごめん、あたしちよっと先に外出てるねっ。話してる内容は問題なさそうだったし、あとでスターリーで優人くんもちゃんと話してくれると思うから安心してよ

さそうだったよっ」

「(え? あっ、ちよつと伊地知先輩……あんなに慌てて出て行って、どうしたんでしよう?)」

「(さあ、おなか減ってちやんと見てなかった)」

「(……帰り何か買って帰ります?)」

「(……虹夏ちゃん……?)」

外に出た。

ドアもそつと閉めたからおそらくはバレていない。

フロア内が薄暗かったおかげか、メンバーにも自分の顔はちやんと見えてなかったはずだ。もし見えていたらと思うとどうにかなくなってしまいそうではあるが。

一月も下旬に入る頃。外はまだまだ真冬で寒い。しかし、この刺さるような冷気が今だけは心地良く感じた。

『支えたい人がいる』

少年のあの言葉を思い出す。

聞いている内であれば自分の事だと嫌でも理解できた。だからこそ、沸騰するように

虹夏の体温は今上昇している。

ライブの打ち上げの時、あの店の入口でも虹夏の夢を支えるとは言ってくれてきたが、まさかあそこまで本気で思ってくれているとは思ってなかったのだ。

そして、それが少年の夢を見つけるきっかけになっていた事も今更ながら分かった。本人の前で言うならまだ何となく心の整理だってできただろう。

だけど、自分がいない場所なのにあんなに本気で支えたいと言われたら、どうしたつて心が動いてしまうのも無理はなかった。

自分の夢を本気で支えようとしてくれる人がいる。そのために全力で動こうと成長しようとしてくれる人がいる。

果たしてあの少年は誰かのために本気で動ける人間というのが、その当人の心をも大きく動かしてしまうという事を知っているか。

人の夢を笑う事も一切なく、むしろサポートするために動いてしまうような純粋な人間がこの世界でどれだけいるのか。

それを目の当たりにしてしまえば誰だつてきつと気持ちを抑えられなくなる事もあるだろう。

伊地知虹夏は空を見上げる。

真冬の太陽の下。なのに太陽の暖かさよりも冷気が全身を包み込むように風が舞つ

ている。

(あくダメだなくあたし……)

しかし。

(あつついや……)

少女の顔にこもった熱は下がる事を知らない。

81. 新宿シデロス編～ミーティング?の巻～

「それじゃ今日から一週間、よろしくお願いします……」

「よろしくつす」

「よろしくね〜!」

「どうもおお〜」

「……」

俺がいるのは下北沢近辺にあるライブハウス、スターリーではない。

ここは新宿にあるライブハウス、きくり姐さんなどが主に拠点として活動している新宿FOLTだ。

学校終わりの放課後、本来なら後藤さん達とスターリーに向かう俺が何故新宿にいるのかというと。

「……許可、貰ってきたのね」

「まあ……はい」

「何でちよつとぎこちないのよ」

「や、えーと……少し気になる点があつたと言いますかかなりショッキングな事があつたと言いますか……」

シデロスをサポートさせてくれと頼んでから翌日の今、俺はここにいる。

俺だつてピシツと許可貰つてきましたつてはつきり言いたかつたよ。けど色々あつたのよ。

あれから俺は銀さんにも事情を話して一週間ここで世話になる事を伝えてからスターリーに戻つた。

後藤さん達からすれば買い出しから戻つてきたら俺が不在になつていてしばらく戻つてこない状況だったので、どう説明しようものかと考えつつ店長に適当な言い訳を言つといてくれと頼んでおけばよかつたと後悔もしていたのだ。

きつと虹夏さん達の事だから問い詰められるに違いないと思つてはいても、よく考えたらいきなり別のバンド、しかも同じ地区の対戦相手になるかもしれないバンドのサポートに行きますとかマジで言い逃れできない事を言おうとしてる自分に冷や汗が止まらなかつた。

そして本気で一発殴られるかもしれないと覚悟してスターリーに戻り事情を話して

みれば、だ。

これが意外や意外。みんな思ったより穏便に納得してくれたのである。

もしや店長がそれとなく説明してくれてたのかと思つて見てみたが、ツンデレ店長は顔を横に振つていたので何も言つてなかった。ほしい普通に謎だった。

あの後藤さんでさえ『ゆ、ゆうくんがいなくても頑張れるつて私も証明して安心させたいから……が、頑張つてきてね……。あつ、でもやつぱり一週間じゃなくて三日じゃダメ』と言つてくれた時は思わず感動で涙が出そうになつたよ。最後のは感動しすぎて何言つてたか聞こえなかつたけど。

喜多さんもりヨウさんも理解を示してくれて普通にファイトとか言われたから、あとはまだもう理解力しかない虹夏さんだけだしこりや余裕つしよと思つていた時期が俺にもありました。

いいや、正確には虹夏さんも分かつてくれて頑張つてきなよつて言つてくれたんだけど……。

何故か一度も虹夏さんが目を合わせてくれなかつたのである。そんな事これまで一度もなかつたのだ。あの時はもうショックで寝込みそうになつた。

俺が目を合わそうとして見るも絶妙に逸らして回避される。お前らに分かるか？突然優しかった天使が目を合わせてくれなくなつた恐怖とショック度が。

実は俺が一人でどっか行つてた事を怒つてるならまだ分かるが、音音的には全然怒つてゐるようには聞こえなかつたのだ。なのに態度が一変してゐた。

挙句の果てには『今こつち見ないで!』とか強めに言われたんだぞ。

つまりはガチの避けられという事。あーダメだ、今思い出しても口から内臓出そうなくらいショックでどうにかなつちやいそう。ここまですると逆に涙は出てこないんだね。純粹に落ち込んだ。それはもう昨日の夜の後藤さんとのギター練習に力が入らないくらい。

そんな訳で心のモヤモヤが取れないまま今に至るといふ訳だ。

シデロスのサポート一日目だといふのに気分は下がつていく一方なんだけど。思い出させんなくそう……。

「まあ何があつたか知らないけどそんなのはどうでもいいわ。清水優人、貴方が今いるのは新宿FOLTよ。一週間とはいえ今日からしばらくはここで活動して私達をサポートするのが貴方の役目。言っておくけど一から十まで丁寧に教えるつもりはないからね。最初はどうぞすればいいか、まずは貴方の意見を言つてみなさい」

「辛いで帰つてもいいですか……」

「昨日までのやる気どこ行つたの!？」

いやだって……虹夏さんの事考えるとテンション下がってくんだもの。気付かない内に避けられるような事したかな俺。

お詫びに高級フルーツ買ってけばワンチャン許してもらえるか？ 心当たりがない以上とにかくこつちから全力で詫びれば何とかなるはず。こうでもしないと俺のメンタルは持ちそうにない。カムバック優しい天使。

「いーいーかーらー！ しゃんとしなさい！ 何今にも死にそんな顔してんのよ！ 今更怖気づいても帰してあげないんだからね！ まずはちゃんと成長して結束バンドのためになる事を考えなさい！」

「……ハッ!? 結束バンドのために、なる事……?」

そうだ、忘れるとこだった。今より結束バンドの役に立てるようになったら虹夏さんも機嫌を直してくれるかもしれない。

気持ちを切り替える清水優人。これは俺のためにも結束バンドのためにもなる。つまりは一石二鳥で万々歳。虹夏さんも普段通りになってハッピーエンド間違いなしだ！

「よっしゃ、手伝い頑張りますぜヨヨさん！」

「え？ あ、ああ、そう。なんかよく分からないけど元に戻ったんならそれでいいわ……」

「清水くんってたまによく分かんなくなつて面白いよね」

「後ろのアレと喜怒哀楽が連動してますね。生霊の類か何かでしようか？」

奥の方で何やら怖いこと言われてそうだがよく聞こえなかつたので不問。

虹夏さんへのお詫びは一週間の間に考えておくとして、今はこちらに集中だ。

「で、まずは俺の意見を聞かせろでしたっけ」

「何よ、そこはちゃんと聞いてたのね。そうよ、何をすべきか貴方から言ってみなさい」

「ヨヨコ先輩、清水さんには後々のためにマネージャー業みたいにも接してもらつて言つてたつすよ」

「どうしてそうすぐにバラすのよ!？」

「なんかまどろっこしかったんで」

すげえな長谷川さん、さすが応募してシデロスに受かるだけの事はある。

ヨヨさんの扱いにも既に慣れてるし、これはシデロスのメンバー入れ替えの心配ももう必要なさそうだな。普通に相性良さそう。

さて、それはともかく、だ。

長谷川さんのおかげでヨヨさんは俺にマネージャーのような振る舞いを求めているという事が分かった。長谷川さん曰く後々のためにもなるらしいけど、今後マネージャーになるつもりは今のところまだないが、それが結束バンドのためにもなるのなら喜んで引き受けよう。

といってもマネージャーの仕事というのがいまいよく分かってないところある。大まかな役割は何となく理解してるけど、細かいところまでは把握してないし。

けどまあ、マネージャーでなくとも手伝いの上で最初にやる事の基本は大体分かっているつもりだ。

今日の活動は始まったばかり。それにヨヨさんはさつき何をすべきかと言ってきた。ヒントはもうそこにある。

おそらく答えは……。

「ヨヨさん、今日のスケジュールってもう決まっていますか」

「……」

ワンマンライブができるほどの人気を有しているシデロスなら結束バンドとは違って忙しいか、あるいは事前にこの日はこういう活動をするみたいにする事が決まってるはずだ。

マネージャー風に言うならスケジュールの確認。今日一日の段取りを確認しつつ、時間を見ながらその都度適切で柔軟な対応をしていく。これが最初にすべき事、だと思っ
けど……。

「今日は次のライブのミーティングをしてから近くにあるスタジオを借りていつもの練習。まあまだ一日目だし最初はこのくらいのスケジュールで良いかしらね……」

あ、これ正解だったっぽい。俺が思った通りの正解を言ったからちよつと目を逸らしながらニヤケそうなのを隠してる。

マジ分かりやすいなこの人。すぐ顔と言動に出るからババ抜きとか一生勝てなさそう。

「え、このくらいのスケジュールって割と毎日こんな感むぐーっ」

「いいからあくびはちよつと黙ってなさいっ」

うん、バンド仲間で仲良しなのは良いことだね。

だから男子の前で女の子同士がくんずほぐれつするのは止めようね。どうしたの、ユリリン・モンローなの。オタクとしてはそれを見ないでいろつてのはムリリン・モンローだからね。オタクとして（強調）

「さあ、今日も一日ビシバシやってくわよ!」

「「お〜」」

せっかくヨヨさんが決め顔で言ってるのに他のお三方は大層緩んだ返事をしておられる。

まさか毎回こんな感じなの。確かに性格的にヨヨさん以外はみんなマイペースに近いけど。

と、長谷川さんがこちらに近づいてきてボソッと俺に言ってきた。

「(ヨヨコ先輩、清水^友さんが来て舞い上がってるだけなんすけど、今は付き合っただけであげてください)」

「(なるほどオーケー理解した)」

可愛いとこあんじゃんかヨヨさん。実は内心ウツキウキだったのね。

俺が来るまでそわそわしてたらしいし、待たせちまった俺にも一応カスほどの非があるのは認めよう。ということ彼女の茶番に付き合っただけじゃあないか。

「ヨヨさん俺にしてほしい事なら何でもお申し付けくださいませ! わたくしめは今あ

なた方のサポート兼マネージャーでもあります故、できる事であれば全力で取り掛からせていただく所存です！」

「よく言ったわね清水優人！　なら今日一日はずっと私の隣にいてサポートしなさい！」

リーダーである私の動きを見て奉仕するのが貴方の役目よ！」

「清水さんは別に執事ではないっすよ」

「違うの!？」

「ヨヨコ先輩頭良いのにたまにIQめっちゃ下がるっすね」

そんな訳でミーティングが始まった。

「この曲はベースが特徴的だし、次のライブの時幽々はもっと前に出てもいいからね。バンドは楽器隊も含めて全員で作り上げるライブよ。ソロパートや見てる人に印象が残るような演奏をする時は派手に動いたり前に出たりして客の視線を引きなさい」

「じゃあ私も目立つ時は客席に降りて演奏しますねっ」

「それはやりすぎだから！」

「ウチはどうしたらいいんすか？　ドラムだから前とかには行けないっすけど」

「……ステイックパフォーマンスとか? ほら、ドラママーがたまによくやつてるステイック回しとか真上に投げてキャッチするみたいなのやつ」

「カメラでスクリーンに映してもらわないと客側からは見えないうつじやないっすか」

なんか真面目なミーティングもしつつたまにコントをやっている印象だった。

何だろう、凄く既視感があります。主にうちの結束バンドで。

基本的にリーダーのヨヨさんが仕切りながらミーティングを進め、ヨヨさんが意見を仰いだり言いたい事がある人は挙手したりしながら話は進められていく。

大体の内容はこうだ。

同じ曲でも前回のライブとは違う演出を考えたり、反省会の時に見付けた改善点を考慮しながらポジションやアレンジなどを加えるか、セトリでトリの曲は定番化させるかなど、バンドマンならではの個性が出ているミーティング内容。

真面目かわざとなのか分からないが、たまにふざける本城さんや長谷川さんはピリピリした空気を中和させる結構ありがたい存在っぽい。ヨヨさん自体も天然ボケは入ってるけどね。

そして思った以上にミーティングの時の俺ってやる事がないのに気付いた。

それはもうシデロスのメンバーじゃない時点で当然なのだが、ステージに立つ彼女達

とそもそも今さっきサポート開始した俺にシデロスのルールや勝手なんか知る由もなく、発言権もないのだからマジでヨヨさんの隣で突っ立ってるだけの執事みたいになつてる。

よく思い返してみれば結束バンドのライブミーティングの時だって俺はほとんど横で聞いてたまに意見挟むか普通にバイトしてただけだったな。

音響や演出、セトリなんてのは実際にステージに立つ本人達が考えないと結局のところ意味ないし。

こんな俺の雰囲気を感じ取ったのか、ヨヨさんが頬杖をつきながら、

「貴方も何か言う事ないの。意見があるなら早めに言っておかないともうこれで決定にするわよ」

「……いや、サポートするつつつても俺は一応部外者の立場でしてね？ さすがにここで発言するとかできないですって」

「違うでしょ」

「はー」

「一週間だけだとしても今の貴方はシデロスのマネージャー。向こうの時はどうしてるか知らないけど、ここにいる以上はこのルールに従ってもらわ。どうせ貴方ならシ

デロスの曲もライブ映像も事前に見てきてるでしょ」

「つまり客観的意見も欲しいので提案か意見があれば遠慮なく言ってくれって事っすね」

「……まあ、そういうことよ」

なるほど、長谷川さんの翻訳とても分かりやすく助かる。

ヨヨさんと知り合ってからシデロスの事も調べたり曲と映像も何度か見聴きしてるのもバレてるのは驚きだけだ。

「セトリ、演出、アレンジの有無、そういうのも含めて貴方にもミーティングに参加してもらおう。知ってる？ マネージャーってスケジュール管理や宣伝活動の他に演者に対してのメンタルケアや力を最大限に発揮できるようにサポート、またはアドバイスもしくちやならないの。そのためにまず貴方はもっと知識をつけてしっかり話し合いにも取り組む必要がある。結束バンドを想うなら尚更、これからは部外者なんて言葉でミーティングに参加しないのはもつてのほかよ」

「……」

正直言葉を失った。この人がステージに立つ演者にも係わらずここまで知識を付けているという事に。

バンドとしての実力が高いだけじゃない。リーダーの素質の有無でもなし。本気で這い上がるために本気で活動に取り組んでいるのがよく分かる。こりや普通の人を着いていけない訳だ。意識の高さが違いすぎる。

「今の全部ネットの付け焼き刃で身に付けた知識つすよ。ここ数日必死にスマホで調べたの知ってるんで」

「あくびイ!？」

「何となく説明がWikiっぽいと思ったらそういう事か」

なんかもうこの流れにも慣れてきた。

あと長谷川さん容赦なさすぎてヨヨさんがちよつとかわいそうだよ。メツキがガリガリ剥がれてきちやつてるからね。自分を大きく見せようと威嚇してきてるけどただ可愛いだけのレッサーパンダみたい。

「ち、違うからね! メジャーデビューとかスカウトされた時に少しでも知識持ってた方がそのマネージャーが有能かどうか見極めるためのものだから! 将来見据えてるだけだから!」

「まあまあ、実際ヨヨさんの言ってる事は正しいし俺も納得できたんで大丈夫ですよ。

それに将来見据えて頑張ってるなんて凄いいじゃないですか。さすがヨヨさんです」

「…………ふ、ふんつ、分かってればいいのよっ」

「ほんととチヨロいっすね」

「(いや俺は結構本気でそう思ってたけどな…………)」

チヨロいのは違うけど。

「ほらっそういう事だから貴方も早く椅子に座りなさい。私の隣にいれば分からない事あつたら教えてあげなくもないから!」

そこは素直に教えてあげるって言ってくれてもいいんじゃないですかね。

ただツンデレを地で良くするのは高ポイントです。ツインテールも良き。オタク心をくすぐります。

とまあ、こんな感じで俺もちょっと話し合いに混ざりながらミーティングは進んでいった。

大体がヨヨさん主体で他のメンバーはほとんど相槌ばかりだったけど、そこは仕切りがしっかりしてるからという事にしておこう。

そして時間も経ち。

「次のライブについてはこんなものかしらね」

「俺結局ほとんど何も言えなかったですけどね」

「まだ初日だし別にいいわよ。最初から全部完璧にやれなんてさすがに私も言わないわ。最終日までにマシになってればいいだけの話」

「はあ」

うつす。助かるつす。うつす。

「じゃあ次の議題ね」

「は〜い、私お菓子焼いてきましたよ〜」

「鉄分摂取しますう」

「あ、清水さん、もう楽にしていっすよ」

「え、いいの？ まだ議題あるっばいけど」

ヨヨさんが言った次の瞬間にはもう本城さんが手作りらしいクッキーを出し、内田さんが鉄分サプリをバリボリと摂取し、長谷川さんがスマホを弄り出した。

えつと……何これ？ ミーティングは？ いきなりみんなサボりだしたんだが。そんなんだとヨヨさん怒るんじゃないの？ 大丈夫なの？ 結束バンドでももうちよつと緊張感あつ……たりはしないか。しないな。

俺の不安をよそに長谷川さん達はマイペースなままだ。

おいおいおい、まさかこれをどうにかするのもマネージャーである俺の仕事とか言われるんじゃないだろうな。もしかしてこれ俺試されてる？ まだヨヨさん以外は親交深めてないけど叱咤できるのかを試されてたりする？

「次の議題はこれよ」

ヨヨさんがテーブルに置いたのはスマホ。

画面にはオーチューブと書かれていた。……オーチューブ？

「……ヨヨさん、これはいったい何でしょう？」

「見て分からない？ オーチューブに決まってるじゃない」

「いや、それは分かるんですけど……何でここでオーチューブ？」

画面をよく見るとチャンネル名に大槻ヨコギターちゃんねるとあった。

まさかヨヨさんのアカウントかこれ。でも何でわざわざこれを議題に？

そして、次にヨヨさんはどこからともなくメントスとコーラをドンツとテーブルに置いた。

「メントスコーラで私のオーチューブチャンネルを伸ばすわよ！」
「バカなんか？」

8.2. 新宿シデロス編～ライブの巻～

あれから四日が経った。

結局あの後、俺の制止も聞かずメントスコーラを実践したヨヨさんは満足気に動画を投稿。

見事に大爆沈したのである。それも脅威の52回再生だ。ヨヨさんのギター演奏やその辺を期待していたであろうシデロスファンは気の毒でしかなかった。俺がもつと本気で止めるべきだったね……。

んでもって見兼ねた長谷川さん達がヨヨさんのチャンネルを乗っ取……新宿FOLTの共有アカウントにしてチャンネル名も改名し、それぞれ趣味のコーナーを曜日担当で投稿していくという路線で落ち着いた。

途中で銀さんやきくり姐さんも参入し、本格的に新宿FOLTのアカウントとして活動が始まったのである。

もちろんマネージャーである俺も後藤さんの編集作業を手伝っているというのもあり、シデロスだけではあるが個々の撮影の手伝いや編集をサポートした。

そこでシデロスのメンバーとも個々人で親交を深める機会があり、ヨヨさん以外のメンバーの人となりも大体掴めてきたのだ。

例えば長谷川さんはゲームが好きで、過去に家でずっと一人でゲームしていた俺と趣味が似ているという事もあつてか合間の話も弾み、お互いこの短い期間でおすすめゲームを貸しあう仲にまでなつた。

貴重なゲーム好きの同士が異性にいるとは、この関係を大切にしていきたい所存である。

本城さんに関してはお菓子作りなどが趣味だそうで、料理は得意でもお菓子作りはそんなにしてこなかった俺は単純に興味湧き、二人でキッチンスタジオを借りて彼女の動画撮影をサポートしながらお菓子作りの手伝いをさせてもらった。

本城さん自体ほんわか系女子だから話しているとこちらまで気が緩みそうになるのは注意が必要だ。あといちいち距離が近いせいかな常に甘い香りがして一番女の子って感じする。

内田さんはやはりといえはやはりで、どうやら靈感（正しくはサタンに魔力を貸してもらつてらしい）のようなものがあるらしく動画でも事故物件を訪れたりお化けがいきくり姐さんの家

そんな場所で霊視しようとしたりと、あんまりそういうのを信じてない俺でもこれは本物だと言わざるを得ない現象に何度か巻き込まれた。

事あるごとに俺の背後や上の方を覗き込むのでそれだけは少し止めてもらいたい。怖い。

ヨヨさんは……もういいか。言うこと特にないわ。ツンデレツンデレ。メントスコーラ。

以上回想終了。

とまあこんな感じで毎日ミーティングや練習を終えるところという自由な時間を使って各々好きな事をしていたりした。

シデロスのサポートをするようになって四日。そこで俺の抱いた感想はといえば。

「なんか思ってたのと違うな〜」

新宿FOLTの楽屋でノートPCを開き動画の編集作業をしている真つ最中のわたしは清水優人のぼやきを一ツ。

結束バンドより忙し……くはあると思う。練習時間も多し、結構頻繁にライブもやるらしいからミーティングも割としつかりしている。この前のオーチューブの話だつてメントスコーラ（笑）がバカだっただけで、新宿FOLTにもシデロスにもプラスに

なるくらいにチャンネルができた。できた（強調）

のだが、誠に勝手ながら俺のイメージとしては最初から最後までみっちりぎゆうぎゆうにバンド活動に精を出すものだと思っていたのだ。

まさに休んでる暇もなくこき使われるのも覚悟していただけに、少し拍子抜けの面もある。現に今も俺はオーチューブにアップする動画の編集をしているだけなのだから。

「このままでいいのかって顔ね」

「ヨヨさん……着替え終わったんですね」

「ええ」

扉を開けて出てきたのはシデロスのメンバー全員であった。

黒をメインとした服装であり、メンバー全員女子でありながらメタルロックを主軸としたバンドならではの攻めた漆黒の衣装。

そう、今日はシデロスのワンマンライブの日だ。

「あ、私の動画だあ。ゆうと君今編集してくれてるんだね。ありがとお」

「会場の準備はこのスタッフの人達がやってくれて俺は暇だからな。ふうさんの動画ももうちょいで終わるよ。……あと少し離れてくれると助かるんですが」

「ゆーさん、そういうえば昨日言ってたゲーム持ってきましたよ。あとこれ一昨日借りてたやつです。やってみたらハマって一日でクリアしちゃいました」

「おう、サンキューハッセ。つか一日でクリアってめちやくちや早えな。夜更かしは乙女の肌が悪いぞ」

「相変わらずユウトさんもそのヒトも両方元気そうで何よりですう」

「幽々さんや、そろそろ俺達以外の幻のシックスマンを見つめるのは止めようか」

もうお気付きだろうが、俺とシデロスメンバーはこの四日間でこうなるくらいには親交を深めた訳である。

ヨヨさんはヨヨさんなのに何故自分達はずっと苗字呼びなのかと、仲良くなるにあたってすぐ距離詰めたがる女子特有の小さな苦情を頂いた結果だ。

正直いまだに慣れないので心の中では基本苗字呼びになってしまいが、どうせ心の中だしそこは別にいいよね。

というか結束バンドに至っては後藤さんは後藤さん呼びだし、喜多さんは本人からの強い要望で喜多さん呼びなんだけど。名前呼びの親密度に関して言えばシデロスの方が仲良いみたいになってる。

「……ほーん、随分と短期間で仲良くなってるじゃない」

「ヨヨさん？　なんで普段より目つきが鋭くなってるのでせうか？」

「自分の胸に手を当てて聞いてみれば？」

言われた通り自分の胸に手を当ててみる。

……うん、一ミリも分かんね。

「ゆーさん、ライブ前恒例のアレっすよ」

「あー、アレね」

「何よ……」

そういやヨヨさんはライブ前になると緊張で三日間くらい寝れなくなるんだったな。

一応メイクで目元の隈は誤魔化せてるみたいだが、目つきの鋭さだけはどうしようもないらしい。あんなんで見られたら大抵の人は怖気づいてしまうわな。

「ヨヨさん、ライブまでまだ時間あるし横になつときます？　一応使い捨て用のアイマスク持ってますけど」

「いらないわ。……その、自分の買ってあるから」

「ヨヨコ先輩、あの時から自分もゆーさんと同じアイマスク買ってライブ前に可能な限り横になるようになったんすよ」

「へえ、そうだったのか」

そりや初耳だ。付け焼き刃の対策だけど何もしないよりはマシだろうと教えたつもりだったが、今も続けてくれているのは普通にありがたい。

こちらとしては前日くらい普通にちゃんと寝ていてほしいのが正直な気持ちだけど。改善できそうな策がないかあとで調べてみるか。

すると長いソファなのにヨヨさんはわざわざ俺の隣に座った。

「ライブまでの時間は？」

「あと三十分ですけど、ギリギリ入店してくるお客さんも考慮に入れると四十分くらいですかね」

「なら二十分くらいは横になれそうね」

「じゃあどうぞ。俺は五分前くらいまで編集しとくんでき好きにしてください」
「えっ!？」

長谷川さん達はもう俺から離れてスマホを見たり雑談したりしている。

自分より緊張して上がってるヨヨさんがいるから逆に落ち着いてられるって前と言ってたもんな。ある意味メンバーの役に立ってるよヨヨさん、良かったね!

と、ここで座っている俺の足の上にぽふんと軽い重量感が押し掛かってきた。

んん???

「……あのう……姫？　いったいぜんたい何をしておられるのでしょうか？」

「な、何って、横になってるだけよっ」

「や、だからなんで俺の足の上に？　これじゃ膝枕になってるんだけど……」

「なっ……ど、どうぞって言ったのは貴方でしょ!?　好きにしていって言ったじゃない!」

それはどうぞその辺で横になってくださいって事だったんだけど……。

俺の言い方そんなに伝わりづらかったか？　長谷川さん達みたいに自由にしているよって言ったつもりなんだが、ヨヨさん寝不足すぎて認識能力低下してるとかじゃないよね？

どうしよう。既に俺の太ももの上に収まっているヨヨさんを強制的にどかすのはさすがに悪いような気がする。というかそんな事しようものなら取り返しがつかないくらい機嫌が悪くなる可能性大だ。

ああ言った手前ヨヨさん自身も自分から退く事はしないだろう。下手すると多分恥ずかしさと怒りで俺に矛先向くに決まってる。

であれば答えはこのまま膝枕続行。

さすがの俺も年上女子に膝枕するのは思う所がある。あくこれがふーちゃんだったらいつともみたいに頭撫でるだけですぐお昼寝してくれるんだけどなく。ヨヨさんだもんな。

「……男の足なんであんまり心地よくはないと思いますけど、気の済むまでそうしてていいですよ」

「……」

せめて何か言っつてほしい。返事がないと俺が自分から勧めたみたいになるじゃん。

しかし沈黙は肯定とも言う。黙って動かないヨヨさんを見るに、彼女も続行を選んだようだ。そそくさとアイマスクをして目を隠しおったわい。ついでに耳栓もし始めた。喉を閉めてしまうから寝る事はないだろうが、落ち着いて集中力を高めるためだろうか。

幸い膝枕をしていてもテーブルとPCへの隔たりはなく、このまま編集も問題なく続けられそうだし気を紛らわすついでに俺は作業に没頭しましょうかね。

カタカタとタイピングしながら字幕を入れてみると、こんな面白い状況を逃すまいとこれまで雑談していた長谷川さんと本城さんがこちらに近寄ってきた。嫌な予感しかしねえ。

二人は一応声を抑えながら、

「シャツターチャンスつす」

「飼い主の足元で安心して寝ちやう子犬みたいだねえ」

「俺が身動きできない事を良いことに好き勝手するのやめてもらえませんか……。あとヨヨさんリラックス中だけど一応起きてはいるから派手な事はしないでくれよ」

「つまり何でもしていいって事お？」

「言つてねえよ」

ゆるふわ女子は頭の中もゆるふわで出来ているらしい。

「つまり身動きできなくて逃げられないからじつくりユウトさんのモノを観察していつて事ですよね」

「言い方が大変誤解を招きかねないトンデモ発言になってる事に気付いてくれ幽々さん。そしてまじまじ背後の壁を見つめ続けるのもやめてくれると嬉しいなって」

「何度見ても立派なモノをお持ちですなえ」

「だから言い方ア！」

ダメですよ。女の子がそんな勘違いさせそうなこと言つちやあ。

しかも君達は特にあれでしょ。きらきらきららかなMAX的な存在放ってんだから間違っても変なこととは言わないように。健全でたまに謎の力働いてそうな気がするんだよこの世界。

「……清水優人」

「あ、はい、大きな声出してすいませんわたくしめはあなた様の忠実な枕でございます」
ヨヨさんが口を開くとちよつかいモードだった長谷川さん達がそそくさと楽屋を離れていった。

おいずるいぞせめて言い訳というかフオローの一つくらいしてってくんない？
これ俺だけ怒られるパターンのやつ？
つうか耳栓してるから俺の返事もちゃんと聞かえてるか不安なんです。

「その……ひ、膝枕……わ、わりゆく、ないわよ……」

「……ああ、そつすか」
噛んだなあ……。

しかもアイマスクに耳栓に膝枕の状態で噛むもんだからこつちも生返事しかできなかつた。え、コントじゃないよねこれ。

言った本人はじっとしたまま何も反応しない。恥ずかしさでだんまりを決め込んで
のか、そもそも自分が噛んだ事に気付いてないのかどっちだ。

……や、まあ、深掘りはしないでおう。ヨヨさんが何も言ってこないなら俺も触れ
はしない。ただ可愛い女の子が可愛い噛み方をした、という事実だけが残る。何とも平
和的じゃないか。

……うん、耳赤くなってるって事は自分で噛んだの気付いてますねえ。

さて、ライブの時間ももうあと五分というところまで迫っていた。

編集も区切りの良いところまで終わらせ、膝枕も結局ぎりぎりになるまでヨヨさんが居
座ってたから今も若干足が痺れてる状態だ。

ワンマンライブができるほど人気なのもあってフロアは既に客でいっぱいになって
いる。

マネージャー役ではあるけどサポートも兼ねてる俺はフロア後方でライブ映像の撮
影をする予定だ。スターリーとはまた別だし客足も相当違うからカメラの高さも細か
く調整しないとイケない。

「じゃあ俺フロアの方に行っとくんぞ」

「よろしくつすー」

「ゆうと君も頑張つてね〜」

カメラと撮影機材を持って楽屋から出ようとする。

その直前にヨヨさんから声をかけられた。

「ねえ」

「はい?」

「この四日間の経験が自分が思つてたのと違うから少し不安になつてるでしょ」

「……」

「もつとスパルタだと思つてた訳?」

おそろくさつきの話の続きつてどこか。

「まあ、そうですね……。ヨヨさんの性格からしててつきり厳しいものだとばかりと勝手に想像してはいたつてところが正直な気持ちです」

「だと思つた」

だつてそつちから誘つてくるもんだから相当厳しい修行やらされるんだと思つてた

し。

「言っておくけどね」

「?」

「最初から最後まで厳しい練習とか数時間拘束されるようなミーティングとかっていうのは、人によるけどバンド全体としてむしろモチベの低下になりかねないの。何事もメリハリが大事なのよ。私達の場合はちゃんと練習してちゃんと息抜きしてちゃんとミーティングもしてちゃんと休みも入れる。上を目指すならどちらかに一辺倒になってもダメなの」

こやつもしや亀仙流の使い手か。

「あとは……時にメンバーとのコミュニケーションも忘れず、にね……」

「説得力あるな」

そこはちゃんと学んでんのね。偉い、偉いよ。

「貴方のしなくちゃいけない事はそれをしているメンバーをどれだけの確にサポートするかって事よ。初日にも言ったわよね。体調やメンタルに異変がないかを細かく見た

り、メンバーの手を煩わせずに自分からどれだけ動けるか。私達が貴方に求めているのはそれよ」

「つまりどれだけ効率良く全てをこなしてメンバーをサポートするのか、それが今の俺のやるべき事、ですか」

「そう。そしてこの四日間貴方を見ていたけど、あくび達とも結構……まあそれなりに
は？ 仲良くなつて一緒にいたみたいだし、メンバーへのサポートや手伝うポイントも
正確だったから特に何も言わなかっただけ。マネージャーとしてはもう既に及第点
……よりも少し上くらいはあげても、いいと思ってる……」

うん？ これはもしや……褒められてる？

なんか後半腕組んで顔逸らしてるし、ヨヨさんツンデレのデレ部分発動してないか？
まじか、ここにきて素直に褒められるとさすがに照れ臭いんだけど。しかもさっきの
膝枕のせいでちょっとお互い変な空気だし。

「あ、あーっと、ありがとう……(ぎ)ぎいます？」

「ふ、フンツ！」

「けどもうライブ直前なのに何でいきなりそんな事を？」

「そ、それは貴方がそこで悩んでる風な顔してたからでしょ!? 私だって別に放ってお

いてもよかつたんだけど? ま、まあ一応今は私のマネージャーでもあるし?」

「私達のつすよ。いきなり独占専属にしないでください」

「つ……私だつて自分から誘つたんだし自分のマネージャーを放置しておくのもかわいそうつて思つただけよ!」

「貫いたな」

貫いたね。

「……ま、そうですね。何かそう言つてもらえて腑に落ちましたわ。何だかんだ言つて周囲を見る事も増えて視野広がつてる感じもありますし、シデロスを見てるおかげか別の側面で発見できる事も多くなりましたからね。これでもじわじわ成長してるんだなつて今分かつた気がします」

「……分かればいいのよ」

「ヨヨコ先輩何か嬉しそうつすね」

「う、うるさい! ほらつ、貴方もカメラのセッティングとかあるんでしょ! さつさと行きなさい! これで上手く撮影できませんでしたとかなつたらもう一週間延長だからね!」

「げえっ!? そつちから呼び止めておいて強制延長はするくないか!? さすがにそれは

嫌だから俺もう行きますからね！ 話もここで終了打ち切り次回作にご期待くださいー
いー！」

言つて足早に楽屋を出る。

ライブまであと三分弱かつ。とにかく急がねえと！

「……嫌だなんて言わなくてもいいじゃない……」

「おーよしよし。結末バンドさんの事情もあるから今回は延長無理っただけで、他意はないと思うっすよー」

ライブが始まった。

銀さんが撮影するのに良いポジションをあらかじめ確保しておいてくれたおかげで、セッティングもスムーズに進められて無事に間に合った。

カメラ越しに演奏しているシデロスのみんなを見る。

「……やつぱりこんだけ集客できるっすげえな……」

結末バンドだけではまだ到達できない所にシデロスはいる。

演奏技術、パフォーマンス力、集客率、演出、全てにおいてまだまだ敵わないのだとライブを見てまじまじと実感させられた。

それぞれの圧倒的な存在感もさることながら、どの曲でも楽器の音が死んでいない。むしろ活き活きしていて音の暴力が耳から体全体に響き渡ってくるようだ。

メタルロック。まさに言葉通りのジャンルの演奏は客を無条件に高揚させ、ライブハウス自体を一つの別世界として日常の空気から切り離している。

世界で一番熱い場所はここだと、今一番盛り上がりつつある場所はここだと、そう魂から言われているような感覚にさえなってしまう。

それにシデロスは激しい音楽だけが魅力ではない。

高い技術力と爆発的な演奏力。それにヨヨさんの歌声が妙にマッチングしているのだ。

メタルといえば激しくてどちらかというと男性ボーカルのイメージが多いけど、ヨヨさんはまさにそのギャップを行く。

殴りかかってくるような激しい曲にヨヨさんの美しい声に乗って脳内を揺さぶられる気分だ。

歌唱力が高いだけじゃない。歌詞をそのまま歌う訳でもなく、訴えるようなものであったり叫ぶようなものであったり、自分の気持ちをそのままぶつけているような表現

力があつた。

おそらく、そういうのが客層にも刺さっている部分だと思う。

メッセージ性のある歌詞は共感を呼び、人を惹き付ける。それにこの高い実力なら尚更の事、自然とファンが増えていくのも納得だ。

「この経験は……持ち帰らないとな……」

時々カメラを確認しながらも、俺はシデロスから目を離せなかつた。

ライブも終わりスタッフの人達が閉店作業をしている中、俺は俺で撮影機材を片付けヨヨさん達に飲み物を渡してから何もしないのも悪いと思いつロアの掃除を手伝っていた。

ライブが終わると掃除しなきゃって思うの、もはや職業病なんじゃないかって思う。まだ高1なのにね俺。

まあ今はバイトではなく手伝って感じだから気持ちも楽だけどさ。

こんな感じでゴミ袋を整理していると、ポケットに入っていたスマホのライブ通知が震え出した。

ずっと震えてるって事はログインじゃなくて電話か。誰からだろ。邪魔にならないようフロアの隅に移動してスマホの画面を確認すると。

「なん……だと……!?!」

俺は目を疑った。

着信画面、そこにはありえないはずの名前が表示されていたからだ。

「あ…の後藤さんから……電話……!?!」

過去に俺から後藤さんに何回か電話した事があったが全ての電話に彼女は出なかった。

そして後藤さんからも電話をかけてくるような事も一切なく、彼女の性格的に電話は相性悪すぎだと判断し連絡事項は全部ログインか直接会って済ますようになった経緯があるのだ。

だから後藤さんからの電話などありえない。いわば都市伝説のような扱いに俺の中であつていたのに……もしやログインと電話間違えたとか？

にしては一向に向こうから電話を切る気配はない。出たら実は呪いの電話でメリーさんとか出てこないよな。大丈夫か、むしろ怖いのはメリーさんよりヒトリーさんだも

んな。奇行に関してはそこら辺のお化けより怖いと思う。

仕方ない……出てみるか。

意を決して着信ボタンをタップして耳元にあてる。

「えっと、もしもし……？」

『……あつうつ』

うん、後藤さんだな（確信）

良かったお化けじゃなかった。

『ゆ、ゆうくん……？』

「おう、心配しなくてもあなた様の幼馴染でご存知ゆうくんどうぞ」

『ほ、ほんとにゆうくんだ……声が似てる人とかじゃなくて本物の……！』

人を希少生物みたいに言うな。

「どうしたんだよ急に電話してきて。後藤さんから電話とかこの先一生ないと思ってたからびつくりしたんだが。急用か？」

『わ、私も一時間くらいかけて勇氣出したから……』

安い勇気だな。

『あつえつとね……お母さんが週末晩ご飯に使う予定のマヨネーズ切らしそうだから、帰りついでに買ってきてくれると助かるって……』

「おう、そうか。じゃあ帰りに買って帰るよ」

もう毎日のように後藤家で飯食ってるしそのくらいは喜んで引き受けますよ。

何の用かと思えばおつかいか。確かに後藤さん一人じゃコンビニにもスーパーにも行けないもんな。

「……ん？　けどそのくらいの用ならロインでも良かったんじゃないか？　何も無駄に

勇気出して電話してくる事もなかったろ？」

『……あ、う……その、ゆ、ゆうくんの声が聞き』

『あー！　ひとりちゃんが電話してますよ伊地知先輩リョウ先輩！　絶対自分からは電話しないしこつちからしても出ないひとりちゃんが誰かと電話してます！』

『明日は槍の雨が降ってくる。もしくは隕石』

『あー、ぼっちちゃんの事だからきつと優人くんでしょ。ぼっちちゃんは用があつただろうから分かるけど、向こうで頑張ってるんだしあんまり迷惑かけちゃダメだよ喜多

ちゃんリヨウ』

『私達セットで迷惑かけると思われてるんですか!? それはそうとひとりちゃんスピーカーにして!』

『それは心外。迷惑かけるなら直接会ってかける。主に金銭面で』

『余計最悪だよ!』

『あ、う……』

何かいきなりうるさくなってきたな……。

せつかく一生に一度あるかないかくらいの電話が後藤さんから来たのに。まあいいか、虹夏さんも俺の事あんま気にしてなさそうな雰囲気だし、あの時は一時の思春期でも発動したんだな。

電話の向こうでわいわいがやがやしていらつしやる。

あー、何か謎の安心感凄いな。体がもうこれこれえ! って結束バンドの空気感を体内に取り込んでいってる。いつの間にか結束バンドは俺の心の栄養素になっていた……?

つと、いかんいかん。

手伝いだとしても今は閉店作業のお手伝い中だ。いつまでも手を止めてたら迷惑かけちまう。

「名残惜しいけど用が終わったんならもう切るぞー。こつちはライブ終わりです今閉店作業の途中なんだ。喜多さんはまた学校で、虹夏さんとリョウさんはこの期間が終わったからスターリーで、後藤さんは……どうせあとで家で会うか。じゃあまたな」

『あ、うん……また家で……』

果たして俺の声が喜多さん達に聞こえてたか分からないがまあいいか。

通話を終了してスマホの画面を見る。後藤さんと表示されていた通話画面からいつものホーム画面へと変わった。

まったく……いつでも向こうは騒がしいまんまだな。

「何スマホ見ながら笑ってるのよ」

「……え、そんなにニヤついてましたかね……」

「どうだか」

ヨヨさんに見つかった。

サボりは減点対象かな。普通はそうだな。

「あ、そうだヨヨさん。この後ですけど俺おつかい頼まれたからスーパー行かなきゃな

んですぐ帰りますね」

「ふうん、スーパーか。いつ出発する？ 私も買いたいものあるし同行するわ」

「大槻院」

「大槻院って何よ！ 貴方はちゃんとヨヨさんって呼びなさい！」

あ、ジョジョネタ知らないのね。

無自覚でそれを言うとはセンスあるじゃあないかヨヨさん。

「ところでライブ、めっちゃ良かったですね。大成功じゃないですか」

「フンッ、当たり前でしょ。失敗しないために普段頑張ってるんだから。……けど百点ではないわね」

「帰ってく客見てましたけど、みんな満足そうでしたよ」

「バンドやってる上で大切なのは実力もそうだけど、何より大事にしなきゃいけないのはライブに来てくれるファンよ。宣伝やグッズを買ってくれるみんながいないと活動もしづらいし成功に繋がる確率はグッと減るからね。ファンを失望させるライブだけは絶対にしちゃダメなの。少なくとも私達にはファンのみんなを笑顔にして帰らせる責任がある」

とことん志が高いのはさすがとしか言いようがない。

フアンを大事にか。確かにそれも活動していく上で重要な事だ。

「やっばここに来て正解でしたわ」

「急に何よ」

「さあさ、ヨヨさんも一緒にスーパー行くなら早く衣装着替えてきてくださいね。俺も掃除すぐ終わらせるんで」

「分かってるわよ！ 貴方がスマホ見てニヤニヤしてたのが悪いんだからね！ 覚悟の準備をしておきなさい！ 残りの三日は今まで以上にしごいてやるんだから！」

何でいきなり俺に対してスパルタ思考になってんだあの人……。やっばニヤニヤしてたの俺。それは普通に恥ずかしいんだけど。

……ほんとにジョジョ知らないんだよね???

「(ライブ中私達には向けなかった笑顔してたくせに……だから百点にならなかったんじゃないのよ……)」

その後宣言通り、俺は残りの三日間をパシリみたいなレベルでこき使われ(全部ヨヨさん主犯)、無事地獄のシデロスサポート期間を終える事ができたとき。

83. 適材適所は確かにある

二月になった。

シデロスへのサポート期間も何とか無事に終わり、その次の日さっそく俺はスターリーにやってきた。

昨夜ロインで終わったとメッセージしたら『じゃあ明日スターリー集合ね』って来たのだ。どうやら劳いのお休みとかくれるつもりはないらしい。別にいいけどさ。という訳で。

「一応ただいまです」

「優人くんおつかえりい〜!」

「一週間振り」

今まで毎日のようにスターリーに来てたというのもあってか、たった一週間行かなかったというだけでも結構久し振り感あるな。

やっぱこの落ち着く感じが良いよね。スターリーはいつもみんな笑顔でアットホームな職場です！

「一週間だけだけど何だか久々に会ったみたいと感じちやうねっ」

「ちやうど俺もそう思ってたところです。適当に見渡せば知ってる顔しかいないって良いですよね。店長がいつもしてる気だるげな顔とか見るとシャキツとなりますし」

「おう、しばくぞこら」

「これこれえ〜！」

「私とひとりちゃんは学校とかで一緒でしたけど先輩達はずっと会ってなかったですね。けど私もスターリーに優人君がいないのは違和感凄かったわ。もういて当たり前の人になってるもの！」

「そう言ってもらえると悪い気はしないよ。うんうん、そうだよな。スターリーで後藤さんに背後取られてるこの感じだよ。なんか向こうにいた時はずっとヨヨさんが隣に居座ってたけどどうしても物足りなさがあったんだ。俺が感じてたのはスタンドがない違和感だったって事か！」

「多分それ毒されてるんじゃないかしら。もう手遅れのなやつ」

「やつと安全圏ゆうくわんが戻ってきた……落ち着く……」

「優人くんがいない間に何かあるとすぐゴミ箱だったりテーブルの下に隠れてたぼっちゃんがまるで自分の巣穴を見つけた動物みたいに納まつてる……」

面白いでしょこのペット。マジで面白いんすよ。たまに人間やめたりするんですけどね、ふへへ。

「ギターもちゃんと持ってきてきてるんだね？」

「まあここに来る時くらいですけどね。主に喜多さんと一緒に放課後練習したり個人練習する時は持ってくるようにしてます」

「新宿の方には持ってたってなかったの？」

「あつちじゃ俺の役割はほぼマネージャーに徹してたんで、私欲に走ってしまおうような事は控えるために持っていきませんでしたよ。あと俺がギター持つてくとヨヨさんうるさくなりそうだし」

「ああ、何となく分かるかも……」

あの人ツンデレだからマネージャーはマネージャーらしくしてなさいと言いながらもそわそわして絶対何だかんだ自分からギター教えてくるタイプだよ。

俺には分かる。それでハッセにミーティング始めるからって首根っこ掴まれて引つ

張られるとこまで想像できた。

「そんで優人」

何気ない会話ばかりしていて本題に入ろうとしなかった俺達を見兼ねたのか、カウンターの席に座っていた店長から声がかかる。

「向こうで得られたものはあつたのか」

視線が一気に俺に集まった。

いきなりとはいえ虹夏さん達に一週間シデロスのサポートをしに行くと言言したのだ。彼女達は反対する事もなく妙に理解を示してくれて送り出してくれたのだが、その結果が気にならない訳でもないだろう。

キュツと、裾を後ろで掴まれている力が微かに強くなった。

表情は見えない。後藤さんとはサポート期間も毎日夜に家で一緒に練習したり雑談などで近況報告をしたりして大体は知っている。それでもここで俺がどう答えるのか、それが気になるのだろう。

「もつと単刀直入に聞こうか」

足を組み、イスと一緒に体ごとこちらへ向けて、店長は言ってきた。

「いや、この人の事だ。どうせ俺が何て答えるか分かりきってるくせに、わざわざ結束バンドのみんなが聞きやすいよう舞台を整えたのだろう。万一にも『向こうに行った結果はどうだった？』『何の成果も得られませんでした』なんて気ままずくなくてしまおう。囲気を避けたくて質問を控えていたみんなのために。」

となれば俺も大人が用意してくれた舞台に堂々と立つてみせよう。

「万一なんて存在しない。結束バンドのためなら何が何でも必ず成果物を持ち帰ると決めていたのだから。」

「こいつらのためになるような成長はできたか？」
「当然」

「あたし達だって優人くんが向こうに行ってる間何もしてなかった訳じゃないよ！」

さて、いつも通り結束バンドのミーティングが始まった。

そもそも昨日の時点で今日の活動内容は粗方聞いてたし、そのための準備ももう済ませている。ロインの方はと……もうすぐか。

一旦スマホをポケットに入れ虹夏さんの方へ向き直る。

じゃじゃーんとわざとらしく擬音まで口に出して（可愛い）虹夏さんはテーブルに一枚のCDを置いた。

「曲が完成しましたー！」

「お、これが例の新曲ですか」

CDの側面には『グルーミーグッドバイ』と書かれている。簡単に言えば新曲のタイトルだ。

「そうだよー！ 優人くんが頑張ってるからつてぼつちちゃんも結構早く作詞してくれだからレコーディングに入れたんだ〜！」

「あ、へへ……」

さっそくCDプレーヤーに入れて聴いてみる。

イヤホンから流れ出すサウンドからは、今までとはまた違った曲調だった。

「これは……結構爽やかな感じですね」

歌詞は相変わらず後藤さん寄りの陰キャ志向だけど、サビ辺りの部分は少し明るめになっていて聴き手の印象を変えてくる。

以前の結束バンドの曲とは一風変わった雰囲気で、これはこれで面白いから俺は全然ありだと思う。

「でしよう！ 私も今回の曲は爽やかめで好きなの！」

「あついや〜今回はインスピレーション湧いてきてさんじか……一時間くらいで書けました……へへっ」

「ヘーソウナンダスゴイネー」

「さてはお前何日か寝てないな？ どうりでこの前目の下に隈があったと思っただら……俺との練習終わってからずっと作詞してたのかこのバカっ。いつも通り朝起こしに行ったらもう起きてた事が三日くらいあつたし……まさかそんな時か？ そんな時だな？

そんな時だろ？」

「ゆ、ゆうくんの推理力が怖い……うう、ご、ごめんなさいい……っ」

推理ですらないぞこんなの。ライブの三日前から寝れないヨヨさんといひ作詞で三

日徹夜する後藤さんといい、どうして拗らせためんどくせーコミュ症女子はいらんところまで似てるんだ。

しかもこのアホピンク、話盛るために三時間から一時間とか無駄に短縮して見栄張ってるし。どっちも嘘なんだから無意味だろうに。

左隣のバカがしがみついてきて涙目になりながらうゆうゆ言ってるのを尻目に、俺は本題へと話題を移すことにした。

「ところで今日はやる事があるんでしょ。俺の持つてるカメラとかは一応持つてきましたけど」

「そうそう！ 優人くんも戻ってきたし曲も完成した事だしMVを撮りたいと思いますーすー！」

とりあえず虹夏さんも通常運転のようであんまり安心した。

俺に対して一週間前のようなぎこちなさはどこにも見当たらない。何か知らない間にやらかしたのかもと思ってたけど、その心配も無用だったっぽい。いつも通りでいてくれるならこちらもそのままでいこう。

「やっぱりMVがあるのとないのとじゃだいぶ変わるんですか？」

「今は動画サイトで音楽探して聴く時代だし、あつた方がバンドの世界観をより伝えられるんだよ。ね、優人くんっ」

あの、なんか虹夏さんいつもより距離が近いような……イスも普段と違ってすぐ右隣だし……。うーん……。いや、気のせいかな？

多分自意識過剰だな。危ない危ない、もうすぐで勘違い残念男に成り下がるとこだった。

「ですね。それに先を見据えるならネット投票の時もMVあつた方が拡散されやすいし、いろんな人の目にも留まりやすい。そういうった意味でも映像作品として色んなところに投稿したりするのは良い手でもあるんだ」

「へ〜そうなのね〜」

「つまるところ結束バンドの曲をもつと色んな人達に知ってもらう必要がある。MVはそのきっかけの一つってところかな。虹夏さん、ついでに新曲も含めて音楽配信サイトとかにも曲の申請送りましたよ」

「おお、それいいね！ 採用！」

「だんだん本格的になつてきたわね！」

作詞作曲担当をしてくれた後藤さんとリョウさんにはこういうとこで一旦楽をして

もらう。

その他宣伝広報などは俺達三人で分担する、というのが結束バンドのやり方だ。

「大手ならスポチファイがあるけど申請通りにくいってネットに書いてましたが、その点バンドキャンペーンなら審査は通りやすいので一応両方に申請しておきましょうか。他にも申請できそうな配信サイトにも送ってみます」

「あ、それあたしも聞いた………というかメモに書いてたよ。大槻さんのやつに」

「あの人親切すぎませんか!？」

そういうところあるんすよあのツンデレさん。態度とか言動だけ見るとキツク思えるだけで実は全部こつちのためにやってる事が大半だからね。

残り三日間のサポート中も地獄みたいなパシリやらされたりもしたけど、思い返してみれば結局全部俺のためにしてくれてたし事あるごとに心配する素振り見せてきたから俺には分かる。

「ねえ優人君、そういえば前にアップしたライブ映像とかどうなってるのかしら？ 再生数とか増えてると思う？」

「一応こまめに宣伝とかしてたけど、見てみるか。虹夏さん、パソコンお願いします」

「はいはい、宣伝してたら一万再生くらいはいつてるんじゃないかな？」

虹夏さんが開いたPCを起動しオーチューブを見ると。

「1000回！」

「……正確には？」

「約1000回……正確には986回再生だった……」

虹夏さんもちよつと見栄張りたかつたのかな。

「やっぱりきつかけがないと伸びにくいのかしら」

「宣伝はしても拡散されないと広まらないしな。いつもRTしてくれてるアカウントもおそらく師匠^{一号さん達}だけだし見てくれる人も限られてくる。それにトウィッターのリンクからわざわざオーチューブに移動して映像を見るのは手間って考える人も少なからぬ。それで余計に視聴する人が絞られちゃうんだと思う」

「広報活動って言っても簡単じゃないのね……」

「ああ、まだ知られてないバンドなら尚更な」

普通に宣伝するだけじゃこれまでとは何も変わらない。

知らない人達にもつと興味を持ってもらうためには他の方法を模索しなくてはなら

ないのだ。

「あ、でも結束バンドの公式ツイッターのフォロワーちよつと増えてない?」

「徐々にですけどね。開始当初よりかは投稿するといいねが貰える事もほんの少しずつ増えてきてます。本音を言うといいねよりも拡散してほしいってのが正直な気持ちですけど……」

「まあそこは人それぞれだもんね。おつ、イソスタの方は結構フォロワー増えてきてるじゃん!」

「マジすかつ。そつちは喜多さんに任せてるからそんなに見れてないんだけど、やっぱ慣れてる女子は宣伝もフォロワーの増やし方も心得てる的なやつ?」

「あつはは……」

イソスタが気になって虹夏さんのスマホを覗き込む。

「ただ勉強しても男子と女子の感性の違いや、女子の興味とか流行り事などへの関心性が分からない分、喜多さんならこういうのに慣れてるというのもあつて興味を持つてもらおうという事については強いのかも。これに関しては俺の分からない領域だ。」

ところが。

「……ナニコレ？」

「みんな喜多ちゃんの話しかしてないんだけど……美容アカになってない？」

「自撮り付きの方が反応多くてつい……」

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！ 俺達はロックバンドとして結束バンドのアカウントを運営していたはずだ。なのに気付いたら結束バンドの公式イソスタアカウントは美容系アカウントになっていた。

な、何を言っているのかわからぬーと思うが俺も何を見ているのか分からなかった……。

「コメントも一切結束バンドとか楽器の話とかしてないもんね」

「優人君に言われた通り機材とかリハとか裏側的な写真も投稿してはいるんですけどねえ……」

コメントを見てみれば『アイシャドウ発色いいですね！ どの使ってるんですか？』とか『どうしてそんなに肌白いですか？』や『どの写真も可愛くて羨ましいです！』などそんなのばっかで音楽の話してる人は一人もいない。

いや確かに可愛いけどそこまで触れるところか？ という疑問が拭えない。

とりあえずこの『制服って事は高校生？ めっちゃ可愛いね。てかどこ住み？ ロインやつてる？』とかクソみたいな事ぬかしてるユーザーはあとでブロックしておこう。

もしくは後藤さんの溶けた顔でも投稿して現実見せてやろうかこの野郎。……それは他のフォロワー減りそうだしやめとこ。

「これからはツイッターにもリンクだけじゃなくてーコーラスだけでもいいからライブ映像やMVを投稿したり、イソスタのストーリーーズにもMVとかを流す事にしよう。とにかく結束バンドの活動と音楽をアピールしていくんだ」

「分かったわー！」

「じゃあさつきも言ったけどまずはMVが最優先だねっ。カメラとか撮影にも最近力入れてくれる優人くんが戻ってきたから今日はMV撮影がメインになるよー！」

「つと、もう近くまで来てるか。すいません、ちよつと外出てきます。すぐそこまで来てるらしいんで」

ロインを見たらちようど駅に着いてこちらに向かっているようだ。

まだ開店前だからこつちから迎えに行かないと向こうも勝手を知らないから入りづらいらいだろうし。

「誰か呼んでるの？ まさか大槻さん？」

「だとしたら今日俺が駅に着いた時点でびったり着いてきてますよあの人は。とにかく行つてきますね。ほら後藤さん、いつまでうゆうゆ言つてんだ。てか知らん間に腰までがつつりホールドしてきてるしつ。さりげなくポジションチェンジなんてどこで覚えてきた！ ええい離せ！ このつ、はなつ、は……HAN☆NA☆SE！」

「うゆうゆ……」

「このうゆうゆ星人両手を結合してんのかつてくらいビクともしねえ……。
これがほんとの手錠つてか。やかましいわ。」

「……まあいいか。んじや行つてきます」

「ぼっちちゃんくつついたまま行つただけど」

「人馬」

「ケンタウロス」

なんか好き勝手言われてんな。

幸いスターリーの入口階段を上ると待つていた人達がちょうどそこまで来ていたの

でそのまま中に入ってもらった。

おかげで後藤さんごと変な目で見られずに済んだ。

「あ、おかえりー早かったね。二分も経ってないじゃん」

「すぐそこまで来てたんで」

階段を下りてフロアに向かう。

我らがゴットウーザ様は人の目も気にしないでいまだ器用にくつついたまんまだ。多分人間の尊厳とか持っていない。

「MVを撮るってのは昨日の時点で聞いてたので、突然ですけどダメ元で聞いてみたんですよ。撮影とかは俺も勉強してはいるけどまだまだだし、それなら俺よりも詳しくて結束バンドのために動いてくれそうな人達に頼めないかって」

「優人くんより詳しい……あ、まさか」

「そのまさかですぜい」

どうやら虹夏さんは何度か遊んだ事があるらしい。俺も前に聞いてびっくりした。

ちなみに結束バンドはMVにお金をかけたたくてもノルマ代に消えるので使えるお金がなく、自分達の持っている限られた機材や技術で撮るしかないという事になった。

そこで俺が考えたのが、ならば詳しい人に頼み込んだらどうという案だ。

俺にカメラや撮影に関しての知識を教えてください、且つ結束バンドが大好きな人達ならば受けてくれるかもという可能性に期待した。

その結果がこれだあ！

「へっへっへ……いでよ結束バンドのファンよお!! 今こそその力を発揮する時だあ!!」

「ども〜! 一号です〜す! 弟子に頼まれてやってきました〜!」

「二号です〜!」

「そして俺は番号らしいです〜!」

「優人くん急にテンション上がってるけど、仮面ライダーっぽいポーズキメてもぼっちゃんのせいで何もキマツてないよ」

誰か早くこのピンク剥がしてよもうー!

84. MV会議

「じゃあどんなMVにするのか企画会議を始めましょう！ 何かこういう風にしたいみたいなイメージとかあってありますか？」

さて、スターリーで会議が始まった。

司会進行は主に映像制作で作品も作った事ある結束バンドのファン一号二号さん、もとい俺の師匠達だ。

「リヨウ結構バンドのMVとかチエックしてるでしょ？ お決まりのやつとかないの？」

「特に関係ない女が出てきて泣くか踊るか走ってる」

「あゝ見るわ」

「俺も結構見ますけど、何でああいうのって女性ばっかなんでしょうね」

「さあ、共感性とか？」

確かに男が泣いてると女の子が泣いてるとじゃ見てる側の印象も変わってくるか。

「あと顔の良いメンバー以外サブプリミナル程度しか映らない。特にドラムとベー」
「すぐ偏見言うのやめろお！」

そういうもんなの？ 俺が見てるバンドのMVは基本ボーカルメインだけど他にも結構平等に映ってたような気もするけど。

まあそこはバンドそれぞれの方向性とか考えがあんのかな。歌詞や曲に集中してほしくてボーカルの顔一切出さないバンドとかもいるし。

ん、というか……。

「それで言うなら結束バンドはみんな顔良いしMVも普通にメンバーがメインでも良さそうですけどねえ」

「「……………」」

「私もそれは思うけど君はいきなりそんな事言っちゃダメだと思うよ弟子君」

「え、なんで……………つてぎやあ!!? なになんなのいきなり後藤さんから蒸気出てるだけだ!? てか普通にあつちいし！ 何度あんだよこれ!?!」

「あーもう優人くんが変なこと言うからっ。お姉ちゃんちよつと冷えビタある!」
何でみんなして俺が変なこと言ったみたいなの。おかしくない?

左半身ほぼサウナ状態なんだが。こんなところでするより真冬の外でやってくれと助かるのにつ。てかライブハウスに冷えビタなんて置いてる訳――、

「あるよ」

「あんのかよ」

「ぼっちちゃん対策用にな」

店長が普通にキツチンの冷蔵庫から出してきた。

この人の事だからそのうち後藤さんのためだからって何でも用意してきそう。過保護か。

虹夏さんが俺に対して小さくぶつくさ言いながら後藤さんの額に冷えビタを貼るとあら不思議。今の今まで高温まき散らしサウナストーンだった後藤さんがだんだん回復していった。それで治るのね。

一度溶けかけたおかげでようやく後藤さんを引きはがす事ができ、気を取り直して会議を再開する。ちなみに俺の発言についての謎は解明される事はなかった。

「あとMVでありそうなのは……あ、みんなで踊るとかは？ 最近だとそういうのも流行ってきてるもんね」

踊りの案自体は良いかもしれないが、生憎うちの後藤さんはそういうのと無縁なので虹夏さんが思っているようなダンスは多分……いや確実に踊れない。

でも逆に一人全然踊れてない方が面白くて注目浴びる可能性もあるか？ ……ダメだ、注目浴びたら浴びたでこやつ死ぬわ。

「私ダンスとか振り付けあまり得意じゃないですけど……」

「大丈夫、どのMVも一夜漬けみたいなキレイのないダンスしてるから」

「偏見ばっかだなアンタ」

どんな目でバンド見てんだよ。えっと、何だっけ、SEKAINOHAZIMARIのホビットだかハグリッドだか忘れたけど、あれのダンスとかは面白くて良いと思っけどね。踊れるか踊れないかは別として。

けどもしダンスするとして振り付けとかどうすんだろ。経験者いないし踊れない子もいるから普通に詰みなのでは？

「え〜分からないなあ。こんな感じですかね？ K-POPみたいなので」

「喜多ちゃんめっちゃキレイじゃん！」

「普通に踊れんのかい」

「出た出た、できないとか謙遜してても実は結構余裕でできちゃいます的な陽キャムーブ。」

しかもジョニーズとかSKZ48とかの曲じゃなくてK-POP選んで踊るのがまた陽キャポイント高い。なんかK-POPダンス特有の腰くねくねしたりしてる。ちよつとやだ、喜多さんスカートだから直視できないわ。

「うーん、でも喜多ちゃんのダンスは難しそうだなあ。ぼつちちゃんは何かできる？」
「えっあつ……!？」

俺を見ても助け船とか出してやれんぞ。ダンスに関しては俺も専門外だから何も知らんからね。

ということとで静観させてもらう。万に一つの可能性として後藤さんが何かしら踊れるという世界線がこの世界かもしれないという奇跡を願ってみる。

「あつへへ……」

「……」

「あ、もういいよぼっちちゃんありがとありがとつ。なんか……ごめんね？」
氣遣つて謝るのが一番ダメージ多いと思うんですがそれ大丈夫ですかね。

いや俺もまさかドジョウ掬いしだすとは思わなかった。あれを喜多さんのダンス略して喜多ダンの後にやるのは逆に勇氣ありすぎだろとは思ったけど。

「(陰キャの私にダンスなんて無理だったんだせめてロボットダンスみたいだに段ボール拾う動作とかその辺にしとけばまだ笑いに繋がるかもしれないなかつたのにもうダメだ私はダンスもまともにはできないくそ雑魚人間なんだゆうくんお願い慰めてしくしくずびずびずび……)」

「おーよしよーし、大丈夫だからなー。誰も後藤さんに期待してなかったからハードルは元々低かったぞ。何なら今回に限つてはいきなり無茶ぶりした虹夏さんが悪いから。あと今俺の服で鼻かみやがったなキサマ？」

急いでティッシュで拭くもちよつとカピカピになった。

この野郎……人が優しく慰めて撫でてやってるのに仇で返してくるの早すぎだろ。俺に何の恨みがあるんだ。

「すいません。ちよつとキッチンの方で軽く服濡らして洗ってくるんで、続けててくだ

「ささい」

「わかったら」

「ずびびむぎゆっ」

とりあえず仕返しとして鼻に丸めたティッシュ突っ込んでからドリンクコーナーにあるキッチンへと移動する。

当然カウンターには作業中の店長がいる訳で、

「ん？ どうした、喉でも乾いたか？」

「いや、ちよつと服を洗いに」

「ジュースでも零したかあ？ 一応飲料系も店のもんなんだから無駄にすんなよ」

「後藤さんの鼻水です」

「……」

「後藤さんの鼻水です」

「……うん、何か……すまん」

「いえ」

色々察してくれたっぽい。

良かったな後藤さん、理解者が徐々に増えていつてるぞ。

「あ、あとカメラとか機材貸してくれてありがとうございます。一応俺のカメラも持ってきてるけど店のやつの方が性能も良いし、同時に別アングルから撮影する時があったら便利なので助かりました」

「おう、気にしなくていいから好きだけ使え。他にも困った事があつたら私に遠慮なく言えよ」

え、やだ、なんか店長いつもより優しいんですけど……もしかして明日空から隕石でも落ちてくる？

「そ、それと今月の給料はバイトだけど臨時にボーナス付けといてやるからな。お前が新宿に行つてた間は有給扱いにもしてるしっ」

「……？」

ん？ 何か流れ変わった？

「店長、何かあつたんですか？」

「えっ？ い、いや？ 別に、何も……？」

きよどり方が何も無い人には見えないんだが。

「正直に言ってくれたら後藤さんの写真一枚あげます」

「実はこの前お前らが私に無断でリヨウの家に行つてバイトバックれたりお前が事情はあれど一週間も新宿に行つた時とかもしかしたら実は私微妙に避けられてたり嫌われているのかなつてちよつと不安になつたんだが見てる限りそんな風には見えないしでもこつちとしては毎日のようにシフト入つてくれる貴重な人材のお前が新宿の方に惹かれてバイトだけでもあつちに行つちまうんじゃないかつて思うと他のシフトの融通きかなくなりそうだから何が何でもお前をここにいさせるための手段なら出来る限りの事はしようと思つたんだ」

早口すぎて饒舌オタクみたいになつてるよこのチヨロ店長。ちよろすぎて心配になるレベル。

しかも息継ぎなしによく言えたな。どんだけ後藤さんの写真欲しいんだよ。

いや、まあ？　そういえば確かにリヨウさんの家行つた時は店長に何も言わず出てつたな……。てつきり虹夏さんが連絡してるものだと思つてたけどしてなかつたんだね。

ちよつと不安になつてる店長も中々可愛らしいところあるじゃん。三十路だけど。

「大体は理解しましたけど、別に店長嫌つてる人とかおそらくこのスターリーで働いて

る人の中にはいないと思いますよ。表情や態度がヤンキーっぽくてもツンデレって思えば微笑ましいですし」

「褒めてんのかそれ」

「少なくとも俺からすれば極上に」

ツンデレは王道にして至高なのだ。

逢坂大河然り、御坂美琴然り、古手川唯然り、中野二乃然り、西木野真姫然り、市ヶ谷有咲然り、ベジータ然り。あと大槻ヨヨコとか。あ、その人は現実にいるわ。とにかく俺からすれば最上級の褒め言葉である。自信持つて店長。

「それに結束バンドがいる限りスターリー以外で長く働くつもりは毛頭ありませんよ」
「根拠は？」

「後藤さんとおある少女の夢」

「ハリーポッターのタイトルみたいな言うな」

ヒトリポッターってか。何そのちよつと疎外感ありそうなタイトル。

「まあそういう訳で安心してください。俺もみんなも好きでここにいるだけなんで」

後藤さんは人気出たらバイトだけ辞めるって言ってたけど。何度か未遂もしてるし

な。

「……なら大丈夫か」

「あ、けど臨時ボーナスはくださいね。貰えるものは喜んで頂く主義なんで」

「ほんとがめつくなつたよなお前」

「信用の表れって言うてくませえ」

店長と適当に話しながらカピカピになった部分を洗うこと数分。

水で濡らしてタオルで服の水分を可能な限り吸い取って終了。ここにはドライヤーないし乾かすのは諦める。

一部分だけ若干濡れてる服のまま会議中のテーブルへと戻ると、何やら話が進んでいった。

イスに座るついでに正面の喜多さんに話しかける。

「何か進展あった？」

「今のとこサムネは子供と犬で釣ってタグも引つかかりやすいのつけて、動画タイトルは『神回』楽器屋さんで100万円使い切ります【プレゼント有】って事になってるわ！」

「却下だ馬鹿野郎共」

何をどうしたらそんな地獄釣り炎上不可避なタイトルと手法になってんだ。

ブレーキ役はいないのかブレーキ役は。

「何でこのカオスを止めなかったんですか師匠」

「いや、結束バンドのMVだしみんなの意見を大事にした方が良かったかなって思ってたから想像以上の速度でここまで堕ちちゃったっていうか……」

「どうやら傍から見れば結束バンドはアクセル全開で自ら地獄に向かっていったらしい。」

あの虹夏さんでさえMVを作る事に夢中になっていて無意識にテンション上がってるせいかツツコミポジション放棄してるし。

二号さんの方は俺と目が合うと苦笑いしかしなかった。大丈夫か、結束バンドのイメージマイナスとかになっちゃってないだろうな？

とはいえ大体の元凶は分かっている。こういうのに悪ふざけだったり真剣だけどダメな方に行ってしまうおバカが二人ほどいると。

「よし、リョウさんと後藤さん今から発言禁止。作詞作曲で疲れたでしょ。今は黙って

会議を見守つててください」

「ふむ、そういう事なら仕方ない」

「な、なんか棘を感じるような……」

「優人君あれ遠回しに戦力外通告してませんか？」

「言うほど遠回しでもないよ。言葉の端々にブチギレが見え隠れしてるよ」

真の脅威は有能な敵ではなく無能な味方だ。

音楽にステータス極振りしてるせいかな作詞作曲担当の二人はそれ以外がカスなのである。ロクな案とか出してこない。

「ということでは虹夏さんと喜多さんで会議続けましょう。サムネとかタグについては追々決めてく事にして、ロケ地とかその辺の事を話しましょうか」

「そうだねえ。ロケ地ならどこがいいかな？ 駆け出しバンドだと浜辺とかネオン街はよく見るけど」

「オシャレだし映像映えしそうでいいですね〜！」

そうそう、こういうのだよちゃんとしたミーティングってのは。

俺の中のこういうのでいいんだよおじさんも「こういうのでいいんだよ」って言うてる。

シテロスの時はヨヨさんが基本仕切ってテンポ良く進めてたから早めに終わった分、その後の練習時間を多く取って成長に繋げてたからな。

多分結束バンドはツツコミよりもボケが強すぎていつもコントになるのがダメなんだ。下手するとさつきみみたいに収拾つかん場合もあるから注意しておかないと。

「ねえねえ、海なら前言った江の島とか良さそうじゃない？ 優人くんはどう思う？」

「江の島海自体は悪くはないと思いますけど、この時期だとまだめちやくちや寒くないですか？」

「うっ確かに……」

真冬の海に腰まで浸かりながらMV撮ってたバンドとかいたけどね。

さすがにそれをロックだからといって彼女達に強いるのは到底できません。いやそもそも海に入る訳ないか。

「優人君は何かないの？」

「あー、そうだなあ……。例えばほら、下北ってサブカルの街でもあるし劇場とか古着屋とか並んでてちよつと他の地域とは違う側面も持つてるだろ。結束バンドは下北メイトンに活動してるし、その商店街とかの風景とか利用するのも味があって良いかもな」

「ほほう、それも有りだねえ」

結束バンドの宣伝にもなるし下北の宣伝にもなるし、ネットでも色んな人に見付けてもええれば上手くスターリーに来てもらえる事もあるかもしれない。

未確認ライオットの審査が通る通らないに関わらず、これから活動が続けていくならMVにだって力を入れていかななくてはならないのだ。予算がなくともそこから自分達のやりたい事や表現したい事をMVに抽出して視聴者の心にどうすれば響くのかを考える。これもサポート役としての俺の役割だ。

「ただ今回の曲の歌詞に合わせるなら他にも候補は出てきそうですけどね」

「あつ私良いMV思いつきましたよ！」

なんか目が大変キラキラしておられるのですが……。

清水優人は知っている。経験則で知っている。こういう時の喜多さんは陽キャオーラ満載でとんでもない事を言い出すのだ。

普段の彼女なら気にしないのだが、江の島の炎天下の中階段全部上ろうと言った時といい、そもそも結束バンドを一度バックレた時といい、喜多さんは度々ぶつ飛んだ事や言い出したりやったりする事から、彼女の背後にキタールのオブジェクトが出たらそれはつまりレッドコール。いわゆる危険信号の合図である。

その対象は主に陽キャオーラを喰らってダメージを受ける後藤さんだ。

「あ、俺ちよつとバケツ持ってきますね」

「え、なんで？」

虹夏さんの疑問に答えず俺は足早に掃除用具入れからバケツを持ってきてスタンバイ。

これでいつでも後藤さんの対処ができる。くくく、これが用意周到というものよ。

さあ来い喜多さん、どんな陽キャ成分増し増し発言でも俺は一向に構わんツ!!

「高校生カップルが浜辺アートの喧嘩してるんですけど、私達の演奏を見て何やかんやで仲直り。それで曲の終わりにキス！それを祝福する結束バンドっ、みたいなの良いんですか?!」

……あれ、思ってたより割とありそうなコンセプトだな。おかしい、喜多さんならもっと過激なこと言うのかと思った。

浜辺でタオル振り回しながらBBQして真夏なジャンプリーするとか言い出しそうだったのに。

まあこれならMVにありがたなやつだし後藤さんも大丈夫だろ。この前リョウさん

85. 日常を演じるのは実はとても難しい

あの後色々あった俺達は公園にやってきていた。

もちろんただ遊ぶだけではなくMVを撮影するためだ。

ちなみにスターリーで後藤さんにゲロられた俺は急遽結束バンドパーカーに着替えて参加している。汚された元の服は虹夏さんのご厚意で虹夏さんの家で洗濯してくれる事になった。あつたけえ、あつたけえよお……。

でもって公園に来ていという事はMVの方向性が決まったからと言えばそうなのだが、実は俺が着替えてる間もみんながやいのやいのまとまらない意見を出していたので我慢の限界が来たのか、俺の師匠に外へほっぽり出されたらしい。

何があつたのか聞いてみたら師匠は小さく「バンドマンは大人しく楽器だけいじつとけばいいのよ……」という大変ありがたいお言葉を呟いていらしたので察した。

という訳で師匠達が決めた方針でMVを撮る事になった俺達。俺は当然衣装替えや

機材などの荷物持ち担当だ。

今日は俺が撮影するのではなく師匠達の撮影の仕方などといった技術をとことん勉強させてもらう予定である。一応サポートはやらせてもらうが、色々参考にさせてもらわねば。

「今日はよろしくお願いします師匠」

「任せて！ 良いMV撮ってあげるからねっ」

何と頼もしい事でしょう。これで結束感ゼロの結束バンドミーティングへの怒りの表情を隠せていたら完璧だったのに。

笑顔なのにまだ若干青筋見えてますよ師匠。ほらもつと純粹に笑って笑って。

「んじやまあ始めますか」

「おっけー！ で、あたし達は何すればいいの？」

「優人君に大体の方針は伝えてるでしょ。それ言っただけで。私達はカメラの設定しとくから」

「分かりました」

と答えたはいいものの、とりあえず先に俺も荷物をどこかに置きたいです。

さすがに両手に衣装とか機材の入ったバッグをずっと持ったままなのは色々やりづら
らい。あと単純にちよつと重い。

「あの、ゆうと君のカメラも使っていていいんだっけ？ 借りてもいい？」

「ああ、好きに使ってやってください……つてそうか、俺のカメラ首に引っさげたまんま
でしたね。すいません、荷物どつかに置いてからでも」

「私が取ること大丈夫だよ。ちよつと首の方失礼するね」

「え、あ、はい」

両手が塞がっている俺の代わりに二号さんが自らの手で俺の首から提げられている
カメラのストラップを取った。

必然なので仕方ないけど、非常に距離が近くて思わず目を瞑っちゃった。カメラが取
られたのを感じ取ってから目を開けると二号さんが「ふふっ」と微笑んでいる。……こ
の人何気にこういう事を平気でするから侮れないんだよなあ。大学で勘違い男量産さ
せてないか心配になってくる。

これぞ大人の余裕ってやつか。ぐぬぬ、俺も好きになっちゃうぞ！ いいのか！

つておい誰だよ裾引つ張つてくるヤツ！ 今は年上お姉さんの包容力の余韻に浸つ
てるつての——、

「優人くん、あたし達はナニをすればいいの？」

「……あつ、えつと、さ、先に荷物置いてからでも大丈夫でしょうか……？」

「よろしい」

伊地知家伝統殺人スマイルがあつた。過去に何度か店長からそれをされて数秒後には地面に倒されてる事が幾度かあつたので知っている。

虹夏さんもしっかりと受け継いでるようだ。めっちゃ怖かった。冬だつてのに顔見たら冷や汗止まらなかつたもん。

そりゃあ最初に質問されてたのに答えないまま年上お姉さんの魅力に引き込まれてたら怒るのも無理はない。

はい、全面的に俺が悪いつす。なので真冬にも負けない冷たいスマイルを俺に向けないで。いつも優しくして温かい天使でいて。

ベンチに荷物を置き気を取り直す。

喜多さんが虹夏さんに話しかけていたおかげか機嫌も直っているようで安心した。とても。

「えー、とりあえずみんなカメラとか気にせず適当に自然体で遊んでくださいとの事

です。その間に撮影するから極力意識しないようにいつも通りって感じですかね」

「なるほど、自然体は得意」

「おい山田、ベンチに片足立てて膝に手をやるのどこが自然体なんだ。アニメか中二病だけだろそんな事するの」

自分をイケてると思ってるヤツほどカメラ意識しがちなところあるよな。

どこ見てんだあの人、斜め上の空をずっと見つめてるんだが。そこに何があるの。虚空？

「リヨウほどじゃないけど意識するなって言われると逆に意識しちゃうよね」

まあ、それは確かにそうだ。モデルとか俳優のような慣れてる人達とは違ってみんなはまだ駆け出しのバンドマン。

ほぼ一般人と変わらない彼女達にいきなりカメラを向けて意識するなど言うのも厳しいか。

とはいえMVの方針的にも自然体の結束バンドを映すのが目的だ。
変に意識させない方法となると……。

「もうみんなちゃんとやってくださいよ！ きゆるるんっ」

「喜多ちゃんその不自然な手元は何!? 小顔効果狙ってるよね!」

「虫歯ですっ☆」

両手を顔の輪郭に添えるようにしてキメ顔ウインクまでかます喜多さん。

写真などにもよく使われる小顔に見えるようなポーズをしている彼女だが、いかんせん言い訳が虫歯とか陽キャにあるまじき最悪な例えで嘘もへつたくれもない。あと口できゆるるんつか言うな。せめてギターンつて言え。

「ひとりちゃんも緊張しなくて大丈夫だから、もつとこつち来てもいいんだよ」

知らない間に設定を終えてカメラを回している師匠が後藤さんに話しかけていた。

ちなみに後藤さんは木の後ろで体育座りをしている。平常運転だね。

「あつ私映り悪いので撮らなくていいです……あとこれほとんど自然体です……」

「弟子君ヘルプ! どうすればいいの!?!」

「しばらく経つと頭にキノコ生えてくるんでそれに栄養吸われたら救いを求めてこつちに寄ってくるか地面と一体化するの二択だと後藤生態レポート（自作）には書いてますね」

「それ自然体とかじゃなくてただ自然に還らされてるだけだよ!?! あと生態レポートつ

「何!?!」

ほほう、後藤さんは自然に優しい体の構造してるんだね。

生態レポートについてはそろそろ40ページ超えそうだからまた整理しないと。

「そ、それに私、公園来たらいつも木陰で土いじりとか石を裏返したりしかないので……。あつダンゴムシ……冬でも頑張ってるんだねえ……ウガバアツ!? だ、ダンゴムシですらみんな寄せ合って温まりながら集団活動してるなんて……私よりも上位種なんだ……」

「ひとりちゃんはもう少しカメラ意識してくれない!?!」

勝手にダンゴムシ見つけて勝手に敗北する女子高生とか今までいたのかな。

完全に後藤さんよりもダンゴムシは上位種だけど後藤さんは人間の中でも希少種だから安心していいよ。……いや奇行種か? 156cm級の巨人……ではないな。普通サイズだ。

「……ん? でも待って。ひとりちゃんさつきほとんど自然体って言うってたよね。じゃあ普通の自然体って訳でもないんでしょ? それなら普段はどうしてるの?」

「あつそれは……」

おっと、何だか空気の流れが乱れてきたかもしれない。
少しお花を摘みにトイレに避難でもし――、

「ゆうくんが何だかんだいつも相手してくれませ……」

「はいもう逃がさないよ弟子君」

「ぐぼっへあ!? いきなり襟首引つ張られるのは普通に首締まるう!? てかやだっ、やだよ! 師匠のその目は絶対俺にMV出させる気満々のやつじゃん! さすがにサポート役つつつてもMVとか表舞台に出るのは解釈違いだつて! こんなものいつか過激派男性ファンに刺される未来しか見えなかつ。推しの子に転生しちゃう来世しか見えなかつ!!」

「大丈夫、そんなの現実には起こらないから」

現実とか言わないで。一応人間辞めてる代表そこにいるでしょうが。リアルと最もかけ離れてる存在だろそのピンク。

「だって結束バンドの手伝いするんですよ。大事な時に協力してあげないと弟子君がいる意味ないじゃん。あとひとりちゃん全体的に暗いし画にならない」

「もつと他に方法あるでしょ。喜多さんや虹夏さんと絡ませるとかつ。そうすりゃ後藤

さんの聞だつて多少は……ミクロンくらいは明るくなるはず！」

「二人共さりげなくデイスつてるせいではぼっちちゃんに棘刺さつてるよ」

「ヴツ!? ガツ!!」

物理的ダメージ負つてる事に関してはもう虹夏さんも不思議に思わないのね。慣れつて怖い。

「うーん……でも弟子君入れた方が面白くなりそうなんだけどな。見た目も悪くはないし好青年さもありませんがどこか高校一年生というあどけなさがある雰囲気……上手く活用すれば良いのできそうっ」

ちくしょう映像学科生のスイツチが変なところで入りやがった。

こうなると中々止めらんないんだよなこの人……。

「弟子君そこ立つてて。逃げようとしたらジカちゃんに技かけてもらうから」

地味に虹夏さん巻き込んでんじやないよ。

悪い事したヤツにしかさういうのしないんだぞうちの天使は。

「おっけー任せて」

二つ返事で快諾しちゃったようちの天使。
くそう、結局は女の友情の方が強いのか。男女の友情はそんなものなのかよ！

「で、ひとりちゃんは弟子君の隣に立って」

「あっはい……」

気付いたらいつも通りのポジションになってた。

何だ、何をする気だ。

「うーん……ひとりちゃんっていつも猫背で俯いてるから映りが悪く見えちゃうんだよねえ」

「二重顎になっちゃうからどう撮っても可愛くはならないわよね。よし、ここは私に任せてくださいー！」

同性に結構な物言いされてるけど本人はまったく気にしてない様子だ。
いや少しは気にしろよ。一応女子だろ。

「ひとりちゃん、ちよつといいかしら？」

「えっは、はいっ」

「男女関係なく姿勢を正すのは大事なことよ。それだけでも見栄えは結構変わってくるものなの」

喜多さんの女子力矯正指導が始まった。

「陽キャと陰キャが交差する時、物語は始まる……ってコト!? 俺はいつまでここに立ってればいいんだろう。」

「ひとりちゃんは基本猫背だから常に巻き肩なのよね。そこから治していきましょ。ひとりちゃん、まずは背筋を伸ばして……そう、それでそのまま猫背にならないよう胸を張るように両肩を少し後ろに持っていくの」

へえ、背筋伸ばすだけでも結構印象変わって見えてくるもんなんだな。

あの後藤さんが既に別人のように見えてきた。真っ直ぐ立っているからかほんの少しだけいつもより背が高く見える。大体二センチほど。

「そして最後に顔をちゃんと上げたら……」

「あっえっ」

するとあら不思議、姿勢を正すだけで下北沢のツチノコが顔面偏差値くそ高女子高生へと変身したではないか。

前髪は相変わらずだがあの後藤さんの背景にいつも喜多さんが宿してるキラキラトーンが輝いていた。ガチのビフォーアフター感ある。これでピンクジャージじやなかったらなあ……。

「あつなっ何か変わります……?」

「これよこれ……!! どうです!? アイドル事務所入れると思いません!? ビジュアル担当で売り出しましょうよ!」

「いいね〜ひとりちゃん! やつと画になったよ〜! 弟子君を隣に添えるとより良い! 高校生カップル感あつてMVらしくなってる〜!」

人を添え物にすんじゃねえ。

「十秒持たずにぼっちちゃん元に戻ったけど」

「ほらあ、師匠が高校生カップル感とか言うからコンプレックス刺激されて戻っちゃまったじゃないすか〜」

「あと優人くんはそこからもう離れなさい」

「んえ? 虹夏さん? いきなりなん……分かりました離れます離れますだから握力強めないで」

急に虹夏さんに手を掴まれてカメラの外に連れていかれたと思えばまたも殺人スマイルを浮かべていた。

え、あれに関しては絶対俺じゃなくて茶化した師匠が悪いと思うんですが……俺は少しもふざけてないよ！

そこからというものの、師匠達の指示になるべく従いながらMV撮影を進めていく俺達。

いざ真面目にやってみればこれが意外と順調に撮影は進んでいった。

基本的にノリの良い喜多さんと虹夏さんが普段通りのまま明るく公園遊具で遊び、気だるげな仕草すらいっそそういう一枚の画になるリョウさんはベンチで佇み、木を背もたれに座っている後藤さんは土をいじって、実は木の裏というカメラに映らない死角から後藤さんの相手をしてた俺。

平凡な高校生の日常とは少しズレた風景にはなったが、これは結束バンドの日常として撮っているから問題も特にない。

公園での撮影を終えるとみんなは公園のトイレで結束バンドパーカーの衣装に着替え移動。

サビの演奏シーンを撮るために広い場所へ行き、人気の少ないところで空をバックに演

奏シーンを撮影した。やはり映像学科生だけあってロケーションの選出が上手い師匠達。一度スイッチが入ればもうファンではなく一人の撮影監督だ。

次に制服に着替え街中で撮影準備をしていた時、俺は彼女達に声をかけた。

「俺から少し言いたい事あるんですけど、いいですか？」

「どうしたの？」

「撮影中、いつもスターリーで話してるとこやみんな歩きながら喋っている時を思い出して過ごしてみてください。そうすれば多分、カメラを意識する事も少なくなると思うんで」

「うーん、一応努力はしてみるけど……」

「私も上手くできるか心配だわ……」

「大丈夫です。そこは不真面目筆頭のリョウさんといつもアレな後藤さんが虹夏さん達の緊張を和らげると思うので」

「優人、それは褒め言葉なのかバカにしてるのかどっち」

「半々」

「……半分褒めてるならまあいいか」

「いいんだ!？」

さすがリョウさん、細かい事は気にしない精神嫌いじゃないぜ。

「後藤さん、いつも通りでいいから余計な事だけはほしくないよにな」

「えっ……あ、うん……が、頑張るっ」

偉いぞ後藤さん、よく分かんなくてもとりあえず承しちやうとこ嫌いじゃないぜ。

とまあ、そんなこんなで始まった街中撮影だが。

始まってみれば俺の想像以上にみんな自然体でできていたと思う。師匠も一度もカメラを止めずに撮ってたし、おそらく俺のアドバイスが上手く効いたのかもしれない。そうだといいな。

カメラを向けられても意識しない方法。

実際それにも様々な方法があると思うが、結束バンドに最適だったのは結局意識しないではなく意識させない方法だったのだ。

リーダーという事もありまとめ役で真面目な虹夏さん、陽キャであり常に映えとカメラ目線を意識している喜多さん。

両者の細かい問題点こそは違えど真面目だからこそちゃんとやろうと逆に意識してしまう虹夏さんに、どこにいれば映りが良くなるかを意識してしまう喜多さん。終着点

は同じだ。

だからその意識してしまう気持ちも吹っ飛ばせばいい。

真面目な彼女達を上回る自然体の権化をぶつけりゃいいのだ。

つまりナチュラルボケ二人がいつも通りにさえしていれば虹夏さんはリヨウさんのボケに構わざるを得ないし、喜多さんは何とか頑張ろうと無駄な努力をする後藤さんを放っておけない。

ここまで流れができれば後はもう放置で良い。

こちらがカメラを回してるだけで彼女達は気付けば毎日行っているような会話を繰り広げてただただ日常を振りまいていく。

カメラを意識している暇もない虹夏さん達も、いつの間にかいつもの帰宅風景のように楽しそうに話しているだけになっていた。

まあこんな手法が使えるのは個性爆発してる後藤さんとリヨウさんがいる結束バンドだけだからというのもあるが。

ともかく、こんな感じでMVは最初だけ躓きはしたものの、途中からは最後まで滞りなく撮影が進み終了を迎えたのだった。

無事にMV撮影も終わった翌日の事。

俺は虹夏さんの家に来ていた。正確に言うと玄関の前だが。

「はいこれ、優人くんの服ね」

「わざわざありがとうございます。あのアホのせいで手を煩わせてしまったからに……」

「いいよいいよ別に！ あのまま服を放置してた方がよっぽど悲惨な事になってたかもしれないしっ」

「それは、確かに……」

昨日の後藤さんリバーズ事件の件で虹夏さんが俺の服を洗濯してくれてたから受け取りに来たという訳だ。決して他意はない。

他のメンバーは今スターリーでバイト中である。にしても後藤さんめ、吐いた張本人が一緒に来ないとは良い度胸してやがる。いやもういいけどさ。

ちなみに店長もスターリーにいるため、今ここにいるのは俺と虹夏さんだけだ。

何だろう、玄関の前とはいえ女の子に家に来るのは何だかむず痒い。後藤さんの家は

もう第二の家みたいなものだしリヨウさんの家は豪華すぎて現実感なかったのがカウ
ントには入らない。ごく普通のマンションという所に虹夏さんが住んでいるのがリア
ル感あつてとても良いですね、はい。

「さすがに悪いんで今度またお礼とかさせてくださいね」

「え、いいよそんなの！ 困った時はお互い様でしょっ？」

「虹夏さんからの施しを返さないままだったらそれこそ俺に罰が下るでしょうがあ!!」
「何の罰!? というか施して何!？」

俺が俺自身に罰を下すのです。天使にはちゃんと奉納しないと……。

「まああれですよ。このままだと俺の気が済まないので大人しくお礼させやがれくださ
い。拒否権はなしです」

「脅迫感が凄いお礼なんて初めて聞いたよ……」

強行手段でいかないと虹夏さんくらいの人は折れないと思つたんでね。

「俺にできる事なら何でもしますから、何かしてほしい事とか欲しい物とかあつたら
言ってくださいね。二十万円くらいまでなら出します」

「高校生が軽々しく言っちゃダメな値段だよそれ!？」

「虹夏さんに貢ぐならこんなはまだまだ安い方でしょうがあツ!!」

「さつきから庄が凄いんだけど!？」

元々の貯金と虹夏さん達より長くバイトしてるからまあまあ貯まってる方ではある。

マンガとか以外に使い道なかったもので。今ではギターとかカメラとか機材に使ってるから順調に減ってきてるけど。一個一個の出費が大きすぎる。

俺の庄に困っている様子の虹夏さんだったが、次第にその表情は変わっていき最後には少し俯いていた。

「えっと、あたしのお願ひ、聞いてくれるん……だよね?」

「何なりと」

折れたか。折れたな。折ってやったぜ。

「あー、じゃあ、さ……? MV撮影も終わって完成待ちなのとあとはデモテープ送るだけだし、色々忙しかったけどやっと落ち着けるじゃん?」

「? はい、ですね」

「だからね、落ち着いたらで良いんだけど……休みの日にどつか遊びに行かない? も

ちろんこれはあたしのお願いだから二人だけでね」

「虹夏さんと……遊びに、だと……?!」

それなんてご褒美？

いいの？　むしろそのお願い俺の方が役得な気がするんですが……。虹夏さんと二人で……二人でかあ……ん？　そういやこんな感じのこと前にどこかで……。

「……ああ、そういうえば前に後藤さんの家でも同じこと言っていましたね」

「え？」

「確か喜多さん達とも二人で出掛けたりしたから自分ともどこか行こうって言っていたじゃないですか。お互い親睦を深めればもっとサポートしやすい環境になるかもしれないって」

「……あく、なんかそういう事も言ってた……かな」

「そういう事なら別にいいですよ。約束してただし、落ち着いたらお礼も兼ねて二人でどっか遊びに行きますか！」

「ん、何か期待してたのと違う反応だけど……まあいつかあ」

どんな反応期待してたんだろう。

虹夏さんのためならどんな反応だってしちゃうぜ俺あ！

「じゃあスターリーに戻ろっか。今日も練習頑張るよ〜！」

「今日はバイトですよ」

とまあ、こんな感じでMV撮影が終わって虹夏さんと遊びに行くことが確定した。

余談だが、後日完成したMVを見ると完成度自体は高かったものの、画にならないからという理由で後藤さんの出演は演奏シーン以外全てカットされていた。

俺も密かに手伝ったのになあ……。

86. カラオケ店の部屋の音って案外外でも普通に聞こえる

「MVも結構再生されてるし、やっぱり本格的な映像になると全然違うもんだね〜」

「曲が良いからじゃん?」

「はいそこ自分だけ棚上げしない。この様子だと次のライブから人も増えてくれるかも。頑張ろうね喜多ちゃん!」

「えっあつはい!」

いつものスターリーでスマホやPCを使いSNSチェックや動画確認をしている俺。

その後ろには虹夏さん達が画面を覗き込んではいしゃいでいる。

無理もない。何せ先日投稿した結束バンドのMV動画『グルーミーグッドバイ』の再生数なんと10000再生を超えたのだ。正確には19329回も視聴されている。

何ならもうちよいで20000再生に届きそう。トゥイッターとかイソスタなどで色々駆使しながら宣伝に力を入れた甲斐があったというものだ。

「ん〜でも動画投稿しただけだとこれ以上は伸びないかなあ。どっかが紹介してくれたりいいんだけど」

「ライブをするのは大前提として、他にももっと手段を増やさないと厳しいかもですね。オーチューブを見てたとしてもキーワード検索で偶然引っかけたりオススメに出てくるとかじゃないと見るきつかけすらない訳ですし」

虹夏さんのぼやきが耳に入る。

約20000再生に届きそうなのはこれまでの動画再生数からすればよく出来ている方ではあるが、所詮それだけに過ぎない。

そう、SNSやクラスの友人に頼んだりしてようやくとそこまでの再生数になったのだ。

今のところ出来る限りの手段は尽くしている。だからこそ今以上の伸びしろがほとんどない状態というのは、結構痛い。

他に結束バンドを知ってもらうのに良い宣伝は……やっぱりライブだろう。

それも予算が掛からないとなれば、路上ライブ……か。今のうちに良さそうな場所とか許可取れそうなところを調べといてみるかな。

「うおっ……喜多さん？」

「ごめんなさい優人君、私もちよつと近くで動画見てもいいかしら」
「そりや全然いいけど……」

後ろでは後藤さんとリョウさんが動画のコメント欄についてぼやいていた。主に自分達の曲に変なエピソードつけて日記帳やら私物化されてるのが気に食わないらしい。そこはほつといてやれ。

そんな会話に混ざる事もなく喜多さんは俺のすぐ横まで顔を覗き込ませMVの動画をずつと見ていた。

そういやMVできたのが嬉しくて何度も聴いてるって教室でも言ってたっけ。

余程気に入ってるんだなくと、何となく横で見ている彼女の顔を見た瞬間、自分自身の抱いた感想を即座に否定した。

嬉しいなら、何度も聴くくらい気に入ってるのなら何かしら顔に出るはずなのだ。

例えば自分達の曲だから喜んだりとか、嬉しくて口角が上がってしまったりとか、そういう風に表情が柔らかくなるはず。少なくとも喜多さんはそういう女の子だと俺は知っている。

だからこそ、気になった。

喜多さんの表情が喜んでいるというより、思い悩んでいるように見えたのが。

そしてこういうった場合、サポート役の俺がそのまま放っておける訳もなく。

「喜多さん、どうかしたのか？」

「……えっ？ な、何が？」

「いや、何かMV見てる割には悩んでそうな顔してるから」

「あつ……そ、そう、かしら……」

これは……ビンゴですなあ。

この様子だと虹夏さんとかには相談してないか。普段の喜多さんならちゃんと相談しそうだが、もしかしたらメンバーのみんなには言いにくい事なのかもしれない。

「少し向こう行くか」

「え？ ちょっとゆ、優人君っ？」

誰もいない方へ喜多さんの手を引っ張り連れて行く。

虹夏さん達はまだコメント欄についてぎやいぎやい（後藤さんは静かに頷いてるだけ）言ってるのでこちらには気付いてない。こういう時何もなくても自分達だけで騒がしくなってくれるのはありがたい。

階段を少しだけ上って受付までやってきた。

ここなら誰かに聞かれる事もないだろう。

「で、何に悩んでんの？」

「え？」

「何かなきゃMV見てあんな顔しないっしょ」

「……優人君は私が悩んでるかどうかすぐ分かっちゃうのね」

「まあほぼ毎日顔見てるし教室でも席が隣だからな。そのくらいの事なら分かるよ」

「ふふっ、何それ。いつも私の顔見てるって事？」

言い方ア!!

「……あのね、この際だから優人君に聞きたいんだけど」

「あ、うん」

「優人君は私の歌って、どう思う？」

「喜多さんの歌？」

「ええ」

喜多さんの歌をどう思っているか。

いや、普通の質問であれば普通に返すのが正解なんだろうけど、果たしてそのまま答えるのが良いのか悪いのかの判断がつかない。

だったこれはただの質問ではなく、喜多さんの悩みが絡んでいるのだ。

MVをあんな顔で見ていたのも、自分の歌に対して何かしら思うところがあつたんだろうという軽い推測くらいはできる。

しかし悩みの本質を理解するためにはまず喜多さん本人から言葉を引き出すのが一番手っ取り早い。

ここは素直に言うべきだ。

「うーん、あくまで俺の主観だけど……普通に上手いと思うぞ」

「……そう、かしら」

「おう、俺も新曲何回も聴き返すくらいだしな」

「優人君はそう言ってくれるのね」

「俺はサポート役だぞ。こういう時に嘘は言わない。……だけどそれだけじゃ何か違う。多分だけど自分自身の歌声に違和感を持つてたりするってところか？」

「えっ何でそれを……よく分かったわね？」

「や、まあ色々あります……」

どこぞのツンデレツインテールにマネージャーなら演者の感情や心境をある程度読めるようになって、『マネージャーの心得』とか『人間の心理・感情の読み方』と

かそういう本を一日中読まされた日があったので……。

まさかこんなところで役に立つとは思わなかったよ。ヨヨさん、やっぱアンタすげえや。ほぼ毎日天気デツキから始まるロインしてくるのさえどうにかしてくれりやもつといいのに。

「実はそうなの。せつかくの良い曲なのに私が歌つてると何かいまいちつていうか……」

「自分の声だからそう思ったって感じでもなく？」

「うん、聴けば聴くほど違うような気がしてきて」

自身から聞こえる自分の声と他者に聞こえている声が違うというのはよく聞く話で、実際に録音した自分の声を聞いてみると思ってた以上に違つて違和感を覚えるのはありふれた話の一つだ。

しかし喜多さんの違和感はそれとはまた別らしい。もつと根本的な、それこそボーカリストとしての問題が浮かび上がってきているのかもしれない。

ギターの練習とかで音楽についての勉強はそこそこしている俺だが、歌に関してはまだそんなに詳しくない。

後藤さんと家で弾き語りの練習をしてる時も彼女からギターのアドバイスはあつて

も歌のアドバイス自体はされないからだ。後藤さん自身も歌に関しては何で自分で自信がないのだろうか。

喜多さんが感じているモノを俺から上手く伝えられる確証はどこにもない。

とすれば。

「虹夏さん達には言いにくい事なんだよな」

「うっ……まあ、せつかく曲ができてようやくみんな落ち着けたのここで水を差すよ
うなこと言っちゃうのも気が引けちゃって……」

「分かった。じゃあ他の人に聞いてみようぜ。メンバーじゃない人ならまだ大丈夫だろ
？」

「それは、そうだけど……誰に聞くの？」

「困った時は分かる大人に頼る。それがゴールへの近道だ」

ということとでPAブースに移動した。

「喜多さんの歌、ですか？」

「です。PAさん的にはどう思ったのかなって」

実は今回の新曲『グルーミーグッドバイ』のエンジニアをPAさんをお願いしていたのだ。

この人なら間違いないと頼み込んでみたらOKしてくれて超頼もしいと思ったのは記憶に新しい。

そんな本名も知らない美人お姉さんは少し考えてからこう言った。

「あー……補正しがいがあつて私は楽しかったですよ？」

「えっ」

ぜ、全然フオローになつてねえ……。今の話をカウンターで聞いていたのか、店長ですら気まずい顔でこちらを見ている。

PAさんって実はオブラートに包むの下手だったりする？　なんかもう包むどころかえげつない中身そのままぶん投げてきてるけど。

しかしほぼ直球で言われたのもあつてか大体の問題は把握できたかもしれない。

補正しがいがあつたという事は、それだけ喜多さんの歌に何かしらの修正点やら問題点があつたという事。

でも喜多さんの歌は決して下手なんかじゃない。

ライブで聴いていても正月にクラススの連中と無理矢理連れていかれたカラオケでも

下手だなんて思った事は一度もなかった。むしろあの中でも一番上手かったと思う。そう、喜多さんは上手いのだ。

なのにどこがダメなのか。喜多さん本人も違和感を覚えてたし、必ずそこに何かがあるはずだ。

例えば、ただ歌うだけのカラオケと、レコーディングやライブでのパフォーマンスの違いなど。

歌が上手いだけじゃ、意味がない……？

新宿に行った時の事を思い出せ。あそこで俺は何を学んだ。ただパシらされていたりメンバーの趣味に付き合っていただけじゃないだろ。

万全にサポートするための知識だって一週間の急ごしらえだとしても少しは身に付けただろうが。

それは楽器面だけじゃなく、歌の方面でもヨヨさんから確か聞いてたはず。

確か……、

「惹き込まれるかどうか、あるいは感情の昂りや気持ちに乗せられるか、だったか……？」

比較対象なら既にあつた。

同年代で結束バンドよりも上の立ち位置にいるシデロス。そのリーダーでもありギターボーカリストでもある大槻ヨヨコ。

色々聞かされたあの人こそ見本になり比較対象としてもうってつけの人物だ。

けどそれをそのまま伝えていいものなのかが悩ましい。ゴールへの近道を教えてもらうとはいってもただ楽をさせるだけじゃ成長には繋がらない。テストの答えを教えるのではなく、ヒントや解き方を教えて自ずと答えを導き出すのも一つのサポートだと俺は思う。

とすればきつかけを与える必要があるけど……どうしよ。

何か上手い言い方とかあるっけ？

そんな事を考えていると、視界の前に赤いのが舞い込んできた。

喜多さんの顔と髪だ。

「優人君っ、付き合って?!?!」

「んぎゃぶるばあッ?!?!」

「ぼっちゃんがいきなり発狂しだしたんだけど?!? なに?!?」

「それは割といつもの事」

なんか向こうの方でピンク色のナニかが弾けている。爆発した？ スプラボムかな

?

いや、まあ俺も一瞬はビックリしたけどさ。すぐ冷静になって考えてみるとあまりにも唐突すぎて「えっ告白？」とかにもならなかった。

「落ち着いてくれ喜多さん。言葉が色々抜けてるから。どこに付き合ってほしい訳？」
「カラオケに着いてきてほしいの！ よく考えたら私ってみんなから歌上手いって言われてギター練習しかしてないし、それに甘えて歌に怠けてたのかも。だから私に足りないのは歌の練習かもしれないわ！ お願い！」

自分が下手だって考えになるならそう思うのも当然か。ただ喜多さんに限って甘えてるなんて事は絶対がない。めっちゃくちや頑張ってるじゃんね。

とはいえカラオケか……きっかけを与えるにはちようど良い場所かもしれないな。

「分かった。じゃあこの後行くか。それと俺も行くなら必然的に後藤さんもセットになってくるけど、よろし？」

「ああ、帰り一緒なんだしそうなるわよね！ ならひとりちゃんも誘ってくるわ！」

言うや否や颯爽と向こうへ行った喜多さん。あの行動力は素直に凄いと思う。あれが陽キャのスキルの一つ、フツ軽ってやつか。

何の脈絡もなく遊びに誘われたり巻き込まれるって考えたら末恐ろしいな。喜多さんの場合は一人でどこかに行くというよりも、誰かと一緒に行くというのが大前提だろうし。

ほら、いきなりカラオケ誘われた後藤さんがさっそく餌食になっておられる。

愉快な表情で顔面崩壊してるし、おそらくまたコンプレックスを刺激される事を言われたんだろう。喜多さんってナチュラル鬼畜などこあるもんね。まるで鬼畜こけしだ。それはきんもザ。

こつちに命乞いの手を伸ばしてきてるし、そろそろ助けに行つてやりますか。

一歩踏み出したその時、ポケットの中でスマホのバイブ通知が振動した。ロインだ。

「……ヨヨさんから?」

今日は珍しく送ってくるのが早いな。いつもは夜で『今日の夜空は澄んでるわね』とか同じような天気デッキから始まるけど。

とにかくロインを開いて見てみると。

『貴方って今日空いてたりするかしれ』

最後誤字ってるよヨヨさん。ら行のフリック入力ミスってるよヨヨさん。

天気デツキからじゃないから感心してたのに惜しいな。

放課後のタイミングだから俺に用でもあったのかな。

だがまさにタイミングが悪い。ちようど今予定が決まったとこなので、ヨヨさんには悪いがまた今度にしてもらおう。

『すいません。今日は予定があるのでまた次の機会にでも埋め合わせしませ』

送信つと。

これは俺もあえて最後に誤字をする事で相手のミスによる羞恥心を和らげてあげる作戦だ。ふふん、これが優しさってやつよ。

『煽ってんじゃないわよバーカー!』

返信まで十秒も経たずにキレられた。

おかしい、お互いの羞恥心をプラマイゼロにしてヨヨさんの脆いメンタルを氣遣ってあげたというのに……どうして怒ってんだこの人。煽るだなんてそんなバカな事を俺がする訳……まあちよつとはあつたけど。

予定の有無についてはもう伝えたんだしこれ以上の返信はしなくていいだろう。

ヨヨさん、何気にあなたからのアドバイスが今日役に立とうとしてますぜ。俺頑張る

よ！ だから次会った時は胸張って会えると思います！

場所を移してカラオケ店に来た俺達。

今日のミーティングは終わったので虹夏さんとリョウさんはいない。そもそも喜多さんの意向で今回は誘ってない。

「二人共三時間でいい？」

「よく分かんないけどいいんじゃないやね」

「あつはい」

カラオケに来たのは正月のを合わせて人生二度目だ。

だからまだカラオケ店のシステムとかはちゃんと理解してないので喜多さん任せである。もちろん後藤さんもよく分かってない、と思う。過去に後藤家で行った事はあるらしいけど、何歌ってたのか超気になるわ。

「ゆ、ゆうくん……」

「どした」

「ヒトカラって、何のためにあるんだろうね……」

一人でも楽しめるからじゃないでしょうかね。俺も分かってないけど。

この感じだと喜多さんは後藤さんに事情説明してないっぽいな。ただいきなり陽キャにカラオケ連れてこられた陰キャの構図になってる。

テレビとかネットで流行っているような曲が店内放送で流れているのを適当に聴き流してる内に慣れてる喜多さんが手際よくプランとかその他諸々の機種とかを決めてくれて、俺と後藤さんはピクミンのように忠実に着いていき部屋へと移動した。

そしてさっそく。

「よしせつかく来たんだしまず楽しみましょ！ 人少ない分私が盛り上げるから
！」

「あつへへっ……うぐっ!？」

陰キャ少女がタンバリンとマラカスの両手装備陽キャに殺されかけていた。

攻撃力高つけえや。鬼に金棒だぜまったく。シャカシャカシャカうっせえな。

うっせえうっせえうっせえな。

「じゃあ最初は私が入れるわね！」

こうして始まった放課後カラオケイベント。

まだ人生二度目のカラオケとはいえ大体どんなものかは分かっていたつもりだったが、それは俺の予想を遥かに超えてきた。

まず喜多さんが歌っている最中に店員がドリンクを持ってきてくれたのに後藤さんが立ち塞がり対峙するというドラクエエンカウントが発生し。

陰キャでも歌えるんだぞと意気込んだ後藤さんが『ミッドナイトピーポーへべれけサンバ feat. ハメ外し隊／湘南のMANI MA』とかいう初めて自分の小遣いで買ったらしいCDの曲を歌って自傷ダメージを受け。

挽回しようと今度は盛り上げる方でマラカスを振り回していたらコップに当たり床にジュースを撒き散らかして落ち込む始末。

店員に雑巾を持ってきてもらい一緒に謝りつつ慰めていると「私に友達とカラオケなんて早すぎたんだ……」と悟りを開いて昇天しようとしていたところを必死に魂を食い止める羽目になったりと。

およそ普通のカラオケでは体験できない出来事を一気に体験したのだった。

うん、全部後藤さんが原因ですね。いつも通りの空回りだ。今は隣で喜多さんの歌を聴きながら大人しくストローでコーラをちゅーちゅー飲んでる。何気に友達とのカラオケを後藤さんなりに楽しみにしていたのかもしれない。ここは大目に見てあげようじゃないか。

「あ、悪い。ちよつとトイレ行ってくる」

「……えつちよつ、ゆ、ゆうくつ……カラオケで二人だけはまだちよつと気まず」

「いやトイレくらい普通に行かせてくれて。大丈夫、ただ大人しく聴いとくだけで良
いから。スマホ弄るのは一応NGな」

「うう……」

忠告だけを済ませ部屋を出る。

トイレは……あつちか。

特に何事もなく用を足し、トイレを後にしようとする。

ちよつとトイレの横にある部屋から大音量と大声量の音圧が聞こえてきた。

カラオケって一応防音対策はされてるんだよな？ めちやくちや大人数で来て騒ぎ

ちらかしてんのか。

まあカラオケだしうるさくてなんぼみたいなどもあるだろうから、これもまた醍醐味というやつなのかねえ。

にしてもこの歌声、何か聞き覚えあるような……。

ははっ、いやいや、まさかね。

きつとただの聞き間違いだと、そう思つて盛り上がっている部屋のドアを少しチラ見する程度で見てみたのだ。

すると。

なんかいた。

黒っぽい服装がメインで見覚えしかないツインテールの少女がドアのガラス越しにいた。

そして。

目が合った。

「……………うん、気のせい気のせい」

俺は笑顔で見なかつた事にした。

87. 陽キヤの唐突な行動に陰キヤは弱い

「あつゆうくんやつと帰つてき……ど、どうしたのそんな笑顔になって……?」

「カラオケの神様を見たんだ。それはもうお一人ではしやぎにはしやいでおられたよ。きつとご利益があるに違いないな!」

「トイレに行ったのにトイレの神様見たとかじゃないのね。というかカラオケの神様って何?」

知らん。俺に聞かれても困る。

もしかしたら妖精かもしれない。ほら、妖精つて基本自分から人の前に現れないコミュ症などこあるから。だからあのツンデレツインテールの姿に見えたのかな?

「まあいつか。ちようど歌い終わったとこだし、次優人君が入れてよ」

「あいよ、じゃあそうさせてもらうかな」

喜多さんからデンモクを受け取る。喜多さんのために来るとはいえ一応今のとこ

ろは遊びに来てる体だし、俺も二度目のカラオケだから少しだけ楽しませてもらうかと、歌手名検索を押しした時だった。

廊下の方からドドドドドドドドドと、とんでもねー足音が近づいてきたのだ。

え、何、地鳴らし？ エレン来た？ 進撃されてる？

そう思ったのも束の間。

その音はこちら側に迫り、やがて勢いよく俺達のドアが開かれた。

足音の主は。

「なんで目が合ったのにスルーしていくのよ!! なんで貴方がここにいるのよ私の用事を断るくらいの予定があったんじゃないの!?! なんでこんな時に限って偶然会っちゃう訳!?!」

なんでも多いなカラオケの神様もといヨヨさん。

つうか俺を見つけたからっていきなり勝手に部屋に入ってくるの肝が据わりすぎでは。あと残念な事に常識とマナーが足りてないね……。

「あれ？ 大槻さん？ どうしてここに?」

そして頭に血が上っていたのか、どうやら俺以外に人がいるのを確認してなかったら

しい。

ポカンとヨヨさんを見ている喜多さんに、急なドアバンと人の大声でキャパが超えたのか倒れながら俺の足にしがみついている死体のなりそこないを見たヨヨさんはどんどん顔に熱がこもっていく。とりあえず後藤さんは離れて。拭いたとはいえさつき床にジューズ零したでしょうが。若干まだ汚いよそこ。

だんだん目がグルグルになつていくヨヨさん。小さく「後藤ひとりもいるなんて……」と呟いたのも俺はちゃんと聞こえたぞ。

いつも通り彼女は腕を組みターゲットを絞つたのか俺だけをキツと強く見ながら、

「ば、バンドメンバーが全員ドタキャンしたから仕方なく一人で来ただけで好きでヒトカラしてる訳じゃないからツ!! そう! ほんつとーに仕方なくよ! あと一人で行くのも何だしせつかく貴方を誘ってあげようとしたのに断るからこんな事になってしまったんだからね!」

「俺のせいにされてもなあ」

ここでじゃあ他の友達誘えば良いじゃんとか言ったら地雷なので無闇な事は言わない。

何故なら俺とシデロスメンバー以外友達いないからだ。あとメンバードタキャンと

かも多分嘘。これ元々ヒトカラの予定だったか普通に俺と遊びたくてカラオケで待ってたやつだと思う。

「貴方さえ断らなければそもそもヒトカラなんかに来なかつたし？ それを勘違いして気を遣つたのか知らないけどあの態度はないんじゃない清水優人？ こっちはもう貴方が来る前提で料理とか頼んでたのに酷いと思わないの？」

「ごめんヨヨさん……まさかそこまでだったとは俺も予想できてなかつた……」

「え？ そこまでつて何が……？ な、何で肩に手を置いてるのよ！ まずその哀れみと同情の目をやめなさい!! 違うつて言ってるでしょお！」

カラオケで待つてた説はあると思つてたけど料理まで頼んでたとは思わなかつた。

普通に俺と楽しみたかつただけじゃんこの人。なのに俺は勝手に一人ではしゃいでるカラオケの神様と勘違いしてたなんて……泣けるに決まつてんだろこんなの。もう全米が泣いた。

「……えつとお、優人君？ もしかして大槻さんと遊ぶ予定だったの？」

「滅相もごいません姫。わたくし清水優人はいついかなる時もあなた様第一、ひいては結束バンドファーストで動きます故、何卒誤解の無きようお願いします」

喜多さん最近言葉の温度冷たくするの得意になつてきたよね。怖いのでできれば控えてくれると助かります。

「え、急に何よその口調気味悪いわね」

「優人君が無駄に丁寧な言葉遣いで私達を持ち上げる時はクロなのよね。そうでしょ、ひとりちゃん？」

「はい」

うわっ……俺の信用度、低すぎ……？

いやマジで低い。しかもちゃんとバレてる辺り救いようもない。あの後藤さんですら最初に「あっ」って言ってないし。めっちゃ確信持つてるやん。

だがしかし、俺だって何も学ばないアホではない。罰の回避手段ならいくつか考えているのだ。

よし、ここは外部のヨヨさんに助けてもらおう。そう、困った時の他力本願よお！

「さあさあヨヨさん、せつかくなんで一人ならここで一緒に歌いませんか？俺もいるし当初の目的と一致してますよね？　ね？」

「いきなりグイグイ来るわね……。ま、まあ？　貴方がそこまで言うなら別にいいけど

……？ し、仕方ないわねえ。たまには大人数でもいいからつ

ヨヨさん出てる。ヒトカラだったのが思いつきり出てるよ。

たまには大人数でもいいっていつも一人でカラオケ来てるって遠回しでもなくむしろ近道で言っちゃってるよー。

「……まあ、私を優先してくれたのは事実だし、今日は許してあげるわ優人君」

一応先約なんだからそりや優先するでしょうよ。何はともあれ制裁は回避できたから良しとしよう。マジで心臓が悪い。

いや別に悪い事は何一つしてないけどさ。もはや条件反射で体が勝手に怯え始めるのやばくない？

「この男に誘われたから仕方なくだけど邪魔する訳だし……これ私の部屋で頼んでた料理、食べる？」

俺が来る前提と思ってたとしても一人で頼むにしては多すぎませんかねこの料理って質問は多分アウトだ。おそらく予備動作なしで裏拳飛んでくる。

それにしてもピザやら山盛りポテトやらから揚げやらスナック菓子やら、定番の物は

ほとんど頼んでるなこの人。まさか俺の好みが変わらんから人気なのを片っ端に頼んだとか？ いや、さすがにないか。

そしてこのラインナップを見て一番目を輝かせてるのが子供舌万歳な後藤さんである。

ヨヨさんの死角に入る状態で俺の裾をちよいちよいと引つ張ってきた。

「ゆうくんっ……これ、食べてもいいのかなっ……？」

「あーはいはい、分かったから今日一番の目の輝きを抑えなさい。じゃあヨヨさん、ありがたくださいますね」

「フンッ、別にいいわよ。元々貴方の分も頼んでただけだから」

今日偶然出会ってなかったらこれ一人で寂しく食べるつもりだったのかなと考えると途端に申し訳なさが凄くなってきた。

ヨヨさんがちよびちよびポテトをつまむのが容易に想像できてしまうのもまた切なさ加速させる一端だと思う。

「よし、ゴーサインは出たぞ後藤さん。いっちゃいなさい。全部平らげて迎えるはずだった悲劇を残す事なく吸い込んじゃいなさい。来て、ワープスター！」

「どんな想像してるのよ！」

「ひとりちゃんほんとにカービイみたいにから揚げ吸い込んでるんだけど……」

さすが後藤さんだ。同じピンクカラーだから再現性も高いね。怖いね。

でもやっぱり普段みたいに美味しそうにちびちび食べてる後藤さんの方が目の保養になるからやめようか。あとそのヒュゴオオオって勢いよく吸い込むのはカービイじゃなくてルリアだぞ。ピンクというより蒼の少女だからねあつちは。グランでブルーなファンタジーの世界だから。

「じゃあこっちはこっちでカラオケに戻りましょうか。せっかくだしヨヨさん歌ってみてくださいよ」

「え、でもさつき私が乗り込んだ時にデนมク持ってたのは貴方なんだし、貴方が歌う番じゃなかったの？」

乗り込んできた自覚はあったのね。

「まあまあ、俺がヨヨさんの歌を聴きたいってだけなんで。頼みます」

「……ふ、ふーん？　ならしやうがないわねえ。全然？　気は乗らないけど……？」

一人の時めつちやノリノリで歌ってたのによく言うな。

俺から受け取ったデンモクを手際よく操作していくヨヨさん。既に歌う曲を決めたのか。十八番とか歌うのかね。

で、モニターに映し出されたタイトル、そのアーティスト名のところには思いつきりSIDEROSと表示されていた。

めっちゃドヤ顔でこっちを見てくるツンデレツインテールさん。顔が良いから普通になつてるのがちよつと悔しい。

「じゃあ私のバンドの曲でも歌ってあげるわ！」

「え〜！ シデロスの曲カラオケに入ってるんですか!? すごーい！」

「まあ私達レベルになればこんなものよ」

ドヤツてるヨヨさんはいつ見ても輝いてますな。自己承認欲に素直すぎるとこは嫌いじゃないよ。

すると同じくらい承認欲求モンスターのから揚げ食べ過ぎで唇が少し油でテカってる後藤さんがスマホを見ながら、

「あつでもリクエスト申請すれば入れてもらえるらしいですよ……」

「じゃあ私達の曲も入れてもらいましょうよ！」

ふーん、やるじゃん。ちゃんと自分で調べて報告するなんて成長だな後藤さん。

多分というか確実に承認欲求満たしたいがために調べただけだろうけど。いいんだ別に。クソみたいな動機だろうと一ミリでも成長すれば後藤さんにとつちや大きな一歩なんだから！

油でテツカテカになった後藤さんの口をティッシュで拭きながら俺も一緒に画面を見てると、

「そっそれにはたくさんさんの人のリクエスト票が必要だけどねっ」

「あら、そうなのね。なら無理そうかしら」

「学校のヤツらに頼んだらいけそうではあるけどなあ。そこんところどうすかヨヨさん」

「え？ さ、さあ？ 私達の曲も気付いたら入ってたし、そっちももつと有名になればこうなる事もなくはないんじゃない？ 多分……」

どのくらいの数の票が必要か分からない以上、下手に頼み込んで失敗しましたじゃあれか。

MVのおかげで最近では知名度も少しくらいは広がってきてるが、それでもシデロスにはまだ及ばないから当面は様子見としておこう。

そしてヨヨさんはこのまま自分のバンドの曲を歌い始めた。

ライブで聴くのとじゃまた違って新鮮だけど相変わらず上手いなこの人。いつもはギターを弾きながら歌ってるが、カラオケで歌だけに集中できていると余計にそつち意識が行き彼女の歌う姿から目が離せなくなっている。

何というかこう、説得力のある声というか惹き込まれる歌声なんだと思う。

歌に感情を込められるのはボーカルとして立派な武器の一つだろう。それをしっかりと理解しながら彼女は歌っている。

うん、偶然とはいえやっぱりヨヨさんを誘って正解だった。

当初の目的は忘れていない。今日カラオケに来たのは喜多さんの練習のためだ。言い方は悪いかもしれないが、こんな近くにちようど良い比較対象がいるなら比べるのも手間が省けるし一番手っ取り早い。

ヨヨさんが歌い終わり次は喜多さんが歌う番となる。

俺は絶対に歌いたい訳でもなかったからとりあえず比較するため喜多さんに代わってもらった次第だ。

で、再び喜多さんが歌い始めた訳だが。

「……」

上手い。もはや何度聴いて見てきたかも分からないくらい喜多さんの歌う姿を拝聴

してきたが、素人の俺からしても身内鼻負なしで十分に上手いと断言できる。少なくとも結束バンドを一番近くで見してきた俺はその姿に惚れたのだから。

ただ、だ。

直前までヨヨさんの歌を聴いていたからこそその違和感に気付いてしまった。

上手いは上手い。しかし、ヨヨさんほどに惹き込まれるかどうかと言われれば、答えは否だった。

結束バンドの演奏を見て惹き込まれる事は何度もあった。バンド全体を通して見れば間違いなく魅了されるモノを持つていた。目を離せられない瞬間だつてたくさんあった。

でも。

だけど。

喜多さんの歌声単体だけだと、ヨヨさんの後だとしてもそうは思えないと感じてしまった。

悪い所は特にない。だけど同時に良い所も特にない。良くも悪くも突出しているモノや特徴らしいモノもない。まるでずっと平均ラインを辿っているような感覚。

二人の歌声を聴いた上で、喜多さんとヨヨさんの違いを自分なりに分析してみる。

ビブラートや抑揚といった歌う上での技術とはまた違うような感じがした。何とな

く自分が好きなバンドボーカルの良い所を一つずつ羅列していく。
すると。

「歌声、表現力……あるいは感情や気持ちの乗せ方……？」

「ゆうくん……？」

「ああ、ごめん。何でもないよ」

深く考えすぎて声に出てしまってたらしい。

「……ねえ、もしかして今日はただ遊びに来ただけじゃないの？」

喜多さんの様子がおかしい事に気付いたのか、ヨヨさんが俺に向けてそう言ってきた。
た。

「あー、そのですね」

「いいわ優人君、私から説明するからっ」

俺から言おうとすると喜多さんから止められる。

まあ、喜多さんが直接説明する方が分かりやすいか。

「えっと、実は今日練習に来てたんです。それで優人君に付き合ってもらって、ひとりちゃんにも一緒に来てもらった訳で……」

「つ……!!? つ? ツ!?!」

後藤さんがそうだったの!?! 聞いてないけど!?! みたいな顔してこっち見てる。

ああ、うん、そうだね。これに関しては俺らの説明不足だったわ。ごめんごめん。まさかヨヨさんに会うとも思ってたからさ。てへぺろっ☆

ちようど良いので後藤さんにも喜多さんの説明を聞いてもらおう事にする。

「という訳で、聴き返してるうちに違和感覚えて自信なくなっちゃって……でも何がダメなのかもよく分からなくて……」

「ふーん、なるほどね」

ある程度説明を終えるとヨヨさんがこちらを見てきた。

「そういう予定だったなら私の誘いを断つたのも納得だわ。一応貴方もちゃんと支えようとしてるのね」

「あたぼうでしようよ」

そのために一週間そっちに行つたんだぞ。

「まあそうね。とりあえずもう少しお腹から声出したら？」

ヨヨさんのボーカル講座が始まった。

こういう時の彼女はためになる事を言ってくれる事も多いが、それと同時にチクチク言葉を連続で浴びせてくるのであまり対人向けではない。俺も何度もその餌食になったので痛感してる。つうか対人向けじゃない講座って何なんだよ。

「あとカラオケが上手いからってレコーディングも上手いとは限らない。カラオケ感覚でやってたら変なのは当然でしょ。バンドのボーカルはフロントマンだから、音程が合つてればそれで良いってもんじゃない。もちろんそれはライブにも言える事よ」
始まった。ツンデレのツンの部分攻撃だ。

俺は元からこの人がツンデレだと分かっていたからダメージも少なかったけど、それを知らない喜多さんからすれば結構なダメ出しにも聞こえると思う。現に喜多さんは委縮してしまつてる状態だ。

ほんと不器用な人でごめん、悪気はないからこの人も。

もうちよいだけ待つてくれたら勝手にデレてアドバイスくれるから。

「まあ今の貴方には結束バンドのボーカルである必要性は感じられ」

「ストツプヨヨさん」

「っ」

ヨヨさんの言いたい事は分かっている。何だかんだちゃんとこの後自分でフォローを入れる事も理解しているし、間違った事を言ってる訳じゃないのも聞いていて分かる。

分かっているけれど、どうしてもその先の言葉を止めずにはいられなかった。

「ごめんヨヨさん。アンタがこの後ちゃんとアドバイスをくれるってのは分かっているんだけどさ……だとしても、ヨヨさんの口からであつてもそれだけは聞きたくないんだ」
申し訳なさそうに苦笑いで繕う。普段態度がキツく捉えられがちな彼女でも、責められ役を買って出る必要はどこにもない。

ここにいる誰もが無意味に傷つくような事は絶対にあつてはならない。まあ言葉がキツくても本来優しいヨヨさん本人はその気なんてそもそももないだろうが。

何となく、ヨヨさんから結束バンドのボーカルは喜多さんじゃなくてもいいなんて言葉は聞きたくなかった。

そこに関しては俺個人のわがままだ。

「……そう、ね。私も、そこまで言いたかった訳じゃないし、言い方が悪かったのは認めるわ。ごめんなさい……」

「え、あ、はい」

驚いた。ヨヨさんが案外素直に謝ってくれただど？

これは明日雪でも降るんじゃないし……いやまだ二月だしそれは普通にあり得るか。

「あ、あとっ」

いきなり隣の後藤さんが立ち上がった。

「け、結束バンドのボーカルは喜多ちゃんじゃないと絶対ダメ……ですー！」

「ひとりちゃん……」

「へえ……」

何だよ、言えたじゃねえか。聞けて良かった。

というのは冗談で。いや冗談ではないけども。

後藤さんがここまでではつきり言うのも珍しいな。それだけ結束バンドに対して思い入れがある証拠だろう。

うむ、偉いぞ。マジでよく言った。余はとても気分が良い。褒めて遣わす。今日のカラオケ代は俺が出してやろうではないか。

「ありがとうつ。優人君も……私頑張るから！」

「あっはい……」

「結束バンドのみんなで末永くやつてくれりやそれでいいよ。あ、ヨヨさんそろそろアドバイスの方よろしくお願いしまーす！」

「この流れで言えるかあッ!!」

どうやらあのヨヨさんも流れを読む事はできたらしい。

三時間が経ちカラオケを後にした俺達。

結局あの後には普通にカラオケを楽しみ（主に喜多さんとヨヨさんが歌う）、その都度ヨヨさんが控えめにアドバイスをしていく流れになった。俺の時よりアドバイス優しめ

だったのはきつと気のせいじゃない。

喜多さんとヨヨさんが前を歩き、俺と後藤さんはその後ろを着いていく形で駅まで歩いている。

ちゃんとは聞こえないけどおそらく今もヨヨさんが何かしらアドバイスをしているのだろう。喜多さんほどの陽キャなら慣れればヨヨさんのコミュ症ガードオーラさえ突破できるらしい。無敵か？

「やつぱりこういうのは適材適所だよなあ」

「ゆうくん、やつぱり喜多ちゃんのために色々やってたんだね……」

「ん、まあな。みんなを支えるのが俺の仕事だし、結束バンドのためなら何だってやるさ」

将来的には俺が全部適材適所を補えるようになりたいが、そう簡単にいけるとも限らないし今は頼れるところは全部頼っていききたい所存だ。

みんなが成長できるなら俺のプライドなんてドブに捨ててやろうじゃないか。はっはっは!!

そんな話をしつつ駅のホームへ。

ヨヨさんとともに既に別れ、ちゃんとした埋め合わせというかお礼はまた後日という事に

してもらった。

当然俺と後藤さんは電車一緒に喜多さんは別だ。

だから俺達が乗る電車が来て、喜多さんと別れの一言をと思つた矢先。

「じゃあ喜多さん、また月曜な……つて、え？」

電車に乗って振り向くとそこに喜多さんはおらず、何なら後藤さんの隣のシートに座っていた。

「えっ……で、電車違いますよ……？」

そりや後藤さんも驚くわな。

気付いたらそこにいるんだもの。でもな後藤さん、それ君がいつも俺にしてる事だからね。もう慣れたからいいけど。

「今後のバンド活動のためにボーカルは自分の曲の理解をもつと深めた方が良いと思うの。大槻さんも似たようなことを言つてたわ」

「はえー、そんなこと話してたのか。それでこの電車に乗つた理由は？」

「ひとりちゃんに歌詞を直接解説してもらえれば私の課題の突破口が開けるかも！」

「ほうほう、その心は？」

「だから今週末ひとりちゃんの家に泊まらせて！」

「マッ。」

……なるほど、一理あるな!! (思考放棄)

頑張れ後藤さん、念願の友達との泊まり女子会だぞ。俺は家でゆったり応援してるからな!! 親睦深めてバンドとしても成長できるといいね!

88. 友人の家に泊まりに行くとは何故か晩ご飯がいつもより豪華になりがち

突如始まったお泊まり女子会。

喜多さんが言うにはボーカルであるなら歌詞への理解をもっと深めないといけないという理由で提案（ほぼ強行手段）された訳だが、となるとこれは喜多さんと後藤さんの問題だし何なら女子会のお泊まりだしさすがの俺もそこに入るほど野暮な性格はしていない。

一応あんなんでも後藤さんは女の子なんだからそこいらの気遣いはちゃんとしてくれるつもりだ。

なので今回の俺は大人しく引き下がって自分の家で弾き語りの練習でもしようと思っ
ていた。

そう、息巻いていた。過去形である。

流れを説明するとまず喜多さんを連れて普通に帰宅。

はいもうそこで問題発生。なんと俺とした事が自分の家ではなく完全にいつもの癖で後藤さん家に来てしまったのだ。ギター練終わりに晩ご飯を食べて帰るという一連のルーティーンが今日に限っては凶と出てしまった。

家に入ればもう手遅れ。事前に後藤さんが連絡していたのか、玄関に入ると目の前には喜多ちゃんいらっしやーい！ と声を揃えながらクラッカーを放つ後藤家と清水家の両親（+ジミヘン）。

自分の親がこつちにいる時点で俺の逃げ道は塞がれ、ダメ元でやっぱ帰るわと言ったら喜多さんに強引に連行され、後藤さんはほんとに喜多ちゃん来ちゃった……みたいな顔して俺の方を見向きもしなかった。

そこで今はもう諦めて極力邪魔せずに晩ご飯食べ終えたら帰ろうと決意したところで、俺の時間は止まっていた。

おかしいな……確か歌詞への理解がどうたらこうたらって話だから、いくらサポート役だったってさすがにこれに関しては専門外だし俺の出る幕ないかなって数十分ほど下でふーちゃんと遊んでたけど、せめて飲み物くらいは持って行ってやろうと階段を上がってたのに。

二階に着いたら後藤さんの部屋の前に下北沢高校の制服を着ている後藤さん……で

はなくその母親の美智代さんが正座させられていたのだ。

どうしてこの家にいると時々不思議発見の現場に遭遇してしまうのだろう。それとも珍百景の一つ？　ほんとうにあつた怖い話？

と、思わず現実逃避したくなるような光景に出くわし、俺の思考回路と時間は止まっていた訳である。

誰だよザ・ワールド使ったヤツ。スタンド攻撃はやめろとあれほど……。

さて問題、いつも優しくしていただいている幼馴染の母親が娘の制服を着たまま部屋の前で正座させられていたのを目撃した時、どう対処するのが正解？

気になる答えはあ〜？　……知らん。むしろこっちが聞きてえ。どうなってるんだよこの状況。本当なら見なかった事にして今すぐにも一階に戻りたいのだが、飲み物を届けなくてはならない以上選択肢は一つ。

くそ高いハードルを飛び越える気持ちで話しかけるしかない。

「……あの、美智代さん？　できれば飲み物届けたいのでそこを空けていただけると助かるんですが……」

俺のミッシヨンは後藤さんの部屋に飲み物を届ける事。あくまでそれだけだ。

だから不用意に美智代さんの格好について触れる必要も特にない訳である。いやま

あ気にはなるけどさ……何か触れたらいけないような気持ちの方が大きい。だって友達之母の制服姿とかそんなのコスプレにしてもキツいでしょ。

うちの母親よりは見た目若いから違和感ないようにも見えるけど、それとこれとはまた別なんよ。

ちよつともう何これ。どこの引き出しに入れるのが正解なの？

「あらゆう君、邪魔しちゃってごめんさいね」

「あ、いえ、別にそんな全然大丈夫ですよ」

「ところでゆう君は私のこの格好どう思う？　ひとりちゃんのために気まづくならないように混ざろうとしたんだけど追い出されちゃって……個人的にはまだギリギリいけるかなって感じなんだけど」

そつちから触れてくるのね……。

「スカートの丈をもう少し短くするべきだったかしら？　そうすればもつと女子高生っぽく見えたり？」

「……ノーコメントでお願いします」

せめてもの救いはうちの母親が便乗して一緒に着ていなかった事か。まあ制服だけ

らそんな何着もないもんな。

多分今の俺世界で一番無駄な時間過ごしてそう。ダレカタスケター。

「だからお母さんはもう下に行つてつて言つたでしょ!! ゆうくに迷惑かけないでつてば!!」

そんな俺の心の声が届いたのか、というより筒抜けの会話が襖の向こうに聞こえてたからか部屋の中から出てきた後藤さんが数年に一度あるかないかくらいの大きい声で美智代さんに一喝した。

うん、正直今回に関してはマジで助かった。ステージ上以外で初めて後藤さんを救世主と思ったかもしれん。

後藤さんに怒られた美智代さんはしくしく言いながら素直に下へ降りていき、俺はいつものように後藤さんの部屋に入って飲み物をテーブルに置いていく。

まさか美智代さんあの格好のままリビングに行ったのかな。違う意味で騒ぎになつてなきやいいけど。

「どうだ、歌詞への理解は深められそうか?」

「ありがと優人君。うーん……ひとりちゃんにも歌詞の事を色々聞いたけどまだよく分

かんなくて」

あーね、後藤さんの歌詞は基本暗くて陰キヤの不满を抽象的にしてかっこよくしてる風ってだけでもんな。

そりや陽キヤの喜多さんには分かりづらいわ。

「だからひとりちゃん自身への理解を深めたら何か分かるかもって思っ、今はひとりちゃんに私を気にせずいつも通りの生活をしてみてっってお願ひして実践してもらってるとこなんだけど……」

「……そつかあ」

むしろ逆に難易度が上がつてませんかねそれ。後藤さんへの理解とか、彼女の生態に詳しい俺でもどこまで理解してるかは怪しいのに。

「んじゃま、とりあえずは頑張ってくれ。この土日に関しちや俺はあまり干渉しないようにすっからさ。お二人の活躍でバンドが更なる成長できるように願っっておりま……何で二人して俺の制服を鷲掴みしてるのでせう？」

「……にいて」

「えっいや、でも、歌詞への理解とかその辺は俺もヨヨさんに教わってないから特に力に

はなれな」

「お願いだからここにいてっ」

何でハモってんの？ 打ち合わせした？

「(き、喜多ちゃんと長時間のタイムマンはまだキツイからゆうくんもいてほしい……。会話のストックももう尽きたしこの部屋メンダコぬいぐるみ以外何もなければ喜多ちゃんもつまらないと思ってるはず……。あと私の生活を見せるならゆうくんは必須……。毎日いるから……)」

「(ひとりちゃんの普段の生活見てたけどちよつとこう……。何も無いというか、退屈というかで眠くなってたところから、優人君がいれば会話も弾むしひとりちゃんももつといつも通りでいられると思うのっ)」

各々から小声で言われた。

どちらの言い分も何となく分かるせいでどうも拒否しづらい。や、確かに毎日後藤さんの家にお邪魔してここで練習とかしたりしてるから、それが後藤さんにとつてのいつもの生活になってる部分もあるというのは理解できる。

そして喜多さんの言っている後藤さんの普段の生活が退屈なのも分かっってしまうところがある。後藤さんは基本ギターしかしないので練習か宅録の他にこの部屋でやれる

事は特に何も無い。言うなればギター練習しなかったらクソ暇なのだ。

喜多さんほどの常に何かやっていたい忙しい陽キャから見れば後藤さんの生活が見えるのも仕方ない。これが陽キャと陰キャの差だ。格が違いすぎる。

「あー分かった分かった。俺もここに居るからひとまず手を離してくれ。えつと……普段通りに過ごせばいいんだっけ。さつきまでは何やってたんだ？」

「ひとりちゃんがギターをひたすら弾いてるのをただ見てただけよ。途中からはあんまり覚えてないわ」

「寝かけてたんじゃねえか。飲み物持ってきて正解だったわ」

「私の日常ってつまらないんだ……」

さすが喜多さん、ナチユラル鬼畜なだけあるぜ。悪意なき言葉が何よりも鋭利な凶器となつて後藤さんの胸に刺さっている。

何なら後藤さんとのギター練習や宅録の時間を退屈と思つた事がない俺にも若干刺さっている。まあやつてる当人達を眺めて自分は何もしないなら退屈になるのも必然か。

「つつても日常を見せてつて言つたのは喜多さんなんだろう？　ならちゃんと見てなきや

ダメじゃん」

「うっ……それもそうよね……。よし、優人君も来た事だしこれでひとりちゃんも普段通りでいられるわよね！ 二人がいつもここでしてる事を見せてちようだい！ ここに歌詞を理解するためのヒントとかあるかもしれないわ！」

ないと思うよ、と言いたいとこだがせっかく喜多さんが頑張ろうとしてるのにわざわざ藪をつつくような事はしない。

これでほんとに何か分かったりする可能性も一応はゼロじゃないしね。……ゼロじゃないよな？

「んー、いつも通りでいいならさっきの続きでもするか？ 宅録やってたんだよな」

「あっうん」

「最近では結束バンドの方に集中してたからこっちはあんまできてなかったし、良い機会だから久々にやっとか」

「そういえば優人君も手伝ってるのよね」

「まあな。これはあくまで後藤さんのアカウントだから俺は編集とかに徹してるけど」

軽い会話をしつつ、喜多さんの要望通りに後藤さんと音だけに意識を集中させていつ

も通りの宅録をすること数時間。

「結局寝てんじやねえかこの陽キャ……」

「やっぱり私の日常は見るに堪えないんだ……」

制服姿のまま丸まって寝ている我らがギターボーカル。

喜多さんのためにここまでしてるといふのに良いご身分だな。耳元でお経でも流してやろうかこやつ。

「ど、どうしようゆうくん……」

「そろそろ晩飯の時間だけど、こんだけ気持ちよさそうに寝てるのを無理矢理起こすのも気が引けるか」

喜多さんが泊まるという事で今日の晩ご飯はおそらく美智代さん達が気合い入れて作ってるはず。

下で飲み物を入れる時に冷蔵庫の中を確認したところ、今日は大量のから揚げと一口サイズの手作りハンバーグ盛り合わせがメインだろう。後藤さんの大好物しかないが、およそ女子高生に出す量じゃないと思う。いや喜多さん細かいからもちと食べても良さそうだけど。

「けど厚意で晩飯が豪勢になってんだから喜多さんが食べないのは勿体ないよなあ」
「？」

「よし、起こすか」

「す、数秒前の気が引けたのはどこに……!？」

「……んぎゅむっ!？」

起こすと決めたからには遠慮はしないのが俺だ。

とりあえずいつも後藤さんを起こす時に行っているように寝ている喜多さんの鼻をつまんでやると、彼女は驚いたのか変な声を出しながら薄っすらと目を開けた。んぎゅむて。

「おはよう喜多さん。快眠だったようで何よりだよ」

少しいたずらっぽく笑いながら言ってみる。

依然として俺に鼻をつままれたままの喜多さんはだんだんと意識がはつきりしてきたのか、半開きだった目がいつも通りのくつきりぱっちりな御目目に戻ってきた。

「……………ありね」

「何が？」

寝起きなのに獲物を見るような目をしてるのは何故なのでしょう。狩られるの俺。さすがに喜多さん相手に鼻をつまむのはまずかったりする？ 親密度足りてない？

実はまだ夢の中とか？

ちよつと怖くなってきたので手を離す。やっぱりこういう事は後藤さんだけにしておこう。俺だって命が惜しい。

「私寝ちゃってた？」

「それはもうぐつすりとな。おかげで動画のストックはそれなりに録れたけど」

「うう、やっぱり私も何かしとかないとすぐ暇になってダメね……」

「やめとけ喜多さん。それ以上は後藤さんに致命傷だぞ」

現にもう破裂寸前だ。比喻でも何でもなく。

「起こしたのはもう晩飯の時間だから。喜多さんのために今日はご馳走……かどうかは知らんけど俺達の親が料理頑張ってるっばいしさつさと目覚ませて食欲増進させときな。じゃないと多分食いきれん」

「な、何が出てくるのかしら？」

「疲れ切った野球部が大喜びしそうな特盛の油もの」

「……今からもうダイエツトの準備しておかなきゃ」

写真映えるために常にスタイルを維持しておかないといけない陽キャというのも大変だな。

逆にジャンク系大好きな後藤さんが何故太ってないのかの方が謎か。二重顎はいつも俯いてるからできてるだけだし体はいつも標準体型なんだよな。体質か？

「うおーい後藤さーん、爆発しそうになってないでそろそろ戻ってこい。今日は好物のから揚げとハンバーグだぞ〜」

「……ぬはっ!? か、から揚げハンバーグっ」

相変わらず小学生が釣られるような言葉で釣り針に引っ掛かるな。

子供舌が戻ってきたところで下に降りようと発言すると、階段の方からタタタツと可愛らしい足音が聞こえてきた。

「タイミングばっちしだな」

「どうしたの?」

「ああ、いつも晩飯ができたらふーちゃんが呼びに来てぐあばあッ!」

「みんな晩ご飯できたよーッ!!」

「優人君が吹っ飛んでいったわ」

「き、今日は喜多ちゃんもいるのでタツクルも特別威力が高いっばいです……」

「いつもああなの？」

「ゆうくんがいる時はいつもゆうくんに飛び掛かっていくので……」

ぬぐお……ふーちゃんヘッドが鳩尾にい……! 幼稚園児のタツクルにしちや中々の高威力だ。これは将来が楽しみな逸材だぜ。……いや普通に可愛いままのふーちゃんで育つて。

痛みに耐えながらふーちゃんを抱っこで抱えて立ち上がる。もはやこれもいつもの光景だ。

「今日はねー晩ご飯いっぱいあるんだよー!」

「そうかくそれは楽しみななあ。ふーちゃんもたくさん食べて大きくなるんだぞー」

「いっぱい食べてゆうくんよりおつきくなる!」

「それは男のプライドがズタズタになるからやめてほしいな」

後藤さんくらいの身長がちやうどいいんでその辺りで勘弁してくれると助かります。

「こうして見ると優人君とふたりちゃんの方が兄妹に見えるわね〜」

「あつ、ゆうくんが欲しかったらあげます……」

「妹を簡単に差し出すんじゃないよ」

そこは姉としてちよつとショック受けたところだよ。

「ゆうくんふたりとふりんする？」

「不倫？」

「よしふーちゃんさつきやってた昼ドラっつこの話はそこまでしようね〜」

兄妹の話から何段飛ばしで飛躍してんだ。

あと暖房効いてるはずなのにこの部屋の温度が一瞬で一度か二度くらい下がってるように感じるのはなぜななぜ？

「ほら、晩飯の時間なんだしもう下に行こう！ あー腹減ったなく！ ふーちゃんもジミヘンとたくさん遊んでお腹空いてるよね〜！」

「ジミヘンゆうくんの代わり下手だからふりん相手の演技微妙ですぐやめちゃった！」
犬になんて演技させようとしてんの。

「最近の子供って遊びもリアル感増してきてるってトウイッターで見た事あるけど、ふたりちゃんのままごとももしかしてそうなのかしら？」

「ふ、冬休みの時に友達を連れてきた時は、私が幽霊扱いされて……いかに怖がらず私にタツチできるか度胸試しに使われた事ありますよ……へへっ」

「ひとりちゃん……」

子供って時に残酷だよなあ。

実の家族とか遠慮も容赦もないから余計にね。いや後藤さんの纏うオーラが暗黒すぎるのも原因の一つだろうけど。何となくふーちゃんを見てみる。無邪気に笑っていた。うん、かわいい。

「すごいや喜多さん、親御さんにはちゃんと今日と土日泊まるって連絡したのか？」

「ええ、バンド仲間の家に泊まるって言うてあるから何の問題もないわ！ 多分！」

多分って。もしかして喜多さんの家ってちよつと厳しめだったりするのかな。

喜多さん自体は結構自由にやってそうだから大丈夫か。他の家の事情に首突っ込みすぎるのも何だしな。

その後は特に何もなく予想通りの豪勢な晩ご飯をいただき、もう夜だから今夜は喜多さんも交え三人でギター練習。

ちようどいい時間帯になった頃に俺は無理矢理自分の家に帰り（ふーちゃんにめっちゃくちやごねられた）、明日は泊まるからと言つて何とか事なきを得た。

そして翌日。

気を取り直して喜多さんが今日こそ後藤さんと歌詞への理解を深めると奮闘。その最中に卒業文集などを見る事になり、見事に後藤さんの黒歴史が暴かれ轟沈した。何で自分からわざわざ黒歴史を作りに行くんだろう。ボブは訝しんだ。

「じゃ、じゃあアルバム見せてよ！」

と、後藤さんの卒業アルバムを見る事になったのだが。

「……解説されるまでもなく中学時代が伝わってくるわ」

「相変わらず心霊写真みたいだな」

基本黒いオーラを纏ってて目が死んでいるのが後藤さんなので見つけやすい。

何という悲しい理由だろう。泣けてくるね。

「あ、でも中学三年生の時って優人君もいるのよね」

「ほとんど行事終わってるから俺も集合写真と個人の写真しかないけどな」

「卒業アルバムついてもっと喜ばしい物のはずなのに哀愁しか感じないわ……」

俺に関しては仕方ないで済ませられるところあるけど、後藤さんに至っては何もフォローできるところないのが致命的ってね。

一応中学は後藤さんと別クラスで同じクラスのヤツと多少は仲良くなり寄せ書きスペースは白紙にならずに済んだのがせめてもの救いか。

まあ、中学三年間友達できなかった後藤さんにこんなものを見せたらどれだけ悲惨な事になるかは見えていたので見せなかったが。

俺はここであまりにも無警戒すぎた。そう、今ここにいるのは陽キャの喜多さんだ。

友達百人できるかなを地で行きその明るさとコミユ力の高さから友人も多く、イソスタのフォロワーも一万五千人を超える人気者。

そんな子が卒業アルバムの寄せ書きスペースを見ないはずもなく。

「ひとりちゃん、なにこれ？」

彼女が悪気もなくアルバムを差し出して聞いたのは寄せ書きスペースの部分。

そこには『犬のエサ』『洗剤』『15時宅配受け取る』『ああ』『世界は何故暗いのか』『明日動画撮る』などが書かれていた。ヒエツ……これってまさか……。

「あつえつそこメモスペースですよね……？」

「え？　ここ寄せ書きスペースなんだけど」

「……………
シユウウウーツ」

後藤さんは死んだ。

89. 話し声って結構壁越しでも聞こえやすい

後藤さんの死体をどこからともなく発現した棺桶の中に入れ、俺と喜多さんは一階へと移動。

本人が死んだのならその家族に聞けばいいじゃないとの事。もう喜多さんの中で後藤さんの死は軽く受け流せるものになったらしい。

最初は死なせないようにしてたピクミンが一度死んでしまえばもう吹っ切れてまた増やせばいいやと気にしなくなるのと似てるなあ。

そんな訳で家族インタビューだ。

とりあえず軽く事情説明をしたら後藤家総出で協力を快諾してくれた。総出と言っても一人はお亡くなり状態だが。ひとりだけにね。

「優人君今寒いこと考えた？」

「何の事？」

読心術やめて。

「最初は私からねっ」

制服からいつものタートルネックセーターに着替えていた美智代さんが張り切っていらっしやる。

うんうん、やっぱ見慣れた格好が一番ですな。さっきまでのほちよつとした悪夢として忘れよう。

という訳でインタビュー開始。

母、後藤美智代の証言。

「うーん、小さい頃から人見知りで引つ込み思案な子だったわねえ。物心ついた頃はよくお腹に戻りたいって言ってたし」

「キャラ徹底してますね!？」

「あー言ってたなあそんな事も」

「あとはいつもゆう君の後ろを着いて行って離れなかったわね」

「確か他の子からは幽霊だつて言われてたっけな」

「ひとりちゃん……」

悲しきかな、今でもふーちゃんの友達からは幽霊扱いされてるのよね。

過去も現在も特に変わってないのがよく分かる。一応は生きてるはずなんだけどなあ。あ、今は死んでるんだつた。

妹、ふたり・犬、ジミヘンの証言。

「おねーちゃん幼稚園のみんなからユーレイって呼ばれてるよ〜！ この前はお札作つて誰が先に背中に貼れるか競つたこともあるの〜！」

「あんまりだわ〜！」

「一応俺が途中で止めたけどな」

さすがに見てられんかったので……。

「わんわんわんわんワンワンワンワンワンワンワンワン!!」

「なんて!?!」

俺も分からん。

父、後藤直樹の証言。

「僕とひとりふたりの中の家族カースト最下位争いを繰り広げてるんだけど、良いライバルだよ！」

「へ、へ〜……」

「ちなみにトップがお母さんとゆう君、その下にふたりで次にジミヘンだからね」

「優人君もカーストに入ってるのね!? とうるか順位高っ!」

喜多さんが驚くのも無理はない。何せ俺も驚いてるのだから。

初耳だわ後藤家カースト。しかも何故か俺も入ってるし。あと何か高えし。後藤さんはともかく直樹さんは何があつたんだ。

ついでに家にいたので清水家両親の証言。

「小さかった頃からひーちゃんは可愛かつたわよ。それはもう目に入れても痛くないくらいにねえ。優人に引つ付いててくてく歩く姿を何度写真に収めたか……」

「うちに娘がいたらこうだったのかなーってずっと思いながらいつも見守ってたなあ。

優人とはまるで兄妹のように一緒に微笑ましかったよ。引っ込み思案なところも大人しくて実に可愛らしかった印象だな。こう、庇護欲が湧いてくるというか」

「何で優人君のご両親の方がまともなエピソードを持つてるのかしら……そもそもひとりちゃんの事を聞いてるのに優人君出てきすぎじゃない!?」

「いつも俺の横か後ろにいるんだぞ。むしろ付属品はあっちでしょ」

子供の頃はまあまだ可愛かったけど、今はどうだ。

……うん、気にするだけ無駄だね！

幼馴染、清水優人の証言。

「え、俺も？ あくそうだなあ……一番の転換期は俺がここにいなかったから分かんねえけど、ギター弾ける以外には特に何も成長してないと思うぞ」

「優人君も結構な物言いよね……」

だって今更遠慮とかいらぬもの。

「あ、そういえばひとりちゃんっていつからギター始めたんですか？」

「確か中学入ってすぐの頃だったかなあ」

喜多さんの質問に直樹さんが答える。

「そういう喜多さんには始めた時期とかは言ってなかったか。言う必要も特になかったけど。」

「昔から運動も勉強も頑張っつてはいたんだけど、周りの子についていけなかったみたいでね……。でもギターを始めてからはその悔しさを埋めるみたいに没頭してたなあ」

俺が覚えている限りでも小学生の頃の後藤さんは決して不真面目だった訳じゃない。

むしろ真面目に頑張っていた記憶がある。そう、彼女なりに真面目に頑張っていたのは間違いないのだが、如何せん要領が悪いのか何をしてても努力が実を結んだ事は一つもなかった。

だからこそ再会した時に後藤さんがギターを弾いてくれた時は驚いたのだ。

素人目で見ても分かる程に上手かったから。

「毎日六時間以上練習して今じゃプロレベルになってるし努力家で天才なんだよ。親としてはひとりが本当に熱中できるものに出会えてよかったって思ってるんだ。ははっ、これじゃ親バカかな」

「……へえ、そうだったんですか」

「でもネット上で彼氏いるとか妄言吐くようになったのだけはちよつとね……」

「俺が手伝うようになってからは止めさせたんで大丈夫ですよ。……過去のはもう火消しできないですけど」

「……いやいつそ妄言を本当の事にしたら嘘じゃなくなるか？」

「そこで俺を見るのは何故なんですかね」

後藤家の夫婦がたまに獣のような目で俺を見てくる件。

「……は逃げるが吉だな。」

「そろそろ後藤さんを蘇生しに行こう喜多さん」

「ああ、うん、分かったわ……って優人君蘇生できるんだっけ？」

「適当にザオリクって言えば棺桶から出てくるっしょ。前にどつかで死んだ時もそれで

蘇ったし。じゃあ俺達上に戻るんで、インタビューどもです」

「ありがとうございましてっ」

「晩ご飯の時にまた呼ぶわねっ」

「任せてっ！」

……ふーちゃんタツクルに備えておくか。

その夜。

後藤さんをザオリクで復活させた後も喜多さんは頑張っていたが、特に収穫はなく残酷にも時間だけが過ぎていつの間にか晩ご飯と風呂まで済んでいた。

昨日ふーちゃんに明日は泊まるからと言ったせいで今日は俺も後藤家に泊まる事になっっている。

もちろん喜多さんもいるからさすがに後藤さんの部屋で寝る事はしない。しようとしたらおそらく喜多さんに殺されるか通報されるに決まってる。

そもそも俺はここに泊まる時いつもふーちゃんと一緒に隣の部屋で寝てるのでこれはいつも通りなのだ。

で、時間は夜の22時半。

既にふーちゃんは部屋で寝かしつけ、俺は後藤さん達とこっそりギター練をしていた。

「ふう……そろそろ俺も戻るかな」

「もう寝るの？ もう少しくらい良いんじゃない？」

「ふーちゃんが途中で目を覚まさないとも限らんだろ。起きた時に俺が隣にいないと翌朝拗ねちゃうんだよ。それはそれで可愛いけど」

「優人君絶対将来親バカ確定よね。女子的には嬉しいけど」

それは褒めてるのかちよつとバカにしてるのかどっちなんだ。いやだって子供は素直で無邪気で可愛いもの。一生愛でたい。

とは思いつつ実際はもう寝巻き状態の後藤さんと喜多さんが目の前にいるから氣遣って撤退しようとしただけってのが七割を占めてる。

俺だって一応は男子なんぞね。同い年の女の子が風呂上がりパジャマ姿でいるのはさすがに思うところがあるのさ。

後藤さんのはいつも見てるシャツだし別に何とも思わんけど、喜多さんはハート柄がたくさん施された可愛いパジャマでいかにも女の子らしい装いである。君本当は髪型ストレートだったんだね。やめて、ときめいちゃう。

「布団だってもう敷いてるんだし喜多さん達も寝たらいいじゃん」

「夜はこれからよ！」

「じゃあもう俺は失礼しますね、ほな」

「いつそ優人君もここで寝る？」

「ぶっ!!」 ば、ばかつ、そういう事を冗談でも軽々しく言うんじゃありませんっ。俺だつて男なんだぞ、もしもの事があつたらどうすんだつ。まったく今時の女子は無警戒にもほどがある！ そう思わないかね後藤さんっ」

「えっあつうん……？」

「でも優人君つてへタレだし何もできないでしょ？」

「……………いや、うん……まあ、しないけどさあ……」

え、なに、俺今めちやくちやバカにされた？ 決して間違つたこと言つてないのに何か俺がへタレとか言つたのかこの小娘……。

よく分かつてんじゃねえか。正解だよこんちくしょう、怖くてできるかそんなもん。ああいうのはマンガだけの話です。多分、きつと。僕は健全な男の子だから大丈夫なのです。

試しに後藤さんを見てみる。

「……………？ つっ？」

うん、何とも思わないな。

平常平常。

「ならせめて襖の向こうでいいから眠くなるまで雑談しましょ！ それならまだいいでしょよ？」

「……まあ、そのくらいなら……あれ、いやでも真冬の廊下つてくそ寒いんじゃ」

「じゃあ決定ね！」

「……はい」

布団にくるまれば何とかかなあ……。

という訳でふーちゃんを起こさないよう細心の注意を払いながら自分の掛け布団を取り、後藤さんの部屋の前へ移動。

襖一枚の壁なんてほとんどないに等しく、向こうの話し声も難なく聞こえてくる。一応俺が聞こえやすいようにあちら側も布団ごと襖の方へ移動したようだ。

俺は当然布団にくるまり襖にもたれかかるようにして座る。

あの、全然寒いんですが……。着替え用の靴下だけでも履いたのがまだ幸いかもしれん。顔と耳が冷える。

「優人君聞こえる？」

「寒い以外には特に問題なし」

「これなら普通に話せそうね」

「俺は廊下側だからあんま声出せないし極力聞き手に回るぞ」

「ん〜まあそれは仕方ないか。私達のがまま聞いてくれただけでもありがたいものね」

「え、私達……?」

勝手に後藤さんも巻き込まれてますねこれ。

「それじゃ夜のトークタイムといきましょうか! 何話す?」

「あつじや、じゃあ……えつと、そういうえば喜多ちゃんは、昨日今日で何か掴めそうでしたか?」

「うーん……ひとりちゃんは昔からひとりちゃんね。二日張り込んだのに特に目新しい情報はなかったわ」

「あつ何かすいません……」

二日と言つても初日は半分寝てましたよねあなた。

「ひとりちゃんと私が正反対な人生を歩みすぎたのはよく分かったけどね……」

「えっそんなにですかっ?」

そんなにだよ。陰と陽だもの君達。太陽と月もつと仲良くして。

「……やっぱり私みたいな平凡な人間に、ひとりちゃんの書いた歌詞は歌いこなせないのかな……」

「……」

襖一枚向こうの空気が変わったような気がした。

すぐに否定しても良かったがここはいったん静観させてもらう事にする。

「私って自分で言うのもあれだけど、そこそこ勉強も運動もできるのよ。友達だって多いし」

「あっそうですね」

何もかもが後藤さんと正反対だな。

「でも何か特別秀でてる訳でもないし、ほんと普通っていうか……楽しいんだけど、自分の人生なんとなく味気ないなってぼんやり思ってた……」

「そんな時にリョウさんのライブを見つけたのか」

「うん……リョウ先輩の路上ライブを見たときは先輩の見た目に惹かれたのもあるけど、それと同時に普通じゃない道を歩いているのは羨ましいなって思ってた。だから私もバンドに入って頑張ってるつもりだったんだけど……それでも私には何もなかったかなって思ってしまうの……」

喜多さんの言葉を聞いて、正直その気持ちがかかってしまう自分がいた。

何かに秀でている訳でもないのは俺も同じで、だから普段はアレなのにギターを弾けば特別な立ち位置に立てる後藤さんがかっこよく見えて、憧れて、同じようにギターを始めてみたけど特別な才能はない。あくまで凡人の域。

趣味の範囲でやっていたとしても、その差には埋められない年月と努力の量があつて決して縮められる事はない。

俺とは違って同じバンドで本気で頑張ってる喜多さんだから、俺以上にそこへもどかしさや焦りを感じたんだろう。今回の件もそれに関してるとすれば納得もいく。

多分、喜多さんには自分には個性が何もないと思ってる。

しかし同時に、自分だって変わりたいと強く願っている。

「大槻さんみたいに何か伝えたい事があつて曲を作つて歌ってる訳でも、先輩達みたいにならずと音楽が好きでやってきた下積みも、ひとりちゃんみたいに全ての時間をギター

に注ぎ込む情熱も、優人君みたいに誰かのために本気になれるような熱意も、唯一無二の才能もカリスマ性も私には」

「あのっ」

そしてこういう時こそ、バンドメンバーからの言葉が一番の薬になるんだ。

「お互い今までの人生真逆な道を歩んできたから、私の書いた歌詞に共感するのは難しいかもしれないですけど……でっでも、私達意外と共通点ありますよね」

「え？」

「喜多ちゃんも私も、バンドを通して自分を変えたいって思ってた音楽やってる所」

「……あ」

「なっなので私にとってその感情が共有できれば歌ってもらう理由は充分だと思うんです。それに喜多ちゃんみたいな普通で楽しい人生を送ってきた人だからこそ、届けられるものってあると思います」

……何だ、やっぱり俺がいなくても問題解決できたじゃんか。

これならもう心配いらなさそうですね。もう寒いし部屋に戻ってもいいかな。

「あつ、えっ偉そうに言ってますみません……私はそう思うっていうか……。やつやっぱ

そんな事ないかもすみません……」

「もうっ、そこは自信もって断言してよ！」

「あっはい……」

さすが後藤さん、良い雰囲気万台無しにする天才だ。

とは言ってももう大丈夫そうだが、話を聞いた以上俺も何か言っておくか。

「俺からも一応言っとく事があるんだけどいいか」

「優人君？」

「喜多さんは自分は何も無いって言ったけど、それは間違いだぞ」

「え？」

「平凡な人間がたった三ヶ月でオーディションに合格できるほどのギターボーカルなんて務められるか。何の情熱もないヤツが自分を変えるためだけに険しい道のバンドなんて始めるか。何も無いような人間がバンドのためにここまで思い悩むか」

極力ポリュームを抑え、襖の向こう側だけに聞こえるよう伝える。

これだけではどうしても訂正しておきたかったから。

「こんなに頑張ってるアンタの事を何も無いだなんて思ってる人間は結束バンドにはい

ないぞ。もちろんその周囲の人も含めてな。これは結束バンドを一番近くで見してきた俺だからこそ断言してやる。喜多さんにだって才能はあるよ。みんなに追いつこうと頑張れる努力の才能が」

「優人君……」

「何も無いなんて言わせないぞ。それは喜多さんがしてきた努力を否定するようなもんだ。何より最近はず結末バンドのファンも増えてきてる。それが一番の証拠だろ。今の歌声だって悪い訳じゃなくてそれに惹かれて来てる人だっている。あとはその歌声やら歌詞への理解をどうのこうのつてのも喜多さんの気持ち次第だけど、まあ後藤さんの言葉を聞いた今ならもう大丈夫だろ」

「……うん、ありがとう。優人君、ひとりちゃん、私もつと頑張るわー!」

声音からしていつもの喜多さんに戻ったか。

やっぱ喜多さんには明るくしてもらわないとこちらの調子が狂うよね。

俺と後藤さん達を隔てる壁はこの襖一枚のみ。

しかしこれが、サポート役である俺とバンドメンバーの彼女達との絶対的な距離感であり、それが妥当で心地良いものだと思わせる。これが俺の正しい役割というやつだ。

「あつじやあもう寝ますね。おやすみなさい……」

「おつ、やつと俺も部屋に戻つていい雰囲気になった?」

「えくもつとお話ししましょうよ。思えばお泊まりつばい事何もしてないじゃない! そうねく……じゃあ恋バナしましょう! 気になつてる人いる!?!」

「えつあつうつ」

「なら好きな芸能人は!?!」

「あつアベピロシ……」

「渋いわね! 優人君は? 気になつてる人いる!? いる!?!」

「ムロプヨシ」

「それ好きな芸能人じゃない!」

何で女子つて無駄に恋バナとかしたがるの。他人の恋路を聞いてどうしたいんだよ。

意味もなくキヤーとか言いたいだけでしょ絶対。あと同じ人が好きじゃないかとかそういう牽制も含めてそう。おー怖つ。

「私も無糖ジローとか結構好きよつ。あく何だかテンション上がってきたわく! 夜はまだまだ長いわよ優人君ひとりちゃん!」

「あつはい……」

……明るすぎるのも問題だなあ。

「…………ふぎがつ、こ、腰があ…………ツ」

朝、目が覚めたら俺は襖にもたれたまま布団にくるまっていた。

どうやら雑談したまま寝落ちしていたらしい。おかげで腰やったかもしれん。しかも早朝だからバカ寒いし。

よろよると起き上がり部屋を覗く。

よし、ふーちゃんはまだ寝てるようだな。時計を見るとまだ時刻は朝の六時。

「…………朝飯の用意でもしとくか」

いつも登校時は朝の四時とか五時に起きてるせいで早く起きるのが癖づいてるのか、一度起きると目が冴えてしまうようになった。

あと腰痛いから立って体を伸ばしたい気分だ。とりあえずウチから適当に食材持ってきてキッチン借りよう。お世話になってるしこのくらいのお礼はしとかないと。

腰を押さえながらゆっくり階段を下りていく。

まあ……そんなだけ深夜まで話が盛り上がった証拠か。

そしてスターリーにて。

喜多さんが歌を録り直したいとP Aさんに懇願し、お礼はちゃんとしませすと俺も一緒に頼んだら渋々承諾してくれた。

そこで実はP Aさんの本名知らないなど突然喜多さんが言いだしてまたひと悶着あったのは別の話である。

もうP Aさんの本名の謎はスターリーの七不思議に認定してもいいんじゃないかな。

「優人君、私頑張って優人君を養えるくらい結束バンドを人気にさせてみせるからねっ」
「何で虹夏さんといい喜多さんといいヒモ前提なの俺」

90. 人は皆リスクを楽しむもの

あれから数日後。

「じゃあ審査用のデモテープ投函するからね……」

「お願いしますー!」

ポストの前で見守る俺達。

デモテープを手に虹夏さんが投函するのを眺めているも、虹夏さんは片手で持つていたデモテープを再び両手で持ち直した。どした？

「……大事なテープだし何か念とか入れといた方がいいのかな？」

「念？ はあああああああ〜こうですかっ？」

なるほど、そゆことね。

こういうのは得意よ俺。

「いやもつと強くだよ！ はあっあ!!」

「天津飯!!」

リョウさんそれただの太陽拳。えげつないくらい眩しくなるだけのやつだから。しやあねえ、俺がお手本でも見せてやりますか。

「宇宙のみんなー！ オラに元気を分けてくれー!!」

「地球だけじゃなくて宇宙規模になってる。GT仕様か、やるじゃん優人」

「凄いわ優人君！ 何だか青く光ってるのが集まってきたわよー!」

「何で時々この二人は次元の壁を超えてくるの!？」

ん？ 二人？

つてことはまさか……。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前……巳・未・申・亥・午・寅!」
おいそれ後半火遁・豪火球の術じゃねえかやめろ。燃やそうとすんな。

「青い球と赤い球ができちゃったけどこれどうすんの?」

「でええええええりやあああああああッ!!」

「わあああああああ!! 青い球がデモテープに吸い取られてるー!」

「ふう……まあ俺の手にかかれればこんなもんですよ」

「あ、よかつた何ともなさそう……。なんかもう優人くんもぼっちちゃんもその芸だけでお金稼げそうだね……」

芸で済ませていいのこれ。俺もよく分かつてないけどこんな事できるようになったの大体後藤さんのせいだからね。

彼女の対応に追いつくためにはこうなるしかなかったんや。

色んな念が込められたデモテープも投函し、俺達はスターリーへ戻る事にした。

その道中、

「そういえば喜多ちゃんが録りなおした歌凄く良くなつててビックリしたよ。何か心境の変化でもあったの?」

「あつ、まあ色々……ちよつと悩んでたんですけど、もうスッキリしました!」

「そつか、全員が納得できるのが一番だからね! 結果的に歌も良くなつてたからオーライだよ!」

結局喜多さんは悩みの種を虹夏さん達には話していない。

あくまで後藤さんと一応俺も含めて一年組だけの話に収まったのだ。ああ、あと

助言枠にヨヨさんもいたわ。

ま、話す話さないは喜多さんの自由だし俺としては別にどうだって構わない。解決したならそれで十分よ。

そんな事を思っていると、虹夏さんと会話中の喜多さんがこちらを見てきた。

「これも全部……」

「ん？ 優人くんとぼっちちゃんがどうかしたの？ また次元の壁超えてる？」

「あつえつと……」

虹夏さんの俺達への認識って……。

元々話すつもりなかったのに虹夏さんに聞かれたせいか少しあたふたしだす喜多さん。少し脳内パニックになった彼女は俺と後藤さんを交互に見て、目をぐるぐるさせながらこう言った。

「ありがとね、ゆー……ゆとりちゃん！」

「優人くんとぼっちちゃんの名前がフュージョンしちゃったけど!？」

まだDBネタ続いていたの。俺の要素一文字しかないんだけど。

すげえ甘やかされ世代みたいになっちゃってんじゃん。

「ゆうくんっ、ゆ、ゆとりちゃんだつてえ……へへへっ」

「嬉しいがる要素あつたか？」

この子のツボがよく分かりません。

「それにしてももう三月なんて早いね〜」

あんだけツツコミしてたのにもう切り替えて歩き出してる虹夏さんさすがつす。

けどツツコミ放置されるとこつちがキツいつす、うつす。

「フェス出ようつて決めてからあつという間でしたね〜。結果が出るまでにやれる事とか何かありますかね？」

「そうだね〜。という訳で優人くんは何か案とかある？」

「ふむ……なら新曲のアピールも兼ねて路上ライブとかですかね。審査が通る通らないにせよ、どの道これからも活動を続けていくなら早めに知名度を広げておくに越したことはないですし、まだまだ夜は寒いとはいえ最近は少しマシになつてきましたしね。そろそろやつてもいい頃合いかと」

「おお〜すらすら出てくるね〜さすゆう〜！」

へへへっ伊達に新宿でしごかれてないんでね。

「とはいえ路上ライブをするにしてもどこでやるかとかも決めないとなんで、翌日に決行とかはまだ無理ですよ。下りるとは思いませんが一応場所が決まれば許可申請もしてみつつもりですけど。あと許可下りそうな場所やおすすめなところを下見とかした方がいいかもしれないです」

路上ライブはミュージシャン界限だと王道も王道だが、法律的にはむしろ邪道なのだ。

許可なくやれば違法行為とされ、最悪の場合は罰則もあるとの事。まあそれは警察の注意を無視したり何度も交通の妨げになるような行為を繰り返した場合ではあるが。

基本は注意だけで済みすぐ撤退すれば特にお咎めもない。路上ライブをする人達はグレーな範囲の中でいつもライブをしているのだ。

決して褒められた行為じゃないが、テレビやサブスクでよく聴く人気ミュージシャン達も過去には必ずと言っていいほど通ってきた道。路上ライブなくして人気にはならない。しかも金欠バンドマンにはうってつけの手法だ。

だからといって簡単に警察に見つかってしまうような場所でやればライブが始まってものの数分で注意&撤退になる可能性も大いにある。

これじゃ何の意味もない。許可など下りない前提。であれば如何にして警察に見つかりにくく人が集まりそうな場所を見つめるかが鍵になる。だからこその下見が必要だと俺は考えた。

「ん、確かにそうだねえ。……よし、じゃあ路上ライブは来週するとして、それまでに良きような場所はあたしと優人くんが探しとくよ」

「え、虹夏さんですか？ 別にそれくらい俺一人でも」

「なーに言ってるのさ。リーダーなんだからあたしも同行するに決まってるじゃん！ ドラムはスペースも取るからちやんと見ておきたいしね。そうだ、みんなは審査の事で張りつめてたし明日の土曜はバイトもないしどうせなら休みにしよっか」

「なら虹夏さんも休むべきじゃ」

「リヨウとぼっちちゃんは新曲作りで頑張ってくれたでしょ。よく分かんないけど喜多ちゃんもギターボーカルとして今回成長してくれた。あたしはジャケ写とか考えたりしたけど、編集は優人くんに任せつきりだし特に何かしてた訳じゃないからね。このくらいは平気へつちやらだよ！」

や、この癖強メンバーまとめるだけでも結構な気苦労されてるはずなんですけど……。

常日頃からリヨウさんの面倒を見てると慣れてくるのかね。その理論なら俺も後藤

さんの面倒見てるけど全然疲れるよ。八時間労働した後の残業くらい疲れる。

いやもしかしたらもつとも……と思っただけなら突然虹夏さんが俺の隣に寄ってきた。

前を歩く後藤さん達は明日が休みになった事で何をするかで盛り上がっている（主に喜多さん主体で後藤さんは聞いているだけ）。

そんな虹夏さんは俺だけに聞こえるように少し背伸びをしながら耳打ちするようにこう言った。

「（前に言ってた二人で遊ぶ約束さ、せっかくだし明日にしようよっ）」

思わず全体が跳ねそうになった。

なるほど……美少女からの耳打ちってこんな感じなのね。今まではよく分からなかったけどASMRを聴く人の気持ちが少しだけ理解できたわ。これは堪らんですわい。

おつといけない、浸ってる場合じゃないわ。

ちゃんと会話しないと。一応ボリュームを下げながら前の三人に怪しまれないよう自然体で話す事にする。

「路上ライブの下見も兼ねてるのにいいんですか？ 一日中遊ぶなら日を変えてちゃんと予定組んでも俺は大丈夫ですよ」

「ううん、いいの。場所探して言ってもどうせ下北のどつかだしすぐ見つかるだろうしね。明日の昼間は普通にどつかで遊んで夜は場所探しでいいんじゃない？」

「虹夏さんが良いなら俺は構いませんけど……」

「特別などこなんて行かなくても、あたしは優人くんと適当に街をぶらぶら歩くだけでもいいんだよね。ほら、優人くんといれば退屈しなくて楽しそうだしっ」

「はあ、さいですか」

街をぶらぶら歩くって何だろう。ウインドウショッピング的なやつだろうか。

まあ何でもいいけどさ。虹夏さんが楽しいなら俺も楽しいのでね。当たり前のように全肯定してくよ！

「それに路上ライブの場所探して体なら誰にも怪しまれなくて済むもんね。この作戦ならぼっちちゃんも気張らずにゆっくり休めるからちようどいいでしょ」

作戦って何すか。どうしてそこで後藤さんが出てくんの。

あれか、喜多さん達も休みにさせる事で虹夏さんと俺が場所探ししてるのに自分だけただ休日を謳歌するとか何て罪深いんだらうという、後藤さん特有のネガティブ思考に

陥らせないためか。

さすが虹夏さん、天才だぜ……。

「そういう事なら仰せのままに。路上ライブの下見つつう味気ないぶら旅だけにならずに済むなら俺も歓迎です。楽しみが一つ増えたって感じですね」

「そうそう、せっかくなら楽しまないとだよ。まああたしが一番楽しみにしてるかもだけどっ」

たのしみにしてるにじかさんかわいい。

「今のうちに決めとくけど、集合時間は十一時に下北沢駅でもいい？」

「虹夏さんのためならどこへでも行きますよ」

「エジプトでも？」

「もちろん」

「はははっ、何それ〜！」

エンジェルスマイルイズゴッド。

「じゃあそれで決まりね。みんなの前ではあくまで路上ライブの下見だけって事で」

「了解です」

「よし。……あ、喜多ちゃん！ とりあえず来週のどつかには下北で路上ライブする予定だからイソスタで告知よろしくね〜！ 優人くんもツイッターで告知お願い！」

「分かりました〜！ 来週下北沢で路上ライブしま〜すつと〜！」

俺も眩いところ。詳細の場所はまた後日告知するという事にしといて、と。

「喜多ちゃん真面目に運営してる!?!」

何やら前の方が騒がしい。

どうやらみんなで喜多さんのスマホ画面を見ているようだ。どれどれ、俺も見に行こ。

で、喜多さんのスマホを覗き込んでみると。

告知投稿のコメント欄にこんなのがあった。

『え!!? 本当にバンドやってたんですか!?!』

『ライブ……? 化粧品の実演販売の事ですか?』

『嘘じゃなかったんだ……!』

『バンド系女子を装ってたらモテると勘違いしてそうとか思ってたてごめんなさい』

『今日は写真投稿ないんですね。そういうえばこの前君が紹介してた化粧品僕も買いました。最近男子もメイクする人増えてるからさ。ぐへへ、お揃いだね。そのうち何もかもお揃いになっちゃうかも?』

うん、いまだに美容アカと勘違いされてるのはひとまず置いて、とりあえず最後のコメントのヤツはブロックしておこう。危険分子すぎる。

前も似たようなアカウントブロックしたのにまだこういうの湧いてるのか。喜多さんが顔を晒しすぎるのも問題な気がしないでもないけど。

「あれからちゃんとはバンド関連の事ばっか投稿してるはずなんですけどねえ」

「既に染みついたイメージを払拭させるのは難しいって事か……」

「いつそ美容系バンドって事にしちゃいます?」

「ロック要素皆無でしょそれ」

「そんなのはロックじゃない」

「美容系の商品一度も使った事ないから私には無理だ……」

一人だけ受け入れようとしたのに自ら失敗した子がいるんですが。

むしろ何もしないでそのポテンシャルなのも驚きではあるよ。九割くらい活かせる事ないけど。一割は私服になった時と文化祭のメイドの時。

「仕方ない、優人くんの方で集客期待するしかないか」

「こっちは結構好印象のリプ来てますよ」

と言ったらみんなこぞって俺のスマホを覗き込んできた。

『路上ライブですか!? くうく、来週全部予定入ってるのが惜しすぎる……』

『路上でやるライブって箱で見ると印象変わったりするんですかね? 私、気になり

ます!』

『見たい! 詳細情報あくして!』

『見れない可能性もあるのでぜひ動画などがあればとても助かります。結束バンドの曲
凄く好きなので!』

『来週のバイト全部バックれます』

『俺にも無下限呪術が使えれば瞬時に移動できるのに。今からでも習得できるよう修行
してきます』

千反田えると五条悟になろうとしてるヤツいるな。修行でどうにかなるようなもん
じゃないだろ。

あとバイトはちゃんと行け。

「……もしかして結束バンドのファンって個性強い人多いのかな？」

「メンバー自体が個性の塊みたいな人ばっかだからですかね。ほら、類は友を呼ぶ的な」
「喜んでいいのかよく分かんないやつだ!？」

「まあわざわざトウイッターでリップくれるような人達だから多少はキャラ作ってるかもですね。トウイッターってやべーヤツの巣窟だし」

「偏見が凄い」

いや割と偏見ではないと思うよ。やべーのがそこら辺にうじゃうじゃいるし。

とは言ってもだ。リップが癖強だとしても実際ライブを後方から見てる俺のファンへの印象は、みんな礼儀正しいしライブに集中してるので特に問題はない。つまりトウイッターの癖強ファン達はキャラ作りみたいなものだろう。

ネットでイキってるヤツが実はリアルじゃ小心者でしたみたいな。……それとこれとはまた別か。

しかし路上ライブを見たくても平日だし見れない人がいるのは確かだな。

リップでも動画にしてほしいって声あるし、知名度を広げるためにもちようど良いかもしれない。路上ライブを動画撮影してオーチューブに投稿する事も検討してみよう。

「路上ライブするなら物販も少し持ってこっか」

「いいですね！ 私達がどんなバンドか興味持ってもらえるかも！」

「……路上ライブは箱とは違ってリアルタイムで客が集まり評価される場所でもある。評価……評価……投げ銭……お金……ハッ!? 私も来週までに何かできる事ないか考えてみる」

「リョウ先輩が急にやる気に……ゆ、ゆうくん、私も何か考えた方がいいのかな……?」
「ら、ライブの時に歯ギターやったりと」

「後藤さんは何も余計なこと考えずにただギター弾いとくだけで十分かっこいいよ」
「かっこ……!? わ、分かったっ」

ちよろくて助かる。後藤さんは普通にしとくだけでいいんだ。変に気遣って普通じゃなくなつた瞬間それは終わりの合図だからね。

そう、手段と結果が最悪な気遣いの事を人はありがた迷惑と呼ぶのだ。彼女には何も考えないでいてもらおう。

色々話しているうちにスターリーへと戻つた俺達。

中はあつたけえなく……。提案したのは俺だけど真冬の時よりはマシになつたとはいえ、まだまだ夜は寒さが残つてるしほんとに路上ライブできんのかこれ。いややるしかないんだけどさ。

今日は練習もバイトもないので全員が自然とテーブルを囲むように座る。いつものミーティングスタイルだ。

話はさっきの続きから始まる。意外にも先に口を開いたのはリヨウさんだった。

「そろそろバンドのマスコットキャラクターを考えるのもありだと思う」

また何か言い出したな……。

「そういうのってリヨウが一番言わなそうなのいきなりどうしたのさ。確かに人気バンドの中にはオリジナルのキャラとかいたりするけど……」

ちよつとスマホでバンドのマスコットキャラを調べてみた。

するとあら不思議。ネズミやら食パンやらネコやら謎の生物やらと、調べると結構出てくるものなんだなこういうのって。俺でも描けそうなレベルのキャラとかいる。

しかし虹夏さんの言った通り、リヨウさんはこういうのあまり好みじゃなさそうなんだが。

どうしても変なこと考えてるに違いないか思ってしまう。というか絶対そうだろ。

「人気バンドにはマスコットキャラが不可欠という事。なら早いうちに考えといた方が

バンドとしても個性が出るし、グッズもより幅広くなる。そう、結果的に結束バンドの活動資金も増えてウハウハ」

「やっぱりお金絡みだろうと思ったよ!!」

でしようねー。

「でも先輩の考えも間違つてはないですよね！　せつかくだしみんなでマスコットキャラのデザインとか考えてみましょうよ！」

「ぐぬぬ……それはまあ、そうだけど……」

虹夏さんも珍しく押されてる。おそらく結束バンドの活動資金という辺りで揺らいでいるんだろう。

最近是将来機材車を買うためにつて少しづつ結束バンド貯金を始めたから、それも関係してるんだと思う。ただでさえ普段のバイトはライブ代で消えるからね。物販の売り上げをコツコツ貯めるしかないがそれだといつになるかも分からんし。

「あつわ、私もキャラクターくらいなら考えられるかも……」

こつちも何か言い出したな……。

己の絵心のなさを自覚してないのか？　初めてノルマ売る時に結束バンドのみんな

を特級呪霊みたいなイラストで描いたの忘れてんじゃないだろうな。しかも呪霊生み出す点では真人側だからヴィラン確定ですけど。

「後藤さんの描く絵は個性強すぎて万人には受け入れられないから他のみんなに任せような」

「あつうつ」

「優人くんそれオブラートに包めてるようで全然包めてないからね」

まじかよ。何十枚分くらい重ねたつもりだったのに。

ちなみにストレートで言うて見た人みんな呪われるから一生描くなつて言っちゃうところだった。

「キャラに関しては私に任せてほしい。大体のイメージは掴めてるから来週には形にしてくる」

「えー、うーん……まあそこまでやる気なら別にいいけど……」

「楽しみにしてますね！」

「リヨウさん絵心あるんですか？」

「ふふん、私を誰だと思ってるの」

「借金ベーシスト」

「マスコットキャラは簡単なイラストでもそれっぽく見えれば問題ない。だから私でも簡単にできる」

「これでもかかってくらいにスルーしたなこいつ。」

「じゃああまり期待せずにリヨウには丸投げするとして」

「期待しといて」

「今日はこの辺でお開きにしようか。メインのデモテープも送った事だしね。喜多ちゃん達は明日ゆつくりしときなよ〜」

「分かりました〜。友達と買い物巡りでもしようかしら〜！」

「それゆつくりするつもりなくない!?!」

「陽キヤは常に動いてないと死んじゃうのかね。サメか？」

「じゃあ俺達も帰るか。今日はどうするよ。収録するか？」

「せっかく時間あるなら、ゆうくんと一緒に練習したいかも……」

「了解。んじゃよろしく頼むわせんせー」

「せ、先生……!! へへっうへへ……」

この笑い方どうにかならんのか。

「あ、そうだ。ぼつちちゃん！」

「へへへ……えっあつは、はいっ!？」

帰り際に虹夏さんが近寄ってきた。

伝え忘れた事でもあったのかな。

「一応言つとこうと思って、明日優人くん借りてくね！」

え、いや、あの、虹夏さん？ 俺は物じゃないんですが……。

「え……あ、ああつ、はい、あのつ、その……ゆうくんは別につ私のじゃ、ないですし……あ、でも……うう……お、おとおお好きにどうぞつ……??？」

そつちも勝手に所有権渡してんじやねえ。何ちよつと逡巡してんだバカタレ。

「ぼつちちゃんに許可貰つちやつたー！ これて明日は安心して行けるね優人くん！」
「安心とは?？」

安心とは
???

9 1. 天使とぶらり旅

翌日、とある駅前で俺は人を待っていた。

時刻は午前10時45分。

待ち合わせ自体は十一時だが、万が一にもお相手を待たす訳にいかない俺は一時間前からいからここで立ち尽くしている。よく言うよね、社会人の基本は一時間前行動つて。言わないか。言わないな。

休日の駅前という事もあってか周囲にも人は多い。まあ無理もないか。

何せここは秋葉原の駅前なんだから。そう、何故俺はここにいいのかと尋ねると話せば長くなる。嘘、めっちゃ短い。

待ち人が昨夜のロインでやつぱりここがいいって言ってきたからだ。以上。

元々は下北沢駅に集合の予定だったが、急遽ここに変更となった。路上ライブ探しは下北沢するのに何で秋葉原で待ち合わせなのかって？ 知らん、天使のお告げに疑問など持つな。絶対服従であれ。

という経緯もあつて俺は秋葉原の駅前で絶賛待機中なのである。

もう三月とは言つてもまだ寒い時期だからか、周りの人達は厚着装備が多い。俺は寒がりではあるが多少はマシになってきたのでベージユのチエスターコートと中に黒のタートルネックを着てついでにマフラー装備。

女子高生は言う。オシヤレは我慢であると。真冬なのにミニスカートだったり大層気合いの入つた薄手装備をなさっているJKはほんと凄いと思う。

俺は男子高校生、DKだから別にそこまで気にする必要もないかなと思つたりもしたけど、やはり相手が相手なので今回は俺も多少の我慢をする事にした。……DKつてドンキーコングみたいでちよつとアレだな。

そんなくだらない事を考えてるうちに時刻も五十分になつた。
すると、

「おーい！ 優人く〜ん！」

出口の方から名指しで声がかかる。

声で相手は分かりきつてるしもう言つちやうけど、相手は虹夏さんだ。10分前行動か、素晴らしいな。

呼ばれた声に答えようと振り返つてみる。

……あれくおかしいな〜？ 天使がいるぞ？ 虹夏さんって人間（天使）の枠組みであつて天使（人間）ではなかったはずだけとお……。

長い金髪のサイドテールを揺らしながら笑顔で駆け寄ってきた彼女はふわもこなホワイトのボアブルゾンって言うんだっけ？ だったかに身を包み、下は黒のボトムスで細いおみ足のラインがくつきりを目立つスタイル。

何というか……新鮮だった。これまでに見てきた虹夏さんの私服とはまた違う印象を感じたのだ。

「早いね〜、いつから来てたの？」

「ついさつき来たところですよ」

こんなふわふわでもこもこな上着を着ると思ってたなかったからついつい見てしまう。ふわもこコーデであどけなさを感じさせる女の子らしさを出しつつも、下は黒くて細いボトムスで大人っぽさも醸し出している。おいおい何だよこれ。可愛さとかっこよさのマリアージュってか。いや可愛いの方が勝つけど。虹夏さんちっちゃいから全然可愛いのが勝つけど。

「えー、ほんとに〜？」

「二〜三分前くらいですかね」

「ふくん……お鼻、赤いよ？」

「……寒がりなもんで」

マフラーで鼻元を隠す。鋭いお人だ。さすがドラムでいつもみんなを後ろから見て
いるだけの事はある。観察眼が高い。

「ここは話を逸らすのが一番か。」

「そーいや昨日は詳細聞いてませんでしたが、今日はどこ行くんですか？ 何故にア

キバ？」

「ああ、それはね」

「思い出したように虹夏さんが紡ぐ。」

「前半は元々遊ぶ予定だったじゃん？ んで何しようかなーどこに行こうかなーとか

思ってたんだけど」

「はい」

「優人くんにはあたしの行きたいとこに着いて来てもらおうって思ったのでしたっ」

「ああ、国外じゃなかったんですね」

「そこまでは思っていないからね!」

別に虹夏さんのお願いなら地球の裏側だろうと月面でも良いんだけどなあ。

ふわもこ虹夏さんはコホンと切り替えつつ、

「とりあえず寒いしまずはそのこに行こつか?」

「大賛成です」

オシヤレは我慢とか言うけど正直全然寒い。ニット帽とイヤーマフくらいは持つてくれば良かったとちよつと後悔してる。

行き先の場所は言わないまま虹夏さんが歩き出したので隣を歩くように着いていく。着いてからのお楽しみというやつだろうか。

ただ一つ確信を持って言える事は。

「場所自体は近いしちよつと歩くだけだからね〜って……どうしたの?」

「いや、今日の虹夏さんちよつと考えられないほど人間辞めてるなって」

「あたしそんなぼつちちゃんみたいな事になってる!?!」

そんだけ可愛いなって事です。純白に包まれる天使とかまさに神だな。どつちだよ。

とまあ、こんな感じにレアな虹夏さん拝めて今日来て良かったなって思えた事だ。

虹夏さんの言う通り少し歩いた先で歩が止まる。

何となくどこかの店かなんかだろうなーとは思ってたが、実際その前まで行くとどんな店なのかすぐに分かった。つーか思ってたよりでかどかと看板に店名が書かれている。

「ここがあたしの行きたいお店だよー」

「おードラム専門店ですか」

看板には『ドラムステーションリブレ』とあった。

そういうや御茶ノ水に後藤さんのギター見に行った時に今度はドラム専門店に行こうって虹夏さん言ってたな。これの事だったのか。

ドラム専門店という自分にとってのホームだからか、テンション上がって看板を指差す腕が上下にぶんぶん揺れてるしついでにアホ毛も左右にぶんぶん揺れている。どうなってんだあの触覚。

まあ行きたがっていた場所に来られたんだから虹夏さんの気分も高まるのだって自然だわな。なら早々に入った方がいいか。

「じゃあさっそく入りまっつとっとおっ!？」

「早く行こ優人くんっ!」

言い終わる前に手を掴まれ店の中へと連れ込まれていく。

何だか初めてテーマパークに来てワクワクを抑えきれない子供に引つ張られる父親の気分です。これがほほえまっつてやつ？

「お、おお……」

店内に入ると思わず声が漏れた。

そこかしこに、周囲どこを見渡してもドラムばかり置いてあった。ギター専門店とはまた違う。基本円の形をしてたり重ねて置けたりできるからか、一人分が立てるスペースにドラムが三つや四つほど重ねて置かれているのだ。

まさに圧巻。何この……限界ギリギリまで詰めれるだけ詰めてみました感。ドラム専門店のドラムってこんな林立されてるもんなの？

「どお、凄いでしょっ?」

「ええ……ははっ、ちよつと予想してたよりも専門店って感じがしますね」

「そうなんだよ、ドラマーならここのお店は外せないし置いてあるのは有名ブランドはもちろんオリジナル商品も充実してるから見るだけでも楽しい聖地みたいなものなんです！」

早口ドラムオタクになってる虹夏さんかわいい。

実際には「はえ〜」と相槌を打ちながら店内を見渡している俺。わお、二階までドラムでびっしりじゃん。

「しかもこの店員さんは全員ドラム経験者だから知識も豊富でね、新しいのを買うってなったら絶対ここって決めてるんだっ」

「確かにこんだけ商品揃えてるのは店員含めてドラム愛が強くないと難しそうですね」

「でしよでしよ〜！ それにこのお店は試奏もオツケーだから気になったのがあったら叩いても良いんだよ。買わなくても大丈夫だから優人くんも気になったのがあったら試奏してみるのも楽しいよ！」

「気が向いたらそうします。だからまずは虹夏さんの好きなように見てください。俺はそれに着いていきますんで」

「いいの？」

「来たかったんでしょ？」

「うんっ！」

何と気持ちの良いお返事なんでしょう。一つ年上なのを忘れてふーちゃんみたいに頭撫でそうになった。だつてすげえ子供っぽくて和むんだもん。

くっそ、ふわもこコーデだから余計あどけなさを加速させてやがる。俺の庇護欲をかき立たせてくるのは後藤さんだけでいいのにつ。

俺の言葉を素直に受け取った虹夏さんは笑顔でドラムを物色しに行く。

そんなウキウキ気分の虹夏さんを眺めながら店を歩くのも中々悪くないだろう。いや、むしろ良い。ここの空間にいれば虹夏さんは常に笑顔なんだから。マジかよ……じゃあここは楽園天国……つてコト!?

「うわ〜どうしよ優人くん！ 全部叩きたい！」

「一応見て回って厳選してからにしましょうねえ」

「うう、分かってる……分かってるんだけどお……っ。ダメ？」

「全部はさすがに現実的ではないかと……」

「くう〜、ならやつぱ厳選するしかないか〜！」

なんだなんだ、今日の虹夏さんからいつもよりリーダーというかまとめ役っぽい雰囲気

気一切感じられないんだが？

印象としては甘えてはくるが聞き分けの良い子供のような、そんな感覚だ。え、何それめっちゃ役得ですよん……。

と、虹夏さんを見て気付く。

そうか、今日は結束バンドのみんなはいないしいるのは俺一人だけ。バカみたいなどん底ネガティブの後藤さんもアホみたいなぶち上げ陽キヤの喜多さんもカスみたいなど借金ベーシストのリョウさんもないとなれば、虹夏さんは普通の女の子でいられるという訳だ。

普段からあの狂人達を相手にリーダーとして接してるんだから、溜め込んでいた鬱憤やストレスを遠慮なく解放してリラックスできる空間というのは実は珍しいのかもしれない。

あの三人って意外と自分のペースというか自分だけの世界を持つてるとこあるもんね。そりや疲れるよ、癒しだつて求めるさ。

ならば今日は俺が虹夏さんをとことん癒してあげなくては……。

いくぞ清水優人、伊達に天使ニジカエルを信奉してないところを見せる絶好の機会だ。ここで信仰心を表さなくてどうするッ！

「虹夏さん、やつぱり気が済むまで全部試奏していきますかっ」

「さすがに冗談だよ!？」

冗談だったらしい。店側の迷惑と俺への気遣いでそう言った事くらい、俺は分かっていますからね!

そんな軽いやり取りをしつつも店内を回る。

虹夏さんは笑みを崩さず一つ一つを吟味するように見てはいいないなくと声を出して楽しんでる様子。

生憎俺は前に始めたギターの事なら少しだけ分かってきたつもりだが、ドラムに関しては知識なんてほとんどない。

精々スネア、ハイ・タム、ロー・タム、バストラム、ハイハット、クラツシユシンバル、ライドシンバルと大まかな各部の名称を知ってるくらいだ。一応ヘッドとかシエルとか一部の名前は覚えてたけど。

こんな感じでメーカーや細かい部分の話になったらもう何が何やらである。

だけど虹夏さんは俺を氣遣ってか小難しい話は一切振ってこない。音がどうのこのやら見栄えがどうたらこうたらと、素人でも何とか通じる程度の話を実顔でしてくれる。

まるで自分だけが知っている宝物を家族や親友にだけ教えてくれるような無垢な子

供のように。

いつもはツツコミやら練習やバイトなどでしっかりしているのもあってか、今のよう
に何のしがらみもなくただこの空間を楽しんでいる虹夏さんは、本当にどこにでも
いる平凡な女の子にしか見えなかった。

しがらみ扱いしてすまん後藤さん達。ただもう少し日頃の行いを改めて虹夏さんに
楽をさせてやろうな。

普段の反動なのか知らんけど今日の虹夏さんめっちゃ俺に甘えてくる子供のような
感じで話しかけてくるから。天使なのに破壊力が凄すぎてもはや暴力になってる。事
あるごとにびよんびよん跳ねるアホ毛が感情を表しているのがいけないんだ。犬の尻尾
かよ。

「うくん、やつぱり見てると欲しくなってくるなあ」

「買わないんですか？」

「一応今使ってるので十分だからね。楽器なんてみんな基本高いのにリョウミたいに
バンバンお小遣い使って楽器買いまくってるのが異常なんだよ」

「それで金欠なって借金してくる人ですもんね」

「またお姉ちゃんにシめてもらおうか」

はて、どこかでくしやみの音がしたような気がするけど気のせいかな？

「それに今はこうやって見てるだけでも楽しいから良いんだ。あ、楽器見てるだけでもウインドウショッピングに入るんだっけ。まあ何でもいつか。……こうやって色々見てさー、高い楽器を見て良いな〜って思いながらね。いつか売れて値段とか関係なく自分の好きな楽器が買えるようになってやるぞーってちよつとした目標も掲げて気合いを入れる訳」

「……あー、だから今日ここに来たんですか？」

「うん。まあ楽しみたいって気持ちの方が半分以上は占めてるけどね。優人くんにもあたしの好きなものをもっと知ってもらいたいってのあったし」

「その辺に関しては楽しんでる虹夏さんを見てたんで俺も十分楽しめましたよ」

「……えへへ、そっか！」

虹夏さん本人が言った通り、今日ここに来たのは彼女が来たかったからというのも事実であり、俺と一緒に楽しみたいと思っていたのも事実だろう。

しかし何故路上ライブの場所を探す今日という日を選んだのかが少し疑問に思っていた。遊ぶだけならもつと別の日でもいいのにだ。

それも虹夏さんの言葉を聞いて合点がいった。

メンバーの三人ではなくわざわざ俺と二人だけでここに来た意味。今は買えないドラムを見ていつかは売れて買ってやると、目標を掲げて気合いを入れると虹夏さんは言った。

おそらく意思表示の一種もあるんだろう。

そもそも昨日路上ライブの場所を探すと決める前に行っていたのは何か。結束バンドにとつては大事なミニイベントでもあつたはずだ。

『未確認ライオット』。その審査へ応募するためのデモテープの投函。

今まで以上にみんなで努力して形にした結晶を送った日。合否の結果はまだ先だが、その間にも多分思うところは色々あるだろう。だからそれを振り切るように自分に気合いを入れる事にした。

あれだけ昨日はテープに念を送っておいておきながら、それでも少なからず残った不安を払拭するために。

こつぱずかしくて三人には見せられなくても、メンバーではない俺になら言つても大丈夫と思つてくれたから吐露したのだと。

何だか、こつちがこそばゆい気持ちになつた。

「まあ、大丈夫ですよ」

「ん?」

「とにかく今日は夕方まで楽しみましようや。俺でよければいくらでもお付き合いしますぜ」

「……うん、じゃあそうしよう! 今日はどことん付き合ってもらおうからね〜!」

俺の言葉をどう受け取ったかは彼女にしか分からないが、いつも通りの笑顔を浮かべているなら多少の不安もどこかに消え去ったか。

もしや甘えるように話しかけてきてたのもその裏返しだったり……? やだ、それはそれでかわいいじゃないのよ。

「店の中は大方見て回ったし、そろそろ試奏しよつかなあ」

「お、いいですね。じゃあ店員さん呼びますか」

店員さんと呼ばひ虹夏さんが気になったドラムを言つて試奏スペースにセットしてもらう。

この店、さすが店員が全員ドラマーなだけあつて拘りが凄い。虹夏さんの要望に全て応えるようにドラムをセットしていつている。普通ならめんどくさいと思ひそうな事でもお互いドラム愛さえあれば何でもないんすね。かけーつす。おっと、俺の中の長谷川さんが出てきてしまった。そーいや彼女もドラムだったね。

セツトも終わり、いよいよ虹夏さんが座る。ふわもこな白のボアブルズンを一旦脱いで俺に預ける。ふわっふわや……。

ああ、なるほど、元々この店に来て試奏するつもりだったからスカートじゃなくて細目のボトムス穿いてきたのね。スカートだったら下手すると大変な事になってたかもしれないもんな。主にそれを見た俺が。

「思いきり叩いても大丈夫ですからね〜」

「はい、ありがとうございます〜す〜」

つーかこの店員全員ドラマーってか、そもそもが全員女性だった件。

虹夏さんが試奏したいって言ったたら五人くらい一気に出てきたけど、みんな女性だった時は普通に驚いた。相変わらずあれか、この世界は謎の力でも働いてるのか？ きらきらきららは健在なのか？

「あんな可愛らしい彼女さんがドラマーだなんて驚きましたよ。てつきり彼氏さんが試奏するものだと思ってましたっ」

いきなり隣にやってきたと思ったら何つう勘違いしてるんだこの髪色パープル店員。

「いや、俺は別に」

「ねえねえっ彼氏さん的にはドラマーってどう思います？ やっぱりギターとかベースみたいの前に出てる楽器の方が華があつて良いと思いますか？」

「や、だから俺は彼氏じゃな」

否定が終わる前にダダダンッ！ という音に俺の声はかき消された。

虹夏さんがドラムを叩き出したのだ。最初に叩いた感触と音を全身で感じ取った虹夏さんはいつものリハで調整を終えた時のように頷いてから、もう一度スティックで自分のリズムを刻みだす。

その瞬間から、俺は否定の言葉を出そうとしていたまま途切れて開いていた口を閉じる事なく、彼女の姿を見る事しかできなくなっていた。

言うなれば釘付けであった。最初の一言で既に意識を持っていかれていたというのが正しいかもしれない。

素人の感想だが別段飛び抜けて上手い訳ではないと思う。

しかし楽しそうに叩く虹夏さんの表情を見ると、上手い下手なんて特に問題じゃないと感じた。きっと、あの笑顔に勝る魅力はない。

そりやもちろん音楽を続けていくなら上手なのは大前提だけど、ただ歌が上手い人や演奏が上手いだけの旋律じゃ中々心は動かない。

少なくとも俺がそうだから。結束バンドに関わるようになってから単に曲を聴くだけでなく、歌詞を含めて演奏する人達を見るようになった。だから何となくだけどころかかってきたのだ。

必死だったり、笑顔だったり、楽しそうだったり、決して曲だけを聴いてたら見えな部分が見えてくるというのは、存外無碍にできない。

演奏者達の顔が見えると曲の雰囲気も得る印象も変わってくるものだ。だから多分、ファンというの好きなバンドがいれば現地のライブに来るんだろう。曲だけでは得られないものを見るために。

パープルヘアーの店員の質問を思い出す。

ドラマーだからこそ本人が感じた思いを無関係の俺にぶつけてきたのかもしれない。率直な感想を聞いてみたいと、ドラムは常に後ろで目立たないから華がないんじゃないかとか、その辺の事を聞いてきてるんだろう。

「確かにドラムだとポジシヨンの目立たないですし、どちらかと言われると華はないかもしれないですね」

「あ、やっぱりそう思います？ かと言って前に出すとスペース取るし動けもしないから地味に見えたりするのがネックなんですよね」

「ですけど」

「？」

「あんだけ楽しそうに叩いてるのが分かってたら、華とか関係ないかもしれないよ。見てる側も演奏してる側も楽しい空間をみんなで共有できるなら、そこに一番の華があるんじゃないですかね」

今も自由に試奏している虹夏さんは楽しそうだった。本当に。

目立つとか目立たないとか、そんなの関係なく純粹にドラムが好きだからその世界に浸っている。

ああ、訂正しないと。

他のメンバー三人はある意味自由すぎて自分だけの世界を持つてるなんて思ってたけど、こうして見れば虹夏さんも立派な自分だけの世界を確立してるんだな。他の三人が強すぎるだけで。いや、マジで無駄に強すぎる。

「わあ……何この理解力限界突破した彼氏さん……一家に一人欲しい……」

「え」

何か怖い事言い始めたんですけどこのパープル。

「彼女さん何かバンドでもやってるんですか？」

「あ、ああ、えっと、結束バンドっていう名前でガールズバンドしてますけど……」

「ふむふむ、ありがとうございます。気になったらチェックしてみますね！」

「あっはい」

微妙に距離をとろうとしていると腹に響いていた音が鳴りやんだ。どうやら虹夏さんの試奏が終わつたらしい。

ふう、と一息つき他の店員さんにお礼を言つてこちらに駆け寄つてきた。

「あー楽しかった！ やっぱ良いドラムは叩くのも良いね〜！ あ、どうだった？」

「たのしそうにたたくにじかしやんかわいとおもいました、まる」

「語彙が小学生の感想文レベルになつてる!？」

「彼氏さんずっと微笑ましそうに見てましたよ〜」

「おいいきなり何てこと言うんだへアー店員パープルおい。そーいや訂正するの忘れてた。」

虹夏さん笑顔のまま固まつちやつたでしょうが。この人にそーいうのはまだ早いんだからね。店長もそー言つてたし！

「え？ ……か、かれっ……？ つ!?」

「あー……虹夏さん、実はこの店員さんちよつと勘ちがあんツ!?」

「あ、ああああああありがとうございましてああーツ!!」

「ご来店ありがとうございます！またのお越しをお待ちしております☆」

入店時同様、退店時も俺は虹夏さんに引つ張られ店を後にした。というかされた。主に襟首を掴まれ首が締まる形で。

「あくあはは……びつくりしたあ……」

「んごぎゆううう」

「あつ！ ごめん優人く——首が九センチくらいまで縮んでる!？」

虹夏さんが慌てて首の皮を引つ張ったり伸ばしてくれたおかげで何とか元に戻る事ができた。

ふう、天使に殺されるとこだったぜ。

「ご、ごめんね……?」

「なんてことないですよ。むしろ死んでも虹夏さんなら本望です」

「それはこつちがちよつと遠慮したいかな……」

遠慮されてしまった……。

「あれ、結構時間経ってたんだね」

「一時間半くらいですね。この後どうします？ 他にも行きたいとことかあるんですか？」

「んー、その前にちょうどお昼時だしご飯でも食べに行こうよ」

確かに12時40分と時間的にもどストライクなタイミングだ。

「了解です。店の希望はありますか？」

「ない！ だから適当にぶらついて二人がいいなつて思ったとこに入るー！」

アドリブ感強いな。

まあガチガチに予定と行き先を固めてるよりはこっちの方が楽しみも多いか。というか虹夏さんとなら俺は油ぎった家系ラーメンでも全然可。

「じゃあその辺歩きますか。アキバだし案外隠れ名店とか見つかるかもですねえ」

「ほほう、いいねー。じゃあ大通りよりかは狭い路地を攻めちやおう！」

はしやぐにじかしやんきやわいい。

と、二人で路地をぶらついてたら何か良さげな看板を見つけたのでそこに入る。

『オムの大木』とかいう名前のオムライス専門店であった。大丈夫か、ポムで樹みたいな名前に似てるけど大丈夫なのよねこれ。狭い路地のくせに雰囲気はめっちゃオシャレな感じだったから入ったけど怒られないよね。

「優人くんは何する？」

向かいに座った虹夏さんが聞いてきた。

「あ、メニューを見せてもらってもいいですか」

「はい」

メニュー表を二人でも見えるように俺から見て左側に立ててくれた。

虹夏さんもまだ決めてないから一緒に見えるようにしただけでなんてことない行動なのに何この共有感。むずがゆさが凄いんですけど。

「あたしはエビフライの乗ったオムライスにしよつかな。ソースはデミグラスソース
！」

「じゃあ俺はシンプルに普通のケチャップオムライスにします」

「え？ 他にも色々あるのに何で一番無難なやつなの？」

「チツチツチツ、だからこそですぜ虹夏さんや」

「？」

ええ、ええ、そのキョトンとした何も分かってない感じで首を傾げる仕草いいですねえ！

「ド定番でシンプルだからこそ見た目のクオリティーと味の良さがダイレクトに評価に繋がるんですよ。卵焼きやオムレツと同じです。簡単な料理こそ真の腕が問われる。ここが隠れ名店で専門店と謳っているならば、スタンダードなオムライスがこの店を評価するのに一番適したセレクトなのです」

「高校一年生が言う言葉じゃないね〜」

虹夏さん所々ドライなところあるよね。さっきまで一緒にノリノリで名店探してたじゃない。

「まあいいや、決まったら注文しよ。すいませ〜ん」

さすが常日頃からあのリョウさんと対峙してるだけある。いなし方が上手い。いや

相手にされてないだけか？

注文を済ませ十分程度が経過した頃、お互いが頼んでいた品がやってきた。

「ふむ……見た目は完璧、ケチャップの量も掛け具合もちょうど良い。何より薄めに焼いた卵がまるで高級な絹のように滑らかな黄色で外観を包んでいる。……うん、プアーフェクトウ……」

「優人くんは美食家なの？ 無駄に最後発音良いし」

「いえ全然。ノリです」

「だろうなとは思ったよ」

いかん、普通に良い匂いで腹が減ってきた。サービスで付いてきたサラダを先にかっこんでやろうか。

「あ、食べる前にさ、ちよつと顔をテーブルの真ん中の方に寄せてくれない？」

「あ、はい」

言われた通りに顔を寄せていく。何だろう、虹夏さんの言う事だから忠実な僕みたいに従ったけどこれ何の時間？

そんな事を思っていたら突然虹夏さんがこちらに顔を寄せてきた。……寄せてきた

???

「え、ちか」

「はい、いやあ優人くんスマホカメラ目線でよろしくね」

「……………うえ？ あっ」

「はい、自い撮りっ」

咄嗟に虹夏さんが持つてるスマホの方に顔と視線を向けると、ちょうどパシヤリという音がした。

なるほど、写真撮るためだったのね……。自撮り自体喜多さんヨヨさんくらいしか一緒に撮ってなかったから意図に気付くまで時間かかった。

こういうのってオムライス単体を撮るんじゃないのか。一応オムライスも一緒に写ってるけど。

「何すか自い撮りっ」

「初めてアー写撮る時に優人くんボケたじゃん？ だからあたしも真似てボケてみた」

ふん……かーわういいいいいいいいッ！！

よし、よく心の中で押さえ込めた俺。危うく声をまんま漏らして店を一発退場出禁になるとこだったぞ。

しかし写真という事でふとある記憶が蘇ってきた。

正確には御茶ノ水でリョウさんと昼食を食べた時に撮った写真を。

「……あの、まさかその写真、結束バンドのグループロインに貼らないですよね……？」
あの時はなんか他のみんな冷静さを欠いたりして妙な寒気を覚えてた記憶がある。
文字なのに変な圧が凄かったんだよなあ……。

「うん？ ああ、貼らない貼らない。良い写真だけどこれはあだし達以外の誰にも見せるつもりはないから安心して。それにもし見せたら今日の事バレちゃうしね」

ああ、そういや今日は路上ライブの場所探しとかみんなには言っていないもんな。

下北ならまだしもこんなアキバでの昼飯写真なんかロインに貼ったら一瞬でバレるか。

「これはあだし達二人だけの秘密だよっ」

「ういっす」

なんと蠱惑的なお言葉なんでしょう。しかも人差し指だけ立てて口元に持ってつてるとか、天然の小悪魔要素まで備えてるの最強すぎんだろ。

天使にこんなこと言われたら今日の事は墓場まで持ってっちゃうゾ☆

「じゃあお腹も空いてるし食べよっか!」

「はい」

二人で手を合わせていただきますと言ってから食事を始める。

オムライスはとても美味しかったし、ひとくちひとくちおいしそうにほおばるにじかしえんがめちゃんこきやわいかったぞえす、まる。

昼食を食べた後はしばらくその店で雑談をし、夕方になるまではアキバで適当にぶらつきながらゲーセンなりアニメショップ（俺の趣味に虹夏さんが付き合ってくれた）に行つて時間を潰してから下北沢駅まで移動した。

下北沢の駅前、時間はおよそ六時半。

夏ならまだ十分明るい時間帯だがこの時期はまだまだ陽が沈むのが早く、辺りはすっかり夜の世界だ。

それもあつてか、土曜日の下北の駅前にはもう路上ライブをしている人がいた。

「お〜今日もやつてる〜」

「たまにバイト帰りの時もこの辺でライブしてる人見かけた事あるからなあ。やつぱ音楽の街だけあつて歌手目指してる人達にとってここはライブしやすい場所なんですかね」

「ここだと人もいっぱい通るし、下北の人ばつかだからみんなこういうのに寛容で見えてくれる人も結構多いからね」

確かに周囲を見てみると数十人くらい立ち止まつて路上ライブを見ている。

年齢層はバラバラ。若い人もいれば仕事帰りなのかスーツを着た中年層もいる。ネットで調べた事もあるが、下北で路上ライブは日常茶飯事な事もあつてか注意されるような回数も少ないのだからか。もちろん警告されれば撤退は必須だが。

見た感じ観客の人達も路上ライブを見るのが慣れているのか、可能な限り通り道の邪魔にならないよう一列で囲むように見てたり少し離れた場所から見ている人もいた。

……なるほど、こうやってライブをしてる人ができるだけ注意されないよう見てる側もみんな意識してくれてるのか。こういうところは芸術に寛容な下北らしい特徴だな。

だから夢を追いかける人はここで遠慮なく色んな思いをぶつけられる。

気持ちを乗せて全力で観客に見てもらえる。もしかしたら初対面でも今日偶然出会えた人達が一人でも多くファンになってくれるかもしれないと願って。

「虹夏さん」

「うん？」

「来週の路上ライブ、ここでしましょう」

「……」

「……なら絶対大丈夫です。根拠は感じられないかもしれませんが、この場所であれば結束バンドの思いはみんなに届く。何となく……そう思いました」

多分俺の言葉には信憑性の欠片もない。

不確定な根拠と未確定な確信しかなく、それこそ届かない相手には絶対に響かない軽口にも思えるような言葉。

それでも。

「……うん、分かった。優人くんがそう言うならここでしょっか」

「えっ……いい、いいんですか？ 自分で言つといてなんですけど、結構めちやくちや言つてますよ？」

「それでもいいよ。あたし達を一番身近で見てください。優人くんが言うなら信じれる。結東バンドのファンをここでもっと増やそう！」

「虹夏さんの銅像をここに建てましょう」

「なんか話ぶつ飛んでつてない!？」

いけない、つい心の声が漏れてしまった……。

あまりの神々しさに崇める姿勢が止まらねえ!!

「……優人くんつてさー、あたしの事どういう風に認識してる訳?」

「下北沢の大神使」

「女の子以前に人として見られてないッ!？」

人間風情と虹夏さんを同列に扱うのがそもそもその間違いなんですよ。

みんなもつと虹夏さんを崇拜するべき。こんな人格者そうそういないよ。たまにリヨウさんに対して猟奇的になるけど。リヨウ、だけにね!!

「コホンツ……とにかく来週の路上ライブはここです。それでいいねー！」
「うっす」

路上ライブをする場所は決まった。これで今日の目的は完遂。

その後はライブしてるのを最後まで見て、ライブをしてたお姉さんに少し話を聞き楽しませてもらったお礼としてお金を払ってCDを買わせてもらった。

ライブが終われば自然と人は散っていき、どうせ駅前にいるなら虹夏さんを家の下まで送って良く事にした。

「わざわざ送ってくれてありがとね」

「当然の義務です。俺も今日はありがとうございました。せつかくの休みだし少しでも虹夏さんの息抜きになってれば何よりです」

「たはく、あたしも十分楽しかったよっ。優人くんの趣味も色々知れたしね」
「アニメシヨップの事ね。バレないように今日は何も買ってないけども。」

「じゃあ俺はこれで」

「うん、またね！」

スターリーの所で別れる。

色々ぶらついて遊んだのはいつぶりだろ。そもそも後藤さんは外に連れられないし、喜多さんで行ったシーパラはほぼ水族館だけで途中寝ちまつてたしなあ。……もしかしたら一日中ぶつ通しで遊んだのって今日が初？ うわ、俺の青春少なすぎ……？

改札を過ぎ電車に乗る。

その車内で椅子に座っていると、スマホの通知が鳴った。

「虹夏さんから？」

何だろう。伝え忘れてた事でもあったのかな。

それとも改めて今日のお礼とか？

スマホを取り出して画面を開く。

虹夏さんから二件来ていた。一つは画像、もう一つはメッセージだった。

「……」

画像の方は今日の昼に二人で撮った自撮り写真。

咄嗟にカメラの方を向いたから虹夏さんがどんな顔をしているか分からなかったけど、ようやく確認できた。

めっちゃ笑顔ですよん。それに比べていきなりすぎて表情を作る暇もなかった俺は

笑顔でも何でもなく、呆気にとられて少し口が開きポカンとしたような顔。

一応自分だけの間抜けかこいつ。

そしてメツセージを見ると。

『二人だけの秘密なら共有しとかないとね!』

大丈夫か虹夏さん、学校で密かに男子キラーとかになってないか。

適当に返信を考えつつ、ふと写真を見て俺は思った。

「……：そーういや俺、女の子とツーショットばっか撮ってんなあ」

ちよつとした独り言の呟きで周囲の乗客（主に若い男性）に睨まれたのは言うまでもない。

92. 路上ライブは箱とはまたひと味違う

そうこうしているうちに路上ライブ当日がやってきた。

場所はもちろん下北沢の駅前である。

結局路上ライブの許可申請はせずにそのままやっちゃおうという事になり、注意されたら撤退する流れになったのだ。路上ライブは基本的に申請しても許可が下りる事は少ないので、それならもういつそ無許可でやってやろうぜそれがロックでしょ！怒られる時はみんなでね！ みたいな感じ。

赤信号みんなで渡れば怖くない理論であった。

一人だけめっちゃくちゃ怯えてる子がいるのはもちろん後藤さんだ。今から路上ライブをするという事ともし警察に見つかつたら今度こそ捕まるとか不安を漏らしてた。こういう事があるから一応許可申請して少しでも不安を払拭させておこうと思ったんだけどなあ。

時刻は六時半。ちょうど会社帰りの人達もたくさんいる時間帯だ。

今日は先客もいないからこのスペースは結束バンドが使わせてもらおう。

「ライブはここでするよー！ 昨日優人くんと決めたからきつとお客さんもたくさん見てくれるはず！」

「結局無難な駅前なんだ。……でもそれならこんな場所すぐ決めただけだ。二人は昨日すぐに場所決めして帰ったの？」

「えっ!? い、いや？ 下北周辺を見回って色々話し合いながらここに落ち着いた感じだけどっ？」

「……虹夏、目が泳いでる。優人吐け」

「おぼろろろろろろおおおおおおおおおッ!!」

「そういうのいいから」

「あ、うっす」

渾身の吐き芸をないがしろにされるの結構ショックなんです。

「つつつても虹夏さんの言う通りですよ。良い場所ないかこの辺見て結局ここが一番見てもらえるし場所的にもちようど良いってなつたんです。それ以上でも以下でもありません」

「そんなことどうでもいい。私は二人だけで美味しい料理店に行つてないかだけが気になつてる。もし行つてたらズルいから私にも奢るべき」

「気にするとこ金と飯しかねえのかキサマツ!!」

家を出てくる料理の方が絶対豪華でしょうが。富豪の娘のくせになまいきだ。

とりあえず事なきを得たので気付かれないよう虹夏さんに軽くウインクしておく。すると向こうもお礼のウインクを返してきた。ウツツツ!?

「優人がいきなり崩れ落ちた」

ふっ膝に矢を受けてしまつてな……違う目にウインクを受けてしまつてな……。危うく失明するところだつたよ。

「ところで伊地知先輩、ドラムはどうしたんですか? 車がないと持ち運べないですよね?」

もうこんな光景も見慣れたのか俺に見向きもせず虹夏さんに質問する喜多さん。完全スルーしていくその姿勢、嫌いじゃないぜ。

「ん? ああ、それはね〜。ハイハットとスネアとバスドラがあれば充分なんだよ〜!

そしてバスドラはこれ！ はい出して優人くん！」

「御意！」

言われた通りに傍らに置いてあつたキャリーバッグを取り出す。

「ぬるつと復活したわね優人君。けど、キャリーバッグ？」

「キャリーバッグにキックペダルを取り付けたら簡易バスドラムになるんだよ！ 荷物も運べて一石二鳥つて事！」

「何でも代用できちゃうんですね〜」

……あれ、そーいや荷物はもう出したのにキャリーバッグが何か重かつたようなの？

「ちよつと素朴だけど意外とそれっぽい音なんだー」

「へ〜、何か人間っぽい音がするんですね〜」

言いながら試しにキャリーバッグのバスドラムを鳴らす虹夏さん。

その音は喜多さんの言う通り「ヴツ、ヴツ！」と人間が腹パンされた時のような音にも聞こえる。キャリーバッグだからこんな音になってんのかね？

つうか後藤さんどこ行つた？ 十メートル以内にいるのは気配で分かるけど、正確な位置まで掴めん。最近気配消すの上手くなつたな。

まさか透明になってたりは……さすがにしないか。いくら人間辞めてもそこまではな。……ないよね？

それから虹夏さんはあらかじめバッグから出していた物をレジヤーシートの上に置いていく。

「あとは物販も少しだけ持つてきたよ」

「あつ 結束バンド普通に売る事にしたんですね」

「原価率いいからつて優人くんが……」

「売れそうな物は売る。例えそれがちよつとアレなやつでもだ。それにどちらにせよ需要があると判断したらファンは買つてくれるからな。メンバーカラーを模した結束バンドなら購買意欲も高まるはず。高まればいいな。高まつてくれるかな？」

「最後でちよつと自信なくさないでよ」

だつてよく見たらただの結束バンドだしこれ。いやよく見なくてもただの結束バンドだわ。

「私は投げ銭箱作つてきた！」

「こいつこつこう事だけは準備いいな……」

「まあ一応は必要な物でもありますし、設置するだけしときましよう」

『投げ銭してね♡』と書かれた箱を目キラキラさせながら見せてくるリョウさん。絶対ハート書く時何も思ってたよこの人。お金の事しか考えてないよこの人。

そのままりョウさんはスケッチブックを取り出してこれ見よがしに俺達の前へ出てきた。

「あと結束バンドのマスコットキャラクター作ってきた」

「えっ、何か死にかけだけど……」

描かれているのは結束バンドのマスコットキャラクターだから名前はけつばんちゃんと言うそうなの。

なんか謎の着ぐるみ感溢れる生物が結束バンドを首に巻いているのだが、その表情は今にも死にそうなのほどやつれている。というか普通に「餓死する……」とか台詞に書いてある。あれ、マスコットキャラクターって喋るもんだっけ？

「投げ銭一万円貯まるごとに餌が与えられて元気になってく設定」

「トウイッターで最近よく見るやつ！」

「これ結束バンドのイメージがマイナスになる可能性ありません？」

金にがめついバンドって思われるかもしれないよこれ。「シャトーブリアンうめ〜」とか台詞のせいで印象最悪なんだけど。

「こういうのはダメっ。あたしがちゃんと可愛い感じに直しておくから一旦このキャラはお蔵入り!」

「私のけつばんが……」

「絶対愛着持っていないでしょうがアンタ。つーかいい加減後藤さんはどこ行」

そうやって探そうと周囲を見渡した時。

どこからともなくこちらに近づいてくる影があった。

「うえええええな s b ヴ j b v j s j d w みんなやって d の s ん s 応援に来 d m ヴ おえ
じょ j v な s」

「なん……だと……!?!」

「今日のライブ終わったあああああー!!」

妖怪キクリン襲来。一升瓶を片手に予測不能回避不可能の災厄がやってきた。

「ちくしょう何でバレた!? SNSでやるとは呟いたけど常に泥酔してるきくり姐さん

が見るはずもないのに!!」

「いや〜結束バンドがライブやるって先輩から聞いたからさ〜!」

同時にスマホの通知が鳴る。見ると店長から『うちに居るのが耐えられなくてお前ら
を売った。すまん……』と謝罪も一緒に送られてきた。

まだ審査待ちとはいえ少しでも知名度広げようとしてる大事な時期だつてのにこんな簡単に俺らを売ったのかあの店長。何てことしてくれてんだ。

「でも箱でのライブかと思つたけど路上ライブか。打ち上げねーなこりゃ。せつかくただ飯にありつけると思つたのにい」

「……きくり姐さん、それつつまり飯さえ渡せば帰るつて事ですか?」

「お酒もね〜!」

「未成年だから買えねえよ詰んだちくしょうツ!!」

ハイエナ精神しかねえのかこの酔っ払い。

しかし野放しにしてしまうと却って周囲に絡みに行かないか心配だな……。いつそここに繋ぎとめて監視しておくのが得策か? 何この究極の二択。超迷惑。

「虹夏さん達はライブの準備してください。俺は呼び込みときくり姐さんの足止めし

とくんで今のうちに早く！」

「何かそれ死亡フラグ立ってない!? でもありがとつ、そこは任せた！」

「ごめんね優人君！」

「グッドラック」

そんな訳で準備を始める虹夏さん達から少し離れたところにきくり姐さんを連れていく。

……ん？ 後藤さんの気配が離れた？ 見たところ周りに隠れられる場所はないし………まさかキャリーバッグの中なんて事はないよな。いやけどさつき虹夏さんがバストラの代わりに鳴らした時人間みたいな声したような……。

「……まあいいか。あとは虹夏さん達でどうにかするだろ」

「ん〜どしたんゆうきゆん？ 独り言なんて呟いてないで私と喋ろうぜ〜！」

「今から呼び込みすんだから少しは黙っててくれませんかね!? 酔っ払い連れて声かけるのリスクでしかねえんだからな!？」

「うい〜まあまあそう言わずにさ〜。私だつて邪魔しにきた訳じゃないんだしそこら辺は弁えてるよ〜ん!!」

弁えてる人は大ボリユームで話さないんすよ。既にもう悪目立ちしつつあるんすよ

分かってんのか。

「はあ……きくり姐さん、アンタ容姿は良いし少しだけ黙っててくれりや集客に繋がってプラスに働く可能性あるんだからちよつとは協力してください。報酬として牛丼の特盛くらいは奢りますから」

「マジで!? きやつほうゆうきゅん愛してるう!! やっぱ持つべきものは優しい年下男子だね〜! 君の愛情が私を救うぜ!!」

「アンタにあるのは苦情だよ」

酒臭えからくつつかないでほしい。夜の駅前で年上の酔っ払い女性に抱き着かれてるシチュエーションとかちよつとイケない匂いがぶんぶんしま……っていやマジで臭えな!!

あとどこからともなく視線が痛い! 主にライブの準備してる方面からとんでもない威圧感と視線ぶつけられてるような気がする!!

何とかきくり姐さんを引っぺがし黙らないと報酬なしと言ったらちやんと口を閉じた。

その間に軽く呼び込みをしつつ虹夏さん達の方を何回か確認しておく。

十分もすれば準備も進み、その雰囲気と空気を感取ったのか周囲には自然と人が集

まっけてきていた。

……あ、キャリーバッグの中から後藤さん出てきた。やっぱりあの中にいたのね。バカなのか？ バカだった。

何やら喜多さんと話しているようだが当然こちらまで声は聞こえない。表情からして後藤さんなりにアドバイスしてるみたいだけど、こっから見てもキャリーバッグの中にいるせいで説得力の欠片も感じねえ。

何となく見てたら後藤さんと目が合った。うわあ……ゾンビみたいにくっちに手伸ばしてきてる……。おそらく助けを求めているか近くに寄ってこいという意味だろうけど、よく俺がいるとこすぐに見付けたな。

えっと、空いてるスペースはまだありそうか。

「きくり姐さん、あっちならまだ前も空いてるんでそこに行きましようか。呼び込みはもう終わったんで喋ってもいいですよ。もちろん迷惑かけない程度に」
「ぶはあくつ、黙ってるあいだ酒も飲めないからしんどかった〜!」

「減点方式だから何かやらかす度に牛丼の量ランクダウンさせますね」

「今から一滴も飲めないじゃんそれ!」

「やらかすの分かってて飲んでたのかアンタ!」

はいもう俺に迷惑かけたので特盛から大盛にランクダウンね。

うぎやくと喚くキクリン怪獣の首根っこを掴みながら前の空いてるスペースへと向かう。酒臭いのが原因なのかは分からないが、俺達が前に行くほど自然と人が避けていったのはきつと気のせいじゃないだろう。

演者と観客の距離感は箱の時よりも近く、およそ一〜二メートルくらいしか離れていない。

観客は扇形で演者を囲むように集まり、一人一人が極力行人の迷惑にならないよう暗黙のルールの中で路上ライブという領域を展開している。

箱とは違う雰囲気というのもあり、結束バンド……特に喜多さんはいつもより表情が強張っている様子だ。

またも後藤さんと目が合う。今度はお互い意思疎通をするように。……なら特に心配はいらなそうだな。

「ゆうきゅん」

「何ですか、酒飲むのは禁止d」

「ちゃんと見ててあげなよお」

「……分かってますよ」

というかみんな立って見てるのに一人だけ地べた座って見てんじやないよ。この個人が持つてる世界があまりにも強すぎて着いていけねえ。

ため息一つ零しながら前を見ると、今度は喜多さんと目が合った。

いつもより近くて、箱とは違いステージの上に立つてる訳でもないから視線もほぼ同じ。そのせいか今の彼女を演者というよりかは等身大の女の子として見る事ができた。

初めての路上ライブ、そもそもライブ自体が久しぶり、以前まで抱えていた不安と悩み、克服していたと思っていたのがまたじわじわとぶり返してきたのかもしれない。

そういえば新宿でしごかれてた時、ライブ前にヨヨさんが言ってたな。プロでさえライブが怖くなるなんて事はないはず。上を目指してバンド活動が続けていくなら絶対にその先も緊張し続ける。だからその不安を少しでも払拭するために練習するのだと。

別にそれが全てだとは思わないが、納得できる部分も多々あった。

つまりその理論で言うなら、きつと問題はないと俺は思う。

練習だつてしてきた。悩みと向き合い多少なりとも強くなった。そういうのを身近で見ってきたから、俺は真つ直ぐと喜多さんを見つめた。

後藤さんとのアイコンタクトで大丈夫という確信もあった。

だから俺のした事はとてもシンプルだ。

強張っていた喜多さんに向けて、大丈夫だという意志を込めて軽く頷き微笑む。

ライブを楽しみにしてるファンと同じような気持ちで、届ける。

彼女から、強く頷く動作があつた。

「あとはグッズ買いに来る人がいないか見つっライブを楽しむだけですな」

「さすがだね、ゆうきゆん。もう立派なサポーターだ」

「全然ですよ。今回俺は何もしてません。そこはメンバーが補ってくれたんで、俺は何も気負う必要ないぞって伝えただけです」

「そういう細かいところをフォローできるようになってると、ここがさすがだって言ってるんだけどねえ」

「こんなのは近くで関わってる人なら誰だってできて当然でしょうよ。」

「きくり姐さんの場合はフォロワー入れる前に自分から喜んで全部壊していきそうかどうか。」

「全員の準備が終え、それぞれスタンバイに入る。」

「第一声は我らがギターボーカルだった。」

「みなさんこんばんはー！ 私達は結束バンドです。よろしく願いしまーす！ それ

ではさっそくですが一曲目聴いてください！『ギターと孤独と蒼い惑星』
初の路上ライブが始まる。

端的に言えば路上ライブは成功を収めた。

最初は緊張していた喜多さんもしぎ始まってしまえば何の心配もいらなかったと思ってしまうほど歌もギターもよくできていた。というか歌めっちゃ良かったてこつちも驚いた。レコーディングの時の歌声とほぼ変わらないんじゃないかあれ。

他は言わずもがな、虹夏さんとリョウさんはリズム隊としてその実力を遺憾なく発揮し、後藤さんも路上ライブにしてはちゃんとやれていたと思う。

それは二曲目三曲目になっていくにつれて緊張が解れてきたのか、みんなの音もどんどん良くなっていった。

途中から客足も増え、無料になってしまいが投げ銭箱にもお金を入れてくれる人が何人かいて貴重な収益を得たのは大きい。投げ銭箱にお金が入られる度リョウさんがチラチラ箱の方を見ていたのが一番の無料だけど。

周囲からはこんな声もあった。

「あーこの曲好きだわ」

「ね〜声も良いね〜」

「あんまり聞かない歌詞だけど所々刺さる〜」

「バンドやってた頃思い出すな〜」

「うん、あの子達には頑張つてほしいねえ」

「結束バンドか、ダジャレみたいな名前でおもしろいけど聴いた事ある?」

「ない。こんな名前のバンドあつたら逆にすぐ覚えるっしょ。けど気に入つたしCDとか売つてるみたいだから買つてこうぜ」

とまあ、こんな感じでおおよそ好印象であつた。

何故かきくり姐さんに「ゆうきゅん嬉しいのは分かるけど尻尾ぶんぶん振りすぎだつて〜」とか言われたけど無視した。人間に尻尾は生えないからきつと酔つてて幻覚を見ただけだろう。

ライブが終わると見ていた客から盛大な拍手が送られた。ライブ中にもいくつかグッズが売れ、売り上げも初の路上ライブにしては好調。

途中で警察などに注意される事もなく、つくづく下北はバンドマンにとってありがたい場所だという事も再認識した。

「今日のライブは終了です。ありがとうございますー頂きましたー結束バンドでした〜!」

「これから毎週ここでライブするんでよろしくね〜！」

ライブが終われば自然と人も散っていくもの。

それぞれ感想を話しながら帰っていく観客を見つめていると、誰かと目が合った。後藤さんと喜多さんと合わせると今日で三人目。しかしその人物は結束バンドの誰かでもなく、関係者でもない。

観客側に突っ立っていた女性は、見た事のあるツーサイドアップで首に包帯、天使の羽が生えた鞆を背負いこちらを見ていた。

つーかめちやくちや因縁のある相手だった。そう、俺達をボロクソに言ってくれたばいずん何某である。

幸い結束バンドの面々は片付けの最中で向こうに気付いていない。向こうは向こうで俺と目が合った途端、ビクツと体を跳ねさせ慌てるように背を向け去っていった。

……まあ突つかかってくる様子もなかったし別にいいか。さて、そんな事より俺もみんなが片付けてる間に物販を売り捌いて貢献していくかね。

「や〜みんな良かったよ〜」

「あ、廣井さん、ありがとうございます！」

割かし順調にグッズを売っていると、ようやくライブが終わって酒が飲めるように

「……トイレで着替えてきます」

「ああ、うん。あたし達ここで待ってるね……」

トイレで私服に着替え、汚れたパーカーを水道でなるべく洗い流してから袋に入れて臭いがしないよう何重にも袋を重ねて封印。

駅前に戻り後藤さん達と合流。俺が着替えてる内に報酬なしと言われたのがショックだったのか、一升瓶を空になるまで飲み路上で無様に寝ているきくり姐さんを一瞥してから放置……する訳にもいかず、知人という事を伏せて交番に預けてから俺達は打ち上げにファミレスまで来ていた。

「いや、初めてだったけど上手くいってよかったね」

「投げ銭五千円になった。優人、グッズも合わせていくら？」

「グッズとCDもそれなりに売れたんで全部合計すると一万いくかいかないかくらいですかね」

「なるほど」

「おいこらちよつと待て。何で自分の財布に投げ銭入れてんだ？」

「？ 私が作ってきたからだけど」

「虹夏さん拘束」

「よしてきた」

「殺生な……」

どの口が言ってたんだこの野郎。

「それにしてもお客さん結構見てくれてましたね。立ち止まってくれた人も多かったですしー」

「あつゆうくん、ポテト……」

「あいよ。俺のやるからそれで我慢しろ。そういや遠くで聴いてくれてた人もいたもんな」

控えめにねだってくる後藤さんの鉄板プレートの上に自分のポテトを全部置きつつ答える。

「新曲が良かったのかしら！」

「郁代の声がよく通ってたからじゃない？」

「それは俺も同感です！ 喜多さんの歌声すげえ良かったもん！ めちゃくちゃ成長感
じたよあれ！ ちよー最高だった！」

「優人くん尻尾振りすぎ。喜んでるのは伝わってるからもうちよつと落ち着こ」

もし俺が無関係な人の立場だったとしても立ち止まって聴いてた自信ある。

それでグッズとCD破産するまで買ってたと思う。ごめんちよつと盛った破産寸前
まで買ってたと思う。

「えっ、いやあ……そんな……ふふっ、名前呼びやめてくださいよ」

おうおう、照れちやって可愛いとこあんじゃんか喜多さん！

てつきり頑張ったんだから当然ですって自信持った態度で来ると思った。

「郁代」

「やめてくださいってばあ」

褒められてるからか名前呼びなのに喜多さんがいつもより柔らかい反応になつて
るだ……？

よし、今の流れなら俺もノリでいけるか!?

「かつこよかったぜ郁y」

「やめてって言ったわよね？」

「マジでごめんなさい産まれてきてごめんなさい」

「まったくもうっ……」

近い近い、近いです。あと照れて顔赤くなってるのか怒って顔赤くなってるのか判別できねえ。

ただ怖いのは確か。マジ調子乗ってすいませんでした。

怯えている俺をよそに、後藤さんは俺のポテトを満足そうに食べていた。

食への集中力すげえな。

あと余談ではあるが、交番に預けていたきくり姐さんは志麻さんにブチギレられながら連れて帰られたそう。

93. コミュニ症にとっては出会いの季節がもう苦痛

時が流れるのも早いもので四月になった。

学生にとっては大きなイベント事の一つでもあり、進級したり先輩になったり教室が変わったりラジバンダリである。

桜の花びらがどこからともなく舞ってくるのを眺めながら幼馴染と登校中。

俺の名前は清水優人。

髪は茶色、身長は推定168cm、誕生日12月21日、下北沢高校に通っているが地元は金沢八景で通学に二時間を要しているというのを除けばどこにでもいる平凡な高校生だ。

ちなみに今日から進級して高校二年生です。

春ですよ皆さん、出会いと別れの季節ですよ！ まあ二年や三年に知り合いとかいなかったから特に別れとかなかったけどね！

隣を歩いてる幼馴染も何とか進級する事ができ、今日も共に通学ううなのだが。

「(クラス替え……人間関係のリセット……陰キャのトラウマ学校イベント第三位……いやでも前のクラスじゃ人間関係築いてなかったし失うものは何もなかったからダメージはゼロ……それはそれでどうなんだ後藤ひとりっ!」

といった感じで朝からぶつぶつ独り言を呟いては頭を抱えているのをかれこれ二時間以上繰り返している。

二時間以上というのは俺がこの子の家に迎えに行くも、ずっとトイレに引きこもって三十分くらい無駄に浪費したからだ。早めに迎えに行つて正解だった

俺の幼馴染、後藤ひとりは度を越したコミュ症陰キャである。

基本的に他人よりも自分を下の位置に置き、超絶ネガティブ思考と拗らせた性格が相まって現在進行形で社会不適合者に着々と足を踏み入れつつある大変困った女の子なのだ。あと時々人間やめる。

成績も悪く運動神経も壊滅的、本人は頑張っているけれど大体何をやらせても下の下でもはや可哀そうと思つてしまふほど。

そんな彼女にもたった一つだけ得意なものがある。それがギターだ。理由としては……えく……あー、うん……よし、はい以上。もう説明終わり、しんどい。

駅から歩いてると俺達みたいに慣れた足取りで通学路を歩く在校生もいる中、少しそ

全力でガッツポーズしてた。

まあこれなら俺もわざわざ教室に覗きに行く手間も省けるしちよいどいいか。そうこうしてるうちに他の生徒も掲示板に集まってきたから同じクラスの名前一覧を見る暇もなく、俺は人混みで暴走しないよう後藤さんの手を引いてそこを後にした。

「きゃああああー!! なにそれ!？」

教室に行つたらまず叫ばれた。俺ではなく後藤さんが。

そして声の主は喜多さんだった。あれ、この教室にいるって事はまさかだったりする……?」

「あつえつ喜多ちゃん!？」

「あつそう! 同じクラスなのよ私達!」

やっぱりね。

仲良い友達がこつちにいるからここの教室来てるだけって可能性も考えたけど、喜多さんの人気度を考えたらむしろ友達の方がここに来る可能性高いもんな。

「それにしてもひとりちゃんその格好は何!？」

「あつえつと」

「何かの罰ゲーム!? そうよね!」

「あつ……えつ!」

喜多さんが指差して言ったのは後藤さんの服装……というか装備についてだ。

今の後藤さんはかつて大滑りした服装を少しだけ改善して改めて着てきた訳である。ヘアバンドにサングラス、無駄に長いネックレスとトートバッグにバンドの缶バッジを全面に付け、両腕にはラバーバンドをこれでもかと大量に装着し、ピンクジャージの下には禍々しいロゴT……ではなくアキレス腱ドロスのロゴTを着ているのだ。

「い、いや去年はこれで話のきつかけを作ろうとしたんですけど上手くいかなかったの
で、今年ドメジャーバンドにしてみたんですけど……」

「改善すべきはそこじゃないわ! 優人君もここまで一緒に登校してきたなら何で止め
なかったの!」

「これは後藤さんなりに頑張った結果だ。成功しようが失敗しようが俺はこの子の自主
性を重んじているのだよ。マイナーバンドからメジャーバンドに変えただけでも立派
な成長って訳」

「ちなみにこの作戦成功するって思った?」

「いや全然」

「えっ?!?!」

有名バンドに変えたら話しかけてもらえるってところがもうダメだね。結局は大事などこを他力本願にしているから運が絡むし望み薄だし。

そーういや登校中にめちやくちや視線感じたのってこれが原因か。くそつ、後藤さんの奇行に慣れすぎてもはや俺も感覚が麻痺してきたかもしれない。

見事に装備の全てを喜多さんの手によつて外され席についた俺達。

ちなみに席は俺の左斜め前が喜多さん、その後ろ……つまり俺の左隣が後藤さんという事になつている。喜多後藤清水と頭文字が近いからというのもあるだろうが、結構奇跡的な席順なんじゃないかこれ。前と右とで後藤さんをフォローできる布陣だぜ。

「それにしても同じクラスになれて良かったわ！ クラスメイトとしてもよろしくねひとりちゃん！ もちろん優人君も連続だけどよろしく！」

「おーう」

「あつき、喜多ちゃ……」

掲示板とこでちゃんとクラスの名前見とけばよかつたな〜と思いつながら左を見ると、後藤さんが喜多さんに何か返事をしようと話しかける素振りを見せていた。

俺以外にも話せる人が近くにいるというのは確かに彼女にとってもありがたい事だ。

「ん？ どうしたの？」

ただ喜多さんが後藤さんとは真逆の立ち位置で人気もあり陽キャの友人にすぐ囲まれるのを除けばの話だが。

「これが陽の世界……迂闊に近づいたら死ぬ……ゆうくうくん……」

「何の話？」

「……悪い、後藤さん。俺もちよつと席外すわ」

「え」

「同じ教室にはいるから安心しろ。他にも去年と同じクラスになったヤツらがいるから挨拶に行くだけだよ」

「わ、私のオアシスがあ……」

「許せサスケ、また今度だ。」

教室。窓側にて。

「またお前らと同じクラスになるとはな。喜多さんともまた一緒だし先生何か考えてんのかね？」

「今年の担任去年俺らの担任してた人らしいぞ。特別仲良いヤツは同じにしてんのかもな。あと清水死ね」

「あの先生女性なのにノリ良いし接しやすから助かるわ。あと清水カス」

「見た感じこのクラスもみんな仲良い部類の人達が集められてるみたいだよ。あと清水クズ」

「……一人でいる生徒が見当たらないしました無駄に団結力強そうな一年になりそうだね。あと清水地獄落ちろ」

「ねえ進級早々俺つてばお前らに何かしましたかね？ 語尾みたいに暴言吐いてくるじゃん」

なんと前のクラスで一番仲が良かった男子の田中、佐藤、高橋、鈴木とも同じクラスになったのである。

いやそれはいいとして何でいきなりこんな悪口言われなきやいかんのよ。喧嘩か？
買うよ？

「喜多さんと一緒と喜んでたら余計なお前まで付いてきたんだぞ。そりゃキレるだろ。」

何なのお前、席までまた近いとかつ。しかも隣には幼馴染まで侍らせてやがるし！ 教室に入った時点で他の男子に飛び掛かられてないだけまだマシと思えよクソカスが」

「おい待てやそれ根本的に俺悪くねえじゃん！ 同じクラスになったのもたまたまだし席が近いのも苗字の五十音順だから仕方ないだろ!? ……つうか言われてみればなんか他の男子からめちやくちや変な視線感じるんだけど。誰かこの原因知ってるヤツ」

「他のクラスだった男子だね。清水は去年の文化祭でハマして有名になったでしょ。女子からの誤解は解けてるし、時間も経ってるから男子も大体は事情分かってる人も多いだろうけど、それとはまた別の理由だね」

「別の理由？」

「あれが噂のクソ誑し野郎か人気者の喜多さんやその他の気に入った女は老いも若きも見境なくかつさらってヤツが通った後の道には草の根一本も残さない人間の最底辺清水優人かつて。要は嫉妬だね」

「ぶふっ!! 全体的に尾ひれが付きすぎてるツ!! じゃねえそもそも尾ひれも何も噂の何一つが合ってねえじゃねえか！ 完全な言い掛かりだ！ 断固抗議させてもらおう!! ……マジでそんな理由で飛び掛かれてたかもしれないの俺？」

「だから最初に清水へ話しかけにいった喜多さんに感謝しなよ。あれがなかったら今頃見知らぬ男子達にタコ殴りされてたかもしれないし」

初対面の人に暴力なんざ言語道断だと思うんですけど。

何なの、この学校の男子達はそんなに女の子と接点がないの。男子校上がりじゃないんだから少なくとも俺なんかよりそれなりの青春送ってきたんじゃないのか。てか喜多さんマジありがとう。多分無自覚なんだろうけども。

「まあ今となつてはそんな気にする事もないと思うぞ。喜多さんと席が近い以上むやみに闇討ちされる事もないだろ」

「現代の学校の教室で闇討ちなんて単語聞くとは思つてなかつたわ」

「変に仕掛けたら喜多さん達からの印象もマイナスになりかねんからな。殺るなら清水が一人になったところを狙うべきだ」

「となると休み時間のトイレ、昼休みのトイレ、もしくは放課後どこかに連れ去るのも手」

「それが一番怪しまれずに殺れそうだな。他に良い案あるヤツは？」

あれ、何か流れ変わってませんか？ 友人達がいきなり俺の暗殺計画の打ち合わせ始めたんですけど。

「というのは冗談で」

「ほんとか？　ほんとに冗談なんだな？　信じてもいいんだな？　もし嘘だったら最低でも田中だけは道連れにするぞ」

「それは別にいいよ」

「清水の俺への殺意はまだ分かるけどお前ら簡単に仲間売るの早すぎない？」

「まあさつきも言った通りこのクラスは仲の良い生徒が集められてるし、男子の清水に對する嫉妬心さえ除けば基本善人しかいないと思うよ。つまりは今年もノリの良いクラスになりそうって事」

「何もないまま仲良くなれるといいなあ〜……」

軽い挨拶のつもりが春休み後もあつてか結構話し込んでしまい、もうすぐでHRの間だから自分の席へ戻る事にした。

「あ、おかえりなさい優人君。楽しそうに喋ってたわね！」

「ある意味戦々恐々したけどな……」

「そうなの？」

これからこのクラスの男子達と上手くやっていきたいところだが、ハードル高すぎてちよつと諦めかけてる。

いつその事拳と拳でぶつかり合えば分かり合えるか？ 昨日の敵は今日の友とか言う。敵ってなんだよクラスメイトでしょうが。

「あつゆうくん……へへっ、ど、どう？ 私一人でもこの空間に耐えられたよ……」
「おおそうかーえらいえらい」

自分の席に座ってるだけなのにそれを耐えれたと思ってる時点で敗者だぞ後藤さんや。

喜多さんの周りに集まっていた女子も各々の場所へ戻っている。何だかんだ先生が来る前にはみんな席に座つてるところを見ると真面目なんだな。

そういや後藤さんの後ろの席の人はまだ来てないのか。誰なんだろ。

と、無駄に時間潰しの思考に耽っていると、

「喜多く今年も同じクラスじゃん。腐れ縁だね〜」
「あ、さつーおはようっ。これで五年連続ね〜」

その人はやってきた。

何なら超知ってる人だった。

「お、清水も一緒か。おいっすー」

「おいっす。こっちは二年連続だな」

「フアツ!？」

後藤さん急に大きな声出さないでほしい。ちよつと引く。

それにしても何というか、奇妙な縁だ。後藤さんを囲むように俺の知り合いが近い。まあこっちの方が俺としてもありがたいけど。

「ウチとしてはいい加減喜多の顔は見飽きてんだけどね。清水はキャラ濃すぎて一年で飽きてたのにな。二人してウチのストーカーすんなしい」

「もく真似してるのはそっちでしょ」

「あとさっさんその発言は主に俺の命が危険に脅かされるからやめようか」

ほんとやめろ。女子の気軽な冤罪発言が男を社会から抹殺してしまうんだぞ。

女子高生怖い。

「てかこの人大丈夫？」

「ひとりちゃん!?! 何で息止めてるの!?!」

「陽キヤの会話に耐えられなくて気配消そうとしてたんだろ」

「優人君は冷静に分析しないで！」

後藤さんの生懸レポートは日々更新されていくのだよ。

観察と分析は大事よ。後藤博士号また取得しないなら必須だから精進したまえ。

「あつひとりちゃん紹介するわね！　この子は佐々木次子、さつっーよ。中学から一緒に、前のクラスで優人君とも一緒だったの！」

「ども〜」

「あつはい……」

「それでこっちは私と同じバンドの」

「知ってる知ってる。去年の文化祭の後藤さんっしょ。清水が体張って守ってたもんね」

「うっ……頭が痛いッ。当時の奇異なモノを見る視線が俺を蝕んでくるう！」

「こっちはこっちで何だかんだダメ〜ジ残ってたのね」

ほぼ全校生徒からジロジロ見られるのって結構怖いんだぞ。何思われてるか分かったもんじゃねえし。

「あつえつと……すっ好きなバン」

「はいみんなおはよう。さっそくHR始めるぞー」

後藤さんが何か言いかけたところで先生が入ってきた。

声小さくてさっさんに聞こえてないとこまで含めて不憫だ。

先生が来た事でHR、最初の授業というよりは新学期恒例の自己紹介タイムが始まった。

五十音順でそれぞれが名前やら趣味やら特技やら部活やらを言っている。まあこういうのは無難な事を言いつつ共通の趣味を持っている人がいれば仲良くなれるきっかけ作りみたいなどこあるし、大げさに変な事をしなけりゃ何も問題は起こらない。

そう、こと彼女の異常性を除けば。

俺の隣で何やらメモを見ながら不穏にニヤケている後藤さん。あのメモはおそらく自己紹介的な何かだろう。そしてそれは彼女が作成した時点で爆弾だ。どうしよう、誰かの自己紹介中に話しかけるのは失礼だから変に声かけねえ。

次の番の人が立ち上がる。

「喜多郁代です！ 気軽に喜多ちゃんって呼んでください！ 趣味はイソスタなので映えスポットに行く時は私も誘ってね！ あとはもちろんみんな知ってると思うけど、結束バンドっていうバンドでギターボーカルしてます。動画サイトにMVあげてるから

みんな見てね！　そして拡散すること！」
さすが喜多さんだ。

陽気な自己紹介でクラスの空気を和らげつつバンドの紹介までしつかりこなしている。ムードメーカーってまさにこういう事を言うのかな。

「ちなみに後ろの後藤さんがリードギターですつ。すつごく上手だから一度は生で見ないと損するわよ〜！」

しかも後藤さんのために少しでも言いやすいよう場をあつためただと……!?!
何この陽キャ、その場を支配する能力でも持つてんのか。

「それでこつちの清水君が私達のバンドをいつも支えてくれてるサポーター役なの！
みんなも知ってると思うけど去年の文化祭で後藤さんを体張つて守つたのが彼よ！
凄く良い人だからそこら辺は男子も誤解しないであげてね！」
ありがとう喜多さん……その言葉のおかげで男子からの視線がより一層鋭くなつたよ。

こいつら都合の悪い事は聞き流して都合の良い事だけを勝手に自分の良いように解釈するからな。違う意味で場があつたまったよこんちくしょう。

しかし、俺の不安も束の間。
ヤツが立ち上がった。

「あつ……」

我が幼馴染である。

「後藤さんの事知りた〜い!」

やめれ、煽るんじゃない喜多さん。

その優しさは時に陰キヤを追い詰めるものだぞ。

「ごっ 後藤ひとりです……あだ名はぼつちです……。な、名前の通りリアルぼつちです……へっ。あつ、出身は神奈川です。中学の人がいない高校が良かったので二時間かけて通学してます……。ま、毎朝寝不足でこの学校にしなきゃ良かったって後悔してます……。あつでも幼馴染のゆうくんがいるから今も頑張ってます……」

おいそれ地味に俺にも浸食ダメージ来るからやめろ。

田中辺りから殺意のこもった視線向けられてるから。

「けつ欠点は人の目を見れない事、言葉の最初に「あつ」って言っちゃうところです……。つてそつそこ笑うな……あつえつと……シバくぞツ!!!」

「(何言ってるのひとりちゃん!?)」

陰キヤは声量が安定しない。生態レポートにも書いてあるぞ喜多さん。

それはそれとして俺もまさかこんなこと言うとは思ってなかった。いらんところで一番の声量出すとは思わんやん。

「あつうつ……モノボケやります！ 武田信玄の軍配！」

いったいどこから持ち出してきたのか、バカが兜を被りギターを逆さに持つて何かしだした。

そうだった。後藤さんは後藤さんで喜多さんとは真逆の意味でその場を支配する能力持つてるんだつた。あんだけあつたまつた教室が一気に冷えだしたぞ。すげえ、すげえよ後藤さん。一生参考にしないぜその姿勢！

「はいありがとうもう座つていいぞ」

「あつはい……」

「次」

さすが先生、あの後藤さんにも全然うろたえず完全スルーした。

「佐々木次子です。ヒップホップやってます。よろしく」

あの後によく普通の自己紹介できるなさっさん。

いやそういう人かさっさんって。

「あとでコミュニケーションについて三人で勉強しましょうね……」

「あっはい……」

隣では陰キヤが陽キヤにビビっていた。それはいつもか。つうか三人って俺まで入れられてる？

あとは佐藤とか真田とか沢渡とかその辺の人が自己紹介を終え、いよいよ俺の番となる。

といつても言う事は去年とそんなに変わらない……事もないか。色々変わったところはあるもんな。

後藤さんと違って普通に立ち上がって口を開く。

「えー清水優人です。趣味はマンガやアニメ鑑賞、最近はギター始めました。喜多さん

が言った通り結束バンドのサポートやっています。さっきやらかしてた隣のピンクは幼馴染ですけど基本は大人しいんで害はありません。俺共々仲良くしてくれると嬉しいっす」

「あーい座つていいぞ〜」

その時、どこからかこんな声が聞こえた。

「(清水死すべし……)」

「(清水殺すべし……)」

「(誠死ね……)」

「(リトさんなら許したのに……)」

後半何かおかしいような気もするが大体俺に向けられた呪詛だった。

はっはくん、今年も愉快的なクラスになりそうですわ。休み時間になったらさっそくりアル鬼ごっこが始まりそうな匂いがぶんぶんするぜ。

放課後。

意外にも何も追いかけられなかった。

始業式の日には基本的に授業はなく部活もやっていない場合は午前までとなる。

故に今日は昼前に学校が終わった。

喜多さんの言葉のおかげカリアル鬼ごっこになる事もなく、おまけに喜多さんと後藤さんとやったコミュニケーションの勉強も実を結ぶ事もなく平和な放課後を迎えた訳だ。やっぱ平和が一番だなー！

「んじゃこのままスターリーに行くか」

「あっうん」

「そうだ後藤」

「ひっ!? さっささささん!?!」

さ多いな。

「さつき言い忘れてたけど去年のギターかつこよかったよ。清水と沈んだダイブの件もそうだけど、あれが一番印象に残ってたから後藤のこと覚えてたんだよね」

「地味に俺巻き込むのやめれ」

「それに清水もしょっちゅう自慢気にギター弾いてる時の後藤の話してくるしそりや覚

えるよねって」

「えっ？ つ？ つ？」

「おいやめろっ」

「だから学校も頑張つて来なね。そんじゃ〜」

あのマイペースわかめ女子め……フォローすんのかからかってきてんのかどつちなんだ……。

「あつあれ？ 良い人……？」

「良い人だけど底が見えないから侮れんのよなあ。まあからかい上手の佐々木さんって覚えとけばいいよ」

「からかつ……えっ？」

「もうっさっつーがからかうのは優人君だけでしょ」

「何も嬉しくねえなその情報！」

いや確かに喜多さんとは対等に話してるしからかうとはまた違うか。

え、マジで俺だけ？ よし、近いうち後藤さんにターゲット変更させよう。

「みんな〜クラスのグループチャット作ったから入ってね〜！」

さすがが女子、行動早いな。

「えっあつ……私も入っていいのかな……？」

「ほら、ひとりちゃんも早く！」

「ちゃんとみんなって言ってたろ。そういうこつた」

「う、うんっ」

まあ、なんだ。

後藤さんがこのクラスのみんなと馴染めるように俺も頑張りますかね。

男子共とも馴染めるかなあ。

94. 事前情報の確認は徹底的にしろ

某日の夜。下北沢駅から歩いて撤退中なのは俺と結束バンド御一行。

今日も路上ライブの帰りであった。

既に数回ほどやってているが一度も注意される事なく無事に終わり、今となつては客足もどんどん増えてきている。

ノルマ代なしでライブできるといふのもあつて虹夏さん達もモチベは高く、場数を踏む度に度胸がついてるのかそれは演奏にも歌声にも表れていた。

ちなみに後藤さんは前ほど人前であがらなくなつてきたものの、ライブが終われば再起不能となりこうして毎回俺がおんぶしているという訳だ。

最初はスライムみたいに溶けた後藤さんをキャリーバッグの中に詰めて虹夏さんが運ぼうとしていたが、さすがに人一人分の重さを運ばせるのは力仕事になるので俺が引き受けた。

するとあら不思議、このスライムは瞬く間に人間の姿に戻り俺におんぶをするようねだつてきたのだ。

人前でおんぶは抵抗もあつたけど、よくよく考えたら人をキャリアバッグの中に詰めて運ぶ方がよっぽどヤバイのではとなりこうなつた。致し方ないのである。俺だって高校生なのに職質だか補導だかされたくないもの。

とまあこんな感じでわがまま姫をおぶっていると、今まで喜多さんと会話していた虹夏さんが俺に声をかけてきた。

「ねえねえ優人くんつてば」

「あ、はい。何でしょう？」

「あたしつて地味だよね」

「どこのどいつですか虹夏さんにそんな無礼を言ったヤツは俺が地獄に落として生き返らせてからまた地獄に落としてやりますよ俺は今最凶のスタンドも背負つてる事だし何も怖くねえ!!」

「あたしが自分でそう言ったんだけど。優人くんはあたしを地獄に落とすの？」

「何言つてんですか俺が死ねば済む話ですよ」

「判断が早すぎる落ち着いてぼっちちゃんの手を使って自分で首絞めるのやめなつてば!?!」

即座に止めてくる虹夏さんの判断力も相当早いよ。これには鱗滝さんもっこりだ。

「で、何の話です?」

「伊地知先輩が自分はドラムだから目立たないし地味だし個性ないから何かキャラ付けでも属性でも付けないとって思ってるらしいの」

「虹夏さんに個性がないとかwwwwワロスwww」

「普通に喋ってるのに草生えてるのが何故か分かるわ……」

フオカヌポウwww

「じゃあ優人くんはあたしにどんな個性あるか言える? ちなみに喜多ちゃんは絵が上手いとか地味な事言ってきたけど」

「オウフwwwいわゆるストリートな質問キタコレですねwwwおつとつとwww拙者『キタコレ』などといふネット用語がwww」

「なんか古いネットスラングを使ってるのだけは分かる」

拙者に対してそのような質問はまさに愚の骨頂ですぞwww

「虹夏さんの個性というか魅力なら最低百個から言えますよ。それでもい」

「三つくらいでいいからっ!」

そんな少なくともいいの？ もったいないなあ。

でも虹夏さん本人の要望なら応えるしかあるまいて。うーん、三つ、三つかあ……少ないけど仕方ないか。

「天使、ママ、神」

「まともなのが一つもない!? というかそれは個性なの!?!」

「めちやくちや個性でしょ。何で下北に住んでる人は虹夏さんを崇拜しないのか疑問にすら思ってます」

「優人くんに聞いたのも間違いだったつ。あたしの事全肯定しかしてこないじゃん!」

「それほどまでに虹夏さんの事が大好きという証拠ですよ。何ならレポートでも提出しましょうか!」

「……え?」

「え? どうかしまぐおえツ!? なばつなになんだよいきなり喜多さん!」

「ややこしくなるから優人君はもう喋らなくてもいいわよ♪」

「え、な」

「喋らなくていいわよ♪」

「……」

久々に出たなキタサンブラック。じゃない喜多さんブラック。出てきた原因は不明だがここは素直に黙っておいた方が良さそうですね。

アニメ三期楽しみにしてるぜキタちゃん。

俺を笑顔で黙らせてきた喜多さんは話を戻すように虹夏さんの方へ顔を向ける。

凄い、ブラック要素が一瞬で消えた。意図的に出したのかアレ。喜多さんのオーラのせいで無意識に怯え縮こまっているのか、再起不能中の後藤さんまで俺にしがみつく腕の力が少し強くなってる。分かるよ、俺も怖かった。

「本題に戻りますけど、伊地知先輩は結束バンドのリーダーじゃないですか！　ここまでやってこれたのは先輩のおかげですよ！」

「喜多ちゃん……」

「ねっ 優人君！」

「っ、っ」

喋るなど言われたのでとりあえず無言で強く頷いておく。あと親指も立ててグツジョブも。

話せない代わりに首を縦に振りまくる。

「……も、もう分かったからっ……!」

ほんとに分かってんのかと思いつつ虹夏さんの顔を見ると微かに頬が紅潮していた。うん、照れてる。これが分からせてやつか……。

「あ、優人君もう喋っていいわよ」

「うっす」

なんか知らんが許可貰ったのでやっど話せる。

なのでさっそく。

「ちなみに真面目に言うど虹夏さんがいつも付けてる大きなリボンありますよね」

「え? うん、これの事?」

「です。それも一つのチャームポイントというか、立派な個性の一つだと思えますよ。虹夏さんといえば大きなリボン、みたいな感じで。出会った時からいつもそのリボン付けてるの見てるのでそういう印象が強くなったのもありますけど。大切な物なんですよね」

「……うん、そうなんだあ。あたしの一番大事で一番大切なリボンだよっ」

おおお、眩しい笑顔ですこと。

「なら自分を地味とかもう言わないでくださいよ。虹夏さんは結束バンドのリーダーなんですから、あのマイペースわがまま娘達をちゃんとまとめてもらわないと」

「……よし、そこはリーダーのあたしに任せておいて！ 結束バンドのためにきっちりやるよお！」

うむ、機嫌も元通りになって何より。

何なら鼻歌までやっていらっしやる。まあリーダーとか先輩のおかげとか言われると嬉しくなる気持ちも分かるけど。

結束バンドとしてこれからも活動していくなら演奏以外でそれぞれの役割も大事になっってくる。

それは表舞台ではなく裏でもだ。あいにくネジが一つや二つほどぶっ飛んだような三人がいる中、それをまとめるのに虹夏さんの存在は必須。気付けばバンドのまとめ役というか、結束バンドのグッズデザインや開発も担っており、資金管理や事務関連に関しては俺も一緒にやっているからよく分かるが、まさに結束バンドにとって虹夏さんは必要不可欠なのである。

確かに先ほど彼女自身が自分を地味なのではと称していた通り、他の三人に比べると

目立つモノは持ち合わせてないかもしれないが、結束バンドの中核を担う人物として虹夏さん以上に適している人はいないだろう。

外から見ると目立つ事はほとんどないが、その内部でひとたび外れてしまうと何もかも全てが機能しなくなってしまうほど大事な歯車のような役割。

俺がサポートとして外部から支える役であるなら、虹夏さんはメンバーとしてみんなを引っ張っていく存在ってとこだ。

そう、虹夏さんにはこの問題児達をちゃんと引っ張ってもらわないと困る。俺だけの手には負えないのでね。

特に山田。あと山田に山田と山田。

と、そんな時。

「ふんふん……ん？ メールだ」

虹夏さんのスマホから通知音が鳴った。

「結束バンド宛てですか？」

「んだね。何々？」

結束バンドは一つのアドレスを共有して持っている。基本は事務などを一緒にして

いる俺と虹夏さんしか見ないのだが。

それはライブブックイングやミニイベントなどの仕事依頼がもしかしたら来るかもしれないという期待も含め、様々なSNSにこのメアドを載せていた。

いつかは来るかもしれないと微かでも希望を持って。

俺も虹夏さんのスマホを覗き込む。

メールにはこう書かれていた。

「えっと『結束バンド様、初めまして。音源聴かせていただきました。私は池袋のライブハウスでブックイングマネージャーをしております柳と申します。この度ハードでロックな結束バンドの音楽性を感じるものがあり、ぜひ当ライブへのご出演をお願いしたいと思っております。当店一押しのアーティストが出演する日です。どうかご検討よろしくお願い致します』……あん？」

普通に見ればとてもありがたいライブのブックイングだが、ある一箇所につっかかるものがあった。

「虹夏さん、これ」

「えくもしかしてライブのお誘いですか!? 路上ライブとMVのおかげですかね!」

「また廣井さんじゃないの?」

「違う、全然知らない箱!」

いつの間にか喜多さんやリヨウさんも逆サイドからスマホを見て各々のリアクションを見せている。

あと知らない箱って聞いた途端おぶっている後藤さんが細くなっているような気がした。つまり意識を取り戻したので降ろして確認してみる。あ、めっちゃ細くなってるわ。具体的に言うとなスペクト比狂ってる。

「結束バンドの名がどんどん広まってるって事ですよね!」

「けど私達はハードロックじゃないけど。虹夏、ちゃんと確認した方がいいんじゃない?」

「それは俺も同感です。ちゃんと決める前に事前確認しておかないとどっかで齟齬が生じてしまうかもしれないですよ」

結束バンドの曲を聴いたなら少なくともハードロックなんて思わないはずだ。

本当に曲を聴いたのかとさえ疑問に思ってしまうほどに。これは何だか臭う。言い知れぬ予感がひしひしと不安を煽ってくるような感覚に近い。

「うくん……きつと打ち間違いか何かでしょ！ それにジャンルの定義なんて人によって変わってくるものだし！ 出演の返事しておくね〜！」

「なっ」

おいおいおい。

「ちよ、ちよつと待つてください虹夏さん！ さすがに決断早すぎますつて！ ブツキングの依頼が来て嬉しいのは分かりますけど、ここはもうちよつと冷静に精査すべきですつ。どう考えても結束バンドの音楽を聴いてハードロックなんてのは出てこないでしょ」

「え、だから打ち間違いの可能性もあるんじゃないかなつて」

「普通こういう依頼を送るならまず相手に失礼がないか、誤字脱字がないかを確認しながら推敲するもんです。ご丁寧な定型文を使つてきてるからこそこういう粗は確実に目立つ。これがわざとじゃないならこちらの曲を聴いてるかなんて余計怪しいですよ」

「私もそう思う。最終的に決めるのは虹夏だけど、今回は新宿FOLTの時みたいになり合いがある訳じゃないんだし一応でも店長に相談してみるのがいんじゃないかな」

「む、リヨウまで……」

意外にもリヨウさんがこつちについてくれた。

前も違うバンド組んでた事あったしその辺についても詳しいのかもしれない。こういうところはちゃんと冷静に考えてるって事か。

俺達の言葉に虹夏さんは逡巡しながら、

「ん〜……分かった。じゃあ今夜お姉ちゃんにも相談してみるよ。決めるのはまたそれからにする」

「……分かりました。店長の言う事なら俺も信用できますし、考える時間も確保できま
すもんね。俺も帰って色々調べてみます」

実際にライブハウスを経営してる店長なら同じ立場として虹夏さんに色々助言とか
してくれるだろ。

まあ一番の願いはこれが俺のただの思い過ごしで、向こうもちゃんとしたライブハウ
スで結束バンドが気持ちよくライブできる事だ。

というより。

「それにしても意外でした。リヨウさんがこっち側につくなんて」

「虹夏はたまに変なところで突っ走るところあるから。そしてそういう時ほど失敗したりす
る。ちなみに経験談」

なるほど、幼馴染故に分かるといふ事ですね。

俺も後藤さんが変な格好した時は失敗するフラグなの分かるからそれと同じだな。成功した試しがないもの。

「今回は優人が引き止めてくれたし店長にも相談するつて言つたから大丈夫とは思いたいけど、実際はまだ分からない」

「幼馴染の勘つてやつですか」

「いや、女の勘」

「そこそんな大事か？」

無駄に細かい拘りなんなの。

そして虹夏さん達と別れ、いつも通り後藤家に帰り後藤さんの部屋で色々している訳なのだが。

「うーん……」

「ど、どうしたの?」

今日はギターの練習をせずにPCで調べものなうの俺に、一人でギターの練習をしていた後藤さんがいったんギターを置いてこつちに近寄ってきた。

「や、気になって依頼元のライブハウスを調べてるんだけどさ、どうも評判があまり良くないみたいなんだよなあ」

「え、も、もしかして悪い人がいるとか……!?!」

「そういうんじゃないけど、レビューとか見る限りブツカーの人が特に……つてああもう、ヤクザとかいる訳じゃないんだから無駄に誇張して怯えんなって! いったいどこの世界にこういう仕組みで人体のアスペクト比おかしくなるヤツがいるんだ!」

「うっあつあつ……!?!」

いたわここに。

「路上ライブで人前に立つても結構マシになつてきたんだろ。何で他のライブハウスの事になると度胸が振り出しに戻るんだよ?」

「ろ、路上ライブは自分達で準備して演奏して帰るだけだけど……ライブハウスは知らないスタッフの人とか関わるから……」

「……ああ、うん、何となく分かった」

要は初対面の人達怖いつて事ね。そうだったね。

後藤さんの場合店長やP Aさんに慣れるまで結構長かったからなあ。何なら今でも普通に怖がつてるか。見た目だけなら女ヤンキーと変わらんもんなあの人ら。

店長口調強いしすぐ威嚇するしツンデレだし。P Aさんはピアス多いし初対面だと雰囲気怖いし何か舌割れてるし。ああいうのつて何て言うんだつけ。スプリットタンだつけか、なんか蛇みたいな舌のやつ。初めて見た時は大層驚いた。あの人も大概やべー人だ。

あんな人達とも少しは話せるようになったこと自体後藤さんも成長してる証拠なんだけど、他のライブハウスとなったら話はまた別か。

考えてみりやそりやそうだ。何せあの後藤さんだもの。一週間振りに会った人に対しても関係リセットされて初対面みたいな反応に戻っちゃう悲しい人間だもの。新宿F O L Tの時もスタッツフの人に委縮しまくってたし。

「けどいざライブハウス行くと意外に大丈夫だったりするかもよ。ほら、路上ライブで知らないうちに鍛えられててそんなに怖くないかもしれねえじゃん」

「想像だけでもうダメだと思ってるのに……?」

「……」

うん、やっぱダメかもしれないねえ。

そう簡単にマシになるなら長年陰キャやってませんよね。わたくしが悪うござんした。とりあえず今は後藤さんの事は置いてP Cに視線を戻す。

「どうしたもんかねえ」

ライブの依頼が来る事自体は大変嬉しい思いなのだが、相手方の評判を見るとどうも素直によろしくお願ひしますとも言えない状況だ。

特にこのブツカー、ブツキングライブをセッティングする人の事を言うらしいが、レビューを見るにただスケジュールを埋めるためだけにジャンル問わずバンドやら地下アイドルやらと適当に声をかけてるらしい。

声をかけるアーティストに統一性がなく、そのせいで客層もバラバラになり、結果ノリの違うアーティストと客の間で変な空間が生まれてしまうという地獄が繰り広げられるとの事。

普通に考えて断り案件だろこれ。……と言いたいところなのだが、結束バンドが今欲しいのは知名度でもありそのための可能性がここに眠っているというのもまた事実なのだ。

レビューは最悪。依頼を承諾する前から不安の割合が多い。しかしレビューだけが全てじゃないという事も分かっているつもりだ。

悪評は一部の時だけで普通の時もあるかもしれないと、今回が普通のブックキングの可塑性だって決してゼロじゃないと思う。

そこに賭けるしかない、か？

「とりあえず明日虹夏さんともう一度話してみるか。妹の事だし店長もまともに相談くらしいは乗ってくれてるだろ」

「そ、そうだといいいね……」

「んしつ、大体の調べはついたし明日の事は明日の俺に任せるかな。後藤さん、そろそろ次の弾いてみた動画の曲でも決めようぜ」

「う、うんっ」

翌日のスターリーのバイト前。

いつものように五人で集まり昨日の事で虹夏さんと話し合おうとした時、まず先に声を上げたのは紛れもない虹夏さんだった。

「ブッキングライブの依頼受ける事になりました！ といつかもう受けたからみんなそのつもりで！ はいじゃあ今日もバイトがんばろー！」

思わずズツコケそうになった。

「ぶっ!? え!? もう受けたって……まさか承諾したんですか!? 俺そのことで今日まで話し合おうとしてたんですけど!?!」

「昨日お姉ちゃんに話して決めたからいいの!! もう決まった事だから優人くんもこれ以上何も言わなくて大丈夫だからね!」

そう言つて虹夏さんは裏の方へと消えていった。

なんかぶんぶんしてたような……もしかしてちよつと怒ってた?

「リョウさん、どう思います」

「これはあれだ。ちよつと突つ走つたかな」

突つ走つちやつたかー。

てことはフラグがビンビンつて事だね。いやそれよりもよ。

「店長、昨日虹夏さんに相談されましたよね。何て言つたんですか。虹夏さんちよつとおこでしたけど」

「あん？ いや……別に何も……」

「虹夏さん怒らせたんですか。ツンですか。またお得意のツンだけ見せてデレ見せないから誤解与えて怒らせたんでしょ」

「お前までやめろよつ。そういうんじゃないつて！」

絶対そういうのだろ。

こういう時くらいはツン控えめにしてちゃんと相談乗つてやればこんな事ならずに済んだのによお。

「じゃあ何て言つたんですか。一字一句違えずに言つてください。判断は俺とリョウさんとPAさんがしますんで」

「すぐ見破れる」

「任せてください♪」

「何でお前らまで……」

ある意味店長特攻持ちだからなこの二人。

「さあ早く」

「いや、だから……下北以外じゃ客足伸びねえからまだうちでやってるだけでいいんじゃないのって……」

「……ちなみに店長はそのライブハウスがどういふところか知っててそう言いました？」

「……うん」

評判良くないと分かってあの物言い。

俺の脳内ツンデレ翻訳で訳すと『あのライブハウス悪評多くて結束バンドのためにはならないから、それならまだスターリーでライブしてた方が確実だぞ』となるな。

うんうん、なるほど。

「リヨウさんPAさんジャッジ」

「アウト」

「はい俺も合わせて3アウトなのでチェンジですね。ツンからデレに変えて虹夏さんに

謝つてきてください」

「何だそれ!? 罰があるとか聞いてねえぞ!」

「言つてないつすもん。それより早く言つてきてください。姉妹喧嘩なんて近くで見ても気持ちの良いものじゃないんで」

「そもそも私は喧嘩のつもりとか一切ないんだが……」

「うっせー早く行けシスコン」

「しっ、シスコンじゃねえーし!!」

なんて説得力のない捨て台詞だったんだらう。あれで隠せてるつもりかね。

とにかくこれで虹夏さんの機嫌が良くなつてもつかい話し合う機会ができればいいんだけど。

数分後。

「まともに取り合つてくなくなつたわ……今日晩飯作つてくれんのかな……」

「マジか……」

姉撃沈してんじゃねえか。

しかも家事炊事全般任せてる分こいう時の店長に勝ち目ゼロなのがやべえ。自墮

落の代償がここで一気に襲い掛かってきたな。

「優人お前今日うちで飯作つてくか……?」

「姉妹の雰囲気最悪な空間に俺を巻き込まないでください。自分で蒔いた種なんだからちゃんと仲直りしてくださいよ」

「うう……」

弱ってんな。

「でも優人、結局私達の状況がまずいままなのは何も変わってない。むしろ虹夏が依頼を受けた分悪くなってる。フラグがどんどん大きくなってるけど」

「……」

虹夏さんがあのままだとおそらく俺の言い分も聞いてはくれなさそうだ。そもそも最初にもう何も言わなくていいと先手で釘を刺されたのもあるから余計言いがらみ。

喜多さんはよく分かかってないからライブ自体は全然やる気だし、後藤さんはアレだから期待すらしてない。

ツン発言した店長の言い分的にも俺が微かに期待してた普通のライブハウスの可能性ってのもほぼ潰えたといいだろう。

だからこそ店長は遠回しにでもここでライブしてた方が良いと言った訳だしな。

ライブまでの時間も少ない。虹夏さんが即決で決めたのも、もしかしたら迷ってるうちに他のバンドでスケジュールが埋まってしまふと危惧したからかもしれない。

上手くいけばいいに越した事はないが、今は正直微妙なところだ。

ちくしょう、店長め。

何でいらぬ時にツンデレ発動すつかなーもう。事態が余計ややこしくなったじゃんかあ——！！

「どうすんの優人？」

「ほんとどうしたもんかねえ」

どどどどーすんの どーすんの!?

95. ある意味ちよつとしたフェスと考えればまだマシ かもしれない

あれからというものの、俺は何度か虹夏さんに考え直さないかと言ってみたが頑なに拒否された。

リヨウさん曰く、姉妹喧嘩した時の虹夏さんほど意地っ張りな人間は中々いないとの事。普段俺達と話す時は普通なのだが、話がライブの件になった途端店長の顔が脳裏に浮かぶのか一瞬で頬が膨れるのだ。

それはそれでハリセンボンみたいで可愛いが、耳を貸してくれないと説明するにもできない。

いつぞ強引に向こうのライブハウスの悪評を脈絡もなく言おうとした時もあったが、何故かそういう時に限って虹夏さんのアホ毛がセンサーのように激しく揺れ、それを合図に虹夏さんは両手で耳を塞ぐのである。

どうなつてんだあのアホ毛。

ロインで送ろうとした時も先にメッセージが送られてきて、『ライブハウスの件だったら大丈夫って言ったでしょ。もしそれでもまだ折れないんだっいたらいくら優人くんでも一週間は口聞かないからね！ ロインならいいけど！』と言われた。

折れた。それはもうポッキーのように簡単に折れた。だって女の子にリアルで一週間口聞いてもらえないとか地獄じゃん。しかも虹夏さん相手だと尚更。

そんなこんなで手詰まりであった。

さすがにこんな意固地な虹夏さん初めてで俺も少々戸惑っている。何なら伊地知虹夏ならぬ意固地虹夏だ。うん、相当戸惑ってるわ俺。

俺が折れて話を振らなくなったからか虹夏さんのテンションはここ最近高く、練習も路上ライブも好調つちや好調だった。

例の件を憂に気にして集中できないよりかはまあ良いかなとポジティブに考えつつ、時間は過ぎていく。

で、あつという間にライブ当日がやってきたとき！ 無常だね!!

「よーし！ 今日頑張ろう！ 未確認ライオットに向けての前哨戦だよー」

悪名高いライブハウスの中で虹夏さんはテンション高めになっておられた。

はいはい、ここまで来たら俺だってもう何も言いませんとも。精々結束バンドのみなが上手くやれるようフォローに全力を尽くす所存ですよ。

「ゆ、ゆうくんシールドっ……」

「人を勝手に盾にしてんじゃねえ」

後藤さんは見知らぬ箱に警戒心を露わにしていた。

意外と今回に関してはその警戒心もあながち間違っていないからきつく言いづらいところある。

「優人くん軽く挨拶回りしてこー！」

「分かりました。ほれ後藤さん、俺に引っ付いたままだと逆に他人と物理的な距離が縮まっちゃうぞー」

「うっ……で、でもまだゆうくんの後ろにいれば何とか耐えられるかも……」

なんですと？ まさか……これも路上ライブで人前にいてもある程度大丈夫になつたという成長の一種なのか……!?!

すげえ、路上ライブの成果出てんじゃん！

「喜多さんっ、後藤さんが成長してるかもしれないねえ！ どうしよう、今日は赤飯かな!?!」
「良かったわねー」

「はいはいとりあえず今は挨拶行ってくつて言ってるでしょ」

ああ、虹夏さんっ、今襟首掴んで引つ張られると俺というより後ろにくつついてる後藤さんが体勢きつくなつて……ないわこいつめちやくちやホールドしてきやがる！
コアラか？

特にする事もないのか虹夏さんと俺の他に喜多さんやリョウさんも着いてきた。

「おはようございます！ 結束バンドです！」

「あつはよつす……」

「？」

なーんかしらけるような挨拶が返ってきましたぞ。

というよりかはあの人達も周りの雰囲気を上手く掴めずに他の人を観察しているように見える。まるで思っていたのと違っていたような、そんな空気を纏っているのだ。

そーいや虹夏さんとの件で折れてから詳しく調べてなかったのを思い出し、スマホで

今日の出演者を調べてみる。

ライブハウスの名前を入れサイトに飛んだところで、俺達に近づいてくる足音と共にやけに軽そうな雰囲気です。声をかけられ振り向く。

「あゝつ、えゝとどちらさんでしたっけ？」

何となくだが確信した。

この男性が結束バンドにメールしてきたブッカーなのだ。だって見るからに軽そうなもの。すぐへマシそうな雰囲気醸し出してるもの。顔だけ無駄にイケメンでなんかムカつくんだもの。

「あつあたし達」

「輪ゴム？　じゅげむ？　あつけつそく？　バンド？　さんつすね」

「あ、えつと」

「……」

「出演頂きありがとうございます。ブッキングマネージャーの柳です。そんじやりハやるんで準備お願いしますね」

そう言つてへらへらと手を振りながら去っていくブッカー。

つうかあの男結束バンドの事を何と言った？ 依頼してきておいてなんかふざけた間違いしてなかったか？

「あアん……？」

「優人くん出てる。顔のそこら中に青筋出てるから抑えてっ」

おつといかんいかん、いくら失礼な態度を取られてもこつちまで同じ土俵まで落ちたらあのブツカーと何も変わらない。

あくまで平静を保っていないと。変に俺が騒いで虹夏さん達に迷惑をかける訳にはいかない。こういう時は心に礼儀も作法も上品な京都人を憑依させるんだ。

「ちなみに優人君、今の気持ちを素直に表すなら？」

「死ねどす」

「全然抑えてない!? あとそれ京都弁のつもり!?」

だってあいつ結束バンドの名前ちゃんと覚えてないもん！ ブツカーなら依頼するバンドの名前くらい覚えてるのが普通でしょ！

何だよ寿限無って！ ぽんぽこぴーのぽんぽこなーかよ。最低限の礼儀もなってねえじゃん！

「うっあつ……あア……ッ!？」

「それよりも優人君やばいわ!　ひとりちゃんが今の柳さんって人のせいで酸欠になってる!　きつとへらへらしたチャラ男オーラがひとりちゃんの空気を全部持ってたのよ!」

「何だつて!?!　なら必要なのは酸素か!　酸素だな?　酸素持つて来い!」

こんな事もあるうかと酸素スプレーを持つてきていたのであった。

とりあえず後藤さんを元に戻して事なきを得る。スターリーならまだしもここで死はさすがに洒落にならないのよ。大騒ぎ不可避よ。

ブツカー柳への憤りもまだ多少はあるが今はどうでもいい。

そんなのより今日出演する同じバンドの人達へ挨拶をしなければならぬ。よく考えたらサイトで今調べるよりもみんなここにいるんだから直接会話すればいいじゃないと結論付けた次第。

という訳でひとまず結束バンドTシャツに着替えてから楽屋に挨拶回りする事にした。

「あくおはようございませす!　私達地下アイドルの『天使のキューティクル』です!　今

日はよろしくお願いしまーす！　ちなみに私はミカエルですっ☆」

「え？　あ、あくと……け、結束バンドです〜！　よろしくお願いしまあすっ」

バンドじゃなくて地下アイドル来ちゃった。

しかも結構位が高い方の天使の名前だ。どういう事だつてばよ。……いやダメだ？　まれるな清水優人、ここはサポート役として俺もちゃんと挨拶しなきゃだろう。

「あ、どうも、結束バンドのサポートをしてる清水です。皆さんは天使がモチーフなんですわねえ。おっと、そういえばこちらにも天使がいるんですよ。ご紹介しますね。この方は大天使ニジカエルって言うんですけど」

「優人くんもういいからッ！　ほんとそういうとこだよ!？」

お隣の天使様に何故かダメ出しされて怒られた件。

どうして。

「みんな行くよ！　女の子ばつかのとこにいると優人くん何しでかすか分かんないから回避しないと危険だ！」

「あれ、俺つてばいつからトラブルメーカー扱いになったんですか?！」

「了解です！　誰引っかけてくるか分かったもんじゃありませんもんね!！」

「喜多さん最近当たりきつくくない?」

「あっはい」

「後藤さん???」

「依頼してくるならせめてお菓子くらい用意してないのかね。不親切な箱、ブツカーもアレだしやつぱり怪しい」

うん、山田はむしろ興味なさげで逆に安心した。

けどスターリーでも別にお菓子ないでしょうが。

その後も何組か挨拶しに行ったのだがこれまた不安は的中した。

さっきの地下アイドルの他に全員閣下っぽい姿をしたデスメタバンド、定年退職したいかにもヅラっぽいおじさんなど、まさかのジャンル被りが一つもないアーティストばかり集められていたのだ。

これじゃまるで仮装大会である。

しかもある意味普通の格好をしている結束バンドが一番浮いてる始末。定年おじさんのスーツ姿もこの中だと衣装っぽく見えて馴染んでるようにも見える。見えるか?

「いや、私は弾き語り初めてまだ半年くらいなんだけどここから絶賛のメールが届いて

ねえ」

「あつはい……」

何故か定年おじさんの話に付き合わされている後藤さん。歳を取ったら話好きになる傾向でもあんのかな。でもって基本黙ってる後藤さんは話し手からすれば格好の的だ。おいたわしや。

「自分ではハードロックじゃないと思ってるんだけど、最近はこういう曲もロックに分類されるのかなあ」

退職おじさんのスマホを見せてもらうと、宛て名以外全て結束バンドに送られてきたメールと同じ文面だった。

これには喜多さんも不審に思い始めたようで、

「えっ私達のと同じ文面ですけど……」

「み、ミスっただけでしょ!」

虹夏さんの往生際は悪かった。実際定年退職の人の曲を聴いてないからまだどうも言えないが、弾き語りでハードロックとはさすがに思えない。

そもそもこの人……白井さんっていうのか。持ってるのアコギですやん。これで

ハードロックは無理ないか？

つうかこのメールを見るに……あり得ない訳ではなさそうか。ちよつと気になったので地下アイドルの人達の方へ向かう。

「あの、すいません。結束バンドのサポートをしてる清水ですが、ちよつといいですか」「はい、何でしょう？」

適当に天使っぽい衣装を着てる人に声を掛けると、くるくるツインテールの子がこちらに振り返った。

見た目的には年下っぽいけど、高校生くらいかな。ツインテールのせいであの地雷系女のシルエツトが脳裏に浮かんだがすぐに排除する。

「失礼でなければこの箱から送られてきたブッキングのメールを見せてほしいんですけど、大丈夫ですか？ あ、こういうのってマネージャーとかそういう人に聞いた方がいいのかこれ？ マネージャーの方とかいます？」

「うーん、そのくらいなら大丈夫だと思えますよつ。私が聞いてきますね！」

そう言うときくるくるツインテールの子は他の子と話していたマネージャーらしき女性の人と話し、スマホだけを借りてこつちに戻ってきた。

せつかなので会釈をしておく。

「はい、これが出演依頼のメールだそうですっ」

「どうも」

だそうって事はこの子達は直接メールを見た訳じゃないのか。まあこういうのは普通マネージャーとか事務所の人が見るから不思議でもない。というかなんかやけに甘い匂いすんなこの子。もしかして天使のイメージとかでそういう香水つけてんのか？
どんなイメージなんだ天使。

いや心の中でツツコミしてる場合じゃない、メールを見ないと。

……………あーね。

「やっぱりか…………」

「どうしたんです？」

「えっと、質問なんですけど天使のキューティクルって曲のメインジャンルとかありますか？」

「うーん、普通にアイドルが歌って踊るようなJ—POPですよ？ 曲名はギャップを狙って時々強い単語を使いますけど！」

ギャップを狙った強い単語というのが気になるけど、今は聞かないでおく。うん、後で個人的に調べてみよう。

「それがどうかしたんですか？」

「……いえ、何も。スマホありがとうございました」

文面はやはり結束バンドと同じだった。地下アイドルがハードロックなんて……まああり得ない話ではないだろうが、少なくとも天使をモチーフにしてるアイドルの曲がハードロックはないと思う。

ギャップが気になるけどそれは曲名の話だったし、多分関係はないはずだ。この子達自身は何も知らなそうという事は、多分マネージャー辺りがどんな依頼でも法外な仕事以外なら受ける方針なんだろう。地下アイドルは厳しいなんて話はよく聞くし。

ここは普通に去るのが得策かな。

「じゃあこの後のライブ客席の方から応援してるんで頑張ってください。えーつと……」

さっきのリーダーっぽい人がミカエルだったって事は、それに近い名前だよな？

「ガブリエルさん？」

「惜しいい〜！ 私はラファエルでした〜！ これからはちゃんと覚えてくださいね！」

惜しいは惜しいけど良いのかそんな名前です。天使モチーフでも名前までそんな寄せなくたっていいと思うぞ。

ニジカエルみたいに本名からもじるだけでも個性出そうだけどなく。

「ラファエルさんね。覚えた覚えた」

「本当ですか〜？ ステージの方から目が合うか確認しますからねえ！」

何このアイドル押しが強すぎない？ なるほど、こうやってファンを落とし込んで沼らせてから一緒に借金も落とさせるのか。

なんて卑劣な商売なんだ地下アイドルってのは。どれ、ラファエルの物販くらいは買ってやるか。

「そういうのは俺よりも推してくれてる人達にファンサしてあげなきゃじゃん」
「新規ファンの獲得も大事なんですよっ」

それはそうだね。

結束バンドもそのためにここに来たからね。正論すぎてぐうの音も出ねえわ。

「天使のキューティクルさん、そろそろ準備お願いしまーす」

「あ、呼ばれてますよ。じゃあ俺行きますね。ではっ」

また何か言われる前に去る事にした。

こういうのはしつこく勧誘してくるのが常だから離れるに越した事はない。あばよとつつあん〜！

「ああつ、ちゃんと私を推してくださいね〜！」

普通に去ってる最中に言われたわ。

で、ライブが始まった。

最初は定年退職おじさんで、聞くに堪えないほど不幸な人生を送ってきたMCを聞かされてからの弾き語りはもう胸中を酷く刺激した。

友達に裏切られ一億の借金を背負い娘は非行に走り三回も家が全焼して娘が成人したと思ったら妻に離婚を切り出されたとか、自分の人生じゃないのに思わず泣きそうになつたもん。可哀そうすぎるよあのおじさん、しかもカツラズレてきてるし。

「じ、人生がハードだからハードロックなのかも……？」

「無理がないですかそれ……？」

おいどんもそう思います。

次は地下アイドルの天使のキューティクル。何気に今日の出演者の中で一番客を集めているのはこのグループだろう。理由は単純、観客の声すっげえから。

あとアイドルオタクにありがちなハチマキとか法被着てる人が多い。まるでオタク専用の特攻服だ。

「この世からダメージヘアを無くしたい！ 天使のキューティクルです！ みんな〜いつものいくよお〜！ シャンプー？ リンス？ ヘアオイル〜！」

「「「ヘアオイル〜!!」」」」

掛け声というかコーレスというか、グループ名称にキューティクルと入ってるのはグループとしてのテーマみたいなのだろうか。

アイドルは専門外なのでよく分からんです。

「じゃあ聴いてね☆『黒髪以外くそビッチ!』」

なんてこと言うんだあのアイドル達。

黒髪以外も認めてあげて。じゃないともれなくうちの結束バンド全員そういう風に見られちゃうから。あ、くるくるツイントールのラファエルさんと目が合った。マジで俺のこと探してたんだな。

「何か独特な盛り上がり方だね……」

「独特というか完全にアイドルノリですね。そのせいで後藤さんとリョウさん地蔵と化してますけど」

「女子がしちやいけない顔してる!？」

仕方ないよ、だってそういうのに耐性ない人達だもの。

「ま、まああたし達とは一番縁遠いジャンルだしね……」

今ジャンル違いなの完全に認めましたよね虹夏さん？

「何言ってるのか全然分かんないですけどお祭りみたいで面白いですね！」

「喜多ちゃんさすがの適応能力……」

「楽しむを見出すプロだな」

その陽キャ力が羨ましい限りです。

「……とはいえ、このお客さん達が私達のバンドに興味持ってくれるのかしら……今までのライブの中で一番異質ですよね」

ピクリツと虹夏さんの体が反応するのを俺は見逃さなかった。

この現状を見てさすがに誤魔化し切れないと思ひ始めたか。ジャンルめちやくちやだもんな。

と、ここでアヘクすな顔をしていたリョウさんが突然元に戻った。

「結束バンドのファンも来てくれてはいるけど、こんなにジャンルがバラバラじゃ新しい箱ですの意味はないかも。いくら何でも怪しすぎる」

「ですね。さつき色んな出演者の人に確認しましたけど、全員のメールの文面が全て同じでした。知り合いがない分、穴埋めで呼ばれたクリスマスライブの時より酷いかもです」

「うっ……で、でもっブツカーさんも何か狙いがあつてそうしてるかもしれないし……」
虹夏さんがそう言った時だった。

ライブ中にも関わらず後ろの方で何やら大きな声が聞こえた。

「柳さんブツカーが寝るのはまずいですよ！ 起きてください！」

「代わりに見といて……」

「……」

虹夏さんと二人で音源の方を見ると、へらへらブツカー柳が思いつきり座ったまま寝ていた。

なるほど、そりやレビニューサイトでも評価が悪い訳だ。あんなの見たら誰だつて良い思いはしない。むしろそっちが呼んでおいて何様なんだと思うだろう。

リハなどの時もそうだったがこの箱で特に評判が悪いのはあのブツカーだけで、それ以外は特に悪いところはなかった。

他のスタッフの人達は至って真面目で出演者にも誠実に向き合ってくれてた方だ。だからあのブツカーには苦勞させられてるんだと思う。

界限全体の割合で見ればルールを守る善人が九割を占めてるのに、残り一割のマナー悪いヤツが目立ちすぎて全体が悪く見られがちというのはよくある話だ。

バンドのファン然り人気配信者のファン然りマンガのファン然り。そしてこのライブハウスも然りだった。

一人の愚行のせいでこのライブハウス全体の評価が落とされるのは大変お気の毒でしかない。

立場的にも上の方なのか、ただのスタッフやアルバイトの人だと何も言えないのがまた可哀そうだ。まあ、ここで働いてない俺からすると無関係だからどうこう言うつもりもないが。

「……」

あからさまに落ち込みそうになってる虹夏さんを見る。

……俺は無関係かもしれないし、ちゃんと話を聞かずに承諾した虹夏さんにだって問題はないかと言われればそうではない。もっと話を聞いてればこうなる事は回避できてたはずというのも今の現状を見てみれば確信できる。

だけど、こうなった以上結束バンドは立派な穴埋めに利用された被害者みたいなものだ。

ライブ終わりにでも直接クレーム言ってやる事くらいはしてもいいだろう。

「とりあえずそろそろ準備しましょうか」

「……………うん」

楽屋に移動し各々が準備に入る。

その最中も虹夏さんは黙ったままだった。ライブも目前だというのにリーダーがあ
あだと少し心配になる。

ので少し声をかけようと虹夏さんに近づいたその時。

「……………づつ」

……………づつ？

虹夏さんの漏らした声に結束バンド全員が振り返る。傍から見れば虹夏さんの近く
にいるのは必然的に俺という認識になる。

そして。

「みんなごめん……………」

ぶわつと虹夏さんが涙目になり、ここに男女の亀裂が入った。

「伊地知先輩!? ちょっと優人君何したの! 先輩を泣かしたの!」

「ぶっ!? ち、ちがつ、違うつて! わたくしめは落ち込みそうになさつてた虹夏しやんを励まそうと声をかけようとして近づいただけで一ミリも触れてないし言葉もまだ発してなかつたんですのよ!」

「口調が崩れてる! クロよ!」

あーもうつちよつとテンパっただけなのにクロ判定されてる! こんなやつてないよ!

「優人……キサマよくも虹夏を……」

「いやあー! 普段力が抜かれたような顔しかしないリョウさんが一段と力の籠った顔してるう!」

「ゆ、ゆうくんは虹夏ちゃんが泣いちやうのような事は絶対しない……と思います……」
「よく言ってくれた後藤さん! やっぱ最後の良心はアンタだ!」

持つべきものは理解のある幼馴染だよね!

あとお構いなしにじりじり寄ってくるリョウさんマジ怖いので踏みとどまってくんないかな。

「ち、違うの……っ」

虹夏さんの零すような言葉に全員動きが止まる。

近くにいたからか彼女の手は縋りつくように俺の手を握っていた。

「私がちゃんと確認せずに承諾しちゃつてみんなを散々のせちやつたから……。優人くんもあんなに何度も話そうとしてくれたのに、あたしがお姉ちゃんとの事で意地張ったせいでこんな事になつちやつたし……呆れちゃうよね……」

「……」

うりゅりゅお目目になつた虹夏さんが口もうにようによりながらみんなにごめんさいしていた。

とりあえず俺への誤解が解けたようでも何より。リョウさんの視線はとつくに俺から虹夏さんへ向けられている。まるでターゲットを変更したかのように。

「だからみんな気持ちが悪えちやつたかなって……ぶほうッ!」

そのままリョウさんは虹夏さんに割とえげつない脳天チョップを喰らわした。

どすつて言つたけど。チョップでしちゃいけない音したけど大丈夫?

手刀の形をすぐにほぐしリョウさんは余計に涙目になつて虹夏さんを撫でながら、

「まったく……何？ 思ってたようなライブじゃなかったから責任感じてんの？ 確かにこの箱は怪しいと思ってたけど、その程度で萎える私達な訳ないじゃん。ここにいる全員をファンにするライブしてやりやいんでしょ。そんなの余裕だよ」

「そうですよ！ むしろ別ジャンルのお客さんもファンにできたら凄いですよね！ 頑張るわよひとりちゃん！」

「あっはい！」

何というか、言いたい事全部言われた感あるな……。

メンタルケアもサポート役として大事だとヨヨさんに言われたからそうしようと思っただが、別に俺なんて必要なかったか。メンバーだけで解決できてんじゃない。嬉しい限りだね。

なら俺はいつも通りでいきますか。

「……」

「何も問題なかったようですね。それじゃあ準備進めましょっか」

「……優人くんは？」

「……はい？」

はい？

「何も言つてくれないの？」

「いや……だつて言いたい事は大体みんな言つてくれたし俺は別にいいかなあつて」

「大体つて事は全部じゃないでしょ？ ならちゃんと言つてよ」

「うつ、ま、まあ……虹夏さんがお望みとあらば……」

仕方ない、ほとんどはリヨウさん達が言つたし省略して伝えればいいか。

てかいつまで手握つてんですかね。言うまで逃がさんとばかりに離さないし。

「あー……俺の言いたい事はあれです。確かに虹夏さんが突つ走つた結果こうなつちやいましたけど、これも経験つて訳ですよ。生きてりや失敗から学ぶ事の方が多いんですし、ポジティブに考えるなら今リヨウさんが言つたように全員をファンにさせてやればいいだけです」

「……経験か」

「ですです。それに他ジャンルファンがいてもライブに関しちや圧倒的こつちが有利つしよ。何たつてどこにいても適応力の高い盛り上げ上手の喜多さんがいるし、圧倒的な自信で満ち溢れてる実力者のリヨウさんもいる。それにギターに関しては頭一つ抜け

てる後藤さんだっているんです。そこに全員をまとめられる包容力を持ったリーダーの虹夏さんがいれば最強でしょうよ。結束バンドに惹かれない人なんていません。それは俺が保証します」

「みんなを巻き込んで盛り上げるなら任せてください！ さつき天キュルのライブ見て良い事思い付いたんで！」

「全員私のベースにひれ伏させる」

「あつうつえつと……が、頑張りましゅつ……あ、噛んだ……」

噛んだね。

「優人くん……みんな……うん、ありがとう！ あたしも頑張るよ！」

うむうむ、これでうちの天使担当も元通りだ。

勝ったな、風呂入ってくる。

「よし！ 超盛り上げてこのふざけたライブハウスぶち壊そう！」

「虹夏さんがお望みとあらば!!」

「そこまでは思ってません！ 優人君も便乗して自分のギター振り上げないの！」

満面の笑みでクレイジーな発言する天使も悪くないと思います！

天キュル達に見せてやろうぜ！ 本物の大天使つてやつをよオ！！

そして俺は喜多さんに楽屋から追い出されたのだった。

しくしく、大人しくフロアの後方に移動しますよ……。あ、撮影の準備もしないと。

——
ほぼ同時刻。

結束バンドが出演するライブハウス、その受付にて。

「当日券一枚」

「はい、本日はどのバンド観に来られましたか？」

「……けつ、結束バンド……」

もう一人、天使を象徴とする羽を携えたりユツクを背に、首に包帯を巻いた女性がやってくる。

96. 人はいつだって変われるものだ

「あれ、店長？」

「あん？ ああ、お前か」

結末バンドのライブが始まる直前に最後方でカメラ撮影の準備をしようとして移動したらウチの店長がいた件について。

「何でここに？ スターリーはどうしたんですか？」

「PAとかその辺のヤツらに任せてきたから特に心配はいらねえよ」

「で、自分は虹夏さんと仲直りできないままライブ当日来ちやつたから心配で来たど。ほんと素直じゃないですね」

「ぼっ、ち、違えし！ 別にそういう訳じゃ」

「はいはい、撮影準備するんで横失礼しますよーっと」

「なんっ……はあ」

ここで強く否定してこなかったのを見るにガチで心配して来たんだな。

まあそうじゃなきゃわざわざ一人で池袋まで見に来ないか。

撮影準備の片手間にフロアを見渡すと結束バンドのファンも何人か確認できた。次の番だからちやんと最前の方に移動してくれてるみたいだ。

むしろよくここまで残ってくれたな。さっきまで定年おじさんや地下アイドルとかジャンル違いにも程がある人達が演つてたのに。

直前まで機材を扱わないアイドルの天キユルがいたので、ステージ上では今スタツフの人達が暗転の中急ピツチで機材などの準備をしている。

つまり今フロアはほぼ静かな状態。それ故か、周りの客が話す声も結構はつきり聞こえてきた。

「次は？」

「結束バンド……つて事はロックバンドかな」

「知らないバンド名だね。商品としてはよく見るけど」

「ロックはあんま聴かないんだよな」

「とうかこのライブ何でジャンルがこんなにバラバラなの？」

「そのせいで盛り上がりも何か統一感ないよね」

こんな意見がちらほらと。

見に来た客の人達でさえこのライブのやり方に疑問を持ち始めてる始末。依頼された側からすりやメールで当店一押しのアーティストが出るとか言われて来てみれば、訳の分からないおじさんにデスメタに地下アイドルとかいてもう頭の中が宇宙になりかけたくらいだ。

ともすればライブが進むにつれて全体の雰囲気がこういう風になるつてのも必然と言えば必然。

当のブツカーはイスで寝ててまともにライブを見てもいない。

「結束バンドの事、結構言われてるっぽいけど大丈夫そうか？」

隣にいる店長から一言があった。

危惧というよりかは、念のための確認程度の声音だった。

「今更どうも思いませんよ。むしろワクワクしてます」

「……ワクワクだあ？」

「だって結束バンドを何も知らない人達が今から結束バンドを知れるんですよ。ジャンルが違うからロックを今まで聴いてこなかった人達が初見で結束バンド見れるとか最

高じやないですか」

「……」

記憶を消してもう一度見たいバンドは何と聞かれたら問答無用で結束バンドと俺は答える。

そのくらいオーディションと初ライブの時に聴いた彼女達の演奏は印象に残っていた。上手い下手とかそういう技術レベルの話ではなく、ただ純粹に惹き込まれたから。

「それにほとんどの人が結束バンドを知らないのって、何となく初ライブの時を思い出さずですよ。ノーマークから全ての視線を釘付けにしちまうパフォーマンズ力。何ならあの時よりも成長してるし、だからこそこの逆境をどうひっくり返すのか、逆にそっちの方が楽しみになってます」

あの衝撃を味わえる人達がここに何人もいるんだぜ。羨ましいに決まってるじゃん。さつき裏でもリョウさんが全員をファンにさせるライブをすればいいと言ってたんだから余計に気になるってもんでしょ。

内心のワクワクを抑えながら撮影準備を終える。
すると不意に俺の頭の上に店長の手が乱暴に置かれた。

「ははっ、んだよ。良い方向に進んでんじやねえかお前」

「だあー！ 髪が乱れるって！ 何すかいきなり！」

「弟分の成長を間近で見ると抑えらんなくなつた。許せ」

「なら弟分だけじゃなく妹とも今の感じで仲直りしてきてください」

「げふん」

このシスコン、咳払いで誤魔化しやがったな……。

と、ステージ上のライトが点灯したと同時にドラムの音が鳴り響いた。

見れば準備も終えてメンバーも出てきている。後藤さんは……うん、大丈夫そうだな。路上ライブのおかげか知らない箱でも思つたより堂々としてる。

さあ、今の状況は完全アウエーだけど、どうする。

『こんばんは！ 結束バンドです！ 今日に来てくれてありがとうー！』

まずはいつも通り虹夏さんの挨拶から始まった。

他の客も様子見といった感じでステージを見つめている。よし、ナイス笑顔だ虹夏さん。こういう場はとりあえず笑つときやおおよそプラスの印象を持たれる。特に地下アイドルファンのオタク達みたいな人は天使のような虹夏さんのスマイルにさぞ魅了

されるだろう。何なら俺はもうされてます。

本来ならここで曲に入るところだが、今回は違った。

『今日はあたし達を見るの初めてつて人も多いと思うから、いきなりだけどメンバー紹介いきますっ！』

「……へえ」

「なるほど、最初にメンバー紹介する事で興味を引きつつロックバンドへの怖い印象に即時性の耐性を持たせる方向でいったか。さすが虹夏さん、オタクの割合が多い客への配慮完璧だな」

店長も口角を上げておるわい。バレバレですぞ。

『ベース、山田リョウ！』

しかもソロ演奏で楽器にも興味を持たせにいくか。

実力は確かなリョウさんが弾くベースは重低音が心地良く、スラップも披露したところで客が湧いた。そうだ、リョウさんは真面目に音楽してる時はめちやくちやかっこいいんだぞ。それ以外がクソカスレベルなだけだ。……ダメだなそれ。

『リードギター、後藤ひとり!』

「……ははっ」

やるじゃん……やるじゃねえか後藤さん。アウエーの中でも臆さずソロ演奏をこなせてる彼女を見て思わず声が零れた。

まだまだ本気の実力とまではいかないにしろ、この箱のレベルを鑑みれば十分すぎる程に客の目線を引きつけている。やっぱソロだと一気に頭一つ抜けるな。

しかし。

「ぼっちちゃんやっぱ上手えな」

「はい。けどそろそろ限界来ますねアレ」

「何が? 見られすぎて変な事でもすんの?」

「いえ、この場合はとことん調子乗って悪目立ちするタイプです」

言うと同時に後藤さんはニヤケながら客に背を向けてずっとピロピロ弾きだした。

案の定まだちゃんと始まってもないのに虹夏さんから背を向けるなど注意されてる。言わんこつちやねえ。ある意味注目の的だから結果的には美味しいか?」

『ぼっちちゃんもういいから長いって! 次いくよ! え〜ギターボーカルの喜多ちゃ

んー!』

『は〜い!』

喜多さんだけフルネームじゃなくて喜多ちゃん呼びなの、絶対裏で名前は言うなって釘刺したんだろうな〜。

『何だか今日は不思議なライブだけどこれも何かの縁! 今日みんな一緒に楽しみませんか! 東武? 西武? 池袋〜!』

でもって陽キャの化身は盛り上げ方も上手かった。

天キュルがやってたフリを真似て一気に天キュルファンを味方につけたのだ。さつき裏で言ってた良い事思い付いたってのはこれの事だったのね。

持ち前の明るさとアドリブ力で他の客をも楽しい空間に引きこむ喜多さんはさすがとしか言えねえや。

何だかんだやっぱり陽キャのコミュ力って大事なのかもしれない。あんなの誰とでも仲良くなれるでしょ絶対。

「ん? あっ」

「?」

そろそろメンバー紹介も終わりライブが始まるから撮影開始のボタンを押そうとしたところで、店長の思わず漏れた声が聞こえてもう一度ステージを見る。

すると突然ギヤリギヤリギヤリという歪な音と共にアホピンクが歯ギターを披露し始め客をドン引きさせていた。

ほら、だから言つたじゃん。とことん調子乗つて悪目立ちするつて。

俺は一度家でいきなり歯ギター披露された事もあつたから別に何ともないが、初見の人が多いのにそれはもはやテロ行為だよ。後で説教だな。

アホピンクの暴走で色々あつたが、喜多さんのアドリブ力のおかげで何とか会場の空気も良い感じに解れてきた。

頼むからもう余計な事すんなよ後藤さん。この箱は気に入らんけど結束バンドの評価を落とすのだけは許さんからな。

おっと危ない危ない。

撮影開始、と。

『では一曲目やりまーす!』

それを合図に贅沢だが個人的に聞き慣れたイントロが始まる。

一曲目は『星座になれたら』。曲調的にも激しすぎる事もなく大人しい訳でもない、比

較的誰でも聴きやすいし楽しめる曲となっている。掴みとしては良い選曲だろう。

ここから二曲目三曲目と徐々にボルテージを上げていけば客もめっちゃ盛り上がり方を理解してノツてくれるはずだ。

隣の店長は相変わらず後方彼氏面で腕組みながら見てるけど。

と、そんな時だった。

店長の肩に誰かがぶつかつたのだ。俺も反射的にそちらを向いた。

おそらくライブを見ながら良いポジションがないか探してる間の不注意。

故に謝ってきたのは向こうからだった。

それは首に包帯を巻き、天使の羽が生えたりユツクを背負い、ツーサイドアップの髪型をした女性であつた。

というか割と因縁ある系のヤツだった。

「あつこめ」

「げっ、ぶりっこメルヘン年齢鯖読みライター……」

「げっ、不法侵入威力業務妨害地雷系ライター……」

「出会い頭にそんなすらすら暴言出る!?!」

「いや全部事実だし」

まさかのぼいずん♡やみ改め佐藤愛子、俺達の前に現る。

「それはそうと何でお前が来てんだよ」

「へへへ、こいつどうしやしよるか店長。 処す？ 処す？」

「ち、ちぬ……」

何となく聞いてみたら既に店長がチョークスリーパー決めてた。

いやあの店長、さすがに違う箱でその技はまずいんじゃないかと思うんですが……。

一周回って俺の方が落ち着いてきちやったよ？

とりあえず荒ぶる店長を宥めて事なきを得る。

この人スターリーじゃなかったら結構好き勝手やるな……。さすがはヤンキー思考なだけある。

「げほつ、うえ……あ、あたしは暇があれば色んなライブを見るようにしてんのよ……」

マジで苦しそうなんだけど店長本気でやったな？ 妹を馬鹿にされたもんだから気

持ちは分からんでもないけど。

「ここは俺が仲裁に入ってこれ以上シスコンが暴走しないように努めますか。」

「だからってわざわざ評判の悪いライブハウスにや来ねえっしょ。アンタこの前結束バンドの路上ライブも見に来てたよな。って事は今日も結束バンド目当てか？」

「うっ……バレてたんだあれ……」

「そんな無駄に目立つ服装してたら嫌でも目に入るんだわ」

「ていうか何であんたあたしに敬語じゃないの！」

「目上で尊敬してる人にはちゃんと使うっての。ですよね店長っ☆」

「そういう事だ。分かったか犯罪者予備軍」

「お願いだからその呼び方だけはやめてっ!？」

ほんと妹絡みの事になると容赦ねえなこの人。

まあその本人は絶賛妹にそっぽ向かれてる最中だけど。ツンデレも時と場合によっちゃ毒ですな。

「うるせえな。お前が余計なこと言ったせいでこいつら気にしてたんだぞ」

「いや結束バンドの事を言われたからムカついただけであって俺自身に言われた事については別に何とも思ってますからね」

「な、何よ……別に嘘は言っていないでしょ！ ギターヒーローさんが才能を無駄にして
結束バンドで燻ってるのもったいないって言っただけだし！」

だから言い方でもんがあるでしょ言い方でもんが。

「あんな才能持つてる人は稀なのに、絶対周りのメンバーだって差を感じて……つてあ
の時は思ってたけど」

ん？ 何？ 過去形？

まさか路上ライブとか今のライブを見て以前とは気持ちに変化でも出てきたか？

「今はもう」

「えくそろそろお店以外でも会おうよ……いつも同伴してるのにい……」

ちょうど一曲目が終わりある程度静かになった時、そんな寝言が聞こえた。

今日のライブの全ての元凶、ブツカー柳である。ライブが始まつてるつてのに呑気に
寝ていられる腐った根性だけは認めてやろう。よし、有罪だ。

さすがの俺も注意くらい言つてやらねば気が済ま、

「殺るか」

「殺るわよ」

「ちよいちよいちよーい」

ツッコミ混じりの制止も敵わず。

「良いライブやってんだからちゃんと見ろ！」

「真剣にやってんだからちゃんと見ろ！」

おつかねー女性二人組の方が早かった。

何なら二人してブツカーの頭を鷲掴みにしておられる。手出るの早えっすね……。店長、あなた前に俺に向かつて説教してくれたのに他の箱だからって自分は手を出すの何なんすか。あの時口頭注意しようとした俺より過激じゃん。ヤンキーじゃん。

さすがにアイアンクローをされて強制的に目が覚めたブツカーが今度は立たされていた。

「あのさあ、この箱あんたが適当なブツキングするから評判最悪よ？ たまにいるのよねー！ スケジュール埋め優先でバンドの事なんて考えてないブツカー！ 真剣にやってる人達のこと考えられないなら辞めれば？ あんたのせいでこのスタッフみんなにも迷惑かかってるんだからね！」

「すつすみません……」

「おお、相変わらずの正論パンチで相手をボコボコにしてる。さすがばいずんと自分で名付けるだけの事はあるな。」

物理攻撃の次は精神攻撃だった。こちら側の陣営にいたらめちやくちやスカツとするくらい口撃してくれるの聞いてて気持ちいい。こんなもん相手からすればぐうの音も出ないだろ。悪いのは百パーブツカー柳だから何とも思わんが。

「いい？　ちゃんと見ときなさいよ。そんで終わったら出演者に軽くでもいいから感想と謝辞を伝える事。ブツカーだとしても音楽業界に少しでも関わってる身なら最低限の礼儀くらいは身に付けなさい」

「最低限の礼儀をお前が言うか」

「人って少しでも自分が優位の立場だと過去の愚行も美談にして正当化させるかそもそも白紙化させようとしませよね」

「うっ……と、とにかく分かったら最後までライブ見ときなさいよね！　あとここにいられると目障りだからどっか行つて！」

「い、い、い、い、い、い……！」

一応はこの箱じゃ割と上の立場っぽいのに情けなく違う場所に追いやられる姿には

同情するぜ。嘘だぜ、全然同情しないZ E ☆

「ふうん、お前つて意外と嫌味なだけのヤツじゃないんだな」

「失敬なつ、あたしはバンドに対してはいつだって真面目よ！」

「だから後藤さん、ひいては結束バンドのみんなに対して自分の正義に逆らう事なくあんなこと言つたと？」

「ぐつ……そ、そう、なるわね……」

軽いMCのあと、結束バンドは二曲目に入った。

一曲目より他ジャンルの客もノリ方が分かってきたのか、はたまた結束バンドの曲に興味を持ち始めたのか徐々にステージの方へのそのそと移動していく。

だから念のためカメラをもつと見やすい方へ移動させた。

一応カメラとの距離は少し離れてたから、俺達の会話は入ってないはずだと思う。カメラ移動を終えて元の位置に戻る。

するとぼいずんさんが俺の正面に向き直ってきた。

「えつと、何か？」

「……うん、そうよ。やっぱり、ちゃんと言わなくちゃいけないって思ってた」

え、何この雰囲気、言わなくちやいけないって何？

まさかあの時まで言い足りない事でもあったの？ 悪いけど俺に対しての暴言はノーダメだからな？

そんな風に思っていると、不意にぼいずんさんは俺に頭を下げてきた。

「……………」

「あの時……あんたの事を悪く言っでごめんなさい……今更かもしれないけど、前に言った言葉は全部撤回させてもらうわ」

結束バンドのライブ中だというのにも関わらず、俺の頭の中は空っぽになった。

「路上ライブで見かけた時に思ったの。あんたも、結束バンドも、前より格段に成長して良くなって。SNSで宣伝とかの回数も増えて積極的に路上ライブで新規ファンを取り入れようとしているのも分かった。正直……この短期間で結束バンドはもの凄く成長してる。ギターヒーローさんだけじゃない、他のメンバーみんなもそう……だから」

「ちよ待てよ」

「……………」

話を聞いてるうちにだんだん理解してきて俺の中のキムタクが待ったをかけた。

つまりこの人はあの件について俺に謝罪してる訳だが。

「それってさ、俺に言う事じゃないよな」

「……で、でもあんたにも色々言っちゃったし」

「そこだよ。さつきも言ったろ。アンタから俺に言われた事については別に何とも思っていないって。むしろそういう風に引き出させたのは俺だし謝罪なんていらねえよ。されても困るだけだ。つうか謝るなら俺にじゃなくて結束バンドの方だろ」

「けどあんたも結構怒ってたじゃない……」

「それは結束バンドを馬鹿にされたからであって、俺個人に関しては何も言っていない。何ならそんな時の怒りも今は全然ない」

これは本音だ。確かに結束バンドを悪く言われてムカついていたのは事実で、あんなにも誰かに対して敵意を向けたのは初めてだったけど。

さつき会った時にもっとこの野郎とか頭が沸騰するのかなって思ってたら案外そうでもなかったのだ。

人間、感情のコントロールとして怒りのピークは六秒間だと何かで見たような気がするが、それが本当だとしたらもうあの日から何日経過したかなんて考えるだけ無駄だろう。

つまり俺のぼいずんさんへの怒りなんてのはとつくに冷めていたという事になる。最初に処す? とか言つたのも完全にノリだし。

だからあの時のような怒りの感情はもうどこにもなかった。

それに、

「……アンタのバンドに対する熱意はもう分かつてるつもりだよ」

「え?」

「アンタが書いた記事つての、読める範囲のやつは全部見させてもらった」

「ぜ、全部!」

そりやあんだだけボロカスに言われたら相手の事も気になつて調べるのが普通だ。

敵情視察とはまた違うが、見返す相手がどんな事をしているのか個人的に気になつてネットの海を色々彷徨つた訳である。

最近はおっぱら色んなバンドを題材にした炎上してもおかしくない記事ばかり書いており、むしろ炎上商法みたいなアクセス稼ぎのためにわざと過激な言葉選びをしたり擁護のしようのない記事もたくさんあった。

これは本名晒されたりやらかし行為が出てきまくる訳だと家でPC見ながら苦笑いもしたものだ。

でも。

だけど。

この人が音楽ライターを始めて間もない頃の記事を見ると、炎上記事を書いているのが嘘だと思ってしまうほど真面目な記事ばかり書いてあった。

良いバンドを広めたい。色んな人にバンドの良さを知ってもらいたい。そんな純粋な気持ちで最初の記事からは見て取れた。

多分、記事が真面目すぎてアクセスが稼げなかったのか徐々に文章は過激になっていき、いつしか今みたいな炎上商法に切り替えていったんだろうと思う。

ある種、彼女も挫折していたのだ。自分が本当に書きたいモノと他者が求めているモノが違うすぎて、悪い方向にシフトチェンジしてしまった。そうしないとアクセスもろくに稼げず生活も苦しいから。

まあ、それでクソ記事ばかり書いてる事に対しては擁護する気も一切ないけど。ほとんど自業自得という因果応報みたいなおある。

ただ、この人にもこの人なりの信念と熱意があったのは確かだと全ての記事を見て分かった。基本的に伝え方や言い方がクソみたいが悪いだけだ。いや悪すぎるな。

「結果だけ言うとあの時のアンタの言い分は尤もだったし、それで俺も納得できる部分

の方が多かった。皮肉だけどアンタの言葉がなかったら結束バンドは今も特に大きな行動を起こさないままスターリーで燻つただけかもしれない。こう言っちゃ何だが、アンタのおかげで未確認ライオットに出る決意もできたし路上ライブやMV、SNSでの宣伝の方と色んなところにまで力を入れるきっかけにもなった。だから結束バンドがあの時からどれだけ成長してるかは、アンタが一番分かってるんじゃないのか」

「……うん、そうね」

『じゃあラスト！ 新曲やります！ 「グルーミーグッドバイ」！』

虹夏さんのMCで最後の曲が始まった。客の方は自ら腕を上げてノッている人も結構いる。

ん？ 虹夏さんとリョウさん、ちよつと走り気味か？ ……でも、これはこれで良いな。緊張のせいで走ってる訳でもなさそうだ。みんな楽しそうに演奏してるのがここからでも見える。

「良いドラムね……」

「ん？」

「本来なら完全アウエーなライブの空気を一変させたわ。それにベースの子もリズムをすぐに合わせて対応できてる。息がピッタリだわ。あとボーカルの子、前よりもギター

が上達してるし歌声にも自信が表れてる。成長してるのはギターヒーローさんだけじゃなかったって事ね……」

前回あれだけボロクソに言ってきた彼女が結束バンド全体の成長を認めていた。

それは、少なくとも虹夏さん達の努力が決して間違っていないかつた事を意味している。彼女達の努力は一人の意見をひっくり返したのだ。

ぽいずんさんの言葉に店長と顔を見合わせる。

そして、二人で自慢気にしながら自然と声が重なった。

「二分かりやいいんだよ」

アウエーの中ライブも無事終わり、そそくさと帰っていくぽいずんさんを一瞥した後、俺は結束バンドの物販を担当していた。

というのもライブ終了後に結束バンドファン以外の人達が結構な数で押し寄せてきたのだ。

主に天キュルルのファン達がメインだが。

買いに来てくれる人達は皆天キユルと一緒に推していきますとかギターかつこよかったですとか様々な感想を一言添えていつてくれる。

会計などは俺がやっているが、グッズを渡すのは虹夏さん達がやっているので一言二言客と交わす様はちよつとしたアイドルの握手会みたいになつてた。

「後藤さんは話さなくてもいいのかわ？」

「あつ、あのブツカーの人だけでもうダメ……」

「あーね……」

ライブの最後、締めくくりにテンションが上がつたのか結束バンドのみんなが曲の終わり直後にパフォーマンスとしてジャンプした際、壊滅的な運動神経の後藤さんは見事にノミみたいな直立ジャンプを見せてある意味注目を集める事になつた。

それをスマホで撮影していたブツカー柳に絡まれ、挙句虹夏さんにはライブ中はもうギター弾いてるだけでいいから一步も動かないでくれと言われる始末。とりあえずブツカー柳には一言クレームだけ言つてどっか行つてもらつた。

物販も一通り終えて客もいなくなつた頃。

今日の出演者の人達が声をかけてきた。

「あのくライブ良かったです！ よかったらなんですけど、この後みんなで打ち上げしませんか？」

「やった〜！ ぜひやりましょ！」

天キュルのリーダーの人だ。あとデスメタの人もいる。

ライブ終わったんだからせめてメイク落としてくれないかなあ。後藤さん怯えて俺の背後でずっと固まってるんだけど。

と、ここで天キュルリーダーの隣にいたくるくるツインテールの子と目が合った。

確かラファエルさんだっけか。一応ライブ中でも目が合ったけど、あんなんで良かったんだろうか。俺が知ってるアイドルは基本スクールアイドルかアイマスくらいしか知らないから、リアルアイドルの応援ってどうすればいいのかよく分からん。

「っ！ っ！」

なんかめっちゃ手を振ってくるけど何。あれがファンサってやつ？

どうしたらいいの。振り返せばいいの？ 客はみんな帰ったけど過激派ファンとかに殺されない？ 大丈夫？

けど一応振ってくれてるし返すだけ返そうと思いい目立たない程度に手を振ろうとしたら、ラファエルさんとやらはもうこつちを見てなかった。何だよ、こつちがちよつと

恥ずかしい思いしたじゃねえか。

いったいどこ見てん……あれ、あの子もしかしてリヨウさん見てない？ めっちゃ熱烈な視線で見てない？ 目がハートマークになってんだけど。まさかりヨウさんに魅了された？ あの借金クズに？ マジかよ、正気か。

いや、うん……まあいいか。好みは人それぞれっていうしね。ダメ女に引つ掛かるのは虹夏さんだけじゃないって事だ。もはや何も言うまい。

と、そこで思い出した。虹夏さんどこ行つたんだろ。店長はつと……お、いたいた。何やら二人で話してる様子だ。

二人の表情を見るに無事仲直りはできたっぽいな。良い良い、あの姉妹には今の光景が一番似合うつてもんよ。

そういうや店長からはぼいずんさんが来たという事は今はまだ黙っておけと言われたので言っていない。

今調子も良くノツてきてる結束バンドに変なわだかまりを残すのは良くないからとの事。まあ俺はともかく虹夏さん達はぼいずんさんに言われた事が結構気にしてたし、今言つてこの空気を乱すのは俺もしたくない。

だから今は今日のライブを無事に終わった事を素直に喜ぼう。

「うう……打ち上げ……他の人達もいる……う、うぐおがががが……！」

……さて、まずはこのコミュ症モンスターをどうしようか。

97. 何だかんだ遊園地とかつていと楽しくなつてくるもの

ブッカー柳による混沌ライブから日も経ち、俺達はいつも通りスターリー……ではなく電車移動でとある場所に来ていた。

「着いた〜！ よみ瓜ランド！」

「下北からすぐでしたね！」

結東バンド、現着。

そう、我らはかの有名な遊園地、よみ瓜ランドに来たのだった。

「今日はライブの打ち上げアード！」

「スターリースタッフ一同自由参加型慰安旅行です！」

今日も今日とて虹夏さんと喜多さんが元気で何よりです。

まあ気持ちは分かる。何たって遊園地だもの。よみ瓜ランドだもの。テレビでよく

見るやつだもの。

ちなみにメンバーは結束バンドの他に俺、スターリースタッフ陣からは店長とPAさん、あと何故かいるきくり姐さんだ。

いやほんと何でいるんだあの人。スタッフでも何でもないだろ。めちやくちや部外者じゃん。

ライブの打ち上げ自体はあの日にもやったがそこはツツコミなしの方向で。

色々目的というか事情がある訳よ。虹夏さん達が無駄に元気出してるのもただ遊園地に来てテンションが上がってるからではないのだ。

どれ、ひとつ現実に戻してみようじゃないか。

「あと未確認ライオットの審査結果が来る日、ですよね」

「……………」

！
なんとという事でしょう。あれだけ明るかった二人が一瞬で黙ってしまわれましたわ

心なしかリョウさんも死んだ魚のような目で虚空を見つめてる。あれはあれだ、普通に遊園地に来た事に対して陰鬱になっただけだ。

そしてここに着いてから一言も言葉を発してない後藤さんは俺がリュックを背負っ

てるから背後に隠れられず、俺の隣ですつと俺の腕にしがみついている。

袖のしわ凄くなりそうだからそろそろ離してほしいんですけど……。傍から見ればカップルが腕を組んでるように見えるかもしれないが、実際は今から人混みへ向かう恐怖に怯えてる女子が男子を逃がさないようにとっ捕まえてるだけだ。凄い、リア充感微塵も感じないね。

俺の言葉に虹夏さんがスマホを見るも、

「まだ来てないね……」

そりやそうだ。来るなら俺のスマホにも通知来てるからね。

今日は未確認ライオットに出るため、結束バンドの新曲音源を一次審査に出した結果が来る日だ。

しかし昼前とはいえまだ連絡の一切も来ていない。正直あんなに良い曲が出来ただから通過できない事はないだろうと俺自身は思ってるが、それでもメールが来るまではどうしたって緊張感は拭えない。

だからこそ今日はここにやってきた。

つまりは。

「……今日は日頃の不安を吹き飛ばすくらい遊ぼうおおうっ!!」

「ただの現実逃避旅行かよ」

「店長鋭いツツコミ禁止。また虹夏さんにそっぽ向かれたいんですか」

「我が家の料理に支障をきたすのはもう御免だ!」

「いい加減一つくらい料理覚えたらいいじゃないっすか。何なら俺が教えてあげましょうか」

「……じゃあかつ丼のレシピ教えてくれ……」

このシスコン三十路、丼ものに逃げやがったな。

具さえできればご飯の上に乗せるだけで結構簡単に出来るし腹も膨れる一品を選ぶとは、極まつてんな店長。けどこの人が上手くとんかつを揚げてるイメージ湧いてこないんだが。

ただ、現実逃避旅行というのもあなたが間違いでないから何とも言えない。

いつ来るかも分からないメールに怯えるくらいなら、せめてメールが来るその時まで楽しい時間を過ごしていいのだ。

「せっかく来たんだから今日はお姉ちゃん達も楽しんでね〜!」

「しんどい」

「だるい」

「吐きそう……」

「優人くん、このやさぐれ三銃士どう思う」

「滑稽ですね」

「いやほんと。」

「もう〜！ ほら周り見て！ 癒されるでしょ！」

何となく俺も周囲を見てみると、家族連れやらカップルやらがキヤツキヤウフフしながら楽しそうに歩いている。

家族連れはともかくリア充は爆発してくれないかな。なんかこう、女子の前でソフトクリームを落としちゃうとか躓いて転けそうになるとかほんの少しの不幸に見舞われてほしい。俺もああいう青春送りてえ〜。

「この歳になるとこういう所に来るのがなんか辛くなつてくんだよ。自分で選んだ道だから後悔もしてねえし間違ってたとも思わないけど、幸せそうな同年代の子連れ見ると胸が締め付けられるんだ……こう、胸がな……ギユツてなるんだよ……」

「毎日家に帰っても一人、おかえりと言ってくれる人もいない……料理しても誰も食べ

てくれない。添加物満載のコンビニ弁当を一人で買っては食べる毎日、壊れていく身体壊れていく心……うう、しくしく……」

「ちくしよ〜！ 借金まみれなのも築52年風呂なし事故物件アパートに住んでるのも全部バンドのせいだ〜！ えーんっ、ほんとに出るんだぞ〜！」

「廣井さんの全部お酒のせいでしょ。……え、出るって何が？ 優人くん、何で目を逸らすの？」

以前シデロスの内田さんときくり姐さんの家行ったら科学では証明できない現象ばっか起きたのをこの目で見てしまったので。

ああ、本物っているんだなつてなつたよ。内田さんは俺の上を見ながら「ユウトさんがいれば大体の悪いモノがいても大丈夫そうですね〜」とか言つてたけど。そつちのが怖かつたわ。

「こんな天気の良い曇りの日に遊園地なんて来るもんじゃねえよ……」

「ほら雨降つてきましたよ……帰りましょう。……あ、私の涙か」

「アルコール類の持ち込み禁止の遊園地とか来る価値ね〜……」

「いや今日快晴だけ?! 廣井さんの関してはほとんどの遊園地がそうでしょ?!」

「園内入つてすぐなのにもうグロッキーなんですか?!」

普段地下のライブハウスに生息してる陰の大人達はひとたび陽の遊園地に来るとこ
うも弱体化するのね。

哀れ、哀れすぎるぜ。ここまでくるといつそ俺にくつついて必死に我慢してる後藤さ
んの方が偉く見えてきた。内心では帰りたいと思つてそうだけど、口に出さないのは彼
女なりにみんなで遊びたいと思つてるのも本心だからだろう。

うん、偉い、偉いぞ後藤さん。何も言わないだけで株が上がるなんて珍しいね。

木にしがみつくとコアラと思えばこの怯えようも可愛いものだ。しわなんてもう気に
しないでおこう。何ならペットを可愛がる勢いで頭も撫でちゃう。

「……………え？ ゆ、ゆうくん……………？ い、いきなりどうし、何で撫でて……………う、うえへ、うえ
へへへへへへく……………」

なんか知らんが後藤さんの機嫌も良くなってきた。誠に良い傾向だ。

「あーもうっ！ ちょっと優人くんっ、この大人達何とかこっから動かして!!」
いきなり結構な無茶振りしてきますやん。

しかしうちの天使が言うのなら従者であり信者のわたくしめがしかとその任務を承
ろうじゃありませんか。

ふむ、このどんより三銃士を少しでも元気づける方法ねえ……。仕方ない、昼にはまだ少し早いけど出しますかな。

「後藤さん、リュック開けたいからちよつとだけ離してくれ」「あつうん」

「優人君、何か出すの?」

「……ハッ!? 優人、まさかこの匂いは……!?!」

何で開けてもないのに匂いが分かるんだよこの草食系(物理)。

遊園地に来るのが楽しみすぎてテンション上がったついでに作った大きめの弁当箱を全部取り出す。

「一応昼食用に弁当作ってきたんですけど、食べます?」

「「食べる」」

食欲は旺盛だなオイ。

「清水君、私に毎日おかえりって言ってくれる係やりませんか? 毎月お金払うので」

「遠回しにプロポーズしてんじゃねえよ。こつちには虹夏だっているんだぞ」

「ちよつとお姉ちゃん今余計な事言つたな？」

「店で酒買えば弁当をつまみに合法で飲めるぜえ〜！」

「よし、ちよろいなこの大人達。後藤さんもういいぞ、近う寄れ」

「あつうん」

「優人君あなた今結構な大事に巻き込まれそうになつてるわよ」

知らん、俺が受けた命はこの三人をここから動かす事だけだ。

こつから動いた後の事までは責任持つ必要とかない。どうせ一緒に行動する気は元からなさそうだし。何で遊園地に来てまで高校生が大人三人の面倒を見てやらにやならんのだ。俺はもうさつさとよみ瓜ランド楽しみたいモードなんだけど。

「うしつ、食料調達したしどつかで時間潰そうぜ」

「酒売つてる店行きましょ〜」

「ていとか何でお前いんの？ 帰れよ」

こうして俺の弁当を全て持つてつた店長達はお酒を求め園内を徘徊しに行つたとき。

さらば俺の弁当箱よ。虹夏さん達と園内の喧噪をBGMにしながらいわい食べるという楽しみは消えたが、お前は一応面倒な大人を追いやる程度には役に立つたぜ。

「という事で昼食は後で適当にどっかの店で済ませしよう。それより今は遊園地ですよ遊園地！」

「うーん……そうだね、優人くんのお弁当も食べたかったけどしょうがない。あつちはほつといて周ろつか。それじゃテーマパークマスターの喜多さん進行お願いしまーす！」

「今日は私に任せてください！ 楽しい一日にしてあげます！」

「よっ！ 喜多さん！ さすが陽キャの極み乙女！ テーマパークに来たら一層輝く喜多さんオーラ！ 頼りにしてるぜ園内網羅！ HP尽きるまで遊ぶぜ今日は！ 後藤も山田も顔上げろーや！ イエイイエイエイ！！」

「優人うるさい」

「よっぼど楽しみにしてたんだね〜」

そりやもう楽しみにもなるってもんでしょ。

こちとら遊園地なんて小さい頃でさえ後藤さんが嫌がるから来た事もなかったんだぞ。ちゃんとした遊園地は今回が初です。だから年甲斐もなく結構はしゃいでるよ俺。武者震いが止まらないドラゲナイなんだぜ！

「喜多ちゃん的にはどっから周るのがオススメとかある？」

「そうですね。とりあえずマップも把握したのでパンフレット取ってきてま
「取ってきたんだぜ」

「はつや。優人くん瞬間移動でもしたの!？」

「あと色々買ってきたんだぜ。チュロスとかポップコーンとかも売ってたんだぜ」

「アトラクション周るつつってんのに食べ物買ってきてるし！」

つい買っちゃったんだぜ。

「ここは食べるの大好き後藤さんにチュロスを二本装備して無理矢理テンション上げさせましよう。ほい後藤さん、お得意の場の雰囲気身を任せるんだ。己を解放しろ」

「あつえつ……が、ガシャーン！ うつ、うおつしやくやく！ アトラクション全制覇しちゃいますくくく？ チュロスソード！ ブッピガン!!」

「なら俺もチュロス二本装備でいくぜ！ うおおおおおつ！ 月牙十字衝ツ!!」

「二人共さすがにハメ外しすぎよ」

「あつすみません……」

喜多さんテーマパークマスターなのにドライなの何で。

こういうのってテンション上げてなんぼじゃないの。俺の子供心が純粹にダメージ負ったんだが。

「こういうのは欲に身を任せて行きたいものから行っても後の楽しみがなくなるんです。だから効率的にワクワクを維持するためにも程よく興味が引かれるアトラクションから攻めつつ、近いエリアにある行きたい所に行くのが最適解なの！ 最初からMAXテンションで行っちゃったらそれこそ体力が持たないわよ優人君」

「な、なるほど……。ただ楽しみでも適度に気持ちを抑えとく事も大事なんだな……。これがテーマパークマスター喜多さん……。」

すげえ、遊園地の楽しみ方つてのを完全に分かってやがる！ テーマパーク初心者の俺には高すぎる位置にいるんだな陽キャつて。

そんな訳でいよいよ出発となった時。

一人だけベンチに座ったままのヤツがいた。そう、人混み苦手マイペース山田である。

「家でだらだらしたかった……」

「リヨウまであの大人達と同じ事を……もーじゃあみんなと遊んどくからいいよ！ ぼっちちゃんですら今日はこっち側なのにつ」

「ゆ、ゆうくんの事なら任せてくださいいっ……」

「おい何で俺が面倒見られる側っぽくなってんだ」

迷子にならないようくつついてきてんのはそっちでしょうが。

ちよつと得意気に微笑んでんじゃねえ。何だその特定のアトラクションでは役に立
てますみたいな顔。

と、リヨウさんをほつといて歩き出そうとした俺達の前を横切るように突然何者かが
現れた。

燕尾服を着た……イノシシ頭のゆるキャラ？

「あー！ マスコットキャラクターの瓜ボーだ！ ゆるかわい〜！」

「きゃ〜！ 写真撮つていいですか！ イソスタにあげたいんで！」

かわいい、のか……？

何でイノシ、ウリボーが燕尾服着てんだというツツコミは多分野暮。こういうのはマ
スコットキャラクターやゆるキャラあるあるなんだろう。にしても顔がなんか絶妙に
腹立つな。写真撮られてるのに一切ポーズとらねえし。もしくはそういうキャラ設定
とか？

「ねえ、優人君のカメラで撮ってちようだいよ！」

「ああ、はいはい」

せっかくの遊園地だし一眼レフ持ってきといて正解だったな。

適当に声をかけてシャッターボタンを何度か押していく。喜多さんはポーズや角度を変えながらも一回と言ってくるので、その度に俺は喜多さんと虹夏さんと瓜ボーを撮った。

何度も、何度も、何度も。

「……あの、喜多さん、もうそろそろいいんじゃない」

「うーん、こっちの角度の方が盛れるかしら？ でも優人君のカメラだと加工できないし……やっぱり自分のスマホで撮った方が慣れてるからやりやすいわよね。ありがとう優人君、あとはこっちで撮るわ！」

まだ撮るんかい。

虹夏さんもいつの間にかこっちにいるし。

「喜多ちゃん、カメラ越しじゃなくて肉眼で見る景色をもっと大切にしよう」

「けど虹夏さん、江の島の展望台で絶景見た時に生だところなもんかって言ってたのどこの誰でしたっけ」

「げふん」

はぐらかし方よ。

「? 加工アプリのフィルター通した景色の方がきらきらして綺麗ですけど?」

「喜多さんも展望台の時絶景だから目に焼き付けとかないとって言ってたよな」

「げふん」

だからはぐらかし方よ。

まあいいや、とりあえず。

「虹夏さんもつかいだけ写真撮るんで瓜ボーのところ行ってくれます? ほら後藤さん、

虹夏さん達いたら怖くないだろ。一緒に撮ってやるから行ってこい」

「えっあつ……ゆ、ゆうくんは……」

「俺は撮影係だから」

という事で虹夏さんに連れてってもらった。

リョウさんは……ペンチでチョコロス食ってるからいいか。何か視線めっちゃ感じるけど。実は羨ましくなってきたんじゃないの。

「撮りますよー。えっとおろ……はい、けつそーく」

「久々に掛け声でボケてきた!」

うん、良い感じだ。相変わらず瓜ボーは直立不動だし相変わらず後藤さんは心霊写真っぽくなってるとけどデュロス持つてるおかげか多少マシに見えてる可能性もある。

ほんとと多少。いや微小? 微レ存?

写真も撮り終え近くにあつたショップに行く。

なんでもそのテーマパーク特有のグッズを身に付ける事でより一層雰囲気を楽しめるらしい(喜多さん談)。

そこで、

「そうだ、瓜ボーカチューシャ付けましょうよ! はい、伊地知先輩も!」

「えくこういうの付けるの恥ずかしいんだけどお」

「ぐはあッ!」

「ゆ、ゆうくんが吐血した……!」

「優人君もああなってますけど」

「付けていこう」

くつ……照れながら瓜ボーカチューシャ付ける虹夏さんの破壊力高すぎんだろ……

!

我が生涯に一片の悔いなし!

という訳にもいかないので立ち上がる。店内での迷惑行為はやめようね。

あらかた装備を整え外に出ると、リョウさんがチュロスを食べながら出待ちしてた。店内は飲食禁止だから律儀に外で待ってたのね。そこだけは褒めてやる。

「……ふつ、年甲斐もなくはしやぎおつて。遊園地ではしやいでの小学生までだよ優人」

「わざわざベンチからここに移動してまで言う台詞ですかそれ。絶対みんなが楽しんでるの見て寂しくなったから来ただけでしょ」

「べ、別にそんな事は……ぐぬぬ」

強がってんねえ。お可愛い事。

「……仕方ない、かくなる上は」

「ん? うおつ」

いきなりリョウさんに片腕を掴まれそのまま俺の左腕はがちりホールドされてしまった。

「優人が私がいなくて物足りなくて寂しいって言うから仕方なく混ざる事にした」

「全部見てたわはよその腕離せバカリヨウ。本当のこと言わないと入れてあげないよ」

「やっぱり遊びたいので混ぜてください」

折れるのはつや。ポツキーかよ。

「……あの、リヨウさん？ いつまで俺の腕掴んでるんですか」

「こうしてれば何か欲しいのあつた時おねだりしやすいかと思つて」

「正直に言つてくれてどうも。俺を甘く見るなよこの野郎」

「優人が顔の良い女子に弱いのは周知の事実。いざとなれば近づけて断れないようにする。それでも私から逃げられると？」

「だからこういう時は他力本願に限るのさ。アンタを制御できるセーフティならそこにいるからな。そんな訳で虹夏さーん、リヨウさんに集られてまーす」

「ちよつ、それはずる」

「山田ア!! また給料から引かれないかあ!?! あと腕離せつて言つたでしよ!! そういうのが許されるのはぼっちちゃんだけだよ!」

ふつ……さす虹だぜ。幼馴染の弱みを完璧に理解しておられる。

遊園地でも説教される高校二年生とはこれ如何に。

そういう俺の幼馴染はどこ行つたっけ。

ああいたわ。キターンオーラを纏う喜多さんに瓜ボーカチューシャ付けられてめっちゃ写真撮られてるせいか顔がウーパールーパーみたいになつてる。

片や借金クズに説教、片やコミュ症の撮影会。

多分今のこの世界でこんな変な事してんのは俺達だけだろう。まだアトラクション何も乗ってないのに謎のイベントばかり起きてる件。強いて言えば直立不動の瓜ボーに出会つたくらいだぞ。

ちくしようつ、楽しみにしてた遊園地なのになんか思つてたのと違う！

やっぱこのパーティー編成じゃそう上手く事は運べないのか。どこもかしこもツツコミ所しかねえ。

「あ、優人君、伊地知先輩のお説教そろそろ終わった？」

「説教待ちかよ。後藤さん顔だけじゃなくて体までウーパールーパーになりかけてんぞ。ほら、体表面がヌメってきた。ストレスが蓄積してる証拠だ」

「そこまでウーパールーパーに寄せなくてもいいのよひとりちゃん！」

「ウパ……ウパ……」

「さすがに鳴き声はそうじゃないと思う!」

「つうかウーパールーパーに発声器官はないぞ」

あとその鳴き声はもうウーパーなんよ。

みずうおポケモンなんよ。みず・じめんタイプなんよ。

「よし、リョウもお金全部自分で払うって言ったし仕切り直して再開しようか!」

「もしもの時は私が払いますよりリョウ先輩!」

「あ、お気持ちだけで十分です、ありがとうございます……」

「敬語!?!」

こっつてり絞られたか。天使を怒らすからああなるんだ。

かくして、俺達のよみ瓜ランド巡りはまだまだ始まったばかりである。

「ウパー」

「ウパーになっちゃった」

98. 観覧車はロマンがあつて然るべき

何とかウパー状態の後藤さんを元に戻し移動してきた俺達。

喜多さんの案内の元、最初のアトラクションにやってきたところまでは良かったのだが……。

「あのう、喜多さん」

「遊園地の定番と言つたらまずはこれですよね！」

元気な陽キヤが一つ目のアトラクションに指を差す。

「お化け屋敷！」

「いきなりこれはハードル高いんじゃないかなつて清水さんは思うんですけどそこんとこどうでしょうか御一考のほどよろしくお願いいたします！」

「さあ行くわよ優人君！」

「ちよつと待つてよーう。せめて他のアトラクション行つてアドレナリン出まくつた後

なら勢いでいけると思つたのにさつそくこれかよーう!!」

こういうのつて普通最初は乗り物系に行くんじゃないの。メリーゴーランドとかに行つて徐々にテンション上げていくものじゃないの。

何でいきなりとびきり世界観無視した真つ黒オーラ放つてるお化け屋敷なんだよ。どうしてさつきから後藤さんは得意気な顔して俺と手を繋いでんだよ。袖掴んでるんじゃないのか。

「あつゆうくん、私がいるから大丈夫だよ……へへっ」

「それつて安心していいのか些か不安なんだが」

「(優人君がドツキリ系のお化け屋敷が苦手というのは去年の文化祭でリサーチ済みです。前は私と伊地知先輩の二人組だったから見れなかつたけど)」

「(なるほど……今回はみんなで入れるから優人くんが怖がるところも見れるつて事だねつ。ナイス喜多ちゃん!)」

「っ!」

なんか虹夏さんと喜多さんが握手してるけどどうしたんだろ。

「一気に面白くなつてきたね、優人」

「アンタの場合は俺を面白がるの言い間違えだろ」

文化祭での醜態をリョウさんに見られたからお化け屋敷だけは遠慮したかったのになあ。

初の遊園地でワクワクしてるとはいえ苦手なものは苦手なのだ。本当なら俺だけ待つてるといふ選択肢もあるにはあるが……。

「お化け屋敷だって優人くん！ 遊園地って感じがするね！」

同じくお化けが苦手なはずの虹夏さんがノリノリなせいで俺の逃げ場も潰された状態だ。

怖いもの苦手なんじゃないのかこの人。めちやくちや俺に微笑みかけてくるのは何なの。怖いのは怖いけど自分より怖がってる人がいたら冷静でいられるタイプとかそういう感じか。

こうなつたら仕方ない。逃げ場がないなら潔く進もうじゃねえか。
ええいままよ！

という訳でお化け屋敷に入った。

先頭はリョウさん。次点で俺、その左に俺を気遣つてか手を繋いでくれる後藤さ

ん、右に元気な顔で俺の腕を掴んでくる喜多さん、背後に両手で精いっぱい俺の服を掴んでふるふる震えてるのが虹夏さんだ。

ちなみに俺のリユックはロツカーに預けてきた。

「怖いわね〜!」

嘘つけ陽キャ。絶対その場のノリで適当言ってるだけだろ。

全然顔怖がつてないじゃん。むしろ早く出てこいみたいな感じで言ってるじゃん。

「ね〜……あの井戸から何も出てこないよね……? めっちゃ怪しいんだけどお……優人くん盾にしてもいい?」

そして何だかんだ入ってしまえばしつかり怖がつてる虹夏さんよ。

さっきのは強がりだったって事か? あと俺を盾にするのはやめてください。何もできないので。

「は、はっはっは、怖がりすぎですよ虹夏さん。まだ何も出てきてないじゃないですか。あの井戸だつて怪しいと思わせて実は何も出ないパターンですよきつと。むしろあれがフェイントで本命は後ろから来ると俺は予想してますぜ」

「あつへへ、ぐへへ」

「うんや」

お化け屋敷の出口から出てすぐのところで俺と虹夏さんは見事に崩れ落ちた。

「はあ、はあ……ごふうつ……し、心臓に悪い……お化け屋敷とか怖いものなんて誰得なんだよ……即刻廃止すべきだろあんなの……」

「今回で言えば私得だったわよ！」

「優人くんの叫び声で余計怖かった……」

「優人が一番叫んで怖がってたよ」

「お化け屋敷なんて二度と行かねえ！」

怖くて後半ほとんど記憶ないけどな！

あと絶叫ポイントの度に虹夏さんが馬鹿力で抱き着いてくるもんだから上半身の骨がいまだにミシミシ言ってる件。逃げたくても右腕は喜多さんがホルドしてたし左手は後藤さんが手繋いでるから逃げられなかったのだ。

おかしい、女子と接触できたラッキーイベントだったはずなのに身体的ダメージと恐怖で喜びの感情が一切湧いてこねえ。

人間極限の状態にいとそういうのどうでもよくなるんだな……初めて知った。

「お化け屋敷でなら唯一ゆうくんに頼ってもらえる……楽しい……うひひ……」
「ぼっちは新しい何かにでも目覚めたの」

場所は変わって。

「あつ、次あれ乗りたい！」

「あおう、虹夏さん」

元気を取り戻した虹夏さんが二つ目のアトラクションに指を差す。

「ジェットコースター！」

「お化け屋敷で気分悪くなつた後に高低差の激しいジェットコースターはちよつと抵抗があるといえますか清水さん少し休憩したいなって思うんですがそことこどう」

「行くよ優人くん！」

「天井すらさせてくれない……だと……!?」

やばい、何か……何か手はないか!?

「……ハッ!? 虹夏さんつ、あのジェットコースターつて二列ですよね! だとしたら誰か一人だけ余るし普通に考えて男子の俺が身を引くのがジェントルマンというもの。だからアレは結束バンドのみんなで楽しんできてください! 俺は地上から見守つとくんで! あゝ残念だなく偶数人で乗れてたらなく!!」

「そういえば優人君、前二人でシーパラ行つた時のジェットコースターで凄く怖がつてたわよね」

「……行くよ優人くん」

「え、ちよ、待つ……き、喜多さん!? 何でここで余計なこと言うの!? 虹夏さんエンジン入つちやつたじゃん! 今度こそ怖がる俺を見て楽しもうとしてるよ絶対!」

「多分理由はそこじゃないと思うけど。まあ、私は隣知らない人でも大丈夫だから乗りなよ優人」

面白いからつてそつちに助け舟出してんじやねえ山田ア!!

落ち着け清水優人、冷静に考えればまだ逃れられる手があるはずだ……そうだ!

「ご、後藤さんは!!」 ジェットコースターつて絶叫系だから苦手な人も多いはず。こういう場所にはとことん無縁で乗つた事ない後藤さんにも聞くべきだと思います虹夏さ

ん！」

「あ、それはそうだね」

よし、虹夏さんは基本天使属性だ。人の事を思いやれる虹夏さんなら後藤さんの苦手意識は無碍にしないはず。

後藤さんは言わずもがな臆病な生き物なのでお化け屋敷はよくても絶叫系はおそらく苦手だと俺はみている。現に今もジェットコースターを見てビクビクしてるし確定だろ。

頼むぞ後藤さん、今は君だけが俺の希望だ。

「ぼっちちゃんはどう、ジェットコースター大丈夫？」

「あっはい！」

「よし、行こうか優人くん」

「ウツス」

ああいうこと言われると断れないイエスマンだったね、うん。
希望は潰えたよ。

そして。

「きや~~~~こわ~~~~い!」

「きもち~~~~!!」

「「……」」

「は〜ドキドキした……つてひとりちゃんと優人君が死んでる……!?!」

「お、お客様あ!?! 大丈夫ですか!?! い、今すぐ救急車を……!」

「あつこれはいつもの事だから大丈夫です。ほらリヨウも早く降りなよ。優人くんと違つて全然驚かないしつまんないの……つて、え? 何、手伸ばしてどうしたの?」

「腰が抜けて立てない」

「何でドヤ顔!?!」

どうやら魂をジェットコースターの頂点付近に置いてきた俺と後藤さんをアシカシヨールが終わるまで虹夏さんと喜多さんが面倒見てくれてたらしい。

ようやく自分の体の元へ戻つた俺達が目にしたのは、アシカシヨール終わりにアシカのかん太くんが何かえげつない鳴き声しながら拍手をしていた場面だった。アシカシヨール見た感想が拍手できて偉いという全肯定オタクみたいになつたのは許してほし

い。そこしか見れんかったんや。

その後も俺達は色んなアトラクションに乗った。

お馴染みの空中ブランコだったり、円盤型の乗り物に乗って左右にスイングする絶叫系だったり、高さ六十メートルを4Gの重力で打ち上げ2Gの重力で一気に落下させる絶叫系だったり、なんか魚みてえなモノに乗ってゆらゆら揺られたり、前後に揺れる宇宙船みたいなやつに乗り360度一回転する絶叫系だったり、コーヒーカップだったり、バンジージャンプだったり、大型のメリーゴーランドに乗ったりした。……絶叫系多くない？

これだけアトラクションに乗ると時間が過ぎ去るのも早いようで、気付けば空も暗くなりかけていた。

そんな中、俺はベンチでぐったりなう。

「何で絶叫系ばつかなんだここ……」

「あんなに楽しみにしてたのに一番弱ってるのが優人くんだなんてね」

「お化け屋敷とかジェットコースターの絶叫系が苦手って……実は優人君テーマパークと相性悪いのかしら」

「俺もそう思い始めたところだわ……」

初の遊園地だったからね。シーパラの時は寝不足だったからかもつて思ったけど普通に苦手だったとは。ちゃんと知れて良かったとプラスに捉えておこう。

俺と後藤さん絶叫系乗る度に魂置き去りにしてたしもう乗る事もあるまい。

「それにしても暗くなつてきたね〜」

「あ、じゃあ最後に観覧車乗りましょうよ！ 優人君も観覧車なら乗れるわよね！」

「さすがに乗れるはず。というか乗ってみてえ」

で。

観覧車はそもそも四人乗りでしたときさ！

「……………どうする？」

「結束バンドの四人は一緒に乗るべきでしょ。俺は……………店長達連れて来てもいいんですけど、どうせ今頃酔い潰れてそうだしなあ」

「確信持つて言うけど絶対潰れてるよ」

マジ何のために来たんだあの大人達。

遊園地に来たのにやつてる事居酒屋と変わってねえじゃねえか。

「じゃあ俺は近くのベンチで待つてるからみんなで行ってきてください。下から見とくんんで」

「えー、でも優人くんも乗ってたかったんじゃないの〜！」

「いや、まあそうですね……さすがに定員オーバーはできないですって」

「ならあたし達も分かれて二人と三人で乗るって言うのは？」

「結束バンドは四人で乗るべきって言ったでしょ。そこは変えられません。なんかこう、謎の力がそう言ってます」

「謎の力って何?！」

謎の力は謎の力だよ。

多分きらきらしてる感じのやつ。MAX的なやつ。

虹夏さんが謎の力について唸っていると、喜多さんがにっこり笑顔でこちらに向いた。

そして。

「ならこうすればいいのよー」

よみ瓜ランドの観覧車は最高部の高さで61.4メートルまで上がり、1周するまでにかかる時間は約11分という。

その高さから見る景色は時間帯によつて変わり、空が朱く陽が沈みかけている今は見下ろすアトラクションの全てが夕焼けに染まり、まるで別世界の建造物達とさえ思つてしまうほど幻想的な景色だった。

そう、わたくし清水優人は今この観覧車を一人で乗っています。

絶叫系でもないしゆつたりしてるから何も怖くはないんだけど、あれだね。一言で今の現状と心境を表すなら孤独感だね。

乗る前、喜多さんから言われたのはこうだ。

『私達が先に乗つて、その後に優人君が一人で乗ればいいのよ！ それなら窓からお互いの顔も少しは見えるでしょ！』

というありがたいお言葉をいたただき俺は四人乗りの観覧車に一人で乗る事になった。

店員さんから「ご友人の皆様全員乗っちゃいましたけど、四人乗りなのにお一人で大丈夫ですか？」と聞かれた時、物理的な疑問か精神的な疑問のどつちで捉えたらいいか

迷ったわ。多分両方。

観覧車って一人で乗る人いんのかな。

同乗者と景色を一緒に見て一緒に楽しむものなんじゃないのかな観覧車って。ほんのちよつとだけ喜多さん恨んでもいいかな。

と、そんな時。

俺のスマホから着信音が鳴った。喜多さんからだ。

「もしもし?」

『あ、繋がった! これで優人君も会話に入れますよ!』

ああ、なるほどそういう事ね。

何となく喜多さん達が乗っている方を見ても今はまだ角度的な問題か顔は見えなかった。まあ頂点に近づけば見えてくるか。

『優人君見える? あれってスカイツリーかしら?』

「ん? ああ、んだな」

『ねえねえ、建物の明かりがイルミネーションみたいだよ!』

「ですな」

目の前には誰もいないのに通話で話しながら景色はお互い共有しているという、ちよつとした面白い状況におかしくなりながらも何だかんだみんなと話していると楽しめるらしい。

観覧車の楽しみ方として合ってるかは置いていて。

『ちよつと優人君入口付近のベンチ見て！』

「ベンチ？」

言われた通りにベンチを探して見てみると、

『店長達が子供達のおもちゃにされてるわ！』

「……めっちゃ遊ばれてんな」

『醜い下界を見るのはやめよう。せつかくの景色が台無しになつちやう』

妹にそんな事を言われる店長、哀れ。

けど凄いな。子供達に好き勝手されてるよあれ。頭に空き缶乗せられたり木の枝で突つつかれてたり髪型変えられてたりラジバンダリ。つうかほんとに飲みすぎて酔い潰れてんのかよ。様子見に行かなくて正解だったわ。

下界の事は忘れ空を見上げる。観覧車に乗っているからか、いつもより夕空が近いよ

うな気がした。

もうすぐ陽が落ちる。朝昼夜の順番、その最後の夜。今日という一日の終わりが始まる合図。

腕時計を見る。

時間的に来るならそろそろのはずだが……。

『あ、そういえばもう一日終わっちゃいますけど連絡しました?』

通話の向こうから喜多さんのそんな声があった。

連絡、というのとは間違いなく未確認ライオットの一次審査の事だ。通過か否か。その二択のどちらかを突き付けられる。

『いやまだ……』

『そうですか……』

こんなにも連絡が来ないと落ちたんじやないかって不安になるかもしれないが、確かに落ちるにしても連絡は来ると書いてあったから来ないなんて事はないはずだ。

いや、まあ俺的には落ちてないとは思ってるけど、さすがにこの時間まで焦らされると何も思わないなんてのは無理な話でして……。

通話は繋いでてもこの空間には俺以外誰もいないので緊張感がまた違う。

……大丈夫、だよな？

『……はは、もしアレな結果だったらみんなでやけ酒パーティーでもしよつか……廣井さんも一番の精神安定剤つてよく言ってるし……』

『優人君大変！ 伊地知先輩がぶるぶるしながら道を踏み外そうとしてるわ！』

「虹夏さん落ち着いて！ 一番参考にしちゃいけない人の言葉ですからそれ！ ロックはロックでもルールと法律は守る方のロックでいきましょう！ そっちの方が絶対良からー！」

この前のブツカー事件の時もそうだったけど、虹夏さんって結構打たれ弱い側面あるから誰かがちゃんと見とかないといけないんだよなあ。

普段周りがぶっ飛んでるから自分はちゃんとしなさいといけないって思ってるせいとか、その分ふとした時の反動で一気に精神が崩れ落ちる傾向にある。多分今も目がうりゆうりゆうになつてるに違いない。

もうすぐ虹夏さん達の乗ってる観覧車が頂点に達する。

景色も良い、下はイルミネーションのような明かりが幻想的で、上は朱から黒に染まりつつある神秘の現象を目の当たりにしている。昼夜の入れ替わりが始まった。

『あ、メール来た!』

その時、通話の向こうと俺のスマホから同時にピロンツと通知音が軽く鳴った。

向こうの音源は言葉通り虹夏さんのスマホだろう。そして、同時に通知音が鳴ったという事はだ。

審査の結果が来た。

思わず全身が少し強張る。

『優人くん……いい?』

「……はい」

一緒に結果の画面を開こうという意図だとすぐに理解する。

『いくよ……せーのっ』

「……」

メールを開き食い入るように文面を確認していく。

そして。

そして。
そして。

『厳正なる審査の結果、デモ審査を……通過となりました……!』

同時に、結束バンドが乗る観覧車が頂点に達した。

「……ふう」

『やった~~~~~!! やったわよ優人君つ、私達審査を通過したつて!!』

「へエアツ!? いきなり大声出すなつてビックリするだろ!? とうか俺も確認したから分かつてるつて!」

突然スマホから大ボリュームの音声が聞こえたせいで体が跳ねた。驚きすぎてウルトラマンみたいな声出ちやつたじゃねえか。

まるで音量最大にしてるのを忘れたままイヤホンを耳に差して曲再生した時みたいになつてる。あれマジで心臓に悪いからね。

「……っ」

と、ここで俺は全身の力が抜けていくのを感じた。

自覚する。あんなに大丈夫と思っていたのも、結束バンドは落ちないと思っていたのも、ただ自分がそう思っていたかかったからでしかなく、実際蓋を開けてみれば俺自身も気付かないくらい緊張していたのだと。

この脱力感は緊張の解放からくる安堵だ。

何つうか、まあ、あれだ。よかった。

『優人君！ こっち見てちょうだい！』

「ん？」

わいわいぎやいぎやいしてた通話越しから俺を呼ぶ声が聞こえ、頂点を迎えた観覧車から喜多さん達の方を見る。

ちようどお互いの顔が見える角度だった。

風前の灯火のような夕陽に照らされ。

結束バンドのみんながこっちを見ていて、笑っていた。

お互いが汚れたガラス越しだから画質も悪い。映りで言えばきつと映えるなんてお世辞にも言えないような場面。

それでも。

俺は自分のカメラを彼女達に向けた。

この瞬間を切り取れるのは、きつと今この時だけだから。

「……それにしてもゴンドラ揺らしすぎだろ……どんだけテンション上がってんだ

……」

ともかくだ。

結束バンド。

未確認ライオット、デモ審査——通過。

——

その後、浮かれに浮かれた後藤さんがよみ瓜ランドのグッズを多数身に付けたまま電車に乗ったり、店長に何度も無理を言つて結局焼肉を奢らせたり、またお酒を飲んで酔つたPAさんに別れ際までおかえり係をやらせないかと誘われたのはまた別の話。

99. 番外編：そんなもしものハロウィン

く 佐々木次子の場合く

「よし、いたずらするわ」

「一発目から選択肢がねえッ！　せめてお菓子なかったらにしてももらえません事!？」

「だってこういう時の清水って無駄に用意良いじゃん。絶対お菓子持つてるでしょ」

「ふっふっふ……よくぞ聞いてくれたなさっさんや。バレンタインの時と同様、こういうイベント事とはほとんど無縁の生活を送ってきたわたくし清水優人。しかあーし！

今となつては友達も知り合いも増え青春イベントの一つ一つを噛み締める余裕ができたのさ！　つまりっ、絶対にいたずらされないようお菓子は大量に持つてきているのであーる!？」

「ふんふん、それで?？」

「だからいつハロウィン定番のトリックオアトリートを言われても迅速に対応できるっ

て事よー。今日の俺に死角などないッー」

「まあお菓子持つてるのは予想してたけどね」

「そうだろうそうだろう。そんな君にはお菓子をあげるのでいたずらはやめてね」

「へえ、ご丁寧に市販じゃなくて手作りなんだ。やるじゃん」

「かぼちやクッキーにしてみた」

「王道だねー。あんがとさん」

「良いって事よ。さて、じゃあ俺は田中達と一緒にリア充男子共へ合法的な拷問いたずらし
てく」

「あ、せっかくだしそのクッキー、清水がウチに食べさせてよ」

「る……………え？」

「聞こえんかった？ あーんしてって事」

「いや聞こえてるけど…………。な、何故に俺がそのような事をしなければならぬので？」

「っーか普通にハズいから嫌なんですが…………」

「なに、くれないの？ じゃあいたずらだねー」

「や、だからこれあげるって言ったろ!?! それで成立してんじゃんっ」

「けどそれってウチが受け取り拒否したら貰った事にはならないっしょ?」

「なん…………」

「さあどうする清水く。ウチにあーんして食べさせるか、諦めていたずらされるか。どっちが良い？」

（普通に考えて諦めていたずらされる選択肢は論外。せつかく防止できるアイテムが手元にあるのにそれを使わないのはただの馬鹿だ。さつさんの事だからそんなじゃそこの凡人よりもエグいいたずらなのは間違いないだろうし……。だとすると……。やつぱり食べさせるしかない、か？ あーん、で？ ……いいや、やるしかない。ここでやらないや男が廃るつ。そうだ、たかがクッキー一枚をさつさと食わせるだけでいたずらなしで済むなら迷う必要はどこにもない！ やるぞ清水優人！ 勢いで乗りきれ！）

「お、やる気になった？」

「やってやるさ、平穩のためならばなあ！ ……あつえつと、じゃ、じゃあ……あ、え、

あつ、あーん……」

「言葉の割にめちやくちや照れてんじゃん。何で清水が目瞑ってんのさ。あーんするなら目瞑るの普通こつちじゃね」

「普通を抜け出す事も時には大事なんですのよ！ という訳でそつちから来てつ。これ以上は俺が持ちません！ ハズい！」

「ふくん、まあいいや。はい、ちーずつと」

「……………え？ 今なんかシャッター音が聞こえたような……」

「おー、良い顔してんじやん清水」

「……あの、佐々木さんや……あなた今何をしゃがりましたのでせう……？」

「はい隙ありい。あーんっ」

「あっ」

「……ん、いたずら完了。清水の場合はこうすればいたずらもできるしお菓子も貰えるからお得だよね」

「全部していきやがった……だと……?! さっさんの悪女！ 魔性の女！ ワカメ！ 陽キャー！」

「どんだん悪口レベル低くなってるけど。ウチにとつちや全部褒め言葉になるから意味ないよ」

「ぐぬぬ……佐々木さんめ……!!」

「からかい上手っしょ？」

「それはもう違う作品なんだわ」

く喜多郁代の場合

「優人君、お菓子持ってきてるんでしょ？ せっかくだし交換しましょうよ！」

「別にいいけど……あれ、ハロウィンってそういうのありだったっけ」

「今時ご丁寧にトリックオアトリートって言う人なんかほとんどいないわよ。九割くらいは仮装したり軽いパーティーするくらいじゃないかしら?」

「じゃあお菓子交換は残りの一割って事か」

「イベント事なら最大限に楽しまなきゃ損じゃない? 私はもう友達と結構交換してるわよ」

「さすが陽キャ思考。後藤さんからじゃ一生かけても口から出てきそうにない言葉だな」

「否定材料が微塵も出てこない辺り、私もひとりちゃんに慣れてきたものね。あとでひとりちゃんにもお菓子あげなきゃ」

「そうしてやってくれ。今はどっか薄暗いとこ行ってるだろうし。ほい、これお菓子。クッキーな」

「ありがと。私のは市販だけどマカロンあげるわっ」

「おう、ありが……な、なあ、喜多さん」

「何?」

「マカロンってお菓子にしては結構な値段しなかったっけ? まさか友達みんなにこれ

配ってるの?」

「え、うくん……別にそうでもないわよ。基本は安いのをたくさん買ってるから安心してちょうだい。優人君にはいつもバンドの活動でお世話になってるからちよつと良い物あげようって思っただけっ」

「あーそっか、じゃあありがたく頂戴しておきませう」

「うん、その代わり大事に味わってね。あ、そういえば二日前に伊地知先輩と話してたんだけど、今日のライブは……って、ちよつとごめんさい、ロイン来たみたい」

「へいへい、どうぞ。陽キャのロインは即確認即返事がモットーだもん。大変なことって」

「(さつつーから……? 何で同じクラスなのにわざわざロインを? ……あつ)」

「マカロンって基本総じてめっちゃ甘いから一つか二つで満足しちゃうよなく。でもこのかぼちゃ風味のマカロン美味いな。難しそうだけど今度作って後藤さんに試食してもらおうか。……ん? こっち見てどうしたよ喜多さん。あ、このマカロン美味かったよ。ありがとな」

「ねえ、優人君」

「ん? どうし……あ、あのう、き、喜多さん? なんか急に目元に影が差してませんか……? 雰囲気が一瞬で重くなってきたんですが……」

「私とは普通のお菓子交換なのにさつつーとはあま〜いトリックオアトリートをしたそ

うね?」

「……え、それってどういう」

「ロインで送られてきたのよ。優人君がさっつーにあーんする写真が」

「急にとてつもない頭痛に苛まれてきたので俺は保健室もしくは学校早退させていただきますさようならッ!!」

「逃がす訳ないでしょ! さあトリックのお時間よ優人君ッ!」

くシデロス、廣井きくりの場合く

「いつも通りロインでいきなり新宿FOLLYTに來いと言われて来たはいいけど、何この状況」

「見て分かるでしょ。ハロウィンパーティーよ」

「分かんねえよ。何でライブハウスでハロウィンパーティーしてるのかがもう分かんねえよ。ライブしろよ」

「せっかく姐さんが主催してくれたってのに何よその言い草!」

「ちなみにヨヨさん。このパーティーって何かお菓子とか食材の持ち込みは各々自費だったりします?」

「そうよ。だから私は鍋用にお肉をいっぱい買ってきたわ」

「おいハツセ何でこの可哀相な人にハロウィンパーティーは金がないきくり姐さんがみんなに食料をせびる目的で開いた極悪パーティーだと教えなかったんだ！」

「言っても無駄だからっスね」

「だねえ〜」

「ですう〜」

「シデロスはもはや陥落済みか……」

「おつ、ゆうきゆん来てんじゃーん！ 何々々？ ゆうきゆんも私のために食べ物買いで……パーティーに参加してくれんの〜？」

「もうほぼ全部言ってるよ誤魔化せないほど本音漏れてたよほんとどうしようもねえなアンタ!? 後輩に食料買がせてプライドねえのか!？」

「そんなのあつたら借金生活なんてできねえZE! それよりゆうきゆんトリックオアトリート〜！」

「せっかくのハロウィンらしい決まり文句の一人目がこの人とかッ！」

「なんだよ〜お菓子ないならいたずらするぞ〜うりや〜！」

「近いし酒臭え!?! だあ〜くつついてくんなあ!」

「あつずるい!」

「ずるいと思うなら遠慮なく剥がしてくんないヨヨさんや!? それか志麻さーん! 志麻さんとイライザさんはいずこー!」

「あのお二人なら自宅で普通に過ごしてるっすよ。パーティーの意図を分かりきってるんで元からここに来るつもりもなかったって事っすね」

「救世主いねえのかよ! ならふうさん助けて!」

「うーん、私じゃ難しいかなあ。あ、そうだゆうと君、それより私かぼちゃケーキ作ってきたんだけど、食べてみて」

「相変わらずのマイペースっ。あとで一切れだけ貰ってくからそれよりで済ませないでくれると助かるんだけど! じゃあ幽々さんでもいいからこの酔っ払い引き? がすの手伝って!」

「霊体ならどうにかできるんですけどお、実体だと難しいですう」

「この状況で一番ハロウィンっぽいこと言ってるよこの子! 助けてほしいのにむしろ違う恐怖埋め込んできたんだけど!」

「私に食いもんよこせやあーい!」

「姐さん! 私お肉買ってきたんでそれ食べましょう! みんなでお鍋囲めばきつと楽しいですよ! ちよつと清水、貴方は何か買ってきてないの!」

「何の脈絡もなくここに来て言ってきたのはどこの誰だこの野郎! クッキーくら

いしか持ってきてねえわ！」

「なあんだお菓子あんじゃん！ んもうつ、ゆうきゆんは焦らし上手だなく。最初から言ってればいたずらしなかったのにー。あー、もしかして私とまだくつついてたくて黙ってたなく？ ゆうきゆんのえっちー！」

「……………」

「……ねえ、なんか清水優人の顔変形してない？ 私には鬼に見えるんだけど……」

「見えるっていうか、完全になってるっス」

「ワイルドですなえー」

「ユウトさんの上にいるヒトも怒気に満ちてるので影響されてるのかもしれないねえ」

「あっはっは！ ゆうきゆん顔おっもしれー！」

「全員で一刻も早く姐さんから清水優人を引き離すわよ！ これ以上はなんかヤバイ気がする！」

～伊地知星歌、PAの場合～

「で、気付いたらもうスターリー付近までいたと」

「はい」

「清水君ってキレると記憶なくして気付いたら周りに人が倒れてるタイプの人ですよ
ね」

「少なくともそんなイキリトみたいな事を言われて嬉しいと思う俺はいませんよP Aさん。アスナに似てる彼女もいませんしリア充は滅ぶべしの思想なんで」

「まあいつもお前に迷惑かける廣井が悪いから気にする事もねえよ」

「ところで一つ聞いていいですか」

「なんだ」

「どうしてお二人は頭にかぼちゃだの猫だののカチューシャを付けているのでしょうか」

「ハロウインだからだろ」

「ハロウインだからですね」

「あれ、もしかしてF O L Tでやってたパーティーもあながち間違ってたの？

俺の認識が遅れてるだけで実はライブハウスもこういうイベントに乗つかるタイプ
だったけ??？」

「誤解がないように言っとくと、最初にこれしようって言い出したのは虹夏だからな。
せっかくハロウインとライブが被ってるから乗っかるうって渡してきたんだよ。文句

「があんなら虹夏に言えよ」

「何言ってるんすか店長。文句ある訳ないでしょ。ハロウィン最高じゃないですか！ てことはスタジオにいる虹夏さん達も今仮装中って事ですよね！ ひゃっほーう☆」

「ほんとお前も良い性格してるよな」

「私は高校生らしくて可愛いと思いますよ」

「気になるんでちよつとスタジオ行ってきますわ。あ、そうだ。店長達にもクッキーあげますね。ハロウィンですけどいっつもお世話になつてるお礼も兼ねて。では！」

「……私があいつに勝つてるところってなんだろうな。……年齢？」

「家政婦かおかえり係としてうちで雇いたいです」

「専属で引き抜こうとすんな」

く伊地知虹夏、山田リョウの場合く

「虹夏、優人、トリックオアトリート」

「優人くん来るの待ってたなお前」

「今日トリックオアトリート言ってきたの今のところクズベースト二人だけなんです。なんなの、がめつい人しか言ってるじゃない卑しいイベントだっけこれ」

「俺はライブしないのにもう疲労度がエグいんですが……」

「ところであたしの仮装はどう？ 似合ってるかな？」

「性格も見た目も天使なのにあえて小悪魔っぽいコスプレしてるセンスが最高で最強すぎて写真撮って家宝にしたいです!!!」

「ビツクリするくらい疲労回復したね」

「虹夏さんは見るだけで癒しをくれる範囲ヒーラーですからね。眼福眼福」

「ちよつと何言ってるか分かんないかな」

「レポートにまとめめて後日持って来ましようか？」

「そこまでしなくていいから！」

「いいのか……」

「……あーあ、それにしてもリヨウはフロア行っちゃったし、ぼっちちゃんも喜多ちゃんも着替え中でもうちよつと時間かかるから練習できなくて暇だなく」

「じゃあ俺と適当に何か喋るとききます？」

「んー、それもいいけど……あつ」

「どうしました？」

「……ねえ、優人くんさつきリヨウにお菓子全部あげてたよね？」

「ええ、まあ……面倒だったのでああするしかないと思って。あ、もしかして虹夏さんも

欲しかったですか？　ならまた作ってきますよ」

「じゃあ今は何もお菓子持っていない訳だ」

「？　そうですね」

「そして今日はハロウィンだよ、優人くん」

「はあ……？　えっと、それが何か？」

「小悪魔と二人きりだつてのに、油断しすぎてるのも考え物だよね」

「あの、虹夏さん？　な、何でじりじりとこちらに寄ってきてるのか聞いても……？」

「時間潰しにはちょうどいいかなって」

「はい？」

「優人くん」

「は、はい」

「トリックオアトリート」

「え……………あつ」

　　↳後藤ひとりの場合

「ゆうくん……………家に帰って来てからずっとぐてぐてしてしてるけど……………、ど、どうしたの

？」

「ハロウィンって結構疲れるんだな〜って……」

「あつえつ……?」

「いや、何でもない。それより今日のライブも良かったぞ」

「あつ、ありがと……えへへ」

「けどまさか後藤さんの仮装が白い布被っただけの一反木綿だったとはなー。もう少し良いのあつたんじゃねえの?」

「うっ……あ、あれが全身包み込んでくれて一番落ち着くから……」

「むしろよくあれでギター弾けるなって感心したわ。無駄に凄かったもん」

「あ、へへ、へへへ……そ、そうかなあ」

「虹夏さんが小悪魔、リョウさんが天使（笑）、喜多さんが何かドンギで買ったハロウィンっぽいオレンジの軽装ドレス、後藤さんが一反木綿。……統一感全然ねえな。相変わらずの結束力だわ」

「あつうっ」

「まあフアンの人達は結構笑ってくれてたから結果良しだけどさ。後藤さんにやまだああいっただ衣装は難しいか」

「ぜ、善処します……いや、け、検討します……」

「期待値低くなってんじゃねえか」

「あうう」

「まあいいや。そんじゃそろそろ晩飯から時間も経ったしハロウィン用のデザートでも食いに行こうぜ」

「……え？　でもリヨウ先輩にお菓子全部あげたんじゃ……」

「あれはクツキーの話。後藤さんと家で食べる用に昨日美智代さんと一緒にケーキ作つていたんだよ。どうせ後藤さんは誰かにトリックオアトリートとか言える玉じゃねえし言われる心配もないからな。けど内心じゃイベント事には乗っかかりたいタイプだろ？」

「うっ……」

「だから最低限でもハロウィンっぽい事させてやるかってなって、かぼちゃケーキ作つた訳。まあライブで仮装するの知つたのが今日だからほとんど空振りだけど」

「そ、そんな事ないよ……ゆうくんが作つたケーキ、た、食べたい……」

「……ははっ、おう、んじや下に取りに行くか」

「う、うんっ」

「はあー、やっぱり何だかんだ後藤さんといんのが一番落ち着くわ」

「えっ!?　そ、それってどういう……?」

「ゆーくん!!」

「おっと、どうしたふーちゃん？」

「ふたりもケーキ食べたいから早く早く!」

「はいはい、美智代さんから聞いたのね。みんなの分ちちゃんがあるから慌てなさんな。よしよし、お兄ちゃんと一緒にゆっくり階段下りような」

「ゆ、ゆうくんさっきのつてどういううゝ……」

100. 交友関係はいざという時頼りになる

授業の合間の休み時間。

俺は教室の後ろの方でクラスの男子達と集まっていた。ひと声かければピクミンのように群がってくるくらい団結力があるのは去年のクラスと変わらないか。良い事だ。男子全員の視線を浴びつつ適当な椅子に座ってから俺はゲンドウポーズをした。

「折り入ってお前達に頼みがある」

「声まで寄せてんじゃねえよ。どっから持ってきたそのサングラス」

「誰だお前」

「田中だよ。サングラスのせいで視界まで悪くなってるんじゃねえか」

失敬な。お前の声と見た目に特徴ないのがいけないんだぞ。

ゲンドウポーズってちよつと俯きがちだから顔上げないと誰が誰だか分からないんだよな。

「で、頼みって何なの」

「誰だお前」

「佐藤だけど」

佐藤ね、はいはい。

「俺が去年の秀華祭でステージに立ってた結束バンドっていうバンドのサポート役をしてるのはもう知ってるよな。それで今回その結束バンドが未確認ライオットというフェスの一次審査を通過したんだ。それで次が二次審査なんだけど、これだけは個人の力でどうにかなるものじゃないからお前ら呼び集めたって訳」

「そーいやクラスのグループプロインで喜多さんが一次審査通ったって言ってたな」

「誰だお前」

「高橋ね。声で分からないならもうその真似やめたら？」

十数人の男子に囲まれてる状態でノリで始めてしまったから止め時が見つからないんよ。

「二次審査はネット投票なんだ。一次審査を通過した100組の中から30組まで絞られる。つまりは30位以内に入れば通過できる人気投票みたいなもんだな。そしてこ

の投票形式は一人一回限りじゃなくて一人一日一回。だから日にちさえ変われば毎日同じ人が同じバンドに投票しても問題ない訳だ」

「……単純に今の時点で個々のバンドの人気差があったとしても、友人や知り合いの hands が多数あれば上位に食い込めるって事だね」

「誰だお前」

「鈴木」

基本話しかけてくるのがいつもつるんでるヤツだから後半はもう誰か分かってもついで誰だって聞いちゃうの。許して。

「鈴木の言う通り、人気度の違いはすぐに覆せるもんじゃない。そうなたらほとんど出来レースになっちゃうからな。だから使える手は何でも使う。多少ずる賢くても上位に食い込むにはこの方法しかないんだ。それに別にルールで禁止されてる訳でもねえし無駄な心配をする必要もねえ」

「ふむ、要するに事を大きくしてみんな巻き込んでしまえという魂胆ですな」

「誰だお前」

「善王寺平介ぜんおうじへいすけですぞ」

「誰だお前!？」

こんな凄い名前のヤツうちのクラスにいたか？ 思わずゲンドウ止めちまったじゃねえか。

そういやこのクラスになってからちゃんとは級友の名前とか覚えようとしてなかったな……。ちようどブツカー柳の件でごたごたしてたり結束バンドの事ばっか考えてたから仕方ない。うん、仕方ない。

多分こいつの名前はもう忘れないだろう。インパクトが強すぎる。次再登場する事あるかは分かんないが。

話を戻すためにコホンツと咳払いを一つ。

「まあそんなとこだ。お前らにはこれから期間終了日まで一日一回結束バンドに投票してほしい。そしてそれを友人でも部活仲間でも先輩後輩でも家族でもいい。とにかく連絡がとれて縁のある人達へ片っ端に協力要請してくれ」

「うーん……」

「どうした田中。一応分かりやすく説明したつもりだったけどお前には難しすぎたか？」

「いや、事情は理解したけどよ、いくらルールのに問題ないからってただ票を入れても良いのかなって。ほら、こういうのってそのバンドの曲を聴いて興味を持ったり惹かれた

りしてこそ投票にも意味が生まれる訳じゃん？ ファンでもねえ人に投票してもらってもさ、それってバンドのためになんのか？」

ほう、田中のくせにまともな事を言うじゃないか。一ミリくらいは見直したぞ。

「俺だって何も全員に無条件でなんて思っただけ。そりゃ厚意で投票してくれる人がいたらありがたいって話だけど、俺はあくまで結束バンドをもっと広めたいんだ。片っ端から協力要請してくれとは言ったが、その前提としてまずは結束バンドの曲を一曲だけでも良いから聴いてみてほしい。それで気に入ってくれたり興味を持ってくれたら票を入れてくれればいいんだよ」

「なんだ、ちゃんと考えてたのか。ならいいや。ちなみに俺はもう秀華祭の時から結束バンドのファンだしもちろん投票するぜ」

「「同じく」」

お前ら……やっぱ持つべきものは心の友だよなあ！

「部活仲間とか家族にも宣伝しとけばいいんだろ。任せろ、結束バンドのためならいくらでも力を貸すぜ」

「何より喜多さんのためなら我ら一同全力で結束バンドを広める所存」

「喜多さんのためだもんな。先生にも言っつていつそ学校全体で応援させようぜ」

「昼休みにいつも花壇に水あげてる校長にも聴かせておくよ。喜多さんのためだしね」

「喜多さんの神ボイスのためにも放送部に掛け合っつて結束バンドの曲を流すのもよろしいかと思われ」

「ごぞとばかりのお前らの団結力ほんとすげえな」

ありがたいけどちよつと怖いわ。どんだけ女子に飢えてんだよ。

とうかせめて誰か後藤さんの名前も言っつたげて。あの子も結束バンドの大事なリードギターなんだからね！ 豆知識だけど最近の後藤さんの休憩時間潰しは薄暗くてジメつた場所を探すのが日課らしいよ！ まるでナメクジだね！

ともあれクラス男子全員の協力は獲得できた。

女子の方は喜多さんが軽く声をかければみんな喜んで投票してくれるだろう。華は華に任せよう。こっちはこっちで男子らしく熱くいこうじゃないか。

「よおーし野郎共お！ いっちよ学校全体巻き込んで結束バンド旋風でも起こしてやろうじゃねえかあ!! 声を上げろおーッ!!」

「「「うおおおおおおおおおおーッ!!!」」」

教室内で男子全員馬鹿みたいに声を出してた時、誰かが男子軍団を掻い潜っつてちよん

ちよんと俺の肩を指で突いてきた。

この微かな遠慮味のある突き方は男子じゃないな。ヤツらなら肩を掴んでくるか叩いてくるか脱臼させようと重い一撃をかましてくるはずだし。

そう思いつつ誰だろうと振り返ると、

「やつはろー清水。ちよつちいい？」

「せめてロインで呼びだしてくれたら男子からの殺意を受けなくて済んだんだけどな」

喜多さんの友人筆頭、佐々木さんことさっささんであった。

「後藤さんがどこにいるか教えてほしいって？」

「そつ。喜多が決めたい事あるから呼んで来てほしいみたいなんだけど、喜多はその決めたい事で話し合い中だからうちが駆り出された訳。んで後藤の居場所を知ってそんな人物っていったら清水しかないじゃん？ だから同行お願いしたんよね」

「なるほどね」

という事でさっさんと廊下を歩きながら経緯を聞いていた。

「おおよその事情を聞きつつ後藤さん探しのために一躍買われているのだ。つうか口インで直接後藤さん呼べばいいんじゃないの、とかは思わない。確信を持って言うが呼び出し系のメッセージであの陰キャが応じる訳ないもの。」

「俺に聞いてきたのは正解だな。後藤さんの生態レポートを日々更新している俺からすれば彼女の居場所を探し当てるなど朝飯前よ」

「へへそんなのしてんだ清水。凄いじゃん。引くわ」

「最後に言葉のナイフぶっ刺してくんのやめて」

「ビックリしたあ。いきなりだったから三秒間くらい絶命してたわ。」

後藤さんの行動パターンを知るためにはレポート書くしかないんだって。五日前に書いた物が次の週にはまた更新されるんだからな。進化が止まらないのが後藤さんなんだぞ。いや劣化かもしれない。

「ところで今はどこに向かって歩いてんの？」

「日当たりの悪いところ。おまけに少しジメジメしたところだと尚良し」

「後藤の事ナメクジだと思ってるの」

「何言ってるんだ。それじゃナメクジに失礼だろ」

「そっちなんだ」

人とナメクジを比べるものじゃありません。

後藤さんから粘液は出てきませんよ。本人が粘液になる事はあるけど。

おつ、そろそろかな。

「見つけた」

「え、どこ？ まだ廊下だけど」

「すぐその誰も使っていない階段の下にいる。確か物置きになってたはずだから見つかりにくいんだよな」

「いやいや、だから何で見た訳でもないのに分かんのか。というか学校の構造に詳しくなっていない？」

「後藤さんの気配なら大体分かるんでね。あとあの子が隠れても見付けられるように校内の構造は全て把握してるんだぜ」

「そこまできたらもはや愛だね」

何故そこで愛ッ!?

「うわ、マジで後藤いたじゃん」

「えっ、さっささささん!! なんぞっ……!!? あ、ゆうくん……」

「悪いな後藤さん。お前がどこに行こうが俺は必ずお前を見つけてしまう運命のよう
だ」

「あっえっ? え?」

さっさん来て頭ん中混乱してるとはいえ純粹に何言ってるんだろうみたいなの顔す
んのやめろ。

自分で言っておいてちよつと恥ずかしかつたから。

「良かったじゃん後藤。王子様は地球のどこにいても見付けてくれるってさ」

「え? えっ? おうっ……え??」

「まあそんなどうでもいい事は置いといてさ」

話振っておきながら一瞬でほっぼりだすさっさんマジパネエっす。

あ、良い事思い付いた。

「それじゃあとはお二人でこゆつくり〜」

「え!! ゆ、ゆうくん?!? ちよ、待っ」

「後藤さんに用があんのはさっさんだからな。俺は特になし先に教室に戻る事にする

よ」

「お、置いてかないでえ……!」

「次の授業が始まるまでには戻ってくるんだぞー」

「ゆうく」

「そんで後藤さ〜」

「(この流れで普通に話しかけてきた……!?)」

二年になってから少しは経ったし、そろそろ後藤さんも俺と喜多さん以外の人も話せるようになってほしいと思ってたところだ。

さっさんなら相手のキャラとか問わず普通に話してくれるし多少は仲良くなれるはずだ。実際今日も喜多さんに言われたとはいえ後藤さんを探す手間すら疎ましく思う事なく来た訳だもんな。

だから多分大丈夫だと思う。俺と喜多さんの共通の友達であれば後藤さんもきつと少しは話しやすいかもしれない。

あとは単純にあの二人の絡みがどんな化学反応を起こすか楽しみだったりする。帰ってきたら聞いてみるか。

清水優人はクールに去るぜ……。

授業が始まる直前、後藤さんが隣の席に戻ってきたので普通に聞いてみた。

「さっさんと話してどうだった？」

「投票期間終わるまで学校行くのやめたい……」

あの短時間に何があつたんだ。

「おはようございまーす」

「あつ、優人くんおはよ〜！」

授業も終わっていつも通りスターリーに行くとき虹夏さんが出迎えてくれた。

学校終わりの疲れを天使に癒してもらえるのって普通にござ褒美ですよね。何ならこのために学校通つてるまである。

「あれ、ぼっちちゃんと喜多ちゃんは？」

「なんか決める事があるみたいで少し遅れるって言っていました。俺はバイトもあるので先に来たって感じですよ」

「なるほどね。そういう事ならさっそく優人くんにもこれ貼るの手伝ってもらおうかな！」

「と言いますと?」

「これ!」

自信満々に虹夏さんが見せてきたのは一枚のビラ。

そこには未確認ライオットのデモ審査通過と次のネットステージ、つまりは二次審査への投票を呼び掛けるための工夫が施されていた。

QRコードの先に飛ぶと直接サイトに移動し結束バンドへの投票ができるというシステムだ。

デザインセンスのある虹夏さんが作ってるのもあってかビラの出来も素晴らしい。目立ちやすいカラーにする事で他者の目に入りやすくしてあるのがまた良いね。写真もかつて下北付近の駐車場で撮ったきさらジャンプのやつだし。

「おお、ビラ作ってたんですね。これをどこに貼ればいいんですか?」

「とにかく人の目につきそうなところに貼って!」

「分かりました。スターリー内をこのビラで埋め尽くしてやりましょう!」

「うん、やつちやおう!」

「ツツコミ不在の恐怖」

リヨウさんアンタもビラを貼るんだよオ!!

熱心でウキウキしてる虹夏さんをもっと眺めてたいんですよぼかあ。目に保養とはまさにこの事だな。

「埋め尽くすのは気持ち悪いから程々にしとけよ」

「何言ってるんですか店長。実は自分が一番応援したいくせに。あでつ」

「うるせつ。お前はさっさと荷物置いてバイトの準備してこい」

「へいへい」

照れちやつてもう。チョップの威力弱いのがデレを隠しきれない証拠だよ。

虹夏さんから何枚かビラを拝借し荷物を置きに行く。掃き掃除とかは既に虹夏さんがやってくれてるみたいだから今日のバイトはゆつくりできそうだ。

さて、俺もパパッと済ませてビラ貼りに専念しますかね。

「おはよー(ぎ)いませー!」

「お、喜多ちゃんぼっちちゃんおはよう」

しばらくすると後藤さんと喜多さんがやってきた。

結構遅かったな。そういや決めたい事って何してたんだろ。俺は何も聞かされてないけど結束バンドとは関係ない事かな。

「聞いてください！ クラスの子達投票してくれてましたよ〜！ あとイソスタのフオロワーさんとよく行く行くシヨップの店員さんにも宣伝しておきました！」

「おお、さすが喜多ちゃん！ 人脈ある人は違うね〜！」

「優人君もクラスの男子達に言ってくれてたものね！」

「え、そうなの？」

「ええ、一応。うちのクラスは無駄に団結力高いので今頃部活中の仲間とか先生含めて巻き込んでるかもしれません」

「感染力高いね!？」

せめて伝染力って言って。いやどっちもどっちか。

「あつそうそう！ クラスの女子達でアレ考えてきましたよ！ いいのできたわよねひとりちゃん！」

「えっあつはい……」

「何々？ バンドが拡散されるような秘策とか？ 優人くんは知ってるの？」

「女子達でつて言つてたから俺は何も知りませんよ。まあ喜多さんの事だから期待値は五分五分ですかね」

「この陽キャは時にこちらが思いもよらない事を考えだす時があるから油断ならぬのよね。」

「優人君は教室で男子達と話してたから知らないのも無理ないわ。その時に女子だけで話してたもの」

ああ、俺があいつらに宣伝頼んでた時ね。

だから途中さっさんが後藤さん探すために俺のどこ来たのか。

「で、何を考えてきたんだ？」

「スローガンよ！」

「え？」

「スローガンよ！」

いや二回言わなくていいから。聞こえた上で「え？」って言ったんだよ。

「天まで轟け魂の音！ いざ掴み取れ勝利の栄冠！ 伝説作れ結束バンド!!」
うわびつくりした。

あの後藤さんがいきなり奇声でもなく普通に声を張り上げただと……？

「良い声よひとりちゃん！ どうですこのスローガン！」

「めちやくちや暑苦しいイベントにされてる!?!」

「五分五分外しちやいましたね」

何となく予想はしてたけど。

「あくなんかもっと投票してもらえそうな良い策ないかな」

「裏工作してる人ならあっちにいますよ」

ノルマ厳しそうにしてるバンドの人達に向かって店長が何やら票を入れたらノルマ
チャラにするとか言ってる。

ほんと身内には激甘だなあの人。いいのかそれで。

「ちなみに私は毎日入れてますよ。微力ながら知り合いにも広めてます」

「え、ありがとうございます！ PAさんのプライベート全然知らないから交友関係とか気になる！ 普段はどうしてるんですか!?」

「週末は麻布十番のオシャレなバーで高級酒飲んでますよね！」

「あついや、まあ……」

「この前の遊園地で毎日コンビニ弁当とか結構ぼやいてなかったっけ」

最近PAさんから次お料理作って来てくれる日とかありませんかって聞かれたし、実は一番人の愛情に飢えてるのこの人なんじゃないかって思えてきた。

店長には何だかんだ虹夏さんいるし、きくり姐さんはいざとなったらヨヨさん辺りがいるもんな。

「うっ……ま、まあ？ 普段はグローバルな友人達と新時代コンテンツについてのオンラインサロンとか開いてますよ……」

「きゃー！ さすが大人の女性！ イケてるわ〜！」

新手の詐欺師みたいにふわふわした言い方だけど大丈夫なのかそれ。

喜多さん将来危ない勧誘に引つ掛かりそうで怖いわ。後藤さん含めて見張っておかなきゃ……。

と、その時俺のスマホからロインの通知音が鳴った。

「あ、師匠と二号さんか」

「どしたの〜？」

「実は投票審査の事を個別にメッセージで送って宣伝を頼んでたんです。それを見てくれたのか師匠と二号さんから報告があつて」

「お、どんな報告!？」

「え〜つと」

それぞれから来たロインのメッセージを見てみる。

『やつほ〜！ 当然だけど私達も毎日票入れてるよー！ 友達にも宣伝しまくってるから期待してて！ ここまで来たらランキングも上げるとこまで上げちゃおう！』

「師匠からはこんな感じですよ」

「え〜？ ちよつとちよつと〜、これ楽々30位圏内入っちゃうんじゃない〜？」

師匠からは明るい雰囲気そのまま伝わってくるようなメッセージだった。

そして二号さんは。

『ねえ、私達って老害とか古参ファンとか腫れ物扱いされたりしないよね？ 新規ファ

ンの人達に民度を低くするような人がいないって信じてるよ……。けどもう、私達だけが知ってる秘密のバンドじゃなくなってきたんだね……。嬉しいけど少し寂しい……。でもずっと結末バンドの事を応援してるよ……。あなたもサポート頑張ってるね」

「二号さんは……。病んでますね」

「なんで!?!」

なんだろう、着実にこじらせファン化していつてる感じがある。

まあこういうのはバンドとかアイドルの古参ファンあるあるなんだろう。二号さんには師匠もいるから大丈夫だとは思うけど。というかあの二人にはMV撮影の時にお世話になってるしロイン交換もしてるから結構結束バンドと関わり深い関係なんだけど、その辺は自覚してるんだらうか。結構ポイント高いと思うんだが。

……よし、とりあえず見なかった事にしよう。

「ともかく、本番の結果が出る一週間前に中間発表もある訳ですし、まずはそこを見据えて頑張らしましょう」

「そうだね! いっぱい宣伝しよう!」

「が、頑張ります……。っ」

「後藤さん家族以外に宣伝できる人いたっけ?」

「……………」

「うん、そうだよな。俺が悪かった。な？ 帰りにコンビニでスイーツ奢るから今溶けるのだけはやめて！ これからバイトなんだって！」

「おお、珍しく優人くんがぼっちちゃんの扱いを間違ってる」

「二号さんの病みメッセに動揺してたんですかね？」

101. 広い駅構内ほど迷子になりやすい

「うばばうばぶぶあゝゝゝ……」

「よし、行くぞ……っとうおっ!? え、お前らどうした!？」

「なんかみんな顔溶けかけてませんか!? あっ、後藤さんと清水君が一番溶けてます(物理)——」

あああゝ? なんだよ、店長かよお。何だよおPAさんにケーキなんか持たせて何するつもりだよお。

こちとら今そんな気分じゃなばばばあゝゝゝ。

「優人が上と下から同時に溶けてやがる……。おい虹夏お前もぼつちちゃんみたいな顔になってないで何があつたか教えろ！」

「……中間結果が、48位で……」

「……えっ」

んえj d n く えいおsのn d d k n べあいbのえばのんかs k n d b ゝゝゝ。

「清水君がだんだんジェル状に!？」

「あれ? PAさん何そのケーキ……」

「えっあつ」

「(おいそれ今すぐどうにかしろ! 何とか誤魔化すぞ!)」

「(誤魔化すと言つてもどうするんですかつ。ケーキとかお祝い以外に用意しないでしよう!)」

「(何でもいいからやれ! フォローなら私もするから!)」

「(絶対ですよつ。ええと……それっぽく誤魔化す手は……はっ!)」

「PAさん?」

「店長すみません! せえや!」

「あん? 何がだぶあばあ!？」

「PAさん!?! 何でいきなりケーキをお姉ちゃんの顔面に!？」

その後、色々騒ぎが起きたおかげで俺は何とか元に戻る事ができた。ジェルになった俺をかき集めてくれた喜多さんには感謝なのだが……。

元に戻った時、気付いたら店長の顔面がケーキになっていたのだ。何を言っているの

か分からねえと思うが俺自身何を言ってるのか分かってない。顔交換したの？ アンパンマンかな？

PAさんがやったケーキで顔交換は失敗したものの、俺達を平常に戻すにはうつつだけでみんなもとどろあえずはいつも通りに戻った。

店長は今顔に付いた丸ごとケーキをPAさんに取ってもらいながらこちらの話を聞く事にしたようで。

「え~~~~ん！ 何か上手くいく感じだったじゃーん！」

元に戻ってもテンションや調子が戻る訳でもなく、虹夏さんの嘆きがスターリーに響く。

「今までたくさんの人に協力してもらったのに100組中48位なんて……。ここからあと一週間で30位圏内なんて無理だよ〜」

二次審査。ネット投票の中間結果がサイトに出たので俺達は一緒に見る事にした。

虹夏さんの言った通り、頼れるところ全てに協力してもらって毎日投票してもらっていたから多少の期待はしていたのが、蓋を開けてみればの48位。

100組いる中でほぼ真ん中辺りに位置している。50位以下じゃないだけマシと

いう見方はおそらくできない。

何せ期間はあと一週間のみ。今のままでたった七日で30位以内に入るのは当然
敵しいだろう。学校全体を巻き込んだり喜多さんの伝手を頼ってもこの順位が限界な
のかというところで、俺達はみんな仲良くテーブルで溶けていたのです。はい簡単な
解説終了。

何度サイトを更新してみても中間結果が変わる事なんて都合の良い事もなく48位
のまま。

少し上にスクロールしてみれば、上位陣の名前が出てきた。

「シデロスは三位か……。俺つてばすげえ人達の下でサポートさせてもらってたんだ
な。なのに俺ときたらこういう時こそサポート役として役に立つべきなのにあんだ
け宣伝してこの順位か……。ははは、カレーパンになりたい……」

「優人君戻ってきて！ あなたはアンパンマン世界の住人じゃないわよ!」

「こいつ打たれ弱い時はとことん弱いから……。自分が活躍すべき分野で中間とはい
えこの結果だから相当精神ダメージがかいんだろ」

「お姉ちゃん冷静な分析してる場合じゃないでしょ!? 優人くんあたし達より落ち込ん
でるんだからね!」

「それに優人は所詮人間だしあつちの世界に行っても顔の交換はできない」「別にそこ重要じゃないから！」

そうか……顔交換できないから元氣百倍にもなれないのか。

たとえばあつちに行っても愛と勇氣だけしか友達いない人いるもんな……。

「あー、まああれだ。上位陣は頭ひとつ抜けてるかもしれないけど、下位層は大差ないだろうしこれに関しちゃうもう運だな。そんな甘い世界じゃないって事か」

「何で追い打ちかけるの！ あとそれあたし達にも効いてるんだからやめて！」

「運も実力の内って言いますしね……」

「え、下位層は大差ないだろうし順位が上がる可能性もまだあるって言ったつもりなんだが……」

「そんなツンデレ発言分かるのは俺くらいですよ店長」

「あ、元に戻ったわ」

「オタクはツンデレに釣られやすいからチョロい」

おい山田今なんつった。お？

「なんか不本意だが……まあ優人が戻ったんならもういいか。とりあえず今は落ち込ん

でないで練習しとけ。今日はスタ練だろ」

「はーい……みんな行こっかあ」

「そのスタジオリュウ時から別のバンドが予約してつからその前には終われよー。あと優人、お前は今日途中までバイトだったな。気分が沈むのは分かるけど、仕事はちゃんとやってくれよ」

「分かってますよ……」

悲しい事があっても仕事は通常通りしないといけない。

社会人になったら落ち込む余裕もなくなってくるのか。大変なんだなあ。

後藤さんにごつちの心配はせんでいいと適当なアイコンタクトをしつつ、みんながスタジオに行くのを見送り掃き掃除から始めようとすると、いるはずの人がいない事に気付いた。

「あれ、そういやPAさんいなくないですか？ さっきまでいたのに」

「……外に休憩でも行ってるじゃね」

「……」

ほお〜ん、これは嘘の匂いがプンプンするぜえ〜。

「店長」

「何だよ」

「嘘ですね」

「何がだよ……」

「あんな不健康肌白PAさんが外なんかには休憩行く訳ないでしょ」

「お前あいつの事なんだと思ってるんだ」

表向きは綺麗な人だなくって思ってます。裏では高校中退インドアスプリットタン不健康美女だと思ってるけど。

結局どっちも美人扱いなのは本当に顔だけは良いからだ。いや性格的にはやさぐれ三銃士の中でも一番まともな部類には入るか？ ……うん、比べるとこがまず違うね。どんぐりの背比べだね。

その時、微かに出口の方から話し声が聞こえた。

「……PAさん、誰かと話してる？」

「あ、ちよっ」

店長の声を無視して出口に向かう。

すると。

「……」

「あつえつとお……」

両手に宅配のピザと寿司を持っているPAさんが俺を見ながらわなわなしていた。

それはもうわなわなしていた。ついでにおろおろもしていた。何だろう、大人の女性が慌てている姿というのは何だか面白くてもつと見ていたくなりますな。このまましばらく見つめてみるか。

「し、清水君？ こ、これはですね、あのう……あれなんですつ。違うんですつ」

何が違うんだろ。ぼくちんさっぱり分かんないな！

「な、何かしらのお祝いのなやつかもしれないねつ」

お祝いって言っちゃってるよもう。ほとんど隠せてないよそれ。

「あんまからかってやるなアホ。頼んだのは私だし言うなら私に言え」

「店長早とちりしすぎじゃないですか」

「よし、しげく」

「言えって言ったから言ったのに酷くない!？」

と、店長からのありがたい拳骨をいただいた俺は掃除をしながら訳を聞いた。

まあさっきのケーキの件から薄々思っていたがこのツンデレ店長、結束バンドが中間結果で30位以内に入っていると根拠もなしに確信してたらしい。それで前祝いにピザと寿司を頼んでたらさっきのアレに出くわしたって事ね。

う〜ん……シスコンシスター、結束バンドに対する思いが重すぎる。

まだ最終順位の発表時に通過してたら分かるが、中間の時にこれはやりすぎでっせ。早とちり以外の何物でもねえじゃねえか。うん、寿司美味い。

「何食ってんだお前は」

「だつてせっかく頼んだのに食べなきゃもつたいでしょ。あとで休憩時間になったらみんな呼んで食べましょうよ。前祝いにならなかつた代わりにやけ食い大会の始まりだZ/E☆」

「さてはまだ地味にダメーz残ってるなお前」

傷はそう簡単に癒えないんだよ。

ちくしょう、このピザしよっぺえなあー!!

特に変わり映えのしないバイト業務を終え、予定通り19時前にスタジオから出てきた結束バンドのみんなを出迎えて今日のスケジュールは全て終わった。

「まだどこでバズるか分からないですし諦めずに頑張りましたよね!」

「もちろんだよ! 優人くんも気落ちしすぎないようにね! じゃあまた明日!」
「はい」

虹夏さん達と別れ駅へ向かう最中、

「とは言ってもやれるだけの宣伝はしてるのよね……。あれだけやっても30位以内に入れないなんて。エゴサしてると呟いてくれる人結構いるんだけどな」

「……」

「優人君、大丈夫?」

「……え? あ、ああ、大丈夫だよ。色々考えてただけだから」

「伊地知先輩も言ってたけどあまり根詰めすぎないようにね? 優人君が私達のためにたくさん頑張ってくれてるのはみんな知ってるんだから」

「分かってるって」

ぐいっと、小さく俺の服を掴んできた後藤さんにも落ち込んでる訳じゃないと目で伝える。

「そういうや昼休みのスローガン声出し練習で喉潰れてるのまだ回復してないのか。普段からあんま声出さないせいで回復遅れてる説はありそう。」

「うーん、けどSNSの宣伝もいっぱいしたのに何が足りないのかしらねえ。やっぱり純粹に知名度?」

「それもあると思う。最近では路上ライブの回数も増えて下北だと結構知ってくれてる人も増えてきたけど、結束バンドの活動日数自体はまだ浅い部類だ。一年も経ってないしな。そういう意味じゃもつと前からやつてる学生バンド達より認知度が低いのも不利になってる要員の一つだろうさ」

「私達より上位にいるバンドは活動歴が長い分の知名度と実力も備わってるって事ね……どうしたらいいのかしら」

だからといってそれだけで結束バンドが負けてるとは思えない。

「実力も上がっていったらいいってライヴの度胸も付いてきてる。曲のクオリティーやMVだって良かったんだ。だから結束バンドが上位に入る素質も充分にあるはず。」

そうなることや足りていないのは、宣伝力か……？
もつと対策を考える必要が、

「あ、SNSで思い出したけどファンの中にちよつと変な人がいるみたいだね！」

「……………変な人？」

「そう！」

思考の海に沈みかけてたら聞き流せない単語が聞こえてつい反応してしまった。言
いながら喜多さんはスマホを操作しツイッターで結束バンドのエゴサをします。
ややあつてその画面を俺達に見せてきた。

「どうやら高校生のコスプレをして結束バンドの曲を聴かせてるお婆さんがいるらしい
のよー！ ほらー！」

画面を見ると、

『なんか女子高生のコスプレした変な人に結束バンドとかいうバンド勧められた』

『結束バンドお婆さん可愛かった！』

『犬を連れてコスプレしたお婆さんが結束バンドを勧めてくる事案が発生してるらしい』

な』

『結束バンドおぼさん？ 新しい都市伝説か？』

『今日コスプレしたおぼさんに結束バンドってバンド勧められた……。東京は不思議な街だ』

『結束バンドおぼさんの出没範囲は神奈川と東京らしいぞ』

『この前渋谷で結束バンドおぼさんに会ったわ。最初不気味だったけど普通に曲良かったからネットでライブ映像とか見てた』

「……」

「優人君？ どうしたの？」

「い、いや、何でもない」

俺の脳裏に浮かんだのは喜多さんが後藤さんの家に泊まりに来た日。

後藤さんの部屋の前で娘の制服を着ていた美智代さんの姿を思い出す。

いやあく、まさかね？ さすがにね？ ないない。ないって。

……ないよな？

「な、何か怖いですね……」

「あ、ひとりちゃん喉回復した？」

「あつ、そのようです」

一瞬寒気したけど多分気のせいだ。大丈夫、美智代さんはそんな非常識な人じゃないって俺知ってるもん。

ああいう格好をするのは家の中だけだって。きつとそうだ、そうに違いない。

「……後藤さん、美智代さんって最近ジミヘンの散歩時間長かったりする？」

「？ さ、最近は……うん、ちよつと長いかも？」

「……」

まさかね？

謎の疑念と不安を抱いたまま俺達は電車に乗る事にした。……まさかね？

喜多さんとも別れ、電車の中で俺と後藤さんは二人して黙りこくっていた。

いつもより早めの解散になったからか帰宅ラッシュよりも少ないものの乗客はそれなりにいる。ギターを背負っている後藤さんと俺は邪魔にならないようお互いドアの近くで立っていた。

「ゆうくん……」

「ん?」

「わ、私のギターヒーロー垢で宣伝す」

「それは結束バンドの力じゃないからしないって二人で決めただろ」

「……うん」

今のところ考えられる限りの宣伝はやっている、と思う。

多分俺が思い至っていない手段もあるかもしれないが、それでも思い付く範囲での宣伝は全てした。

だけど通過範囲には入れていない。それが己の未熟さを見せ付けられているようで俺の心を茨の蔓みたいなのが縛り付けてくる。

ネット投票。バンドの実力以外にも知名度や宣伝力と広報力が試される二次審査。結束バンドのみんなとは違ってここに力を専念できる俺がもつとしっかりしないといけないってのに何やってんだ。

正直後藤さんのギターヒーローとしてのアカウントで宣伝すれば大きな宣伝にはなるとは思う。

しかしそれは彼女の思いと信念を裏切る事になる。それだけは絶対にダメだ。ここは結束バンドの力だけでこの試練を突破しないと意味がない。だから虹夏さん達も決してギターヒーローを活用しようなんて一言も言ってこなかったんだ。その思いを無

下にするな。

考えろ。

他にもまだ手段はあるはずだ。この一週間で逆転できる方法を何としても探し出せ。

「あつ、ゆうくん、降りる駅だよ……」

「ん、ああ」

いつもの乗り換えの駅で降りる。

危ない、後藤さんに言われなきや気付かなかつたところだ。次々と降りてくる乗客の人混みに流される形で俺達も歩き出す。

いつもより早い時間だからか乗り換えという事もあり人が多い。

一応はぐれないよう、というか消えないように後藤さんの手を引いて歩いていく。人の流れに身を任せる。

その間にも俺は思考に時間を費やした。

使っているSNSを増やすか？ トwitterやイソスタ以外にも、今はチックトックなど流行りの曲を取り入れて創作ダンスをするアプリが人気の世の中だ。それで結東バンドのアカウントを作って喜多さん辺りに自分達の曲を使用しながら創作ダンスをしてもらえばある程度の宣伝にはなるかもしれない。

だけどそれで一発逆転ができるほど一週間という期間は長くない。アカウントのフオロワーを増やすのにもある程度の時間がかかる。くそ、こうなるならもっと早めを始めさせておくべきだったな……。

あとは何かないか……？

「あの、ゆうくん」

「……」

「ゆ、ゆうくんっ」

「……ん？ ああ、悪い、何？」

「えっと……どこ、どこ？」

「……え？」

後藤さんに言われて周囲を見渡してみる。

……どこ、どこ？

多分渋谷駅のどこかとは思いますが、なにぶん俺達は神奈川県で東京に住んでる訳じゃないからこの辺の駅構内に詳しいはずもなく、人がいっぱいいるからどっちに向かえばいいかもよく分かっていない状況だ。

人の流れに身を任せすぎて考え事に耽っていたから全然違う方面に歩いてる事も気

が付かなかつた。清水優人、一生の不覚。

いやいや、そうじゃなくて。

まずはマツプがあるところに移動しないと。

「ごめん後藤さん、俺のせいだ。とりあえず位置が分かるところまで移動し」

「ほら！ 早くしないとスタジオ遅れるよ！」

と、ここで何だか聞き覚えのある声が聞こえた。

俺の視線はほとんど無意識にそちらへ向かつていく。

「あつ」

「あつ」

「……ッ!!」

ツンデレ二号こと我らがヨヨさん率いるシデロスの面々が目の前にいた。

そして後藤さんは気付いてないフリをしようと首を180度ぐりんつと曲げて自ら折っていた。これで生きていられるんだから不思議だよね。

たっぷり五秒間こちらを見ていたヨヨさんは突然ハッと意識を取り戻すと、

「ちよ、ちよつと後藤ひとり！ 何で目が合ったのに無視するのよ！ ちよつと傷つくんだけど！ ちよつとだけね！」

「あついや……」

「すいません、その子そういう性分なんです。顔見知りにも条件反射で気付かないフリしちゃうタイプの子なんです許してやってください。」

「ゆうさんお久しぶりです。こんなところで何してるんですか？」

「よおハツセ。ただいまわたくし達神奈川の民は帰宅してた最中に迷子になったのです」

「こんなところで何してるんですか？」

「二回も聞かないで。我ながらアホだと自覚してるから。」

「ゆうと君達帰宅途中に迷ったのお？ 結構ドジなところもあるんだね。あ、そうだ、じゃあせつかくだし私達と一緒に来ない？ 今からスタジオに入って練習するんだ」

「あれ、今帰宅途中って言ったばっかだよ俺」

「面白そうっすねそれ。いいじゃないですか。ぼっちさんも一緒に行きましょうよ」

「あつはい！」

快諾しちゃったよこのイエスウーマン。

絶対嫌だと思ってたんだろうけど断れない精神出ちゃったよ。涙目でこっち見てるけど承諾したの君だからね。

「ちよつと勝手に決めないでよ！ 私は嫌だからね！」

お、ヨヨさんのツンが発生した。いいぞリーダー、そのまま強気で行けば俺達まっすぐ帰れるから頑張れ。

「いいじゃないですか。最近ゆーさんと連絡取れてないし会えてないから不満そうにしてたのはヨヨコ先輩っすよ」

「え？」

「なつばつ!! ち、違うわよ!! 毎回こつちからロインするのもあれだし清水には結束バンドの方で忙しいと思うから放置してるだけであつて……というかたまには貴方から送つてきなさいよとか思つてる訳じゃないからね！」

「な、何かすみません……」

「先輩くんがらがりすぎて台詞めちやくちやになつてるっすね」

それを面白がつてる君も中々良い性格してると思うよ。

「あてこのスタジオ五人以上なら格安で大部屋借りられるっすよ」

「……ま、まあそういう事なら着いてきてもいいけど……？」

「(チヨロいっす)」

「チヨロいなあ」

「あばばばばばばばばばば」

102. 一秒先へ向かう者と、一秒先が訪れるだけの者

「わゝ部屋広い〜!」

「立派なスタジオっすね〜」

何故かシデロスのみんなに着いていく事になり、軽くコンビニへ寄った後やってきたのは渋谷のとあるスタジオ。

それも結構大きい部屋のだ。スターリーにあるスタジオより余裕でかい。何ならソファとかも置いてある。

「ゆうくん……私達は何でこんなところにいるんだろうね……」

「自業自得じゃねえかな」

俺は帰る気だったのに最初に承諾したの後藤さんだからね。ノーと言えない日本人代表格じゃん。

そして大部屋に釣られたヨヨさんは目をキラキラさせながらアンプの前で屈んでい

た。使いたかったのねそのアンプ。

「で、でもゆうくんがいてくれるからまだ平気かも……」

「さいですか。つうか成り行きで一緒に来たはいいけど、俺達何しときやいいんだ？」

「うっ……!? た、確かに……いたたまれなさすぎる……。ここはスマホのホーム画面を意味もなくスライドさせて連絡とつてますよ今忙しいんですよ感を出すしかないよゆうくん……っ」

「いや普通に俺と喋っとくだけでいいじゃん」

「い、言われてみればそうだった……」

人って追い込まれるほど冷静な判断できないもんな。いや後藤さんは追い込まれなくても普段から冷静な判断できてないか。

荷物を置いて適当にシデロスの練習風景を眺めながら後藤さんと喋るところと思っ
ていたら、

「ちよつと、時間もつたいないから早く準備してよね」

「あっはい！」

だから何も分かってないのはいとか言っちゃダメだつて。

「あつじやあギターから音出しワンツ……」

「なんで貴方が仕切ってるのよ!?　そういうのはそのマネージャー(仮)の役目だから貴方はギター持つてこつち来ればいいの!」

「ま、マネっ……?」

「ああ、そゆことね。後藤さん、あとでセッションするからそれにまざっていいってさ」「えっえっ?」

まあ連れて来てもらったのは事実だし前のサポート期間の時みたいにまたマネージャー役くらいは請け負いますか。

とりあえず頭上にぼのぼのみたいな汗を吹き散らかしているぼちぼちにギターを持つてこさせた。うーん、ごことごとの方が語感良いか?　どっちでもいいや。

「あつうっ……ど、どうすれば……」

「適当に音出しときゃいいよ。結束バンドの時と同じ感覚でいればいい」

「で、でも大槻さん以外よく知らないからやりづらい……ギター持つてきてるんだしせめてゆうくんも一緒に練習しようよお……」

「今の俺はマネージャー任命されてるから無理。それにアンタ達のレベルに着いていけ

る自信がねえつつの」

「あうう……」

今人気の若手バンドと本気出せたらプロレベルのギタリストがいる中にペーペーの俺がまざったらそれこそ異物になっちまう。

スタジオを借りた目的は彼女達の練習がメインなのだから邪魔になる事だけは絶対にNGだ。

ですのでさっさと俺から離れてシデロスのとこへ行つてほしいんだけどこのピンク、一向に隣から離れる素振りが見えない。

完全に親の足元からくつついて離れようとしないう人見知りの子供状態だ。

そんな後藤さんを見て思うところがあつたのか、黒マスクの長谷川さんが近寄つてきた。

「あのお、もしかしてぼっちさん来るの嫌でした？　だとしたら無理矢理呼んで申し訳ないっす……」

「えっあつ」

「んな事ねえよ。ただ極度の……いや究極か？　じゃないな……人智を超えた……うん、神レベルの人見知りっただけだから気にしないでくれ」

「逆に気になるんすけど」
だよね。

「ほれ後藤さん、そろそろ良心が痛くなってきた頃合いだろ。ちゃんと自分の口から言つてあげないと分からないぞ」

「う、うん……」

後藤さんの事だ。どうせ相手の気持ちを無下にする事はできないから自分の素直な気持ちを不器用ながらに伝えて少しは距離を縮められるだろ。

一応はシデロスのみんなともクリスマス会の際に面識くらいはあったし初対面でもないからな。

そして言葉を選ぶために悩みに悩んだ末、後藤さんは一歩前に出て長谷川さんの顎をくいと上げた。

いわゆる顎クイだ。

「あつかわいっ……うえへ、肌……白……ぐふっ、ロインID教えて……てかどこ住み……? にちゃあ」

「距離の詰め方えぐいつすね……」

「おいこらクソ馬鹿野郎ちよつとこつち来い」

俺の期待返せこの野郎。何ネットの出会い厨みたいなこと言ってるんだいきなり。

長谷川さん普通に引いてんじゃねえか。俺でもちよつと引いたよ今の。何をどう考えたらあの流れで出会い厨の言葉が出てくるの。

「喜多ちゃんの真似しただけなのに……」

いないところでとんでもねえ風評被害受けてるんだけど喜多さん。どんなイメージ持ってるの。

喜多さんが友達多いのは別に出会い厨だからじゃないからね。生まれ持ったコミュ強陽キヤの力だよアレは。陰の俺達が真似していい領域じゃないのよ。身の程を知れ。

「やばい人連れてきちゃったかもっす」

「そんな事言ったら失礼だよ！ ゆうと君の大事な幼馴染さんなんだからっ」
「ふーちゃん今は後ろに。もう少し様子見するっす」

めちやくちや警戒されだすやん。いやもうほんとうちの子がすいません。

悪気はないんです。悪気ないから余計タチ悪いとか言われたらもうその通りなんですけどね！

「幽々貧血なんでセツシヨンまで休んでます」

「ど、どうしようゆうくん、話しかけられる相手いなくなっちゃった……」

「自業自得じゃねえかな」

ほほ100%ね。

今回に関しては俺でもフオローできねえや。被害を受けた長谷川さんと風評被害を受けた喜多さんが気の毒すぎるでしょ。

「あー……とにかく今はギター持ってヨヨさんのところに行ってこい。ある意味一番の安全圏かもしれないから」

「う、うん……?」

まだヨヨさんの方が会話した事あるし多少はマシのはず。

さて、他のみんなは……内田さんは鉄分サプリをバリバリ食ってるけど既に準備は終えてある。長谷川さんと本城さんも後藤さんがヨヨさんのところに行ったから警戒心を解いて準備を始めたか。

「何ニヤけてるの! まさか冷やかし!」

「へへっへへっ……」

うん、コミュニケーションも上手くいつてるようだ。

あの噛み合わなさが逆に噛み合ってたんだよねあの二人。……噛み合ってたのか？
程なくして準備を終えた長谷川さんが駆け寄ってきた。

「準備おつけーつす。じゃあいつものやつやりますか」

「ん、そうね」

「ぼっちさんも適当に合わせてくれたらいいんで。それじゃゆうーさん、仕切りお願いするっす」

「分かった」

これもサポート期間の時にさせられていた事だ。

今更動じる事もなく俺はみんなに声をかけた。

「じゃあハチロクのカウント6でいきましよう。後藤さんも入りたいたここで入っていいからな」

「あっうん」

そして、それを合図にシデロスの練習が始まった。

マネージャー役をやっていた時も思っていたけど、やっぱりシデロスの音は圧巻だ。本番ではなく練習だというのにこちらを？み込んでくるような音の世界観が目の前に広がってくる。

一人一人の完成度もさることながら、それが合わさる事によって一つの完璧な世界が完成してるんだ。

というか……前回の時よりもますます上手くなってないか？リーダーのヨヨさんが指導厳しめだからか、その分長谷川さん達の上達速度も上がってるって事か。やっぱすげえなこの人達……練習に妥協の一切を感じねえや。

……いや、凄いのほもう一人いるか。

二つのバンドを近くで見えてきた俺だから分かる。正直シデロスの練習は結束バンドよりもキツイ。一時間ぶつ通しで練習したとして、その間にかく汗の量も圧倒的にシデロスの方が多い印象だった。それだけ演奏のクオリティーを落とさずにやり遂げるのはとてもハードだという事もよく知っている。

しかし、あのレベルの高い演奏に後藤さんは食らいついていた。

いつもと違ってメンバーも違うし慣れない環境なのに、だ。

せつかくの練習時間、後藤さんがいるからといって練習のレベルを少しだけ落とすな

んで心遣いも一切ないのがヨヨさんらしいが、後藤さんは後藤さんでむしろいつもより遠慮のなさが表れているように思う。

結束バンドとは違う意味でシデロスのレベルに彼女の実力が引つ張られているような、そんな感覚。何だか新鮮だ。

少し癪だがぼいずんさんの言っていた事の意味が今分かった気がする。

もつと上手い人達の下で後藤さんが慣れさえすればその実力は遺憾なく発揮できるようにになると、以前ぼいずんさんはそれに似た事を言っていた。

今この光景がまさにあれを体現してるようにも見えた。

ぶっ続けで練習を始めてから一時間。

スマホのタイマーが震えた瞬間に声をかけて休憩に入る。
で。

「ぜえ、はあ……」

慣れない環境とメンバーで練習をしていたせいか体というより精神的な疲れが出てきていた後藤さんは見事にグロッキーになっていたのでした。

さつきのやつぱ撤回。後藤さんには結束バンド以外に継続できるところなんてないね。

メンバーが奇跡的に良い人ばかりだもの。山田は……まあ、作詞作曲組で結構気の合うところあるらしいから及第点。

「ほれ後藤さん、水」

「あ、ありがと……」

「ヨヨさん達も、水分補給どうぞ」

「ん、気が利くじゃない。貰うわ」

「そりゃあの時も後半はほとんどパシリみたいなもんだっ……何でもないですごめんなさい」

水飲みながら睨まないでほしい。

みんなでほつとひと息つきながら、息を整えてそれぞれ休憩時間を潰す事になった。

ソファで本城さんとキャツキャしながら雑談している長谷川さん達を尻目に、ヨヨさんと後藤さんと俺の分の丸椅子を用意してそこに座る。

ちなみに内田さんはまた鉄分サプリをボリボリし始めた。どんだけ鉄分足りてないんだよ。

「あつい、いきなりなんですけど……お、大槻さんはなんでフェスに出たいんですか……」

？」

「適当に話でも振ろうかと思っていたら、まさかの後藤さんからヨヨさんに話しかける事件が発生した。」

「明日は台風でも来るのかな？」

「そんなの一番になりたいからだけど？」

「ヨヨコ先輩って何故か一番とか数字に異常にこだわるんすよね〜」

急に話入ってくるじゃんハッセ。

「まあ俺もその答えは予想できてたけど。確かシデロスに長谷川さん達が入ってくる前ヨヨさんから相談された時だっけか。そんな時に一番にこだわる理由を聞いたはず。一番になればみんなが認めてくれて見てくれるとか、そんな感じの事を言ってた。」

「かつ仮に優勝できなかったらどうしますか……?」

「絶対一番になるけど」

「いや、かつ仮に、です……」

「……」

後藤さんの意図は何となくだが分かった。

結束バンドは今行われているネット審査での順位が芳しくない。このままだと二次審査で落選となりみんなが目指したフェスへの道は潰える。ぽいずんさんを見返すという目的も達成できない。

そう、結束バンドは今間違はなく大きい壁の前に立たされている。

現状のままではどうにもできない分厚い壁。乗り越えるにはあまりにも高い壁。

もし、そんな大きな壁が立ちはだかつてきた場合、自分じゃなく違う人ならどうするか、それを聞いてみたいのかもしれない。

同じギタリストとして。同じバンドを組んでいる者として。

対して、ヨヨさんはよく考える素振りすら見せなかった。

「……まあ、万が一優勝できなかったとしたら死ぬほど悔しいけど、たかが一度の挫折で一喜一憂なんてしない。一分一秒の努力の差で何もかもが変わる事だってある。くよくよしている場合があるなら少しでも前に進むための努力をするだけよ。未確認ライオット？ 10代限定のロックフェス？ そんなの知ったこっちゃないわ。悪いけど私達にとっては未確認ライオットなんて今よりもバンドを大きくするための通過点にすぎないの。こんな小さな舞台で満足できるようなシデロスじゃないわよ私達は」

やつぱりすげえ人だなと、素直にそう思った。

言葉のどれもこれもこれもが傲慢で、愚直で、いつそ大言壮語にも聞こえるような台詞の羅列だけだ。

この人が言うとは本当に純粋に真っ直ぐな気持ちでバンドをしているというのがよく分かる。

そして、その言葉にも嘘や偽りなど一切感じない。本気で上を狙っているのが伝わってくる。

結束バンドが一つの目標としている未確認ライオット出場ですら、ヨヨさんはただの通過点としか思っていない。

視ているものがそもそも違っていたのだ。まずは出場を指すと捉えるか、優勝して当然と捉えるか。一つのゴール地点と見るか、ただの通過点と見るか。

これだけでも意識の差はハッキリと見えてくる。

目の前の事だけではなく、もっと先を見据えて視野を増やす事も大事なのだと言われたような気さえてきた。

もしネット審査に落ちたとしても、そこで結束バンドの道は終わらない。途絶えない。

そんなのは全員確認せずとも分かりきっている事だ。だから不安になるくらいなら今できる事を全力でする。少しでも可能性を大きくするために。

「そう、何があつても立ち止まらない！最後の最後に全員下して私達が一番だったらそれでいいのよ！」

「悪役かよ」

普通にツッコんじやったわちくししよう。

良い話だったのになー！

「とか言つて対バン相手の方が盛り上がり過ぎてたら裏で毎回泣いてるくせに〜」

「な、泣いてないわよ！清水の前で余計なこと言わないで！」

そんなところで泣いちやうヨヨさんお可愛いこと。

まあ後藤さんの表情を見る限り得たものもあつたようだし、結果的に迷子になって良かったかな。うん、迷子は良くないな。

「……あつ、え、えつと……あ、ありがとうございましたっ。あの、それで……わ、私達はこれでもう……あう……ゆ、ゆうくうんっ」

「はいはい。ヨヨさん、これ以上練習の邪魔はしたくないので俺達はもう帰りますね。今日は色々ありがとうございました」

「え？ あ、ちょっと！ 私も少し聞きたいことがっ……」

「あれ、ゆうさん達もう帰っちゃうんすか？ じゃあまた会いましょうね。ぼっちさんもセツシヨン楽しかったっす」

帰るとなった途端わざわざみんな近寄ってきてくれる辺り、練習は厳しくてもシデロスのみんなは優しい人達なんだなと再認識する。

後藤さんがまだ若干慣れてないのが玉に瑕だけど。

「またね〜！ 今度はお茶菓子とか作って持つてくるよ〜！」

それ俺らとまた偶然会わなきゃ成り立たないと思うんですが。

「今日は二つも凄いモノが見られて良かったですう。ぜひお二人を連れて事故物件に行つてみたいですな〜」

「丁重にお断りさせていただきますよ」

二つって何。人を数える時の言葉じゃないよねそれ。

「だから私も聞きたい事があるって言っ」

「あつうっ……で、ではっ……！」

「おわつとと、んじゃまたどっかであ〜」

後藤さんに引つ張られる形でシデロスのみんなに別れを告げる。

そういやヨヨさんの聞きたいことって何だったんだろ。まあいいか、本当に聞きたかったらどっかで連絡してくるかもしれないし。

人の多い夜の渋谷を二人で歩く。

今度は迷わないようにナビを見ながら。

一応はぐれないよう適当に俺の服を掴んだまま、後藤さんがぼつりと呟いた。

「ゆ、ゆうくん」

「ん?」

人混みに怖がっている様子ではない事はすぐに分かった。

声音から真剣さと少しの決意が垣間見える。

「私達も……もつと前に進まなきゃダメ、だよね」

「……そうだな」

「大概さんの言葉を聞いて……まだまだ結束力も完成度も敵わないって思った……。結

束バンドは今ネット審査で危ない状況だけど、そこだけに囚われてたらきつと次の一步を踏み出すのに時間がかかっちゃうかもしれない……」

それは、中間結果が出た時に感じた事だ。

みんな落ち込んで練習にも少し支障が出ていた。実際俺もやれる事を全部したつもりであの順位だったから結構なダメージを負った訳だ。

ここがヨヨさん達との違い。

あの人達はどれだけ悔しくてもそこで踏みとどまらない。明日の自分が今の自分を超えるための努力を惜しまず、限りある時間をシデロスを大きくするために前へ進む強さを持っている。

今の自分にできる事を精一杯やっているのだ。

であれば。

「……俺達も順位が芳しくないからつてくよくよしてらんねえよな」

「つ……う、うんつ。い、今の私達にできる事を全力でやりたい……」

本当に、後藤さんが結束バンドのためにここまでのはつきり言えるようになった事が一番の成長だと思う。

自分の気持ちを出す事において苦手意識を持っていた彼女が、誰かのために頑張りたい

いと行動に出せるなんて中三の頃を思い出せば絶対あり得なかったのに。

何だか嬉しいような寂しいようなという感じだ。

これが子供の成長を感じる親の立場か……。

「い、一緒に頑張ろうね……！」

「……」

……ま、ヨヨさんや後藤さんの言葉に感化される俺もまだまだ子供なんだろうけど。

これも悪くない。

「ははっ、じゃあ家に帰ったら一緒に対策でも考えるかっ。今日はそっちに泊まりだな」

「う、うん……お母さんに軽い夜食でも作ってもらうねっ」

もう一週間しかないと考えるか、まだ一週間もあると捉えるか。

きつと、それだけで未来は少し変えられるのかもしれない。

「あつど、どうせなら虹夏ちゃん達にも集まってもらって一緒に考えるのもありなん

じゃ……っ！」

「集まる頃には深夜だっつのおバカ」

「あつ……」

103. 正当な評価とは曇りなき眼で人を見るという事だ

ネット審査最終結果発表の日。

「(ぎ)くり……」

「……」

「あっう……」

スターリーにてテーブルを囲い息を呑みながらじつと佇んでいる結束バンドの四人。その視線の先にはスマホの画面を開いている俺がいた。

本当ならみんなで一緒に見るといふ流れだったのにいきなり虹夏さんと喜多さんが、

『ぬぐあーっ！ やっぱ無理！ お願い優人くん先に見てあたし達に教えて！ 勇気出てこない！』

『え、俺もそれなりに宣伝頑張ったから緊張してるんですけど』

『こういう時こそ優人君の出番よ！ さあ早く!!』

『俺の気持ちって……』

という事で急遽俺が先に確認してから結果を告げる形になったのであった。メンタル……。

まあ一度請け負った以上今更やっぱ店長に見てもらおうとかはなしだ。多分虹夏さんが許してくれない。

正直俺も心臓ばっくばくなんだけどなあ……。

この一週間で色々模索しながら手は尽くしたと思うが、リアルタイムで結果が変わる訳でもないので実際の効果がどれくらいあったのかは未知数のままだ。

しかしその結果ももうこのサイトを開けば分かる。緊張のせいかスマホを持つ手が少し震えていた。

すると隣に座っている後藤さんが小さく俺の服の裾を掴んできた。……ふう……よし。

こういうのは勢いだ。どうせ必ず見ないといけないのならパッと確認して盛大に喜ぶか落ち込むかすりゃいい。

覚悟を決めて椅子から立ちそのままサイトを開く。ええい、ままよお!!

「……………」

「……ゆ、優人くん？ 何位だった？」

「どうしてずつと黙ってるの優人君？ ねえ……？」

「ほわぁ」

「ちよつ、いきなり力抜けたみたいになってるけどどうしたのさ!？」

思わず強張っていた全身の力が抜けて尻餅をつくように椅子へへたり込む。

ああ、結果を言わないとだっけ……。

「……………28位」

「え？」

「結束バンドの最終順位は28位……ネット審査……通過です」

「……………に、28位……?!？」

ようやく理解したのか虹夏さんと喜多さんが手を取り合って喜び始めた。

リョウさんも声には出さないもののテーブルの下で小さくガッツポーズしたのを俺は見逃してないですぞ。もつと素直に喜んだらいいのに。……しかしなんかこの順位

に引つ掛かりを覚える自分がいる。何だろう、この微かな違和感。

と、急に左隣から手を握られる。

犯人はもちろん後藤さんだ。

「ゆうくん、や、やったねっ……」

「……だな」

今日までの一週間、後藤さんの家に泊まって作戦会議をしたり宣伝の仕方を変えてみたりなど、出来る限りの事をしてきた。

サポート役としての踏ん張りどころだったから思い付いた事は全部してきたが、そこに至るまでの空間には俺だけじゃなく後藤さんもいたのだ。ギターヒーローの力は使わずに、結束バンドの後藤ひとりとしての力を使うために何度も話し合いをした。

そういう意味での労いも兼ねてやったねと言ってくれたんだろう。
なら今は素直に受け取っておこう。

「良かった……でもなんで急に順位上がったんだろ？」

「何故かMVの再生数も数日前から一気に伸び始めたよね」

「ああ、それは俺も気になってました」

確かに28位になったのはめでたいしありがたい。ネット審査も通過できて万々歳だ。言う事なんて何も無い……と普通なら思う。

しかしよく考えてみると、果たして俺達の試行錯誤だけで48位から28位、実に20位という順位を覆せるくらいのものがあったのかと思うと、正直そうとは思えないのもまた事実。

色んな宣伝をしたのが偶然どこかでバズってこうなった……なんて可能性も無きにしても非ずだが、違うような気がする。

多分、別のきっかけが俺達の知らないところであったのかもかもしれない。例えば作戦会議の時、ふとそのアイデアを思い浮かんだがすぐに俺達じゃ手が出せないからという理由で頭の隅に追いやった手段とか。

「みんなが最後まで諦めなかったからですよ！ 優人君もこの一週間一生懸命私達のために頑張ってくれてたもの！ その努力が実ったんだわ！」

「だといんだけどな」

「そうだねっ。それに廣井さん達も投票してくれたしね〜」

あつちにはシデロスもいるし、案外ヨヨさん辺りがきくり姐さんに借金ちらつかせてシデロスに投票させてる説とかありそうだけど。

むしろ俺はそつちを推すね。

「ねえ、これ見て」

喜多さんが通過した嬉しさにキラキラきららしながら後藤さんの手を握って喜び、その輝かしさで後藤さんが灰になりかけていると、スマホを片手にリョウさんが話しかけてきた。

「どうしたんです?」

「なんかぼんらぼんってサイトの『絶対次にバズりちらかしてのし上がってくる若手バンド』って記事に結束バンドが取り上げられてたっぽい。MVのコメ欄にここから来たって書いてる人いた」

「ネット記事!? あたし達紹介されてたの!?!」

なんつうタイトルだよ。もっとシンプルでいいだろ。

にしてもネット記事、か。そう聞くとどうしてもぽいずんさんの顔が浮かび上がってきてしまう。最近あの人の顔が何度も浮かび上がってくる辺り、無駄に重要キャラの美化されたヒロインポジっぽい感じがしてなんか嫌だな……。

「なにになに〜なんて書いてるの!? ライターさん誰!？」

「分からない。探してみたけどどこにも名前書いてなかった」

「匿名の記事か」

「はいはい! 私を読みま〜す! え〜『メンバーが若く勢いがある。楽曲にも年齢に見合わない深みがあり、それがまた聴く者を惹き込ませる魅力の一つだろう』」

「おお、結構褒めてくれてるね」

「タイトルがタイトルですしね」

絶対バズりちらかすとか書いてるし。普通にハードル上げてくるやん。

『しかしバンド名が結束バンドとかっこ悪くてもったいない気がする。リードギターのパフオーマンスが時々突拍子もなく怖い。変わり者にはハマるかもしれない。あと日によっては酔っ払いの客が最前列で喚き散らかしていて民度が低い時もある』

……」

「よし、あの人は出禁だな」

酔っ払いの時点で犯人は確定してるから顔写真載せてお断りポスターでも貼っておこう。

何ならスターリー付近で見かけたらとっ捕まえるよう指名手配犯っぽくするのもあ

りかもしれない。

「みなさ〜ん、ネット審査通過のお祝いケーキですよ〜」

どんなポスターデザインにしてやろうか虹夏さんと話し合っていると、いきなりPAさんがホールケーキを持ってやってきた。

みんなでやけくそ食いした時と一緒のやつじゃん。

「やった〜！ ケーキだ〜！」

「おう、ネット投票は実力の他にも運が絡んでくるからある意味一番難しい審査だ。それを乗り越えたんだからな。今日くらいは祝ってやるよ、食べ食べ」

「あれ、店長どっか行ってたんですか？」

「あん？ ちょっと外に電話しに行ってただけだ。気にすんな」

「みかじめ料の請求ですか？」

「冗談を言えるくらいにやメンタルもいつも通りに戻ったみたいだな。よし、盛大に祝ってやる。覚悟しろよ」

「おかしいな、祝ってもらうはずなのに指の骨パキパキ鳴らしながら近づいてくる理由を聞いてもよろ腕が変な方向にいいいいいいいいい〜!?!」

「今日も平和ですなえ〜」

その後は店長にこつてりと絞られましたときつ。

解放されたのは数分後。

テーブルを囲んで仲良くケーキを食べている結束バンドをカウンター席で店長とP
Aさんと見守っていると、

「お前はケーキ食いに行かなくていいのか」

「誰かさんに右腕痛めつけられたからフォーク持てません」

「そんなの誰かに食わせてもらえばいいだけだろ。あいつらなら喜んで功労者のお前の世話くらい名乗り出てくるぞ。例えば虹夏とか」

「天使の手を煩わせたくありませんので却下ですね」

「言つとくけどお前のその崇拜だか敬愛だか分かんねえ言い方すんのは今更止めないけど、その扱いをされる本人の気持ちくらいは考えてやれよ」
「？」

「近づきたくても壁を感じる事だつてあるつて言つてんだ」

「なあに言つてんですか。俺と虹夏さんの間に今更壁なんてないですよ」

「……重症だな」

「重症ですねぇ」

そりやアンタに技仕掛けられたんだからこつちが重症なのは当たり前でしょうよ。
まだズキズキするんだからね！

「……で、結局店長の電話相手は誰だったんですか」

「あん？ 何でそんなのいちいちお前が気にするんだよ」

「だって泣いてたでしょ。目が少し充血してるし周りもちよつと腫れてますよ。ああ、もしかして嬉し泣きとか？」

「つ、う、うるせえな……電話のせいだよ電話の」

今更目元隠しても意味ないよそれ。むしろ泣いてたの認めてる事になるからね。

相変わらざるのツンデレなんだからもう。これで暴力がなかったら良いのになー。いや大体俺の自業自得だけど。

「あるヤツと話してただけだ。それ以上でもそれ以下でもねえ」

「もしかしてぼいずんさんですか」

「……お前、なんで」

反応から見るにやっぱり当たってたか。

何となくだがそうかもしれないとは思ってたけど見事に的中したらしい。店長は普段から電話もお構いなしにスターリーの中でやってるのに今日に限ってわざわざ外に出ていくし、確か電話しに行つたのも俺達がネット記事を見てる最中の時だった。

誰にも見られたくなくて結束バンドのみんなにもまだ聞かれたくない相手といえば、と考えたら消去法でこうなつた。

あとはタイムミングだ。

「もしかしてと思つただけですよ。それに結束バンドの記事を書きそうな人なんて、例え匿名だとしても心当たりはあの人しかいないんで」

「……そうだな」

「あの人が言つてました？」

「礼を言つたら今の結束バンドを正当に評価しただけだから礼はいらねえだつてさ」
「正当な評価ねえ……」

だろうな、と思う。

さっきの記事を見ればよく分かる。褒めてくれていたところもあつたが厳しいところもちゃんと書かれていた。評価的には五分五分といったところ。

しかし忖度なしだからこそ正当であり平等な評価だと思えたのは事実。

嘘偽りのない言葉には力が宿り、不思議と人の目を惹く。それがMVの再生数が伸びた最大の要因だろう。そしてその効果は見事にネット審査を覆すほどの影響力を見せた。

結束バンドがネット審査を逆転通過できたのは、間違いなくぽいずんさんの書いた記事のおかげだ。

たつた一つの記事だけで多くの人の心と興味を動かし、結束バンドに投票するという行動力まで付随させた。

記事が匿名なもの、ぽいずん♡やみ名義だとネットではほとんど素性がバレていて悪目立ちしてしまうための対策だろう。

それにあの人の記事を読める範囲のもの全て読んできたから分かる。あの記事はぽいずんさんがまだ真面目に好きなバンドを広めたいという一心で書いていた初期の頃の内容そのものだった。

やっぱりこっちの記事の方が俺も好みだ。

そして、これでもう一つ分かった事がある。

ぽいずんさんの記事があったから結束バンドはネット審査を通過できた。

では、だ。

もしそれがなかったら、結果はどうなっていたんだろう。

奇跡的な逆転劇なんてどこにも存在しなくて、結束バンドのみんなが今食べているお祝いケーキもまたやけくそ食いになっていたかもしれない。というか絶対にそうだ。あの記事がなければ確実に落ちていたと思う。

つまり、つまり、つまり……。

俺の努力は、ほとんど無駄になっていたのかもしれない。

「……無力だなあ、俺」

「アホかお前」

「バカですか」

「いでえっ」

自虐的にぼつりと呟いた言葉を聞いた瞬間に店長とPAさんから脳天チョップを頂いた。

反応早すぎませんかね……。

「今の数十秒間で何を悟ったか知らねえけどな、お前の頑張りが無駄だった事なんて絶対ないぞ。これだけは断言してやる」

「……や、でも結局俺の努力だけじゃ投票審査は負けてた訳ですし……ぼいずんさんの

記事のおかげってのが一番でしょうよ。実際MVのコメント欄はあそこから来たって人ばかりなんだから」

「それが事実だとしてもだよ。あいつらのためにお前がやってきた事に間違いなんて一つもねえ。あいつの記事とお前の努力の成果がどこまで投票の差に影響を与えたか正確なデータもないんだからな。無事に通過したとはいえ28位。順位で言えば割とギリギリなとこだ。実際の所は知らんがあいつの記事だけでこの一週間全てが上手くいった確証もないんだろ。だったらお前の努力だってきつと報われてる。それを無力だなんて水の泡みたいに言うな」

「……」

「あと今のは絶対になんさんの前で言わない方がいいですよ。確信を持って言いますけどおそらく全員怒ります」

「え、いや、さすがに後藤さんは怒りはしないんじゃないか……」

後藤さんが怒る確率とか多分F.G.Oのガチャ排出率より低いぞ。絶対1%未満だもん。

「そういうとこだぞ」

「そういうとこだぞ」

「どういうとこだ」

どういうことだ。

「まあお前の頑張りはここにいる全員ちゃんと見て知ってんだから卑下すんなって事だよ」

「……はあ」

「ちなみに今度そんなこと言ったら私達も怒りますからね」

「それは……勘弁したいですね」

「ふふっ、店長は既にちよつと怒ってたみたいですけど」

「べ、別に怒ってねえよ……。ただちゃんと頑張ってたヤツが自分を下げするような自己評価をすんのが気に入らないってだけだ」

その割には目逸らしてません？

とか思ってたらいきなり店長の手が俺の頭の上に置かれた。どうやらチョップでもそのまま持ち上げられるのでもないらしいのは力加減で分かった。

「ただ、まあ、何だ。お前もよく頑張ったな」

「……あの、高二になってこれはさすがにハズいんでやめてほしいんですけど……う

104. ステージの上いきなり立たされるのは誰だつて怖い

翌日。

うちの教室では朝っぱらからさつそくきらきらららしている喜多さんが教卓の前に立ち報告をしていた。

「という訳で改めてになるけど、みんなの協力のもと結束バンドは無事ネット審査を通過したわ〜！」

結束バンドおめでとくと口々に言うクラスメイトからの賛辞をドヤ顔で受け止める喜多さんと、祝ってもらえてるのは嬉しいけどそれはそれとして注目を浴びるのはなかなか怖い後藤さんが目を逸らしてポツンと横に立っている。

あれが陽と陰の差か……。

ちなみに喜多さんが改めてと言ったのは、昨日のうちにクラスのグループラインで報告したからだ。

昨日のロインでも今の教室内の騒ぎもそうだが、相変わらず喜多さんの人望は計り知れない。気付いたら知らない人とも仲良くなつてそんな勢いだ。

「清水は前に行かなくていいの?」

「なんで?」

佐々木次子ことさつさんが俺の机に軽くもたれかかるような形で座つて聞いてきた。

「いやだつて清水も結束バンドの活動手伝つてるからさ。いいんかな?」

「ああいうのは表舞台に立つ後藤さん達だけでいいんだよ。裏方がしゃばつてどうする」

「こういう時くらいはいいんじゃないの?。ネット投票の宣伝めっちゃ頑張つてくれたつて喜多が昨日ロインで言つてたよ。まあここ最近教室でも色んな生徒に声掛けて投票のお願いしてたのうちも見てたしね」

「そういう登校中に会つた時、昨夜のロインでみんなからわざわざ個別でも来てたつて言つてたな。」

後藤さんは誰からも来てないつて落ち込んでたけど。

「それとこれとは別だつての。サポート役は大人しくこっち側で見守るに徹するのだよ」

そう、僕は影だ……。

「ふうん」

「……なんだよ」

あとついでに机からどいてくれませんかね。

自分の机に現在進行形で女子が座ってるのってなんかこう、大変よろしくない感情を抱いてしまいそうなので。思春期の男子高校生を舐めないでいただきたい。オタクの想像力と妄想力は豊かなんですのよ。

「じゃあみんなの代わりにうちが清水を褒めてあげつかう」

「あん？ 何言つてむぐうっ」

「おつかれさん、褒美に飴ちゃんをやろう」

「いきなり飴を口に入れてくるやつがあるかつ……それにまだ審査は残ってるつつの。……まあ、さんきゅ」

昨日の店長とPAさんといいさっさんといい、なんか調子狂うな……。

「ちよつとそこ何やってるのさっつー!? 今優人君にあーんしてたわよね!」

「あうあうあゝ……」

「あら、バレちった」

「バレたって何が?」

「うちの手から清水の口に飴を直接入れた事」

「いやいや、半ば強引だったしあんなのあーんイベントにすらカウントされ」

「喜多がでつかい声で言ったから男子達にもバレてるけどどうする?」

「HRが始まるまで逃げるんだよオ!」

それからというもの。

男子達から逃げ延びたはいいが、結束バンドがネット審査を通過したのは学校中にすぐ知れ渡つたらしく、昼休みになるまでの授業中全ての担当先生から軽く触れられる程にまでなっていた。

果てには噂が噂を呼び知らない間に結束バンドがロッキンジャポンに大トリで出るという事になってるらしい。

三限目の先生が言つてた。普通に考えたら10代限定のバンドフェスなのにロッキ

ンなんて出る訳がないと分かるはずなだけだな。多分ちよつとアホだあの先生。そんなこんなで昼休み。

いつも通り俺と後藤さんと喜多さんにさっさんの四人で弁当を食べ、片付けが終わつたと同時に俺は瞬時に教室を飛び出した。

理由は簡単。

喜多さん達に気を遣つて昼食中は手を出してこなかったバカ共が俺が食べ終わった瞬間に殺意をむき出しにしてきたからだ。律儀に食べ終わるまで手を出してこなかったのは最低限の理性をヤツらなりに保つていられたからだろう。

しかし食べ終わつてしまえば遠慮はいらない訳で、クラスの男子全員対俺で食後の運動という名の鬼ごっこが始まったのであった。

ちなみに補足しておくと捕まったら死ぬ系のやつだ。今日もうちのクラスはどうでもいい事に全力を出せるくらい平和らしい。

「私達のクラスの男子って何でああも無駄に元気なのかしらね〜」

「さあ？ まあ原因はうちにあるし清水にはあとでジュースでも奢つてあげようかな」

「火に油注いでどうするのよ……」

何とかバカ共を全員鎮圧した俺が教室へ戻ったら喜多さんはニコニコで後藤さんは今にも死にそうな顔をしていた。

この数十分で何があつたんだよ。

「えっと、何で後藤さん口から泡吹きそうになつてんの？」

「あ、おかえり優人君。実はさつき校長室に呼ばれてね、校長先生にも結束バンドの事を褒められたのよ。それで放課後に臨時の全校集会開くからつてみんなの前で一曲演奏をお願いされたの。そういうえば他の男子はどうしたの？」

「そういや投票で学校全体巻き込んだから当然校長先生にも噂は伝わってるか。なるほどね、みんなの前で演奏しなきゃだから後藤さんこんな事になつてんのね。男子共なら全員どつかで寝込んでんじゃね」

「最近優人君の強さが異常なくらい上がってるわね……」

何かあると大体ここのバカ達と殺り合うからね。他の誰かが少しでもリア充イベント匂わすとすぐ獣になるヤツしかいないし。

しかも八割くらい俺が狙われるから、嫌でも生き残るために逃げたり殴り合ったりしてると体が頑丈になって自然と力も身についてきたりするのだ。なんと不名誉な理由なんだろう。

「ゆ、ゆうくんどうしよう……今から体調不良で早退してもいいかな……」

「そうなるの後藤さん一人だけ今日のスターリー早入りになって店長達大人と一緒になるけどいいの？」

「どっちを選んでも私は死ぬんだあ……」

それ聞いたら泣くぞ店長。

「まあ文化祭でも一回やってるし、フェスまで通つたらどのみちもつとたくさんの人の前でライブやる事になるんだ。そう思えば全校生徒の前で演奏するくらいまだ楽な方だって」

「い、陰キャは人数の多さが問題なんじゃなくて人がいっぱいいるって認識しただけでもうダメなの……」

「後藤さんにとっちゃ一回一回が常に命取りなんだつたなそういえば……」

表情を見てるとマジでライブの度に命削ってそう感が凄い。

寿命とか縮んでないだろうなこいつ。

「にしても集会で一曲やるつたつてドラムとベースはどうするんだよ？ アンプもない
だろ。軽音部から借りたりすんの？」

「……ハッ!? た、確かにアンプないし虹夏ちゃん達もないから演奏できないな、な
んて……」

「そこは気合いよ！ 私達のギターだけでもみんなを楽しませてあげましょひとりちゃ
ん！」

「死ぬんだあ……」

どうやら生き残る事は諦めたらしい。

南無。

放課後になった。

喜多さんから聞いた通り、臨時で全校集会があると担任に言われみんな揃って体育館
へ。

喜多さんと後藤さんの名前が呼ばれ二人は前に出ていく。

後藤さん歩いてる時右手と右足同時に出てるけど大丈夫かよ。大丈夫な訳ないだろ
(自問自答)。

「あれ、清水は呼ばれないんだ？」

出席番号順の男女別で並んでおり、俺の斜め後ろにいたさっさんが不思議そうに聞いてくる。

「あくまで結束バンドはあの二人だからな。さっきも言ったら、俺は裏方なんだよ。目立つポジションにいるべきじゃない」

「ふくん、そんなもんかあ」

あともし呼ばれたとしても行くつもりなかったけどね。

何というか、さつきから俺の嫌な予感センサーが警鐘を鳴らし始めてるのだ。二人だけで演奏、後藤さんの緊張具合、ぶつつけ本番という三つの不安要素が莫大すぎて平和に終わる未来が見えないよ。

マイクを通して先生の声が体育館に響き渡る。

《え〜結束バンドのお二人、ロッキンジャポン出演おめでとうございます》

「……………はい？」

あれれ、俺の聞き間違いかな？

なんか今ロッキンジャポンとかまったくの無関係なフェスの名前が聞こえたような…………。ああ、未確認ライオットと言いだしたのか。そうかそうか、そうだよな！先生だって言い間違える時くらいあるよな〜あつはつは！

「…………さっさん、あの先生今なんて言った？」

「ロッキンジャポンって言ったね…………ぶくくっ」

よし、この集会在りくくな終わり方しないのがたつた今確定したわ。尾ひれ付いた噂の方が出回ってるって何だよ。

先生が何か言ってるが俺の耳には上手く入ってこない。俺の視線の先には口から泡を吹きながらピースしてる後藤蟹がいた。人間辞めて逃げようとしてんなあいつ。

《では全校生徒に向けて何か一言どうぞ！》

先生から喜多さんにマイクが渡される。

そうだ、まだここで喜多さんが訂正すれば誤解は解ける。頼むぞ喜多さん…………。

《あく今日はみんな集まってくれてありがとう。えっと、それでちよつと訂正なんですけど、私達はロッキンジャポンじゃなくて……》

「アキレス腱ドロスのサインよろしく!!」

「ロックの申し子!!」

「いよっ! 無形文化財!!」

「将来の人間国宝!!」

《くくくつ、この夏は私たち海浜公園で会いましょうね!! 今年の夏は結束バンドがステージの上から日本中を熱くします!》

「「うおおおくくく!!」」

【悲報】誤解を解こうとした喜多さん、ノリに抗えずロッキンジャポンへの出演を表明する陽キャの鑑になってしまう。

「喜多やってんね」

「もはや陽キャの弱点だろあの習性」

ほぼ同調圧力じゃねえか。

おそらく喜多さんも生徒の大半もネタと分かっててやってるんだろうが、わざわざ臨

時で全校集会を開いた先生方は多分分かってない。

生徒達が流した噂に誇張された尾ひれが付いており、教師陣には誇張された噂が広まったんだろう。

だからロツキンジャポンなんて普通に考えたら分かるような嘘にも気付いていないのだ。いや気付けよ教師。何ならちよつとくらい調べとけよ。事前調査は常識でしようが。

「こつからどうなると思う?」

「地獄でも始まるんじゃないの?」

結局アンプも借りてないしギター二本だけでどこまでやれるかは知らんけど、後藤さんが蟹になってるのを見てるとフラグがピンピンに立ってるのがよく分かる。

あいつ絶対何かやらかすぞ。ほらもう喜多さんにアイコンタクトされたと思った矢先にギター逆さまに持ち出したし。

「助け舟出さなくてもいいん?」

「手遅れですねぇ」

《あつじやあモノボケを! 相撲の審判が持つてるやつ! はっけよおーいのこつたあ

！
》

《だからなんでギター持ってやる事がそれなの!? もっと他にあるでしょ!》

「後藤やばー」

「俺の幼馴染やばー」

ギターを軍配に見立ててモノボケをした後藤さん。

なんで普段は声小さいのにこういう時だけ無駄に声張れるんだろう。その変な自信はどこから出てくるんだ。努力の方向性ミスってんぞ。

そして案の定体育館の中は沈黙に包まれていた。

何ならやばーと呟いた俺とさっさんが少し目立ったくらいだ。後藤さんめ、何つう領域展開してくれちゃってんの。

《……じゃあね、少々アクシデントはありましたがライブに事故はつきものです!

滑ったMCもある意味ライブっぽくて味わい深いですね》

事故扱いされてるやん。

《では一曲やりまーす!》

そこから先どうなったかは想像に難くないと思う。

喜多さん達の演奏は何とも微妙というか、空気感があまりにもアウエーになりすぎて全体的なレベルも下がっていたのだ。

うん、多分過去最低レベルだったね。

思わずうわあって声出たもん。季節はもう春過ぎなのに気温が下がっていくのが分かった。冬かと思った。

「冷静に考えたらあの後藤さんがロッキンに出れる訳ないよな……」

「やっぱちよつと変な人だしな……」

「垂れ幕外しとくか……」

「よくあれで審査通ったな……」

冷ややかな声も聞こえるが仕方がない。

あれに関しては自業自得だ。さすがの俺もフォローできそうにないっす。

「喜多さん達演奏本気出せてないよなあれ」

「文化祭ん時はもつと凄かったもんな」

「あんなギャグやっちゃった後だとね」

「しかしギターを軍配に見立てるといふ発想は中々面白いと思いますぞ」
うちのクラス男子達は割と理解ある方だったっぽい。

一応後藤さんのこと知ってるしある程度理解できてるもんね君達。

「うわーお、清水はどう思うあれ」

「あとで説教すべきか慰めるべきか迷ってるどころ」

「アメとムチの塩梅は気を付けてやんなよ」

……できっかなあ。

これ多分台風ライブの時より酷い有様なんだけど。

「それでぼっちちゃんと喜多ちゃん沈んでるんだ」

「私のマイナー曲演奏で会場の雰囲気をお通夜にしてやった時の気持ちがよく理解でき
たはず。……うっ」

「自分からトラウマ再燃させてどうする」

説教するまでもなく落ち込んでたからこのままスターリーに二人を連れてきたけど

持ち直せんのかなこれ。

リヨウさんは自分からトラウマ持ち出して勝手に自爆してるし。

「もおうみんな落ち込んでないで今日も練習するよ！ 次はいよいよライブ審査なんだからー！」

「みんなの冷たい目が私を刺してくる……」

「モノボケのクオリティーをもっと上げないと……」

「お通夜……お通夜……」

「優人くんどうしようみんな岩石みたいに重くなってるんだけど!!」

「俺はバイトでドリンクの補充しなくちゃなんで、すいませんがあとは頑張ってください
いママ」

「誰がママだあ!」

落ち込んでる二人をスターリーまで連れてきただけでも偉いと思うんですよ自分。
という訳で虹夏さん、ファイトだよ!

105. 似合うものより着たいものを着れば良いと思うけど限度だつてあると思う

「よし、それじゃ今日の練習終わり〜!」

「お疲れ様です〜」

休日の午後三時半。

スターリーのスタジオで練習終了の声がかかる。

各々楽器を片付け帰宅準備をしている中、俺は今日の練習を振り返っていた。

次の審査はいよいよ人前で演奏をするライブ審査だ。そのために結束バンドは毎日のように練習に励んでいる。

俺もバイトをしながら店長に許可を貰った日は見学に行き、客観的な視点から意見を述べたりしている訳だ。

だからこそみんなが日々成長している事も知っている。

「あつ伊地知先輩、前にいいカフェ見つけたんですけどこの後……」

「そういえばリヨウ！ 明日は貸した漫画絶対持ってきてよ！ 売ったらタダじゃすまないからね！」

「うっす、じゃ」

ネット審査の順位は28位とギリギリだから油断なんて一切できない。

少なくとも結束バンドより上にいるバンドが27組もいて、30位までのバンドだって投票も僅差だろうし実力で考えたら結束バンドより上の可能性も全然あり得る訳で。こうなってくるというよいよ対策なんて練習を積み重ねるしかないのである。

「あの、伊地知先輩……カフェで」

「あ、ぼっちちゃんばいばい！ ちゃんと優人くんの後ろに着いていくんだよ。はぐれちゃダメだからねっ」

「あっはい……では……」

演奏する曲の音を一つ一つクオリティーを上げていく。言うだけなら簡単に思えるかもしれないが、実際にやってみると何をどうすればクオリティーが上がっているのか案外分からなかったりするのだ。

正確に演奏するのが正解か、弾き方にコツがあるのか。しかもそういうのに限って聴

き手の好みや感性によって捉え方が違っており、考えれば考える程思考の泥沼に陥ってしまう危険もある。

結局彼女達自身が最高だと思える演奏ができればそれが一番の正解か。

「あ、ごめん喜多ちゃん何か言った？」

「女子高生感が足りない……」

「え？」

つまりやる事もやれる事も何一つ変わらない。

このまま当日まで練習を繰り返すしかないって事だ。

「毎日学校練習バイトの繰り返し！ たまには女子高生っぽい事もしましょうよ！ き

らきらきらしたくないですか!？ 私はしたい!」

「きらきらきららって何？」

「触れてはならない世界」

「輝かしいワードからは考えられないくらい闇深そうな答え来た!？」

……何かさつきから騒がしいな。いや騒がしいのはいつもか。後藤さんだけ話に入れず俺の背後霊と化してる。ああ、帰るの待ってたのね。

それにしても人が考え事してる時に何をわちゃわちゃやつとるんだこの人達は。

「何の話ですか？」

「なんか喜多ちゃんがいきなり女子高生ぽい事したいとか言つて駄々こねだしたんだよ」

「じゃあ男子高校生の俺は無関係ですね。後藤さん、今日は俺先に帰るから喜多さんのわがままに付き合つてやれ」

『女子高生ぽい事』というワードから察するに、おそらく俺がそこにおいても変に浮いて悪目立ちしそうな予感しかしい。

多分内装ピンクだらけで女の子感増し増しの雑貨屋とかカラフルで謎のオシヤンティーな店とかに行く気だろう。何で女の子って派手なカラーの店とかに行きたがるんだらうね。

ともあれそんな場違いなどところに行くなら俺はさっさと退散するが吉。

女子は女子だけでキヤツキヤウフフな旅路に出るがいいさ。シミーズワゴンはクルに去るぜ……。

と、スタジオを先に出ようとしたら両手をガシツと強く掴まれた。

思わず振り返る。犯人は二人いた。

「ダメ」

喜多さんと後藤さんがそれぞれ笑顔と焦り顔で俺を見ている。

引き止めてきた理由は多分それぞれ違うって事くらいは察した。というか喜多さんの絶対逃がさないと云わんばかりの笑顔がむしろ怖い。

「優人君も来るのよ」

「え、でも女子高生っぽい事なら俺が行く必要ないんじゃない」

「来るのよ」

「……はい、お供させていただけます……」

きらきらきらららに飢えた陽キャ女子高生の眼差しは簡単に人を殺せるね。

間近で霸王色の覇気を浴びせられた気分だ。よく意識を保てた俺。

「でも喜多ちゃんさ、この前みんなで遊園地行ったじゃん」

「あれは実質現実逃避じゃないですか！ たまには練習終わりにみんなで意味もない街歩きとかしたいんですよ！ ねっ、ひとりちゃん！」

「えっいや、あっはい！」

イエスマンは今日も相変わらず健在だったようだ。

「夢に向かつて頑張るためには人並みの青春も犠牲にしなきゃいけないんですか!? この一瞬はプライスレスはなんですよ! そうでしょひとりちゃん!」

「えっいや、あっはい!」

「もはや脊髄反射の領域だな」

肯定しながらも俺の服を掴む手が震えてるのはせめてもの抵抗だろう。

体は全力で街ブラに拒否反応起こしてらっしやるけど。

「えくでも疲れてるし……」

「やだやだっ街歩きしましょうよ! 私のイソスタ最近全然更新できてないんですよ

く! えくんっ、いいねがく! いいねが欲しいく!」

「それが本音かい!」

陽キャの禁断症状ってとこかな。

後藤さんとはまた違う承認欲求モンスターがここにいた。床にゴロゴロ転がりながら本格的に子供みたくない駄々のこね方を始めたぞこやつ。

「ん〜……どうする優人くん。このままだと喜多ちゃんスーパーでお菓子買ってもらえるまでごねる子供みたいになっちゃうけど。というかもうなってるけど」

「まあ練習するにもモチベを保つ事は大事ですからねえ。俺もわがまま姫の圧に負けてお供するって言っちゃったし、適当に下北でもぶらつきますか」

そう言った瞬間、喜多さんが勢いよくガバツと飛び起きた。

こいつ……真似は真似でもお菓子を買ってもらえると分かった途端嘘のように泣き止んで笑顔になるクソガキタイプの方だったか……！

「ライブ審査に向けて結束力を高めるためにも遊びは必要ですよ！　ねっひとりちゃん
！」

「えっいや、あっはい！」

「NPCかおのれは」

同じ事しか言えなくなってるじゃん。

いやこれ思考放棄か？

「下北詳しそうだし案内役はリョウ先輩でお願いします！」

「何で私が」

「リョウに案内役は向いてないと思うけど」

「右に同じく」

「ぬう……それはそれでムカつく。今に見ておれ。私の完璧な下北街歩きスケジュールを作ってやる」

だってアンタ基本的に自分の行きたいところしか行かないじゃん。

俺がギター買った日も途中まで自分の行きたい店ばっか行ってたし。

「リョウ先輩つ、私ハンドメイドアクセとかレトロな雑貨屋さんに行きたいんですけど、おすすめのショップあったら連れて行ってほしいです！あとは映えそうで美味しいカフェとか！」

「分かった」

「どう見る優人くん」

「何も分かってないに一票」

数十秒後、リョウさんがスマホのスケジュール帳アプリに書いた今日の予定を見せてきた。

そこには。

16時～19時まで全部古着屋、内30分だけどこかで休憩と書かれていた。

「じゃあこれで」

「リクエストガン無視!？」

「ほら、やっぱり何も分かってないじゃん」

「これがリヨウクオリティーだよ喜多ちゃん」

クオリティーとは。

——
ということまで外に出てきた。

「リヨウ散歩」

「in下北沢〜!」

結束バンドwithわたくし清水優人、街ブラロケの始まりである。

「下北沢は音楽、演劇、アート、サブカルチャーの発信地。店も個人経営がほとんどだから自分好みの店に出会えると思う。他にも下北は若者の街、古着屋の街、ファッション

の街とか色々呼ばれてるくらいには結構有名」

「確かに若者は多いですけど、渋谷とかとはまた違ったタイプの人達ですよね」

おお、思ったよりちゃんと説明できてるなこの人。

wikiとか見てカンニングしてんじやねと思ってたけどそういう事もしてないし、下北に住んでるという事もあつてかやはり地元には詳しいのかな。そういやいつもこの付近で古着屋漁ってるって言ってたからそれもあるか。

「有名バンドを輩出したライブハウスもたくさんあるし、バンドマンにとつても憧れの街と言われている」

「サブカル好きなら一度は住んでみたい街かもねえ」

まあこうして話を聞いていると下北は魅力的な街だなとは思う。

経営してる店だつてリョウさんが言ったように個人のものも多いから見て回るだけでも外観に個性があつて飽きない。将来こういうとこに住んでみたいという気持ちも何となく分かるな。

「つてぼっちちゃんはいいい加減慣れなよ！ 一年以上来てるでしょ！ なんでまた優人くんの後ろに引っ付いてるのさ!?!」

「あついつもライブハウスと駅の間を往復してるだけなので……初めて通るとこはちよつと……」

「という理由なのを察してるから俺は好きにさせてます」

「理解者が過ぎる……!」

へへっ褒めても何も出ねえやい。

少し歩いたところにあるカフェにやってきた。

もちろん喜多さんのリクエストである。リヨウさんの古着屋オンリーツアーは無事みんなに却下されたらしい。それで若干落ち込んだので後で一軒くらいは見に行くと言ったからとりあえずの機嫌は戻った。

各々注文をしてケーキと飲み物が人数分来る。

「ところでちやつかり全員頼んでますけど、リヨウさんお金あるんです?」

「……優人様」

「おう、何だ。言ってみろ」

「身体で支払わせていただきます……」

「ぶっ!? ちよ、ちよつとリヨウ! こんなところで何言ってるの!? 他にも人いるん

だからやめなさい！」

「きやー！ ひとりちゃんに急にガタガタ震えだしたわ!？」

俺がツツコミを入れる前に何故か虹夏さん達が大騒ぎし始めた。後藤さんに至ってはバイブモードになってイスと一緒に震えてる。

一応店内なので周りのお客様の迷惑になる事は控えてほしいですなまったく。

リヨウさんにはとりあえずケーキと飲み物代は俺が出す事にして次の給料日で返してもらおう事にした。

返さなかった場合は店長に告発して一発KOである。文字通りの意味でな。

何とか場も収まりようやくケーキを食べようとすると、

「あ、ちよつと影入っちゃった！ 優人君少しどいて！」

陽キヤモードに入った喜多さんがケーキを色んな角度から連写しながら言ってきた。

なんで普通に食べようとしている俺が排他されなきゃならんのだよ……。これがきらきら成分を補充した本気の喜多さんか。

こんなのもうきらきらきらららじやなくて喜多喜多喜多だよ。

「優人君今なにか失礼なこと考えなかった？」

「H A H A H A、そんな訳ないだろう。存分に写真を撮りたまえよ喜多多ん」

「喜多多ん？」

「嘯みまみた」

怖いからナチュラルに思考読んでこないでほしい。

「あう……ゆ、ゆうくん、フォークとナイフってどっちで持つの……？」

「ステーキでも食う気かオメーは。ナイフはいらんから普通にフォークで食べなさい」

「早く古着屋行きたいからさっさと食べよう」

「もうっさつきからオシヤレな雰囲気か台無しになってるじゃない！」

「諦めな喜多ちゃん、これが結束バンドクオリティーだよ」

クオリティーとは。

次にやってきたのはリョウさんの強い、それはもう懇願と言っても過言ではないくらい強い要望で古着屋に来た。

「はえ〜古着屋ってこんな感じなのか」

入ってみるとあら不思議。普通の服屋とはまた違った雰囲気の内と売られている

古着のレパトリリーが多様多様すぎてちよつとした別世界を思わせた。

マジで色んなデザイナーの服売ってんだな。こういうのって仕入する店主の趣味とかも若干入ってそう。

「私古着って上手く着こなせる自信ないですよね」

「あー分かる。こういうのってセンス問われるもんね」

「え、そうなんですか？ 二人なら何着ても似合いそうですけど」

「……」

何で黙ってこちらを見てくるんでしょうか。

一応褒めたよね俺。何もバカにしてないよね。もしかした変な地雷踏んだとか？

しばしのジト目を俺に向けた後、虹夏さんが咳払いを一つしてから、

「……えつとね、例えば一着一着はオシャレだけど、それにかまけて抜け感を出そうとしたら小汚い感じになっちゃう事があるんだよ古着って」

「です。普通のお店で売ってるのとは結構違うから合わせるのも難しいのよね」

ふくん、そういうものか。

言われてみると俺も私服は基本無地とかシンプルなデザインのものばかり着てるか

ら、ここに売ってる服で合わせるとなると何を選べばいいのかさっぱり分からん。

でもまあこういうのは最初に冒険するんじゃないやなくて無難に一着合いそうなものを買えば大体安牌でしょ。

無理に全身コーデにしようとするから失敗するんだって何かの雑誌で見た気がする。

「全身古着でコーデする必要はない。新品の中に一着アクセントで入れるだけでも良い感じになる」

ここで古着ソムリエール、リョウさんのテイスティングが始まった。

「今日の虹夏と郁代は下無地だし何でも合わせやすそう。虹夏はこれ、郁代はこれ着てみて」

「おお、じゃあお言葉に甘えて試着してみよっか！」

「はい！」

さすがリョウさん、二人に合いそうな服を即座に選んで渡すとは中々の技量をお持ちのようです。

ところで後藤さんは何してるんだろう。さつきからずっと一人で服見て回ってるけど。

この店今のところ人少ないし店員さんも話しかけてこないタイプの物静かな店だから居心地は悪くなさそうだな。

なら多少放っておいても大丈夫か。たまにはあの子に自由に店内を見て回ると言う行動力を身に付けさせるのも大事だ。

「優人はこれね」

「え、俺も？」

リヨウさんが渡してきたのはベージュの柄シャツだった。

「当たり前じゃん。それに男子をコーデできる貴重な機会を逃したくない」

「本性表したな」

「でも優人に合いそうな服を選んだのは確かだから」

……確かに柄シャツは着たことなかったしちよつと気にはなってたけども。

いや、ここは古着ソムリエールを信じよう。

「……じゃあちよつと試着してみます」

「うん、ぼっちはどうする」

「適当に泳がしといてください。多分自分で何か見繕うと思うんで」

「りようかい。リヨウだけに」

「やかましいわ」

吐き捨ててから試着室に入る。

しかし着替えるといつても俺のは上着を脱いでまた羽織るだけなので試着自体は数秒で終わる。何なら試着室に入らなくてもいいくらいなのだが、そこはまあ、ほら……そういう流れだったから、ね？

ともあれベージュの柄シャツを羽織って鏡を見る。

……うん、何だろう。自分で思うのは少し自意識過剰のように見えてしまうけど、こういうのも結構ありなんじゃないか俺？

今まで無地ばかりの服着てきたけど、今後は柄物を検討してみてもいいかもしれない。

そう思うくらいには気に入った。柄シャツだけどベージュという事もあり派手すぎず、かといって無地とは確実に異なるデザイン柄。ええやん……めっちゃええやん。

もうこれを買うのは確定事項として、割かし上機嫌のまま試着室のカーテンを開ける。

あくまで疑問を持っている体で聞いてみた。

「リヨウさん、試着してみましたけどどうですかね？」

「うん、似合ってる。やはり私の目に狂いはなかった」

「いやほんとさすがです。五センチほど見直したっす。

「お、優人くんも試着してたの？ どれどれ……おお、良いじゃん！」

「無地を着てない優人君って何だか新鮮ね〜！ ありだわ！」

「どもっす」

今をときめくきらきら女子の二人にそう言われるって事は悪くないらしい。

良かった、リヨウさんを疑ってた訳じゃないけど俺の感性がおかしい訳じゃなかったんだな。ちよつと安心したわ。

安心しつつ虹夏さんと喜多さんの服装も見る。

「やっぱり虹夏さん達も似合ってますね」

「へへーん、ありがとっ」

「よし、じゃあ次はこれ着て。優人はこれね」

もう次の服を用意してやがるよ古着ソムリエール。

仕事早すぎんか。普段からバイトとかこれくらい積極的だったらいいのに。

その後、俺達は十分くらい着せ替え人形にさせられた。

次から次へと服を持つてくるもんだから断る隙も与えられなかったのだ。まあ俺は新鮮な気持ちだったから結構楽しかったけど。何着か買つていいこうかな。

「ふう、こんなもんかな」

「やつと解放された……」

「でもこれでトータル二千円つて凄いですよね！ 今日みんな古着コーデのまま遊びましようよ！」

その提案には大いに賛成である。

優人さんこの古着気に行つちやつたもんね。

「で、後藤さんはどこ行つた？」

「ぼっちならあそこの試着室で着替えてる。そろそろ終わるんじゃない」

「ひとりちゃん着替え終わった〜？」

「あつはい！」

さてさて、適当に泳がせていた魚は果たしてどうなったかねえ。

一応リョウさんのワンポイントアドバイスも聞いてたし普通ならそんなに酷くなる
とは思わないけど。

でも後藤さん普通の子じゃないしなあ。

と、試着室のカーテンが開けられた。

予想は当たった。

「うへへ……け、結構かつこよくできました……!」

「……」

「ど、どうですかね……?」

「よし、ちゃちゃつと会計済ませて次のところ行きますか」

「異議なし」

「えっえっ?」

「後藤さんは早く着替えてその服達元の場所に直しておくんだぞ」

「えっ」

泳がせていた魚は合成獣キメラだったようだ。

まさかピンクジャージの方がマシだと思おう日が来るとは思わなかったぜ。

106. 何かを成すのには心を休ませるのも必要

古着屋を出る。

結局後藤さんのカメラコーデは全員一致で0点……いや正確には採点拒否で無効となった。

そのまま彼女以外は俺を含めリョウさんにコーデしてもらった服を買い上げ、ワンポイント古着コーデで下北散策を再開したのである。

「そーいやリョウも買ったんだ。ジャケットかつこいいじゃん」

「一目惚れ」

「……ん？ でもリョウさんお金なかったはずですよ？ ケーキも俺が出したし、どつからそれを買うお金が湧いてきたんですか」

まさか俺の知らないところで後藤さんか喜多さんに借りたとかじゃないよな。

この人なら普通にあり得そうだから怖い。お金に関しては信用度マイナスに振り切ってるからね。

と、こんな疑問をぶつけてみたのが逆にまずかったのかも知れない。

基本的にどこかズレているリヨウさんの行動力を見誤っていた俺の責任もあったのだと思う。というか気付くべきだったのだ。元々着てた服はどこに行ったのかと。

俺の質問に彼女は答えた。

「さつき着てた服を売ったお金で買った」

普通にチャックを開けて見せてきたのまでは良かったが、その中身が問題だった。

さつきまでリヨウさんが着ていたのはシャツ一枚。夏も間近で気温も暖かいというより暑く感じてきた近頃ではそれがデフォルトになっていた。

リヨウさんの着ている服は基本的に良いブランドの服だろうからそれなりの値段で売れたのだろう。

それで古着を買ったと言えば済んだ話なのに、何故か証拠まで見せてきたのだ。つまり。

疑似的な露出狂山田の誕生であった。

「うわちよつりヨウさんいきなり何してというか中に何も着てな」

「優人君は見ちゃダメーッ!!」

「ぐぎやああああああああ目がアアアあああああああッ!」

虹夏さんと喜多さんがそれぞれの人差し指で俺の両目を突き刺してきた。

俺は死んだ。

数分もすれば潰れた両目も復活し、下北ぶらり旅続行。

「優人にはカフエで身体で支払うって言ったからちよつとしたサービスをとって……

一応ギリギリ見えないラインでやったのに……」

「外でやるバカがどこにいるのさこのクソバカベースストつ。下着まで売りやがって……」

そこにいますよ。

リヨウさんは頭に思いっきりたんこぶを作りとぼとぼ歩いている。多分虹夏さんに一発やられたんだろう。あれは山田が悪い。

「優人くんも最後まで見てないよね?」

「その前に刺突されたんで見れてないです」

「見れてない……?」

「見てないですハイ!!!」

日本語難しいなあ~~~~!!

「まったく、いくらお金のお礼とはいえあんな事は絶対しちゃダメだからね。優人くんには刺激が強いんだから」

「でも優人はぼつちが下着姿のままなのに説教した過去があるから何とも思わないと思ってた」

「あつうっ……」

「今それ掘り出すのやめてもらえませんか？」

後藤さんに流れ弾行ってますよ。

「言われてみれば確かに……優人くん、ちゃんと女子の身体に興味はある？」

「どう答えてもアウトになりそうな質問なんですが」

「ただの興味だよ。で、どうなの？」

「まあ、普通程度には……」

女子高生四人に囲まれながらこんな質問答えさせられるとかどんな拷問だよ。

一応無難な答えにしたけど、大丈夫だよな……？

「ちなみに二次元の可愛い女の子キャラクターの場合は？」

「大好き……愛してます」

「よし、ギルティだね」

ハッ!? 誘導尋問だなんて卑怯な!!

それが天使のする事かあ!?

「私からの質問だけど優人君、二次元で胸が大きい女の子キャラクターは？」

「何がと言わないけど包容力に包まれない」

「よし、ギルティね」

ちくしょう口が勝手に……!!

「優人は時々私よりバカになるよね」

「元凶が何言ってるんだこの野郎! ……いやでも待てよ? 俺のはそもそも二次元だから別にアウトもギルティもないのでは？」

「おそらくそういう問題じゃないと思う」

「じゃあどういふ問題なんです？」

「三次元へどう引き戻すかとかじゃない」

「?」

いまいちよく分からん。

どういうことだっただってばよって俺の中のナルトも疑問に思ってる。

「(優人くんのオタク部分が強すぎるんだよねえ)」

「(包容力という意味ではそういうのも含めて受け入れる事も大事なんじゃないですかね?)」

何をこそこそ話してんだあの二人。

とりあえず俺へのギルティ判定はどこかへ行ったらしい。まあ許されるならそれに越した事はないな。

「後藤さんは二人の言ってること理解できた?」

「あつえつと……ちよつとだけなら……」

なん……だと……!!?

後藤さんでも少しは分かっているのに俺が理解できないとか、そんな事があつて許されていいのか……?」

「ここそ話を続けている二人と俺が軽く絶望してたら痺れを切らしたのか、リヨウさんが自ら声をかけてきた。」

「どうでもいいから次のところ行こう。音楽好きなら誰もが心躍る穴場スポットを案内するから」

「ハッ!? そういえば今日は私のイソスタ更新ネタを探すための遊びでしたね! 私とした事がうっかりしてました!」

「違うと思うよ。みんなで気分転換に遊ぶためだったと思うよ」

「さあ行きましょうリヨウ先輩! 穴場と聞いて俄然やる気がみなぎってきました! どんな映えスポットなのか私、気になります!」

おお、まさか自然にえるたそネタを聞けるとは思ってた。ちよつと感動。

リヨウさんの一言から流れが変わり、さっきまでの謎の不穏オーラはどこへやら。俺達は先導するリヨウさんに着いていった。

そして着いたのが。

「ハイ、ハードオフ」

「ふざけてんですかー！」

喜多さん渾身のツツコミであった。

気持ちは分かるよ。穴場スポットがまさかの割かしどこにでもあるお店だったもんね。今のところ映えとは無縁なものね。

「何を言うつ。ここには現行品から生産終了した中古楽器や機材まで稀に値の張る物が激安で売られている事があるのだ！ 気分は徳川埋蔵金探検隊！ ジャンク品を買い取って自分好みに改造するも良し！ 部品のために買うも良し！ ネタで買うも良し！ これが穴場スポットと言わずして何と言う!？」

「他人のオタク特有早口を聞くとこんな微妙な気分になるんですね。何と返したらいいか分かんねえや。虹夏さんも俺からオタク話聞く時こんな気持ちだったんですか」

「そうだよ」

何気ないそうだよが俺の心をハートブレイク。

「一カ月で品揃えが変わる事も多いから月イチ都内ハードオブ巡りをするのがまた楽しい……。あつ郁代、この情報は友達に教えたらダメだよ」

「言いませんよこんな役に立たない情報！」

言ったところでそれがどうしたのとか言われそう。

楽器通にしか伝わらんのだろその魅力。……ん？　つてことは……。

「見てリョウ！　スピードコブラがこんな値段で売ってるよ！」

「くくつ、これだからハードオプでの物色はやめられんなあ……」

「う、嘘……!?　高くて手が出なかつたエフエクターがこんなに安く売ってるなんて……！　ここで買えば何回もマイニユーギアできる……！　うふへ、うふぐへえへ……」

案の定楽器通のヤツらが見事に釣られていた。

楽器に詳しい人にとっちゃ中古品だとしても安く売られてる商品を見ると魅力的に見えるらしい。俺で言う面白いゲームが安く売ってたみたいな発見をするのが良い所なんだろう。

そしてそんなに詳しくない俺と一緒に取り残されてるのは喜多さんである。

もちろん借り物のギターを持つてる時点で楽器に拘りもない彼女には、あの領域に混ぜるのは到底無理な話だ。

つまりは謎の疎外感をここにきて感じる陽キャの出来上がりだった。

もはや俺達の事は眼中になく三人共ハードオプの虜になっている。あの後藤さんさ

え目をキラキラさせながら色々見ているのだ。余程楽しいのかもしれない。

「とはいえこっちはこっちで暇だよなあ」

「うう……みんな楽器に夢中なんて……こんなの女子高生の遊びじゃないわ……」

「まあ楽しみ方は人それぞれだし、結束力を高める以外にもリフレッシュは大事だからな。気が済むまで見させてやろうぜ」

「こんな時まで優人君は面倒見がいいのね……」

一応元々は帰ろうとしてた身ではあるんですけどね。無理矢理連れてきたのはあなた達でしょうよ。

こういう時はいつそ開き直ってこっちも楽しむ気概でいれば楽しめるもんなのさ。暇は暇だけど。

しかしこの遊びも元はと言えば喜多さんの発案。

最終的に彼女が楽しめていないと今日の一日を付き合った意味もなくなるというものだ。

三人を見てみると……まだまだ時間はかかりそうだな。

スマホを出して適当にこの付近の店を調べる。軽く時間を潰すのにちょうどいいのは……ふむふむ、よし。

「喜多さん」

「何かしら……」

「そんなに暇ならリョウウさん達が見終わるまでどこか別の店に行つて時間でも潰すか？」

近くに有名なドラマで紹介されてた食べ物とか売ってるらしいけど」

「……………一人で？」

「うん」

「行くわ!!」

うわうるさつ。

いきなり機嫌良くなるじゃん。そんなに暇だったのかよ。陽キャって常に動いてないと死ぬの？

という訳で虹夏さん達に一言だけ告げてハードオフを後にする。

スマホでマップを見ながら目的の店へ歩いてると、隣に並んだ喜多さんが上機嫌で口を開いた。

「何だか私服で優人君と二人で歩いてると横浜のシーパラダイスに行った時の事思い出すわね」

「そーいやそーうだな。まああん時は文化祭の展示物を撮るって目的があつたけど」
後半寝不足が原因で寝てしまったのも今ではもはや懐かしい。何だかんだ半年以上は経つてるもんな。

「ほとんど遊んでたようなものだったけどね。でも今日は何の目的もなく遊びに来てるから、前よりも気楽で楽しいわっ」

「いや喜多さんの陽キャ成分補充が目的だったような気が……」

「何か言つた？」

「いえ何も」

笑顔で聞き返してこないで。

「つうかシーパラの時も結構はしゃいでたような気がするんですが俺の気のせいですかね。」

「目的の店に着き『ぼっちのグルメ』というドラマで次郎さんが食べてた肉巻きおにぎりを購入。」

ベンチに座り食べながら適当なトークをする事にした。

「二応次に行きたい店とかは決まってるの？」

「ビレパンね！」

「……それどこにでもあるし特別感ないのでは？」

「下北のビレパンは特別なの！ 何故なら下北だからよ！」

あーそーゆーことね。完全に理解した（わかってない）。

「じゃあ合流したらそこ向かいますか」

「先輩達はまだ少し時間かかりそうかしら？」

「多分。自分の好きなものを見る時は一つ一つ丁寧にみるから普段より時間かかっちゃうんだよ。オタクだから分かる」

「私が美容系とかのグッズを見る時みたいな？」

「そゆこと」

「へえ〜」

本屋に行つて漫画の試し読みをしたりゲームショップで色んなゲームソフトを見漁るようなのと一緒だ。

たまに後藤さんと帰りの際に俺の都合で付き合ってもらったりしてたから理解できる。おかげで最近の後藤さんと一緒にアニメを見たりする時あるし、何気に布教も成功してるのだ。

「うーん、私もギターとかもつと詳しくなった方がいいのかしら?」

「別に詳しくなくてもいいんじゃないね。そういうのは後藤さんやりヨウさんがいるんだから知識はそつちに任せりゃいいさ。ブランドとかなんてのは結局音の質と見た目と値段の違いがほとんどなんだから」

「そうかしら?」

「それに喜多さんはギター以外にボーカルもやらなくちゃだしな。ギターを詳しくなるより普通に練習なりボーカル方面を頑張る方が堅実だと思うぞ」

「うっ……それつてもつと私に練習した方が良いつて言ってるの……?」

「じゃなくて、バンドにとつちやボーカルはバンドの顔でもあるんだから、それを磨けば後藤さん達にはない喜多さんだけの武器になりえるんじゃないかなつて」

「私だけの、武器……」

肉巻きおにぎりの最後の一口を頬張る。

「喜多さんの歌声は綺麗だけどどこか力強さもある。だからボーカルの知識を深めてもつと良い練習法とか分かれば、今以上に誰かの心に響く歌声になるんじゃないかな」

「……ねえ、私の歌声は優人君の心に響いてる?」

「おう、響いてる響いてる。響きすぎてひじきになるくらいだわ」
「そこ茶化すところ!? あと何でちよつと声掠れ気味なの!？」

だって俺の中の大蛇丸が勝手に出てくるもんだから……。

とまあ、冗談はさておき。喜多さんも食べ終わったのを見て席を立つ。

「少なくとも俺は喜多さんの歌声に、結束バンドの音楽に心打たれた最初の一人だからな。身体によおく染みついているよ」

「……もう、最初からそう言えばいいのに」

「言わせんな恥ずかしい。つと、しょっぱいもん食べたから甘いもの食べたくなってきたな。何か店探すか」

「あつ、だつたらすぐ近くにテレビで紹介されてたクレープ屋さんがあるわよ! そこ行きましょ!」

「よくそんなのチェックしてんな。まあいいや、どうせなら美味しいもん食べたいしそつち行くか」

マジで近くにあった。数分もかからなかった。

お互い違うクレープを頼み、そろそろハードオプ組も終わる頃合いかと思いながら店

に向かう。

「……美味しいけど、そんな紹介されるほどか？」

「うーん！ やっぱりテレビで紹介されてるだけあって全然違うわねー！ 絶品だわー！」

クレープというより情報食ってんなこの子。プラシーボ効果じゃねえのそれ。

舌が肥えてる訳じゃないと思うんだが、普通よりちよい上くらいだと思う。そもそも作り方と具材的にクレープに味の良し悪しは付けにくいと思うんだけど。作った事あるから分かるけど、生地さえあれば不味い具を入れない限り誰でも平均点は超えられるだろこれ。いや全然美味しいけどね。

「優人君のはどう？」

「美味しいよ。ただテレビで紹介されたって聞いたから勝手にハードル上げすぎたかもしれない。そこは俺の反省点だな」

「そう？ 私は凄く美味しいと思うけど」

「テレビで紹介してたのは喜多さんのクレープだから、一番美味しいのがそれって事かな」

「……」

フルーツ系じゃなくてシンプルにチョコソースと生クリームたっぷりなやつの方がよかったか。

何だかんだ王道が一番って言うものね。ポテチもうすしお味が一番だししやがりこもサラダ味が一番だし、たけこのかきのこかで言えばたけのこがいちば……おつといけない、これ以上は血みどろの争いが起きかねないな。

俺は両方好きですよって謎の勢力にアピールしていると、喜多さんが不意にこちらを向いた。

「……じゃあ優人君、私のクレープ食べてみてっ」

「え？ ……いや、でもそれってかんsぶぐぼあつ!？」

言い終わる前に喜多さんから俺の口へクレープアタックが飛んできた。

予備動作なしの攻撃とは……やるじゃねえか喜多さん……俺の完敗だぜ。クリームが顔のそこら中に飛び散ったぜ。

「(きゃー！ やっちゃったつ、私やっちゃったわー!)」

「……あの、できればウェットティッシュを貸していただけると清水さん嬉しいなって

……」

周囲の人に注目されてるの地味に恥ずかしいんだわ。

こんな嬉しくないアオハルイベントも早々ないぞ。やっぱり俺はとことん青春ラブコメに縁がないらしい。ラブコメになりそうなシチュになると大体ギャグが襲い掛かってくるのは何なんだよ。呪いかよ。

ハードオプに戻ると、虹夏さん達が店の前にいた。

「どうやら堪能したようだ。」

「……優人くん、何だか顔テカってない？」

「今流行りの生クリーム洗顔してきた後なんで」

「絶対流行ってないよね!!」 喜多ちゃんは何で若干顔赤いの!？」

「今流行りの赤面メイクです」

「絶対流行ってないよね!？」

やはり虹夏さんのツツコミは素晴らしいね。

一家に一人虹夏さん欲しいわ。観賞用と保存用と拝む用と話す用で四人欲しい。

「はあ……まあいいや、それで次はどこ行くか決まったの？」

「一応は」

そして先程喜多さんが言った希望通りビレパンに行った。

彼女曰く、下北のビレパンは特別らしいとの事だったが、実際行ってみれば特別などはそんなになくて他のビレパンとあまり大差はないと虹夏さんが言っていた。

ただ何もなかったという訳でもなく、ビレパン特有の手書きポップやステッカーを見てグッツの参考にしたたり、いつの間にか後藤さんが迷子になってたり、リヨウさんが結束バンドのマスコットキャラクターけつばんちゃんを自分で開発しておきながら忘れて虹夏さんにツッコまれてたりと、相も変わらず俺達はどこかに行けば何かしらのイベントが起きるらしい。

癖強パーティーならではかもしれない。

「それで、喜多ちゃんは満足した？ 今日にはもう解散でいい？」

「はい！ 楽しかったです！ きらきら成分もたくさん補給できました！ これて明日も生きられるわ！」

え、死ぬとこだったの？

外も既に暗くなりつつある頃、俺達はスターリー付近まで戻ってきていた。

「じゃあみんなまたね！ リフレッシュした分、次は目いっぱい練習しよう！」

「あっはい！」

「分かりました！」

「それより今日買った中古品の修理で私は忙しくなる」

「そんなこと言うなら審査終わるまで没収するよ」

「練習頑張る」

虹夏さんの声にそれぞれ応える。山田は通常運転だった。

「では俺達はこれで」

「うん、じゃね〜！」

虹夏さん達と別れ、後藤さんと喜多さんと下北沢駅へ向かう。

その道中だった。

「あ、あそこで路上ライブやってるわよ！」

「おお、今日も下北は下北してんな〜」

うむ、やはりライブハウスで聴くのはまた違う良さが路上ライブにはありませんな。ちらほらと立ち止まって聴く客、そんなのお構いなしに自分達の音楽を奏でるバンド。

この小さな街のあちこちで毎夜夢溢れる若者達が自分達だけの世界を作り上げていた。

音楽、ひいてはバンドに関わり始めてまだ一年くらいだけど、それでもバンドは俺の世界を広げてくれたと言っても過言ではない。これも後藤さんがギターをやったなかったら縁のない世界だったんだ。

そして、結束バンドがもう一段階上のステージに行くための審査がそこまで迫ってきている。

「ひとりちゃん、私達もライブ審査まで頑張らなくちゃね！」

「は、はいっ」

「優人君もしつかりサポート頼むわよ！」

「おう、俺にできる事なら何だとしてやるさ」

結成して一年とちよつとだけけれど、ここまでやってきたならいつそ行くところまで突き抜けていけばいい。

行けるとこまで行くのではなく、行きたいとこまで行く。俺はその一歩後から着いていく。そうすれば、きつと何も怖くない。どこへだっで行けるのだ。

ライブ審査まで、あと約一週間。

107. 大事な出番の前でこそリラックスはしておくべき

太陽照りつける夏空の下。

清々しいほど気持ちの良い晴れた天気とは裏腹に、迷惑極まりない太陽光が容赦なく肌を直撃し直に熱を浴びせてくる今日この頃。

わたくし清水優人は両手が塞がったまま虹夏さんと出会い頭にこんな会話をした。

「丸太みたいに担がれてるのがぼっちちゃんなのは分かるけど、どうしてふたりちゃんもいるの?」

「ライブが怖いと言って全然トイレから出てこなかったんでピッキングで鍵開けてから連れてきました。ふーちゃんは途中まで一緒に行きたくて着いてきたって感じですよ。」

「うんっ! お姉ちゃんが逃げないようにふたりも見張ってたんだよ!」

「ぼっちちゃん……」

「あつうつ、な、何か視線が……?」

前にみんなで頑張ろうと意気込んでいたというのに怯えて閉じこもる、これが後藤さんクオリティーだ。

俺が迎えに行つた時にはもう既にトイレの住人になってた。もしもあのまま放置してたらトイレの神様になってたかもしれない。疫病神的な方面のやつで。

ひとまずふーちゃんを直樹さん達が乗る車に預けて俺達も移動する事にした……いところなのだが。

「あれ、リヨウさんまだなんですか? 地元だからとつくに來てると思ってたんですけど」

「あのアホはさつき起きたから先に行つててだつて。地元だからギリギリまで寝てられるとか思つて大寝坊したんでしょ」

「山田ア……」

強制的に連れてきたとはいえ観念してここにいる後藤さんの方がまだマシだと思つちやうくらいクレイジーな事をしやがるなああの女。

「こんな時までマイペースなんだからまつたく……しょうがない、あたし達だけでも先

に新宿行こっか」

「うっす」

俺達は電車の改札へ向かう。目的地は虹夏さんが言った通り新宿駅だ。

そう、今日はとうとう『未確認ライオット』のライブ審査の日。審査員や客を入れての本格的な審査が行われる本番当日である。

電車に乗って移動中、冷房が効いてるんだか効いてないんだかよく分からない電車内で座りながら会話が始まる。

「まさかライブ審査開催場所が新宿フォルトだなんてね。それでかは分かんないけどオープンングアクトはS I C K H A C Kらしいよ。みんな聞いてた？」

「そうなんですか？ というか廣井さんで大丈夫ですかね……逆にそっちの方が私は心配になりそうなんですけど」

「あつ私も初耳でした……」

「俺は毎日サイトのお知らせ見てたんで一応知ってました。何かやらかして急遽バンドの差し替えがないかヒヤヒヤでしたよ」

「そっちの心配なんだ……」

そりゃあ大事な審査なんだから万が一にもトラブルとかあつてほしくないもの。

しかも一番トラブル起こしそうなのが知り合いな時点で余計怖い。にしてもライブをする場所が新宿フォルトなのは正直助かる。一度やった事のあるライブハウスだけに見知らぬ場所でやるよりも幾分か緊張も解れるかもしれないし。

話してるうちに新宿駅に到着。約十分程度といったところか。

それぞれ機材を担ぎホーム、階段、改札、出口に向かった。
で。

「ちよつと太陽にクレーム入れるんであいつの番号教えてください」

「恒星にクレーム入れようとする人初めて見たよ。あと暑いのは分かるけどやめなさい」

外に出ると一気に太陽光が攻撃を浴びせてきた。地面も焼かれてるように熱せられており、もれなく上下から熱の拷問サンド状態である。

快晴すぎるのも考え物と思ってしまうくらいには暑い。雨じゃなくていいからせめて曇りとかその辺にしてくれないかな。

虹夏さんに止められて仕方なく暑い中を歩き出す。

「それにしても機材持ったまま人混みの中歩いて行かないやなのがキツイです……」

「これが駆け出しバンドマンの宿命だよ喜多ちゃん……はあ、でもそうだね。夏休み入ったら車の免許とりに行こうかな……」

「そういや虹夏さん達はもう免許とれるんでしたね」

「まあね。これからの事を考えると自分達の機材車とかあった方がいいだろうし、早めにとっておく事に越した事はないから」

いいな、俺も早く免許とりたい。

そしたら結束バンドのみんな乗せて移動できるのいい。とにかく冷房とか暖房とか自由に設定できるし快適なまま移動したい。

と、暑い日差しの中まだまだ遠い願望を抱きながら歩いていたらすぐ隣を車が通り過ぎていく。

なんかちよつと高そうな車だなくと思つてたら急にその車が減速した。そして俺達と並走するくらいゆっくり走行しだした。

もしかして最近の輩は歩行者にまで煽り運転をするようになったのかしら。

なんて思つてたら、後部座席の窓が開いた。どんなヤンキー面が顔を出すのか見ていると、フツッに見覚えあるヤツだった。

「みんなおはよう」

親が病院経営してるセレブお嬢さま（笑）の山田が涼しげな顔をしたまま挨拶してきたのだ。

おうおう、良い度胸してんね〜？

「つてオイ！ 何で寝坊したりリヨウの方が優雅にしてんの！ ずるっ！」

「許せねえよなあ!？」

「そんな事を言っても結局は先に着いた方が正義なのだよ諸君。という事で遅刻しないでね」

「待てコラ山田ア!!」

せめて乗せろやあ!!

俺達の叫び声もむなしくリヨウさんを乗せた車は去っていった。山田家両親め、またあのアホ娘を甘やかしたな？ これだから親バカは……。

新宿フォルト前到着。

無事に着いたはいいものの虹夏さん達は暑さによって既にグロッキー状態である。一応後藤さんと喜多さんのギターは俺が前後に装備して持つてるからマシなはずなん

だけど、それでも暑さには敵わないらしい。何なら俺も暑くて普通に嫌な気分だ。早く涼しいところ行きたい。

で、目の前に座っているダーヤマがいた。

「遅い。暑い中待たせないでほしい」

「……」

「優人くん待つて、気持ちに分かるけどアレでも一応は結束バンドに欠かせないベースだから！　ここで一人退場は洒落にならないよ！　終わってからならいくらでも罰しいいから今だけは落ち着いて〜！」

天使に助けられたなこの野郎。今日このままタダで帰られると思うなよ。一時間は説教してやる。

今はとにかく冷房の効いた室内に行くのが最優先。みんな満場一致で新宿フオルトに入る事にした。

「ふわあ〜涼しい〜……」

「生き返るわね〜」

「あっはい」

何だか少し久しぶりに感じつつ、新宿フォルトの中を見渡す。

慌ただしそうに駆け回るスタッフの人達や既に他のバンドの人達もいるようだ。みんなとSICK HACKのライブを見に来た時とシデロスのサポートをした時のライブとはまた違う雰囲気があった。

適当に見ていると見覚えのある姿が見えたので声をかける。

何だか慌てているようにも見えるけど、どの業界でも挨拶は大事なのだ。

「おはようございます。久しぶりです銀さん。つうか忙しそうですね」

「あらあら～優人ちゃんも結束バンドちゃんも久しぶりね～！」

ペットボトルの水を三本ほど抱えながら足を止めてくれたのは新宿フォルトの店長、銀さんである。

「ごめんね～今ちよつとバタバタしてて～つ。また後でゆっくりお話ししましょう！」

「開催場所の店長さんなんだから今日は大変ですよねえ。お姉ちゃんがよろしくつて言っていましたっ。今日は結束バンド共々よろしくお願いします！」

「よろしくね～！ それじゃあたしは行くからみんなも準備しててちようだい。あと優人ちゃんは近くのレストランに声かければ関係者用の名札貰えるからそれに名前書い

て付けておいてね！」

「あ、はい、分かりました」

手際良いな銀さん。さすが店長やつてるだけの事はありますわ。

そして少しだけ虹夏さん達から離れて近くのスタッフに声をかけると、言われた通り名札を貰い自分の名前を書いてから首に提げる。これで楽屋にいたりしても不審に思われないか。

スタッフの人にペンを返して軽く礼を述べてから虹夏さん達の元へ戻る。

すると、彼女達が全然違う方を見ている事に気付いた。みんなして床を見てる……？緊張で俯いてる訳でもない、か。

とりあえず駆け寄っていく。戻ると同時に自然とみんなと同じように俺も床を見た。なんかいた。

「水買ってきたわよつ、ほら飲んでさっさと生き返って〜！」

「業務外で足引つ張られてる!!」

床におにころのパックを撒き散らしながら倒れてるのは我らがきくり姐さんである。

こう見ると人間ってほんとと学ばない生き物なんだなとつくづく思い知らされるよね。他のスタッフみんな準備で忙しくしてんのに堂々と床で寝転がってるのマジで狂

気だと思う。ほら、周りのバンドマンちよつと引いてるよ。

「くくくけつ……みん……おは……つ……くくくつ！」

「酒やけのせいで何言ってるか分かんないし！」

口をぱくぱくしながら何かを言ってるようだが、かすれ声すぎてあまり聞き取れん。

「大事なライブの日に何でこんなお酒飲んでるんですかこの人！」

「何で運営さんはこんな人をゲストにしたの!？」

「さすが廣井さん。当日にこそ酒を飲みまくるなんて、これでこそロック」

「くくく！ つくくく！」

散々な言われようである。一人のバカを除いて。

しかしほんと何言ってるか分かんないな。仕方ない。

「銀さん、ちよつと水貸してください」

「? いいけど……どうするの?」

「こういうのは無理矢理飲ませないの意味ないですよ。そうらっ！」

「がほびぼびぼばばばべばばばお!!」

「凄い荒療治ね……」

「優人くん酔っ払いには容赦ないから……」

水をいくらか飲ませると少し回復したのか、きくり姐さんが自分で喉を確かめるようにうめき声みたいなのを出していた。

そんなので確認できんの。

「で、無駄に飲みすぎた理由は？」

「……まだ未来のある失敗してもやり直しがきく若者達を見てると飲まずにはいられなくなつてえ……うう、やり直したい……」

「銀さん、これ運営側の人選ミスでは？」

「言わないでちょうだい……」

リヨウさんがきくり姐さんを見てロックだとか言つてたけど、これ見て運営の人がSICK HACKをゲストに選んだなら運営も運営で大概変な方向にぶっ飛んでる方のロックだと思う。

よし、反面教師にしよう。

「……わ、私も将来あんな風にお酒に逃げるような大人になるんだろうな……」

「そうならんように俺が一生監視してやるから安心しろ」

「あつうん……」

なんか後藤さんにお酒飲ませたらマジで危ない気がする。

こういう子に限って酔うと理性崩壊してめちやくちやになるタイプだとマンガで見た事あるし。

「にしても普段のライブでは見えないような人もちらほらいるね」

「主催のお偉いさんとかレーベルの人とかいるからいつもより堅苦しい空気になってるわよね。でもそれも経験。結果がどうなるうともこれから活動を続けていくならこういうった機会は増えていくわ。だからあまり意識せずやっちゃいなさいね」

確かに周りにはスーツを着たおっちゃん系の人がそれなりにいた。

威厳とも貫録ともまた違うけど、ライブハウスにはあまり似つかわしくないスーツ姿というの、逆にその違和感を存在感として表しているようにも見える。

言ってしまったばそれに吞まれて演奏にブレが出たら終わり。どんな人の前であつてもいつも通りのクオリティーでライブができるか問われる審査でもあるのかもしれない。

うちの後藤さんは大丈夫かなあ……。

「ちなみにあたしも審査員の一人。身内だからってもちろん鼻屑はしないわよ」
宣告があつた。

どのバンドに対しても平等に価値を評価する立場からの。

「だって、そんな事しなくても結束バンドは客を魅了できるものを持つてると思うからね」

「……はいー」

ただ、友人としての激励はしてくれたらしい。

あの後、銀さんはそのままきくり姐さんを引きずっていき、今までコメディー色の雰
囲気だった俺達は本来の空気感にまで一気に引き戻された。

喧騒とまではいかず、だけどスタッフ達や他のバンドグループの会話からは緊張感も
漂つていて静寂とも言えない。

冷房が涼しいというより、空気がピリついていて寒気がしそうな感覚に近いか。

さすがに本気で上を目指しているバンドがこんなにいると、普段のライブよりも圧迫
感を感じてしまう。

「うーん、あたし達はどうしよつか？ もう控え室行つとく？」

「じゃあ先行つててください。俺はみんなの分の水買つてきますね」

「あ、じゃあお金渡すね」

「いいですよ別に。こういう時くらい俺に出させてください。今日に関してはこれくらいしか力になれないんで」

「うっ……じゃあ、甘えさせてもらおうかな」

「喜んで」

後藤さんを喜多さんに預けて水を買いに行く。

その途中にとあるバンドを見かけた。確か、ケモノリアだ。

今回のライブ審査で本命はシデロスとケモノリアと言われているくらい、他を圧倒する実力の持ち主達。

正直ネットの反応を見てもこの東京会場からはシデロスとケモノリアが勝ち進むと断定されるほど別格のバンドだ。結束バンドを超えるべき壁の一つ。

藝大生というのもあつてみんな才能ありそう感凄いけど、実際実力もあるのだから恐ろしい。

個人的には年上お姉さんって感じの見た目の人が多くて美人だなんて思います。

……というかあの人達何か言い合っていない？

気のせいだと思うけど解散だーとか信玄がーとか言ってるように聞こえるけど。穏やかじゃないですねえ。ここは触らぬ神に祟りなしで行こう。さて、水水つと。

「あつ」

「あつ」

水を買おうとしてたらばったり会った。

そう、シデロスのドラム担当ハッセとギター担当のふうさんに。

「ゆうーさんじゃないっすか」

「ゆうと君もお水買いに来たの〜？」

「おつす、まあそんなとこ。今日はライバル同士だけどよろしくな」

「よろしくつす」

どうせならという事で一緒に控え室へ戻る事に。

「じゃあもうヨヨさんと幽々さんも控え室にいんのか」

「そうっすよ。ヨヨコ先輩は今頃緊張と人見知り発症してスマホ見まくってんじやない

すかね」

「容易に想像できるな」

「幽々ちゃんも鉄分サプリ食べてるかも？」

「いつものだな」

相変わらず癖が強いゼシデロス。

結束バンドも負けてらんねえなあ！ いやこつちも充分癖強か。

「そつちの方は活動順調なんすか？」

「どうだろうな。色々力入れてるけど結局ネット審査も28位でギリギリだったし、順調といえば順調……微妙といえば微妙ってとこかな？」

「けどここまで勝ち上がってきただけでも充分凄いよー！」

「それは結束バンドの実力と応援してくれる人達のおかげだよ」

実際3000を超えるバンドの中から30組まで残ってる時点で相当凄いと思う。

あとはどこまでやれるかだ。いよいよ色んな人の前で演奏する今回がある意味一番の見せ所になるだろう。

そして強敵とも言えるシデロスとケモノリア。上位2組だけが最終審査に進めるといふ、今日の審査において最大最強のライバル。

この2組のどちらかに勝たないと結束バンドは上にいけない。ただでさえ高すぎる壁に分厚さまで付け加えたレベルの難易度。

そんなライバルのうちの1組のメンバーと仲良く話してるんだから正直言つて今よく分からない状況だな。

こんな和みムードでいいの君達。さつきまで他のバンドみんな結構ピリピリしてたけど。これが強者の余裕つてやつ？ いやでもあれか、そういやいつもヨヨさんが異常なくらい緊張してるから逆に自分達は冷静になれるんだっけ。ヨヨさん……。

適当な会話をしてる内に控え室に着く。

4本分ペットボトルを抱えてる俺を気遣つてハッセが扉を開けてくれた。

「ヨヨコ先輩くゆーさんが来たつすよ〜」

「あつー！」

ハッセの言葉に反応したヨヨさんがこちらを見る。

どうやら既に虹夏さん達と会って話している様子だったが、俺を見るとあからさまに顔がパアツと明るくなった……気がする。チワワだ、尻尾振ってるチワワがいるぞ！

「…………ツ、フンツ！」

そして束の間、目つきの悪いツンデレチワワ姫はすぐさま目を逸らした。

「俺ヨヨさんに何かしたっけ？」

「オーラはチワワですけど性格はネコっすからねえ。いつもの照れ隠しじゃないすか？」

「納得」

「ちよつ、勝手に納得してんじやないわよ！」

「まあそうキャンキャン吠えなさんなヨヨさん。落ち着いて、はいお手」

「……」

「本当にお手しようかちよつと迷ったつすねあれ」

「周りの目もあるから諦めた感じだね」

「あつ、ワンツ……」

「代わりにぼつちちゃんがお手しだしたけど」

「さすが優人の忠実なぼつち犬」

「犬派なのね、あなたは犬派なのね優人君！」

「ごめんちよつと和ますつもりが収拾つかなくなった誰か助けて！」

「無理そうっす」

君達このあと大事な本番があるって分かってるよね？

108. 戦いというのは準備段階の内から始まっている

ぼっち犬とヨヨ犬に待てをしてしようやく事なきを得た。

そこは素直に待つんだ、と思ったのは内緒だ。

そしてしばらくするとスタッフの人がやってきた。

「出演者のみなさん、今日の流れの説明と出演順決めをします！」

スタッフの話が始まる。

流れを簡単に説明するところだ。

まず順番決めを行い、リハでは逆リハと言っていわゆる出番ラストのバンドからリハを行うらしい。もちろん本番はトップバッターから順番通りに出演していく。

それで全バンドの演奏が終わった後に審査員や観客に投票をしてもらい、票数の多かった2組のバンドが決勝に進むとの事。ルールとしては至ってシンプルだ。

となるとここで問題となってくるのが出演順である。

俺達のいる東京会場には結束バンドを合わせて計7組のバンドがいる。しかしこう

いう観客のいる審査では曲や演奏だけでなく出演する順番も重要になってくるのだ。理由は簡単。観客の飽きが来るから。

トップバッターや二番手、トリくらいならばまだ無条件で見られるかもしれないが、もし中途半端な順番なんて引いてしまえばそれだけで不利になるのは確定に近い。

そんなのお構いなしに惹き付けるほどの知名度と実力があるなら気にもしないけど、ネット審査突破時点での順位からするに結束バンドが中盤を引くと多分観客の興味を惹き付けるには難しいかもしれない。

単純に後の方になる程観客はだれてくるものなのだ。それもよく知らないバンドなら尚更。

審査対象にはオーディエンスの盛り上がりも含まれている。つまりそういう意味でも順番関係なく観客を盛り上がらせる力が必要となってくるだろう。

将来こういったフェスに参加する機会があったとしてその時には順番なんて気にしないくらい実力も上がってるかもしれないが、今はとにかく中途半端な順番は回避すべきだ。

そのためにも印象に残りやすいトリかトップバッター辺りを引くのが妥当。というか絶対条件。

出番が真ん中になるほど不利なのでそれ以外ならばまあまだ許せると思う。

各バンドの代表者が前が出る。出演順はくじで決めるらしい。

うちからは当然虹夏さんが前に出た。

「伊地知先輩、絶対トリ引いてくださいね！ 絶対ですよ！」

「印象残りにくいから微妙な順番はやめてよ。トリかトップバッターを狙って」

「オンカラキリソワカビンコロビンコロジャンボウゲーアビボロビョーンブビデバビデ
ブーツ……」

「何の呪文だそれ。手から黒紫の変なオーラ出てるけど」

「任せろーい！ 何だか今日はいけそうな気がするよー！」

「何で5番なんか引いたんだろあたし……」

「夏終了」

「夏、終わらないで」

見事中途半端な順番を引き当てた虹夏さんは四つん這いで落ち込んでいる。

よくよく思い返してみればみんながみんなフラグ建てた気がする。ごめん虹夏さ

ん、かくいう俺も心の中でフラグのお膳立てしすぎたみたい。これはフラグ一級建築士の称号を貰える日も近いかもしれない。

ちなみにトップバッターはケモノリアだ。ただでさえあの知名度と人気でありながらトップバッターだなんてさぞ客の印象に残るだろう。ずるい。

二番手はシデロス。ケモノリアで盛り上がった後にシデロスとか二連コンボみたいなもんじゃん。最初からクライマックスじゃん。いーじゃんずるいじゃん。

「だ、大丈夫ですよ伊地知先輩っ。きつとそこまで影響されませんって！　むしろこの順番で私達がフロアを盛り上げたなら印象に残ること間違いなしです！」

さすが陽キャリンピック日本代表喜多郁代選手。

こんな時のフォローも立ち直りやすい言葉選びで完璧なチョイスだ。その調子で自分に変な呪文唱えたから悪い番号引いちゃったんだと部屋の隅で落ち込んでる後藤さんにもフォロー入れてほしい。可能性は否定しきれないけど。変なオーラ出てたし。

「うう、そうかなあ……」

「そうですそうです！　ここは気を取り直してリハが始まる前に栄養補給といきましよう！　ちょうどお昼時ですし何か食べましようよ！」

「あ、そういう事ならお姉ちゃんが今日みんなの分のお弁当作ってくれたらしくて、それ持ってきたんだよね」

「へー、店長つて料理するんですね！ でしたらそれいただきましょうか！」

「いつもはあたしが家事担当だからお姉ちゃん料理できないと思うんだけど、何故か今日は作ってくれたんだよ。絶対勝つって意味で安直だけどカツ丼だつて」

言いながら虹夏さんが人数分の重箱を出してそれぞれに渡す。もちろん俺にもくれた。

あと部屋の隅で座敷童になりかけてる後藤さんの首根っこを掴んで合流させる。わざわざ五人分のカツ丼を作るとは不器用なくせにご丁寧な人だ。

「おお、普通に美味しそうですよっ」

「あれ、ほんとだ。いただきます……ちよつと見た目焦げ付いてるけど味も普通に美味しい……。あのお姉ちゃんの料理なのは何で？」

まあ俺が教えたからなんですけどね。

とある日に店長からカツ丼のレシピと作り方を教えてくれと言われ、それだけだと何だか失敗しそうな予感がしたから昨夜ビデオ通話で話しながら教えたのだ。

揚げ具合とか味付けとか細かく見るにはビデオ通話が一番都合が良かったのだが、あ

の人カメラワーク下手すぎて間接的に虹夏さんの家の中を結構覗いてしまったせいで謎の罪悪感があった。

ライブ関係以外だとポンコツになるのなんなん。

ただ俺が映像越しで見てももたついてたりグダグダなところがあったから俺の想像してた味よりかは少し劣っている。油跳ねに怯えてカツを中々取り出せなかったのと、大さじ一杯分だった醤油を勢い余って計量スプーンから溢れさせたのが原因かな。と言っても誤差レベルだが。

しかしまあ、こういうのはあれだ。大事なのは味より愛情である。あの店長にしては頑張った方だし花丸をあげましょう。

虹夏さんも言ってたけど普通に美味しいレベルにはなってるから結果的に良しだ。

味付けも俺個人の感覚的に少ししょっぱい以外は教えた通りになってるので十分に合格点。

「はぐふぐもぐつ……美味い！ シエフを呼べ！」

「(´▽`)は高級レストランじゃないよ」

リヨウさんも目を輝かせてよう食べておる。

「……？ あれ、何かこのカツ丼、ゆうくんが前に作ってくれたのと味付けが似てるような……？」

後藤さんも俺の味付けをよう覚えておる。

さすが食い意地張ってるだけの事はありますね。

「そんなこんなで店長のカツ丼弁当はみんな見事に完食。虹夏さんが今度また家で作らせてみようとか言ってたけど、うん……頑張れ店長。今度は記憶だけを頼りに作るんだぞ。」

腹を満たした後はリハの時間がやってきた。

結束バンドは7組中5番目だから、逆リハだと順番が回ってくるのが早い。

音出しや音量チェック、歌い出しが主なので基本的に余程のトラブルがない限りはスムーズに進んでいく。

「では次、結束バンドさんお願いしまーす」

「あ、はいー！」

結束バンドが呼ばれたところで俺も控え室からフロアに移動する。

これでも一応は彼女達の関係者なんだから俺もリハくらいはちゃんと確認しておきたいのだ。

とはいえ結束バンドのリハも思ったより滞りなく終わった。虹夏さんとリョウさんのリズム隊も調子が良く、喜多さんの歌もここ最近だとトップレベルに良いと言える。思ったよりというのはアレだ。後藤さんが武者震いを装ってめちやくちや緊張から来る体の振動のせいでまるで高速ピッキングをしている風になったからだ。

何ならほぼ事故だけどリハから無駄に謎クオリティーの高速ピッキングをしたおかげか、周囲のスタッフの視線が結束バンドに集まったのが何を意味するのか、そこは見ものかもしれない。

さすが後藤さん、既に良い意味でも悪い意味でも爪痕残してますわね。いいぞ、これでこそロツカーだ。

「……」

そして、虹夏さん達に自分はもう少しリハを見ていくと言ってフロアに残った俺は現在他のバンドのリハを見ている。

どのバンドも上位30組に選ばれただけあって、リハなのに実力があると一発で分かるほどだ。

しかし、やはり本命は桁違いだった。

シデロスとケモノリア。

逆リハという大物の2組が最後まで残っていたのがむしろその印象を強くしたのかもしれない。

まるで直前までのバンドが前座と言わんばかりの迫力。でもって本番では序盤から、いいや序盤こそがクライマックスと言わんばかりの演奏力と表現力。

リハでこれかよ……と素直に思ってしまった。

現状だけで言えばレベル、格が違う。

メタルバンドのシデロスとエレクトリックバンドのケモノリア。

ジャンルこそ違うが、だからこそ両者の立ち位置が絶対的なものとして君臨している。いわゆる個の世界観を完璧に確立していた。

実力者ほどリハ―サルから本気度が違うと言うが、これは存外間違いでもなさそうだ。

……ただ、それで結束バンドが負けるかと聞かれれば、答えはノーである。

だって演る前から力の差は分かりきっているんだから。

その上で結束バンドは下剋上を狙っている。そう、ライブ審査と言っても観客にだって好みはあるはずだ。メタルバンドとエレクトリックバンドと比べれば、結束バンドはオーソドックスなロックと言える。

つまりは好みの偏りがある固定層の一点狙いよりも幅広い客層を狙って確実に票を貰いに行くスタイルに近いか。

審査員は好みより実力を重視するらしいけど、観客の票なら結束バンドにだってワンチャンある……と思いたい。

全てのバンドのリハが終わり控え室に戻る。

ちなみにシデロスのリハ終わりの退場間際、ヨヨさんがこちらに向かってドヤ顔していたのはきつと気のせいだ。

「清水戻りました〜」

「ねえ優人君っ、さつき表見たらお客さんたくさん並んでたわよ！ 多分今まで一番多いんじゃないかしら！」

「そっか。やつぱ色んなバンドが集まるライブ審査となると人も集まってくるよなあ」
後藤さんまた変な事にならないといいけど。

まあ路上ライブとかでだいぶ場数も踏んでるし大丈夫か。……いやさつきまでの緊張ぶり見てると全然だいじよばないな。

というか気付かんうちに俺の背後に立ってるし。いつからそこいたんだ。控え室に

戻って来た瞬間かおい。

「あ、そうだ！」

とりあえず逃げ出さないよう手首を挿んで隣に来させていると、何かを思い出したかのように虹夏さんが声を上げた。

「はいこれ！ 前言ってたステッカー作ってきたよ！ いっぱいあるからみんな貼ってね！」

「わあ〜！ 可愛いですね！ これみんなで楽器に貼りましょうよ！ 一致団結感出ますよきつと！」

虹夏さんが出してきたのは結束バンドのロゴなどが主のステッカーだった。

ほほう、これは中々なクオリティーですな。グッズとしても売れそうで良い感じだ。会場来てるだろうけどあとで一号さん達にも近々グッズで売るかもとロインで教えてあげよう。

「あ、このキャラのステッカーも作ったんですね。何だっけ、えーと……」
「けつばんちゃんね。あたしはスネアに貼ったよ」

採用されたんだこいつ。マスコットキャラクターとして大丈夫なのかこのビジュア
ル。

せめて投げ銭貰って元気になった時の方を作ればよかったんじゃない……。

「はい、リヨウも貼りなよ」

「そんな首吊りキャラクターみたいな変なのは貼りたくない。もつと他にマシなデザイ
ン作れなかったの」

おい創作者。

「お前が作ったキャラだろあたしに責任転嫁すんな。さつさと貼れ」

「はい……」

虹夏さんの剛腕がリヨウさんを片手で押さえつけておられる。

つよい。

あつちは虹夏さんに任せよう。

さて、後藤さんはと……。

「何してんの？」

「あつえつと、どこに貼ろうか迷ってて……」

ステッカーを両手に持ったままおろおろしていた。

「別にどこでもいいと思うけどな。じゃあほら、喜多さんとリヨウさんはボディに貼ってるし後藤さんはヘッドに貼ったらどうよ」

「あつうん。じゃあ、そうしようかな……へへっ」

そう言つて後藤さんはけつばんちゃんのステッカーをギターのヘッドに貼った。

あ、貼るのそつちなね。ロゴの方じゃないんだ。首吊りの方だけど大丈夫そ？ いや後藤さんが良いならいいんだけど。

「あとは、はい、優人くんも貼ってね」

「……え、俺もですか？」

「当然」

あの、真顔で言われましても……。

「えつと……確かに俺はサポート役ではありませんけど、これを貼ると何かバンドメンバーっぽくなって個人的に違和感あるんですが……」

「えーそんな事まで気にするの？」

「優人君って時々細かすぎてめんどくさいわよね」

むしろ割と正常な方では？

あと喜多さんそれ何気にダメージ大きいから言わないで。俺でも致命傷だからね。いや致命傷はダメなんだわ。こういうのはきちんと境界線を引いておく事も大事なんだから！

「ん〜……あつ、そういえば優人くんのスマホケースって手帳型だったよね？」

「ええ、そうですけど」

「ちよつと貸して♪」

「はい……ハッ!？」

貸しての言い方があまりにも可愛すぎて気付いたら勝手に渡していた、だと!？」

「は〜いペタリ、と。ありがとつ、スマホ返すね！」

返された自分のスマホを見る。

裏側に思いつきりけつばんちゃんのステッカーが貼られていた。しかもサイズのちよつど良かったらしく良い感じに収まっている。貼るのロゴじゃなくてそつちな

ね。

「これならただの結束バンドファンっぽくてまだいいでしょ？」

「……まあ、これくらいなら」

「へへーん、さすがあたし！」

「結束バンドにめんどくさい愛情抱えた優人君を納得させるなんて伊地知先輩ナイスですー！」

「ねえ喜多さんつてもしかして俺のこと嫌いだったりする？」

「次そんなこと言ったらぶっ飛ばすわ！」

「あつはいすいませんでした」

女の子が使う強い言葉つて何故か男子とはまた違う威圧感持つてるよね。

何はともあれメンバーみんなステッカーを貼り終わった。

途中で後藤さんがボデイにけつばんちゃんを貼りまくって集合体恐怖症の喜多さんを発狂させていたのは内緒だ。俺から見ても普通に気持ち悪かった。

メンバーそれぞれの楽器をステッカーが見えるように向かい合わせて写真を撮る。

SNSに投稿する用の写真だ。

トウイッターとイソスタに投稿するため、喜多さんと同じ文章を考えてから投稿し

た。

写真と共に投稿文にはこう書かれている。

『ついにライブ審査です！　メンバー一致団結！　ファンのみなさん応援よろしく！』
と。

さあ、いよいよライブ審査の始まりだ。

109. どうしようもない戦況をひっくり返せ

『全国の10代バンドからまだ見ぬ才能を発掘するこの未確認ライオット！ 今年も3000を超えるバンドが応募してくれたぜ！』

ステージ上でMCを務める男性のマイク音がフロアに響く。

『今日はその中からネット投票の上位30組が審査に進んでいるぞ！ そしてこの東京会場からファイナルステージに進めるのは2組だけだ！ 曲はもちろんオーディエンスの盛り上がりも審査の対象だぜ！ 君達が次世代バンドの最初の目撃者になるんだ！ 最後まで楽しんでいってくれよ!!』

呼応するように観客の歓声が響き渡る。

さすが満員になった新宿フォルトだ。演者でもない俺でもあれだけの歓声を聞くと腹に押し掛かるようなプレッシャーが一気に押し寄せてきた。

楽屋からモニターでフロアの様子を見ているが、観客の期待値もほぼMAX状態。と

いか超騒がしい。

まさにいつでもぶち上がれるという訳だ。ああいう人達にはウォーミングアップとかならないらしい。

『じゃあオープニングアクトはこの新宿フォルトを拠点として活動している人気バンドがゲストだ！ S I C K H A C Kのみんな、会場を温めてくれー!!』

『うえっぶ……あー、二日酔いなんでエチケツト袋持ったまま歌わせてもらいまうっぶ……。吐いたらごめん、けどそれもロツプ……』

最後言えてねえじゃねえか。

会場が新宿フォルトだからきくり姐さん達がゲストに選ばれたのは分かるけど、なんで大事な本番でやらかしそうになってんのあの人。

いやあの酒カス姐さんがこの日のために禁酒する訳もないとは思ってたけども。

それにしたって二日酔いするまで飲むか普通。……あ、きくり姐さんは普通じゃなかったわ。

「ファンとそうじゃない人で反応がはつきり分かれるバンドですな……」

「ファンの人達はむしろ吐くか吐かないかの瀬戸際を楽しんでるっほいね」

「演奏見ろよ」

「さすが廣井さん、あれでこそロックバンドの真髓」

「頼むから反面教師にしてくれリョウさん」

「……」

みんなでモニターを覗きつつそれぞれ感想を呟く。

後藤さんだけはそれどころじゃなさそうで怯えてる子犬みたいにプルプル震えてるけど。

きくり姐さんがあんなだから後ろでドラムを叩いてる志麻さんの顔がちよつと怖い。いやだいたい怖い。

あれ絶対終わったらシメられるやつじゃん。呑気に演奏してるイライザさんが逆に場違いまである。かわい。

結束バンドの番は5番目という事もあり、今のところは後藤さん以外そんなに緊張してないように見える。

それよりもきくり姐さんの醜態の結末が気になるようだ。何故なら俺も気になるから。くそ、普通に演奏も歌も凄いのにならだけじゃなくてリバースしそうな雰囲気出しつつも決して出さないという、絶妙なラインを攻めてるからこつちも目が離せない。

きくり姐さんめ、まさかあれも観客が夢中になる手法として使ってる説出てきたか。

実はちゃんと考えてるとかある？

……と思ったけど多分それはないと志麻さんの表情で分かった。絶対素だねアレ。時々歌声詰まってる時あったし。

そんなこんなで S I C K H A C K のオープニングアクトは色んな意味で目が離せないくらいのパフォーマンスを披露し、見事に観客の視線を釘付けにした。

ついでに終わった後きくり姐さんは志麻さんにどこかへ連れて行かれた。説教だけで終わればいいけど。

しかしそんな余所の心配をしている暇はすぐになくなった。

オープニングアクトが終われば、始まるのはライブ審査の本番だ。

つまり。

のっけから人気を博しているバンドのお出ましだった。

『さあて、トップバッターはキュートでポップでロック！ エレクトリック・ロックバンドのケモノリアだ！ 新時代の幕開けを感じさせる音楽でこの会場を沸かしてくれませー！』

キーボードボーカルを務めているのはさつき解散がどうのこうので騒いでいたお姉さんである。

信玄のギャグがうんぬんかんぬん言っていた先程とはまるで別人のような立ち振る舞いでキーボードを演奏していた。

素人目で見ていてもトツプバツターからあれだけフロアを盛り上がらせている実力は本物だと分かってしまう。

モニター越しでも観客達が手を上げジャンプしている様子が見える。マジで最初からクライマックスじゃねえか……。やっぱり順番って大事なんだなと今更ながら痛感した。

そして数曲終わった後、盛大な拍手に見送られながらケモノリアが退場してしばらくすると、二番手のバンドがステージに登場する。

端の方にいたMCが言う。

『熱気に溢れるフロアをさらに熱くしてくれるのはこのバンドお！ かわいい顔で凶暴な音を鳴らすガールズバンド、シデロスだあ!! このギャップが見る人の心を余計に沸騰させるぜー!!』

言い終わると共にシデロスの曲が始まった。ヨヨさんのギターが空間全体に響き渡っていく。

音の圧が変わる。それだけでケモノリアが作っていた空気を一変させ自分達の空気

に変えてしまった。

ある意味ケモノリアとジャンルが違うからこそ、そのギャップも含め観客の意識は一瞬でシデロス一色に染まる。

実力もさることながら、魅せ方も自分達だけを見ると言っているような、まさに傲岸不遜にも思えるのに誰もシデロスから目が離せなくなっているのがモニター越しに分かる。

分かっていた事だと覚悟していたのに、いざこの光景を目にすると臆してしまう自分がいた。

やはりシデロスのレベルは頭一つ抜けていると。ジャンルの壁とか、好みの問題とか、そういうのを全部吹っ飛ばす勢いで全てを呑み込む存在感が彼女達にはある。

「何か……すっごく盛り上がってますね……」

「完全に場の空気持ってかれた」

扉の向こうから聞こえてくる観客の声を聞いて喜多さん達も緊張が移ってきたらしい。

まあ無理もないか。いきなりツートップがあんなレベルのライブをしたんだから。既にちよつとしたフェスみたいになってんだもんあれ。逆に三番手のバンドの人達が

一番緊張するでしょ。

「人人人人人人……」

違ったわ。一番緊張してる子すぐ近くにいたわ。何なら身内だったわ。

後藤さん人の字書いて物理的に食ってやがる。どうやってんのそれ。忍法・超獣偽画なの。

……不思議だ、後藤さん見てたらいつの間にか俺の中の緊張どつか行っちゃった。

自分より怖がつてる人がいたら逆に冷静になるアレと似たようなものかもしれない。そういうやハツセ達も極度に緊張してるヨヨさん見てたら緊張しないって言ってたな。それと同じか。やっぱ似た者同士じゃんあの二人。

「あつトイレ行ってきまふ……」

「あ、うん。……ちよつと待って優人くんぼっちちゃん止めて」

「ほいさ」

「えっ」

虹夏さんの命により後藤さんの腕を掴む。

理由は俺も何となく……じゃなくて確信を持つてるから素直に従った。

「ぼっちちゃんの事だからトイレに籠城してそのまま出てこない可能性あるからね。もしそうだったら女子トイレだし優人くんは助太刀頼めないから今の内に誓約させとかない」と

「最悪警備員さん呼びましょうね」

こういう時の後藤さんほんと信用ねえな。

いやまあ大体自業自得なだけどさ。

後藤さんを虹夏さんと喜多さんに預け、一応俺もトイレの前まで着いていこうとした時。

「あー！ 結束バンドちゃんと優人ちゃん良い所にいたわ！」

「ん、銀さん？」

銀さんに声を掛けられたのでそちらに顔を向けた。

すると、そこには銀さんの他にもう一人女性がいた。それはある意味結束バンドにとって因縁のある相手だった。

「この方は今日取材で入ってる記者さんなんだけどう！」

「あ、ぼいずんさん」

思いもよらず出くわしたといった顔をしているのはツーサイドアップの毒舌ライター、皆さんご存知ぼいずん♡やみさんだ。

あ、やべみたいいな顔してる。多分あちらもこつちと会うのは想定外だったのかもしれない。

「結束バンドちゃんの事をね、とくつても褒めもごごごお!?!」

「何でも縛れて便利ですよねって話してたんですよね! ね!?! そうですよね!?!」

「ぼいずんさんいきなり何を!?!」

銀さんが何かを言おうとした途端、ぼいずんさんが銀さんが首から提げていた関係者の用の名札の紐を絞めた。そう、首を絞める形で。

どこで覚えたそんな技。俺の知り合いの女性みんなちよつと攻撃力高いのは何故なんだろうか。

「あーっ! あたし別のバンドの取材に行かなきゃなく! という事でこの辺で失礼します!」

「げえほっ! ごほっ! あーんちよつと何なのよもうひどーい!」

銀さんむせてる時えらい男らしい声してますね。そこはどうでもいいか。気を取り直したように虹夏さんが声を掛けた。

「えつと……あの人がどうしたんですか？」

「あの子がぼんらぼつてサイトであなた達のこと書いてくれてたらしいのよ！ だから紹介しようかなって思ったのにい！」

「え、ぼいずんさんがあの記事を……？ 優人くん、知ってた？」

「……まあ、何となく予想はしてましたけど、これでビンゴって感じですかね」

虹夏さん達には悪いが嘘をつかせてもらった。俺は既に店長から記事の事を聞いたので知っていたが、それならそれで何で黙ってたのか問い詰められそうだったのでこは保守させてもらう。

高い攻撃力を持つ人から身を守るには物理的な防御力を上げるのではなくいかに回避力を上げるかが大事なのだ。そう、当たらなければどうという事はないのである。

「あつ、あの、まだ時間あるからギリギリまで練習しませんか？」

そして俺が保守的になっているのとは裏腹に、気持ちの変化がプラスに働いている幼馴染がいた。

「ぼっちちゃん……そうだね！ やれるとこまでやろつか！ 二人もそれでいい？」

「はい！」

「ん」

あれだけ色々言ってきた人が自分達の記事を書いてくれたという事実にはやる気が上がったのだろう。

しかし、俺が本当に驚いたのはここからだった。

「あつあと今日のMCなんですけど……」

――

新宿フォルトのフロアでは、こんな声が聞こえていた。

「次のバンド何だっけ」

「結束なんとかとかいうの」

「知らね」

「ネット投票でギリギリだったバンドか。まあここはなさそうだな」

「めちやくちや上手いならともかく5番目ともなると聴く方もだれるしね。もうシデロスで決まりじゃん？」

「やっぱシデロスとケモノリアが抜きん出てるよなあ」

「あの2組が最初に出てきちゃったらなく。可哀そうだけど今のところ残りは消化試合って感じるわ」

フロアの端にいる俺の耳にはそんな声ばかりが入ってくる。

シデロスとケモノリアの二強。ライブ審査が始まる前から囁かれていたり、実際審査が始まればそれを助長するかのようにレベルの違いを見せてきた2組の演奏を見れば誰だってそう思うのも自然だろう。

直前までは俺もそう思わざるを得なかった。そう思ってしまうほどシデロス達のバンドは凄かった。

しかし今は違う。

この震えだつて緊張や不安から来るものではなく、いわば武者震いに近い。

結束バンドが周りにどう言われていようがあんなのは些末な事だと心が勝手に処理してくれる。湧き上がるような熱があるはずなのに、どこか気持ちはクリーンになっていた。

『さて次は下北沢発、そのバンド名はネタか本気か!? しかし絆の結びはピカイチか！
結束バンドお!!』

MCの紹介が終わると共に結束バンドがステージに現れる。

見覚えのあるファンから熱い拍手と声援、知らない観客からは礼儀としての拍手で出迎えられる。

当然出だしはギターボーカルの喜多さんがマイクを握った。

『えーこんにちは！ 下北沢から来ましたエゴサがまったく機能しないで有名の結束バンドです！ よろしくお願いしまーす!』

意外にもウケたようで、軽いジョークを交えつつ適度な掴みは得られたようだ。

『じゃあさっそく一曲目! ……の前に、リードギターの後藤から一言あるそうなので聞いてください……ひとりちゃん』

『あっはい……』

「……」

「ここからが本番。」

俺の不安が一瞬で消えた理由の一つとして、後藤さんからの提案があった。

今日のMCについて、最初に自分に話をさせてほしいという申し出が後藤さんから直々にあったのだ。

最初はみんなが目を見開いた。もちろん俺も。普段なら絶対に緊張して目立つから言わないであろうあの後藤さんが、自分からMCをしたいと言ってきた。

しかもライブ審査という重要なシーンでだ。多分後藤さんもほいずんさんの記事を見て気持ちに変化があったんだろう。きつと結束バンドを勝たせたいという気持ちがある自分の臆病な性格よりも勝った瞬間だった。

だから、みんなも後藤さんの提案を快諾した。

ステージの上で、臆病な彼女が声を出す。

『あつえつと……わた、私達がこのフェスに出ようと思ったのは、こつこの四人でバンドをする意味を聞かれた事がきつかけでした……』

「何の話？」

「声ちっさ」

「震えてんじゃん、がんばれー」

うるせえ黙って聞きなさいうちの子がまだ喋ってる途中でしようが。

『そつそれからたくさんライブや練習をして……色んな人に支えてもらいながらバンドとして力をつけてきました……。じ、自分達だけじゃどうにもできなかつた事も、身近で応援してくれる人が頑張ってくれたから……。私達もここまで諦めずに来られたんです……』

いつの間にか全員が後藤さんを見ていた。

誰一人として顔を下げている者はおらず、引つ込み思案で臆病なたった一人の少女から目が離せずにいた。

『だから』

そして。

『だから、私達、結束バンドの結束力を……観てくださいっ！』

後藤ひとりのギターの音が新宿フォルトを席卷した。

「ま、マジか……」

「これ……ほんとに高校生かよ……！」

「こんなバンドいたっけ!？」

「す、すげえ……一曲目から飛ばしてきてんな!」

さつきまでファン以外誰も知らなかったはずの結束バンドが、瞬く間に広がっていくのを感じた。

そう、これだ。これが俺が見たかったものだ。

後藤さんのギターソロから始まり、虹夏さんとリョウさんのリズム隊が曲の始まりを告げ、喜多さんの力強くも透き通る歌声がフロアを瞬時に魅了する。

誰もが興味のない状態から一気に視線を奪ってしまうこの瞬間がたまらない。

ツートップが最初にあんなにもレベルが違う演奏を見せ、誰もが残りを消化試合と思ってしまうような場面を覆す唯一の方法。

それが『ギターヒーロー』のソロから始まる圧倒的なギャップからの曲の始まりだ。

かつての初ライブで客の視線を一気に奪ったのも、文化祭でピンチを乗り越え客の興味を瞬時に引いたのも、後藤さんのギターだった。

結束バンドの転機となるライブの時に、必ずと言っていいほど活躍するのが後藤さんだ。

いつも怯えて何もできないからこそ、自分から何かをするという思いに至った彼女が強い事は俺も結束バンドのみんなもよく知っている。

そしてそういう時ほど、彼女は観客を含めライブの空間全体を包み込むほどの圧倒的存在感を解き放つ。

一切興味がなければまだしも、一度でも微かに興味を持ってしまったが最後。その目はもう彼女達からは離すことができなくなっていく。

シデロスとケモノリアの二強？

ふざけるな。こういうのはダークホースがいてこそ盛り上がるものだろうが。最初がクライマックスだなんて言わせない。

そう、ここからが本番だ。

「見せてやれ」

結束バンドがここで終わるようなタマじやないってとこを。

既に詰んだと思われた戦況を丸ごとひっくり返すような所業を。

無事に7組全てのバンドのライブが終わった。

審査員や観客の投票も済み、最後にMCがステージに立つ。

『では結果発表といくぜえ！
未確認ライオットファイナルステージに進む栄えあるバ
ンドは〜！』

そして。

そして。

そして。

110. 正直ロックフェスはちょうどいい気温の時に
やってほしい

太陽が憎い。

遙か頭上から俺達を見下ろさんばかりに直射日光を叩きつけてくるあの太陽が憎い。
少しは遠慮してほしい。

8月某日。

学生の特権、夏休み真っ只中の俺達とはある場所に来ていた。

「来たぞー！ 未確認ライオットファイナルステージ！」

さっそく第一声を放ったのは虹夏さんだ。

元気で可愛らしい声が外に響き渡るも、誰一人文句など言っていない。

それもそのはず、ここは虹夏さんも言った通り未確認ライオットのファイナルステージが行われるフェス会場だから。

今日に限っては騒音も歓声もむしろ大歓迎な雰囲気まである。みんなフェスという楽しい雰囲気には？み込まれているのだろう。こういう場所ではある種の一体感というか、この会場だけに特別な小世界が作られたような感覚にまで陥る。

今日ここに来る人達はみんなバンドを見に来ているのだ。

それぞれ好きなバンドを応援しに来たり、どのバンドが勝つのか興味があったり、まだ世間に知られていないバンド原石を見に来たりと、様々な目的があつて来場してくるだろう。

きつと観客の熱は歓声や密集でとてつもない事になると思う。

そう、クソ暑苦しいほどに。

「太陽が憎い」

「優人くんもうそれ47回目だよ。電車の中でも言つてたでしょ」

「伊地知先輩数えてたんですね」

だつて暑いんだもん。入道雲とかはその辺にあるけど太陽の周りには一切雲ないんだよ？ あいつあの太陽野郎ここぞとばかりに気合い入れて太陽光ビーム出してきて何なの。

もうちよつとした Sauna だよこれ。蒸されるよ、焼かれるよ。人間の丸焼きが上手に

焼けました〜♪ とかなっっちゃうよ。

「でも色々対策はしてきてるんでしょ？ ほら、出発前に暑さ対策のアイテムいっぱい持ってきたって言うってたじゃん」

「熱中症になつたら大変ですからね。このクソ暑い中を少しでもマシにするためならどんな努力も惜しまないのが俺です」

「だから一人だけちよつとした大荷物になつてるのか……。ところで何持ってきたの？ クーラーボックスとかもあるけど」

ちよつどいいので場所取り用にレジヤシートを敷いてから荷物を置き、暑さ対策用アイテムを出していく。

「えーっと、水分と塩分補給のためのスポドリ、クエン酸タブレット、ネットクーラー、冷却スプレー、冷風が出る携帯扇風機、何か叩くだけで急速冷却されるパック。クーラーボックスにはネットリング、氷水で冷やしてるタオルに濡らして振るだけで冷たくなる冷却タオル、と……大体そんなもんですかね」

「うわっ、ガチじゃん」

何でちよつと引いてんの。熱中症舐めんなよ。

「よくこんなに揃えたね」

「家にある対策グッズ総動員してきました。まあ半分は主に夏でもジャージ姿のバカが熱中症にならないよう用意してきたんですけど」

「出た優人くんの過保護精神っ」

「うっ……」

せめて夏くらいは半袖で過ごせばいいのにと毎年言ってるのだが、家の中以外では必ずピンクジャージしか着ないのが後藤さんだ。

多分あのジャージに憑りつかれてると思う。いったいあのピンクジャージの何が彼女をそこまで執着させているんだろう。謎は深まるばかりである。

「みんなも暑かったら勝手に使ってくださいね。あと水分は喉が渇く前に飲んでおく事。一人二本ずつ用意してるからこまめに補給してください。熱中症の他に脱水症状にも陥るのが真夏の怖いところですんで」

「じゃあお言葉に甘えてスポーツドリンク貰うわね!」

「私はネッククーラーと冷却タオル、携帯扇風機も貰う」

「リヨウ一人で使いすぎだっば! 普通ここは分け合うとこでしょ!」

「ああ、タオルも扇風機も人数分持ってきてるんで大丈夫ですよ。そのために大きいリュック持ってきたんだし」

「……じゃあ、使わせてもらいます……。え、優人くんまさかそのリュックの中全部対策グッズなの……？」

「俺用のと俺の予備分二つに家族の分を全て持ってきてきたから大体は五つずつ揃ってますぜ」

ちょうど五人分あるからアイテムの取り合いとかなる心配もない。

リョウさんが欲張ってめっちゃグッズ持つてくのも想定してた故の対策でもある。対策グッズ、だけにね！

「……凄い、優人くんが持ってきたアイテムのおかげで暑いのも結構マシになった」

「今って冷風を起こしてくれる携帯扇風機もあるのね。私も買おうかしら、友達とどこか行く時とかに便利そうだわ！」

「これなら始まるまで寝転びながらもゲームできる」

「あつ、タオル冷たい……」

思ったより気に入ってくれたようで何より何より。

バカみたいに暑い外だが、未確認ライオットが外でやる以上そのルールに従うしかな

い。であれば大事なのは暑さに嘆くのではなく、いかに対策をしてこの猛暑を少しでも快適にするかを考える必要がある。

暑いのが嫌いな俺と夏でもジャージオンリーピンクが外でくたばらないようにするには、これくらい熱中症対策グッズがないとダメなのだ。

いやもうほんと体中の毛穴から汗出てきてんじやねってなるくらい暑い。

「でもこの後どうする？ 開始の12時まではまだ時間もあるよね」

「だったらどこかご飯食べに行きませんか？ フェスならではのご飯食べたいですー」

「お、いいね。じゃあ不要な荷物だけ置いてフェス飯食べに行こっか！」

「あれ、でもそれだともしもの場合誰かに荷物盗られちゃったりしません？」

「フードコートテーブルのテーブルに場所取りとしてハンカチとか置いておくのと一緒だよ。周りには他の観客達もいるし、そういうのが抑止力になる。それにわざわざこんなところで盗みをするようなヤツはいないさ」

多分……というの伏せておく。

俺達がレジャーシートを敷いたのはステージから割と後方の辺り。ここなら迷惑になりにくいし、目的のバンドが出て前に行つたとしてあまりの熱気と圧迫感で体調が崩れそうになった時、救護室でお世話になる程ではないぐらいならこっちに避難してくれ

ばいい。

俺達と同じような考えを持つ観客も結構いるため、既に周囲にはレジャーシートを敷いて各々適当に過ごしてる観客もいる。

実際不要な荷物だけ置いて誰もいないシートもいくつもあるが、誰も不審な行動をしそうな者はいない。当たり前だ。別に大金が手に入る訳でもないのにこんなところで盗みをして警察のお世話になるのはただのバカだからだ。

ふとステージの方を見る。今もスタッフ達が細かな最終チェックや準備作業をしていた。

それを俺は観客席の方から眺めるだけ。

そう、結束バンドはライブ審査において……ファイナルステージに進む事は叶わなかった。

あくまで審査という形で進めなかったという風になっているが、他のバンドと比べられた時点でそれはもう当人達にとって『勝敗』と何ら変わらない。

つまり結束バンドは敗北した。

上位2組の枠を掴み取れなかった。

結局勝ち上がったのはシデロスとケモノリア。

最初から人気や知名度があり期待されていた2組が実力通りファイナルステージに立つ事となった。

言ってしまうえば順当。新宿フォルトのフロアで観客が言っていたようにシデロスとケモノリアの出来レースみたいな結果。

結束バンドのライブが始まった時はあれだけ自信に満ち溢れていたのも、目の前で結果が発表された時には砂嵐のように全てが散っていった。

なのに不思議とその場では俺を含めみんな泣き叫ぶ事も悔しがる事もなく、ただただ事実を受け入れその場を離れた……はずだ。

若干記憶が曖昧なのはあれだけ未確認ライオットに時間を捧げ費やして張り詰めていたものが一気に消失したからなのか、単純に緊張感からの解放なのか、ライブが終わった後の虚無感のせいなのかは分からない。

しかし、帰りの電車で後藤さんと一言も会話をしなかった事だけは鮮明に覚えている。

あの日から今日まで、負けた事に対して多少みんな話した事もあったがどれも残念だったねとか、良い思い出にはなったとか、もつと頑張らないとだとか、プラスに捉えつつ今まで通りライブをしていこうという方針になっていた。

多分、みんな色んな思いを内に抱えているんだと思う。

その上で今だけは気持ちに蓋をして、見ない振りをしてここにいる。自分達が立ち上がった未確認ライオットを最後まで見届けようとしている。

だから俺は、それに付き合う事にした。

みんなが本格的に向き合うまでは、俺からは何も言わないと決めた。そしてみんなが向き合った時は、その時は俺にできる事をすればいい。

それまではいつも通り日常を謳歌するだけの話だ。

「ちよつと優人くんつてば！ 聞ってるの!？」

「あつはい聞いてますよ」

「それ絶対聞いてない時の反応じゃん!」

「聞いてますつて。ご飯食べに行くつて話なのにリヨウさんがダラけてここに残るつてごねてるんでしょ?」

「あれ!? ほんとにちゃんと聞いてたやつだ!? なんかごめん!」

あまり俺を舐めないでほしい。さつきから寝転んだまま一ミリも動こうとしないリヨウさんを見れば大体の状況は把握できる。

「俺が話つけてみますか?」

「じゃあお願いしていい？」

「ふっ、私は開始時間までここでゲームして待つてるんだ。梃子でも動かんぞ」

「リヨウさんお金は？」

「ない！」

「じゃあ俺が奢るんで昼飯食べに行きましょう」

「行く！」

「虹夏さん獲物釣れました」

「たった四文字で即答したなこの金欠ベーシスト……」

となれば必然的に後藤さんも一緒に来る事になる訳で。というか既に俺の後ろにいたわ。

周りの陽キヤが怖くて仕方ないらしい。うん、まあ水鉄砲とかドツジボールで遊んでる陽キヤいるし気持ちは何となく分かる。一応今日つて音楽フェスだよね？　ここ海じゃないよね？

荷物を置いて移動。

いわゆるフェス飯とやらを求め俺達は腹を満たしに周辺を回る事にした。

するとさっそく喜多さんが何か見つけたようで。

「あ！ ケバブ！ ロックフェスといたらやっぱお肉ですよ！ あれ食べましょう！」

「ロックフェスといえばやっぱお肉なんですか？」

「あたしもフェス飯食べた事ないからよく分かんないや。まあでもこの暑さと後々人混みにまみれると思ったらお肉でスタミナ付けとくのもありなんじゃない？」

肉にそんな即効性あったっけ。肉食つたらすぐ回復するルフィじゃないんだから。

とはいっても別段拒否する理由も特にないのでケバブを買う事に。

したのだが……いざ行ってみると見知った顔が店内にいた。

「何やってんすかきくり姐さん」

「あついらっしやいませえ……元気だね君ら……」

店員元気なさすぎじゃない？

「うう……銀ちゃんにお酒飲めるよって言われてここに来たらいきなりバイトしろって騙されたんだよお……！」

「ゲストに呼ばれたイベントで最後にこんな扱い……」

「ちなみにきくり姐さん、今借金どのくらいなんですか？」

「……てへっ☆」

「自業自得ですね。さっさと買つて離れましょう」

「ベージストつてみんなこんなのかな……」

そうじゃないと願いたいばかりだね。

シデロスの幽々さんは……うん、何も言うまい。

お酒を飲めていないからか酔いがほぼ抜けているきくり姐さんの作ったケバブを受け取り退散。

去る時に背後から何か助けを求めるような声が聞こえたが、あれは多分気のせいだ。思う存分労働に励んでもらつて借金返済頑張つてもらおう。

少し離れたところでケバブを食べる事に。

炎天下という事もあり食欲が少しアレだが、こういう時こそ食べておかないとなので一口ガブリと頬張つてみる。

「……うん、男子高校生が好きな味って感じだな」

「つまり美味しいって事じゃん」

てへっ☆

俺も健全な男子高校生、多少料理ができるからと言って栄養管理が完璧な訳ではない。そういうのとはまた別物だ。何が言いたいのかというとお肉サイコーって事。

「おいしく！ フェスで食べるご飯って何だかいつもより美味しく感じますよね！」

「お祭りの屋台とかもあるあるだね〜！ 家で作った方が安いのにつついっつい買っちゃうとことか！」

「クラス男子が言っていましたけどきゆうりの一本漬けとかって無駄に高いらしいですね。確か200円だとか300円だとか。なのに暑い外でさっぱりした物を食うのが最高だからってつい買ってしまっうって聞きました」

「ほんと不思議効果だね〜」

「友達と行くと結構食べちゃいますもんね〜」

お祭り肯定派のお二人はどうやらフェス飯とやらをお気に召したらしい。

フェス特有の謎の高揚効果と相まってきらきらしておられる。

対して。

「味が……濃い……」

「ぼそぼそする……」

「場の空気で美味しく感じるマジックがフェス嫌い達には効いてませんね……」

「まあ実際ちゃんと味わってみると微妙かなって思うところはあるだねえ」

お祭り否定派の二人は微妙らしい。何なら虹夏さんもちよつと便乗してる。君達一応そのケバブきくり姐さんが作ったやつだからね？

あとリョウさんは奢ってもらっておいでその言い草はなんだこの野郎。この前店長の作ったカツ丼絶賛してたじゃねえか。あれか、フェスだからデバフ入ってんのか。

「優人の料理の方が美味しい」

「……へへっ」

「優人くん乗せられてるよ。危険察知したりリョウがご機嫌取りのために言った言葉に乗せられてるよ」

へへっ！

「この後どうします？ もうちよつと出店とか見て回りますか？」

「そうだね。せっかくだし色々見て回ろっか」

「後藤さん、味の濃いもの以外なら何食べれる？」

「あつハンバーグとかカレーとか……」

「モノによっちゃ濃いじゃねえか」

この子に関しては結局好みの問題じゃん。

その後は適当にぶらつき気になった食べ物があれば買うというのを繰り返していた。

とは言いつつもみんなやはり暑さにやられてるのか主食のようなメインはあまり買わず、冷たいそばや軽く食べられるポテトにかき氷とかアイスなどを中心に堪能した。唯一後藤さんはから揚げを一人で食ってたけど。

かくいう俺もカップに盛られた三段アイスをつつきながらみんなでテーブルを囲っていた時、アナウンスが聞こえてきた。

『まもなく未確認ライオットの最終ステージが始まります。観覧される方は』

「うえ、もう始まる時間だっけ!」

「待ち時間長いのかあったから忘れてたわ!」

「え、俺のアイスまだ三つ残ってんだけどどうしたら」

「全部口に突っ込んで! ほら早く食べて戻らないと!」

「いやさすがにアイス三つ全部は口内死にま」

「リョウ!」

「よいやつさ」

「むごばあっ!?」

「許せ優人。虹夏の命令だから」

く、口があ……口の中が南極大陸にい……ッ!?

「伊地知先輩！ 優人君が口からペンギンみたいな魂出して死んでます！」

「引きずってきて！」

「分かりました！」

「優人、南無三」

男子高校生に対する扱いか？

これが……。

111. みんな必ず何かしらを背負っている

いよいよ始まった未確認ライオットの最終ステージ。

どうやら1組目は福岡からやってきたバンドらしい。MCで博多弁喋ってるけど方言女子って良いよね（小並感）。

「せっかくだしもつと前で聴きましょうよ！ なんとたつて現地の熱さは現地でしか味わえないんですから！」

キラキラ陽キヤがまた訳の分からない事を言っておられる。

俺が何のために熱中症対策グッズを持ってきたか分かってないのか。

「喜多さん、悪いけどこのクソ暑い中であの人混みに入るのはバカの所業だとおも」

「んー、まあこんな機会も中々ないしねー。ほら、優人くんも行こ？」

「さっさと行くぞ喜多さん後藤さん。人混み掻い潜ってベスポジまで一直線だ」

「あつえつ、えつ……わ、私も……？」

「バカが増えた」

ダーヤマから何か聞き捨てならん言葉が聞こえたような気がするが構わん。

言いたいヤツには言わせておけばいいのだ。俺には人混みの中で天使を守り抜くという任務があるのでね！

後方でのんびり見ると言ったりヨウさんを残し俺達はライブの観客がリズムに乗って揺れている僅かな隙間を潜り抜けながらそれなりに見えるとこまで辿り着く。

ある程度身に付けられる冷感アイテムを装備しているとはいえ、人と人の距離がゼロに近い密度と真上からの直射日光のせいでなんかもう色々凄い。自然と人体の群れで生成されるサウナみたいだ。一言で表すなら地獄。

着いてから一瞬でここに来たこと後悔したわ。虹夏さんの言葉に脊髄反射でイエスマンになってしまふこの体と精神が憎い。

隣を見ると喜多さんと虹夏さんは普通に楽しんでる様子。何ならもうちよつと前行こうとか言い出した。陽キヤとバンド好きは音楽フェスへの適応力高いな。

虹夏さんを守るミッシヨンは喜多さんに任せ、俺はその場にいる事にした。多分ここがこの子の限界ラインだからだ。

で、肝心の後藤さんというと。

「ヒイツ!？」

俺の腰にしがみ付きながらライブとか暑さよりも周りの人間に怯えている最中だった。

まあ無理もない。俺でさえこの密度に圧倒されてるんだ。屋外十人混み（陽キャ集団）＋直射日光という、後藤さんの天敵三拍子が融合召喚されてる時点で彼女に安寧の地はない。

緊急ミツシヨン、虹夏さんを守れから後藤さんを守れに変更。これにより難易度はSランクからCランクに下がる。

ただし周囲のどこにも逃げ場はなく、今のバンドが終わるまでの耐久戦となる。何かなんでも彼女を守る事を優先されたし。

「ゆ、ゆうくんっ……い、いつの間にか周りカップルばかりになってる……!」

「ヒイツ!？」

緊急事態発生、緊急事態発生。突如として周囲にリア充カップルが大量に出現。「前は危険だから俺の傍から離れるなよ」とかあすなる抱きをしながらライブそっこのけで歯が浮くようなセリフを平然と言っている模様。

清水優人の精神の汚染を確認。不快感が臨界点を突破。このままではリア充殺戮

モードへ自動的に移行されます。任務続行不能、任務続行ふノウ。

「ピーピーガガツ、ガガガツピーウィーガシャン、ウィーガシャンツ」

「屋外だからはつきり客が見えるせいでダイレクトに心にくる……ウツアアツ」

「うわあ!?! 何か変なロボットみたいなヤツと溶けかけてるヤツいるんだけど!?! に、逃げるぞお!」

「え、何言ってるきゃー!?!」

リアジュウシスベシホフルベシ、リアジュウシスベシホフルベシ。

「……ハツ!? こ、ここは……?」

「あつゆうくん、気が付いた……」

気付いたら俺と後藤さんは人混みではなくステージから後方へと戻って来ていた。いったい何故? 数分前から記憶が……。

「ゆうくん、ロボットみたいになったと思ったらすぐ熱でオーバーヒートしちゃって……そ、そのまま私と一緒に人並みに吞まれてここに戻ってきたんだよ……」

「俺クソザコすぎん?」

気温と自らの怒りによってオーバーヒートとかただの自滅じゃん。

「ふっ哀れな優人達」

「いたのか山田」

「後方なら巻き込まれなかったものを、青空の下冷感アイテムと共にゆったりライブを眺めるのも悪くないぞ」

「人の持つてきたアイテムを我が物顔で使つて言う台詞かそれ」

「だって優人が勝手に使つていいつて言った」

「……いや、うん……それは、まあ、そうですね……」

リヨウさんにダンガンロンパされてしまった。俺はもうダメかもしれない。

いそいそと保冷バッグから飲み物でも取ろうとした時、集団の方から目立つような声がした。

「モツシユモツシユハイモツシユ！ さあ、みんなで輪になって踊ろう！」

「……何だありや。Vで6の曲みたいなワード聞こえてきたけど」

「説明しよう。あれはフェス名物のライブをよそ目にサークルモツシユを先導しサビで飛んだり跳ねたりする周囲の気持ちを考えないで好き勝手暴れるクソ迷惑なモツシユ

先導男である！」

「サンキューダーヤマ。つまり目立ちたがりなファツオンボーイって事だな」

「イエス」

フ〇ツキン。

「アレに巻き込まれる前に安全地帯に戻って来れたのは不幸中の幸いだつたな」

「傍から見てる分には愉快」

「あつで、でも虹夏ちゃん達が……」

「適応力高いあの二人ならむしろすぐ馴染むだろ。無理に伝えに行こうとするなよ後藤さん。却って巻き込まれた上にボロカスになるぞ」

「う、うん……」

キンキンに冷えたスポドリを飲みながら眺めていても分かる。

アレは素人が気軽に混ぜていいものではない。渦中にいる人達はアドレナリンが出てるのかみんな楽しそうだが、俺の視点ではもうマジでぐっちゃぐちゃ。遠目で見ればちよつとした乱闘でも起きてるのかと思ってしまうほどだ。

あんな物騒な所に体力と精神が常に赤ゲージ瀕死状態の後藤さんを見かねない。

それはわざわざ犠牲者を送り込むようなものだ。俺は保護者なのだから到底無理な事はさせないのである。

「バンドの雰囲気や曲の方向性に関係なくただただ騒ぎたいだけの輩がなんでもかんでもサークル作ろうとするのがそもそもの間違い。音を聴け音を！ 何のためのフェスだ！」

「それについては同意見ですな。まあ俺達は安全地帯から頑張るバンドを見守っていきましょうや」

「あつゆうくん、スマホのバイブ通知鳴ってるよ……」

「お、マジか。サンキュ」

レジャーシートの上に置いてあったスマホがバイブで揺れているのを確認してから取る。

ロインだ。絶賛どこかでサークルモツシュしているであろう喜多さんと虹夏さんじゃないのは確定。

となると、

「……あー、俺達ももう少しであの人混みの中に行かないといけないっぽいですね」

「マジか……」

「もうすぐだから絶対前方まで来なさいよって送られてきました」

「という事は」

「……し、シデロスの番が近いですね……」

フェス中には似つかわしくない静寂の中、ステージに立つ彼女がスタンドマイクを手に取った。

『……あー、SIDEROSです。観客のみんな、こんなにも暑い中朝からお疲れ様』

人の波が荒立たないうちに後藤さんとリヨウさんを連れて人混みの中でさらに前方の方へ移動し、ようやく喜多さんと虹夏さんと合流した。

最前ではないけど前の方。そしてマイクを持つ彼女は俺達の正面にいる。

ライブが始まる前のMCだった。

『……今立ってるこのステージを目指したバンドを今回たくさん見てきました。いいバ

ンドばかりだった』

一瞬目が合ったように見えたのは、多分気のせいじゃないと思う。

『みんなそれぞれ頑張つて、悩んで、もがいて、苦しんで、それでも今の自分達にとって最高の曲を作り上げて切磋琢磨したんだと思う。私達もそうだったから……。その道の途中で凄いギタリストにも出会ったし、それを一生懸命支える人達にも出会った』

マネージャー（仮）体験をさせてもらった事もあるから何度かシデロスのライブを見てきた俺だけど、こんなにもMCで話す彼女を見たのはもしかすると初めてかもしれない。

『きつとみんなそうだったと思う。自分達だけじゃなくて、色んな人やファンが支えてくれてここまで頑張ってきたんだって。そういう思いを胸に未確認ライオットに臨んだんだって。でも、それらを退けて私達は今ここに立っています』

彼女の言葉を聞きながら、失礼にも俺は思ってしまった。

もし結束バンドがああステージに立っていたら、どんな言葉を、どんな演奏を見せてくれたのだろうか。

それはきつといつもスターリーで見えるような景色でもなくて、歓声もいつもの数十倍

はあつて……こんな暑さなんかどうでもよくなるくらいとてもキラキラしている光景だったんだろう。

このステージに立ってほしかった。あのステージに立たせてあげたかった。

こんな空想がふと出てきてしまうくらい、大槻ヨヨコの言葉が俺の胸に容赦なく刺さってしまった。

『だからその分背負ってるものが半端ないの！ 誰にも負けてやる訳にはいかない！ 初っ端から死ぬ気でトバすから、死ぬ気で最後までついてきなさい！』

そして、大歓声と共にシデロスの曲が未確認ライオットのステージを席卷していった。

「はく楽しかったー！ 結局シデロスが優勝か。やっぱり凄いな〜」

「大槻さんのドヤ顔凄かったですねえ。最後私達の方見てませんでした？」

「ドヤ顔だったね〜」

あれから時間はすぐに経過し、終わってみれば結果もみんなが納得のいくものだった。

優勝者はシデロス。誰もがそれで文句はないと言わんばかりの拍手を彼女達に送り、未確認ライオットは閉幕したのだ。

最後の方はもう人の密度がどうか気にもなっていなかった。ただただシデロスの奏でる激しい音楽から目が離せなかった。

結果発表の時に見せたドヤ顔だけが妙に鼻につくのは置いておく。

「あーあ、フェス終わっちゃったねー」

「名残惜しいですけど私達も帰りましょうか。どこかで晩ご飯でも食べに行きます?」

「優人様」

「晩ご飯は奢りじゃなくて貸しですからね」

「ははー」

ほんとに分かってんのかこの人。

「ん? ぼっちちゃんどうしたの。あたし達も帰る準備しよつ」

みんなが帰る準備をするために移動しようとしている中、後藤さんだけがいつまでも

ステージの方に向けて動こうとしなかった。

普段の彼女なら迷惑をかけないためにこういった行動にはすぐさま反応するの
だ。

だから気になって、俺も彼女に近づいた。

「ほら、行こうぜ後藤さ……」

そして、後藤さんの顔を見て最後まで言葉が続かなかった。

同じように駆け寄ってきた虹夏さんが代わりに反応してくれる。

「え!? ぼっちちゃん大丈夫!? どうしたの!?!」

泣いていた。

抑える事もできずにボロボロと少女は泣いていた。

「ひとりちゃん?! 大丈夫? どこか痛めたの? け、怪我はしてない!? ちょっと、

優人君も突っ立ってないで何があつたのか聞かないと!」

「……………え、あ、ああ…………」

普段のようなコミカルな泣き方じゃないのはすぐに分かった。

けどだからこそそうと悟った瞬間、俺の思考は空っぽになつてしまふ。単純に、涙を流す後藤さんを見てどうすればいいのか分からなくなつたのだ。

ポロポロと涙を零す後藤さんは嗚咽混じりにでも自分から理由を話してくれる。

「あう……そ、そのつ、やつぱり悔しくて……みつみんなで今日……大きいステージに立ちたかつたです……。ゆうくんの期待に応えたくて……応援してくれた店長さん達やフアンの人達にも、このステージに立つところを見てほしくて……もつとたくさんの人に、結束バンドの曲を……聴いてほしかつた……。誰かに認めてもらうとか、一番になるとか、そういう事より……もつと……」

多分、我慢していたんだろう。

ライブ審査に落ちてから今日までずっと、この気持ち塞いでいたんだろう。

上手く呑み込んで、理解して、納得して、だけど諦めきれなくて……表面張力のようにギリギリで耐えていた思いが、シデロスのライブを見てついに溢れ出したんだと思う。

涙だけに留まらず鼻水さえも垂らしている後藤さんの姿は、いつものようなみつともさなんて一ミリもなく、一人のバンドマンとして純粹に悔しさを吐き出す立派なギタリストに見えた。

「……やめてよ」

呼応するように、それはバンドマンのメンバーに浸透していく。

「あたしだって……みんなと今日とライブしたかったよ……」

「伊地知先輩……」

「うう、が、我慢してたのに……」

それぞれ抑えていたものが零れていく。

ぼすりと、後藤さんが俺の胸に額を押し付けて預けてきた。後は嗚咽が聞こえるだけ。

迷いがあった。

この涙は努力をし続けてきた彼女達が流す事に意味がある。俺なんかよりもプレイヤーであるみんなの方が悔しい思いや悲しい気持ちは何十倍も持っている。だから俺に涙を流す資格はない。

でも、だけど。

こんなにも頑張ってきた彼女達を一番近くで見えてきたからこそ、それを労って、受け止める事くらいはしてもいいんじゃないだろうか。

それくらいなら、俺にもしてあげられる資格ぐらゐはあるんじゃないだろうか。

自然と、俺の右手は後藤さんの頭の上に置かれていた。

何かを特別言う必要はない。

言葉をかける事よりも、こんな行動だけであつても何かがマシになればいいと信じる。

そして、新しい声が出た。

「ねえちよつと！」

水を差すような部外者の声。

俺達以外の誰か。

後藤さんを撫でるのに必死になつていた俺の代わりに、虹夏さんが先に反応した。

「え、ぼいずんさん!？」

同時に、新しい風が舞い降りてくるような音がした。

112. それでも少年少女達の世界は広がっていく

「ぼいずんさん……どうしてここに……？」

慌てて涙を拭いながら虹夏さんが言う。

しみりりとしていた空気は因縁の相手の来訪により良くも悪くも崩された。

喜多さん達も涙混じりの目をハンカチや服で拭いている。

俺はぼいずんさん……っていうのは言いにくいな、やみさんでいいかも。俺はやみさんから目を離さずにハンカチを出し、さりげなく後藤さんに涙を拭けと差し出した。

のに向にハンカチを取る気配がないので後藤さんを見たら、思いつきり俺の胸に顔を埋めながら俺の服で涙やら鼻水やらをご丁寧に拭いていやがった。

この野郎……涙はまだしも鼻水も一緒にちーんしゃがって……シャツがカピカピになっちゃうでしょうが。

俺と後藤さんがささやかな攻防を繰り返している中、あちらはあちらで話が進んでいくようだった。

「あ、あなた達の事だし今日は絶対来てると思ったから探してたのよ……その、どうしても言っておきたい事あったし……」

「言っておきたい事……?」

後藤さんを剥がして結束バンド方面に追いやってから鼻水でカピカピになった箇所を汗拭きシートで拭けばワンチャン良い匂いになるんじゃないかね作戦を一人で決行していると、視界の端に大きな動きがあつた。

過去に一度やらかし発言をしているやみさんに対して虹夏さん達が警戒心から後ずさりでもしたのかと思つたけど違う。

いつかのハチャメチャなライブハウスの時に俺にも見せた行動。

つまりはやみさんが謝罪の意味を込めて頭を下げていたのだ。

「(づ)めんなさい」

やみさんの一連の行動と言動に目を丸くしたのは俺以外のみんな。

まさか因縁の彼女から謝罪の言葉が来ると思っていなかったんだろう。結束バンドはライブ審査で落ちたのにも関わらずだ。

「ギターヒーローさん以外お遊びって言ったことやその他全ての発言を撤回します。本当にすみませんでした」

「……へえ」

思わず小さく声が漏れた。

何だよ、ちゃんと言えたじゃねえか。聞けて良かった。これにはノクティス王子もニツコリだね。

ただあの時のライブハウスで俺とやみさんが会っていた事はみんなに話していないので、実情を知っている俺以外は挑発的な事を言ってきた彼女を見返すつもりだったのにライブ審査落ちちゃったからどうしようと思っただけならいきなり元凶が出てきて謝られた状態な訳である。

そりゃ混乱もするし何を言えいいのか分からないのも頷ける。

えつとお……と虹夏さんが言葉を紡ごうにも上手く出てこないのをよそに、やみさんが再び口を開いた。

「あの日……あなた達のライブ審査の演奏を観て分かったの。ギターヒーローさんの居場所は他のどのバンドでもない、結束バンドじゃなきゃダメだって。ここ以外あり得ないんだって、私自身ライブを観てそう思った。本当に凄かった、目が離せなかった、惹

き込まれた、楽しかった……」

この言葉に偽りはないと分かったのは、両手で自分の服をぎゅつと掴んでいる力の強さと彼女のギラギラと光る瞳がそうだと物語っていたから。

「だからあの時のライブ審査……私にとっては結束バンドが一番だった。……つていうのも言っておきたくて……うん……」

「ぽいずんさん……うう、追い打ちかけないでくださいよ〜〜!」

「おいこらこのメンヘラすつとこどつこい地雷女うちの天使をよくも泣かしやがったなそこだけは許さねえぞこの野郎ツ!!」

「ええっ!? 予想外なところから怒りの矛先向けられたんだけど!?!」

良い雰囲気で終わると思つたら大間違いだからな。虹夏さん泣かすヤツは誰であろうと処す。処して処して処しまくる。

「優人君落ち着いて! さすがにここで怒り散らかすのはちよつとアレだから! 人の心を取り戻すのよ!」

「ヒトノ……ココロ……?」

「操られたモンスターみたいな返しね……」

おつといけね、虹夏さんの涙は俺を狂わすんだぜ。
とりあえず落ち着くと、自分のハンカチで涙を拭き取った虹夏さんが俺とやみさんを
交互に見てきた。

「……えつと、というかお二人って……その、大丈夫なの……?」

「何がです?」

「いや、ほら……前にスターリーで色々あったから、さ……」

「……あー」

どう言おうか少し悩むも、何も上手い誤魔化し方が出てこない。

うーん……まあいつか。

「まああれですよ。俺も一つ大人になったって事で」

「……そうよね。一応でもみんなの前でケジメは付けておくべきよね……」

「……あれ、やみさん? 何を一人でぶつぶつ言ってる」

「いやね、あんたにもちゃんと謝っておきたくて……前は謝罪とかいらなくて言ってくれたけど、それでもあんなに酷い事いっぱい言っちゃったし……私自身きちんと謝らないと気が済まないのよ」

「「……………前？」」

「おおおーっつとやみさんオーケー分かった！ あなたの誠意はもう優人さんにちやあーんと伝わったから大丈夫です！ だから余計なこと言わない内にそのお口をチャツクしましょうねええええ〜！」

「むぐう〜〜つっ!？」

さつきまでしんみり悔し涙を流していたお三方から何やら不穏な空気を察知したのでやみさんの口を塞ぐ。

虹夏さんと喜多さんはいつもの事だけど今回は後藤さんもかよ。何なのみんな、バンドは第二の家族だからって他の女性と会うのダメなルールとかはないじゃんよお！
リョウさんだけだよこういう時毎回アホ面で突っ立ってくれるのはっ。みんなも見習って。

「手で口なんか塞いじやってさ……………何か仲良くなつてない？」

「ハハッそんな事はないさっ。ハハッ」

「何でミ〇キーボイス？」

とりあえず勢いで何とか誤魔化せた……………と思う。

俺の行動にやみさんも何かを察したのかこれ以上は何も言わない事にしたようだ。

それでいい、じゃないと俺の命がいくつあっても足りん。

というところで結束バンドと俺とやみさんの因縁はここに終結した。

元々やみさんを見返すためにと出場を決めた未確認ライオット。終わってみればたくさんの貴重な経験と出会いがあり、ライブ審査で落ちたものの俺達を大きく成長させるきっかけの一つにもなった。

そして結果的にファンも増え、見返すための相手も見事に結束バンドのファンになってくれたのだ。

試合には負けたが勝負には勝った、という表現が正しいかもしれない。きつとこれを糧に結束バンドはもつと成長でき

「あっそうだ」

「何すかやみさん、今せっかく良い感じに締めようとしてたのに」

「どこがよ、何がよ。あんた今黙ってただけじゃない」

「そうだよ優人くん、締めるにはまだ短すぎるよ」

やみさんの言い分は正しいけど虹夏さんは何で時々メタい事普通に言ってくるの。怖いよ。

「で、どうしたんですかぼいずんさん？」

「そうそう、今日あなた達に会いたかったのにはもう一つ理由があつてね」

喜多さんの問いに応えるようにやみさんは手招きをした。

するとステージ下の脇の方から人が出てきた。

真夏には暑そうなスーツを着ながら毛先にウエーブをかけたロングヘアの女性。

しかしその表情は俺達が今まで出会ってきた大人の中で一番まともそうでビシツとした大人の風格があつた。

というかぱつと見このフェスには不釣り合いな格好のようにも思えるが、真夏でスーツ姿、ステージ下の脇から登場、そしてやみさんの紹介という点からもしかしてフェスの関係者だったりするんだらうか。

いや、でもその前に……。

「今までで一番まともそうな大人のお姉さん」

「気持ちに分かるけど口に出さない。あと一応あたしもお姉さんだから」

あでで……耳引つ張らないで虹夏さん。なんかポケモンのタケシみたいな扱いになつちやつてるよ今。

ちなみに虹夏さんは歳のにお姉さんだけど妹だから妹枠でもある。これを巧みに扱

い翻弄してくる虹夏さんがとても可愛いのでオススメだ。しかも無自覚だな。話を戻そう。

「この人を紹介したかったからなの」

「どうも、ストレイビートというレーベルでマネジメントをしています、しばみやこ司馬都と申します」

お声も何だか落ち着いたお姉さん感のある美声で名乗る女性。今のところ個人的に理想のお姉さんって感じがして最高です。

じゃないじゃない、それよりも気になる事を言ってみせんでしたかこの人？

「すといびいと……？」

「レーベルだって？」

レーベルって……もしかしてあのレーベル？

「はい、先日のライブを観て気になったのでお話できたらと思ったのですが、よろしいでしょうか」

「え……」

虹夏さんと何故か俺にも名刺を渡してきたので一応会釈をしながら受け取る。

……名刺は特に普通、か。別に疑っている訳ではないが、過去に池袋のライブハウスでブッキングの誘いを受けた時はちよつとした詐欺に遭ったようなものだったので少しばかり警戒してしまう。

やみさんの紹介だから大丈夫だとは思うけど……いややみさんだからこそ大丈夫なのか？ という気持ちもちよつとある。

……いや、失礼な憶測はやめておこう。改心した彼女の気持ちは本物だって事くらいはもう知ってるし、今のやみさんなら信用もしていいと思える。

そして、ようやく意味を理解したのか彼女達（後藤さんとリョウさん以外）が一斉に声をあげた。

「レーベル~~~~~!!」

「ちよつと声でかいわよ!」

「あの、まだお話が……」

やみさんの制止も空しく虹夏さん達は己の世界に入っていく。

「みんなっ、レーベルだよレーベル!」

「レーベルってあのレーベルですよね！」

「敵を倒すと経験値が貰えて強くなるやつ」

「それはレベル」

「旧約聖書の神話に出てくるやつ」

「それはバベル」

「遊城十代の精神的パートナーのヤツ」

「それはユベル」

「アメコミの出版企業のやつ」

「それはマーベル」

「気持ち的にナイトやってたけどSAO第一層のボスにやられたヤツ」

「それはディアベルはん……っていつまで続けんですかそのボケ」

多分リョウさんも顔には出てないけどテンション上がってるやつだこれ。

無駄に口回ってるし。

しかしライブ審査には落ちたのにレーベルから声がかかるとは……音楽業界って分らないもんだな。

未確認ライオットでは勝敗という形はあつたけれど、絶対的に向いてないとか技術が足りていなくてもバンドは続けられるし、その過程で見えてくれる人も増えていく。基本

的にバンド活動とは他者よりも自分達との戦いだ。

今回のフェスだつて優勝できなかったから才能がないと落ち込む必要なんてどこにもない。活動を続けていけば突然どこかで道が拓かれる事もある。

結束バンドに関してはそれがライブ審査の時ではなく、今日がその日だったということかもしれない。

まあ、とにかく、彼女達の悔し涙の理由がプラスに変わったのなら俺はそれでいい。犠牲になったのは俺のカピカピTシャツだけだ。被害は最小限だけ。

「……話の続きをしたかったです、すっかり蚊帳の外ですね」

「まあ、嬉しい気持ちは分かりますからね。今はそつとしいてもいいんじゃないですか」

「こつちにいると落ち着くなあ」

「何大人の仲間入りしようとしてんのよ。あんたはあつち側でしょうが」

「まだ決まった訳じゃないですけどレーベルから声かかって喜ぶのはバンドメンバーの権利ですよ。むしろ俺は喜ぶ彼女達を微笑ましく見守る立場です」

ほほえまうって感じだね。

「いつか必ずロック音^オジャポンに出るぞー！」

「Nステにも出れますかね!？」

「ギャフントダウンTVにも出れちゃったり!？」

「おお、冠番組も遠くないですね！」

「めっちゃ話決まったっぽい雰囲気の話してるけど」

「……未来は明るいなー」

「遠い目してんじゃないわよ」

「こういう時って目先の事より将来の妄想に思いを馳せる事多いよね。」

「……というかあんたあたしにタメ口使ってなかったっけ。しかもいきなりやみさんって呼んできてるし」

「前に言ったでしょ。ちゃんと尊敬する人には敬語を使うって」

「え……?」

「この前の記事もそうですけど、今日彼女達を見付けてくれてありがとうございます、やみさん。おかげで後藤さん達も元気を取り戻しました」

「……う、うん。なんか急に素直に言われると調子狂うわね……」

今日やみさんと司馬さんが結束バンドを見付けてなかったら今も雰囲気はお通夜状

態だったかもしれない。

そう考えるとレーベルから声がかかるなんて、最上級のイベントに他ならない。どん底から一気に天井まで突き抜けていくほどのサプライズ。一個人の俺には到底成し得ない事だ。

これだけでもやみさん達には感謝しかない。

まったく、俺はこんなにもありがたがってるつてのに、当の本人達は今ももう少し遊んで帰ろうとか花火買ってこようとか話していて完全に舞い上がっている様子だ。夏の暑さは健在なのに結構元気ですな君ら。

あれよあれよという間にコンビニで花火を調達し、陽キャ特有のてきぱき動作で花火の準備を終わらせた喜多さんがみんなに花火を配る。

まだ完全に夜でもなくオレンジ色の夕日が世界を染め上げていく中、後藤さん達はそれぞれ花火を楽しんでいた。司馬さんほったらかしにされてるのに保護者モードになつてくれてますけど大丈夫ですかね。

「……仲の良いバンドですね」

ふと花火を楽しむ結束バンドを見て微笑む司馬さん。

視線の先には青春を体現したような景色が広がっている。

もはや自然にカメラを構えている自分がいた。

一枚撮る。見ると花火の煙も相まってジャケ写に使えそうなくらい幻想的な一枚だった。

ぼろりと口に出た。

「ええ、それが彼女達の強さですよ」

本当、一人一人の個性が奇跡みたいなバランスで成り立っているバンドだどつくづく思う。

「……さすがに盗撮は止めといた方がいいと思うわよ……」

「洒落にならない言い掛かりはよしてくれ威力業務妨害さん」

雰囲気台無し上等でやみさんと軽い取っ組み合いになった。

結局司馬さんとの話は後日レーベルの事務所でする事にして今日は解散となった。

虹夏さん達とも別れ、今は金沢八景駅から後藤さんと自分達の家まで歩いている最中

である。

ライブ終わった直後は悔し涙と鼻水を流していたのに、レーベルからのスカウトで今
はもうすっかり浮かれポンチモードだ。

電車の中でも普通に会話してたのにいきなりうへへ……とか妄想の世界に浸る瞬間
が125回あった。

何ともまあ浮き沈みの激しい子だ。……それは元からか。元からだったな。

「れ、レーベルだよゆうくんつ、私達もこれで夢の印税生活……将来安泰……！」

「気が早すぎるし夢見がすぎえ。事が上手く進みすぎだろそのルート」

こんな感じでさつきから無駄に将来が明るくなると信じ切ってる脳内ハッピーセツ
トのアホピンクが出来上がっているのだ。

嬉しいのは分かるが、期待のしすぎも後から思ってたのと違ってたら反動でダメージ
大きいぞ、とは言わない。浮かれポンチには多少のショック療法も必要なのである。

「は、早くお母さん達にも知らせたいねっ……」

「……そうだな」

それは本当にそう。審査に落ちた時は俺達以上に悲しんでたし、嬉しいお知らせなら

ば早く伝えて喜ばせてあげたい。

多分明日の晩ご飯は強制的にご馳走とケーキになると思う。主から揚げ増し増し
で。

「あつ、そ、そういえば……」

「ん？」

「ゆうくんはその、レーベルの話を聞きに行く時……一緒に来てくれるの……？」

至極真つ当な質問だった。

「あー、どうだろうな。普通に考えたら結束バンドは後藤さん達の四人だけだし、サポーター役つつつても多分事情を知らないあちら側からすれば俺は金魚のフンか部外者扱いだからな。下手したら追い出される可能性もゼロじゃないから多分行かない方が俺の身のためにな……うん、分かった。要検討するからマジの涙目はやめてくれ。こればかりはどっちの方がいいか俺も分かんねえんだって！ 一応行く確率高いってのだけは言っておくからっ」

一応名刺貰ったから結束バンドの関係者扱いとして認識はされてるのかなと勝手に思い込む事にする。

その辺の立ち位置が曖昧だから後藤さんもわざわざ『来るの?』ではなく『来てくれるの?』と質問してきたんだろう。念のため後日虹夏さんにも確認してみよう。

確定ではないが着いていく確率が高いと知った後藤さんはまたもご機嫌になった。

珍しく、本当に珍しく俺からではなく後藤さんから話を振ってきたり独り言のように語り出すのだ。

「こ、これでまた、私達は夢に一步近づいたんだよねっ」

「ああ、そうだな」

「虹夏ちゃんの夢にも近づいて……結末バンドはまた大きくなれるんだ……」

「上手くいけばファンも一気に増えるかもな」

「……これ以上の規模で人前には出たくないかも……ああ……胃が……五臓六腑が人前に入る事に拒絶感を表してる……!」

「直前までの威勢はどこいった」

相変わらず感情の高低差が激しすぎて風邪引きそうなレベル。

しかし今日に限っては後藤さんの口は止まらない。彼女の声が小さくとも話し続ける姿はとて新鮮で見ていて飽きないのだ。

そして、そんな後藤さんの心なしか楽し気な話を聞きながら一緒に歩いて帰るこの時

間が。

俺はどうしようもなく心地良いと感じた。

こうして、俺達の『未確認ライオット』は幕を閉じた。

審査には落ちたが、可能性を見出してくれた人に拾い上げられる形で。

113. レーベルとか事務所とかの違いって割と分かりづらい

夏である。

そう、季節は忌々しい事にまだまだ夏真っ最中なのである。

しかし嬉しい事に俺達学生特権の夏休みもまだまだ続いていた。

今日も今日とて地元から約二時間かけて下北沢に移動し、真夏の太陽に照らされながらスターリーへとやってきた俺達。今日は何だかやけに太陽が眩しかった気がする。

早く秋になんねえかなと内心愚痴りつつ、いつも通り挨拶しながら涼しいライブハウスの中へ入ると、

「……いつからゾロになったんですかりョウさん」

「強いて言えば今日から」

金持ち（金無し）の山田がベース三刀流で仁王立ちしていたのだ。

さすがにお金なさすぎて家のコレクションベースを売る気にもなったのかな。だつたら早く借金返してくれないかな。

「違うよ優人くん、あれ全部ハイエンドベース。ローン組んで買ったらしい」

「ローン組む前に借金返せや」

「レーベル入るしよーよー。すぐ契約料貰って印税がっほがっほよ」

「あの人頭ん中ハッピーセットなんですかね」

「そっだよ」

「そっだったのか。」

「ところで何か今日の優人くん眩しくない？　というかぼっちちゃんは？　一緒に来るはずだよな？」

「ええ、後藤さんならいつも通り俺の後ろにいますよ、ほら」

「あつ!!　おつ、おつはようございます!!!」

「急にうるさつ!　つてうわ、光つてたのぼっちちゃんだったの!?　どうりで優人くんの背景が後光みたいになつてると思つたら!」

「これが後藤さんならぬ後光さんつてね」

「優人君そういうの今いいから」

喜多さんのドライな視線が痛い。今日の冷房きつくない？

それより後光さんマジで眩しいな。だから外歩いてる時も普段より太陽が眩しく感じたと錯覚してたのか。

「……え!? 伊地知先輩これ見てください! ひとりちゃんを着てる物……クツチのジャージにクロロハーツ全身ブランド成金コーデですよ!? ひとりちゃんいっただいどうしたのこれ!」

「あつへへ、動画の収益が貯まって……バンド活動も進展したのでお父さんが自由に使っていていいと言ってくれたから奮発しちゃいました……」

「優人君どうして止めなかったの!」

「喜多さん、家は隣でも別々に住んでるから止められない事だつてたくさんあるんだぜ」「ごめんなさい私が間違ってたわ……」

分かってくれればそれでいいのよ。俺もまさか知らないうちに通販で注文してたなんて思わなかったもの。

今日迎えに行ったらいきなりドアが開いて出てきたのがコレだったんだぜ? 眩しさで失明するかと思った。

「ここ、これからの備えてワンランク上の女コーデ意識してみたんですけどどうですかね……」

「服のオーラに負けてぼっちちゃんの顔がよく見えないんだけど……優人くん代わりに何か言っただけよ」

「せめてジャージ以外の服買えよ」

「問題そこなの!？」

実際あれは後藤さんが動画収益で稼いだお金だし、何に使うかは結局彼女の自由だから特に何も言えない。

まあもつと他に使い道はあったと思うが……あれだ。脳内ハッピーセットがもう一人いたと思えばいい。そう考える事で俺の思考は無駄な働きをせずに済む。……そのうち将来の事を考えてお金の使い道について話し合う事にしよう。

山田に関しては救いようがないので触らぬ神に祟りなし。

「はあ……もういいや。みんな揃った事だし事務所行くよ。今日は話聞きに行くだけだからリョウもベース置いていってね」

「大切な我が子をこんな所に置いていけと言うのかっ」

「大切な我が子家にどんだけ置いてきてると思ってるの今更でしょ」

という事でリョウさんの無駄に高いベースは店長が預かってくれる事になった。

そしてみんなの準備も既に完了している……のだが。

「虹夏さん……最終確認ですけど、ほんとに俺も着いて行って良いんですか？」

「もく、優人くんまだそんな事言ってるの？」

「や、だって俺はサポート役つつつてもメンバーじゃない訳ですし、下手すりゃ門前払いされる可能性だってあるんですよ？ そんなんされたらちよつと気まずいじゃないですか」

「気まずいだけで済むメンタルも中々だと思うけど……。ロインでも伝えたでしょ、絶対大丈夫だって。というかもし優人くんだけ追い返そうとしたら抗議してあげるから安心して！」

「虹夏さんのメンタルも相当じゃないすか。……まあ、分かりました」

リーダーがそう言うならとりあえず従おう。もし何かあった時は全力で謝るか逃げよう。

「そうと決まれば早く向かおう。ちなみに迎えは何。へり？ それともハイヤー？ い

やリムジンでも可」

「あつお迎えのマネージャーとかつていますかね……へへっ」

「ここから徒歩三分だぞハッピーセット共」

頭ん中もう印税とか給料の事しか考えてねえのかこいつら。

高校生特有のこれさえ上手くいけば将来めっちゃ裕福な生活できるんじやね的思考してる。大人の世界はそんな甘くないと思うぞ。主に転勤多かった父親の姿を見てからそう思い込んでるだけかもしれないけど。

再びクソ暑い外へ。

近いとはいえ一応貰った名刺からスマホで調べてナビルートを見る。マジで近かった。

「ぼっち、三分圏内にでかい建物あつたっけ？」

「……さ、さあ、どうでしたかね……。いつもゆうくんの後ろか隣に引っ付いてるのであんまり周り見てないです……」

後ろにいるおバカ達の会話を聞き流しながら虹夏さん達と前を歩く。

スマホで事務所の名前を調べたから出てくるのは当たり前なのだが、画面に映っているその名前をもう一度ちゃんと見てみる。

「ストレイビート、か」

「どんな事務所なのかしらね〜」

無意識に口から零れた言葉に反応したのは喜多さんだった。

「楽しみねっ」

「ん〜……まあ」

「あら、優人君はそうでもないの？ そういえば伊地知先輩もあまり浮かれてないですよね？」

「いやあ、あたしも楽しみは楽しみだよ？ ただ、この前は悔しい思いをしてた直後にあれだったから深く考えずに喜んでちゃってたけど、よく考えたらいまいちレーベルってよく分からないし話を聞かない事にはねえ……」

「俺も同感です。さすがに前のライブハウスみたいに早とちりなんて事にはならないと思いますけど、こればかりは直接会って話さないと分からないですもんね」

そもそもレーベルとは何なのか、事務所やレコード会社とどう違うのかなんて話にもなりそうだが、細かいとこまでは俺もちよつと調べただけで多くは分かかっていない。

凄く簡単に言えば事務所はアーティストのマネジメント、レコード会社は音楽作品を

販売する組織、そしてレーベルは音楽作品を制作するorさせる組織、みたいな感じだったと思う。

言わばレコード会社の下部組織のようなものか。それで俺達はそのレーベル事務所に向かっているという訳だ。

果たしてどんな話をするのか、はたまた俺は入れてもらえるのか、主に後者が重要な部分ですね。

「そういうえぼどうい話をするのかまでは私達も知らないわね」

「大体はレーベル側の売り出し方とかお互いにメリットがあるような方向性とか、あとは契約の話とかじゃね。今のところ七割方は前向き検討だけどまだ完全に契約するとは決めてないからな」

「だねえ。あたし達のやりたい事を尊重してくれるところないんだけど、結構そうじゃないみたいいな噂も聞くし」

「ええつ、そうなんですか？ やっぱり音楽業界は甘くないのかしら……」

「それこそ売れるために音楽性を変えなくちゃいけなかったり、演奏レベルが低いからってメンバー一人だけ減らしてデビューさせるようなところもあるって聞くぞ」

「……私ももつと頑張るわ……」

いや喜多さんの上達速度なら大丈夫だと思っけど。

というのも俺目線だからってのあるしプロを輩出する向こう側からするとまた見方や意見も違ってくるんだろな。司馬さん自体は良い人っぽかったから心配はないと信じたい。

ここで何やら後ろの無駄遣いコンビがひそひそ話をしているのが聞こえた。

「……ぼっち、何かさつき優人達から完全に契約するとは決めてないとか聞こえたんだけど。これって気のせい？」

「あつい、いや……さすがにこの前大喜びしてたしそれはないんじゃないかなと……じゃなきや私達を買った高級品達が大変な事になります……」

「私達の手で何としても契約にこぎつけよう」

「あつは、はいっ……」

こつちが色々慎重になってるといふのに何ともまあ気楽な会話をしてるおバカさん達である。

と、虹夏さんの足が止まった。

「あ、着いた。こここの二階だっけさ！」

「え」

「わーお」

見上げればとても立派な建物……なんてのは幻想で、普通に……いや普通よりも結構ボロいレンガ調の雑居ビル（？）だった。

ネットにあつた画像と完全に一致してる。お世辞にも小綺麗とすら言えない感じなのがもう何かアレだ。

さて、後藤さん達の反応でも拝んでやりますか。

「……いい、いや、違う違う。虹夏に優人、そのナビ多分間違ってる。レーベルなんだしもうちよつとこう、ガラス張りの高層ビルとかにあるはずだって。そうに違いない、こんなボロいわけ……きつと何かの間違」

「みなさん来たようですね。お待ちしておりました」

三階建てオンボロ雑居ビルの階段から出てきたのは毛先ウェーブのスーツお姉さん、司馬さんだった。

これで確定したね。

「ほ、ほーん……？ よく見たらレトロで趣のある建物じゃん。目立たないのにどこと

なく存在感を漂わせる雰囲気、こういう方が私は好みなんだぜ……」

「あつゆうくん見て……ハムスターいっぱいいるよつ。ペットの放し飼いもしてるなんて凄いとこだね……!」

「いいからそのドブネズミ離してあげなさい。普通に汚いしめちゃんこ威嚇されてるからね君。てかどうやって捕まえたんだ」

「この雑居ビルを褒められたのは初めてです。特殊な価値観をお持ちなんですね、さすがバンドマンとでもいうのでしょうか」

現実を受け入れられない脳内お花畑達は錯覚でも見ているらしい。思い込みの強さもここまで来るともはや狂気だな。

あと司馬さんも真面目に対応しないでいいから。あまり冗談通じない系の人なのか。後藤さん達は今の状況が冗談であってほしいみたいだけど。

まあ俺も最初は警備員の一人か二人くらいはいるのかと思ってたけど、この様子だといなさそうだ。

おっと、司馬さんがいるなら今のうちに確認しておかないと。

「あー、その、司馬さん」

「はい、何でしょう」

「えつとお、一応確認しときたいんですけど……今日の話って俺も一緒にいいいんですかね？ 俺自体は結束バンドのメンバーじゃないんですが……」

隣で虹夏さんがムムム……と黙つとけばワンチャンそのまま入れるかもしれないのに何でわざわざ聞くのかなという意味を含めた怪訝な顔で見ているような視線を感じるが、これだけはちゃんと聞いておかなければならない。

そう、後から面倒事になるのは御免だからだ。どうなるにしても懸念点は最初に解消しておきたい。

しかし俺の質問に対して司馬さんはむしろ何故そのような事を聞くのかといった顔をしながら、

「もちろんです。清水さんは結束バンドにとつて必要不可欠な人材だと伺っておりますので、どうぞ遠慮せず一緒にいらしてください」

「……は、はあ」

思つたよりも普通に歓迎されてるっぽくて逆に困ってしまった。

うん、まあとりあえずはこれで俺も一緒にいてもいいいらしいので一安心、かな。……というか誰からそんな話を伺ってたんだろう。

「では、外も暑いのでこちらへどうぞ」

考えを巡らせる前に司馬さんに案内されたから二階へと上がる。

後ろで後藤さんとリョウさんがまだぶつぶつと微かな希望を捨てていないっぽい会話をしているが、多分そろそろ限界だろ思う。

「まだだ、まだ希望はあるぞぼっち。大事なのは外見じゃねえ。中身だ……」

「は、はいっ……」

ドアを開け中に入る。

ふう、ようやく暑い外から涼しい室内に移れ……、

「狭い所で申し訳ありません。最近クーラーの効きも悪くて快適とは言いづらいですが、どうかご容赦を」

真夏にクーラーもまともに作動してないサウナ状態のレーベル事務所であった。

なるほどね、これはもしかして俺達試されてたりする？ 大丈夫かストレイビート、

そのうち潰されないかこの雑居ビル。

「さ、サウナも兼ねてるだなんて未来的な建物だなあ……。私的にはもうちよつと温度

上げてもいいくらい……」

「あつ仕事中もサウナキメたいですからね……終わつた後の水風呂……いや水風呂が気持ちいいの何のっ」

嘘つけ。水風呂で風邪引くようなヤツが強がつてんじやねえぞ。

そもそもサウナ行つた事ないでしょうが。

「凄いポジティブな方達なんです。高校生にしては中々のポテンシャルをお持ちのよう
うで」

「あんならざるを得ない事情がありました……放つておいて大丈夫です」

「彼も放つておいて大丈夫なんですか？」

「え？ 彼つて……つて優人くん!? 何か溶けかけてない!？」

「暑さにめつぼう弱い優人君だものっ。せつかく涼しいところに行けると油断してたらある意味外よりも蒸し暑い室内に連れてこられて限界が来たんだわ！ ロウソクみたい
に足から溶け始めてる！」

そう、俺は俺で絶賛溶けている真つ最中だ。階段を上っている途中から無言だったのもそのせい。

だって室内は涼しいと思うじゃん？ 生き返ると思つたら追い打ちされるとは思つ

てなかった。ほら、お腹痛くてトイレに駆け込んでやつと用が足せると気持ち緩んでたら全部使用中だった時の絶望感。あんな感じ。

「時々ぼつちちゃん達より世話のかかるサポーターだなあもうっ！ 司馬さん扇風機ありますか!？」

「はい。さすがにそれが無いとうちの社員もみんなダウンしてしまうので何台か常備してあります。二台ほど持ってきてますね。……ええと、どこにあったでしょうか……?」

「ぼつち、もつとプラス要素のある部分を見付けるんだ。じゃないと私達は取り返しのつかない事になるっ」

「あっはい！ ええと……ひ、人が少なくて過ぎやすい!」
「プラスだ!」

「そんなこと言ってる場合ですか！ ほら、ひとりちゃんもリョウ先輩も優人君の溶けた部分をかき集めるの手伝ってください!」

やはり結束バンドはどこに行っても結束バンドらしい。

こうもホームのように騒げるのはある意味長所と言っていいところなのか。アウエーとか基本ないのかもしれない。

まあ今こうなってる原因は俺なんですけどね☆

114. 頼れる大人というのは思った以上に貴重な存在

「改めまして私、ストレイビートでマネジメントしております司馬都と申します。本日はご足労頂きありがとうございます」

「あ、ど、どうも……」

「ところで清水さんはもう大丈夫なのでしょうか」

「扇風機のおかげで何とか一命を取り留めましたので大丈夫です」

「そうですか。それはよかったです」

ええもうほんとに。

真夏だつってんのに冷房無しの室内はただの地獄すぎますて。スーツ着用してんならエアコンの修理ぐらい依頼しといた方が絶対良いと思う。それだけで社員のモチベ上がるんじゃないかな。

「あ、優人君の溶けた残骸まだそこにあつたわ。適当にくっ付けとくわね」

「おう、サンキュー」

「相変わらず普通の人間のやり取りに思えない事してるわね……」

「んあ？　つてあれ、やみさん？」

「え!?!　ぽいずんさんが何でここに!?!」

まさかの言いたい事も普通に言ってくる系女子(？)、ぽいずん♡やみさんのご登場でみんな驚いていた。浮かれポンチ二人組を除いて。

「はい、お飲み物どうぞー」

「どうも。で、やみさんどうしたんですか？　まさかライタークビになってここで働き始めたとか？」

「クビにはなつてないわよ！　ただライターだけで食べてくのは難しいってだけ！」

「つまり？」

「ちようど人手が足りないなので彼女にもバイトとして働いてもらう事にしたんです」

人手足りないレーベル事務所って大丈夫なの。最近はこの業界も人手不足で大変そうだ。世知辛いねえ。

というかこういうレーベルってバイトでも働けるんだな。正社員とかじゃないと無理だと思ってた。

「やみさんいくらレーベルだからって変なキャラ付けしたまま社員の人に絡んでませんか。そこんとこ気を付けなきや変なレッテル貼られますからね。変な」

「変なを強調すんな！ さすがにもうああいう事はやめたわよ！」

「確かに……：：：そういえばこの前も思いましたけど、ぽいずんさん最近落ち着きましたよね？」

「あ、あの時はライターで生き残るために色々キャラ付けの試行錯誤してたから……：：：あ」と今はやみつて呼んで！」

そこは変わらないのね。佐藤さんとかじゃないんだ。

「あ、アルバイトを雇えるくらい余裕のある事務所……：：：」

「間違いなくプラス要素だぜぼっち。このままあと三十個はいこう」

おバカコンビはまだ浮かれポンチモードから帰って来てないらしい。

さつきからちよくちよく会話は聞こえてくるけど一生後藤さんがストレイビートの良い所を言わされててリョウウさん何も言っていないんだよな。さすがダーヤマ、他力本願の極みだぜ。

ちよつとした小話もほどほどに、いよいよメインに取り掛かる。

「ではそろそろ本題に入らせてもらいます。まずレーベルと聞いてどんなイメージを持たれましたか？」

「えつとお……アルバム作らせてもらえたりとか……？　うちのお姉ちゃんも昔レーベルに誘われた事あるんですけど、そういう事言われたって聞きました」

「それでミリオンセラー飛ばしちゃったりい！」

「あと別荘貸し切って曲作りとか」

「あつ毎月事務所から給料出て働かなくていい……う？」

どうやら虹夏さん以外のメンバーは大層幸せな脳内をしているらしい。

ましてやミリオンセラーなんて最近全然聞かんど。それもサブスクが主流になったせいもあると思うけど。

司馬さんはみんなのイメージを無表情のまま受け止めつつ、

「なるほど。ちなみに清水さんのイメージを聞かせてもらってもいいでしょうか」

「俺も虹夏さんと大体は一緒ですかね。一応軽く調べはしましたけど、今の音楽業界だと大手以外はそんなに甘くないってイメージは抱きました」

「その通りです。残念ながら今の音楽業界では余程の事でないとデビュー時にそのよう

なバックアップはできません。実はCD一枚出すのにも結構ハードルが高かったりします」

「えっ」

何か隣の浮かれポンチ達から素っ頓狂な声が聞こえたけど今は気にしないでおく。

「ここ数年で音楽業界の仕組みも大きく変わりました。CDを出したとしても昔のよう
にみんなが手に取ってくれる訳でもありません。しかし、今だからこそできる売り方も
あります」

そう言うと司馬さんは一枚の資料を俺達に差し出してきた。

手に取ると同時に彼女はそれに書かれている内容を話します。

「まずは結束バンドのみなさんにこちらの予算で数曲作っていただいて、それを弊社が
サブスクや動画サイトで順次配信していきます。そしてその売上や再生数が多ければ、
今度はCDのミニアルバムを製作したいと考えています」

「な、なるほど……っ」

「つまりお試しでそちらが制作費を出してくれた上で、結果が良ければミニアルバムも
作ってくれるって事ですか？」

「要約するとそういう事です。今回は専属実演家契約という形式になりますね」

ふむ、聞き慣れない単語が出てきたけどシンプルに考えると単純にアーティストとレコード会社が普通にする契約みたいなもんか。

これで上手くいけば多少なりとも歌唱印税が入ってくる訳ね。

「プロモーションについてもこちらにお任せいただければと。ネット発の音楽ユニット『クリムトの夜』も弊社所属のアーティストなんですよ」

「クリムトの夜!?! 私最近よく聴いてるわ!」

「喜多さん知ってるって事は人気なのか?」

「優人君知らないの? 最近深夜アニメのタイアップやって知名度が上がった人気ユニットよ! 深夜アニメだから優人君も知ってると思ってたのに」

「マジか。OPは基本飛ばさない主義だと主題歌アーティストのどこを見落としてたか単純に見てないアニメだったとか? いやけどミーハーの喜多さんでも知ってるくらいに人気になったって事はアニメも人気なはず。とすれば俺が知らないはずはないよな……やっぱ見落としてたのかも。多分曲聴けば分かると思う」

「アニメに対する自信凄いわね……」

毎期アニメは大体網羅してるからね。気になったアニメはとりあえず三話まで見る

のが俺流だぜ。

「ねえ、ひとりちゃんは何も耳に入ってなさそうね……」

「もももしもしさつき買ったベース返品できますか……?」

「あつタツタグ……タグさえ元通りにすれば返品できるはず……あ、あれ? も、戻らない……」

欲に吞まれしバカ共は後戻りできないところまで来てたようだ。

南無三。

我らが大人のお姉さんである司馬さんは金の亡者など気にも留めずに説明を続ける。

「それと曲に制作費が出る事以外は今までの活動と特に変わりありません。みなさんのやりやすいようにやってください」

「結局ノルマに追われる金欠バンドマンのままって事ですね……道のりは長いわ……」

「虹夏さん、どう思います」

「そうだねえ……今のところ思ってたより全然悪い話じゃないかもとは思ってるよ。あたし達個人でやれる事にはどうしても限界があるし、お試しだとしても制作費を出して

くれるのはありがたいもん」

それは俺も同意見だ。ただでさえノルマや機材車を買うために貯金して常に金欠状態の現状で、制作費だけでもレベル側が負担してくれるのは助かる。

こちらとしてもデメリットはほとんどない。やれるだけの事をやってみる価値は十分にあるだろう。

「じゃあこの話受けてみま」

「ところで後藤さんはギターヒーローという別名義でも音楽活動をされてるようですね」

言いかけて止まる。

それに反応したのは虹夏さんと後藤さんも同様だった。

「……どうしてその事を？ 司馬さんには話した覚えありませんでしたけど」

「いえ、この前のフェスの時にみなさんが大声で喋ってらしたので、気になって調べてみたらこちらのアカウントが出てきました」

「……」

そういえばやみさんが結束バンドに謝罪した時司馬さんも近くにいたんだったわ。

思いつきギターヒーローさんの居場所がどうか話してたな……。そりゃ知られても仕方ない……。けど。

近くで突っ立ってるやみさんを軽く睨むと慌てたように地雷系の服装の人は目を泳がせていた。

……まあ、やみさん自体もあの時は純粋に反省しての事だし咎める理由もない、か。なら問題はここからだ。

「登録者数もそこそこいますし動画の再生数も100万回超えがちらほら……。普通に凄いですね。演奏してみた系の動画がネット上にたくさんあるのは知っていますが、ここまでの再生数を誇っているのはそうそう見かけません。宣伝に使わない手はないので使っても問題ないですか？」

「えっ」

やっぱりそう来るよな……。

「あつあの、それってやっぱり、公表しないとダメですか……?」

「こちららも慈善事業じゃないので売上やダウンロード数に良い影響を与えられる手段は全部使っていきたいのですが」

「あつ……」

司馬さんの言っている事自体は尤もだ。レーベル側の人だから仕事としても利益に繋がる手段であれば利用するに越したことはない。

その方が必ず注目度は上がるし確実に売上も上がるかもしれない。最高の一步を踏み出すには十分すぎるほどの宣伝文句になる。

……しかし、それをギターヒーロー自身が望んでいなかったら何の意味もない。ましてや結束バンド全員の力とは言えないような売り出し方で売れたとしても後藤さんやみんなが納得できるはずがない。

だからみんな未確認ライオットで少しずつでも成長するために努力してきたんだから。

プロの世界だからそんな世迷言は通用しない。甘ったれた事を言うなと思われるのも分かっている。

きつと今プロになりテレビでも活躍しているようなアーティスト達も、最初はこんな苦汁を飲まされているのかもしれない。

アーティストの思いと会社側の方針が必ずしも合致する訳じゃないのだ。レーベルと契約して一緒に進んでいくのなら、必ずどこかでこういう問題にぶち当たるのは予想していた。

ただそれが最初の最初、今になっただけ。

つまり、こちらにとつての踏ん張りどころだ。

「その話ちよつと待つ」

「それつて逆効果だと思えますよ〜」

俺の声を遮るように被せてきたのは結束バンドの誰でもない、まさかのやみさんだった。

「まだ結束バンドの後藤ひとりとギターヒーローは同等の力じゃないですし、最初に実は彼女がギターヒーローだった〜みたいな売り出し方をしても確実に信じてはもらえないと思います」

「あなたどつちの味方なんですか……?」

「あたしは未来ある若者の味方なんです〜! どうしてもそつちに肩入れしちゃうつていうか〜!」

「いつ辞めてもらつてもいいんですよ」

「容赦ないパワハラ!?!」

うん、何か大人同士でバチバチしあつてるけど、ここは素直にやみさんには感謝して

おっこう。

正直やみさんから擁護されるとは思ってなかったから驚いたけど。彼女のおかげで会話に割り込む隙ができたし、ここは遠慮なく口を挟ませてもらう。

「失礼ですけど司馬さん、俺もやみさんの言う通りだと思ってます」

「……清水さんもですか」

「はい。確かにギターヒーローとしての後藤さんの実力は相当ですが、結束バンドとしての後藤さんの実力はまだその域に達していませんし安定しているとも言えません。あくまで成長途中の段階なんです。なので今変にギターヒーローと銘打ったとしても、それが期待以下だった場合むしろ反感を買ってしまうリスクの方が高いかと」

「うっ……」

チクチク言葉にダメージを受けてるところ悪いが堪えてくれ後藤さん。これも後藤さん、ひいては結束バンドのためなんだ。

「それにギターヒーローの正体を明かすにしても、後藤さんの実力がライブに追いついた時の方がきつと盛り上がりますよ」

「……理由を聞いてもっ？」

「ヒーローって最初は正体を隠すのが王道じゃないですか。それで最後に正体を明かした時こそ一気にみんなのテンションが上がるつてもんです。熱い王道展開が嫌いな人なんて早々いけませんよ」

「ふむ、そういうものでしょうか？ すいません、私はそういつたものに疎くて……」
まあこういうのは大体男が好きなものだからね。司馬さんに刺さるとはあまり思っていない。

今大事なのは結束バンドのやり方を司馬さんに納得してもらおう事さえできればそれでいいのだから。

司馬さんは顎に手をやり少し考える素振りをしてから、再び腕を組み直した。

「しかし……そうですね。確かにライブでまだ安定した演奏ができないのではマイナス要素の方が大きいかもです」

「そうですね。メリットも少ないし今は絶対その時じゃないと思います。ギターヒーローファンのおたしが言うんだから間違いない！」

「それに私が以前のライブで心惹かれたのは後藤さんの演奏もそうですが結束バンド全体にです。個人だけを推す売り方は得策ではありませんね。何よりあなた方がやりたくないならやるべきではないでしょう。清水さんの言った事にも納得できました。最

初にみなさんの方針を聞くべきでしたね、これは私の落ち度です。すみません」
「い、いえ、そんなっ！」

やみさんが親指を立ててグッドサインをしてきた。

小声でこれで今までの事はチャラにしてよねと言ってきてるけど、多分もうみんなとつくの昔に気にしてないと思うよ。

「まあ面倒見の良い家事炊事完璧イケメン彼氏だの学校一のモテ女だのこのいけ好かないキャラクターが大衆にウケるとは到底考えられないですしね。ちなみにこれ事実ですか？」

「あつ半分じじ」

「全て嘘です」

このピン……今はクツチジャージだったか。何を平然と嘘つこうとしてんだ。
俺の中のトランクスも全力否定してんじやん。

ややあつて。

司馬さんも結束バンドのやり方を尊重してくれているようだし虹夏さんも納得の
いった様子で、

「あの、これからよろしくお願いします！ あたし達結束バンドも精一杯やります！」
「つ、こちらこそありがとうございます！」

これで正式に結束バンドはストレイビートと契約を結んだ。

司馬さんの表情を見るに嬉しそうだったから多分この人普段仕事人間で表情筋固まつてるだけなんだと思う。サウナ状態の室内なのに普通にスーツだし。

「司馬さんってバリキャリって感じするわ〜！ 見た目も性格もしつかりしてるし頼りにしてますね！」

「照れますね。まだ入社二年目ですが」

「え」

マジかよ。てことは二十代前半？

こんなしつかりしてて？

「こーみえてあたしの方が年上なのよ！ この見た目で23歳とは思えないわよね！」

まさかのやみさんより一個年下だったでござる。

というか俺の知ってる大人より大人してんだけど。まさかダメ大人三銃士が酷すぎ

て俺の中で大人のハードル下がってる……？

「私はまだ年齢も経験も浅いです。ですが責任をもつて結束バンドをサポートします」

「まあいざつて時はあたしもいるし？ 業界長いしコネもあるし？ 頼れるお姉さんは多い方が安心でしょ？」

「その必要はありません。自分でやれますので」

「可愛げゼロかアンタ……」

「そういうやみさんはもう少し大人っぽくなった方がいいかもですね。見た目的に」

「何か言った？」

「いいえ別に」

多分目が合ったらやばいタイプだ今。野生動物と同じ。

「まず一曲目のリリース時期は年明けを予定していますが、詳しいスケジュールは追って連絡します。受験もあり大変だとは思いますが10代の感性を大事にして経験を曲に詰め込んでください。これぞ結束バンドのキラージューンというような曲、みなさんなら作れると私は思っています。期待してますね」

「はいっ、頑張ります！」

「そして清水さん」

「はい」

「私達はまだ制作費を出す事やレコーディング面での事務的なサポートくらいしか上手くできません。もちろんマネージャーも現段階では到底つきません。彼女達のメンタル面や身の回りについては特殊な立ち位置にいる清水さんにお任せしますね。レーベル側の私が言っている事ではないかもしれませんが、結束バンドのサポート、よろしくお願います」

「……はい」

司馬さんからのお願いをしかと受け止める。

俺の役割が断定した瞬間だった。

そして隣からはこんな小声が聞こえた。

「（その前にノルマ稼がないと……）」

……金銭面でのサポートはなしの方向でいこう。

115. やる事ない時はとことん暇

まだまだ夏休み真っ最中ではあるが、俺達は今日も今日とてスターリーにいた。しかし、あるメンバーを除いて。

「今日も虹夏さんとリヨウさんは車校かあ」

「ええ、だから今日も私達だけでスタ練だけど頑張りましたよねひとりちゃん！」

「あっはい……………」

そう、ここ最近虹夏さんとリヨウさんは車校、つまりは教習所へ通っているのだ。

理由は簡単。レーベル契約もしたし結束バンドの活動もこれからさらに大きくなっていくかもしれない。だから今後ライブツアーなどをする際に必要になってくるであろう機材車のために、年長者組の二人が夏休みを利用して車の免許を取りに行っている最中なのである。

とは言ってもリヨウさんはまだ誕生日じゃないから仮免までしかダメらしいけど。

あの人ほんとに免許取れんのか？ 仮免すら取れるイメージ湧かないんだが。S字カーブで心折れてそう。

「でもいいわよね。車を運転できる女性って憧れちゃうわ〜！」

「別に今時珍しい事じゃないだろ？ 免許なんて適正年齢になれば誰でも取れるんだし」

「そういう事じゃなくてっ、何か運転できる女性ってできる人感があつてキラキラして見えるのよ！」

「さいですか」

相変わらずミーハー極まつてんなこの子。世界が輝いて見えてそれで羨ましい限りですわ。

「そういう優人君は免許取れるようになったら取りに行くの？」

「まあそのつもりだけど」

「どうして？ やっぱり男の子って早く免許取って車買ってドライブしに行きたいとか考えてるのかしら？」

「所々偏見が垣間見えるな……。俺の場合は結束バンドのためでもあるよ一応」

「そうなの？」

「ああ。いつかやるライブツアーのために機材車買うって話だけど、それって今のままだと要はライブ終わりに疲れてる状態で虹夏さんが運転するって事だろ」

「ナチュラルにリョウ先輩を運転手から除外するのね」

あたぼうよ。俺だつて命が惜しい。

「だからできればそんな負担は背負って欲しくない訳。年齢が年齢だから一年遅れるのは仕方ないと割り切ってるけどさ、俺が運転できるようになって遠征するって事になったら運転は全部俺が請け負うつもりだよ」

「なるほど、確かにライブ終わりに運転は疲れちゃうものねえ」

ましてや虹夏さんは手足を酷使するドラムだからな。それを踏まえても一年はまだ我慢しなくちゃいけないから歯がゆい。

まあこの先どうなるかは何も分かつちやいないが、まだ高校生だし遠征なんてのもっと先の話になるだろうとは思う。そもそも機材車を買うのが先だしね。いったいいつの事になるやら。

「あ、ひとりちゃんは免許取るつもりはあるの？」

「こいつに取らせる訳ないだろうか一生取らせねえよ命がいくつあっても足りんわ
車校代を無駄にするのはやめなさい」

「あつみたいです……」

「出たわね過保護怪獣カホゴン」

誰が怪獣だキターン星人め。人をカネゴンみたいに言うな。

そんなこと言うならまず後藤さんが教習車乗ってる時に隣に乗ってる教習所の人と喋ってることを明確に想像してみなさいよ。できないでしょ、俺も想像できないもん。

「いや、うん……まあ、ひとりちゃんが車を運転してるところは想像できない、かも……」

「あつへへっ……」

それ見たことか。後藤さんは運転じゃなくて助手席でナビの言った事を軽く復唱してるだけでいいんだよ。

知ってるか、適材適所って大事なんだぜ。

「けどいつまでも免許なかったら不便じゃない？ ほら、最近は車乗らないにしても免許だけは取っておこうって人も多くなって聞くわよ」

「安心しろ。後藤さんが行きたいところあつたら俺が連れてってやるから」

「あつみたいですよ……うへっ」

「出たわねタラシ怪獣ミサカイナシマン」

それももう怪獣つてよりヒーローの方のイントネーションじゃねえか。いや名前はクソみたいに嫌だけど。

こんな会話をしつつも後藤さんと喜多さんはギターの練習をちゃんとしている最中である。虹夏さん達がいないのでいつそ喜多さんのギター力を上げてやろうぜつて話からこうなった。

「優人君はギター練習しないの？ どうせなら一緒にしましょうよ」

「あくまで結束バンドの演奏力向上のためにギター練習してんのに関係ない俺が加わる訳ねえだろ。それに練習なら家で後藤さんとずっとやってるよ。な？」

「う、うん……最近は弾き語りも上手くなってきてるもんね……」

「そうなの？ じゃあ今度聴かせてちょうだいよっ。見てみたいわ！」

「まだ人様の前で演れるレベルじゃないから却下。んな事言つてねえでギター練頑張らんかい。ギターボーカルはバンドの顔なんだぞ」

「うっ……何も言い返せない……」

しめしめ、喜多さんはこう言われると大人しくなるから実に御しやすい。

とは言ってもレーベル契約した以上本格的に実力向上を求められる訳だから仕方ないのもあるが。まあ後藤さんがいるから無理はさせないだろうし大丈夫か。

「じゃあ俺はバイトに戻るから、後は二人で頑張れよ。後藤さん、喜多さんを頼むな」「あつうん……任せてっ……」

「最近ここだけひとりちやん気合い入るわよね……」

スタジオに彼女達を残しフロアへ戻る。

メンバーじゃない俺は通常営業のバイトである。将来的に機材車を運転するなら俺自身もそのための貯金に貢献しなくちゃいけないため、いつもより頑張らないといけない。い。

のだが、開店前にやる事はもうほとんど終わってるし、ライブの際の大事な事は店長やスタッフの人が担当するため基本雑用の俺は既に暇を持て余している最中なのよね。

だから後藤さん達と一緒に休憩がてら練習覗きに行ってたし。ということでもドリンクカウンターの方向に向かう。そこには偉そうに座ってパソコンを見ている金髪ヤンキーがいた。

「休憩終わりましたー。店長、何か残ってる仕事ありますか？」

「んー、掃除もドリンク補充も裏の機材運搬も終わったんだろ。じゃあもう何もねえかな。後は専門のスタッフの仕事だ」

「まだシフト時間めちやくちやあるんですが」

「んな事言つても夜までライブないんだから仕方ないだろ？ 適当にPAんとこ行つて機材の扱い方でも習つたらどうだ。前は教えてもらうとか息巻いてたじゃねえか」

「あれから嫌というほど現実を分からされたんですよ。俺にあの作業は無理でした。P Aさんマジ尊敬つす」

「要は諦めたつてこつたな」

「否定はせん。というか事実でしかない。俺には早すぎたよパトラッシュ……。」

「そーいや虹夏さんは教習所の調子どうなんですか？ なんか話してます？」

「普通に雑談始めるつもりだなこいつ……。あー、まあ順調だとよ。今日はいよいよバック駐車するとか言つてたな」

「さすが虹夏さん、お化けが怖い以外は完璧すぎるな」

「ハッ、どうだかねー。案外アクセルとブレーキをツインペダルに見立ててリズム刻みたくなつてんじゃないの」

「あはは、虹夏さんに限つてそんなバカな事あり得ませんて」

「いやいや、ドラム脳のあいつならハンドルもスネアのフープに見えるとか絶対思ってるって」

「だとしたら重症……いやそんなお茶目な虹夏さんもありっちゃありだな」

「お前の虹夏に対する全肯定主義どうなってるんだよ」

それこそ何を言ってるんだこの姉は。人は神や天使を崇めてなんぼでしょうが。

虹夏さんが右って言ったなら例え正解が左でも喜んで右を選ぶよ俺は。これが信じてやつよ。だから店長俺にこいつバカじゃねえのみたいな視線送るのやめてほしい。

「お前も最初とはだいぶ変わったよな。主にヤバい方向だけだ」

「褒められてないって事だけは理解しました」

「よく分かってんじゃないやねえか」

分かったくはなかつたけどね？

「で、そっちの方はどうなんだよ」

「というと？」

「結束バンドの方。新曲の進捗は？ 上手くいってるのか」

言われて考える素振りも見せず、俺は直球で答える事にした。

「微妙なところですね」

「正直だなおい」

「主にリヨウさんが音楽にバイトだけだったのがそこに車校もプラスされたせいで難航してゐるって感じですかね。あの人にマルチタスクは難しいかと」

「怠け者が作曲の要だと面倒だな……」

「いやまあそこはリヨウさんだけが頼りだから俺達はどうかう言える立場じゃないんですけどね。」

「怠け者に関してははげど（死語）」

「それに伴って後藤さんも作詞に手が付けられなくて滞ってる最中です」

「自分の中である程度アイデアないと新曲なんてのはそうポンポン作れる訳じゃないし、且つレーベル契約して最初の新曲だからそれなりにハードル高くなってプレッシャーも感じてゐるってところか。あるあるだな」

「そうなんですか？」

「チャンスが来たからそれに応えられるよう気合いを入れようとしても、それが逆にプレッシャーになって自分を追い詰めちゃうなんて事はこの業界じゃザラだ。今までよ

りも良い曲を作らなくちゃいけない、バンドにとつて大事な一步目になる曲だから未踏のハードルを越えなくちゃならない。それはバンドメンバーの作詞作曲者にとつちやある種の呪いであり枷にもなりかねえんだ」

俺なんかよりも遥かに音楽業界に詳しい店長はパソコンの画面を見ながら淡々と言う。

「どんだけ外じゃ平気な面してても、家だと孤独の中たつた一人でこれからのバンド生活左右するかもしれないプレッシャーの中をひたすら考え込まなくちゃならない。多分お前が思ってる以上に内側では何か思い詰めてる可能性があるかもな。リヨウは普段はクソみたいに不真面目だが、こと音楽に関しては結束バンドの中で一番のバンド経験者であり真面目なやつだし」

ふとりヨウさんが突然バイトにも学校にも来なくなった時の事を思い出す。

確かあの時もフェスに出るから新曲を作るってなりスランプに陥って誰にも相談しないまま家の庭でキャンプしてたな。そういう意味じゃ、今回とシチュエーションは似てるかもしれない。

しかも前に比べて今回はレーベルがいてサポートもしてくれる好条件付き。故に下手な曲は作れないとリヨウさんも人知れず焦っている可能性があるという事か。

後藤さんは……何かあれば俺に言えって伝えてるし多分大丈夫だとは思う。何なら家隣だから付きつきりでいてもいいし。

「つつてもまだ新曲リリースまで期間もあるし焦る事もないだろ。リョウだつて一応成長してんだ。今はとにかく車校に集中させときゃいいさ」

「店長……」

「あいつの場合脳内ショートしたままバイトしたら何かやらかしそうだし」

「そこかい」

気遣いと思ったら割と自分本意の考えしてたよこの人。

優しいところあんじゃん……と思って見てた俺の尊敬の眼差し返してほしい。

「それにあいつらの事は公認サポーターのお前が何とかすんだろ」

「……へへっ」

「お前つて時々ぼちちゃんに似てるよな」

それは褒めてんのか貶してんのかどっちだ……？

店長後藤さんの事大好きだから分からね。多分ペットは飼い主に似的なニユアンズで言ってきたのかも。……どっちみち褒められてはないな？

「ほれ、やる事ねえならどっか行け。正確にはぼっちちゃん達のとこ行ってこい」

「それが店長の言う事ですか？」

「用ができたら呼んでやつから。こっちはまだやる事あるからお前の相手ばつかしてらんないんだわ」

「追いやり方が都合の良いカレカノみたいで何か嫌だな！」

「烏漕がましい事言ってるな。お前が私の彼氏だなんて百年早えわ。いいとこ虹夏くらいだろ」

「俺なんかガッ！ 虹夏さんにッ！ 釣り合う訳ッ！ ないだろうがッ!!!」

「お前ほんとそういうところで虹夏泣かしたらぶっ飛ばすからな？」

虹夏さん泣かすヤツなんか俺も一緒にぶっ飛ばしてやりますよ!!

え？ ぶっ飛ばされるのは俺の方？ なして??

疑問に思っていると店長にげしげしと蹴られながらドリンクカウンターを追いやられた。

扱いが酷いと思います。

「それでひとりちゃんに私を頼むって言ったのにこのこ戻ってきたと」

「はい。流れに身を任せて戻ってきました」

「……優人君ってたまにそういうとこひとりちゃんに似てるわよね」
「後藤さん、俺らって似てるらしいぞ」

「え、えへへ……嬉しいね……」

……嬉しいのか？

116. 旅行前に色々決める時が一番楽しい

「最近リヨウ先輩の様子がおかしいわ……」

「リヨウさんがおかしいのはいつもの事だぞ喜多さん」

夏休みのバイト中、喜多さんがいかにも不安そうに語り出した。

大丈夫かな、暑さで頭やられたのかな？

「そうじゃなくって！ あれを見てちようだい優人君！」

「ライブ楽しんでくださいねっ☆」

喜多さんの指差す方を見ると、受付の方でいつものように接客をしているリヨウさんがいた。

ただし、普段見た事もないようなほどめちゃんこ笑顔で。

「うん、あれは異常だな。とうとう毒草でも食べちゃったか」

「やっぱりそうなるわよね!? 変なモノ食べちゃったとかよね!? じゃないとあの先輩

が笑顔で接客するなんてあり得ないもの！」

ナチュラルに同意してくる辺り喜多さんもやはり天然鬼畜などこあると思う。

とうか接客なのに普段から無表情で受付してるリヨウさんの方がおかしい事に気付いた方がいい。ライブハウスだからそれも許されるって言われたらそこで終わりだ
けど。

「と、冗談はここままでしておいて」

「優人君冗談だったの!？」

「虹夏さんはどう思います?」

「人生でここまでのタスクを積んだことないから壊れたっぽいね。あんな女の子してる
笑顔のリヨウは初めて見たよ。多分明日雪降るね」

真夏で雪とかいよいよ地球が終わっちゃうよそれ。

にしても大方予想通りだった。ここ最近バイトスタ練車校新曲作りの連続だから
リヨウさんのキヤパが完全にオーバーしてる。あの人の容量は多分TBもない。良く
てMBだ。いつの時代だよ。

「普段からあんだだけ愛想良かったら愛嬌も出てくるんだけどね」

「それには同意ですね。可愛い笑顔のリョウさんはギャップしかないですし俺得なんでもうしばらくあのままで良いかもなあ」

「早く元に戻そう」

「早く元に戻しましょう」

「どうやら虹夏さん達はちゃんとリョウさんの心配もしているようだ。あの笑顔を写真に収めたいと思つてた自分が恥ずかしいぜ。」

「けど今はまだバイト中だからまずは閉店まで頑張ろうつ。みんないつも通りお願いね！」

「分かりました！」

「はい」

「あっはい」

とても正しい事を仰つた虹夏さんの合図でそれぞれ持ち場に向かう。

とは言つても今日は俺達全員キッチンでドリンク担当だから一緒にいるんだけどね。四人だと少し狭いが、今日出演するバンドはそれなりに人気があり客も結構いるのでスムーズに受け渡しを行う必要があるため、珍しく四人体制の配置になつたのである。

「今日は多そうだな……。後藤さん、忙しくなるかもしれないから笑顔は大事だけど今日はそれよりもできる限りスムーズに受け渡しするように心掛けてな」

「う、うん……が、頑張るねっ……」

「? おう」

なんか後藤さんがふにやふにやした下手つぴスマイルを向けてきた件。

笑顔の練習か何かなのかな。できればそれを俺にはなく客に向けてほしいんだけど。まあいいか、少なからず引かれるようなドン引きスマイルじゃなくなっただけでも大きな成長だ。優人さん嬉しい。

その後は忙しくはありつつも何とか問題なく仕事をこなし、閉店時間になった。

これで家に帰れるぞい……という訳でもなく、むしろここからが本番だ。

「あ、頭がこれ以上働かない……。パンクしそう……」

「リョウ先輩が今にも死にそうだわ……!」

テーブルに突っ伏しながらぐったりしてるグロッキーダーヤマが出来上がっていた。

ぐでたまならぬぐでやまである。ぐでやまだでもいいな。どうでもいいか。

「来年リリースする新曲も書いてはいるんだけど中々いいメロディーが浮かばなくて……ぼっちとも色々考えてるんだけど難航中」

「まあそうばつぱメロディーや歌詞が思いつく訳でもないですもんねえ。そこはまだ時間もあるし慌てる事もないですよ」

「今まで音楽とバイトだけだったのに車校も入ってきて、家でも五時間は学科の勉強で拘束されるし頭と手足が二つ分くらい足りない……」

「仮に二つ分あっても容量MBのリョウさんにはキツイんじゃないですかね」

「そんなこと言う悪い優人には私の親に言いつける罰を与えるよ」

「超絶親バカの山田ファミリーにそんな事告げ口されたら確実に秘密の地下人体実験室に送られるからやめてッ!!」

いつから恐ろしい脅し文句を覚えやがったんだこのベーススト……。

「ん、でもこのままって訳にもいかないよねえ。リョウもぼっちちゃんも曲作り頑張ってくれてる事には変わりないんだし……結束バンドのメンバーなんだからあたし達がフオローしてあげないと」

まあ、それはそうか。

これでも二人はバンドには欠かせない作詞作曲担当。曲がないとバンド活動なんて到底できない。なので創作ができない俺達がこういう時にどれだけ後藤さんとリヨウさんをフォロワーできるかが鍵だ。

「優人君、何か良い案ないかしら？」

「こういう時に一番手っ取り早いのは気分転換とかかなあ。夏休みだしどっか出掛けるとか。後藤さんでも行けそうな場所って条件が付くけど」

「あつうっ……」

「そこはまあ優人くんがいれば大丈夫でしょ」

メンバーでフォロワーし合うって話はどこにいったんですかね。

サポートはサポートでも後藤さん専属サポートじゃないんだぞ俺は。……いやプライベートはいつも専属サポートしてるようなもんか。

「ん〜……あつ、そうだ！ だったらみんなで一泊旅行しようよ！ こういう時は一旦いつもの場所から離れて違う環境で気分転換が一番だつて！」

……ん？ 一泊???

「ちよつとあの、虹k」

「ほら、司馬さんも言つてたじゃん！ 十代ならではの事をたくさんしろつて。どうせならみんな夏休みらしい事しようよ！ お姉ちゃんにはバイト休めるよう頼んでみるからさー！」

「楽しそうですね！ 私は賛成です！ ひとりちゃんもいいわよね！」

「えっついやつあつはい！」

何だか話が勝手に進み出した。このままでは多数決で問答無用に可決されかねない。

だつてよく考えてもみる。こういつた時の女子の言う夏休みの一泊旅行と言えば大抵夏合宿と称して海だとか山だとか言いだすんだ。

適当な観光地巡りならまだしも、海と山となつた場合男一人の俺の肩身の狭さが基準値を大きく超えてしまう。

だつてあれだぞ。海とか山の川とか行つたら必然的に水着回になるパターンのやつだもの。部活系アニメでは定番中の定番、テコ入れ上等視聴者歓喜のサーブスイベン卜だもの。

そんなとこに俺も一緒に行けば下手すると視線泳ぎまくりで不審者の出来上がりか冤罪紛いのセクハラ認定で社会的死が待つてるに違いない……。

俺はまだ平凡な高校生活を送っていたいんだ！

「けどどこ行くんですか？ 私達機材車代貯めてるので余裕ないですけど」

「うっ、確かに……」

「これだあ!! ナイスアシスト喜多さん！ 愛してるぜ!!」

「ハッ……?! 何だか今ラブコメの波動を感知したような……?」

「いきなり何言ってるの喜多ちゃん」

「喜多さんの言う通りですよ虹夏さん。貯金しなければならぬ現状で一泊旅行は散財でしかありません。せめて日帰りで近場に遊びに行くのが限界かと」

「うーん……やっぱり厳しいかあ……」

よし、これで俺の平穩は守られ、

「そういえば海の近くに別荘持ってたはず。親に頼めば車も食費も喜んで出してくれると思う」

「それだあー！ そういやリヨウの家お金持ちなの忘れてた!」

「俺の平穩がアアアあああああああああああああああああああッ!」

「ゆ、ゆうくんっ!?!」

悲しきかな。

思えば部活系アニメに登場する人物の中には何故かお金持ちキャラが一人はいるという謎設定が存在するんだった。まさかりアルでこんな設定が被るなんて……。

かくなる上は……!!

「虹夏さんっ、その一泊旅行に健全な現役高校生女子四人男子一人はさすがに不健全な匂いがするので俺は欠席させ」

「何を今更。あたし達は優人くんに期待も不安も抱いてないから一緒に来なさい。ちなみに拒否権はないよ」

「いやでも」

「リヨウ」

「来ないと親に優人から抱きつかれたってあらぬ嘘を言う」

「喜んでご一緒させていただきます!!」

きやつほう美少女と海で水着イベント確定だぜこんちくしょうツツツ!!!!

天国と地獄という名の地雷原が入り混じる中でタツプダンスしろって言ってるようなもんだぞこれ。生きて帰れるかなあ……。

「海の別荘なんて俄然楽しみになってきたわ！　ひとりちゃん、明日渋谷の108に水着買いに行きましょ！　あそこなら可愛いのがたくさん売ってるわ！　ひとりちゃんの素材を光らせるわよ！」

「えっしぶっ……あっ嫌、はい！」

「映える浮き輪もたくさん持ってこなきゃ！　今から準備が忙しくなりそうだから☆」

凄いキラキラしていらっしやる。どうやら東京イチの陽キヤは映えが最優先であり男子なんて羽虫が如く気にも留めていないようだ。

これはこれでありがたいかもしれない。変に気を遣われるよりもはやいっそいなモノとして扱われる方がこちらとしては気が楽だし。

それにリヨウさんはリヨウさんだからいちいち男女のあれこれなんて考えてなさそう。だからこそ脅しでああいう事を言われると余計タチが悪いんだけど。

虹夏さんは我らが天使でありママでもあるので多分直視さえしなければ眩しきで目が死ぬ事もないだろう。それに誰だって聖母によからぬ気持ちなんて抱かないもの。

……あれ？　そう考えると一泊旅行も案外何とかなりそう？

そうだよ、よくよく考えなくてもこの偏食パーティー編成なんだ。よくあるラブコメ展開などあろうはずもない。もし似たような事が起きたとしても必ずどこかで破綻す

るに決まってるし。

これで三人はクリア。クリアと言ったらクリア。

で、後藤さんは……………。

「……………後藤さん」

「あつな、何？」

「水着買ったら何度か先に家で見せてくれない？ 早めに慣らしときたい」

「あ、う、うん……………分かった……………」

よし、おそらく懸念点はだいぶ解消できたと思う。

半分以上はただの推測だつて？ うるせえ、思い込みが時に平常心を保つ一番の安定剤になる時だつてあるんだ。よく覚えておきな。ちなみに自信の程は五分です。

「あれが一番ヤバイ発言だつて理解してんのかな優人くん」

「（それを普通に受け入れてるひとりちゃんも大概ですけどね。もし恋人同士だとしてもあんな会話しませんよ普通）」

「……………普通じゃないもんねあの二人」

「（ですわね……………）」

何だか虹夏さんと喜多さん辺りから謎の侮蔑と諦観の視線を感じるのは気のせいかな。

あれ、俺また何かやつちやいました？

「……あ、そういえばゆうくんは水着買いに行かないの？」

「俺は適当に通販で買うよ。男物は女子のとは違ってそんなバラエティー豊かでもないしな。それっぽい物でも選んで楽に済ませるわ」

「あつ、じゃ、じゃあ私もそっちにしようかな……」

「バカタレ。女子のは色々あんだから喜多さんとちゃんとした店で選んでこい。せつかくの海なんだからな」

「な、ならせめて着いてきてえ……」

「おバカ。女子二人の水着の買い物に男子が着いてくなんてわざわざ白い目で見られに行くようなもんだぞ。というか個人的に敷居が高すぎる。俺にはオシャレな店じゃなくユニクロとかギーユーくらいがちやうど良いんだよ」

そもそも渋谷でお買い物とかいう時点で場違い感が凄い。

ああいうとこつてオシャレすぎてむしろオシャレに見えないようなカラフルカラーな人ばっかいるの何で？ 蛍光色大好きなの？ と思ってる俺は既にオシャンティー

路線から脱落だ。多分根本的に向いてない。

あと渋谷は後藤さんとの相性最悪だけど、喜多さんがいるなら安心して任せられる。陽キヤの街は陽キヤに一任するのが手っ取り早いのだ。俺が着いてつたらおそらく後藤さんと二人して挙動不審になる自信がある。我ながら自分自身リア充耐性がないんだなと実感した。

世の中のリア充達はいったどこでキラキラワールドに順応したんだろう。

住む世界が違うすぎる。爆発してほしい。

流れでリア充に怨念を送っていると、店長に話をつけに行っていたらしい虹夏さんが戻ってきた。

「みんな、お姉ちゃん休みくれるってさ！これで心置きなく気分転換できるね！」

「一気に五人も休み空けて大丈夫だったんですか？」

「お姉ちゃんが言うには大人舐めんな、二日くらい本気出しゃ余裕でカバーできるっての。だって」

「いつもは本気出してないって言ってるようなもんじゃないですかねそれ」

「たはは、まあそれはあたし達がバンド活動で貯金しやすいようにいつもシフト多めに入れてくれてるってのもあるからね」

感服しました。ダメ大人三銃士の中では一番まとも粋に近い店長、さすがです。

「リョウウどうする？ あたし達も近場に買い物行つとく？」

「お金な……いや今回の件と一緒に親に言えばワンチャン全部出してくれるか……？」

「真つ先にそんな考えに行き着くのほんとクス思考極まつてるよ」

それで100%の確率で快諾するのが山田ファミリーなんですけどね。

いつそハイエンドベースのローン分も払ってもらえ。何ならその勢いで借金返せ。

長いようで短い夏休みはまだ続く。

バイトやバンド活動を頑張る彼女達のサポートをしているだけの日々に、一つのイベントが舞い降りてきた。

テーブルに頬杖をつきながら周囲を見る。

一泊旅行の事について楽しそうに話す彼女達（一人を除いて）を眺めながら、ボソツと独り言が自然と出てきた。

「……何事もなく平穏に終わればいいなあ」

楽しみなイベントに思いを馳せる事もなく、ただただ俺はいるかどうか分からない

神様に向かって毎回何かしでかす結束バンドが平和に旅行を終えられるようお願いの
だった。

……フラグじゃないよね？

117. 流行り物は常にベルトコンベアのように流れ変わっていくもの

拝啓、皆々様。

本日はいかががお過ごしでしょうか？

今宵も空はすこぶる機嫌がよろしいようで雲一つない青空が空一面に広がっています。おかげさまでクソ暑い太陽を防いでくれる遮蔽物がなくて困っていると聞いています。

それに何とも不思議な事に上を見れば青、下を見ても青が一面に広がっています。まるで上下を鏡に写しているかのようです。ええ、海です。しょっぺえ水の溜まり場です。

しかし真夏のシーズン、夏休みでもあり本当なら人で埋め尽くされるであろうビーチには何故か人っ子一人いません。

不思議ですね。誰もいない白い砂浜の先には海が地平線の彼方まで伸びているだけです。ええ、プライベートビーチですね。すげえやリョウさん家。

さて、そんな訳でわたくし清水優人と結束バンドのみんなで作ってきました気分転換

の一泊旅行。

今回は病院経営をしている山田家のご厚意で別荘と食材の用意をしてもらい、ここに来るまでの移動もなんとリョウさんのお母さんが車で送ってくれたのである。とてもありがたいけど何故お金持ちキャラが日常系によくいるのか何となく分かった気がする。イベント起こすのに便利すぎるのだけわ。

「来たぞ別荘〜!!」

「イエーイ!」

さっそくムードメーカー達が雄叫びを上げている。テリトリーを誇示してるのかな。多分違う。

「うっ……夏の日差しと陽キャの波動で動悸が……ゆうくんガード……」

さっそく人を盾にしました陰キャがくたびれている。テリトリー誇示が効いてるのかな。多分そう。

「バカみたいに暑いけど潮風は気持ちいい」

「じゃあ俺は暑いで別荘で涼んできます」

「待てい優人。一応ここは私の別荘でもあるんだから私の許可なしに入る事は許さん。というかずるい」

「残念ですがリヨウママから別荘の鍵を預かったのは俺です。つまり俺は保護者枠兼一時的なここの最大権力者って訳でさあ。ふはははつ、今の俺はアンタより一つ格が上の人間なんだよオ！」

「ぐぬぬ……！」

リヨウママから何故か満面の笑みで鍵を渡された時はさすがに疑問に思ったけどね。『リヨウちゃんをよろしくね』って言われたからすぐに俺が保護者枠ねって理解した。あと純粹にリヨウさんに鍵渡したらどっかで無くしそうだし。

「優人くん何だかテンション上がってますね」

「暑いから海じゃなくて別荘見てテンション上がってるっぽいね。それが暑さでやられたか」

きらきら組からなんか言われてるような気がするけどまあいい。今は一刻も早く別荘の冷房を堪能したい気分なのだ。

やっぱ涼しい室内が一番だっはつきり分かんだね。

「でも暑いのは同感かも……。どうせ夜バーベキューするし今日はそれまでならだらしとく〜?」

「賛成で」

「えー! 海行きましようよ! あの健康的な景色を前にして泳ぎたくならないんですか!? もうすぐそこに映えの楽園は広がってるんですよ!」

「陽の光を浴びて陽キャにバフがかかっている……」

「こういう時の喜多さんって勢いで押してくるからこつちの言い分全然通らないんだよなあ。」

しかしこちらには虹夏さんがいる。どちらかと言うとインドア系の虹夏さんなら持ち前のリーダーシップであのきらさん……。じゃない喜多さんを言いくるめてくれるはず。にじかしやんがんばえ〜。

「ん〜……まあせつかくだし海行ってみる?」

「え」

「いやほら、最初のうちに喜多ちゃんのバフ取り除いとかなないと室内ですつとわがまま言うかもだし……。この前だつて女子高生感が足りないってなつてみんなで下北ぶらりしたでしょ? またあんな感じになつちやうよ」

「……あー」

確かにそれは少し面倒かもしれない。主にそれで一番ダメージ喰らうのが後藤さんというのも含めてややこしい事になるのは必然だろう。

うーん……まあ、仕方ないか。

「……分かりました。こうなつたらみんな海行きますか」

そして観念して承諾した途端、喜多さんの行動はとても早かった。

「やったー！　ずっと服の下に水着着てたから息苦しかったのよ！　ようやく解放されるわー！」

「きやあー!?　ちよつと何いきなり脱ぎ出してんの喜多さん!?　まさか優人さんを社会的に殺すつもりですか!?　ヘンタイさんなんですか!?!」

「小学生か！　って優人くんの方が女子っぽい恥じらい方してるのも何なの!?!」

周囲に人がいないとはいえさすがに突然衣服をパージする喜多さんはどうかしてると思います。しかも今の一瞬で髪型もおさげっぽくなってるし。イリュージョンかな？

一応男子がいるんだからそういうのはもうちよつと配慮していただきたい。バフか

かりすぎてバーサーカーになったのかと思った。

「ふふん、どーお優人君私の水着っ」

「え、あ、うん、よろしいんじゃないかと思えます」

「何でそんな微妙な反応なの!?!」

「だって女子の水着の褒め方とかよく分かんねえんだもん！ ギャルゲーだと好感度のプラマイ振れ幅が大きすぎるしましてや現実なんて下手な事言えるか！ 『似合ってるよ』『どこが?』とか細かい事聞いてきたり『可愛いね』『変な目で見ないで』とか言われるに決まってるじゃん！ 怖い！」

「優人くん変なところじらせてるからなあ」

「友達と遊ぶ機会なくてゲームばかりやってた弊害がここに来てるのね」

ちよつとめんどくさい友達の相手してる時の雰囲気出すのやめて。

どつか適当に遊びに行くだけならまだしも水着イベントはお互いの格好的にも気を遣うんだから仕方ないじゃない。こちとら男子一人なのよ。むしろそっちが気を遣って。

「大丈夫よ優人君、あなたには何を言われても好感度が下がる事なんてないんだから。

ほら、ひとりちゃんともお家で慣らしてきたんでしょ？ 感想を聞かせてちょうだい？」

「男子高校生的にビキニ系って全体的に目のやり場に困るなあって」

「……………」

「けどまあ似合ついであつ、ちよ、喜多さん？ あだつ、ゆ、指二本で脇腹何度も突いてくるのはぐえつもはやただの攻撃になってませんことぶえあつ!!」

無言で攻撃されるって事は多分選択肢ミスりましたね俺。

だつてもう脇腹つんつんなんて可愛い擬音聞こえてこないもん。ズドムズドムって聞こえてくるもん。

「じゃあとりあえずあたし達も着替えよつか。ほら優人くんさつさと鍵開けて」

「は、はい……………」

助け舟を出してくれた虹夏さんに内心感謝しながら逃げるように別荘の鍵を開けて各々荷物を置く。

とりあえず全体的に冷房をつけて部屋チェックを軽く済ませてから全員着替える事になったのだが……………。

当然男子の俺は着替えなんてすぐに終わり部屋を出る。男の水着など全裸になつて

海パン履くだけで終わりなのよ。一応上に薄いパーカー羽織ってるけど。

部屋を出れば着替えに時間のかかる女子達はまだおらず、先に衣服の下に水着を着てきていた小学生思考の喜多さんが水着のまま映え写真を撮ろうと別荘内で良いポジションを探していた。暇持て余してんなあ。

「あ、優人君早いのね」

「男子は基本履くだけだからな。こういう時はすぐ準備終わるし便利なんだよ」

「めちやくちゃ視線合わせてくるわね」

「むしろ一点集中してた方が変な疑いかけられないかなって」

露骨に目を逸らすのでもなく目を泳がす訳でもなく、常に相手の目を見ていれば逆にやらしいとか不審な目で見られないかもしれない。

ほら、女子って男子からの視線に敏感だって言うし、自分がどこを見てるかも言われないだけで勘付かれてる確率の方が断然高いらしいしね。

「……別に優人君に他意はないなんて分かりきってるから気にしないわよ?」

「信用してくれてるのは嬉しいけど多少は気にした方がいいんじゃないかそれ……」

「だって優人君だもの♪」

何それ逆に怖い。

「とうかかひとりちゃんの家で水着観賞会したんじゃないの?」

「言い方。や、一応見たけどさ……」

「どうだったの? 一緒に買いに行ったはしたけど何買ったかまでは見てないのよね私」

「渋谷だからか今どきかは知らんけどあの辺りの流行りファッションって結構奇抜なんだなって」

「ちよつと不安になってきたわ……。でも私が店内見た限りだと変な水着は売ってなかったはずだけど」

俺だって女子の生水着とか小中学生ん時のスク水しか見た事なかったし、大体はアニメとかそういうのしか見てないからリアルの流行りはよく分かってないのだ。

ああいうのが実は今どきのものなのかと思つて不思議に感じたけど、まあ喜多さんと買いに行ったんなら間違いではないかと指摘はしなかったがまさかね。

そんな話していると部屋の方からドアが開く音がした。

誰かが着替え終わったんだろうと視線を向けると、我らが天使のご降臨であった。

「おうつ、伊地知先輩の水着ハイウエストデザインで可愛いですね!」

「夏休み食べすぎちゃったから体型隠しだけどねえ……で、優人くんは何してるの」

「あまりの眩しさに失明しないようにつてのとご礼拝のために土下座しております故、気にしないでください」

「ああ、いつもの病気ね」

「ちよつと優人君私の時と反応違いすぎないかしら!？」

人間と天使を比べるなど不敬ですわよ喜多さん。

「同じ人間扱いされるだけマシだと思いなよ喜多ちゃん。そっちの方が土俵は同じなんだから」

「先輩の表情が菩薩になりかけてるわ……神聖扱いされすぎるのも考え物なのね……」

次に出てきたのはリョウさんだった。

「きゃく! リョウ先輩のシースルー水着大人っぽくて綺麗! 腹筋割れててスタイルも最高です!」

「一番自堕落なくせにスタイルだけは良いの解せない……」

「草ばつか食べてるからむしろ痩せ気味説とかないですかね」

「あれ、リヨウは普通に見ても平気なんだ？」

「無駄に現実離れというかモデル体型の人っていつそアートな芸術品っぽいから大丈夫です。少年誌でよく水着モデルが表紙とかあるじゃないですか。あれと似たようなのかもしれない」

「あたしには優人くんの基準がもう分からないよ……」

「無駄に言ったの聞こえてるからな優人」

おっと失言失言。

ふむ、しかし改めて喜多さん達の全体像を見ると定番のフリルビキニ、ハイウエスト、シースルーとそれぞれ個性の異なる水着で実際見栄えは良いと思う。

漫画やアニメで培った知識しかない俺でも何となくこれらが流行なんだと分かるくらいだ。これがクラスの男子共にバレた暁には確実に俺は殺される。あいつら今頃クソ暑い中部活やってんだろなあ。愉悦愉悦！

で、だ。

お三方の水着を見たからこそ思う。俺の中のコナン君があれれ〜おかしいぞ〜と何度も遠回しの疑問をぶつけてくる。

はてさて。

俺が見た後藤さんの水着は本当に流行りの物だったのかと。

「ひとりちゃんもそろそろ着替え終わったかしら？」

「まさかスク水とかじゃないよね？」

「渋谷の108で買ったんで流行の水着なはずですよ！ 優人君の発言聞いた後だと少し自信なくなってきましたけど……」

「……優人くん、一応聞いても？」

「率直に言わせてもらいますと虹夏さん達の方が目の保養になるのは確かかと」

「ぼっちゃんの子で大抵の女子に免疫ついてるあの優人くんがそんなこと言うなんて……」

あのって何だあのって。

「ひとりちゃんの素材はそれ相応のモノじゃないと悪くならないはずなんだけど……」

「思い出せ喜多さん。ライブTシャツのデザイン作る時に後藤さんがデザインした厨二満載のアレを」

「そういえばひとりちゃん自身が自分の良さを全部潰すセンスの持ち主だったわ……」

悲しい事件だったね……。

……ここまで来るとさすがの俺も察した。

おそらく後藤さんの水着チョイスはミスっていると。

三人のを見ても奇抜と思えるものはどこにもなく、ちゃんと人気がありそうなデザインだと男目線でも何となく分かる。だから家で見ただけは多分そのどれもから外れているのだと確信した。

やはりあの時点で指摘すべきだったかもしれないと今更ながら後悔している。俺も流行くらいは調べておくべきだったかなあと思い始めてるくらいだ。

つまり無知は罪である。今から出てくるのは果たして水着女子と言っているのか疑問さえ出てきてしまう。そう、彼女に……後藤さんに世間の常識は通用しないのだ。

「あつ着替え終わりました……いー」

そして、一番最後に彼女は出てきた。

それは背中に小さな天使の羽みたいなのが付いていた。

それは胸部の辺りに謎のぐるぐる線が書いてあった。

それはパンツ部分にスズメバチのような黒い縞々模様があった。

それは多分一応は水着と言っているものか迷うものでもあった。

それはむしろ昔のテレビにあったようなコントに使いそうなふざけたデザインにも見えた。

つまりは謎の妖精的なナニかがドアから出てきたのだ。

最初に反応したのは当然一緒に買いに行っただけの喜多さんだった。

「絶対そんなの売ってなかったわよ!!」

「……優人くん、何か言う事は？」

「もつと早く止めておくべきでした」

「あつえつ……!?!」

これからは後藤さんのために女子物の流行も調べておこうと密かに思う俺なのであった。